

【第一章完結】仮面ライ
ダーアクロス
With Legend Heroes

カオス箱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリジナルライダー×多重クロス作品。

数多もの次元に分かれた世界。そこでは、様々なヒーロー達の物語が紡がれている。

しかしそれらが今、一つに混じり合い、悪意のもとに滅ぼされようとしていた。

普通の高校生・逢瀬瞬は、ある日謎の男・ファイティから謎のベルトを半ば強引に預けられ、仮面ライダーアクロスとして戦う運命を背負わされる。

敵は、次元統合を引き起こし、悪しき転生者達を率いて暴虐の限りを尽くす犯罪グループ・ギフトメイカー。

数多ものヒーロー達や次元の住人と関わり合いながら、少年はヒーローとして成長し

てゆく。

しかしそれは、壮絶にして壮大なる冒険と戦いの幕開けに過ぎなかった――
運命に挑め、戦士達。

思いを、力を、世界を繋げ！

Pixivとのマルチ投稿を開始しました。

<https://www.pixiv.net/novel/series/1137728>

現時点でのクロス作品（随時更新）

- ストライク・ザ・ブラッド
- 超次元ゲームネプテューヌ
- ハイスクールD×D
- 艦隊これくしょん
- めだかボックス
- 遊戯王ARC-V
- 仮面ライダービルド
- 仮面ライダーカブト

○仮面ライダー剣

○デユラララ!!

○真夏の夜の淫夢

○緋弾のアリア

注意事項

・兎に角一話ごとのボリュームがあげつないです。腰を据えてゆっくり読むことを推奨します。

・主人公は最強じゃないです。無双とかは期待しないでください

・展開も更新も遅いです。

・オリキャラ多数。

・基本オリジナルストーリー

・各作品の重要な部分については随時説明を加えてますが、原作見た方が遥かに分かりやすいです。

・主人公ハーレムにはなりません。

・基本的に原作キャラへのアンチはしませんが、話の展開上敵キャラがアンチ・ヘイト的発言をする場合があります。

・実力不足や読み込み不足などの要因で、キャラ崩壊しまくると思います。

・作中のデュエルについては21話まではマスタールール3、それ以降は新マスタールール（11期）にPゾーンを追加した独自仕様で進行します。

・淫夢要素あります。てか淫夢ファミリーが出ます。

・オリジナル怪人のアイデア、随時募集中です。詳しくは活動報告を参照。

○追記（2023.4/22）

柴猫侍氏（<https://syosetu.org/user/142590/>）にサムネイルを描いていただきました！ありがとうございます！

目次

序章 アクロス・ビギンズタイム

第1話 GRAND PROLOGUE

Eー交わり、滅びゆく世界で | 1

第2話 ENTER THE

NEW WORLD | 35

第3話 フォーリング・ヴィー

ナス | 61

第4話 原点を汚す者(オリ

ジョン)

第5話 ゲート・オブ・オリジオ

ン | 104

第6話 ヒーロー胎動 | 122

第7話 クロスオーバー・ヒー

ローズ | 150

第1章 統合陰謀学園

アマスベ

第8話 ハイスクールR×R

191

第9話 デアイノレンサ | 221

第10話 望まれないエンカウ

ト | 249

第11話 Tern of th

e r e v i v e r | 278

第12話 悪魔滅殺／狙うはただ

一人 | 299

	第13話	月下真紅のブーステッド	335		第21話	交差するオッドアイズ	946
	第14話	赤と青の通り魔	395		第22話	オルタナティブ・ランペー	
	第15話	継承のベストマッチ	438		第23話	太陽に近づく飛翔（イカロス・ハイ）	1147
	第16話	戦艦少女の園	507		1章―池袋編		
	第17話	謎の少女騎士	575		第24話	AM10:00／池袋	
	第18話	「俺だつてやればできるんだ」	643		ジャック・ザ・ボマー	1255	
	第19話	「転生しただけの愚か者だよ」	717		第25話	PM5:52／数多の邂逅	
	第20話	レッツ、エンタメデュエル	833		の狭間で	1308	
!					第26話	PM6:23／玩具の涙	1387

第27話	PM 7 : 14 / 夜会は美味	
いラーメン屋の屋台で		1459
第28話	PM 8 : 10 / 引力で結ば	
れたクソツたれな関係		1495
第29話	PM 9 : 02 / 望まれて生	
まれた生命		1534
第30話	PM 11 : 24 / それが業	
であるならば		1590
第31話	AM 1 : 23 / 破滅を誘う	
サーキット		1627
第32話	AM 1 : 50 / 可憐なる捕	
食者		1686
第33話	AM 2 : 33 / 軌跡の果て	

より来る異眼 (ビヨンド・ザ・オッドアイズ)		1760
第34話	AM 2 : 44 / インクリン	
グとテイロ・フィナーレ		1831
第35話	AM 3 : 00 / 再来のロス	
トウイル		1866
第36話	AM 3 : 10 / 覚悟VS責	
務		1906
第37話	AM 3 : 21 / ふたりで歩	
む資格		1936
第38話	AM 3 : 25 / 歪んだ愛を	
唄う街		1961
第39話	AM 6 : 00 / そして朝は	

訪れる | 1984

Requiem for the avenger

enger

第40話 その男、不倶戴天につき

2010

第41話 爆炎の傀儡武神

2038

第42話 ひとりぼちな君への贈り

物 | 2059

第43話 故に、人は彼を天災と呼ん

だ | 2089

第44話 Avengersの敗走↓

合流 | 2114

第45話 復讐前夜〜決意と悪意と啗

うモノ | 2139

第46話 呼応する因縁、あるいは

ヒーローの集結

第47話 それはきつと終わるべき生

命 | 2187

第48話 呪縛を解くのは正義の心

2211

第49話 因縁決着〜requiem

for the Avenger

2242

第50話 復讐の果て、或いは序章の

終わり | 2268

??????? 救われたままでは終われない

H

e r | O d y s s e y |

2293

設定集

キャラクターズ・ファイル（オリジナル

編）※随時更新予定

2299

オリジオン紹介（序章〜1章編）※ネタ

バレ注意

2327

序章 アクロス・ビギンズタイム

第1話 GRAND PROLOGUE—交わり、滅びゆく世界で

何もない。

その空間を形容するとしたら、この言葉が一番であろう。

視界を覆い尽くすほどの暗闇が、無限に広がっている。

そんな辺り一面黒い世界に佇む二人の人物。光が存在しないにもかかわらず、彼らの姿はとても鮮明に見える。

一人は金髪の少年。半袖のカッターシャツに黒いズボン、耳にはピアスをつけており、一見すると不良ぶった学生のようにしか見えない。幼さの残る顔には、何かを企んでいるかのように不敵な笑みを浮かべている。

もう一方は、背の高い灰色の髪をオールバックにした男。赤黒いロングコートの片方

の袖がないという変な服装だが、突っ込む者はここにはいない。

「いつまで続けるのさ？ いい加減飽きてきたんだけど」

少年が、つまらなさそうに言う。男はそれを鼻で笑い、

「終わるまでだ。途中下車は許されない」

「こんな途方も無い、やりがいも楽しさも無い作業を延々とさせられて楽しいですって
言えるような社畜精神、生憎僕は持ち合わせて無いもんでね」

「何時ものように、住人と殺りあえばいいだろう。あんなに楽しそうに殺ってただらう
？」

「飽きた。あんなのヌルゲーじゃないか。……今度はどうなのさ？」

少年の問いに対し、男は指を鳴らす。

すると、突如として黒一色だった世界の地面を突き破るように、丸い何か飛び出してきた。

それは地球だった。

乗用車ほどの大きさの地球が、地面から宙に浮かぶ。

二人はそれに特に驚くそぶりを見せることなく、触れた。

「さあ、始めるか」

「一仕事行くか……あーつまんね」

瞬間、全ては光で満たされた。

とある高校

「それじゃあ、また新学期な」

担任教師がそう言つてHRを締めくくると、途端に教室が騒がしくなった。

本日は終業式。明日からの短い春休みを経て、来月からは新学年になる。

騒がしい教室の中、逢瀬おうせ 瞬しゅんは机に突つ伏していた。どうやら、教師の話の間中、

ずっと寝ていたようだ。放課後になったのにも気づかず、今も眠っている。

そんな瞬のもとに、一人の少女が近づく。

その顔には、ちよっぴり小悪魔めいた笑みが浮かべられている。

「うりゃあー！何してんじゃボツチ予備軍さんよおー！」

「止める止める止めるお！髪が乱れるだろ!!？」

瞬の髪をワシヤワシヤと触りながら、少女は笑う。

彼女の名は、諸星もろぼし 唯ゆい。明るい金髪のショートヘアーの、小柄な少女だ。運動神経・

サブカル知識ともに最高クラスの、一体どこの今どきのラブコメ漫画のヒロインだとい

いたくなるような存在だ。瞬とは10年近く続いている長い付き合いだ。

「せっかく昼から暇なんだからさあ、遊びに行こーよ!」

有り余る元気を糧に瞬の肩を揺すりはじめる唯。いつもの我儘が始まったよ糞面倒くせえ!と辟易しながら、机に突つ伏したまま動かない瞬。しかし唯はあきらめることなく、さらに激しく揺らしてきやがる。数分くらいして、あまりのしつこさに瞬は耐えかねて顔を上げる。

「あーうるさいなあ! わかった付き合ってやるから!」

「わーいありがとう! じゃあ早速遊びにいこう!」

「遊びについて……どうせ駅前のアニメグッズ専門店だろ。荷物持ち要員なら他当たれっ
ての」

「でもそう言っておきながらも何だかんだ付き合ってくれるんでしょ? ホント、ツンデレなんだから」

誰がツンデレだ、と言い返しながら、瞬は机の横に掛けていた鞆を手に持つ。長い付き合いだから分かる。コイツはしつこい。まるで典型的な少年漫画の主人公かというレベルで、一度言い出したならなかなか曲がらないタチだ。

「今日は無理だ。妹の誕生日だからな」

「あーそっか、今日は妹さんの誕生日だったねー。あ、そうだ。私も祝ってあげよーか？」

遊びに行くのはどうなったんだよ、と瞬は呆れたように言う。唯本人は既に行く気マンマンであるが、瞬としては別に嫌というわけではない。きつと妹本人も喜ぶだろうと思いつながら、瞬は席を立つ。

「何かプレゼントがいるんじゃない？」

「まあそうだけど……ホントに来るのか……」

まあいいけどな、と言いつながら瞬は教室を出て、校門へと向かう。唯が後から走ってついてくる。春の暖かな日差しの下、そんな会話が続く。

側から見れば、完璧にリア充カップルであった……というのは言わないでおこう。少年のためにも。

場所は変わり、駅の近くの通り。二人は、ケーキ屋へと向かっていた。

「おっそいぞ〜？どうした〜運動不足か〜？」

「お前歩くの速いんだっつーの……」

機嫌の良さが歩くスピードに現れているのか、唯は瞬を置き去りにする勢いで先々進んでいく。

苦笑いしながら後方を歩く瞬。その時、彼の足元から、カツンと、何か固いものが足に当たった様な音が聞こえた。瞬の足にあたったそれは、地面をスライドしながら転がってゆき、近くの縁石にあたって停止する。

何か蹴飛ばしたか？と思ひ、彼は足元を見る。そこには。

「……何だこれ」

なにかの鍵、だろうか。なんかやたらとごてごてとした、鍵状としか掲揚できない用途不明の物体。何か模様らしきものがあるようだが、良く分からない。真ん中に丸い穴があるが、何の意味があるのだろうか。

誰かの落とし物だろうか？とりあえず近くの交番にでも届けてやろう。唯ならきつとそうすはずだ。瞬はその鍵？らしきものを拾い上げる。こうしている間にも、唯は先に行つてしまっているだろう。走つて追い付くだろうか、と思ひながら

瞬は顔を上げる。

そこで漸く、あることに気づいた

「……あれ？」

誰もいない。

先ほどまで、通行人が結構いたはずの市街地は、人っ子一人いなくなっていた。

車道を走っていたはずの車は、まるで時間が止まったかのようにその場に放置されているし、道沿いの飲食店内は、湯気の立った食事がテーブル上に放置されているのが、店の窓から見える。

「唯？」

前を歩いていた筈の、幼馴染の名前を呼ぶ。

彼女からの返事はない。震え上がるほど不気味な静寂が、瞬一人だけを包み込む。

見馴れた筈の街が、酷く不気味に見える。自分だけが別の世界に入ってしまったかのような、得体の知れない感覚が、彼の体にまとわりつく。それを払しよくするかのように、瞬は拾った鍵のようなものを握りしめる。その時だった。

「やあ」

「うあああああああ？」

突然、耳元で声がして、瞬は驚きの声を上げる。

「君が、選ばれたのか。なんだか、心もと無いな」

振り返って腰を抜かした瞬の目の前には、黒を基調としたローブを身に纏った黒髪の青年が立っていた。

その容姿は、まるでファンタジーな異世界からやってきましたと言われても納得してしまうレベルで、周囲の景色とは浮いていた。

突如として現れた謎の存在に、警戒しながらも、瞬は問いかける。もしかしたら、なにかわかるかもしれない。

「お前は……？これ、ドツキリじゃないよな？」

「ドツキリじゃないさ」

青年は、不気味な笑みを浮かべながら近く of 街灯に近づき、寄りかかる。

寄りかかられた街灯が軋む音だけが、静かな世界に響く。

「私はファイフティ。君を、選んだ者だ」

ソツチ系とも取れそうな言葉のニュアンスに、瞬は嫌そうな表情を浮かべる。生憎彼にはそんな趣味は無いので、ファイフティと名乗る胡散臭そうな青年から少し後ろに下がる。

「君が何を思っているかは知らないが、私にもそんな趣味はないよ」

「……一体なんなんだ、お前」

「あまり時間がないから、単刀直入に言おう」

青年は両手を広げ、高らかに叫ぶ。

まるで、この世界全体に伝えるように。

「世界は、終わる！」

——何を言っているんだ？

瞬の抱いた感想は、普通の現代人としては至極真つ当なものだった。世界が終わる？
さんざん終末論は主張されて来たが、人類は、地球は、まだ続いている。

先程とは変わって、青年を見る瞬の目が白くなる。謎の人物から、謎の変人へとグ
レードダウンしたような感じだ。しかし、本人はそんなことは御構い無しに、大真面目
な顔で続ける。

「信じていないようだ」

「いきなりそう言われてはいそうですね。すかかって信じられるか。エイプリルフールは来月
だったの」

そもそも、仮に本当だとしても、一介の学生に何が出来るというのだ。ただその時を
待つだけしかないというのに。

「残念だが本当だ。正確に言うくと、滅ぼされる」

先程からこの男は、世界が滅ぼされるとかほざいているが、怪獣や宇宙人がやって来

るとでもいうのだろうか。それこそ胡散臭い。まだヒーロー物のほうがマシだ。

こんな脈略のない法螺話に付き合つてられるか。そんな事を思っている瞬の手を取り、ファイフティは一方的に、冗談じみた話を続ける。

「しかし、君なら最悪の事態は回避出来る。君に、ほんのちよつとの覚悟があればね」瞬を置き去りに、ファイフティの話は展開していく。話の理解を放棄した瞬は、ただぼんやりと、妹の誕生日について考えていた。

ファイフティは、御構い無しに、腰につけていたポーチから、何かを取り出そうとする。その姿が、段々ボヤけていく。

そして、聞き慣れた声が入ってきた。

「瞬……瞬……瞬……！」

「……………あ？？」

気がつけば、目の前で唯が瞬を呼んでいた。辺りを見渡すと、そこには、何時ものような街があった。ファイフティと無人の街は、消えていた。

「どこか遠い目をして……………何かあったの？」

「えっと……何て言えばいいのか……」

「まあいいや、ケーキ予約してたんでしょ？さっさと行くよ？」

「ま、待てっつーの！」

走りだす唯を追いかけていく瞬。

とりあえず、あの事は保留にして置こう。彼はそう思うことにした。

夕方

「ハッピーバースデー、湖森ちゃん！」

ケーキの上に立てられた蝋燭の灯りが吹き消され、部屋が真つ暗になる。

少しして、瞬が部屋の電気をつける。

瞬の妹・湖森こもりは、嬉しそうに唯とツーショット写真を撮る。ポニテとアホ毛が揺れ

ているのも、感情表現の一種だろう。

「皆ー、ジュース持って来たよー」

逢瀬兄妹の親代わりである叔父の環かんしろ士郎が、コップに注がれたジュースを持って来る。瞬が物心つくかつかないかのころに居なくなってしまった両親にかわって、ここま

で面倒を見てくれた、瞬の頭が上がない人物だ。

「おじさんからのプレゼントだよ」

そう言うのと、環士郎は部屋の隅に置いてあった紙袋から、ラッピングされたプレゼントを取り出す。

「おおつ、ありがとう！」

「プレゼント見せて見せてー」

唯に催促され、湖森はプレゼントを開ける。

「おおっ……これは……、超次元スマッシュフォースXV！」

出てきたのは、様々なゲーム作品のキャラクターが登場する大人気対戦ゲームの最新作であった。シリーズの大ファンである湖森にとっては、良いプレゼントだろう。

「私も買って来たよ、欲しいでしょ？」

「欲しい欲しい！」

唯は笑顔を浮かべながら、自らの横に置いてあった紙袋からプレゼントを取り出す。

「じゃじゃーん！私とお揃いの猫耳パーカー！」

「おおっ！まじイカすじゃん！」

「兄ちゃんはお前のセンスがよくわかんないよ」

彼女が取り出したのは、白と黒、二着のパーカーだった。フードには、可愛らしい猫耳がついている。ケーキを受け取った後、二人は一旦別れたのだが、おそらくその後で買ったのだろう。

「さっそく着てみようか」

「良いね！」

「着替えるなら別の部屋でね」

環士郎の言葉に従って、唯達は部屋を出る。部屋に残ったのは男二人。絵面的にも何の面白みが無い空間になってしまった。

「瞬君」

「何、叔父さん」

環士郎が何かを言おうとしたその時、

「おりゃー！私、只今参上！」

パーカーを着た二人が戻って来た。すぐさま部屋が騒がしくなる。

とうかか今の流れ、なんか重要な話が始まるぞと言わんばかりのやつだったのだが、一瞬でそれがお流れになりやがった。一体何だったんだ今のは。なんか唯がフード

被った姿をこれ見よがしに見せつけてくるが、瞬は全然反応しない。ただ唯のやかましさに対して、一言。

「近所迷惑」

「パーカーについての感想はないの?!」

「あーはいはい似合ってますねー」

「この朴念仁！私は瞬をそんな子に育てた覚えがないでやんすよ?!」

適当に切り抜ける作戦、失敗。瞬の生返事に対して、唯の泣き落としがぶち込まれるが、もはや突っ込むのも面倒くさい。というか誕生日の主役差し置いて何してんねんお前。

その場であーだこーだ言っている唯を横にのけると、その後ろから、唯と同じデザインのパーカーを着た湖森がやってきた。

「私はどう?」

「いいじゃないか。見ているとこつちがちよつと恥ずかしくなるけど」

「ぬおおおおお……なんちゆう身内轟頂……」

馬鹿野郎。家族なんだからそりゃあ轟頂するに決まっているだろう。

「よしお兄ちゃん！唯さん！ゲームしよう!」

「負けないからね」

「俺もやるのか……」

ゲームというのは一種のタイムマシンだ。

ゲームに夢中になっていた3人だが、気がつけば日がすっかり暮れていた。流石にこれ以上長居は出来ないの、唯はここでおいとまさせて頂く事にした。

「ほんじゃ〜」

唯と湖森は互いに手を振って別れる。瞬は自室に戻ってベッドに横になる。

ふと、昼間の事が頭に浮かぶ。

あれは、何だったんだろうか。何故か、頭から離れない。ズボンのポケットに手を突っ込むと、固い感触がする。その感触の主を取り出し、眺める。

「一体、なんなんだろうな、これ」

昼間拾った物体だが、なんなのかわからない。だが、あの胡散臭い男に関係するのは確かだ。

と、その時、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「お兄ちゃん、入るよー?」

湖森が、瞬に呼びかけながら部屋に入ってきた。瞬は物体をポケットにしまい、体を起こす。

「何だ」

「唯さん、制服の上着を忘れて帰っちゃったんだ」

そう言いながら、湖森は制服の上着を瞬に差し出す。思い返してみれば、帰るとき、彼女はパーカー姿だったような気がする。なんちゆう面倒くさいことしてくれたんだ、まったく。

仕方なしに瞬は立ち上がり、湖森の持っていた上着を受け取る。

「今なら間に合うだろ、行ってくる」

そう言って、夜の街へと出発した。

玄関扉を開けると、少しひんやりとした空気が肌に触れた。

瞬は、唯の家に向かって走っていた。

「あれは……」

前方から、何かが走ってくるのが見える。

「あれ、持ってきてくれたんだ」

唯だった。どうやら本人も気づいて戻って来ていたようだ。

「わざわざ届けてくれるなんて気が利くう〜」

「おだてても何もないぞ。つたくそそっかしいんだよ、お前」

瞬は唯に上着を手渡し、今度こそ別れようとする。

その時、

「やあ、昼間以来だね。昼間は、白昼夢という形でしか話が出来なくてすまない」

「ファイフティ……」

曲がり角から、昼間会った胡散臭いローブの青年が現れた。

嫌そうな顔をする瞬と、「何だこの人……」と至極真つ当な感想を抱く唯。

昼間会った時と同じように、ファイフティは一方的に話を始める。

「瞬の彼氏？」

「ふざけたこと抜かすなこの野郎」

「別れの挨拶は済んだかい？」

「は……？」

いきなり、そんな事を訊いてきた。困惑する瞬を見て、ファイフティは続ける。

「だって、もうすぐ世界が滅ぶぶからね。知り合いや家族に、最後の挨拶くらいはしておいた方がいいんじゃないかな」

「瞬、この人何言ってるの？」

唯が訊いてくるが、瞬だつて同じだ。そもそも、何故コイツは付いてくるのだろうか。わからない。

「力は、既にこの世界に有る。後は君が、それを見つけ出し、自らのものとするんだ」
「お前さつきから何言つて……」

瞬がそう言いかけた瞬間、突如として轟音が鳴り響き、地面が激しく揺れる。

「うわああああ!!?」

「地震か!!」

瞬と唯は、立つことが出来ずに転倒する。瞬が起き上がった時には、既にフィフティの姿は消えていた。

「何だつたんだ、今の……?」

「さ、さあ……」

周囲の家からも、轟音と揺れに襲われて慌てた人達が出てくる。閑静な夜の住宅地に、どよめきが伝染してゆく。瞬達は立ち上がり、辺りを見渡す。

そのとき、突然、ドサリという音がした。音源の方を見ると、一人の男性が倒れていた。

「あなた……?」

男性の妻らしき女性が、倒れた夫に触れる。すると、男性の頬が、まるで灰になった

かのように崩れた。

「え……」

困惑する彼女をよそに、男性の体のあちこちが同様に崩れ、最後には灰に埋もれた衣服のみが残された。

ここで、ようやく全員は我に帰る。

「き……きやあああああああー！」

「うわあああああああー!?!」

男性の妻の悲鳴を皮切りに、瞬も唯も含め、周囲の人達が一齐に悲鳴を上げた。

「あ……ああ……ゴフツ!?!」

恐怖で腰が抜けた女性の口から、血が流れる。

見ると、彼女の胸に何かが刺さっていた。それが引き抜かれると同時に、女性の体も灰になって崩れ去っていく。

その背後には、灰色の怪物が立っていた。

後は、パニックだった。

「逃げろ……!」

反射的に、瞬は唯の手を引いて駆け出した。瞬が来た道の方には、灰色の怪物がいる。いや、それだけではない、剣と盾を装備した骸骨や、大きな目玉を持った一頭身の生き

物、ファンタジーの世界に生息していそうなワイバーンに、ハンマーを両手に持った二足歩行の亀。

その傍らには、動かなくなった人間が幾人も存在している。おそらく、彼等は死んでいる。そして、ここにいれば間違いなく瞬たちも同じ末路をたどる。

「なんなんだよあれは……!」

「わかんないよ……!」

それは嫌だ。

何もわからないまま、瞬と唯は、家とは正反対の方向に逃げだした。

街は、もつと凄惨な状況だった。

鏡から現れたガゼルのような怪物が、人間を鏡に引きずり込んで捕食する。500m程の大きさの怪物が、駅ごと人間を踏み潰した。巨大な蜘蛛の姿をした化け物が、近くを通った人間に飛び掛かり、八裂きにする。機械仕掛けの魔神や猟犬が、手当たり次第に砲撃を加える。典型的な鬼のような姿をした異形が、目についた人間を片っ端から貪り食っている。

「何だアレ……!? 何なんだよ!?」

「わかんないよ……わかんないよ……!」

その場から離れようと、がむしやらに走る瞬と唯。その前方から、大勢の人が此方に向かつて逃げてくる。

その人の群れに向かつて、カラフルな何かが降ってきた。

「なま……!?」

それと接触した人の体が、急速に炭化し、崩れ去る。攻撃を逃れた、集団の後方にいた人たちは、皆腰を抜かしている。そこに追い打ちをかけるように、金色に輝く生命体が手を伸ばしてくる。それに触れられた人は、瞬時にその身体を結晶に変え、ばらばらに崩れ去ってしまう。

「駄目だっ……別のところに逃げるんだ……!」

瞬は、唯の手を強く繋ぎ、来た道を引き返す。今離れたら、死んでしまうかもしれない、そんな感じがする。

二人は、コンビニの裏に回りこむ。

これが、アイツの言っていた世界の終わりなのか。数多もの命が目の前で散っていく。数分前までは、ありふれた日常が営まれていたとは想像もつかないような惨状だった。こんなの、耐えられない。

「父さん達……無事かな……?」

家にいるであろう両親を心配する唯。一方、瞬は黙り込んでいる。

「……」

「瞬?」

黙り込んでいる瞬に、心配そうに声をかける唯。

「な、何?」

「私達、これからどうなるんだろう」

「さあな……」

その時、突如二人の近くにあったコンビニが、前触れなく、文字通り、消えた。

他に例えようがない。ただ、消えた。その跡には、何も無い、真つ黒な空間が広がっていた。

「なんじゃこりや……」

「統合だよ」

「!?」

いつの間にか、二人の近くにファイフティが現れていた。こんな状況下にもかかわらず、彼は平然としている。

ファイフティは、壁に寄りかかって話しだす。

「最初に言っておくが、今起こっている事は、私の仕業ではない」

「じゃあ、なんなんだよ……!?? 誰が……いや、なんでこんなことになってんだよ!!」

「一体これはなんだってんだよ!!」

「今は教えられない。君がまだ、力を手に入れてないからだ」

「一体何なんだ。その力つてのは」

ファイフティは、瞬の問いを無視して、怪物まみれの大通りに出ていく。火災が発生しているのか、やけに向こうが明るい。

彼は、最後にこう告げた。

「君のライドアーツが、力へと導いてくれる。それが、世界を救う鍵だ」

「おい待て……!」

ファイフティを追いかけようとする瞬だが、彼のすぐ前を灼熱の炎が通過する。見ると、頭に変な装置を付けた男が、指先から炎を生み出している。

「PK……FIRE」

突然、その炎が瞬目掛けて飛んでくる。

「っ☒」

慌てて先程まで居た路地に引き返し、なんとか回避する。しかし、上から突然怪物たちが降ってきて、唯と瞬は怪物で隔てられてしまう。

「唯！逃げろお！」

「でも……」

「良いから……がはっ！」

怪物が、その太い腕で瞬で殴り、彼は火の海と化した大通りへと吹き飛ばされる。彼はずぐに立ち上がり、

「俺なら大丈夫だがふっ!?」

怪物からもう一発喰らい、地面に倒れる。怪物達の間から路地の方を見ると、逃げる唯の背中が小さく見える。

彼はもう一度立ち上がり、怪物達から離れようと走り出す。その時、彼のズボンのポケットが、白く光っているのに気付く。その光源を取り出して手に持つ。

「これは……」

それは、昼間拾った物体だった。拾った時とは異なり、その表面には、何やら顔のようなものが描かれていたのがわかる。放たれている光は、真っ直ぐと、ある一点を指している。

もし、本当に世界を救えるのなら。そして、その為の力を手に入れる術が、この手にあるというのなら。

「ライドアーツが導く……いまはこれに賭けるしかないねえ！」

戯言じみた予言が、瞬の中でいつの間にか一縷の希望へと変わっていく。少年は走る。力へと。

世界の命運が、今、託される。

どれくらい走っただろうか。

息も絶え絶えで、少年は、街の惨状が一望できる高台へと辿り着いた。辺りを見渡すと、近くに、まだ無傷な神社があった。

手の中の物体——ライドアーツの光は、この神社の敷地へと伸びている。

「唯……湖森……叔父さん……」

皆は、まだ生きているのだろうか。

少し前までは、ありふれた日常が流れていた筈なのに。今、全てが無くなるうとしている。

此処に来る途中で見かけたテレビが言うには、世界中がこの有様らしい。ファイフティの言うとおり、このまま世界は滅ぶのかもしれない。

怪物を遠くに見つけたので、急いで鳥居の陰に隠れる。

「A a……」

背中からゲル状の液体を垂れ流す怪物が神社の前を通り過ぎるのを待つてから、瞬は再び動きだす。その時、奇妙なものを見つけた。

「なんだ……これ」

それはマネキンだった。

真つ白なそれは、この場所においてはあまりにも不自然だった。光は、マネキンの近くの地面を指している。

恐る恐る、接近する。

その時、マネキンが突然起き上がり、瞬の首を掴んで鳥居に叩きつけた。

「くあつ………！」

肺の空気が全て押し出されるような力で、向こうは首を締めてくる。脳に酸素がいかず、酸素不足と激痛で意識が飛びそうになる。

ふと、マネキンがあつた場所に目を向けると、何かが地面に埋まっているのが見える。光の筋は、真つ直ぐとそれを指している。

しかし、気付いたところで、今のままでは何も出来ない。というか死ぬ。

（やばい………死ぬ………！）

死を覚悟したその時。

「おんりやあああああ！」

「ヌツ………」

誰かが体当たりを白いのに喰らわせ、瞬が解放される。空気を吸いながら、瞬は顔を上げる。それはある意味で、瞬を安心させる人物だった。

「唯………?!?逃げたんじゃ………?!?」

「ようやく………再会出来た………!」

煤だらけの、今にも泣きだしそうな笑顔で、瞬に抱きつく唯。

「お前一人で逃げたんじゃ………」

「瞬を置いて逃げるなんてやつぱり無理だよ!」

「………んな事言っている場合じゃねえぞ」

白いのが、起き上がる。

それと同時に、神社も、コンビニと同様に消え始める。それに気付いた唯は、瞬の手を引く張る。

「あの消えてる最中のやつに触れてたら、私達も消えるの!だから早く此処を出るよ!」

「いや、まだだ」

だが、瞬は唯の手を振りほどいた。

なんで、と言いかけた唯に、瞬は無言で鍵状の物体——ライドアーツを見せる。それから発せられる光は、瞬の目の前の地面の中へのびている。

「ようやく……見つけたんだ！今を逃したら、もう駄目なんだ！」

さつき見つけた場所を、一心不乱に掘る。数分ぐらい掘っただろうか。地面を掘っていた瞬の手に、固い感触が伝わる。

出てきたのは、バツクルのようなものだった。丸い形をしており、前面には液晶がついている。上面にはふたつの鍵穴のようなもの。そして鍵穴からバツクルの側方部までを結ぶような溝。

一体これは何なのだろうか。まじまじと見つめる瞬だったが、唯の声で我に返る。

「ほらー早くー！」

「あ、そうだった！」

こんなことしている場合ではない。一刻も早くこの場を離れなくては。唯に手を引つ張られ、瞬は神社の外に出る。白いのは、神社ごと消滅した。

路上にへたり込む二人。周りを見ると、他にも消滅したものがあろうだ。建ち並んでいた住宅が無くなり、黒い空間のみが残っていた。

「唯、これからどうする？」

「……家に帰る。父さんや母さんが心配だし」

安息の地は、無い。それでも、大切な人の安否は確かめたい。

瞬は、バツクルをまじまじと見つめる。これが、本当に世界を救う力なのだろうか。

「瞬……?」

心配そうに唯が言う。

「俺は大丈夫だから、な?」

「ホント?」

口先では強がってみせるが、大丈夫なわけがない。

こんな状況に置かれても、彼は普通の少年だ。彼だって、心配すべき大切な人がいる。

彼らのことを考えると、不安になる。とりあえず、安否は知りたい。

二人は立ち上がり、歩きだす。

いつの間にか、辺りは静まりかえっていた。

「何だ、あれ」

瓦礫の山の頂上で、金髪の少年がそう言った。

彼の視界の先には、瞬に襲い掛かったのと同じ、真つ白な人影がいた。

「あれはデリトールンだ」

彼の隣にいた片袖無しコートの大人が答える。

「次元統合に耐えられない次元に現れ、全てを消し去る。そんな存在だ」

つまらなさそうに、二人は街を眺める。この辺りはまだ、街の形をしているものの、そこから死体が転がっている。

「じゃあ、あのオルフェノクやガストレア、ミラーモンスターやノイズは？」

「全部、デリトールンの変異した姿だ。怪物と消滅の二重奏、中々趣きがあるだろう？」

男は、邪悪な笑みを浮かべ、高らかに叫ぶ。

「我らの大望は、何人たりとも止められはしない!!？」

「はいはい、皆待つてるから帰るよ」

少年に突っ込まれ、男は黙る。二人は、もう用はないといった調子で姿を消した。

長い道のりの果てに、唯の家までやってきた。

唯の家は、まだ残っていた。どうやら、まだこの辺りは消滅してないようだ。

「じゃあ、見てくる。そこで待ってて」

瞬を外に待たせ、唯は玄関のドアの前に立つ。

ガチャリと、扉を開ける。

静まりかえった自宅に、唯は恐る恐る足を踏み出す。早く、親の顔が見たい。帰りが遅い、と叱ってくれたらどれだけ安心できるか。

リビングの扉を開ける。

そこには、ソファにすわり、真つ暗なテレビの画面を凝視する唯の両親の後ろ姿。

「父さん……母さん……」

唯が呼びかけると、二人は立ち上がり、唯のほうを向く。その顔には、醜悪な笑みが浮かんでいる。

そして、彼らのはその身を昆虫のような姿の怪物に変える。

「い……嫌あああああああ！」

「唯……？」

悲鳴を聞き、瞬が駆けつける。

「父さん……母さんが……怪物に……」

「そんな……」

呆然とする彼らの周りに、何処からともなく、白い化物—デリト—レンが現れ、取り

囲む。

「ちくしょう……！」

「今こそ、その力を使う時だ」

何処からか、ファイフティの声が聞こえる。同時に、瞬の頭に、何か流れ込んでくるのを感じる。

(これは……コイツの使い方か……?)

頭にあるイメージを、実行に移す。

唯をかばうように前に立ち、バックルを腰に当てる。すると、何処からかベルトが出てきて彼の腰に巻きつき、バックルを腰に固定すると同時に、音声が出る。

《クロスドライバー!》

次に、ライドアーツの背面部のスイッチを押す。

《ARCROSS》

絵の部分が光り、音声が出る。バックルの右側のボタンを押すと、ボタンのついてる部分がパカリと上にひらく。そこについている差し込み口に、ライドアーツの側面の突起を刺す。

バックルから音楽が流れだし、瞬は、腕をバックルの辺りで交差させる。
そして、

「変身！」

その掛け声と共に、クロスした腕を戻すと同時に、ライドアーツの刺さっている箇所を右手で軽く押す。

《CROSS OVER!》

バックルの右にスライドしたライドアーツが、円盤状の液晶部分にドッキングされる。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

その音声と共に、液晶から無数の光の線が飛び出して、瞬の体に巻き付く。全身がそれに包まれた後、何故か瞬の背後に振子のようなものが現れる。そして、それが瞬に向かつて勢いよくぶつかると同時に、光がはじけとぶ。

「……何これ？」

瞬の見た目は、大きく変貌していた。

全身を覆う黒。銀色の胸部装甲。手足の発光するオレンジのラインと眼が、周囲を照

らす。

「これは……」

「それが、力だ」

この日、あまりにも大き過ぎる使命を持たされたヒーローが生まれた。

彼の名は、仮面ライダーアクロス。

全てを繋ぐヒーローの物語が、今始まる。

第2話
ENTER THE NEW WORLD

初めての変身に、戸惑う瞬。

しかし、相手は待つてはくれない。そもそも、現在二人は囲まれている。これはまずい。

「どうすんの……？」

「……」

瞬——アクロスは、拳を握りしめる。体が、震えているのが分かる。

彼は、つい先程までは、ただ脅威から逃げるしか無い凡人だったのだ。歴戦の戦士のように、涼しい顔などできっこ無い。

「gguuuuu！」

怪物が、鋭い爪をふりかざす。

「危ねえ!!？」

アクロスは唯をかばうように、怪物の爪の軌道に割って入る。背中に爪が直撃し、火花が飛ぶ。

やってくるであろう痛みにも、歯をくいしばる。
しかし。

(あれ……痛くない……)

思いきり斬られた筈なのに、それ程痛みは無い。まだ困惑しているアクロスに、怪物達が襲い掛かってくる。

ひよつとして、これならいけるのではないか？今自分たちを襲っている異形どもを倒すことだって。

「はあっ！」

アクロスは振り向いて、怪物に拳を突き出す。

「g u a p ! ? 」

怪物の腹に拳が叩き込まれ、家具を蹴散らしながら後方へと吹き飛んだ。其の光景を見て、アクロスは確信する。

「この力……この力があれば……守れる！」

そう確信した彼は、先程より強く拳を握りしめる。

怪物達が、一斉にアクロスに襲い掛かる。彼は、飛び掛かってきた二体に拳を叩き込んで地面に落とし、すぐさま振り向き、後ろからきたやつを蹴飛ばす。

怪物達は、距離を置こうと屋外へと出る。しかし、アクロスに蹴られた怪物が、彼

らの前に倒れてきて、足を止めさせる。

「これで……終わりだ！」

《CROSS BRAKE!》

アクロスも屋外に出て、バツクル上部の、三つあるボタンのうち、真ん中にあるものを押す。

唯が呆然と見つめるなか、アクロスは高く跳び上がり、右脚を真っ直ぐと伸ばし、空中で飛び蹴りの体勢になる。すると、足の裏から、何かが飛び出して怪物達の体を押さえつける。

「a p……」

怪物の集団の目の前に、オレンジ色の六角形があり、アクロスの足との間に、いくつもの??が、キツクの軌跡を予言するかのように出現する。

「おらああああああああああああああああああああ!!?。」

その時、アクロスの姿が一瞬で消える。

と思えば、いつの間にか怪物達の背後に着地していた。

「外した……?。」

唯がそう呟いた瞬間。

列を作っていた??が、伸びたバネが戻っていくかのように、六角形に重なっていく。

そして、最後のものが重なった瞬間、怪物の群れは、爆発を引き起こした。爆風で思わず目を閉じる唯。

しばらくして、恐る恐る目を開ける。爆風の中からアクロスが現れ、ゆつくりとこちらへと歩いてくる。

「なんなの……それ」

「俺の台詞だったの」

アクロスは、バックル上部右のボタンを押しながら言う。すると、ライドアーツが排出されると共に、変身が解除され、瞬の顔が現れる。

ほっと溜息をついた直後、

「見事初陣を切り抜けた、仮面ライダーアクロスよ」

「お前……」

いつの間にか、唯の家の屋根の上に、ファイティが立っていた。その顔は、嬉しそうだ。

「これで、世界の危機は去った。君が変身したおかげで、この世界の消滅は回避された」

ファイティはそう言った後、急に真面目な顔つきになる。そして、空を見上げる。

「次元統合は避けられない」

瞬達もつられて空を見上げる。そこには、あり得ないものがあつた。

「なんだ……アレ」

それは地球だった。

もう一つの地球が、今まさに落ちてこようとしていた。

「おい……話が違うじゃねえか……」

もう、無茶苦茶だった。たった数時間で、世界が滅びようとしている。瞬の理解を待つこと無く、事態だけが進む。

「本番はここからだ、アクロス」

瞬と唯は目の前に広がる光景を目の当たりにして、ファイティの声も入ってこない程に圧倒されていた。

思考を放棄し、呆然と空を見上げる。

眼前に、世界が迫る。

《ENTER THE NEW WORLD》

頬を撫でる冷たい風が、瞬の意識を引きずりあげる。

最初に視界に入ったのは、街灯の無機質ながらも眩しい光だった。

「はっ!?」

慌てて飛び起きると、見慣れた自宅の前だった。なぜ自分は路上で寝てたのか、と疑問に思う。

何かを忘れていているような感覚に捕らわれながら立ち上がり、あたりを見渡すと、見慣れた風景が広がっている。ここは慣れ親しんだ自宅の前だ。何故自分はこんなところで寝ていたのだろうか、必死に過去を思い返すが、今に至る経緯をどうやっても思い出せない。

しばらく考えて、瞬は諦めた。

思い出せないものは仕方ない。スマホで時刻を確認すると、午前4時ジャストと表示されている。兎に角、家に戻ったほうがいいだろう。

「ただいま」

恐る恐る玄関の扉を開ける。

返事は無い。

時間的に、叔父も湖森もまだ眠っているのだろう。起こさないように自分の部屋までたどり着き、ベッドに倒れこむ。

と、その時、ポケットに入れてたスマホが鳴る。画面には、唯の名前が表示されている。

「もしもし……っ？」

『瞬？無事なんだよね？』

「無事って……なんだお前、そんな切羽詰まったような声で」

電話の向こう側で、唯が安心したかのように溜息をつくのが聞こえる。

「つーか今何時だと思ってんだよ。こちらは何故か路上でグースカしてただけだなー」

『……覚えてないの？』

急に、真面目な声色になる。

覚えてないものにも、瞬には何の事かさっぱりわからない。

「なんだ？お前、何が言いた……」

そう言いかけた時、彼の記憶が呼び起こされた。

怪物の群れ。消え行く街。そして、仮面ライダー。あれほどの出来事があつたはずなのに、何故かそれらは先程まで記憶からさっぱりと消えていた。

さらに、一番の違和感に気づく。

「なんで……なんで街がなんともないんだ……!?？」

部屋の窓から見えるのは、見慣れた街の風景。

瓦礫も、死体も、まるで昨日のことが無かつたかのように、さっぱりと消えていた。まるで、質の悪い悪夢でも見ていたかのような感覚だ。

『父さんも、母さんも、ちゃんといた』

悲劇は無かった事になったが、それ以上に大きな違和感が残った。瞬は、窓の外に目を向ける。今日の朝日は、酷く不気味に映った。

「やっぱり全部無かったことになってる……」

どうやら、誰も覚えていないらしい。家にいた二人に訊いてみたものの、叔父には、いつ帰って来たんだと聞かれ、湖森には怪訝そうな顔を向けられた。

あくびをしながらテレビを付け、普段は見ないニュース番組を見てみても、昨日のことには一切触れない。

『先月から発生している児童連続失踪事件ですが、未だに詳しいことはわかっておらず、警察は誘拐の線も視野に入れた上で操作を続けています——』

「怖いねー、二人とも気をつけるんだよ」

「どうせ変態の仕業でしょ」

テレビを横目に、瞬は朝食を食べる。何時も通りの朝の筈なのに、不気味に感じる。

それに、先程から、瞬は現在進行形で表現し得ない違和感を感じていた。

あえて例えるならば、なにか余計なものがあるような、周りと自分が噛み合わないような感覚。こうして何時も通り過ごしているだけで、それは膨らんでゆく。

「瞬君、なんか顔色悪いけど……大丈夫？」

「だ、大丈夫だつて……二人とも心配しすぎだよ。俺はなんともないから、さ」

どうやら顔に出てたらしい。瞬は急いで朝食を食べ終えようと、洗面所の鏡の前に立つ。

自分自身には、見たところ特に変化はない。叔父も湖森も、何時も通りだ。

「訳わかんねえ」

顔を洗つても、頭の中はまだスツキリしない。溜息が自然と出てきた。

着替えを済ませた瞬は、机に向かっていった。と言つても、勉強してるわけではない。彼の手には、昨日手に入れたバックルとライドアーツがあった。この得体のしれないものが、昨日の出来事が夢ではなかったと告げている。

「これがある……つーことは、夢じゃない、って事か」

誰かに話すべきだろうか、と考えるも、話したところで多分どうにもならない。

「考えたって仕方ねえか……」

一旦考えるはやめよう。今までの流れだと、また頃合いを見計らってフィフティが説明でもしてくれるだろう。なんだかよくわからないけど、そんな気がする。

瞬は違和感について考えるのをやめ、勉強机の横に掛けてある鞆に手を伸ばす。宿題をやつてた方が遥かにマシだと考えたためだ。鞆を開け、宿題を取り出そうと中に手を突っ込む。

「……あれ？」

おかしい。見つからない。結構分厚い本だから、そう簡単には無くさない筈だし、そもそも昨日は帰ってから鞆は開けてない。部屋中を探すが、出てこない。

と、なると考えられる可能性は。

「宿題学校に置いてきた……」

最悪だ。

なんか抱えている問題が先程と比べて一気にスケールダウンした気がするが、高校生にとつては大きいものだ。

「取りに行くしかねえか……」

校則の規定で、校舎に入る際は制服か、部活動のユニホームを着用しなければならぬ。瞬は服を脱ぎ、クローゼットの中にある制服を取り出す。

と、ここである事に気づく。

「……制服、こんなだったか？」

自分の記憶にあるものと、目の前にある制服が違う。再び、忘れようとしていた違和感が呼び覚まされる。

「……まあ、着るしかないか」

そんな事よりも宿題だ。やらなかったらやらなかったで後々痛手になる。瞬は着慣れない制服に身を通し、家を出た。

「ほんとに元通りだな……」

改めて見ると、昨日の夜の事が嘘だったかのように、街は普通だ。ひよつとしたら、あつちが夢だったのかと一瞬考えたが、未だに残るあの生々しい感覚が、あれが現実だ

と主張する。

と、考えているうちに、高校のある場所にたどり着いた。

「あれ……？」

校舎を見た瞬の口から、そんな声が漏れる。

記憶にある校舎と、目の前にある校舎が、大きく異なっている。校門のところにある学校名も違う。というか、中高一貫校になっている。明らかにおかしい。

道を間違えたのだろうか、と一瞬考えたが、胸ポケットの生徒手帳に挟んである学生証は、瞬が目の前の学校の生徒であることを示している。

どういうことだ？と瞬が考えていると、

「ちよつと良いか」

「……？」

急に、後ろから呼びかけられた。ファイフティかと思ひ振り返ると、白いパーカーを着た男がいた。被っているフードの下から覗く前髪は、色が薄い。

なにやら、切羽詰まったような表情を浮かべて、此方を見ている。

「なんだ、アンタ」

瞬の問いに、男はこう答えた。

「妹を知らないか。少し目を離した隙に消えてたんだ」

「悪いけど、俺は知らない」

そもそも誰なんだお前、といった目線を男に向ける。男はガツクリと肩を落とすもすぐに立ち直り、そのまま校門を駆け抜けて行った。

「なんだったんだ、今の……？」

色々疑問に思う瞬。

しかし、自分の本来の目的はまだ達成できてない。というか、出来るかわからない。

「……とりあえず、あるかどうか確認しねえと……」

とにかく、宿題を持ち帰るのが優先だ。考えるのは後回しにしよう。そう自分に言い聞かせ、瞬は校門をくぐった。

——と、息巻いていた数分前は何故か考えていなかった問題が発生。

「あれ……？教室どこだ……？」

外観が変わってた時点で予想はしていたが、校舎の内装も変わっていた。

自分の教室が何処にあるのかわからない。

途方に暮れる瞬だったが、正面玄関辺りなら案内図があるのでと予想し、瞬は一旦引き返す事にした。

「くそ……学校で迷子なんてみつともないにも程があるだろ……！」

悪態をつきながら、静かな廊下を歩く。その時、近くの教室の中に、あるものが見えた。

誰かが倒れている。具合が悪くなって倒れたのだろうか。今いる位置からは良く見えない。保健室にでも連れて行った方がいいのではないかと思い、瞬は教室に入る。

良く教室を見ると、中学生ぐらいの少女が仰向けで床に倒れている。よく見ると、服が少し乱れている。この状況から推測されるのは。

「マジかよ……!?？」

どう考えても事案だ。それも薄い本とかであるような、だ。

考えたくないが、そう判断出来てしまう。思考が、悪い方へ悪い方へと流されていく。これってえつちな漫画の中だけの話ではなかったのか？

その時、

「何入って来てんだよ、モブ野郎」

突然、目の前に拳が現れたかと思えば、次の瞬間には教室の天井が視界一杯に広がっていた。いきなり殴られたらしい。鼻血が流れている。

混乱する瞬の前に、攻撃をしてきたであろう人物が現れる。瞬と同じ制服を着た、気持ちわるいくらいに顔の整った少年だった。

「な………にが………」

「もう少しでお楽しみだったのによお、何邪魔してくれてんだよ」

少年は瞬を殴った拳をもう片方の手で払いながら、瞬を威嚇するように睨みつけてくる。

おそらく、彼が犯人。何がしたいかなんて考えるまでもないだろう。

少年はまだ立ち上がれない瞬の脇腹を思い切り蹴り上げ、瞬は床を転がって壁に背中を打ちつけられる。瞬は痛みを堪えながら、目の前の少年に怒る。

「何……してんだよ!!? 犯罪だぞー!」

「犯罪者呼ばわりは酷いな。救世主と呼んでくれ。これは、世界を救う為の第一歩なんだから、さ」

その言葉に、瞬は唾然とした。会話が噛み合わない。まるで別の世界の、別の生き物と会話しているような感覚だ。というかこの光景がどうやってたら世界救済につながるというのだ?

逃げたい所だが、少女を置いて逃げるなんて出来ない。そしたら、間違いなく彼女は襲われる。早速行動に移そうとするも、少年に腹を踏みつけられる。

「見られたからには、邪魔したからには死んでもらうーこの雑魚が!」

「がはっ!ばふっ!」

少年は叫びながら何度も瞬を踏みつける。踏みつけられる度に、腹の中のもの全て

押し出されそんな感覚が襲ってくる。

「あー腹立つ……ああ腹立つ！ テメエみたいな雑魚には使いたくなかったんだけどよお、テメエのせいで今の俺は凄え気分が悪い！ 後悔させてやる、俺の邪魔をした事を！」

そう言うと、少年は何処からか一本の剣を取り出す。

「なっ……お前、そんなもん……」

銃や刀剣の所持が法律でしつかりと規制されている日本では、本来でてくるはずがない代物。最初、瞬はこれはおもちやだと思いつつになったが、あの刃の輝きは明らかにおもちやではない。本物だ。目の前の少年は、それを躊躇いなく瞬にふりかざそうとしてくる。ハッキリ言つてまともじゃない。

「おらああああああああああああああああああああああああああああ！！？」

剣が、瞬の胸に刺さろうとする。

その時。

《KAKUSEI GUNGNIR》

何処からかくぐもつた電子音が聞こえた直後、廊下側の壁が吹き飛んだ。

粉塵と衝撃波が、両者を襲う。少年の方は、衝撃で窓の方へ叩きつけられ、窓を突き破つて二階の高さからコンクリートの地面へと落下していった。

「なんだっ……」

粉塵の中から現れたのは、異様な姿をした怪物だった。身体のうちこちを覆う白とオレンジの目立つ装甲。その隙間からは、黒い煙が噴き出している。

怪物は低い唸り声をあげながら、ゆっくり歩いてくる。ここで瞬は、少女の事を思い出す。辺りを見渡すと、気絶したままの彼女は、瞬のすぐ近くに倒れているのが見える。怪物が、少しずつ接近してくる。

「……やるしかない、のか？」

あの時のように、出来るのだろうか。守れるのだろうか。

「ガアアアアアアアアアア！」

「うっ!!？」

怪物がいきなり殴りかかってきた。瞬はギリギリ躲すも、拳のあたったロッカーが粉々になる。

とにかく、このままでは少女も瞬もどうなるかわからない。最優先は、少女の安全を確保すること。その為に出来ることを必死になって考える。

「……やっぱりこれしかない！」

考えた末、瞬はバックルを取り出して腰に当てる。するとベルトが自動で巻かれる。

《クロスドライバー！》

ライドアーツを取り出し、ベルトに取り付ける。

《ARROSS》

待機音が鳴り出し、怪物の動きが止まる。瞬は怪物を真っ直ぐ見つめる。

「変身！」

《CROSS OVER》

振り絞って出た掛け声は、震えていた。前と同じように、瞬の身体が光に包まれていく。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

再び、少年は変身した。

仮面の下で、一回だけ、深呼吸をする。

目の前の怪物を恐れるな。後ろの少女が傷つくことを恐れる。

変身に驚いたかのように動きを止めていた怪物が、アクロスに殴りかかってくる。アクロスは腕でガードしつつ、腹にパンチを一発くらわせる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！？」

怪物が怯んだ隙に、アクロスは怪物に突進する。ここで戦えば、少女を巻き込んでしまうからだ。両者はそのまま、杵しか残っていない窓から飛び出し、地上に落下する。

何度も地面を転がった後にゆっくりと立ち上がり、両者は対峙する。

「はあああああつー！」

アクロスは、渾身の力で殴る。しかし、怪物はそれを打ちほらい、カウンターとして蹴りをアクロスに叩き込む。瞬は数歩ほど後退りするも、すぐに再び攻撃体勢に入る。

「アアアアアアアアア！」

怪物は雄叫びをあげ、接近してきた瞬に頭突きをする。瞬は大きく吹き飛び、フェンスに激突し、大きくへこませる。

「っ……強え……」

目の前の怪物は、ポキポキと手を鳴らしながら接近してくる。アクロスは立ち上がるうとするも、少年に受けたダメージが蓄積され、上手く立てない。

「ヤバイ……俺、死ぬ……!?」

怪物の手が光りだす。

死が、目の前に迫る。

暁あかつき古城こじょうは、必死めいじになつて校舎の中を走つていた。

「なぎさ風沙ふうさっ……！風沙ふうさあ！」

必死になつて妹の名前を呼ぶ。

長年一緒に過すごしてきた、大切な家族。それが急に居なくなれば、普通は不安になる。

古城は血眼になつて探す。身体中から、嫌な汗がだくだくと流れる。

ある一室にたどり着いた時、彼は立ち止まった。壁や窓ガラスが吹き飛び、机が散乱している。まるでここだけ台風が直撃した様だ。

そんな教室の壁にもたれかかるように、古城の妹・風沙は倒れていた。

「風沙ふうさあ！」

古城は彼女のもとに駆け寄る。特に外傷はないようだ。ほつと胸を撫で下ろし、肩の力を抜く。

その時、外から何かを殴るような音が聞こえてきた。

「誰か喧嘩けんかでもしてんのか……？」

おつかねえと思ひながら、窓から下を見ると、全身を黒い鎧よろいのようなもので覆い仮面をつけた人物と、異形の怪物が戦っていた。

「なんじゃありや……！！？」

自分の目が可笑しくなったのかと目をこすってみるも、目の前の光景は変わらない。事実だ。

古城が呆然としていると、更に猛スピードで何が彼の目の前を落ち、粉塵を巻き上げる。

「何がどうなつてんだよ……?」

思わず、そんな言葉が口から出てくる。

この時、彼は気付かなかつた。校舎の壁をよじ登り、窓枠に手を掛けている人物がいた事を。古城に殺意のこもつた視線を向けながら、窓から教室に入り込んでいた事に。

「くたばれえええええ!!?」

「な」

グサリ。

古城が気付いた時には、彼の胸元に一本の剣が突き刺さっていた。襲撃者が剣を思い切り引き抜くと同時に、そこから鮮血がとめどなく溢れ出す。

「な……に、が……?」

古城は自らの血が作り上げた紅き海に倒れる。血を失い過ぎた為か、意識が朦朧としてきた。

「や、べえ……」

古城の意識が、沈む。

襲撃者の少年は、屍と化した古城を何度も蹴飛ばす。

「やった……俺はコイツから世界を守った！神様、見てくれたか！やったぞ！俺はヒーローだ！」

高らかに叫ぶ少年。その顔には、何かを成し遂げたのような満面の笑みを浮かべている。血にまみれたその笑顔は、彼が見た目通り真つ当な感性を持ち合わせていない異常者であることを主張している。

「さてと、帰りますか」

色々予定外のことがあったものの、やるべき事は済んだ。少年は剣を引きずりながら教室を出ようとする。

が、

「貴方を逃がすと思っているんですか？」

その言葉と共に、少年の額に銀の槍の穂先が突きつけられる。

「君は……姫柊雪菜ひめらぎゆきなちゃんだっけ？」

「……」

少年に、銀の槍を突きつけている少女は微動だにしない。その目には、少年に対する怒りが込められている。

瞬に、死が迫る直前、それはやってきた。

「どいてどいてどいてどいてどいてえー!」

「なっ……!?」

突然空から女の子の声が聞こえてきたかと思えば、何かアクロスの真上に勢いよく落下してきた。

「がっ……」

良くも悪くも、アクロスのスーツが頑丈な為、そこまでの痛みは感じない。一体何が落ちてきたんだ、とアクロスは自分の体の上に乗っかっている物体を見てみる。

「マジかよ……」

其れは人だった。

紫の髪の毛の、パーカーワンピースを着た幼い少女が、アクロスの上に乗っかっていた。

「……あれ?」

驚くべきことに、彼女は普通に起き上がり、辺りを見渡しはじめた。少なくとも校舎よりも高い位置から落ちてきていた筈なのに。そしてその後には口から出た言葉は、

「もしかして私、また次元を超えちゃったんだ!」

「……え」

「いやあ、もう少し捻りないのかな? 流石に4回目だとマンネリ化してこないかな」

？私、このままだと落下極めちゃうかも!!？」

この場の殺伐とした雰囲気を粉々にするかのようには、少女の口から出てくるメタ発言。

困惑するアクロスに対し、少女は次の様に言う。

「私、ネプテューヌっていうんだ。悪いけど君、状況と此処が何処なのか教えて欲しいんだけど、いいかな？」

それは、なんとも奇妙な縁の始まりだった。

突如周囲に響き渡る咆哮。

其れを合図に、校舎から飛び出した稲妻が、無差別に襲いかかってくる。瞬もネプテューヌも体を屈めて周囲を薙ぎ払うような稲妻を避けるも、衝撃でフェンスに叩きつけられる。

稲妻の当たった地面が抉れている。凄まじい威力だ。

「ガッ……」

稲妻を何度もその身に受けた怪物は、体を引きずるようにその場を離れる。雷鳴が止み、怪物も去り、その場に残された二人は、緊張の糸が解けたかのようにその場にへたり込む。

「何だったんだ今の……?」

「……10万ボルトを喰らう口●ツト団の気持ち味が味わえたような気がするよ……」

なんかズレた感想を抱くネプテューヌ。アクロスは変身を解く。その光景を見たネプテューヌは、驚いた顔で瞬を見る。

「ねぶっ!?」 まさか人間だったなんて……てつきりロボットかと思つたよ〜」

「あのさあ、さつきから言おうと思つてただけど、お前一体なんなんだ?なんで上から落ちてきた?」

「あ、そつか。これまでも何回かこういうのはあつたけど、異性の上に乗つかるのは初

めてだったなー私。変な気起きてないよね？私そーゆーのはお断りだからね？」

やっとネプテユースが退き、瞬の体が軽くなる。一体コイツは何を言っているのだろう。さっきの少年とは別ベクトルの意味不明さを感じるのはきつと瞬は気のせいではないだろう。

「それには色々あつてさあ……てゆーか此処何処？教えてくれたら嬉しいんだけど、どう？」

「日本。正確に言うとうと東京」

瞬の言葉に、眉をひそめるネプテユース。ざつくり過ぎたか、求めているのは別の情報なのか、瞬にはわからない。

「もつと正確に言うなら天統市……」

「日本？プラネテユースじゃなくて？」

今度は瞬が眉をひそめる。聞いたことない単語だ。思わず訊き返す。

「えつと……どーゆーことだ？」

「此処つて、ゲームギョウ界だよね？」

「ゲーム業界……話の流れがわからん。なんでそんな単語が出てくるんだ」

何やら彼女は驚いたような顔をしているが、瞬にはその理由がわからない。さつきから話が妙に噛み合わない。こうも会話のキャッチボールが成り立たないと、自分が可笑

しいのかという気持ちになってしまう。

「まさか……また次元を超えちゃった？ヤバイよくただでさえ仕事溜めていーすんカンカンなのにこれじゃあ激おこされちゃうよ〜」

「……」

「……なんか急に私に向ける視線が変わった？なんでそんな可哀想な目で私を見るの？どっちかという可悲劇のヒロインより主人公なだけだなー私」

一人で騒いでるネプテューヌを、冷めた目で見る瞬。彼の頭の中で、既に彼女は言動の痛い変な子扱いに決定されていた。瞬は立ち上がり、そのままネプテューヌを置いて歩き出す。

「ちよつと待つてよ!!? 私これからどうすれば良いの!!? RPGのNPCでさえ耳より情報を教えてくれるのに☒」

「なんでついてくるんだよ!!? 迷子なら警察行けつての!」

しつこく付き纏ってくる少女を振り切るべく、瞬は全力で走り出した。

さつきから何なんだ。まるで意味がわからない。さつきの怪物も、稲妻も、この少女も、瞬の理解の範疇を超えている。しばらくは何も考えたくない。瞬はそう思いながら、全力疾走するのだった。

時は遡ること5分前。

教室が突如として閃光に塗りつぶされた直後。

「なっ………！」

「これはまさか………！」

閃光に対し、咄嗟に目を閉じた両者。瞬間、稲妻が辺りに飛び散る。閃光が収まり、姫柊雪菜が目を開けた時、彼女の視界には此方に向かってくる稲妻が入ってきていた。

咄嗟に床を転がって回避するも、再び稲妻が襲いかかってくる。まるで、周囲の全てを滅ぼそうとするように。

「一体何処からっ………」

回避しながら、稲妻の発生源を探す雪菜。それは直ぐに見つかった。血溜まりの中に倒れている暁古城だ。彼の腕から、濃密な魔力の塊と稲妻が噴き出している。

次第に雷撃は止み、教室中に焦げたような匂いが充満する。後に残されたのは、雪菜と、血塗れの古城、そして無傷で床に寝かされている風沙であった。

襲撃者の姿は何処にもない。

「今のは………？」

ボロボロになった教室を、倒れている古城の元へと歩く。随分と派手に破壊したものだ。黒板は真つ二つに焼き切られ、床に落ちていているし、廊下側の壁と窓がごっそり無く

なっている。

「つ……………」

ふと、雪菜の耳に何者かの呻き声が入ってくる。声からして男のものだろうが、そんな筈は無い。

いくら吸血鬼でも、致命的な弱点である心臓を貫かれて生きている筈はない。しかし、雪菜の目に映っているのは、紛れも無い現実だった。

床にぶち巻かれていた血が、まるでビデオを巻き戻すかのように古城の体に戻っている。心臓を貫くように体に空いていた穴が、塞がっていく。

「な……………」

最終的に雪菜の前には、ボロボロの服を着た、無傷の体の古城が横たわっていた。雪菜の声に反応して、古城の体がピクリと動く。

「先輩!?？」

「……………姫終か？」

この数日で、聞き慣れた気怠げな声。その主が、ゆっくりと体を起こしていた。

「痛え……………つーか死んでた……………」

「い、生きてるならちゃんと言ってくさいよ！心配した私が馬鹿みたいじゃないですか……………」

「悪かった。でも、俺だって知らなかったんだよ。真祖って、此処までされても生き返っちゃうんだな……」

暁古城は人間ではない。吸血鬼である。

それも只の吸血鬼ではなく、強大な力を持ち、世界を揺るがしかねない第四真祖である。

彼は少し前、ある人物から真祖の力を受け継ぎ、人間から真祖へとなった。未知数の力を持ち、危険視されているが故にある組織から監視をつけられている。それが姫終雪菜である。

「しかし、風沙を誘拐するなんて、一体何が目的だったんだ？」

ふと、古城が呟く。

「第四真祖である先輩に対する人質、と考えるのが妥当ですけど……」

「けど……」

「……すみません、まだはつきりとは分かりません」

雪菜は、何故かここで言うのをやめる。

考えてみると、古城の事を危険視して殺しにかかるのは、納得がいく。実際彼は、人には実感がなく、かもしれないが、世界のバランスを崩しかねない力を秘めている。

「つーか、なんで俺を助けてくれたんだ？お前の任務って、俺の監視か抹殺だったら」

そうだ。もともと雪菜の所属する獅子王機関は、古城の監視及び抹殺を彼女に命じている。別に古城は死にたがってる訳ではないが、雪菜が彼を助ける必要がないように思える。

「確かに、先輩は危険です」

雪菜は、きつぱりと告げる。古城はやつぱりか、といった顔をするが、雪菜はこう続ける。

「ですが、私は先輩が始末されるべきだ、とは思いません。だらしなくていやらしいですが、悪い人じゃないのは確かですから」

その言葉を聞いて、嬉しいような、なんか微妙に傷付いたような気分になる古城。若干心当たりがあるので言い返せない。

古城は気絶している風沙を背負って雪菜と共にボロボロの教室を出た。

『ごめん、お兄ちゃん今いないんだ』

「あーそうなんだ。御免ね、いきなり電話かけて」

『別にいいよ』

湖森の言葉を聞いて、溜息をつく唯。

瞬の電話にかけても繋がらないので湖森に電話してみたのだが、家にはいなかったようだ。

(てゆうか、ありえんっしょ)

誰も、昨日の事を覚えてない上、目の前で怪物に殺された両親が生きていた。朝顔を見た時は、大きな悲鳴をあげてしまったなあと思い出し、唯は少し恥ずかしくなった。

「しっかし、アイツは何処ほっつき歩いてんだか」

唯が瞬に電話したかった理由としては、やはり昨日の事だ。誰も覚えていない、無かった事になっている大惨事。それについて話せる唯一の知り合い。こういう時は、事情を知っている者同士で話し合っって安心を確保したい。そんな思いを抱きながら、彼女は歩く。

彼女が今居るのは、郊外にある巨大ショッピングモール。スマホの機種変更を終えた帰りであるのだが、正直関係ない事だ。付き添いできた父親を先に帰らせ、一人で店内を歩いていた。

「ん?」

ふと、誰かに服を引っ張られたような気がして立ち止まる唯。誰かと思い、後ろを振り返る。

「えーと?」

「……………」

そこに居たのは、小学生くらいの少女だった。無言で唯の服の裾をがっしりと掴んでいる。

「私に何か用でも?」

「……………、何処?」

迷子だこれ。唯はそう呟いて溜息をつく。少女は、じーっと唯を見つめている。

「ま、迷子?この辺の子じゃないの?お母さんは?」

「わからない」

全然情報が出てこない。犬のお巡りさんになった気分だ。面倒なので置いていかかと思つたが、流石に気が引ける。仕方なしに、唯は少女の頭を撫でながら、

「わかつた。お姉ちゃんに任せんしゃい」

せめて迷子センサーにでも連れて行ってあげよう。右も左もわからないような子供を置いていくよりはマシだと判断した唯は、服の裾を握っている手を取る。

「君、名前は？」

「……ひびき」

「ヒビキちゃんか。短い間になるけど、よろしくね」

不安そうな顔の少女を安心させようと、笑いかける唯。瞬とは電話が繋がらないし、とりあえず彼のことを考えるのは、この少女を助けてからでもいいだろう。

当初の目的を後回しにして、唯は少女の手を引きながら歩く。

「……」

「……気まずいなあ」

二人の間に会話はない。沈黙に耐えながら、唯は無言で迷子センターを目指す。

ふと、ヒビキを引いていた手が重くなる。少し力を入れて引つ張ってみるも、抵抗さ
れている感じがする。

「あの、ヒビキちゃん？」

「……」

唯の声は見事にスルーされた。

「見て、あの子」

「え？」

唐突にヒビキがそう言つて指をさす。唯は、なんぞやと思ひながら指のさす方を見る

と、そこには、泣き^{じやく}騒る幼い男の子がいた。

ヒビキよりも幼い男の子は、わんわん泣いている。なんか嫌な感じがするも、唯は話しかけてみる。

「あの、どうしたの……？」

「お母さあん……お父さん……何処お……」

迷子その2だった。思わず唯は頭を抱える。まさか短時間で二人も迷子に出くわすなんて、誰が予想できようか。

「ほっとけないよ……何とかならないかな？」

「それは私も同じなんだけど……ヒビキちゃん、貴女も迷子じゃ無かったっけ？」

「それはそれ、これはこれ。私はこの子を助けたい」

ヒビキはこう言っているが、流石に迷子二人も面倒を見られる気がしない。しかし、同じく迷子であるヒビキが助ける気マンマンなのはどういう事だろうか。ほっとこうかと思つたが、またまた唯の中の善性がそれを妨げる。色々悩んだ挙句。

「ああわかつた！私も手伝うから……」

結果、ひとり増えました。

困っている人をほっとけない自分を笑うしかなかった唯であつた。

まだついてくる。

撒いたと思つたが、あのネプテューヌとか名乗る少女はしつこく瞬に付いてくる。

「あのさあ、いつまで付いてくるんだ？」

「いや、君冷たすぎない？そんなんじや私から主人公の座は奪えないよ？まあ譲る気はさらさらないけどねー」

「何言つてるのかわからないんですが」

痛い発言にはもう慣れたが、相変わらず此方の話を聞いちゃくれない。色々と強引な幼馴染の事が頭に浮かび、溜息をつく。

「しかし、此方がゲームギョウ界じゃないとすれば、一体何処なんだろ？」

「またその話？あんな、俺はお前の厨二病ごっこに付き合つてる余裕はないんだ。また今度な？」

「あ、一応付き合つてはくれるんだ」

ただし高校生は忙しい。よつてそんな余裕はないだろう。疲れ切つた瞬は、近くのベンチに座りこむ。ネプテューヌも隣のベンチに座ってきたが、もうどうでもいい。

「疲れ、た……」

快晴の空を見上げ、長い溜息をつく瞬。そこに、足音が近づいてくる。もうなんだか反応するのが面倒になった瞬は、体をピクリとも動かさず、無視を決め込もうとした。

「すみませーん」

「……」

「あの一？」

「迷子なら他を当たってくれ」

「いや、貴方、開王学園の人ですよね？」

「コスプレだ」

「すっげえ適当な嘘つきやがったよこの人！」

しつこいなあと思いながら、声のした方に顔を向ける。そこには、赤い髪の上に緑の髪という、トマトみたいな髪色の少年が立っていた。

「うわあ凄い髪色」

「さつきからわざとやってませんか？俺の精神にダイレクトアタック仕掛けないでくださいよ」

その時、着信音らしきものが鳴りだした。

「あ、柚子からだ」

少年は何処からか太いタブレットのような物を取り出して腕に取り付ける。

「なんでこつちで通話すんだよ。スマホがあるじゃんかよ」

『遊矢？今何処にいるのよ……早くしないと入学説明会が始まるわよ？』

「久留鳴呼公園……」

『何処をどう行つたら学校とは反対側に来るのよ?!?』

なんだコイツ。一体何を見せられているんだろう。そんなことを思いながら、生温い目で少年を見つめる瞬とネプテューヌ。通話が終わった少年は、

「と、兎に角邪魔してすみませんでしたー」

すたこらさつさと退散していった。ホント何だったんだらうか。あの少年、凄い髪色だったなくらいしか言えない。そういえば自分は何をしに学校に行ったんだっけなあと、思うが色々ありすぎて思い出せない。

とりあえず唯に電話でもして昨日の事について話し合おうと思ったが、スマホの充電が切れていた。

「最悪だ……」

怪物に襲われるし、教室は吹き飛ばし、変なヤツに絡まれるしで、瞬は動く気力が無くなっていた。

自分の周りって、こんなに変なヤツばかりだったっけ。そんな疑問さえも、考えるの

が馬鹿らしくなってきた。青空を見上げ、本日何回目かの大きな溜息をついたのであった。

「つかは……!」

少年は、ボロボロの体を学校の授業屋上に横たえる。体のあちこちに火傷の跡がある。強烈な電撃で体を焼き切られたのだ。生きているのが不思議なレベルで。

「くそつたれ……甘く見すぎてた……」

あれで第四真祖を殺せると思っていた自分が情けない。やはり、ただの剣では第四真祖を殺せない。

準備を整えリベンジマッチに挑もうと、起き上がる。油断しなければ、イレギュラーな要素が無ければ、殺れる。そう呟きながら、ふらふらとした足取りで歩き出す。その時、

「だいぶボロボロになってるねえ、力貸そうか?」

「何だお前!?」

屋上の扉の向こうから、声が聞こえる。

「君に力を与えたものさ」

その言葉が聞こえると同時に、扉が開き、そこから金髪の少年が出てくる。

「まさか、神の仲間か？」

「僕はギフトメイカーのレド。以後宜しく」

金髪の少年は挨拶を済ませると、スマホを取り出して弄り始める。傷だらけの少年は、何だコイツ、倒してしまおうかなんて脳筋じみた考えを抱きはじめる。

やがて、レドと名乗った少年の手が止まる。そして、満足そうな顔でスマホの画面を見ながら何度も頷く。

「うん、うん。凄くいい。中々才能あるんじゃないかな？」

「……何を言っている？」

「君は強くなれる。僕の方があれば」

そう言うのと、レドは少年は腹に思い切り腕を突っ込んだ。

「……？」

少年は驚くも、血は一滴も出ないし、体に穴が空いているわけでもない。ただ、体中に力がみなぎってくるような感じがする。

少年が全身に伝わる奇妙な感覚に戸惑っていると、レドはそれを解消するかのよう
に、こう言った。

「進化、だ。君の特典を覚醒させた。これなら、今までよりもずっと強くなる」

「あ、あ、あああ、あああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああつ!!？」

少年は叫ぶ。レドが手を引き抜くと、少年の体中にジツパーの様なものが現れる。そして、それが開きだす。

「貰い物の力で、己の欲望の為に強くなる。分かりやすく、愚かな進化……」

《KAKUSEI BABILON》

その音声と共に、黄金の輝きが屋上を覆い尽くす。レドは瞬きする事なく、それを見つめている。

やがて光が収まった後には、レドと一人の怪物が残っていた。

「これは……」

怪物から出たのは、先程の少年の声。

その姿は、傷だらけで燻んだ輝きを放つ黄金の鎧を身に纏い、骸骨を思わせる顔には、シミだらけの包帯が何重にも巻かれている。体を動かす度、鎧の板金同士が擦れ合う音がする。

それを見て、レドは万円の笑みを浮かべて告げた。

「崇高なる原点を汚す異端の怪物、オリジオンだ」

第4話

原点を汚す者（オリジオン）

真つ白な空間。

何処まで行つても、白が広がる。

その中に、ポツンと佇む一台の機械。自販機のような形をしているが、商品はない。ただ、備え付けられてたタツチパネルがボンヤリと発光している。

画面には、このような文が表示されていた。

《転生おめでとうございます。特典をお選びください》

「転生……そして、特典というシステムは、我々にとつて都合がいい。誰が、どうやって、何のためにこんな都合のいいシステムを作ったのかは分らんが、使えればそれでいい」

機械から少し離れたところで、二人の男が会話をしていた。一人は、袖無しコートを着たオールバックの男。もう一人は、黒いスーツにサングラスをかけた男。サングラスの男は、煙草の煙を口から吐き出し、

「そういえば、私も一人『覚醒』させたんですよ。中々醜い人でしたけど、努力と才能次第で伸びますよ」

「……期待しているぞ、笠原」

「承知しました、ティード」

そう言い残すと、サングラスの男は姿を消した。白い空間に、オールバックの男——
ティードが残される。

「邪魔は、させない」

シヨップピングモール

「うちの子がすみませんでした」

「良いですよ。当然の事をしただけですから」

迷子センターに辿り着いたとき、館内放送を聞いて駆けつけた男の子の親にばったりとでくわした。母親は何度も唯に礼を言いながら、男の子の手を引いて立ち去っていく。

「もう迷子にならないでね。お姉ちゃんとの約束っ」

男の子は何か言いたげな表情だったが、母親に手を引かれて唯の視界から消えていった。

「良かった良かった」

「良くない。ヒビキちゃんも迷子じゃんか」

男の子の親が見つかって誇らしげに胸を張っているが、ヒビキも立派な迷子である。本人はそののところが分かっているのだろうか。

「……てゆうかヒビキちゃん、意外と喋るタイプなんだね」

唯に懐いたせいなのかは知らないが、一気に口数が増えたような気がする。そして唯の服の裾を掴んで離さない。

「ヒビキちゃんも、ここで待っていればきつとお母さんが来てくれる筈だから。私とはこれでお別れだよ」

「……いやだ」

強く拒否された。ここまで懐かれるとなんか怖くなってくる。何が嫌なんだと訊いてみるも、彼女は俯いたまま答えない。再び犬のお巡りさん状態に陥ってしまった。

「一体何が嫌なんだろ……」

シンキングタイムに突入した唯だったが、それは数秒で終わる事となった。突然、誰かに押されたような衝撃を背中に受け、唯はよろける。

「あつ……」

「あ、ごめんね……急いでるから」

唯にぶつかって来たのは、唯より歳上の女性だった。彼女は一言謝ると、急ぐかのように入り去っていった。

(何だったんだろう……ん?)

気付くと、唯にしがみ付いていた筈のヒビキがいなかった。一瞬パニックになったが、走っていく彼女の後ろ姿を捉える。まるで、何かを追いかけていくかのように。

「待って！何処行くの!?」

親が見つかったのかと思つたが、妙な胸騒ぎがする。早く追いかけないと、取り返しがつかなくなるような、そんな感覚が纏わりつく。歩く人の波に逆らうように、唯は追いかける。

その時。突如として鳴り響く轟音。まるで、爆破でもしたかのような衝撃が、シヨツピングモールを揺らす。

そして、シヨツピングモールが暗闇に包まれた。

しばらくベンチに座つてうだうだしていた瞬。ネプテューヌの方は、いつの間にか隣のベンチで眠りこけていた。

「……いかん、このままだと俺まで眠ってしまう」

春の陽気は人を眠りに誘う魔性の暖かき、というのは良く言われている事。今の際に

この色々痛い少女から距離をとろうと、ベンチから立ちあがる。

だが、何か忘れている様な気がしてならない。まるで前提条件をすつ飛ばしてるような——

「昨日ぶりだね、逢瀬くん」

「うわあああああああああああ！」

公園を出ようとする、胡散臭い野郎ファイティが居た。思わず大声で叫んでしまう瞬。ファイティはやれやれといった感じに溜息をつく。

「まるで幽霊でも見たかのように叫ばないでくれ。私はちゃんと生きている」

「……まあ、丁度いいや。お前に聞きたいことがたんまりとあつたんだ」

そう、これは願ってもないチャンス。今の訳の分からない状況について、コイツからならば、何か情報が引き出せるかもしれない。

ファイティの顔を見ると、全てを見透かしたかのような胡散臭い笑みを浮かべている。その顔に若干不快感を覚えながらも、瞬は口を開く。

「昨日のアレは、一体何だった？」

「世界の終わりさ。文字通りのね」

「でも、終わってない。それどころか、何も無かったみたいになってるじゃねーかよ」

唯との電話の後から感じていた、大きな疑問をぶつける。ファイティは、少し笑って

答える。

「いや、世界は終わったのさ。間違はなく、あの時に」

「じゃあ……今のここはなんなんだ。冗談は格好だけにしろ。そして寝言は寝て言え」

相変わらず、よくわからない物言いをする。ハナから理解させる気がないように思えてくる話し方だ。

ファイフティはニヤリと笑い、瞬を馬鹿にするように言う。

「寝言ね……今更何を言うんだい。私はいつでも大真面目だ。馬鹿にしなさいただきたいね」

「お前が真面目だったなら人類はイかれてるよ」

「話をいい加減進めよう。ここは、確かに君の生きる世界。ただし、様々なイレギュラーが混じった、不純で歪んだ世界だけどね」

やっぱり何を言っているのかわからない。もう少し分かりやすく説明してくれと言ってやりたい。

ファイフティは瞬の方を振り返り、ぱつと腕を広げる。

「様々な可能性を孕んだ第1多重統合次元——縮めて『第1次元』とも呼ぶべき、かな？」

しばらくの間、沈黙が訪れる。瞬が反応に困って黙りこんでいるためだ。そんな突飛

な話にはいそうですかと頷ける奴は、普通に考えても殆どいない。

「君の質問に答えながら、説明しようか」

「ここでようやく、質問に答えてくれるらしい。長話になるけど、と前置きを入れ、フィフティは話し始める。

「まず、君には『平行世界が存在する』という前提で話を進めることを知ってもらいたい」

この一言で、瞬の中でのフィフティの胡散臭さがランクアップする。いつからこの世界はそんな厨二ワールドになったのだろうか。困惑する瞬を見て説明が必要なのかと判断したフィフティは、平行世界について補足する。

「難しい言い方をすると、枝状分岐^{しじょうぶんぎ}宇宙^{うそふ}末端^{まつたん}点^{てん}とも言う。地球を含む宇宙そのものが、枝状に分岐を続け、無数の時空が宇宙に存在するとした考えさ。分岐点が近ければ似た世界に、遠ければ差異の大きな世界になる。これくらいはSF作品とかでも良く知っているような内容だろう？ 軽い復習みたいなもんさ」

確かに、アニメや漫画などの知識から、何となくなら瞬も知っている。ただ、現実に存在すると言われても実感は湧かない。

「普通は、異なる次元同士を歩き来することは容易ではないし、干渉も困難だ。まあ、世界によっては楽々と出来てしまうんだけどね。君の世界では、そんな技術は無かった

みただけど」

「有ったら怖いわ」

「だが、その前提を突き崩すような事態が現在進行形で発生している。君、戦いの後に見たもののを覚えているかい？」

そう言われて、瞬は思い返してみる。色々ありすぎて正直あやふやにしか思い出せない。怪物を倒して、空を見上げて――

「地球が降って来た……」

「そう。あれこれが、平行世界だ」

さりとんでもない事を言つてのけるファイフティ。驚きのあまり、瞬は一瞬表情の作り方を忘れたかのように呆然とした顔になる。今更何を驚く必要があるんだい？とも言わんばかりに、ファイフティはきよとんとした顔で瞬を見つめる。これが至極真つ当な反応だと思ふのだが。

まあいいか、と言つてファイフティは話を再開する。

「君が、空にもう一つの地球を見たあの瞬間に、世界は融合したんだ」

「融合……？」

「そう。次元統合現象、と私は呼んでいる。このままでは、全ての次元は一つになり、滅ぶだろう」

そして、それに対抗し得る力が、瞬に託されている。瞬は、ポケットの中のライドアーツを固く握りしめる。

「君が立ち向かうべき相手は既に示した。さあ、全てを救え！君は、これから救世主になるんだ！」

「……………」

長い沈黙があつた。

突飛な話があまりにもポンポン出てくるので、瞬は何を言えいいのか困惑しているのだ。

「ああ、最後に一つ説明したい事が——」

ファイフティが何かを言おうとしたその時。

ドガアアアアアアツツ!!と、轟音が鳴り響いた。

学校での一件といい、今の爆発といい、一体何が起きているのか。音のした方を見ると、煙が上がっている。確か、あの方向には馬鹿でかいシヨツピングモールがあつた筈だ。

「話は後だ。僕から一つ、プレゼントを渡そうか」

ファイフティはそう言うと、ポケットから何かを取り出して瞬に投げ渡す。見たところ、瞬の持っているライドアーツに似ているが、一体どうしろというのだろうか。

「それをベルトに挿入して起動するんだ」

言われるがままに、ライドアーツをバックルに刺して、変身の時と同じ要領で操作する。すると、

《VEHICLE MODE》

その音声と共に勢いよくライドアーツがバックルから排出され、地面に転がる。

「……不良品？」

「いや、ここからだ」

すると、地面に落ちたライドアーツがガチャガチャと音を立てて振動を始めた。それと同時に、ライドアーツが大きくなりながら変形していく。

「これは……」

瞬の目の前には、一台のバイクが現れていた。ヘルメットもちゃんとついている。

「乗ってみるといい」

ファイティに言われるがままに、瞬はヘルメットを被ってバイクに跨る。見ると、メーターなどがある場所の手前に、タッチパネルのようなものがついている。恐る恐る手をかざしてみると、画面に文章が表示された。

「なんだこれ」

《ユーザー情報インプット、オートモード起動》

突然、バイクのエンジンがかかり、大きな音が鳴り響く。慌てふためく瞬だが、フティは御構い無しに瞬の後ろに座る。野郎二人乗りなんて誰も望んじやいないが、慌てている瞬はそれに気付かない。

「ちよつと待て！これどうやって止めんの？止まらないんだけど？？」

「だいじよーぶ、死にはしないから」

少年の叫びは届かない。

バイクは猛スピードで発進した。

唯とヒビキが会おう少し前。

ショツピングモールの、一般客は立ち入らない筈の冷凍室。固く閉じられていたその扉が、ゆっくりと開けられる。溜め込まれた冷気が、外へと流れていく。

カツンと、乾いた足音が鳴り響き、それと同時に薄暗い冷凍室にひとつの影が入ってくる。

スーツを着た、若い女性。スーツの上からでも、彼女のスタイルの良さが見て取れる。ぱつと見どころかのキャリアウーマンに見えなくもない。

「はあ……」

白い息が、口から漏れる。冷気に体を震わせながら、部屋の奥へと進む彼女。

部屋の隅に積まれたダンボールの山を退かし、その向こうを覗き込む。そこには、一人の子供が倒れていた。

「見つけた……」

冷たい部屋の中で、その一言が木霊した。

再び、視点は切り替わる。

突如として停電したショッピングモール。当然、人々は混乱に陥る。ヒビキを追っていた唯も例外ではなく、当然現れた暗闇にその足を止められた。

「停電……なんで!?」

足を止めたために一瞬ヒビキを見失った唯は、辺りを見渡す。階段を降りていくヒビキの背中が見える。

「待って……ヒビキちゃん！」

階段を数段飛ばして降りながら追いかける唯。多少距離があつたが、踊り場でなんとか捕まえる。

「捕まえた……！」

ヒビキはというと、唯の腕を振り解こうと暴れている。一体なぜ彼女は急に走り出したのだろうか、と疑問に思うが、兎に角一安心する。

唯がほっと一息ついたその時、ギイっという音が辺りに響いた。見ると、階段を降りた先、狭い通路の突き当たりの『関係者以外立ち入り禁止』と書かれた扉が開いている。唯がその扉に視線を合わせた瞬間、物凄い勢いで何かが飛び出し、唯の首を締め付けてきた。

「がっ……はんっ……!」

唯の手かヒビキが離れると同時に、扉が吹き飛んで階段前に落ちる。冷たい空気と共に、何かが通路に入ってくる。それが階段の前まで来た時、非常口看板の緑の光に照らされ、その姿が明らかになった。

緑色の、トカゲのような生き物。頭頂部から背中にかけては鶏冠がつき、長い尻尾を引きずっている。

一番の特徴は、長い舌。口から伸びる長い舌が、唯の首を締め付けている。

「な、なんなの……コイツ……」

少しずつ、引つ張られている。怪物に近づくにつれ、唯の視界にあるものが見えた。怪物が、何かを抱えている。服を着たマネキンのような――

（待って!これって――）

ここで唯は気付いた。

あれはマネキンではない。人間の子供だ。さらに、あの服には見覚えがある。さつき

唯が送り届けた迷子の少年のものではなかっただろうか？

唯が思考を巡らせていると、怪物はより強く首を締めてきた。意識が飛びそうになるのを必死に抑えるが、引つ張る力も強くなり、唯は階段から落ちそうになる。

(やば、死ぬ——)

その時。

「ああああああっ！」

聞き覚えのある声と共に、何かが怪物を吹っ飛ばした。唯は締め付けから解放され、踊り場の壁に叩きつけられる。

それはバイクだった。何故こんな所に入つて来てるのかは知らないが、とりあえず助かった。

「ようやく止まった……」

バイクに跨っていた人物は、気が抜けたようにヘルメットを脱ぎ捨てる。その顔を見て、唯は思わず声を出した。

「瞬……」

「唯……? なんでお前が……?」

いやその前にあなたは何でショッピングモールの中でバイク乗ってるんだ、と思わず突っ込みたくなった唯。しかし、忘れてはいけないのは、今この場には怪物がいるとい

うこと。バイクに跳ねられた怪物は、ヨロヨロと立ち上がって瞬を睨みつけている。

「さ、逢瀬君。戦うんだ」

瞬の背後から、何処か胡散臭い声が聞こえてくる。よく見ると、瞬の後ろにファイフティが乗っている。唯は、野郎二人乗りなんて誰得なんだと一瞬思ってしまった。

「ファイフティ、あれは……」

「あれはオリジオン。奴等の手駒さ。細かい話は後にして、割って入った以上は戦え。君は場数を踏むべきだ」

瞬はバックルを装着し、ライドアーツを取り出す。

《クロスドライバー！》

起き上がってくる怪物を真つ直ぐ見据えながら、バックルにライドアーツを差し込む。

《ARCROSS》

「変身！」

《CROSS OVER》

音声が鳴り響くと共に、瞬は走り出す。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

変身が完了し、アクロスは起き上がった怪物に体当たりを仕掛ける。兎に角、唯達か

ら怪物を引き離そうとする。

「私の、邪魔をするな！」

突然怪物が喋ったかと思えば、背中に衝撃を受けてアクロスは前方へと転がって行く。飛ばされた先は、多くの人がいる出口前。当然、パニックが引き起こされた。

「なんだあれ！化け物^何?!？」

「馬鹿どうせ魔族だ！特区警備隊^{アイランドガード}を呼べ！」

「あれ立体映像じゃないの?!？」 誰かがデュエルしてるんじゃないの?!？」

誰もがアクロスに変身した瞬と、オリジオンをみて騒いでいる。アクロスは立ち上がったって、皆に逃げるように言う。

「みんな逃げろっ……早くがっ」

顔面に拳を入れられて、数歩退く。オリジオンとアクロスの戦いに巻き込まれたいくない人々が、一斉にその場を離れていく。

「どうした。格好だけなのか？」

アクロスは果敢に挑むも、オリジオンは軽々と攻撃を躲し、舌を伸ばして引つ叩いてくる。その度にアクロスは壁に叩きつけられる。

「まあ、死ね！」

「っはあ！」

オリジオンは、手のひらから卵型のエネルギー弾を撃ち出し、アクロスを吹き飛ばす。自動ドアを突き破り、駐車場の地面のアスファルトに体を打ちつけられる。

立ち上がろうとするも、上手く力が入らない。学校での戦闘のダメージがまだ残っているのだ。アクロスはまだ戦いの素人。ずば抜けた身体能力や特殊能力があるわけもなく、ライダーの力も上手く扱いきれていない。

「はああつー！」

オリジオンの方は、アクロスよりは無駄の少ない動きで間合いを詰め、ようやく立ち上がったアクロスを殴り飛ばす。

（やっぱ無理だつーの……！俺なんか世界救える訳ねーだろ……）

一抹の諦め。それが実力差をさらに広げてゆく。オリジオンは倒れたアクロスを強く踏みつける。体の中身が全て押し出されるかのような圧力が、アクロスにのしかかる。

「がっ……はあつ……」

「私はねえ、可愛い子供は好きだけど、君みたいな反抗期真っ盛りのクソガキは嫌いなんだ」

「っ……」

「てか、君も転生者だろう？何をトチ狂ってヒーローごっこしてるんだか。いい子ぶつ

てないで、せつかくの第2の人生なんだから、自由に生きれば良いじゃないか」

アクロスは、限界に来ていた。意識が、手放される。オリジオンは、手のひらにエネルギーを集める。トドメを刺すつもりらしい。

「ま、どのみち君みたいな子には無理だけどき」
が。

「その言葉、そのまま返すぞ」

突然、何処からか声が聞こえてきた。

唯達ではない。彼女達は、まだシヨツピングモールの中だ。明らかに、すぐ側から声がした。

オリジオンは攻撃を中断し、辺りを見渡す。周りには、アクロスの他にら駐車中の車しかない。

「此処だつての、間抜け」

次の瞬間。

声と共に、オリジオンの顔に何者かの拳が叩き込まれた。

「な………!?」

驚くのも無理はない。

その腕は、車のサイドミラーからでていた。まるで、鏡の中からでてきたかのように。

更に、困惑するアクロスとオリジオンの両者に、嘲るような声がぶつけられる。

「馬つ鹿じゃねえの？ お前は転生した時に脳味噌置いてきたのかよ」

「お前……何処から……!?？」

声の主が、瞬の前に現れる。

そいつは、鏡から出てきた。そうとしか言えなかった。鏡から二人の戦いに割って入り、一瞬にして自らの舞台へと変えた。

更に異様なのは、外見だ。黒い甲冑のような物を身につけて、顔も見えない。腰にはベルトのような物を巻いている。ただ、アクロスはその姿を見てある事を感じていた。（なんだ……こいつ、アクロスに似ている……気がする）

何故か、そのような感じがする。向こうの事など、微塵も知らないにも関わらず。既視感とは、こういう感覚なのだろうか。

「お前呼ばわりするな。俺はリュウガ、ただの……悪だよ」

「リュウガ……」

「邪魔だ、退け」

リュウガと名乗った人物（？）は、地面に倒れたままのアクロスを蹴飛ばし、オリジオンに近づいていく。

「オリジオンになった以上、容赦はしない。懺悔などさせてたまるか」

（なんじゃありやあ……!?? ドラゴン……うまさかアイツも鏡から……!??）

それは、黒い蛇竜だった。見るからに危なそうなその生物は、リュウガの背後で浮遊している。

ドラゴンは、滞空しているオリジオンに向かって口から黒い火球を吐き出す。

「がはあっ！」

オリジオンは火球を左肩に受け、ショッピングモールの入口前に墜落する。

「逃すか、追え」

リュウガはドラゴンにそう命じ、瞬の方を向く。ドラゴンは、オリジオンの落下地点へと飛んでいく。

「訊きたいことがある」

「……」

「お前は何処の回し者だ？何だ、その姿は？」

どうやら、コイツはアクロスについては知らないようだ。酷く冷たい声が、アクロスに突きつけられる。

「……知るかよ。この力とはまだ半日くらいの付き合いなんだな」

「正直に言え。返答次第では殺す」

正直に言ったつもりだが、向こうには信じてもらえなかったらしい。おまけに脅迫ま

でしてきた。仮面の下、満身創痕の瞬の体から冷や汗がどつと湧き出てくる。

殺意。平穏な生活を送っていた瞬にとっては、縁がなかったもの。感じたことのない恐怖が、アクロスを襲う。

「し、正直に言ったぞ。本当だって」

「じゃあ、お前の目的は何だ。返答次第では殺す」

リュウガは、瞬の弁明を無視して新たな質問を脅迫込みで送りつける。彼の気迫に、瞬は足が震えてくる。

「……………」

分かりっこない。世界を救えだの次元統合だの言われても、未だにピンとこない。自分の目的だって示されたってはつきり言える自信はない。

「答えないというのなら、覚悟はいいな？」

答えられずに立ち尽くしているアクロスを見て、リュウガは溜息をつく。そして、アクロスに近寄って、

ボグッ!!!と。

瞬を思い切りぶん殴った。

アクロスの体は近くの車に叩きつけられ、車は真つ二つにひしゃげる。口の中に広がる血の味。アクロスは、力を振り絞って上体を起こす。

「いきなり何を……」

「今の答えで、お前を倒す事にした」

訳が分からない。理不尽だ。

突然突き付けられた言葉によって、アクロスの思考が混乱する。

「意思も目的もない、強大な力。お前はそれがどれほど恐ろしいか分かっちゃいない」

「……はあつ!?」

「お前は、危険すぎる。だから、世界の為にも今ここで倒す——！」

シヨッピングモールの中。残された唯とヒビキは階段に座っていた。ファイフティは、怪物から助け出された少年を唯に預けて何処かに行つてしまっていた。

既に建物内は停電から復旧しており、照明が明るく周囲を照らしている。しかし、瞬と怪物の戦闘が起きたこの区画だけは、誰も寄り付こうとせず、静まりかえっていた。

「何だったの、今の怪物」

「……………」

会話が途切れる。あんな怪物に襲われたのだから、無理もない。唯は、目を覚まさない少年を背負つて立ちあがる。瞬が、身を呈して自分達を守っている。そのうちにこの

子供を安全な場所に避難させるべきだろう。

ヒビキの手を引いて、唯は階段を下る。

その時、ガタンという音が前方から聞こえてくる。確か階段の前には、怪物が吹き飛ばした鉄扉があつた筈。今のは、それを踏む音だろうか。瞬なのか、怪物なのか、それとも。

「大丈夫……私がいるから……」

ヒビキを安心させるかのように、繋いだ手をぎゅつと握る。再び、ボタンという音がある。通路の角から、靴のつま先が覗く。

「あ……」

「え……」

出会つたのは、傷だらけの女性だった。服はあちこちが破けたり煤けていて、ところどころ出血もしている。

「だ、大丈夫ですか？？」

「だ……」

唯の呼びかけに応じる前に、女性は倒れてしまった。揺すつても返事はない。こんな怪物人を放つておけない。

とにかく救急車でも呼ぼうと、スマホを取り出す唯。その光景を、ヒビキは微動だに

することなくじっと見つめていた。

第5話

ゲート・オブ・オリジオン

「お前は、危険すぎる。だから、世界の為にも今ここで殺す！」

「なっ………！！？」

《S W O R D V E N T》

リュウガは、再びカードを取り出して左手の機械に挿入する。すると、彼の右手に一本の剣が現れる。黒い柄とギラリと光る刃が禍々しく感じられる。

「なんなんだお前………一体なんなんだよ！」

「今から死ぬ奴に話すことはない！」

リュウガは瞬の言葉を切り捨て、剣を振りおろす。アクロスは必死になつて体を横にずらし、それを回避する。標的に避けられた剣は、先程の攻撃でひしゃげた車を容赦なく切り裂き、車は大爆発を引き起こした。

「うおっ………はっ………！」

焼けつくような爆風に煽られ、アクロスの身体は数メートル先に飛ばされる。再び地面を転がり、立ち上がって体勢を整える。

リュウガの方を見ると、炎の中に真つ黒な影が佇んでいるのが分かる。炎の中から、気怠げな声が聞こえてくる。

「じゃあ、次はこれだ」

《COMPLETE》

突然、炎の中から青い閃光が放たれる。そのあまりの眩しさに、アクロスは目を閉じてしまう。そして、何かは炎の中から勢いよく飛び出してきた。

アクロスはぼつと後ろを振り返る。そこには、先程までとは違う、新たな姿となったリュウガがいた。

白い身体に、青いライン。紫の大きな複眼に、ベルトに取り付けられているのは携帯電話のように見える。一番の特徴は、背中に取り付けられた大きなジェットバッグだった。

「リュウガ……なのか?」

「今の俺は、サイガだ」

サイガはそう言うと、ジェットバッグを起動させる。背中から勢いよく煙を吐き出し、サイガの身体が宙に浮き上がる。

「なんだよそれ……ありえねえだろ!?!?」

「文句言うんじゃない。ここは戦場だぞ? いつでもどこでもフェアな勝負が出来るまで

目を開けて下をみると、自分の足が宙に浮いている。ここで、アクロスは誰かに腕を掴まれている事に気付いて上を見る。

「大丈夫かな？」

「ファイフティ……」

バイクに跨った涼しい顔のファイフティが、瞬の右腕を掴んでいる。というか、バイクが空を飛んでいる訳なのだが、生憎、命拾いをして呆然としているアクロスはそれを疑問に思えるほど頭が回らない。

ファイフティはアクロスを引っ張り上げて自らの後ろに乗せると、スピードメーター下のレバーを手前に倒す。すると、バイクはゆっくりと地上に降り立ち、それと同時に側方に展開されていた翼が折り畳まれ、内部に格納される。

「随分と酷い事をするもんだね。彼が離れていつちやうのも納得するよ」

ファイフティは、上空から此方を見下ろしているサイガにそう言い放つ。高度を下げて接近してきたサイガは、ファイフティを睨むかのように顔を向ける。

「こいつはお前の差し金か。何を企んでんのかは知らねえが、邪魔しないでくれないか」
「変わらないな、君も。まだ復讐を続けるのかい？」

「……お前には一生理解できねえよ」

そう言い残すと、サイガは此方に背を向け、そのまま飛び去っていつてしまった。

彼の姿が小さくなって見えなくなると同時に、瞬は変身を解除してその場に膝を落とし、座り込む。その体は、度重なる戦いによってボロボロになっていた。

「酷くやられたね。立てるか？」

「……………」

瞬の返事はない。ファイティが手を差し伸べるも、反応がない。ぐらりと、少年の体が揺れたかと思えば、そのまま地面に倒れた。

「逢瀬君！」

ファイティは体を揺すが、反応がない。

「まずい ……予想以上にダメーシが大きい」

意識のない瞬の体を肩に担いで、ファイティは移動を始める。この場所にまだ敵がいる可能性もあるからだ。

瞬を担いだファイティが、シヨツピングモールの駐車場を出たその瞬間、

「いたいたー！私を置いてくなんて酷い……………ってねぶう！！？ どうしたのその怪我！」

公園に置いてきた筈のネプテューヌと遭遇した。公園とシヨツピングモールは距離が近い為、戦闘音を聞きつけてここまで辿り着いたようだ。

血塗れの瞬を見て、気が動転するネプテューヌ。ファイティは、彼女を軽く押しつけて前に進む。

「話なら後にして、救急車でも呼んでくれると助かる。私は今携帯電話を持っていないもので」

「そうしたいのは山々なんだけど……出来ないんだよね。何故か繋がらなくてさー」

しまったな……とファイフティは頭を抱える。唯達はまだ建物内にいるし、ここから建物の入り口までは距離がある。

脈はまだあるのだが、一刻を争うのには変わりない。バイクの方は、ライドアーツの状態のまま何故か動かない。

ここで、ネプテューヌがいきなり大声をあげる。

「む、むむー？私、この状況を打破出来るかもー」

そういうと、彼女はパーカーのポケットに手を出して突っ込んで、なにかをがさがさと探し始める。

「あつた！知り合いのアイテム屋さんから買った『すごいような傷薬』！」

ネプテューヌが取り出したのは、ポ○モンとかで出てきそうな一本のスプレー缶だった。この時点で充分怪しいのだが、「すぐ効く！」「最強！」と、頭の悪そうなキャッチコピーが書かれているのが、その怪しさを際立たせている。

ネプテューヌは缶の封を切り、ファイフティが肩に担いでいる瞬間の顔面目掛けてそれを

思い切り吹きかけた。

「何をすげほっ」

「動かさないでっ」

思い切りフィフティの顔面にもかかってたり、そもそもネプテューヌの背が低い為に瞬にうまくかからずに苦勞するも、なんとかやり終えた。

フィフティは、その場に腰を下ろしたネプテューヌに言う。

「……君もついてきたまえ。おそらく、私なら君の知りたい情報を提供できる」

時は進み夕方。

誰もいない倉庫街。

「うう……」

血をダラダラ流しながら、呻き声をあげる一人の男。着ていた背広は破けて半裸状態。左手に至ってはあり得ない方向に折れていた。ひしゃげたコンテナに仰向けになつた彼の後ろには、大きな黒い蜘蛛のような存在が倒れている。

その前に、二つの人影が立ちはだかる。左眼に金属製の片眼鏡を嵌めた法衣の男と、ケープコートのみを身に付けた藍色の髪の小女だ。

「完全に虚仮威しですね。まあ、貴方みたいな吸血鬼ごときにハナから期待はしていな

かったんですが」

「……ちくしよ」

法衣の男の侮蔑の言葉が、倒れたままの男にぶつけられる。

男は、吸血鬼である。真祖の様な戦闘力はないが、弱い吸血鬼でも、眷獣の強さは戦車や戦闘機一台分には相当する。普通なら、人間相手にここまでやられる事もないし、される道理もない。

しかし実際、男は目の前の二人に完敗し、追い詰められていた。

「終わります。アスタルテ、やりなさい」

「はい、殲教師様」

藍色の髪の少女は、静かに目を閉じる。コートを靡かせながら、抑揚のない声で告げる。

「命令受諾。アクセプト エクスキュート 執行せよ、ロドダクテユレス 薔薇の指先」

「あ、ああ……」

彼女のコートの間隙から、仄白く輝く透き通った、巨大な腕が飛び出す。そしてそれは、倒れている吸血鬼の男とその眷獣を勢いよく貫いた。

「さて、引き上げますよ」

そう言って、法衣の男 —— ルードルフ・オイスタツハは踵を返す。彼とアスタル

テは、ある目的の為にこの地に降り立ち、魔族を狩っている。これまでも幾度となく襲撃を繰り返しているのだが、警察は彼等まで辿り着いてはいない。

自らの悲願成就の為に、足早に立ち去ろうとするオイスタツハ。しかし、そこに一人の影が現れる。

「……」

現れたのは、制服姿の少年。東洋人の顔は殆ど同じように感じるオイスタツハはそうは思わなかいのだが、顔も整っている。夕日に照らされたその顔は、まるで物を見るかのように此方を見ている。

「なんですか。まさか、見たのですか？」

バレないようにやったつもりだが、目撃者なら消すしかない。先日も、獅子王機関の剣巫と第四真祖に目撃され、彼等を始末しきれずに撤退してしまった為に、オイスタツハは余計に不安を感じていた。

まだ実行するには不十分だ。全てを賭して臨む聖戦がある。手に持った戦斧の柄を強く握りしめる。

「オツサンには、興味はないんだけどな。実験してえんだわ」

「……アスタルテ、構えなさい」

二人が構える。少年は、不気味な笑みを浮かべながら、

「無駄な足掻きをしてくれる」

《KAKUSEI GILGAMESH》

その音声とともに、少年の体にジツパーが現れ、それが開いていく。そして、ジツパーが開ききると同時に、まるで内と外をひっくり返すかのように体が反転していく。

その変化が終わると、そこにいたのは少年ではなく、黄金の傷だらけの鎧を着た怪物であった。夕日の輝きを反射しながら光るその姿は、酷く醜く感じられる。

「前哨戦……貴様には、俺の踏み台になってもらおうか」

怪物の後ろから、眩い光が照りつける。夕日ではない。オイスタツハは、今夕日を背に立っているからだ。

ゲート・オブ・パピロン、オルタナティブ
「王の財宝・転」

その瞬間。

なんの前触れもなく、派手な装飾が施された戦斧がオイスタツハの脇腹を抉りとつた。

「あ………!?」

彼の意識は、ここで途切れた。

夢。

それは、過去のプレイバック。

唯と二人で帰る道。

夕日に照らされながら、瞬はこんな言葉を切り出した。

「時々さ、虚しくなるんだ」

「いきなり何？ 詩人じみた台詞なんか言い出して。中二病？」

「やめろ、お前ほどイタクねえわ」

唯の揶揄いで、話の腰をいきなり折られてしまう。瞬はそっぽを向いて話を続ける。

「自分が、空っぽに感じる。何も持っていない、木偶の坊に思えてしまうんだ」

「そう？」

何時からかはわからない。

自分を形作るモノ。その中にあるのは全て他人の受け売りだと気付いた時、瞬はどうしようもない虚しさに襲われた。

と、ここまで話したところで、唯が堪えきれずに大笑いする。

「笑うなよ。割と真剣なんだぜ」

「いや、笑うしか無いじゃん。アンタそういうキャラだった？」

「青年期特有のアレだつて……お前だつてそうだろ？」

「いやいや、私はさ——」

最初に視界に入ったのは、自室の天井だった。

窓の方に視線をやると、窓の向こうは完全に暗くなっていた。随分と懐かしい夢を見てしまったらしい。はつきりと覚えている。あれは、唯と初めて出会った時のことだ。

しかし、何故今この夢を見たのだろうか。寝ぼけてた頭で考えても分からない。

「……てか、まごころは？」

瞬は、ゆっくりと体を起こす。何故か上半身が下着一枚になっている。ここに至る経緯を思い出してみようと、ベッドに腰掛けて考える。

（俺は、あのリュウガとかサイガとかいう奴にやられて……）

ここで、瞬は自身の体が無傷であることに気付く。あんなに連戦が続き、その全てでボコボコにされた筈なのに、今の瞬の体には傷のひとつも無く、疲れが取れたかのよう
に体が軽い。

何でだ？と疑問に思う瞬だったが、その思考は廊下から聞こえてきたドタドタという音に遮られる。

「こらー！待て待て待てー！私の分のプッチンプリンを食べるなんて許さないぞー！」
「うわああああー！ごめんなさい！ごめんなさい〜！」

……ちよつと待て。何故コイツらがいる？

ドアを開けた瞬間の頭に、突如浮かび上がるハテナマーク。紫色と栗色の髪が瞬の視界の下方を横切る。

「つい出来心で……ごめんネプテユヌー！」

「食べ物への恨みは深いんだから！例えるならえーつと……とにかく深いんだから！」

「人ん家で何ギャーギャー騒いでるんだよ。夜だぞ。てか何でいるんだ」

迷子の幼女二人を家に連れて入るとかアウトだろう。とりあえず二人を捕まえて両脇に抱え、階段を下りていく。

「HA☆NA☆SE！」

「やだやだやだやだやだ！」

じたばた暴れながら叫んでいるみたいだが聞こえない、気のせいだ。無心になつて二人を抱え、足でリビングのドアをスライドさせる。ここでは、妹の胡森が既に夕食を食べていた。

「あ、お兄ちゃん。ご飯出来てるよ」

「ゴチになりまーす」

唯と一緒に。

思わずギャグ漫画的ズッコケをやらかしそうになる瞬。抱えていた幼女二人をその場に下ろして唯に詰め寄る。

「何当たり前の様に人ん家でメシ食って帰ろうとしてんのじゃおのれはあ！大体昨日もそうだったろーが！」

「叔父さんはいいつて言つてたし、私の親からも許可貰つてますからー」

「つーか叔父さんもお前の親もなんでホイホイOKしちゃう訳!?？」

無責任な大人ばつか揃いやがつて……とがつくりと肩を落として溜息をつく瞬。話を切り替えて、リビングの入口に置きっ放しの幼女二人について尋ねる。

「で、だ。こいつらがなんで此処にいるんだ？ニュースになつてた連続児童失踪事件の犯人はお前だったのか？」

「いやいやいや、私そんな趣味ないし！いきなりファイフティがやつて来て、瞬とネプテューヌを置いていったんだって……」

「じゃあコイツはなんなんだ？」

瞬がヒビキを指差して唯に尋ねる。なんか迷子のようなのだが、家に連れて帰るとか完全に犯罪でしかない。この歳で前科持ちとか洒落にならない。

「ファイフティに訊いてよ。なんか『彼女は普通ではない。君達の手元に置いていた方が

都合がいい』とか言ってたけど……」

なんでそう中途半端にはぐらかすんだ。瞬は思わず頭を抱えてしまう。ソファアードかりと座り込み、背もたれに背中を預けてポツリと一言呟いた。

「…ホント、どうすんだよ」

世界は不親切すぎる。少年は、齢16にして

それを思い知らされるのであった。

しばらくたって。

唯が帰るので、家の外まで見送りに来た瞬。春先の、微妙に冷えた風が二人に吹き付け、瞬は一回クシャミをする。

瞬は、ふと思った事を唯に言う。

「……なあ、唯」

「何？なんか悩み事？」

「俺は、この力をどう使えばいいんだ？」

瞬は、バックルを取り出してそう言った。その顔には、なんとも言えない表情が浮かべられている。唯はうーんと唸りながら、

「胡散臭男は、世界を救うとか言ってたんでしょ？そうなんじゃない？」

そんなことはわかってる。多分、何度聞いたって同じ事を彼は言うだろう。しかし、昼間リュウガに言われた言葉が、頭から離れない。

「意思も目的もない、強大な力。お前はそれがどれほど恐ろしいか分かっちゃいない

”

確かに、これまで瞬は状況に流されるがままにアクロスに変身し、戦っていた。歴戦の勇者のような強い意思も、アクロスの力を使いこなす術も、自分で掲げられるような目的も無い。

果たして、そんな自分がアクロスの力を使っていいのだろうか。そう思ってしまったのだ。

「……俺が、このままアクロスでいいのかな？」

ぼつりと呟いた言葉。それを聞いて、唯が少し吹き出す。

「ちよ……笑うなよ。コツチは真面目で……」

「もー難しく考え過ぎだよ、瞬は」

唯は軽く笑うと、瞬の手をとって次のように言った。

「力が有ろうが無かろうが、瞬は瞬だよ。やれる事は増えたかもしれないけど、瞬がやる事は変わらないんじゃない？」

その言葉が、瞬にどのように通じたのかは、他人にはわからない。だが、瞬の顔は薄

く笑っているように見えた。

「瞬には、私と同じ皆ハッピーの精神がある。そう簡単にはブレないよ」

そう言うと、唯は踵を返して歩き出す。一人残された瞬は、バックルを手に持ったまま立ち尽くしていた。

あくまでも、唯の言葉はヒントのようなモノ。最終的には、瞬自身で答えに辿り着かなくてはならない。周りから与えられた、頭から消える事のない命題に、少年は頭を悩ませるのだった。

第6話

ヒーロー胎動

例えばの話。

ある日突然、強大な力や才能を手に入れたら。そしてそれを、特に何も考えることなく使い続けたら。そして、その結果誰かを傷つけたという現実に気づけなかったら。

君はそれを見過ごせるのか。許せるのか。

または、その現実を理解した上で力を使うのか。

結局のところ、逢瀬瞬という人間に与えられた命題は、そういう次元のものなのだ。

これは、彼の道を決める分岐点。

それを決めるのは、彼自身。

少年が選ぶのは、他人の為に動くヒーローか、自分の為だけに動く愚者か。

昨晚深夜未明

「完全に死んでいる」

レースアップした黒いワンピースを着た少女が、オイスタツハの死体を見ながら言った。

目の前の殲教師は完全に事切れている。全身に刺さっている数十本の剣によって、彼の死体は倉庫の壁に磷付になっている。悪趣味な芸術作品だ、と思ってしまう。

「こいつが、暁古城を襲ったロンダルギアの殲教師か」

彼女の名は南宮那月。古城の通う学校の女教師でありながら、魔族に対抗する力を持つ攻魔師だ。年中ゴスロリファッションの合法ロリ教師という、一部の人からしたら属性盛りすぎて狂喜乱舞しそうな存在である。

古城の事情を知る数少ない人物であり、今古城が人間として生活できるのは、彼女の手回しの存在が大きい。

「……」

那月の視線が、足元に転がっている一本の短剣にうつる。刃の根元から血に染まっているあたり、死体に刺されていたものが抜け落ちたモノなのだろう。

その時、ぶわっと強い風が吹き付けると同時に、何処からかビニール袋が飛んできて

短剣に触れた。すると、短剣が眩い光を放ったかと思えば、たちまち無数の光の粒になつて跡形もなく消えてしまった。

翌朝・逢瀬家

「おかわり」

「はいはい、沢山食べてねー」

「……………」

瞬は、なんか昨日よりも多い人数で食卓を囲んでいた。

ボケーっとした顔をしながら、炊きたてごはんを口に入れる瞬。こんな状態でも変わらずご飯は美味しいし、周りは平常運転である事に軽く絶望し、思わず死んだ様な目になつてしまう。

なんで知らない幼女二人と共に食卓を囲むことになつたのか。なんで我が家に押し付けられたのか。なんで叔父さんは何も言わないのかとか、言いたいことは山ほどあつたが、いったところでどうしようもないことは知っている。

「ヒビキちゃん、卯の花とって」

「はいっ」

「ねぶねぶ、ちゃんと茄子食べなつて……」

「わ、私にくたばれと申すか!?」

「言つてないんだけどなあ……」

どうやら茄子が嫌いらしいネプテューヌが、茄子の天ぷらを押し付けようと隣に座っている湖森の茶碗に乗せ、湖森はそれをネプテューヌの茶碗に返すのを繰り返す。

瞬はそれを横目にぬるくなつた味噌汁を飲み干し、テレビの電源を入れる。

「……やっぱ騒ぎになつてんじゃねーか」

「ん? お兄ちゃんなんか言つた?」

「な、何でもない」

テレビでは、昨日のショッピングモールでの騒動が報道されていた。魔族の喧嘩という形にはなつているが、瞬は「魔族つてなんだ」というレベルで困惑していた。

「何時からこの世界はファンタジーになつたんだ……」

ニュースを見ても、学園都市やらデュエルモンスターズやら深海棲鬼やら艦娘やら武偵やら、瞬からしたら意味不明な単語が羅列されているだけで、余計頭が混乱してきた。まるで、色んなものを無理矢理混ぜ合わせたような違和感が瞬にまとわりつく。

そうしているながらも食事を終え、洗面所で顔を洗っていた瞬だが、誰かにぐいぐいと

服を引っ張られたので振り返った。

「……なんだよ」

「病院に連れてって」

「なんだ、風邪でも引いたのか？」

いきなり言われても困る。てかどうしろってんだ、と思っていると、ポケットに入っていたスマホが鳴る。

画面を見ると、お騒がせ者の名前が出ている。朝から何だと悪態をつきながら通話に出た。

「今何時だと思ってるんだ」

『あ、瞬？今ヒビキちゃんいるよね？』

本人は現在、瞬の隣で歯を磨き始めたところだ。その旨を伝えると、唯はなら良かった、と一呼吸おいて、

『今から市民総合病院に行くから、ヒビキちゃん連れてきて』

はあ？という台詞が、思わず瞬の口から出てくる。

「コイツが病気だったりすんのかよ？ちゃんと説明してくれよ」

説明を求める瞬に、唯はおちゃらけた感じに瞬の発言を否定しながら次のように言った。

『違う違う。お見舞いなさ☆』

唯から聞いた話によると、昨日のオリジオンに襲われて病院に搬送された女性とヒビキには面識があるらしく、ヒビキはあの人の事を酷く心配していたらしい。拒否しようかと思つたが、唯が「皆ハッピーって言うでしょ？」等煩いので、結局瞬が折れてしまつたのだ。

まあ、唯のお人好し精神も少しあるわけであるが、それに従つてしまふ瞬もお人好しなんだな、と思わず自分に苦笑してしまふ。そういう感じに坂道を登る瞬に、上の方から声がかけられる。

「は・や・く、おいでよー置いてくよー？」

「で、なんで湖森も付いて来てんの」

「唯さんの御召集とあらばいざ行かん、女の友情つてやつですよん」

「人助けつてのは女神、ひいては主人公たる私の行動指針の基本だからね。やらなかつたらやらなかつたで次元越しにいーすんが怒つてきそうだしなー」

結論から言うと、ヒビキだけでなく湖森もネプテューヌも、みんな付いて来た。ラノベハーレムの行進の出来上がりである。ただしひとりは血のつながった妹、残りは住所不定の幼女×2。手を出すなんて到底不可能だろう。

「お前らは関係ないんだから来なくていいのに。てか俺も面識ないんだけど」

普通に考えて、瞬達が見舞いに行く必要はない。そもそも、瞬の言う通りヒビキ以外は面識皆無なのだから、行ったところで不審者極まりない。既に目的地が間に迫っておきながら今更だが、自分が来る意味とは？と何度も考えている瞬。

と、ここで瞬の左手の中に何もなくなる。あれ？と思つて見てみると、手を繋いでいた筈のヒビキが居なくなつていた。

「あ、あれ？アイツは何処行つたんだよ？」

「ホントだ……何処行っちゃつたんだろ。いきなり迷子になるなんてどんな主人公補正？……いやなあ私にも分けねぶっ」

「馬鹿な事言つてないで探すの。そしてオーバーリアクションだから」

またまた意味不明な事を言い出したネプテューヌに、湖森が軽く頭を叩いて突っ込む。二人を他所に、瞬はヒビキを探す為に来た道を引き返すことにした。

「何処行きやがったー？言い出しつぺはお前なんだからさー、勝手にどつか行くなつてーの。出て来いやー」

微妙に気の抜けたような呼びかけをしながら、坂道のみもとまでやって来た。その時、何かが瞬の頭に当たつたような感じがした。なんだなんだと頭を押さえながら足元を見ると、靴が片方だけ落ちていた。

「あんれ……」

どこか見覚えのある靴だなあと思い、瞬は上を向く。そこには、
「うんしょ、うんしょ……ほーら、大丈夫だからねー」

「みゃー」

街路樹に登って猫を助けようとしてる幼女がいた。彼女は瞬を見ると、

「下で構えていてー」

「いきなり過ぎじゃねえのかお前……」

思わず「まるでアニメだな」という言葉が口から漏れる。成る程、落ちてきた靴は彼女のものらしい。しかし、ヒビキはかなり高く登っているのだが、ある疑問が浮かぶ。

「てか、お前降りてこられんのか？随分と高く登っているけどさ」

「……」

瞬の言葉に、猫を抱えたままだんまりとするヒビキ。どうやら凶星らしい。

馬鹿だろコイツ……と、瞬は頭をかかえる。飛び降りるにしては少し高すぎて危ない。と、その時強い風が吹き付け、木の枝を揺らす。当然、上に乗っているヒビキも煽られてバランスを崩してしまう。

「あうっ」

「あ」

ずるり。ヒビキが木から落ちる。そのまま、下にいた瞬に向かつて——

「ばっ……」

「痛あつ！」

ドシン！という音と共に、二人は地面に倒れる。ヒビキの下敷きにされた瞬は、背中に響く痛みに顔を歪ませる。

「おーい、大丈夫ー？」

音に気付いたネプテューヌ達が駆けつけてくる。ヒビキは猫を抱えたまま起き上がり、

「私はへいきへっちやらー」

「よかったーヒビキも猫も無事で」

「いや俺の心配はしないのかよ」

彼女らからの割と冷淡な反応に、軽く突っ込む瞬。まばらに見える通行人も何事かと此方を見ている。何とかヒビキを退かして立ち上がる。背中がまだじんわりと痛むが、我慢するしかない。

「まったく何やってんだか……痛っ」

「にゃー」

どうやら心配をしてくれているのは猫だけらしい。瞬は猫を拾い上げるが、特に暴れ

られる事はなかった。人間に懐いているらしい。

「おい、もう行くぞ。こんなところで油売ってたら唯が煩くなる」

「お兄ちゃん、ヒビキちゃんがいませーん」

またかよ。深い溜息と共に、瞬の顔に呆れが浮かび上がる。ただ単に病院に行くだけなのに、あつちこつちに逸れ過ぎな気がする。

ぼつと辺りを見渡すと、今度は腰の曲がったお婆さんと話をしているヒビキの姿があつた。

「何をしていらしてるんですかねあなたは」

「この人が荷物重たいって」

「この一歳になると、重いもの持って坂道を登るのが一難しくてな」

確かに、老婆の背中には見るからにズッシリとしたバッグがある。ここまでは歩いてきたのか、本人も結構息切れしているようだ。ヒビキはなんとかして手伝いたいみたいだが、彼女の身長半分くらいはある荷物を一人で運ぶのはキツイだろう。

しかし、ほつとくにしてはなんか危なっかしい。面倒だが、仕方がない。

「わかった、俺も手伝うから。お婆さん、俺が荷物を運びますよ」

「助かるねえー、今時の子にしては随分と優しいもんだねえ」

なんだかんだ言つて、瞬も薄情な人間ではないのでほつとけないのだった。

——彼の後ろで微笑む老婆に気づかないまま。

「貴方は邪魔だから、くたばってくれないかしらねえ」

ずるりと、林檎の皮でも剥ぐかのように老婆の皮がめくれ上がる。その下からでてくるのは、全くの別人の、若い女性。

「この特典は、こんな事も出来ちゃうのよ」

《KAKUSEI YOSHI》

その音で、瞬が振り返る。

その時には既に、女性の姿は醜い怪物に変わっていた。その姿には、見覚えがある。昨日、シヨップینگモールで戦ったオリジオンだった。

「私の特典は、ヨッシーの力。タマゴにした人間に擬態できるのは、ほんのおマケ」

「なんだお前……」

「昨日は転生狩りに邪魔されたが、今度こそ始末するわ」

「くそっ……おいつ皆逃げっ」

「させない!」

「があっ」

ヒビキ達に逃げるように言おうとした瞬だが、オリジオンに顔を殴られて、街路樹に叩きつけられる。ズルズルとその場に崩れ落ちる瞬に背中を向けると、彼女はうねう

ねと舌を伸ばし始めた。

「に、げろ……」

「いただきます」

「うわっ!!?」

舌がヒビキ達に巻きつけられたかと思えば、カメレオン等が虫を食べる時の様に、それが勢いよく引つ込んで行く。

「なになに!!? これなんてエロ同人——」

ネプテューヌの声が、そこで途切れる。怪物の口に、三人が飲み込まれたのだ。どうやったら人間を丸呑み出来るのかは知らないが、事実、瞬の目で起きたのだ。

「さて……邪魔な奴は消さないとねえ」

オリジオンは瞬に見向きもせず、病院の方に向かう。彼女が遠ざかった後、ヨロヨロと瞬は立ち上がる。

「……行かせ、ねえ」

その目に、怒りが宿る。
が。

「よお、随分と怒り心頭のようにだな」

出鼻を挫くような台詞。

聞き覚えのある声が、後ろからかけられる。振り返ってみると、そこには一本の角を頭部に持った漆黒の仮面の戦士がいた。

「……リユウガ？」

「今の俺はダークカブトだ」

「どうやら、いくつもの姿を使い分けているらしい。黄色い複眼越しに、此方を睨んでいるのが伝わってくる。」

“意思も目的もない、強大な力。お前はそれがどれほど恐ろしいか分かっちゃいない”

あの言葉を、目の前のコイツはどんな意味で言い放ったのだろうか。一晩たった今でも、答えが出ない。

「なんで俺の前に現れた」

「お前に会いに来たつもりは微塵もない。俺は、俺の目的の為に動いている」

教える気どころか、瞬と会話する気すらないらしい。突き放すような物言いに、瞬は若干むっとくる。

ダークカブトは、地面に手をついたままの瞬を素通りしようとするが、ふとその足を止めて、瞬に質問する。

「そうだ、折角だからお前に訊く。あの力は何だ？ 転生者でも、本物でもないお前が、俺

の知らない仮面ライダーに変身している。何故だ？」

「……………」

アクロスの力について訊いてきた。

実際のところ、彼はこの力についてはまだ殆ど知らない。熟知しているであろうファイティが中々教えてくれないし、そもそもまだ2日しかこの力と付き合っていないのだから当然だ。

手に入れた経緯についても、未だに理解が出来ていない。あの理解の及ばない地獄の中、アレを手に入れて使ったこと。それだけが確かだ。

ファイティはこの力で世界を救えと言っていたが、スケールがでか過ぎて実感が湧かない。かと言って、アクロスの力の、他の使い道を瞬は知らない。

「……………分からない」

結果、これしか言えない。

ダークカブトは、その答えを聞いて失望したかのような素振りを見せる。

その時、ある光景が脳裏に蘇る。

昨日の夢。

あの過去のプレイバックには、このような続きがある。

「青年期特有のアレだつて……お前だつてそうだろう？」

「いやいや、私はさあ、皆ハッピーの精神の持ち主なワケですじゃん？」

「ここでその言葉が出るか、と瞬は苦笑する。唯が割と頻繁に口にする言葉。誰か困つてたら、方法の有無に関係なしに、助ける為に動いてみる。誰かが困っているなんて見過ごせない。自分だけじゃなく、皆で幸せになるほうがより良いに決まつてる。」

「でもさ、私が昔頃からこんな言葉掲げてたと思うかい？分かつてるんでしょ」

「……たしかに、お前にそんな事考えるほどの頭は無いわな」

「うわひでえ。女の子にバカつて言いやがったよこいつ」

軽く頭の出来をバカにされた唯は、軽く瞬に肘鉄を入れてスキップで追い抜いていく。そして、少し離れた位置で振り返つて悪戯な笑みを浮かべる。

「昔は、たしかに何も考えてなかった。ただ、どうしてもほつとけなかったからやつてた。瞬と会つた時もおんなじ。難しく考えなくていいのだよっ」

ウインクを一回して、唯は続ける。

「中身なんか、勝手に出来てくもんなの。最初は空っぽでも、面倒でも、全力でやつて

りやあ中身なんか、後からでも簡単に作れちゃうもんだよ」

「そーか、そうかよ」

「誰かの受け売りだつていいよ。単純に、瞬がやりたいことやつてれば、そんな気持ちすぐ吹き飛ばよ——」

息の詰まるような重圧で、現実には引き戻される。

(そうだ……俺のしたいこと……)

“力が有ろうが無かろうが、瞬は瞬だよ。やれる事は増えたかもしれないけど、瞬がやる事は変わらないんじゃない?”

世界を救うなんて、大それた事ではない。今、やりたい事。そんなのは既に決まってる。

(助けなくちゃ……湖森も、ネプテューヌも、ヒビキも)

目の前で攫われた3人を助ける。兎に角今は、その為に力を使う。

あの時は、単に理不尽な奴だと思っていたが、後になって考えてみると、なんとなく理解できる。

そもそも話、瞬は平和な世界で生きてきた人間であり、戦争経験など当然ながら無い。そんな人間がいきなり力を使う覚悟だ信念だなんだの言われても、正直ピンと来ない。

だから、身近な事で考えた。

——大切な人を失いたくない。

単純ながら、戦うには、力を使うには十分すぎる。世界を救う、という目的よりもまだ分かりやすいし、確かなものだ。声を張り上げて、ダークカブトの背中に言葉をぶつける。

「コッチは目の前で家族誘拐されてんだぞ！一応これでも、ヒビキとネプテューヌは昨日からの付き合いで一緒に食卓囲んだし、湖森は俺の妹だ！力を振るう目的だあ？んなのあいづらを助けるってだけで今は充分だ！世界を救うアクロスの力があるんなら、人間の一人や二人助けられるに決まってる！俺はそれを幾らでも使って、助けてみせる！」

それはきつと、答えとしては赤点より酷いものなのかもしれない。瞬自身、途中から何を言いたいかあやふやになっていた。

だが、ひとつだけ言えることがある。

——これが今、自分のやるべき事なんだ。

「どうやら、お前は俺の予想以上に馬鹿らしい。やはり、お前みたいな奴にはその力は過ぎたものだ」

必死に捻り出した拙い回答は、いとも容易く破り捨てられた。ダークカブトは、手斧のようなモノを取り出し、瞬に突きつける。喉元僅か数センチの距離に、死が迫る。

その時。

《KAKUSEI GUNGNIR》

突然、ダークカブトの頭部目掛けて振り下ろされた拳。ダークカブトは空いているように手でそれを掴み、押し返す。

「お前は……！」

「またお前か、しつこい野郎だな」

其処にいたのは、昨日学校で瞬が戦ったオリジオンだった。そいつは、周囲に轟くような咆哮をあげると、その豪腕をダークカブトに向けて振るってきた。

ダークカブトはそれを腕で防ぐが、衝撃を消しきれずに少し後退する。そして、頭部に向けて放たれた二発目のパンチを、首を軽く捻って躲し、逆に　オリジオンの腹部にパンチをくらわせる。

「相変わらず馬鹿みたいに硬えなおい！」

悪態をつきつつも、オリジオンのパンチを身体を捻って躲しながら、追撃の回し蹴り

でオリジオンを地面に倒す。

いつの間にか、少年が居なくなっていることに気付かないまま。

インターホンを連打する音で、暁古城の眠りは妨げられた。

吸血鬼になつてから極端に朝に弱くなった彼は、うまく働かない頭をなんとか働かせながらベッドから起き上がる。休みの日であろうと、朝は大抵妹に起こされるので、朝食を済ませてから二度寝と洒落込もうとしていたのだが、ここまで連打されると鬱陶しさを通り越して怖くなってくる。

「古城くん……なんなのこれ？」

妹の風沙も、流石に怯えている。インターホンのモニター越しに、フードを深く被つた状態で、無言でインターホンを連打する人物の姿が見てとれる。

「よし待つてろ、俺が見てきてやる」

誰だか知らないが、傲慢の妹に悪戯をするようならとつちめてやる。そう意気込みながら、古城は玄関の扉に近づく。

すると、ピタリと音がとまる。唐突な静寂が、古城に緊張感を与える。前方に彼が一步足を踏み入れたその時。

「掛かったな馬鹿めが」

ばごっ!!!という音と共に、破片を残さずに玄関の扉が半分抉れた。あまりの出来事に、廊下の奥から様子を見ていた風沙がリピングに引つ込む。

それと同時に、彼の手足に鉄の鎖が巻きつけられ、外へと体を引つ張られる。

「なんだこれ……」

「昨日ぶりだよな、暁古城オ！」

インターホン越しに見たフードの人物が、何も無いところから鎖を出している。よく見えないが、その下から見える端正な顔立ちには嫉妬に満ち溢れている。

「昨日ぶりだと……」 誰だか知らねえけど、いきなり襲いかかってくんじゃねえ！」

「残念だが、さっさとお前を連れ去るぜえ？ 確実に始末する為によお！こいつを黙らせろ、アスタルテ！」

フードの男がそう言うと、ばんっ!!!という音がマンシヨンの下から聞こえてきた。一瞬何だと古城は疑問に思ったが、彼の視界に藍色の髪が映る。

そこには、以前遭遇した人工生命体の少女がいた。彼女は一瞬、生氣のない目をこちらに向けたかと思うと、

「命令受諾」
アクセプト

その言葉が紡がれると同時に、彼女の背後に巨大な半透明の腕が出現する。オイスタツハによつて積み込まれた眷獣である。手足を拘束されている彼は、身動きがとれな

い。

男は、そんな古城を嘲笑うかのように告げる。

「黙らせろ」

「させません！」

瞬間、両者の間に文字通り横槍が入られる。男が視線を向けた先には、槍のようなものを構えた雪菜の姿があった。

七式突撃降魔機槍 —— 通称・雪霞狼。雪菜が所属する組織・獅子王機関が開発した、魔力を無効化し、あらゆる結界を切り裂く“神格振動波駆動術式”を搭載している秘奥兵器だ。勿論、それは吸血鬼の眷獣だろうと関係ない。アスタルテの眷獣に向かって一直線に穂先が迫る。

しかし、

「邪魔」

男は雪菜の足元めがけて剣を射出する。彼女が一瞬ひるんだその隙に、彼らは古城を鎖で縛り上げたうえで逃亡にかかる。

「先輩っ！」

「なら、お前もだ」

男を追おうとする雪菜に、古城と同じ鎖が巻きつけられる。そして、男はフードを

てきた。

「あ、目覚ましたんですね」

入ってきたのは、金髪の高校生くらいの少女だった。

「……貴女は？」

「諸星唯です。ほんつとに、無事で良かったあ……」

名前を告げて、直ぐに彼女は女性の手を取って嬉しそうに笑った。

「な、何？ 貴女、一体何のつもりなの？」

「私が見つけた時、酷い怪我だったんですよ……ヒビキちゃんも凄く心配してたんですから」

「ちよつと待つて？ あの子は無事なの!!？」

唯の発言に、凄い勢いで喰いつく女性。包帯だらけなのも相まって、唯はその剣幕に思わず体が竦んでしまう。

女性を落ち着かせながら、唯は答える。

「大丈夫だから、今私の幼馴染みが連れて来てますから。私に負けず劣らずのお人好しなんで安心してくださいよ」

「良かった……無事だったんだ、あの子」

そう言うのと、女性はホッと安心したかのようにベッドに背中を預け、窓の方を見る。

「ここで、唯の頭にある当然の疑問が浮かぶ。

「貴女とヒビキちゃんって、どういう関係なんですか？」

「……皆戸 灯。いい加減、名前くらいは言わなきゃいけないから、とりあえず名乗るわ」

そうして女性 —— トモリは、話し始めた。

「今起きてる連続児童失踪事件の事、どれくらい知ってる？」

「はい？」

いきなりそんな話題を吹っかけられるとは思ってもみなかった模様で、思わず素っ頓狂な声を上げる唯。トモリはその反応を確認した上で続ける。

「その様子だと、テレビで知ってるレベルの様ね」

それがどうしたんだ、と思ってる唯。トモリは声を押し殺すように告げる。

「私は、あの子を誘拐犯の元から連れ出した」

その時、部屋は静寂に包まれた。トモリの爆弾発言に、唯がどう反応しているのかわからなかった為だ。思わず唯は訊き返す。

「は、ちよ……何いきなりカミングアウトしちゃってるんですか……てかあれ、誘拐事件って……？」

「貴女も見たでしょうに。あのオリジオンを」

オリジオン。確かそんな言葉をファイフティも言っていたような気がする。イマイチピンとこない様子の唯。昨日シヨツピングモールで出会った、緑色のトカゲみたいな顔をした怪人の事だろうか。

「あいつの元から逃げ出した時に、私はあの子と逸れたの。あいつは執念深いから、まだあの子を狙っているし、散々邪魔した私も狙っている」

その時、病室の扉が開く音がした。瞬がヒビキを連れてきたのだろうか、唯は扉の方に振り向く。

「……あれ、どちら様？」

そこにいたのは、背中にやけに大きな荷物を背負った、20歳くらいの女性だった。しかし、どこか女性に見覚えがあるように感じるのは気のせいだろうか。

その女性に向かって、トモリはつよく睨みつける。女性はそれを見て鼻で笑うと、「トドメを刺しに来たに決まってるでしょ」

「え……」

そういうと、女性の身体に無数のジッパーが現れたかと思えば、それらが一齐に開き始める。

《KAKUSEI YOSHI》

「私の楽しみを邪魔する奴は、たとえ前世からの友達でも許さない！」

女性の姿は、緑色のトカゲのような怪物—— オリジオンに変わっていた。唯は腰を抜かして床に尻餅をつき、トモリは身構える。

「その怪我じゃマトモに戦えないでしょ？ そもそも、貴女は一度たりとも私に勝ったことがあったかしら」

オリジオンは、そんなトモリの姿を見て再び鼻で笑い、落としていたバッグからあるものを取り出す。

それは、大きなタマゴだった。殻が不気味に痙攣しているそれを、彼女は嬉しそうに掲げる。

「ネプテューヌちゃん、逢瀬湖森ちゃん、ヒビキちゃん……この子達も、立派なコレクシヨンの仲間入りよ……」

「え……ちよつと待って……三人が……？」

「私のタマゴの中。じきにみんな、私の愛おしいコレクシオンになるのよ。この世界の可愛い子供達は皆私のモノなのだから」

嬉しそうに笑うオリジオン。話が本当なら、今三人は、彼女の手にあるタマゴの中に入っているということになる。

「さて、落とし前をつけてもらおうわよ。友達だからって手加減は期待しないで。そもそも、もうアンタは友達じゃない」

オリジオンが、二人に近づく。ここまでベラベラ話したのも、勝利を既に確信しているからか。じりじりと、距離を詰めてくる。

来る。咄嗟に唯は目を閉じる。

その時だった。

「ようやく、追いついたぞこの野郎！」

先程、オリジオンにぶん殴られた瞬が、追いついた。口から血を流しながら、彼はオリジオンを睨みつける。

「生憎、私は野郎じゃないのよ」

「アイツらは、返してもらおう」

「なら先に終わらせる！」

そう言うと、彼女は舌を伸ばし、ベッドにいるトモリに巻きつける。彼女を始末する気だ。

「させるかっ」

瞬はバックルを取り出し、腰に取り付ける。そして、ライドアーツを取り付ける。

「待ってる……今助ける！変身！」

《CROSS OVER》

オリジオンはトモリを飲み込むと、手からエネルギー弾を出して病室の窓を破壊し、

そこから飛び降りる。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

「待てっ！」

アクロスに変身した瞬は、昨日ファイフティから受け取った別のライドアーツを取り出し、病院行つた外へ向けて投げる。

「瞬 何？」

「てえやあああああ！」

そしてそれを追つてアクロスも飛び降りる。唯が何か叫んでいるのが聞こえた気がしたが、アクロスの思考は、オリジオンからヒビキ達を奪還する事に集中しきっていた。地面まで数メートル。昨日のフリーフォールが脳裏に蘇り、少し身震いしてしまう。しかし、彼は止まらない。

《VEHICLE MODE》

既に地上には、ライドアーツから変形を終えたバイクが止まっていた。アクロスはその上に着地と同時に跨ると、バイクのアクセルを思い切り回す。

「俺は……彼奴らを助ける！」

第7話

クロスオーバー・ヒーローズ

風を切るような音が聞こえる。

猛スピードで空を飛ぶ緑色の怪人と、それを追う一台のバイク。街中で始まったこの追跡は、郊外へと広がっていた。

「シツコイわね！アンタみたいな子はどこん痛い目を見てもらうわよ！」

前方を飛ぶオリジオンは、バイクで追跡してくる瞬に向かって口から火球を吐き出す。しかし、アクロスは火球が地面に着弾する直前にバイクごと飛び上がり、それを回避する。

「何？？」

（はわぶつ……危ねえ！つか、こんな事できるなんて……自分でも驚きだぜ……）

瞬自身も、先程のような動きが出来たことに驚いている様子。オリジオンの方も、瞬の動きに驚いたような素振りを見せるも、すぐに気を取り直し、火球を連発する。

「あつ……ぶねえ！」

アクロスはハンドルを左右に何度もきり、蛇行しながらそれらを回避していく。このままだと一方的にいたぶられるだけだ。何か反撃の術は無いのかと、アクロスは左手で

ベルトやバイクのタンク表面を探ってみる。

すると、ベルトに何かがぶら下げられているのに気付いた。

「んならこれで……!」

銃口を前方にいるオリジオンに向ける。相手もそれに気づき、返り討ちにしようとするにエネルギーを貯める。

刹那、両者の攻撃が炸裂した。オリジオンのエネルギー弾は瞬目掛けて真っ直ぐ飛んでいくが、アクロスはその直前で急ブレーキをかける。バイクの進む速度を考慮された攻撃は、それによって標的がずれ、バイクの手前スレスレに着弾する。

「がっ……」

逆に、アクロスが放ったエネルギー弾は、オリジオンのモノの横スレスレを通過しながら、オリジオンの片翼を貫いた。

バランスを崩し、近くの崖に体をぶつけるオリジオンに対し、瞬は続けて引き金を引いた。

「ていやあ!」

「はながばぶ……っ☒」

オリジオンに次々と着弾し、その度に両者の距離が縮まってゆく。高度と速度を落とすしていくオリジオンに、瞬はアクセルを更に回して突っ込んでいく。

そして。

ズガアアアアアンツ!!!と。

オリジオンはバイクに跳ね飛ばされた。

「がっぱはっ!」

街の郊外にある廃倉庫に、カエルを潰すような音が響く。

鎖で縛られたまま、古城は100m程の高さから地面に叩きつけられた。その際にあちこちの骨が砕けたり、内臓が潰れるような感じがしたが、彼が真祖でなければ確実に死んでいただろう。

裏を返せば、向こうは殺す気満々らしい。同じく鎖で縛られた雪菜を抱えたまま、黄金の鎧を纏った怪人とアスタルテが地上におりたつ。

「しぶとい野郎だな。なんで生きてんだかなあ……申し訳ないと思わないのかよ!」
「がっ」

苛立ちの込められた蹴りが、古城の顔面に突き刺さる。普通の吸血鬼なら、鎖など容易く引き千切れるのだろうが、人間の血を一度も吸っていない古城は、吸血鬼の身体能力も、強力な眷獣も使えない。

結果として、ただの蹂躪劇が繰り広げられていた。

「おらもう一発！」

「ぐふっ……」

思い切り顔を蹴られた古城は、サッカーボールのように飛んでいき、倉庫の壁を突き破って放棄されたトラックにぶつかって漸く停止した。

古城の血塗れの顔を見て、怪人は更に怒り狂ったように古城を罵倒する。

「お前はクズだ！存在する価値の無いクズだ！周りの女には事故と偽ってセクハラ、自分の立場を弁えずに力を振るう、欲望に逆らえない！生きてて恥ずかしいと思わないのかこの化け物！」

古城が存在する事自体が許せないかのような言い分。縛られた状態の雪菜は、次第に彼にある疑問を抱くようになった。

何故ここまで古城を憎むのか？風沙を誘拐した件から私怨の線を考えてが、それにしでは言ってる事が稚拙すぎる上、何より雪菜にむける視線が、まるでものを見るような感じなのだ。

次に雪菜は、怪人の傍に居るアスタルテに視線を向ける。確か彼女は、魔族狩をしていた職教師と共に行動していた筈。なのに今は、この怪人と行動を共にしている。何故なのだろうか。

と、ここで雪菜の怪訝そうな顔に気付いた怪人は、嬉々とした様子で話し始めた。

「ああ、コイツは既に俺の手駒——いや、俺に救われた身。第四真祖の汚れから救出した……君も直ぐに救ってやりたい」

話を通じない。同じ地面に足をつけ、同じ空気を吸っているにもかかわらず、別の世界で生きているような雰囲気だ。

雪菜の鋭い視線を感じ取った怪人は、どこか失望したように俯く。

「しかし、君は拒絶するみたいだな」

「貴方は、一体何者なんですか……」

「君を救う者だ」

雪菜の問いに、一瞬の迷いもなく、彼はそう言い切る。その目には、光が無かった。そして、彼は誰にも聞こえないような声で、自分に言い聞かせるようにこのような言葉を繰り返して呟いていた。

「なんでしぶといんだ……俺の知ってるコイツは雑魚だった筈だろう……？俺はコイツを殺して雪菜達を救う為に転生してきたヒーローなんだぞ……欲の権化・暁古城なんか楽に殺せるから、いたぶってるんだ……」

宵江誠。前世名・宅島海士。前世享年28年。

モヤシ体系な彼は、日頃から自分の気に入らないものをボロクソにとぼすような人間

であつた。なかでも、ライトノベル作品を特に嫌悪し、中身を知らずに人の又聞きで批判するという事を繰り返していた。

そんな事ばかりしていれば嫌われるのは明白であり、次第にネットでもリアルでも孤立していった彼は、ある日酔つて川に転落し、誰にも助けてもらえない事なくそのまま溺死した。

そして気付けば、彼は白い空間にいた。

「なんだ、これ」

360度見渡しても、地平線が見えることはない。ただ、彼の目の前には、自販機のような装置が一台、ぽつんと立っていた。

《特典と世界を選んでください》

装置のタッチパネルに表示された一文を見て、彼は即座に理解した。

(これ、転生じゃねえか！)

生前酷く羨んでいたことが、今自分の身に振りかかっている。頭に抱いていた僅かな疑問をかなぐり捨て、男は狂喜した。

家族や友人の事はどうでもいい。彼にとって、家族や友人は自分を理解する事の出来ない馬鹿だからだ。転生すれば、自分は正義の味方になれる。人間として劣っている原作主人公の魔の手からヒロイン達を救える。彼は本気でそう思つて、そして「王の財宝」

を特典にこの世界に転生したのだった。

全ては、主人公の中でも一番嫌いだった暁古城を消し、全てを奪う為。もうすぐ彼の野望は成就する、筈だった。

しかし。誰も予想しなかった全くの偶然が、それを阻む事になる。

「……アスタルテ、何か近づいて来てる」

怪人が、何かの音に気付いて暴行の手を止める。古城も、次第に大きくなってゆくその音に気付いて目を動かす。バイクの走る音だ。それも、此方に近づいてきている。

「迎撃してこい」

怪人が冷たい声でそう言うと、眷獣を連れたアスタルテが音源に向かっていく。たとえなんであろうと、王の財宝がある限り敵ではない。そうほくそ笑みながら古城の方を向いたその直後。

ズガガガガガッ!!!と。

倉庫の壁を削るような音と共に、緑色の怪人が吹っ飛んできた。

「ようやく、止まった……」

オリジオンを吹き飛ばした後、壁ギリギリで漸くアクロスのバイクは停止した。辺りを見渡すと、ズダボロの少年と黄金の鎧を纏った オリジオンがいた。

「てか、もう一体いるのかよ……」

アクロスの追ってきたオリジオンの抱えていたタマゴのような物体が、ボロボロの少年の足元に転がってくる。

何だと思つて見ていると、それにひとりでヒビが入っていく。辺りにヒビが入る音だけが響きわたり、ついにタマゴが割れてしまった。すると、眩い光が辺りを包みこむ。「が、がが……」

光の収まった後、其処には砕け散ったタマゴの殻と、ヒビキ達の姿があつた。アクロスは、それを見てほっと胸を撫で下ろすが、まだ脅威は去っていない。

二人の怪人は、アクロスを睨みつける。一人は自らの邪魔をした憎き相手として、もう一人は新たに現れた未知の存在として。

そして、もう一人は。

(なんだあれ……)

激痛に襲われながらも、暁古城はその姿を凝視していた。

今迄に見たことのない、奇妙な存在。敵が味方か定かでない存在に対し、彼はただそ

の姿を凝視する他なかった。古城から離れた位置で縛られている雪菜も、同じ思いなのだろうか。

黄金の鎧を身に纏ったオリジオンは、アクロスに一步近づき、こんな事を言ってきた。

「なんだお前……折角いいところだったのに邪魔すんなよ」

「どう見てもイジメやつてるようにしか見えねえよ」

目的を果たす寸前で乱入してきた部外者に対し、オリジオンは手をかざす。すると、彼の背後に眩い光の渦が出現する。

「ゲート・オブ・パピロン、オルタナティブ
「王の財宝・転」

「なっ……っ?」

瞬間、目にも留まらぬ速さで光の渦から何かが発射され、瞬の足元を抉り取った。粉塵が撒きあげられ、アクロスの視界が塞がれる。

アクロスは粉塵の中、自らの足元に突き刺さったものを見た。それは剣だった。派手な装飾のつけられた一本の剣が地面に突き立てられている。そして、煙の向こうから怒鳴りつけるような声が聞こえてきた。

「なんで……なんで肝心な時に邪魔が入るかなあ……ホント馬鹿しかいねえじゃんこの世界い！」

「あっ!?」

邪魔をされた事により、オリジオンは激昂し、辺り構わずに剣を射出した。対峙していた瞬間も、アクロスの追ってきたオリジオンも、漸く目を覚ましたネプテューヌ達も、縛られた古城と雪菜も。

この場にいた全員を巻き込んで、大爆発が引き起こされた。

一方、病院前で戦闘中のダークカブトは、オレンジと黄色の装甲を身に纏ったオリジオンを圧倒していた。

「クロックアップ」

《CLOCK UP》

ダークカブトがベルトの右側面につけられたボタンをタッチすると、一瞬にして彼の姿が消える。突然の出来事に戸惑う素振りを見せるオリジオン。あたりを見渡して敵の姿を捉えようとする。

次の瞬間、オリジオンの身体が真上に跳ね上げられる。そして、背中に衝撃が加えられたかと思えば、顔面にダークカブトの拳がめり込んでいた。

《CLOCK OVER》

「遅い、そして弱い」

突然目の前に現れたダークカブトは、そう言い放って、オリジオンの脇腹を蹴り上げ、

コンクリートの壁に叩きつけた。

ズルズルと地面に崩れ落ちるオリジオン。ダークカブトは、トドメを刺そうと接近する。その時、横から戦いに水を差すような声がかげられた。

「邪魔、しないでくれないかな？」

「……ギフトメイカー」

戦いに割って入ってきた、制服姿の金髪の少年は、ダークカブトの言葉を聞いて顔をしかめる。

「僕にはレドって名前があるんだけどね」

「一々覚えるメリツトがねえからだよ」

「まあ、よくもコイツを痛めつけたもんだ。やはりお前は厄介な邪魔者だ」

レドはそう言うのと、パチンと指を鳴らす。すると、彼とオリジオンの背後の壁に謎の穴が出現する。その中はまるでテレビの砂嵐の様になっており、よく見えない。

「逃すか！」

「バーカ、僕達は簡単には捕まらないよ」

ダークカブトは咄嗟に地面を蹴り、レド達を追いかけて穴へと飛び込もうとする。しかし、その前に穴が消え、ダークカブトは一人その場に取り残された。

「相変わらず逃げ足の速い奴等だ……さて、なら彼奴を追いかけるか」

ダークカブトは、そう言って街の外れにある山の方を見る。
山の一点からは、煙が上がっていた、

瓦礫に囲まれた中、緑色のオリジオン——ヨッシーオリジオンは四つん這いになって何かを吐き出そうとしていた。

「お、おええええええっ!」

血とともに、彼女の口からあるものが吐き出される。

それは、トモリだった。包帯と手術衣がはだけた状態で、全身はオリジオンの唾液と、開いた傷口から溢れた血で濡れている。トモリは、オリジオンを真っ直ぐ見つめながら言う。

「ねえ、もう止めない?」

「嫌だ……私は、この力を使って……」

「やっぱり、その特典が貴女を変えてしまったの……? そんな力、この世界で生きてくのにには必要ないのに」

トモリは、嘗ての友に向かって呼びかける。しかし、その言葉を必死に振り払い、否定するかの様な声が投げ返される。

「この力が有れば、前世の様な惨めな思いはしない! 上手く生きてける! 貴女だってそ

うでしょう！力が無い奴は何をやっても駄目！力が有ればなんでも出来る！」

「力の有る無し以前に貴女のやつてる事は犯罪なのよ!!? 何も知らない子供を攫つては悲しませる、貴女はそんな事するような人じゃない！」

「アンタの知る私はもう居ない……いい加減私から離れろ！私は私のやりたいように生きるんだから！」

オリジオンはそう言うのと、トモリの顔を思い切り殴り、尻尾で薙ぎ払う。彼女の身体が何度も地面をバウンドしながら飛んでいき、瓦礫の上に落ちる。

これで懲りただろう、と吐き捨て、オリジオンはトモリに背を向ける。その時、彼女に向かってこんな言葉がかけられた。

「力なんかあつたつて……何も出来ない……力で何かを手に入れたつて、直ぐに全部失うモノなのよ……」

オリジオンは声が出た方を向くが、そこには、瓦礫の上で意識を失ったトモリが倒れているだけだった。それを確認すると、再び背を向けて歩き出す。その足取りは、何処か力無いように見えた。

水滴のようなものが頬に落ちた感覚で、雪菜は目を覚ました。何か鉄臭い匂いがする。先程の攻撃で、辺り一面瓦礫まみれになっている。暗闇の中、どうにかして瓦礫の

下から抜け出そうと体を少し動かす。

が、ここで誰かの呻き声がした。随分と近い。ぼんやりと、少しずつ暗闇に目が慣れ
てくる。

「先輩？」

それは古城だった。彼の顔が、雪菜のすぐ近くにあるのだ。雪菜を庇うかのような体
勢で、彼も瓦礫に飲み込まれていたのだ。

その時、ピシリという音が雪菜の耳に入ってきた。見ると、彼女らを覆っている瓦礫
の一部に、ひび割れが生じている。そして、そのまま瓦礫が粉々に崩れ去り、光が入っ
てきた。

そして、目を覆いたくなるような現実が見えてしまった。

「……大丈夫、か」

「せん、ばい……」

まるで針山のように、数々の武器によって串刺しにされている古城。口から垂れた血
が、下にいる雪菜の顔に落ちる。

死なないと分かっているとはいえど、充分ショッキングな光景であるし、古城自身も
相当な苦痛を感じているに違いない。

「よ、かった……お前が、無事で」

「なんで……なんで私を？」

「お前がここで死んだらダメだろ」

古城はそう吐き捨てる、よろよろと立ち上がり、腹を貫いている槍に両手を持っていき、力強く握り締める。そして、それを勢いよく引っこ抜いた。

穴から流れ出す鮮血が、地面を紅く染めていく。呆然としている雪菜に対し、古城は続ける。

「相手の狙いは俺だけなんだ。だから、俺が囷になりやあ姫終だけは……アイツらも逃げられる」

「……そんなの、意味ないじゃないですか」

「アイツは、俺を殺す為ならなんでもする。風沙を人質に取ったり、一度俺と戦ったオイスタツハを殺してアスタルテを支配下に置くことも。更にエグい手段をとるかもしれないんだ」

あの怪人と古城。どちらかが消えるまで被害は広がる。しかし、古城達には勝ち目が殆どない。どん詰まりである。

古城は、体を貫いていた剣を全て抜き終わると、瓦礫の上に腰を下ろす。流れ出た血が、傷口へと戻っていく。

「誰かを危険に晒してまでも生きてけるような、だからといって自分から死に行くよ

「ちよいまち……姫終、何するつもりで……」

古城は狼狽えるが、吸血鬼としての本能が容赦なく膨れ上がっていく。興奮に引きずられるように、古城の口が雪菜の首元に迫る。

そして。

——カブリ。

また一人、舞台にヒーローが上り詰めた。

「っはぁ……返事……しなよっ」

ネプテューヌは、瓦礫を必死に退かしていた。

意識が覚醒した時、彼女は一人だった。ヒビキも湖森も居なかった。最後に見たのは、あの黄金の鎧を身に纏った怪人が、手当たり次第に攻撃を仕掛ける様。幸いにも、ネプテューヌ自身には怪我は無かったのだが、あの二人は普通の人間なのだ。一泊二食の恩とはいえど、二人に何かあつたら瞬に顔向け出来ないし、女神としても失格だ。

訳あつて本来の力が出せない状況に若干歯痒さを感じながらも、彼女が手を止めることはなかった。

「ん……」の音は……？」

何処からか、爆発音のような音が聞こえてきた。ネプテューヌは、音源目指して瓦礫の山をよじ登っていく。

そこには。

「はあ……はあ……」

「が、ががががががが」

「こ、こ、来ないで……」

二体のオリジオンに迫られている湖森とヒビキの姿があつた。湖森はヒビキを抱きしめながら、ガクガクと震える足で後退している。

黄金の鎧を纏ったオリジオンの方は、もう理性を失っているらしく、誘拐犯の方も何処か足取りがおぼつかない様に見える。しかし、依然として脅威なのは変わらない。

ネプテューヌが二人を守る為に飛び出そうとしたその時。

「テメエの相手は俺じゃなかったのかよ？」

「……お前は」

「へえ……ヴヴヴヴヴヴ……」

ネプテューヌとは反対側の瓦礫の山の上に立つ少年と少女。それを見て、鎧のオリジオンは獣の様な唸り声をあげる。

「やっぱり俺が邪魔らしいな。いいぜ、その喧嘩買ってやるよ」

「……いけますか、先輩」

「ああ……ここから先は、第四真祖の——いや、俺たちの聖戦だ！」

初動は成功した。

被害を軽減すべく、怪人の内一体は此方に注意を向けてきたが、もう一体はまだ少女達を狙っていた。しかし、助けにいく余裕はない。目の前の理性を失った怪人が、古城に向かって剣を突き立てている。

「はあっ！」

しかし、雪菜によって文字通り横槍を入れられて、剣が弾かれる。

「ぐ、ぎ、ギギギギイ！」

雪霞狼を構えながら一気に距離を詰める雪菜に対し、怪人はけたたましい咆哮をあげる。

すると、それに呼応するかの様に、両者の間に眷獣を引き連れたアスタルテが割って入り、雪霞狼を押しとどめる。眷獣の表面は、雪霞狼と同じ光に包まれていた。

「なっ……雪霞狼を止めた!?」

真祖の眷獣さえも滅ぼしうる刃が、アスタルテを包む眷獣に防がれ、彼女の身体の手前で止まっている。驚愕の表情を浮かべる雪菜に対し、アスタルテは無慈悲に眷獣の腕

起こした。

そこには、身体のアちこちを焦がした満身創痍の少年と、眷獣を出したまま、口から血を流して突っ立っているアスタルテの姿があった。

「なっ……」

「先輩、気を付けてください。あの子、雪霞狼の『神格振動波駆動術式』をコピーしてます。それで先輩の攻撃を無効にしたんです」

いつの間にか傍らにいた雪菜の忠告を聞きながらも、古城はアスタルテをただじっと見つめていた。

「……あの人工生命体、眷獣を植え付けられてやがるんだ。このままだと、死ぬ」

眷獣は、吸血鬼だけが扱い得る力。それは、眷獣の実体化の際に宿主の生命力を多く喰らうからであり、無限の『負』の生命力を持つ吸血鬼だからこそ飼いやらせる。

当然、人間は然り、人工生命体や獣人、悪魔であろうとも他の種族が眷獣を宿せば、長くは生きられない。

これを行ったのはオイスタツハであるが、怪人の少年はそんなの御構い無しに、ただ古城を殺すだけに彼女に力を使わせていた。目の前の彼女の様子を見る限り、そう長くはないらしい。

「……ひでえ話だ」

「先輩?」

「姫終、いけるか?」

「はい」

二人は立ち上がり、眷獣を纏ったアスタルテを見据える。

戦いに、そして周りに利用され続けたまま、使い潰されようとしている少女の運命に終止符を打つ為に。

「いぐざ」

「はい」

その会話を皮切りに、二人は駆け出した。アスタルテの眷獣の腕が容赦なく襲いかかってくるが、古城の眷獣がそれを押し留め、雪菜の進路を確保する。

前に出た雪菜は、銀色の槍を携えながら瓦礫の上を駆け、粛々とした祝詞を発する。

「獅子の巫女たる高神の劍巫が願ひ奉る —— 破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え!」

祝詞の終わりと共に、槍が灰白く光り始める。

もう一本の腕の攻撃を跳んで回避し、そのまま雪菜は銀の槍を構える。神格振動波駆動術式を槍の先端一点に集中させ、ただ鋭く、細い一撃を突き立てようとする。

「雪霞狼!」

同じ術式で無効にしていようと、アスタルテの方は大きな眷獣の全身を覆うように結界を構築している。対する雪菜の方は、結界を貫くために鋭く一点に集中している。

「はっ……」

眷獣を包む結界を突き破り、その頭部へと深々と突き立てられる銀の槍。雪菜は槍を手放し、地面に着地すると、眷獣を抑えていた古城に呼びかける。

「今です、先輩！」

「ああ！ レゲルス・アウルム 獅子の黄金！」

瞬間、古城の眷獣は巨大な稲妻に姿を変え、避雷針のごとく突き立てられた銀の槍目掛けて一直線に飛んで行く。そして、その雷は一瞬にして眷獣の全身を駆け巡った。

眷獣を倒すには、より強い魔力をぶつける事。圧倒的な強さを誇る第四真祖の眷獣をマトモにくらい、アスタルテの眷獣は消滅した。

「……や、った？」

「……おそらく」

辺りに訪れる静寂。

雪菜は緊張が解け、その場に崩れ落ちる。しかし古城は、倒れているアスタルテをまじまじと見つめている。

「姫柊。誤解されないよう説明しとくぞ」

「は、はい」

「このままじゃ、コイツの命は永くはもたない。だから、これからやるのはコイツを救う為の行動だからな」

古城達の目の前には、眷獣を宿した影響で、永い寿命を使い果たしかけた人工生命体の少女が横たわっている。

古城が見出した救う為のプランとしては、彼女の血を吸う事で彼女から眷獣の支配権を奪い、吸血鬼である古城の生命力で動くように変更する事だった。要は魔力の貸し出しである。これにより、彼女の寿命は長くなる筈だ。

「誰も犠牲にはしない、俺の周りではな」

鎧のオリジオンは、先程の少年を追って既に姿を消していた。

ネプテューヌは、誘拐犯の方を見る。向こうもこちらに気付いたのか、両者の視線が交差する。

「あら、いたの」

「さっきの様子にはいかないよ？私、ここから逆転劇おっ始めるつもりだし」

「強がっちゃって……嫌いじゃないわ。今度こそ貴女を私のモノにしちゃうんだから」

オリジオンはそう言うと、ネプテューヌに向かって舌を伸ばしてくる。ネプテューヌは咄嗟に真横に転がって回避すると、何処からか木刀を取り出して構える。

「残念だけど、私は皆の女神。誰か一人のモノにはなれないんだよっ！」

「女神だろうと何だろうと、私の前では皆獲物なのよ！」

オリジオンはそう叫び、ネプテューヌに向かって灼熱の炎を吐き出す。ネプテューヌは即座に立ち上がって走り出し回避するも、炙られた瓦礫がドロドロに溶け、煙をあげてのを見て冷や汗がどつと出てくる。あんなもんに当たったら一たまりもない。

攻撃を避けながら、ネプテューヌはヒビキ達へと近づいてゆく。エネルギー弾を木刀で弾き、スライディングで火炎を避け、二人の元へと迫り着く。

「ちよつと飛ぶよ？いいい？」

「はっはい☒」

木刀を腰にさしながら湖森にそう言うと、ネプテューヌは二人を両脇に抱えて大きく跳躍した。後ろから迫る火炎弾は、彼女達の真下スレスレを通過し、虚空へと消える。

「ちよ……ま、マジなのコレ？？」

「す、すごい……」

「逃す訳ないでしょう？」

オリジオンも大きく跳躍し、ネプテューヌ達へと追い付く。相手の舌が伸び、ネプ

テューヌの足に巻きつこうとしたその時。

「てやあつー！」

ネプテューヌの脇に抱えられていたヒビキが、何かを落とす、それをネプテューヌが思い切り蹴ってオリジオンの顔面にぶつけてきた。

一体何が、と思い、オリジオンは地面に転がったものを見る。それは木刀だった。どうやら、ヒビキはネプテューヌの腰にぶら下げてあったそれを外し、それを彼女が蹴り飛ばしたららしい。

「どーよ？これが主人公ってヤツなのさー！」

「随分と生意気な口を聞くのね……今業にしてあげるわ！」

ネプテューヌの挑発(?)に対し、オリジオンは怒って走ってくる。今ので彼女は丸腰状態になってしまっている。

「あ、やば——」

半ばやけになり、身を呈して二人を庇おうと動くネプテューヌ。そこへ、
「はあああああああつー！」

バイクに乗った瞬間が二人の間に割って入り、オリジオンの攻撃をバイクの車体で防いだ。先程の爆発のせい、変身は解除されていた。

オリジオンは忌ま忌ましそうに瞬を睨みつけるが、瞬は迷う事なくベルトを装着す

る。

「っ……」

その時、ネプテューヌが若干苦しそうな表情になる。地面に膝をつき、息も少し荒くなっている。瞬は心配して手を差し伸べる。

「大丈夫か？」

「へーきへーき……ねぶうつっ!?」

ネプテューヌが瞬の手を取ったその時、突然ネプテューヌの身体が光り出した。あまりにも唐突な出来事に困惑する一同。紫の光は、次第にネプテューヌの手の中に集まり、何かを形作っていく。

十秒ほど経ち、光は少しずつ収束していく。瞬は、ネプテューヌに差し伸べた手の中に、何か固い物があるような感覚に気づく。

「これは……なんだ？」

「んー?なんだろそれ」

あつたのは、紫色の鍵のような物体。一見すると、瞬がアクロスに変身する時に使うライドアーツに似ているような気がする。

「これを……ベルトに付けるのか？」

よくよく見ると、バックルの左側にもライドアーツをはめるような箇所がある。しか

し、グズグズしている余裕はない。オリジオンが我に返り、攻撃体勢に入っている。「どうせ悩んだ所で誰も教えちゃくれないんだ、やってみるしかねえ！」

《ARCCROSS》

《NEPTUNIA》

二つのライドアーツのボタンを押して、ベルトに取り付ける。湖森達を庇うように、瞬は前に出てオリジオンと相對する。

「変身！」

《CROSS OVER》

無数の光の線が瞬を包み込み、アクロスの装甲を形成していく。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

アクロスへの変身が完了し、まるで瞬の決意を示すかのように複眼が光る。

だが、それだけでは終わらなかった。

《LEGEND LINK》

その音声と共に、バックルから何かが勢いよく飛び出し、オリジオンにぶつかっている。オリジオンは数歩後退し、ぶつかった何かは、今度は瞬に向かっている。

それは何かのパーツだった。真つ黒なものが多いが、ところどころ紫色に光る部分もある。それらは、アクロスの表面に次々とくっついてゆき、アクロスの外観を変化させ

てゆく。

《SET UP! ネプテューヌウウ!》

その音声と共に、変化は完了していた。

全身は黒くなり、身体中に紫のラインがはしっている。方には丸っこい謎の物体が付き、背中からは半透明の翼のようなものが確認できる。

「……なんだこりゃ」

何度目かわからない台詞が、思わず口から出てくる。だが、なんとなく力が湧いてくる。まるで、誰かが一緒に戦ってくれると言わんばかりの心強さが、何処からか伝わってくる。

「ほんじゃあ、いっちょいってやる!」

アクロスは一気に駆け出し、オリジオンとの距離を詰める。そして、両者ともに互いの胸目掛けて渾身のパンチを叩き込んだ。

しかし、仰け反ったのはオリジオンの方のみ。アクロスの方はその場で踏みとどまり、連続して拳を叩き込む。

「はあっ!」

そして、アクロスはその場で飛び上がり、膝蹴りを喰らわせる。オリジオンは大きく吹き飛び、瓦礫の上を何度も転がっていく。

「次はこれだ！」

アクロスがそう叫ぶと、アクロスの背中の翼が一对取れる。そして、宙に浮かびながら変形し、瞬の手元にやってくる。

それは、紫の刀身を持つ近未来的なデザインのブレードだった。瞬はそれを構えると、先程の攻撃で吹き飛んだオリジオンに向かって走り出す。

「なんなの……このパワー☒」

「残念だが俺も知らねえんだよ！」

アクロスの唐突なパワーアップに困惑するオリジオンだが、アクロスは構わずにブレードで一閃する。火花が飛び散り、再びオリジオンは吹き飛んで瓦礫の山に突っ込む。

《CROSS EXEDRIVE》

バックルを操作すると、ブレードの輝きが増し始める。鮮やかな紫色の光が、オリジオンを、アクロスを、辺り一帯を包み込んでゆく。

「はあああああああああああああああああああああああああああああ
！」

アクロスは勢いよくブレードを振るう。

すると、刀身から紫の斬撃が飛び出し、立ち上がりかけているオリジオンに向かって

ないように見える。

「瞬！大丈夫!!」

「唯……まさかここまで走ってきたのか？」

「うん……おかげで最後の方しか見られなかったんだけど……すごかったね」

それを聞いたネプテューヌが、「化け物かコイツは」という目で唯を見ている。昔から唯は運動が得意だったので、そのことを知っている瞬は特に反応はしなかった。いや、もしかしたら、疲れ切ってそれどころではなかったのかもしれない。

「唯さん……」

「瞬がみんなを助けたの？」

「そう、だな……俺が……助けたんだよな」

「……………」

いまだに実感がわかない。

しかし、結果だけははつきりと目に見える形で残っている。瞬はオリジオンを倒し、皆を助けたのだ。

「湖森、唯。ちよつと肩貸してくれ……疲れて上手く身体が動かせねえんだ」

「あ、うん……」

「まあ頑張ったしね。それくらいやってあげようよ湖森ちゃん」

妹と幼馴染みに肩を借りながら、瞬はその場を後にする。それに続いて、ヒビキとネプテューヌが立ち去る。

ちよつとカツコ悪い凱旋が、人知れずはじまった。

「マジありえねえ……古城のクソ野郎が……ふざけんな……」

古城に敗北した少年は、身体を引きずるように戦場から遠ざかっていた。足取りは重く、身体中に激痛がはしっているが、とにかく逃げていた。

本来なら、古城が眷獣を操る前に始末したかったのだが、あろうことかその後押しをしてしまった。ともかく、これで希望は潰えた。少年は、前世からの野望をかなぐり捨て、今はただ生き延びる為に逃げていた。その有様はなんとも無様であった。

しかし、そう上手い事はいかないものだ。

「よお、こんなところで何してやがんだ？」

「あ……」

少年にかけられる声。

その主を見た少年の顔が、絶望に染まる。

「き、貴様は……転生狩り……」

「人聞き悪いこと言うなよ。まあ、随分派手にやってくれたおかげですぐ見つげられた」

「ま、待つてくれ！俺はまだ——」

少年の命乞いに耳を貸すことなく、声の主はバックルのようなものを自らの腰に取り付ける。そして、少年に見せつけるように錠前のようなものを取りだす。

《レモンエナジー！》

「は、ははははははは……」

錠前から発せられたその音声聞いて、少年は腰を抜かして必死に後退りする。声の主は、錠前をバックルに取り付けると、少年の方に歩み寄る。

《ROCK ON》

「変身」

《SODA》

既に少年の顔は、恐怖と涙でぐじやぐじやになっていた。そこには嬉々として古城をいたぶっていた時の威勢の良さは微塵も無かった。

《レモンエナジーアームズ！Fight Power！Fight Power！Fi,
Fi, Fi, Fi, F, F, F, F, Fight！》

「過ぎた力は全てを滅ぼす……お前達は存在してはならない。死をもって、それを償え」
そして。

鮮血が舞った。

後日、街外れの山奥で、頭部が木っ端微塵に爆散した少年の死体が発見される事になる。

武偵や警察の捜査も無駄となり、誘拐事件の事も相まって、この事件は人々から忘れ去られる事になる。

同時期から、仮面をつけた謎の存在の噂が広がります。

それもまた、不明瞭なものとして街に燻り続けるのだった。

EPILOGUE

事の顛末を纏めよう。

まず、誘拐犯の方は力を失っていた。怪人になる力も、その前に持っていた特典も、綺麗サツパリ消えていた。タマゴに閉じ込められていた子供達は無事に保護され、女性は

逮捕された。

トモリの方は、再び病院に運び込まれて入院している。唯が毎日お見舞いに行っているようだが、春休みが終わる頃には退院できるらしい。

そして最後にひとつ。

「買わない。買わねーよ、んな高いプリンなんで買うわけねえだろ……」

「じゃあこれは？」

「駄目なもんは駄目だったの」

結局、二人の居候生活は存続する事となった。一体どうやってヒビキとネプテューヌを家に置く算段がっていたのかは、最後まで誰も教えてはくれなかった。

日夜二人に振り回されっぱなしの春休みを送っている瞬は、少しだけ世の中の父親の苦労が分かったような気がした。

「分かってます分かってます。急かされるのは主人公特権、フラグリーダーピンピン来てますよ〜これ」

「絶対壊れてるよそれ」

「ねぶーっ!? 頼むからその髪飾りだけは弄らないでっ!? キャラビジュアル薄くなっちゃうからあー!」

スーパードールから出ながら繰り広げられるヒビキとネプテューヌのじゃれ合いをよそに、

瞬は帰ってからのことを考える。いい天気だし、そろそろ桜も見頃だ。残り少ない春休みが終わる前に花見でもしてみたいもんだ、という考えがふと浮かんでくる。

ここで、瞬の足が唐突に止まる。ヒビキ達が怪訝そうに瞬を見上げるが、瞬がある一点を見つめていることに気付く。

「……」

瞬の目の前に立つ、パーカーのフードを深く被った灰色の少年。連れらしき少女の方は、瞬をじつと見つめている少年に対し、怪訝そうな視線を向けている。

「……退いてくれねーか、そんなところ居たら他の人の邪魔だ」

「あ、すみません」

「ごもつともな正論で瞬達を退かすと、少年達は瞬達と入れ違いで店内に入っていた。た。

そして、ぼつりとヒビキがこんな質問をぶつけてきた。

「なんで笑ってるの?」

「あれ?俺笑ってたか?」

「厨二臭く笑ってた」

「どんな笑い方だよソレエ」

軽く弄られながら、瞬は再び足を進め出した。

恐らく、相手の方は瞬の顔を知らない。瞬の方も、少年の名前は知らない。お互い接点は無かったが、各々の思いを胸にあの時、同じ戦場に立っていた。

きっと、向こうも自分のように何かを守ったのだろう。そして、今それを享受している。

また、会える。

そんな思いが、何故か心をよぎった。

街の何処か。

目の前に広がる青い海を見つめながら、セーラー服姿の少女が自分に言い聞かせるように呟いた。

「吹雪、今日も一日頑張ります！」

街の何処か。

茶髪の高校生くらいの男が、ニヤニヤした顔で先程貰った手紙を眺めていた。

「……まさか、俺に春が来るなんて！神さまマジ感謝！」

街の何処か。

赤と緑の髪の少年が、両手を広げて叫んだ。

「さあ、お楽しみはこれからだ！」

街の何処か。

誰もが振り向くようなスタイルの良い身体の黒髪の少女が、校舎を見上げていた。

「うむ、今日も学園は平和だ」

街の何処か。

なんか必死の形相で自転車を漕ぐ一人の少年が、どうにもならないといった風に叫んだ。

「チャリジャックなんか聞いてねえってのおおおおおおおおお！」

街の何処か。

ツンツン頭の少年が、流しにぶちまけられたカップ焼きそばを呆然と見ながら呟いた。

「不幸だ……」

街の何処か。

闇にまぎれ、街を走り抜ける漆黒のバイクを見て、街の人々はこう言った。
「首無しライダーだ」と。

それは有り得ざる交差だ。

交わることのなかった軌跡が交差し、出会う事の無かったヒーロー達が出会う。例えそれが破滅のお膳立てだとしても、其処には、確かな希望も同時に存在するのだ。

新たな伝説が、幕を開ける。

祝え、全てを繋ぐ希望の誕生を。

第1章

統合陰謀学園

アマスベ

第8話

ハイスクールR×R

少し肌寒い、四月の朝。

部屋にけたたましく鳴り響く目覚ましの音。開けっ放しの窓から入ってくる海風が、ベッドで寝ている少年に吹き付ける。

しかし少年は、手探りで目覚まし時計を止めると、再び眠りについてしまう。その時、数回ドアをノックする音がしたかと思えば、直後に部屋のドアが開いた。

「アラタ、いつまで寝てるのよ？春休みはとづくに終わってるんだけど」

部屋に入ってきたのは、小柄な少女。茶色がかった短めの黒髪が、窓から入ってきた海風にたなびいている。

少女は、少年の体に被さっている布団を勢いよく引っぺがし、少年の体を何度も揺すって起こそうとする。

「起きろこん畜生」

「あと2、3年寝かせてくれい……」

「馬鹿なの貴方は。さっさと起きなさいよ。春休みはとづくに過ぎてるんだってさつき

言ったよね」

「わかったてーの、大鳳……」

「先、降りてるからね」

大鳳と呼ばれた少女は、少年がちゃんと目を覚ましたのを確認すると、部屋を出て行った。

起こされた少年は、大きな欠伸をしながら壁にかけてあつた制服を着ていく。寝癖直しは後回しにし、着替え終えた少年はリビングへと向かう。

かけもち
欠望アラタ。16歳。

彼は『艦娘』と共に生きる少年である。

「あ、アラタおはよー」

「うわあ姉貴、凄え寝癖じゃんか……」

廊下でばったり出くわしたのは、アラタの姉である——希（いつき）。アラタより頭一つ分小さな身長に、肩まで伸びた寝癖まみれの茶髪。寝ぼけているのか、眼鏡がちやんとかけられていない。朝はいつもこんな感じなのだ。

「ご飯ならもう出来てるよん」

「姉貴もさっさと目覚めとけよ。フラフラ歩いてると危なっかしくて見てられねーんだ

からさ」

「善処する〜」

そう答えると、一希はフラフラと洗面所に向かうのであった。まあ何時もの事だし大丈夫だろうと、アラタはほっといてリビングに入る。すると、台所の方から挨拶がとんできた。

「あ、アラタおはよー」

「おう山風、今日も朝飯作ってくれたのか。毎朝ホント助かるぜ」

「へへんっ」

山風と呼ばれた少女は、嬉しそうに胸を張る。頭の黒いリボンや緑の長い髪と共に、割と大きめな胸が揺れているが、見なかったことにしておこう。

と、そこに寝癖はそのまま、顔を洗い終えて若干顔付きがすっかりした一希がやってきて、山風の肩に手を置いて瞳を潤ませる。

「山風も大鳳も学校かあ……いやあ、ここまで立ち直るなんて私嬉しくて嬉しくて涙腺壊れちゃうよ」

「んな大袈裟な」

「今更言うか。もう二年生だぜ」

アラタも口ではそう言っているものの、なんだかしみじみとした雰囲気の欠望姉弟

に、若干気恥ずかしくなる大鳳。アラタ達の顔は、どこか救われたような雰囲気を漂わせていた。

なんか朝から雰囲気があらぬ方向に行ってしまった二人に対し、大鳳は現実に取り戻そうとアラタと一希の手を軽く引っ張る。

「と、兎に角朝食を食べなさい。遅刻するかご飯抜きかの選択を迫られることになるけどいいの？」

「や、やつべえ」

時計を見ると、七時半はどうに過ぎてしまっていた。学校が始まるまであと一時間もない。遅刻しないように急いで食卓につき、朝食に手をつけ始めるアラタ達。

その様子を眠たそうに、かつ優しそうな眼差しで眺めながら、コーヒーを飲む一希。

「……一希さん、どうかしました？」

「ん、いや何でもないよ」

山風にそう笑いかけると、一希は何かを誤魔化すようにコップを置いて大きな欠伸をする。

（貴女達は人間の中で生きる事を選んだ。それを私もアラタも、あの提督さん達やお仲間も咎めやしない。精一杯この世界を楽しんでくれや）

「いただきます」

「いただきますーす」

いつも通り食卓につき、朝食を食べる。

逢瀬家の3人に加えて、ネプテューヌにヒビキも共に食卓を囲む。春休みの間に、瞬達はすっかりこの光景に慣れてしまった。

ただ、春休みと違うのは、瞬と湖森が制服姿な所だ。先週から新学年が始まったのだから当然ではあるのだが、次元統合前の記憶がある瞬は、ちよつとした転校生状態になっていた。

(なんか慣れないぜ……学校も俺の記憶とはまるで違うし……この間まで学ランだったつてのに。ブレザー似合ってる気がしないんだよなあ)

白飯を口に運びながら、瞬は始業式の事を回想していた。

学校で見かけた生徒の中には当然見知った顔もあつたが、この一週間だけでも随分と周りと自分の知る世界の違いを思い知らされた。

例えば、変態3人組と称される女子から忌み嫌われる男子生徒達。投稿義務を免除された特待学級の十三組。「二大お嬢様」と学校中から注目を集める女子生徒。支持率98%の新生徒会長などなど。――瞬と唯からしたら混乱の極みであつた。

その中でも、唯と同じクラスという事実は、幾らか瞬を落ち着かせた。同じ戸惑いを

感じる、唯一同じ境遇の存在の心強さに感謝せずにはいられなかった。

「湖森、あのさ」

「……」

ついでにもう一つ、困ったことがある。

オリジオンと戦って以来、湖森の態度が冷たいのだ。この春休みの間、瞬と湖森はほとんど口を利いていない。どうやら、あの時湖森の目の前でアクロスに変身した事が原因のようなのだが、弁解しようにもそれすら無視される始末。ここにきて反抗期かよ、と瞬はシヨツクを受けるのだった。

朝食を終え、少し寛いでいると、学校に行く時間が近づいてきた。瞬と湖森はそれぞれ靴を持って玄関に向かうが、二人の間には言葉は交わされない。

「ほんじゃ、俺らは学校行ってくるから、叔父さんの言うことちゃんと聞いて留守番してるんだぞ」

「子供扱いしないで欲しいもんだね」

「子供だろ」

居候幼女達にそう告げて家を出る。

湖森の方をちらりと見たものの、見事に視線を逸らされ、早歩きで先に行ってしまった

た。こういう時はどうすれば良いのだろうか、と悩みながら瞬は歩いていた。

そのせいだろうか。

「ぶあつー！」

「ひよあああああああああああ!?？」

後ろから大声で驚かされて盛大に尻餅をついてしまった。見上げると、其処には見慣れた顔が一つ。

「いやあ随分と悩んじゃってるね」

「なんだ唯か……」

笑いながら此方を覗き込んでくる唯を見て、軽く溜息をつく瞬。

「あの年頃の女の子って複雑だからね。しょうがないね」

「お前が単純すぎるんだよ」

そう言いながら瞬は立ち上がる。みつともない姿を晒してしまったことに少し恥ずかしくなる瞬。

「まあ、全然上手くいかねーんだわ。お前が訊いたって、はぐらかされたんだろ？」

「ありやあ、そつとしておくのが一番じゃない？ 下手に突っ込んだら余計悪化するかも」

瞬自身、そんな事は分かっている。しかし、時間に任せて何もしていないのもなん

だか落ち着かない。今迄それ程喧嘩する事なく、兄妹仲は良好だった分、余計に瞬は悩んでいるのだった。

「そーなのかな……」

「まあ、兄がいきなり仮面ライダーになったらそら受け入れがたいに決まってるんだけどねえ」

仮面ライダーも難儀なものだなあと実感する瞬。今日も湖森との仲直りに悩まされながら、瞬は学校へとあしを運ぼうとする。
が。

「うお危なあがあっ!」

「あべしっ!」

なんだかよくわからない内に衝撃をくらい、再び尻餅をつく羽目になった。

どうやら、いきなり曲がり角で誰かと衝突した模様。いつの時代のラブコメなんだと思いつつ、瞬は相手を確認する。

「あ」

「は」

そこにいたのは、瞬と同じ制服を着た茶髪の少年だった。お互いに呆然とした顔で見つめ合っている。

一部始終を見ていた唯がぼつり。

「……ラブコメ展開だ」

「冗談じゃない！ 誰がコイツと恋に落ちるか！」

息ぴったり、見事なダブル突っ込みが炸裂。唯は調子に乗って瞬をさらにおちよくりだす。

「お前いきなりぶつかって来るとかなんなんだよ……」

「そつちこそ、どこ見て歩いてんだよ！」

少年は自らの頭をさすりながら瞬を睨みつける。朝から変な奴に絡まれたなあと思いながらも、どうやってこの状況を掻い潜ればいいんだと考える。

……で、

「何してるのアラタ」

「アラタの方がトラブル起こしてどうするの」

「あいだだだだだだ耳もげる！」

少年の後方からやってきた二人の少女が、少年の耳を引っ張り、瞬から引き離して行く。

「だからちゃんと前見てって言ったじゃない……ほら謝って謝って」

少女に諭され、少年は瞬のほうを向いて謝る。前をちゃんと確認しなかったのは瞬も

朝の早い時間帯。とある高校の教室のひとつ。そこでは、茶髪の青年が必死な様子で何かを訴えていた。

「いやホントマジだから！ ガチ中のガチだから！ 赤き真実で証明できるレベルだから！ 信じてれよお松田あ！ 元浜あ！ 桐生う！」

青年の名は兵藤一誠^{ひょうとういつせい}。スケベな事の事を年中考えている、どうしようもない変態である。当然女子からは嫌われている。

そんな彼であったが、先日なんと女子から告白されたのだ。それもとびっきりの美少女に。デートの約束も既に取り付けてあり、一誠としては狂喜乱舞モノなのだが……どうやら、クラスメイト達は信じていない様子。

「それってよ、エイプリルフールの嘘告白じゃあねえのかよ？」

松田と呼ばれた坊主頭の男は、信じられないといった様子で言う。彼もまた変態仲間である。

「俺も松田に同意だ。二次元彼女の間違いじゃねーのか？」

松田の隣にいる元浜と呼ばれた眼鏡の男は、一誠を茶化しては眼鏡をくいつとおさえる。彼も一誠や松田同様に変態であり三人揃って変態トリオとされている。

「いや、普通に考えても無いわ。いくらマジになったといえども、兵藤は変態だから」

辛辣な言葉を一齐にぶつける眼鏡女子は、桐生。ちなみに中身はかなり腐っていらつしやる模様。

「汚名は簡単には払拭できねえのかよ畜生がつ！ てかお前ら馬鹿でかいブーメラン飛んでるからな!?」

一誠はクラスメイト達の薄情さに文句を言うも、日頃が日頃なので助け船は出ない。というかブーメランが自らにも跳ね返っているのに気付かないのだろうか。

クラスメイト達の心無い言葉の数々に、ご立腹の様子である一誠。彼は不貞腐れたように自分の席に座ると、机に突つ伏してしまった。松田と元浜も、一誠を揶揄うのに飽きたのか、好みの女子を見つけてるためな窓から校門を眺め始めた。

「しかし、今年の一年生はすげえ可愛い子ばかりだなあ。あー内面も外見も最高の彼女が欲しいぜー」

「あの中から彼女になってくれる子、出てきてくれたら嬉しいんだけどなあ。俺童貞のまま死にたかねえよ」

叶わぬ夢をボヤキながら、彼らは窓の外を眺める。

「あ、木場と阿久根だ」

「死んでしまえイケメン」

視線の先には、金髪の青年二人が数多の女子に囲まれながら校門を潜る光景が広がっ

ていた。両者とも女子から絶大な人気を誇っており、学園の二大王子と呼ばれている。

怨嗟のこもった視線を送る松田と元浜だが、それはすぐに途切れることとなる。

「あー！ グレモリー先輩だ！ 朱乃先輩に子猫ちゃんも！」

「マジかよ！ あーやつばふつくしい……思わずおっふっふっしてしまうよ」

「謎ワードを作るな」

視線の先には、鮮やかな紅い髪の女性と、スタイル抜群の黒髪ポニーテールの女性と小柄な白髪の少女が共に校門をくぐる光景が広がっていた。男子生徒の中で大人気のリアス・グレモリー、姫島朱乃、塔城子猫の3人である。

松田達の顔が一気にだらし無くなるのを見て、桐生は呆れて溜息をつく。

「で、いつまでしよげているのよ？」

「煩い薄情者め。今に見てろよ、俺ハーレム王になるからな」

「日本は一夫多妻制は採用してないわよ」

もつとも、例えばハーレムが許されたとしても、既に学校中に悪評が広まりきっているのでハーレムは不可能に近いのだが。

そんな一誠に、悪友達は心無い言葉をぶつけるのであった。

「なあイツセー、これから新入生に声掛けにいかね？ もしかしたら彼女できるかもしんねえぞ。妄想じゃない奴がな」

「ちよ……流石に言い過ぎだろ松田。僻みをぶつけるんじゃない」
知るもんか薄情者共め。ふてくされた一誠は机に突っ伏した状態で、ただデートプランを練り上げていくのであった。

時間は進んで昼休み。多くの生徒で混雑する食堂での話。

「ねえ聞いた？　新しい生徒会長の噂」

「いきなりなんだよ柚子」

ピンクのツインテールの少女・柊柚子ひいらぎゆずは、目の前に座っているトマトみたいな髪色の少年・榊遊矢さかきゆうやに対し、唐突に話を振った。

「あ、まあ聞いたよ。なんでも凄まじく化け物じみた人らしい。一年生にしてこの時期でって時点で凄いなと思うんだけどな」

「アイツ相変わらずぶっ飛んでやがる……普通あんな啖呵の切り方するかよ」
遊矢達とともに学食を食べていた人吉善吉ひしよしぜんきちは、ラーメンの麺を啜って飲み込んでから、呆れたように大きな溜息をつく。

「支持率98%、偏差値90超え、手にした賞状やトロフィーは数知れず。スポーツもトップレベルで、実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち。身長263・5m、高

度6万フィートをマツハ2で飛行！ インテルも入ってる！ 人間かどうかも疑わしいレベルの超人だよ」

「後半3つは流石に無いだろ……てかいつの間に不知火はそこに？」

「嫌だなあ、最初からいたよ？」

善吉の向かい側に座っている小柄な少女・不知火しらぬいはんそで半袖は悪戯な笑みを浮かべながら話を続ける。

「ま、私も彼女に清き一票を入れたわけですがね」

うわあ見るからに怪しい顔してるなあと思いつつも、遊矢と柚子は苦笑する。

「で、人吉は生徒会入るの？ あのお嬢様の事ほっとけないんじゃない？」

「馬鹿、アイツは一人でも出来ちゃう。俺なんか必要ねーだろ。ともかく、俺は生徒会には入らない」

善吉の言葉はもつともだ。入学したばかりの遊矢達でさえも、又聞きではあるものの彼女の完璧さは理解できる。

と、ここで善吉以外の動きが止まる。何だ何だと狼狽える善吉に対し、他の三人は一齐に指をさして、

「……後ろ」

後ろ？ とぼやきながらも、善吉は振り向く。そこには、

「ほう、随分とつれない事言うじゃないか、善吉」

なんか凄い態度のどかい美女がいた。形も大きさも立派な胸元を露出した黒い制服。左腕に付いているのは、生徒会役員の印である腕章が五つ。腰まで伸びた黒髪。それら全てが、彼女の凜とした態度を際立たせる。

「……ちよつと待ってくれ。まだ昼飯食べ終わってない」

「問答無用！ 私についてくるのだ！」

善吉の言葉を問答無用でぶった斬ると、彼女はそのまま手を引つ張りながら食堂から消えていった。その場にいた全員は、あまりの出来事にぼかーんとしてしまう。

近くで一部始終を見ていた遊矢と柚子にたいし、不知火はニヤニヤ笑いを浮かべながら言う。

「あれが噂の生徒会長、黒神めだかだよ」

「……なんかよく分かんないけど、やっぱりよく分かんない」

「遊矢、日本語おかしいから」

周りから見れば充分ぶっ飛んだ部類の彼らからみても、強烈だった模様。暫く遊矢達は食事に手がつかなかった。

誰もいない剣道場。

剣道部が数年前に部員不足で廃部になって以来、不良の溜まり場になっていて、本日は日曜日なので来ていない。

一歩歩くとびに埃が舞い、足に竹刀がぶつかるほど散らかったその中。二人の少女が、一人の男子生徒にある提案を持ちかけていた。片方は、紫色の髪を腰まで伸ばしたゴスロリ衣装の少女。もう一人は、分厚い軍服のようなコートを着て、軍帽を目深く被った、長い銀髪をツインテールでまとめあげた少女。

「貴方の力、覚醒させてあげようか？」

「少し醜くなるけど、その力は絶大だ」

「……ああ、寄越せよ。俺が世界を変えてやるからな」

男子生徒が少女達の問いに即答すると、ゴスロリ少女は満足したかのように顔に笑みを浮かべて、彼の肩に手を置く。そして、その身体を真つ二つに引き裂くように左右に強く引つ張り始めた。

「決まりだなリイラ。中々の逸材だ」

「そうねレイラ。彼ならきつと、うまくやってくれる」

男子生徒の顔に浮かぶは苦悶の表情。さらにその上に、ジツパーのようなものが浮かび上がってくる。リイラとレイラ、二人の少女が少年を引つ張っていくたびにそのジツパーが開いていき、少年の姿がまるで皮のように裏返っていく。

少女達は、少年に笑みを向け続ける。彼女達の甘言に、彼は際限なく墮ちてゆく。

「少し痛い但我慢しろ。これが終わればお前はなんでも思うがままにできるはずだ」

「嫌いな奴を消したり、好きな子を独り占めしたりは勿論、みんなから認められる英雄にもなれるの」

変化が終了する。

そこには既に少年の姿はなく、全身が赤黒い鱗で覆われた怪人がいた。

《KAKUSEI DRAIG》

「お前も今日から赤龍帝だ。本物を倒して代わりに王になるもよし、気に入らないやつを痛めつけるもよし……思うが儘だ」

「だけど気をつけて。仮面ライダーっていう悪い奴らが私や貴方の邪魔をするの。充分気を付けてね」

リイラとレイラの忠告を聞いた後、怪人は地を震わせるような低い声で返答する。

「……俺はそんなヘマはしない。俺こそが魔王に相応しいということ、この世界の馬鹿どもに見せつけてやるのさ」

怪人は開いていた扉から剣道場の外に出ると、肩に力を入れる。すると、怪人の背中から一對の赤黒い翼が生えて、力強く羽ばたきだした。そして、大空高くに飛び上がっていく。

レイラとレイラは、嬉しそうにそれを眺めていた。

「最っ高ね！ たまらないわ！ あたしも久しぶりに暴れたくなっちゃうくらい！」

「よせレイラ。お前の能力だと全員再起不能になるだろ」

「あつそーだったわ。まあ、今回は出しゃばらないでおきましょう。仮面ライダーって奴を知りたいしね」

レイラとレイラは、軽口を叩き合いながら踵を返す。すると、二人の姿が一瞬のうちに消えてしまった。

日曜日、正午過ぎ。

兵藤一誠はワクワクしながら待っていた。心臓は高鳴る一方、不安も当然ながらあった。事実、彼は変態性が災いし、今まで一度も彼女が出来たことがなかった。好意を持っていた異性の幼馴染みも、今では海外在住。

結果、女性とこんな感じで付き合うのは一誠にとっても未知の領域だった。

「まだかなー夕麻ちゃん……すっぱかきないよなーまさか……」

若干不安そうに、いずれ来る筈の恋人の名前を呟く。女の準備は時間がかかるといって、多分そうなんだろうなあと思いついて、不安を紛らわせる。

「あなたの願い、叶えます」と書かれた、少し前に貰ったチラシを握りしめて、デート成功を祈願する。

体感時間では数十分は待たただろう。一誠を呼ぶ、聞き覚えのある声。

「兵藤くん、おまたせ」

「ゆ、夕麻ちゃん。俺も今来たところだぜ」

黒髪の美少女に名前を呼ばれ、一誠の心は舞い上がった。彼女こそ、一誠をデートに誘った少女・天野夕麻である。

若干声が裏返りながらも、緊張を誤魔化すように精一杯強がる一誠。いくら変態な一誠といえど、既に心臓はバクバク状態。

「じゃ、行こうか」

「あ、ああ」

こうして、二人は街に繰り出した。

兵藤一誠の人生は、ここで転換期となる。

果たしてそれがどう転ぶのかは——転生者であつても予測はつかない。

夕方頃、逢瀬家では。

「あ、味噌切らした」

夕飯時になって、叔父の還士郎がそんな事を言い出した。なんで今更になって言い出すのだ。昼間買いに行く時間は充分あっただろうに、と思いつながら、瞬は叔父の言葉を聞き流す。

この流れだと確実に買いに行かされる羽目になる。手間はかからないが、出来れば行きたくないのが本音だ？

「……1日くらい味噌汁なくてもよくなる？」

「いやそれだと晩御飯が鯖味噌と白米だけになっちゃうんだよね……それって寂しくない？」

「それもそうだけどもさ」

瞬がそう言いかけた時、横からネプテューヌが会話に割り込んでくる。

「ついでにトイレットペーパー買って来てよ。無くなったんだよね」

ついでにの前後が逆な気がするが、まあそれは置いておこう。味噌とは違って、トイレットペーパーが無いのは死活問題なので、これは流石に買いに行くしか無い。

「わかったよ、俺が買って来る」

結局、瞬が買いに行く事になってしまった。大きな欠伸をしながら、外へ出て行く瞬。これを機に、再び彼は騒乱に巻き込まれることになる。

デートも終わり、待ち合わせした公園に戻って来た二人。一誠にとっては、新鮮な体験であつたために、未だに有頂天であつた。

「今日は楽しかつたな」

「ええ」

嬉しそうに頷く夕麻の顔を見て、思わず心の中でガッツポーズをする一誠。無い頭を必死に絞つて考えたデートプランを楽しんでもらえて嬉しいのだろう。

と、去り際になつて夕麻がこんな事を言つてきた。

「兵藤くん、私、お願いがあるんだ」

「そ、それは——」

突然の出来事に対し、淡い期待を膨らませる一誠。月明かりに照らされた、夕麻の妖艶な笑みはその期待を一層膨らませていく。

しかし、それは果たされること無く終わった。

ズブリ。

その音の直後、一誠の身体は血を吹き出しながら倒れていった。

一部始終を目の前で目撃していた天野夕麻——レイナーレにとっても、これは予想外の展開であった。

彼女は実は人間ではない。人間より高位の、墮天使と呼ばれる存在である。ある目的をもつて一誠に近づいたはいいものの、それを果たす前に横取りされた形になったことに対し、憤りを感じずにはいられなかった。

ドチャリと、力無く血だまりに横たわる一誠。それは自分でも、その仲間達の仕業でも無い。

「……」

目の前に居たのは、真紅の鎧を纏った怪物だった。レイナーレにとっても、それは見覚えのない存在。しかし、その雰囲気には何処か心あたりがあるように感じられた。

違和感を押し殺しながら、彼女は問いかける。

「何のつもり？ 私の獲物を横取りしようなんて、いい度胸ね」

いきなり獲物を台無しにされたのだ。当然ながら敵意くらい湧く。レイナーレの問いに対し、怪人は沈黙を続ける。

「まあ、私も邪魔されて黙っているほど甘くないの。死になさい」

「……俺は悪魔の王となる存在。墮天使風情など敵ではないが、目障りだ。今すぐ俺の視界から消えた上で死ね」

「こつちにも都合つてもんがあるのよ！」

レイナーレはそう叫ぶと、光で出来た槍のようなものを両手に持って、怪人に向かってそれを振りかざした。

「言つた筈だ。貴様など敵ではないと」

怪人はそれを片手で防ぐと、パキンと、軽く力を入れただけでへし折つてしまった。敵の予想外の強さに一瞬動揺するレイナーレだが、すぐに距離を取る。

そして、彼女の背中から漆黒の翼が勢いよく開き、それを強く羽ばたかせて夜空に翔び上がった。

（コイツは強い……恐らく、私一人では勝率は高くはない。ここは撤退……いえ、あの方の為にも、それは許されない）

「……」

怪人は空に浮かぶレイナーレに見向きもせず、踵を返して瀕死の一誠に向かつて歩き出す。

「俺の覇道の犠牲になれ」

怪人は爪を高く振り上げ、冷たい声でそう告げる。今一誠をこの怪人に殺されてしまえば、レイナーレの目的は果たせなくなる。出来るかは分からないが、その前に怪人を追い払うしかない。空からその光景を見下ろしながら、攻撃準備をするレイナーレ。

両者が今まさに攻撃をしようとしたその瞬間。
赤い閃光が、夜の闇を塗り替えた。

兵藤一誠はただ事態に流されるまま、理不尽にもその生を終えようとしていた。

何が起こったのかは分からないが、自分の身体から血と体温がなくなっていくのが感じられる。腹を抉られた部分は、まだ熱を発しているものの、それ以外の部分は自分でもわかるほどに冷えてきていた。死んでゆく、というのはこんな感覚なのだろうか。

(死にたくない)

漠然とした願いが浮かぶ。

それは生への執着。理不尽に殺されゆく者の、正当なる願い。早すぎる死の恐怖から逃れようとする未熟な者の、強大な願望。

それに、応答があった。

一誠の前に赤い光が突如として現れる。レイナーレと怪人の双方が動きを止める。光は何らかの模様を描くように広がっていき、一誠を包み込んでいく。

「この光……紋章、まさか」

「まだ集団戦をする時ではない……俺はこれで去る」

その正体に気付いた両者は、戦いをやめて撤退を始める。後に残されたのは、今にも死にゆくとうとする一誠だけであった。

不利な状況と判断し、逃亡を図った怪人。既に公園からは離れ、人通りのない、高速道路の高架下まで移動していた。

このあたりまで来ればなんとかなるだろうと思い、息を切らしながらも移動を続ける。目立つのを避けるため、人間態に戻った上で徒歩で移動を続ける。

「ヨオ、随分と不細工な姿してんな」

その声を聞いて、思わず足を止める。

月明かりも届かない高架下の暗闇の中から響いてくる足音。怪人は音源の方を凝視する。

「オリジオンなら、とりあえず殺せば済む」

ボタンを押すような音が三度。

《STANDING BY》

「変身」

《COMPLETE》

くぐもった音声と共に、黄色い光が闇の中から発せられる。オリジオンの間近に迫る足音。月明かりの下に出てきたそれは、紫の複眼を持ち、顔に×マークがある仮面ライダーであった。複眼や、身体中の黄色いラインが発光し、彼を威嚇しているようにも感じられる。

「……俺の事くらい知ってんだろ」

怪人の方は、人間態から再び変身し、目の前の仮面ライダーと戦う準備をする。

「仮面ライダーカイザ……いや転生者狩り！随分と暇なのだな貴様は」

「勝手に言うがいいさ。ドーセオタクは死にやがるんだからよ」

その会話を皮切りに、戦いは始まった。

両者共に、一気に駆け出して互いに拳をぶつけ合った。あまりの速さに、両者を中心に突風が吹き荒れる。

そこからは言葉は不要であった。互いが互いにガラ空きの部分を目敏く見つけては蹴りや拳を叩き込み、また相手のそれを予測して的確に防いでダメージを回避する。

「はあっ！」

「ぬん！」

両者の蹴りは、お互いの腹に同時にヒットし、双方吹っ飛んで地面に叩きつけられる。しかしらカイザもオリジオンもすぐに立ちあがり、戦闘を続行しようとする。両者と

今まさに変身しようとしていた瞬の目の前に、突如として人型の何かが落ちてきた。落下の衝撃と土埃に、思わず目を瞑る瞬。

「新手か……!」

「く……はっ!」

目を開けると、瞬の目の前に居たのは、以前学校で襲いかかってきた、オレンジがかった装甲をあちこちに身につけたオリジオンだった。

オリジオンは瞬と視線が合うなり、いきなりぶん殴ってきた。動きはそれ程速くなくなった為に、瞬もなんとか避けられたのだが、拳の当たった部分のアスファルトが砕け、周囲にもヒビが入る。

「ブウウウウウ……!」

このままだと殺されかねない。そう判断した瞬は、オリジオンと距離を取りながらライドアーツをベルトに取り付ける。

《《ARCROSS》》

「変身!」

《《CROSS OVER! 思いを! 力を! 世界を繋げ! 仮面ライダーアク

ロス!》》

何度も変身するうちに馴れたのか、変身動作がすこしスピーディーに感じられる。ア

クロスはオリジオンに向かって走りだしながら、拳を突き出す。

「はあつ！ せい！」

「らあつ！」

カイザとアクロス。両者はそれぞれ異なった思いを抱きながら目の前の敵に立ち向かう。

戦いが、幕を開ける。

兵藤一誠の視界に、誰かが映り込む。

瀕死の彼には、はつきりとは見えていないのだが、その人物は彼をまじまじと見つめながら言葉を告げる。

「貴方が私を呼んだのね……今にも死にそうじゃない」

当然ながら、今の一誠には応答するだけの力はない。ただ、その顔には、未だに生への執着が見られていた。

謎の人物は、クスクスと笑った後、一誠に対してこう告げた。

「どうせ死ぬなら、私が拾ってあげるわ。貴方の命。私の為に生きなさい」

第9話

デアイノレンサ

夜闇に光る、カイザの黄色いラインと紫の複眼。高架線の橋脚に打ち付けられるオリジオンの赤黒い身体。呻き声をあげながら、オリジオンは背中を橋脚に預けながら立ち上がる。

(やはりコイツ相手じゃ分が悪い……単純に、今は実力に差があり過ぎる)

そう判断していたオリジオンは、何度も戦線離脱を試みたものの、カイザはそれを許さない。飛ばうとすればすぐ様銃で撃ち落とされ、一方的に殴られる。的確に、かつ冷酷に、殺す為の攻撃の手を一切緩めることなく、目の前の仮面ライダーは殴ってくる。

カイザはオリジオンにゆっくり歩み寄りながら、左腰に下げていたデジカメのような機器を手を持ち、×マークのような形をした剣に差ししていたメモリーを抜いて、デジカメのレンズ部分に差し込む。

《Ready》

デジカメから音声がすると同時に、裏側から持ち手のようなものが飛び出す。カイザはそこを右手で掴み、そのまま思い切りオリジオンをぶん殴った。

大きく吹き飛んでフェンスを突き破り、近くの用水路に落ちてゆくオリジオン。濁った水飛沫を上げ、用水路の底を転がっていく。

「大したことないな。その特典は御飾りか？ まあどの道、俺には効かないがな」

「……」

「今地獄に送ってやる。転生者おまえらは……許さない存在だ」

「せいやあつー！」

一方、アクロスに変身した瞬も別のオリジオンと交戦を始めていた。両者の拳が勢いよく衝突するが、オリジオンの方がパワーが上な為にアクロスの拳は上に跳ね上げられる。

それを逃す事なく、オリジオンは装甲の隙間から煙を吹き出しながら、ガラ空きになったアクロスの身体に回し蹴りを食らわせて吹っ飛ばした。

「やつぱりコイツ強え……純粹にパワーが桁違いだ……」

「オマエト……ワカリアウ……」

「こんなのと殴り愛してたらこっちの身が持たんわ！ と思いがらも、アクロスは立

ち上がる。

(俺じゃコイツには勝てない。だから、ここを上手いこと切り抜ける方法を見つけ出さねえと……)

と、考えているうちに、オリジオンがアクロスに向かって蹴りを放ってきた。すぐ様意識を戻し、身体を横に捻って回避する。蹴りは高架トンネルの壁面に亀裂を走らせ、辺りの空気も震わせる。

「ハナシ、アウ……」

「じゃあ暴力やめろや!」

行動と台詞が噛み合っていない。まさか肉体言語で話し合ってるつもりなのだろうか……と思ってしまう。オリジオンはアクロスの方をむくと、身体中から煙を吹き出しながら一歩ずつ瞬に接近していく。

「畜生……ならこれを!」

《NEPTUNIA》

以前手に入れた新しいライドアーツをベルトに取り付ける。

《LEGEND LINK・SET UP! ネプテューヌウウ!》

アクロスの周りに黒と紫のアーマーが出現し、アクロスの上からくつついてゆき、以前変身した姿に変化した。

オリジオンは一瞬驚いたような仕草をするが、アクロスはその隙を突いて、前より早イスピードでオリジオンに肘を撃ち込んだ。そのままタツクルの要領でオリジオンを推して行き、フェンスを突き破ってカイザ達のいる用水路に落ちていく。

「今地獄に送つてやる。転生者おまえらは……許さない存在だ」

下から聞こえる声には、明確な怒りが感じられる。それに対し、こんな返答があつた。
「甘いぜ？」

《explosion!》

その声と同時に、赤いオリジオンから衝撃波のようなものが放たれる。それは目の前にいたカイザも、落下中であつたアクロス達も、彼の周りに合つたもの全てを吹き飛ばしてゆく。

気づいた時には、衝撃波を食らつた全員が用水路から投げ出され、高い位置の道路に転がされていた。

赤黒い翼をはためかせながら、オリジオンは用水路から瞬達のいる高さまで翔んでくる。

「そうか……赤龍帝の籠手……お前、ずっと溜めていたな？」

カイザはオリジオンに向かつて、憎らしそうに言う。瞬にとつてはなんのことかさっぱりだが、どうやら彼らには分かるらしい。

「貴様に吹き飛ばされる寸前にな。慢心してゆっくりトドメを刺そうとしてくれて助かったぞ」

「……慢心してるのはどっちだ？」

不敵に笑うオリジオンを気にも留めず、カイザはベルトについている携帯電話のEnterキーを押す。

《Exceed charge》

「無駄だ……ここから届くとも？」

「阿保、誰がお前を殴るつつつた？」

そう言った次の瞬間、何か黄色いものがオリジオンの身体に刺さる。それは刺さると同時に四角錐状に広がり、オリジオンをその位置に固定する。

一体何が、とオリジオンは目を動かして自分を襲った現象を探る。すると、カイザの右足に双眼鏡のような物がついていることに気づいた。

「殴るんじゃねえ、蹴るんだよクソツタレ」

「あ、あが……」

「せやあー！」

カイザは高く飛び上がり、空中で一回転してドロップキックに体勢に移る。オリジオンは避けようともがくが、動けない。カイザの足が、目前に迫る。

その時であった。

「帰るよ、ガングニール、ドライブグ」

何処からか声とともに、鞭のような物が飛んできてカイザを用水路へと叩き落とすと共に、オリジオンをまるで引き寄せるように巻きついていった。

上体を起こしながら、アクロスは何が起きたのか確かめようとする。

「今はまだ戦う時じゃない。貴方も分かっている筈よ」

再び声が出た。いつの間にか、アクロスの正面、用水路を挟んで反対側の道路に一人の少女がいた。街灯に照らされている為に、彼女の姿は良く見える。禍々しい紫の長髪に、瞬より頭一つ分ほど低い背丈。黒いゴスロリ衣装。しかし、アクロスが気になったのは全く別だった。

「唯に……似てる?」

何故か、そんな言葉が漏れた。

顔付きは似ているように見えるが、それ以外は全て違う。それなのに、出てきた言葉はそれだった。アクロス自身、何故そんな言葉を漏らしたのかわからない。

「……唯って誰よ? 私はリイラよ」

少女はアクロスの言葉に機嫌を悪くしながらも、左手にあつたもう一つの鞭を伸ばしてもう一体のオリジオンを引き上げる。

「まったく、また逃げ出したの？ 貴方に死なれたら困るんだから、やめて欲しいのだけどね。転生者といえど、無敵では無いのよ」

「待て——」

「煩い」

怪人達を引き連れ撤退しようとするリイラと名乗った少女を追いかけようと、アクロスは立ち上がるが、リイラはアクロスの足元に鞭を放ち、瞬を華麗にすつ転ばさせる。くるりと空中で一回転して背中を地面に叩きつけられる瞬。彼が再び立ち上がった時には、既に少女もオリジオンも姿を消していた。

「……」

何だったんだ今の。変身を解くのも忘れて暫く呆然としていたが、そういえば用水路にカイザがまだいる事を思い出し、立ち上がってフェンス越しに覗き込む。

「あれ……？」

しかし、そこには何もなかった。結構まともに攻撃をうけているように見えたのだが、既に離れていたのだろうか。

なんだか心配して損した気分だな、と思いつながら瞬は変身を解除する。そもそも買い物帰りだったので、道端に置いてきた買い物袋を取りに行こうと踵を返す。落し物扱いで交番に届けられてなければいいが。

てか買い物行っただけでバトル発生ってありえねーだろ、と悪態をつきながら、買い物袋を置いてきた地点へと向かう。そこに、

「少しはいい顔つきになつたじゃないか、逢瀬君」

「ふおあつ!?」

いきなり真横から胡散臭い声が聞こえてきて、思わず驚いてしまう。声のした方を見ると、そこには久しぶりとなる怪しいお兄さんの姿があつた。

「久しぶりだね」

「ファイフティ……」

なんでそう心臓に悪い登場の仕方しか出来ないんだ。と言わんばかりの視線をファイフティに向けて放つ瞬。しかしスルースキルが異様に高いファイフティはそんなの関係ねえとばかりに薄笑いを浮かべながら話を続ける。

「すまないね。出てくるのが遅くなって」

「……」

別にお前を待つてた覚えは無いんだが、と言いたくなつたが、どうせスルーされるのは目に見えているので、瞬は黙っていた。

「既にアクロスの真の力その1を使ったようだね」

「真の……アレのことか」

「ああ。まさにあれこそがアクロス真骨頂その1『LEGEND LINK』なのさー」
「……」

腕を広げて高らかに叫ぶファイフティ。正直言うと既に夜中だし近所迷惑だからやめて欲しい。そんな瞬の思いはどこへやら。ファイフティは反応に困っている瞬を無視して話を続けていく。

「数多の世界で活躍をしてきた・している戦士達の力を借り、身に纏う。それが『LEGEND LINK』なんだ。私が作ったわけではないが、ロマン溢れるだろう?」

なんか得意げにドヤ顔をキメるファイフティに、どう反応すればいいのか分からずに困惑する瞬。はつきり言ってよくわからないので「お、おう」としか言えないのだが。

「うん。これでアクロスの力については大方説明はした……と思う」

ホントかよ、と瞬は疑惑の視線を向ける。ファイフティは踵を返そうとするが、ふと何かを思い出したような素振りを見せ、最後に一つ、と付け加える。

「アクロスの力は絆の力。それを念頭に入れてほしい。もし君がその力を私利私欲の為に使うならば、私は君を殺す」

「——!」

今までにない真面目な表情、低い声で瞬にそう告げるファイフティ。その声色は、いつもの不信感マシマシな胡散臭い雰囲気は一切纏わず、代わりに形容しがたい恐怖を含ん

でいた。

ファイフティはそう告げた後、すぐさま何時もの胡散臭そうな雰囲気にもどると、

「あ、それはそうとコレを」

「あつ……買い物袋」

ファイフティが手渡したのは、瞬の買い物袋だった。戦闘の邪魔になると置いておいたのだが、持っていたらしい。

「最後に忠告を一つ。あの転生者狩りには気をつけたまえ。君がアクロスとして戦う以上、彼との衝突は避けられないだろうが、しばらくは彼との戦闘はしないでおう。力量差は天と地ほどあるからね」

「協力つてのは……」

「無理だ。おそらく彼と君は根本的に馬が合わない。そもそも私も彼に嫌われてるから協力なんか絶望的さ」

一体過去に何があつた、と疑問に思わずにはいられなくなる。どうやらファイフティと転生狩者は面識があるようだが、どうせ訊いたところで答えてはくれないだろう。

瞬としてもファーストコンタクトでボコボコにされた相手とは出来れば関わりたくないのは本心であるのだが、かと言ってオリジオンを野放しにすれば、前回のような事態になり得る。それは瞬としても看過はできない。

つまるところ、方針としてはあの転生狩者との戦闘をなるべく回避しながらあのオリジオンに対処することになる。

「じゃ、また今度」

言いたいことは全て言い切ったのか、夜の闇に消えていくファイフティ。後に残されたのは瞬ただ一人。

こうして、再び戦いの幕が上がった。

柔らかな朝の日差し。

兵藤一誠は、ゆっくりと目を開ける。

「……………あれ？」

目が覚めると、見慣れた自分の部屋だった。部屋の至る所に健全とは言えない内容の雑誌やらDVDやらがある、別の意味で汚部屋な自室。

時計を見ると、午前6時。起きるにはちよつと早い時間な気がするが、目覚めたものはどうしようもない。

「朝……………朝かー、てか俺いつ帰って来たんだっけ……………？」

そう思考を働かせていると、昨日の記憶が蘇る。

「つーか、俺死んでなかったっけ？」

それに気づくと同時に、背中が冷や汗でぐっしよりと濡れていく。

止め処なく流れてゆく鮮血と、冷えてゆく身体。何もわからないまま、夕麻との別れ際に訪れた“死”。あの時、明らかに一誠の腹は何者かに抉られた筈だった。

しかし、彼はまだ生きている。何故だか分からないが、こうして今も生きているのだ。腹に穴は空いていないし、心臓はちゃんと脈打っている。むしろピンピンしている。

一体これはどういう事なんだ？ と、一誠は足りない頭を振り絞って考える。と、ここでふとある事が頭をよぎった。

「つーか、夕麻ちゃんは大丈夫だったのか？」

そうだ。あの時、あの場には夕麻も居たはずだ。彼女は襲われずに済んだのだろうか。後で電話でもかけてみようか、と決める一誠。

早速しようと、机の上で目覚ましアラームを鳴らしっぱなしの自身のスマホに手を伸ばそうとしたその時、廊下から母親の声が聞こえてくる。

「イツセー、起きなさい。また遅くまで起きてたの？」

「お、起きてる！ 起きてるから！ 今降ります！」

一誠はそう言うのと、すぐ様アラームを切り、スマホを手を持って部屋を出て行く。いくら考えたところで答えは出ないし、今は考えないでおこうと決め、いつも通りに朝の

支度を進めるのであった。

そんなこんなで登校中。歩き慣れた通学路を行く一誠だが、T字路でばったり出会った級友に声をかけられる。

「おつすイツセー」

「ん、アラタか」

半ば腐れ縁のような関係のアラタと一誠。諸事情より艦娘との縁が豊富なアラタに對して、時折一誠は軽く嫉妬と羨望の念を抱く事もある。本日も大鳳と一緒に登校しているアラタの姿に若干嫉妬と羨望を抱く一誠であった。

「お前どうした？　なんか気怠げそうじゃあないか」

アラタに心配そうな顔でそんな事を言われたが、昨晩あんな事があったのだ。能天気なエロいことを考えられる訳がない。考えないでおこうとしても、やはり難しい。

「気のせいだって、昨日のデートも楽しめたしな」

「あー、そうか。面白いやそんな事言ってたな。あれ嘘じゃ無かったんだな」

「お前まで信じてなかったのかよ!?!? 写真まで見せたのに……!」

「てつきり合成かと思って」

お前も信じてなかったんかい！　と一誠はアラタの頭にグリグリ攻撃を繰り返す。

痛い痛いともかくアラタと、その光景を若干冷めた目で見る大鳳。ちなみにこの冷めた目は一誠にのみ向けられている。

「相変わらず冷たい視線だ」

「たりめーだろ、お前日頃女子から何て言われてると思うう？」

逸（脱^{イッ}した）性（欲の権^セ化）だぞ？ 目があつたら即孕ませらるとか言われてるぜ」

「聞きたくなかつたそんな情報！ 昔に比べたらだいぶ治まつてきたから！ 覗きも足を洗つたから！」

逸性とか品性疑う渾名つけられてはたまらないと憤慨する一誠だが、実際本人が品性疑うような人間なのであまり擁護は出来ない、

アラタ自身もちよつと一誠を茶化してオーバーに言っただけなのだが、流石にやり過ぎだと思ひ訂正する。

「それって当時の学級委員長にシメられたからだろ……つーかそこまでは言われてねーよ。フレンドジョークだよ」

「なーんだよかつたー」

まあ程度はどうあれ、変態なものには変わりないが。

「アラタ、友達は選んだ方がいいよ」

「そう言うなって。これでも友達思いな奴なんだよ、イッセーは」

大鳳の追い討ちをフォローによってなんとか回避するアラタ。そんなこんなしているうちに、昨日の曲がり角に差し掛かった。

「……」

「アラタさん？」

「少し待とうか」

えっ……と大鳳が思っていると、前方の曲がり角から少年が一人出てきた。アラタもご存知、逢瀬瞬である。何だか考え事をしているのか、前をちゃんと見てないようだ。

「危ない危ない。またラブコメ展開になるところだった」

「おっす逢瀬……だったっけ？」

「お、おはよ……そうだけど」

「俺は兵藤一誠。せっかく同じクラスになったんだから、よろしく頼むぜ」

一誠は瞬の肩に手を回しながらそんな事を言う。妙に馴れ馴れしい気がするのは気のせいだろうか。

「気になってんだがよ、なんでお前挙動不審気味なんだ？」

「え？ そ、そうだった？」

瞬はアラタからそう言われて、少しビクツとしてしまう。瞬からすれば、転校してない筈なのに転校生気分な状態なわけであるから、自分の記憶とは食い違う異物には警戒

せざるを得ないのだ。

「気のせいだって」

「……いや赤の他人の俺から見ても一目瞭然だからよ、流星にこっちも気になるんだ」

「そ、そうか……でもホントに大丈夫だから、な？」

「そうならいいけど」

「さっさと行こーぜアラタ。何やってんだ」

会話が終わって一人残された瞬。確かにここの所張り詰め気味だったが、周りから見ても異様だと思われるらしい。確かにこの一週間、新たなクラスで孤立気味だとは感じていたが、ひよっとすると無意識のうちに避けられていたのかもしれない。

「……もうちよつと肩の力抜いた方がいいのかな」

「肩の力がどうしたって？」

「がひいん！」

後ろから声が出したかと思えば、いきなり膝カツクンをくらって思わず地面に膝をついてしまう。

「いつて……唯！いきなり何するんだよ！！？」

「おっはよー、相変わらず浮かない顔してるねー」

いつも通りの能天気な態度の唯を見て、思わず苦笑する瞬。

ただし幼馴染みとは言えど、挨拶がわりに膝カツクンは無いと思う。そもそも異性にやるのは抵抗感があると思うのだが、彼女はその辺りをどう思っているのだろうか。

「お前とは違って色々俺はあるんだって」

「色々ねえ」

「なんだその反応。とにかく俺は先に行くぜ」

こうしてダラダラ立ち話をしていたら前の様に遅刻ギリギリになりかねない。早歩きになっていく瞬を慌てて追いかける唯。

「ちよ待て待てい！」

「こないだ置いていきやがった軽い仕返しだってー」

ここで両者全力疾走。学校までの競争が始まった。

ちなみにこの直後に唯があっさり抜かして行って、瞬は学校に着く頃にはヘトヘトになってしまったのは別の話となる。

HR前の教室に、品性が感じられない大きな声が響いた。

「彼女お？ お前に？ いやいやいや、馬鹿な事言うなよ。エイプリルフールはとつくに終わってるんだぜ？」

昨日の夕麻とのデートの話題を振るなり、松田と元浜はそんな心ない発言を一誠に放

つ。

「お前なあ……俺に嫉妬するのは分かるが、幾ら何でも言い過ぎだぜ。いつまで疑ってるんだ。写真だつて見せただろ。昨日のデート写真だつてスマホに送ってる筈だ」

そもその話、一誠の記憶が確かならば二人に彼女を紹介したし、優越感から「お前も早く彼女作れよ」と言つてやったのも覚えてる。

それにもかかわらず、二人は全く覚えていない。それどころか、夕麻がいたことさえも覚えていないのだ。こうしている今も、松田と元浜は一誠に対して憐みの表情をむけ続けている。

「ま、まあなんだ。よく分かんねーけど、今日は俺ん家で秘蔵のコレクションでも見て元氣だそうや」

「うんうん。童貞こじらせて妄想彼女とのデートまでやらかしたんだ。お前疲れてんだつて」

「うう……」

一誠を無視して勝手に盛り上がる二人。見かねたアラタが肩に手を置いて、

「その……よ。生憎俺は知らなかつただけだよ、まあ落ち込むなよ。お前らしく無いぜ」

「……アラタは信じてくれるのか？」

「分からない。俺は紹介されてねえしな。だけどお前は良くも悪くも正直な奴だつてのは知ってる」

アラタに慰められる一誠。流石に変態二人も言い過ぎたと思つた様で、申し訳無さそうにしている。

昼休み。

唯と机を向かい合わせにくつつけて弁当を食べようとする瞬。側から見るとお前ら付き合つてないかと言われそうな感じだが、本人達はそのつもりはない。

そこに、

「俺達も一緒でいいか？」

「お前は……」

「欠望アラタだ。こっちは大鳳と一誠」

今朝の三人がやってきた。

「別にいいよ。食事どきは賑やかに越したことは無いからね」

アツサリと許可を出す唯。瞬としても断る理由が無いので、三人は近くの空席を動かしてくつつける。

「よろしく」

「いっつちいそ」

大鳳の挨拶に軽く返す唯。一方で瞬は、自分の向かい側に座ったアラタに対し、なんなんだこいつと言わんばかりの目を向けていた。

現在の世界は、瞬にとつては未知の部分が多い。記憶している常識と現実が微妙に噛み合わない。それにファイフティからの漠然とした忠告や、前述した実質的な転校生状態がまざるのだから、いくら一般人の瞬でも周囲への警戒心の類は芽生える。

「なんだよ、怖い顔して」

「い、いやあ、なんか距離の詰め方が早いっつーか、そんな気がして」

「友達作りの基本は最初は攻める！ 俺なりのやり方なのさー！」

「地雷踏みかねないんですがそれは」

ドヤ顔のアラタに対し、思わずツツコミを入れる瞬。アラタの言っていることは理解は出来るのだが、瞬の言う通りの可能性もある。人間関係とは難しいものである。

「それを聞いて最初からオープンにしてたら俺女子から嫌われたんだが」

「性欲オープンにしろとは言ってねえよ。てか俺と出会う前からオープンだったろお前」

「正直言つて最初見たとき引いた」

割と付き合いの長いアラタだけでなく、ほぼ初対面の唯にまで正論を突きつけられ

る一誠。正直言って公衆の面前でエロトークかましてる人間とお近づきになりたいと思う人間は少ないだろう。

「お前もつとスケベを隠せば人気になると思うんだけどな」

「性欲は全生命が持ちうる由緒ある欲望なんだぜ。それを——」

会話が始まって30分程経った。

やはり食事しながら話をするというのは、親交を深めるのには効果的なのか、少年漫画トークで盛り上がったたり、アラタと一誠の漫才じみた会話に笑いを誘われたりした。

そして会話は以下の話題に行き着いた。

「フラれた？」

「今朝から夕麻ちゃんと連絡がつかないんだよ……電話やメールも番号やアドレス変わってて出来ないし」

「……変態性を見抜かれたのでは」

大鳳のもつともな指摘を必死に否定する一誠。本人が言うには、一応変態コンビ以外の知り合いから色々デートプランのアドバイスを貰ったらしいのだが。

「それを誰も覚えてないんだよ。松田達も夕麻ちゃんを紹介したはずなのに全く覚え

ちやいない」

「そりや不思議だな」

「まあ私含めてみんな信じてないんだけどね。普段がアレだし」

「とにかくこの話題はやめやめ。私達が反応に困るから」

唯の一言で一旦会話が途切れる。話題に入れない人が出てくる会話はあまりよろしくない。

「そういえば新しい生徒会長さん、目安箱置くとか言っていましたね。全生徒の悩みを解決するって」

「噂だけでも同じ人間とは思えないんだけど」

「そうだイツセー、目安箱使えばいいんじゃないの？　そうすりやお前の悩みもなんとかなるかもな」

「無茶言うなよ……」

アラタと一誠のやり取りを他所に、瞬はふと窓の外に目をやる。人気の少ない場所であつたが、そこにいた人物にはどこか見覚えがある。

（あの白パーカー見覚えあるんだけど、何処で見たっけなあ）

お互いに面識はほぼゼロな上、瞬はズダボロの姿しか見てないために知らないのは当然と言える。なんか下級生らしき少女に必死に弁明しているが、関係無いので視線を戻

す。

「じゃあ、放課後にでも行くか?」

「ダメ元でやるかあ……?」

「いやどうにかなるんですかそれで」

そんな感じで昼休みのトークは幕を下ろすのだった。

「兵藤一誠くんだね」

放課後になつて直ぐの事。瞬のクラスに一人の少年がやって来た。彼が教室に入り、教室にいた女子の大半が一斉に黄色い悲鳴をあげた。

「キヤー! 木場くんよ!」

「こんなに近くで見たの初めて!」

「希望の花咲いちやう!」

「止まるんじやねえぞ……!」

一体何なんだと、あまりの煩さに思わず耳を塞いでしまふ瞬と唯。少年に嫉妬する非リア充の男子達。ある意味カオスな空間の中、少年は一誠に向かつて歩く。

「お前は……木場裕斗!」

学園の二大王子の一人と言われるイケメンボーイこと木場裕斗。男子からは妬み、女

子からは羨望の眼差しを一身に受ける人気者である。彼はいつものようにイケメンスマイルを浮かべながら一誠に話しかけてくる。

「グレモリー先輩からの伝言を預かってきた」

「俺に？ てか先輩が？」

嫌そうな顔をする一誠。声に木場に対する僻みがこもっているように感じるのは気のせいだろうか。

そもそも呼ばれる心辺りがなさすぎる。学園の人気者であるリアスに呼ばれるのは嬉しいのだが、いささか唐突に感じる。

「残念ながら拒否権はないんだ」

爽やかなイケメンスマイルで群がる女性を捌きながら、一誠の手を引いて教室を出て行く木場。

「なーんだあれ」

「告白？」

「木場くんと付き合うなんて兵藤絶対許さねえ！」

「木場くんはホモだった……？ でも兵藤、テメーはダメだ」

一連の出来事に対しぽかーんとしている男性陣と、一誠に対して辛辣な言葉を放つ女性陣。一部は「イチキバとかキモくね？」等のマニアックな感想を漏らしていた。

「わけわからん……」

「それがこの学園なんだってよ」

瞬の眩きに対し、茶化すように言うアラタ。自分の知ってる学校生活つてもつと平和だった筈なんだがなあとと思わずにはいられないのであった。

木場に連れられるまま、一誠は旧校舎へとやってきていた。古びた西洋風のこの建物は、現在は一部分だけが部室棟として使われており、寄り付く人は少ない。

掃除が行き届いているのか中はかなり綺麗になつており、初めて立ち入った一誠は辺りを興味深そうに見ながら木場に連れられていった。

「……だ」

最終的に、ある扉の前で立ち止まった。小綺麗な扉には「オカルト研究部」と書かれたプレートがつけられている。

「部長、連れてきました」

「おい、なんでオカルト研究部に連れてきたんだよ?」

一誠の言葉を無視したまま、木場は扉をノックしてから開ける。そこらかしこに謎の文字や魔方阵的な何かが存在する悪趣味な部屋が、一誠を迎える。シャワーの音が聞こえるのは何故だろうか。

「うえ……なんだこれ」

ソファーに座っていた少女が、二人に気付いて菓子へと伸ばしていた手を止める。

「先輩」

「紹介するよ。こちらは兵藤一誠くん」

一誠も彼女のことは知っている。学園のマスコットとも言われている美少女・塔城小猫だ。ロリな外見で男子人気の高い後輩は、一誠に軽く頭を下げるてすぐにそっぽを向いてしまう。

「嫌らしい顔」

初っ端から辛辣な言葉をぶっかけられた。そりゃあ現在進行形で女子から嫌われている一誠に近寄られたくないというねは当然の事。一誠も分かってはいるし、言われ慣れてはいるが、やはり傷つく。

一誠がソファーに腰掛けると同時に、部室の奥の方のカーテンが開く。そこに居たのは制服を着たリアスの姿。

「ごめんなさい、さつきまでちよつと忙しかったから、今シャワーを浴びてたの」

「いえ、気にしてません」

少し濡れた紅い髪が、一誠を興奮させる。それを見て再び小猫が嫌な顔をする。すると部室の扉が開き、黒髪ポニテのダイナマイトボディの女性が入ってきた。リアスと並

ぶ学園の憧れの的・姫島朱乃^{ひめじまあけの}

だ。彼女の登場により、更に一誠は興奮する。

「少し遅くなりました」

「これで揃ったわね。さて、兵藤一誠くん——いえ、イツセー」

「は、はい」

「私たちオカルト研究部は貴方を歓迎するわ—— 悪魔としてね」

同時刻、帰り道。

アラタと大鳳は二人で歩いていた。海が近いので、潮風の匂いが二人を薄く包んでいく。

「アラタ、なんで急にあの人達と関わり出したの？」

「それ聞く必要があるかな？」

「いやまあ、結果的には悪くない人だったけど、なんかこう……始まりが突発的な気がして」

アラタは数秒ほどうーんと唸ったのち、

「ん、まあ……ちよつと昔の俺に似てるなーって思ってたさ」

「昔……ああ、あの厨二病拗らせてた」

「拗らせてねーよ」

大鳳の言葉に苦笑して、アラタはこう言った。

「周りを恐れて、何もできなかつた独りぼっちの俺にさ」

第10話 望まれないエンカウト

あれから一週間が過ぎた。

瞬は徐々にクラスに打ち解け始めていたが、それ以外は全く進展無し。湖森との溝は埋まらず、転生狩者については何もわからない。

それでも時は流れていく。物語は進む。

瞬達の通う学校は、小高い丘の斜面に、街を見下ろすように建っている。つまり登校時は学校の手前で坂道を登る羽目になる為、割と面倒くさいのだ。おまけに今日は気温が高い為、学校に着く頃には瞬は汗だくになっていた。

「よ、二人とも」

「ん、逢瀬か。アイツは一緒じゃねーんだな」

この一週間でアラタと瞬は徐々に仲良くなり始めていた。教室に入るなり挨拶を交わすと、瞬は席に座る。ちなみに現在の座席は出席番号順に決められているので、二人

は前後の席である。

「いやーあつつい。これでもまだ四月半ばだけ？」

「本日の最高気温は28℃らしいし……アラタさん、今日帰りにアイスでも買って帰りましょう……」

「あーそうだな。制服がすでに汗臭い……」

「汚いからちよつと離れてくれない？」

「お前から近づいてきたんじゃねーか」

「何こいつら付き合ってるの？」と思いながら、アラタと大鳳のやり取りを眺める瞬。ちなみに彼も既に汗ダラダラである。これも全部温暖化って奴の所為なんだ。温暖化許さねえ！と思わずにはいられないだろう。

制服の袖を捲り、下敷きで自身を仰ぎながら椅子にもたれかかるといふ、凄くだらしない格好のアラタは、その体勢のまま瞬にこんなことを聞いてきた。

「なあ、瞬は部活とかやってんの？」

時期的には、部活の勧誘が盛んな時期なので割とタイムリーな話題だ。瞬はそれ聞くか？と言わんばかりの顔を一瞬してから、渋々答える。

「帰宅部2年目だったの」

「へーそうかい」

瞬の答えを聞いて若干ニヤついたような顔を向けるアラタ。なんだその反応は、と瞬は少し不機嫌そうにアラタの肩をつつく。

「アラタだって帰宅部じゃない」

「し、仕方ないだろ。姉貴に負担はかけられないからな。大鳳だってわかってるだろ？」
「よく分かってますよ」

二人のやり取りを眺めながら、一体朝から何を見せられてるんだ、と変な自己嫌悪感を抱く瞬。妙に二人が眩しく見えるのは気のせいだろうか。

無意識のうちに、なんか微笑ましいモノを見るような温かい視線を向けていたらしい。すこし照れたように二人が、

「そんな目で見ると。別に面白くないぞ」

「分かった分かった……お、唯のお出ませ」

「オツハー！ 私参上！」

相変わらず煩い挨拶だ。しかしこの馬鹿みたいな元気さに瞬は安心する。

「あ、そーだそーだ。湖森ちゃんから借りてたコレ、見終わったから返しとくわ」

「へいよ」

唯は鞆からDVDケースを取り出して瞬に手渡す。先月から湖森が唯に貸していたモノだ。

二人は何故か瞬以上に仲が良いので、こうして、DVDや漫画の貸し借りを行なっているのだが、何故か毎回瞬を経由するのだ。しょっちゅう遊びに来てるのだから直接やれよ……と思う瞬だが、別に大したことないので普通に引き受ける。

「いい加減仲直りしちゃいなよ。良かったら私がセッティングするからさ」

「お見合いみたいに言うなよ」

ここで二人のやり取りを見ていたアラタが一言。

「お前も大概だよな」

「うっせえ」

アラタの言葉に、すこし照れ笑いをしながら返す瞬。まあ、側から見ればどっちもどっちなのであった。

「やべえ……疲れた」

朝から早々ぐったりしている一誠。何時もならば松田や元浜と共にエロトークにうつつを抜かすのだが、ここ一週間はそんな気力が無いのか、教室にきてはHホームルームR開始まで席について疲れたような態度を取るようになっていた。

「おいイツセー、今日の放課後は松田ん家でAV鑑賞するぞ」

「俺。パス」

だるそうな声で元浜の誘いを断る一誠。それを聞いて松田が口をあんどり開けて驚く。

「嘘だろ？ 性欲の擬人化とも言われているお前が断るなんて……変なもん食ったのか？」

酷い言われようである。周囲は知る由も無いが、実際にはオカルト研究部の活動が忙しいのでそんな余裕が無いのだ。

あの後リアス達から悪魔の何たるかを色々教わり、悪魔稼業の第一歩として契約のピラ配りを夜に行っている上、基礎的な力を高めるためのトレーニングも行っている。いくら夜に強いといえど、さすがに徹夜はキツイ。結果として、このようにヘトヘトになっているのだ。

「なんか最近付き合ひ悪いぞ。木場に告白でもされたのか？」

「んなこと天地がひっくり返っても無い」

力なくツツコミを返すと、一誠はそのまま机に突っ伏した。とんだブラック部活だが、悪魔として成り上がる為の通過儀礼だと思ひ頑張るしか無いのだ。それに悪魔になると様々なメリットがあるらしく、その事実も一誠を奮い立たせる要因になっていた。

（上級悪魔になれば……ハーレムが作れる！ 俺は成り上がってやる！）

そう。成り上がる事が出来れば、一誠の悲願であったハーレム王が実現できるのだ。

その為には悪魔として精一杯働いて手柄を立てる必要がある。

そう考えていると、心無しか疲れが吹き飛んでいくような気がした。一誠は己の欲望を想像し、机に突つ伏したままにやけていた。余談だが、これを見ていた教室内の女子達にドン引きしてたとか。

「はあ……」

また、溜息が出た。

これで何度目だろうか。

大した事ではないし、すぐに片付く話なのだが、どうしても踏み出せない。拒絶してしまう。

「どーしよう……」

逢瀬湖森は悩んでいた。現在は絶賛昼休みの時間なのだが、開けられた弁当はあまり手がつけられていない。

(立ち止まってちゃ駄目なのは分かるけど、やっぱり……)

悩んでいるのは兄のことだった。

ヒビキやネプテューヌと共に怪物に攫われたあの日、湖森の目の前で瞬は変身して戦った。妹の為に身体を張って奮闘した、その事実は、助けられた身からすると充分賞

賛と感謝に値するモノだというのは湖森にも理解は出来る。

しかし、だ。湖森はそれを完全には受け入れられなかった。未知の力を使って戦う兄の姿に、感謝とは別にある種の恐怖を抱いてしまったのだ。それ以来、彼女は瞬を避けるようになってしまい、現在に至る。

「湖森ちゃんっ」

そうやって一人で悩むこと早半月近くが経とうとしていた今日。流石に見かねたのか、ぽんと肩に手を置かれると共に声をかけられた。

「あ……風沙」

顔を上げると、そこには中学入学の時から付き合っている暁風沙が心配そうな顔を湖森に向けていた。隣にはこの春から転校してきた姫終雪菜も一緒にいる。

「紹介するね。友達の逢瀬湖森ちゃん」

「はじめまして、姫終雪菜です。話すのは初めてになりますね」

「見るからにお悩みの様子だけど、私でよかったですら話は聞くとよ？」

「だ、だいじょーぶ大丈夫。自力でなんとかし、しますから」

「まあそう言わずに。少し吐き出した方が、案外解決策とか見つかるかもよ？　なんか溜め込みがちな所、古城くんに少し似てるよね」

それを聞いて「言うほど似てるかな？」と思わずにはいられない湖森。何度か風沙か

ら話を聞いたり、学校でも見かけたりしているが、正直言うといつも怠そうな顔してる人という印象だ。

ともかく、風沙のいうとおり、誰かに吐露したほうがいいのかもしれない。彼女なら、きつと大丈夫。そう判断し、湖森は心中を明かす。

「お兄ちゃんのことなんだけどさ」

「お兄さんがどうかしたんですか？」

「なんか……秘密……みたいなのを知っちゃって、それで向き合いにくくなっちゃって」「秘密かあ……何？ お兄さんが実はお姉さんだったとか？」

「何その複雑な秘密!? いやそんなんじゃないからね!?!」

風沙の言葉に思わず吹き出し、必死に否定する湖森。想像しただけで目眩がし、倒れそうになるところを風沙が支える。

「ご、ごめん。話の腰を折っちゃって」

要らぬ発言で会話をぶった切ったことを謝罪する風沙。

どちらかと言えば粉碎しちやってるんだけどなあ、と思う湖森と雪菜。半笑いになりながらも、湖森は続ける。

「お兄ちゃんには悪いとは思っているんだけど、中々言い出せなくて。風沙ちゃんも知ってる通り、お兄ちゃんとはずっと仲良くて喧嘩もほとんどした事なくて、余計にど

うしたらいいか分からなくなつて」

「んー難しい悩みだなー。雪菜ちゃんはどう思う?」

「え、いや……私、兄弟とか居ないからよく分からなくて」

急に話題を振られて少し慌てる雪菜。剣巫として育てられた故にこういつた経験がないので、どうも力にはなれない模様。

仕方なしに風沙は一人で考える事に。1分ほど唸りながら考えた末に、

「月並みなこと言うけど、やっぱりこればかりは湖森ちゃん自身の問題だからさ、最後には自分でやらなきゃ駄目なんだよ。だからあくまで最初のひと押しだけしか私達はしないよ」

「それは分かつてる」

「焦る必要は無いんだからさ、湖森ちゃんのやり易いタイミングで話しあつてみたら?」

悪いお兄さんでもないんだし、躊躇する必要はない気がするけどね」

「……まあ、そうだよね。充分逃げたし、なんか今からなら行けそうな気がしてきた。ありがと、風沙、雪菜」

「いや、私何もしてませんから……」

そうだ。いつまでも躊躇つてはいられない。今日帰ったら話してみよう。てか今まで躊躇してた分根掘り葉掘り訊きまくつてやる。そう息巻いてる湖森の様子を見て、雪

葉がぼつりと一言。

「……あつさりと元気になりすぎな気がしますけど」

「私、カウンセラーの資質あるのかも」

それはどうなんだろう。雪菜の心の中の拙い突っ込みは、誰にも届くことはなかった。

時間は進んで放課後。

「あ、今日私は中年スキップ買わなきゃいけないから、バイバーイ」

「……アレ面白いのかね」

欠かさず購読している週刊漫画雑誌を買いに行く為に、唯は帰り道とは逆方向のコンビニに向かう。一誠はオカルト研究部の活動があるために、瞬はアラタ達と一緒に帰ることになった。

「山風、待ってたのか」

正門の辺りで、中等部の制服を着た緑髪の少女が待っていた。こちらに気付いた彼女は、頭の黒いリボンを揺らしながらアラタの元へと駆け寄ってくる。

「まあね。随分と遅かったね」

「担任の話が長くてよーもうヤダ疲れた」

「アラタ……知り合いか？」

「山風だよ。なんつーか……妹分的な？」

なんか歯切れの悪い言い方なのは気のせいだろうか。と思っていると、山風がアラタの発言を訂正するように言う。

「正確には同居してるんだよね。色々アラタのお姉さんには世話になってるから」

なんだそりゃ。思わずそんな言葉が口から出てしまった瞬間。何処のラブコメの主人公だと言いたくなるが、ぐつとこらえる。

「両手に華、とはこーゆーことか」

「何その変な視線……頼むからやめて！」

「へいよ。邪魔しないから好きだけイチヤつきなさいな」

リア充の邪魔をするような腐った性根は持ち合わせていない逢瀬少年は、数歩引いた位置からアラタと大鳳のやり取りを眺める。そこに山風と名乗った少女がトコトコと側に寄ってきて、

「……二人とも仲良いよな」

「ですね。出会ったのは私と同じくらいなんですけど、何処でこんなに差がついたのかな……」

「でも見てて微笑ましくならないかな？ 正直ちよつと羨ましいぜ」

「よく言われます」

瞬の言葉に苦笑する山風。どうやら考える事は皆同じらしい。

と、ここで一台のバイクが猛スピードで近づいてくる。気づいていないアラタに山風が注意する。

「アラタ、バイク来てるから!」

「うおっ危ねえ!」

少し大袈裟にバイクを避けるアラタ。幸い事故が起る事なく、バイクはそのまま走り去っていった。

「いや〜危なかった……にしても、なんか腕が軽くなったよーな……」

呑気なアラタの態度に呆れたような顔をする大鳳だが、瞬がある事に気付く。

「あれ、お前鞆どした?」

「鞆?　ちやーんと手に持つ……あ!?!?」

瞬に指摘されて自分の手を見ると、そこには鞆の紐のみ。鞆本体は影も形もない。すぐさま必死になって辺りをキョロキョロするアラタだが、山風が何か思い至ったような顔をする。

「……さっきバイク避けた時に鞆の紐が切れて、ガードレールを飛び越して落ちていったんじゃ」

「あー、確かに落ちてる。見えるわ」

ガードレールから身を乗り出して斜面を見下ろすと、アラタの鞆と思しき物体が、斜面の下の廃工場の敷地に転がっているのが見えた。

軽く4〜5メートルは下に落ちているのだが、鞆はそんなに傷ついた感じがしない。

「くそっ拾いに行くつきやねえ！」

「ちよつアラタっ」

アラタはガードレールを乗り越えて、雑草の生い茂った急な斜面を下りていく。そっちの方が最短距離で辿り着けるからだ。瞬達もアラタを追って下る。

途中何度も滑り落ちそうになったが、怪我なく全員鞆に辿り着いた。鞆についた土を払いながら、アラタは鞆を持ち上げる。

「あー良かった……っーか結構頑丈だなこの鞆」

「てかどこまで落ちたの……」

「別にお前らついてこなくて良かったのに」

アラタがもつともなことを言うが、そもそも鞆落としたのはコイツだ。アツサリと目的は完了したので、何処か気味の悪い廃工場からさっさと立ち去ろうと四人は歩き出す。

ところが、

「……待て、なんか音がしないか？」

「は？」

瞬の耳に何かの唸り声のような音が入ってくる。犬とは違う。何処か邪悪で、夕子の悪そうなものだ。

「犬じゃない……なんだこれは」

「さ、さっさと帰ろうよ……なんか怖い」

山風がそう言ったその時、ズシンという音がし、それと同時に地面が少し揺れる。そして、近くの倉庫の暗闇の中から声がする。

「ほう、久々に人間が来たか。これは美味そうだ」

「なん……じゃ……これ」

倉庫の暗闇の中からでてきたそれが人間でないの是一目瞭然だった。

4本の馬のような足のついた下半身。その上に乗っかる人間の上半身。その背中には蝙蝠のような一对の翼や、額には牛のような大きな2本の角が生えている。

全長4メートル程は優にありそうなその怪物は、瞬達をまるで獲物を見定めるかのように見下ろして、舌舐めずりをする。

「俺様は名も無きはぐれ悪魔。俺様の餌食になるが良い、非力な^{にんげん}下等生物どもよ」

「悪魔……？ 人間を……食べる？」

呆然とする瞬の手を、アラタが強く引つ張る。

「悪魔……やべえ、逃げるぞ瞬。喰われちまうぞ」

「あ……ああ！」

アラタに促され、我に返った瞬も逃げ出す。悪魔と名乗った存在も、4本の足でその後を追ってくる。

「速い……！ このままじゃ追いつかれちまう！」

「逃がさねえぞ……久々の獲物だからな。人間の血肉はやはり極上だ……」

悪魔は瞬達を見下ろしながら舌舐めずりをする。

「どうするの、ねえ……」

「畜生っ！ ここで死ぬのかよ俺達……」

「ひゃっはあああっ！」

世紀末な掛け声と共に、悪魔は鋭い爪を振り回す。

「皆伏せろっ！」

咄嗟に四人が伏せたことで、悪魔の腕は瞬達の真上を掠め、近くに高く積み重ねていた鉄パイプやドラム缶などの資材に派手な音を立ててぶち当たる。

土煙が上がる中、アラタは山風と大鳳の手をとって駆け出しながら、もうひとりの友人の名を叫ぶ。

「おい逢瀬え！」

しかし、瞬はアラタ達とは反対の方向——悪魔のいる方向へと走りだす。予想外の出来事にアラタ達は驚き、

「ちよつ……瞬!? 何してるの!?」

「悪い! コイツは俺が引きつける!」

「馬鹿かお前! 死にてえのか!?」

「大丈夫! 俺もちゃんと逃げるつての!」

そう言い残した直後、資材の雪崩が二人の間になだれ込み、分断される。もう瞬に逃げ場はない。深く息を吸い込んで悪魔に正対する。

崩れた資材の山の向こうからアラタが何か叫んでいるが、瞬には届かなかった。

「なんだあ? ヒーロー気取りか?」

悪魔が瞬の行動を笑う。彼からすれば、自分より遥かに格下の獲物が、他人の囷として

自分の前に残つたのだ。身の程知らずな奴め、自ら喰われにくるか。悪魔は今にも抱腹絶倒しそうになる。

「そうかもな。だが誰だつて黙つて喰われたくはないだろ」

そう言いながら瞬はクロスドライバーを取り出し、腰に装着する。悪魔はその隙を見

逃さず、口から魔力で作った黒い波動を瞬に向かつて吐き出す。

瞬に着弾すると同時に、それは大爆発を引き起こす。炎が上がる中、あっけなく終わった瞬を悪魔は嘲笑う。あれだけ威勢のいいこと言っておきながら、随分とあっけなく死んだのだ。笑いたくもなる。

「馬鹿め。やはり人間は脆い生き物……」

「そうかよ。だが俺は少しは頑丈らしいぜ?」

「は?」

する筈のない声でしたかと思えば、既にアクロスに変身していた瞬が、土埃を突き破るように上に跳びあがっていた。驚いている悪魔に、アクロスはそのまま急降下して飛び蹴りを仕掛ける。

「ふん!」

「つ……!」

悪魔は其れを咄嗟に腕で防いで弾き、弾かれたアクロスは地面に着地する。

「へえ、神器つてやつかソレ! じゃあお前殺して奪つてやんよ。人間には過ぎたモンだしなあ!」

アクロスに変身した瞬を見て、悪魔は馬鹿にしたように笑い出す。どうやらアクロスの力をあわよくば奪つてやろうと考えているようだ。

下劣な笑い声を上げながら、悪魔はアクロスに向かって大きな拳を振り下ろす。アクロスは前に転がってそれを回避し、同時に腰にさしてい銃——ツインズバスターを構え、悪魔の頭目掛けてぶっ放した。

「その程度の攻撃なんぞ効かん！」

そう言うと、悪魔は接近してきていた瞬を前脚で蹴っ飛ばす。

「がっ……ぶっ……！」

地面を何度も転がる瞬。悪魔はそこに鋭い爪を振り下ろしてくる。慌てて立ち上がり、瞬は走って回避するが、もう片方の爪が目の前スレスレを横切っていく。

「あっぶねえ……！」

思わず冷や汗がぶわっと溢れ出すが、その恐怖を堪えてアクロスは悪魔の再び振り下ろされた

拳を回避し、今度はそれに飛び乗る。

「くっ……ちよこまかと動きやがって……！」

「せやあー！」

必死に振り払おうとする悪魔だが、アクロスはそれを耐えながら腕を駆け上り、悪魔の顔面に渾身の左ストレートをお見舞いさせる。

が、これもあまり効いてない様子。悪魔は頭を振るい、肩に乗っているアクロスを地

面に落とし、前脚で踏みつけ始めた。

「はっ………！ ばかはっ………！」

踏まれるたびに襲いかかる、肺の中の空気が全て押し出されるような衝撃。アクロスは動くことができないまま、ただ一方的に踏まれていた。

そもそもの話、今迄に比べて相手が単純にデカい。おまけに相手の皮膚は意外に硬く、パンチやキック、銃撃だとあまりダメージが通らない。大きさというハンデが、余計にアクロスを不利にしていた。

「おらっ！」

「がはっ………！」

止めに前脚で思い切り蹴飛ばされ、アクロスは周囲に置かれていたドラム缶や鉄パイプを蹴散らしながら吹き飛ばされる。その衝撃で持っていたツインズカリバーが落ちて転がる。

転がっていったツインズカリバーは、倉庫の建物の柱にぶつかってカチリと音を立てる。その時、

《SABRE MODE》

唐突に発せられた音声。

すると、ツインズバスターのグリップ部分が銃身部分とカチリとくっ付き、剣の刃を

形成した。

「変形すんのかこれ……」

ひよつとすると、この鋭い剣なら攻撃が通るかもしれない。そう考えたアクロスはベルトからアクロスのライドアーツを外し、ツインスバスターについているスロットに差し込む。

《CROSS BLAKE》

カチツという小さな音がした後、剣からその音声が鳴り、刀身がオレンジ色に点滅し始めた。

「ひゃつはああああ！ いただきまーすー！」

怪物は動かないアクロスを見て好機と捉えたのか、4本の足で一気に走って距離を詰めてくる。腕を高く振り上げ、鋭い爪でズタズタにしようとする。

が。アクロスは土壇場になってツインスバスターに左手を添えて、

「せえいやあー！」

一閃。オレンジ色の稲妻を纏った刀身が、はぐれ悪魔の横つ腹を切り裂く。今まさに振り下ろさんとしていた腕が止まり、斬られた箇所から鮮血が一気に噴き出した。

「残念だが、俺は食われる訳にはいかねーし、他の奴を食わせる訳にもいかねえんだよ」アクロスの言葉が、怪物に届いたのかはわからない。

ただ、遅れてやってきた痛みが、悪魔の歪んだ笑みを苦悶の表情へと次第に変えてゆく。

「あ、がか……あばっ……」

膝から崩れ落ちるようにして地面に倒れる怪物。彼はもう既に絶命していた。それと同時に、アクロスの張り詰めていた緊張の糸が切れて、どっと疲れが押し寄せる。

「はっ……はあ……」

武器を足元に落とし、肩で息をしながら、地面に膝をつく。やはりまだ戦いには慣れないな、と思いながら瞬はゆつくりと立ち上がろうとする。

そこへ、

「待ちなさい、其処の貴方！」

「……え？」

突然ぶつけられた大声に固まるアクロス。

振り返ると、倉庫の入り口に複数の人影があった。それは瞬に向かって恐る恐る接近してくる。倉庫の穴の空いた屋根から覗く日の光に照らされる人影達。一人は瞬と同じ年くらいの金髪のイケメン。一人は小柄な銀髪の少女。一人は無駄に胸がでかい黒

髪の女性。その中には、見知った顔もあった。

学校の女子の多くから嫌われてる変態クラスメイト・兵藤一誠。イマイチ状況が飲み込めていないのか、必死にあたりをキョロキョロ見ている。

もう一人は、鮮やかな紅髪の女性。リアス・グレモリー。アクロスからすればただの上級生だが、他の生徒からすれば校内有数の美人。その人気故に、アクロスもこの一週間で名前と顔は覚えてしまった。

リアスは、瞬に向かつて問いかける。

「……で何をしていたの？」

「……さあなんでしようかね」

「巫山戯ないで。こっちは真面目に訊いてるの。私の質問に全て正直に答えなさい」

正直に、と言われても困る。「怪物と戦ってましたー」なんて誰が信じるというのだ。

そもそも向こうは何故ここに来たのかアクロスにはわからない以上、迂闊に発言できない。あれこれ考えてるうちに、リアスから質問をぶつけられる。

「はぐれ悪魔を倒したのは貴方なの？」

悪魔ってなんなんだよ、と思いつながらも、リアスの話を聞く。いつの間にファンタジーになってたんだこの世界は。もしくはリアス達が厨二病なのか。

「……なんか可愛そうな子を見るような視線を感じました」

「大丈夫、私もよ……ずいぶんと舐め腐ってくれるじゃない」

無意識のうちににそんな目を向けてしまっていたらしい。一方的に決めつけるのはいかんと思い、アクロスは首をふる。

「……で、話を戻すけど、はぐれ悪魔を倒したのは貴方なの？」

「えつと……あの化け物のこと？ 確かに倒したつちやあ……倒したけど」

「ええ。あれは私達が倒すはずだったの。私の領地で人間を勝手に襲う連中を生かしてはおけないのよ」

「それなら別にいいじゃないか。襲われる人はいなくなつた訳なんだからさ」

「それで済めばいいんだけどね。僕らからしたら、君は未知の力を使う謎の人物……このように危険視されてしまうのは当然と言えるんだけど」

金髪の少年がアクロスの言葉を遮るように言う。たしかに、彼の言うことには一理ある。この辺りを考慮せずに戦ったアクロスに落ち度があると見えるだろう。

全員の警戒心の込められた視線がアクロスに突きつけられる。戦いの時とは違った緊張感が容赦なく襲う。

「貴方は何者なの？」

リアスは真面目な顔で瞬に問いかける。さて、どうしたものかと内心パニックになっている。当然の事であるが、向こうは向こうで完全に警戒している。流星に連戦は体

力的にキツイし、そもそもここでリアス達とかち合ってしまったら、どちらも学園での立場が悪くなりかねない。

（正体を明かして誤解を解くべきか……？ いや、それだと余計に事態が悪化する可能性も無くはない……）

「答える気が無いの？」

リアスの言葉がアクロスを焦らせていく。向こうも声に若干のイライラが籠っているように感じられる。どちらに転ぶのもあまり良いとは思えない。

逃げたいが囲まれている。アクロスの力を使えばなりふり構わず逃げられるが、その場合は完全に敵対したと取られる可能性もある。万事休すだ。

（この状況……切り抜けられるのか……？）

一体どうしたことだ、と一誠は困惑していた。

はれてグレモリー眷属の仲間入りを果たした彼は、皆に連れられて悪魔稼業に駆り出されていた。主人殺し等によって冥界から指名手配されているはぐれ悪魔の討伐任務に同行し、リアスをはじめとする部員達の戦いぶりを見学するというのが本来の予定だった。

しかし、仲間達が倒すはずだったはぐれ悪魔はすでに謎の人物によって倒され、現在

は警戒したリアスの質問タイムに突入している。向こうは答えたくないのか、仮面で見えないが質問に口ごもっている様子だ。

「小猫ちゃん、これどうすんだよ」

「分かりません。万が一戦闘になる場合も否定できませんから、その場合は下がって、ください。足手まといですから」

「くっ……否定できねえ!」

小猫の辛辣な言葉を一誠は否定できない。実際一誠は悪魔としては未熟、その上魔力も少ないので魔法陣での転移も厳しい始末。

「姫島先輩……」

朱乃の方を見ると、彼女も謎の人物に対して警戒している。喧嘩もろくにした事ないただの変態である一誠は、皆のその様子を見て困惑せざる得なかった。

「部長、ホントにアイツと戦うんですか?」

恐る恐る手をあげ、見るからにイライラしてるリアスに質問する一誠。

「場合によってはそうなるわ。だから戦いになったら貴方は下がって見学をしてて。何、その時はデモンストレーションの相手が変わるだけよ。普通の人間が悪魔とやり合うなんて、そうそう出来ないわよ」

「リアス、油断は禁物ですよ。貴女のそういう所が欠点だってお兄さんに言われてる

じゃない」

謎の人物もリアス達も、両者一步も引かない。睨み合いが暫く続く中、ある異変に気付いた人物がいた。

「——部長、何かが此処に近づいてきています」

「小猫?」

「あ」

唐突な小猫の発言に反応して、一同は辺りを見渡す。その時。

ドガシャアアアンツ!!! と。

何かが倉庫の天井を突き破って落ちてきた。

土埃が発生し、全員の視界を塞ぐ。

「なっ……何が起きて……?」

土埃の中から現れたのは、赤黒い鱗。アクロスを含めた、この場にいる全員に向けられた敵意のこもった視線。

次に現れたのは、紅い一対の大翼。それが羽ばたく度に、土埃と共にプレッシャーが周囲に拡散されていく。

その姿にアクロスは見覚えがあった。

「オリジオン……」

一週間前に遭遇したオリジオンだった。アクロスは直接戦つてはいないが、一筋縄ではいかない相手なのは充分理解している。

そいつは肩を震わせながら笑い声を漏らす。それは次第に大きくなり、やがて身体を精一杯仰け反らし、辺り一帯に響く邪悪な笑い声に変わる。

「見つけたぞ……!」

ギロリと睨みつける。

「何なのコイツ……新手のはぐれ悪魔?」

「やかましいぞ、蠅風情が」

「誰が蠅よ！ いきなり現れて馬鹿にするとか、一体何のつもりよ!?」

オリジオンの挑発に見事に乗せられ、リアスは言い返す。

「馬鹿にするも何も、事実だ」

「私を甘く見ないで！」

オリジオンはリアスを鼻で笑い、見下したように言う。さすがにここまで馬鹿にされては黙っていられないリアスは、両手に魔力を集中させ、それをオリジオンに向かってぶっ放した。

グレモリー家の持つ「滅びの魔力」。これを喰らって仕舞えば大抵の相手は身体がグズグズに崩れてしまう濃密な魔力。悪魔としてはまだ未熟なりアスのものでも充分な脅威になる。オリジオンはそれを避ける素振りをみせず、一步も動くことなくそれにくらった。

その瞬間、オリジオンを中心に爆発が起き、爆風が周囲に吹き荒れる。近くにいたアクロスは勿論、少し離れた位置で見えていた一誠も堪らず尻餅をつく。

「よし！ やったわ！」

勝利を確信し、ガッツポーズをするリアス。しかし、煙の中から

「ほう、グレモリーの力とはその程度か。予想通り弱い……話にならん」

「なっ……」

純血悪魔の中でも上位に入るグレモリー家の滅びの魔力。それが通じなかったという事実は、リアス達を驚愕させるには充分であつた。

「……お前はなんなんだ」

立ち上がったアクロスが、オリジオンに問う。

オリジオンは、腕を一回振るって煙を払うと、高らかに叫んだ。

「我が名は赤龍帝。貴様らに変わつて冥界を統べる魔王の名だ。光栄に思うがいい、俺の手で殺されることを！」

第11話

T e r n o f t h e r e v i v e

r

赤龍帝を名乗ったオリジオン。

その邪悪な気迫に、各々が無意識のうちに後ずさる。

「嘘よ。貴方がそんな……」

「なら試してみるか？ 愚かな蝙蝠どもよ」

オリジオンは、驚愕の表情を浮かべるリアス達を嘲笑いながら挑発する。言動の節々から見て取れる他人を下に見ているような雰囲気、瞬は仮面の下でわずかながら嫌悪感を顕にしていた。

「さつきから黙っていれば好き勝手言って……!」

「悔しいならかかって来い。口だけなのか？ まあ、やってきたところで無駄だろうがな」
再びリアスを煽るオリジオン。彼はゆっくりと瞬の方に首を向けると、

「邪魔者も纏めて消してしまおうか」

「やべっ」

オリジオンは軽く地面を蹴ると、物凄いスピードでアクロスの目の前までやって来

て、そのまま眉間に向かつて硬い拳をぶつけてきた。

「がっ……」

頭を揺さぶるような衝撃を齒を食いしばって踏ん張ると、瞬は膝を上にあげてオリジオンの脇腹に突き刺した。

が、その膝を掴まれ、瞬は勢いよく振り回された後に地面に投げつけられる。

「あ……」

じんじんと身体に響く痛みを堪えて立ち上がると、アクロスはツインズバスターを銃の形に変形させて連射し、オリジオンを牽制する。

「おいお前から逃げろ！」

「その必要は無いわ！大体貴方は信用できないし、ここまで馬鹿にされて黙っていられるとでも!?？」

アクロスの言葉は見事に否定された。そもそもアクロスはリアス達が悪魔である事を知らないで、彼からしたらリアスは無謀にも危険な怪人に立ち向かおうとする一般人なのだ。そりやあ止めるだろう。

しかし、散々敵にコケにされたリアスは聞き入れなかった。というか、リアス達からしたらアクロスもまた敵に等しい。普通に考えて瞬の言葉は容易には届かない。

「リアスっ……貴女が飛び込んだら駄目よ！小猫、優斗、リアスをとめて！」

朱乃の声が届くよりも早く、リアスがオリジオンに向かって滅びの魔力を放った。
が、

「はっ!」

オリジオンの拳が軽く触れただけで、リアスの滅びの魔力はいとも容易く打ち消され、霧散した。

「やっぱり効かない……!」

「無駄な足掻きをまだするか。大人しく散れい!」

オリジオンはリアスの頭を鷲掴みにすると、そのまま地面に叩き落とす。

「おいつ!?!」

「甘い!」

《boost》

「がっ」

くぐもつた音声が聞こえてきたかと思えば、次の瞬間、硬い鱗に覆われたオリジオンの豪腕が、アクロスの胸めがけて凄まじい速度で叩き込まれた。体がくの字に折れ曲がり、倉庫の壁に向かって吹き飛ばされるアクロス。痛みを堪えながら上体を起こすが、先程悪魔との戦闘でのダメージが残っている為か、すぐには反撃に移れない。

「部長を助けに行くよ! 姫島先輩、兵藤くんをお願いします!」

「行きますよ裕斗先輩」

「小猫ちゃん!?」

主人の安全を確保する為、木場と小猫が前に出る。が、オリジオンに近づいた次の瞬間、二人は身体がくの字に曲がった状態で地面に叩きつけられていた。尻尾で薙ぎ払われたらしい。

オリジオンが振り向く。吹き飛ばされた各々が身体を起こす様子を、つまらなさそうに見下す。

「死に急ぐか雑魚共め。そんなに死にたいなら、少しばかり貴様らの戯言に付き合つてやろう」

「なんなんだよこれ……」

一誠の口から、思わずそんな言葉が漏れた。

それは、戦いと呼ぶのも烏滸がましい現実あそびであった。いや、そもそも相手からすれば遊びですらないのかもしれない。目の前の赤龍帝は、赤子の手を捻るかのように木場達の攻撃を退け、恐ろしい威力のパンチで容赦なく返り討ちにしていた。

何度目になるか分からないくらいの返り討ちの後、端正な顔のあちこちに傷を作った木場が立ち上がって隣の小猫に言う。

「あくまで僕らの目標は部長の救出。アイツには勝とうとしなくてもいい」

「分かってます。優斗先輩、ここは頼みます」

「ああ、そのつもりだよ」

そう言うと、木場は勢いよく地面を蹴ってオリジオンに向かって飛び出した。

「死ににきたか、低脳が！」

木場はオリジオンの攻撃を受けて吹き飛びながらも地面に上手く着地し、倒れているリアスに辿り着き、彼女を自分の方に引き寄せる。すると、オリジオンは木場に対して尻尾を強く振り回してきた。

「はあああああつ！」

「その攻撃は当たらない！」

攻撃が発動すると同時に、木場はリアスを担いだまま後方にジャンプし、尻尾を躲す。

そのまま木場は一誠達のいるところに合流すると、

「部長は無事回収した。悔しいけど、ここは撤退しよう」

「同感です。姫島先輩と兵藤先輩が既に部長を連れて離脱をはじめています。私達も早く行きましょう」

「でも、彼はどうするんだい？」

木場はアクロスとして戦っている瞬をちらりと見る。随分と苦戦しているようだが、

助けに行くべきであろうかと悩んでいると、

「どの道今は私達の事だけでも手一杯です。残念ですが、ここは撤退を」

「……殴られ損、みたいだね。兵藤くん、帰るよ」

「俺、魔方阵で転移出来ないんだけど？」

「そうだったね。ならこの手で」

木場はそう言うとは何処からか小振りの片手剣を取り出してそれを振るった。すると、木場の前を突風が吹きつけ、一誠達の姿を隠していく。

「っ……」

「逃げたか……」

風が止んだ後には、一誠達の姿は無かった。この場に残されたのはアクロスとオリジオンのみになったが、オリジオンは一誠達が居なくなつたのを確認すると、突然構えていた拳を下ろした。

「何のマネだ」

「元より俺には貴様の相手をする必要がない。今度邪魔をすれば、殺す」

「おい待て！」

アクロスの呼びかけにも反応することなく、オリジオンは踵を返すと直ちに翼を広げ、何処かへと飛び去ってしまった。

全てが去った後、ただ一人残された瞬はベルトを外して変身を解き、その場に膝から崩れ落ちた。

「おーいー！」

背後から聞き覚えのある声がした。振り返ると、逃した筈のアラタがこちらに走ってきていた。

「お前逃げたんじゃ……」

「逃げたけどよ、やっぱり不安で……お前もうまく逃げられたんだな。よかつたあ……」
アラタは瞬の肩に手を置いて、安堵の表情を浮かべる。同時に、緊張の糸がぷつんと切れたかのように、瞬の身体から一気に力が抜けて、地面に膝をついた。

「お、おい。大丈夫か」

「……うん」

瞬は力なく頷く。

こうして、ひとまず危機は退けられた。

街のどこかにある廃教会。墮天使レイナーレは、何者にもその場所を悟られる事がない様に注意を払いながら空から降り立った。それに気づいたスーツ姿の男が、彼女に

視線を向ける。

「帰ってきたか」

「ええ。ちゃんと見張り留守番をしたのよね？ドーナシック、ミッテルト」

「無論。あの聖女も現在カラワーナが探している」

「ドーナシックは全部ウチに押し付けてただけじゃないっすか」

ドーナシックと呼ばれた男が返答する一方、ミッテルトと呼ばれた少女が彼に文句を言う。二人もレイナーレと同じく墮天使であり、今この場に居ないカラワーナを含め、彼女の元である任務を遂行している。

「災難だったな。まさかあそこで赤龍帝が来るとは」

「赤龍帝……アイツのせいで私達の計画は台無しよ……い」

レイナーレはペットボトルに入っている水を飲み干すなり、苛立ちをぶつけるかのよう
に壁に拳を叩きつける。一誠に近づいたのも、彼女達の計画の一環。

「……さつき街の外れで赤龍帝を見かけたわ。グレモリーの悪魔連中を一方的に甚振つてた」

「今代の赤龍帝は随分と凶暴……いや、無謀なのだ。そんな事をすれば、早々に様々な勢力に目をつけられるだろうに」

彼の言うとおり、神器所有者が一度目をつけられてしまえば、普通の人間として生き

ることは不可能だろう。ましてや、悪魔側のトップである四大魔王の身内に危害を加えたのだ。他の勢力が手を出さずとも、悪魔側から報復を受けるのは容易に想像できる。

「思ったんすけど、レイナー様はなんであの人間を誑かしたんですか？サキュバスにでも転職するつもりで？」

「馬鹿。あれは遊びよ。ちよつと擲揄からかいたくన్నただけ。

思い切り言っちゃいけないような発言をかましたミッテルトを軽く小突くレイナーレ。ここで、何にもしてなかったドーナシークがミッテルトに便乗してくる。

「こいつの言う事も一理ある。デートなんかせずとも、アイツを拐えば済んだ話だろう。そうすれば邪魔も入らずに済んだのだからな」

「……遊び心が裏目に出たっすね。おまけにアイツ、転生悪魔になってグレモリーの眷属になっちまいましたっけ、そこんどこはどうお考えで？」

「あーはいはい悪かったわよ。全部私の不手際ですよ」

二人に責められて若干開き直ったように非を認めるレイナーレ。

「あまり遊ぶな。折角アザゼル様から直々に指令を頂けたのだぞ？一番寵愛を欲している筈のお前がそんなんでどうする」

「……そうね。アザゼル様の計画に失敗は許されない。これは、この世界の存亡を賭けた一大プロジェクトなんだから」

オカルト研究部の面々が、部室に戻ってからの話。

「あの……部長」

「何？」

「彼奴の言っていた赤龍帝つてのは、一体なんのことなんですか？名前からして強そうですけど」

率直な疑問だった。悪魔になったばかりの一誠は、まだ悪魔社会のしくみや歴史については疎い。しかし、あの怪物が名乗りを上げた際の部員達の驚愕の表情は、明らかに只ならぬものであった。

リアスは、赤龍帝にやられた傷の痛みに一瞬顔を歪めた後に、ゆっくりと話しはじめた。

「そうね……イツセー、前に冥界でかつて戦争があったのは話したわよね？」

リアスの言葉に頷く一誠。

話によると、過去に悪魔・堕天使・天使の三大勢力が派手に戦争していたのだが、各々疲弊し切った為に休戦したという。大戦によって大きく数を減らした悪魔側は、それを補う為に悪魔イヴルヒースの駒による転生システムを構築し、多種族を悪魔に変えることで勢力を盛り返そうとしていた。一誠もこれによって悪魔として蘇ったのだ。

まあ、一誠はまだ天使や墮天使を見てはいない為にイマイチピンと来てないのだが。

「じゃあ、どうやって戦争が終わったかについては分かる？」

「そりゃあ、それぞれ疲弊したからだって前に聞きましたよ」

「疲弊の原因になったのは……ドラゴンよ」

その言葉に、思わず一誠は素っ頓狂な声を上げた。悪魔・天使・墮天使ときて次はドラゴンときた。流石に一誠も「色々混ざりすぎじゃね？」と思わずにはいらなかった。「ドラゴンって……あのドラゴン？」

「大体イメージ通りよ。戦争の最中、突如として現れた赤と白、2匹の龍。其奴らが好き放題暴れまわったせいで巻き込まれた各陣営は多大な被害を被った。それで皆で協力し、龍の魂をそれぞれ神器として封じた——それが顛末。以後、その神器の所有者は代々赤龍帝・白龍帝と呼ばれ、恐れられて来たの」

「じゃあ、あれが今代の赤龍帝……」

あの邪悪な怪物がそんなにヤバイ奴だったなんて、と驚く一誠。あの容赦ない蹂躪に、息苦しくなるような気迫。思い返すだけで足がすくんでしまう。

「……怪我とか、大丈夫なんですか」

「大丈夫よ。今日はもう帰ってもいいわ」

心配する一誠に対し、リアスは笑って返す。一誠には、なんとなくそれが無理をして

いるように見えた。

部室を後にし、日の落ちかかった帰り道を歩く。赤から青紫に変わりゆく空を見上げながら、一誠は思い返していた。

リアス達が手も足も出なかった赤龍帝。あの場に居合わせた仮面の男。何もわからない事だらけだったが、一つだけわかった事がある。

(俺……足手まといじゃん……)

今の一誠は弱い。この身に宿る神器を未だに扱えず、戦いにはとてもではないが参加できない。実際今日も、皆がやられている所をただみているだけであった。せつかく悪魔として生き返らせて貰ったのに、何も出来ない自分が情けなくなる。

早くリアスの役に立てるようになりたい。ならなくてはならない。そう決意し、一誠は拳を握りしめた。

ちなみに。

誰も知る由もない、一誠には届かなかった声があった。

『今代の相棒は未だ目覚めぬか……まあよい、時が来ればいずれ表層に出ることも叶うだろう』

なんか色々疲れた瞬は、家に着くなりそのままリビングのソファに倒れこんだ。殴られたり蹴られたりした箇所から、じんわりと熱と痛みが発せられるような感覚。戦い慣れてない分、どうしても疲労が溜まりやすいのだ。

そんな瞬の様子を見て、居候迷子ことヒビキが心配そうに顔を覗き込んできた。

「大丈夫？なんかすごい疲れ様な顔してるよ？」

「大丈夫だヒビキ。ちょっと疲れただけだからさ……少し寝かせてくれ」

横になっているうちに、眠気が襲ってきた。瞬きのたびに視界がぼやけ、意識が微睡んでいく。

1分もしないうちに、瞬は眠りについてしまった。

「……ホントに大丈夫かなあ」

「ただいまー」

湖森が帰ってきたのは、瞬が帰宅してから1時間程経った頃だった。リビングには放送中の某携帯獣アニメに夢中にかじりついてるヒビキと、制服姿のままソファでぐー

すかしている兄の姿があった。

(珍しいな……普段昼寝なんか滅多にしないのに)

起こすのも悪いし、寝てるなら後にしようかという考えが一瞬頭をよぎったが、直ぐにそれを拭い去る。

(躊躇うな私……今回で決着^{ケッ}をつけるんだ……!)

友人が背中を押してくれたのだ。それを裏切るなんて真似はできない。自らの両頬を軽く叩き、深呼吸をする。一体何をしているんだと言わんばかりの目をヒビキが向けているが、それはそれ。本人は真面目にやってるから。

が、ここで出鼻を挫くアクシデントが。

「つたく、さつきから人の近くで何息を荒くしてるんだ」

「……あ」

ご本人が起きてしまった。

さあ、どうしようか。

結果、半ば強引に二人きりになった。全てを知る者が見たら、一体今までのウジウジは何だったのだと突っ込まずにはいられないレベルの強引さだが、思春期真っ只中のオナノコはだいたいこんな感じに複雑でしつちやかめつちやかなのだ。

現在、瞬の部屋にて二人は正対していた。

「話がある、か。丁度俺もそうだった」

「こども長く避けられてるといい加減に辛くなってくる、というのもある。家族なら尚更のことだ。」

湖森は、少し言いにくそうな顔をし、心なしか瞬から目をそらしながら話し始めた。

「お兄ちゃんの、力のことなんだけどね」

「ん……ああ、やっぱりか」

瞬はほんの一瞬だけ、部屋の隅に置かれた、アクロスのベルトが入った通学鞆に視線をやる。自分でもイマイチ分からないヤベーブツ。それが他人から見たらどう映っているのか、想像にはかたくなかった。

「あの時、怪物から私達を守ろうとしたお兄ちゃんの姿は、格好良かったし、頼もしかった」

「……」

「けど、怖かったんだ。あんな強そうな力を奮って戦うお兄ちゃんが。まるで、私の知ってるお兄ちゃんが居なくなりそうで。それで、接しにくくなっちゃって」

「そうか……」

湖森の本音を聞いて、瞬はどこか分かりきっていたような感じにつぶやく。

ある意味、唯の予想は当たっていた訳だ。未知の力を持ち、それを振るう。それを目撃した際にまず感じるものは、それに対する恐怖。人は、自分の常識から逸脱したモノを畏怖する。彼女の場合は、その対象が大切な家族だからこそ、余計に怖くなった。

他人がそれを責める権利はない。そうだったんだな、と瞬は呟いた後、湖森の瞳を真つ直ぐ見つめて、

「大丈夫だって。力が手に入ったって俺は俺だ。お前の知ってるお兄ちゃんだって」

「……ホント?」

「本当だって。弱っちくて、お人好しで、中途半端なお前のお兄ちゃんだぜ? 人の中身ってそう簡単に変わらないと思うんだけどな」

「自分で言うのそれ」

「ちよ……そりゃあないぜ」

呆れたように笑みをこぼす湖森。瞬も言い切ってから少し恥ずかしくなったのか、照れ隠しをするかのように笑う。

ふう、とひとしきり笑いきった湖森が一呼吸置いて、瞬にこんな質問を投げかけた。

「お兄ちゃんは、またあの時のように戦うの?」

瞬は、少し考えてから答える。

「ああ」

「……どうして」

「守るため。今は、まだそれだけ。世界を救うにはまだ程遠いんだけど、周りの人なら今の俺でもいけそうな気がする。それに、どの道もう逃げられ無いような気もする」

これまでで何度か戦ってきたが、勝った回数よりも負けた回数の方が多い。それでも、傷付きながらも守れたものも実際にあるのだ。

不安で顔を暗くする湖森に、瞬は

「そんな顔するなよ。死ぬような無茶はしないから、心配すんなって」

「……約束だからね。後で唯さんや他の皆にも約束して」

「わかってる」

瞬がそう答えると、湖森は小指を立てた左手を差しだした。何がしたいのか察した瞬は、笑みを浮かべて同じように小指を立てて左手を差しだし、湖森のそれに絡めた。

「ゆるびきりげーんまーん、嘘ついたら針千本突うずる突っ込む！指切った！」

なんとなく下品な指切りに思えたのだが、アクロスに変身して以来こんな感じの齟齬はしよつちゆうあつたので、別に気にしないことにした。

話の前よりも軽い足取りで部屋を出ていった湖森。

「……思ってた以上にいらぬ心配かけさせてたんだな、俺」

大事な妹に余計な心配かけるなんて兄失格じゃないか、と自嘲し、瞬はベッドに寝転

がる。これで一つ、問題は解決した。しかし、まだ残っている。

(あの馬鹿みたいにパワーが強いオリジオン……そして、悪魔とか言つてた連中……)

どうやらオリジオンは悪魔という存在を激しく嫌悪しているらしく、去り際の発言からして、邪魔さえしなければ瞬の事はあまり気に留めてない様子だった。

両者の間にどんな因縁があるのかは想像も付かないのだが、見過ごすには少々危険過ぎる気がする。それに、だ。

「一誠……アイツも関わってるのか？」

たまたまあの場に居合わせただけなのかもしれないが、見知った人物がこの一件に関わっているかもしれない。

瞬からしたらほんの一週間弱の付き合いしかないが、それでも関わりのあるクラスメイトが危険な目にあっているのを見過ごすのはできない。

何もわからないが、邪魔するなど言われて邪魔しない程出来た人間じゃない。兎に角今はオリジオンを止めながら、事情を知る。そう決意しながら、瞬はアクロスのベルトを見つめるのだった。

淡い月明かりで照らされる、とうの昔に潰れた廃病院の裏手。ドライグオリジオンは眼前の悪魔の死体をつまらなさそうに見ていた。

その死体は、顔面に突き刺さった鉄パイプで木の幹に括り付けられ、腰から下は粉々に砕けて影も形もなくなっている。彼が先程やったものだ。辺りを見ると、草木に紛れて他の悪魔の物とおぼしき手足が散らばっている。

「……肅清完了」

彼にとつて、悪魔は滅ぼすべき存在。だが、彼は教会の悪魔祓いエックスシストでも、ましてや天使や墮天使の仲間でもない。

ただ、気に食わないから。前世で原作を読んで、自分が気に食わないと感じたから。その為に、偶然得た転生の権利も使って此処にいる。

(しかし実際に見てみると、やっぱり気持ち悪い。こんな奴が生きてると思うだけで気持ち悪くなる)

オリジオンは変身を解き、学校でチラリと見た一誠達の姿を思い浮かべる。自分の知っているものとは異なり、幾ばくか一誠の変態行為は控えめになってはいるが、それでも気に食わない事には変わらない。良くも悪くも、第一印象はなかなか覆らないものだ。

頭の中で憎き悪魔達を蹴り殺しにしながら、ふつつつと憎悪の炎を燃やしていく。そこへ、

「進捗はどうですか？」

黒いローブを身に纏った長身の男が、少年に近付いてくる。月明かりの下、二人が邂逅する。

「貴様は……リバイブ・フォース！」

志を同じとする他の転生者から、話は聞いている。ギフトメイカー直属で、この世界に存在する転生者達を取り纏める転生者達。下手に逆らえば特典を剥奪されて殺される。

「そうですとも。すでに存じ上げているでしょうが、改めて自己紹介を。私はリバイブ・フォースの一人、タロットです」

タロットと名乗った男は、少年に一礼すると、懐から手帳をとりだす。

実を言うと、転生者達は完全に好き勝手できるわけではない。緩やかながらも特典創者を頂点とした上下関係が存在し、特典創者の目的を妨害しない範囲での自由が与えられている。そね転生者の管理を行なっているのが、リバイブ・フォースなのだ。

「あまり遊んでいる余裕はない。悪魔ばかりにかまけず、天使や墮天使どもも始末して欲しいものだね」

「特典創者直属だからと偉そうに。どの道三大勢力の屑どもは根絶やしにする。急かすな」

口ではそう言うが、一人では中々上手くはいかない。この間、一誠を殺した時も、レ

イナレーや仮面ライダーに邪魔されたせいで、彼を転生悪魔にするタイムリングを作らせてしまった上、先日の襲撃も、仮面ライダーに邪魔されて完遂には至らなかつた。

さすがに二度も邪魔されれば無視はできない。次は奴を先に始末すべきかと考えている少年を、タロットは冷たい目で見つめながら言葉が続ける。

「……彼らがあなたを転生させた理由は把握済みです。人外に虐げられ続けるしかない無力な人間、その救済の為にあなたは三大勢力を滅ぼすつもりなのです」

タロットの言葉に、少年は憎しみのこもった声で答える。

「当然だ。あんな傲慢な人外共が人間を喰い物にする世界があつていい筈がない！ここは人間の世界だ！」

前世からの強い思いを吐き出す。ようやく、直接憎悪を本人にぶつけられるようになったのだ。躊躇う必要など存在しない。

「その調子、その調子。モチベーションは最高みたいですね……では、私からささやかながら餞別せんべつでも渡しませうか」

タロットは静かに笑う。

ここから、事態は急変する。

第12話

悪魔滅殺／狙うはただ一人

あの日から数日が経った。

一誠は悪魔としての家業に加えて、力をつける為の特訓も行うことになった。つい10日ほど前までは普通の高校生だったのだから、悪魔としてはあらゆる面で素人。戦闘での無力さを痛感し、どうしたらいいのかとリアス達に尋ねてみたところ、とりあえず基礎体力をつける為のジョギングから始めることになったのだ。

「ふう……ちよいと休憩……」

慣れない運動に疲れ、一旦休憩を入れる。今日は休みな為、暇な日中に自主練をいれているのだ。本来なら夜の方が悪魔の力は増す

為、日中にトレーニングをするのは効率的にはどうかと思うが、何もしないではどうしても駄目だった。

「はあ……出世街道は長いなあ……」

自販機で買ったサイダーを一気に飲み干すと、溜息をつく。

セイクリッド・ギア

「神器も発動出来ないし、これじゃあただの荷物じゃんか……」

セイクリッド・ギア

神器。人間だけが有する神々からの贈り物。其々が人間社会では常軌を逸脱した

能力を持ち、悪魔や墮天使、天使などの各勢力が喉から手が出るほど欲しがらるモノだ。だいたいこの所有者は、神器の存在に気付くことなく一生を終えるのだが、神器持ち欲しさに無理やり所有者を悪魔に転生させたり、所有者を殺して神器を抜き取ったりと、神器を持つという事はどちらかというババを引かされたような感覚に等しい。

リアスの話によると、一誠が殺されかけたのは、彼に宿る神器を狙っていたのではないかとの事。ホントろくでもない。

「感情がエネルギーつてもよ……性欲じゃ駄目なのか？」

感情の力で強くなる神器。しかし、一誠に宿っている筈のそれは未だウンともすんとも言わない。つい昨日も松田や元浜と共に新たなエロ本で興奮したのだが、それも駄目であった。現実是非情である。

しかし、だ。そんな一誠にも最近、ある楽しみが出来たのだ。

「あ、イツセーさん」

「その声は……」

ヘトヘトになった一誠に掛かる可愛らしい声。一誠が顔を上げると、そこには黒い修道服を着た金髪のシスターさんがいた。

「また会ったな、アーシアちゃん」

「はい！会えて嬉しいです！」

アーシアと呼ばれたシスターは、見るからに嬉しそうな声を上げる。一誠の悪評を知る者が見たら、ソツコーで引き離されそうなもののだが、純粹を通り越して天然っぽい彼女はそこところは全然気にしていない様子だった。知らないだけかもしれないが。

「元気にしてた？」

「はい！」

彼女と一誠が出会ったのは、丁度1週間前。街にある教会に行こうとして迷子になっていたところを、一誠に助けられたのだ。教会でも聖女と呼ばれていただけあって、凄まじいくらいの純粹っぷりだ。

アーシアはその勿体無いくらい純粹な眼差しを一誠に向けて、

「イツセーさんは何を？」

「トレーニング……的な？色々あって。ところで、アーシアちゃんはどうしたんだ？」

「ちよつと暇を頂いたので、この辺りを散策を……と思っただけですけど、この辺りには土地勘がなくて」

アーシアの返答を受けて、一誠はどうしたものかと少し考える。少したって、何かを思いついたかのように膝を叩いて立ち上がり、

「そうだ、今日は俺が街を案内してやるよ。色々あって楽しいぜ？」

「本当ですか!?!? でも、私お金とか持ってないんですけど……」

「気にするなつて、それくらい俺が奢る!」

「イツセーさんには初めて会った時からお世話になりっぱなしで……なんか色々申し訳ないですよ」

「気にするな、アーシアちゃんの為ならこれくらいして当然さ!」

一誠は笑顔でそう言うと、戸惑うアーシアの手を取る。一誠自身、ここ最近は何レニングやら悪魔稼業やらであまり遊べていなかったの、自らの気分転換を兼ねて今日はアーシアと街に出て遊びたいと思ったのだ。

「じゃあ、行こうか」

「は、はい!」

こうして、二人の休日開幕を開けた。

『逢瀬一、今からどっか遊びに行かぬ? 諸星も既に来てるからよ』

土曜日の朝。朝食も洗濯も済ませ、録画した深夜アニメも見終わって一息つき終わった直後、アラタから上記のL●NEメッセージが送られてきた。断る理由は特になのだが、ここ最近の出来事もあってあまり乗り気にはなれない。

「……ちよつと呑気過ぎる気がする」

というか、世界を救えとけ言われてる奴が普通に学生生活送ってて問題ないのか、フィフティは半月以上もの間干渉してこないし、オリジオンは明らかに一誠達を殺す気だったし、これらをほっぽり出して遊ぶのはなんか納得いかない。

どうしたもんかと悩んでいると、見かねた還士郎がこんなことを言ってきた。

「お友達との約束かい？ それなら行くべきじゃないかな。よくわからないけれど、なんか最近瞬くん、色々疲れたような顔してばっかだからさ、気分転換とかにいいんじゃない？」

「そんな顔してるかな……」

「自分では気づかないものだよ。心の疲労は放置しちゃ駄目だからね」

「そうそう、張り詰めっぱなしで平気な人ってごく一部だし、キミは元々一般人でしょ？ だから尚更リラックスは必要だよ。ゲームを続けると目が疲れるし肩凝るからね。それと似たようなもんだって」

そこで、ずっとゲームに没頭していた　ネプテューヌが会話に入ってきた。彼女

は、テレビ画面に映ったゲームオーバー画面を見つめながら伸びをすると、一言。

「キミは戦士じゃない。無理に戦いのことばかり考えなくてもいいでしょ、疲れるだけだしさ」

「……余計な事考えすぎてんのかな」

「まだ肩の力の抜き具合がイマイチ分かってないんじゃないかな。生きる上では割と重要なんだよ」

「そうか……」

不意に、瞬は窓の外を見る。いい天気だ、こんな日くらいは外に出て暗い気持ちを吹き飛ばしたほうがいいのだろう。仮面ライダーにもリフレッシュも必要だ。還志郎やネプテューヌのアドバイスを受け入れ、瞬は外に出ることにした。

家を出て十分くらい経った頃。アラタ、唯、大鳳、山風といった、この2週間弱ですっかり見慣れた顔ぶれが前方に見えてきた。

「やつと来たか。遅いからお前ん家に迎えに行こうとしてたんだ」

「ごめんな、色々あつて」

どうやら無駄にうだうだしていたら、家の近くまで来てたようだ。というか、他のメンバーの行動が無駄に早い。

「他人を待たせるのと嘘付きは信用を失うきつかけになるぞ」

「すまねえ。てか、なんでいきなり呼んだんだ？」

「いや、GW前に遠足あるだろ。その為の私服でも買いに行かないかって」

瞬達の通う学校には、毎年GW前にクラス内の交流を深める名目で遠足がある。と

いっても、さすがに小学校のようなものではなく、行き先は近場から多数決、結果によっては郊外でバーベキューもできるのだ。ちなみに瞬のクラスをはじめとする数クラスは山の中でバーベキューをすることになっている。

この遠足は基本的に私服でいくので、クラスの皆はこぞつてこの時期に服を買いに行くのだ。

「服か……俺は別にこれでもいいんだけどなあ」

「ちつち、分かってないな。皆で行くからこそいいんじゃないか。青春だろ？」

「分かる分かる！」

なんか妙に乗り気なアラタと唯の様子に、瞬は呆れて苦笑する。隣を見ると、大鳳も同じく苦笑していた。

「大鳳も大変そうだな」

「悪くはないんだけどね」

「じゃあ早いとこいこうか。この調子だと時間があつという間に過ぎそうだしさ」

そこへ、

「久方ぶりだね、二人とも」

唐突に会話に割り込む、聞き覚えのある声。

「うわでた」

「帰れ」

にゅつとアラタ達の後ろから出てきたのは怪しいお兄さんことファイフティであつた。タイムラグはあつたが、噂をすると出てくるとは良く言つたものだ。

「この人お前の知り合いなんだろう？お前に用があるつぼくて、ここまで案内してきたんだ」

「いや知らない人です」

「冷たいな君は。いやまあ、長いこと顔出せなくて申し訳ないとは思っているよ。今度は厄介なものに首突つ込んだようだね」

ずつと瞬のこことを見てたかのような物言いのファイフティだが、心なしか怒っているよ
うな気がする。

「それはそうと、足を踏むのはいかななものかと」

言われるまで気づかなかつたが、よく見るとファイフティの足が誰かに力強く踏まれている。誰なんだこんなしよーもない事やってるのは、と思ひながら、そのまま一同の視線は足から上へ上へと移動していく。

「ほー、随分と生意気な事を言うねえ？」

踏んでいたのは唯の足だつた。ファイフティは唯の足を退かそうと自らの足を動かすが、唯は退いてはくれないどころか、一層強く足を踏みつける。

「いやいや、瞬を無理矢理巻き込んでそれは虫が悪くないかな？これくらいはやり返されてもおかしくないでしょ？」

「ローブ引つ張らないでくれたまえ、伸びるから」

「お前は俺の保護者か何かか！てかなんで唯が一番怒ってるんだよ！」

「やめたまえ！やめっ……やめてください何でもしますから！」

どうやらこの男、他人を弄るのは好きだが、弄られるのには滅法弱いらしい。今迄とは違い、かなりテンパった様子のファイフティを見て軽く吹き出す瞬。ファイフティが助けを求めるかのような目をしていたのは気のせいだろう。きつとそうだ。

と、

「あのさー、行くならさっさと行こうよ。いつまで私達の目の前で油を売るつもりなの？」

「コイツを連れて？せめて置いてかない？」

「連れないね君達は。君に力を与えたのは誰だったかな？もつと感謝してくれたまえ」

「したくねえ……」

したくないというより、する要素が無い。というか客観的に見て、見ず知らずの少年を危険な戦いにぶち込みながらこの態度は流石に虫が良すぎるだろう。明らかに唯が苛ついてるから早く帰れよ、と瞬が悪態をついていると、

「ちよつと話でもしようか、逢瀬君？」

そう言つて、ファイフティは瞬の首根つこを掴んで自分の方に引き寄せ、掴んでいた手を肩にまわし、ヒソヒソと話し始めた。

「すこーしばかり耳をかつぽじつて聞いてくれ」

「なんだなんだ、今時チンピラでもそんな因縁の付け方しねーぞ」

「馬鹿な事を言うな。君は少々迂闊に正体を明かしすぎではないのかね」

「何言つてんだお前は」

随分と大袈裟だな、と馬鹿にしたように笑う瞬。知られてるといつても、片手で数えられるくらいだし、一体なんの問題があるんだ、と言おうとするが、

「たった数人でも、だ。敵が何処にいるか分かってない以上、君がアクロスであるという事がこれ以上知られるのはよくない。これは君の周りにいる人も守ることになるんだ」

「守る……」

続けてファイフティが何か言おうとするが、ここで唯が何かに気づいた模様。

「ん、んんん？　なんか前方に見覚えのある顔がおりますなー」

言い方が若干気持ち悪い気がしたが、それはスルーして

一誠だった。休日に限って知り合いに出会すと気まずさを感じてしまう。隣には修道福をまとつた金髪のシスターさんがいるようだが、一体どうしたのだろうか。瞬は声

をかけようとするが、大鳳が瞬の服の裾を引っ張ってそれを阻む。

「瞬、邪魔しちゃだめだつて。きつとデート中よアレ」

「そうそう、水を差すのは人としてどうかと思うよ?」

「おまファイフティが言うな」

女性陣（とファイフティ）からとめられ、瞬はそのまま固まる。確かに皆の言うとおり、知人のデート（らしきもの）を妨害するのは人としてどうかと思う。しかし、ここに空気の読めない人間が一人いることは、瞬達にとって予想外であった。

「よう、イツセーじゃねーか。こんなところで何してんだ?」

「ちよ、アラタ!? 邪魔したらダメだつて!」

アラタは愚かにも、いい雰囲気の二人の間に割り込みやがったのだ! 当然女子達からは非難の嵐なのだが、本人はわかっていない模様。一誠のほうもアラタに気づいて声をかけてくる。

「あ、アラタ? 奇遇だな、こんなところで会うなんて」

「いやあ、ほんとほんと。お前も随分といい雰囲気じゃあないか!」

いやそのいい雰囲気ぶち壊したのはお前だから! と周りから総ツツコミをくらうアラタだが、おバカな本人は気づかない。そこでアラタが、一誠の隣にいるシスターらしき少女に意識が向く。

「で、そのシスターさんは何？新しい彼女？前言ってた美人の彼女はフラれたの？」

「別にそこまではいってないって。アーシアちゃんは最近この街に来たばっかしだから、今から色々案内して回ろうと思ってる……」

すると、紹介されたシスターが瞬たちの前に出てきて、何かを言い始めた。

「Nice to meet you, my name is Asia. Thank you. 《初めまして、私はアーシアといいます。よろしくお願ひします》」

「は、はい、どうも」

「……ごめん何言ってるかわからない」

「あ、そうか」

一誠は失念していたのだが、悪魔の駒には某翻訳○ンニヤクみたいな機能があるらしく、そのおかげで外国語が得意でない一誠がアーシアと普通に会話できるのだ。だが彼以外は普通の人間、拙い英語くらいしか外国語は話せない一般的な高校生。彼らにとって、言語の壁はデカかった。事実、英語の苦手なアラタはてんで会話が成り立っていないかった。

仕方ないので、ここからは一誠の通訳を介してコミュニケーションをとることにした。

「よろしくお願ひします！」

「よろしくつてさ」

「そうか、こちらこそよろしくつ」

一誠の通訳を介し、唯とアーシアは笑顔で握手を交わす。おそらくこれで、言語の壁問題はなんとかなったようだ。と、ここでアラタが一誠の肩に手を回し、少し僻みを込めた声で耳打ちをする。

「お前最近モテモテじゃねーかよー？ グレモリー先輩やこのシスターちゃんだったりよ」

「念願の春到来つてやつだよ。お前も早く彼女の一人くらい作れよ。山風ちゃんとか大鳳とかいるんだから」

一誠がアラタを軽く冷やかすと、アラタは耳打ちをしている事も忘れ、思いつき取り乱したかのように、

「ちちちちがわいちがわい！ アイツらとはそーゆー関係じゃなくてだな？ どちらかという大家族みたいな感じ……いやどうなんだ？」

瞬とファイフティは生暖かい目でアラタを見つめている。ウブというか青春というか、とにかく微笑ましいものだ。

「一誠さん、この人は何で慌てるんでしょうか……？」

ニンマリ顔で二人のやりとりを聴いている瞬とは対照的に、色々と純粋なアーシアは

何も分かっていない模様。ちなみに耳元で大声で出された一誠は軽く目を回していた。

「いやいや！兎に角馬鹿なことを言うんじゃないから！」

無理矢理誤魔化した。全然誤魔化せてないが。

一方で女性陣。

「……さつきからあの二人は何を話してるんだろうね」

「どうせエロトークでしょ。兵藤さんのことだし」

女性陣は辛辣だった。日頃の言動には気をつけよう。

「がああああ！負けたあ！」

悔しそうに頭をかかえてのけぞるアラタ。彼の前には、レースゲームの敗者となったことが表示されている。隣ではトップ2をぶんどった瞬と唯がこれでもかと言うほど煽ってくる。

「私の勝ち！ぶいぶい！」

「なんだなんだ、情けないぞアラタあ！」

「昔からゲーム好きな割に度下手だったからねー。というか、操作方法分かってプレイしてる。」

「ちくしょう！もう一回だ、今度こそ俺が勝つ！」

レースゲームでぼろ負けしてるアラタ。瞬・唯・山風といった対戦相手の面々からフルボッコであるが、無謀にもリベンジをしようとする模様。

「なんでこうなったんだっけ……」

後ろの方でぼけーっとしている大鳳が、店内の喧騒にかき消されそうな声量で呟いた。アーシアと遊び歩きたい一誠の提案に渋々乗った結果として、大所帯でゲーセンに来ている訳なのだが、大鳳としては、他人のデートの邪魔をしているような気分になるのでイマイチ乗り気になれず、かといって自分だけ帰るのもどうなんだ、と一人葛藤してるのだが、他の奴らはあまり考えてないらしく、能天気にも遊んでやがる。自分含めて酷い奴らだ、と彼女は内心嘲笑していた。

一方、少し離れたクレーンゲームエリア。此方ではアーシアがクレーンゲームに挑戦している模様。どうやら初めてらしく、お目当ての景品を取るのに苦労している。

「アーシアちゃん！もーちよいだー！」

苦戦すること15分弱。一誠の協力もあってやっとのことで目当ての品を手に入れることができたようだ。

「イツセーさん、取れましたー！」

「よしよし、よくやったー！」

喜びのあまり、二人でハイタッチをする。アーシアは実に嬉しそうに、景品のぬいぐる

るみを抱いてはしゃいでいる。向こうでレーシングゲームに興じてる馬鹿どもとは大違いだ。

「呑気なものだ。まあ、息抜きも大事だというのは分からなくもないが……」

その傍ら、先程から瞬達を見守るかのようにゲームセンターの入り口付近に佇んでいるファイフティ。ゲームセンターの入り口にずっと佇んでるコート姿の男なぞ、側から見たら怪しさがプンプンする。

流石に気になったのか、アラタが率直な疑問をぶつける。

「何でさつきから端っこでコソコソしてやがんだ？あんたも混ざればいいのに」

「い、いや、私はいいんだ。少なくとも、そんなことをしている場合ではないからね」

「よくわかんねーな」

ファイフティの歯切れの悪い返答が理解できずに首を捻りながらも、再びゲームに戻るアラタ。

（わからなくてもいい。これは個人的なものだ。傍観者が、当事者になるべきではないから——）

あれからさんざんゲームセンターで遊んだ後、一行は街中のハンバーガーショップで休憩をとっていた。思ったより時間がたっていたらしく、既に日は若干傾き始めてい

た。

「お前ら容赦ねえ……」

結局、アラタはゲームをやった事が無かったアーシアを除いてあらゆるゲームで全敗という、酷い有様だった。それに対して本日の王者たる唯から辛辣な一言。

「いや、だって一アラタが弱すぎるんだもん……」

「だよねえ」

瞬も唯の言葉に追隨する。

「味方はいなかったの!?? 俺に味方は!??」

「いないよ……ゲームは勝者が全てなのだから」

ちくしょう!と捨て台詞を吐きながら、皆に見捨てられたアラタはコーラを一気飲みする。ああ哀れだ。

一方、一誠とアーシアはというと。

「楽しかったなー!」

「ですね!」

「ごめん、デートの邪魔をしちゃって」

「よせやい、そんな関係じゃないっての!」

山風の謝罪を軽く流す一誠。本人にとつても、アーシアとは恋人云々というよりも、

純粋な友達という側面が強かった為か、あまりそういう関係には至っていないらしい。「どうだった？」

「こんなに楽しかったの……初めてで。ほんとに、友達とこうして遊ぶのだった……あ、あの、よかつたら、私と友達になってくれますか？」

一言口に出す度に、アーシアの目から涙が溢れる。悲しみの涙ではない、喜びの涙だ。一誠はそんな様子のアーシアを見て、笑いながら手を差し伸べる。

「何言ってるんだよ、もう俺達は友達だろ？」

「友達……」

「ああ、俺だけじゃない。瞬も、アラタも、みんな友達だ」

その言葉に、瞬も唯も、フィフティを除いたその場にいる全員がうなずき、手を差し伸べる。

「……はい！」

アーシアも、嬉し涙を流しながら自らの小さな手を差し出し、この場にいた全員が手を繋ぐ。この時、全員が友達という名の絆で繋がったのだ。

しばらくたって、時計を見たアーシアが、ふと思い出したかの様に席を立つ。

「……あ、もうこんな時間ですか」

「なに？もう帰っちゃおうの？」

「はい、そろそろ帰らないと教会の人たちも心配してますから」

じゃあ、と皆が手を振ってアーシアに別れを告げる。店内から出て一人歩き始めるアーシアの後を、一誠が追いかけて、呼び止める。

「アーシアちゃん」

一誠の声にアーシアは振り返り、軽く一礼する。

「今日は色々ありがとうございます。こんな私にここまで親切にしてくれて」

「と、友達としてはこんなこと、普通のことだしな」

「でも……できれば、イツセイさんと二人で回りたいかったです」

アーシアは少し寂しそうに、そして照れくさそうに言う。一誠は彼女の方へと足を踏み出すが、

「あ、れ？」

足に力が入らない。地面から離し、踏み出そうとした足が空を踏み、一誠は尻餅をつく。一体なんなんだと一誠は思考するが、その直後、彼の膝に激痛が走った。

「く、ああああああああああああ、ああああ？？」

彼の視界に入ったのは、自身の右膝に深々と刺さったナイフ。ナイフの刺さった箇所から、一誠の足元に血溜まりを生み出す。激痛で意識が飛びそうになるが、そこに追討

ちをかけるように、横から出てきた何者かの足で腹部を踏みつけられる。

仰向けに倒された一誠は、ぎりぎりとして視界を動かし、足の主を探す。すると、すぐ近くから下衆さダダ漏れの声が聞こえてきた。

「初めまして、クソ悪魔くんヨオ」

一誠を踏みつけているのは、同じ年くらいの神父だった。その顔には余す事なく下衆さが現れている。

「テメエは……」

「オレたちはフリード。御宅さん、悪魔祓エクソシストいってご存知で？悪魔ぶつ殺す正義の味方なんだけどさ」

下衆顔の少年神父はベラベラと物騒極まりない自己紹介をする。

悪魔祓エクソシストい。教会に所属する悪魔狩り。心霊番組とかでやってる悪魔祓いとは違い、一誠の目の前にいる少年は、明らかに此方を直接切り刻む気マンマンであった。まるで人殺しが趣味ですと言わんばかりに。

「イツセーさん！大丈夫ですか!?!？」

アーシアが叫ぶが、フリードはそれを意に介さず、踏みつける強さを増す。そこに、バタバタと此方に駆け寄ってくるような足音が聞こえてきた。

「何をやってんだお前！」

駆けつけた瞬間が体当たりでフリードを一誠から引き離す。その隙に、アーシアは一誠を引き離し、刺さったナイフを引き抜き、傷口に手を押し当てる。

「イツセーさん、今治します!」

「あ、ああ……助かった……」

アーシアは自身の神セイクリッド・ギア器 聖母の微笑《トワイライト・ヒーリング》を発動させる。フリードは瞬を突き飛ばすと、心底嫌そうな顔をする。

「オレっち、悪魔に近づくと肌痒くなるんだよねー。お前みたいのが出歩いてると空気不味くなるからさあ、とつとと土に還え……いや、それだと土壤汚染になるから、原子レベルでぐちやぐちやに分解されてくんね?」

「アーシアちゃん、逃げてくれ」

フリードの異様な言動に震えながらも、一誠はアーシアを庇うように立つ。が、フリードは嫌悪感マシマシと言わんばかりの顔をして、鋭い言葉を容赦なくぶつけてくる。

「あーあーいけませんねえ! そんな悪魔の言う事なんか聞いちや駄目! そいつは言葉巧みに君を騙して犯しちゃう魂胆だから」

「悪魔……イツセーさんが?」

「あれ、知らなかったんですかあ? 其奴は悪魔、イコールオレ達の敵! 少しは他人を疑う

事を覚えてべきじゃないのオ？」

自分に優しくしてくれた一誠が、悪魔。フリードの口から告げられた事実には、純粋なアーシアは動揺し、地面に崩れ落ちる。フリードはそんなアーシアの様子など意にも介さず、汚い言葉を吐き続ける。

「この悪魔も、ドーセキミの神器目当てで近付いたに決まってるさ」

「勝手なこと言うんじゃないか！お前こそ、そうやってアーシアちゃんを騙して処刑するつもりだろ！」

「分かってないですねえ。教会締め出された同類のことなんぞ知ったことか。俺たちの最優先事項はテメエなんだよ！」

フリードはそう叫ぶと、ズボンのポケットからガラスの小瓶を取り出して蓋を開け、中の液体を一誠めがけてぶっかけた。

「あがつ！熱っ —— ！」

咄嗟に避けたものの、一誠の右腕にかかった途端、液体に濡れた箇所は焼け付くような痛みが迸った。腕を抑え、痛みで涙目になりながら、一誠は尻餅をついたアーシアの方を見る。

「アーシアちゃんは……なんともない？」

「はい……これはただの聖水ですから」

修道服を濡らしながらも、アーシアは平然とした様子で答える。

「アーシアちゃんの言う通りだぜ。勿論アツチの意味じゃなく、モノホンのだ。悪魔には効果覲面てきめんだつて主人から教わらなかつたか？」

「聖……水」

聖なる力は悪魔にとっては毒。聖水以外にも、光や教会そのもの、更には教会の信徒達の祈りを側で聴く事によつても少なからずダメージを受けてしまう。悪魔には弱点も多いのだ。

しかし、これらはいくまで悪魔の弱点。教会を追い出されたといえど、人間であるアーシアには効果がないのは当然だ。そして、聖水で負傷するという事実は、一誠が人間でない事をこれでもかというほど鮮烈に証明していた。

「じゃあ……一誠さんは本当に悪魔……」

「これで分かつたでしょ？」

「お前の相手は俺なんだろう!? なら俺をやれよ……!」

「なら、遠慮なく殺らせてもらおう」

突如として、一誠とフリードの対話に割り込む新たな声。

その直後、一誠の横腹めがけて視界の外から飛んできた赤い光弾のようなモノに、一誠の身体が吹き飛ばされ、アスファルトに叩きつけられて腕に擦り傷をつくる。フリー

ドも予想外だったようで、興が覚めたかのように不機嫌そうに光弾の発生元を睨みつける。

なんとか身体を起こすが、その時には既に彼の目の前は真紅の鱗を纏った怪人にふさがれていた。

「3度目はない……ここで死ぬ、兵藤一誠」

「お前は……この間の奴！」

そう。先日のオリジオンだった。人外を激しく憎み、蔑む転生者の成れの果てが、三度一誠に牙を剥こうとしていた。

「あいつまで来やがったのか……！」

瞬は咄嗟にベルトを持って飛び出そうとするが、それをファイフティが肩を強く引って張って静止させる。

「なんで止める……!?」

「待て、言ったそばから正体晒そうとするんじゃない。鳥頭なのか君は」

「そんな事より、一誠を助ける方が先だ！」

そんな悠長な事を言ってる場合ではない。瞬はファイフティの言葉をそう啖呵を切つてばつさり切り捨て、両者の間へ割りこもうと駆け出す。人の命が脅かされようとしているのだ。真つ当な人間なら、なりふり構わずそれを阻止しようとするものだ。

「お前の相手は俺だ！」

ファイティイの手を振り払い、クロスドライバーを腰に巻きながらアラタとオリジオンの間に割って入る瞬。

「逢瀬……?」

「変身！」

《CROSS OVER》

三度目の正直。今度こそケリをつけるため、逢瀬瞬はアクロスに変身した。

「は……ちよ、何それ……」

「私は何を見せられてるの……?」

「お前はあの時の……?!?」

「これは……神器なのですか?」

「ひゅー、なんか変なやつが来やがった」

アクロスとしての姿をさらした瞬に対し各々が各々の驚愕の表情を見せる中、ファイティイは頭を抱えながら瞬に告げる。

「……君には後で言いたいことが山ほどあるが、兎に角あのオリジオンを撃破するのが先決だ。油断はするな」

「わかってる」

短い応答の後、アクロスは目の前の襲撃者に向かって一步踏み出す。この間のような蹂躞劇を許すわけにはいかない。そう決意を固め挑むアクロスだが、この場に一人、事態が読み込めていない人物がいた。

「なん……だ？」

自分は一体何を見ている？ 今見ている景色は現実なのか？ 疑問だけが次々と脳裏に浮かんで、消えてくれない。

目の前でなんだかよくわからないものに変身した友人を、ただ呆然と眺めていたアラタ達。既にアクロスについては知っている唯やファイフティは険しい顔つきになり、オリジオンは力強くコンクリート製の壁に拳を叩きつけており、明らかに苛立っている様子だ。

「また会ったな、仮面ライダー。邪魔をするな」

「お前が何をしようとしているのかは知らないけど、友達が襲われるのを黙って見てる事はできない」

「友は選んだ方が良い。其奴に身体を張ってでも守る価値があるとも？」

「少なくとも俺にはある！」

たとえ赤の他人だろうと、身勝手な理由で殺されていいなんて事はない。守る価値

云々で人の命が図られて良い筈がないのだ。そう強く思い叫ぶ。

オリジオンはアクロスのその態度が癪に障ったらしく、ありったけの怒りと憎しみを込め、周りにはつきりと聞こえるくらい大きな舌打ちをする。

「そうか……今ので貴様を殺すことにした」

ドライブグオリジオンは近くにあった標識に手をかけると、軽く手首をひねるだけで標識のポールを引きちぎってしまった。

「ふんっ！」

「っ！」

そのまま槍投げの様に、瞬めがけて標識を投げつけてくる。アクロスは間一髪、身体を横に捻って躲すが、標識は背後のブロック塀にぶちあたり、塀もろとも粉々に砕け散る。足元に落ちた標識の破片を見て、アラタは思わず身を震わせる。

「皆は逃げてくれ！」

「はあ!? お前はどうすんだよ!？」

「逃がすと思ってるのかよオ! 悪魔は抹殺だあああああああ!」

「ああくそっ!」

アクロスは悪態をつきながら、意気揚々と一誠を殺しにかかろうとするフリードを体当たりで抑え込む。当然フリードからすれば邪魔以外の何物でもないので、アクロスに

向かって何度もナイフを振り下ろすが、アクロスの強固な装甲が装甲がそれを阻み、傷一つつかない。お互いに取り組み合いになったまま、アクロスは後方の唯達にむかって叫ぶ。

「今のうちに逃げろ！」

「ちよつと瞬!?! 本当に大丈夫なの!?!」

「大丈夫だ、だから今のうちに！」

瞬はフリードをオリジオンの方に向かって突き飛ばし、唯達を庇う様にオリジオンの前に立ちふさがる。オリジオンは鬱陶しそうにフリードを突き飛ばし、目の前の邪魔ものを排除しようと走り出した。

「とつとと失せろ！俺様の邪魔をするんじゃないやあねえぞこのカスがあ！」

アクロスは助走をつけてオリジオンの胸を殴りつけるが、あまり効いていないらしく、パンチを受け止められ、さらに首を掴んで持ち上げられてしまう。メキメキと音を立てる瞬の首。このままではへし折られてしまう。苦しさに悶えながらも、アクロスは右腰にぶら下げていた可変式剣・ツインズカリバーを手に取り、鱗の薄いオリジオンの横っ腹をぶつた斬る。

「げはあっ！」

首を絞める手が緩み、アクロスはせき込みながらその場に倒れる。オリジオンは斬ら

れたわき腹を手で抑えながら、硬い鱗で覆われた尻尾を強く振り回してきた。瞬は地面を転がってそれを避けると、立ち上がってツインズカリバーを構えてオリジオンに突進していき、オリジオンの後方にある橋のほうまで押していく。

「せはあー！」

オリジオンはツインズカリバーを爪ではじき、そのままから空きになったアクロスの胴体めがけて爪を振り下ろすが、すかさず瞬はツインズカリバーを身体の正面に戻して防ぐ。2撃目をはじき、3撃目となる爪が瞬に迫るが、その前に瞬の蹴りがオリジオンの胴体に届き、両者の距離が開く。

攻防は一進一退。流石に3戦目となれば、それなりにお互いの手の内も力量も見えてくる。一方の攻撃が通ったかと思いきや、もう一方がすかさず食らいつく。数十秒の攻防の末、爪と剣による罅迫り合いに突入する。さっさと瞬を片付けたいオリジオンは、アクロスの後方にちらりと見えた、小さな影——アラタに狙いを定めた。

「ふんー！」

「ぐはっ！」

アクロスに頭突きを食らわせ、ひるんだその隙に空いたほうの掌から赤い火球を、瞬の後方の逃げるアラタに向かって飛ばす。

「があっ！」

瞬が気づいた時にはもう遅かった。アラタの足元にぶち当たった火球は小さな爆発を起こし、アラタを地面ごと吹き飛ばした。地面に倒れたアラタを見て、思わず瞬は叫ぶ。

「アラタあー！」

「隙ありイ」

その隙をついて、フリードがどこから取り出した光の刃を持つ剣でアクロスを激しく斬りつけた。火花が飛び散り、アクロスの体勢が崩れるのを、オリジオンは見逃さなかった。

「とどめだ……！」

「がっ……」

「瞬——」

一瞬の隙をついた、痛恨の一撃。ガラ空きの胴体に滑り込むように当たった豪腕は、内臓を掻き混ぜるような衝撃とともにアクロスを軽々と打ち上げ、その拍子にベルトが外れ、アクロスの変身が解除されてしまう。ベルトはカシヤンと音を立ててオリジオンの足元に落ちる。

無防備となった瞬の身体は橋の上から飛び出し、重量に従って落下を始める。次第に全身を包み込む浮遊感。下にはそんなのお構いなしに流れ続ける川。

「逢瀬えええええ！」

現れるは、大きな水飛沫。

友の叫びが虚しく響き、少年は水底へと沈んでいった。

「こつちだ！アーシアちゃん！」

息も絶え絶え、がむしやらに走り続ける2人。瞬が変な姿に変身したのに対し、何だっただアレと疑問を抱く間も気力もなかった。ただ、明確に2人を狙った敵意から逃げるのに精一杯だった。いつの間にか皆ともはぐれ、二人きりになってしまっていた。

近くにあった大きな公園の中、鬱蒼と生い茂る森へと逃げ込む。皆は逃げられただろうか。瞬は無事なのだろうか。自分たちは逃げられるのか。

「ここまで来れば……大丈夫だろ……」

息を切らしながら、草木の生茂る木陰に腰を下ろす二人。追跡を卷いた途端に、二人にどつと疲れが押し寄せる。重い腰を上げて木に背中を預けた一誠は、ぼつりと力無く
咳く。

「隠すつもりはなかった」

「え……？」

「俺が悪魔だって事。別に、君に危害を加えようとして近づいたつもりでもなかった。それだけは本当なんだ」

これは紛れもない本心であるのだが、正直言つて信じてもらえる可能性は低い。古今東西の物語が、それを証明している。

アーシアは失望しただろうか。幻滅しているだろうか。自分を取り繕うような言葉ばかりが、ぽつぽつと出てくる。しばらくして、アーシアが答える。それは、予想外の言葉だった。

「わかってます。イツセイさんが悪い人じゃないって私はわかってます」

「え……」

「だって、イツセイさんは、不出来で役立たずの私なんかに優しくしてくれた。友達だと言ってくれた。それだけで、信じる理由は十分なんです」。

力強く、そう言い切るアーシア。それを聞いた一誠の身体に、僅かながら力が湧いてくるような気がした。ここで、ふと一誠はフリードの台詞の中でも言及されていた、ある一文を思いだし、聞いてみる事にした。

「アーシアちゃん、さっきアイツが言つてた教会を締め出されたって……」

アーシアは一誠の言葉に少し驚いたような顔をした後、ポツリポツリと話し始めた。「私、教会を追い出されたんです。神器で悪魔を治療してるところを見られちゃって。それで仕方なく、墮天使の管理する廃教会に身を寄せていて……」

「……そう、だったのか」

予期せぬ形で暴露してしまったが、お互いに色々隠しあっていたようだ。人の心の地雷を踏みぬいてしまったような罪悪感が一誠を襲うが、アーシアは気にしないでどうかのように笑いかける。場所や時間帯のせいか、その笑顔は一誠には少しばかり暗く見えた。

「傷、癒しますね」

アーシアは先程ボコボコにされた一誠の傷を癒そうと、赤く腫れた頬に手をかざす。すると、緑色の光が一誠の頬を優しく包み込んでゆく。少しして、光が収まると、腫れはすっかり引いていて、傷一つなくなっていた。

「やつぱり、優しいな。アーシアちゃんは。俺みたいなやつもちゃんと傷を治してくれるし」

「イツセーさんこそ、私みたいなダメな人間を友達だってみとめてくれた」

「ダメじゃないさ。その優しさのどこがダメだってんだ？最高じゃないか」

「イツセーさん……」

一誠はアーシアから少し離れ、木の陰からこつそりと周囲を見渡す。

「とにかく、まだ奴が追ってくるかもしれない。ここは部長にでも助けを求め——」

「逃がさない、と言ったつしよ?」

その声を聞いた時にはもう手遅れだった。

「ばーん☆」

瞬間、一誠の背後からその身体を内と外から焼かれるような衝撃が襲った。焼けつくような烈風と身を焦がす爆炎。一人は殺せる威力の爆発が、彼を襲ったのだ。もう、一歩も動けない。朦朧とする意識の中、悪魔祓いの下品な笑い声が耳に入ってくる。

「手榴弾をつかう悪魔祓いってパンクな感じがしてかっこいいつしよ? 前殺した、悪魔と契約してた人間の遺留品なんだけど……って、まだ生きてるじゃんかよオ!?! ほんとしつけえんだよゴラア!」

全身から血と煙を出し続けながらも生きている一誠を蹴とばすフリード。その時、何かが空から降りてくるような音が聞こえてきた。

「ああ……気分がいい。憎き悪魔が死に体なのは実に最高だ」

この声を忘れるはずがない。赤龍帝を名乗る怪物が、追いついたのだ。

「ああ、俺達手を組むことにしたのよ。敵の敵は味方っていうじゃん？」

オリジオンはボロボロの一誠を素通りし、気を失っているアーシアを担ぎ上げる。一誠とは離れていたため、爆発には巻き込まれなかったものの、爆発の衝撃で気絶してしまつたらしい。アーシアを担いで立ち去ろうとするオリジオンに、一誠は残つたごく僅かな力と、声を振り絞つて叫ぶ。

「アーシアを……どうするつもりだ」

「ゴイツの神器を頂く。別段お前一人ならいつでも殺せるが、生憎俺の相手はまだまだ大勢いやがる。大変不服だが、貴様らを相手取るにはこれくらいの保険は欲しいのにな」

その発言に、一誠は驚愕した。神器所有者の魂と密接に繋がっている神器を抜き取られてしまえば、所有者は死ぬ。要するに、これは殺害予告にも等しい発言だった。一誠は力を振り絞るようにオリジオンの方へと這いずり、その足にしがみつく。

「んな事……させるかよ」

「ほぎげ怪物。貴様の意見なぞ求めておらん」

「ひぐつ」

まるでゴミを蹴飛ばすかのように、オリジオンの蹴りが一誠の顎に突き刺さり、彼の身体を打ち上げる。そのまま一誠は背中から地面に倒れるが、オリジオンは空いた方の

手でその頭を鷲掴みにし、フリードの方を見る。

「コイツを殺すんだろ？なら譲つてやる。今は時間が惜しい」

オリジオンはフリードの足元に向かって、一誠を塵のように叩きつける。

「アンタはどうするのさ？」

「別に、俺はこれまで三大勢力きさまらに虐げられてきた人類の味方だ。これまでも、これからもな」

「しょもねえし、くつダラねえ。勝手にしろよ、俺たちは悪魔が殺せばそれでいい」
お互いに吐き捨てるように別れを告げ、オリジオンはアシアを抱えたまま背中
の飛び立っていった。一人残ったフリードは、動かない一誠の腹を踏みつけながらそれ
を無言で見送った。

「あれが、赤い龍ネエ……随分としようもない奴だ」

一誠を踏む足に力を込めながら、そう呟いた。

第13話 月下真紅のブーステッド

一誠は目を覚ました。

「ハ、ハはっ！」

まず視界に飛び込んで来たのは、一誠の顔を覗き込む木場と小猫の顔だった。辺りを見るところ、ここはオカルト研究部の部室らしい。記憶が混濁しているのか、先程までの出来事が曖昧にしか思い出せない。窓から差し込む西日が、寝ぼけた一誠の顔を照らしている。

「無事だったか。間一髪、というところかな」

「目覚めて一番最初に見るのがお前の顔とか、マジ引くんだけど」

「そんな口をきける位には大丈夫みたいですね。フェニックスの涙が無ければあのまま死んでたんですよ」

あれほど痛めつけられていたにもかかわらず、身体のどこにも傷も痛みも無かった。話を聞くと、どうやら悪魔の間で知られているすごい治療薬を使っただけらしい。

「そうか……俺……」

意識がはつきりとしてきたらしい。同時に、先程までの出来事を思い出す。赤龍帝と

神父に殺されかけ、アーシアも拐われた。それだけで十分だ。こうしちやいられないと一誠はすぐさま身体を起こそうとするが、二人がすかさず静止する。

「待ってください、傷が治ったばかりで動くのは良くないですし、色々聞きたいことがあります」

「悪魔祓いに殺されかけてたところを、僕と部長が助けたんだ。一体、何があつたんだい？」

木場に訊かれて、事の顛末をぼつぼつと話し始める。アーシアの事も、フリードやオリジオンの事も。すべてを聞き終えた木場は、腕をくんで考え込む。

「悪魔祓いも来るとなると、これは厄介だ」

「何も出来なかつた……この間の時も、アーシアちゃんの時も！」

ここ最近だけで嫌というほど味わった無力感に思わず苛立ち、ベッドに拳を叩きつける。もうこんなのはたくさんだ、せめて自分に力があればいいのに。心の中に巣くう堪えようのない悔しさが、時間が経つにつれて自己嫌悪に変わっていくのがわかる。

「行かなくちや……俺が、助けに」

「駄目よ」

二人の静止を振り切つてまでベッドから出ようとするが、そこにリアスがやつて来て一誠を止める。

「傷が治ったとはいえ、行くのは危険すぎる。それに、あの赤龍帝絡みとなると、一筋縄ではいかないの。相手は三大勢力に大損害を与えた二天龍の片割れなのよ？私どころか、魔王様でも刃が立つかどうか……」

「俺がやらなくちやいけないんだ。だって、友達だから」

「そういう話じゃないのよ。今度死んでも、生き返れないのよ？」

「そんなの関係ないんです。俺、約束したんだ。友達だって。一人にはしないって。それを破ったら俺は俺じゃなくなる」

話は平行線をたどる。リアスも一誠の身を案じての発言なのは重々承知の上なのだが、一誠はそれでも我慢ができない。どうしようもない歯痒さと苛立ちがくすぶっている。

二人は暫く互いに見つめあっていたが、そこに朱乃が入室してきた。

「朱乃、どうかした？」

「墮天使を捕らえました。何者かにやられたようですが、まだ息がありましたので念のため連れてきました」

「こんなタイミングで……？まあいいわ。赤龍帝絡みかもしれないし、話を聞いてみても損は無い筈。案内して」

旧校舎のとある一室。結界を何層も重ねばりされ、一般人の立ち入ることも、中にいる者を出すことも阻まれているその中に、彼女達はいた。

「あのさ……これは理不尽すぎないっすかね？ウチら、アイツにボコられた上に悪魔に取っ捕まるとか、厄日っすか？」

「私達は関係ない。寧ろ被害者よ……神器使いは奪われるし、何度も邪魔された挙句赤龍帝に皆揃って半殺し……こんな屈辱的な仕打ち、許されるわけ無いわ！」

朱乃に連れられたリアス達が室内に入ってくるなり、簀巻き状態のレイナーレが抗議してくる。文句な内容からして、赤龍帝を名乗るアイツにボコボコにされて放置された所をグレモリーサイドに発見されて拉致られたようだ。まさに泣きっ面に蜂とはこういうことであろう。

「少しくらい静かに出来ないの？墮天使ってかなり品性がないのね」

ギャンギャン煩いレイナーレに、僅かながら嫌悪感を見せるリアス。というかあからさまに煽っている。大丈夫なのかこの人。

「調子乗ってんじゃ無いわよクソ悪魔！調子が悪くなければアンタ達なんか光の力であとかたもなく即蒸発させて——」

と」

リアスのどことなく軽蔑が籠もった眼差しと、棒読みかつするどい言葉がレイナーレを襲う。

「信じらんない……あの時でつきり死んだのかと……まさか悪魔になってるとはね」

「レイナーレの遊び心が奇縁を結んだ、というわけか」

「遊び?!?」 じゃああの時のデートじゃなくて罰ゲーム的なアレだったのかよ?!?」

「追い打ちをかけるように、ドーナシークの発言によつて初恋を否定されてすっかりしよげてしまふ一誠。閑話休題、リアスがレイナーレの前に出て問い詰める。」

「貴女とあの赤龍帝の関係、それにこの街で何をしていたのかを根掘り葉掘り聞かせてもらうわ。返答次第では三大勢力の戦争が勃発するかもしれないけど、覚悟はいいかしら?」

リアスは手のひらに滅びの魔力を溜めながら脅迫するが、すかさず朱乃が止めに入る。

「リアス、それは駄目よ。私達が独断でやっていい事では無いわ。堕天使との間で余計な火種を作るのは危険すぎる。滅びの魔力じゃなくて、せめて氷漬けにしましょう」

「大して変わんないわよ?!?」 というか、コント感覚で私達の生殺与奪の権利を弄ぶん

じゃない！」

「レイナーレよ、俺達は捕虜の立場だからその要求は通らないぞ……」

というか、捕虜とはそういうモノである。まあ、貴重な情報源たる墮天使達をみすみす殺すのはリアスからしても好ましくないもので、まだ墮天使達の命は保証されている。その後はわからないが。

「とにかく、貴女達の処遇を決めなければならぬわ。私の領地に来た理由もまだ答えでないし、望ましくはないけど、返答次第では戦争の火種になるかもしれないわよ」

「はたして、今はそんな事してる場合かしら？」

リアスの言葉を遮るレイナーレ。彼女は周りが静かになったのを確認してから続ける。

「私達は独自に神器使いを手中に収めていた。が、本人が逃げ出した挙句、赤龍帝に捕まった」

「……………」

「あの赤龍帝……アーシア・アルジェントの神セイクリッド・ギア器を抜き取って、自分に入れるつもり

よ。そうなれば奴は無敵。今すぐにでも三大勢力を殲滅しにかかる。癒しの力を得たら奴は手がつけれなくなる。その前に倒さなければ、三大勢力は全滅するかもしれない」

「なぜそう言い切れるのでしょうか」

「奴がベラベラ喋ったからに決まってるでしょ。アイツ、完全に私達を嘗めてる。奴の実力なら成し遂げかねない。私達を処分するよりも、アイツをどうにかしなきゃ全員終わりって理解してる？」

「……だとしても、貴女達を放逐する訳にはいきません。今のところ処分は後回しにしますが、逃げようだなんて思わないことです」

あくまで朱乃は冷静な態度を崩さない。僅かながら命の先延ばしにはなったが、これでは助かりようがない。

「随分強気ね。私達の光の力の前では悪魔なんぞイチコロだつてのに」

「手負いで無ければの話だがな」

墮天使達の負け惜しみをよそに、一誠は考えこんでいた。いや、既に答えは出ていた為、改めて決意し直していた、というのが正しいか。やはりあの赤龍帝も、アーシアも放つてはおけない。どうにかしなくてはならない、と。

皆にバレないよう、そろりと部屋のドアノブに手をかけようとする。その時。パシリと、リアスが一誠の腕を掴んだ。

「何処に行く気？」

「何って……決まってるじゃないですか。アーシアを助けにいくんですよ」

「貴方が助けようとしているのは教会の人間。元がつくけど天使側の人員。それに相手は赤龍帝。神器のなかでも別格の強さを誇るヤツだというのに、無茶よ。」

「それでもです。アーシアちゃんは友達なんだ。友達を見捨てる、なんてのはとてもじゃ無いけどできそうにない」

一誠は決意の籠もった力強い眼差しをリアスに向ける。

「眷属から外されても構いません。俺一人ですら行って行きます」

それは決意表明。全てを投げうってでも向かいたい道。恩を仇で返すようで心苦しみのだが、こればかりは譲れなかった。一誠とリアスは互いに見つめあったまま黙り込む。両者とも引けなかった。

部室に戻った一誠達。あの後、二人の間には会話は無かった。静まりかえった部室の中で、リアスが口を開く。

「……これから私と朱乃は墮天使達の処遇をお兄様に相談する。いい？間違っても単身で突っ込まないように」

去り際に「今日はもう帰宅しなさい」と釘を刺された一誠。彼の身を案じての言動なのは理解できているが、心の中では完全には同意しきれていなかった。

ふてくされたように返事をし、部室をでる。重い足取りで校内を出口に向かって進んでいく。

「……ごめん」

命の恩人よりも、出来たばかりの友達をとる。それが一誠の決断であった。それが裏切りだとしても、失ってから後悔なんてことはしたくないから。

校門を出て、周囲に誰もいないのを確認した後、家とは反対方向に足を進めようとする。

が、その時。

「僕にも声を掛けて欲しかったんだけどね」

「普段はデリカシーの欠片も無いくせに、こういうのはだんまりなんですな」

二つの声が一誠を呼び止めた。一誠は思わずびくりと肩を震わせて振り返ると、そこには木場と小猫がいた。

「木場……小猫ちゃんも」

「多分、部長は君が行くことを止めた訳じゃない。部長の言葉をよく思い出してみて」

言われてみれば、リアスは単身で行くなど言っただけで、行くことを禁止している訳ではないとも解釈できる。一人では不可能でも、力を合わせれば一縷の希望は見える。まあ、斜め下の解釈な気もするが。

「ご存知の通り、神器を抜かれてしまえば所有者は死ぬ。助けにいくのなら一刻の猶予もない。どうする?」

改めて問われるまでもない。初めから答えは一つ。

「巻き込んで悪いが、力をかしてほしい」

たとえ無謀だろうと、敵対していようと関係ない。友情の前に立場の差異なんてものは無意味なのだから。

さあ、友を助けにいざ行かん。

しかし。

その前にひとつ、やらねばならない事があった。

時刻はやや巻き戻り、夕日が眩しい河川敷。

土手の上を、3人の少女が歩いていった。湖森、ヒビキ、ネプテューヌの3人である。おつかいを頼まれた帰り道、湖森は自由奔放な二人を嗜めながら歩いていった。お姉さん風吹かせてるように見えるのは多分気のせいじゃない。多分。

「ほーら帰るよ二人とも」

「合点承知！ヒビキ、帰投しまーす！」

「ねぶねぶ、プリンを所望しまーす！」

「だーめ。家事を手伝わない人にやるプリンはない」

「それにしても今日は暑かったねえ。ホントに4月？海水浴とかしたくなつてこない？」

「確かに。ほら、あそこの川にも人が流れてきてるし」

ほら、とネプテューヌが指差した先を見ると、服を着たマネキンらしきものが川の端を流れている。3人が見ている中、マネキンは河原に打ち上げられる。

「ふーん……いやいや、ちよいまち！今なんつった？！」

危うく受け流しかけたが、それはスルーするにはあまりにも異常すぎた。

マネキンではなく、流れていたのは人間だった。正確には、河原に打ち上げられたような状態で意識を失っている。そして、それは彼女達の良く知る人物だった。

「し、瞬？！」

そう。前回の最後でオリジオンに敗北して水落ちエンドを迎えてしまった主人公と、逢瀬瞬であった。当然ながら3人は慌てふためきつつも、瞬の元に駆け寄ってくる。

「え」

「だ、だ、だ、大丈夫!?? 何で川を流れて来たの!??」

「帰宅ルートของ ショートカット、というヤツかな」

「んな訳ないでしょ!と、とにかく陸地まで引つ張り上げなくちゃ……」

がっちりとの瞬の身体を掴んで引つ張ろうとする湖森たち。しかし、小柄な湖森たちでは体格的には立派な大人に近い男子高校生を引つ張ったりするだけの力は生憎ながら無い。近くに人がいないかと辺りを見渡すと、

「だからさ、別に俺は悩んでなんかないって。まあ、権現坂が心配してくれるのはありがたいけどさあ」

「しかしだな……遊矢、ここのところあまりデュエルの調子が良くないように——」

トマトみたいな髪色の少年と、ガツチリとした体格の、大柄な少年が通りかかるのを見て、湖森は声を掛けた。

「あ、あのつすみません!手を貸してください!」

「え?あ、はい」

「よく分からんが、手を貸すぞ」

通りすがった少年達の力を借り、なんとか陸地まで引つ張り上げることができた。身体をゆすつてみると、呻き声をあげながら目を開いた。どうやら命に別状はないようだ。

湖森は安堵するが、瞬の様子を見て、ある一抹の不安が頭をよぎった。まさか、彼はまた戦つたのだらうか。あの時、自分を助けに来たように。腹部には青痣ができ、頬の切り傷からは血が滲み出ている。こんなボロボロにやられている。

「げほっ……がはっ……」

咳き込みながら起き上がろうとする瞬を、湖森が静止させる。

「息はしてるし、大丈夫みたいだ。でも一体何が……？」

「……あれからどうなつたんだ」

皆の心配する声を他所に、目を覚ますなりそんなことを言う瞬。身体は傷だらけなのに、その目には力が籠っているように感じられる。思わずネプテューヌもいつものキラを崩して突っ込みをいれた。

「えつと……そんな場合じゃなくない？瞬、見たところ怪我也酷そうだしさあ……」

「今すぐ戻らないと」

「あの……聞いてる？」

そう言うのと瞬は立ち上がり、この場から立ち去ろうとする。

「お前が行くべきは病院だ。待つてる、救急車を——」

「心配するな。これくらい平気なんだ」

大男が救急車を呼ぼうとするが、瞬はそれを止める。

「平気って……その心構えが一番危険なんだよ？そこはゲームも現実も同じだよ？」

皆の声を聞かずに、瞬はうわ言のように大丈夫だと繰り返す。どう見ても大丈夫ではないはずなのに。そんな大丈夫をいくら言われても、心配なのは変わらない。今の瞬は、湖森の知らない誰かの為に無理して強がっているように見える。

兄の態度に、色々と思うところがあつたのか、湖森は瞬の手を強く掴んで引き留める。「俺は死なないさ。約束しただろ？」

「そういう問題じゃないの！ねえ、やつぱりこんなのおかしいよ！だって、お兄ちゃんは一切よつと前まで一般人だったんでしょ!?？ それなのにこんなによつと前のような事に首突っ込んで……だつたらいつそのこと、辞めてしまえばいいじゃん！」

湖森の言葉はもつともだ。逃げられるものなら逃げてほしい。わざわざ貴方が傷つきに行く必要はない。それだけ大切に思っているのだ、と。それは瞬にも痛い程わかる。

しかし、だ。

「辞める、か。簡単に辞められたらいいんだけどな。これは俺にしか出来ないし、やらなかったら後悔するような気もする。始まりはどうあれ、今は俺がやらなくちゃいけないんだ」

「ちよつと待って ——」

痛む身体を無理矢理動かす。湖森の声が次第に遠くなる。

話がすれ違っているのは承知している。妹の心を踏みにじっているのも理解している。それでも止まれないのだ。例え、守ろうとするのがほんの僅かな間の微かな関わりだろうと、それは見捨てていいものではないからだ。

湖森も、今更になつてこんなことを言うべきではないことは分かっている。兄の戦う姿に、不安と恐怖を感じたのは確かで、昨日の話し合いで恐怖が消えても、戦うことへの不安が残り続けているのも確かだ。でもそれは、簡単には振り払えない。至極真つ当な感情なのだ。

(ウジウジ考えるのはいい加減にやめてやる。決めたんだ。今は他所からの受け売りの心でも、それでも構わない。俺が持っているのは、この為の力なんだ ——)

かつて貰った言葉を灯りに、歩を進める瞬間。今はただ、あのオリジオンをどうにかしなければならぬ。放っておいたら、きつとロクなことにならない。足取りが次第に確かになってゆく。大丈夫、まだ動ける。今はまだ止まっちゃ駄目だ。

そんな瞬間の背中に、湖森の叫び声がぶつくれた。

「約束して！無事に帰ってくるって！だつて、どんな人でも帰ってくる場所はあるんだよ！家族との約束破ったりするなんて、私、絶対許さないから！」

その言葉に瞬がどんな顔をしたのかは、湖森からは見えなかった。

「アラタあ、ご飯できてるんだけどー」

姉の呼び声に生返事で返し、アラタは部屋のベランダに突っ立っていた。星々が輝き出した空を見上げ、

「何やってんだ俺は……」

友達を見捨てて逃げて、のうのうとしている。そうして永らえた命でこうして悔やんでいる。そんな自分が嫌になってくる。何にも手につかなくなり、頭を掻き筆りながら声を上げる。

（一体何がどーなってんだよ……？ありえねえ、あんなこと。こんなことになると知っていたら、俺は■■■■■■■■■■なんてしなかったのに……）

昼間の事を思い出して、気が重くなる。あんなのは予想外だ。どうすればいい。それ以前に、あれからどうなったのだ。瞬は、一誠は無事なのだろうか。

瞬が水落ちした後、怪物はアラタ達を置き去りにして一誠の方を追った。奴にとつては部外者たるアラタ達の存在などどうでも良かったのだ。だから、生き延びた。唯はあの後ファイフティを引きずって瞬を探しに行き、山風が一部始終を見たせいで取り乱した

ので、なし崩し的に解散になってしまった。大鳳も態度に出していないだけで、かなり混乱している。

「つたく……全然切り替えらんねえ……」

頭を抱えながら、ふとペランダから家の前の道路を見下ろす。街外れの、明かりの少ない見慣れた道に、人影が見えた。

「ん、待て。あれは……」
が。

街頭に照らされたその姿を見て、アラタの顔が青ざめる。

「馬鹿っ……アイツ……!」

そこにいたのは瞬だった。ぱっと見御世辞にも無事とは言えない容態だが、五体満足で生きていたのは素直に嬉しかった。しかし、彼はどこに行こうとしているのであろうか？明らかに昼間の怪物のせいであろう怪我をしているし、どことなく目つきが怖く感じられる。

ペランダから声をかけてみたが、どうやら向こうはアラタに気づいていないらしく、そのまま歩き続けている。すぐさま家を飛び出して瞬の後を追う。向こうの動きは遅かった為、すぐに追いつけた。

「ちよつと待て!」

肩を掴んで声をかけると、ようやくアラタに気づいたらしく、瞬は振り向いた。

「あ」

「あ、じゃねえよ！お前無事だったのか!？」

「なんとかな……お前こそ、無事に逃げられたみてーだな」

「人の心配してる場合かよ……！結構ボロボロじゃねえかよ……そんなナリでどこ行こうとしてんだよ、おい」

自分の容態を気にも留めない様子の瞬に、本気で心配して叱りつけるアラタ。先への不安は吹っ飛んだ。こんな有様の奴をほっといたらそれこそ最低だ。

「お前も見ただろ、昼間のヤツを。アイツを今とめなきゃ、きつとまずいことになる。俺の直感でしかないけど、このままじつとしてるなんてできない」

どうやら、昼間の怪物に性懲りもなく挑むつもりらしい。助けてもらった分際で申し訳ないが、さすがに無茶だろうとアラタも思う。

「そうは言ってもだな……お前、こっ酷くやられたばつかだろ。そんなんでどうにか出来るのか？」

「なんとかする」

ダメだコレ。絶対止まらないパターンじゃねえか。一旦決意を固めてしまった人間を説得させるのは、並大抵のことじゃ不可能だ。頑なに考えを変えない瞬に、情けない

ことにアラタは早々に折れてしまった。自分で自分に文句を言いたくなるレベルである。

様に頭を掻きながら、アラタは呆れた様に言う。

「なんかお前は絶対止まらなさそうだから、もう何も言わない。助けてくれたことには、素直に感謝しているよ」

「そっか。俺も身体を張った甲斐があつたもんだな」

会話が成り立っているのか、すれ違っているのかイマイチわからない。この話題は続けるだけ無駄だと判断したアラタは、強引に話題を切り替えた。

「話は変わるけどさ、お前が変身したのって、仮面ライダーなんだろう?」

「知ってるのか?」

「名前くらいはな。人間の自由の為に立ち上がるヒーロー、らしいぜ」

「人間の……自由」

「カッコいいよな。途中でいくら傷つこうが、最後には皆を笑顔にしちまう。まさに理想のヒーロー。憧れないわけないだろう?」

「よくわかんねーよ。でもなんか良さそうだ、それ」

人間の自由の為に戦う戦士。瞬は、そんな大層な存在にはまだなれない。だが、不思議と悪くはなさそうだと思った。いつか、そんな風になるのだろうか。そんな風と呼ば

れる時がくるのだろうか。

瞬は傷だらけの顔をあげる。アラタは、気恥ずかしいそうにこう言った。

「俺達を助けてくれた時、確かにお前はマジモンのヒーローだったよ。友人たる俺がそう言ってるんだ。だから負けるな。あんなやべーヤツに、負けんじゃねえぞ」

アーシアを助けに行く一誠達。暗い夜道を走る彼らであったが、ふとあるものが一誠の視界に入り、彼は立ち止まる。

「どうしたのですか?」

「あれは……」

十字路の別方向。明かりの少ない道の上に、ふたつの見知った顔を見かけた。ちょうど街灯で照らされていた為気づけたのだ。逢瀬瞬と欠望アラタ。自分の素性を知ら

れてしまった友人達。関わっている場合じゃないのに、早くアーシアを助けに行かなくちやいけないのに、一誠は立ち止まっている。

ならば、これもきつと避けてはならないことなのだろう。一誠は友人達のいる方へと向きを変える。

「ちよつと話してくる。先に行つててくれ」

「どこに行くんだい？」

「悪いが、今やらなくちやいけないんだ」

木場たちにそう告げ、一誠は友人達の元に歩み寄る。二人の会話は聞こえている。自分と同じように、向こうにも色々と事情はあるのだろう。会話に割つて入るように、声を掛けた。

「よつ……なんて、軽い態度じゃだめだよな」

「一誠……お前まで」

二人は驚いているようだ。かくしてここに男三人が揃つた。アラタ以外は色々とポコポコにやられてたのだが。

「途中からだけど話は聞いていた。それでも俺は分からない。なんで瞬はあの怪物を倒そうとしてるんだ？お前は巻き込まれただけで、関係ないだろ？」

「巻き込まれたんなら、既に関係者だろ？それに決めたんだ。俺の力は、皆を守る為にあ

る。ならその為に使うことを悩んだりはしない。全力で突っ走ってな。友達を守りたい。その想いは同じだよ」

「……ほんと無茶苦茶だ。今日出会った奴の為に命張るなんて、馬鹿だ」

「自分でも驚いてるよ。俺はこんなにも簡単に命を投げ出せるような人間じゃないって、俺が一番知っているのにな」

自嘲気味に瞬が笑う。

危なっかしくて、無茶苦茶で、悪い意味で命知らず。だがそれもきつとひとつのあり方。馬鹿だけど、ヒーローとは多分そういう存在なのだ。アラタにはそのあり方が、愚かしいと同時に、どこか眩しくも見えた気がした。

「そういえば」

「？」

と、ここで何か思い出したかのように、唐突に話の流れを変えるアラタ。あまりにも急すぎて事故ってるのは言うまでもない。

「いや……あの、さ。不本意な形で隠してるっぽいことがバレちゃったみたいだけど……お前ら的にはどうなんだ？」

アラタのその言葉に、二人は黙り込む。確かにそうだった。一誠は自身が悪魔であること、瞬は自身が仮面ライダーであること。意図的に隠していたわけでは無いにしろ、

結果的にはお互いに露見した。それなら、いつそのこと全部ぶちまけてしまった方が気が楽になるのでは無いか。

二人は事情を洗いざらいカミングアウトした。

「ドン引きしたか？」

「いや」

カミングアウトを静かに聞いていたアラタは、きつぱりと否定した。

「それがどうしたってんだ。別にお前が仮面ライダーだろうが、悪魔だろうがどうだっていい。そんな側面があるのは否定しないし、だからって俺のダチには変わりはない。だからさ、こんなのサツサと終わらせて、また今日みたいに、馬鹿騒ぎしようぜ」

実の所、アラタは二人の隠された事情にはあまり驚いてはいなかった。というか、アクロス姿を見て「カッコいいなあ」といった感じの空気読めてないような感想を抱いていたまでだ。肝が座っていたのか、馬鹿なのかは彼のみぞ知るのだが。

「……ああ」

二人は同時にうなずくと、アラタに背を向けて走り出す。その背中を、アラタは真剣そうな目で見つめる。

走れ、身勝手な悲劇を防ぐために。

街外れの廃教会。辺りには廃マンションや廃病院といった、肝試しにうつつけであるろう廃墟が乱立する中、その内の一つとしてそれは建っていた。

「ここに奴が居るんだよな」

「木場達はまだなのか……？」

先に行つた筈の木場と小猫の姿が見えないことを疑問に感じる一誠。しかし待つている余裕はない。恐る恐るポロポロの木の扉を開き、中に入る。中は天井の隙間から漏れる月明かりと奥に立つ燭台の火のみの為、かなり暗い。

歩きたびに埃が舞い、反射的に軽く咳き込む。それでも瞬は目を凝らして奥に進む。すると、朽ちた扉の先に階段らしきものを発見した。

「あつた、地下に続く階段……この先かも——」

瞬がそう言い切る前に、二人は背中から凄まじい衝撃をうけた。

衝撃を受け、派手な音を立てて階段の一番下まで一気に転がり落ちる二人。階段の上を見上げると、そこに見覚えのある人影があつた。

「やあやあ、また会つたねえ！俺たちは一度相對した悪魔はすぐぶつ殺しちゃうから、再開とかねーんだわ！マジ不愉快だからちやつちやと死ねよオラ！」

「昼間の神父……!」

昼間、オリジオンと共に襲撃してきた煩い神父ことフリードであった。長つたらしい台詞を吐きながら、意気揚々と双剣を手に飛びかかってきた。二人はすぐさま立ち上がって避けるが、フリードは床に突き刺さった剣を引っこ抜いて二人に向け、醜悪な顔を見せる。

「悪魔が教会に入るとか馬鹿なんですかあ? いや馬鹿だったわお前! そして隣のクソガキも悪魔に肩入れイコール同罪だから二人仲良く地獄の片道切符を受け取って死ねオラ!」

「なっ!」

木場達を先に行かせたのが裏目に出た。電話とかすればよかったのだが、生憎オリジオンにボコボコにされた際にスマホは木っ端微塵になっっている。

狭い地下通路では逃げ場は無い。壁際に追い詰められた一誠に、フリードは剣を振り下ろす。恐怖で目を閉じる一誠。一貫の終わりだ。

「畜生があ!」

刃が一誠の鼻先をかすめんとしたその時。

ガンツ!! と、何か硬いものがぶつかるような音がすると同時に、全員の動きが止まる。

恐る恐る一誠が目を開けると、目の前のフリードは頭から血を流して止まっていた。足元には血のついた鉄パイプが転がっている。

「なんだよオイ、何のつもりだオイ！俺キレちまったよ、キレたよどうしてくれんだよゴラア！」

激昂したフリードは、階段の方を向く。地上と地下を繋ぐ階段の一番上、そこに息を切らしたアラタが立っていた。

「アラタ……お前……！」

「いけよ、助けにさ。時間がないなら俺がそいつを引きつける」

「お前正気か!? そいつはまともな人間じゃないんだぞ!？」

「わかってんだよ—— たぶん、なんとかなる。だから任せとけ！借りは返さなきゃ俺の気が収まらねえしなあ！」

「いきなり邪魔しといてボクチャンマジで不快なんですけどー！消えろーうー！」

ノリノリな台詞と共にフリードはアラタに斬りかかってきた。咄嗟にアラタは避け、フリードの剣は燭台を押し倒す。そして、倒れた燭台の火が絨毯に燃え移り、辺りが激しく燃えだした。

「アラタあー！」

「急げ！」

炎から逃れるように、瞬と一誠は地下通路を走る。同時に地上部では、戦いの衝撃で脆かった教会の天井が崩れ落ち、地下階段への道が塞がれる。

「やべえぞ……」

「アイツら、あのまま丸焼きになるんじゃないやねえの？ バツカだなああ！」

側から見れば、余計なことをして事態を悪化させてしまったようにしか見えない。てか実際そうだ。助けになりたいという心だけが先走りすぎたのだ。

「……こいよ、クソ神父」

「へえ。やる気かよ」

勢いでやってしまったが、こうなれば引き寄せるしかない。アラタはコソコソと操作していたスマホをしまうと、外に向かって駆け出した。

崩れゆく廃教会から飛び出したアラタの視界に、古びた廃マンションが入る。剣撃を必死になって躲しながら、廃マンションへと駆け込んでゆく。

「ああこそ！ 俺の知ってる悪魔祓いでもっとマシだったと思うけどな！ あんたマジ狂ってるぜ！」

大声で悪態をつきながら、アラタは階段を駆け上がっていく。最上階まで駆け上がり、錆び付いた鉄扉を蹴って開き、屋上に出る。

「どうしたんでちゆかあ〜？ 立派なのは威勢だけで？ マジのマジで無鉄砲スギイ！」

逃げ場のない屋上へと舞台は移っていた。自信満々で割り込んできた身の程知らずの滑稽さに、フリードは怒りと嗤いが混ざったような表情を見せる。神父の剣先がアラタに向けられる。

（おいおい……まさか俺達が無闇に介入しちまったせいで流れが変わってしまったのか？！？）
だとしたらこれ、マジやべー展開じゃね？）

最悪の展開だ。少しでも瞬に恩を返そうとしたのが運の尽きだったのかはもう分からないが、少なくとも自身を含めた幾つものイレギュラー故に、予想していた流れが来なかったことが問題だ。やはり、現実はその簡単にうまく行くものではないらしい。

迂闊すぎた自身への怒りを抑え、アラタは苦し紛れに一言。

「な、なあ。邪魔したのは悪かった。……はひとつ見逃してくれないかな。なあ？」

「何言ってるんですかあ？クソ悪魔どもに加担した時点でてめえは殺されても文句ねえ、つてことだよオ！邪魔の対価は高くつくぜい？君たちの首300個あっても足りるかはわかんねーけどなあ！」

すごい情けないことを言ってるが、さすがに死ぬのは勘弁ねがいたい。友達の為に命張るのは別に構わないが、決して死にたくないわけではないのだ。そんな思いで命乞いというチキンじみた発言をするが、当然ながらバツサリと切り捨てられてる。

邪魔をいれられてご立腹なフリードは、意気揚々と剣を構えて歩み寄ってくる。アラ

タの背後には既に屋上の縁が側まで近づいている。後には引けない。

(いやいや！俺、馬鹿じゃね？ いや馬鹿だわ！足手纏いになるのは分かってたはずだし、最悪死ぬって分かってただろ？！) じゃあなんで来た？！)

いや、はじめから分かってたはず。その思いひとつだけで、無謀な行動にでたのは自分自身だ。あまりにも愚かで、理解不能で、不合理だけど。それは悪くはない。

アラタは立ち上がる。抱いている思いを、恐怖を無理矢理抑える為に叫ぶ。

「俺はまだ死ねない！少しでも逢瀬の役に立つて、生き残らなきゃなんねえ！それに、言い出しつぺが約束破って死んだら元も子もなからなあ！」

が、無情にも、刃が首先に滑り込む。

その時。

「悪いけど、僕も邪魔させてもらうよ」

突然割り込んできた声。フリードはその声に反応して動きを止め、振り返る。

「邪魔が入って遅くなった。君も一般人より、悪魔と戦いたいんじゃないかな？なら僕が付き合っただけよと思うてね」

「……へえ、今日ひよつとしてツイてる？君も悪魔……要するに！敵！獲物！暇つぶし

がてら死んでみようやイケメン君？」

乱入してきた少年——木場祐斗は、フリードに対して真つ直ぐに剣を向ける。フリードは新たな獲物に歓喜と興奮を隠せないように、木場を見るなりテンションがうなぎ登りになる。たしかに暇つぶしにはなりそうだ。

一方、木場はというと、こんな事を思い出していた。

一誠が一時離脱してから、よくわからない邪魔者によつて足止めを喰らつてきたのだ。詳しくは本筋とほぼ関係ないのでここでは省くが、いきなり絡んできたかと思えば、予想外の強さと厄介さで苦戦させられてしまった。そのことについては色々と考えたくなつたが、ともかく今は目の前の悪魔祓いを無力化することが先決だ。禍々しい黒い剣を構え、フリードを見据える。

フリードも、木場を殺す為に剣を構える。元より、悪魔を滅ぼすという目的の一致でオリジオンと共に動いていたのだが、興奮のあまり、そんな細かいことは忘れた。目の前の悪魔を殺る。ただそれだけが頭を支配する。

両者剣を構え、徐々に間合いを詰めていく。挙動の一つ一つが慎重に、かつ精密に遂行されていく。そして。

まずは一閃、両者が同時に斬りかかった。

そして、アラタはというと。

「五体満足なのが奇跡だぜまったくよ……」

ひとまず生き延びたことに安堵していた。同時に、緊張の糸が切れたのか、身体から力が抜けたかのようにその場に崩れ落ちた。そこに少し遅れて、小さな人影がやってくる。

「……馬鹿ですか貴方は。無茶にも程がありますけど、そこのところはどうお考えで？」
「なんも考えてませんでした。すみません」

塔城小猫であった。

悪態をつきながらも、小猫は小さな身体でアラタをお姫様抱っこし、その状態で屋上から地上へと飛び降りる。勿論彼女はピンピンしてらっしゃる。彼女も人外なのだから当然っちゃあそうなのだが。

(間に合った……？偶然、なんとかなった……？)

「どうでもいいけど、いい加減持ち上げ続けるの疲れたんで下ろしますよ。なんか貴方、

いやらしそうな顔して不快ですし」

さらりとデイスリを入れながらアラタを地面に下ろすと、小猫はそのまま地面を思い切り蹴り、凄まじい跳躍力でマンシヨンの屋上へと跳んでいった。

「……よく考えたら、俺無駄な事してねえかなコレ」

一難去った後、自身の行動が急に無意味に思えてきた。足りない頭でどうにか役に立ちたいと思って動いたのだが、それに意味があつたのかといと、多分無い。それでも、自己満足と友情から身体を張ったのだ。地面に大の字になり、友の健闘を祈りながら夜空を見る。

「頼んだぞ……二人とも」

だんだんと暗くなりつつある夕暮れ。街外れの廃教会のそのまた地下深く。煤けた地下の祭儀場の最奥に、ソイツは居た。

祭儀場の床には魔法陣らしきものが描かれており、そこら中に神父らしき人物達が倒れていた。彼らは皆レイナーレ達の配下だったのだが、アーシアを横取りする為に、オリジオンの手で纏めて半殺しにされたのだ。殆どの奴は既に死んでいるが。

そして、魔法陣の中央には十字架に貼り付けにされた状態でアーシアが寝かされていた。まだ神器が抜かれた訳ではないが、彼女は深い眠りにについている。

「こいつの力を取り込んでしまえば、俺様は不死身だ」

傷を癒す神器の力を取り込めば、無敵になる。なんせ赤龍帝の火力と神器の回復効果を併せ持った、攻守に隙がない状態になるのだ。そう考えると、アーシアが狙われるのも納得がいく。

間も無く儀式が始まる。地上でなにか激しい音がしたようだが、邪魔をされる前に終わらせてしまえばどうともなると思い、意識の無いアーシアの胸に手をかざす。その時、祭儀場の鉄扉が勢いよく開かれた。

「来たか」

瞬と一誠が遂にたどり着いたのだ。息も絶え絶えで、オリジオンに全く歯が立たなかった二人だが、まだ食らいつく。友の為に。

「来たさー！ さあ、アーシアちゃんを返せ！」

「はっ！ 一足遅かったな。俺様はたつた今、儀式を終えた！ 聖母トワイライト・ヒーリングの微笑は俺のものだ！ 俺様の！ 力に！ なったのだ！」

オリジオンは下賤な笑い声を上げながら、瞬達に右手を見せつける。その右手は、淡く緑色に光っている。

「それは……!?？」

「なんだ、貴様は神器を知らぬか。ほう………つきり貴様も転生者かと思ったが、まさか部外者だったとは。いいか、これはあの聖女の神器。力。これを失った時点で彼奴は死んだ。残念だったなあ?」

「なんだと………なんでそう簡単他人を犠牲に出来るんだ!?？」

「三大勢力は死ななければならぬからだ。肩入れする奴も同罪だ」

「お前は間違ってるよ………そんな下らない事の為にアーシアちゃんの命を奪うなんて絶対間違ってるし、俺は許さない!」

一誠の言葉にあからさまな不快を示したオリジオンは、目にも止まらない速さで一誠の首を掴んで持ち上げた。そして、心底軽蔑したような溜息をつき、こう続けた。

「俺様が間違っているだど?寝言は寝て言え雑魚が。これはな、人外どもに虐げられている人間の、正当なる反逆なのだよ。それがなぜ理解できない?悪魔は強力かつ稀少な力を持つ奴を節操なく、かつ強引に手籠にし、天使共は自分達以外の全てを見下しつけ上がっているくせ、逆らう者は容赦なく見捨てる。墮天使も神器を組織だってかき集めてるくせに部下の管理すらできない無能。最大の罪は、奴等がこぞって人間を見下している事だ。奴等は人間をどうとも思っちゃいない!分かるか!?? 人類は人外の家畜では無いというのに、奴等はそれを正当化した上で正義面までしてるんだ!屑の極みだ

！これは正しい裁き、正当なる報復なんだよオオオオオオ！」

思いの丈をぶちまけるオリジオン。言い切った後、部屋中に響くような大声で笑い出す。彼からすれば、三大勢力は極悪非道の屑の集まり。理由は前世で二次創作で読んだから。彼はこの世界における三大勢力について、実の所何も知らない。一方的な偏見でしかないのだ。

瞬達には知る由もない。

早いとこ終わらせてしまおうと、オリジオンは足を動かそうとするが、

「そいつは違うな」

それを遮る声。それは、オリジオンからしてみればほとんど部外者である瞬の声だった。

「俺は悪魔がクズだの人間が人外に虐げられてるだのなんてよく知らない。でも、お前の言ってることが正しいとしても、お前がやろうとしているのは、お前が忌み嫌っている悪魔と同じじゃないのか？ 同じところに堕ちていいのか？ 自分以外の全てを見下し、力に酔いしれてるのはお前も同じだろ。同じところまで堕ちてるんだぞ」

「何を言っている？ 悪いのはアイツら、恨みを買った奴が悪いだろう」

「散々他人を傷つけといて、今更被害者面してんじゃねえよ！ お前は虐げられた被害者じゃない。既に報復をやった加害者なんだ！ 裁かれるのはお前も同じだろ」

そう。仮に復讐する動機が納得できるものであったとしても、被害者という立場はそれを正当化することはできない。復讐から別の復讐が生まれる事もありうる。そうなれば加害者の仲間入りになることは間違いない。

さらに瞬は知る由もないが、このオリジオンに関して、そもそもこれは復讐ですらなく、ただの糾弾。気に入らない奴に難癖をつけてイジメているようなものなのだ。ハナから常人には賛同できないものだった。

「屁理屈捏ねてんじゃねえぞ……あいつらが滅ぶべき悪なのは変わりない！」

「ああ屁理屈だよ。正論もへつたくれもない、自分勝手に支離滅裂なクレームだよ。それでも言うし、食らいつく。なんせ友達を助けたいからな！その為だけに、俺は一誠に力を貸しに来た！」

オリジオンの言葉を一蹴する瞬。偏見に塗れた憎悪と、純粹で不格好な友情。元より両者は平行線であった。会話など初めからしていない、意見のぶつけ合い、ドッジボールだった。瞬の言葉に続くように、一誠も言葉のドッジボールに参加する。

「……弱いからなんて関係ない。お前の考えなんて知らない。俺はただ、今度こそ助けなきやいけないと思って来たんだよ！アーシアちゃんは一人だった。見捨てられて、利用されて、友達なんていなかった！だから！俺達になるんだ！彼女の友達に……お前なんかとは違う！お前の言う通り、悪魔達が非道なことをやってんなら、俺が変えてやる

！」

啖呵を切った二人の主張を聞いてる内にオリジオンは少し落ち着いた様だ。長い沈黙の末、ぼそりと、失望に満ちた声を漏らす。

「……言つてもわからぬ馬鹿ばかり、か。ああ、全く無駄だったよ。貴様らはあくまでそんな安くて薄っぺらい理由でここに立つか。ならその身に刻むがいい。俺様の正しさと、強さを！」

そう叫ぶと、オリジオンは全身から覇気のようなものを放出する。それは荒れ狂う突風となつて二人を襲い、吹き飛ばした。

「がっ」

「うっ」

壁に激しく叩きつけられ、ずるずると崩れ落ちる二人。オリジオンはそれを見て嘲笑うかのように、身体を震わせる。瞬は立ち上がりながらバツクルにライドアーツを差し込み、腰に巻く。

「変身つ……！」

《CROSS OVER！仮面ライダーアクロス！》

すぐさまアクロスに変身し、瞬はオリジオンに向かって駆け出す。

「何度かかってこようが無駄だとまだ分からねか！」

オリジオンは、瞬のタツクルを物ともせず、ゴミを払うかのように弾き飛ばす。のけぞった瞬に、続け様にオリジオンの爪が振り下ろされる。アクロスの特種金属から作られた装甲から火花が飛び散り、衝撃と痛みが瞬の身体の芯まで届く。相手は前より更に強くなっている。

「俺は赤龍帝だ。倍化の力なぞどうに使いこなしている。戦うたびにつよくなっているのだ！」

「それでも……とめる！」

瞬はアクロス専用武装であるツインズバスターを構えると、すかさずオリジオンに斬りかかった。今度はオリジオンの硬い鱗から火花が飛び散る。これならダメージが通る筈、時間と共に強くなる彼を止めるには、早期決着しかない。

速攻で決めるべく、瞬は連続でオリジオンを斬りつけ、渾身の力を込めた突き攻撃でオリジオンを床に押し倒した。そして、ライドアーツをツインズバスターの柄にある差込口に挿入し、必殺技を発動させる。

《CROSS BLAKE! ARC LIGHT PUNISHER!》

「はああああっ！」

「ぐはあっ！」

赤い光を纏った斬撃が、オリジオンの鱗をバラバラに引き裂き、肉体へと刃を届かせ

る。断末魔をあげながら、オリジオンはそのまま動かなくなった。

「今のうちにアーシアを……!」

一誠はそれを好機とみて、礫にされているアーシアの元に駆け寄る。

拘束を解き、背中に背負ってこの場から離れようとする。

が。

「甘いな、俺様はまだ動けるぜ」

「嘘だろ!?!」

なんと倒した筈のオリジオンが動き出し、掌から火炎弾を一誠にむかって発射してきた。まさかと思いい目をやると、自らの胸に添えられたオリジオンの右手が緑色の光を放っている。アーシアの神器を使ったのだ。

「一誠!」

完全に油断していた。倒しても回復してしまうような奴を倒す手段はない。現に、身体を真つ二つに裂くような一撃を与えたのにもかかわらず、オリジオンは五体満足なのだ。

思わず瞬が一誠の元へと駆け寄ろうとするが、突然、オリジオンの火炎弾に何かがつけられ、そのまま霧散した。

一体何が起きたのだ。オリジオンは突然の横槍に、

「部長……朱乃先輩！なんでここに！」

「そんなの、私が連れてきたに決まってるじゃないか」

リアス達の背後から、見慣れた胡散臭い男が出てくる。瞬を戦いに巻き込んだ元凶たるファイフティである。瞬は顔を見るなり、露骨に嫌そうな顔をする。

「げ、ファイフティ」

「感謝したまえ。ギリギリ間に合ったのは私のおかげだよ？それに君は本調子じゃないんだからさ、私がこれくらいの手事はしなきゃ駄目だろう？」

得意げに言っているが、妙に気持ち悪く感じてしまうのは気のせいだろうか。瞬がファイフティに対してちよつとイラついている傍ら、一誠はアーシアを抱えて部屋の入り口まで走る。

「イツセー、話は後よ。兎に角コイツにはこの間のお返しをさせてもらおうわー！」

リアスはそう言うとお得意の滅びの魔力を指先から放つ。予想外の事態に対応出来ず、オリジオンはリアスの攻撃をもちろにうけて膝をつく。リアスは一誠とオリジオンの間に割って入り、魔力を込めた蹴りをオリジオンに叩き込んだ。

「朱乃！いつて！」

「分かっている！はああ！」

すかさず朱乃が魔力で氷の刃を生み出し、オリジオンにぶつける。

「やった!?」

「残念だ、今のは死亡フラグだぜクソ野郎」

オリジオンは受けた傷を神器で癒し、そのまま炎を吐いて一誠達を吹き飛ばした。

「がっ……!」

身体中に激痛が走る。治ったはずの身体が一瞬で再びボロボロにされる。地下室の冷たい床にぶつ倒れた一誠は、床に倒れたアシアの身体に手を伸ばす。

ここまでしても、何もできないのか。大切な人を助けることすらできないのか。そんなのは嫌だ。

(何もできないのはもう沢山だ!だから —— 目覚めてくれ、俺の神器——!)

それは応えた。

高慢な偽物では無く、未熟で不格好な本物に。

《Dragon booster!!?》

一誠の心の叫びに呼応するかのように、彼の左腕の神器が動き出す。籠手に紋様が浮かぶと同時に、一誠の全身に力が駆け巡る。

籠手も、先程の無骨な外見からうつつて変わり、手の甲に緑に輝く宝珠がはめられた、籠をかたどったかのような形をした赤い籠手へと変化していた。これには一誠は勿論、この場にいた全員が驚愕していた。

「なんだこりやあ……ガチでなんだこれえ!」

赤き龍の魂を宿した真紅の籠手。ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手が、目覚めたのだ。

「嘘……なんで、イツセーが……?」

「なんだ!?何が起きたんだ!」

「なんてやつだ……貴様、どうやって覚醒したのだ!?」

その光景に一番驚いていたのは、オリジオンだった。

(馬鹿なっ……このタイミングで覚醒するとは……だから悪魔になる前に始末したかったんだよ!)

完全に油断していた。

一番危惧していた事。それは、一誠の覚醒が始まる事であった。いくら所有者が弱かろうと、その力はこの世界では最上級。自らの野望を確実に実行すべく、兵藤一誠が主人公として本領を発揮する前に仕留めたかった、というのがドライブオリジオンの本音だった。

が、それは今この瞬間、失敗した。神器は感情の力に応える。アーシアに降りかかる不条理と、胸の内にあつた無力感、それらとオリジオンに対する一誠の怒りが、それを目覚めさせてしまった。思えば、最初の襲撃が完遂できなかった時点で、この展開になることが決まっていたのかもしれない。

各々が驚愕に包まれている中、赤龍帝の籠手の宝珠から光輝く玉が出てくる。それは光りながらゆつくりと瞬の掌に落ちてきて、手の中に納まった時、そこには赤き龍が描かれたライドアーツらしきものがあつた。

「これなら、あの時みたいにな……！」
ネプテューヌの時を思い出しながら、バックル左側に新たに手に入れてライドアーツを取り付ける。

《LEGEND LINK! BOOST! BOOST! EXPLOSION! DRAI
G!》

瞬の周囲が激しい炎が包み込んでいく。その炎の海の中から、三等身くらいの紅き龍

が勢いよく飛び出し、天井を突き破り、炎を全身に纏ったまま瞬の上を旋回する。そして、瞬に向かってそのまま落ちながら、その体を5つに分解し、アクロスの装甲として引つ付いた。龍の腕は瞬の腕に、足は足に、翼と尾は背中に、頭部は胸に。そして、アクロスの額には緑の宝珠と二本の角が備わった。

その姿は、まだ一誠達は知る由もないが、赤龍帝の真なる力である赤ブーステッド・ギア・スケイルメイル龍帝の鎧を思わせるようなものであった。

「これは……随分と派手というか、刺々しいというか……」

赤龍帝の籠手を左手に出現させた一誠と、赤龍帝の力を身に纏ったアクロス。ファイティはその姿に見惚れたような反応を示し、嬉しそうにこう続けた。

「ついに繋いだね……これこそは真なる赤龍帝との絆の証！仮面ライダーアクロス・リンクドライブ！真紅の双龍よ、今こそ反逆の時だ！」

ファイティの声を皮切りに、二人は駆け出した。近づいたたびに、全身に漲る力がいつそう高まっていくのが感じられる。

「せえいー！」

「ぶふほああ……？」

一誠の右ストレートがオリジオンの顔面に突き刺さり、これまでとは比べるのも烏澁がましくなる程の痛みがくる。間髪を入れず、瞬の回し蹴りがオリジオンの脇腹に滑る

ように入り、彼の身体を大きく吹き飛ばした。

「まさか……貴様も倍化を使っているというのか……?!?!」

「そのようだね。赤龍帝の力が宿ったライドアーツ、当然だね」

オリジオンの問いにファイフティが軽い調子で答える。そこに、瞬の裏拳と一誠の膝蹴りが同時に入り、オリジオンを中心に壁にクレーターを作った。

「貴様ら……倍化がこれ程まで……」

壁にもたれかかるオリジオンに、一誠と瞬が迫る。回復されるなら、それ以上の力でぶん殴ってやればいい。二人の倍化がさらに重ねられる。

? EXPLOSION CROSS BLAKE?

? explosion!!??

二人の倍化が最大まで到達する。それは、オリジオンからすれば敗北の宣告に他ならなかった。何故、負ける? 何故、コイツらに逆転される? 彼の読んできた二次創作では、主人公は決して原作キャラに負けず、原作で裁かれなかった罪を裁く救世主で

「なんでっ……貴様らみたいなカスに……!」

「他人を見下し続けた報い……にしては安いもんだと私は思うよ?」

ファイフティが馬鹿にした様に答える。彼は色々と踏みにじり過ぎた。悪魔にも悪魔の尊厳はあるし、守りたいものだってある。しかし、前世から原作世界そのものを貶し

続けていた彼には、終ぞ理解できなかったのだ。自分の知ることが全てだと盲信し、それだけを頼りに進みすぎた。

瞬と一誠が、オリジオンの前に立ち、拳を構える。

「ダブルドラゴンパアアアアアアンチツ!!?」

「」

偽りの赤龍帝に、鉄槌が下された。オリジオンの身体から、緑色の光が勢いよく飛び出し、床に転がる。アーシアの神器だ。

そして、二人の倍化したつぶりのダブルパンチによって、オリジオンの身体は地下室の天井を突き抜け、満月の浮かぶ夜空へと大きく吹き飛ばされていった。

同時刻。廃マンションの屋上でフリードと対峙していた木場と小猫。互いに傷だらけであり、ただでさえボロボロな廃墟が、戦闘の余波で更にボロボロになっているあた

り、戦いの激しさがひしひしと感じられる。

対するフリードは、平気へつちやらと言わんばかりの様子で、二人を長時間相手取りながらも一向に剣筋が乱れていない。当初の予想を遥かに上回る難敵。ここは倒すよりも、可能な限り足止めに専念してから離脱したほうがいいのでは、と木場は考えていた。

「しづとい……二人がかりでも、まだ持ち堪えるのですか」

「君、中々の腕前だ。そんな身に堕ちているのが惜しいほどに」

「生憎だが、俺は悪魔を殺したくてやってんだ。好きで今いる所まで堕ちてるんだ！調子こいてんじゃねーよミクロ単位で斬り刻むぞ！」

なんとか強がつてみせるが、正直に言っただけかなりギリギリの状態だ。フリードは相変わらずの汚い口調で罵倒をするが、急に剣を収めてしまった。

「……と、言いたい所ですけど、ダメですわ。あの赤龍帝やられてやんの。ぼくちんマジ白けちゃうわー。つーわけで俺、まだ捕まりたくないんで去ります、バイチャー！」

そう言うのと、フリードは懐から丸い物体を取り出し、木場に向かって投げつけた。瞬間、眩い光が木場達の視界を包み込む。

「閃光弾っ……」

何も見えない。特に夜では効果的面だ。二人の目が眩んでいるうちに、フリードはマ

ンションの屋上から飛び降りて逃げていく。もう今回は引き際なのだ。赤龍帝をたすける義理はないし、悪魔に殺されるなどもつてのほか。

しばらくして、二人の白く塗りつぶされた視界が徐々に戻っていく。そのときには既に、神父の姿はどこにも無かった。

数時間後。

「ハアツ……バハアツ……」

オリジオンは身体を引きずりながら歩く。吹き飛ばされた後、這う這うの体で逃げた。

オリジオンとしての姿を維持することもままならず、先ほどまでの堂々たる態度とはうってかわり、無様に怯える子羊としか言いようのない有様であった。

「この俺様が……よりによつて兵藤みたいなクズに……！それに話が違う！俺が転生特典として赤龍帝の籠手を持っているくせに、何故あのクズ野郎が覚醒するんだ……！」
敗北してなお、見下すスタンスに変化はない。典型的な負け惜しみは、人が見れば呆

れて失笑するほかないであろう。

「ん？」

少年の向かう先、満月の前に立ち塞がるが如く立つ人影に気付く。

漆黒の軍服に身を包んだ少女が、そこにいた。帽子の下から覗く銀色の瞳が、美しくも鋭く少年を睨みつけていた。大きな満月を背に佇む少女に、オリジオンだった少年は問いかける。

「お前は……？」

「私はレイラ、お前には力を与えたつきり顔を見せていなかっただろうから、覚えてないのかもしれない」

自らの名を名乗った少女は、かつかつと辺りに靴音を響かせながら、少年のすぐ側まで歩いてくる。

「かのみやいっせい鹿野宮志成……いや、こさかかずなり小阪和成お前に力を与えた……のは妹なんだが、代わりに私から宣告してやろう」

レイラは、目の前の少年の名前を呼ぶが、直後に前世での名前と呼びなおす。それは、少年の素性をすべて知っていることに他ならない。そしてレイラの言葉をうけて、少年は思い出した。自身がオリジオンとして覚醒した時のことを。こいつは、自身の力を覚醒させた連中の仲間だと。

すぐ側まで接近していたレイラは、少年の額に人差し指を当てる。

「……………何を」

「死ね、下種野郎が」

その言葉と同時に、ドスツという、何かが刺さったような音がした。そして、少年の身体がぐらりと前のめりに倒れ、地面に血を撒き散らす。その背中には、一本のサーベルが深々と突き刺さっていた。

「な……………に、を、す……………る？」

訳がわからない、といった表情のまま倒れ伏した少年に、レイラは目をくれることなくサーベルを引き抜く。同時に鮮血が吹き出し、更に辺りを紅くしていく。

「お前は王になれない。お前は……………井の中の蛙にすらなれんよ。その性根が治らん限り、永遠にな」

冷たいその宣告が、冷たくなりつつある少年に突き刺さる。既にその言葉を理解するほどの意識は残っていないかもしれないが、レイラにはどうでもよかった。

「外野の思っているほど、奴らも単純じゃないというのに」

「あれ、役に立たなかつたか」。はあ、面倒だけど、また新しい転生者補充しないと」

偽物の赤龍帝の始末を終えたレイラ。そこに、能天気な声が響いた。

「レイラ、お前は享樂的すぎる。それにどつちにしろ、あいつは使い物にならなかつた

さ。中身が腐り果てている。とてもじゃないが……こいつの作る世界を、私は許容できない」

「でも、レイラも最初の頃は結構乗り気だったじゃん？ 忘れたとは言わせないにやー」
「あ、あれはだな……」

妹からの痛い突っ込みを受け、言葉を詰まらせるレイラ。妹からの追求を誤魔化すように話題を変える。

「それにしても、遂にやってきたのか……仮面ライダー」

「転生者狩りもこれを嗅ぎ付けているし、これは一波乱あるかもね」

「踏んだり蹴ったりじゃない！ 赤龍帝が二人いただけの、三大勢力死すべしだの、バツカじゃないのあいっ！」

今回の事件では完全にいい所無しでボコられただけの形となった墮天使カルテットの一人、レイナーレ。治らない苛立ちに綺麗な顔を歪ませながら、近くのガードレールに八つ当たりの蹴りをくらわせ、凹ませる。器物破損である。

「うむ。今のは完全に負け惜しみだな」

「そもそも勝負になつてないっすけど」

「なんか言つたかしら、ミッテルト？」

レイナーレがミッテルトの失言に鋭く反応する。墮天使カルテットのの中では下つ端に位置する彼女は、レイナーレの声に肩を震わせ、冷や汗をだらだらと垂らしながら、

「いいい言つてません！か、か、カラワーナが！カラワーナが！」

「はあ？ ふざけないでよ！アンタちんちくりんの癖に……！」

小学生レベルの言い掛かりを端に取っ組み合いになつたカラワーナとミッテルト。それを諫めるドーナシークは、

「喧嘩はよせ、貴様ら。まだここは悪魔の領地、騒ぎを起こせばどうなるか分かつているのか」

そう。ここはまだグレモリーの支配する街の中。ただでさえ今日の事件からピリピリしててであろう悪魔陣営からしたら、不法入国者も同然のレイナーレ達の存在は余計な諍いの種になりかねない。彼女ら自身もオリジオンにボコボコにやられた為、一旦街を離れて回復に専念したいのもあるが、とにかく今は事を荒立てるべきではないのだ。

そんなこんなで、オリジオンに翼もへし折られ、飛行が困難な彼女らは徒歩で街外れまできていた。街を出れば多分救援も来る筈。淡い希望を抱きながら足を進めるレイ

ナーレ達だったが、眼前の坂の頂上にひとつの影を見つけた。

藍色のライダースーツを身につけた、長身の男だった。一步一步、足音を大きく響かせながら近づいてくる。

「無事逃げられたようだな」

「……お前だったのか。我々をグレモリーから逃したのは」

そう。捕まっていたはずの彼女らは、何者かの手引きを受けて逃げ出していた。知らぬ間に解かれていた拘束、誰もいない校舎。それら全てが、偶然とは思えないタイミングで彼女らに味方していたのを、逃げながら感じていたのだ。

「俺はギフトメイカーのバルジ。まあ、ロクデナシ同士仲良くやろうじゃないか、なあ？」

レイナーレ達の正体を知っているのか知らないのかは分からないが、随分と不敵な笑みを浮かべている。

「何故助けたの？」

「趣味さ。あの悪魔共に軽く悪戯して足止めしたのも、君達を助けたのもさ。だって君達も、あそこにずっと居たくはないだろう？ ああ、別に取り引きを持ちかけるつもりは無い」

男はそう言いながら、いつの間にかレイナーレの背後に回り込み、肩に手を回してい

た。当然彼女は振り払うが、男は一瞬の内に離れた電柱の上に跳躍していた。

「ただちよつと、実験動物になつてもらうだけさ。拒否権ないぜ？」

「待ちなさい！あなたは一体——」

レイナーレの声は途中で途切れた。彼女の意識は、一瞬で消し飛ばされていた。意識を失つた身体が、倒れることを忘れるくらいに。

他の面々が何か言おうとするが、彼らもまた、レイナーレと同じ末路を辿る。バルジの目の前には、まるで時が止まったかのような状態になつた墮天使達がいた。

「この世界、中々壊しがいいあるじゃん」

バルジは舌なめずりをしながら、夜の街を見下ろす。

その目は何とも形容し難い、悍ましいものだった。

あれから一晩が経つた。

あの後アーシアは神器を戻され、リアスの手で悪魔として生き返つた。成り行き上仕方ないとはいえ、シスターを悪魔にするとか大丈夫なんだろうかと瞬は思ったのだが、

本人が満足そうなので突っ込むのは野暮、というものだろう。アーシアはそのまま一誠の家に住む事になり、学校にも転入してきた。男子生徒からの熱烈な人気と、一誠への恨み辛みがわんさか湧き出てきて教室はしばらくの間うるさくなつたのは言うまでもない。

ちなみに、三大勢力について知ってしまった瞬とアラタが、その後リアスに呼び出される事になるのはまた別の話——。

4月も半分以上経過し、桜も殆ど散ってしまったある朝の通学路。

「しまったなー目覚まし時計が1時間早くなつてたかマジありえねえわーつれーわー」
若干イキつたような感じの独り言をぶつくさ呟きながら通学する瞬。しきりに欠伸をしながらも教室に入り、ホームルームの時間まで二度寝をしようかと机に突っ伏す。時間はまだたっぷりあるのだから、問題はなからう。

冷たい机でうとうとしかかっているところ、教室のドアがガラガラと開く音で眠気が飛ぶ。入ってきたのは一誠だった。

「あれ、お前随分と早いんだな」

「一誠こそ。今日は一人なのか」

「ああ、松田達と夜通しAV鑑賞してから直で来た」

それは無断外泊にあたるのではなからうか。瞬は訝しんだ。二人して暫く机に突っ伏していたが、ふと思ひ出したかのように一誠が瞬に訊いてきた。

「なんで、知り合つて間もない奴の為にあんなに身体をはつてくれたんだ？」

「言うまでもないさ。出会つたばかりだろうがそうでなからうが、友達は友達だろ。それに、見捨てたらアイツに合わせる顔がないしな」

「アイツ……つてドイツ？」

その時、バタバタと煩い足音が廊下から聞こえてきた。

「話をすれば」

「ごうらあ瞬！お前に抗議やからな！」

やつかましい声が、ぼちぼちと人が増えてきてた教室を振るわせる。反射的に瞬が立ち上がると、教室の入り口にいた唯がつかつかと瞬の元に歩いてきて、がしりと腕を掴む。

「朝から元気満々だなあお前。こちとら寝不足なんだ」

「またラスト置いてけぼりだったんだけどお！瞬！もつと私に構つてくれないかなあ!!
? 私達、幼馴染みだよね!!?」

「泣きつくなそして抱きつくな！周りの目線が『女の子泣かせた極悪人』的な感じになつてとつても鋭いんだけど！」

「嫌い！放課後は瞬の奢りで本屋ハシゴするからね！」

「会社終わりの一杯つばい感覚で言うな！」

いつも通り唯にタジタジにされる瞬を見ながら笑う一誠だったが、そこに今し方登校してきた松田と元浜が一誠の肩に手を置いて、

「おーいイツセー！てめーこの半月でどんだけ未来に進んでんだよお！羨ましいぜえ全くよおー！」

「処す？処す？！」

「……悪いな、俺はまだまだテメエらより先に大人の階段を登るぜ」

フツ、とカツコよく切り返した——つもりだったが、二人から羨ましさと妬ましきの籠った頭グリグリ攻撃をうけた。

少しずつ、人の輪は広がる。人間も、それ以外も巻き込みながら。

真の赤龍帝の物語も、ここから始まってゆくのだ。

誰かがつぶやいた。

「ああ、やはり彼はイカれているよ。正気を失ったというかより、本性を表したといつたところか。まあ、ヒーローなんだからそれくらいは当然つちやあ当然なんだけどね？ 彼の道のりは前途多難だ。狂わせた元凶の責務として、私が導かねばなるまい」

それは決意表明、もしくは言い訳。
その心中は、誰にも知りえない。

t o b e c o n t i n u e d

第14話 赤と青の通り魔

夜の埠頭に響く足音。

まるで何かを恐れ、それから逃げるかのように、酷く慌てた様子で駆けてゆく一人の男。

「ちくしょう！天罰ってやつなのか!?!? あんな事やったからなのか!?!?」

靴が脱げた事にも気付けない程に切羽詰まっているようだ。悪態をつきながら逃げ続けた彼だが、気付けば袋小路。既に逃げ場は無くなっていた。

「ゆ、許してくれえ！引つたくりなんて二度としない！だから命だけは助けて……お願いしますう！」

泣き喚きながらの、必死の罪の告白も、その影には届かなかった。

《Ready Go!》

「ああああつ！」

眼前に迫る恐怖。

それに対する絶叫を最後に、彼の意識は途絶した。

翌朝 逢瀬家

『今回の事件で通り魔による被害は7件に達しました。目撃者の証言によると、暗くてよく見えなかったが、犯人は赤と青の変わった姿に見えたとのこと。今のところ死者はでていませんが——』

「おつかないなあ……」

数日前から世間を騒がせている通り魔のニュースを見て、環士郎が不安を抱く。世界的に見れば平和ボケしてる日本人ではあるが、流石にこんな事件が地元で起きて平気な奴はいないだろう。

「この調子だと、部活休止や遠足中止にもなるかもね。ま、二人とも部活はしてないから関係ないか」

「遠足潰れんのは許しがたいね……楽しみじゃないといえは嘘になるし」

ソファーに背中を預けてスマホを弄りながら湖森が応える。時刻は午前7時半を過ぎた頃。時間にはまだ余裕があるので、朝の支度を済ませて一息ついてる逢瀬兄妹。

その時。

ピンポーンピンポーンピンポーン！

連打されるインターホン。誰だ朝っぱらからこんな下らない事をやってるバカタレは。

「朝早くからなんだよ？湖森、でてきてくれ」

「やだよめんどくさい」

対応を面倒くさがって兄妹で押し付けあつてる間にも、連打され続けているインターホン。平日の朝からこんな非常識なことをやつてる馬鹿はいつたいつたこのどいつだというのだ。

「あーはいはい煩いから連打しないで」

繰り返し鳴らされるインターホンの音に耳を塞ぎながら、瞬は玄関のドアを開ける。

なんか無駄にでかい胸のおねーさんがいきなり来訪してきやがった。

「なっなんで……てかいい年した大人が朝から人ん家上がり込むんじゃない！」

「なにおう！私はピッチピチの19よ！来月には誕生日だけど！」

「言い訳になつてないしいらない情報だからそれ！てか何しにきたんですか貴方は！て

さ誰？」

「トモリさん、いくらなんでもこんな時間に来るのは非常識だよ。トモリさんは大学生だから時間があるんだろうけど、皆は違うんだって」

「いやヒビキちゃんそれ以上に暇してるよね？きつと毎日が日曜日状態だよな？」

「で、あんた誰なんすか。俺にあんたみたいなの非常識な知り合いは唯以外いなんですか」

「わ、私を忘れたというか君は！」

忘れるも何も、そもそも接点ほぼゼロである。瞬はほとんどヒビキや唯からの又聞きでしか彼女を知らない。話を聞くに、春休みに倒したオリジオンの知り合いだったらしいのだが、んなの知るわけない。

「湊トモリ、19歳！好きなのは食べること全般、嫌いなものは」

「ちよつと待っていきなり話進めないで!!? てか言つときますけどアンタと俺はほぼ接点ないですし！友達の友達の親戚レベルだから！通報していい!!?」

気が狂うような会話の勢いと非常識なトモリにキレ気味に対応する瞬。彼がこういうのも至極まつとうなのはまあ分かるだろう。

「流石にだめだつて。かわいそうだし、追い出すくらいでいいじゃんよ」

「元氣になつたのはよかつたけど、アポは取るべきだよね」

ちびつ子二人も簡単にトモリの味方とはいかない模様。ヒビキとネプテューヌの言葉にうんうんとうなずきながら、瞬はトモリの背中をぐいぐいと押して玄関まで行く。

「帰つた帰つた！朝早くから凸するとか馬鹿かアンタは。せめて日を改めて来てくれ、頼むから」

「そ、それにほら。もうそろそろ出発しないと学校に遅刻しちゃうよ？ 皆勤賞狙ってるんじゃないかったっけ？」

環士郎の言葉で時計を見て気づく。たしかにそろそろ出発する頃合いだ。しかし、この痴女子大生をどうしたものか。

「えーと、この子ならオジサンがなんとかしとくからさ。二人は学校行つてきなさい」
「ごめん叔父さん！」

環士郎に礼を言いながら、瞬は靴を急いで履いて家を出る。

あんなよく分からんもののせいで遅刻なんてまっぴらごめんだ。

朝から酷い目に遭つた瞬の精神は、この時点で結構疲労していた。もちろんそれは湖森も同じ。

「あー酷え目にあつた」

「そーだね……」

先程の光景を思い返し、兄妹揃つて遠い目になる。やべー奴がいたもんだ。現代社会

恐るべし。

「き、気を取り直していかねば。さっきのことは忘れよう、な?」

「ソウダネアレハアクムダツタ。ソーユーコトニシテオコウ」

兄妹仲良く忘れることにした。ぶつちやけただの逃避に過ぎないが、その方がいいに決まつてる。あんな馬鹿に思考領域を割くと無駄に疲れるだけだ。

時刻は8時をまわり、タイムリミットは後30分を切った。ちよつと出るのが遅くなつた為か、学校に着くのはギリギリになりそうだ。密かに皆勤賞を狙つてらっしゃる逢瀬少年は、内心焦り気味なのはここだけの秘密である。

「しっかし、なんで学校を坂の上で作つたんだろうね。作つた奴バツカじゃないの?」

学校前の坂道に着いた。瞬達の通う学校は、天統あますべの街を見下ろせる小高い丘の上に位置する。まるでアニメに出てきそうな立地だが、実際に通う側からすれば不便この上ない。徒歩だと長い坂道が辛いのは言うまでもなく、自転車だと下り坂でスピード出し過ぎて事故るケースが毎年のようにある為、危なっかしいことこの上ない。

瞬の目の前を歩く少年も同じなのか、足取りが軽くフラフラになっている。見ていて危なっかしなあと瞬と湖森が思っていると、

「ふんぎゃっ」

街頭に思いつきり顔面をぶつけ、潰れたカエルのような声をあげた。少年は蹲つて額

を抑え、苦悶の声を漏らす。

「だ、大丈夫か……なんかフラついてるけど」

思わず瞬は少年に声をかけた。少年は顔をあげて返答する。

「だいひょーふ……ただの低血圧……い、いったあ……」

「お前は同じクラス……志村だったっけ」

「……うん、志村優始^{しむらゆうし}。君は……逢瀬くんだったかな。いてて……」

あまり関わりが無いクラスメイトといえど、流石に半月もすれば数人くらいは顔と名前が一致してくる。弱々しい雰囲気^{きふうき}がダダ漏れな少年は恥ずかしそうに笑いながら、差し出された瞬の手を取る。

「情けない姿を見せちゃったね」

「情けないというか……あんなに綺麗に電柱にぶつかると、初めて見たかも」

「湖森、言ってるな……」

街頭にぶつかった際に乱れた金髪を軽く手で整えながら立ち上がる志村少年。顔はいいのだろうが、先程の一部始終を見ていた逢瀬兄妹にとっては、どこか抜けたところのある、所謂残念なイケメンという印象しか感じられなかった。実際そうなのだが。

「もう大丈夫、少しマシになったかも」

「おいおいホントかよ。無理するなって」

心配する瞬達を他所に歩き出した志村。

が、数歩として歩かない内に、地面のでっぱりに足を引っ掛けて顔面からずっこけた。痛そうな音に瞬と湖森は一瞬身震いするも、ほっとくわけにもいかないので、再び手を差し伸べる。ひよつとして、コイツはドジっ子属性持ちだったりするのだろうか。

「痛くないか？」

「いいよ、これくらい良くあるんだ」

「いやほんとに大丈夫かよ？盛大にすつ転んでたけどさ」

流石に1分もしないうちに2回も怪我をする奴を心配するなど言う方が無理があると思うのだが。志村は遠慮がちに差し伸べられた手を掴む。

「ほんと、気にしなくていいから……おっとっと」

瞬の手を借りて立ち上がる志村だが、よろけて数歩ほど後退する。

そして。

べちより

「あ」

何か柔らかいものを踏み潰したような音がした。同時にあたりに広がるなんとも言えない香り。即座に逢瀬兄妹は悟った。

—— 間違いない、コイツウ○コ踏みやがった。踏み潰された汚物からなんとも言え

ない臭いがあたりに広がる。

「お前さあ、大丈夫？靴取り替えた方よくない？」

「大丈夫大丈夫……僕昔から運が悪くてき。こーゆーのは慣れてるから」

「大丈夫なのそれは」

嫌そうな顔をしながらも湖森が突つ込む。逢瀬兄妹からすれば、大丈夫そうには見えないのだが。そして運が悪いというよりただのドジなのでは、と僅からながら思い始めるのであった。

まあ色々あつて校門に着いた。校門前では風紀委員が生徒指導の教員と共に遅刻の見守りをしている。瞬達を通り過ぎようとすると、門の前に立っていた風紀委員の一人が少し嫌味の籠つたような声をかけてくる。

「早くするんだ。僕といえど、他人を叱責するのは好きではないんだ。そんな事させないでくれ」

「風紀委員の遅刻喚起週間だったな、そういえば」

「いやいや時間見て！あと3分で遅刻だよ！」

と、ここで湖森が血相を変えて叫ぶ。すかさず腕時計を見ると、時刻は8時27分。家を出るタイミングがいつもとズレていたせいで、時間感覚が若干バグってたらしい。

「げえっ！走れ走れ！志村、お前もだっ！」

「ふももえんぐえげおんもえちよつちよつちやつさつ！」

瞬は咄嗟に志村の襟首を掴んで引つ張っていく。どたどたと校門を走り抜け、確かめるように、立っていた風紀委員に訊く。

「セーフだよな、な？」

「……早く教室に行け。ホームルームに遅れるけどいいのか？」

朝からこの調子だと疲れるなあと、溜息をつく瞬。そこに、襟首を掴まれたままの志村が一言。

「ぐるじいはなじで」

「あ、ごめん……」

時間は進んでお昼時。食堂に向かう唯と瞬。

今朝の出来事を聞いた唯が一言。

「朝から災難だったねそりや……」

「ホントだよ畜生。てか何あの人、あんな人だったの？ ドン引きしたんだけどさあ」

「でもまあ、悪い人じゃないよ。しよつちゆうヒビキちゃんと一緒にお見舞い行つてた私が証人さ！」

「お前の善人認定雑すぎるんだよなあ」

他人事だと思つて樂觀的なことを言う唯に、ため息混じりに悪態をつく瞬。今朝のエンカウントからして、瞬にとつては少なくとも変人である事には変わりない。間違つても常識人とは判断できないし、したくもない。

「そもそもなんで今食堂に向かつてるんだっけ」

「弁当忘れたんだよ。あの変なオバサンのごたごたのせいだな」

せつかく作つてもらつた弁当が無駄になつてしまつた事に対し、申し訳なく思う。これも全部トモリつて奴のせいなんだ。酷い奴だ。そんな感じに脳内で彼女をサンドバッグにしながら、瞬は食堂にたどり着いた。初動が遅かつたせいか、既に食堂は多数の生徒でごつた返している。並ぶ生徒の列をかき分けながら、比較的安い生姜焼き定食のトレイを持つて空いていた席に座る。

「多いな畜生。これだからあまり使いたくないんだよな」

「でも安い・美味しい・たまに不味いのが学食のいいところなんだよな」

「いや最後の絶対良くない。致命的な欠点だよな？」

思わず突つ込む瞬だが、そう言われると、心なしか目の前の生姜焼き定食を食べる気

が失せてきた。だが、腹は減ってるし、何より実際に食べずして味のジャツジを下すなど、作ってくれた人に失礼にも程がある。いただきますの挨拶をした後、出来立ての豚の生姜焼きに箸を伸ばそうとしたその時。

「ごめんだけど、隣いいかな?」

なんかナヨナヨした感じの声をかけられた。見上げると、其処には今朝もみた頼りなさそうな男の顔があった。向こうもようやく気づいたらしく、少し驚いたような顔をしている。

「志村……」

「あれ、逢瀬くん?今朝方ぶりだね。で、もう一度聞くけど、隣いいかな?」

「あ、ああ。別に構わないけど」

混雑しているし、別に誰が座ろうが気にしないので譲ってやることにした。唯の隣に座り、カレーが入った皿の乗ったトレイを机に置く。

「いやー良かった。このままずっと座れないんじゃないかと思ったよ」

「意外だね、瞬と志村が友達だったなんて。瞬は昔から友達作りが苦手な方だったからねえ。成長して私は嬉しいよ」

「気持ち悪いからその親ムーブやめろ」

「反抗期?……じゃあこれから私はクソババア呼ばわりされるってワケね!?」 楽しみ

「だわ！」

「だからやめろって言うってんだろぅが！てか何反抗期楽しみにしてるんだ。家族に反抗期を期待されたらかえって反抗しづらくならないか」

と、ここで蚊帳の外状態で2人のやりとりを見ていた志村が一言。

「隣の子は……彼女さん？」

「「んな訳あるかつ!!？」」

見事にハモりました。必死の形相で否定する二人を見て、地雷踏んじまったと理解した志村は、黙り込みながらも、「いやこのハモリ具合……そのうち本当に付き合い始める可能性も微レ存……？」と思わずにはいられなかつた。

「……今朝のあれはどうなつたんだ」

先程のアレを誤魔化すように無理矢理話を変える瞬。ここでの“あれ”とは今朝のやつである。志村がべっちよりと踏んでしまったアレだ。

「出来る限り洗ってみたさ……というか食事中にその話題はふらないで欲しかったな」

「自分から話振つといてなんだけど、若干食欲失せたわ」

「あ、それこの食堂のなかでもブツチギリに不味いから気をつけて」

「うげえ……やっぱり不味い……」

志村の忠告も間に合わず、瞬の口の中でいろんな味の合体事故が繰り広げられた。見

「目が普通なくせに、中身がカオスなのだ。食にこんなものは求めてない、やめてくれ。大丈夫？水で流し込む？」

「一体なんの話をしてるんだお前たちは」

唯から水の入ったガラスコップを受け取り、なんとか流し込む瞬。そこに、どこか皮肉めいた声が割って入ってくる。

「お前今朝の……」

そこにやって来たのは、今朝の風紀委員の男子生徒だった。はて、彼とは殆ど接点が無かったはずなのだが、一体どうしたことか。少年は瞬の顔と、瞬は食べかけの生姜焼きをまじまじと見つめている。

「君は風紀委員の……高山くんだったけ？」

「ああ。クソ不味い生姜焼き定食に果敢に挑まんとする命知らずが居ると聞いてな。誰かと思ひ興味が湧いてきて見てみたら君だったというわけだ」

「そんなに有名だったのかこれ……どーりで食券みた奴が『こうかいしませんね？』と聞いてきたのか。これ残そうかな……白飯だけで食おうと思えば食えるし」

「どうやら瞬の思っていた以上に、無謀な挑戦だったようだ。いやそんなにやべーのなら改善しろと言いたい。この不味さだとクレームの10つや20つは平気で入ってそうなのだが。」

そう考えているうちに、瞬はだんだんと腹が立つてきた。なんでこんな拷問じみた昼飯を食わねばならんのだ。よし、残してやる。そう決意して瞬は生姜焼きの皿を持ち、残飯処理BOXのある食器返却コーナーに向かおうと立ち上がる。

「あれ、残すんだ。やはり君でも無理だったか……」

「完食する頃には味覚おかしくなるわ。不本意ながら残させてもらう」

「駄目だ。それは許されない。周りも、僕も」

弱音を吐いた瞬に対し、それを妙に強い口調で否定する高山。何故だかわからないが、目付きも若干怖くなっているような気もする。

「まあそれを完食でもしたら確実に味音痴が移りかねないからね……うん、僕だってそうする」

「駄目だ。残さず食うんだ。それでも高校生か？ そういった些細な悪事から人は墮落していくんだからな」

「ちよつと言い過ぎじゃない？」

話が脱線しはじめ、何故か瞬を詰り始めた高山。その異様な様子と発言内容に唯が思わず苦言を呈するが、

「そんなはずは無い。不義に怒り、正義を愛する。それが人間としての正しさだ。それ以外に正解はない——」

「ちよつとまで、流石に俺も——」

あまりにも度を超した言いように、瞬も少し怒り気味に反論しようとしたその時、

「あ、メガネ君じゃーん！」

「あつ……」

見るからに不良です！と言わんばかりの柄の悪そうな男子生徒が高山に声をかけてきた。ピアスやらなんだかよくわからない金属製のアクセサリーやらをジャラジャラくつつけたその不良は、急に萎縮した高山の肩に手をかけて、

「いやー、丁度よかつたわあ。マジで良かった。ちよいつら貸してくんね？拒否したらどうなるかは分かつてるよな？」

「っー」

「俺らかーなーり金欠で機嫌悪いワケ。後は分かるよな？」

このやりとりだけでも、瞬達はなんとなく察してしまった。高山はこの不良達に遊ばれている。俯きながら身体を震わせる彼の姿を見かねて、唯が助け舟を出そうとする。さつきまでの険悪ムードを理由に、今日の前で怒つてることを見過ごすのはできない。

「あの一、なんか本人嫌がつてるみたいだし、やめてあげたら？」

「いやいやいや、これが俺ら流の絡み……的なの？てか中中八九挨拶無視する奴が悪いよな？普段挨拶運動とかしてる風紀委員が挨拶無視とか、風紀委員の風上にも置けねえ

よなあ?」

しかしこの不良、無駄に弁が立つ。後半はまともとも言えなくもないのが余計に苛立つ。だが所詮は屁理屈。唯は臆せず不良を睨みつける。対して志村は無茶苦茶ビビってる模様。まあ普通の反応だろう。

「まずいよ……この人達めっちゃ怖いんだって! 反抗したら唯ちゃんが……」

「てかなんだ? 女のくせに口答えしようつての? 調子こいてんじやねーぞ」

「そーだそーだ! 俺達はダチだもんなあ? ダチの頼みが聞けねーつての? あん?」

「反抗したらどーなるかわかるよなあ?」

取り巻きらしき連中も野次を飛ばしてくる。というか、大勢の目の前でよくこんな事できるものだ。怖いもの知らずにも程がある、と瞬は内心呆れてしまいが、高山は放つて置けないし、このままだと唯も危ない。

決心して、唯と不良の間に立つ。

「そこまでしておけ。高山も、他の皆もビビってるだろうが」

「しゃしゃりでてんじやねーぞダボが! 内蔵残らず吐き出されてえのか!」

「困ってる奴に声かけて何が悪いんだ。高山の奴、見るからに怯えてるだろ。初対面の俺達だつて分かるんだから相当だと思っただが」

「なんだお前、生意気だな。ぶっ飛ばされてえのか、ああん?」

「オシマイだ……」

瞬まで逆らいたし、志村は頭を抱えて震える。食堂にいた他の生徒たちも、先生を呼びにいこうとしたり、必死に気配を消して被害を免れようとしたり、早々に食堂を立ち去ろうとしたりと、この状況に対して様々な反応を見せている。中には、瞬と唯を指差して、無謀だのアレは終わりだのとヒソヒソと言いつ合っている者もいる。

だいぶ騒ぎが大きくなってきたが、不良は意にも介さず、高山の肩をがっしりと掴みながら瞬を睨みつける。

「ビビってる？……いつが？お前の思い違いじゃないのか？高山あ、お前はどなんだ？ええ？」

ドスの聞いた声で念を押すように、本人に問い掛ける。高山は、震える声で答える。
「大丈夫……嫌じゃないんだ。僕は」

明らかに脅迫だろう、とその場にいた誰もが思った。明らかに声は震えているし、俯いた顔には恐怖の感情が浮かんでいる。が、不良は鈍いのか無視しているのか、それを意に介することなくヘラヘラと笑いながら高山から離れ、瞬の目の前に歩み寄る。

「ほら、本人もこう言ってるだろ。だからよ」

「……？」

「オラっ！」

「ぶはあつ!?」

次の瞬間、不良のストレートパンチが瞬の顔面にクリーンヒットした。瞬はぶつ倒れ、椅子に頭を打ちつけ、辺りに鈍い音が響いた。

「俺様に盾ついた罰だ。時間がねえから一発でガマンしてやんよ」

不良達は倒れた瞬を嘲笑いながら、高山の肩にガツチリと手を回して食堂を立ち去っていった。あたりはしばらくの間静まり返っていたが、近くにいた生徒が倒れた瞬を心配して声をかける。

「だ、大丈夫かアンタ……鼻血出てるし、頭打ってるし……」

「大丈夫……つてえ……」

「瞬! 大丈夫? なんともない?」

周囲に心配されながらも、痛む頭を押さえながら起き上がる瞬。鼻頭周辺も後頭部もじんじんと痛むのが伝わってくる。痛みのサンドイッチ状態である。

「私のために……」

「唯、考え無しに突っ込むなよ。俺が割って入らなかつたら、殴られてたのはお前だったかもしれないんだぜ?」

「ごめん……でもどうしても我慢できなくて」

「お前らしいっちゃらしいけどなあ」

予想通りの答えに、思わず呆れて笑う瞬。
その時。

「ぎやあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああつ！」

直後、何かを叩きつけるような、鈍く生々しい音と共に絶叫が響き渡った。一瞬で静
まり返る食堂。そして、開けっ放しになっていた扉から何かが投げ込まれる。

鈍い音とともに投げ込まれたそれは。

「あ、あ、ああ、あああああああああああああ！」

「なっ……なんだコレエー！なんなんだあ！」

それは、先程の不良達だった。彼らはボゴボゴに殴られたかのように身体中に真新し
い痣を作り、歯が抜けていたり、顔が腫れていたりと酷い有様である。いくら先程のい
ざござで悪印象を持っている相手であろうとも、ここまでされても気分が悪くなるだけ
だ。

さらに追い討ちをかける様に、横たわる不良達を踏みつけながら、入ってくる人影。
燻んだ赤と青で構成された、人型の怪物。ウサギともなんかの兵器とも見て取れる左右
非対称のフォルム。

「フー……フー……」

瞬はそれを知っている—— オリジオンだ。

—— たちまちに、阿鼻叫喚の嵐が来た。

「うあああああつ！」

「きやあああああつ！」

一目散に逃げ出す人々。日常が、恐怖を纏った非日常に塗り替えられてゆく。

「あ、ああ……あばばばばばあがふつ！」

「志村!?」

「ひはかんは……」

志村は驚きのあまり腰を抜かすと同時に、パニックになって自分の舌を噛んでしまい、驚きと痛みの中で悶え苦しみ出した。何やってんのコイツ、と瞬は思いながら、志村の手を引つ張つて目の前のヤバそうな怪人から引き離す。

「あれが通り魔……? どう見てもオリジオンじゃんかあ！」

「だよな……じゃなくて、とめないと！」

「気を付けて……なんかコイツヤバそうだよ」

「変身！」

瞬はアクロスに変身しながらオリジオンの元へと走り、執拗に不良達を痛めつけようとするオリジオンを止めようと羽交い締めにする。

「やめろ！これ以上やったら死ぬぞ！」

「邪魔するなあ！」

オリジオンはアクロスを振り払うと、振り返り様に殴りかかってきた。アクロスはそれをひらりと躲し、オリジオンにタックルを仕掛けて不良達から引き離す。

オリジオンは再び瞬を振り払うが、すぐ様アクロスはオリジオンの腹を一発殴り、脇腹に回し蹴りをくらわせて吹っ飛ばす。どうやら、今までの敵よりは強くない様だが、人に危害を加えてた以上は止めるべきだ。アクロスはトドメを刺そうとベルトに手をかける。

が、その時。立ち上がったオリジオンが、何処からか小さいボトルの様なものを2本取り出してきた。

「一体何をやる気なんだ……？」

思わずアクロスは身構える。すると、オリジオンはその2本のボトルを自らの口へと持っていく、なんと一気に口の中へと放り込んでしまった。予想のつかない行動に驚く瞬と唯だが、まだ終わらない。

？ホークガトリング……y e a A A A A !?

突然、オリジオンの左腕がぐにやりと崩れ、ガトリングのような機構へと変形する。同時に背中から錆塗れの鉄の翼を生やし、空へと飛び立とうとする。

「逃がさない!」

「はあああああああ!」

オリジオンはガトリングを構えたまま、低空飛行で瞬に向かってくる。

「ああつ」

すれ違い様の一撃。スピードで威力を増した右ストレートがアクロスの胸元に滑り込むように命中し、彼の身体を地面へと倒す。オリジオンはアクロスを少し通り過ぎてから振り返り、構えたガトリングの狙いを定め、引き金を引いた。

「瞬……!」

ズガガガガガガガガツ!!?

オリジオンのガトリングが、爆音と硝煙と葉莖をばら撒きながらアクロスめがけて掃射する。唯は慌てて校舎の影に身を隠し、瞬も弾丸の雨を掻い潜りながら、ツインズカリバーを銃の形へと変形させ、オリジオンのいるであろう場所に向かって撃つ。

が、当然当たらない。硝煙でアクロスの視界が塞がれた隙をつき、オリジオンの方はそのまま飛んで逃げていく。なんとか煙を振り払うが、その時には既にオリジオンの姿は消えていた。

「逃げられた……」

「なんだったの、あいつ……てか何処から来たんだろう」

「さあ……?」

オリジオンの飛んでいった方向を見つめる瞬と唯。

後には、混乱と不安だけが残されていた。

とある場所。

テレビのニュースを観ながら、二人の男が会話していた。

「おいおい、これマジなのか? マジなのか? もしかしてまたアレ絡みじゃないよな?」

「その可能性は低そうだが……流石にほっとけ無いな」

「■■■■をパクられた上悪事に使われてるとなると、本家本元が動かないって訳にはいかないし、コーユーのが俺達の役目ってもんだろ?」

「まあそうだな。何度だって愛と平和のために戦ってやろうじゃねえか、それが俺達だからな」

「筋肉馬鹿のくせに良い事いうなあ。今朝変なプロテインでも拾い食いたのかよ」

「別に良いじゃねえか。ほら、確かめにいくんならさつさといこうぜ」

「ああ、ちゃんとチャックは締めろよ?」

「うるせえ。さつき締めたから大丈夫だったの——」

なんやかんやで放課後になりました。

今日は遅刻やら弁当紛失やらオリジオンやらでめちゃくちゃな一日であった。特に最後のは学校側にとつても色々とヤバかったらしく、昼からの授業は無くなり、全生徒は強制的に下校させられることとなった。

帰りのホームルームも終わり、早めの放課後が訪れる。早く帰らないと学校側がうるさくなるので、瞬は帰りの支度を進める。そこに、空気を読まない唯がやってくる。

「昼から暇になったし、どっか遊びに行かない?」

「遊びについて……どうせ古本屋とか中古ゲーム屋とかをハシゴするだけだろお前」

「な、なぜ分かるんだ瞬!見たのか!?!? パンツ見たのか!?!?」

長年の付き合いだからこそ分かるのだ。瞬は、まったくよく飽きないな、と呆れながら帰りの支度を黙々と進める。あとパンツは見えないし関係ない。唯のパンツ見ることで得られる情報にどれほどの価値があるというのだ。少なくとも瞬にとっては微塵もない。

と、そこに瞬達の会話が耳に入ったのか、高山がやってきて注意をする。オリジオンの騒ぎの後、こうして教室に戻ってきたのだが、あれから大丈夫だったのだろうか。

「念の為言っておくが、寄り道禁止だぞ。遊びに行くなど言語道断だからな」

「……わかつてますよ」

去つていくの背中に向かつて不満そうに返事をする唯に対し、絶対分かつてないだろう、と思う男性陣。分かつてない奴ほど言うのは皆さん既にお分かりだろう。

と、ここで瞬は去つていく高山にある疑問をぶつけた。

「お、おい。昼間のやつは大丈夫だったのかよ!?」

「君には関係がないだろう、忘れてくれ」

しかし、彼は冷たい声でそう答えると、そのまま颯爽と教室を出て行ってしまった。声をかける間もなかった。

『瞬君。悪いんだけど、ちよいと夕飯の買い出しに行つてくれないかな？ちよつと急用が出来ちゃつて、夜まで帰れなくなつたんだ、すまない』

学校を出てすぐ、叔父からこんな電話がかかってきた。教師に見られたら即生徒指導送りだが、今朝見たら冷蔵庫の中身があんまり無かつたし、まあいくら寄り道するなど言われたところで、晩飯抜きにしていい理由にはならない。

だが制服のままなのは流石にどうかと思つたので、スーパーと学校が真反対の方角にあるというのもあるのだが、一旦帰つて着替えてから行くことにした。が、スーパーの前で瞬がぼつり。

「何もお前らまでついてくる事ないんだけどな」

彼の後ろには湖森と、気持ち悪いくらいにつこにこ状態な唯がいる。まだ家族である湖森は分かるが、何故唯まで一緒に居るんだ。帰る際に一旦別れたのは夢だつたのだろうか？

唯はニヤニヤ笑いながら瞬をからかう。

「いやほら、そこはまあ幼馴染み特権とかを濫用すれば問題はないんだよねえ。悔しいでしょうねえ」

「濫用の時点で問題だろ。なんで我が家の買い物に堂々と参加してるんですかねえ！」
「だつてウチの近所ですし？ そーゆー瞬こそ、もつと近場のスーパーがあつたのではなくって？」

「いやだつて今日はここが一番おトクだし」

「私としては唯さんと一緒に満足なんだけどなー」

すつかり唯に懐柔されてる湖森はこの始末。よし、早いことおつかい終わらせて帰ろう。そう決心し、自動ドアを通ろうとしたが、ふとその横にあった自販機が目に入る。

そこには。

「どこに行つたんだ……流石に500円は惜しいんだよなあ……」

なんか見た事ある金髪が自販機の下を必死に覗き込んでいた。

いや何やってるんだよ、と思いながらも、とりあえず声をかけてみることにした。

「また会つたな」

「あ、逢瀬くん……奇遇だね」

顔をあげて志村が答える。

「今日はやたらとお前と遭遇するんだけど……もしかしてストーカー?」

「僕をなんだと思ってるのさ……」

なんか二人の間に惹かれ合う何かがあったりするのだろうか? 瞬はふと想像してみたが、割と気持ち悪かったので思わず身を震わせた。女性陣がなんか気になるような目で瞬を見てるけど気にしない気にしない。

唯は答え合わせをするかのようにな、志村に問いかける。

「大方予想はついてるけど、何やってんの?」

「小銭……落としたんだ」

ホント何やってるんだよ。今朝から色々あったが、もしかしてこいつめちやくちや不幸体質なのではないだろうか？ 本人は諦めたのか、立ち上がって大きな溜息をつきながら、分かりやすいくらいに肩を落とす。500円の損失はデカかった。

こうして志村少年が瞬のパーティーに加入した。する必要が皆無なのだが、何故かこの4人で動くことに。ほんと何故だ。

入店早々、唯はお菓子売り場に直行していった……と思いきや、10秒足らずで瞬達の元へ帰還してきた。お目当てらしきお菓子……いや、なんかよくわからない食玩の箱を瞬に見せつけ、

「瞬。これ買ってよ」

おねだりし始めやがった。高校生が幼馴染みにタカって恥ずかしくないんですか？ 当然ながら瞬は突っぱねる。というか唯もおつかいに來てるのだから、金くらい持つてるだろうに。

「なんで食玩を持つてくる。買わねえよ」

「パパ、良いでしょ？」

「だれがパパだ」

瞬と唯のやりとりを見ていた志村は、思わず、

「仲睦まじいね、二人とも」

「いや誰がこいつみたいなの問題児とラブラブだつて？」

「志村はそこまで言つてないよ、多分」

昼間の繰り返しである。志村、少しは学習したまえ。一連のやりとりを見ていた湖森は、呆れ笑いをしながらも、内心では志村に同意していた。というか、常日頃から「早く二人に恋愛感情とか芽生えないかな」と、本人達からすれば余計なお世話と言わんばかりの考えを持っていた。長年の付き合いだからこそその考えである。

と、妹のそうだった気持ちも露知らず、瞬はちやつちやと頼まれたブツを手際よく買物カゴに突っ込むつこんでいく。唯は瞬を時折おちよくつたり、隙を見ては菓子類を瞬のカゴに突っ込んでやり返されたりしている。そんな兄とその幼馴染みの姿を背後で見守る湖森がぼつり。

「もうちよつと分かりやすくイチヤつかないものか……」

「湖森、なんか言つたか？」

「いやいや、何も言つてませんがな。ねえ志村」

「なんでこつちにフツてくるのさ!!？」

おっと、願望が漏れていたようだ。湖森はなんとか志村に押しつけて誤魔化しを図る。苛んだなあ志村くん。

そうしてゐるうちに、なんだかんだで会計も終え、スーパーを出ようとする。しかし、
「あいてっ」

店を出ようとしたその時、後ろからなにか慌てた様子の、フードを目深く被った男が瞬にぶつかっていった。どこ見て歩いてるんだ、と内心苛ついた彼だったが、直後に店員らしきおばちゃんが血相を変えて叫んだ。

「万引きよおおお！ オツペケペンムツキー！」

「万引き……？ もしかしてさっきの？」

人の少なかった店内が騒然としだし、咄嗟に高校生くらいの店員が万引き犯の後を追うように走り出す。

「今日は厄日か？」

「厄日って……？？」

「とにかく今日はツイてないってことだよ」

万引き犯は店の敷地を飛び出し、敷地沿いにある坂道を登っていく。瞬達のいるスーパーの建物の入口付近からもよく見える。万引き犯は意外と逃げ足が速く、このままだと坂の頂上にある踏切を使って撒かれるかもしれない。

その様子を見ていた唯は、おもむろに瞬に自身の買ひ物袋を押し付けると、

「瞬、ちよつと荷物お願い」

「え、ちよいまさかお前」

瞬の制止も聞かずに、万引き犯を追いかけ始めた。常日頃から、運動神経に自信があると豪語するだけあって、めちやくちや速い。ぐんぐんと瞬達との距離を引き離していく。

「またこのパターンかよ！ああもう！湖森、荷物頼む！俺も唯を追いかけるからー」

昼間の食堂での事を思い出して、悪態をつきながらも、唯を心配した瞬は彼女を追うことにした。湖森に二人分の荷物を託し、唯を追いかける瞬。

一方、万引き犯の目の前にはでかい踏切。そこに差し掛かると同時に、踏切が鳴り始め、遮断機が動き出す。チャンスだ、と思いながら、

万引き犯は踏切を急いで駆け抜けようとする。が。

「逃さないぞ、悪人め」

それを遮るかのように、フードを目深くかぶった男が万引き犯の前に立ち塞がる。

「邪魔だどけっ！」

「断る」

そうこうしているうちに、遮断機が降り切ってしまった。踏切で撒こうとしたのに、これでは失敗だ。捕まってしまう。

「丁度よかった。そいつを捕らえてください！」

そこに、追つてきた店員が万引き犯に追いついてくる。一本道で挟み撃ち。更に片方は踏切で塞がっている。万引き犯にとつては万事休す。

ところが、ここで予想外の事態になる。

「そんなんじや生温いんだ。悪人には、こうしなきゃ」

《KAKUSEI……BUILD!》

そう言うと、男の身体の至る所にジツパーが現れ、まるで着ぐるみを脱いでいくかのようにジツパーが開いていく。同時に、黒ずんだ煙が男の全身を包み込んでいき、その煙の中から赤と青の瞳が不気味に輝く。

「は……え？」

呆然と立ち尽くす万引き犯の目の前に、変身を完了した男が立ち塞がる。彼は知る由もないが、その姿は、昼間に瞬達の学校に現れたオリジオンであった。

「うわあああああ！」

店員はオリジオンに驚いて一目散に逃げていく。それを尻目に、万引き犯に対し、淡々とオリジオンは告げる。

「許さない。お前は罪を犯した」

「な、なんだお前！化け物！」

「俺は正義の味方……愛と平和のために、悪事を働いたお前に制裁をくださなければな

らない」

「ゆ、許してくれ！ほんの出来心……遊びだったんだよ！」

この男、反省していなかった。

たった一度、たった1000円の万引きだろうと、店側からしたら大損害なのは変わらない。最悪の場合は廃業まで追い込まれてしまうことだってあるのだ。それに万引きも窃盗と同じ、犯罪である。謝って済む話ではないのだが、彼は愚かすぎた。

オリジオンは万引き犯の態度に失望したかのようなそぶりをみせると、彼の首に手をかける。

「反省しないなら、その命をもらおう」

そう言うのと首にかけて手に力をこめ、彼の首を絞め出した。万引き犯は苦しきからものがきですが、手は緩められることはない。

そこへ、少し遅れて瞬と唯が追いついた。

「あれは昼間の！」

「なっ……」

「あっ……がばぎがあが……」

首を絞められた万引き犯の顔からだんだんと生気が抜けていく。このままでは彼は死ぬだろう。幾ら犯罪者といえど、命を奪っていい理由にはならない。そんなものはた

だの私刑、法律的にも人道的にも許されるものではない。

「何やってんだお前っ!」

「離せ! 邪魔をするな!」

瞬は、万引き犯の首にかけられたオリジオンの手をなんとか剥がそうとするが、逆に蹴り飛ばされてガードレールに打ち付けられる。

「邪魔をするな……邪魔をするんじゃない!」

「いいやするね! 変身!」

《CROSS OVER! 思いを、力を、全てを繋げ! 仮面ライダーアクロス!》

アクロスに変身し、オリジオンの顔を殴り飛ばす。万引き犯はすんでのところで解放され、その場に崩れ落ちる。アクロスはオリジオンを万引き犯から引き離して、オリジオンを強く突き飛ばす。

そこに、遅れてやってきた志村と湖森。志村は、アクロスに変身して戦う瞬をみて驚き、持っていた荷物をその場に落としてしまう。

「なっ……なんだあれ」

「お兄ちゃん……また、戦うんだね」

「あれは一体……なんだ?」

呆然とする志村の視界の先で、アクロスとオリジオンは戦う。オリジオンはアクロス

の顔面や鳩尾などを重点的に狙い、手っ取り早くアクロスをダウンさせようとするが、アクロスはそれを見事に防ぎ、カウンターパンチをお見舞いする。

反撃を受けて地面を転がったオリジオンは、立ち上がりながら瞬を糾弾する。

「そいつは犯罪者なんだぞ！悪人を庇う気か！！？」

「だからって殺す事はないだろ！！？ そんなことをすればお前も悪人になってしまいうんじやないのか？」

両者は再び接近し、殴り合いをはじめめる。オリジオンのチョップを瞬が片腕で打ち払い、腹パンでオリジオンの動きを止める。前回の赤龍帝よりは攻撃が痛くないためか、はたまたアクロスも戦いの経験を少しは重ねてきたからか、アクロスの方が若干優勢の模様。

顔面を殴られてのけぞったオリジオンは、握った拳を震わせながら、怒りのこもった声で反論する。

「……そんな筈は無い。だって僕は正しいことをしている。不義に怒り、正義を愛するのは正しいことじゃないのか？悪を殺す事の何が悪い？お前はヒーローの癖になんでそう思わないんだ？」

オリジオンに問いかけに、アクロスは一瞬戸惑いながらも、力強く反論する。

「それを正当化してしまえば、人の命なんか今よりずっと軽いモノになってしまう！そ

れはダメだ！」

理想論だとは分かっている。だが、それでも正義を盾になんでもしていい、なんて道理が通らないのを瞬は知ってる。フィクションでも、時たま似たような事が叫ばれるのも、彼は知っている。故に否定する。

しかし、オリジオンの方は、その答えがよっぽど耐えがたいものだったのか、その身を震わせながらボソリと呟く。

「……お前なんか」

ガシリと、瞬の拳を掴み取る。

「お前なんかがつ！正義のヒーローを語るなっ！」

そのままアクロスの拳を払い除け、驚異的な跳躍をみせた。10階建てのビルほどの高さまで飛び上がったオリジオンは、そのまま落下しながらキックの体勢を取り始めた。飛び蹴りだ。

すかさず、アクロスは専用武装・ツインズバスターを取り出し、アクロスライドアーツをその柄に差し込む。

? CROSS BRACKET?

斬撃と蹴り。両者の必殺の一撃が激しくぶつかり合う。しかし、

「はああああああっ！」

「がああああああっ！」

惜しくも力及ばず、オリジオンに軍配が上がった。急降下で威力の増した飛び蹴りを受け、アクロスは背中を地面に打ちつけられる。そのままオリジオンはアクロスを押し倒し、馬乗りの体制となる。ツインズバスターは手から落ち、唯達の方へと転がっていく。

「僕は正義だ……愛と平和の為に戦う、正義の味方だ！」

自分が正しい。自分が正義だと、まるで自分に言い聞かせるように叫び続けながら、アクロスに馬乗りになって顔を殴りつけるオリジオン。万事休す——と、思われたが。

「はあああああああああ！」

なんと、戦いを見ていた唯が、落ちてたツインズバスターを拾って駆け出した。志村や湖森は当然静止するが、もう遅い。

「んにやろ……瞬から離れなさいっ！」

「馬鹿お前何無茶苦茶を——」

アクロスの静止も聞かずに、唯はツインズバスターでオリジオンの無防備な背中を思い切りぶった斬った。不意撃ちは見事に決まり、モロに攻撃を受けたオリジオンはアクロスの上から崩れ落ちる。拘束の緩んだその隙に、瞬はオリジオンを蹴飛ばして体勢を

立て直す。

なんとか体勢を立て直したアクロスは、唯からツイーンズバスターを受け取ると、

「無茶してんじゃねえ！危ないから離れる！」

「無茶してるのはそっちの方じゃないか！それにナイスアシストだったでしょ、今の！」
「それはそうだけど……ともかく、危ないから、唯は手を出さないでほしい。お前が傷つくのは、許せないから」

助かったのは事実だが、流石に唯の危険な行動は咎めるアクロス。唯が素直に引き下がる、アクロスは立ち上がってくるオリジオンを見据える。

「君たちも結局は、善人のふりをしたクズか。不義に怒り、正義を愛する。それが人間としての正しさだ。それ以外に正解はない。邪魔する奴は悪だ！滅する！」

オリジオンは怒り心頭のようなだが、ここで瞬が何かに引っかかるような気分になる。今の台詞、どこかで聞いたような ——

《ヒツサーツツ！ フルスロットル！》

その時、唐突に割り込んでくる音声。予想外の事態に両者は困惑するも、次の瞬間、何者かの飛び蹴りが割り込んできて、ぶち当たったオリジオンが横に大きく吹っ飛んだ。

「せやあつ！」

「なっ!?？」

そこにいたのは、銀色の仮面ライダーだった。紫がかったラインがところどころにあり、複眼はオレンジ色に発光し、手にはでかい斧を携えている。

「……オリジオン、お前を狩りにきた」

聞き覚えのある加工音声に、瞬はある可能性に思い至る。

「まさか……またお前か!?!?」

「はあ……それは此方の台詞なんだがなあ」

なんかやたらとアクロスを敵視している転生者狩り、とかいう奴だ。正体は不明だが、またまた戦いに乱入してきた模様。

「懲りない奴だな。まだ戦場に立つ気概があるのか……正義感ってやつはこれだから厄介なんだ」

相変わらず、アクロスを嘲るような台詞を吐いてくる転生者狩り。前とはまた違う姿だが、一体いくつの姿をもっているのだろうか。そんなアクロスの疑問をよそに、銀の仮面ライダー——チェイサーに変身している彼は、歩行者用信号を象った斧をオリジオンに突きつけると、

「だが、お前は後回しだ。まずはその転生者を片付ける!」

そのままオリジオンをぶった切った。火花を散らしながら、オリジオンは吹っ飛んで地面に叩きつけられる。

(助けてくれた……だど?)

何故かよく分からないが、どうやら今のところ、彼とアクロスの倒すべき敵は同じらしい。それならば、と瞬も加勢しようとするが、

「勘違いするな。そして邪魔をするな。これは俺の仕事だ。素人は引っ込んでろ——
決めてやる!」

思い切り拒否られた。まあそうだよな、そんな甘い話あるわけ無いよな!とアクロスは思うが、それでも見ているだけという訳にはいかない。共闘を拒否するチエイサーを無視し、ツインズバスターを構える。

一方、オリジオンも立ち上がり、身構える。

その時。

「そこまでだ」

唐突に、再び戦いに割り込まれた。今度は何だと思いながら、声のした方を見る一同。そこには、ページユ色のコートを着た青年と、青いスタジャンを着た茶髪の青年がいた。彼らはオリジオンを見るなり、ヒソヒソと話し始める。

「噂は本当だったのか……てかあれ、明らかにアレだよな?」

「ネガティブキャンペーンは遠慮願いたいんだけどな……明らかに似せる気ないだろアレ」

「アンタらは一体……」

「ああそうだ、ここは俺達に任せろ。これは俺達がやるべき事、だからな」

コートの青年はそう言うと、さもこのような状況に慣れているかのような様子で、オリジオンとアクロスの間に割って入る。そして、懐から赤いレバーの付いたバツクルのようなものと、赤と青の小さなボトルらしき物体を取り出す。

「アンタ……それは……！」

「さあ、実験を始めようか」

両手にひとつずつ持ったボトルを数回振り、バツクルに填める。

《ラビット！タンク！ベストマッチ！》

ベルトからやけにテンションの高い音声が届くかと思うと、青年は続いて右側面に付いているレバーを回し始める。すると、ボトルから赤と青、2色のパイプが伸び、プラモデルのランナーのような型が彼の周囲に形成される。パイプの中には、瞬達には何かよくわからないものが通っており、先には人型のスーツを前後に真つ二つにしたような型がくつついている。

《Are you ready?》

「変身！」

電子音声と変身の掛け声の直後、形成された型が地面のスタンドに沿ってスライドし、激しく蒸気を吹き出しながら、男はスーツを身につける。

《鋼のムーンサルト！ラビットタンク！yeah！》

そこに居たのは、赤と青の装甲を身につけた仮面の戦士。その姿は、どこことなくアクロスに近いものが感じられる。

そいつは、仮面の下で不敵な笑みを浮かべながらこう言った。

「勝利の法則は、決まった！」

第15話 継承のベストマッチ

ビルドと名乗った仮面ライダー。その唐突な登場に呆然とする瞬。向こうはというと、瞬の方に歩み寄ってきて、

「苦戦してるみたいだが……手を貸すぞ」

こう切り出してきた。

「は……？あ、はい」

なんだかよくわからないままうなずくアクロス。突然現れた目の前の仮面ライダー——ビルドをまじまじと見つめながら、瞬は思考する。コイツは一体なんなんだ？コイツも自分と同じ仮面ライダーなのか？そもそも味方と認識していいのか？疑問はつきないが、ともかく考えていても仕方がない。手を貸してくれるというならば、喜んで手を借りようではないか。

釈然としないながらも、差し出された手をとった。目の前の脅威をなんとかするのが最優先だ。

「とにかく奴を無力化するぞ！」

「分かってる！」

ビルドに諭されながら、アクロスも戦いの場に復帰する。チェイサーに変身して戦っている転生者狩りは、手に持ったシンゴウアックスで問答無用でビルドオリジオンをぶった斬る。大振りな分ダメージはかなり与えられているようで、ビルドオリジオンの動きも先程以上に鈍っているように見える。そこにすかさずビルドが急接近しながらオリジオンの顔面にパンチを喰らわせ、続いて瞬が走りながらツインスバスターでオリジオンの胴体を斬りつけた。

「がっ……」

3ライダーの猛攻を受けながらも、尚も執拗に彼らにくらいつこうと立ち上がるビルドオリジオン。一体何が彼をそうまでさせるのだろう。そこに、またまた乱入者がやってくる。

「置いていくんじゃねえよー」

青いジャージを着た茶髪の青年が此方に走ってきている。なんかキレてるようだし怖いなー、と志村は思わず身構えてしまうが、青年は志村なんぞ眼中にないようで、彼の横を走り去りながら、何処からかビルドと同じベルトを取り出して腰に巻きつけ、ドラゴンを模した……:ように見える四角い物体にボトルを差し込み、更にそれをベルトにセツトする。

すると、ビルドと同じように、プラモデルの型みたいなものが彼の前後に出現する。

「変身っ！」

《wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yea h!》

「仮面ライダークローズ、見参だあっ！」

ビルドと同じようなシックエンスを辿り、ドラゴンをモチーフにしたと思わしき仮面の戦士が戦いの場に現れた。立て続けに新たなライダーが現れたことに、瞬はもちろん唯達も混乱の極みにあった。

「ビルド……クローズう……何故お前達が居るんだあ！」

「ぶつぶつ煩えんだよコンチクショウ！」

ビルドとクローズの乱入はビルドオリジオンにとつても想定外だったようで、転生者狩りの変身するチェイサーにボコられながら狼狽える。そこにクローズが飛び蹴りをかましながらか割って入り、ビルドオリジオンはフェンスに身体を打ちつけられ、ずるずるとその場に崩れ落ちた。

「何だお前らは！いきなり乱入しやがって！」

「いやアンタも同じでしょ……」

チェイサーは乱入してきたクローズにキレるが、唯が突っ込んだとおり、そもそも彼自身も乱入者であるからブーメラン感が否めない。

「お前ら！ 僕は正義だぞ！ 邪魔をするなあ！」

「だとしてもやり過ぎなんだよ！ 少し頭冷やせ馬鹿！」

「がはあ！」

冷静さを失いながら、尚も立ち上がって攻撃してくるビルドオリジオン。それに対し、アクロスは渾身の頭突きでオリジオンを退け反らせる。続いてチェイサーのシンゴウアックスの一閃と、ビルドとクローズのダブルライダーパンチがヒットし、ビルドオリジオンは大きく吹っ飛んでいった。

「うがあっ……はあ……」

ゴロゴロと硬いアスファルトの地面を転がりながら、オリジオンの変身が解かれてゆく。うつ伏せに倒れたその人物は、瞬達の学校の制服を着ている。まさか同級生だったりするのだろうか。

「何をしやがるんだ……なんで邪魔をするんだよ……！」

恨み言を吐きながら立ち上がったその人物の正体は。

「高山くん？」

「高山……お前だったのか」

そう、ビルドオリジオンの正体は、今日学校でも何度か顔を合わせた高山だったのだ。その姿に、離れた場所で唯や湖森と共に戦いを見ていた志村も驚いている。口元からは

血が流れ、それ以外のところも満身創痍である高山だが、それでもまだ立ち上がったく
る。

「お前らもヒーローだろう!?? なら何故その悪人を庇う!?? 犯罪犯すような奴を
守って何になる!?? ヒーローなら裁かなきゃダメだろうが!」

「ヒーローが救う人間選り好みしちやダメだろ。どんな悪人でも、守るべき人間なん
じゃ無いのか」

「愛と平和を守るためだ……僕は間違っていない」

「だったら……なんでこの人を殺そうとした!?? 確かにこの人のやったことは犯罪だけ
ど、殺す必要があったのか? 明らかにやり過ぎだろ……!」

アクロスは、意識を失って倒れたままの万引き犯を指差して反論する。そう、本来な
らこうして戦う必要など無かった。逃げる彼を捕まえて警察に突き出せば済む話だっ
たのだ。しかし、高山は明らかに殺す気でやっていた。

高山は、アクロスの言葉に対し掠れた声で答える。

「悪を倒す……これはその為の力だ。僕は、間違つてはいない」

「おい高山 ——」

高山はフェンスに手を掛けながら再びビルドオリジオンに変身し、身体中から白い蒸
気のようなものを物凄い勢いで噴出し、一同の視界を奪う。

「待ちやがれ！」

白く染められた視界の中、チェイサーの怒号が聞こえた。それと共に遠ざかる足音。まずい、逃げられる。瞬は蒸気の中を掻き分けながら足を進める。が。

「いなくなつた……の？」

「みただけど……何だつたんだ、今の」

また逃げられた。

蒸気を抜けた先には何もなく、ただ夕日に照らされた線路沿いの住宅街が広がっているだけであつた。瞬は辺りを見たわして高山を探すが、

ふとその足から力が抜け、地面に膝をついてアクロスの変身を解いてしまう。

「無茶はよしたまえ、今日は結構戦つたから疲労が溜まつているはずだよ」

頭の上から、聞き覚えのある声がある。顔をあげると、いつの間にか瞬の横にファイフティが立っていた。ついさつきまでいなくなつたのに。

「ファイフティ……ッ!?？」

「驚いたみたいだね。君のいるところに私あり、という訳さ」

「なんか気持ち悪いからやめてくれ」

「それはともかく、あのオリジオンについてだけど、今日のところは引いたほうがいい。さつきも言った通り、君は疲れているだろう。そんな状態で行つたつて勝つてつこ無い

さ。ここは一つ、その彼に任せようじゃないか、ねえ？」

ファイティがにんまりと笑みを浮かべながらチェイサーの方を向く。チェイサーはファイティと顔を合わせたくないらしく、そっぽを向いて側に止めてあったバイクに跨ると、

「俺は勝手にやらせてもらう。お前らの出る幕はない」

「わあ辛辣う。もう少し他人に優しくした方が生きやすいと思うけどね」

「お前が言うな、この厄病神が」

転生者狩りは悪態をつきながらバイクを動かし、何処かへと去ってしまった。ファイティはつまらなそうな顔でそれを見送った後、瞬に手を差し伸べる。

「立てるかい?」

「大丈夫だよ。それよりも……」

瞬は立ち上がりながら、2人の仮面ライダーに目を向ける。

ビルドとクローズ。まずは彼らから話を聞かなくてはならない。

場所は移って近場の公園。瞬達以外には誰もいないこの場所で話を聞くことになった。

「俺は桐生戦兎。てえっんさい物理学者だ！で、横のが万丈龍我。馬鹿だ」

「筋肉つけろよ筋肉！」

「……変わった人達だね」

2人の自己紹介を聞き、ぽつりと呟いた志村。同感だ。2人とも悪い人では無さそうなのだが、これまた変わり者と遭遇しちゃったなあと思う瞬。

戦兎は缶コーヒを一気に飲み干すと、ビルドドライバーを手にとって話し始めた。

「元々この仮面ライダービルドは、俺が作ったモノだった。本当はこんなモノ、もう使う機会がない方がいいんだけどなあ……アレを見たからにはそういうわけにはいかないんだよな」

「自分で作ったとかすげー！私にも使えたりする？」

「無理だし出来たとしても使わせられない。コイツは危険なモノだからな」

戦兎の返答に対し、不貞腐れたようにそっぽを向く唯。だだをこねる唯を無視して戦兎はドライバーをしまう。

そして、ファイファイが2人に問う。

「しかし、なんでまた君達が現れたんだい？」

「なんせテレビの向こう側でビルドが暴れてんだ。俺じゃなくても、自分の偽者が迷惑かけてるってのは見過ごせないさ」

「だからって置いていくなっつーの。お前俺のことどう思ってたんだよ」

「それにしても、お前も仮面ライダーだったとはな。システム周りとか色々興味深いなあ。ちよつと見せてくれないか」

「無視すんな！てか話がいきなりずれてねーか？？」

どうやら戦兎はアクロスの変身ベルトであるクロスドライバーに興味があるようで、瞬は戦兎に言われるがままクロスドライバーを手渡すと、色々な角度からそれを観察し始めた。万丈は思わず突っ込むが、戦兎はさも当然といった感じにこう返答する。

「いや気になるでしょ？ビルドドライバーの開発者として、科学者として、未知の技術とこののは心踊るモノなんだって」

「そもそもビルド作ったのお前じゃなくて葛城巧だろ」

「俺元々葛城巧だったし、俺が作ったようなもんじゃ？」

「そーゆーもんか？」

「盛り上がっているところ悪いけど、クロスドライバーに無闇に触らないで欲しい。それは他の人間が触るべきでない代物だからね」

ファイティイはそう言って戦兎からクロスドライバーを取り上げると、戦兎と万丈の漫

オフェイズに呆気にとられていた瞬に投げ渡す。

すると、先程まで蚊帳の外だった志村がおずおずと手を挙げる。

「あのさあ……僕、理解が追いついてないんだけど……高山くんが昼間の怪物で、それを倒さなきゃいけないってのが目標でいいのかな？」

「ちゃんとわかつてるじゃないか。巻き込んでしまったことについては私から詫びよう。今日の事は早く忘れて帰りたまえ。知っててもろくな事にならないからね」

「はあ……」

ファイティに促され、部外者である志村はなんか釈然としない気分のまま帰ってゆく。瞬達に手を振って曲がり角の向こうへと消えていく志村を見ながら、ふとあることを思った瞬。

「ちゃんと謝れたんだな、お前」

「逢瀬君は私をなんだと思ってるんだい？これでも君ほどでは無いが善性は持ち合わせているつもりなんだけど」

「説得力ないなあ」

一応初対面である湖森にまでこう言われる始末。まあこれまで散々勝手な理由で瞬を振り回してきたのだから、こう言われるのも無理はない。

一方、戦兎と万丈は暗くなった空をみあげながら、

「暗くなってきたな……」

「あんまり遅くなるとなあ……」

と、困り気味の様子。

「ねえねえ」

「どした」

今日の所は引き上げるしか無いか、と帰ろうとする戦兎の服の裾を引つ張り、呼び止める唯。そして、ちよつと小悪魔めいた笑みを浮かべて、ある提案をする。

「晩飯、食べてかない？」

力無き正義は、無駄だ。

前世から、清く正しくあろうとしてきた。不正を憎み、善を尊ぶのが理想の生き方であると信じていた。そうすれば正義のヒーローになれると思っていた。

しかし現実是非情。どんなに自分が正しかろうと、どんなに相手が間違っているとうと、力が全てだった。暴力、権力、知力 —— それらが優っていれば、正しさなど

些細なことに過ぎなかったのだ。

（力が無ければ駄目なのか……？弱い奴には正義を語る資格すらないってのかよ……！）

高山幸生は、自らの無力さ故に折れた。転生特典に選んだのは、とあるヒーローの力。これならばいける、正義のヒーローになれる。

しかしながら。それは甘い妄想だった。

『ご覧下さい、この凄惨な現場を。犯人は未だ逃走中の模様——』

『被害者は襲われる直前に近隣の飲食店で無銭飲食をしていた模様。意識不明の重体

——』

『悪人ばかりを狙い、凄惨な制裁を加える赤と青の謎の通り魔に対し、人々の間には不安が蔓延している模様——』

ニュースでは赤と青の通り魔という烙印を貼られ。助けた筈の人がインタビューで恐怖におののいている。自分は正しいことをしているのに。間違っちゃいけないのに。対価は称賛とは程遠い恐怖のみ。

「なんで……」

何故だ。何故だ。

前世とは違って力がある筈なのに。悪人を懲らしめる自分は正しい筈なのに。それ

なのにどうして恐れられる？自分は仮面ライダー、正義のヒーローなのに、どうして？今日だってそうだ。見たことのない仮面ライダーっぽい何かに変身したクラスメイトに、悉く邪魔をされてしまった。何故悪人を庇って自分の邪魔をする？悪いのはあいつらなのに。

少年は一人、恨みの籠った声で呟いた。

「僕は……間違っていない」

そして今。

「悪は、悪だ。悪は、滅ぼさなくてはならない。誰もやろうとしないなら、僕がやらなくてはならないんだ」

謔言のように繰り返しながら、ふらふらと高架下の闇から顔を出す。辺りはすっかり夕暮れとなっており、夕焼けは憔悴したような顔の高山を紅く染めている。

「昔みたい弱い自分じゃ無いんだ。その筈なんだ」

うわごとのように繰り返す。それでもしないと、抛り所がなくなってしまうから。

「そうだ。お前は変わった」

カツンと、濁いた足音が響いた。高山が振りかえると、そこにはベージュ色のトレン

チコートを seen に纏った中年男性が立っていた。彼こそ、高山少年を転生させた張本人——ギフトメイカー・ティードである。彼は煙草を吸いながら高山の肩に手を掛け、彼にある提案を持ちかけてきた。

「お前は正しい。お前に逆らう奴は皆悪だ。だから——アクロスを殺せ。お前が正しく在るためにも、あの邪魔な似非ヒーローを始末しろ。」

そうすれば、更なる力を与えてやろう。お前も欲しいんだらう?」

「……」

「力無き正義は正義に有らず、正義とは強者だけに許された特権。それは貴様が一番理解している筈だぞ?」

容赦のない力の誘惑に苛まれる高山。ティードはその様子を見ながらほくそ笑む。

「欲しいです。力を……僕が正しくあるための力を……」

「いい心意気だ。その調子で頼むぞ」

その先は地獄だぞ、と。

少年に声を掛ける者はまだいない。

瞬達と別れ、一人で帰る志村。その顔は、何やら思い詰めたように見える。

「高山くんは……なんかおかしいよ……」

志村は先程、ソレを目の当たりにしてして理解していた。あれは正義を建前にした、ただの暴力だ。罪を犯した者が悪とされるのには納得がいく。だが、正義とは、一方的に悪をいたぶるモノであつたのだろうか？

「……なんか我ながら哲学的なこと考えてるよなあ」

ただの高校生が考えるには、デカすぎるよなあ、と呆れながら歩いていたのだが、ふと目をやった横の路地に見覚えのある人物の後姿を見た。その正体をはつきりと認識した時、志村はぎよつとした。

「高山くん……!?」

そう、先程まで仮面ライダー達と交戦し、命からがら逃げ延びたビルドオリジオンと高山少年であつた。

あの姿は嫌でも鮮明に分かる。さっきまで見ていたのだから。

どうやら彼は志村には気付いていないようで、暗い路地のさらに奥へと入っていく。志村は気づかれないように後を追う。正直言つてめちやくちや怖いのだが、それ以上に好奇心がまさつていたので。

それに、彼の言う正義に、志村は引つ掛かりを感じていた。もしかしたら、それがわ

村。決心しても、いざリアルに見てしまうと中々にキツイものだった。

「違う……こんなの、違う……！」

怯えながらも、志村は確信した。彼は正義の味方なんかじゃない。あれをそう呼んではならないと。

そんな志村に見られていたとはつゆ知らず、悪人を制裁し終えたビルドオリジオンは次の獲物を求め、路地から出ようと動き出す。その時。

「見つけたぞー！」

「またお前かー！」

上から声がしたと思いきや、次の瞬間、ビルドオリジオンの立っていた場所に焦げ跡のようなものが発生した。近くに葉莖が転がっているのを見るに、どうやら銃的な何かを撃ってきた模様。

ビルドオリジオンが空を見上げると、どうやっていっているのかは知らないが、そこには壁に張り付いた仮面ライダーG4が存在していた。もちろん、転生者狩りの変身したものである。

「さつきあれ程やられておいてまだやるとはな。余程この行為に執着してるようだな」
「煩い！僕の邪魔をしないでくれ……！」

「するさ。お前みたいな傍迷惑なエゴイストを生かしたら、世界が減ぶ」

転生者狩りは、懲りないオリジオンに呆れながら、地面に着地する。

両者とも、互いが邪魔だ。そう判断してからは、早かった。ガツ！と、一瞬の内に互いの拳がぶつかる。初撃は相殺。すぐに互いに拳を引つ込め、次の一手をくりだそうとする。

(やばい！逃げなきや巻き込まれる！)

唐突に始まった転生者狩りとビルドオリジオンの戦い。志村は巻き込まれないように、背後でした爆音に耳を塞ぎながら慌ててその場から逃げ出した。

きつかけはなんだったか。

多分、唯のこんな発言だった気がする。

「すっかり日が暮れちゃいましたし、今日は瞬のおうちで夕飯戴きませんか？」

それに対し、困惑気味な反応の戦兎と万丈。というか人の家に招待するというのはどうなんだろうか。

「いいのか……？」

「いいんですよ。叔父さんも多分喜びますからねえ」

「いやお前家族じゃないし！何勝手に人の家に他人招待してんだ！」

こんな感じのやりとりがあった気がする。誰か止めて欲しかった。しかしもう時は遅し、家の前まで来てしまった。ちなみに志村とはもう別れた。アクロスの事とかは隠しようがなかったのだから黙っててもらえるように話つけたが、はたして大丈夫だろうか。そして何故かファイフティもついてきている。まさかコイツも飯タカるつもりなのではないだろうか。

そんなことを考えながら、玄関の鍵を開ける。ヒビキとネプテューヌはちゃんと留守番していただろうか。年齢的には一人でお留守番できる年頃なのだが、それでも心配にはなる。親の気持ちってこんな感じなのだろうか。

「ただいまー、お前らちゃんと留守番してたかー？」

「してましたよう！私もバチりんとな〜！」

—— いや待て。誰だ、今の声。

今さつき瞬の声に反応したのは、明らかに大人の女性の声だった。しかもなんか聞き覚えがある。嫌な予感に身を包まされながら、灯りのついたリビングの扉を開ける。

「おはえりなはいみなはんお邪魔してます
「お帰りなさい皆さん。おひやまひてまふ」

何かを頼張るような声で出迎えられた一同。そこには、コーヒー入りのマグカップ片手に惣菜パンを頼張る成人女性の姿が。不審者・港トモリ、再来である。瞬は側に立て

かけてあつた箒を構えてトモリを睨みつける。

「お前は今朝の……！何勝手に上がり込んでんだ！しかも本日2度目え！」

「誤解だよ誤解い！私は教授にここで待つてるように言われただけだし！今朝も今回も教授にアポ取つたし！」

「アポ取つた……？」

「後で本人に訊けばわかるよ」

本当かよ……と、トモリに疑いの目を向ける瞬。なんでここまで疑心暗鬼にならにやあかんのだ。ホントここ最近心身が疲れるような事ばかり続くものだ。

一方、馬鹿こと唯は、瞬よりも親交が深いこともあつてか、特に気にする事なくトモリに駆け寄つていく。

「あ、トモリさん来てたんだあ。退院おめでとー！」

「唯ちゃんもヒビキちゃんもコンバンハー！私、港トモリ完全復活なーのよう！」

「イェーイ」

「うるさい馬鹿が増えた……」

はしやくトモリと唯に呆れる瞬。ほんと何なんだこの人。なんで自分の周りにはこんな感じのテンションの奴ばつかなのだろうか。

「なんだこの人。てかさつき教授つて……」

「叔父さん、大学の先生やってんだ。確か考古学かなんかだったような……俺達にはあまり研究とかについては話さねーからよく知らないんだよ」

「こそ。私、教授のゼミに入ってるのよ。いやー世間って狭いんだなあ。君教授のお子さんだったんだね」

肩に手を回しながら瞬に擦り寄ってくる瞬。トモリさんや、貴女の無駄にでかい胸が当たってます、とは言いだせず、思わず顔を赤くする瞬と、それを見て不満そうな顔をする唯。

しかしそんな幼馴染みの様子には気づかず、瞬はトモリに言葉を否定する。

「いや違いますよ」

「え」

「俺と湖森は小さい頃に親を亡くしてな。それで叔父さんの所に今いるってわけなんだよ」

「お前も色々苦労してんだな……」

「あー、なんかごめん。空気が悪くしちゃった?」

瞬の唐突なカミングアウトに対し、自分達も過去に色々と苦労してきた事を思い返し同情する戦兔と万丈の2人と、なんか踏み込みじゃない領域に踏み込んでしまい申し訳なく思うトモリ。だが瞬は笑いながら、

「まあ気にしてないさ。昔のことはあんま覚えてないし」

と水に流す発言をする。事実として叔父の元に来る前の記憶については臚げにしか覚えていないのだからそうとしか言えない。

一連の会話で部屋がなんだか気まずい雰囲気になってしまった。一同がこれはどうしましょうかと悩んでいた所、その沈黙を打ち破ったのは唯だった。

「気まずい話はやめやめ！そろそろ叔父さんも帰ってくる時間じゃないの？」

「そうだね。晩御飯の支度しなくちゃ。ヒビキちゃんも手伝ってほら」

「ガッテン承知！もりもりいかせてもらおうよ！」

小一時間後、皆で逢瀬家の食卓を囲んでいた。今晚のメニューは手巻き寿司。選りすぐりの特売品の魚介類を買ってきた甲斐があつてか、かかった値段の割にはかなりたくさん刺身が大皿に盛り付けられていた。

戦兎や万丈はともかく、トモリまで当然のように参加しているが、環四郎はそのところあまり突つ込まないようだ。

「悪いな、晩飯までご馳走してもらって」

「良いってもんよ。ここで会ったのも何かの縁だよ、縁」

「お前余所者の癖に何言ってるんだ」

なんでこの幼馴染みは当たり前のように逢瀬家の一員を気取っているのか。もう慣れたことなのであまり強くは言わないが、少しは遠慮してほしいものだ。

「瞬くんが世話になったのはこちらですけどね。うん、君も食べていきなさい」

「世話になったのはこちらですけどね……ではお言葉に甘えて」

「うん、それと、いくらアポ取ったといえど平日の早朝に来るもんじゃないよ。ゼミの課題については覚悟すること」

「職権濫用反対！」

流石に温厚な環四郎でも、非常識判定を下さざるを得なかったようだ。泣きついても意味ないだろう。というかそこはちゃんと指摘するんだな、と瞬は失笑していた。

「手巻き寿司かあ。普通の寿司が良かったなあ」

「勝手にタカリに来るとして文句言わないの」

「凶々しくも文句を言う唯を批判する瞬。一方、ネプテューヌは環四郎にある事を聞いてくる。」

「そういえば叔父さん、例のアレ買ってきてくれた？」

「もちろん。ほら、あそこにあるだろう？週刊少年ジャパジン最新号」

「ありがとうございます！私、感無量！」

部屋の入り口あたりにあるビニール袋を指差した環四郎に、ネプテューヌはオーバーリアクション気味な礼をする。

「おいお前、まさか叔父さんをパシってたのか？」

「いや本人快諾してるからパシリじゃないかも」

だからといって家主をパシるんじゃない。ああ見えて叔父も忙しいのだ。そこにヒビキからのいたーい援護射撃が容赦なくやってくる。

「だってねぶねぶ金銭感覚ゆるキャラだし……好きあらばゲームとプリンにつき込みかねないもん」

「小学生からこんなこと言われてて恥ずかしくないんですか自称女神さん？」

瞬のその言葉に思わずネプテューヌも痛いところを突かれたような顔にかかる。そう、こいつは現在居候の身。瞬からすれば、女神を自称するイタイロリでしかないのだ。だって女神らしい所一度も見えてないし。

とはいえネプテューヌも黙って聞いていられるような奴ではない。彼女なりの主人公と女神の矜持にかけて、すかさず反論する。

「いや女神だし！主人公ですしおすし！いや待って、この作品だと私は主人公じゃない

「うほどの量のワサビをぶっかけた。」

「少しは遠慮というものを覚えろってんだ」

「許さねえ……!」

キレた唯は自分の指にワサビを塗ると、その指を瞬の鼻の穴にがしつと突っ込んだ。つんとくる衝撃が瞬を襲い、思わずのたうちまわってしまった。

「ぬぎやあああああああああ!何してんだあ!?!」

「仕返しだよ」

「醤油かけるぞ醤油!」

「2人とも食べ物で遊ぶなよ。高校生だろ」

戦兎のごもつともな指摘で鎮静化したようだ。その後は瞬も唯も小さくなり、黙々と食事をするのであった。

その後は万丈がチビ2人の遊びに付き合い合わされてたじたじになったり、環四郎のオヤジギャグ260連発が全部大スベリして場の空気が凍えたりと色々あったのだが、今夜はそろそろお開きという雰囲気になりつつあった。

寝ているヒビキとネプテューヌの2人に挟まれて寝落ちしている万丈に、片付けをしている瞬と湖森、ソファーで眠たそうに目を擦る唯といった具合に、結構ぐだぐだしてきていた。

「おーい唯、寝るなよー。早く帰らないと学校に連絡入れられて面倒なことになるぞ？」
「無断外泊がなんのもんだい。うちの親も瞬の家なら安心だつて言ってるのは知ってるでしょ」

「駄目だこりゃ」

普段よりも明らかに間の抜けたような唯の声に、あれは近いうちに寝落ちするなと確信する。とはいえ、本日は2回も戦闘を行い、瞬もだいぶ疲れているのも事実。気を抜くと皿を落として割ってしまいそうになるのを、なんとか堪えている状態だ。

そかに、手持ち無沙汰だったトモリが声を掛けてきた。

「おーい瞬くん」

「なんすかトモリさん。何なんですか一体」

「なんでそんなに嫌そうな顔するのさ。酷いなあお姉さん傷ついたぞう」

「水の音であんま聞こえないんで後にしてくれませんかね？」

「お兄ちゃん行ってきたら？この量なら私一人でなんとかなるからさ」

妹の言葉に甘え、一旦台所から離脱する瞬。座布団にあぐらかいているトモリは、隣

の誰も座っていない座布団をポンポンと叩いて瞬を誘う。瞬は誘われるがままトモリの隣に座り、欠伸を一つする。

「なんすか、一体」

「今朝のアレ、ちゃんと伝わってなかったみたいで。もう一度言っておこうかなって」

「そもそも俺とアンタはほぼ接点ないんですよ？単に知り合いの知り合いという程度でしか無いんだけど……」

「それでもさ、私は君に感謝してるんだよ」

唐突な感謝の言葉にハテナマークを浮かべる瞬。かれからすれば心当たりが無いので仕方ないのだが、トモリからすれば結構大事な事らしい。トモリは、頭を掻きながら話を続ける。

「いや、あのさ。君は知らないだろうけど、春に出くわした児童誘拐犯の怪物、私の友達だったんだ。私は何度も止めようとしたんだけど、普通の人間だったから無理だった。出来たのは、連れて行かれそうになっていたヒビキちゃんの救出だけ」

「あんただったんだな、ヒビキを助けたのって」

「目の前で友達が間違った道を進んでるのに、私は何もできなかった。だから、代わりに止めてくれた君に礼を言わなくちゃいけないんだ。そう思ってたら、居ても立っても居られなくてね。ありがとう、ね」

面と向かって伝えられた、明確な感謝の言葉。その言葉には、嘘偽りはなかった。

あの時はアクロスになったばかりで周囲に流されてばかりだったし（今も大概だが）、無我夢中で湖森達を守ろうとしていただけで、そこまでは知らなかったのだが、こうして改めて感謝されると、なんだかむず痒い気分になる。

「俺はただ、俺の大事なものを守ろうとしただけだつて。あの時はがむしやらだつたし……」

「それでも、救われた人間は確かに居たよ。なんにせよ、君は私の恩人だよ」

トモリはそう言うと、立ち上がって自分の鞆を手を持つ。

「ごめんね、おしかけちゃつて。私はそろそろおいとまさせてもらうよ。グッバイ」

「トモリさん、帰り道気をつけてねー」

帰っていくトモリを台所から見送る2人。丁度皿洗いも終わったので、トイレにでも行こうと瞬は廊下にでる。

すると、廊下に戦兎がいた。まるでずっと瞬を待っていたかのように、腕を組み、壁に背中を預けた状態で立っていた。瞬は少し考えて、こう切り出した。

「戦兎、少し話がしたい」

自宅から近くの公園。夜遅くということもあり、誰もいない静まりかえったこの場所に、2人はいた。

「で、話って?」

「……アンタも仮面ライダーなんだろう? アンタは……戦兎は、そのの所をどう思っているんだ?」

そう。瞬は、先輩ライダーとしての桐生戦兎と話したかったのだ。瞬はまだ仮面ライダーになって日が浅い。まだ悩んだり迷ったりを繰り返すひよっこといっても過言ではない。他のライダーといっても、あの転生者狩りはあまり話し合える様子ではないし、こうして他のライダーとまともに話せる機会というものは初めてであった。

それに、昼間のオリジオンとして戦う高山の姿を見て、瞬はあることが気になっていた。戦兎は、仮面ライダーというものを、ヒーローというものをどう考えているのか。高山は、正義という言葉の為だけに戦っていたが、瞬からすれば、あれは正義とは名ばかりの蹂躞にしか見えなかった。そんな彼の様子を見ていたからこそ、瞬はこの問いを投げかけたのかもしれない。

「そうだなー。どう思っているか……って言われてもなあ」

戦兎は暫く考えた後、こう言った。

「俺は愛と平和のために、それを信じて戦った。辛い事だつて数え切れないほどあったし、救えずに取りこぼした事だつてあった。それでもさ、俺は信じてたんだ。愛と平和を胸に生きていける世界を創れるつてさ」

「愛と平和……かあ」

「そ。愛と平和のヒーロー、それが仮面ライダービルドなのさ。俺にとつての仮面ライダーとは何か、と訊かれたらこれが答えになるのかもしれないな。ならさ、お前にとつてのアクロスつてどんなのだ？」

戦兎にとつてのビルドとは、そういうものなのだろう。では、自分にとつてのアクロスとはなんなのだろうか？ 瞬はそう考えていた。まだ瞬はアクロスになって短く、半ば無理矢理巻き込まれたようなものであるために、そういつた確固たるものはまだない。

戦兎に問いかけに頭を悩ませている瞬の様子を見た戦兎が、瞬に助け舟を出す。

「初めて変身した時のことを思い出してみろよ。その時どう思い、何を考えていたか。きつとそれがヒントになるだろうさ」

「……」

初めて変身したあの日を思い出す。

炎の中、怪人達に囲まれて命の危機に晒された唯を助けたいという一心で、変身し無

我夢中で戦った。あれが一体何だったのかは未だによく分からないが、戦いが終わり、無事だった唯を見てホツとしていたのはたしかに覚えている。

春休みに湖森達が攫われた時も、同じだった。状況が自分を置いてけぼりにしていく中で、その思いだけが瞬にとつて確かなモノであった。そして、湖森やヒビキ、まだ面識のなかったトモリを救うことができた。

「守りたい……あの時、唯や他の皆を守りたいって、その一心でがむしゃらに走ってたんだ」

「なら今はそれでいい。焦って考えなくていいんだよ。その気持ちを忘れずにいれば、自ずと分かるって」

「なーにこそそこそ語り合ってたんだ。俺も混ぜろや」

2人に声かけられる。振り向くと、公園の入り口に寝落ちしていたはずの万丈が立っていた。よっ、と手をあげて挨拶し、彼は公園に入ってくる。

「万丈……」

「あれ、寝てたんじゃ」

「悪いな、途中から聞いてた」

笑いながら此方に歩いてくる万丈。その顔は何故かしみじみとしているように感じられる。

「お前らの話聞いてたら、随分と懐かしいこと思い出しちゃったよ？」

「前に戦兔が言ってたんだよ。誰かの力になれたら、心の底から嬉しくなって顔がくしゃつとなるってな。最初に聞いた時はそんな余裕なくて、なんか……アレだったけど、俺も今ならそれが分かるんだ」

「万丈、ちよつとそれ言われるの恥ずかしいんだけど。てかアレって何。語彙力仕事してちよ」

「元々お前から言い出したんだからいいだろ。それに語彙力は関係ないだろー」

「この会話の流れで馬鹿丸出しな台詞聞かされる俺の気持ちをだな」

「筋肉つけるよ本日2度目え！」

やいのやいのと騒ぎ始める2人を見ながら、瞬は考えていた。

誰かのために。それが桐生戦兔の、仮面ライダービルドの原動力であるのだ。青臭く感じたが、それでも瞬にとっては輝いてるように感じられた。

「それが戦兔の原動力、ってコトか？」

「……まあそんな感じだ。例えこれから先も戦うことになっても、この理由は忘れてたくない。お前にもきつと、わかる時が来るはずさ」

戦兔は照れ臭そうに笑いながら、自分の掌を見つめる。

「帰るぞ」

「もうかよ?」

「長居しちやあ瞬達に悪いだろ」

「そうか、なら気をつけて」

「ああ。あのオリジオンとかいう奴を見つけたら連絡をくれると助かる。こつちも見つけたら知らせるからな」

戦兎はそう言うと、スマホとフルボトルをコートのポケットから取り出して、そのボトルをスマホに差し込む。すると、スマホがガシヤンガシヤンと変形し、一台のバイクに変化した。

呆気にとられる瞬の前で、戦兎はヘルメットを被りバイクに跨る。万丈も同じようにヘルメットを被って戦兎の後ろに座る。

「夕飯、美味かったぜ。ご馳走様」

「それじゃあまたなあ!」

エンジン音を夜空に響かせながら、2人の乗ったバイクが去っていく。瞬は闇夜に溶け込みながら小さくなっていく2人の後ろ姿を見つめながら、戦兎や万丈から聞いたヒーローの流儀を、頭の中で反芻させるのであった。

翌朝。ティーダに連れられ、高山は駅前にやって来ていた。休日だが、相変わらず人の往来は盛んであり、2人も完璧に雑踏に溶け込んでいる。

「さあやれ。あそこに裁くべき悪がいる」

ティーダが指差す先には、髭の濃い小太りの中年男性が、ベンチに座ってスマホで電話している。ティーダは、力を振るうことを促すように高山の耳元で囁く。

「奴は極悪詐欺師だ。金を騙し取って何人もの人生を破滅に追い込んでいる……許せないだろう?」

「……」

「何を戸惑う必要がある? 悪人に情けを掛けるのが、お前の強さだというのか? 転生者は神に選ばれた者だ。選ばれし者が、そうでない者を気にかける必要は無い。好きなだけ暴れろ」

ティーダは半ば強引に高山の背中を押し、詐欺師の前に行かせる。当然ながら、詐欺師は突然自分の目の前で立ち止まった見ず知らずに少年に対し、怪訝そうな顔をする。

そんな彼に対し、高山はぼそりと宣告する。

「……お前を裁く」

「なんて？」

《KAKUSEI BUILD》

高山は、公衆の面前でビルドオリジオンに変身し、詐欺師に掴みかかった。首を掴まれた彼は大きな悲鳴をあげながら足をバタバタと動かすが、当然ながら何の効果もない。何気ない日常風景が一気に戦場に塗り替えられ、取り乱した周囲の人々が一斉に逃げ出す。

「悪は、滅べ」

ビルドオリジオンの手の力が強くなり、詐欺師の顔が青くなっていく。

「よせ高山あー！」

「これ以上力を振るうのはやめろー！」

その時、彼に呼びかける声があった。何処か聞き覚えのある声に振りかえると、そこには2人の仮面ライダーがいた。逢瀬瞬と桐生戦兔。昨日と同じように、またまた邪魔者が現れた。

「これ以上手を汚したら……きつと、お前は後悔する」

「悪を裁けばヒーローって訳じゃないんだ！考えなおせ！」

2人は必死に呼びかけるが、高山はそれを無視して詐欺師の首を更に強く締め上げ

る。高山の元へと駆け出そうとする瞬達だが、彼らの前にある人物が現れ、2人の足を止めさせる。

「あら、また会ったわねアクロス」

「お前は前に……」

瞬達の前に立ちただかったのは、偽者の赤龍帝を相手取った際に乱入してきたゴスロリ少女、リイラ。ポリウム溢れる紫髪を触手のように靡かせ、太陽を背に微笑を浮かべる姿は、妖艶さと不気味さを漂わせている。

「……何、貴女」

「ん？もしかして私に言ってる？」

瞬達について来ていた唯は、震える声で呟く。リイラは、一瞬眉をひそめながら唯の方を見るが、気の所為か、と言った感じにすぐに視線を瞬の方に合わせる。

（何故なの……？なんなの、この既視感……初めて出逢うはずなのに、なぜかこの子を他人とは思えない……！）

これまでに感じたことのないような、理解し難い感覚が唯の全身に纏わりつく。なんなのだ、これは。相手が何かをしているわけでも無いのに、自分の奥底から何かが湧き上がって膨れ上がるような、混ざり合って拡散するような、気持ち悪い感覚に、唯の思考が侵されてゆく。

そのまま倒れそうになる唯だったが、すかさず瞬が唯を受け止める。

「大丈夫か……？ お前、気分でも悪いのか？ 凄い汗だぞ」

「大丈夫！ 大丈夫だから……うん」

「だからついてくるなって言ったのに。危ないから離れていろ」

瞬と戦兎の心配を振り切り、唯は自分の足で立ち上がる。慣れたのか、あの感覚はさつきよりはマシになったようだ。リイラを見ると、変わらず妖艶な笑みを浮かべている。

「邪魔しないで欲しいのよね……その役立たずの駄女神はともかく、仮面ライダーにこれ以上邪魔されたくないのよね」

「私をみくびらないで欲しいなあ！ いくら体が鈍つてるといえど、ちよつと酷くない!!
？ ねぶはーとは繊細なんだからー」

「お前の何処が繊細なんだよ。めっちゃ図太いよ」

繊細な奴は居候先の家主をパシツたりしねーよ、と心の中で突つ込む瞬。なんかネプテューヌと話していると、ちよくちよくシリアスがシリアルになるのだが、何故なのだろうか。

「前のオリジオンは欲まみれで暴走してたからねえ……その分、今回は扱いやすいわ。正義だのなんだの言いながら、本心では力を奮いたいだけの子供。憧れのヒーローの力

を貰ったのに、結局はただの醜いバケモノ……最高に無様だと思わない？」

高山の様子を見て、心底くだらないと言わんばかりに嘲笑するリイラ。彼女はこの状況を楽しんでいるのだ。高山が暴れることで傷つく人が出ることも全く気に留めていないのだ。まるでテレビの中の出来事のようにこの事を見ているリイラに、瞬達は異常さを感じていた。

リイラのいかにも他人事です、といった態度に怒りを感じた唯は、リイラを問いたただそうとする。

「貴女達は一体何者なの、答えて！」

「ギフトメイカー。転生者を統べるすごい人よ？」

「ギフトメイカー……何よそれ」

聞き慣れない単語に、生粋のオタクである唯も流石に困惑する。いきなり何を言い出しやがるんだこいつは？

「転生者は皆私達の下僕なの。彼もそう、私達の為に働く兵隊さんでしかないのよ」

「転生者……？兵隊……？何を言ってるんだ？」

心底嬉しそうに笑うリイラだが、瞬には彼女の言っていることがさっぱりわからな
い。一瞬妄言の類かと思ったが、どうやらそうではないらしい。困惑する瞬の様子を見たりイラは、先程とはうってかわって心底呆れたと言わんばかりの顔を見せる。

キレ散らかしたかのように腕を振り回すが、その襲撃者は剣でその攻撃を受け止める。

「この顔を出してくるとは、随分と余裕があるじゃねえか。シヤクに触る」

「次は牙王……ほんと、転生者狩りもネタが尽きないわね」

「手数は多いに越した事はないだろ」

仮面ライダーガオウに変身した転生者狩りは、鼻で笑いながら、リイラに殴りかかろうと地面を強く蹴って動き出す。そこにすかさずガングニールが割って入り、そのパンチを身体全体で受け止める。

転生者狩りはすぐさま拳を引き、ガングニールの脇腹にハイキックを叩き込もうと脚を振り上げるが、それもガングニールの腕で阻まれる。どうやら一筋縄ではいかないらしい。立て続けに攻撃を防がれた転生者狩りは、一旦距離を取って立て直そうとする。

「俺と瞬でビルドオリジオンをなんとかするから万丈はあの怪人を！」

「わかってらあ！変身っ！」

《wake up burning! Get CROSS—Z DRAGON! Yeah!》

ビルドの指示を受けながら、万丈はクローズドラゴンにドラゴンボトルを挿し、それをビルドドライバーにセットする。そして走りながらベルトのレバーを回し、クローズに変身しガオウに加勢する。

「おらあー！」

「i a a a a a a a a a a w a a a a a a a a a a！」

ガングニールオリジオンはクローズに変身した万丈の飛び蹴りを受けて数歩退くが、あまり効いていないのか、すぐ様対応して地面にその剛腕を叩きつけ、地面を大きく揺らしてきた。ガオウも万丈も揺れでよろけたのを好機と捉えたのか、ガングニールオリジオンは首元の黒いマフラーのような部位を触手のように伸ばし、それで2人に追撃を加えてきた。

「パワーだけじゃない、か。前よりは賢くなっているようだな」

「なんかいやらしい戦い方だなこいつ……」

起きあがろうとする2人に再び触手攻撃が迫る。しかし、クローズは横に転がって回避し、ガオウは逆に触手を掴みとってガングニールを引っ張り始めた。

「A a !!?」

「2度も同じ手は食らわねえよ」

ずるずるとガングニールオリジオンは転生者狩りの足元まで引き摺られると、その腹を思い切り踏みつけられた。触手をがちりと掴んだまま、ガングニールはガシガシと蹴られたり踏みつけられたりと好き放題にされる。これではどちらが仮面ライダーなのやら、と言いたくなるような戦い方である。

「ぬうんー！」

「G y a a っ!?？」

聞いた事のない変身音がした直後、爆煙の中からガングニールの首目掛けて肘鉄が炸裂した。

煙が晴れると、そこには黒いトゲトゲした頭部に、マンガのような瞳、黒い体躯に骨を連想させる白い装甲——仮面ライダーゲンム・ゾンビゲーマーに変身した転生者狩りがいた。

「ハンティングゲームの始まりだ。覚悟しろよ！」

一方、リイラを引きつけることになったネプテューヌ。何処からか木刀を取り出して構え、ドヤ顔をしながら自信満々な台詞を吐く。

「君の相手はこの私だよ！女神モードじゃ無くても割といけるんだからね！」

「出しゃばるなよ女神の出廻らし風情が。女神化出来ない貴女なんか敵じゃないわ」

リイラは辛辣な言葉を吐き返し、ネプテューヌを指差す。すると、リイラの指先から紫色のビームのようなものが瞬時に発射され、一瞬のうちにネプテューヌの頬を掠め、地面を焦がした。

ビームが命中し、ぷすぷすと煙を立てる地面をチラリとみて、ネプテューヌはかなり冷や汗をかいていた。コレは油断出来ない。ゲームギョウ界を何度も救ってきた歴戦の女神だけあって、いやでも理解できてしまう。

と、目つきが鋭くなったネプテューヌに対し、リイラがある質問をする。

「そういえば気になってたんだけどさ」

「？」

「女神って食べたなら美味しいの？」

「……それは性的な意味？それとも物理的な意味？」

あまりに唐突で、突拍子もない質問に、流石のネプテューヌも若干引き気味に質問で返す。某殺人鬼だったら質問を質問で返すなどブチ切れるところであるのだが、リイラは、

「この姿を見たら分かるでしょう？」

と、不敵に笑いながら髪を結んでいたゴムを外す。すると、彼女の背中を突き破るかのように、触手やら蜘蛛の脚のようなものが一齐に生えてきた。リイラの額には触覚のようなものも生えており、全体的に気持ち悪い雰囲気ガダガダ漏れである。

ほけーっとその様子を見ていたネプテューヌだったが、我に帰って一言。

「何？貴女って蠱惑魔のカードの精霊だったりするの？私決闘者じゃないんだけどなー

困っちゃうん」

リイラの変わりように驚きながら感想をベラベラ述べてるネプテューヌだが、それと言いつ終る前にリイラの触手攻撃が無慈悲に彼女を襲った。ネプテューヌを足元の地面ごと抉るような一撃だった。触手の先端には食虫植物の花弁を思わせるような部位があり、そこから垂れる液体で触手の通過したルートはドロドロに溶けていた。しかしながら、地面の腐食によって発生した煙の中にネプテューヌの姿は無い。

そのことに対し意外そうな反応を見せるリイラだったが、直後に背中にガキンツ！と硬いものがぶつかるような音がした。振り返ると、無傷のネプテューヌがリイラの背中から木刀を振り下ろしていた。リイラは咄嗟に触覚で防いでいたが、不意打ちを仕掛けられたことに対し苛ついたので、背中の蜘蛛の脚でそのままネプテューヌをがっしりと捕らえてしまう。

「ぬあっ！コレは……」

「飛んで火に入る夏の虫、ね。自分から皿の上に乗っかってくれるなんて、随分とサービース精神旺盛な食材よねえ？」

「へっ！生憎これで終わるようなら何作品もゲーム作られないのだよ！ドヤア！」

嬉しそうに舌舐めずりをするリイラだったが、ネプテューヌはメタさと自信に溢れた台詞を吐く。すると、ネプテューヌの持っていた木刀にパキリとヒビが入る。それは次

第に広がっていき、しまいにはバキバキに折れてしまった。

「あらあら、威勢のわりには情けなくてよ？」

唯一の武器を失った自称女神を笑うリイラであったが、直後、背中の蜘蛛の脚と触手が全て同時にズバアッ!と焼き斬られた。またまた意外そうな顔をするリイラ。拘束を抜け出したネプテューヌは、リイラから離れた位置に着地する。その手には先程までは無かったビームサーベルのようなモノが握られている。

「木刀の中にビームサーベルねえ……女神らしからぬ卑怯な手を使うのね。親近感湧いちゃうわ」

「そりゃあ我がプラネテューヌが誇る最新のブツですし?中からビームサーベルの5、6本はで、出ますよ」

そう威勢よく切り返すネプテューヌだったが、内心は、

(マズイよこれ……女神の力無しで行ける気しないんですけどお!)

結構ピンチだった。

色々と事情があつて、彼女は現在女神としての力が使えない状態にある。雑魚モンスター相手ならともかく、目の前のリイラは女神の力無しでは勝てそうにない。というか、あつても自分一人では正直言つてキツイかもしれない。

そんなネプテューヌの心情も梅雨知らず、リイラは不敵な笑みをこぼす事なく着実に

ネプテューヌに歩み寄ってくる。

「さあ、私を楽しませて。食事は楽しむモノだから、ね?」

アクロスとビルドがビルドオリジオンと交戦を始めて少し経った頃。

(ああ……本当に僕はついてないなあ)

戦場から少し離れた、駅の入り口。そこに志村優始は座り込んで身を隠していた。

休日だからと出かけてみたのが運の尽き、また仮面ライダーと怪人の戦いに巻き込まれてしまったのだ。志村も逃げようとしたのだが、躓いて転んだり他の人達に突き飛ばされたりして逃げ遅れ、こうして建物の影に隠れる他無くなったのだ。

(てか……逢瀬くんが戦ってる相手って、高山くんだよな?)

しかもよくよくみると、怪人の方は昨日と同じ——すなわち、高山であった。彼が怪物になったことについても、仮面ライダーのあれこれについてだのと色々理解が追いついていないのだが、こうして目の前の戦いを見ていると、アレは現実だったのだと改めて思い知らされる。

しかし、そんなことよりも志村にとって重要なことがあった。戦場からの離脱である。逃げ遅れた今になって動いたらどんな目にあうか、志村の鈍い頭でも充分想像でき

る。だからここから動きようもないし、出来ることといえば観察だけ。このような理由から柱の影に隠れて戦いを見守っていた。

が。

「邪魔をしないでくれっ……この力がなきや……ヒーローじゃなくなる！僕は僕じゃなくなるんだよ……！」

「そこまでして固執するのかよ……！考えて直せたかやぐはあっ！」

必死に抵抗してくるビルドオリジオンに尚も言葉をかけるアクロスであったが、オリジオンに腹を蹴られ、志村の隠れている駅舎の方へと吹っ飛ばされる。そして、ゴロゴロと地面を転がって此方まで飛んできたアクロスと目が合う。

「うわあああああああっ!?？」

「っ！まだ逃げ遅れた人が——って志村あ!?？」

「は、はいドーモ志村デス……！」

申し訳なさそうにちぢこまる志村。邪魔になっているのは重々承知なのだが、仕方ないのだ。

「ごめん、逃げ遅れた……！」

「お前なあ……！」

溜息をつくが、今更逃げるのは厳しい。アクロスは志村に、その場から動かないよう

に念を押して言う、再び戦闘に戻ろうとする。

が、志村はそんなアクロスを呼び止める。

「ねえ」

「？」

「あれって、やっぱり高山くんなんだよね？」

「ああ……俺も初めは驚いていたけどな」

「ずっと考えていたんだ。高山くんがやってることが本当に正しいかって。でも……やっぱりおかしいよ。あれが正義の行いだって、僕はどうしても思えないんだ」

「そこで何をしている？」

「!??!」

二人の会話に割って入ってくる声。同時に、一人奮戦していたビルドが吹っ飛ばされて転がってくる。見ると、ビルドオリジオンが息を切らしながら此方に歩いてくるのが見える。

「戦兔！」

「大丈夫だ。こいつ、昨日よりも容赦が無くなっている」

「何で僕の邪魔をするのさ！僕は正義のヒーローの筈だ！僕の行いは、賞賛されるべきものなんだぞ……ああ、僕は正義のヒーロー、正義のヒーロー正義のヒーロー……」

切羽詰まったような声で、まるで自分に言い聞かせるように叫ぶビルドオリジオン。正義のヒーローだ、とうわごとの様に繰り返し眩きながら歩み寄ってくる様は、とてもじゃないが正気の沙汰とは思えない。

だが、瞬は、明確にそれを否定する。

「お前なんか正義のヒーローのわけ無いだろ、自己中野朗！」

「なん、だと」

「根本的な事を言うぞ。ヒーローってのは思いやりなんだよ。他人の事を本気で助けたい、誰かの力になりたいって心の底から思えるからヒーローなんだよ。だからお前も憧れたんじゃないのか!?」

戦兎は「誰かの力になれたら、心の底から嬉しくなって顔がくしゃつとなるんだよ」と言っていた。たとえ力が無かろうと、そう言った思いやりの心を持ち、それを実践出来るからこそ、ヒーローはヒーローたり得るし、憧れの対象にもなる。だが、自分勝手な正義に酔ってはならない。ましてや、悪人だからと言って容赦なく叩きのめす様な奴が善人である訳がない。罪を憎んで人を憎まず。それが出来ておらず、ヒーローの力に溺れる高山を、瞬は否定する。

ビルドオリジオンは動揺したかに見えたが、それを否定するかの様に、自らの正義を否定する瞬を排除しようと拳を振り上げる。

「だって君、悪い奴を叩きのめしてる時、どんな気持ちだった？」

そこに、志村が口を出した。ビルドオリジオンは、振り上げた拳を止め、志村を見つめる。足は震え、歯はガチガチと鳴っており、全身から恐怖が溢れ出ている。それでも、言わなくてはならない。そう決心し、なけなしの勇気を振り絞って志村は続ける。

「昨日、見たんだ。逢瀬くん達と別れた後で、君が人を襲っているところを」

「……」

「その時の君は、笑ってた。人を痛めつけながら、笑ってた。僕は怖かった……あんなの、ただ暴力を振るってるのを楽しんでるだけじゃないか！」

志村の言葉に、ビルドオリジオンは怒りを露わにする。否定したい事実を口にする目の前に少年を排除しなければならないと、焦りがどんどん大きくなる。

そして志村は、その言葉を口にする。高山を否定する、鋭い言葉の刃を。

「ヒーローって、あんなことするかな？僕は……あれを見て、君を正しいなんて到底思えない」

「このっ……何も知らない、力もない弱虫の分際で！」

ビルドオリジオンは激昂し、志村に殴りかかろうとする。が、間一髪、アクロスがその拳を掴んで止める。

「志村の言う通りだ。今のお前は悪を捌いてるんじゃない。力を振るう相手に悪人を選

んでるだけなんじゃないのか？お前も薄々気づいてるんだろ？」

「今のような行いをする奴を、ヒーローとは言えない」

「煩い……！おまえらに何が分かる！」

「正義を力を振るう言い訳にするな！本当に正義の味方になりたいなら！まず心で示さなきゃ駄目なんだ！」

「目を覚ませ！お前が向かう先にあるのは善悪の関係ない無だ。力を振るわずともできる正義はある！それでも駄目な時に代わりに戦うのが、ヒーローだ！」

2人の「仮面ライダー」の言葉に動揺したような素振りを見せるビルドオリジオン。その一瞬の隙を突き、ビルドとアクロス、2人のライダーのパンチが彼の胴体に滑り込むようにして突き刺さる。膝をつき、ビルドオリジオンから高山の姿に戻る。オリジオンとしての姿を維持できなくなる程に消耗したのだ。

傷つき倒れた高山。しかし、彼は尚もうわ言のようにこう繰り返す。

「僕は……ヒーローだ。でなければ、僕のこの正義感は無意味になってしまうじゃないか……」

正義を成すための力が、いつしか目的と手段が反転し、力を振るうための言い訳としての正義という形になってしまった。正義のヒーローとしては、最高に皮肉なものである。

これで本当に終わったのか。それを確かめるべく、瞬はその場に座り込んだ高山に近づく。しかし、

「お前の妄執はその程度か？」

「……？」

そこに、ずっと傍観していたティードが割って入る。ティードは仮面ライダー達には目もくれず、座り込んでいる高山の腕を掴んで無理やり立ち上がらせ、発破をかけた。めた。

「正義のヒーローになりたいのだろうか？なら、邪魔する悪を討て。その為の力を与えてやったのは誰だと思ってるんだ？」

「ティード様……僕は……」

「つまらん事で迷うな。拒否権などあると思ってるのか阿呆め」

「がふっ」

突然苦しそうに呻く高山。よく見ると、ティードの腕が高山の腹部に深々と突き刺さっていた。しかしながら、血は一滴も流れておらず、ティードの腕は高山の体を貫通するほど深々と突き刺さっている筈なのに、腕の先が背中から見える、といったこともない。まるで、亜空間かなにかに突っ込まれているようだ。

「くだらん正義など放り出し、俺達のために暴れる。貴様ら転生者の存在意義はそれだ

その巨体による体当たりは、ビルドとアクロスを最も容易く吹き飛ばしてしまう。

「うわあああああああつ!」

「があああああああつ!」

これまでとは比べ物にならない程の強い衝撃が2人を襲う。倒れ伏した二人に、暴走を続けるビルドオリジオンは左手につけられるアームキャノンから、幾つものミサイルを放つてくる。それはアクロスとビルドはおろか、離れた位置で戦っていたクローズや転生者狩り、ネプテューヌに加え、リイラやガングニールオリジオンさえも巻き添えに爆発を起こした。もはや敵味方の区別さえもつかなくなっているらしい。

全身を襲う痛み能耐えながら、爆炎の中、アクロスとビルドは立ち上がる。他の面々も立ち上がり、それぞれの戦いを続行する。ビルドオリジオンは雄叫びを上げながら、地面を強く叩く。

「勝てるのか、あれに……」

ぼつりと瞬が眩いたその時だった。

急に、アクロスの視界の端が少し眩しくなったのだ。炎の光ではない。どこか優しく、それでいて力強く感じられる、白い光だった。光源はすぐそばだ。アクロスはビルドの方をみるが、そこには驚きの光景が存在していた。

「おい、戦兎………身体が」

「え……な、なんじゃこりや！」

びつくり仰天。なんと、唐突にビルドの身体が淡く輝き出した。

「コレは……何が起きている!?？」

「俺もわかんないけど……前にもあつたなこれ」

その光は、次第に一点に集中していく。アクロスの掌に。

そして光は、一つの鍵のようなモノに変化する。赤と青のカラーリングが何処となくビルドを連想させるそれは、紛れも無くアクロスが使用するライドアーツそのものであつた。

「ネプテューヌや一誠の時と同じ……まさか！」

起動してみる。

《BUILD》

これまでの時と同じようにして、ドライバーの中央部を横に回転させてライドアーツ挿入口を上に向け、クロスドライバーにライドアーツを差し込み、再び横に倒す。すると、

《LEGEND LINK……ラビットアンドタンク！アクロスアンドビルド！ベストマッチ・リンクオン！》

ビルドドライバーの変身音のように喧しくハイテンションな音がクロスドライバー

から流れる。それと同時に、アクロスの左右に兎を模した膝丈ほどの大きさの赤いメカと、同じ大きさの青い戦車が出現し、左右それぞれから瞬の身体に引っ付いていく。

兎の頭部が左肩のアーマーに、前脚が伸長して左腕の装甲になる。戦車の砲台が右肩アーマーに、右キヤタピラが右腕の装甲になる。残ったパーツが脚部と胸部にひつついていき、アクロスの複眼が赤と青のオッドアイに変化する。そして触覚のような部位、リングージコントローラーは左右それぞれが兎の耳と戦車の砲身を模した形状に変化する。

「これは……ビルドの力?」

「その通りだとも!これこそ仮面ライダーアクロス・リンクビルド。仮面ライダービルドとの絆の結晶、紡がれし新たなる力だとも!」

「ファイフティ?」 一つの間……!」

横から胡散臭いイケメンボイスが聞こえてきたと思つたら、一つの間にかアクロスとビルドの真後ろにファイフティが立っていた。何しにきた。まさか今の台詞を言うためだけに現れたとでもいうのだろうか。

「英雄との繋がりで進化する、それこそがアクロスの真骨頂。行きなさい、君の行く道は確かな繋がりに満ちているさ!」

「絆の力、か」

レジェンドリンクは絆の結晶。ファイティの言葉を聞いて、アクロスは自分の手のひらを見つめる。僅かな間ながらも、ビルドとアクロスは仮面ライダー同士繋がり合えた。その結果が今のアクロスの姿なのだ。アクロスは拳を強く握りしめ、戦兔の顔を見て言う。

これで終わらせる。

「一発で行くぞ」

「ああ」

《VOLTAGE FINISH》

《VOLTAGE CROSS BRAKE》

2人のライダーが必殺技を発動する。両者とも高く跳び、空中で飛び蹴りの姿勢を取る。すると、ビルドの突き出した左足から曲線グラフが現れ、オリジオンの胴体まで伸びていく。アクロスの足からも同様にグラフが現れるが、ビルドとは違い下に凸の放物線を描いている。

しかし、グラフの形は違えど、終点は同じ。2人のグラフの交点は、オリジオンの胴体のど真ん中。

「せえいやああああああああ!!?」

「はああああああああああ!!?」

「あれ、終わったの？ 呆気ないわねえ」

ゴスロリ衣装をボロボロにしながらも、ネプテューヌを触手で甚振っていたリイラは、ビルドオリジオンの敗北を目の当たりにし、興が削がれたと言った感じの顔をした。「貴女と戦うのも飽きちゃった☆そろそろ食べちゃおうかしら」

リイラの背中から生えた昆虫の脚が不気味に蠢く。そして、彼女の腹のあたりから、なんらかの食虫植物の花弁のような物が浮かび上がってくる。ネプテューヌを食わんとばかりに、花弁から消化液とおぼしき液体が滴り落ちる。

終わった —— 既に反逆できるほどの余力はない。実力差が開きすぎている。こんな事なら、普段からイストワールの忠告通り、怠けずにしっかり女神家業やっておくんだった ——

らしくもない後悔に、ネプテューヌの思考が埋め尽くされそうになっていたその時。

「因果切断・反動一破！」

「はひええ!?」

「!?」

突然、リイラの触手が飛んできたサーベルによって切断され、ネプテューヌは縛られた状態のまま地面に落とされた。縛られているので受け身は取れず、鈍い痛みが全身を襲った。

レイラは、不満そうに舌打ちをして、サーベルが飛んできたであろう方角を睨みつけて言う。

「何のつもりよ……レイラ?」

そこには、長い銀髪をツインテールにした豪華な軍服姿の少女が、ライフルの銃口をレイラに向けた状態で立っていた。レイラの姉であり、同じギフトメイカーの一員、レイラである。レイラは、邪魔されたことに対する怒りをあらわにレイラに対し、淡々と告げる。

「こんな奴に構ってる場合か?あのオリジオンがやられた以上、ここに留まる意味はない」

「食事の邪魔しないでよ。たとえ実の姉だろうと、私の邪魔する奴には容赦はしないわよ」

「ティータからの命令だ。今すぐ帰還しろ、とな」

その言葉に、苦虫を潰したような顔をするレイラ。乱暴な手つきで、レイラに投げられ地面に刺さっていたサーベルを引き抜くと、踵を返して歩き出す。

「……帰るわ。退屈しのぎにはちよつと足りなかつたかしら。女神化できない貴女なら無理もないでしょうけど」

「なら帰るぞ」

縛られたままのネプテューヌに背を向けたレイラは、昆虫の足や触手や食虫植物の花弁を全部仕舞うと、代わりに蝶の羽根のようなものを背中から生やし、その羽根で宙に浮かび上がる。一体どんな身体しているのか、不思議なものだ。

羽根で空を飛んでいった妹を仰ぎながら、レイラは去り際にこう言った。

「妹が迷惑をかけた。すまない」

「え……」

そしてレイラは一瞬の内に姿を消した。まるで瞬間移動でもしたかのように。

結局、レイラの言動の意図は殆ど分からずじまいだし、レイラには惨敗してしまったネプテューヌであったが、ひとつだけ、理解していることがあった。

自分は今、あの少女に庇われたのだと。

一方、此方も決着が着こうとしていた。

「があっ!」

「おらあ!」

万丈のストレートパンチで吹っ飛び、地面を転がるガングニールオリジオン。いくら頑丈でも、長きにわたる戦いで体力が減ってきているのだ。

その隙にガングニールオリジオンを挟み込むように移動したクローズとゲムは、それぞれベルトを操作し、必殺技を発動する。空高く跳び上がる2人を見て、ガングニールは大きな手甲のように肥大化した腕部装甲を突き出し、それを以てキックを受け止めようとする。

「おらあ！」

「せえい！」

《キメワザ！クリティカルストライク！》

《VOLTAGE FINISH》

2人のライダーキックがガングニールに接触した瞬間、爆発が起きた。炎が巻き上がるとともに、ガングニールの苦悶の声がする。

「やったか!?？」

爆炎の中、クローズが立ち上がる。しかし、辺りを見渡してもガングニールオリジオンに変身していたであろう人物の姿は何処にも見当たらない。ただ、燃える装甲の残骸が一部残っているだけであった。

「逃したか……ギフトメイカーの奴らも相変わらず逃げ足が早いな」

ゲムは溜息をつきながら、ある一点に目をやる。そこには、オリジオンの姿から戻り、その場に座り込む高山の姿があつた。見ると、変身を解いた瞬と戦兎が彼に近寄つ

ていつている所であった。

「……」

「高山」

瞬の呼びかけを、高山は無視する。

ゲムムは、背後から高山にゆつくりと近づいていき、座り込んで肩を落としている彼の背中に弓型の武装、ガシャコンスパロウを突きつける。

「何をする気だ！」

「……」

殺す気なのか。そう問いかけようとしたが、ゲムムは「邪魔をするな」とでも言うかのように瞬達に殺気を飛ばして威圧してくる。市街地の駅前という場所には似合わないような静寂が辺りを支配する。

幾らか経った頃。ゲムムはおもむろに武器をおろす。

「斬る必要はなくなつた」

「へ？」

「こいつにはもう何の力もない。もう2度とオリジオンになる事もないし、転生特典も使用できない。ならば、殺そうが生かそうがどの道俺には意味がない。だから、テメエらが後始末をしろ」

んな勝手な……と思ったが、兎に角高山の命も保証されたようだ。いくらあんな事をしでかしたとはいえ、クラスメイトを目の前で殺されるのは瞬にとつてもいただけなことであつた。そんな事したら、高山と同じになってしまう。

転生者狩りは、ゲナムに変身したまま瞬達に背を向けて歩き出す。そして、「道を違えるな。次にまた堕ちたら、その時は殺す」

そう高山に言つた。

これは執行猶予みたいなモノなのだ。高山自身も、本能的に理解していた。その身体は、恐怖で震えていた。

(こんな気分だつたのか……僕にやられていた人達は、僕をこんな風に見ていたのか) 身に沁みてわかつた。オリジオンとして力を振るい悪を裁く自分が、周りからどう思われていたのかを。これが真つ当な反応だつたのだ。それを認めずに自分はヒートアップしてしまった。結果的に、憧れだつたヒーローに全部否定され、迷惑をかけてしまった。

——なんて身勝手な奴だ。結局のところ、自分が一番の悪だつたんだ。

傷だらけの身体で項垂れる高山を、瞬達は見つめていた。彼は過ちに気づいた。ならば、それを機にしつかり反省し、罪を償ってほしい。それが間違いを犯した人間の義務なのだ。そう思っていた。

「……」

転生者狩りの耳に、高山の嗚咽が入ってくる。彼はそれを聞いて足を止め、振り向く事なく瞬に言葉を投げかける。

「お前もだアクロス」

「!?？」

「お前はコイツを否定したんだ。なら、せいぜい口だけの馬鹿にならないようにしろ」

転生者狩りはそう言うのと、いつの間にか止まっていたバイクに跨り、たちまち走り去ってしまった。幾人ものライダーに変身しその力を自在に操り、敵か味方か、それに正体も分からない転生者狩り。あいつはやはり一筋縄ではいけないものだと思認識する瞬であった。

「なーによあいつ！感じ悪すぎじゃない？」

「彼も素直じゃないねえ。まあ、それも仕方ないのかもしれない」

唯とフイフティが、転生者狩りの陰口で盛り上がる中、ずっと項垂れていた高山は、顔をあげて瞬に問いかけてきた。

「……心で示せて言ったよな。なら、君はどうなんだ？」

「正直出来るかどうかは自信がないな。でも、それを忘れずにいたいし、できるようならなくちゃいけない。それが、この力を手に入れた俺の義務だと思ってるから」

「……今からでも、できるかな」

「出来るよ。命がある限り、なんどでも」

志村が高山に発破をかける。

転生者狩りも、乱暴な言い方だが瞬に忠告したのだ。目の前の失敗した者と同じ轍を踏むなど。自分も気を付けねばなるまい。それが仮面ライダーになった自分の義務だから。

そしてもう一つ。半ば押しつけられたような力でも。心に宿しているのが誰かの受け売りの理想でも。こうして誰かを助けられた事が、瞬はなんだかとても嬉しく思えた。

「戦兔の気持ち、少し分かったかもしれない」

—— 誰かを助けた後って、なんか他とは違った達成感……爽快感? まあそんな感じのヤツ? があるよね。それで感謝されたら余計に心が熱くなるような、バクバクするよな…… 兎に角! 人助けっていいよね! ってコトよ。

唯と出逢って間もない頃、彼女がこんな事を言っていたのを思い出した。結構フワフ

ワした言い方だけど、案外「やり切った」後のヒーローの気持ちとしては的を射ているのかもしれない、と瞬は考えていた。今の自分の気持ちは、まさしくこれだったのだ。きつと、あの時の唯も似たような気持ちだったのかもしれない。

色々と考えを巡らせる瞬に、戦兔が声を掛ける。

「これからはお前の番だ、瞬」

「え？」

「力が必要になったら、いつでも呼んでくれ。力を貸すぜ」

「頑張れよ、後輩」

ポンと瞬の肩に置かれる、2人の先輩の手。

ラブアンドピースを掲げて戦い続けた先

レジエントライダー

輩は、前途多難なアクロスこうはいに後を託し、

去ってゆく。その思いを噛み締めた瞬な、背負ったものに恥じない人間にならなくては、という思いをより一層強くするのであった。

ビルドとアクロス。

今確かに、縁は結ばれた。

第16話 戦艦少女の園

人類に仇なす深海棲艦が海を支配してから早十年。

深海精鬼に対抗しうる唯一の存在。それが、人間に軍艦の力を融合させた艦娘であった。

4月も残り1週間。戦いの始まった当初と比べると、随分と平和になった海。かつては世界各地のシーレーンは壊滅的な被害を被っていたが、艦娘と彼女らを指揮する提督達の手により、かなり持ち直してきていた。昔ほどではないが、今では艦娘の護衛付きで海上輸送も活発になりつつあった。

海の脅威との戦いは、徐々に日常の一部へと溶け込み始めていた。そんな世界の、あるひとつの鎮守府から物語は始まる。

4月23日(日) AM10:00

「またいない……」

駆逐艦・吹雪は執務室に入るなり肩を落とした。

時刻はヒトマルマルマル。真つ当な人間や艦娘はとつくに活動を始めている時間であるのだが、彼女ら艦娘を指揮する、この鎮守府の提督の姿が見当たらない。

野暮用で席を少し外したらコレだ。彼女の上官たる提督は、若干押しに弱いところがあるので、押しの強い艦娘の我儘に付き合わされているのであろう。あの時以来、こういう事が多くなってる。

(コレはあのパターンかな。面倒くさいけど、仕事はしてくれなきゃ困るし……もう少し軍人としての自覚をもってよもう)

経験則からそう推測した吹雪は、愚痴を溢しながら鎮守府内を探すことにした。吹雪もあまり自分も人の事は言えないが、平和にかまけて少々弛みすぎてるのではないかと思いつながら、階段を下つてゆく。

階段を降り切ったその時、吹雪の真上から声が降ってきた。

「ブツキー！ちよい避けて！」

「なんでぶはあ？？」

言われるがまま避けようとした次の瞬間、吹雪の目の前に誰かが上から飛び降りて来た。驚いて盛大に尻餅をつく吹雪。パンモロしているが生憎それに喜ぶ者は今この場
にいない。

吹雪は自分の目の前に現れた人物を見上げる。軽巡洋艦・川内。この鎮守府のエース艦娘の1人にして、問題児の1人。吹雪よりも少し年上のその少女は、2階から階段の吹き抜けを直で飛び降りてきたのだ。

綺麗に着地を決め、大きな欠伸をしながら肩をほぐす川内。朝が弱い彼女にとって、午前10時はまだ早い感覚なのだ。

「……川内さん。吹き抜けを飛び降りないでください」

またですか、といった感じに呆れる吹雪。川内と呼ばれたこの少女はいつもこんな感じらしい。

「だってこっちの方が早いし、私怪我しないし。眠気覚ましにちょうどいいんだよね」

「確かに貴女の運動神経は常軌を逸したレベルですけど、駆逐艦の子が真似したらどうするんですか?」

「しないですよ。この鎮守府の駆逐艦の皆、まともだし」

他がまともじゃ無いみたいに言うな。そして言い訳の体を成していない言い訳をするな。駆逐艦の艦娘にとって、巡洋艦や戦艦の皆さんは憧れの対象なのだから、少しくらい意識してほしいものだ。こういう良くも悪くも自由な所が川内の特徴なのであるが。

立ち上がって事情を説明する吹雪。川内は少し考えた後、

「提督探してるんだよね？なら、神通のどこじゃない？」

「あーそうですか……今の時間帯は暇でしたしね、神通さん」

川内の妹・神通の所にいるのでは、と予想を立てる。吹雪もそれに納得するが、2人ともどこか面倒くさそうな顔になっている。

しかし行かなければならない。提督に仕事させなければならぬのだなら。そういうわけで着いたのは神通の部屋。

なんか扉の向こうでギツタンバツタンと喧しい音が聞こえてくるんですけど。絶対厄介なことになってるよねこれ。川内と吹雪は顔を見合わせるが、上司のケツを引つ叩いて動かすのも部下の役目だと覚悟を決め、ドアノブに手をかける。

扉の先には、こんな光景が広がっていた。

「さあ提督！これを！これを着るのです！」

「やだよ！俺にも一応まだ男としてのプライド残ってるもん！バニースーツなんてやだよ！てか俺じゃなくて他の奴にやれよ！多分五航戦とかその辺需要あると思うから！」

「いや部下を売っちゃダメだよ……でも五航戦バニーは確かに需要あるかも」

バニースーツ片手にどったんバツタン暴れる川内型軽巡洋艦式番艦・神通と、彼女から逃げる川内達とそう年の変わらない見た目をした白い軍服姿の少女と、その様子を部屋に備え付けられた二段ベッドの上で体育座りになって死んだ目で見ている参番艦・那

珂。正直言つて文章で書くにはあまりにもカオスな状況が広がっていた。

しかし川内と吹雪はこれに慣れているのか、またか、と言つた感じに軽く溜息をつくと、目の前を通り過ぎようとしていた神通の首根っこを掴んで事実の説明を要求する。

「神通……？少しは節度とかそーゆーのを持つて欲しいなあと私は常日頃から思つてるわけなんですけど、これは一体？」

「川内姉さんが駄目なら提督でやるしか無いじゃない！普段怠けて私のセツティングした訓練メニューを適当にやつてるんですから、今くらいは私の言う通りにしてくれたつて構わないですよね!!？」

「お前部下、俺が上司。アンダスタン？」

「軽く30分近くこの地獄に身を置かされてる那珂ちゃんの気持ちを誰か労つてくれな
いかなあ」

神通から逃れるように吹雪にしがみつく少女と、色々と諦めたような遠い目をする那珂。興奮状態の神通を羽交い締めにしながら、どうてこんな方向に拗らせちゃつたかなあ、と妹と同じように遠い目をする川内。

この鎮守府の神通、普段は厳しく面倒見のいい軽巡、しかし川内関連になるとクソレズに大変身を遂げてしまうという悪癖があるのだ。川内の記憶が確かなら、少なくとも艦娘になった直後はこんな感じじゃなかったと思う。神通は過去に色々あつて艦娘人

生存続の危機レベルに陥り、それを川内と新人だったこの鎮守府の提督が頑張つて立ち直らせたのだが、多分それが原因だと思われる。

軍服姿の少女は神通に取り押さえられながら、吹雪に助けを求めて手を伸ばして行く。なんか見えていて可哀想になってくる必死さだ。

「助けてブッキー！貞操の危機だよ危機！俺こんな形でハジメテを奪われるなんて嫌やで！」

「無理です。今の神通さんはガチです。キラキラしてますもん月光蝶……じゃなかった、絶好調ですよ」

「提督よ犠牲になれ」

お手上げ状態の吹雪と、残酷な天使の○○○のリズムで少女を身代わりにしようとする川内。この薄情者お！と少女が叫ぶが、神通は構わず少女に抱きついてハアハアハスハスとやべー音を出しまくる。

「知ってますか提督、ドラえもんにも不可能はあるんですよ。私の欲望を満たすための犠牲になっていただけませんかでしょう。此方は日々の仕事で色々溜まるんですよ」

「溜まるって何？ ストレス以外も含んでないそれ？ てか上手くねえんだよ！頼むから仕事してて仕事！貴女の有能さは理解してるから俺を人形代わりにしないでえ！」

涙目で神通に懇願する少女だったが、ここでどうとう川内が屈してしまう。

「ねえ提督。いい加減諦めたら？これじゃいつまで経っても仕事始められないし、そもそも今日はお客さんがくるんでしょ？ならさっさと神通のオモチャにでもなっちゃいなよ」

「川内いいいいい！お前の妹だろなんとかしてくれ！」

「どうにもならないのは提督もよく分かってるでしょ。那珂ちゃん関わりたく無いから、バイバイ」

普段の明るさは何処へやら、色々と諦めたような言動の那珂は死んだ魚のような目のまま逃げるように部屋を出て行ってしまった。アイドルにあんな目をさせるなんて酷いやつだ。ファン辞めます。

川内の無責任な発言により、この場は神通の勝利となった。吹雪はもう呆れて何も言えなくなっている。なんて酷い有り様なんでしょう。バニースーツを手を取った少女は、顔を赤くしながら神通にあらかじめ釘を刺す。

「……着るだけでぞ。ほんとに着るだけだから！仕事立て込んでんだからな！」

「ええ分かっています。写真だけ撮らせていただいて、続きは夜に致しましょう」

「後で川内にもやっちゃいなよ。そんな時は強力するから」

「提督ひつどーい！」

「私が言うのもアレなんですが、見捨てた川内さんが悪いかと……」

これが、舞網鎮守府の騒々しい日常的一幕。今回のプロローグもとい蛇足。艦隊を率いる提督は、潮原東吾。

世界で唯一の元男性の艦娘である。

同日 正午

隣町・舞網市。デュエルに關した技術が突出して高いデュエルの街——という事実は今回はほぼ関係ないが——その郊外。

「つーわけで、今日は知り合いの提督に掛け合つて此処、舞網鎮守府に遊びに……じゃなくて見学にきました」

「いええええええええええええええええええええええええい!!?」

初っ端から典型的なYouTuberみたいなノリをしてるアラタと唯。今彼らの

背後には、赤い煉瓦造りの建物がある。それが、この舞網市に設立された軍の施設——鎮守府であった。その入り口前ではしゃいでいる2人に対し、若干困惑気味の瞬は、当然湧いてきそうな質問をする。

「軍事施設に遊びに行つていいんか」

「鎮守府は定期的に一般開放されるからな。考えてみる、年頃の女の子達を戦場に立たせてる海軍がどんな目で見られるのかを。めっちゃ冷たいからな？ 八甲田山レベルだからな？」

「例えわからないけど、とりあえずすべつてるぞ」

アラタの話によると、艦娘という存在が世に出てから10年くらい経っているにもかかわらず、未だに艦娘への否定的な意見は根強く、中には女性差別だとか仰つて政府をボコスカお殴りになる女性人権意識の高い方々や、そもそも艦娘使うくらいなら死んだ方がマシと言い出すやべー奴までいるらしく、イメージアップを兼ねて、定期的な一般向けイベントを行なつてオープンな環境作りに努めているらしい。

一応軍事施設なので見せちやまずい場所も多々あるのだが、こうしてオープンな環境にする事で、鎮守府側も後ろ暗い事が出来ないようにするとう一面もある。

「姉貴はさ、艦娘のメンタルケアやつてるんだ。あれでも元艦娘だからさ、当事者だったからこそ親身になってくれるって

「お前の姉さんを知らないんだが」

「別に知らなくて良いよ。あの人ただの駄目人間だから」

「山風エ……」

家族に向かつて辛辣な事言うなあと思う瞬だったが、自分も大概なので口には出せなかった。それに、来ているのはこれで全員というわけでは無い。

「まさか私達まで連れていって貰えるなんてねえ。あたしや感謝感激だよ。艦娘見るの初めてなんだよねードキドキしちゃうな」

「私もなんだよね。艦娘って可愛くて強い子多いから憧れちゃうよねー。ということ
は、あんな子達に守られてる私達人類ってすごく幸せ者なのでは……?」

「あーはいはい2人ともはしやがないの。無理やりついてきたんだから少しは自重してよ」

ネプテューヌとヒビキもちやつかりついて来ていた。現役の艦娘とじかに触れ合えるチャンスだからなのか、かなり強引に参加してきたのだ。彼女らの反応を見るに、子供達にとつても艦娘は憧れの存在のようだ。

居候その1とその2を宥める妹・湖森を横目に、瞬は鎮守府の建物を仰ぎ見る。これが海の平和を守る最前線。こんな所に来てよかったのかと未だに及び腰な瞬を見て、アラタが呆れたように笑う。

「しっかしさあ、逢瀬。俺らの世代にしてはちと無知すぎやしないか。ここら辺は社会科の授業でも定番だぜ？」

「瞬、バカだから」

「お前にだけは言われたくねえよ万年赤点のくせに！」

仕方がないだろう。瞬がアクロスに変身したあの日、世界は変わった。今まで無かったものがさぞ当然のように日常に浸透する。いかなれば、いきなり見知らぬ世界に飛ばされたも同然なのだ。昨日まで居なかつた人が知り合い面してくる様には散々混乱させられてきた。しかし、それを共有できるのは唯のみ。

艦娘というものも、瞬にとつてはあの日以降急に出現してきたものだ。深海棲艦との戦いが始まって10年弱、とか言われてもピンとこない。軍艦の力を宿したオンナノコ、という認識で合ってるのだろうか。

「……逢瀬くん、唯ちゃん、僕も来てよかったのかな？」

ここで、おずおずと手をあげる少年が一人。志村である。

前回の一件の後もなんやかんやで関わり合いが続いた結果、こうしてアラタ達とも関わるようになったのである。なんかキョドツてる志村の背中をバシバシと叩きながら、アラタは笑いかける。

「志村、そんな事気にしてたのかよ。大丈夫だったの、友達だろ？」

「ダチのダチはダチだろ！逢瀬の友達なら悪い奴じゃなさそうだしな。宜しくな！」
「あ、はい」

はて、自分はいつの間に野郎にこんな台詞を吐かせるレベルの友好度を築きあげていたのだろうか。互いに握手をするアラタと志村を見ながら首を傾げる瞬であったが、まあ別に不都合があるわけでもないので深く考えるのはやめた。

そうしているうちに、鎮守府の正面玄関から、艦娘と思しき数人の少女が出てくるのが見える。自分達を迎えに来たのだろうか。そうしているうちに此方に気づいたのか、眼帯付けた紫がかった髪の女性が瞬達の元にやって来た。

「ようお前らかーアラタのダチつてのは。俺は天龍、一応オメーらを案内する役を任されてるんだ。今日一日宜しくな」

そう名乗りながら、握手の手を差し出してくる艦娘・天龍。こうして艤装を付けていない彼女達をみると、完全に瞬達とそう歳の変わらない学生にしか見えない。つくづく不思議な気持ちにさせられるなあと思いつつながら、瞬は天龍の握手に応じる。自分と同じ、暖かい手だった。

と、握手が終わったのを見計らってか、アラタが天龍に喜びながら駆け寄っていく。2人は互いにハイタッチをして、再開を喜び合う。

「天龍の姉御お！春休み以来だなー！」

「アラタじゃねーか！おー、元氣そうじゃん！またでっかくなつたんじゃねえか？」

「天龍も大きくなつてくるくせに」

そう言うアラタの視線はある一点——天龍のでっかい胸部装甲（意味深）に集中していた。皆のアラタに対する視線がみるみる内に冷たいものに変化していく。そりやあまあ気にはなるだろうが、少しは取り繕つてほしい。

「胸の話はするんじゃねえ。セクハラで訴えるぞゴラ」

「ひっ」

天龍がアラタをキツと睨みつける。その鋭く強い眼力に、向けられたアラタだけでなく、ネプテューヌやヒビキ、山風も身が竦み上がってしまう。瞬や唯も一瞬身震いしてしまつたくらいだ。これが戦場に立つ者の凄みというやつなのだろうか。

が、どうやら天龍自身はそこまで怖がらせるつもりはなかったようで、震えるちびっ子達を慌てて落ち着かせようとあたふたする。そんな彼女の頭に、後ろから軽いチョップが浴びせられる。

「いーけないんだー天龍ちゃん！子供怖がらせちゃ駄目ですよーが！」

「川内さん！」

そこに居たのは川内だった。白いマフラーを風に靡かせながら会釈する彼女の姿は、不思議とかっこよく見える。

「別にそんなつもりはなかったんだよ。つーかお前何しにきた訳？訓練中じゃなかったっけ？」

「残念だったな、私は今日昼間は暇なのさっ！」

えへんと威張って答える川内。別に威張ることじゃねーだろ、と愚痴りながら、天龍は自分を怖がっているヒビキを優しく撫でて落ち着かせる。

大鳳は、元気が有り余ってる川内の姿に、どこか安心したように微笑む。

「川内、相変わらず元気ね」

「もうお昼だしね。ようやくエンジンが温まつてきたって感じかな？」

こうしてみると、戦場に立っていかない、日常の中の艦娘達かのしよは、本当に普通の女の子にしか見えないなあと改めて思う瞬であった。そんな瞬の視線が気になったのか、天龍が瞬に問いかけてくる。

「さつきから気になつていたんだがよ、ずーつと珍しいモノでも見たような顔しやがって、いったいどうしたんだよ？艦娘ぐらい今時の奴らはすっかり見慣れてるつてのにさ」

いや見慣れないです。信じがたいです。唯も状況的には同じはずなのにも関わらず、彼女はというと、普通に川内と指相撲をやり出してた。何故そこで指相撲なのかはわからないが、その順応性の高さには見習うものがあるような気がする。

瞬は、天龍の質問に対し、若干どもりぎみに答える。

「ああ、えつと……アンタも艦娘なのか？」

「おうよ。泣く子も黙る天龍サマとはこの俺のことヨオ！」

「あれれ？一昨日の鎮守府ホラー映画観賞会でビビってたの誰だったかなあ？青葉さんにバツチリ映像撮られてたのをお忘れで？」

「あーあれか。瑞鳳と仲良く抱き合って震えてたなーあれ」

「おまつ……よし青葉のヤツとつちめてやらあ！首をだせい！」

よく分からないが、青葉さんとやらに合掌。

しかしこのままではいつまで経っても話が進まないのです、最後の一人の自己紹介に移らせてもらおう。天龍、川内と一緒に来ていたもう一人の艦娘の紹介がまだだったのだ。

「どーも皆さん！秘書艦の吹雪です！皆さんの案内その他諸々を担当させていただきますー！」

山風と同じ年くらいのセーラー服を着た少女が、元気いっぱい挨拶で瞬達を出迎える。こんな小さな女の子に海の平和が守られていたという事実には、瞬は未だに半信半疑であった。

いよいよ瞬達は鎮守府に足を踏み入れる。海が近いからか、吹き付ける風に潮の匂い

が、鼻をくすぐってくる。少し進んだ先に、鎮守府の建物入口が見えて来た。アラタが事務室窓口で手続きを済ませると、一同はロビーに案内された。内部は豪華というわけではないのだが、掃除の行き届いた小綺麗な内装だ。

全員がいることを確認すると、吹雪は注意事項を口頭で確認する。

「二応こも軍事施設なので、機密保持のための立ち入り禁止区間とがありますから、入っちゃダメですよ？ 私も司令官も、できれば皆さんを憲兵さんに突き出したくないですし」

「まあブツキーを始め暇な子達があんたらに付くことになるから、そんな事はやらせないよ」

「そうそう。あ、俺はちよつと用事あるから席を外す。また後でな！」

どつやら天龍は用事があるらしく、軽く別れの挨拶を済ませると、瞬達の行先とは反対方向に廊下を走っていつてしまった。彼女の後ろ姿を見つめながら、僅かな間だったが、思ったよりも気のいい子でよかったと思う瞬であった。

吹雪と川内の後に皆がついていく。すれ違う艦娘達が、不思議なものを見るような目を此方に向けてくる。まあ軍人ならともかく、一介の学生がいるような場所じゃないから当然の反応なのだが。彼女らの反応を見るたびに、なんだか自分がいけないことをしているみたいでどうしようもなく不安な気持ちになってくる。

「積もる話はあるだろうけど、まずは提督にご挨拶しなきゃね」

「あー、そうだな……どう説明しようか？」

「わかるわかる。なんかあの人色々あるからさあ、説明しづらいんだよね」

アラタと艦娘達の間でなんか勝手に話が進んでいるのだが、一体何をそんなにヒソヒソと話しているのだろうか。目の前で内緒話されると無性に不安になるのだが。

そうこうしているうちに、提督のいるであろう司令室について。一同の目の前には、でかい両開きの扉が鎮座している。

「皆さんは中に入らないようお願いします。執務室には軍の機密文書とかが沢山ありますからね。司令官を呼んでくるだけですからすぐ済みます。隣の貴賓室で待つても構いませんよ」

そう言ってから、吹雪は壁の認証装置に手持ちのカードキーをタッチしてロックを解除し、軽くノックしてから司令室の扉を開ける。何やら慌てたような声が聞こえてくるよ
うな ——

「司令官、皆さん来ましたよー」

「あーちよつと待ってまだ着替え終わってん」

声の主が言い終わる前に、吹雪が扉を開けてしまった。絨毯が敷かれた綺麗な部屋。部屋の奥のでかい窓からは、綺麗な水平線が映っている。その中間地点。

パニースーツに軍服の上だけを羽織った、変態チックな服装の少女がいた。

「……」

無言で扉を閉める吹雪。そのまま瞬達の方を振り返る。

—— ナニモミマセンデシタネ？

張り付けられたお面のような無言の笑顔は、そう言ってるように見えた。皆それを察したのか、無言でこくこくと頷く。吹雪はその反応に安心したように笑顔を解くと、呆れたような顔になって紹介する。

「彼がここの提督、潮原東吾^{しおばらとうご}。世界で唯一男性の身で艦娘になつてしまつた男もとい少女です」

矛盾を孕んだ存在が、そこにいた。

執務室の隣にある貴賓室にて、みんなはテーブルを囲んでいた。

ちなみに提督と紹介された少女は、着替える時間がなかったのか、結局バニースーツの上に軍服を着るといふ、かなりエッチでニツチな格好になっている事は瞬達は知らない。

「久しぶりっすね提督さん。前にウチに来たのって確か春休み前でしたっけ」

「そんならいだったなーうん」

「色々ありすぎて結構前のことのように思えてしまうな」

潮原提督とアラタは、2人して春休みの思い出にふけっている。お願いだから自分達の世界にトリップせずに戻って来てくれ。それぞれ吹雪と大鳳に肩を揺さぶられ、現実世界に帰還する。

潮原提督は、帽子を被り直すと、自己紹介をする。

「さっきはとんだ醜態を晒してしまつて申し訳ない。改めて自己紹介を。俺がここ、鯛網鎮守府提督の潮原東吾だ。今日は特別に、君達に我が鎮守府の見学を許可しようと思ふ。よく来てくれたな」

見た目は瞬達とそう歳の変わらない少女がコスプレしているようにしか見えないのだが、その僅かな立ち振る舞いに、彼女の、提督として色々と背負っていることを示す気迫が伝わってくる。

……と思いきや、何やら川内や吹雪とヒソヒソ話を始めた。さっきの気迫はなんだっ

たんだ。

(提督、さっきのなんなのさ！まだ着替え終わってなかったの！？？)

(仕方ねーだろ！ラバーがびつちりすぎて脱ぎづらかったんだよ。男の俺がバニースーツなんて着たことも脱いだこともないことぐらいわかるだろ！)

(で、着替える暇なく上に直接軍服着たわけですか。バレたらどうするんですか)

元はと言えば提督にバニースーツを着せようとした神通が悪いのだが、いくら愚痴つても事態は進展しない。隠し通すしかない。

「……あの、ちよつといいですか」

「なんだ少年」

「あの、さつき吹雪が言ってたのって本当なんですか？俺よく分かんないんですけど、男性って普通は艦娘には成れないものなんですか？」

「そうだよ(肯定)。幾ら研究しても何故か女性しか艦娘になれないんだ。本当は年頃の女の子を戦わせるなんて真似、したく無いんだけどな」

瞬の質問に対し、あつさりと肯定する提督。そりゃあ、艦「娘」と言われてるのだから、男がなるのはどうかと思う。同人界隈には男性艦娘時空といったニツチなジャンルもあるにはあるのだが、この世界ではそういった実例はないらしい。目の前の一例を除いて。

しかし、目の前の彼女（と言っていいのかはよく分からないが、少なくとも生物学的には合ってる）の姿はというと、先程出会った川内という少女に瓜二つなのだ。潮原提督の方は髪を結んでおらず、川内型の制服ではなく、一般的な提督が着る白い軍服であるのだが、逆に言えば、服装以外で見分ける術はないと言えよう。面倒臭いったらありやしない。

「色々あつて艦娘・川内になつて早3年。戻るあてもないんで法律上も女性になつてしまいました」

しみじみと何かを懐かしむようにおつしやる提督さん。いやまて、この人色々濃くない？この人メインで一作品ほど作れない？色々と苦労してたんだな……という感じの雰囲気が滲み出てやがる。

「今日はすいません。忙しいのに俺達の申し出を受け入れてくれるなんて」

「アラタの姉さんには世話になりっぱなしだから。お安い御用よ。友達の皆も、俺達に質問とかあつたらバンバンしてくれ。こたえるぜ」

「はい質問！川内さん、自分と同じ姿の上司って正直言つてどうなんですかね……？やっぱり気色悪いですか？」

唯が川内にかなり失礼な質問をかます。確かに気にはなるけれども、当人の目の前でそんな質問するんじゃない。彼女のデリケートな質問に当の本人はというと、少し考え

てから一言。

「まあ今でも気色悪いね。同一艦が同じ鎮守府にいと色々と混乱をきたすから、基本的には別所に配属されるんだけど、

「オイ」

分からなくもないが、上官に対して非情過ぎではなからうか。横に本人居るんだから少しはオペラートに包んでやるなりしろ。

「私は提督がこうなる前から一緒にやってきてるけど、当初はガチで嫌だったな。まあ、艦娘になった時点で自分と同じ姿のやつと出会う事は必然的になるからね。そこは避けられないって割り切ってるさ」

言われてみればそうだ。艦娘となれる人間は多けれど、元となる軍艦は限りがある。当然ながら同じ艦になる人だって出てくる。

「逆によく割り切れたな……」

「童貞卒業は出来なくなっただけだな……」

「下ネタ振ってこないでください。反応に困るから」

「要するに留年したんだね。可哀想に、一生童貞なんだ……」

「留年というか中退……? って何言わせんだ馬鹿。やめろ、憐れむんじゃない。俺も亡き相棒思い出して泣けてくるからあ！」

どこか哀愁漂う雰囲気をだして、潮原提督。言っていることは分からなくもないけど、女性陣の前でそういった下ネタは控えていたきたい。

「慣れればなんとかなるモンだよ。いざって時は俺自身が出撃できるし」
「するんですか？」

「あーでも余程のことが無い限り出ないぞ？ 指揮官が戦線に出るとか馬鹿そのものだからな。一応、一通り自分でできるように訓練はさせられたけどな」

潮原提督の返答に対し、へえー、と感心するように頷く唯。分かったような素振りだが、本当に分かっているのだろうか？ 甚だ疑問に感じてしまう瞬であった。

そのとき、貴賓室の扉がノックされる。提督が声を掛けると扉が開き、2人の艦娘の姿が現れる。

「あら、もういらしてたんですね」

「何よ、アンタらも来てたの」

「あつ瑞鶴さんに神通さん。珍しい組み合わせですね」

川内と似たような制服に身を包んだ、若干茶色があった髪の毛の少女と、弓道着姿のツインテールの少女が入って来た。どうやら潮原提督に用があるらしい。軽巡洋艦・神通と正規空母・瑞鶴である。それにしてもかなり珍しい組み合わせである。

「偶々よ偶々。ほら、駆逐艦の子から預かった哨戒の報告書。本日も異常無し、近頃はホ

ント平和よねーまったく」

「船舶護衛任務から帰投した木曾さん達から任務完了の報告を受けて知らせに来たんです。あ、皆さんようこそ。お茶をお淹れしますね」

神通は報告を済ませると、給湯器のお湯を急須に注いで温かい緑茶を淹れる。瑞鶴の方は特に何かするわけでもなく、アラタ達と駄弁っている。それにしても現役の軍人や艦娘と面識ある男子高校生っていったい何なんだ……と、瞬と唯の中でアラタの人脈についての謎が生まれるのであった。

一方、お茶出しをする神通を見ながら、潮原提督と川内は先程の光景を思い返していた。川内に変態行為をかまそうとしてたさっきのと、業務に真摯に取り組む今の彼女がどうしても結びつかないのだ。長年の付き合いでもこれだけは無理だった。

（オンオフの切り替えやべーよなアイツ……実はこの鎮守府、神通が2人いるなんて事はないよな？）

（それはない。ノックスの十戒に誓おう。そもそもあんた提督なんだからそれくらい把握しててでしょ）

（十戒に誓う必要ないだろ。お前どこのミステリー作家だよこの体育会系！）

なんか神通をチラチラ見ながら潮原提督と川内がヒソヒソ話をしているが、アレはなんなのだろう。吹雪も呆れて苦笑いしてるじゃないか。

瞬はふと、壁にかけられていた時計を見る。時刻はすでに正午を回っている。それに気づいた途端、急にお腹が空いてきたように思えてきた。実際、唯のお腹はさつきからちよくちよく鳴っている。ここでだいたいぶダレてきた質問コーナーを神通が素早く切り上げる。

「では皆さん、食堂に参りしましょうか。そろそろ昼食の時間ですし」

「俺はこれから仕事があるからな。吹雪、昼食の後からは任せるぞ」

「了解しました。吹雪にお任せを！」

吹雪に連れられ、部屋を出て行く一同。部屋には提督だけが残された。

「……」

誰もいなくなったのを確認すると、提督は軍服のボタンを外して行く。その下には、ラバー素材でできたバニースーツが蒸れ蒸れになった状態で存在していた。

—— バレなかった、よな？

一晩中かかった遠距離任務を終え、帰投する艦娘達がいた。

予定外の深海棲艦との戦闘により、かなり帰投が遅くなってしまったものの、なんとか無事に帰還できたのである。

「予想以上に帰るの遅くなつたね……予定外の交戦あつたから艦装も結構ボロボロだよ。たつた数体といえど、帰り道に襲われるとは思わなかつたなあ」

「お疲れー。今日の任務はかなり長距離を移動したから、皆疲れただろう？しつかり休んで疲れを取れよ」

護送艦隊の旗艦を務めていた艦娘・木曾が、共に帰投した面々に声をかける。服には一部に焦げ跡のようなものがついており、肌や装備も傷だらけであるが、それでも凜とした態度を崩していない。木曾に続いて上陸した駆逐艦・海風は、陸に上がるなり大きく伸びをする。次いで木曾の姉・大井も上陸。木曾よりも傷ついた

「お疲れー。ふう、帰つたら早速ひとつ風呂浴びようかな」

「一晩ぶりのキタガミニウム補給いいすか？」

「大井姉さん、正直言つて今のアンタは汗臭いぞ。そんなんじや北上姉さんに嫌われるけどいいののか？」

「それは困る」

大井の返答が若干食い気味に聞こえた気がするが、深く突つ込むのは藪蛇だろうとス

ルーする一同。

「身体中バッキバキよ……あーもう深海棲艦の馬鹿野郎お！レディーをこんなにもボロボロにするなんて！」

「暁、あんた大破してるんだから大人しくしてなさい。それにしても深海棲艦のやつ、暁を集中狙いしてたけどアレ何だったの？」

「さあな。深海棲艦の考えることはよく分からないしな」

1人だけやけにボロボロになっている暁は、陽炎に牽引しながらぶんすかと御立腹な様子。この調子だと船渠送りであろう。そしてレディーは馬鹿野郎なんて汚い言葉は使わないぞ。

最後が続くのは、陽炎の疑問に対し、さあな、と諦めたように首を振る菊月。ともあれ、今日も全員無事に帰って来たのだ。

戦闘による被弾などで傷ついた装備を工幣に預け、ついで大破している暁も船渠に送り届けた後、残った5人はお風呂タイムに入る。人間も艦娘も、こういった休息が土気の高揚やパフォーマンスの維持に必須なのだ。中にはそういったものを軽視して艦娘を酷使するブラック鎮守府という場所もあるらしいのだが、潮原提督に言わせれば「手厚くサポートしなきゃ充分な能力を発揮できないのは人間も兵器も艦娘も同じ。だからブラック鎮守府のやり方は愚の骨頂」らしい。

船渠の隣にある浴場に向かう一同。戦場で日々深海棲艦相手にドンパチやっている艦娘も、戦いが終われば普通の女の子。どうでもいいような会話をしながら服を脱いでいく。

「疲れたなあ……今頃司令官はアラタ達とワイワイガヤガヤやってるんだろなあ」

「風呂から出たら私達も混ざってやりやあいのよ」

「その前に昼飯じゃない？ 私お腹減つてもー大変」

スーパー銭湯のような、幾つかのかい浴槽が点在する浴場に足を踏み入れる。同時に、白く熱い湯気が、夜通し外にいて冷え切った彼女達の肌を温める。

「ああ〜生き返るわあ〜。やはり仕事終わりの風呂は最高や」

「口調ごちゃごちゃですよ」

熱い風呂というものは心身の疲れを癒す。

木曾もあまりの気持ち良さに、普段の男らしい口調が崩れまくっている。この時ばかりは風呂文化の栄える日本に生まれて良かったと思わざるを得ない。

「そーいや最近、強姦殺人事件が繰り返されてるらしいわね……怖いなーとづまりしなきゃ」

「流石に艦娘を標的にしようなんて馬鹿、そうそう居ないさ。ブラック鎮守府の提督とかなら話は別だけど」

「やめてよ、そんな物騒な話。もっと心が安らぐような話をさあ」

「なら話を変えましょう。そうだ、今私は海風とあの整備士のお兄さんのイチヤラブトークでも聞きたい気分なのよねえ……海風、率直に訊くけどどこまでいったわけ？」

「わ、私は！べべべ別にあの人とはそーゆー関係では……！」

駆逐艦達のトークに耳を傾けながら、木曾は湯船の中から浴場の天井を仰ぎ見る。今になって疲れがどつと出てしまったようで、次第に瞼が重くなってくる。今日はもう出撃の予定はないので、早く風呂から出て休もうと、浴槽から出るために立ち上がった。

その時、濡れた木曾の背中に冷たい風が吹き付ける。それに違和感を感じ、木曾が振り返ると、背後の小窓が空いていた。窓のそばにはずっと自分がいたし、他の人は誰も近づいていない。一体誰が、いつの間に関けたのだろうか。木曾は、一番近くにいた大井に訊く。

「あれ？誰か窓開けた？」

「いや。木曾じゃないの？」

「そうか」

防犯用に鉄格子がつけられているといえど、浴場の窓が全開なのは保安上あまり宜しくないし、風で身体が冷えてしまう。窓を閉めようと近づこうとした次の瞬間。

「……フヒツ」

「そこに居るのは誰だっ!」

窓の外から聞こえてきたキモい笑い声。

その気持ち悪い声に気付いた木曾は、近くにあった洗面器を開いていた窓にぶつける。洗面器はカコーン! と綺麗な音を立てて窓のアルミサッシにぶつかり、カラカラと音を立てて濡れたタイル張りの床を転がっていく。突然の木曾の行動に、他の艦娘達はビビって微動だにもしなくなり、出しっぱなしのシャワーの音だけが聞こえていた。

険しい表情の木曾に怯えながら、シャンプーの泡をを頭につけたままの海風が恐る恐る訊いてくる。

「あの……木曾センパイ、何があつたんですか?」

「覗かれてた」

「ウソツ?」

その事実には動揺する少女達。対して、木曾と大井は怒りに燃えていた。

罪なき少女達を辱めようとした不屈者にお灸を据えねばなるまい。指をポキポキと鳴らしながら、裸タオルの木曾と大井は怒りを露わにするのであった。

「かなりの猛者ね、鎮守府内でこんなくならない事するなんて」

「ちよいとばかし、とつちめなきやならねえなあ」

「毎度ありがとうございますー」

「間宮さんもお疲れ様！ 間宮さんと言えば、やっぱりこの特性アイスキャンディーなんだわー！」

「駆逐艦の子達にも人気ですからね。もちろん私も好きですよー！」

書類仕事のある提督と一旦別れ、吹雪と天龍の案内のもと鎮守府内を見て回ることにした瞬達は、間宮の売店で買ったアイスキャンディーを堪能しながら、レクリエーションルームで寛いでいた。

近くには艦娘用の風呂場があることもあってか、この区画はまるで旅館を思わせるような雰囲気であった。丁度風呂上がりの艦娘達もいるようで、身体からポカポカと湯気を漂わせながら、椅子に腰掛けている瞬達の近くを通り過ぎていく。こうしていると、ここが軍事施設とは思えなくなる。

「ねえ、ホントに僕達みたいな民間人を入れちゃって良いのかな？ 首飛ばないよね？ 憲兵に連れてかれないよね？」

「アポをちゃんと取ってれば敷地内に入れるんだよ。俺がやったんだから安心しろよ」
はっはっはっー！と大笑いするアラタ。そう言われると余計に安心出来ないのは何故なのだろうか。

ネプテューヌはというと、向かいの遊戯室で艦娘と卓球勝負をしている模様。ただし、ネプテューヌの惨敗のようだが。相手の艦娘のスマッシュが顎にぶち当たって悶絶するネプテューヌの姿に、思わず苦笑するアラタの服の袖を、隣のヒビキが軽く引つ張る。

「ねえ、ずっと気になってたんだけど」

「ん、どした」

「大鳳と山風も艦娘なんだよね？なんで鎮守府とかに所属せずに学校行ってるの？」

言われるとたしかに気になる。これまで艦娘についてろくに知らなかったから疑問に思わなかったのだが、2人もかつての日本海軍の軍艦の名を冠している。もしかすると彼女らも艦娘なのだろうか。

ヒビキの疑問にアラタは言い淀んだようにしばらく無言を貫いていたが、やがて、これくらいなら話してもいいだろ、と前置きした上で、瞬達に対して話しはじめた。

「……簡単に言うとな、アイツらは厳密にはもう艦娘じゃないんだわ。艦装とのパスは解体によって殆ど失われているし、今のアイツらは人よりちよつと強靱な肉体を持った

女の子でしかないんだよ」

「元艦娘？」

「ああ」

「……なんでやめたんだ？」

「色々あったんだ。その時の2人はかなり苦しんでいた。こればかりは俺が勝手にペラペラ喋っていい内容じゃないんだ。デリケートな内容だからな」

普段のおちやらけたものとはかけ離れた、険しい顔つきで話し続けるアラタの姿に、瞬は思わず唾を呑む。

「ただこれだけは言える。2人を助けたのは姉貴とここの鎮守府の面々だ。そのおかげで大鳳と山風は今、普通の人間としての生活を送れている。だから、俺は姉貴や潮原提督を尊敬しているんだよ。俺もいつか、あの人達みたいに苦しんでる人を救う仕事をしたい……まあ今はまだ夢物語なんだけどな」

「立派だなーアラタ君は。僕も人の役に立ちたい！つて思ってるんだけど、いつもドジ踏んでばっかでき……」

「じゃあそれを実現できるように頑張らなとな。お前なら案外いけるんじゃないか？」

「よせよ。お前の方が向いてるだろ。だってお前仮面ライダーじゃんか」

俺なんかまだまだだよ、と笑いながら返す瞬。ヒーローとしてはまだまだ駆け出しの自分に向いてる向いてないと言われる資格なんてまだないのだから。

と、ずっと真面目な話をしてきた男性陣に対し、遊戯室の方から唯から声を掛けられた。

「瞬！こつちで卓球やろうよ！那智さん意外と強敵だかさ！トリプルスでいこう！」

「んなルール無えよ。まあいいぜ、やってやらあ！志村もこいよ」

「いや僕は……」

瞬の後を追おうと席を立った志村。しかしその腕に突然、何やら柔らかいものが当たる感覚がする。みると、スク水姿の艦娘が腕を組んで胸を志村に押し付けて来ていた。気の小さい童貞である志村にとっては、本気で心臓が止まりそうになるほどの衝撃であった。

少女はそんな事お構いなしに、扇情的な仕草で志村を誘う。何この見え見えなハニートラップみたいなのは。

「ならイクと一緒にあちらで楽しいことやるのね！」

「けっけ結構ですからあ！」

スク水姿の潜水艦の子の誘いを慌てて蹴り、志村は瞬の元に走り去っていく。断られた少女・伊19は不満そうに腕を組んで頬を膨らませる。後ろから同じく潜水艦の伊5

8が愚痴る。

「つれないでちね。ただのスマブラなのに」

「いや19ちゃんの言い方に語弊があるのよ……それにしても、あの子かなりウブだったわね」

「如月だつて似たようなもののくせに」

「あらやる気？ならスマブラで決着をつけましょうか。ゴーヤちゃん、サシでやるから邪魔しないでね」

「キャラの方向性が似通つてるからつて一々張り合わなくてもいいのに……」

「なんか此方も戦いが始まった模様。賑やかなこの光景を見て、アラタは頬を緩ませるのであつた。」

一方、鎮守府の中庭のベンチに並んで腰掛けていた大鳳と山風。

「演習場から聞こえてくる砲撃の音。わいわいと駄弁りながら渡り廊下を通つてゆく艦娘たち。その全てが、大鳳の心を刺激する。」

「現役時代を思い出してた？」

「……うん。やっぱり鎮守府しんしゅふにいたいと思ひ出しちゃうの。あんまりいい思ひ出は無かつたけどね。それでも、この鎮守府の温かさは癖になるのよね。私も、他の鎮守府に着任しつじんしていれば良かったのかな」

「IFもしもの話なんてやるだけ無駄だよ。共感きかんはするけど、私達は今を生きてるの。あり得ざる過去も今も、結局は夢物語むせつものがたりでしかないんだから……」

現役時代に想いを馳せる。当時はあまりいい思ひ出は無かつたが、それでも大鳳にとつては希少な過去なのだ。

「みんなの所に戻りましょ。2人きりだとなんか無駄に感傷的になっちゃうわ……」
「そうだね」

せつかく皆と一緒に来ているのに、センチメンタルになってちゃ勿体ない。同じ境遇の山風と2人きりだと、どうしても思ひ出してしまふし、皆と一緒になって気を紛らわそう。

そう思ひながら、皆の所に戻ろうと立ち上がろうとしたその時。

「やあやあどうしたのかな大鳳ちゃん。そんなにアンニユイな表情してさ。そんな表情のキミを見ていると、どうしてもほっとけなくなるんだよね。俺、優しいから」

「!?？」

突然、大鳳の耳元で声がした。台詞的に明らかにナンパされているのだが、優しい声

色とは裏腹に、猛烈な嫌悪感を大鳳は抱いていた。間違つても信用してはならないような、不安を煽られるような、出来ればあまり聞いていたくはないような声だった。それに妙に馴れ馴れしい。大鳳にこんな声の知り合いは居ない。一体なんなのだ。

固まって振り向けない大鳳と山風の肩に、ガシリと手が置かれる。そして、さらにかかけられる。

「怯えないでよ、キミ達と俺との仲でしょ？いつものように、俺の事を提督さんのパパだの呼んでくれてもいいんだよ？」

「誰……なの？私は、貴方なんて知らない！」

「人違いです。手を離してください！」

ヤバイやつだ。明らかに言動がまともじゃ無い。馴れ馴れしい口調が、より一層異質な雰囲気強くする。大鳳達は必死に否定するが、声の主は聞こえていないのか無視しているのか知らないが、変わらず馴れ馴れしい口調で話しかけてくる。

「恥ずかしがる事はないよ。まあ俺はそんなキミ達も好きだよ。だから、これから俺と楽しいことしようよ。いいでしょ？」

《KAKUSEI DEMON》

ミシミシと、2人の肩を掴む力が強くなる。ヤバイ、逃げなくては。

その時。

「2人とも離れて！」

「ひよへえ^{!?}？」

優しくも力強い声がした。2人はその声に従い、肩に乗せられた手を振り払い、左右に散る。そして、声の主に向かって矢が放たれた。ブシュリと鈍い音がした。

声のした方をみると、中庭の向こう側に弓道着姿の銀髪の女性が、弓道用の弓を構えて立っていた。正規空母・翔鶴である。

「しよ、翔鶴さん！」

「酷いじゃないか。キミらしくもない。あの優しくお淑やかだったキミがこんな真似をするなんて、一体全体どうしちゃったんだい？」

「生憎ですが、私は貴方を存じ上げません。それよりも、2人に何をやる気だったのか、そもそも勝手に鎮守府に侵入した事も含め、色々と問いたさなくてはなりません」

茂みに隠れていた声の主の姿が露わになる。それは、まさしく「鬼」といふべき姿であった。筋肉質な肉体に虎柄の腰蓑を纏っただけの薄着姿。額から突き出た長い一本の角。腹部には般若の顔がでかでかと浮かび上がり、威圧感を出している。

鬼は、肩に刺さった矢を平然と引き抜いて投げ捨てると、さつきと変わらない調子で話しかけてきた。

「いきなり乱暴はやめてくれよ。俺が何したっていうんだい？してないだろう？だから

こんな真似はやめて俺と遊ぼうぜ」

「嫌ですー!」

翔鶴に一蹴されてもへこたれず、鬼は繰り返し口説いてくる。ここまで図々しいと恐怖を感じてくる。いかつい文字通りの鬼の姿で、爽やかそうに話しかけてくるものだから違和感が半端ない。それに、友好的に振る舞っているのにも関わらず、彼の目は全く笑っていないのだ。それが彼女達にとっては不気味だった。

「大丈夫?!? 何ともない?!?」

騒ぎを聞き付けたのか、大鳳と山風の元に、神通が駆けつけて来た。訓練中だったのか、艦装をつけたまんまである。

「翔鶴のおかげでなんとか……それよりも、こいつは……」
「前にも似たようなのを見たよね」

大鳳と山風の脳裏に、以前一誠を襲った怪物のことがよぎる。結局よくわからないうちに消えていったのだが、それでもアレはマトモじゃないと感じていた。

そして、目の前のコイツは別ベクトルでイカれている。翔鶴に拒絶されたにも関わらず、しよげるどころか余計に興奮し始めている。かなりハイレベルな変態である。

「うんうん……やっぱ翔鶴って美しいよなあ……真剣な目で俺を見てくれるなんて、最高ですよ最高! たつまらねえぜえ……」

「うわ何気持ち悪い」

「何者ですか貴方は！」

「愛の使者」

ダメだ。話を通じない。鬼は大鳳達をほつといて自分の世界に浸り始める。見ていて純粹に気持ち悪い。

「ああ、俺は幸せ者だ……こんなにたくさん可愛い子ちゃん達に構ってもらえるなんて、俺死んでもいいかも」

「なら死んでみます？」

今朝の時とは一変、冷ややかな目で鬼を睨む神通。睨まれた当の本人は、なんでそんな目を向けられているのか全く理解できていないようで、ヘラヘラと笑いながら神通の方を振り向き、彼女に向かって歩み寄ろうとする。

「やだなあ何そんなに怒ってるん

次の瞬間。

彼の身体は何の前触れもなく真上にぶつ飛ばされた。

大鳳も、山風も、翔鶴も、神通も。誰もが理解できなかつた。

そして、鬼が立っていた位置に、先程とは別の怪物がいた。青白い肌に髑髏を模したマスクで覆われた目元、目を惹きつける妊婦みたいに丸々と突き出た腹（おまけにデベソが丸見え）、ボロボロの軍服と随所に見られる艦娘の艦装のような部位。ただし、その艦装は全て使い物にならないレベルで損傷しており、さらに様々な艦種のもが入り混じったカオスなものになっている。その容姿はまるで深海棲艦を思わせるものであった。

彼は、大鳳達を品定めするかののようにジロジロと見ていたが、やがて、一番近くにいた大鳳に近づき始めた。彼女は、本能的に恐怖を感じて後ずさる。

「や、やめて……こないで」

「お前に拒否権なんかねーよカス！ 原作キャラ風情が俺様に楯突くんじゃねーよ殺されてーのかアバズレ！」

息を吐くように汚い言葉を吐き捨ててくる。言ってることが半分くらい分からないが、コイツもコイツでマトモでは無かった。

怪物は腰にぶら下げていた鎖で、恐怖と動揺で動けない大鳳を縛り上げると、恐るべき跳躍力でかつ飛んでしまった。

「何、今の」

「……はっ！ 大鳳さんが危険よ！ 皆に知らせて！」

残された神通達は、突飛すぎる出来事に呆然としていたが、直ぐに正気に戻り、大鳳を拐った怪物を何とかすべく動き出すのであった。

鎮守府屋上

鬼は遙か上空に打ち上げられた後、鎮守府の屋上に落下する。コンクリート製の床にできたクレーターの中心で、彼は起き上がる。オリジオンとしての姿ではなく、爽やかなイケメンの姿であった。

彼が顔をあげると、そこにはボサボサの髪のカリガリのオッサンが、青年を見下ろしていた。彼は青年が起き上がるなり、汚い唾を撒き散らしながら、捲し立てるように暴言を吐き出して来た。

「邪魔すんじゃないよカス！この女共は俺様が全部戴くんだからとつと死ねやゴミクス野郎！」

対して青年は、全く意に介していないように飄々と振る舞う。

「やめてよね。同じ穴の貉同士で争つても何にもならない。それよりも、耳寄りな情報があるんだよね」

「モブの話なんか聞く価値ないね！俺は選ばれし男だから忙しいんだ死ね死ね死ね死ね

死ね！」

「ギフトメイカーからの通達だ。仮面ライダーがここに来ていろいろらしい。殺せば褒美が貰えるんだってさ」

その言葉に、男が反応した。

彼らを始めとする転生者達は、数日前、自分達をオリジオンとして覚醒させた存在・ギフトメイカーから、こんなことを言われていた。

——もし仮面ライダーに出逢うようなことがあつたら、殺せ。あれは僕らにとつても、君達にとつても邪魔な存在だ。

その事実には、男の低い沸点は一気に頂点に達した。苛々した彼は、屋上の手すりを拳で殴りつける。筋肉もろくについてない、細いを通り越してガリガリの腕にも関わらず、その一発だけで手すりの殴られた部分が千切れ、地上に落ちていった。

「せっかく手に入れたセカンドライフを邪魔されてたまるかよ」

その物騒な会話を聞いていた大鳳。鎖で縛られた状態のまま、男に抗議する。

「離しなさい！ 貴方達一体なんなの！？ 仮面ライダーを……瞬を殺すつて……」

「ヒロイン風情が一丁前に俺に口答えするんじゃねーよカス！ 黙れよ！」

「ぐええっ！」

男の拳が大鳳の腹に突き刺さり、女の子にあるまじき声をあげさせられる。膝をつい

て咳き込む大鳳を、隣の青年は憐れむような目で見つめながら言う。

「あーあ、その子仮面ライダーの仲間らしいね。なんて可哀想」

「許せねえ……俺のヒロイン寝取りやがって。ぶち殺してやる!」

「誰が……貴方なんかの……」

「だーかーらあ! 口答えするんじゃないやねーよ学習能力ねーのかアホンダラー!」

「はうあつ!!?」

今度は大鳳の頬を強く引つ叩いた。あまりの衝撃に、膝で立つこともままならず、盛大にぶつ倒れてしまう。流石にまずいと思ったのか、青年が止めに入る。しかし大鳳からすれば、その発言の内容はまともなものではなかった。

「やめなよ、キミが欲しかったのは彼女だろ? なのにそんな扱いしたら本末転倒だよ。

その苛立ちは仮面ライダーにぶつけた方が有意義さ」

「アイツに傷者にされてるかもしれないねーんだぞ!!? 許せるかよ!」

「その怒りもやつにぶつければいい。やってしまおう」

「けっ、そうだなあ! 俺のヒロインを奪った罪は重いぜえ……」

訳の分からない恐怖に見舞われた大鳳は、不気味に笑う2人を見ながら、必死に祈るしか無かった。それしか、できなかった。

—— 早く、助けに来てください。

時刻はヒトゴーマルマル。結構長居してしまつたが、そろそろ帰つた方がいい頃合いだ。

皆を集合させようと、声を掛けるアラタだったが、そこに何やら険しい表情をした眼帯を付けた緑髪の艦娘が此方につかつかと歩いてくる。

「あ、木曾じゃねーか。帰ってきてたんなら言えつて——」
「おい」

天龍の呼びかけを無視して木曾はアラタに詰め寄る。近い近いめっちゃ近い。具体的に言うともう少しで木曾の胸が当たりそうなくらい。

「お前、覗きとかしてないよな？」

「す、するわけないだろそんな馬鹿な真似！」

いきなり何言われているのか分からなかつたが、アラタは即座に理解すると同時に強く否定する。どこから覗き魔疑惑が湧いて出たのか、彼には見当もつかないのだが、そんな汚名を着せられてはたまつたもんじやない。

必死に否定するアラタの様子を見た木曾は、続いて瞬に疑いの目を向けて来た。

「じゃあお前か？」

「断じて違う！」

なんか女性陣の視線に冷たさを感じてきた。誠に不本意だが、痴漢冤罪の被害者の気分が分かったような気がした。

「犯罪に手を染めるほどムラムラしてねえし、尊敬してるアンタ達相手にそんな真似できるかよ。そもそも覗きとかハイリスクノーリターンじゃないか？」

「アラタ、それお前の友人達に刺さってるぞ」

瞬の脳裏に一瞬スケベな赤龍帝の顔が浮かんでくる。彼がこの場にいたら真っ先に疑われていただろう。日頃の行いは大事である。

「ちよいまっち。いきなり事実も話さずに犯人扱いは良くないよ。説明してくれなきゃ困るって」

「そ、そうだな……疲れてて気が立っていた。すまない」

「お前、覗きがどうか言ってたよな。まさか——」

「そのまさかだよ。さつき覗かれた……ああ思い返すだけで気分悪くなってくる」

「マジかよ……命知らずにも程があるだろ」

よりによつてこの鎮守府内でそんな行為をする人がいることに、アラタは唾然とする。ここに居る皆を疑いたくはないのだが、覗き魔をのさばらせるわけにはいかない。

二つの思いの間で板挟みになり苦悩するアラタに代わり、吹雪が証言する。

「皆さんはさつきまで私達と一緒にいましたし、物理的に不可能ですよ」

「そーだそーだ」

「……ならいいんだ。いきなり悪かったな、すまない」

吹雪がアリバイを証明したことにより、瞬とアラタは重圧から解放された。それにしても、もつと早く助け舟出せばよかったのではないだろうか。

「んじゃ誰が……」

「よし、私達も犯人探しに協力しよう！女として許せないし！」

「まあ、俺もあらぬ疑いをかけられちゃあ見過ごせねーな。手伝うぜ」

唯の発言に対し、賛同する一同。たしかに、この場で考えるよりも動き回って犯人を探す方がいい。だがしかし、鎮守府内でうろちよろされたら困るので、吹雪が止めようとする。

「ちよつと勝手に動き回らないでk

「嫌あああああああああああああああああああ！」

「……」

突然上がった悲鳴。それに反応した川内が、即座に驚異的な速さで走り出す。彼女の後を追い、皆も走り出す。

鎮守府の外に出ると、川内がある一点を見つめたまま立ちすくしていた。その視線の先には、見たことのないオリジオンに捕まった大鳳がいた。そのオリジオン——フリートオリジオンは、キモい笑い声をあげながら得意げに言う。

「へっへっへ！コイツは貫つたあ！」

「大鳳っ……テメエ、放しやがれ！」

大鳳を捕まえているオリジオンに、アラタは無謀にも殴りかかろうとする。しかし、オリジオンはアラタの振り下ろされた拳をもとせず、アラタを殴り飛ばして返り討ちにしてしまった。倒れたアラタを踏みつけ、下品に笑うオリジオン。痛めつけられながらも、それでもアラタは睨みつけてくる。

オリジオンはそれが気に障ったのか、今度はアラタの顎を砕く勢いで強く蹴飛ばした。鼻息を荒くし、何度も何度もアラタの頭を踏みつける。

「やめろ殺す気かよ!?」

「アラタあ！」

見かねて瞬はクロスドライバーを装着しながら、オリジオンに体当たりをして突き飛ばす。オリジオンは

瞬はボロボロになったアラタに駆け寄る。

「なんなんだよいつもコイツも！モブキャラの分際で俺に楯突くとか生意気なんだよ

「！」

「どうするつもりだ……大鳳をどうするつもりなんだ！」

「うるせえ！雑魚はすつこんでろ！この鎮守府の艦娘は全部俺のモノにするんだ！」

「うわあ……リアルでこんな事言う奴初めて見た……」

オリジオンの発言にドン引きする一同。臨戦態勢だった瞬でさえ、露骨に嫌そうな素振りを見せ、思わず後退りしてしまう。今時こんな単純な色ボケ野郎が見られるとは驚きである。

アラタはオリジオンの言動に怒りをあらわにする。

「オメーのモノでもなんでもねえよ！この鎮守府の皆も大鳳も渡すもんか！さつさと失せやがれすつとこどつこい！」

「アラタくん、すげー怒ってる……」

「大鳳さんがそれくらい大切なんだよ。私もアラタの立場だったら、多分同じように怒るよ」

何時もの気さくな様子は何処へやら、まるで別人の様に激昂するアラタ。そな変わりように体が竦んでしまう志村と、同情するヒビキ。オリジオンはそれが気に食わなかったようで、アラタに対して怒りのままに怒鳴り散らす。

「何で俺がお前達みたいなモブキャラの意見を聞かなきゃならねーんだよ？調子のるな

よ？」

「調子乗ってるのは貴方でしょ……私は貴方のモノになる気なんて微塵もないわよ！いい加減にして！」

「黙れ！次口答えしたら舌と声帯引きちぎって海に投げ捨てるからな！」

「くうっ……！」

オリジオンは、自らに対して口答えした大鳳の頭を思い切りぶん殴った。よく見ると、彼女の体のあちこちには真新しい痣ができているではないか。それに気づいたアラタは激昂し、無謀にも再びオリジオンに殴りかかろうと走り出す。

「ダメエっ！大鳳に手をあげてんじゃねえ！」

「ぶんー！」

周りが止めるよりも早く、オリジオンの腹パンがアラタの腹に直撃し、アラタの体がズルズルとその場に崩れ落ちる。それに飽き足らず、オリジオンは崩れ落ちたアラタを強く蹴飛ばした。

身体中の空気が根こそぎ吐き出させられるような衝撃がアラタに襲いかかる。身体中が痛んで仕方がないが、それでも立ち上がる。立ち上がらなければならぬ。こんな奴に、大鳳を好きにさせてたまるか。その一心だけで立ち上がろうとするが、志村がすかさず静止する。

「アラタ君大丈夫!? 無茶だよ……!」

「それでも、いかなきやならねーんだ……俺がつ……やらなきやならねーんだよ……!」
「その怪我じゃ不味いつて! 勇気と無謀は別ものだってそれ一番言われてるから!」

ネプテューヌと志村の静止を振り切り、尚も立ち上がるうとするアラタを横目に、木曾が問いかける。

「まさかお前なのか? さつき風呂を覗いてたのは」

「別にいいだろ減るもんじゃないし。お前らも俺様に見られて嬉しいだろお?」

覗きをあつさり認めるどころか、微塵も悪びれないオリジオンに、んな訳あるか! と周りから非難の声があがる。一体どこの世界の間人だお前は! と叫びたくなるほどの身勝手な主張に、木曾の拳が怒りでぶるぶる震える。

思わず木曾は殴りかかりそうになるが、

「おっと、こいつがどうなつてもいいのかよ? ええ?」

「なっ!」

オリジオンの方は、大鳳を人質にしてきた。これでは手が出せない。当然非難の嵐になるが、オリジオンは瞬の方を見ると、より一層憎しみのこもった顔つきになる。

「お前……汚ねえぞ!」

「お前がギフトメイカーの連中が言っていた仮面ライダーか! お前にだけは言われたく

ねーよ！大鳳はなあ、俺のヒロインなんだよ！俺がいたただくんだよ！それを横から搔つ攫いやがって……300回ぐらい殺してやらねえと気がすまねえ！」

「寝言は寝て言えよ……！さつきから大鳳をモノのように扱いやがって……オメーみたいな奴なんかに靡く女はいねーよ！帰って二次元で満足してろ！」

「さつきから雑魚キヤラのくせにうぜーんだよ消えろ！」

さつきから自分にしつこく何度も噛み付いてきているアラタに対して頭にきたオリジオンは、肩の副砲から一発弾丸を発射する。アラタや、そばにいる志村やネプテューヌも纏めて殺す気の一発が迫る。

「アラタあー！」

《CROSS OVER》

瞬は即座にアクロスに変身し、銃形態のツインスバスターで砲弾目掛けて光弾を放つた。

「うわああああああつ！」

「ねぷうひゃあー！」

1秒にも満たない出来事だった。砲口から放たれた砲弾が空中で爆発を起こし、鎮守府の窓ガラスが衝撃で粉々に砕け散り、花壇の花も土ごと宙に舞い上げられた。ガラスと土の雨があたりに降り注ぐ中、無傷で済んだ志村達の前にアクロスが立つ。

《思いを！力を！世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

「許さない……お前は許さない！俺が狙いなら、望みどおり俺が相手してやる！だから、皆には手を出させない！」

「あれは……何？」

仮面ライダーアクロスに変身した瞬を見て、驚きの声をあげる艦娘達。

「吹雪、皆を安全なところに連れて行ってくれないか？アラタのやつ……かなり酷くやられてるからさ」

「あの、その姿……」

「詳しくは後で話す。今は、コイツを倒す！」

アクロスは怒りに満ちた声でそう叫ぶと、ツインズバスターを剣形態に変形させながら、フリートオリジオンに突っ込んでいこうとか走り出す。

しかし。

「残念だったねえ！俺もいるんだよなあこれが！」

その間に割って入るように、上空から別のオリジオンが乱入して来た。見るからに鬼ですといったような風貌の乱入者——デモンオリジオンは、ツインズバスターの刀身を片手で受け止めると、アクロスねガラ空きの胴体に渾身の膝蹴りをお見舞いする。

「ぐはあっ！」

ツインズバスターを落とし、背中から地面に倒れるアクロス。デモンオリジオンはアクロスを踏みつけようとするが、アクロスは咄嗟に横に転がってそれを避け、オリジオンの膝に横から蹴りを入れる。

しかしあまり効いていないらしく、デモンオリジオンは表情を変える事なく、即座に腕を振り回してアクロスを薙ぎ倒しにかかる。体勢を整えながら後退したアクロスに、彼は言う。

「邪魔んだよねーキミ達。この世界では転生者である俺が主役つてのがセオリーだというのにさあ、何考えてるの？身の程弁えた方が身のためなんだけどなー」

「残念だったな。俺はこの世界は皆が主人公かつ脇役つて考えでな！お前みたいにナルシスト的思考は出来ないんだよ！」

両者の拳が激しくぶつかる。しかし、向こうの方がパワーが上なのか、アクロスの拳が上に押し上げられ、オリジオンのもう一方の手によるチョップが、アクロスの首をへし折らんとする勢いで振り下ろされる。

アクロスは咄嗟に身を屈め、ガラ空きになったデモンオリジオンの胴体に頭突きを喰らわせる。今度は少し効いたのか、オリジオンはわずかに顔を歪めると、空を切った腕を即座に引き、アクロスの背中に肘鉄を食らわせてその身体を地面に叩きつけると、足で強く踏みつける。

内蔵が無理やり捻り出されるような衝撃がアクロスを襲う。どうやらこのオリジオンは、相当なパワーを持つているようだ。デモンオリジオンは、勝ち誇ったようにアクロスを嘲笑う。

「それがキミの転生特典？見た目の割にシヨボくない？てかなんでキミ俺達の邪魔するわけ？キミも転生者ならば俺の気持ちを理解できると思うんだけどなー」

「俺は転生者とやらじゃないからわかんねーけど……お前もアイツみたいに皆を傷つけるというなら、俺が倒す！」

痛みに耐えながら、アクロスは一つのライドアーツを取り出すと、クロスドライバーにセツトする。

《LEGEND LINK! BOOST! BOOST! EXPLOSION! DRAIG!》

すると、アクロスの全身から炎が吹き上がり、ドライバーから、デフォルメ等身の真紅のドラゴンが出現する。そして、そのドラゴンの身体がアーマーとなつてアクロスの全身に引っ付いてゆく。赤龍帝の力を借り受けた姿、アクロス・リンクドライグである。

レジェンドリンクを完了させたアクロスは、即座に固有能力の「倍化」を発動させて自身の力を増幅させると、デモンオリジオンの足を容易く払い除け、立ち上がった。

「これ筋肉痛になるからあんまり使いたく無いんだけどな……だが、パワーにはパワー

をぶつけるしかねえし、いっちよやるか！」

「イキるなよ背景ごときが。俺以外の男キャラなんて、全員俺の引き立て役やってればいいんだよ。主役たる俺に下剋上とか、身分不相応過ぎるって考えないわけ？ ホント転生先のキャラってどういつもこいつも救いようのない奴だよな」

ここから反撃だ、と決め込むアクロスに、捲し立てる様に言葉を吐き捨てるデモンオリジオン。

冗談でなく、彼は本気でそう言っているのだ。彼からすれば、自分以外の全ては、自分の活躍の為の踏み台か、自分に都合の良いお人形ヒロインでしかないのだ。そして、踏み台ですらない背景モブの癖に自分に歯向かってくるアクロスは、彼にとって唾棄する存在であった。

「でもまあ、俺は寛容だし？ キミを殺してさっさとハーレムエンドに突入するから。OK？」

「ノーに決まってるだろ！」

両者は再び向かい合う。

第二ラウンド、開幕。

アクロスとデモンオリジオンの戦いを、離れた位置から見ていたフリートオリジオン。彼はすでにこの場からの離脱を始めており、鎮守府の建物から離れた演習場の脇に移動していた。

「今のうちに逃げちまうか。仮面ライダーとやりあうなんて馬鹿馬鹿しい。お楽しみが待ってるんだからよお」

フリートオリジオンは、縛られた大鳳の頬を指でなぞる。普段なら綺麗な肌も、彼に殴られたせいで痣ができてしまっている。

彼は今一度、大鳳に声を掛ける。当の彼女は散々拒否しているのにもかかわらず、何度も懲りずに繰り返している。普通これだけ拒否されれば嫌でも脈なしだと分かるものなのだが、他人の気持ちなんぞ全くわからず、原作キャラをナチュラルに見下す思考回路の持ち主たるこの怪人には、諦めるといふ発想も、自分が悪いといふ発想も微塵もなかった。

「なあ大鳳お、俺のモノになれよ。そうすりやお互いに幸せになれるぜ？お前も何が賢い選択か分かるよなあ？」

「ええ……貴方から逃げる事が一番賢い選択よ！」

「デメエつ……ふざけんなよ！原作キャラの癖に生意気な！轟沈しちまえ！」

自分の意に沿わない事を口にした大鳳に激昂し、再びオリジオンは彼女に手をあげる。狙つてた女の子にこんな感じに当たり散らしておきながら、どうして惚れてくれると思えるのかが甚だ疑問なのだが、どうやら彼の脳内ではそうではないらしい。

ぶたれてぶつ倒れた大鳳を無理矢理立たせ、この場を離れようと急ぐフリートオリジオン。そこに、

「喰らえこんにやろう！提督パーンチ！」

「はがばふい！」

突然、フリートオリジオンの顔面にパンチが突き刺さった。大鳳が振り向くと、そこには拳を突き出した潮原提督が立っていた。

「鎮守府で好き勝手やりやがった上に俺の客まで傷つけやがって……ただで帰れると思うなよ？なんなら今すぐ憲兵に突き出してやってもいいんだぞ？」

潮原提督のパンチ（手加減バージョン）を顔面に受けたオリジオンはブサイクな悲鳴を上げながら吹っ飛び、背中から地面に倒れる。同時に変身が解け、生え際がかなり後退したガリガリのブサイクなオッサンの姿が現れる。男は殴られた鼻頭を押さえながら、率直に言つてかなりキモい顔を更にキモく歪ませながら、殴られた事に対して抗議する。

「畜生！女の分際で俺を殴りやがって！」

「女の分際ねえ。悪いな、俺こうみえてオツサンだから」

リアルで美少女受肉を果たしたやつがオツサンのカテゴリーに含まれるのかは甚だ疑問であるが、潮原提督は指をポキポキと鳴らしながら男に接近していく。そして人間の姿のまま殴りかかって来た男を軽くないすと、大鳳の元へと駆け寄っていく。

「こーゆー時だけはこの身体になって良かったと思えるぜ。ほら、大丈夫か?」

「あ、はい」

大鳳を縛る鎖をなんとかしようと試行錯誤する潮原提督。しかし、

「いい気になりやがって……こりゃあわからせないとダメみてーだなあオイ?」

「ひっ」

倒れた男は、顔を上げて潮原提督と大鳳を睨みつける。2人はその目を一目見ただけで、猛烈な悪寒を感じた。下心丸見えというよりも、まるでモノでも見るかのような、光のない気味の悪い眼差しだった。

動きを止めた少女達に、男は呪詛の如く叫ぶ。

「この世界の女は全部俺のものだ……所有物が持ち主に逆らってんじやあねえよ!」

「支離滅裂にも程があるし、そもそも気がはえーよ。誰がいつお前の所有物になったんだ? ああ?」

いつの時代の男性優位主義者だ、と突っ込みたくなるような発言をぼんぼん繰り出し

てくる変態男。思わず潮原提督もキレて口が悪くなる。SNSに今の男の発言を掲げたら大炎上間違いなしであろう。てかそうしてやりたい。

男はフケまみれの髪を怒りのままに掻きむしり、喉が枯れるような勢いで叫び散らす。

「こうなりや力尽くで掻つ攫つてやる！その提督の格好してるヤツも意外と気に入ったから俺の女にしてやんよ！変身！」

「うわああああ！こいつ見境いなさすぎだろ！どんだけ女に飢えてんだよ気持ち悪っ！」

《KAKUSEI FLEET》

男は興奮で股間のブツをイキリ勃たせながら、再びオリジオンの姿に変身する。潮原提督はあまりの気持ち悪さに震える身体を動かし、大鳳を抱き抱えて逃げ出す。いくらプロの軍人でも気持ち悪いものは気持ち悪いのだ。

しかし。

「おっと逃さねーぜ？」

提督の行く手を阻むように、藍色のライダースーツを着た長身の男が現れる。

「貴方もヤツらの仲間……？？」

「俺様はギフトメイカーのバルジ。ヤツらに力を与えた崇高なる存在だよ」

「ギフトメイカー……」

「アクロス！初めましてになるよなあ！まあなんだ、これから宜しくな。ま、お前は直ぐに死ぬんだけどな」

バルジと名乗った男は、向こうの方でデモンオリジオンと戦っているアクロスに向かって、そう呼びかける。バルジは、潮原提督の方を再び向くと、

《KAKUSEI PIKACHU》

黄色いネズミのような化け物に姿を変える。皮膚は爛れ、所々骨らしきものが見えており、大きく裂けた口からは血が滴り落ちる。目の前の人間がまごう事なき化け物に変身したことに、潮原提督も大鳳も驚きを隠せないでいる。

「提督避けてー！」

その時、バルジと潮原提督の間を、一機の艦載機が通過した。

いつの間にか、普段から砲撃や航行の練習に使う演習場に、艀装をつけた瑞鶴と川内が立っていた。

「おまつ……助かったけどあぶねーだろ!?？」

「命の方が大事だつて提督も日頃から言ってるじゃない！いいから離脱して！ばかわ……じゃなかった、川内任せた！」

「また名前間違えてるし……まあいいよ、今だ！」

「呼ばれて飛び出てばんばかばーん！これ愛宕ひとのネタなんですけどもね！」

大鳳を抱き抱えた潮原提督が身を引くと、直後にでつかいドラム缶を積んだ台車がバルジ目掛けて突っ込んできた。予想外の出来事に、彼はこれを避ける事が出来ず、なすすべなく海に突き落とされる。

「明石い……お前え」

「無茶振りしないでくださいよ川内さん……腕吊るかと思つたわ……」

台車で突っ込んできたのは、鎮守府のメカニック担当である工作艦・明石であつた。いくら艦娘といえども、大量の燃料が入った重たいドラム缶の乗った台車を押しながら全力疾走してきたので、かなり疲れたのか、明石は即座にへたりこむ。

「時間がなかつたんでこーゆー手しか使えなかつたんですよ……燃料勿体無いなあ」

「中々過激だよ……資材無駄にしてすまない、遠征組の皆……い！」

「よし、後は任せろ！」

何百キロもあるドラム缶をぶつけられたバルジは、海の中に沈んでいく。

そしてそこに、川内がクナイを扱うが如く投げられ……もとい発射した魚雷が、落水したバルジに直撃する。いくら演習用のものといえど、直撃すればタダでは済まない。魚雷の爆発によつて吹き上げられた水柱が、岸にいた提督達にぶつかけられる。

——これ普通に危ないよね？頼もしいけどデンジャラスだよねコレ？

彼女らの活躍を見ながら、潮原提督は内心冷や汗をかいていた。

「やったんですね？」

「いやそれフラグじゃ……」

「そんな小細工が俺様に通用する訳ねーだろ！」

「!?？」

直後、水底から黒い稲妻がほとばしった。それは周囲にいた提督達に襲いかかり、彼女を最も容易く蹴散らしてしまう。海の上にはいた瑞鶴と川内も、瞬く間に中破レベルまで負傷させられる。電撃のせいか、2人の装備からは黒い煙がもくもくと立ち始めていた。

その攻撃を行ったバルジは、何事も無かったかのように海から這い上がると、潮原提督の後方にいたフリートオリジオンに呼びかける。

「おい、今のうちにやっちまえよ」

「あ、ああ！いいから俺と一緒に来い！」

フリートオリジオンは、先の攻撃で倒れた潮原提督を無視して大鳳を再び捕まえるど、どこかへと走り去ってしまう。

「待てっ……逃げるな！」

「馬鹿、アクロスを殺れって意味だったのによお……まあいいか。ここは奴のお手並み
拜見といくか」

命令よりも自身の欲望を優先したフリートオリジオンに悪態をつきながらも、人間の
姿に戻ったバルジは、アクロスとデモンオリジオンの戦いを見守ることにした。自分達
の敵の実力を測るいい機会だ、と笑いながら、倒れている潮原提督を踏みつける。

「てんめえ……!」

「見せてみるよアクロス、貴様の力をよお。まーどうせ、俺より雑魚なんだろうけどな
!」

「はああああああつ!」

「ぬぐああつ!!?」

リンクドライブにフォームチェンジしたアクロスは、倍化を発動させながらデモンオ
リジオンに殴りかかる。先程までパワーで優位に経っていた筈のオリジオンが、アクロ
スのパンチ一発でダウンさせられる。

本物の赤龍帝よりは劣るものの、単純に倍化というシステム自体が強力であった。殴れば殴るだけ、時間が経ては経つほど、アクロスの力は倍になってゆくのだ。相手からすれば、あまり時間をかけたたくない相手なのだ。

「調子乗るなよ……モブキャラ如きが、俺の邪魔するなよ！」

自分の劣勢を認めたくないのか、アクロスに暴言を吐きながら立ち上がるデモンオリゾン。この期に及んでも、まだ彼はアクロスを取るに足らないモブキャラだと認識していた。

最初の飄々とした態度は完全に崩れ、醜い本性を曝け出していた。

「俺が！俺が！選ばれた人間だから！何やってもいいんだよ！気に入った女は奪ってもいいし、気に入らない野郎は殺してもいい！だって、選ばれた存在だからね！」

「何言ってるんだよ……それ、本気で思ってるのか!?？」

「俺は神様選ばれた転生者なんだぞ！主人公なんだからなんでも許されるんだよ！お前らモブキャラと違ってさあ！だから倒れるよ仮面ライダー。そしたらこの世界中の女は俺がいただいてハッピーエンドになるんだから！」

もはや言っている事が支離滅裂であった。さつきから、転生者だの主人公だのモブキャラだの、何の事を言っているのか瞬にはさっぱり分からない。ただ、本気でそう言っていることだけは理解できた。

——ならば、全力で止めるしかあるまい。

アクロスは、クロスドライバーを操作して必殺技を発動させる。倍化により極限まで高まったパワーが、両の拳に集中していき、高熱が発せられる。

? EXPLOSION CROSS BLAKE?

「歯を食い縛れよ……結構キツイ一発だからよ!」

「黙れええええええええ!」

取り乱したように走り出したデモンオリジオン。対してアクロスは、冷静に腰を落として待ち構える。

「死ね仮面ライダーあ!」

「へいやあああつ!」

倍化の数、6回。つまるところ、通常の2の6乗倍、すなわち64倍の威力の正拳突きが、オリジオンの腹にめり込んだ。当たった衝撃だけで、周囲に突風が吹き付ける。

「なんだこの威力つ……!」

「うひゃあ海に落ちるう!」

離れた位置から戦いを見ていた唯達の元まで、その衝撃は伝わってきた。思わず自分達も吹き飛ばされそうになってしまう。

それをもろに食らったオリジオン自身はというと、当然無事では済まず、力無く項垂

れた後、赤い爆炎をあげてぶっ倒れた。その姿は既に人間の姿に戻っており、意識もなくなっている。

「そうだ、大鳳を……！」

そう、まだ終わりではない。大鳳を攫ったもう一人がいるのだ。

アクロスはすかさず辺りを見渡すが、辺りにそれらしき人影はない。既に逃げられていたのだ。焦る彼を見て、戦いを見終わったバルジが、嘲笑うようにつけてくる。

「残念だったなあ、お目当ての奴はもうここにはいないぜ？」

「逃げられていたか……！」

「そ、残念だったなあ。ざまーみる！俺様はいったん退却するからよおバイバイビー！」

「待て！」

アクロスが動き出すよりも早く、バルジは凄まじい速度で逃げ出してしまった。

守りきれなかった。力が及ばなかった。その事実が、アクロスの心を蝕む。

「くそっ……！大鳳おとおおおおおおおおおおおお！」

少年の悲痛の叫びが、虚しく潮風の中に吸い込まれていった。

そしてもう一人。騒動の一部始終を見ていた者がいた。

「なんと醜い……」

フードを深く被っているため、顔はよく見えない。厚いコートのせいで、男か女かも判断しづらい。格好だけ見れば、オリジオン達とどっこいどっこの怪しさであった。

その人物は、フリートオリジオンの逃げていった方を見つめる。その先には、街の中心であるビル街がみえる。そして、自分に言い聞かせるように呟いた。

「寄り道になるが、見過ごせないな。騎士として、奴を討つ」

第17話 謎の少女騎士

侵入者の片割れのオリジオンを退けた後、鎮守府の医務室にアラタは一旦収容されることになった。

あの後、なんとか応急処置が施されたアラタは、この一室に一旦寝かされていた。しばらくすれば病院に搬送される手立てが整うはずだ。幸いにも、怪我自体は見た目ほど酷くはないようで、数日で退院できるらしい。

「あれが近頃街のあちこちで見かけるようになった怪人か……にしても、容赦がないな。皆の話を聞くに、あれは人間なのだろうか？」

医学の知識を有していた為に、アラタの応急処置を任された空母・グラフは、瞬達から話を聞いて考え込む。

「人間、か。確かにそうだったけど、話は通じて無かったな」

「多分私があの場合にいれば殴り飛ばしていただろう。話を聞いただけで怒りが込み上げてくる」

瞬は、これまで出くわしたオリジオンの言動を思い出してみる。ほとんどのヤツが、お世話にも話を通じているとは思えなかった。正直言つて、今日のは瞬でさえ嫌悪感を

抱く他なかった。もしかして、オリジオンはあんなヤツばかりなのだろうか。

そう考えていたところに、グラーフとの話を終えた潮原提督がこちらにやって来て、瞬達に頭を下げる。

「すまない、俺が迂闊だった」

「……俺も、もう一体のオリジオンも、ギフトメイカーも逃してしまった」

「お前は悪くない。アイツもアイツで危険だった。本当なら戦うのは俺達軍人の仕事なのに、お前みたいいな子どもに戦わせちまって……情けねえな……」

「落ち込まないでください。俺は、俺がやらなくちゃいけないことをしているだけですから」

「それでもだ。俺は、軍事訓練を積んだわけでも無い一般人に戦わせといて、平気でいられるような冷血漢じゃないんでな。てか、お前の親御さんだって、お前が戦っていることを知ったら多分俺と同じようなこと思うぞ？」

言われてみればそうだ。マトモな人間なら、子供がこんな戦いに身を投じているのを知れば止めるなりなんなりするだろう。瞬や唯だって、もしも自分より幼い子供が戦いに身を投じていることをしたら、きつと放って置けないだろう。

だから、瞬は叔父にはまだ仮面ライダー云々は言っていない。大人はこういう話を信じないだろうというのと、提督の言うとおり、叔父にそのような心配をかけたくないと

いう理由だ。

潮原提督の言葉で、瞬は改めてそれに気づかされた。瞬が黙り込んでいると、提督が声を掛けてくる。

「それでもな、お前のおかげで助かった。お前が戦ってくれてなきやもつと事態が悪化していたかもしれない。ありがとな」

「司令官も大人になりましたね。こんな気遣いができるようになるなんて、吹雪は感激です」

「……それ褒めてる？てかせつかく良い事言ったのに余韻台無しじゃんかよ」

今の台詞も余韻ぶちこわしているけどな、と心の中で突っ込む瞬。だが、今の言葉に、瞬の頬が思わず緩んだ。

ですが、とここで吹雪が話を変える。

「まだ全てが終わったわけではありません。大鳳さんの身が危ないことには変わりありません。一刻も早く助け出さなければ、何をされることか……」

吹雪の言う通り、事件は終わってはいない。大鳳を攫ったオリジオンの方はまだ解決していないのだ。あのいかにも「私は男性優位主義者です」と公言しているような奴の言動から想像すると、放置していると碌でも無いことになるのは間違いない。

「あれは間違いなく女性の敵だな。うん」

「噂に聞くブラック鎮守府の提督ってあんな感じなんでしようね……」
「あんな○ちゃんから這い出して来たような人、初めて見たなあ」

グラーフも吹雪も唯も、皆揃ってあのオリジオンの事をボロクソに言う。あの言動は一般的な男から見ても問題しかなかったと断言できる。間違つてもあんなのにはなるまい、と瞬も堅く誓うのであつた。

その時、カーテンで仕切られたベッドの方から、何やらガタガタと物音が聞こえてきた。アラタが目を覚ましたのだらうか。瞬達がカーテンをめくると、アラタの叫び声が耳に入つて来た。

「頼む！大鳳を助けにいかなくちゃならないんだ！」

「無茶だよアラタ君！結構ひどい怪我なんだから安静にしてなきゃ！」

傷だらけの状態が無理やり起きあがろうとするアラタを、志村がベッドに押さえつける。今のアラタは冷静さを欠いている。骨も数本折れているというのに、心身ともにコンディション最悪の状態で行つては、命に関わるかもしれない。

そんなことは皆望んではない。アラタの気持ちは分かるが、ここはじつとしてもらうしか無い。潮原提督は、無理やりベッドに寝かされたアラタの枕元に移動して話しかける。

「駄目だ馬鹿。お前傷だらけじゃねーか。ほら、明石が子守唄歌ってくれるから大人し

「分かつてるからこそ、お前を行かせるわけにはいかない。大鳳もお前も、二人とも無事できなやダメなんだよ。だから寝てろ。後は俺達がなんとかするから」

提督は胸ぐらを掴んでいるアラタの手を剥がしながら言った。アラタは、荒い呼吸を整えながら、提督の隣の瞬を見る。そして、悔し涙を浮かべながら心境を吐露する。

「あいつは、家族以上の存在なんだ。あいつがいたから、今の俺がいるってくらいに。だから俺が行かなくちゃならないんだよ！」

「気持ちには分かった。だが駄目だ。お前は寝ている。俺が行く」

「逢瀬……」

「俺はまだ大鳳とは関わりが浅いけど、お前が大鳳を大事に想っているのはよく分かった。多分、傷だらけの状態で行ってお前に何かあったら、大鳳も悲しむだろう？そんなの駄目だってお前もわかってるだろう？」

瞬は、潮原提督の胸ぐらから引き剥がされ、力無くだらんと垂れ下がったままのアラタの手を取って言う。

「だから、俺が行く。お前の怒りも悔しさも、俺が引き受ける。俺が持つていってやる」

「……」

それは決意表明だった。友として、ヒーローとして、一人の少年との約束であった。

アラタは何も言わなかった。アラタの顔はそっぽを向いていて、瞬にはよく見えな

かったが、どうやら大人しくはしてくれるようだ。瞬は席を立つと、志村に後を任せて退室することにした。

「志村、ネプテューヌ達を任せるぞ」

「わかったよ。僕が行ったって足手纏いだしね」

「それ自分で言つて悲しくならない？」

「なった……」

上着を着て、廊下を駆け抜けていく。

友との約束を果たすべく。

鎮守府入口付近

「馬鹿、なんで付いてくるんだよ。バイクに4人も乗れる訳ないだろ!!?」

なんかぞろぞろついてきた。潮原提督も山風も湖森もついてきた。お人好しでこーゆーことに首を突っ込まずにはいられない性格の唯はまだついてくる理由がわからないのだから……

《リンケイジゲーター!》

バイクのようなマークが刻印されたライドアーツを起動させると、それが発光しながらバイクの形に変形していく。アクロスの専用バイク・リンケイジゲーターである。

「俺がなんとかするから、皆は待っていてくれないか」

「俺の鎮守府で起きた問題だ。俺がカタをつけないでどうする」

「それはそうですね……なら山風、お前は……」

「アラタが動けないならせめてわたしが行かなきゃ!今のわたしは何の力もないけど、動かないでいるなんてできない!」

「俺が言ってもこんな感じで聞かないんだよ……」

半ば諦めた感じに潮原提督が言う。確かに、今の山風の目は凄く真剣なものだ。固い決意が秘められた、強いものだ。瞬も、これは何言っても聞かないなど直感的に理解した。

しかし、この場の全員をバイク一台で連れていくいくことは厳しい。そもそも、根本的な問題は別にあつた。

「場所の見当、ついてないんだろ?」

そう。潮原提督の言う通り、あてがないのだ。別のオリジオン達に邪魔されてまんまと取り逃してしまったが、奴が何処に逃げたのか見当のつけようがない。

しかし、闇雲に探していたら大鳳の身が危ないし、悠長に手がかりを探す時間もない。だか、瞬だつてじつとしていないことはできないのだ。大鳳は、アラタと山風にとつて大切な家族の一員なのだ。そんな彼女に危険が及ぼうとしている現状に、瞬も焦燥に駆られていた。

「でも、山風の言うようにじつとしてられない」

「それは俺も同じだ。それより思い出したんだ。アイツ、指名手配中の連続強姦殺人犯だよ。この街で何件も事件を起こしている。もしかすると、大鳳もこの街のどこかにまだ……」

潮原提督が言いかけたその時。

大地を揺るがす爆音とともに、市街地の方で爆発が起きた。

衝撃で尻餅をついた瞬は、空を見上げていた。

夕暮れの空高く上がる火柱。衝撃や音のデカさを考慮すると、距離的にはそれ程遠く無いようだ。怯える湖森を安心させるように抱きしめながら、唯が呟く。

「何今の……」

「分からない……でも、あそこに行つてみる価値はあるかもしれない。どの道宛がない

んだ」

「ああ、行かないや」

無関係である可能性もなくは無いが、只事ではないことには変わりない。瞬は即座にヘルメットを被りバイクにまたがる。その後ろにちやつかり唯も乗つかる。

「私も乗せて！幼馴染み特権使うから！」

「幼馴染み特権ってなんだよ……てか降りろ、振り落とすぞ」

唯に降車を命じながら、バイクのエンジンをかける。アラタにあんな風に啖呵を切ったのだから、間に合いませんでしたと済ましてはならないし、もたもたしている場合は無い。

「あれ？」

が、アクシデント問題発生。

—— 単刀直入に言うと、エンジンがかからない。いくらやってもプスンと気の抜けたような音が出るだけで、やかましいエンジン音が出る気配はない。

瞬は焦って何度も何度も同じことを繰り返すが、効果無し。こんな所でモタついてる暇は無いらしいのに。このままだと取り返しがつかなくなる。その事実が、余計に彼を焦らせる。

「動かない……嘘だろ!!？」

「バイクってちゃんと整備しないとすぐに壊れるからね……定期的に動かさないとすぐダメになるって父さんがボヤいてたな……」

呆れたようにぼやく唯。

そりやあまあ、仮面ライダーに変身する時以外は使っていないが、ネットで調べながらできる範囲でメンテナンスはやってたのだが、このタイミグで動かなくなるのは運が悪すぎる。一刻も早く大鳳を助けに向かわなくてはならない。

こうなったら足で走るしかない、と瞬はバイクから降りる。間に合わない可能性の方が高いが、今はバイクを点検する時間すら惜しいのだ。ヘルメットを脱ぎ捨て、クロスドライバーを装着しようとする瞬。

が。

希望はやってきた。

「あれれ、瞬くん唯ちゃんどーしたのよ?」

間の抜けたような声。振り返ると、一台のワゴン車が止まっていた。開けられたその運転席の窓から、見覚えのある顔がこちらを覗き込んでいた。

「と、トモリさん!」

「そーそー。徹夜でレポート書いた上に一日中バイトして疲労度半端ねーバイト帰りの

トモリ姉様なんだぜい」

車の運転手は港トモリであった。なんか目の下に隈が出来ているが、その状態で運転していいのだろうか。トモリはでかい欠伸を一つすると、瞬達に問いかける。

「なんか急ぎの用事みたいだけど、足が必要かな？」

これは渡りに船、というやつだろうか。ならば行幸、喜んで使わせてもらおう。

「はい。頼みます！」

瞬は一礼すると、ドアを開けて後部座席に座る。

「なら私も」

「私もいくもん！」

「お兄ちゃんとかさんがいくならば！」

「俺も乗せていただいて構いませんね！」

次いで他の皆もどかどか乗っかっていく。トモリ一人が乗っていた、人口密度スツカスカの7人乗りのワゴン車は、あつという間にほぼ満員状態になる。うわ多い多い。

トモリは全員がシートベルトをつけたことを確認すると、アクセルを強く踏み込む。「思った以上に大所帯になったけど皆乗ったね！結構とばすから！」

舞網市内某所・倉庫街

時は十数分前に遡る ——

市街地の外れにある、普段から人の寄り付かない倉庫街。高く積み上げられた幾つものコンテナが、ひどく無機質で空虚な雰囲気を出している。その中にあるひとつの古びた倉庫の中から、少女の叫び声が聞こえてくる。

「やめて！私に触らないで！」

「暴れんなよ……暴れんなよ……う？」

倉庫の中で、大鳳は鎖で縛られ、コンクリートの冷たい床に座らされていた。男か距離を取るように必死に後退りするも、すぐに壁際に追い詰められてしまう。男は、怯える大鳳の髪を撫でながら、気持ち悪い笑みを浮かべる。その顔を見るたびに、大鳳の身体が恐怖で震える。

「やっぱり実物は違うわあ。マジ興奮する」

「離してっ……」

「いや、キミは俺の物だよ。誰にも渡すもんか」

いつ誰がお前みたいな奴の所有物になったというのだ。大鳳の顔に、男の生暖かく臭い吐息がかかり、鳥肌が立つ。

鎖で縛られた身体を振ってなんとか離れようとするも、生憎彼女は引退した身。身体的には普通の人間と変わり無いのだ。というか現役の艦娘でも、艤装をつけてもない状態で鎖を引きちぎるなんて無理だ。

男は嫌がる大鳳の顔を舐め回すように見ながら、こんなことを考えていた。

（しかしラツキーだぜ！艦娘がこの世界にいたなんてな！貧相な身体付きだが、モブ野郎に処女奪われる前で助かったぜ……俺が主人公なんだから、女は全部俺のモンにしちまってもいいだろお？）

気持ち悪さ全開だった。一体何をどう拗らせればこんなヤベエ考えを持つようになるのだろうか。アラタとよくつるんで一誠達も変態っっちゃあ変態なのだが、スケベな部分に目を瞑れば、目の前の男より遥かにマシな人間だと思う。それくらい気持ち悪かった。

「何なのこの人……ホントあり得ないんだけど……？」

「口答えしてんじゃねーよオラア！お前は黙って俺のモノになつてりゃあいいんだよ！

ほらほら脱げ……」

下品な笑みを浮かべながら大鳳の服を剥ごうとする男だったが、突然、ギイイイイ……と金属が擦れる重たい音がし、屋内に光が差し込んでくる。まさかアラタ達が助けに来てくれたのか。大鳳は希望を胸に顔をあげる。そこには。

「貴様……これはどういう状況だ？」

「だっ……誰だお前は？」

そこに居たのは、緑のトレンチコートのような服を着た人物だった。紺色のフードで顔は隠れており、よく見えない。

「いやはや、通りすがりの身なのだが、この様な場に居合わせたとなると、私とて感化できない。したとすれば、それは騎士道精神に反するし、何より彼女にあわせる顔が無くなる」

凛々しくも綺麗なソプラノボイスが発せられた。半分くらい言ってることが分からないが、どうやら大鳳を助けてくれるようだ。

「何言ってるやがんだテメエ……用がないなら失せるんだな！」

「見過ごせないと言っているんだ。今すぐソイツを放せ。痛い目を見たくないのだから今のうちだぞ」

乱入者の物言いがしやくに触ったのか、男はすぐさま激昂する。

「黙りやがれクソ野郎が！この鎮守府の艦娘は全員俺のモノだつ！」

《KAKUSEI FREET》

オリジオンの姿に変身し、躊躇いなく乱入者に襲いかかった。自分の欲望を満たすのを邪魔する奴は、どうなるうが構わない。そんな驕りが見て取れる行為だった。

「逃げて——！」

大鳳の叫びは惜しくも届かず、オリジオンの肩の主砲が火を噴いた。放たれた弾丸が乱入者に向かって放たれ、着弾と同時に爆発を起こした。

ゴツ!!?と爆風が吹きつけ、倉庫の鉄扉がひしゃげて壁ごと吹っ飛んでいく。この様子だと、あの人物は無事では済まないだろう。きつと身体がバラバラに砕け散っている。大鳳もオリジオンも、そう思っていた。

が。

「いない、だど？」

鉄扉の残骸の上にあつたのは、ボロボロになったフードのみ。それを身につけていた人物の姿はどこにもなかった。

それを見て、悲惨な状態にならなかつたことに安堵する大鳳と、焦りと不満から地団駄を踏むオリジオン。その背後から、足音が聞こえてきた。

「話を聞いていなかったのか。そいつを解放しろ、と私は言ったはずだ。かかって来い

とは言っていない」

凜とした声が再びした。フリートオリジオンは、ぼつと声のした方を振り向き、声の主を睨みつける。そこには、顔を颯にした乱入者が無傷で佇んでいた。破壊された壁から夕日が差し込み、その人物の顔を照らし出す。

美しい緑色の髪をポニーテールにし、近未来的なゴーグルを身につけた、大鳳とそう歳の変わらななさそうな凛々しい表情の少女だった。しかし、大鳳はその少女に対し、好悪などという単純なものとは異なる、なんとも言えない不思議な感情を抱いていた。

（この人は一体……？それに何？何処か見覚えがあるというか、懐かしいような気持ちは……）

「なんだお前……女だったのかよ……」

オリジオンは少女の顔を見て驚いたような素振りを見せると、何故か警戒態勢を解いて彼女にゆつくりと歩み寄り始めた。

「だったらなんだ」

「へっ、邪魔者は殺すつもりだったが、女なら話は別だ。お前の名はなんだ？」

「貴様の様な下衆野郎に名乗る名は無い。いいから彼女を放してやれ」

なんと少女の方も口説きはじめた。その様子を見ていた大鳳は、あまりの見境の無さにドン引きし、思わず顔を逸らす。少女は僅かに不快そうに顔をしかめるが、特に動く

気配はない。

「よく見ればお前も結構いいモノ持つてるじゃんかあ。うん、俺のオナホには最適かもな」

コートの上からでも分かるほど、明確に存在を主張する彼女の胸を舐め回す様に見つめながら男は言う。最低なセクハラ発言のオンパレードだが、これが彼のデフォルトなのだ。いくら転生して強くなるうが、中身は非モテぼつちをこじらせたセクハラオヤジのまま。彼はそれを隠すそぶりもないのだから、嫌われて当然なのだ。他の屑系転生者でも多少は取り繕うというのに、なんとも情けない。女性の皆さんに訊いたら満場一致でリンチされてもおかしくは無いだろう。

大鳳も、性欲を微塵も隠そうとしない男の言動に辟易としているのだが、女心という概念を知らないこの男は気づかない。オリジオンは、少女に向かって手を差し伸べながら言う。

「決めた。お前も俺のモノにしてやる！生意気な女には、たつぷりとわからせなきやあならねえよなあ！」

（凄く気持ち悪いこと言い出したんですがこの人……？）

凄く今更な突っ込みを心の中に入れてながら、大鳳は少女の方を見る。彼女は、オリジオンを軽蔑し切ったような目で睨みつけながらこう吐き捨てた。

「断る。お前の目は、他人を自分と同じ人間として見ていない目だ。その時点でお前はダメなんだ。仮に同性同士だったとしても、誰もお前のモノにはならない。そう断言しよう」

「デメエ！下手に出れば良い気になりやがって！」

いやめっちゃ上から目線なんですすがそれは……という突っ込みが全方向からとんでくる台詞なのだが、オリジオンの中では普通なのだ。生来からの男尊女卑思考の上に、力を手に入れて増長し切っている彼は、手のつけようのないモンスターに成り果てていた。

フリートオリジオンは、不気味に笑いながら連想砲の砲口を少女に向ける。自分に靡かない女は、痛めつけなければ気が済まないのだ。

「なあ知ってるか？生意気な女騎士はすぐ竿役に屈するってなあ！お前もすぐに『くっ殺せ……！』って言わせてやるから覚悟しとけよお！」

どこの薄い本の世界の常識を披露してるんだ。ここは健全なる現実だというのに。というか、女性相手にリアルでこんな事言うような性格だから、前世でモテなかったのではなからうか。大鳳の身体中に悪寒が走る。怖さを通り越して気持ち悪さを感じる。早く助けてほしい、この場からは連れ出してほしい。そう祈るしか無かった。

少女は男を軽蔑を込めて睨み、その気色悪い発言を一蹴する。

「私にそんな趣味は無い。この身はかの女神達だけに捧げるものだ」

「お高く止まつてんじやねえよ雌豚あ！女神だが高んだか知らねえが、俺様のビッグマグナムを味わえば気も変わるだろ！これまでの女は皆そうだったんだからなあ！」

差別心丸出しの罵倒を吐きながら飛びかかる男。あんな綺麗なル○ンダイブ初めてみたわ、と気持ち悪さを通り越して呆れてくる大鳳。それに彼の発言からすると、大鳳よりも前にも被害者が複数人いる模様。こいつはとんでもないクズですよ間違いない。

対して少女は、飛びかかってくるオリジオンに臆する事なく、腰に携えた一振りの剣を鞘から抜く。そして、剣先をオリジオンにまっすぐ向けて、叫んだ。

「抜剣・絢爛たる女神騎士《コード・ヴァルキリア》っー！」

瞬間、剣先を起点に眩い緑色の光が放たれ、少女の身体を包み込んだ。

「な、なんだよ一体！」

フリートオリジオンは、あまりの眩さに思わず目を閉じ、攻撃を中断してしまふ。一体何が起きたというのか。

「あ………れ？」

光が収まり、大鳳の視界が晴れる。そこに立っていた少女は、先程までとはうって変わって、ポニーテールを解いて銀の鎧を見に纏った姿だった。といつても、ガチガチのフルアーマー全身装甲ではなく、胸元や太腿から肌色が覗いている。まるでどつかのファンタジー作

品からそのまま出てきたような格好である。なんか胸元や太腿の露出がえっちに見えるのは気のせいではないはず。うん。

「何……それ」

「言つてもわからぬ様だな……ならば、この剣を以て判らせてやる」

少女騎士は、煌びやかな装飾が施された剣を突きつけながら名乗りをあげる。それは、揺るぎない信念と正義感に満ちた声だった。

「我が名はセラ。誇り高き女神騎士の団長として、貴様のような不埒な輩は捨ておけぬ。ここで斬り伏せてやる！」

「うるせえやい！女の分際で俺に楯突くなあ！大人しく俺の××に屈しろこの雌豚あ！」

汚い言葉のオンパレードに思わず耳を塞ぎたくなる大鳳[×]。拘束されていなければ、ぐにでも逃げ出したくなる。今どきまだこんな男尊女卑思考の持ち主いたんだー、とか考えてる余裕はなかった。

「それは不可能だ。何故なら——」

セラは手に持った剣を大きく振り上げる。その時大鳳には、刀身に稲妻が走ったのが見えた気がした。

「お前は××で倒れるからだ」

一閃。それだけであった。

セラが剣を一振りしただけで、途方もない衝撃が当たりを襲った。剣を振ったことで生じた風圧だけで、大鳳は吹き飛ばされそうになり、倉庫は、まるで倒壊してしまうんじゃないかと錯覚させるほどに激しく音を立てて軋む。

そして、剣が振られると同時に剣先から放たれた紫電が、フリートオリジオンに向かい飛んでいく。あたりに散った電撃が、木箱を貫いて発火させる。中に何かはいつていたのだろうか。フリートオリジオンは感電によって苦悶の声をあげるが、足を踏ん張りなんとか耐え切る。

ドカンと、吹き上がった火柱が倉庫の屋根の一部を吹き飛ばす。オリジオンは落ちてくる屋根の破片を気にも留めず、ただセラに対して怒りをぶつける。

「調子にのるなよ雌豚あ！お前は俺様のオモチャでいいんだ上等だろー！」

攻撃されたことに対して激怒したオリジオンは、怒り心頭でセラに向かって砲撃を仕掛ける。しかし、セラは飛んできた砲弾をなんと剣で斬り捨ててしまう。斬られた砲弾が爆発し、セラの姿が煙で隠れる。

「はあああああー！」

「なあ？？」

オリジオンが動揺する間も無く、セラは煙の中を一直線に突っ切ってオリジオンに斬りかかってくる。ガキンッ！と鈍い金属音と火花がでる。しかしオリジオンの装備に

は傷はない。

「馬鹿め！剣一本で軍艦に勝てる訳ねーだろ！」

「動きに隙が大きすぎる。やはり力を持っただけの素人……」

「だから！女の分際で！調子こいてんじやねーぞダボが！」

フリートオリジオンは、左腕のカタパルトから艦載機を発進させ、空爆をはじめた。セラと距離を取るように離れ、右腕の連装砲を乱れ撃ちしてくる。屋内でそんな真似をされたら今度こそ倒壊間違いなしなのだが、女に歯向かわれたことでプライドを傷つけられ、怒り狂っているフリートオリジオンには、そんな事を考える余裕はない。

しかしセラは難なくその攻撃を避け、オリジオンの頭上を飛び越えながら艦載機を一撃で斬り伏せると、心底軽蔑した、といった感じにオリジオンを見下してきた。いや、軽蔑というには、その目はあまりにも冷たかった。

「下らないな。実に下らない。お前という人間の器の小ささには感心するほかないな。こんな小物を直に見たのは初めてだよ」

「誰が下らない奴だ……俺は神様に選ばれて転生したんだぞ!?」 それだけで凡百の奴等とは違う、選ばれた存在なんだ！だから俺は全てを手にする権利がある！それが、選ばれた者の特権なんだよ！原作に名前すら出てこないようなモブキャラ風情が俺を見下すなああああああ！」

セラの自分への目に苛立ち、傲慢な持論を吐き散らすオリジオン。

選ばれた存在は何をしてもいい。それが彼の根幹にあった。理不尽にも前世を潰されたんだから、転生して好き勝手やって良い。邪魔する奴は許さない。それで今までまかり通って来たのだから、何も反省することはなかった。

しかし、そんなことは誰も認めはしない。結局、それがまかり通っていたのは自分が強かったからであって、それが通じない相手を敵に回した時点で、彼は終わりだったのかも知れない。

「……なんでまあ、転生者はどいつもこいつも私を苛立たせるのか。これまで出会ってきた奴らのほとんどが、貴様と同じ反応だったよ。この世界で生きる人々を見下し続け、少しでも自分の思い通りにならなければ当たり散らす……お前は選ばれた者じゃない。ただの悪ガキだよ」

フリートオリジオンをばっさり否定するセラ。神に選ばれし転生者であることを最高の誇りとしていた彼にとつて、セラの言葉は許し難いものであった。無駄にプライドの高い彼は半狂乱になり、発狂しながらセラに突撃していく。

セラは、激昂しながら接近してくるオリジオンを真剣な表情で見据えながら、剣を構える。

「だから、私が罰する。道を外れた人を正しく導くのも、騎士の役目だからな」

その頃、トモリの車で倉庫街の近くまで来ていた瞬達もその爆発を見ていた。それを見たトモリは思わず車を急停止させ、震え上がる。

「何が起きてるのアレエ！私怖いヨオ！」

「急がないと……！」

「あ、待つて瞬！」

爆発した場所はここから近い。この距離なら自分の足で走ったほうが早い。瞬は即座に車から降りて走り出す。続いて唯も山風も湖森も潮原提督も下車し、薄暗い倉庫街へ向かつて走り出す。

一人運転席に取り残されたトモリは、車のエンジンを止めると、慌てて瞬達の後を追って車から降りる。

「ちよつと皆さん早くないですかあ!!? た、頼むから置いてかないでえ！」

数分後。

数奇な出会いが待ち受けているとは知らずに。

「な、何が起きたのよもう……」

爆煙の中、大鳳は意識を取り戻した。

爆風で煽られ、大鳳は倉庫の入り口まで吹っ飛んでいた。徐々に晴れていく爆煙に咳き込みながら、あたりを見渡す。

大鳳から数メートル離れた位置。そこに、人間の姿に戻り、全身ボロボロの状態で見られているオリジオンの変身者の姿があった。うつ伏せのまま動かない彼の姿に、大鳳はほっとする。

「すげえ……」

「大丈夫か？ すまない、私の技はどれも出力調整が難しくくてな……君を余計な危険に晒してしまったようだ」

騎士のような鎧姿から元の格好に戻ったセラが、大鳳の元に駆け寄り、彼女を縛っていた鎖を剣で斬り落とす。ようやく助かったのだ。

「偶然お前が攫われる所を目撃したから尾行したんだ。結果的に助けられて良かったよ」

「見ず知らずの私の為に……ありがとうございます」

「なあに、騎士としての当然の義務を果たしたまでさ」

「わっ!?」

頭を下げて礼を言う大鳳の頭を、セラは安心させるように優しく撫でる。

(でも、私を感じた違和感って何だったの……う?)

撫でられることを恥ずかしく思いながらも、大鳳は、セラを一目見た際に感じた違和感について考えていた。どこかで見たような見てないような、初めて出会ったとは思えない感覚。それが引つかかる。

考えるが、答えは出ない。そこに、

「大鳳!」

「その声……瞬!」

爆発音を聞きつけ、瞬達がようやく駆けつけたのだ。唯や山風、湖森に潮原提督も来ている。心細く感じていたが、知っている声に安堵する大鳳。崩れた壁の影から、瞬が現れる。

「ここにいたのか!?」 良かった無事だったんだ……え?」

向こうも向こうで、安堵の表情を浮かべながら走ってくるが、その顔が突如として、困惑の表情に変わった。他の面々も、瞬と同じような顔になっている。

彼らの視線はある一点に集中していた。その先にあるものは。

「……………え？」

「は？」

大鳳の隣に立つセラだった。大鳳もそれに気づき、セラの顔を見るが、彼女も彼女ではたまたま何かに困惑したような表情になっていた。

その視線の先に居たのは——唯だった。

互いを見つめたまま、固まる唯とセラ。なんだかよく分からないのに、何かが引つかつて仕方がない。しかし、何が引つかかるのかはさっぱり分からない。そんな感覚だった。

こうして皆が固まって動けなくなっているところに、トモリが遅れてやってくる。

「皆置いてかないでよお……………おねーさん便秘持ちだから今お腹痛くて……………つておわああお!?」 ゆゆゆ、唯ちやんが二人い!?」

「……………っ！」

「ああ! そうだ！」

トモリはセラをみるなり、まるでお化けでも見たかのように腰を抜かす。その声で、ようやく大鳳の疑問が晴れた。

少女騎士は、唯に似ている。

顔つきや体格以外はほとんど似ていないというのにも関わらず、何故か2人は似てい

るのだと結論づけてしまうのだ。そして、瞬は大鳳以上に困惑していた。

(前に見たりイラとかいう奴……そして今日の前にいる彼女……一体、なんだというんだ？何故なんだ？何故彼女らと唯に共通点があるのだと俺は思っている？！)

全く接点も何もないのに、そう思わされることが異常だった。皆な中でも、既にリイラという前例を知っている瞬は、三者の間に何かあるのでは、という考えを抱き始めたていた。

他の皆も、自分が二人に抱いている感覚に酷く困惑しているように見える。湖森は、セラと唯の顔を何度も交互に見ているし、潮原提督は、怪訝そうな顔をしながらセラを凝視している。そして、当の本人達も、互いに対して困惑の表情を見せていた。

「貴女は……一体？」

「それは此方の台詞だ。何故かお前を見てみると、他人のようには思えないんだ」

セラの言う通り、友人や家族に抱くそれとは違う、異質な親近感。それがセラと唯の両者にしつこくまとわりつく。だが、それが何故なのかは誰にも分からなかった。

セラは違和感に戸惑いながらも、気を取り直すように首を横に振ると、瞬の方を向く。

「そうだ、お前」

「俺？」

「ああ。お前に一つ聞きたいことがある」

数歩、距離が縮まる。

セラが、再び口を開く。こんな質問だった。

「パープルハート様を知っているな？」

「ちよつと待て、いきなり何の話だ？」

いきなりの知らない単語に困惑する瞬。なんだ、何故自分ばかりがこんなに混乱させられなきやなんのだ。もちろん瞬はパープルハートなんてものは微塵も知らないし、そもそもセラのこと自体まだ信じられないので、彼女の質問には答えられない。

瞬が答えずに黙っていると、セラは詰め寄りながら、先程より強く瞬に問いかけてきた。

「私の目は誤魔化せない。お前からはあの方の気配を確かに感じる。直に会っているほどの、強いやつをな。質問に答えてもらおうか」

「ちよいと待て何それ怖い気味悪い！知らないっての！」

ぐいぐいと詰め寄ってくるセラにドン引きし、瞬は思わず後退りしてしまう。真剣な表情のセラにたじろぎ、上手く言葉が出てこない。そんな問い詰め方では、仮に瞬がパープルハートとやらにについて知っていても、答えるのを拒否してきそうなものなのだが。

その時。

「お邪魔するぜえ！バルジ様の御成だあい！」

バンツ！と、フリートオリジオンが吹き飛ばした鉄扉を勢いよく踏みつけるような音と共に、品性のカケラもないチンピラボイスが響き渡った。皆が入口の方に目をやると、そこには、数時間前に鎮守府に姿を現したギフトメイカー・バルジが下品な笑みを浮かべて立っていた。

「お前はさっきの……！」

「よう、また会ったなアクロス。いやあ良くも大事な俺たちの同志をやってくれたなあ！マジ鬼だわお前ら！」

瞬はバルジの顔を見るなり、咄嗟に身構える。それに対し、バルジは調子の良い声で手をあげて挨拶をすると、笑いながら話し始める。

「なんか神気臭えなあと思ったらよお、凄えオマケまでついてきてるとか、マジラッキーだな！おーい起きろ。お前まだ立ち上がれんだろ」

バルジは何か嬉ぶような仕草をすると、足元で倒れているフリートオリジオンの変身者を足で蹴って起こす。男は呻き声を上げながら目を開き、眼球を動かしてあたりを見渡す。

「見下してんじゃねえよモブ共が……俺が一番なんだよ」

「ああそうだよお前が一番だ。だから、ちよいと背中を押してやる」

大鳳に肩を貸しながら潮原提督が叫ぶ。それに促される形で、皆が出口に向かう。あたりはもうめちやくちやだった。割れたガラスが雨の様に降り注ぎ、天井や壁がそれに混ざって崩れ落ちてくる。

頭を守りながら外に向かう瞬であったが、ふと目をやると、セラが脱出する素振りを見せずに棒立ちしているのが目に入った。

「お前も早く逃げるんだよ！何突つ立ってんだ？？」
「危ないって！瞬くんこそ逃げなきゃまずいから！」

必死にセラに呼びかける瞬だったが、セラからの反応はない。そのうち、トモリに半ば無理矢理腕を引つ張られる形で、倉庫の外に連れ出されていく。瞬が最後に見たのは、崩れゆく建物の中で、こちらを見つめて微動だにしないセラの姿であった。

後ろを振り返る間もなく、瞬は引つ張られるようにして外に脱出した。そうしてセラ以外の全員が脱出した瞬間、激しく揺れながら倉庫は倒壊した。皆がそれをただ見つめる中、瞬は膝から崩れ落ちる。

「あ……ああ……！」

助けられなかった。目の前で、一人犠牲になってしまった。その事実が、瞬にのし掛かる。唯がそれを励ます様に、瞬に言う。

「瞬……！まだ死んだと決まった訳じゃないよ！自力で脱出してたりするかもしれない

「んな訳ないだろ……！大勢の人が傷つくかもしれないんだぞ？？」
「何水を刺すようなこと言うんだ。いい子ぶってんじやねーよ雑魚が」

瞬の言葉を聞いたバルジは、さつきまでとはうって変わり、酷くさめたような目つきで瞬を睨みつける。まるで、楽しい場面が些細な失言一つで一気に冷めていくような、それを安易に糾弾するような目で、瞬を見下す。

瞬にはその目が恐ろしく思えた。今日出くわした2体のオリジオンも、他人を人間と見ていないような目をしていたが、それに近いものを感じた。

「俺達は新たな神を作り、全世界を支配する。その過程で亡くなる、多次元宇宙すら認識できない劣等種の2、300億人の命なんか、俺達にはどうだっていいのさ。アリやハエが死んでも悲しむ人間が居ないのと同じようにね」

「劣等種だと……？」

まるで自分は他より優れた存在だと自負するような発言に思えた。荒唐無稽な話だが、ろくでもないことなのは確かだ。バルジは瞬を見て笑うと、声高らかに言う。「お喋りはここまでだ。さあ殺し合おうぜ仮面ライダー！お前は劣等種の中でもちよつと特別だからなあ、前座程度には楽しませろよ？」

「くっ……やるしかないのか……！」

瞬はクロストライバーを装着してアクロスに変身しようとするが、その時、瞬の足元

が突然爆発を起こし、瞬の身体を吹き飛ばす。直撃はしなかったものの、爆風に煽られて瞬はゴロゴロと地面を転がされることとなった。

空を見上げると、髑髏をあしらった悪趣味な戦闘機らしきものが上を飛んでいた。フリートオリジオンの飛ばした艦載機だ。どうやら爆撃を仕掛けてきたらしい。

「ぬうおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

オリジオンは雄叫びを上げながら、埠頭から離れた海上から、背中から歪に伸びる主砲による砲撃を放ってきた。アスファルトが抉れて破片が降り注ぎ、炎が舞い上がる。瞬達は砲火を掻い潜り、物陰に避難する。

埠頭のあちこちから火の手が上がり、艦載機と砲撃の音が絶え間無く聞こえてくる。その有り様はまさに兵器。そんなものが暴れ回るのだから、恐怖でしかなかった。

「こわいこわいこわい！私の車壊れないよね！！？」

「まずい、このままだと市街地に被害が及ぶ可能性がある！早く周辺住民を避難させなければ……」

「畜生っ！海の上から砲撃とかズルすぎだろ！」

「空飛んでいけば？アクロスの方に確かあったよね？」

「いやキツイ。アイツ、艦載機までとばしてる。制空権は彼方に奪われちゃったんだよ。その中を飛んでいくなんで自殺行為だぜ？」

「どうするのよ一体……」

このままオリゾンに一方的に甚振られるしかないのか、と一行に諦めムードが漂い始めていたその時、潮原提督はニヤリと笑いながら、通信機を取り出した。

「提督、一体何をする気で……」

「まあ任せろ。ここは一つ、俺達の底力を見せてやる。だから……ほんと申し訳ないが、あのバルジとかいう奴を任されてくれないか？」

「俺が？」

「出来ればやらせたくないのが本心だが、此方のまともな戦力は今、お前しかないんだ。じゃなきや皆死ぬかもしれない」

やれるか？と、瞬の目を真っ直ぐ見つめながら頼む潮原提督。瞬に、迷いはなかった。「やりますよ。なんで、出来るだけ早くしてくれと助かります」

「……オーケーだ。やってやんよ」

同時刻・舞網鎮守府

夕暮れの鎮守府に、突如として鳴り響くサイレン。

それを聞いた者——遊んでいた者、外から帰ってきた者、休んでいた者、働いていた者——思い思いの日常を過ごしていた艦娘達の顔つきが、一瞬で変わった。

そして、執務室でそのサイレンを聞いていた吹雪は、サイレンの直後に掛かってきた電話に出る。提督からだった。

「司令官、今どこにいるんですか？街の方になんかでかい化け物がいるのが見えるんですけど!?？」

留守の間にとんでもないことになっていることに驚き、思わず提督に問い詰める様な言い方になってしまふ。すると、耳に当てられた受話器の向こうから、切羽詰まった提督の声が聞こえてくる。

『今現地にいる！兎に角出撃の時間だ、いけるか？』

「ちよつと……無事なんですか!?？」 無茶しないでください。自分から前線に突っ込む指揮官は馬鹿って言ったの誰でしたっけ？」

『いや俺もこの展開は予想外だったというか……とりあえず、出撃できるか？このままじゃ市街地にも被害がいきかねない。至急急行願いたいところだ』

提督と通話しながら、吹雪は鎮守府の窓から外を見る。窓の端、市街地があるあたりから、煙や火らしきものが小さく見える。あの辺りは確か埠頭のあたりだったはず。たしかに提督の言う通り、危機的状況なのは間違いない。

となれば、やることは一つ。今こそ、艦娘の使命を果たす時。吹雪は提督の問いに、力強く答える。

「……はい、いけます！」

『よし！俺の言う通りにメンバーを集めて出撃してくれ！場所は鎮守府の港から見えるんだろ？』

「見えてます。夜戦の準備は？」

『それも想定しておけ。そろそろ日没だからな』

「はい、では行きます。司令官も無事でいてください！」

通話を切り、吹雪は出撃メンバーを集めるために放送室へと走る。

—— さあ少女達よ、抜錨せよ。

「おいおい。隠れてないで出てきてくれよ？そんなビビりっぷりで仮面ライダー名乗るとか笑っちゃうぜ？」

燃え盛る火の海を背に、バルジは挑発を仕掛けていた。囃し立てるように手を叩く姿は、どうみてもそこら辺のイキリ散らしているチンピラにしか見えないのだが、その実は自信に満ち溢れたような雰囲気を漂わせている。自分が負けるはずがないという、絶対的な自信に。

ガサリと、バルジの前方で音がする。彼は動きを止め、音のした方を注意深く見つめる。すると、物陰からクロスドライバーを装着した瞬がバルジの前に出てきた。その顔は真剣なものだった。バルジはそれに歓喜し、高らかに叫ぶ。

「お、やる気か？ いいねえ、せいぜい楽しませろよ？」

「なあ」

「あ？」

「こんな馬鹿げた真似をやめる気はないのか？」

「なんで？ どうして？ 俺にメリットないよね？ てか悔しかったら力づくで止めればいいじゃねーか。単純な話だろ？」

瞬の言葉が本気で理解できていない様な反応をするバルジ。彼にとつては、それが当たり前になってきているのだ。住む世界も、前提となる常識も、なにもかもが違いすぎる。

バルジは高笑いしながら、地面を蹴って瞬に急接近する。反応が遅れた瞬は、なすすべなくバルジのパンチをその腹に受け、身体がくの字に折れ曲がった状態で後方に吹き

飛ばされる。そして、咳き込みながら起き上がる瞬に、バルジはさらに挑発を仕掛ける。「話し合いで解決できるのは幼稚園までだつての！ さあ、殺し合おうぜ仮面ライダー！」
「くそっ！ 結局戦うしかないのか！ 変身！」

《CROSS OVER！ 思いを！ 力を！ 世界を繋げ！ 仮面ライダーアクロス！》

《KAKUSEI PIKACHU》

それぞれが変身し、走りながら互いに殴りかかろうとする。その拳は互いの胸板に突き刺さり、両者はその衝撃でのけぞりながら距離を取る。

バルジは殴りつけた拳を、汚れを払うかの様にもう片方の手ではたきながら、アクロスに問いかける。

「お前、ピカチュウ知ってる？ 国民的電気ネズミなんだけどさ。」

「何言ってるんだお前……」

「まあ、お前は転生者じゃないし知らなくて当然か。せつかく俺様の転生特典を暴露してやったのに、それを活かせる知識がなくて残念だ」

アクロスを馬鹿にする様にわざとらしいため息をつくとき、バルジ——ピカチュウオリジオンはバチバチと音を立てながら、高圧の電気を発生させて身体に纏う。

「ボーナズ問題を無駄にした代償は高くつくぜえ！ エレキボール！」

「ぬあにつ……」

ピカチュウオリジオンの全身に纏わりついていていた電気が、彼の両手に集中していき、球状の電気の塊を生成する。そして、それがアクロスに向かって放たれる。

二つのエレキボールは、アクロスの胸部装甲にぶつかって激しく火花を散らす。そして、僅かながらアクロスの身体を痺れさせる。バルジはその隙を見逃さず、今度は腰から首元あたりまでの長さはありそうな、強靱な尻尾を振り回してアクロスに叩きつけてきた。

「うわあああつ!!?」

「オラオラどうした!弱いぞ弱いぜアクロスう!さつきまでのイキりっぷりはなんだつたんだ、ああ?」

「がっ」

倒れたアクロスを挑発しながら、脇腹を蹴りつけるオリジオン。もう少しでアクロスは海に落とされそうだ。ピカチュウオリジオンは、アクロスの顔に唾を吐き捨てると、拳に電気を溜め始める。

「はあくつつまんねえ。期待外れだったぜ……じゃ、早よ死ねよ」

「断る!」

そう叫びながら、アクロスはすかさずツイインズバスターを取り出し、銃形態に変形させる。至近距離からオリジオンを撃ち抜いた。

「あががあがつ!?？」

予想外の反撃をもちにうけ、ピカチュウオリジオンはひっくり返る。その隙にアクロスは立ち上がって駆け出し、オリジオンから距離を取る。これで形勢は均衡状態に近づいた。アクロスは振り向きながらツインズバスターを構えるが、その時には既にオリジオンは立ち上がっていた。

彼は立ち上がりながら嬉しそうに大笑いする。一体何が嬉しいというのだろうか。オリジオンはアクロスを指差しながら叫ぶ。

「やるじゃんやるじゃんかあ！それくらいしてくれなきゃ困る！やられたんだから、このバルジ様も仕返ししなきゃなんねえよなあ!?？」

(来るか!??)

ピカチュウオリジオンは先程以上に激しく笑いながら、辺りに放電攻撃を仕掛けてくる。アクロスはその電網を掻い潜りながら、ツインズバスターを連射しつつ走って距離を詰めてゆく。そしてゼロ距離。ツインズバスターを剣形態にしてから斬りかかるアクロスに対し、オリジオンは電気を纏った拳を振り下ろしてくる。

その攻撃はお互いに当たり、両者は衝撃でよろけながら後退する。しかし、一足先にアクロスが体勢を整え、ツインズバスターでオリジオンを一閃した。

「やるじゃねーかよ。ならもつと本気出さなきゃな?？」

転生者狩りであった。今回は、バッタをモチーフにしたと思われる、白と黒のモノトーンカラーのライダー・仮面ライダーアークワンに変身していた。

「へえ……転生者狩りかあ。お仕事しに来たのか？ご苦労なコツタ」

「よくものうのうと……貴様だけは許さない！貴様だけはああああああつー！」

今までと比較すると、かなり感情的なように見える。誰が聞いてもわかる、怨嗟の声だった。アークワンは、二本の剣、アタツシユカリバーとプログライズホップブレードを構え、突進しながらピカチュウオリジオンを斬り払おうとする。

「消え失せろ、外道が！」

「やなこつた」

アークワンの憎しみの籠った声と斬撃を軽く一蹴するように、ピカチュウオリジオンは尻尾で攻撃を打ち払うと、そのまま勢いをつけて回し蹴りをアークワンの胴体に叩き込む。

しかし、アークワンは咄嗟に武器を捨ててオリジオンの脚を両手でがしりと掴むと、そのまま持ち上げてオリジオンの体勢を崩す。オリジオンは「やるじゃねーか」とも言うかのように鼻で笑うと、手を地面について身体をバネの様に動かしててムーンサルトキックを繰り出した。

「その手は食わねえ！往生際が悪いんだよテメエは！きつさとくたばれよ！」

「なんだお前、俺に恨みでもあんのか？生憎俺は人に恨まれる様なことした覚えがなく
てねえ」

「惚けるな！貴様のせいだ……あいつらが！貴様だけは許さない！」

お互いにヒートアップし過ぎていて、アクロスはついていけなかった。何か事情があるのだろうが、本人に聞いても答えてくれそうにもないし、

「つて呆然としてる場合か！」

だが、このまま戦いを黙って見ているわけにもいかない。アクロスは雄叫びを上げながら、落ちていたツインズバスターを拾い、それでピカチュウオリジオンに斬りかかるが。

「邪魔するな！」

「うぐあつ!?？」

戦いを邪魔されて激怒したアークワンが、アクロスの顔面を容赦なく殴り飛ばした。アークワンはそのまま、オリジオンにシオルダータックルをかまして突き飛ばし、

「そうカツカするなよ。冷静さを欠くと勝てる戦いにも勝てないぜ」

「どの口が言うかつ！」

アークワンはドライバー上部のスイッチ・アークローダーを連打しながら、飛び蹴りを放つべく構える。そして、ドライバーから何処か艶やかな、くぐもった音声の流れ

いく。

《悪意、恐怖、憤怒、憎悪、絶望、闘争、殺意》

言葉が紡がれる度に、アークワンの周囲に赤黒いエネルギーのようなものが収束していく。そして、そのエネルギーがアークワンを覆い尽くしかけた瞬間、必殺技が発動した。

《パーフェクトコンクルージョン！》

音声と同時に、アークワンが飛び上がる。その余波として放出された赤黒いエネルギー波だけで、戦いの蚊帳の外だったアクロスは大ダメージを受けて吹き飛ばされてしまった。

それは離れた位置に隠れていた唯達の元まで及び、エネルギーこそ減衰されてダメージはなかったものの、衝撃で発生した突風に必死に踏ん張ることを強いられることとなった。

「何が起きてるの……？？」

「やばいよコレ……あのオリジオン、まだ暴れる気だよ」

歯を食いしばって踏ん張りながら、湖森が海の方をみる。そこには、未だ離れた位置から爆撃や砲撃を繰り返しているフリートオリジオンの姿があった。しかし、今の仮面ライダー達では太刀打ちできない。

オリジオンの砲撃が、アークワンが先程まで立っていた位置に直撃する。しかし、アークワンは一足早くキツクの体勢に移行を完了しており、爆発を背に、さらに発生した爆風で落下速度をあげて威力を高めながらライダーキツクを繰り出してきた。

「終わりだバルジ！ イイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

ピカチュウオリジオンにキツクが当たる。瞬間、先程よりも何倍も強い衝撃波が辺りに撒き散らされると同時に、オリジオンの身体は大爆発を引き起こした。

その衝撃波は、先程の余波で吹き飛ばされてからまだ起き上がれていなかったアークロスに容赦なく襲いかかり、彼の身体を近くの倉庫の壁に思い切り叩きつけた。全身を鞭打つ様な痛みを堪えながら、アークロスはよろよろと立ち上がる。彼の目には、変身が解けて仰向けに寝転がるバルジと、それを見下ろすアークワンの後ろ姿が映っていた。

「……はっ、今回は俺の負けだな」

バルジは、嬉しそうに笑う。予想外の展開だが、暇つぶしにはなったと言いたげな表情だった。

そして、倒れている自分を上から睨みつけているアークワンに視線を合わせると、嘲笑うかの様に言う。

「転生者狩りい……次会う時は覚悟しとけよ？ 本気で殺し合おうや……」

「次なんてない。今すぐ殺してやる」

「アディオス」

そう言いながらバルジが指を鳴らすと、彼の倒れていた地面にジツパーの様なものが現れ、それが開いてゆく。中は完全なる闇。何も見えない。バルジは仰向けに倒れたまま、その闇に溶ける様にして消えてゆく。

アークワンは逃げるバルジを、怨嗟の声を吐きながら追いかける。しかし、バルジは彼を挑発する様に下品に笑いながら消えてゆく。

「待て！殺してやる！殺してやる！お前だけはっ！」

アークワンの叫びも虚しく、バルジが完全に闇に消えたのを合図に、ジツパーは急速に閉じてゆく。そして、アークワンがたどり着いた時には、ジツパーは跡形もなく消えていた。

アークワンは苛立ちのままに、空に向かって大声で叫びながら地面を強く踏みつける。仮面で素顔は見えないが、その姿は泣き叫んでいる様に見えた。

「バルジッ！出てこい！俺がぶっ殺してやるっつとんだよお！」

「お、落ち着けよ……そもそも殺すとかなんとかって、なんだよ。そんな」

「そんなの駄目だと言いたいんだろ」

アークワンは、自身をたしなめようとしたアークロスの言葉を遮る様に、その首元を強く掴む。

「ふざけるな！アイツはな、生かしちゃいけない類の人間なんだよ！コイツを殺さなければな、悲劇は繰り返されるんだぞ^{!!}？」

「俺はお前の事情は知らない。でも、人殺しなんて……」

「もうやつてる。屑みたいな転生者を山程な」

「……っ！」

「覚えとけアクロス。復讐の邪魔をする奴は殺されても文句は言えないってことをな」

言いたいだけ言うと、アークワンはアクロスを突き放し、踵を返す。そんな彼の後ろ姿を見ながら、アクロスは何も言えなかった。下手に他人のデリケートな部分について口を出したせいで、彼を怒らせてしまったことについて申し訳ないと思う。彼があんなに激昂するほどバルジに強い憎しみを抱いているという事実には、心を痛めていた。あれ程の憎しみを抱くほどの何かがあったのだろうと推測しながら、アクロスはアークワンの後ろ姿をただ見つめるしかなかった。

が、事態はまだ収束していなかった。

アクロスが立ちあがろうとした瞬間、近くで爆発が起きた。またまた爆風で吹き飛ばされ、本日何度目になるのか分からない地面転がりを披露させられる羽目となるアクロス。顔を上げると、夕陽を背に海上に立ち、主砲をこちらに向けたフリートオリジオンの姿が目に入った。バルジに気を取られすぎていて向こうのことを忘れていたのだ。

間髪入れず二発目が発射され、手前の海上に落ちてでかい水飛沫を上げる。

「うわっ！」

「チッ！面倒臭い奴だ！サイガに変身しても撃ち落とされるのが目に見えてやがるし……」

アークワンの方も決め手にかける様で、離れた位置から好き勝手振ってくるオリジオンを睨む他なくなってしまう。これじゃ何も解決していない。

その時だった。

「海の上ならー！」

「私達の独壇場ですー！」

次いで、オリジオンの足元で2つの水飛沫が、爆発と共に引き起こされた。吹雪の後方から、駆逐艦・三日月と江風が現れる。今のは、2人の放った魚雷の爆発のようだ。

3人の駆逐艦に追隨してきたような形で、神通もやってくる。朝とはうって変わり、その顔は真剣そのもの。格好も相まって、歴戦の武士のような雰囲気を出していた。そんな彼女の耳につけられた通信機を通し、岸にいる潮原提督が話しかけてくる。

『おっせえよお前ら！何時間待たされたと思っただら？？』

「大袈裟な、20分くらいですよ。提督こそ、よくぞご無事で」

『ほんと、命が幾つあっても足らねえよなあ、この仕事ってのは』

「でも、それが私達の仕事ですから」

そう。命をかけて深海棲艦の脅威から人類と海の平和を守る。それが艦娘と提督の存在意義。悪態をつきながらも、

「あれ、昼間のやつなんだよね？前より気持ち悪い……」

「新種の深海棲艦だって紹介されても違和感ないかもな、あれ」

暴走するオリジオンの姿を見て、感想を口にする三日月と江風。確かに気持ち悪い。というかごちゃごちゃしていて悪趣味だ。

オリジオンは周囲に現れた艦娘達を見て、海そのものを震わせるかのような咆哮を轟かせる。江風はあまりの煩さに耳を塞ぎながらも、鎮守府で好き勝手やってくれたオリジオンに対して、臆することなく啖呵を切る。

「うるせえ！だがオリジオンでも深海棲艦でも関係無え！海を荒らすってんなら、どっちもぶちのめしてやりやあい話だろうが！」

「んな乱暴な……一応あれでも人間ですからね？ちゃんと生きて罪を償ってもらわなきゃ」

やる気満々の江風に対し、三日月はあくまで相手は人間だとし、殺さずに罪を償わせることを主張する。そんな2人を後ろの方で見つめるのは、軽巡の由良と重巡の加古。加古はオリジオンを不安そうに見つめる三日月に近づいていき、後ろから背中を叩く。

「まーまー。兎に角提督が無事でよかった。全速力でかつ飛ばした甲斐があつたよな。後はコイツを片付ければ終わりって訳だ」

「そうね。加古さん、準備は？」

「大丈夫だ。古鷹のやつ、こいつの起こした事件の事知るたびに凄く怯えていたからな。ウチの古鷹を怖がらせた代償は高くつくぜ！」

パキポキと指を鳴らしながら、オリジオンを見据える。大事な姉を怖がらせたコイツを、彼女は許せなかつた。実際、さつきオリジオンのことを吹雪から知らされた時、古鷹は凄く不安そうな顔をしていた。そんな顔は見たくないのだ。

6人の艦娘は、海の上に立つ怪人を見据える。深海棲艦でなくとも、海を荒らす存在ならば自分達がなんとかしなければならぬ。吹雪は真剣な表情で、こう切り出した。「時刻ヒトキユーマルマル。これより夜戦に突入します！」

戦闘開始。

薄暗くなつた海を探照灯で照らしながら、目標に接近していく。その動きはさながらスケートでもしているかの様だつた。オリジオン側も、雄叫びを上げながら射角を合わせってくる。

「がらああっ！」

『敵砲撃が来る、回避！』

「言われずとも！」

オリジオンの主砲が火を吹くが、当たらない。狼狽えるオリジオンだったが、発生した水飛沫を突っ切る様な形で、駆逐艦の3人が先陣を切って接近してきた。

「撃てっ！」

「三日月、撃ちます！」

吹雪と三日月が、連装砲を発射する。オリジオンはそれを避けることなく、もろに受ける。理性を失って回避行動さえ取れなくなったのか、それとも駆逐艦ごときの攻撃なんぞ痛くも痒くも無いとでもいいいたいのかは分からない。だが事実として、オリジオンは攻撃を受けながらも砲身を吹雪達の方に向けてくる。

「そっ離れて！」

が、間髪入れずに神通が両者の間に割って入り、至近距離から砲撃を仕掛ける。主砲は発射寸前で射角がずれ、あらぬ方向に火を吹く。もちろん、吹雪達には当たらない。ダメ押しとして、神通は後退しながら魚雷をばら撒いていく。轟音と共に、何本もの水柱が立て続けに上がっていく。どうやら、向こうも魚雷で応戦したが為に、半分以上は相討ちの形で爆発したらしい。

神通達は、一旦オリジオンから距離をとりながら作戦を考える。オリジオンは、彼女達を逃すまいと咆哮を轟かせながらその後を追ってくる。

「おつといかせねーぞ?」

しかし、横から砲撃を受けてフリートオリジオンはひっくり返る。攻撃したのは加古だった。普段の物臭な態度とはうって変わり、その目は獲物を狩る猛獣の目付きだった。

加古はオリジオンの攻撃を的確に躲しながら、敵の探照灯目掛けて機銃を放つ。敵の明かりを絶つのは夜戦の常套手段。オリジオンは視界を確保しづらくなり、加古への攻撃も当たらなくなる。

「鎮守府で好き勝手やってくれたお返しをしてやるぜ!」

加古はそう豪語しながら、主砲を放つ。それはフリートオリジオンの胴体に見事に命中し、発生した炎がたちまち彼の全身を覆っていく。

一方、一旦オリジオンから離脱した神通達は、

「まずはあのごちやごちやした外装を剥がす方がいいかもしれません。あのごちやごちや具合だと、攻撃すれば案外簡単に装備を外せると思いますので、まずはその辺りを中心に狙いましょう」

「なるほど……わかりました!」

「敵魚雷、来ます!」

三日月の警告に従い、一斉に離れる3人。一方、幾多もの水柱が上がる中、江風は果

敢にフリートオリジオンに挑んでいた。

「はっ！この江風サマの出番だな！オラオラかかってこいヤア！」

「そこ！勝手に先行しないで！爆撃来ます注意して！」

夜戦に心躍って先行する江風を諫める由良。それを聞いて江風は航行を止める。すると、江風の真前に砲弾が着水し、爆発を引き起こした。

由良の判断が早かったが為に、水飛沫をもろにかぶりながらも、なんとか被害は最小に抑えられた江風は、改めて艦としてのフリートオリジオンのやりたい放題っぷりに悪態をつく。

「ぶはあっ！無茶苦茶だろコイツ！レ級以上にやつてること無茶苦茶だ！」

「駆逐艦なのか空母なのか潜水艦なのか戦艦なのか……ああまどろっこしい！全部合体させりやいいってもんじゃないでしょうに！」

高角砲を撃ちながら、由良も珍しく声を荒げる。普通、こんなてんこ盛りミックス井みたいなコンセプトの兵器を相手取る機会はないため、余計に鬱陶しく感じる。

しかし、オリジオン自身の実力はそんなに高くない。事実、吹雪達は攻めあぐねてはいるものの、相手の攻撃はただ闇雲に周囲に当たり散らしているだけであり、艦隊への損害はそんなに出していない。つまるところ、折角のスペックを活かしきれていなかった。

「というか、装備がゴタゴタと付きすぎているせいなのかは分からないが、見た目ほど装甲も硬く無いので、吹雪達からすれば、ちよつと厄介だけど放つておいたら被害がえらいことになる面倒臭い敵、という感じに見られていた。」

「アタリイ！」

加古の砲撃が命中し、オリジオンの単装砲が爆発して碎け散る。フリートオリジオンはそれに激怒し、加古目掛けて黒煙を吹き始めている連装砲を構えるが、すかさず江風が接近してそこに攻撃を加えた為に連装砲も壊され、攻撃は不発に終わる。

江風はさらに攻めようとするが、ここでアクシデント。

「ちっ、弾切れか」

弾切れである。オリジオンが無駄にタフだった為に、予想以上に弾薬を消費してしまつたらしい。江風は悔しそうに舌打ちすると、少し離れた位置で、魚雷を躲しながら連装砲による攻撃を続ける吹雪の方に近づいていく。

フリートオリジオンが絶叫する。どうやら、殆どの武装を壊されてまともに攻撃できなくなつたらしい。唯一使える魚雷も弾数は僅か。主機も煙をふいており、徐々にその足は沈みつつあつた。それを好機と捉えた江風は、すかさず吹雪に提案する。

「吹雪、お前まだ魚雷残してるだろ？ならお前が行け。アイツにいいところ見せてやれよ、な？」

「すげえな……パねえ」

アクロスは、吹雪達の戦いの一部始終を見ていた。

この戦いについては、海の上で戦う手段を持たないアクロスは完全に蚊帳の外であり、彼女達に任せる他無かったのだ。

しかし、艦娘達の強さはアクロスの想像を遥かに超えていた。あれは確かに凄い。彼女らのおかげで海の平和が保たれているのも、なんだか納得がいくように思えてきた。

「すごいよな、あれ……」

アクロスはアークワンに話を振ろうと後ろを振り返る。しかし、すでに転生者狩りの姿はどこにも無かった。

とあるビルの屋上。色鮮やかな夜景を一望できる絶景スポットともいえるようなその場所に、ギフトメイカーの面々は集まっていた。屋上の縁から足を投げ出して腰掛けるバルジは、仮面ライダー達との戦いにより満身創痍であったが、彼はそれを気にも留めず、ただ不敵な笑みを浮かべて無言で街を見下ろしている。

そこから少し離れた、屋上階段の近く。そこに、同じくギフトメイカーであるレイラ・レイラ・レドの3人は屯たむろしていた。その中で、初めに口を開いたのはレイラだった。

「今日も駄目だったか。まあ私はハナから転生者には期待していないからな」

「そこは期待しようよ。一応君もギフトメイカーなんだからさ」

「そーいやさあ、今日倒された二人をオリジオンにしたの、レドよね？なんであんな奴をオリジオンに覚醒なんかさせたワケ？ただの性犯罪者でしょ」

レイラの駄目だしにレドが突つ込む一方、レイラがごもつともな意見をあげる。レドはやれやれ、といった感じに肩をすくめながらため息をついた。

「いやーまさか彼処まで拗らせてると思ってもみなかったわ。あんなわかりやすいモブオジサン属性、いるものだね……あー気持ち悪かった！帰ろうか、ティーダが煩くならないうちにね」

「……個人的には、アイツがくたばってくれて清々したが」

「うわーレイラも辛辣う」

ボロクソであった。事実なのだから仕方がない。レイラとレイラも、女性としてはあんな奴は願ひ下げらしい。もつとも、今の彼女達も同レベルな存在なのだ。

しかし一人だけ、満身創痍のバルジだけは違った。彼は品のない笑い声をあげながら、得意げに自論をぶちまける。

「でも、あれくらい欲に素直な奴の方が御しやすいだろう？俺様は結構好きなんだよなあ……ヒヤヒヤヒヤあ！」

「あれは完全に女の敵よ。いくら私でもあれは願ひ下げ」

リイラはバルジの意見をバツサリ切り捨てると、足早にその場を離れる。レドとレイラも、彼女の後につづいて屋上から立ち去っていく。ただ一人残されたバルジは、

「にしても、あの坊主……俺様を殺そうって魂胆か……笑えるぜ。負け犬風情が一丁前に復讐者気取りとか調子乗んなつての。大人しく這いつくばつてろ、死に損ないが」

バルジはそう言うと、ズボンのポケットからあるものを取り出す。それはどうやら、CDのような形をしている。淡い緑色の光を放つそれには『igalima』と刻印されている。バルジはそれを舌でなぞる様に舐めると、邪悪な笑みを浮かべながら、街を見下ろす。

「次は本気でいかないと、なあ？」

オリジオンに変身していた男達は、2人で合わせて強姦殺人に拉致監禁、暴行・公務執行妨害・不法侵入・猥褻などといった罪により逮捕された。夕方の件は普通の深海棲艦との戦いということでなんとか誤魔化した。2人とも反省の兆しが見られないし、そもそも被害者の数が結構多かったので、かなり罪は重くなるだろう。

新聞でそれについて読んでいた潮原提督は、ミルクたっぷりのコーヒーを一口飲み、ため息をついた。それは、なんとか今回も乗り切れたことからくる、緊張が解けたものであった。提督になってから、幾度となく艦娘達を出撃させてきたが、やはり緊張してしまうものだ。そればかりは慣れない。

と、そこに吹雪がやってきた。壁にかけられた時計を見ると、そろそろ仕事に取り掛かるべき時刻だった。

「司令官、そろそろ執務室に向かいましょう。仕事の始まりですよ」

「分かっている分かってる。ほんじゃ、今日もいきみますかね」

吹雪に促されるがまま、空のマグカップと読みかけの新聞をテーブルの上に残し、潮原提督は執務室に向かう。今日も面倒な書類仕事が増山あるのだ。昨日はあまり進まなかったから今日は頑張らなくては、と頬を叩いて眠気を飛ばすと、執務室の扉をあけた。

すると。

「なーんで私を行かせなかつたのさ!!?」 夜戦だよ夜戦!この川内サマを使わないなんてどーゆー了しきき!!?」

「さつきから川内ちゃんこがうるさくてさあ」

「姉をコレ呼ばわりすんのか……」

潮原提督と吹雪が執務室に入ってくるなり、先に来ていた川内が抗議してきた。後ろの方では那珂や江風、瑞鶴が呆れた顔をしている。昨日バルジに艀装を壊されたせいで大好きな夜戦がお預けになったことが、よほど不服だったのだろう。

喚いている川内に、呆れた様に瑞鶴が突っ込む。

「仕方なかつたでしょ。あの化け物に私達の艀装は壊されてたんだから。それとも何、裝備が壊れた状態で出撃して轟沈しずめられたかつた訳?」

「そ、それはそうだけど……」

瑞鶴の正論にたじろぐ川内。たしかにそれは嫌だろう。川内も他の皆も、提督もそれを望んじや居ない。潮原提督は、川内をたしなめながら書類仕事を済ませるために机に向かう。

「過ぎたことを考えてもしゃーなしだ。一件落着だからいいじゃないか、なあ吹雪?」
「相変わらず能天気ですね……ま、司令官のそんなところが好きなんですけどね」

おうおう勝手に惚気の雰囲気出すな、と瑞鶴と川内は吹雪と提督を睨みつける。やる

ならよそでやれ、と言いたくなるものだ。

と、その時、執務室の扉が勢いよく開かれ、なんかキャラのイメージが粉々にぶつ壊れるような表情をした神通が入ってくる。

「川内姉さん、提督！見つけました！今日は私の訓練に付き合ってもらいますよ！」

「手に持つてるマイクロビキニは何?!? 何処から調達したの?!?」

「如月ちゃんから拝借しました！サイズのことは気にしないでください！寧ろキツキツの方がそそるんで。さあ！」

「さあ、じゃないし！そんなん着るくらいなら那珂のファンやめるし！」

逃げる提督と追う神通。昨日と同じドタバタが始まり、吹雪はまたまた頭を抱えることになった。江風と瑞鶴も、呆れ笑いしながらその光景を見つめる。

「出撃時は格好いいし先輩艦娘としては頼りになるんだけどなあ……」

「平和ねえ平和。夜戦馬鹿にはいい薬よ」

「瑞鶴さんエ……」

今日も賑やかに鎮守府は廻る。

それが彼女達の日常なのだから。

数日後

学校に向かう途中、瞬はアラタ達と出会った。

「2人とも無事に退院出来て良かったね」

「おう、欠望アラタ完全復活だぜ！」

オリジオンにボコられたアラタは完全に復帰していた。怪我が治ったことをこれ見よがしに見せつけるように、様々なポーズをとるアラタに、瞬達は呆れながらも素直に怪我がの完治を祝う。

アラタの後ろには、同じく怪我が治った大鳳が。彼女は普段と変わらないように見える。

「もーアラタ、病み上がりなんだからはしやがない」

「別にいいだろ？今日は退院祝いで帰りにファミレスにでも寄ろうぜ！」

「いやそれ普通入院してた側が提案することじゃなくない？」

「それもそうね」

アラタは瞬の方を向くと、深々と頭を下げる。

「逢瀬、ありがとう」

「俺は友達を助けただけ……いや、今回は何もしてねーよ。やったのは……ほら、アイツだよな大鳳」

そう、今回は瞬は何も出来ちゃいない。今回のMVPは舞網鎮守府の皆と、もう一人。「セラ、だったかしら。彼女がいなければ、私はさらに酷い目に遭わされていたわ」

「それにしてもあの子、何だったんだろぅね?」

「ああ……無事ならいいんだけどな」

瞬と唯は、大鳳を救った一人の少女について、想いを馳せながら満天の快晴の空を見上げた。

あの時、大鳳を助けてくれたという、唯に似ている（と何故か感じてしまう）謎の少女。あの後、崩れ去る建物のなかで別れてしまったが、彼女は果たして無事なのだろうか。無事だったら、今度はじつくりと話をしてみたいと瞬は考えていた。彼女には訊かねばならないことが幾つもあるのだ。

「うわ!カラスの糞かけられた!」

「何やってんだよ志村!うわばっちい」

「どうしようどうしよう!」

「いや来ないで……マジで勘弁して」

と、その時。あたりが騒がしくなる。なんか志村がカラスに糞をひっかけられたらし

い。白くべつちやりしたものが思い切りかかっているが、どうするんだ一体。

カラスの糞を頭に落とされパニックる志村をどうにかすべく、瞬と唯は慌てて駆け寄って行く。彼らに続いて向かおうとしたアラタだったが、ふとその足が止まる。そして、遠くなつてゆく大鳳の背中を見つめる彼の心の中に、一つの、強い思いが膨らみ始める。

(俺は……何も出来なかつた)

それは後悔だった。

押し殺していた後悔が、今になって溢れ出してきた。あの時、大鳳を助けられずに彼女を危ない目にあわせてしまった。それは自分が無力だったからに他ならない。

今回は瞬や潮原提督達のおかげで助かったのだが、その事実が余計に悔しく思えてきた。自分は何も出来ちゃいない。大切な人一人さえ自分の力では守れやしない、無力な存在。その悔しさが、少年の心の中で一つの渴望に変化する。

(力が欲しい……大鳳を……大切な人達を守る力が……！)

歯を食いしばりながら、再び歩を進めるアラタ。

少年の心に暗雲が、立ち込め始めていた。

第18話 「俺だってやればできるんだ」

生徒会室にて。

黒い制服に身を包んだ生徒会庶務・人吉善吉ひとよしぜんきちは、目安箱から取り出した投書を開き、中身を確認する。

「今日の依頼は……これか」

「そーだな。2年1組、九瀬川くせがわハル。漫画研究部唯一のメンバー。大方、部員探しを手伝って欲しいと言ったところかな。部活存続の為に、部員三人以上が必要条件だからね。今月中に部員が集まらなければ即廃部だし、焦るのも道理だ」

長々と説明台詞を言ってくれたのは、生徒会書記・阿久根高貴あくねこうき。紆余曲折あつて柔道部から生徒会へと移籍したイケメンである。めだかに憧れて彼も胸元を曝け出しており、校内の女子からは鍛え上げられた胸板がセクシーだと言われている。ちなみに善吉とはしよつちゆう張りあつてるぞ！

「いや待ってくれ。今月中つて……今週いっぱいまで4月は終わりだし、週末からはゴールデンウィークだぞ？無理じゃないかそれ」

「いいや善吉。無理ではない。やるんだよ。それが私達、生徒会執行部だ」

「ははースパルタだあ……僕も負けてらんないなこりや」

弱音を吐いた善吉を諫めるように口を出したのは、生徒会長・黒神めだかであった。

容姿・頭脳・身体能力・地位・金・名誉 エトセトラ ……それら全てを併せ持った完璧超人である。彼女は涼しい顔をして椅子に座って紅茶を飲みながら、善吉から渡された投書に目を通す。

「漫画研究部の部員集めを手伝って欲しい、か。今回は比較的まともそうだな」

「なんでも、現時点で部員が依頼者の九瀬川2年のみのようだな。善吉、此処に任意の部に入っていない生徒のリストを作つてあるから、依頼者への顔合わせの後にそれを元に当たつて欲しい」

「そつちはどうするつもりだ？」

「決まっているだろう。正門前で勧誘だ。下校時間が近いし効果的だろう。善吉は放課後に漫研部室に向かつて欲しい。私は一足先に向かうことにするよ」

そう言うのとめだかは足早に生徒会室を抜けて行ってしまふ。相変わらずの行動力の塊だな、と善吉は呆れ笑いをする。阿久根はすれ違いざまに、そんな善吉の肩にポンと手を置き、同様に部屋を出ていく。

「僕も別の依頼があるからね、それじゃあ頑張りましたまえ」

「あ、おい……行つちまいやがった」

2人がちやっちやと出て行ってしまい、生徒会室に1人取り残された善吉は頭を掻きながら、風に煽られ床に落ちた投書を拾う。

「……あれ？」

善吉は、生徒会室を見渡してみる。部屋の至る所には、めだかが持つてきた花が飾られている。それは普通なのだ。しかし、先程妙な違和感を感じたような気がする。それが何だったのかは善吉には分からないが、少なくとも看過していいものではないような……。

「……まあ、今更何言っただって遅いか。しやーないやるつきやないか」
気のせいだろう。きっとそうだろう。善吉はそう思い込む事に決め、生徒会室を後にする。

色々と規格外の生徒会長・黒神めだか。

今日も張り切って仲間と共に生徒会を執行するのであった。

「え、普通に嫌なんだけど……」

「ですよ。それが普通の反応ですよ。」

話を聞くなり、速攻で断る逢瀬瞬。思わず善吉も相槌を打ってしまふ。

とりあえずしらみ潰しにやっつていこうと、手始めにリストの頭に名前があった瞬の所に来たのだが、こうも即断されると頷く他なくなってしまう。

「いやだから俺は部活動なんてやらないし……てか唯やアラタを待たせるから行かないやならないし……」

「幽霊部員になつてもいいから、せめて入部届くらいは出して下さいよ。去年も出してなかったみたいですね。先生ボヤいてましたよ」

「部活動を強制するなよ……続けられる自信がないんだよ。幽霊部員予備軍が入つたつて迷惑なだけだろ？」

瞬がそう言うのは、こんな理由があつた。彼は中学時代、唯に半ば強引に陸上部に入られたのだが、バリバリの体育会系な雰囲気合わなかつた為に次第に幽霊部員化し自主退部。その時にヘンにサボリ癖がついてしまい、高校では帰宅部になつてしまったのだ。ちなみに理由は知らないが瞬が退部した際に唯も一緒にやめている。

「だいたい最近は何面ライダーになつて色々大変なのだ。部活なんてやつてる余裕がない。」

「本人はそれでもいいつて言つてるみたいなんだ。話くらい聞いてあげてもいいんじゃない」

「？」

「……そこまで言うなら話くらいは聞いてやるか」

「それならこれからその部長と話をしに行くから、ついてきて下さい」

こりや話を聞くだけ聞いた方が早く済みそうだと判断した瞬は、渋々善吉の提案に乗っかることにした。それに話を聞いてしまった以上、このまま無視して帰るのもなんだか気分が悪い。話だけ聞いてやる、後は知らんと決意し、善吉に案内されるがまま歩いていく。

辿り着いたのは、旧校舎に繋がる渡り廊下の手前にある一室。扉には「漫画研究部」と乱雑な手書き文字で書かれた紙が貼られている。2人が扉の前に立つと、部屋の中から声が聞こえてくる。

「おー早い。早速部員候補を連れてきたのですね」

「九瀬川ハル先輩、俺です。生徒会庶務の人吉善吉です。てか扉越しによく分かりましたね」

「九瀬川……確かクラスにそんな苗字の奴いたっけな」

流石に半月近くたてばクラスメイトの顔と名前はだいたい一致してくる。瞬の知っている九瀬川ハルという少女は、いつも教室の隅で1人であるような、ザ・陰キャですと言わんばかりの女の子だ。話した事がないので、それはあくまで主観的なものになる

のだが。

善吉が入室していいかを訊く。流石に文系の部活動ではあまりないかもしれないが、ひよっとしたら中で着替えている最中かもしれないからだ。善吉はこの手の展開のめだか前例を既に経験している為、余計に慎重になつてしまう。

「OK、ベリーOK。入つてきても構いません、私も準備が済んでますので」

中から、マイペースな印象を与える声が応答する。それなら大丈夫だ、と善吉は扉を開ける。そこには。

部室の真ん中で、紺色のスクール水着が煌めいていた。

「え？」

瞬よりも頭一つ分くらい小さなショートボブの少女が、スクール水着にニーソックスというクソみたいにマニアックな格好で机の上に尻を預けている。

善吉ともども困惑していたが、2人ともやつぱり健全な男子高校生であることには変わり無い為、顔を赤くして彼女から目を逸らし、回れ右してこの場をさろうとする。

「……帰ろう」

「いや待つてくださいお願いします何にもしませんけど！」

「いやだって、スク水って着てるとめっちゃ気持ちいいし興奮しますし、何より可愛いじゃないですか！女子たるもの、自分の可愛いと思う心を大切にしなければいけないと私は常日頃から思ってる訳ですって」

「いやだからって常時着用してる馬鹿はお前くらいしかいねーよ。てか制服着てくれ。俺らまで変な目で見られる」

「なんでそんな事する必要があるんですか（正論）」

「暴論でしかないわたくわが」

その後もスク水ニーソ姿のまま、平然とスク水について熱弁するハルに対し、瞬も善吉も冷めた目を向けるしかなかった。というか、それ以外にどうしろというのだ。

というか、これが幻覚ではないという事実がおぞましい。てつきりマイペース文系女子だと思っていたのが、ガチでやべー変態だったというギャップに二人は打ちのめされていた。本人は全く恥じらっていないようで、今の自らの姿を年頃の男子二人にこれでもかという程見せつけてきている。そもそもの話の趣旨が完全に行方不明になってる

有様だ。

「貴女もスク水ニーソつて興奮しません？」

「話逸らさないの。てか廃部の危機じゃなかったっけ？この調子じゃ潰れていいんじゃないですかねこれ。というかその方がいいんじゃないかと思ってるんだけど、別に間違つてないよね？」

「それは困ります！早くなんとかしなければ……後一人は入りますね、部員。その黒髪の人が入部決定としても、当てがないんですよね」

「いや俺入るって言つてないんだけど。それにスク水姿のまま話進めようとするんじゃないよもう」

勝手に入部確定されてた瞬。なぜ自分の周りの人は、こうも人の話を聞かない奴ばかりなのだろうか。コミュニケーションというものに対する認識がどつかズレてるのか思えない。

とうにかさつきからスク水が気になって仕方がない。ハルは別段スタイルがいい訳ではないのだが、それでも健全な一男子生徒にとつて、クラスメイトの水着姿は凄まじい劇物なのだ。おまけにそれを臆することなく見せびらかしてくるのだから、瞬と善吉の逃げ場はどこにもなかった。

このいかがわしい雰囲気なんてかせねばと、頭をフル回転させる善吉。すると、あ

「10年以上前のライトノベルみたいなのりはよせ！てかそんな格好でアンタ少恥ずかしくないのかよ？」

「いや……昔から露出癖があったからなあ。てかその服、何処から調達したんだ？」

「私の私物です。買ったのはいいんですが、胸周りのサイズが合わなかったものでどうしたのかと思ってたのですが……」

「ええ……」

瞬達の後から付いてきたハルが補足説明をする。流石に水着のまま外に出るような真似はしなかったらしく、ちゃんと制服に着替えてきている。

その時、ハルのスカートのポケットから何かがヒラリと落ちる。ハンカチかな？と思いつつ、瞬達はそれを拾い上げる。が、なんか違う。ハンカチにしては変な形だし妙にヒラヒラしてるし

「あら大変。パンツ落としてしまいました」

「フアツ？」

ハルのカミングアウトに動揺した瞬は、慌てて手に持ったパンツをその場に投げ捨てる。いや待て、ここにパンツがあるということは、必然的にハルは今履いていないということになるのだが、それは大丈夫なのだろうか。

と、そんな瞬の疑問に答えるように、ハルはスカートをたくし上げ、その中を見せつ

ける。そこにあつたのは肌色の秘部ではなく、紺色の布——要するにスク水だった。

「安心してください。下にスク水着てるので」

「何にも変わってねえ！ただ着込んだだけじゃねーか！一体何がお前をそこまでスク水に入れ込ませてるんだ？！」

瞬は思わず頭を抱えてしまう。まさかここまで変態だったとは。この学校の風紀は大丈夫なのだろうか。顔を上げると、善吉も瞬と同じように呆然としている。それを見た瞬は「よかった、この人はマトモだ」と妙な安心感を抱いてしまう。

と、そこによく知ってる顔どもが現れた。

「何してるの瞬」

「逢瀬くんじゃないか。遅いから迎えに来たよ」

「俺と大鳳の退院祝いにファミレス奢る約束はどうしたんだよ」

「馬鹿が釣れた……」

先に行っていたはずの唯達が、中々やってこない瞬を心配してこちらに来てしまった。要するに、なんだかんだでいつもの面子が揃ってしまったのだ。

「で、何なのこれ。どんなプレイ？」

「生徒会長さんをバニー姿にして、一体どんな羞恥プレイよ？」

どこをどう解釈したらそうなるんだ。勿論、瞬には見ず知らずの他人をバニーにして侍らせる性癖はない。変な勘違いをしている女性陣に、事情説明を兼ねて必死で弁解し、なんとか誤解を解く。

事実を粗方理解した唯は、数秒ほど腕を組んで考えた後、こんな事を宣のたまい始めた。

「なるほど、なら皆で入部しようか」

「だからなんで俺を巻き込む訳!!?」

「瞬と一緒にならどこでもオツケーなのだよ私はね!」

「適当オブ適当だよなお前!」

瞬は説明したことを軽く後悔した。お人好しの唯が潰れかけている部活動を放って置ける訳無いと分かっていたのに、だ。

「それは有難い。あ、技術面に関しては問題なく。私がばっちり指南しますので」

「アラタ達も入ろーよそうしよーよ?」

「悪いようにはしません。皆私がスク水の道に導いてしんぜよう」

「マンガじゃねーのかよ!!? てかそれなら漫研じゃなくてスク水研にでも名前変えてしまえ!」

もうその方が本人にとっても幸せなんじゃないだろうか。

瞬はあまりの馬鹿馬鹿しさに、完全に投げやりになっていた。

「これぞ青春、だもんな」

「オッサン臭い事言うなつての。お前も十分若造だろーが」

そんなバカ騒ぎを眺めながら、みよーにオッサン臭い台詞を口にするアラタ。

その傍らで、ハルが新たに通りすがりの学生に声を掛ける。

「おーいその貴方、漫研に興味なーい？」

「へえ、漫研かあ」

意外にもすんなりと勧誘に乗って来た。白い髪の毛の、温和そうな少年だ。というか、制服スク水姿の変人の勧誘にあつきり応じちゃう時点で、彼の将来が不安になる。

少年は、バニー姿のめだかを見て一瞬びつくりしたような顔をした後、彼女の持つていた勧誘用のピラを遠慮がちに受け取る。

「生徒会長さん……ですよね？その格好は一体……？」

「ちよいと頼まれて勧誘を手伝っている。どうだ、貴様も入る気はないか？」

部活の勧誘のためにバニースーツ着てる美少女なんか普通はいねーよ、と心の中で突っ込む善吉。いや確かに映える絵面だけでも、だとしてもシチュエーションが全然合っていないと思うのは間違いではないはずだ。

ピラを受け取った少年はというと、刺激的なめだかバニーから目を逸らしながら、勧誘に対する答えを述べる。

「えーっと、そうですね……なら、ひとまず見学させてもらえないでしょうか。僕はもう2年ですけど、部活選びは失敗したくないですからね」

「見学つっても、まともな部員はこの変態だけだぞ」

「え、貴方は違うんですか。てつきり皆さんそうなのかと……」

「その通りだよ、私は漫画研究部副部長の諸星唯さー！」

どうやらハルの中では瞬の入部は確定事項らしい。唯に至っては、勝手に副部長に就任してる始末。さらに他の面々も、どうやら入部の方に気持ち傾いてきている模様。

「アラタ、どうするの？ 私は面白そうだなーって思うんだけど」

「一度はクリエイター側の立場に立ってみたいというのも分からなくもない。俺的には異論はないぞー！」

「文系の部活なら、僕も邪魔にならないかも」

あ、コレ逃げ場無くなったわ。そう判断した瞬は、無駄な足掻きをやめて大人しく勧誘を受け入れる事にした。

「あー分かったよ。俺も入ればいいんだろ」

「それじゃあ僕達はこれから皆仲間ですね。僕は無束灰司^{むつかはいじ}。宜しくお願ひしますね、逢瀬くん」

「お、おう宜しくな」

灰司と名乗った少年は、瞬に握手を求めて手を差し出す。途中から勝手に事が進み、半ば蚊帳の外になっていた生徒会の2人も、ひとまず依頼が片付いた事に安堵する。

「うむ、これにて一件落着だな！」

「今回あんまり俺達の出番無かったな……まあそれが一番いいんだらうけど」

その時、学校のチャイムが鳴る。善吉はそれを聞いて右腕につけられた腕時計を確認する。

「あ、そろそろ次の依頼人の所に向かわなきゃならねーな。悪い、俺はここでいじまお暇させてもらうぜ」

「私もだ。諸君らも学園生活を存分に満喫してくれ。では！」

「あ、後でそのバニーは返してくださいねー」

めだかは別れの挨拶を済ませると、バニー姿のまま目にも留まらぬ速さで去っていつてしまった。生徒会って忙しいんだな、と思う反面、ずいぶんと強烈だけどアレでいいのかね、と不安に思う瞬なのであった。活躍は噂に聞いていたが、実際会ってみると色んな意味でインパクトが濃い人物だった。

めだかと善吉が居なくなつたのを確認したハルは、瞬達の方を向いて興奮気味に言う。
「早速部室に参りましようか。スク水の素晴らしさとマンガについてレクチャーしま

しょう！さあカモンです！」

「おう！私は絵心はないけど情熱はあるよ！」

「お茶汲みぐらいなら任せてよ！」

「賑やかでいいですよねえ。僕こういうの初めてなので楽しみなんですよ」

なんか成り行きで入ったけど、どいつもこいつもこんな調子で大丈夫なんだろうか、この部は。唯は情熱が空回りしそうな雰囲気ピンピンだし、志村は聞いてて可愛そうになつてくる事言つてるし、ハルに至つては事あるごとに性癖押し付けてくるし。

どこかズレた情熱片手にはしやく皆を見ながら瞬は、活動が始まる前から不安になるのであった。

誰もいない学校の屋上から、レイラは瞬達を見下ろしていた。長い軍服の裾と銀の髪が、春風に靡いている。

何を思つて瞬達を見ているのかは定かではない。その赤い瞳には、果たして何を映しているのだろうか。

「やあ、相変わらず無愛想だねえ」

レイラの後ろから声がある。声を掛けてきたのは、彼女と同じギフトメイカーのレドだった。まだ春だというのに、アロハシャツを着ている姿はかなり浮いている。レイラも内心「センスねーなこのガキ」と思っていた。

飴玉を口の中で転がしながら、レドはレイラの隣に立つ。

「……レドか」

「ティードが煩いんだ。君の仕事っぷりを監視しろってね」

「ならレイラと一緒に居させろ。私が何の為にギフトメイカーになったか、知らない訳ではないだろう」

「ならちゃんとギフトメイカーとして働いて、信頼を勝ち取らなきゃ。信頼こそ人間社会を作る基盤じゃ無かった？」

強情なレイラを諭すように、レドは優しい口調で語りかける。しかし、レドの金髪にピアスにアロハシャツという、いかにもチャラ男ですと言わんばかりの風貌が、その台詞から信頼感を根こそぎ奪い去っているように思えるのは気のせいではないだろう。

レイラもそう思ったのか、レドを鋭く睨みつける。その赤い瞳は、恐ろしいほどに濁っていた。

「……化物の癖に」

「酷いなあ。皆化物みたいなもんじゃないか。神さまからの贈り物で好き勝手してる、

人でなしの同類だよ」

レドは自嘲の籠った笑みを浮かべながら、レイラの肩に手を回す。レイラは露骨に嫌そうな顔をしてそれを振り払うと、レドから距離を取る。

「私だけ仕事ぶりに関しては心配するな。今回は私が出る」

「え、君自らが行くのかい？」

自ら先陣に立つ事を宣言したレイラに対し、レドは意外そうな顔をする。レドやテイダ、バルジやレイラレイラ姉妹の他にもギフトメイカーは存在するが、ギフトメイカーはどいつもこいつも傲慢な奴らの集まりであるが故に、基本的にはあまり戦場には立たない。中には戦闘狂のバルジや超絶刹那的思考のレイラみたいに、先陣に立つような奴もいるっちゃいるが、大抵は実力行使はオリジオンに一任しているのだ。

それに、レイラはギフトメイカーの中では新参者。だからレドは彼女の事を知らない。故に、レドは驚きをあらわにしながらも、後輩の仕事をみるいい機会だと判断し、若干誇らしそうな顔になった。

「ま、頑張りなよ成功すれば、君の望みが叶うかもよ？」

「心にもない事をほざくな。本当は望んでいないくせに」

レドの励ましを無下にし、レイラは屋上から出ていく。一人残されたレドは、手に持っていた飴玉の包み紙を屋上から投げ捨てると、レイラの後に続いて屋上を出ていっ

た。

「食えない奴。ま、それくらいなきや僕らの仲間には務まらないか」

阿久根高貴は、校内のとある一室にいた。やけに薄暗く、荘厳な雰囲気のある部屋。一目見ただけでは、ここが学校の中だとは誰も思わないだろう。

そして阿久根の前に座る一人の少女。彼女の名は支取蒼那しとりそうな。この学園の3年生であり、彼女もまた、学園では指折りの人気を誇る美女である。そして——黒神めだかという一異常《アブノーマル》が居ない他の世界なら、生徒会長になっていた筈の人物である。

彼女の横に使用人の如く控えているのは、匙元士郎さしげんしろう。なんか柄の悪そうな少年だ。蒼那の人気は阿久根も耳にしている。おそらくこの少年もまた、蒼那の取り巻きみたいなものなのであろう。

阿久根は蒼那の方に視線を戻すと、ポケットから一枚の紙切れを取り出し、テーブルの上に置く。

「こんなものが目安箱に入っていた」

目安箱とは、めだかが生徒会長に就任した際に作り上げたものであり、これに悩みを書いて投入すれば、生徒会執行部が全力で解決に臨むというシステム。人の為に生まれてきたと豪語するめだからしい制度といえる。

それに入っていた投書を、阿久根は広げて2人に見せる。それに書かれていたのは、
悩みではなく

「脅迫状、か？」

その紙には、「貴様は生徒会長に相応しくない。我が天誅を下し、あるべき道をしろ示す」と書かれていた。誰がどう読んでもその内容は、生徒会長に対する脅迫としか読めなかった。

「因みにめだかさんには言っていない。本人が知ったら気にするどころか、むしろ迎え撃つ気満々になつちやうからね。まあ実際返り討ちにできるんだけど、だからといって俺は見過ごせない。だからこの件は俺一人で片付けたいんだよ」

「で、最初に来たのが俺達の所か。疑ってるのか？」

「可能性の高いところから潰しにかかるのが常套じゃないかな。なんせ支取先輩は、生徒会選挙でめだかさんに大敗しちゃったんだからね。動機はいくらでもある筈だよ」

そう。普通なら負ける筈の無かつた選挙に、彼女は負けた。

黒神めだかは生徒支持率98%、容姿端麗・成績優秀・運動神経抜群（というレベル

じゃない)・お金持ち エトセトラ e t c : … : …ともかく、色んな意味で常識はずれな存在だ。が、出る杭は打たれるのが世の常。彼女に嫉妬するものも出てくるのも自明で有る。

例を挙げるなら、彼女に生徒会選挙で負けた者。阿久根が生徒会に入る前のことが、生徒会選挙でめだかに負けた生徒が、めだかをボコろうと計画していたことがあった。まあその時は本人は「下剋上すんなら受けて立つ！」というスタイルだったし、計画自体も善吉が潰したのだが。

というか、めだかをよく知る阿久根や善吉からしたら、めだかに脅迫状送りつけるなど、無謀にも程があると思えない。よっぽど自信があるのか、かなりの馬鹿なのかはさておき、現に脅迫状はきている。だから、念を入れて阿久根はここに来た。大好きなめだかにたかる害虫を払い除けるために。

「そんな真似したらソーナ先輩に迷惑がかかるだろうが。やるわけねーだろ」

匙はそう吐き捨てると、阿久根を睨みつける。

「過去の勝敗にみつともなくしがみつくほど、下賤な人間ではありませんので。そもそも、脅迫状送るくらいならばリコールをすればいいのに。校則でも認められてますし、私だつたらきつとそうします」

次いで蒼那も否定する。彼女の言う通り、校則で生徒会長に対するリコールが認められているのだから、仮にめだかが気に入らなくても、脅迫などせずとも済む話なのだ。そ

れにも関わらず脅迫という手を使ってきたからには、犯人はかなりめだかを憎んでいると思われる。だからこそ、阿久根は自分が思いつく限りで、めだかを憎んでそんな人の元を回ろうとしている。

蒼那は真剣な表情で阿久根を見つめる。阿久根は、少し頬を緩めて言う。

「分かりましたよ、多分貴女は違う。そんな顔をするような人が、姑息な手を使うとは思えない。勘ですけどね」

「勘、ですか。いいのですか？もし私達が犯人だとしたらどうするのでしょうか？」

「多分めだかさんも、過程は違えど同じような結論に至りますよ。それにその質問は愚問です。犯人だとしても、俺達生徒会が改心させてみせますので」

きっぱりと、そう言った。

「疑ってすまなかつた。だいぶ邪魔してしまつたみたいだし、そろそろ失礼するよ」

蒼那達に一礼すると、阿久根は部屋を出ていく。閉まつた扉を見ながら、匙は不服そうな顔をして悪態をつく。

「何だつたんすかねアイツ。何も知らないで……誰が昼の学園の平和を守ってるってんだ」

「匙、そんな事は言わないの。私達が悪魔として学園の秩序を守っていることなど、彼らは知る由ないのです」

そう。彼女達は人間ではない。

その正体は、悪魔の中でも上級に位置するシトリー家に連なる者たちである。支取蒼那——ソーナ・シトリーは、シトリー家の次期当主であり、グレモリー家と分担してこの学園を裏から支配しているのだ。そして匙はソーナの眷属。まだ悪魔になつて日の浅い転生悪魔だが、ソーナに対する忠誠心はかなり強い。

「それもそうか。しかし難儀だよなあ……本来は生徒会を隠れ蓑にするつもりだったんですよね？それがあの生徒会長のせいでおじやんになつて悔しくないんですか？」

「悔しいかと聞かれればそうですが、黒神めだかを含め、この学校の13組は三大勢力^{わたしたち}以上の癖者揃い。彼らを侮るべきではないでしょう。出来れば此方側に引き込みたいのですけどね……」

「この学園魔鏡過ぎんだろ……俺悪魔としてやってく自身無くしそうつすよ」

ソーナの話聞き、気が遠くなる匙。確かに、この学園には良くも悪くも常人離れた奴が沢山いるとの噂だ。これから先、悪魔としてこの学園で生きていくのは前途多難。匙はあらためて、この世界の混沌つぷりを呪うのであった。

阿久根高貴は、部屋を出て一人で廊下を歩いていた。辺りに人はいない。

「……」

ゆらりと、その後を追う影。足音をどうにかして消しているのかは知らないが、あたりに響く足音は一人分のみ。右手に金属バットを持ったその人物は、阿久根にひっそりと、かつ着々と近づいていく。

(まずはお前から、消えてもらう……！)

目標まで後わずか。勝利を確信したその人物は、意気揚々と阿久根の後頭部にバットを振り下ろす。

——それが無謀な試みだとも知らずに。

バッドが振り下ろされる瞬間、阿久根はぼつと振り返り、その人物の右側の襟と袖ががっしりと掴む。阿久根はいつもと変わらない、涼しい表情のまま、襲撃者に問いかける。

「危ないな君。一体何のつもりだ？」

「ちっ……！」

白い仮面を身につけた男子生徒だった。彼は阿久根の腕を振り解こうともがくが、同じ側の襟と袖を掴まれてしまっている為振り解けない。

そして阿久根は、そのまま鮮やかな一本背負いを男子生徒に叩き込む。ドタンと大きな音を立てて、サナトリウムの床の上に背中から倒れる少年。手に持っていた金属バットは音を立てて落ち、廊下の隅へと転がってゆく。

「もう排除しに掛かるなんて、意外とせっかちなんだな」

「煩い……煩い！ イレギュラーは消えろよお！ 異端滅殺、正常普遍、英雄行為い！」

《KAKUSEI SURFACE》

阿久根に投げられた男子生徒は喚き散らしながら、木製のデッサン人形のような姿をした怪人へと姿を変える。そして、金属バットを拾って阿久根目掛けてぶん投げてきた。

阿久根はこれに驚きながらも、咄嗟にしゃがんでバッドを回避する。避けられたバットは、そのまま窓ガラスを突き破り、ガラスの破片共々中庭に落ちていった。怪人——サーフィスオリジオンは、阿久根に殴りかかるも、阿久根は咄嗟に腕でガードする。

その時だった。

「なんだ今の音？」

「なんか暴れてるみたいだったけど……見に行こう！」

今の音を聞いたのか、誰かが阿久根の背後にある階段を駆け上がってくる。その足音を聞き、オリジオンは動きを止める。やってきたのは、なんかパツとしない癖つ毛の黒

髪の少年 —— 逢瀬瞬と、その仲間達であった。

「あれは……新手のオリジオンか！」

「あの人、生徒会の阿久根さんじゃ……危ないから離れて！」

「君たちこそ離れるんだ！」

阿久根と唯が互いに対して逃げるように促す中、サーフィスオリジオンは、目標を阿久根から瞬へと変えるかのように向きを変える。

「目標変更。新規対象、仮面ライダーアクロス、抹殺開始」

そして、瞬達のいる階段の踊り場目掛け、階段の最上階から飛び降りて来た。

「こっちに来る……!?？」

「と、兎に角逃げましょう！まずいですよこれえ！」

初めて見るオリジオンに動揺を隠せない様子 of ハルと灰司。瞬は皆に逃げるようにいいながら、クロスドライバーを装着する。オリジオンは瞬の真横に着地するなり。瞬の頬を殴り飛ばした。

瞬はよろけて壁に手をつきながら、アクロスライドアーツをドライバーに装填する。そして、サーフィスオリジオンのパンチを避けながら、ドライバーを操作してアクロスに変身する。

「変身っ！」

《CROSS OVER! 力を、思いを、世界を繋げ! 仮面ライダーアクロス!》

変身完了したアクロスは、此方に殴りかかろうとしてくるオリジオンのパンチを両手で掴むと、思い切りオリジオンを投げ飛ばした。

投げられたサーフィスオリジオンは、一気に階段の一番下まで落下し、一階の廊下まで転がってゆく。アクロスはオリジオンを追おうとするが、オリジオンは起き上がりながら、口から黒い気弾のようなモノを放ってきた。アクロスはそれを避けるが、気弾の当たった踊り場の壁が抉れ、外の景色が丸見えとなってしまう。

「絶対抹殺、完全勝利、蹂躪制覇あ!」

「ここにやろ……学校壊す気かお前はっ!」

周囲への被害などお構いなしに攻撃をしてくるオリジオンに怒りながら、アクロスは階段の踊り場から一気に一階の廊下まで飛び降り、落下の勢いを上乗せした拳でサーフィスオリジオンを殴り飛ばした。顔面ど真ん中どストレートを殴られたオリジオンは、背面の出入り口を介して情けなく中庭まで飛ばされてゆく。

中庭の芝生の上にサーフィスオリジオンは腹を打ち付けられる。それでも彼はまだ挑む。自身に向かってきたアクロスに対し、何処からか取り出した金槌を投げつける。生身の人間なら即死しかねない攻撃だが、アクロスはスライディングでそれを避け、更にオリジオンを蹴飛ばす。

「テメエ、汚ねえぞ！非難轟々、正々堂々、真剣勝負！」

「闇討ちしかけて返り討ちにされた君が言ってもなあ」

アクロスを非難するサーフィスオリジオンの言動を、唯達と共に安全地帯に避難して戦いを見ていた阿久根が突っ込む。先程まで襲われていた人とは思えないくらい冷静な発言である。

そしてハルの方は、アクロスとオリジオンの存在そのものに興味津々の様だ。その結果、ギャラリーの中で一番アクロスに精通している唯に、皆の疑問が殺到してゆく。

「アレって何なんですか？なんか特撮モノみたいな展開になってますけど……」

「そういえば、私はまだアクロスについて碌に説明して貰ってないんだけど、私にも教えてくれない、唯？」

「話せば長くなるんだけど……いいの？」

こう言っているが、実のところ唯も答えられない。

確かに、アクロスについては碌な説明が為されていない。唯にとつても、あのフィフティとかいう信頼可能な要素が皆無の怪人物から渡された力、くらいの認識しかない。力を与えた本人がちゃんと説明すべきだと思うのだが。

気を取り直し、唯達は再び観戦に集中する。サーフィスオリジオンは、何処からか鋸のこぎりを取り出すが、振るう前にアクロスに蹴飛ばされ、中庭の端の方まで飛んでいく。先程

中断させ、二人揃って何も出来ずに地上に落とされる。

着地と同時に受け身をとって両者は立ち上がり、取っ組み合った状態のまま校舎の壁に激突する。

「うんぬっ！」

アクロスは頭突きでオリジオンを怯ませると、ガングニールを突き飛ばした後には体当たりを仕掛ける。しかしガングニールはそれを受け止め、さらにそこに、後ろからサーフィスオリジオンがアクロスの背中を殴りつける。

「俺を忘れてんじやないぞ！卑怯上等、勝者絶対、完全有利い！」

「くっ……離せっ！」

アクロスはガングニールの拘束を振り払おうとするが、がっしりと掴まれていて抜け出せない。そんなものがくアクロスに、これ幸いとサーフィスオリジオンが殴る蹴るのやりたい放題をかましてくる。さっきまでやられてきた鬱憤をこの期に晴らしてやる算段らしい。

このままでサンドバッグもいいところだ。なんとかしてこれを打破しなければならぬ。アクロスは焦り気味にもがくが、拘束を振り解けない。

その時だった。

突然、校舎の窓ガラスが割れ、そこから何かが落ちてきたのは。

ちよつと前

「やつと解放されたあ……」

「イツセーさん、災難でしたね」

へろへろになりながら教室から出てきた一誠に、アーシアが心配してかけよる。

なぜ彼がここまで疲弊していたのかというと、エロ本持っているのが風紀委員にバレて、松田や元浜と一緒に先程まで説教（物理）されていたのだ。最近の風紀委員は凄く厳しいとは話には聞いていたが、予想以上の厳しさに打ちのめされた一誠は、力なくアーシアの胸に顔を埋めるように倒れ込む。

勿論クツションにされた側のアーシアは、恥ずかしさで声をあげる。だがあんまり嫌そうには見えないのは気のせいだろうか。

「ひゃいつ!? イ、イツセーさん!? これは……そのう……」

「風紀委員厳しすぎねえか……特にあの一年生！めっちゃ怖い！メリケンサックと手錠がトラウマになりそうだよ！」

「あー鬼瀬さん……彼女の過激っぷりは有名ですからね。まあ自業自得です。それこんな場所で女子の胸に顔うずめてたら、また風紀委員にドヤされますよ。まあ私的にはむしろざまあみやがれ、といった感じなんですが」

「イツセーさん……この体制のまま喋らないでください……くすぐつたい、です」
「……」

一誠はここでようやく、自分が何にもたれかかっているのか気づいたらしい。どうやら疲れからか、無意識のうちにやってしまっていたようだ。一誠は慌ててアジアから離れ、戒めの意をこめて壁に自らの頭を打ちつける。

（俺はなんて事を……これじゃあ神様仏様に顔向けできねえ！）

いや日頃からエロい事ばつかな時点で今更だし、悪魔になっている時点で神や仏に顔向けは不可能だろう、と小猫は思わざるを得なかった。同じ眷属仲間としては多少は当てにしているが、人（悪魔）としては正直言つて尊敬はできない、というのが小猫の一誠に対する評価だった。

一誠のスケベっぷりに呆れたようにため息をつきながら、小猫は2人に早くオカ研の部室に行くように促す。

「行きましょう、部長達が待っています」

「そうだなー。てかアジアはともかく、なんで小猫ちゃんまで俺を待つてくれたん

だ？」

「偶々私も遅くなっただけです。そしたらここでアーシアさんが待っているのが見えて

——」

そう言いかけて、塔城小猫はふと立ち止まった。

「どうしたんですか、一体……」

「小猫ちゃん？おーい何か見つけたのかよー？」

共に歩いていた兵藤一誠とアーシアは、突然立ち止まった小猫に対し、怪訝そうな顔を向ける。

「この妖力の感じ……同族？」

そう呟いた小猫の身体に、猫耳と猫の尻尾が顕となる。これが彼女の正体、猫妖怪である。悪魔であり妖怪である彼女は、このようにして妖力を操ったり感知したりする術を有していた。

「は、え？小猫ちゃんの同族ってことは……」

「近くにいますってことですよ、猫妖怪が」

妖怪が、この学園に。その可能性に至った3人は、即座に戦闘態勢を取る。グレモリーの管轄下であるこの街に、外部の人がいるということは普通ではない。その正体がなんであるにせよ、警戒せざるを得ないのだ。

「妖怪かあ……女の子だったら嬉しいよなあ……」

「少しは欲望を隠そうという気概は見せないんですか？」

「移り気は厳禁ですよ、イツセーさん」

軽口を叩き合いながらも、慎重に辺りを見渡す。すると、彼らの耳に、何者かが戦っているかのような音が聞こえてくる。音は下の方——中庭から聞こえる。

一誠は廊下の窓から、音がしている中庭を覗き込む。そこには、2体のオリジオン相手に戦うアクロスの姿があった。

「あ、あれって……アクロス！」

「この間の奴と、アレははぐれ悪魔……なんででしょうか？」

アクロスの正体とオリジオンについてはよく知らない小猫は警戒心が強く、様子見に徹しようとする。しかし、アクロスの正体を知り、共に共闘までした一誠の方は、すぐに加勢に入ろうと窓に手をかける。しかし、窓が中々開かない。

「助けに行かないと！ぐぬぬ……建て付けが悪くて窓があかねえ！」

「勝手な行動は厳禁……」

「んな事言ってる場合じゃないだろ！俺は助けに行く。ダチ兼命の恩人を見捨てるような人でなしにはなりたくねえからな！悪魔だけど！」

いつもの一誠からは想像もできない真剣な表情を見て、小猫は呆れたように言う。

「はあ、分かりましたよ。どうやら感じた気配はあの怪物のうちのどちらかからしているようですし、どの道放置しておくわけにもいけませんからね。先輩、倍化をお願いします」

「もうしてるさ！いつでも譲渡は可能だ！」

《boost!》

そう答えた一誠の左腕に、赤い籠手が出現する。ブリステッド・ギア 赤龍帝の籠手。所有者の力を倍化し続ける、二天龍の片割れの魂を宿した神滅具。ロンギヌス 一誠を特別たらしめるもの。

だが、今回はそれを自分にではなく小猫に対して行う。倍化した力の譲渡。赤龍帝の籠手は、そういった芸当も可能なのだ。

《transfer!》

「このまま窓をぶち破るしかねえ！すみません先生方！」

階段を下る時間が惜しい。だがしかし、ピンチになっっている友達を手をこまねいて見ている訳にはいかないのだ。倍増した力を受け取ってパワーアップした小猫が、妖力を纏ったパンチで窓を突き破り、そのまま落下攻撃に移行する。

「その貴方、下がってくださいい！」

「うぬぎゃああああああっ!!?」

硝子の雨と共に、小猫とオリジオンが落下してゆく。

その下は――

そして現在。

「その貴方、下がってくださいい！」

「うぬぎやあああああつ!!？」

なんかガラスが割れたような音がしたと思ったら、女の子がガラスの破片と共に降りかかってきた。

「痛い痛い痛いー！」

ガラスの破片とともに降ってきた小猫に、思わず叫んでしまうアクロス。変身していても正直言って痛いし、変身していなかったら今頃全身血まみれである。

そんな事はお構いなしに、小猫は妖力を纏ったパンチをガングニールの脳天に叩き込み、バツク宙をして着地する。なんだかんだで拘束の解けたアクロスは、散々自分をサンドバッグにしてくれた目の前のサーフィスオリジオンに、お返しとして渾身の右ストリートをお見舞いする。

なんとか解放されたアクロスは、ガラスの降ってきた上を見上げる。すると、割れた

窓から顔を覗かせていた一誠と目が合う。

「すまねえ！大丈夫か？？」

「助けに来たのか殺しに来たのかどっちなんだよ！」

「俺達も加勢するぜ！とりやあああつ！」

「馬鹿こつちに落ちてくんじやドバア？？」

アクロスの抗議を無視して、一誠は割れた窓からこちららに向かつて飛び降りる。結果は単純明快。アクロスが落ちてきた一誠の下敷きになってしまった。仮面ライダーと悪魔だったからギャグで済んでいるが、普通の人間だったら仲良く御陀仏である。

「何やってんだあれ……」

「野郎同士でやるような展開じゃ無いですよねーあれって」

一連の流れを見ていたアラタとハルも、ぐだぐだな2人の様子に思わず失笑してしまう。小猫も、表情からは分かりにくいのが、若干怒り気味に2人に声を掛ける。

「何やってるんですか貴方達は。この怪物をどうにかするんでしよう？なら早く戦ってください」

「あ、はい……」

気を取り直し、一誠とアクロスは戦闘体勢に入る。一誠達が GANG ニールを抑え、アクロスがサーフィスをどうにかする算段だ。

ガングニールは知性を感じさせない唸り声を上げ、小猫に殴られた脳天を摩りながら立ち上がる。サーフィスも壁に手をつき、息を切らしながらも金槌を構える。

「再び共闘と行こうじゃねーか、瞬！」

「そっちは任せたぞ、一誠！」

四者が走り出す。

サーフィスは、自身に向かってくるアクロスに対し、金槌を振り下ろす。しかし、アクロスはそれを予知して足を止める。結果として、金槌はアクロスに当たる事なく、その手間の空間を通過するだけに終わる。

すかさずアクロスが、金槌を持つサーフィスの手を蹴り上げ、振り下ろされ切った金槌をその手から落とさせる。そのまま、アクロスのローリングソバットを顎に受け、サーフィスオリジオンは壁に打ち付けられる。

「邪魔、するな……世界修正、改変阻止、賞賛行為……」

「人襲つというそりやないだろ……とりあえずお前を大人しくさせて、なんで阿久根あのひとに襲いかかったのか問い詰めてやる！」

一方、ガングニールと対峙することになった一誠。

一誠は赤龍帝の籠手の力で倍化をしながら、ガングニールを殴りつける。しかし、まだ倍化が始まったばかりでパワーが足りていないためか、あまり効いていない。一誠の攻撃に怒ったガングニールは、首元のマフラーを触手のように伸ばし、それで一誠を叩く。

「まだまだこれからあー！」

《Boost!》

倍化2回目。まだまだ余裕はある。一誠はもう一度、ガングニールオリジオンの肩を殴る。それでも足りない。返しに顔面に頭突きを食らわされ、一誠は鼻血を散らしながらよろけて後退する。

『黒い龍脈』つー！

何処からかそんな声がしたかと思えば、まるで唐突に、力が抜かれたかのようにガングニールオリジオンの体勢が崩れ、攻撃が逸れる。そして、膝をついたガングニールオリジオンの顔面に、倍化によって更に強化された一誠のパンチが炸裂する。

吹っ飛んで背中から倒れるガングニールオリジオン。対して一誠は、今の現象に対し、あることに気がついた。

「今のは……セイクリッド・ギア神器^{!!?}?」

神器を持つ何者かが、自分を助けてくれた。しかし、一体誰が。

困惑する一誠の耳に、若干チンピラじみた声が聞こえてくる。

「何やってんだよ……学校のど真ん中で!ちったあ隠そうという気はねーのかよおめーはよー!」

声の主は、一誠と同じ年くらいのも、制服姿の少年だった。ただし彼の手には、デフォルメ化されたトカゲの顔らしき物体付いており、さらにそこから淡い光を放つ黒い紐が伸びており、それがガングニールの足に繋がっている。

神器・黒い龍脈アブゾーフション・ライン少年 —— 匙元士郎の神器であり、他者の力を吸収する力を持つ。

その力でガングニールを弱らせたことで、一誠の攻撃が効いたのだ。

まあ一誠はそんな事は知らず、いきなり乱暴な物言いをしてきた匙に反発する。

「なんだいきなり!それって今言うことかよ^{!!?}?」

「匙先輩、助力ありがとうございます」

「え、何?コイツ知り合いです?」

「詳しい説明は後。今のうちに仕掛けますよ」

小猫に言われるがまま、一誠と匙は言い争いをやめてガングニールと向かい合う。ガングニールは既に立ち上がっており、匙の生成した黒い龍脈によるラインを引き剥がそ

そう確信した次の瞬間。

「Heeeeeeeeeeeeeee!」

「何だっ」

「ガングニールオリジオンの口から、光線のようなものが飛び出し、一誠の上半身を焦がした。」

「ぬああああああああああああつ!?」

匙の神器によって弱体化させられていたおかげで大したダメージにはならなかったが、一誠が奇襲に怯んだ隙を突いて、ガングニールは一誠を払い除けると、一誠達ともアクロスにいる方とも違う方向に向かって走り出す。

サーフィスオリジオンに必殺技を喰らわせようとしたアクロスも、その奇行に思わず手を止めてしまう。一体、奴は何処へ向かっていているというのだろうか。アクロスは、ガングニールオリジオンの向かった方に視線を合わせる。

その先にいたのは、生徒会長・黒神めだかだった。胸元を露出した黒い生徒会役員用の制服だからよく目立つ。ガングニールオリジオンは、渡り廊下を歩いていたのでかに一直線に向かっていた。

「危ねえ!」

すかさずアクロスがめだかに向かって叫ぶ。彼女もガングニールに気付いたようだ

が、遅かった。弱体化しているにも関わらず、ガングニールオリジオンのスピードは衰えていなかった。

ガングニールは空に響くような雄叫びを上げながら、めだかの額を思い切りぶん殴った。バコンツ!!? と、してはいけなような音が響く。皆は思わず目を逸らしてしまう。きつと、彼女は頭の中身をぶち撒けて凄惨な状態に

「……」

—— なっていないかった。

オリジオンの中でもパワータイプなガングニールの拳をモロに受けたにも関わらず、めだかは平然としている。その光景に、ガングニールを追ってきた一誠達も呆然としてしまう。

自分の自慢の拳がまるで効いていない様子のめだかに、ガングニールは本能ながら恐怖を感じ、突き出した拳を引っ込める。そして、殴られた本人は、いつもと変わらない尊大な態度を崩す事なく、ガングニールに告げる。

「暴力は感心しないが……これ以上この学園で暴れるのはやめてもらおうか、貴様ら」
「Haっ!!?」

一瞬、めだかの姿が消えたような気がした。が、次の瞬間には、めだかかがみ込んでガングニールオリジオンの顎目掛けてアッパーを仕掛けようとしていた。

そして。

「黒神アツパー！」

「G o f u っ!?」

ガングニールオリジオンの顎に、下からめだかのアツパーカットが炸裂する。匙の神器で弱体化していたガングニールは、風船が割れるような音と共に空高く打ち上げられ、校舎の4階部分の壁面にクレーターを作った。

それを見て、アクロスや一誠、戦いを見ていた唯達も啞然とする。この生徒会長、めっちゃ強いやんけ、と。

戦闘不能になったガングニールオリジオンを覆うようにして、壁面にジツパーが出現する。そしてジツパーが開き、その中に真っ暗な空間が出現する。そして、その闇に溶け込むような形でガングニールは姿を消していった。

「勝利絶望……撤退決定、即断即決！」

増援たるガングニールオリジオンの敗北により、勝機が無くなったと判断したサーフィスオリジオンは、這う這うの体で逃げてゆく。すかさずアクロスは追いかけるが、校舎に入ったところで見失ってしまった。

「あっ……畜生！逃したか……」

悔しそうに舌打ちをしながら、アクロスは変身を解除する。そして、芝生の上で大の

字になっている一誠の元へと歩いてゆく。

「助かったよ、イツセー」

「なーに、これくらい大したことないつての。お前にはアーシアを助けるのに協力してくれた借りがあるからな」

拳闘士をコツンと触れ合わせ、両者は笑う。そんな2人を見て、小猫がぽつり。

「……へえ、アクロスというんですか。兵藤先輩よりマトモそうですね」

「小猫ちゃんつてさあ……俺に対して辛辣すぎない？まあ心当たりしか無いんだけども」

まあ一誠は日頃の変態行為のせいで、女子生徒からの評判は地に落ちてるようなものだから仕方ない。一誠もそれを分かっているので、軽く流して寝転んだまま空を見上げ、この状況を主人たるリアスにどう報告したらいいものやら、と考え始めていた。

そこに、校舎内に取り残されていたアーシアがやって来る。回復役たる彼女はあまり前線に立つべきでは無いと判断し、一誠が待機させていたのだ。アーシアは、傷だらけの一誠と瞬を見るなり、心配して駆け寄り、自身の持つ神器・トワイライト・ヒーリング聖母の微笑による治療を試みる。

「イツセーさん、大丈夫ですか？？」

「」

「大丈夫だアーシア。これくらいの怪我、大したことないから」

「今直しますね、じつとしていてください。瞬さんもこちらに」

「あ、はい……」

言われるがまま、少年2人は治療を受ける。そして一誠は、先程まで放置されていた、神器使いの少年に意識が向く。

「つーかお前、誰？神器保有者みたいだけど……」

「彼は匙元士郎。グレモリー家と親交の深いシトリ家の次期当主、ソーナ様の眷属です。本来ならもう少し後に顔合わせをする予定だったんですよ」

「つまりお前も転生悪魔ってコトか。へえこりやあいい。同じ兵士^{ゴーン}同士仲良くやろうぜ、宜しくな」

「ああ宜しくなあ」

小猫からの紹介を受け、一誠は匙と握手をする。だが、互いに互いが気に入らないのか、その手にはかなりの力が入っているし、両者とも引きつったような笑みを浮かべている。瞬と小猫は2人を見て、やれやれといった感じに首を振る。

そんな2人の横で、めだかは戦いでボロボロになった中庭を見つめていた。ガングニールオリジオンに殴られた頭をさすりながらも、平然としている彼女に対し、大鳳が訊いてくる。

「オリジオンとか諸々に対してあまり驚かないのね……」

「いや結構驚いているぞ？世界ってまだまだ未知なるものが沢山あるんだなーって」
「貴女が言うのと嫌味にしか聞こえませんかよ……」

肝が据わっているというか、怖いもの知らずというか……めだかのあつけらかんとした態度に、阿久根も思わず苦笑いしてしまう。少なくともオリジオンをアツパー一発で屋上近くまで打ち上げた奴の吐く台詞じゃないよな、とめだか以外の全員が思う。

そしてめだかは、アーシアの治療を受けている瞬のもとに歩み寄ってゆき、声を掛ける。

「それにしても、興味深いものを見せてもらったよ逢瀬2年」

「あれ、なんで俺の名前を……」

「全校生徒の名前くらい把握済みだ。阿久根書記を助けてくれたのだろうか？私から礼を言わねば失礼というもののだ」

めだかは瞬に手を差し出す。どうやら握手を求めているらしい。断る理由も無いので、瞬は握手に応じる。が、いざ正面から見ると、彼女の格好に思わず赤面してしまう。そりゃあ、豊満な胸の上半分が露出した改造制服なんだから、瞬の反応は真つ当である。その格好で生徒会長は無理でしょう。

「……」

「ん、何を恥じる事がある？」

だが全く本人は恥ずかしがっていない模様。てか瞬の反応に首を傾げている。

「しかし、酷い有様だよねえ」

「言われてみればそうですね」

一方、先程まで物陰に隠れていた唯は、中庭をぐるりと見渡しながら言う。

先程まで戦場だった中庭は、かなりボロボロになっていた。校舎の壁面は傷やヒビが入ってるし、ガラスは地面に飛び散ってるし、植え込みがぐしゃぐしゃに引つ掻き回されている。放課後であまり人がいなかったのが幸いだった。

小猫は、自分が砕いた窓ガラスの破片を見ながら、申し訳なさそうにめだかに告げる。「あのー私窓割ってしまったんですが、どうしたらいいですか？」

「オカルト研究部の面々か。貴様らもあの怪物相手に良くやったな。礼代わりと言ってはなんだが、校舎の修理代は私が受け持とう」

うわあ太っ腹。ありがたいっちゃありがたいが、これはちよつと申し訳なくなってくるヤツだよな、と皆は思うのだった。

「今日はもう帰った方がいいかもしれません。流石にこんな事があつた後で部室に行くつてのもアレですからね」

「それはありがたい。つたく、オリジオンの奴らも少しは休ませてくれねーかなあ」

「こゝ最近はオリジオンと戦つてばかりで、流石に瞬も辟易していた。今日は早く

帰って休みたい気分だ。なので、ハルの意見は渡りに船であった。

瞬は、校舎の壁面にガングニールオリジオンが作ったクレーターをチラリと見て、軽く生徒会長に恐ろしさを感じながら、帰路につくのであった。

翌日 漫研部室

昨日あんな事があったのに、学校は平常運転だった。瞬は、ビルドオリジオンの時は休校になったくせに、何故今回はならないんだろうかと疑問に思ったが、休みじゃ無いなら行くつきや無いと腹を括って登校した。

そして放課後。昨日入った漫研の部室にやってきた瞬。昨日見たスク水姿のハルを思い出し、今日は何事ありませんようにと祈りながら、扉を開ける。

「ちーっす、入るぞー?」

「よく来ましたね待ってたゾー! さあさあ上がりなさいな!」

「……」

ああ無念、少年の祈りは通じなかった。

部室に入るなり、スク水姿のハルが瞬を出迎えてきた。瞬は頭が痛くなってきた。昨

日のはどうやら冗談ではなかったらしい。

ハルは（お世辞にもあるとは言えない）胸を張っているが、瞬は彼女に対して興奮するよりも、呆れていた。そんな事はつゆ知らず、ハルは両手を広げて胸を張り、瞬を受け止める体勢に入る。

「興奮しますよね？私はしますよ！さあ好きだけ舐め回すが良い！」

「誰がするかあ！全人類がお前と同じ性壁だと思ふなよ！」

「おうんひどうい……私はただスク水の素晴らしさを広めたくて……」

だったら漫画研究部やめてスク水研究部に解明した方が早いと思う。瞬はハルを素通りして椅子に座り、既に来ていた志村と灰司に声をかける。

「よう、お前らもう来てたんだな」

「ははは……ハルちゃんはさっきからずっとあんな感じなんだよね」

「あ、逢瀬くん。今この漫研が過去に出した部誌を読んでもらいますよ。中々個性的な内容で興味深いです」

「個性的……ねえ」

ハルの奇行に呆れ笑いする志村の横で、灰司は何やら読んでいる模様。瞬は後ろからそれを覗き込む。

灰司が読んでいたのは、かつて漫画研究部が刊行していた部誌。当時の部員達の漫画

が冊子に纏められているものだ。内容もクオリティもよりどりみどりで、今灰司が読んでいる作品は、色々な意味で一際個性的な内容であった。決して画力の話ではない。

と、ここで先程から放置されていたハルが指をパチンと鳴らす。

「カモン、我が同胞！」

「それ突撃い〜！」

「ぶはっ!?？」

突然背中に強い衝撃を受け、瞬は床にぶつ倒れる。なんか唯の声がしてたような気がするが一体何なんだと、瞬は起き上がりながら後ろを振り返る。

「な、なんでお前達まで着てるんだよ!?？」

そう、何故か唯と大鳳までスク水姿になっていた。にまにまと小悪魔めいた笑みを浮かべている唯とは対照的に、大鳳の方は凄く恥ずかしそうに顔を赤くしている。どうやら彼女の方は無理矢理やらされているらしい。

「潜水艦の子達ってこんな恥ずかしい格好だったのね……」

「わかったわ。貴女が変態だという事が。服返して頂戴」

「ぬぎぎぎぎぎぎぎわがっだがらやめでええええええ身体がガラケーになつちや〜う〜！」

大鳳に背中の上に乗っかられてキヤメルクラッチをかけられ、鯨^{しやちほし}鉾よりも反っている

んじゃないのかと思わされる程背中を逆に曲げさせられるハル。側から見ればスク水姿の少女2人がプロレスごっこ（文字通り）をして戯れているようにしか見えない。なんだこの空間、さっさと帰りたくなってきた。

そんな瞬の気持ちを察したのか、瞬を足止めすべく唯がにじり寄ってきた。此方はどうやらハルに乗せられている模様。

「悪いね瞬。瞬をスク水フェチにしたら図書カードくれるって言うから……」

「安いなオイ！そんなもんに釣られて変態の道に落ちるなよ!!？」

幼馴染みのこんなみつともない様を見せられる此方の身にもなつて欲しい。シユバシユバツ！と良くわからん決めポーズらしきものをとりながら、唯は戦線布告する。

助けを求めようと、既に来ていた灰司と志村の方を見るが、彼らは彼らで関わりたくないのか、露骨に視線を合わせようともしない。薄情な奴らだ。こうなれば自力でなんとかするつきやない。

「いざ勝負！」

「悪ノリがすぎる！」

飛びかかつてきた唯を難なく避けると、瞬はゲンコツを彼女の頭に対してお見舞いする。いくら身体能力に差があると言っても、10年間も共に過ごしたのだから動きのいつや二つは読めるのだ。

そして、もうこんな不毛な戦いはやめようと、スク水姿の女性陣に提案する。

「もうやめなさいよ……俺こんな変態ばかりの魔鏡にいたく無いんだけど」

「変態とは失礼な！ 私達3人の何処が変態だっていうのさー！」

（私も頭数に入れられてる……?!?）

「お前が変態じゃなかったら変態仮面も変態じゃなくなるだろ」

「たとえ突っ込み下手くそですね」

「そっか瞬はパンツを被ると興奮するんだー。取り繕わなくていいんだよ……私は瞬の性癖を肯定しよう」

「今の発言の何処にそんな要素あったよ」

なんか発言をわざと曲解して、瞬をとんでもない性癖持ち呼ばわりしようとした幼馴染みに、もう一発お見舞いする。コレは悪ノリが過ぎた模様。ゲンコツを2度も受けた唯は、そのまま床に崩れ落ちる。

「失礼しまーす生徒会でーす。様子見に来たんですけどもー？」

そこに善吉が入って来た。

が。

「スク水で、笑顔を……スク水で、世界に、みんなの未来に……笑顔を……」

「唯さんんんんんんんんんんっ！」

ゲンコツされた事で、なんか安らかな最期を迎えようとしている唯と、彼女を抱き抱えて泣き叫ぶハル（両者ともスク水姿）。そんな2人を馬鹿を見る様な目で見下す瞬と大鳳、彼らにお構いなしに漫画を読んでいる灰司に、逃避するかの様に英単語帳（上下逆）の暗記を始める志村。端的に言つてカオスな状況が繰り広げられていた。

一眼見ただけで、あまり深く関わらない方がいいなと判断した善吉が、瞬の方を向いて一言。

「帰つていい?」

死んだ魚のような目でこちらを見つめてくる善吉。ぶつちやけ瞬も、正気のうちにここを去つた方がいいと思つている。善吉は、スク水だらけのスペースから目を逸らすようにして、話を続ける。

「様子見に来たけど……まあ大丈夫そうだな」

「何処をどう見たら大丈夫に見えるのよ。その目は飾りなの?」

「デスヨネーあははは……」

大鳳の突つ込みに、善吉は棒読みじみた渴いた笑いで返す他なかった。依頼が来ていたからとはいえ、正直、この部を立ち直らせようとしたのは間違いだったんじゃないかなるかと思わざるを得なかった。だって部長が変態だし。

大鳳は、中々服を返そうとしないハルの腹の上に座り続けている。一体がハルをそこ

までスク水に搔き立ててるのか、誰もわからなかった。てかわかりたく無い。

そして、ついに屈したハルが、大鳳に制服を返す。大鳳は制服をハルから奪い取ると、「これから私着替えるんで出てってもらえる？」

と、男性陣を廊下に叩き出してしまった。

「追い出されたね……」

「俺、来た意味あったんだろうか……」

全然一件落着じゃねーんだよ……。

善吉と瞬は、コレから先の事を思いながら、深い溜息をつくのだった。

数時間後

静まり返った部室の、扉がゆっくりと開かれる。

思い詰めたような表情をした欠望アラタは、息を殺し、足音を消しながら部室にゆっくりとはいつてゆく。

「皆、寝ているのか」

瞬も大鳳も唯もハルも、皆爆睡していた。アラタはこれを好機だと判断し、足元に転がっているモツプを避けながら、瞬の元までたどり着く。そして、彼の足元に置かれていた鞆に目をやる。

フアスナーの開いている鞆から覗く物体。

クロスドライバー。アクロスの力の源泉。それを見たアラタの頭に、ある邪な考えが浮かび上がってくる。

(これがあれば、これを使えば、俺は……)

そう、クロスドライバーを盗んでしまうという手だ。手を伸ばしたい。手に入れた。眼前の力が、少年の心を誘惑する。だがその誘惑に負けるといふことは、人間性を、ひいては逢瀬瞬との友情を捨てることに他ならない。

葛藤の末、アラタはクロスドライバーから目を逸らし、机を挟んで瞬の向かい側で、椅子に腰掛けて眠る大鳳に目をやる。大切な家族で、友人で、互いに今の自分を作ってくれた恩人で。アラタは彼女の苦しんできた過去を知っている。だからこそ、彼女に傷つけてほしく無いと誰よりも強く思っている。

心臓がバクバクと鳴り、呼吸が荒くなってゆく。全身から冷や汗がブワツと溢れ、4月なのに、身体がひどく冷たくなっていくような感覚がする。

(……俺が、守るんだ。それくらいできなきや、隣にいる資格なんてない!)
決心するかのようには目を見開き、アラタはクロスドライバーに手を伸ばす。

もう二度とあんな目には合わせない。二度と君を傷つかせやしない。普通なら尊く、讃えられる筈の決意は、歪んで腐り果ててしまった。後悔と渴望が、少年を狂わせた。

それは過ちであると共に、彼の未来に至る一歩。

舞台へと至る、最初の一段目 ——

瞬が目を覚ますと、すでに陽が傾いていた。

「あれっ!? 寝てた!?」

というか、いつの間にか机に突っ伏して寝てしまっていたらしい。部屋を見渡すと、隣で同じように唯が眠っているし、他の皆は既に帰ったのか、姿が見当たらなかつた。

時計を見ると午後5時。瞬は隣でスク水姿のまま涎を垂らして爆睡している幼馴染みの身体を揺すって起こす。

「起きろそして着替えろ。いつまでその格好でいるつもりだ」

「はにゆ？瞬……今何時……」

「皆帰っちゃまったよ。俺達皆揃って寝ちまってたらしい」

春の陽気に絆され、皆部室で寝落ちしてしまったのだ。にしても、先に帰った奴らのうち、誰でもいいから起こしてくれてもよかったのに、と瞬は思っていた。

廊下で唯が着替え終わるのを待ってから、2人で揃って校門をでる。正門前の長い下り坂を降りながら、赤くなつた空を見上げる。夕空はなぜこうも、ノルスタジックな気分させられるのだろうか。瞬が柄にもなくそんな事を考えていると、唯が思い出したかの様に言う。

「そういえば、2人で帰るのって久しぶりかも」

「そうか……そうかな？」

「ひどいなー瞬は。ここ最近皆でガヤガヤしてばつかだったからね。2人きりつてのは案外久しぶりなもんなのさっ」

「言われてみればそうだな。少し懐かしく感じる」

この一か月で色々あつた為か、唯と2人きりだった日々のことが凄く前の事のように感じられてしまう。よくよく考えるとまだひと月しか経っていない、もしくは早くもひと月が過ぎたのだ。改めて密度の濃い日々だったのだと思ひ知らされる。

2人は大通りを歩いていった。たしかこの辺りには唯の行きつけの本屋があつた筈。

偶にはコイツと2人で行ってみるのもいいかもしれない。

「本屋寄ってかない？マ○ジンとサ○デー買いたいからさー」

「別にいいけど。俺も買うつもりだったし」

漫画雑誌の今週号をまだ買っていなかったのもあって、2人は近くの本屋に入る。

雑誌コーナーは入り口付近なのですぐに見つかった。早速目当ての雑誌を見つけ、唯は手に取ろうとするが、横から伸びてきた手にその雑誌を搔つ攫われる。一体こんな真似をする奴は誰なんだと思いつながら、唯は顔をあげる。

そこには、雑誌を手に持ったハルトと、両手に持った籠いっぱい本を入れ、気まずそうな顔をしている灰司がいた。

「あれ、逢瀬さんに唯さん。先程以来ですね」

「さつき部室で別れたばかりなのに、これだと別れた意味がないですね」

灰司の言うとおり、さつき別れたばかりなのに（実際は部室に置いていかれた）こうしてすぐに再開してしまうと、なんとも言えない気分になる。

しかし何故こうも、学校帰りに行く先々で知り合いに出会すのだろう。志村の時も確かこんな感じだったし、思ったよりも世間は狭いのもかもしれない。

「しかし奇遇だねー。ハルちゃんもこの店に来てたなんて」

「家から近いのでよく来るのです。ひよつとして2人も常連さん？」

「学校帰りにここでジャ○プとか買うのが毎週のルーチンなんだ」

そう言った唯は、ふと、ハルの手に持っている漫画本の表紙を見る。

「あ、それ『技術回線』の最新巻！そっか今日発売日だったんだ！」

「あ、ちよつと……つたく、相変わらずこうなんだから」

待っていた漫画の最新巻が発売されていた事を思い出すなり、目にもとまらぬ速さで新巻コーナーに向かつていってしまいました。こうなれば此方も好きにやらせてもらおうと、瞬も新巻コーナーへと走っていくことにした。

そんな2人の後ろ姿を、ハルは立ち読みしながら眺めていた。

「案外似た者同士……なのかもしれないね」

「よきかなよきかな」

「ところで九瀬川さん。僕を荷物持ちにするのはいいんですが、一体いくら買い込むつもりで……」

「あーあー聞こえないなあー」

「……」

帰り際に半ば強引に荷物持ち要員として連れてきていてそれは無いだろう。このまま帰ってもバチ当たらないよね？と、ハルに対して若干キレそうになる灰司であった。

数十分後。

灰司以外は思い思いに大量の本を買ってレジ袋に詰め込んでいた。ハルに至っては、灰司が居なかつたら一体どうやって帰るつもりで、そしてどうやって読破する時間を作るんだと言いたくなるような量である。

「早く読みたいなー。帰るのめんどくさいからここで広げちやおつかなー」

「やめろ。そんな事したら流石の俺でもお前の友達辞めざるを得なくなるぞ」

「なんか小腹空いたなー。何かいい店知らない？」

「ならいい店知ってますよ。向かいにメイド喫茶があるんですけど、メニューもいいしメイドも可愛い、まさに天国！って場所なんですよ。私はここで買った本を読みながらその店のケーキ食べるのがサイコーに堪らないと思ってますが、一発どうですかね？」

「このマシンガンの如くなされる自分語り……なんかだいたい慣れてきたな」

「いやこんなに大量の本、どこ行っても邪魔なだけでしょ……」

ハルのマシンガントークをはいはいと聞き流しながら、瞬達は店を出る。目当ての漫画が買えて嬉しいのか、唯だけでなく瞬も心なしか浮き足立っているように見える。

瞬達が店を出たその時だった。ガシャーン！と大きな音がしたと思いきや、向かい側

のメイド喫茶らしき建物から、怒り心頭の男が出てくる。それを追って、店からロングスカートのメイド服を着た店員らしき人物が店から出てきて、男の肩を掴む。男はそれを振り払い、メイドの胸ぐらを掴んで鬼のような形相で怒鳴り散らす。

「ふざけんな！何で俺がモブキャラに金払わにやならんのだ！テメエは俺のオモチャなんだから金払わなくていいだろ上等だろ！」

「いやいやいや、こちららビジネスでやってんだから客から金取るのは当たり前でしょーが！ぼったくってるわけじゃないんだからさあ……」

「黙れよ雑魚！まさかテメエは俺から金を取るうつてのか！ふざけるのも大概にしろよ！」

男の怒鳴っている内容を聞いて、瞬は頭が痛くなってきた。どう考えてもいい歳した大人が言うような内容じゃない。常軌を逸した発言に、周囲の人達が男を憐れむような目で見るようになる。あれは大人の皮被った赤ちゃんなのだ、そう思わなければやっていけなかった。

皆が珍獣を見るような目を男に向ける中、ハルは男ではなく、男と言い争いをしていくメイドの方を、目を凝らしてよく見ていた。そして気づいた。

「あれは店長さん！うむむ、常連として放って置けない、行きますよ皆さん！」

「え、俺達も行くの？」

「当たり前。レッツ人助け！」

どうやらあのメイドは、ハルが先程言っていた店の店長らしい。知り合いが困っているのをほっとけないハルと、そんなハルをもほっとけない唯の2人に両手を引き摺られるような形で、瞬も騒ぎの中心に向かっていく。

横断歩道を渡って反対側、騒ぎの中心となつた店の真前にやってくる。男と怒鳴り合いの口論をしていたメイドは、ハルの顔を見るなり声を掛けてきた。

「あ、ハルちゃん！聞いてよ！コイツウチの店の金払わずに出て行こうとした拳句、逆切れしてくるんですよ！非常識すぎない？」

「警察呼んだんですよね？」

「今他の子が呼んでるところ。兎に角この人が逃げないように押さえつけて！」

「は、はい」

メイドに言われるがまま、瞬と灰司が逃げようとする男の前方に回り込み、男を押さえつける。

「すみません！でも話を聞く限り貴方が悪いんですよね？」

「よつと……しかし、みつともないよな……」

「テメエら！俺を誰だと思つてやがる!!? 俺は主人公だぞ!!? 主人公から金取ろうとするこの店が悪いに決まつてるだろ！」

男はもがきながら怒鳴り散らす、周囲の人は皆、彼の言っていることの意味がわからなかった。目の前の男が、自分達と同じ人間とは到底思えなかった。

「お主往生際が悪いぞ！」

「幼稚園からやり直せ！」

「同族として恥ずかしい……かくなる上は切腹しかないでござる！」

「やめてー！メイドさんのハラキリなんか求めてないからあ？？」

店の中にいる客やメイド達、通りすがりの一般人も、窓越しに男を非難する。ぶつちやけ、メイド喫茶で無銭飲食するとか恥ずかしいにも程があると瞬達は思うのだが、この男はそうではないらしい。面の皮厚すぎだろう。

周囲からの猛烈なバツシングを受けた男は、急にぴたりと抵抗を止める。しかし、ようやくやく落ち着いた……ようには、瞬に到底思えなかった。

何か、ある。

「テメエら俺をコケにしやがって……ぶつ殺してやる！」

《KAKUSEI GULE》

「まさかお前……皆逃げろオ！」

瞬が叫ぶよりも早く、男の身体がジッパーに覆われていく。そして、そのジッパーが全て開くと、浅黒い艶のある体躯に、大きな口だけが存在する頭を持ったオリジオンに

男は変身していた。

オリジオンとなったことで常人をものもしない力を手に入れた男は、自身を押さえつけていた瞬と灰司を振り払って突き飛ばすと、自身の食い逃げを非難していた一般人の青年に食ってかかる。首を掴んで持ち上げられた青年は、大声で叫びながらじたばたもがく。

「や、やばばばばば……」

「店長！逃げるでござるよおー！」

腰を抜かしたメイド店長を、他のメイドが引きずるようにして逃す。瞬達以外の人間達も、一斉に散り散りになって逃げてゆく。突き飛ばされた瞬は、腰を摩りながら起き上がる。

「オリジオンだったのか……アイツも」

「あんな状態で暴れられたら逆ギレでは済まないし！止めなきやー！」

「あ、馬鹿っ！」

瞬が止めるのも聞かずに、唯はグールオリジオンに飛び蹴りをかます。グールオリジオンは死角からの、何の力も持たない筈の少女による予想外の攻撃を受け、青年を放して街頭にあたまを打ち付けられる。

「効いた……んですかね？」

「兎に角逃げてください！いいですわね！」

「あ、ありがとう助かった！君は命の恩人だ！」

青年は唯に感謝の言葉を述べると、急いで逃げて行く。これで大方逃げ終わった筈だ。まだ逃げ遅れている人がいないか、瞬が確認していると、

「邪魔すんなよタコ！食っちまうぞ！」

邪魔されてキレたオリジオンが、近くにあつた電灯を地面から引き抜いて、瞬達目掛けてぶん投げてきた。電灯は瞬達の間を素通りしてその後ろの街路樹に当たり、街路樹もろとも千切れ、近くの電線とそれに繋がっている電柱諸共地面に倒れ込んできた。

まるでドミノ倒しみたいに倒れた街路樹やら電柱やらにより、瞬達は分断される。土煙で視界が塞がれる中、必死に叫んで瞬は他の皆の安否を確認する。隣にいる唯はともかく、他の2人が心配だ。

「だ、大丈夫か灰司！ハル！」

「大丈夫ですよ。てか何あれ、まるで特撮モノな怪人みたい……」

「僕も大丈夫ですから！」

皆の元氣そうな声で、瞬と唯は安堵する。

こうなつたらアクロスに変身するほかない。放つておいたら、自分達も周囲の人達も危ない。瞬は持っていた鞄からクロスドライバーを取り出そうと、鞄に手を突っ込むが

ガキンツ!!?

死を覚悟した筈の瞬の耳に、金属同士がぶつかり合うような音が聞こえてくる。それはつまり、瞬が生き延びた事を意味していた。

恐る恐る、目を開く。

「何ボサつと突つ立ってやがる、アクロス」

黒ずんだ体色の仮面ライダーが、オリジオンの腕を両手で受け止めていた。

仮面ライダーメタルビルド。転生者を裁く執行者の登場であった。どこかビルドに似ているが、全身が黒ずんだメタリックカラーで構成されている。どうやら瞬がかつて出会った、あのビルドとは別らしい。

メタルビルドはグールオリジオンの腕を掴んだまま、そのまま投げ倒す。そして追撃しようとするが、突然、何処からか彼の足元に銃弾が飛んでくる。威嚇射撃のつもりだったのか、それは誰にも当たる事なく、歩道に銃痕を残すだけにとどまる。

メタルビルドは、銃弾が飛んできた方に視線を向ける。車道を挟んで反対側の歩道に、軍服姿の銀髪の少女が銃を構えた状態で立っていた。ギフトメイカー・レイラである。彼女は、メタルビルドを見るなり、鼻で笑って濁った赤い瞳で彼を睨みつける。

「なんだ、転生者狩りか」

お前はお呼びびでは無い、とでも言うかのように。

「来やがったな、ギフトメイカー！テメエらの野望は俺が砕く！テメエらの命は俺が奪う！それが俺の仕事だ」

だがメタルビルドにとつてはそんな事は知ったこつちや無い。世界に仇為す転生者と、それを操るギフトメイカーは等しく殺すべき敵。敵意マシマシの声をレイラにぶつける。

レイラの方も、言ってもわからぬなら力尽くでやるしかない、銃を投げ捨てて、何処からか二振りのサーベルを取り出し、刃をメタルビルドに向ける。

「貴様には用はないが、性懲りも無く大口を叩くようなら……その言葉、口先だけでは無い事を私に示してみろ！」

戦いの火蓋が、切って落とされようとしていた。

アラタは走っていた。

クロストライバーを盗んだ。やってはいけない事だということは分かっている。今

自分は悪人に成り下がったのだという自覚は確かにあった。友情を裏切り、自分の感情を優先してしまった。そんな自分には、もう彼にあわせる顔は無くなつたのだ。

後ろ髪を引かれるような気持ちを抱えたまま、クロスドライバーを手に持つて走るアラタ。だが、彼の行手を阻む様に、ある人物が彼の前に立ちはだかる。

「どこに行こうというのかな、そのベルトを持つて」

ファイフティだった。いつもの様な物腰の柔らかさそうな雰囲気とはうって変わり、ただアラタを蔑む様な、冷ややかな目をしている。彼は、至極真つ当な質問をする。そして、憐憫からくる生温かさ、軽蔑からくる冷ややかさが合わさつた様な、奇妙な目をアラタに向け、諭す様に言葉を紡ぐ。

「いくら君が逢瀬くんの友達だとしても、泥棒はよくないな。さ、私が彼に返してあげるから、クロスドライバーを渡しなよ。皆には黙っておいてあげるからさ」

「この力があれば、オリジオンをブツ倒せるんだろ？なら俺は使う。この間みたいな事は、起こさせない！」

そう。アラタはこの間のことを悔いていたのだ。鎮守府でオリジオンに襲われ、大鳳が攫われた時のことを。

あの時、アラタは何も出来なかつた。一方的に蹴られ、奪われるだけであつた。あの悔しさと不甲斐なさに、ここ数日間ずっと苛まれ続けてきた。潮原提督や瞬のおかげで

助かったのは事実。だからといって、これから先も、大切な人を自分で守ることができないという現実には、アラタは耐えられなかった。

それも全部、自分が弱いから。

大切な人に降りかかる理不尽を全て跳ね除けられるような男になりたい。これ以上、彼女を苦しませたくない。だから、強くならなくては、力を得なくてはならない。

そうして——彼はこのような愚行に走ってしまった。本来の持ち主である友人が今、追い詰められているとはつゆ知らず。

「君の気持ちはよく分かる。大切な人が危険な目に遭っていたのに、自分は何も出来なかった。それはさぞ悔しいだろう。だがしかし、世の中にはどうあがいても不可能な事があるんだ。それは君には使えないよ。焦って力を得ようとしても、碌な事にならないさ」

「それでもだよ……大鳳は今の俺を作ってくれた恩人で！家族で！大切なヒトなんだ！それを守れない俺の不甲斐なさに苛々して仕方がないんだ！だから使わず、俺だつてやればできるんだって証明してやるんだよ！」

ファイティは、そんなアラタの気持ちを理解しながらも、その行いは無謀で無意味なものだと断じる。だがアラタは、ファイティの言葉を受け入れない。後悔と焦りに支配された今の彼には、ファイティの声が届く余地はない。それをわかつていたファイティ

は、黙ってアラタを見つめ、痛い目を見ないと分からないようだな、と言うかのように鼻で笑う。

アラタはそんなファイフティの態度に更に反発し、啖呵を切りながらクロスドライバーを装着し、アクロスライドアーツを装填する。そして、拳を力強く前に突き出して、心の限り叫ぶ。

「変……身……っ！」

《FATAL ERROR!》

しかし、それは叶わなかった。

クロスドライバーから光が発せられ、アクロスのスーツが生成されようとした瞬間、アラタの全身を、その身を焦がし尽くすかのような電撃が迸った。

「っがあああああああっ!!?」

まるで身体だけではなく、精神すらも焦がし尽くさんとする衝撃が、アラタの全身をとめどなく駆け巡る。声を出し尽くす様な勢いで絶叫するアラタを、ファイフティは「だから言わんこつちやない」とでも言うかのように、冷めた目で見つめる。

「ぐああああああああああっ!!?」

クロスドライバーがアラタの身体から弾かれる様に離れ、地面に転がり落ちる。アラタもまた、ドライバーに弾かれたかのように吹っ飛び、ブロック塀に激突し、そのまま

倒れる。

身体は動かなかつた。自分が今どんな表情をして、どんな姿勢をとっているのかすら曖昧になる。視界は今もお激しく点滅を繰り返して、頭の中から耐えがたい激痛が絶え間なく襲ってくる。変身しようとしただけでこのザマだ。

「だから言ったのに。ホント愚かな奴だね」

「な、んで……つかえ……ない？」

まさか小細工でもしたのか。瞬以外には触らせない様に。そんなアラタの疑念を晴らすかの様に、ファイフティは冷ややかな声で告げる。

「別に細工とかはしてないよ。至極単純な理由だよ」

ファイフティは、ボロボロになったアラタに目もくれず、落ちたクロスドライバーを拾い上げる。そして、アラタの疑問に対し、どうしようもなく残酷な答えを告げる。

「だって君、転生者だろ？」

第19話 「転生しただけの愚か者だよ」

その少年は、血溜まりに座り込んでいた。

彼の周囲には、同じ年くらいの少年少女達が血塗れで倒れている。その全ては既に生命活動を終えていた。手足が千切れて出血多量で死んだ者。頭が跡形もなく消し飛んだ者。皮だけのミイラになった者。全身が焼け焦げ炭化した者——死因のパーゼンセールと言わざるを得ない地獄絵図の中、その少年は傷と血に全身が覆われながらも、五体満足で震えていた。

(なんで、こう、なった?)

少年は凄惨極まりない部屋の隅で頭を抱え、この惨状に至った経緯を回想する。

軽い気持ちだったのだ。自分と同じ転生者達に出会えたから、その交流会を企画した。せつかく転生者^{どうほう}に出会えたのに。仲良くできると思っていたのに。

結果はこれ。参加者の一人から提供されたパーティー会場は、皆が皆、与えられた転生特典を使って殺し合う戦場と化し、少年以外の転生者は皆死んでしまった。

少年は思った。これはひとえに、こんな催しを提案した自分が悪いのだと。自分の浅はかさ、無力さで皆が死んだ。

ああ、こんな惨劇が繰り返されるといふならば。

——
転生特典このものなんか捨ててやる。

欠望アラタは転生者である。

異世界に行つて大活躍したり賞賛されたくて転生したわけでは無いが、どういう訳か気が付いたらこの世界で第二の生を受けていた。

前世の記憶はあまり無い。どうやらこれは普通ではないようなのだが、覚えていないものは仕方がない。きつと、覚えていたらいたで前世に継り付くだけだった。

初めは転生先の世界をよく知らずにはしやいでいた。

しかし、「ある失敗」を機に、彼は一度壊れかけた。それは一人の人間が、心を閉ざすには充分すぎる悲劇だった。

そうなつた彼を立ち直らせるきつかけとなり、かつ今の彼の人格形成に深く関わっているのが、大鳳と呼ばれる一人の艦娘である。この経緯は後の機会に語る事として、結果として、今の情に熱く家族思いな欠望アラタという人間にとつて、彼女は何よりも大切な存在といえる。

故に。

無自覚な愛故に、彼は道を踏み外した。忌避していたはずの場所に舞い戻ってしまった。

その過ちの結果はまだ

——

そして今。

クロストドライバーに弾かれて地面にぶつ倒れたアラタに、ファイティの冷やかな視線が上から突き刺さる。

だから言わんこつちやない、散々忠告したのに破った君が悪いんだよ？と暗に告げている様な。そんな無言の時間が幾ばくか経過した後、ファイティは心底呆れたといった感じにわざとらしいため息をつきながらアラタの元に歩み寄る。

「アクロスのベルトは転生者には使えないんだ。私もよく分かつてはいないが……恐らく、人間の魂ってやつは、転生というフィルターを介することで歪んでしまうものらし

「い

クロスドライバーを拾い上げ、手持ちのハンカチで綺麗に磨く。そして、うつ伏せで倒れているアラタを足で仰向けにする。それは暗に、ファイティがアラタをゴミのような存在と認識していることを表していた。ファイティは、

「だから大人しく諦めたまえ。世の中にはどうにもならない事はごろごろあるんだから」

「うう……」

「やめなよ、私の所に堕ちるのは。仮に君に新たな力を授ける術があっても、今の君には絶対に渡さない。自分が何故こんな行為に及ぼうとしたのか、その過程をよく思い返してみろ事だ」

意地を張る子供の様な、というかあからさまに蔑む様な言い方だった。

「私は意地悪だからね。ここで一つ、今の逢瀬くん状況を君に見せてあげよう」

ファイティは何処からか、華美な装飾の施された杖を取り出すと、その柄でトン、と軽く地面を叩いた。すると、叩かれた箇所が淡く光り出した。

「何を……」

光の中に、見知った顔が映る。

逢瀬瞬。アラタの友人にして、ベルトの本来の持ち主。彼がオリジオンらしき怪物に

殺されようとしていた。思わず声をあげそうになったが

すんでのところで謎の仮面の戦士に助けられ、そいつとオリジオンが交戦に入る中、瞬はその場から離脱していく。ファイティの言葉から察するに、瞬の様子を地面に投影しているようだ。

映像は瞬が唯とハルの手を引こうとするところで止まり、それと同時に地面の発光が止まる。

「まあこんな事が起きたわけ。今回ばかりは転生者狩りに感謝しなきゃね。あーあ、誰かさんがクロストライバー盗まなきゃこんな真似しなくて済んだのにのなー」

「……」

ファイティは執拗にアラタを責め立てる。あまりにも苛つく言い方に、アラタは思わず目の前の男に殴りかかりたくなるが、クロストライバーに弾かれた反動のダメージで満足に動けないし、言ってること自体は事実なので何も言い返せなかった。

「じゃあね。意気地なしの足手纏い君。2度と私の逢瀬君の前に現れないでくれよ」

ファイティはアラタをひとしきりこき下ろすと、倒れたままのアラタを放置して立ち去って行く。

倒れたままのアラタは、先程見せられた映像を頭の中で反芻していた。あの仮面の戦士が居なかつたら、瞬は死んでいた。そしたら、間違いなく自分のせいになる。自らの

身勝手さで、友人を死なせかけた。

(畜生……っ！俺、何にも変わってないじゃねえか！)

これが、力なんか手にしないという、過去の誓いを無碍にした結果。ファイフティが去り、1人取り残されたボロボロの少年は、しばらくの間、自らの浅はかさと思かさ、そして惨めさに、嗚咽を漏らすことしかできなかった。

同時刻。

瞬達の目の前で、メタルビルドに変身した転生者狩りと、オリジオンとギフトメイカー・レイラのタッグの戦いが幕を開けようとしていた。

「ふんっ！」

レイラは無数のサーベルを空中に出現させると、それをメタルビルド目掛けて一齐に射出する。それに対し、なんとメタルビルドは自分に向かって飛んできたサーベルを掴み、それを使って飛んできた別のサーベルを弾き飛ばした。

「なっ……やはり只者ではないか！」

レイラはそれを見て一瞬驚いたような顔をしたが、負けじと更にサーベルを出現さ

せ、射出する。

煉瓦張の歩道を抉るような威力の剣の雨の中を、メタルビルドは躊躇う事なく突っ走り、手に持ったサーベルで飛んできたものを弾きながら、最短距離でレイラに接近しようとする。

レイラは後ろに跳躍して距離を取ると、手に持っていたサーベルを投げ、メタルビルドが持っていたものを弾き飛ばす。

「ふんー！」

「一因果融合・銃剣乱舞第一楽章《ホロスコープフュージョン キルバレットトラップソ
ディ》！」

「転生者狩り覚悟オ！テメエを木っ端微塵の粗挽き肉にした上で犬の餌にしてやんよお
！」

レイラは空中に幾つものライフルを出現させると、それによる一斉射撃を開始する。
メタルビルドは後方に跳躍して回避するが、その後ろからグールオリジオンが襲いかか
る。

が、メタルビルドはそれを読んでおり、後方に跳躍すると同時に肘を後ろに向かって突き出し、奇襲を仕掛けようとしたオリジオンを返り討ちにしてしまう。鳩尾に肘鉄を食らったグールオリジオンは、情けない声を上げながらガードレールの上に倒れ込む。

メタルビルドは、手に持っていたドリルクラッシュャーを投げてレイラのライフフルを弾き落とすと、グルルオリジオンを踏みつけながら語りかける。

「偶にいるんだよな。自分は選ばれたものだからって何しても許されるって勘違いする馬鹿が」

「ふ、ふざけるな！俺は主人公だぞ！踏み台は踏み台らしく倒されとけよおこは俺の世界なんだからさあ！」

「んな訳あるか。社会生活舐めてんのかテメエ。ここは空想の世界じゃ無いんだ。ここにいる奴は皆背景^{モブ}じゃなくて生きてるし、原作キャラとやらも心を持った存在だ。犯罪しといて無罪放免って道理もないよナア？それもわからないようなクズが一丁前に転生してんじゃねーよ！」

メタルビルドはそう説教しながらグルルオリジオンの顔を掴んで持ち上げると、その体を思い切り街灯に押しつけ、必殺技を発動させるべく腰のビルドドライバーのレバーを回す。

「一瞬で楽にしてやる。お前は人に生まれるにや早すぎたよ」

《ガタガダゴットンズタンズタン！ガタガダゴットンズタンズタン！Are You Ready?》

メタルビルドの脚に漆黒のエネルギーのようなものが集約していくのが見える。オ

リジオンは必死にもがいたり手の爪で切りつけたりして抵抗してくるが、メタルビルドは動じない。逃れられない。

「死にたく無い……死にたく無いよおおおっ！」

「ミジンコからでもやり直してこい、ゲロカス野郎」

メタルビルドからの死刑宣告と同時に、必殺の一撃が炸裂する。至近距離から放たれたハイキックが、オリジオンとその背後の街灯を横から薙ぎ払い、くの字に折り曲げさせる。

「ぎゃああああああああつー！」

グールオリジオンは断末魔の悲鳴を上げながら、街灯の残骸と共にレンガ張の道路を転がってゆき、そのまま爆散した。

跡形もなかった。

レイラは対して役に立つことなく死亡したオリジオンをボロクソにこき下ろす。

「やはり並の転生者では手駒にもならんか。そもそも我欲が強すぎて手綱を握ることすらままらなんというのに……つたく、何故ティーダは転生者を手駒にしようとか言い出したんだ」

「意外だな。ギフトメイカーからそんな台詞を聞くとは」

「やはり信頼できるのは己の力のみ、ということらしい。覚悟しろ、転生者狩り！」

レイラはマシンガンを両手に出現させると、周囲のことなどお構いなしにぶつ放す。瞬は咄嗟に唯とハルの手を引つ張り、近くの店舗に逃げ込む。銃声があたりに響き渡り、瞬が先程まで立っていた地面が銃痕まみれになるのを見て、瞬は思わず身震いをする。

逃げ込んだ先は、先程のオリジオンがトラブルを起こしていたメイド喫茶。銃弾から逃れるべく、3人はカウンターの後ろに潜り込む。他の皆はオリジオンの出現の際に逃げたらしく、この場には戦っている2人をのぞいて瞬達以外の人物はいないのが幸いだ。

「ちよこまかと……」

「それが俺のスタイルなんだな。つたく、遠距離攻撃ばつかで分が悪い。装備^{セレクトミス}選び失敗ったか？」

「それならそれを後悔しながら死ぬ」

弾丸を避けながらメタルビルドで挑んだ事を失敗だとぼやく転生者狩りに、レイラは新たなマシンガンを出現させて再び乱射する。メタルビルドは避けるが、飛ばされた銃弾はその後ろにあつたメイド喫茶に突入する。

激しい音とともにガラスが砕け、横殴りの銃弾の雨が店内に降り注ぐ。カウンター裏に隠れていた瞬達は、必死に身をかがめてやり過ごす。こんな下手したら蜂の巣にな

まれないように裏口から逃げよう。お前ここの店員なんだろう？裏口とかの場所分かるか？」

「は、はい。あの奥でござるが……ちよつと腰抜けちゃつて、手を貸していただけると助かるのですが……」

「なら私が。大丈夫？立てる？」

唯が少女に肩を貸し、彼女の案内の元、四人は戦場から離脱しようとする。ベルトが手元にあれば、もう少し状況はマシになっていたかもしれない。転生者狩りがいなかったら、瞬は死んでいたかもしれない。

不幸なのか幸運なのか、曖昧になる感覚に軽く震えながら出口を目指すが、それはすぐに叶わなくなった。

メタルビルドに殴り飛ばれたレイラが、ガンガラガシャンと激しい物音を立てながら、ボロボロになった店内に突っ込んできた。放置されたままの食器やテーブルが砕け散る音が店中に響き渡る中立ち上がった彼女は、軍服についた埃を払うと、恐ろしいほど暗く紅い瞳で瞬の方を睨みつける。

そして。

「まだ居たか、仮面ライダー。ちよつど良い、死ね」

ライフルを構え、瞬達の方を目掛けて撃つ。

瞬は咄嗟に横に跳んで回避する。が、射線の先には、今まさに裏口の戸を開けようとするメイド少女が。彼女は銃弾が自分に向かって飛んできていることに気づいていない。瞬の叫びも間に合わない。

—— 終わった。

しかし、それは呆気なく阻まれた。

《COMPLETE》

銃声の直前に滑り込んできた機械音声。

レイラの背後から黄色い光が差し込んできたかと思えば、その直後、彼女の後方から放たれた光弾が、レイラの銃弾を全て弾き飛ばした。

《EXCEED CHARGE》

「っ!?」

レイラが状況を理解した直後、間髪入れず死角からの一撃が背中に直撃する。

レイラの背中のど真ん中を起点として、彼女の全身に衝撃が走った。そしてレイラの身体は黄色い網状の模様で覆われ、銃を構えた体制のまま、彼女の身動きが封じられる。

ギリギリと、レイラは満足に動けない首を無理やり動かして後ろを確認する。そこには、仮面ライダーカイザに変身を切り替えた転生者狩りが、カイザブレイガンの銃口を向けた状態で立っていた。ブレイガンから伸びる刀身では、充填されたフォトンブラッドが、まるで獲物を求めるが如く黄色く発光している。

「つたく、ウロチョロしてんじゃねえ。死にたいのか」

「は、はひい……」

「大丈夫ですかあ!!?」

命の危機が一瞬のうちに自分に降り注ぎ、そして通過した。その事実を認識した少女は、緊張が解けたのか、カイザに魔の抜けた返事を返すとへなへなとその場に崩れ落ちる。

カイザブレイガンの刀身をレイラに突き付けながら、皮肉混じりに鼻で笑う。

「流石ギフトメイカー。俺よりも無防備な一般人を狙うたあ卑怯者らしいぜ」

「……………」

「しかしお前は馬鹿だな。俺に背を向けると……このように狩られるぞ?」

明確な殺意の籠った、鋭い声。この間バルジと対峙した時と同じだ、と本能的に瞬は理解していた。

すると、先程からダンマリを決め込んでいたレイラが、カイザに鼻で笑い返してきた。

「はっ、お前こそ馬鹿か？私がこの程度の束縛から逃れられないとでも？」

「なんだと？」

カイザブレイガンの拘束はそう簡単に打ち破れるものではない。本来の世界でも、これが打ち破られたのはただ1回のみ。ましてや、いくらギフトメイカーといえどレイラは肉体的には普通の人間。打ち破れるはずがないと、カイザはそう思っていた。

しかし、それはあつという間に覆った。

一瞬、レイラの目が紅く光つたように見えた、と思った次の瞬間、レイラを縛り付けていたカイザブレイガンによる拘束が呆気なく弾け飛んだ。歴戦の転生者狩りも、さすがにこれには驚きを隠せなかった。

「馬鹿な？！？」 いくらギフトメイカーといつても、テメエは普通の人間の筈だろ！何故破ることが出来る？！？」

「さあ？お前がその転生特典ちからを使いこなせていないだけでは？」

レイラがカイザを嘲笑う。しかし、転生者狩りは即座にカイザブレイガンを構え、レイラ目掛けて振り下ろす。

いくら拘束を打ち破られようが、カイザブレイガンのフォトンブラッドは既に充填されている。フォトンブラッドは人体にとって有害なモノ。このまま斬りさえすれば、レイラは死ぬ。

しかし。

デッドリーゼロ・デイスオベイ
「因果焼却・反撃一矢！」

突如として、カイザブレイガンに充填されていた筈のフォトンブラッドが無くなった。何が起きたのだと疑問に思う間も無く、レイラの空いた手に出現したサーベルによつて、カイザブレイガンがカイザの手から弾き飛ばされる。その衝撃でブレイガンからカイザメモリが外れ、刀身が消えた状態でカイザブレイガンが地面に落ちる。

「何をした……!?？」

「私はギフトメイカーだぞ？他人の転生特典に鑑賞することなんて朝飯前だ。貴様の特典に介入し、必殺技を不発にしたに過ぎない」

「転生……特典？」

確か、レイラとかいう少女が似たようなことを言っていた気がする。しかしそれが何なのか、瞬にはわからない。まるでそこだけが周りからあらゆる意味でズレているように感じる。

発言内容が理解できていない瞬を他所に、驚いたような反応を見せる転生者狩りをレイラは笑う。

「しかし滑稽だな。転生者が同じ転生者を手にかける組織など、我々には理解できない。秩序を守るだ世界を守るだの正義ぶつて……お前らも側から見れば世界の癌だろうに」

ぶつ倒れたレイラの真後ろ。そこに現れた人物の名を、カイザは憎しみマシマシの声で叫ぶ。

「バルジイ……またテメエかあ！」

「よ、死に損ない。今日も惨めに転生者殺しご苦労様ですつ」

この間倒された筈のギフトメイカー・バルジであった。バルジは悶え苦しむレイラを担ぎ上げながら、息を吐くようにカイザを煽る。

カイザはベルトの左側につけていたデジカメ型ツール・カイザショットを手に持ち、落ちていたカイザメモリをセットする。そして、地面を思い切り蹴って走り出しながら、ベルトに装填されているカイザフォンのエンターキーを押して必殺技を発動させる。

《EXCEED CHARGE》

「死ねバルジイイイイイイイイイイイイッ!!?」

「あらよつと」

猛毒のフォトンブラッドを纏った一撃が迫る。が、バルジはそれを臆することなく、カイザの手首を掴み上げ、そのまま片手でカイザを投げ飛ばしてしまった。

あまりにもあつけなく、転生者狩りが地面に叩きつけられる。瞬は、当然の疑問をぶつける。

「お前、前に倒された筈じゃなかったのか？」

「え、アレくらいで俺様が死ぬと思ってたの？ バツカじゃねーの？ 伊達にギフトメイカーやってないんだよ。あーあやっぱ現地民は馬鹿ばつかわあ……テメエの常識の範疇で俺達転生者を語るとか、身の程知れよゴミカス」

品性の欠片も無い笑い声を上げながら、瞬も馬鹿にし始める。流星に瞬もキレ気味になるが、バルジはそれを見て更に囁し立てる。

「なんだと……？」

「あれえ、怒った？ うわあ転生者でも無いくせに一丁前に怒ってやがる！ アクロス、お前場違いだから早くフェードアウトしろよ。原作キャラも非転生者も邪魔なだけだからさ。うん早く自害なりしてくれね？」

「さつきから転生者だの原作だの……一体何のことなんだ!?!？」

瞬がキレ気味にぶつけた質問。瞬にとっては当然のものであったが、バルジにとっては予想だにしないものであった。

その言葉を聞いて、驚いたような顔を見せるバルジ。「信じられないことを聞いてしまったぞ!?!？」とでも言っているかのように目を丸くし、しばらく呆然としたかのようになり黙り込んでいたが、酷く興醒めしたような、先程よりも冷ややかさがました声で瞬を罵倒し始めた。

「え、マジで知らない？知らずに首突っ込んでた訳？無いわーあり得ないわーマジ引くわー。どーりで話通じないわけだ。論外すぎる。そんな状態で俺達の邪魔をするとか気持ち悪いし反吐が出る。死ぬ」

「ああ、テメエの存在そのものが気持ち悪い。死ぬよ」

瞬間、バルジの足元から声が出たかと思えば、バルジの身体が横に倒れていった。足元に転がされていたカイザが、バルジの足を文字通りに引っ張ったのだ。しかし、バルジは空中で華麗に横宙返りを決め、何ごともなかったかのように着地する。

カイザも立ち上がり、落ちていたカイザブレイガンの銃口をバルジに向ける。

「悪いがお前と戦ってる暇は無いだ」

「ごちやごちや煩え！俺はテメエを殺すためだけに生きてきた！ここで決着を――」

ヒートアップするカイザ。

そこに、妙に胡散臭い声が割り込んできた。

「ようやく辿り着いた。にしても派手にやったなあキミたち。活気あふれる商店街が凄惨なこと……悲しいね」

「お前は……ファイフティ！」

「邪魔するなよ老害」

「そうそう、仮面ライダーの導き手ファイフティ、久々の登場さ。遅れてすまない。ちよつとコイツを取り返すのに手間取ってね」

裾の長いローブを身に纏った神出鬼没の怪人物・ファイフティの登場であった。呑気なことを言いながらのんびりと歩いてくるファイフティに対し、カイザもバルジも怒鳴り散らす、本人は意にも介していない様子。

そして瞬の近くまでやってくると、軽い謝罪の言葉と共に、ファイフティは手に持っていた物体を瞬に投げ渡す。それは、無くなっていたクロスドライバーであった。

「クロスドライバー!」

「君の不用心が招いた結果だ。今度からは気をつけるんだね」

ファイフティは瞬の肩に手を置き、諭すように言う。

少し離れたところで、ファイフティを初めて見たハルが、唯に訊く。

「唯さん、この人……」

「私も良くわかんないんだよね。アクロスの力を与えたのはこの人なんだけど」

「声はいいけど全然信用できないですね」

初対面のハルからも胡散臭い呼ばわりされているが、ファイフティは全然動じない。用事は済んだ、と言わんばかりに、そそくさと退散しようとする彼だったが、その前にバルジが立ちほだかる。

「そのまま帰すでも思ったか？ テメエがアクロスの背後にいやがったのか、くたばりぞ来ないが」

「誰だか知らないけど酷いこと言うなあ。なんと言われようが、私はまだ死ぬわけにはいかないんだ。さっさと失せてくれないかな？」

「誰に向かつてそんな口を聞いてやがる……俺様はギフトメイカーのバルジ様だ

—

ファイティの挑発に乗りかけたバルジだったが、そこで彼の腕に取り付けられていた通信機の着信音が鳴り出した。バルジはそれを聞くと、不満そうに舌打ちをしながら通信に応じる。通信機を起動すると、通信機から光が放たれ、バルジの目の前に立体映像を投影する。

その映像に映っていた人物に、瞬は見覚えがあった。それは、ビルドオリジオンの時に姿を見せたギフトメイカーの一人、ティーダであった。立体映像のティーダは、周囲をぐるりと一瞥すると、

『バルジ、帰投しろ。お前の仕事はレイラの回収だけだろう？ そいつは早急に改良が必要だからな。戦いはまた次の機会にしる。異論は認めん』

「チツ、仕方ねえ……まあどうせいつかは俺たちが全てを支配するんだ。お前らなんかいつだって殺せるんだからな、俺様は！」

「まちやがれー!」

バルジの足元に、ジツパーのようなものが出現し、それが開いてゆく。あの時と同じだ。このままでは逃げられる。

カイザの怒号を無視して、レイラを担いだバルジは、自身の足元に現れた開いたジツパーの中に溶けるように入ってゆく。カイザが手を伸ばすが、それよりも早く、穴の中にバルジの全身がはいり、それと同時にジツパーが閉じて消滅した。

「クソツタレがあー!」

怒りのままに壁に拳を叩きつけるカイザ。それと同時に、彼の身体が青白く発光し始める。

「次は逃さねえ……殺してやる、殺してやる……!」

呪詛を吐き散らしながら、足元から霧散していくかのように彼の身体は消えていった。

「終わった、のか?」

「ひとまずね。それじゃ私はこれで。クロスドライバーの管理はちゃんとしたまえ、ファイフティお兄さんとの約束ダゾ!」

「うわあ気持ち悪」

ファイフティのぶりっ子じみた言い方に、思わず唯が嫌悪感を露わにする。ファイフティ

は踵を返し、夕日の方向へと遠ざかっていった。

「ここでずっと蚊帳の外だったハルがぼつり。」

「最後まで私達ガン無視されてましたね」

「……」

「瞬どしたの？」

「いや、一体どのタイミングでベルトを無くしたんだろうなあ……って思ってたさ」

「無意識のうちに落としたのかもよ。忘れ物ってそーゆーもんでしょ？」

唯の言葉に、そうかなあ、と頭を掻きながらぼやく瞬。

全ての災難は去ったが、後に残ったのは瓦礫が散乱する無人の商店街。このままだと警察とかやってきて厄介なことになりそうだ。全てが自分の関わることなく終わってしまったことに釈然としない気持ちのまま、瞬は唯達を引っ張る形でその場を去るのであった。

「ここから少し余談になる。」

ファイティもギフトメイカーも転生者狩りも去った後、残った面々の中で一人、完全な巻き込まれた部外者であるメイドの少女は、戦いの痕跡がアチコチに残る商店街を呆

然と見つめていた。

心臓は未だにバクバクしているし、足も上手く力が入らない。そんな彼女の頭の中で、ある記憶が反芻されていた。

「カツコ良かったでござるなあ……あの人」

自分を助けてくれた仮面の戦士。

素顔は知らないけど、それでも命の恩人なのだ。

一体何処の誰で、どんな人なのだろうか。気になって仕方がない。複数の仮面ライダーの力を自在に使っているということは、転生者なのは間違いない。

自分と同じ転生者に逢えるなんて、なんて幸運なんだろう。

「好奇心が抑えられないでござるう！」

彼女はまだ知らない。

のちに彼と奇妙な再会をする事を。

翌日昼、食堂

安い・早い・たまに不味いと評判な学食。先日のビルドオリジオンの一件のせいなの

か、はたまた新入生が学食に飽きたのかは分からないが、新学期冒頭に比べると客足は随分と減っている。

そんな中、善吉はクラスメイトの不知火半袖しらぬいはんそでの食事風景を見ながら、ぼつりと呟いた。「しっかし、お前良く食うよなあ……」

「二日5リットルのカレーを摂取するつてのが私の信条だからね」

それはデブの定型文だぞ、と善吉は不知火に突っ込みを入れる。というか前に似たようなこと言ってたが、その時はラーメンでは無かっただろうか。毎度ながら、不知火の小学生みたいな体型の何処にあんな量の食い物が入るのだろうか、友人の身体のみステリーについて考えざるを得ない。

と、ここで2人と一緒に飯を食べていた剣道部主将・日向ひゅうがが話を振ってくる。

「しかし最近この街物騒過ぎないか？この間は駅前で怪物騒ぎがあったし、春休みにも怪物が子ども攫いまくってたし、昨日も商店街で銃撃事件があったとかなんとか」

「日向くんがそれ言っても説得力ないしな」

「あ？」

「やめろやめろ火種を掘り起こすな。日向も乗っからない！」

なんか目付きが鋭くなった日向をなんとか宥める善吉。日向もまた、色々と問題起こしてめだかに改心させられた一人。確かに不知火の言う通り、あまり説得力はない。

ぱつと見理性的に見えるが、割と凶暴なヤツなのだ。実際善吉も一度怪我を負わされて
いる。

「でも今更だよ。この学園も充分イカれてるしね。特待生組の化け物っぷりを見れば、
な」

「化け物ねえ……」

化け物、の単語を聞いて、オーバスベックな幼馴染・黒神めだかのことが頭に浮かんで
しまうが、「いや化け物に失礼だわ。めだかを化け物と呼んだら化け物の方が可哀想だ
わ」と思い、即座に脳内で否定する善吉。

まあ充分に普通じゃない奴ばかりが集う学校なのは間違いない。こりゃあ疲れるよ
なあと思いながら、善吉は席を立つ。

「俺行くわ。不知火、今日は結構時間かかりそうだから奢ってやれねーんだ。またの機
会に、な」

「じゃーねー」

「ホント入学して一月とは思えない仲の良さだよなお前らって」

クラスメイトと別れ、生徒会室に向かう。ただでさえ生徒会の業務は多岐にわたって
いる上、本来5人のメンバーで回すところを3人で回しているので余計に忙しいのだ。

どうせ今日も依頼が来ている。生徒会庶務として、生徒の為に全力を尽くそうじゃな

いか。

そう意気込みながら、善吉は渡り廊下へと出る。

次の瞬間。

後頭部に強い衝撃を受け、人吉善吉の意識は途絶した。

今日は午前中で授業が終わり、既に放課後に突入していた。

唯の「皆で屋上でランチタイムしようぜ」という提案を受諾した瞬は、ホームルームが終わるなりさっさと部室に向かっていったハルを呼びに行くべく、廊下を歩いていた。

(そういえば、今日はアラタに避けられてるような気がする……気のせいかな?)

歩きながら、今日感じた違和感について考えていた。

今日はアラタの様子がおかしかった。なんか瞬に対して妙によそよそしいというか、

避けられているような感じがしたのだ。瞬には心あたりがないので、いくら頭を捻ってもその理由を考えつくことができない。聞き出せるかどうかは別として、どうやら本人に話を聞くしかないらしい。

そんなことを考えているうちに部室にたどり着いた。部室の扉を開けると、椅子に座りながらペンタブで何かを描いているハルがいた。どうやら昨日や一昨日みたいにスク水にはしっているばかりではなく、一応漫研として活動はしてるらしい。

その向かい側では、何やら神妙そうな顔でスマホをいじっている灰司の姿も。すぐはこちらに気づいたのか、スマホをポケットに閉まって瞬に挨拶をしてきた。

「あ、どうも」

「おやおや、来たんですね」

「ペンタブ……」

「ウチはデジタル派なんですよ」

えへん、と誇らしげに胸を張るハル。

「皆さんは一緒じゃ？」

「屋上でランチタイム。皆お前を待ってたよ」

ハルを誘いにきた、というのもあるが、瞬が来たのはそれだけが理由ではなかった。昨日の戦いに巻き込まれたハルが、変にトラウマを抱えてしまっていないか確かめにきた

のだ。彼女は出会った初日に戦闘を目撃はしているものの、昨日のように直接巻き込まれた訳ではなく、あれはただ見ていただけ。それとこれとは色々と異なってくるのは必然といえよう。

「昨日の件……なんだけど」

「昨日はとんだ災難でしたねー」

瞬が言い切る前に即答するハル。

命の危機にさらされていたのが嘘だったかのように、いつもと変わらない様に見える。肝が座っているのか、はたまた鈍いのかは謎だが。兎に角、変にトラウマになってなくて良かった、とほっとする瞬。

「兎に角、お前らが無事で良かったよ。灰司は途中から姿を見なくなったけど、ちゃんと逃げられていたんだな」

「二人だけ逃げてしまつてすみません……」

「まああんなもん見たら一目散に逃げるのが普通だしな」

「わざわざ心配してくれて申し訳ないです。しかしハルさん、随分と平気そうな様子です……」

「世の中何が起きるかわかりませんから。事実は小説より奇なり、といえますからね。まあ昔から私はあまり顔に出ないタイプって周りから言われてるので、あまり表情で判

断するのは良くないかと」

「うん……ん？」

分かりづらいが、要するに、態度に出てないだけで人並みに驚いたりはしている、ということだろうか。

と、先程までずっとペンタブを操作していたハルがそれをやめ、ペンタブの電源を落として膝の上に置き、どこかキリッとした表情になる。一体どうしたのだろうか。

「話は変わりますが、私は今日は下に白スク着てます」

瞬と灰司は本気でズッコケそうになった。会話の流れガン無視で凄まじい方向に流しやがった。てか凜々しい顔になって言う内容でも無いしら知ったところでどうしろというのだ。

「ホントいきなり会話の流れぶった切ってきたよコイツ。それを俺に知らせて何がしたいのお前。俺じゃなくても反応に困るんだけど」

「でもツツコミを入れてくれるだけマシですよ。他の人だったら無言でフェードアウトして縁を断ち切りますよ」

「……でしょうね。僕だったらさつきのような言葉投げかけられたら痴女認定下しますね」

灰司のキツイ言葉に対し、まあ口を開けばスク水の話ばかりする女子とか普通の人は

付き合いたくないもんな、と納得する瞬。

「私はほら、変態趣味でオタクで自分勝手な、社会不適合者なわけですよ。こんな感じだからずつとぼっちだったんですよ。漫研でも、先輩達からは腫れ物を触る様な扱いでしたし」

それは当然なのは、と瞬は突っ込んだ。あんな常軌を逸したスク水愛を叫ぶ奴と一緒にされるのは誰だってお断りだろうに。

「誤解を生まないよう言っておきますが、昔からこんな感じというわけではありませんよ」

「え、それ本気で言ってるの？マトモなお前が全然想像付かねえ……」

「私、他人との距離感がよく分からないんです。どのくらいの距離感なら他人を傷付けずにいられるか、どうすれば好かれるのか、私にはわからない。皆がやっているようなやり方が、私にはできない。ポンコツなんですよね」

窓の外に目をやりながら、自嘲ぎみにハルは続ける。

「それなのに、もっと私を見ていて欲しい。好きなモノを語り合いたいし、少しくらい馬鹿なことをやりたいと思うってしまう。コミュニケーションが下手なくせに自己顕示欲は一人前にある。我ながら面倒くさい人間ですよね」

要するに、今のスク水狂いの九瀬川ハルという少女は、ぼっちを拗らせた結果として

の人格であると言いたいらしい。ちゃらんぼらん言動も、下手なりの彼女のコミュニケーション。でもそんなものが通用するはずも無く、結果はご覧の有り様というわけだ。

あまり気に留めていなかったが、思い返すと、クラスメイトは皆意図的に彼女を避けていたような気がする。だがこうして話してみると、まあ致し方なしと思えてしまうのは瞬だけでないと思いたい。

「その点漫研の皆さんは良かったんですけど、卒業しちゃいましたし。だからせめて、あの居場所は無くしたくなかったです。初めて私と対等に付き合ってくれたあの人達への恩返しとして。まあ単純に私の趣味という理由が大半を占めてますが」

「100%趣味じゃないの？」

「それが違うのですよ。機会があれば紹介しますよ？」

大丈夫かなあ……と不安になる瞬と灰司。この流れだと、その先輩方もハルと同ベクトルの奴だったりしそうだ。

「でも、逢瀬さんは何故勧誘に乗ったのですか？見た感じ厄介ごと嫌ってそうなタイプですけど」

ふと、ハルが訊いてきた。

よくよく思い返せば、かなり強引に勧誘してしまった割にはあつさりと許諾してい

た。それに対し、瞬はさも当然、といった風に答える。

「まあ変な奴だけど、悪意はねーだろお前。俺は唯が乗ったから自分も乗ったただだよ。一介のオタクとして、創る側に興味が無かったわけでもないんだけどさ」

「そこは素直に興味があつたと言えればいいじゃないですか」

「うっせし灰司い！お前意外と言うじゃねーかおい！」

茶化してきた灰司の頭をぐりぐりする瞬。口数少ないからとつつき難いと思つていたが、案外ノリは悪くないのかもしれない。

散々愚痴つてはいたが、ハルは悪い奴では無いのは確かだ。むしろ趣味があう分、そう言つた面では話しやすいし、ノリが独特すぎて合わせるのに疲れるが、瞬はこの一カ月で変な奴にすっかり慣れてしまったので、本人は無自覚だが正直あまり気になつていなかった。

ぐりぐりをやめて椅子に座り直した瞬。すると、先程の答えを聞いたハルが、いきなり瞬のほうに向かつて机に乗り出してくる。そして瞬の手を取り、

「大丈夫です、きつと貴方も創作とスク水の魅力が分かります！私が手取り足取り教えとさしあげましょう！」

「後者は余計だろ後者は！っておい脱ぐな馬鹿あ！」

興奮したハルが制服のボタンを緩めながら瞬に接近してくる。制服の下には宣告し

た通り白いスクール水着が覗いている。

——が、ラッキースケベとは程遠い何か瞬はお断りである。テンパリ気味に、脳天に拳骨を突き刺して無理やりハルを停止させる。正気に戻ったハルは、頭を押さえながら申し訳なさそうにその場で縮こまる。

「すみません、好きなものの事になるとつい我を忘れてしまい……うう、中々治らないものですね」

「……まあそれが個性、なんででしょうかね？」

「灰司、お前他人事だと思つて適当な事言つてない？」

灰司はニコニコとわかりやすい愛想笑いで瞬の言葉をスルーする。ハルは自分の荷物を片付けると、

「それでは私も作業がひと段落したので、皆さんのところに行きます。逢瀬さんも来るならお早めに〜」

そう言い残して部室を出て行った。マイペースな奴だ。

瞬と灰司も用が済んだので、部室を出て鍵を掛ける。さて、随分と皆を待たせてしまったようだし、さっさと向かわなければなるまい。

「行きましようか」

「そーだな。お前も一緒にどうよ？」

「あーすみません、今日はどうしても無理なんです」
「そうか」

ふと、灰司も誘ってやるべきかと思いをかけてみたが、どうやら用事があるらしい。灰司はさっと断ると、瞬の行き先とは反対方向に走って行ってしまった。それなら仕方ない、とハルの後を追おうと瞬は振り返る。

そこには。

「逢瀬2年。少しばかり付き合え」

黒神めだかが居た。

……さて、一体全体どうということだ？

体育倉庫前

体育倉庫の備品の整理を依頼された阿久根は、倉庫の前で善吉を待っていた。
待つこと15分。

「随分と遅かったじゃないか」

「色々忙しいのはそつちも承知の上でしょうが。ほら鍵持ってきましたよ」

善吉は悪態をつきながら、体育倉庫の鍵を投げ渡す。阿久根はそれを受け取って鍵を開け、若干錆びついた鉄扉を動かす。

倉庫の中は薄暗く、さまざまな用具が所狭しと、それでいてきつちりと納められていた。今回はこの中にある、経年劣化や破損で使えなくなつた道具の処分を行わなければならない。体育倉庫の様子を見て、これは骨が折れそうだと呆れ笑いを溢しながら、阿久根は倉庫に立ち入る。

ふと、後ろを振り返る。善吉は先程からその場から動いておらず、入口を塞ぐようにして立つたままにいる。

「どうした？何突つ立って——」

不思議に思いながら阿久根は声をかけるが、その時、善吉の顔に醜悪な笑みが浮かんだ。そして次の瞬間、善吉は鉄扉に手をかけて力任せにスライドさせた。思わず阿久根は手を引っ込めてしまう。

ガシャンと大きな音を立てて体育倉庫の扉が閉じられ、一気に光源が失われ、薄暗い体育倉庫の中に阿久根は閉じ込められてしまった。扉を動かそうとするが、外からつか

え棒でも使つて固定しているのか、ピクリとも動かない。

「なっ!?? これは一体どういうつもりだ!??」

「邪魔なんて暫く消えてもらえませんかね。アンタが邪魔で邪魔でしかたないんですよ」

ガチャリと、外から鍵がかかる音がする。続いて、チャリチャリという音が耳に入ってくる。外からさらにチエーンかなんかを巻いているらしい。

作業が終わったのか音が止み、代わりに善吉の音がする。いつもとは違う、まるで別人であるかの様に悪意に満ちた声だった。

「お前らみたいなイレギュラーは排除しなきゃ駄目なんだよ。お前らのせいでソーナがいらぬ改変を受けて辛い思いをしているんだ。だから消してあるべき形に直すんだよ」

「あるべき形……その為には俺達が邪魔だというのか？」

「バイバイ。生徒会長サマを始末してからまた会おう」

「待て！めだかさんに何を……!??」

阿久根の叫びを無視して、善吉の声が遠ざかってゆく。

さて、一体どうしたものか。『破壊臣』の異名を持つ彼にとつて、この扉を壊すのは造作のないことだ。脱出は容易い。だが、先程の善吉は明らかにおかしかった。まるで

別人の様だ。どうやら自分達生徒会を排除したい様なのだが、何がどうなっているのやら、イマイチ考えがまとまらない。

阿久根は考えごとをしながら、周囲を見渡す。バスケットボールの入った籠や卓球台が、所狭しと収納されている。が、ここで阿久根は気づく。不自然に動かされた形跡がある。本来ならばきっちり並んで収められているはずなのに、周りからズレた位置に配置された備品がある。

何かある。そう思いながら、阿久根は近づく。すると、近くに置かれていた跳び箱から物置がした。

「……………」

跳び箱の中は人間一人が入れるくらいスペースがある。小学生の頃だったか、同級生がふざけて中に隠れていたな、と思いながら、綺麗に積み上げられた跳び箱の最上段を持ち上げる。

「なっ……………」

中には、頭から血を流した状態の善吉が入られていた。何かで後頭部を殴られたようだ。

顔を近づけてみると、善吉の眉がぴくりと動く。どうやら死んではいなかったようだ。普段はめだかを巡ってバチバチしたりはするが、それでも中学時代から互いを知る

後輩。心配くらいはして当然だ。

善吉の臉が開く。後頭部を押さえながら、時折狭い跳び箱の内壁に体をぶつけつつ、阿久根の顔を見上げる。

「……ハハハ？」

「こんなところでサボリとは不真面目だな」

「目覚めて早々気分悪くさせないでくれませんかねえ？」

「そんな口叩けるなら心配の必要は無さそうだ。一体何があつたんだ？」

善吉から事情——といつても、不意打ちで後頭部を殴られて気絶させられているうちに体育倉庫に閉じ込められた、ということくらいだが——を聞いた阿久根は、腕を組んで考えこむ。

「まだ頭がジンジンするし血がとまらねえ……つたく、殺す気かよ」

「にしても、誰がやつたんだろうね。言動から察するに、めだかさんを目の敵にしているようだけど」

「心当たりが多すぎるんだが」

一体誰の仕業なのか、と思ひ当たる節を探してみたが、そもそも心当たりがありません。見当がつかない。めだかの言動は良くも悪くも人を惹きつけてしまう。それはつまり、敵を作りやすいことを意味し、めだかの近くにいる善吉や阿久根にもその影響が及ぶ訳で——要するに、考えるだけ無駄だった。

「てか何？俺がもう一人いるってのか？」

「そうとしか考えられない。だって他でもない君がめだかさんを排除しようとするかい？」

「まあ俺はそんなことしないっすね」

問題はもう一つ。自分達をここに閉じ込めてきた、善吉の姿をした何者か。そうとしか考えられないのだ。そしてそいつはめだかに危害を加えようとしている。じっとしている場合ではない。急いでここから脱出しなければ。

「……学校の設備を壊すのは気が引けるが、めだかさんに危機が迫っているとあつてはじつとしてられない」

「俺だって同じだ。俺を騙って幼馴染みに危害を加えるとか見過ごせねーよなあ！」

2人は立ち上がる。

「怪我人は留守番でもしていたらどうだい？」

「あまり嘗めないでくださいよ。俺ってめちやくちや凶暴っすから」

学校の廊下を歩く善吉。

いつもの気さくな雰囲気は皆無であり、その顔は本人ならまずしないような、邪念そのものでもいうような表情を浮かべていた。

「待っているよ……俺が修正しなきゃ駄目なんだ、うん」

一瞬、善吉の姿が揺らぎ、木人形のような怪人の姿になる。

だが、それはほんの瞬く間の出来事。仮にこれを目撃した人がいようが、そいつはきつと気のせいで済ましてしまうだろう。それくらいの出来事だった。すぐに善吉の姿に戻る。

彼は左腕に着けた腕時計で時刻を確認すると、生徒会室に向かって駆け出してゆく。

騙ることしか能のない、道化師未満の怪人。

事件の幕引きは近かった。

一晩が経った。

アラタはあれからずつと気持ちが悪く沈んでいた。

(久々だな……こんな自己嫌悪感マシマシなのは)

きつと今の自分は変な風に見えていて、それで大鳳達に余計な心配をかけさせている。そんなことを考えると、余計に気持ちが沈む。自分で自分の心を刺し続けているような感覚が、ずつと纏わり付いている。

『あーあ、誰かさんがクロスドライバー盗まなきゃこんな真似しなくて済んだのになー』

『じゃあね。意気地なしの足手纏い君。2度と私の逢瀬君の前に現れないでくれよ』
頭に響いている、非難の声。

クロスドライバーを盗んだアラタの前に現れた、ファイフティと名乗る男。彼が何者かは知る由もないし、言動にはイライラしているが、彼の非難は正しい。少なくとも、瞬に誠意を見せなければならぬ立場であるのは間違いない。

だが、情けないことに勇気が出ない。今朝からアラタは他の皆を避けて行動してしまっている。向こうは不思議がっていたが、アラタにはどうしても瞬に合わせる顔がなかった。

「はあ……一旦何もかも吐き出せたらなあ……」

罪の意識に縛られて、息苦しくなる。どうしたものか。

そんな重い足取りで、生徒会室の前を横切ろうとするが、そこでアラタの目にあるものがとまる。

「目安箱……」

めだかボックス
目安箱。

黒神めだかは生徒会選挙の際に、悩みがあつたら目安箱に投書すれば相談に乗つてやる、と啖呵を切つていた。その象徴たるものがコレだ。漫画という媒体によつて前世からその存在を知つてはいたが、こうして目の当たりにすると、自分がヤバイ世界にいるのだと実感し、なんだか未恐ろしく思えてくる。

アラタは目安箱をじつと見つめていた。扉の窓越しに室内の様子が目に入ったが、どうやら生徒会室は現在無人らしい。そのまま立ち去つてしまおうかと考えていたが、アラタの足はその場を動かない。

「なんでも、か」

アラタは、考えていた。

今抱えている気持ち、誰でもいいからぶちまけてやりたい。話を聞いてほしい。だけど本人に直接は言いづらい。何ふざけたこと抜かしてやがる、と言われるだろうが、

そうなのだから仕方ない。溜まりに溜まった苦しみを一旦吐き出して、咀嚼でもしなければ気が済まない。謝る前に、淀んだ気持ちを整理したい。

要するに、最後の踏ん切りがつかきつかけが欲しいのだ。それが必要であるということに、アラタは情けなく思えてきた。思わず口から自嘲めいた笑いが漏れる。

そこに。

「すまないが、ちよつと退いてもらえないだろうか」

「あ」

後ろから掛けられた声。その主は、目安箱を導入した張本人である黒神めだかであった。予想外のタイミングで声をかけられ、一瞬固まるアラタだったが、逆にこれはいい機会だと考えてもいた。

この人なら、いいのでは。

生徒の悩みは私の物だ、と豪語していた彼女。彼女ならば、この背中を押してくれるかもしれない。得策では無いかもしれないが、アラタはそれしか頭になかった。

アラタはめだかに頭を下げ、依頼をする。

「すまない。依頼をお願いしたい」

「ん？直接とは珍しい。いいぞ乗ってやる。なんだか思い詰めた顔だが、成る程依頼人という訳か」

場所を移そうか、とアラタは提案する。2人は廊下を歩きながら、話を続ける。

「で、内容は？」

「いや……なんというか、ちよつと話を聞いて欲しいというか。別に悩みを解決して欲しいとかじゃなくて、ただ気持ちの整理のために独り言に付き合っただけというか……」

「安心しろ。依頼人のプライバシーは私が責任を持つて守る」

自信たつぷりに胸を張るめだか。それによつて、彼女の曝け出されている谷間が強調され、思わず目を逸らしてしまう。間近で見るとかなり刺激が強いのだ。うん。

だが今は欲情している場合では無い。気合いで無理やり押さえ込み、アラタは続ける。

「友達の大切なモノを奪つて……危険な目に遭わせたんだ。申し訳ないとは思っているんだけど、どうしても顔を合わせる勇気が無くて……」

「なるほど、要するに友と仲直りしたいのか。だけど合わせる顔がなくて途方にくれていると」

「そうだ。だから、少し話というか、そういうのを聞いて欲しい。そしたら、踏ん切りがつくような気がするんだ」

2人は後者の裏手に出ていた。めだかはアラタの話を頷きながら聞いていた。よし、

なら本題にはいろうかとアラタは考える。

が。

この生徒会長は人よりもちよつとお節介だった。具体的には。

「ならば本人を連れてくるか？ 私なら一分以内に戻つてこられるぞ？」

こんなことを言い出すレベルで。いや本人に合わせる顔がないと言ったんですが、思わずアラタは素つ頓狂な声をあげてしまう。

「え、いや話聞いてた？ そこまでしなくていいって……」

「友情は青春時代の最高の宝。ボヤボヤしていたら取り戻せなくなるぞ。だいたい見ず知らずの私なんかよりも、本人に直接言ったほうが早く済むだろう？」

生徒会長は人の心が分からない。アラタは思わず某円卓の弓兵のような顔になってしまう。そもそも後ろめた過ぎて本人に直接言えないからこうして話したのであって、何もそこまでしてもらつては申し訳ない。

が、そんなアラタの弁解はめだかには届かず。アラタの静止を振り切ると、めだかは馬鹿みたいなスピードで走り去って行ってしまった。いやこれどうするの。どうしてくれるんだ。

「ただいま」

「早っ!?？」

瞬の首根っこを掴みながら、所要時間30秒足らずで戻ってきた。コイツひよつとしてサイボーグかなんかじゃ無いのか。一応前世でも漫画という媒体を通してだが黒神めだかというキャラクターを知っているアラタだったが、こうして直に会ってみると、やはりコイツはやべー奴だと改めて思い知らされるのだった。

で、肝心の瞬はというと、何が起きたのかさっぱりわからないといった様子で、首根っこを掴まれたまま、目玉をキョロキョロと動かして辺りを見渡している。

「あの……いきなり連れてこられたと思っただけ何？そして苦しいです離してくれませんか」

「欠望2年がお前に話があるそうだ」

「アラタが……？え？」

解放されて地面に尻を打ち付けられた瞬は、尻をさすりながら困惑した表情でアラタを見つめる。当然ながら、瞬にはこんな状況に放り込まれる心当たりがない。困ったような顔を向けてくる瞬を、アラタは黙って見つめながら考えていた。

「……」

「さあ、どうしようか？」

だが、これは本来アラタが望んでいた展開の筈。頼んではいなかったが、こうしてめだかが舞台を整えてくれたのだ。ここまでしてもらって、自分がとても情けなく思えて

仕方がないのだが、それはそれ。こうなりややけだ。やるつきやない。

一回深呼吸してから、意を決して、瞬に向かつて勢いよく頭を下げて、感情のままに声を張り上げてアラタはこう言った。

「すまない！」

「え」

一度始めてしまえば、後は勢いでやるしかない。アラタは頭を下げたまま続ける。

「昨日、アクロスのベルトを盗んだのは俺だったんだ！力の有る無しに取り憑かれて

……お前が羨ましくて……つい！」

早くも勢いは落ちて、言葉が詰まる。頭が熱く、白くなってゆくのを感ずる。だが止まるわけにはいかない。

「謝って済む話でないことは分かっている！俺の身勝手な行動のせいで、お前を死なせかけたことは本当に謝っても謝りきれねえ！お前が望むならなんだって」

「分かった分かった分かったから！とりま落ち着け、な？な？」

なんだかハラキリしますとまで言い出しそうな雰囲気だったので、慌てて瞬はアラタを止める。あんまり必死になって謝られても、謝られた側も居心地が悪くなるのだ。それは瞬も望んではいない。なんとかアラタの頭を上げさせ、その肩に手を置く。

「アレくらい命の危機、とつくに覚悟は決めてるから心配要らねーよ。まあ昨日のア

レはマジで終わったと思ったけど」

「だから……」

「お前は謝った、だから俺は許す。後で外野が何を言おうがそれで終わりだよ。てかお前が盗ってたのか、初耳だぞ」

死にかけはしたけど、短いながらもこれまでアクロスとして戦ってきた中で死線というものは何度も遭遇してきた。それは戦うことを選んだ時点で覚悟していた。だから、瞬は死にかけたことでアラタを責めはしない。

そもそも瞬としては、知らないうちに無くなっていたらファイフティから返されたので、誰が盗ったなんて全く考えもしていなかったのだ。それも、自分の身近な人物が盗るだなんて、瞬は予想だにしていなかった。

「しかし意外だな。お前がクロスドライバーを盗ろうとしたなんて」

「意外でもなんでもねーよ。正直、俺はお前が羨ましいと思ってる。ヒーローになつてさ、戦って、人守って……ホント、間近でされると劣等感ハンパないのよ。はあ、どこで差がついたのかねえ……」

前世と合わせれば瞬の倍以上は生きている筈なのに、瞬の方が大人っぽく感じてしまうことに、アラタはしょぼくれてしまう。どうやら、生きた年数と精神的な成長は別というこららしい。

「俺はお前が思ってるほど立派な人間じゃない。昔から、ただ必死に取り繕っているだけだよ」

瞬は校舎の壁に寄りかかり、空を見上げながら続ける。いや謙遜になってないんですわ、という言葉をなんとか飲み込み、アラタは瞬の話聞くのに徹する。

「唯はな。大団円ハッピーエンド至上主義なんだよ。皆で最後はハッピーエンドで終わりたい。初めてそれを聞いた時にな、アイツの考えが馬鹿みたいに俺の心に染みたんだ。だから、俺の動く理由は全部アイツの受け売りなんだ。本当の俺はただの木偶の坊、すつからかな人間なんだよ」

そう。瞬には、自分で一から作り上げた、確固たる意思が欠落している。成り行きでなったといえど、今の瞬は、ヒーローとしては極めて受動的な存在である。他人がそれを知れば、まだ始まったばかりなのだからそれは当然では、と言うかもしれない。だが、瞬自身はそれでいいとは思っていない。今のままでは、遅かれ早かれ立ち止まってしまいかもれない。他人から貰った言葉をそのまま使うだけでは、心は強くなれない。

仮面ライダービルド——桐生戦兔は、ラブ&ピースという信念があった。だが瞬には無い。あるのは幼馴染みの受け売りのみ。だから、瞬は強い意志を持つものに、ある種の憧れのようなものを抱いてしまう。

それは、手に入れた力に釣り合うような人間であろうとする、瞬が抱く一種の強迫観

念からくるものであるのだが……本人はそれには気づいてはいない。

「でも、お前は仮面ライダーだ」

「たまたまなっただけだ。手に入れた力と立場に見合う中身を日々取り繕うばかりのハリボテ野郎だよ、俺って奴は。ただそれっぽい言葉を反響させてる、人の形をした虚しい生き物さ」

「誰かからの受け売りだとしてもそれは立派な志だよな。尊敬しちまうじゃねーか。それに比べて俺は、自分勝手な理由で力を奪おうとした。完全に悪役のやる事だぞ？」

「ふーん……てかさ、お前はなんで力が欲しいなんて思ったんだ？」

「ここで、瞬は根本的なことを訊いてみることにした。それに対し、アラタはびくりと身体を震わせると、目を逸らして口籠ってしまふ。

「べ、別に……」

「単に欲しかっただけだったのか、それとも何か理由があったのか……理由が分かれば、俺や唯、他の皆だつて力になれるだろ？ 話してみろよ。他の誰にも言わないから、な？」

誰にも言わない。これ程信用ならない言葉はそうそうないだろう。アラタも「えゝ本当かよ？」と懐疑的な目を向けるが、瞬は至つて本気のように。それならばその言葉を信じようと、アラタは決心して話し始める。

「……鎮守府での件、覚えてるよな？」

「流石に数日前の事忘れる様な鳥頭じゃないぞ」

「あの時、大鳳が危険な目にあっていたのに、俺は何も出来なかった。それが悔しい。お前に助けられてばかりで、本当に自分が情けなくなる。自分が憎たらしく思えて仕方がないんだ」

あの時、オリジオンになすすべなくやられた時、アラタは自分の無力さを呪った。

「俺だって、自分で守れるならそうしたいんだよ……！何時迄も人に自分の大事なモン守られていて、のうのうと居られるほど能天気にはなれねえ……！」

ただの意地っ張りなのは、アラタ自身がよく知っている。だが、理屈などではそれをどうすることもできない。くだらないプライド。それを通せないならば、自分が自分で無くなってしまう。それほどまでに、大切に思うモノがあるのだ。

一方瞬は、アラタがそこまでして自分で守らなきやならないと言うようなモノについて、なんとなく見当が付き始めていた。というか、この流れならこれしか無いだろうと思っていた。だから、意を決してそれを訊いてみることにした。

「……もしかしてお前、大鳳に気があるのか？」

「はっ……」

瞬の発言に、思わずアラタは取り乱してしまう。

思い返せば、この間の鎮守府の時のアラタの取り乱し用はかなりのものであった。あ

の取り乱し方は、きつと家族だの想い人だのに向けるものだ。あれを見た時、恋愛とは無縁な人生を送ってきた瞬でさえ、うつすらと「コイツもしかして……」といった感じに察していた。

が、素直になれない思春期男子のアラタは、バグったゲームのようにガタガタ震えながら、言葉にならない声を漏らす。

「ばばばばば馬鹿なこと言うな！ おお俺はべべべ別に」

「良いじゃんか。好きな子の為に強くなりたいて。立派な志があつて羨ましいぜ、つたく」

「お前たまにはつちやけるよな……」

「そうか？」

どうやら瞬は茶化しているわけでは無いようだが、それはそれでどこか気まずく感じる。そして、最後の羨ましいという言葉。それに対して、アラタは意外だと思った。

瞬には、自分で一から作り上げた確固たる信念が、アラタには、確固たる意思を押し通すための力が、それぞれ欠けている。お互いに、自分に無いものを眩しいモノだと認識している。要するに、腹を割った話し合いの末に分かったことは、隣の芝は青い、ということだった。

2人は向かい合い、互いに握手を交わす。男の友情の、誓いの握手だった。

「兎に角だ。俺は許す。だからあんな真似すんなよ」

「分かってるさ。俺は決めた。正々堂々、正攻法で強くなつてやる」

これにて問題は解決された。

「ごほん、これにて一件落着だな。うーん実に青春だった。よきかなよきかな」
「……」

その声で、2人は我に帰った。

2人が振り向くと、そこには満足げに微笑みながら頷くめだかの姿。友情トレーニング的なヤツの発生で忘れていたが、そういえばこの人がいたんだった。ということは今までのクサイ男同士の会話も全部聞かれていたわけで……。

「今の会話は全て忘れろ。パンチー」

恥ずかしさがオーバーフローした結果、思わず手が出てしまう2人だったが、めだかは笑いながら2人のパンチを片手にひとつずつ、両手でいとも容易く受け止めてしまう。育ち盛りの男子高校生2人の力を持ってしても、まるで大地そのものを相手しているかのようにびくともしなかつた。

受け止めた拳を一瞥すると、めだかは何かに関心するかのよう頷く。

「実にいいパンチだ。僅かだが私にも響いてきた」

「いや全然びくともしてないんだけど」

「だがまだまだだ。こんなんでは私は愚か善吉にも届かんよ。お前もこの先戦いを続けるのならば、精進するのだな」

そして拳を下に降ろされる。こども簡単にあしらわれては、なんだか色々と自信を無くしてしまいそうだ。

「私個人としては嫌なのだが、兄なら力になれるかもしれん。性格には難ありだがトレーナーとしては一流だしな……」

なにやらぶつくさ言い始めたためだか。そこに瞬が、ある質問を投げかける。

「そういうえびさ、なんであんたは生徒会長になんてなろうと思っただんだ？」

この4月の間だけでも、現生徒会は学園内でもかなり有名になっている。噂や実績だけは以前から知ってはいたが、実際に会ってみて、その象徴ともいえる彼女に、瞬は少し興味が湧いてきたのだ。

「それは簡単な話だ。私は人の役に立つ為に生まれてきた。そのためにピッタリな方法がたまたまこれだったというだけの話だよ」

「バツサリ言うなあ……」

見事な即答であった。質問されてから、考える素振りも見せていなかった気がする。それくらい彼女の声は自信にあふれていた。さもそれが当然であるかのような、そうであるのが自然であるかのような、そんな圧倒的な存在。瞬にはそれが眩しく感じられ

た。

人の役に立つ為に生まれてきた。こんな事を迷いなく言える奴は多分早々いないだろう。瞬はその答えを聞いて、改めて彼女に畏敬の念を感じるのであった。

「そうだ。一昨日のアレ、個人的には興味深かったぞ。あの力を使つて人知れず守つていたのだろうか？素晴らしいじゃないか」

ふと、思い出したかのようによめだかと言う。多分アクロスとして戦っている事を言っているであろう。そういえば一昨日の現場に彼女も居たのだった。

だが、めだかの答えを聞いた後では、やはりどうしても自信が揺らぎそうになり、瞬はどこか頼りなさげな返答をしてしまう。

「ただ偶然居合わせただけだし、見過ごせなかつただけだし……あんたみたいに広い視点なんか、俺にはまだ……」

「それでも立派な行いだよ。もつと自信を持って。案外、自分の凄さは自分で分らないものと言うしな。私が思っている以上に、人が誰かの為に動くことは大変……らしい。私にはよくわからないが。だから、そういう考えに則るならば、お前も充分凄いんだ」

誰かの為に行動出来るだけで充分だ。彼女はそう言っているのだ。人には利己心というものがある。それは生物としてはごく普通の標準装備であり、誰かの為に動くという事は、本能の一部ともいえる利己心と真つ向から反対する事になる。だからこそ、

それに抗いきれる人間が尊ばれるのだ。

「まあ……あんたみたいに凄い人にそうまで言われちゃ、俺も頑張らなきゃな。ありがとう」

めだかに礼を言うも、あそこまでの称賛の言葉は貰ったことがないので、瞬はどこかむず痒いような感覚がする。単に褒められ慣れてないだけかもしれないが。

「さて、結構長い間生徒会室を空けてしまったな。そろそろ戻らなくては。鍵は私が持つてるから、善吉のやつ、入れなくて困ってあるだろうし」

「俺らもいこうぜ。唯達をかなり待たせちまつてるからさ」
「そうしますかね」

そういえば、もともと瞬はハルを呼びに来たのであった。きっと屋上で長い間待たされてる唯は御立腹であろう。ひよっとしたら、もう帰ってしまっているかもしれない。兎に角早く向かわなくては。

3人は校舎内へと戻ってゆく。その顔は、前よりもすつきりしたように見えていた。

それを凝視する人影があった。

「……邪魔者は、排除する」

その頃。

「しかしよお……なんで一誠みたいな変態が赤龍帝なんすかね？ ホント不条理すぎませんか？ ソーナ先輩もそう思いませんか？」

匙は自らの主である支取蒼那 —— ソーナ・シトリーに愚痴をこぼした。

フーステット・ギア

赤龍帝の籠手にやどる龍は、三大勢力の戦争に乱入して暴れ回り、各陣営を大きく弱体化させた元凶。その存在は良くも悪くも世界を掻き乱す。それがあんな変態に宿っているということに、思わず頭を抱えてしまいたくなるのも無理はない。

「俺の神器が嫌というわけでは無いんですけど、やっぱりな」

「でも神器が誰に宿るかは分からないし……それだけは運としか言えないのです。まあ彼の噂は私も耳にしています。色々と強烈な子ですけど、リアスが見出したんだから問題は無いはず……無いはず」

「だといいですけどね」

「俺がなんだっていうんだ？ ええ？」

匙の後ろから、聞き覚えのある声がある。振り返ると、そこには一誠の姿があった。

噂をすれば、向こうからお出ましというわけだ。

「げ、噂をしてたら来やがったよ」

「こら匙、すぐ噛み付かない」

「俺はわかるんだ。お前は同類だつてな！男はだいたい変態なんだよ！」

「一緒にするな！てかお前レベルの変態がうじやうじやいてたまるかつての！」

言葉では表現しづらい、凄惨な形相で睨み合う。一誠の悪評を知っている匙からすれば、できれば一緒にしたにはされたくない。一方一誠は、ハーレム作りのライバルとなりうる匙にバチバチと対抗意識を燃やしている。

両者の睨み合いは終わらない。思春期男子の対抗心はそれほど苛烈なものなのだ。

「また会いましたね」

「あらソーナ、こんなところで会うなんて」

男子二人がわちやわちややっているところに、更に声がかけられる。どうやら一誠だけではなく、リアスと小猫もいるようだ。

リアスとソーナが挨拶を交わしている中、匙に突き放された一誠は、壁に寄りかかり、腕を組んでカッコつける。

「ふっ、モテる男は辛いな……」

「いやどこをどうやったらそんな反応が出るんですか」

「いやまじだぜ？この間知ったんだけど、松田と元浜にオカ研で女取っ替え引っ替えしてると噂流されてたんだよね……まだやらしいことはしてないし！健全な付き合いだし！」

小猫は疑いまくっているが、一誠の言っていることは事実だ。変態のくせして、側から見ればリア充道まっしぐらな一誠に嫉妬してか、変態仲間の松田と元浜にあらぬ噂を立てられていたのだ。流石にこの時はボコボコにしてやろうかと思つた。一部では木場と付き合つてる噂まで流されている始末であり、現在進行形でモテる男の辛さをこれでもかと味わっている。

まあそんなことがどうでも良くなるくらい充実した日々なのは間違いない。こうしてオカ研の面々との毎日を満喫している。一誠は何処までも単純であつた。

「神滅具ロンギヌス持ちに限らず、強者というのは存在からして敵を作りやすいの。イツセーは赤龍帝だから尚更よ」

いやコイツは多分神器なくても色々と敵作つてると思う。主に女性の。匙はそんなことを思いながら、一誠にベツタリのリアスを見つめていた。恋は盲目、という言葉はやはり間違つてはいないようだ。

一応ソーナは一誠とは初対面なので、挨拶をすることにした。

「初めまして。私はソーナ・シトリー。上級悪魔の二柱・シトリー家の次期当主をやらせ

ていただいています。貴方のことは匙から聞いています。赤龍帝……その躍進に大いに期待しています」

「あ、はいどうも……」

ソーナが手を差し出してきたので、かしこまって握手に応じる一誠。後ろで匙が先程以上に凄い形相になっているけど気にしない気にしない。

「それにしても、ソーナともう知り合ってたなんて以外ね。後々対面する機会を設けるつもりだったのだけど……手間が省けてラッキーね。で、ソーナ。最近何か悩んでるみたいだけど、何かあったの？」

リアスに聞かれて、ソーナは生徒会関連のいざこざを話す。

「大変だったわね……で、その後は？」

「変わりなしという所ですね。眷族に生徒会周りを探らせていますが、まだ彼らへの迷惑行為は続いています。早く終わってくればいいのですが……」

「疑われたままといいのは気分が悪いからね……」

「生徒会ってアレだろ？化け物みたいなやつだろ？あんなに喧嘩ふっかけていいのかよ？命知らずだよなーあの怪物エ……」

一誠は一昨日のオリジオンを思い出し、その無謀っぷりに呆れ返る。書記の人にも負けた時点で、勝ち目はないと思うのだが。

「本来は私が生徒会長になって、私達のこの街での活動をしやすくするつもりだったのです。しかし結果はこの始末。規格外の存在によつて目論みはご破産というわけなんです。支持率98%なんて、異常すぎませんか？」

「でもなつてしまつたんなら仕方ない。黒神めだかの存在感は揺るぎないもの。排除しようとするれば嫌でも目立つ。それは駄目だ」

「というか、そんなことすればシトリーの名に泥を塗ることになるわ」

そんな事情があつたのか、と感心する一誠。確かに、就任からまだ1ヶ月も経つていないにも関わらず、彼女の活躍っぷりは見事という他ない。一応悪魔の力による記憶の改竄とかで後始末はどうにかかなりそうだが、それほどの人を消すのは確かにハイリスクだろう。放置したほうが学園の平和も保たれるし、手間がかからないと判断するのは妥当だろう。というか、そもそもソーナがそんな真似を好まないというのが大きいのだが。

そうこうしているうちに、一行は生徒会室の前まで来た。すると前方から、瞬とアラタがやってくるのが見える。その後ろには、黒神めだかの姿も。噂をすればなんとらや、というヤツだろうか。

「お、オカ研一行。何話してたんだよー？」

「私の噂話でもしてたのだろう。構わん、上に立つ者には付き物だからな」

「うわあすげー自信だ……」

この自信は何処からわいているのか、いささか疑問に思う一同。そこに、めだかの後方から善吉が姿を現す。

「あ、いたいた。おーいめだかあ、生徒会室の鍵掛かっててさあ、職員室にもなかったからどうしようかと思つてたんだよな」

「なんだ、それなら直接私の元に来ればよかつたのに。というか阿久根書記は一緒ではないのか？」

「あの人のことは気にしなくていいから。ほら早く」

善吉は手を出して生徒会室の鍵を催促する。

「……」

「どうした？」

めだかは鍵を手渡さずに善吉の掌を見つめている。いや、正確には、彼の手首を見ていた。

左手首にはめられた腕時計を。

「ほら早く。俺これから用事あるんだからさ。何フリーズしてんだよめだか。なあ」

「どうしたの？何か……」

「そうだ、

「貴様、善吉じゃないな」

「な、何言ってるのかさっぱりなんだぜ？なあめだか……」

善吉が言い終わる前に、めだかの左ストレートがその顔面に勢いよく突き刺さった。メキヤメキヤツ!!? という、頭が木っ端微塵になってそうなヤバげな音を立てながら、善吉は壁に背中を強打し、轢かれたカエルのように床にのびる。

一体何が起きたんだと一同が困惑する中、めだかはぶつ倒れた善吉の前につかつかと歩み寄る。

「なにが、てか、なんで……めだかあ、これはないだろ……」

「墓穴を掘ったな」

「墓穴う……?」

「善吉は左利きだし、私の事はめだかちゃんと呼んでくれるぞ?何が目的で成りすましているのかは知らんが、他人に成りすますなら、成りすます対象のリサーチくらいマトモにやるのだな。親しい人間を騙すなら完璧にやれ。さもなくば……」

めだかは凜とした態度を崩すことなく、ただ冷やかな声で告げる。

「今のようになすすぐ露見するぞ。本者はどうした?」

「これ何がどうなっているんすか?」

「わかんねーけど……多分ロクデモナイ展開なのは間違いないな」

他の面々は、困惑したような顔で2人を見つめる。一体、何がどうなっているのか。瞬が聞いただそうとめだかに近寄ろうとしたその時。

「一々うぜえんだよ、原作を乱すイレギュラーの癖にさあ！」

「ッ！」

「おわあっ!?？」

善吉の怒号が響き渡ったかと思えば、次の瞬間、瞬はめだかに突き飛ばされていた。瞬がそれを理解したのは尻餅をついた後。床面で強打した尻をさすりながら瞬が顔を上げると、目の前の床に穴が空いていた。

それを見て、ぞくりときた。今突き飛ばされていなかったら、無事では済まなかった。瞬はまさかと思い、豹変した善吉の方を見る。

「お前らが勝手に動く……いや、お前らがいるから原作通りに進まないんだよお！原作通りじゃなきゃ俺が活躍出来ねえじゃんかあ！」

「随分とあっさり本性を現したな。面白い、下剋上なら受けて立つぞ」

「いや何乗り気になってるんだよ！そいつ殺す気マンマンじゃねえか!?？」

「それがどうした。それくらいじゃなきゃつまらんだろ」

心なしかめだかの目が輝いている気がする。目の前にいる善吉の姿をした誰かさんに、現在進行形で殺意を向けられているというのに。善吉の方は、手から白煙を立たせ

ながら、右手に持った金槌を勢いよく振り上げる。

めだかはそれを避けない。

そこに。

「待てよめだかちゃん。一発俺達にも殴らせろ」

そんな声が割りり込んできたかと思えば、次の瞬間、横から運動靴が飛んできて、善吉の偽者の手から金槌を叩き落とした。金槌は偽者の真後ろの窓ガラスを突き破り、ガラスの破片と共に中庭へと落ちてゆく。

めだかと偽者は、声と靴が飛んできた廊下の向こうに目をやる。その2つを放った人物が、そこにはいた。

「俺の幼馴染みに手エ出してんじゃねーよ、モノマネ野郎」

それは人吉善吉だった。身体の内側に傷をつくっており、頭に巻かれた包帯からは血が滲み出ている。

「これは……!?」

「何よこれ!? どうなってるのよ!?」

「なっ……善吉が2人居る!?」

各々はある得ない光景に驚愕するが、善吉はそんな事知ったことかといった感じに、苦虫を潰したような顔のまま固まっている自分の姿をした偽者に向かって、一直線に走

り出す。

そして、偽者の手間で立ち止まり、

「さつき頭がち割られた仕返しだ馬鹿野郎がつ！」

「びぎやふつ!?」

直後、身体を大きく捻って繰り出される回し蹴りが、偽者の腰に直撃し、偽者の身体を扉が開け放たれたままの生徒会室の中へと叩き込んだ。

そのまま勢いよく、生徒会長用のデスクに頭を打ちつけられ、偽者は床にぶつ倒れる。部屋の入り口から、偽者を睨みつける善吉。その後ろから、新たな人影が現れる。

「まったく、俺達を隔離してめだかさんを騙し討ちとは、随分と卑怯な真似をするもんだ、ねえ？」

「阿久根……!」

同じく本者の善吉と共に監禁されていた阿久根だった。

黒神めだかを排除する際の障害になるとふんで、事前に隔離していたはずの2人が、自分の目の前に揃っている。

「大丈夫ですかめだかさん!?」

「心配はいらん。それはお前もよく知っているだろう?」

めだかは生徒会室に入り、再び善吉の偽者と相對する。その肩越しに、善吉が怒りの

声をぶつける。

「よくも人の頭ぶん殴ってくれたよなあ！日向の時に慣れたけどさあ！」

「ふざけんな……っ!?」 お前らは体育倉庫に閉じ込めて鍵も開かないよう細工しておいたはず!?」 一体どうやって脱出したんだ!?」

その問いに対し、阿久根は即答する。

「そんなもの壊したに決まってるさ。まあ学校の備品を破壊するのはアレだと思ったんだけど、緊急事態だったし」

「今回ばかりは助かりましたよ……すっかり丸くなって忘れてたけど、流石破壊臣つてところっすかね」

排除していた障害物ふたりが、涼しい顔して目の前に現れたことに動揺する偽善吉だったが、その動揺はすぐに怒りに変わった。

「許さねえ……黒神めだかあ！許さんぞお！絶対抹殺！原作尊守！逸脱厳禁ンンンンンンンンンンンンンンンンンツ！」

《KAKUSEI SURFACE》

もう1人の善吉は、発狂しながらその姿を変えてゆく。全身にジッパーが現れ、まるで皮が剥がれてゆくかのようにそれが展開してゆく。そしてその中から、木製のデッサン人形のような怪人が姿を現す。

そう、これがこの怪人——サーフィスオリジオンの能力。それは高度な擬態能力。それを用いて場を引つ掻き回していたのだ。

サーフィスオリジオンは変身が完了すると、即座にめだかの顔を殴りつけた。他の者が反応するよりも早く、鈍い音が部屋に響く。至近距離でオリジオンのパンチを顔面に受けて、無事で済むはずがない。誰もがそう思っていた。

「で?」

バシン。

めだかは、何ごともなかったかのような涼しい顔をしたまま、自らの額に当たっているサーフィスオリジオンの拳を左手で掴み上げると、なんと、そのままオリジオンをぶん投げた。

全員が呆気にとられる中、投げられたオリジオンは立ち尽くす瞬達の間をすり抜け、開けっ放しのドアを飛び出して廊下の壁に叩きつけられる。

「つ、強え……」

「凄いよめだかちゃん! パなかった!」

「ま、だ、だあああああつ!」

「ふんっ!」

めだかは身体を強く捻り、振り下ろされたバットに対して回し蹴りをかます。すると、蹴りの当たったバットは、なんと木っ端微塵に砕け散ってしまった。金属製にもかかわらず、だ。

同様するオリジオンに、めだかは深く腰を落とし、正拳突きを叩き込む。逃げ場の無い壁際でこれを受けたサーフィスオリジオンは、再び壁に強く叩きつけられ、ズルズルと倒れ込む。更に、めだかの正拳突きの衝撃で、廊下の窓ガラスも何枚か砕け散る。

「ば、化け物やんけ……」

ほぼ無傷で振り返りにしてしまつたためだかに対し、サーフィスオリジオンは満身創痍。これではどちらが加害者なのやら。

「やったか？」

「いや、まだだ。来るぞー」

サーフィスオリジオンは、混乱と痛みの中で立ち上がる。一体なんだというのだ、この黒神めだかは。こんなの、人の皮被つた化け物じゃないか。彼は早々にめだかを狙う事を諦め、手負いの善吉に狙いを定める。凡人たる善吉の方がやり易いと踏んだのだから。

が。サーフィスは彼を侮り過ぎていた。十数年も黒神めだかという人間に寄り添い続けた普通が、ただの雑草で済む訳が無かつた。

「俺を甘く見るなよ。しぶとときには自信があるんだよ！」

「!?」

目にも止まらぬ速さで繰り出された足払い。それによつてサーフィスは体勢を崩される。そこに間髪入れず、反対の足によるローキックがサーフィスの顔面に直撃する。

顔を抑えて後ずさるサーフィスに、善吉は指を刺しながら叫ぶ。

「人を闇討ちした挙句になりすましやがつてーこれ以上好き勝手させるかよー！」

自分をボコつた上に幼馴染みに気概を加えようとしたことに激怒しながら、善吉はオリジオンの腹めがけてハイキックを叩き込む。あまりにも鋭いその蹴りに、オリジオンの身体はくの字に折れ曲がつた状態で壁に叩きつけられる。

—— ダメだ。コイツら強い。

排除しようとしていた相手の予想外の強さに恐れをなしたサーフィスオリジオンは、這う這うの体で生徒会室から逃走する。

(聞いてねえよーなんだあいつら!? もしかして全員転生者かよ!? ふぎけんなよギフトメイカー! この世界にいる転生者は俺だけじゃ無かつたのかよ!? ここはハイスクールD×Dの世界の筈、イレギュラーは他にいるはずがないだろ!?)

理不尽さに怒りながら逃げる彼は、めだかボックスそのさくひんを知らないのです、上記の結論に至る。というか、全て彼が勝手にそう思い込んでいるだけである。

サーフィスオリジオンを追って瞬達も廊下に出る。その時には既に、オリジオンは近くの階段を駆け上がり始めていた。だいぶボコボコにされた割には動きが速い。

「兎に角逃げなければ……ああくそ！ なんとる屈辱！ 臥薪嘗胆ンンっ!!？」

「くそっ！ 何処まで逃げる気なんだ!!？」

オリジオンの向かう先には屋上に通じる扉。

「待て、屋上には唯達が……！」

ここで、屋上で唯達を待たせていることを思い出し、焦る瞬。このままだと、何も知らない唯達に危害が及んでしまうことになる。早急に何とかさすべくクロストライバーを取り出し、アクロスに変身しようとする瞬。しかし、

「ゆるさねえ……負けねえぞおらあ！」

「ぐはっ!!？」

ぱつと振り返ったサーフィスオリジオンに蹴飛ばされ、階段の踊り場に突き落とされてしまった。クロストライバーが手から離れ、一階下の廊下に転がり落ちてゆく。

その隙に、サーフィスオリジオンは階段を駆け上がり、開けっ放しの扉から屋上に飛び出す。

「邪魔だあ！」

「ぶぎこやあ!!？」

屋上の扉を開けるなり、近くにいた志村を蹴飛ばし、山風を突き飛ばしながらサーフィスオリジオンは逃げる。

しかしここは屋上。安全な逃げ場なんて無い。

「あんたは一昨日の……」

「だったらなんだってんだよ……お前らもイレギュラーなんだから、なら俺に殺されても文句ないよなあ!」

「何を……」

唯の言葉に、キレ気味に返すオリジオン。焦燥と恐怖に支配され、冷静さは皆無であつた。

自棄になつたのか、オリジオンは唯に襲い掛かろうと、手に持っていたハンマーを振り下ろすが、唯は身体を横に捻つてそれを避ける。オリジオンは続いて、振り払うようにハンマーを振り回すが、唯は綺麗なバック宙でオリジオンから離れる。攻撃を避けた唯に対し、オリジオンはキレ散らかす。

「チョコマカと逃げんなよ……邪魔なんだよお前ら全員!俺に活躍させろよお!」

「何言ってるかわかんないんだけど!!? いきなり殺しにかかるといってなによ!!?」

「待て!変身っ!」

《CROSS OVER!仮面ライダーアクロス!》

両者が言い争いを始めた所に、瞬がアクロスに変身しながら飛び込んだ。両者の間に割り込みながら、振り下ろされたハンマーをはたき落とし、唯を抱き抱えてオリジオンから距離を取る。

「瞬！今まで何してたの？！」

「色々あったんだよ色々とな！兎に角、皆を連れてここから逃げろ。今度こそ逃さない！」

「邪魔すんなよ仮面ライダー！原作を守ろうとする行為の何が悪いんだよ？！」

「何言ってるのかわかんねーんだよよ！」

手を摩りながらぶち切れるサーフィスオリジオンだが、直後にアクロスに顔面を思い切りぶん殴られ、屋上のフェンスに叩きつけられる。あまりにも自分の思い通りにならない現状によって心身共に疲弊しきったサーフィスは、この場を逃れる術はないかと必死に考える。

—— そして気がついた。自分の横数メートルにいる、九瀬川ハルの存在に。

そこから先は速かった。

その考えに思い至つてすぐに、サーフィスは痛みで軋む身体を無理やり動かしてハル目掛けて全力疾走し、その腕を鷲掴みにする。そして、ハルの腕を後ろに回して抑えつけ、二の腕程はありそうな長さの釘を取り出し、その先端を彼女に突きつけた。

「こいつがどうなつてもいいのかあ！ああっ!?？」

「ヒギイツ!?？」

端的に言うとうと、彼はハルを人質に取るという暴挙に出た。

「九瀬川2年！」

「テメエツ、汚ねえぞ！」

「黙れイレギュラー共！貴様らを消せばこのズレにずれた世界も原作通りに進む！予定調和！未来安泰！確約栄光！」

その卑怯な行いに対し非難の嵐になるが、サーフィスオリジオンは逆ギレして意味不明なことを口走る。

「絶対静止！発句厳禁！絶対服従！生徒会長も仮面ライダーも大人くししなきやあ、こいつの命はねーぞ！」

「くっ……」

アクロス達から距離をとりながら、サーフィスは笑う。人質を取られてしまつてはどうしようもない。

人質を獲得したことで優位に立ち、気が大きくなつたサーフィスは、中指を立ててさかんにアクロス達を挑発する。もちろん、彼の台詞の内容はアクロスには理解できない。

サーフィスはハルを片腕で抱き寄せると、もう片方の手に持っていた釘を、行動を封じられたアクロスに向かって投げつける。

「ふんー！」

「があっー！」

繰り返し、繰り返し、アクロス目掛けて釘がミサイルのように飛んでくる。世間一般にヒーローと呼ばれる人種には、この上なく効果的な、狡猾な手法だ。

幾度となく攻撃をうけ、屋上の床に膝をついたアクロスに、サーフィスは持っていた金槌を投げつけた。それは聞くに耐えない鈍い音を立ててアクロスの顔面にぶつかり、アクロスの身体を屋上の床に倒れさせる。アクロスは立ちあがろうとするが、何故か身体が痺れて思うように動けない。

「瞬ー！」

「身体が痺れて動けないだろ？この釘には神経毒が塗ってあるんだよー！」

「確かに……身体が思うように動かねえ……！」

立ち上がるうとしても、身体に力が入らずにすぐ崩れ落ちてしまう。それを見て、もうアクロスは脅威ではなくなつたと判断したサーフィスは、次はどいつから始末してやるうかと考えながら周囲を一瞥する。倒れたまま動けないアクロスに駆け寄る唯か、此方を睨みつけている善吉か、先程から黙り込んでいるアラタか。

どの道全員殺すのだ。コイツらは後々になつて邪魔になる。ただそれが早いか遅いかの違いに過ぎない。

「余計な真似して原作をしつちやかめつちやかにするから悪いんだぜ？お前らイレギュラーは存在が悪なんだよ、分かれよ！」

「イレギュラーがなんだっていうんですか？」

「へ、へえ……口答えするんだおまえ。生意気だなクソが！」

「ハル！奴を刺激しちゃ駄目！」

「無理です。私、自分勝手な基準でイレギュラーだのなんだの、そんなことほざく輩が許せないんですよ」

「黙れ！黙らねえと殺す！」

「それがどうした！自分ルールで人を好き放題に傷つけている貴方みたいな奴なんか怖くもない！」

いつもの敬語口調が崩れ、ただ感情的にハルは怒る。

九瀬川ハルは世間一般からは逸脱している。故に友達もできないし、誰の輪にも入れない。彼女の場合、それに趣味嗜好も合わさつて長年孤独であり続けた。

でも、そんな爪弾き者だからこそ、それには怒る。弾き出されたものを蔑むべきではないと。自分もそうだから。

だが悲しいかな。オリジオンにはそんな言葉は通じないのです。なんせ彼らは、第二の生を受けるにあたり、力と欲望に溺れて人の心を捨てた、人の形をした化け物なのですから。

「じゃあ、死ね」

瞬間、怒りが頂点に達したサーフェイスオリジオンは、ハルの拘束を解いたかと思いきや、片手で彼女の頭を強くフェンスに押しえつけ、空いていたもう片方の拳で思い切りハルの腹を殴りつけた。

「ばはっ……!!？」

メキヤメキヤと、人体から出てはいけないような音を鳴らしながら、ハルの身体がくの字に折れ曲がる。

そして殴られた衝撃は、彼女が背中を預けていた屋上のフェンスにも伝播し、彼女の寄りかかっていた周辺のフェンスが千切れ、ハルは屋上から投げ出される形となる。

「あ……」

「ハルウウウウー！」

神経毒がなんだ。それがどうした。アクロスは痺れる身体を無理やり起こし、ハルに手を伸ばそうと駆け出す。

だが、圧倒的に間に合わない。アクロスでは遅い。

そこに。

「任せる逢瀬2年。私なら間に合う」

「!?？」

「めだかちゃん！」

アクロスの遙か後方にいた筈のめだかが、一瞬のうちにアクロスの真横に現れたかと思いきや、すぐに彼を追い越していった。これにはサーフィスも驚き、咄嗟に神経毒を塗った釘を何本も投げつけるが、なんとそれはめだかの身体をすり抜けてしまう。

—— いや、すり抜けてはいなかった。めだかが増えていた。

分身の術。彼女の場合は、単に送り足と継ぎ足を交互に使っただけなのだが、彼女のそれは分身を生み出すレベルの速さに達する。が、普通はそんなこと出来るわけがないので、めだかをよく知る善吉と阿久根以外の全員が口をあんぐりと開けて呆然としてしまう。

「どれが分身でどれが本者かどうかなんて知ったことか！なら全員纏めて——」

サーフィスは分身も本者も纏めて始末してしまえばいいと判断し、ありったけの毒釘

を取り出すが、その瞬間、彼の目前に迫っていた無数のめだかの分身が全て消え失せる。

「死なせやしないよ。誰一人、私の目の前では！」

「はうえっ!!?」

いつの間にか、めだかはサーフィスオリジオンの真横を通り過ぎていた。そしてそのまま、フェンスの穴の空いた部分に躊躇いなく飛び込んでいく。

「おいっ!!?」

「何考えてるのあの人!!? 屋上から飛び降りた……!!?」

そう。彼女はハルを助けるべく屋上から飛び降りたのだ。これには皆驚いてしまう。幾らハイスペックな存在であろうと彼女は生物学上は人間の部類。こんな高さから飛び降りて無事で済むはずが無い。

その事実を理解したサーフィスは、引き攣ったような笑みをこぼしながら、やがて大爆笑し始めた。

「はっはっはあ! 案外大したことねーじゃんかよお! 雑魚雑魚敗敗弱弱弱弱う! 結局最後に勝つのは俺だ! 原作を壊そうとするテムエらよりも、原作を守ろうとする俺の方が偉くて正しいってことさ!」

「何訳の分からねえこと言ってるんだお前……人を傷つけておいてなんだよそれ……!」

「お前も地獄に直送してやるぜ仮面ライダー! イレギュラーは殺す! 原作は俺が守る

！」

アクロスの怒りはサーフィスを素通りする。全く通じていないのだ。この期に及んで尚も自分を正当化しながら、サーフィスはアクロスを踏みつけ、一誠達の方を向くと、誇らしそうに声をあげる。

「匙、一誠。これはテメエらのためなんだぜ？ 原作にいない邪魔ものを俺が消してやってるんだ。お前らの邪魔をするイレギュラーを消してやってるんだから、感謝して欲しいくらいだぜ？」

それを聞いてアラタはとてつもない気持ち悪さを感じた。

ああ、同じだ。

手段と目的を履き違え、君のためだと口先だけの言葉を盾に自分の好きなようにする傲慢っぷりは、さつきまでの自分となんら変わらない。一度は逃げた癖して、勝手に羨み、焦って力を得ようとした自分と同じなのだ。自分は、そんなものにはなりたくない。堕ちたくない。堕ちてたまるか。変われ。羨むな。こんな卑怯者と同類になつてたまるものか。

アラタはサーフィスの言葉をぶつけられた周囲を見る。皆、答えは決まっていた。

「私達の為……？ ふざけないで、迷惑です」

「お前のせいでいらねー疑いかけられたんだよ馬鹿！ 謝れ！ ソーナ先輩に謝れ！」

「学園の平和を乱しておきながら随分な物言いね、呆れるわ。私達は貴方の助けなんか要らないわ。馬鹿にしているの？」

「俺だつてお前に頼んだ覚えないんだよ！」

余計なお世話だ、ふざけるな。それが彼らの答えであった。

ソーナ達から口々に反論をくらい、サーフィスは唸る。お前達のためにやってやったというのに、なんだその言い草は。サーフィスの手が怒りに震える。完全な逆ギレだが、傲慢な彼にとっては正当な怒りなのだ。

「はっ！お前ら恩を仇で返すつもりかよ？いい加減にしないと、いくら優しい俺でもブチ切れるぜ？いいのか、俺の怒りは高くつくぞ？」

「まだわかんねーのかよ。そんなの誰も望んでいないんだよ。お前がやっていることはただの破壊だ！」

自分の行いを否定する一誠達に、サーフィスは怒りが込み上げてくるが、そこに、アラタの口からサーフィスを否定する言葉が飛び出した。

サーフィスは、モブキャラの分際で自分に口を出してきたアラタに対し、息を吐くように罵声を浴びせる。自分は間違つてはいない、正しいのだと必死に弁護するように。

「なんだお前。モブキャラが出しゃばるなよ！」

サーフィスが叫ぶが、アラタは動じない。こんな卑怯者に恐怖など抱かない。抱くの

は憤りだけだ。アラタは大鳳が止めるのもきかず、サーフィスにつかつかと歩み寄りながら、彼の間違いを指摘し続ける。

「お前、いつまでここにハイスクールDXDの世界だと思つてやがるんだ？ お前が今生きている此処は！ 紛れもない現実なんだよ！ 現実にはモブキャラもサブキャラもヒロインも主人公も全部一人もいないし、予定調和の原作展開なんてものもある訳ねーんだよ！ いい加減現実を見ろよ……じゃないと、お前は一生幸せにはなれねーぞ」

「テメエ……まさか転生者か？」

「一緒にするなよ。俺はただの……ちよつくら転生しただけの愚か者だよ」

サーフィスはアラタが転生者であることを知つて動揺する。こんな所に、また別種の邪魔者がいたのだから当然だ。だがアラタはそんなこと知る良しもなく、ただサーフィスを睨みつける。

アラタのいう通り、彼は大事なことに気付いていない。

転生した先の世界は、自分がかつて見た空想の世界ではなく、紛れもない現実。そして自分自身も、その世界の一部になっているのだ。いくら自分にとってはフィクションの話だろうが、その物語の住人にとってははれつきとした現実。それに気付いていない時点で、彼は劣っていた。

そしてアラタは、アラタが転生者だと知つて動揺するサーフィスに体当たりを仕掛

け、瞬の上からどかす。

「いつまで俺のダチ踏みつけてんだ、どけよこの野郎！」

そのままサーフィスを押し倒すが、転生者といえど特典を持たない普通の人間であるアラタと、ギフトメイカーによって覚醒させられたオリジオンの差は圧倒的なものであり、あっさりとアラタは蹴飛ばされてしまう。

だが間髪入れず、そこに匙の神器 アフターフィッシュン、ライズ “黒い龍脈” の舌がサーフィスの足に絡みつき、動きを封じると同時にその力を吸収し始める。ずるずると、引きずられる形でアラタから引き剥がされるサーフィスオリジオンに、匙は啖呵を切る。

「俺もそーだよ。たしかにあの生徒会長は生簀かねえけどよ、お前みたいなことしたらソーナ先輩に合わせる顔なくなるからよお！てかまずお前の言動が気に食わねえんだよ卑怯者！」

「お前みたいになやつに助けてもらうほどヤワじゃないんだよこっちは！」

一誠もそれに続いて、倍化したパンチをサーフィスにお見舞いする。情けない悲鳴をあげながら、サーフィスは床をゴロゴロと転がっていく。そこに、立ち上がったアラタから追加口撃を受ける。

「てゆうかお前、どーせ自分が活躍できなくなるかもしれないから、邪魔な奴を消そうとしてるんだろ？ちつせえ奴。自分の舞台くらい自分で見つけやがれ木偶人形！」

自分がこんなこと言う資格が無いのは分かっている。瞬に謝る時だって、お膳立てしてもらっていた。だからこれは、アラタ自身にも向けた言葉でもあるのだ。

一方、サーフィスはオリジオンはアラタの言葉を反射的に拒絶していた。何くだらないことしているんだ。そんな事やめろ。アラタは暗にそう言っているのだ。しかし、その意見は、それを言ったアラタの目は、サーフィスには耐え難いものであった。

何故ならそれを吞んでしまえば、自分が転生した意味が無くなってしまふから。一氣に無価値な存在に成り下がってしまうから。今更それになるなんて我慢できない。結果として、サーフィスは更に激昂し、ヤケクソ気味に周囲に怒鳴り散らす。

「俺をそんな目で見るんじゃないやねえお前らは俺を輝かせる舞台装置でいいんだ上等だろ！全員粉碎！」

「お前……そこまでして何になるんだよ……！」

「させるかよー！」

善吉のハイキックがサーフィスの顎を下から打ち上げる。数秒の間滞空したのち、サーフィスは屋上を囲うフェンスにぶち当たって床に落ちる。

顔を上げた彼らの前に、阿久根と善吉が立ちはだかる。2人とも顔に青筋を浮かべていた。

「俺の怒りは高くつくぞ、と言ったな。悪いが俺達の怒りはお前以上に高くつくぜ！」

「君の賛同者はゼロ。それでもまだ俺達を排除するかい？」

「今更遅えよ！生徒会長は死んだ！ついでに煩いモブキャラも死んだ！お前らも皆アイツらみたいにならねばいいんだ！お前らが死んでも原作にはなんも影響が無いからなあ！」

死人に唾を吐くが如く罵倒をぶちまけながら、サーフィスは金槌をやたらめつたらに振り回す。

気に入らないやつは、邪魔なやつは殺せばいい。彼がギフトメイカーに、オリジオンに覚醒してもらった時に言われたセリフ。それは酷く、素晴らしいほどに心に染み込んだ。転生者だから、選ばれた人間だから、それくらいは構わないだろう？彼は自分の行いを、そうやって正当化していた。

だが、その発言はマズかった。

なんせ彼は、アクロスの、瞬の怒りも買ってしまったのだから。

「誰がモブだよ！ふざけるな！アイツを、ハルをモブキャラ脇役呼ばわりするなああああああああああつ！」

声を張り上げ、いまだ満足に動けない身体を無理やり動かして、サーフィスに体当たりをする。金槌を取り落とし、サーフィスは床に倒される。

「邪魔すんなゴミカス！なんで俺に好き勝手させねーんだよ！」

「あがつ!?」

だがまだまだ本調子ではない。踏ん張りが効かない故に、サーフィスの蹴りであつさりとアクロスは引き剥がされ、一気に形勢が逆転する。

「邪魔な奴が2人程死んだだけだろ?なんでそんなに怒るんだよ」

「お前にとつての邪魔者だろ。この世界に邪魔な奴がいるもんか。皆揃つて世界なんだよ」

やはり分かり合えない。同じ人間の筈なのに、価値観があまりにも違いすぎる。サーフィスは金槌を拾い、倒れたアクロス目掛けて思い切り振り下ろす。

「じゃあ死ぬよアクロスウウウウウウッ!」

が、ちよつと待とうか。

ちゃんと死に様を確認しておかないと、足元掬われるぞ?

「残念だが、私を死んだと決めつけるのは早計だ。ちゃんと確認しなければ、このように

反撃を喰らう羽目になるぞ？」

サーフィスの手が止まる。金槌が、アクロスの目の前で失速し、サーフィスの手から落ちる。いつのまにか、サーフィスの首筋に、毒釘が突き立てられていた。

こんなあり得ない。なぜならそれはあり得ざる声だったから。先程死んだはずの邪魔者の声だったから。わなわなと震えながら、サーフィスは振り返る。

「もつと付き合え。下克上があっさり終わっては味気ないだろう？」

「め、めだかちゃん！」

「馬鹿なあ!!？」

なんと、ハル諸共地上に落ちたはずのめだかが、ハルを背中に負ぶった状態でサーフィスの後ろに立っていた。全身傷と血だらけで服も破けて半裸状態だが、彼女は凜とした態度を崩すことなく、サーフィスに毒釘を突きつける。

「な、なんで……ここ屋上だぞ？なんで五体満足でピンピンしてやがる!!？」

「私は生徒会長だぞ？校舎の壁くらい登れなくてどうする」

「登って……ああ！見てこれ！」

志村がフェンス越しに地上を見下ろして、何かに気づいたかのように声をあげる。サーフィスもつられて下を見る。そこには、校舎の壁面いっぱい突き刺さった無数の釘が存在していた。そして、一番低い位置に刺さった釘からは、上に向かって一本の溝

のようなものができている。

「まさか、俺の釘を……」

「ちよつと拝借したぞ。その気になれば生身で壁面を駆け上がることも可能だったが、丁度そこにあつたからな」

そう。めだかはすれ違いざまにサーフィスから釘を数十本程くすねていたので。そうして、空中でハルをキャッチしたのちに釘を壁に刺して減速、からの釘を足場にしたクライミングでここまで登ってきたというわけだ。

「へっ！俺の幼馴染み舐めんよ？これくらいでくたばるタマじゃないんだからな！」
「俺だつて信じていたさ、なあ？」

なんだか誇らしげにしている生徒会男性組。一方、唯はめだかの背中から降りたハルに、一目散に駆け寄ってゆく。

「ハル、大丈夫？！」

「おかげさまで。流石の私もビビりましたよ……」

「無事で良かった……ありがとな、めだか」

「これくらい当然のことさ。これで、奴に心おきなく対処できると言う訳だ」

（ば……化け物だ!!？ こいつは人間じゃない！まさか……俺と同じ転生者……）

サーフィスは五体満足で帰還してきためだかに今更ながら恐怖を感じる。が、それを

見透かしていたかのように、ある声が割り込んでくる。

「残念ながら違う。この世界には化け物クラスのやつなんかゴロゴロいるんだよ。君が知らないだけで、ね」

「ファイフティ……？」

「ほらこれ飲んで。ファイフティお兄様の謹製解毒剤さ」

屋上の給水塔の上に、いつの間にもやらファイフティが立っていた。彼は苦しそうにしている。アクロスを見ると、液体の入った瓶らしきものをアクロスに投げて渡す。

一旦アクロスの変身を解除し、瞬はその瓶に入ったモノを飲み干す。すると、たちまち身体が自由に動くようになった。

「いける！サンキュなファイフティ！」

これでようやく瞬は戦えるようになった。これで万全、役者は揃った。

サーフィスは怒りで呼吸を荒げながら、全方位に向かって殺意をばら撒いている。それを冷静に見ていたためだけは、何処からか取り出した扇子を広げ、それでサーフィスオリジオンを指す。

「哀れなものだ。貴様もかつては夢と希望に溢れ、人生の可能性を信じていた純粋な少年だったに決まっている。現実への失望からレールの如き人生から外れる事を極度に恐れるようになったとしか考えられん。ならばその心、改心してみせよう！」

ビシィツ！という音が聞こえたような気がした。サーフィスは、めだかの発言を鼻で笑う。

人吉善吉曰く、黒神めだかの真骨頂パート1・上から目線性善説と呼ばれるそれは言われている本人からしたら、到底的外れなものだった。が、そんな事はどうでもいい。これが飛び出たという事は、彼の命運は決まったようなモノ。

瞬はめだかの隣に立ち、クロスドライバーを起動させる。ここからは自分の役目だ、とでも言うかのように。

「ありがとう。後は俺がやる」

「ああ任せた。これはお前の役目だからな、仮面ライダーアクロス。存分にやってしまえー！」

《NEPTUNE》

《ARCROSS》

2つのライドアーツを円形のバックル上部に差し込む。

「変身！」

《CROSS OVER! LEGEND LINK! SET UP! ネプテューヌウウー!》

ライドアーツがバックルの上部から側面にスライドし、それと同時にバックルから無

数の光の束が放出される。それは瞬の身体に張り付いていき、アクロスのスーツを瞬の身体の表面に形成していく。今回はネプテューヌのライドアーツを同時に使用しているため、さらに追加で黒と紫を基調としたアーマーが上に乗っかってくる。

仮面ライダーアクロス・リンクネプテューヌ。サーフィスオリジオンとの再戦が始まった。

「姿がかわったくらいで調子乗るなよアクロス！俺が本気だしやあお前なんか瞬殺だぜ！」

「ふんっ！」

飛びがかりながら金槌を振り下ろすサーフィスオリジオン。対してアクロスは、ツインズバスターを取り出してそれを打ち払う。居合斬りの要領で放たれた一撃は、呆気なく金槌は彼の手を離れ、床を滑ってゆく。

ならばと、サーフィスは毒釘を取り出して投げつける。アクロスだけでなく、他の皆も巻き添えにする気マンマンの攻撃だ。しかし、そんな彼の思惑とは裏腹に、放った毒釘は、横から飛んできた魔力弾によつて根こそぎ消し飛ばされる。魔力弾が飛んできた方を見ると、そこには両手に滅びの魔力を貯めた状態のリアスがいた。どうやら彼女がやっつたらしい。

自分の思い通りにならない原作キャラに、短気なサーフィスは怒鳴り散らす。

「何処までも恩知らずで馬鹿な奴だ……！そんなだから無能なんだよお前はさあ！」

「お前の相手は俺だったの！」

だが、戦いの最中は余所見厳禁。そんな事をしていけば、たちまち隙を突かれてしまうのだ。リアスに対して勝手にキレ散らかしていたサーフィスの横っ腹に、ツインスバスターの刃が滑り込むようにしてぶち当たる。いつのまにか、アクロスが懷まで迫っていたのだ。

渾身の一撃を受けたサーフィスはそのまま吹っ飛んでいき、屋上のフェンスを飛び越して地上へと落下していく。そしてアクロスも、後を追って3メートルはあるフェンスを飛び越え、屋上から飛び降りる。

「馬鹿だろお前！自ら死を選ぶとは！」

「残念だがそれはハズレだよ馬鹿野郎」

サーフィスは自分も落下しているくせしてアクロスの行動を笑い飛ばすが、アクロスは一蹴すると、背中の機械仕掛けの翼を広げ始める。紫色の粒子のようなものが、背中のスラストターラシキ部位から放出され、翼を形成する。それを見てサーフィスは顔色を変え、もう手遅れ。一足早く、彼は地面に激突し、耳障りな悲鳴をあげる。

アクロスは冷静に、翼で滑空しながら悠然と地面に着地する。それを見てサーフィス

は文句を垂れるが、またまたそれは一蹴されてしまう。オリジオンとしての力のおかげか、屋上から落ちたくらいでは全然堪えないようだ。

「飛べるなんて聞いてないぞ！」

「聞かれなかったからな！これで決める！」

《CROSS EXEDRIVE!》

ツインズバスターの柄の部分にある差し込み口に、ネプテューヌライドアーツを差し込み、回す。そして、アクロスは再び背中の翼を広げる。サーフィスはそれを見て逃げようとするが、もう遅い。次の瞬間、彼は後者よりも高く打ち上げられていた。

何が起きたんだと、地上を見下ろす。が、その時には既にアクロスがすぐ近くまで飛翔してきていた。すれ違いざまの一閃が、サーフィスの胴体にぶち当たり、苦悶の音が漏れる。

サーフィスを通り越したアクロスは空中で大きく弧を描きながら旋回し、紫の光を纏ったツインズバスターを構え、サーフィス目掛けて急降下する。それはあまりにも速く、サーフィスに回避の隙も与えなかった。

「ていやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああつ!!?」

「

ぎいやあああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああああああつ!?？」

あまりにも速い紫光の一閃。アクロスが着地していたときには、それはもう既に終わっていた。

サーフィスはアクロスを憤怒の表情で睨みつけるも、既に遅し。突如として全身に途方もない激痛が走ったかと思えば、次の瞬間、サーフィスは空中で爆発した。断末魔の悲鳴が、爆風とともに空に拡散してゆく。それをアクロスは地上から見上げていた。

どざりと、近くの木に何かが引つかかるような音がする。見ると、ボサボサの髪を制服を着た少年が、ボロボロの姿で木に引つかかっていた。どうやら、彼がオリジオンに変身していたようだ。

そこに、皆がやってくる。アクロスの変身を解いた瞬に、間髪入れずアラタが肩に手を回してくる。

「やったな逢瀬！」

「なるほど、これが仮面ライダー……」

「これで彼も懲りただろう。二度とオリジオンにはなれないと思うから安心して欲しい。まあ、その方が彼にとっては生き地獄かもしれないけども」

気に引つかかっている少年を見ながら、どこか嬉しそうに言うファイフティだったが、アラタの顔を見るなり露骨に嫌そうな顔をして、そっぽを向いてしまった。一体何が

あつたのだろうと不思議に思う瞬だったが、いきなり唯に背中を蹴り飛ばされ、その疑問は意識の彼方に消し飛んでしまった。

あまりにも綺麗な飛び蹴りが背中に命中し、瞬は近くの花壇に頭から突っ込んでしまう。口の中に入った土を吐き出しながら、自分を蹴ってきた唯に文句を言う。

「何なんだよいきなり!? 暴力反対!」

「遅すぎんだよ瞬はさー! ハル呼んでくるのに小一時間もかけるんじゃないよまったくもう! ランチタイムはとつくのとうに終わったぞう!」

「時間にルーズな男は嫌われるから……」

「やめろやめろぼかすか叩くな! てか山風も便乗しないの!」

唯と、なぜか山風に抗議代わりにぼかすか叩かれながら、瞬は2人から逃げ回る。

一方、ハルはめだかに助けてもらった礼を言っていた。自分の口から出た災いではあるものの、いまこうして生きているのは彼女のおかげなのだ。一步違えば、地面に血肉の華を咲かせることになっていたかもしれないのだから。当然ハルは、そのところは猛省している。

「助けていただいてありがとうございます!」

「あの状況だと間に合うのは私だけだったから、ある意味当然の結果だ。まあ私ならあの高さから落ちてても大丈夫なのだが」

「ホント化け物だこの人……あいつ、よく喧嘩売ろうと思えたよな……」
 「命知らずといふかなんといふか……」

一誠と匙は改めてめだかの化け物っぷりに戦慄する。一応悪魔やつているのに、これば変に自信を奪われそう。彼女は間違つても敵に回したくねーな、と思う2人なのであつた。

で、先程から唯達から逃げている瞬はというと。

「増えてない!?? 増えてませんかねえこれ!??」

「逃がさんぞい瞬! 約束破つたんだから罰金千円!」

「じゃあ私も! お兄ちゃん覚悟お!」

「私も! 人生初カツアゲだ!」

湖森も山風も変にノリノリになっている。誰か止めろやと大鳳や志村の方を見るも、ものの見事に効果なし。思わず振り向きながら悪態をつく。

「ちくしようがつ!」

「瞬、前前!」

「ん、前……」

唯に言われて前を向くと、瞬のすぐ目の前に善吉の姿が。やべえと思つたが、そのまま避け切れるはずもなく、両者は衝突し、瞬が善吉を押し倒す形で2人揃つて倒れてし

まう。本日何回目かの転倒なんでしょうかねいったい。

男子高校生2人が揃って一体何やっているんだか、と言わんばりの表情で、阿久根が倒れた2人を覗き込んでくる。

「いつてえ……俺怪我人なんだからさあ！もうちよい労つてくれませんかねえ？」
「すみません……」

「つたく、後で保健室で診てもらえ。私を助ける為に、一直線で来たのだろう？」

包帯の巻かれた頭を抑える善吉に、めだかが手を差し伸べる。

その時、なんの前触れもなく、めだかの身体が淡く発光し始めた。本人もこれには困惑している素振りを見せているが、瞬はこの現象に見覚えがあった。ビルドの時と同じなのだ。ならばそのあとに起こることも予想がつく。

めだかの全身を包み込んでいた光は、やがて彼女の胸の前一点に集まってゆき、鍵のような形状に変化してゆく。そして、濃縮されたそれが、地面に手をつけていた瞬の、手の甲に落ちる。

「なんか出た？」

「いいからどけての！」

善吉に押しつけられ、瞬はごろんと転がされる。それと同時に光が収まり、新たに出現していた黒いライドアーツが、瞬の足元に転がり落ちる。

「これ……」

「ライドアーツ、だよね？」

ファイフティは、アクロスの力は絆の力と言った。ライドアーツはその最もたる物であると。つまりは——そういう事なのだろう。

めだか達も、一誠達も、バラバラに分かれてゆく。成り行きでかなりの大所帯になっていただけあって、別れ際は妙な寂しさを感じてしまう。

「よくわかんねーけど、認められたのかもな」

「認められた、ねえ……目をつけられたの間違いじゃないけどな」

去ってゆく生徒会メンバーの背中を眺めながら、瞬とアラタはそう呟いた。

仮面ライダーアクロスは、また一つ絆を紡いだ。

サーフィスオリジオンに変身していた少年は、這う這うの体でその場から逃げた。

既に特典は失われている。アクロスによって砕かれたのだ。自分の全てともいえる転生特典を失い敗走する彼は、涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら走る。終わった。詰んだ。もう微塵の栄光すら無くなっていた。

裏門を潜り抜け、当てもなく走り続ける。そこに、ある人物の姿が目に入る。

「お前は……ギフトメイカーの！」

「やあ、無様だね。元気にしてた？」

少年に力を与えた張本人であるギフトメイカー・レドであった。彼は少年の様子を見るなり、嘲笑ってくる。その態度にキレた少年は、レドにつかみかかる。

「カスみたいな特典を渡すから負けたんじゃないか！ どうにかしろよオイ！ 俺は選ばれた人間なんだぞ！！？」

彼は叫ぶが、レドは冷ややかな目を向けたまま。そして、少年の手を払い除けると、その胸ぐらイレギュラーを掴み上げ、少年に残酷な真実を告げる。

「君という転生者が居る時点で、君の言う原作とやらは壊れているのね。まさか自分は対象外だとも思えば上がったのかい？ ならお笑いだ。そもそも君が原作尊守を

掲げるのつて、自分が原作にカツコよく乱入して活躍しチャホヤされたいからだよね？
いやあ馬鹿みたいだ。叶わぬ夢を追い求めて手を汚す無様っぷり、ああくだらねえな
！」

思い切り馬鹿にしたように笑う。結局、少年のやっていることは何の意味も無かつたのだ。既に世界は混じり合っている。ここはそういう世界なのだ。少年の知る原作通りに行くことはあり得ない。その事実、少年は耐え切れず、ただ何も言わずに涙をこぼす。

レドは手についた涙を不快そうに拭うと、少年をその場に放置して歩き始める。

「君は殺す価値もない。残りの負け犬人生、惨めに生きろよ」

惨めなモブキャラとして、残りのセカンドライフを無駄に生きる。それは、栄光と名誉を求めて生まれてきた転生者にとって、最大の生き地獄だった。

自分はもう何者にもなれない。特典を失い、ただただくだらない人生を生きるしか無い。今まで好き勝手やってきた彼らは、そんな境遇に耐え切れない。だけど死ぬ勇気もない。終わる気がしない。

「ああ、ああああ……」

何もかも失い、何も得ることもできず、がつくりと項垂れる少年だけが、その場に残されていた。

ファイフティは一人、屋上に戻ってきていた。

「順当に成長していて何よりだ。私としても誇らしい気分だ」

はじまりはどうなる事かと思つてはいたが、いざ任せてみると、それなりにサマになつてきている模様。それはファイフティにとつて喜ばしいものであつた。

本当ならば自分でクロストライバーを使いたいが、ファイフティは訳あつてそれができない。だからこうして他人に任せ、自分は裏方に徹している。巻き込んだことに対して後ろめたさ、申し訳なさは感じているが、それを周りに見せることはない。まだそういうわけにはいかない。

色々と考えながら地上を見下ろしていたファイフティ。そこに、背後から声がかけられる。

「なんでまあ、お前みたいなの種は高いところが好きなんだろうな」

「雰囲気出てるだろ？それにブーメラン刺さってるよ」

嫌味たっぷりの台詞を、爽やかに笑いながら打ち返す。声の主は、この学園の制服を着ていることから、ここの生徒であるようなのだが、首から上は靄がかかったように視認が出来ない。

「まあ待ちなよ。今回君の出演はないよ」

「そうだな。転生特典が破壊されている。これが……アクロスの力の一端か」

「アクロスの、というよりも……ああこれ以上は言うべきじゃないな。兎に角今日は帰るんだ。仕事は終わったんだから」

「みたいだな」

声の主は、首元についていた装置の電源を落とす。転生者狩りの標準装備の認識障害デバイス。それによって隠されていた顔が明かされる。と言っても、ファイティは既に彼の顔を知っているのです、特に反応するでもなく、軽い調子で問いかける。

「にしても、今更逢瀬くんに接近するとか何のつもりかな、灰司くん」
「……」

無東灰司は黙り込んでいた。

瞬達の前で見せていた、頼りなさそうで物静かな雰囲気は全く感じられず、心なしか、他者を拒絶するような鋭いオーラのようだが、全身にまとわりついているよう

に見える。そして、その顔つきに温和さは微塵も存在していない。幾度となく死線をくぐり抜けてきた者の顔だった。

「君の属する組織の差金かな？ 一体何考えているのやら、ねえ？」

フィフティは、薄ら笑いを浮かべながら問いかける。その目は全く笑ってはおらず、酷く無機質に感じられる。

「安心しなよ。君が転生者狩りだということはバラしやしないさ。だって君がいようがないが、アクロスの戦いには全く影響ないし」

「テメエが何考えているかは知らねえ。だが、全てが思い通りにいくとは思うなよ。世界つてのはそうできてるんだ」

灰司はそう吐き捨てると、不機嫌そうにそっぽを向く。

「俺はテメエもアクロスも信用しないが、邪魔をしないなら此方からは手を出さない」

「そうだね、お互い不可侵といこう。その方が都合だ」

2人は別れる。

両者は決して相入れない。ぶつかり合う必要は無いが、わかり合う必要もない。そういうものなのだから仕方がない。

灰司が去ってから少し後。フィフティはカッン、カッンと靴音を鳴らしながら階段を降りてゆく。今のフィフティは部外者。他の生徒や教員に見つかったらただでは済ま

「逢瀬からお前のことは聞いた。お前、アクロスの導き手で、色々と知ってるんだろ。オリジオンとか、ギフトメイカーとか。そいつらは、幾らでも俺の周囲の人を傷つけるんだろ。だから、俺を鍛えて欲しい」

「普通それ、自分を嫌ってる人間に頼むことかな？だからの前後で文章成り立ってくない？」

「逢瀬を強くしたお前なら、性格はともかく実力面なら師事する価値はあるんじゃないのか」

「いや逢瀬くんに関しては私はあんまりタッチしてないし……ねえ話聞いてる？」

「どうやらファイフティをアクロスの師匠かなんかだと思ってるようだが、一体どこをどう勘違いしたらそうなるんだ、とファイフティは溜息をつく。別にファイフティはアクロスに試練とか特訓とかを課した覚えはない。頃合いをみて特訓するかな、とは多少は考えてはいるが、それとこれとは関係ない。第一、何故ゴキブリみたいに嫌う奴に稽古をつけなければならぬのだ。」

馬鹿馬鹿しいし不快なのでさっさと帰ろうとするが、アラタがその行手を塞ぐ。

「決めたんだ。あんな卑怯な真似は2度としない。正攻法で強くなるしか無いってな。それに、あそこまでボロクソにこき下ろされといて黙っていられるタマじゃねーんだよ。だから、強くなってテメエを見返してやる」

「なるほど。反骨心だけは一丁前だね。いやあ滑稽滑稽！まあ少しは見直したよ。諭えるなら、ゴキブリよりちよつと上くらいかな？まあゴミには変わりないんだけどね」

さらに煽るファイフティだったが、アラタは至つて真面目な模様。これはいくら言つても無駄だと踏み、観念してある事をアラタに告げる。

「実を言うとな、さつき逢瀬くんに相談を受けたんだよ。いや本当、馬鹿馬鹿しいにも程があると思つただけどね？まあ他でもない彼の頼みだし？君もやる気みたいだし？こゝろ見えて私も善人だからね。お望み通り、君をしごいてやるよ」

そう。オリジオンを倒した後、屋上に戻る途中で、瞬から相談されていたのだ。そろそろアクロス強化に向けた特訓をしないかと持ち掛けたら「ならアラタも一緒に鍛えてやれないか？」と尋ねられた時には柄にも無くびっくりしてしまった。

だが、仮面ライダーの導き手としては、その願いを無碍には出来ない。個人的には嫌だがやつてやろうじゃないか。そう意気込み、ファイフティはアラタに告げる。

「言つておくが、私は君が大嫌いだ。だから君に情けはかけないし、泣き叫ぼうが苦しもうが抱腹絶倒するつもりだよ。君が嫌いだから、そんじやそこの体育会系がドン引きするレベルで君をしごいてイジメ抜くつもりでいる。それでも君はやるのかい？」

「やるよ。やつてやる。惨めに憧れて、頼り続けるわけにはいかないからな」

「転生特典を自分から捨てた君に出来るかな？」

煽り散らかすフィフティと、昨日とは違う、真剣な表情のアラタ。ここにまた一つ、挑戦者が生まれた。

翌日。

この間の部員勧誘の件で、瞬とハルは生徒会室に向かっていた。

一応お礼をちゃんと言いに行った方がいいよな、と判断した結果であるのだが、それとは別に、オリジオンに色々と酷い目に遭わされていたから大丈夫かな、と思い、様子を見に行こうという話にもなった。明らかに余計な心配だが、一応怪我人も出ていたし、やっぱり行った方が良いのだと瞬は判断した。

挨拶をしながら、瞬は生徒会室の扉をあける。

「失礼しまーす」

「……」

その瞬間、2人はフリーズした。

勿体ぶらず端的に言うのと、黒神めだか、まさかのお着替えタイムであった。人型の肌

色の上に白い下着が眩しく輝いている。なんか壁際の方では善吉と阿久根が必死に目を逸らしている。そういうえば露出癖じみたところがあると言っていた様な気がするが、状況から察するに彼らも逃げそびれたらしい。

—— とうかこの状況、やはくね？

一瞬の内にそう結論づけた瞬は、瞬く間に回れ右してこの場を立ち去ろうとする。シチュエーション的には一般的なラッキースケベとなら変わりないはずなのに、何故だか全然ラッキーとは思えない。端的に言う到場違い感がすごい。

が、当の本人はというと。

「気にするな」

「いやこれが真つ当な反応だからな!!？」

「構わんよ、入るが良い」

「入れるか！服着ろ服！てかそもそもいきなり脱ぎだすな！」

善吉が顔を赤くしながら突つ込む。とうかいきなり脱ぎだすって何だ。まさか何の脈略もなくこの状況になったわけでもあるまい。

「さあ出て行こうじゃないか！めだかさんの裸体は神聖なもの。特に善吉、君の様なイヌッコロが見ていいものじゃないんだ！」

「アンタにそのまま返すぞその言葉ア！だいたいアンタも逃げそびれてたくせに！」

善吉とガミガミ言い争いながら、阿久根が他の皆を室外へと押し出してゆく。ピシャリと、皆が廊下に締め出される。こんな扱いを受けると、自分達は一体何しに来たんだろうかと考えてしまう。

ふと、瞬は横にいたハルに、先程から気になっていた事を聞く。

「お前、めだかをずっとガン見してたろ」

「え、なんですか逢瀬さん。もしかして勃つてたんですか？」

「……お前が友達出来なかつた理由がわかつた様な気がするよ」

ハルへの応答に困り、瞬は苦笑いで誤魔化すしかなかった。確かにコミユニケーショに難ありだわこれ。うん。

数分経って、めだかが着替え終わったとの報告が扉越しに耳に入った。この場唯一の女性陣であるハルに確認させた後、再び生徒会室に戻る一同。

さて、仕切り直しと入ろう。

「今日はある報告に来ました」

「ほう、言ってみるが良い」

「本日をもって漫研を廃止し、OC部に改名いたします！」

「はい？」

当然ながら善吉がツツコミを入れる。ハルの隣では瞬がなんとも言えない表情で頭

を抱えている。

「いやいやいや、漫研はどうなったんだよ!?？」

「漫研なんかどうでも良かったんです。それ以上に刺激的なものに出逢えましたから。だから origin Counters部。オリジオン関連の事件を捜査する由緒正しい部活動です」

「うん確かに刺激的だったと思うけど……君、ホントにそれでいいのかわ？」

「何度も止めたんだよ？でもコイツ全然言うこと聞いちゃくれないのよ……」

瞬が悲壮じみた声で頭を抱えながらボヤク。その様子を見て、思わず同情してしまう善吉と阿久根。やっぱり最後までまともじゃなかった。

そもそも名前からしてセンスが壊滅的である。わざわざ部活動にしないでいいと、瞬は口を酸っぱくして言ったのだが、他の皆は特に反対しなかったので多数決で決まってしまうのだ。さんざん反対してきたものの、もう遅し。たった今、瞬の目の前で正式名称として受理されてしまった。

「善吉、本人がいいと言っているのだから、我々が突っ込むのは野暮というものだ。九瀬川2年、貴様の活躍を大いに期待しているぞ」

「やめてくれ！下手に優しい言葉食らったら余計傷つくからあ！」

「漫研としての活動も継続しますので以下よろしく」

それだったら部を改名する必要なかったのでは、と男性陣は思うのであった。用事も済んだし、おいとまさせて頂こうと瞬は動くが、そこにめだかが声を掛ける。

「逢瀬2年、昨日の戦い振りは見事であった」

「……………」

「貴様も励むが良い。それが貴様の志だというならば、私は全力で応援しよう。それでももし、悩みを抱えた時は相談に乗ろう。それが私達……開王学園生徒会執行部だ」

「……………ありがとうございます」

一礼して、瞬は退室する。

学園を表から守る、生徒会という光。裏から支える仮面ライダー。その間に存在する数多くの生徒達。それが崩れない限り、きっと安泰。

……………たぶん。

後日談はもう一つあった。

生徒会室から部室へと戻って来た瞬とハル。瞬は、部室の扉に貼られたOC部と書かれた貼り紙を見て、改めてため息をつく。某広告機構じゃ無いんだから、と乾いた笑いを漏らしながら、扉を開ける。

すると。

「やあ遅かったね逢瀬くん。すでに活動は始まっているよ?」

「ファイフティ!!?」

ジャージ姿のファイフティが、扉を開けてすぐの位置で待ち構えていた。予想外の人物に、思わず瞬は素っ頓狂な声をあげてしまう。

「その格好は何?てかなんでファイフティが学校に居るんだよ!!?」

「なんでって、そりゃあ顧問だよ。部活には顧問教師が付く物だからね。あと、アクロスを知るものが増えてきた今、逆に組織化しちやった方が管理しやすいかな、と私も思ってたね。それと戦いの激化に備えて私も近くにいた事にしたんだ」

そういう色々あつて忘れていたが、この部活の顧問の話を全くしていなかった気がする。でもだからと言って、こんな奴に任せていいのだろうか。オリジオンについてはエキスパートだろうが、一体どうやって教師になったのだろう。

瞬はファイフティから目を逸らすように、部室を見渡すと、机を挟んで反対側にアラタが腕立て伏せをしているのが見えた。瞬はファイフティを押しつけて、アラタのもとに向

かう。

「何してんだ？」

「決めたんだ、俺は強くなる。お前に追いつく……いや、追い越してみせる！自分の大事なものは自分で守れるくらいに！」

「ど、どうしたのよアラタ……なんか人が変わったみたい……」

事情を知らない大鳳達は、一体何事かと心配そうな目でアラタを見るが、本人はそんなのお構いなしに腕立て伏せを続行する。

成る程、特訓は既に始まっているらしい。アラタの心境を色々と知っている瞬は、少しニヤニヤしながら頷く。想い人を守るために強くなると誓っているアラタを見ながら、瞬は大鳳の疑問に答える。

「そりゃーまあ、あれだよ。愛だよ」

「何故そこで愛……？」

「間違つてはないけどぎっくりすぎない？」

これ以上は言うべきではあるまい。人の恋路に無闇に関わるべきではないのだから。瞬はそうモノローグを締め括り、席に座ろうとする。が、ファイティが瞬の肩を掴んで静止させる。

「さあ逢瀬くん、君も特訓だ。まずは腕立て伏せと腹筋を各500回！さあやるんだG

OGOO!

「文化部がやる事じゃねえ！これ今やらなきゃダメ?!？」

「当たり前さ。これは君のための特訓なんだからね。さあやるんだ！兎飛びをさせないだけ良心的だぞ？」

「がんばってー瞬」

「お前から他人事だと思つてコンチクショウが！」

部室に響き渡る瞬の悪態。

彼の日常は、こうして一回り大きくなりましたとき。

To be continued……

第20話 レッツ、エンタメデュエル!

質量を持ったソリッドビジョンの発明により生まれられたアクションデュエル。ファイルド、モンスター、そして決闘者が一体となったこのデュエルは、人々を熱狂の渦へと巻き込んだ。――

白い、白い空間。

無限に広がる、普通ならば誰も辿り着く事は不可能な、どこでもない場所。しかしながら、その純白の世界には一点だけ、残された場所があった。

それは瓦礫の山だった。何処かの神殿だったのかは知らないが、瓦礫には華麗な装飾がところどころ見られる。

「人生をやり直したくないか？」

呆然と白い大地に立ち尽くしている男に、ギフトメイカー・ティーダは問いかける。はつきりとした意識のまま、男は質問する。

「……は何処だ？俺は夢でも見てるのか？」

「貴様は死んだ、それだけのことだ」

あつさりど、残酷な真実が告げられる。それは男の混濁していた意識を覚醒させるには、あまりにも衝撃的すぎるものだった。みるみる男の顔が青ざめ、目に見えて取り乱す。

「いや……そんな筈はない！これは夢だ！タチの悪い悪夢に決まつてる！俺はここで死んでいい人間じゃあないんだ！」

「それは此方も同意見だ。だから——ひとつ、チャンスをやろう。光栄に思うがい、貴様は千載一遇の機会を得たのだ」

事実を受け入れられずに塞ぎ込んだ男に、ティードはあるチャンスを持ちかける。それはまさしく、天より地獄へと垂らされた蜘蛛の糸。唯一の希望だった。

——そのタチの悪さに、最期まで彼は気付くことはないのだが。

「貴様は幸運な事に、別の世界に転生する権利を得た。今ならば転生特典をひとつだけ与えてやる事もできる。こんな上手い話はそうそう無いはずだ。どうだ、するかしないか、早く答えろ。時間は有限だ」

「するするするする！させてくれ！俺はまだやり残した事が沢山あるんだよ！アンタの言うこと何でも聞くから！」

即答だった。欲深いというか、単純というか、口ぶりからして信用すべきでは無いの

は明らかなのだが、この男はティーダの足元で土下座までして頼み込んだ。その様子を見てティーダはほくそ笑むが、男はそれに気づいていない。

ティーダは男に顔を上げさせると、話を続ける。勿論、無償で転生させはしない。あっさりとい食いついた男に、ティーダはある契約を持ちかける。

「ただし見返りとして、俺達の力になってもらう。安心しろ、力が必要になれば呼びつけるが、基本的に貴様は自由だ。何をしてもいい。何故なら、貴様は選ばれし人間だから」

「何をしても……? なら、転生先を選ばせてくれないか? どうしても許せねえ奴がいるんだ! ソイツを甚振りたくないんだ!」

「貴様の望みはきいてやる。だから俺達に協力しろ。いいな?」
「分かった! 分かったから! 転生できるならなんでもするさ!」

喜びで身体を震わせながら、男はもう転生した後のことを考えていた。前世に残してきた家族のことなんて知ったことではない。趣味に理解を示してくれない家族など、彼にはどうでも良かったのだ。

彼の目的はただ一つ。それは転生者の大半が望む、ありふれた、それでいて最も忌み嫌われる願いだった。

殺すのだ。

榊遊矢

—— 決闘者の面汚しに制裁を下すのだ。

瞬達の住む天統市のお隣、舞網市。デュエルに関する技術が突出している事以外は割と普通の街である。余談だが、見た目川内の潮原提督もこの街の鎮守府で頑張っているぞ。

それはさておき、ゴールデンウィークが間近に迫ったある週末。舞網市の中心部にある総合公園に、瞬達はOC部の面々は来ていたのだが。

「ぎよめえええええええっ!?」

のっけから汚いアヒルのような声を上げながら、アラタは地面に倒れる。

痛みで熱を持った背中を摩り、服についた芝や土を払いながら状態を起こすアラタに、いつもとは違って私服スタイルの潮原提督が手を差し出す。

「二本取ったな。つたく『いきなり強くなりたから特訓に付き合ってくれ』と言われるとはな……けど、いきなり俺とタイマンなんてお前正気じゃねーよ……」

「いやいいんだ。俺は強くならなきゃいけないんだ」

差し伸べられた手を取り、アラタは立ち上がる。

この間、アラタは大切な人を自力で守れるくらい強くなると誓った。故に今回、潮原提督にわざわざ付き合ってもらって、格闘戦こんかくせんをしているのだ。

「それにしても、せっかくの休みの日なのに、わざわざ付き合ってもらって申し訳ないですよ。潮原さん、忙しいんじゃない?」

「いいって事よ。お前の姉さんには、提督になってから世話になりっぱなしだし、お前の事は弟のように思ってるんだぜ?これくらいお安い御用だつての。ほら、まだやるんだろ?」

「ああやるぜ!」

潮原提督の言葉で奮起し、再び立ち上がるアラタ。服には土や草がついているが、その目は真剣そのもの。強い意志のようなものが感じられる。大鳳には、その意志の源が何であるかは知る由もないのだが。

「ほーら逢瀬くん?次はあのジャングルジムをジャンプで飛び越えようか。少しでも掠つたらアウトね」

「いやいきなりそれは無理が有りませんかね」

「拒否権はないよ。ほらいきな」

遠くのほうでは、瞬がファイフティに特訓をつけられている。公園中の遊具を全部ジャンプで飛び越す特訓に、イマイチ唯は意味を見出せないのだが、きつと大事な意味があるんだろうと思ひ、温かい目で瞬を見守る。

「流石に私もジャングルジムは無理だよなー、せいぜい鉄棒レベルだよ」

「それはそれで凄いいけど……」

「やつぱり唯さんは凄いやー！ほらお兄ちゃんも唯さんを見習ってー！」

湖森に理不尽な内容の声援を送られ、瞬は苦笑する。妹とは須らく兄に対して横暴に振る舞うもの。世の中の兄はそれを受け入れるしか無いのだ。

「てーいーとーくーはーやーくー。ボクは早く帰ってデツキを組みたいのさー！」

一方、瞬からもアラタからも離れた位置にあるベンチでは、潮原提督の部下である艦娘・初月が、ベンチに腰掛けながら不満そうに足をバタつかせていた。その隣では、ご存知五航戦こと翔鶴と瑞鶴がニコニコ笑いながらアラタと潮原提督の取っ組み合いを見ている。

「初月、散々連れ回しといて文句言わないの。一人一箱までの限定BOXの複数買のために提督や翔鶴姉を半ば強引に連れてきたのは誰だったかしら？」

「説明台詞サンクスです瑞鶴さん。てかそんなことして大丈夫なんすかね……私はそこから辺の事情に詳しくないのでよくわからないんですが」

「転売ヤーから買うよりはマシでしょ。それに翔鶴姉とは違って私もプレイヤーだし、ちようど欲しかったのよねこれ」

「へー意外。瑞鶴、ちよつとデツキ見せてよ」

ハルと瑞鶴が何やら盛り上がっている様子。そこに、一旦休憩をする為に瞬が戻ってきた。

瞬はハルからスポーツドリンクを受け取るが、その時、初月の手元にあるカードらしき物に目がいく。絵柄から見るに、トレーディングカードゲームか何かだろうか。

「なあ初月、それって何？カードみたいだけど……」

「デュエルモンスターズだよ、知らないのかい？世界的な知名度と人気、競技人口を誇るカードゲーム。常識だよこれ」

「そーそー！お兄ちゃん、山籠りでもしてたか記憶喪失にでもなったの？」

「いやそうじゃ無いんだけど知らない……」

「私もよくわかんない……」

さも知っていて当然、というような反応をする皆に対して、瞬と唯は、困惑気味に答える。

そりゃあ、2人が知っているはずがない。瞬がアクロスの力を手に入れる前には、そんなカードゲームなんて存在しなかった。にもかかわらず、まるで昔からあったかのよ

うに存在している。あの日以来、こういう齟齬が絶えないのだ。

「唯さんでつきりデュエルにも精通してるかと思つてたな。意外だなくうん」

「ごめんカードゲームは全く守備範囲外で……」

遠慮がちに唯が言う。

その時、ぶわりと突風が吹き、初月の元にあつたカードが風に乗つて空へと舞い上がつてしまう。

「あつ買ったばかりのカードがあー！」

「だから外で広げんなつて言つたでしょ……どうすんの？」

慌ててカードを拾いに行く初月と、呆れながらそれを手伝う瑞鶴。瞬達も仕方なしにそれを手伝うことにした。

瞬はふと空を見上げる。すると、風に煽られて空に舞い上がったカードが、ひらひらと落ちてきているのが見えた。跳んでキャッチしてやろうと、

「ふんっ！」

が、その手は届かず、逆に手を動かした際に発生した風によつて、カードは瞬から離れるように飛んでいってしまう。その先には、ローラースケートで疾走する少年が一人。

そして、その少年の顔に、飛んできたカードが舞い降り、その視界を塞ぐ。本人はい

きなり視界が塞がれて思わず取り乱してしまふ。

「うわわわわっ!?? 前が見えなくなつた!??」

「ちよい前!前街灯!」

瞬の注意も間に合わず、少年は頭から公園内の道の脇に立っていた街灯に突っ込んでしまふ。視界が急に塞がれたことに加え、ローラースケートによつて結構なスピードが出ていた為か、避けることもままならなかつたらしい。

ゴチンと、痛そうな音が響き渡り、瞬は思わず自分の目を手で覆つてしまふ。なんかに前にも似たようなことがあつたような気がするが、ほつとくわけにもいかないの、一応声をかけてみる。ちなみにカードは少年と街灯にサンドイッチされたせいで、開封したばかりにもかかわらず少し曲がつてしまつていた。カードコレクターにとっては、きつと失神ものだろう。

「大丈夫か……?記憶や魂飛んでないよな?」

「痛え……何が起きたんだよもう……」

痛がる少年の顔を見て、瞬は何か引つかかるものを感じた。何処かで見た覚えがある。しかしそれがいつ何処でだったか、思い出せない。ゴーグルを頭につけ、緑と赤の派手な髪色をした少年だった。まるでトマトみたいな色合いだなー、といったことを考えていると、瞬はあることに思い至つた。そして少年の方も思い至つた。

「アンタは……この間の川流れしてた人！」

「ちよくちよく見かけてたトマト頭！」

どっちもひでー呼び名である。お互いにそう思ったのか、なんとも言えない表情のまま数秒ほど固まってしまう。

そして瞬は思い出した。春休みの時と、ドライブオリジオンに川に突き落とされた時だ。単に道を聞かれただけだったり、湖森と一緒に川を流れていた瞬を救助してくれていたりと、直接的な絡みはほぼ無かったものの、やけに特徴的な髪色が印象に残っていたのだ。

湖森や初月、ハルに唯も、瞬のもとにやってくる。湖森も、顔を見るなり思い出したのか、少年を指差す。

「あ、お兄ちゃんが川流れしてた時に助けるの手伝ってくれた人だ」

「いや俺そんなに役に立って無かったし……ほとんど権現坂のパワーに任せていたし」
「礼を忘れていたな。あの時はありがとな」

瞬は言い忘れていた礼を言いながら、少年の手を引いて立ち上がらせる。少年はズボンの汚れを手で払いながら、自己紹介をする。

「どういたしまして。俺の名前は榊遊矢さかきゆうや。これもきつと何かの縁なのかもしれないな。よろしく」

「逢瀬瞬だ」

滞りなく互いに名前を明かし、自己紹介がおわる。が、遊矢の名前を聞いた初月が、驚きの声をあげる。

「え、あの榊遊矢[!]?ほんとにホントのマジ[!]?」

「嘘でしょ……まさか同じ学校だったなんて……」

「何なの湖森ちゃんも初月ちゃんも……この人、有名人かなんか?」

何故2人が驚いているのか全くわからない唯は、困惑気味に尋ねる。瞬も分からないのは同じだ。この少年がいったいどうかしたのであるだろうか?

唯に訊かれて、初月はめちやくちや興奮しながら答える。

「アクシオンデュエルの開祖・榊遊勝の息子にして、自力で新しい召喚法であるペンデュラム召喚を編み出した新鋭^{デュエリスト}デュエリスト! 決闘者なら知らない奴は居ないくらい凄いななのさ!」

「そんなに褒められるようなもんじゃないさ。父さんと比べたら俺なんかまだまだエンターテイナーとしても決闘者としても未熟だよ」

初月の発言に、謙遜するようなそぶりを見せる遊矢。だが、説明をされてもデュエル知識皆無な瞬と唯は、何が凄いのか、そもそも初月が何を言っているのかすらよく分からず、頭の中でクエスチョンマークが大量発生してしまう。

そこに、2人分の足音がこちらに近づいてくる。見ると、遊矢の後方から、ノースリーブの服を着た、ピンク髪ツインテールの少女と、赤い鉢巻を巻いた、ガタイのいいリーゼント頭の少年がこちらに向かって走ってきていた。

「遊矢大丈夫?!? なんかに凄く痛そうな音が聞こえてきたんだけど?!?」

「何もそんなに急ぐことは無かるうに。別に今日買わなければいけないわけでもないだろう」

「柚子、権現坂……急がないと売り切れるかもしれないだろう?」

「どうやら遊矢の連れらしい。ここで初月が、彼らの会話から何かを察したのか、先程開封したカードの空き箱を見せながら、こう訊いた。

「もしかして……君たちもこれを買いに?」

「ああそうだよ。ちよつと出遅れちゃって、それで急いでただけど……」

「なら無理だね。僕が買った時にはもう数えるほどしか残ってなかったから。多分もう売り切れてるよ」

「そんなあ……かんつぜんに出遅れた……」

それを聞いて、遊矢はがっくりと肩を落とす。瞬はカードゲームには疎いが、これは残念なことなのだろうということくらいはわかる。

「で、そちらの方々は?」

「ああ紹介するよ。昔からの友達の柚子と権現坂だよ」

紹介された2人が、それぞれ挨拶する。ツインテールの少女が柚子で、大柄なリーゼント頭の少年が権現坂だ。

「あら、貴女もデュエルやってるのね。私は終柚子^{ひいりちゆうゆず}。家はデュエル塾をやってるの。どう？もし良ければ、今度ウチに見学にでもこない？塾長……父さんもきつと喜ぶわ」

「いきなり勧誘は良くないと思うが……権現坂昇^{ごんげんざかのぼる}だ。どうやらウチの遊矢が迷惑をかけたしまったようだ。友人として代わりに詫びよう」

「いやいや、元を辿ればこっちのせいだから……」

そこまでして謝罪されるようなことでもないし、そもそも初月が全部悪い。瞬は若干困惑しながら、権現坂に頭をあげさせる。またまた個性的な奴らと出会ってしまったものだ。今回に至っては、髪色からして個性的だ。どこのホビーアニメの世界だろうか。

「で、このカード……もしかして、お前もデュエルモンスターズを？」

「いや俺はデュエルなんてルールすら知らないんだけど」

「初心者には厳しいからね」

「ルールは複雑そうに見えるけど複雑よ！」

「えゝ不安になってくるんだけど……」

柚子がやけに自信気と言うが、それは自信たっぷりそうに言う台詞ではない。そうい

うのを言ってしまうと、初心者は寄り付かなくとも思うのだが。

ゆずの言葉で、デュエルに対してかすかに拒否反応を示し始めた瞬と唯に、すかさず柚子とハルがフォローを入れ始める。

「モンスターカードや魔法・罠カードを駆使して相手のライフポイントを0にすれば勝利、ほら、簡単でしょ？」

「それが結構ややこしいのですよホント。カード効果の処理とかがややこしすぎて、初心者は皆苦労するんですよ。かくいう私もその一人でしたし」

「対象を取る取らない、チェーンブロックを作るか否か、カードの発動と効果の発動
e t c ……面倒だったらありやしない。でも楽しいからやめられないんだよね」
エトセトラ

フォローがフォローになってないし、それを秒で無碍にしちゃったよコイツら。彼女らが羅列する専門用語の数々に、思わず拒否反応を示してしまう瞬と唯。知恵熱が出てしまいそうな気分だ。こんなことを何なく理解できているカードゲームマーを見ていると、本当はコイツら、自分達とは別の生命体ではないのかと思えて仕方がない。

遊矢も横で話を聞きながらも、コイツら一旦止めて自分が話した方がよくね？とは思ってはいるが、中々その気になれない。幼馴染みとのパワーバランスが如実に現れている瞬間であった。

そこに、物凄くデカイ声が聞こえてきた。

「み、つ、け、た、ぜ！我が永遠のライバル榊遊矢あ！」

瞬が振り返ると、なんか派手な髪色の、いかにもお金持ちのボンボンですといわんばかりのオーラダダ漏れの少年が、こちらに向かってずかずかとやってくる。後ろには如何にもT H E ・取り巻きという感じの少年を3人ほど付き従えている。

少年の顔を見るなり、柚子は露骨に嫌そうな顔をする。

「げ、沢渡……」

「何知り合い？」

「此奴は沢渡シンゴ。奴もまた決闘者の一人。まあ腐れ縁というやつだな」

「腐れ縁じゃねえ。ライバルだ！」

権現坂の紹介を一部否定する沢渡。彼はつかつかと此方に向かって歩いてくると、やけに自信たっぷりな笑みを浮かべながら、突然現れた沢渡にきよとんとしている瞬と唯を指差して、

「おいおい、このてえっんさいエンタメデュエリスト、ネオニユーアルティメットハイパー沢渡シンゴ様をご存知無いは、お里が知れるってもんだな！」

「ダサイ名前だ……」

「ダサイのは同意するけど、口にしちやいけない言葉つてもんがあんだろ！」

「沢渡さんを悪く言うな！一度機嫌損ねたら中々治らないんすよ！」

「俺たちの沢渡さんはまじパネエから！」

いきなりのマウントであった。取り巻き達も便乗してきてるし、一体何なのだろうかコイツら。とうか取り巻き達も地味に沢渡をdisっている気がする。コイツら本当に取り巻きなんだろうか？

「ネオニユールティメットハイパー……小学生かな？」

「精神年齢的には間違っていないかも」

「誰が小学生だ誰が！よし決めた、榊遊矢！今日こそこの沢渡様の華つ麗でスーパーアメイジングなデュエルで勝利してやんよ！」

沢渡はそう叫ぶと、ズボンのポケットから、小型のタブレット端末のような機械を取り出す。はて、カードゲームにあんなものが必要だったりするのだろうか？

疑問に感じながらも、瞬は隣の方をちらりと見るが、どうやら彼女も同じ考えのようだ。と、未知との遭遇をしたような顔をしている2人に気づいたのか、沢渡が煽り気味に声をかけてきた。

「なんだ？デュエルディスクも知らないのか？幾ら興味無かったといつてもそりゃ無いぜ。どこの未開の地育ちだよお前ら」

「さーどこでしょうねーうふふふふ」

「え、いやーなんだろうなーあははははは」

「唯も逢瀬も気色悪いな……」

瞬と唯の目が明後日の方に泳ぐ。異世界転生したら多分こんな気分なんだろう。

「デュエルディスクはデュエルの必需品。これ無くして決闘者に在らず、ともいわれている。これ常識だぞ?」

「知らないからって責めたり囃し立てたりすること無いでしょ。ほらこれがソリッドビジョン。立体映像によってカードやモンスターを投影出来るの」

「すげ〜いつの間に関人類はそこまで進歩してたんだ〜」

久しぶりに人間の世界にやって来た人外のような反応をしてみよう瞬。それを見て、沢渡の取り巻き達がクスクスと笑っているが、瞬と唯は気づかない。

「まあデュエル以外にもタブレット端末としても使えるし、なにかと便利なんだよね」
「でもお高いんでしよう?」

「まあそれなりにね」

みるみるうちに、会話が通販番組みたいなノリになる。これは話の脱線の色が濃厚になってきた。はたしてこの話の脱線っぷりに異議を唱えられる奴はいるのだろうか。

「おいお前ら! さつきから俺ほつぽって何話進めてやがんだよお!」

「うわ沢渡がうるさくなつた……」

話の軌道修正をしたのは、先程から影が薄くなりはじめていたほつと出の沢渡シンゴ

であった。

話の中心からみるみるとフェードアウトさせられていった沢渡が、柚子に対して文句を言ってくる。少し除け者にされただけで、すぐにぶんすかご立腹になる。なるほど、確かに典型的な困った御坊ちゃまだ。

と、ここで柚子が、地団駄を踏んでいる沢渡を見て何かを思い付いた模様。

「丁度いいわ。この2人のデュエルを観戦しない？ 実際に見たりやつたりした方が理解できるわよ」

「俺はチュートリアルの敵キャラ扱いかよ!!?」 ったく、それならそれで俺様が残らず魅力させてやるぜ？ 構わねーよな？」

沢渡の凄まじいまでの切り替えの早さに、ある意味感心してしまう。さんざん弄られたことにつっ込んでおきながらも、すぐにギャラリーを魅力させようと意気込むスタイルには、遊矢もエンターテイナーとして、思わず見習いたくなるものを感じる。

だが、遊矢も負けてはられない。負けじと沢渡に強気な口調で言い返す。

「それはどうかな。俺だってプロになって多少は成長しているつもりさー！」

「いいぜ、かかって来な！」

決闘の火蓋が、切って落とされようとしてした。

さて、デュエル……といっても、それ相応の舞台が必要になるだろう。別にデュエルの場所くらい何処でもいいだろ、と言う人もいるだろうが、こういうのは場の雰囲気も大事な要素の一つなのだ。

一同は、公園の敷地の端の方に位置するデュエルコートに移動する。この施設では、金を払えば誰でもアクションデュエルが出来るのだ。

「広いな……体育館くらいはあるぞ? たかがカードゲームにこんな広いスペースが要るのか?」

「お兄ちゃん知らなさすぎだよ。アクションデュエルだから派手に動き回るんだよ? これくらいは大会なら普通だよ?」

「アクション……なんだって?」

「アクションデュエル。ほらあれ見てよ」

湖森が指差した先には、床がガラス張りになっている箇所がある。そこを覗くと、何やら大きな機械が見えた。

「あれがリアルソリッドビジョンシステム。普通のソリッドビジョンは質量を持たないんだけど、これを使えば触感や質感も再現出来るんだって。科学の力つてすごいよ

ねー」

「そ。あそこがその操作室よ」

コートの方には、野球場のスタンドのような箇所があり、そこにはなにやらでかい機械のようなものが見える。どうやらあれがリアルソリッドビジョンシステムの操作をする場所らしい。

「誰かりアルソリッドビジョンシステムを起動してくれないか？」

「じゃー私が！フィールド魔法は私の独断で決めるからね！」

「僕も行くよ」

湖森が名乗り上げ、デュエルコートの端にあるリアルソリッドビジョンシステムの操作パネルへとスキップしながら向かってゆく。志村も、より見晴らしの良い場所を求めて湖森の後に続いてゆく。

湖森は、操作パネルの側に保管されていた操作説明書を読みながら、鼻歌混じりにアクシオンデュエルのフィールドを選ぶ。

《フィールド魔法 臨海遺跡クリアオーシャン》

そんな音声でしたかと思えば、ソリッドビジョンシステムが稼働し、眩い光を放ち始める。瞬はたまらず、目を閉じてしまう。

「な、なんだあ？？」

」

「軍の訓練でもたまにリアルソリッドビジョンは使うけど、何度やつても慣れねーなこれ……」

数秒たって、光が収まってくる。瞬は恐る恐る目を開ける。すると、先程まで殺風景な室内コートにいた筈なのに、いつの間にか、周囲の風景は、よく分からない謎の遺跡らしきものの点在する砂浜に切り替わっていた。

見た目だけではない。近くの石柱は本物さながらの質感と触感だし、足元の感触も砂浜のそれだ。これがリアルソリッドビジョン。質量を持った立体映像。

「すっごい……本物そっくりだよコレ」

「足場の感触も砂浜のソレだ……かかくのちからつてすげー」

「観客席に下がった下がった。派手に動き回るからね」

初めて体験するソリッドビジョンに驚いている瞬と唯。そんな2人をはじめとするギャラリー達を観客席まで下がらせ、沢渡と遊矢は相對する。2人は自分の左腕にデュエルディスクを装着し、腰のホルダーからデッキを取り出してディスクに装填する。すると、ディスクのタッチパネルが点灯し、リアルソリッドビジョンによってカードプレートが形成される。

2人は互いに不敵な笑みを交わし合うと、観客席の方を向き、アクションデュエルの始まりの口上を言い始める。

「戦いの殿堂に集いし決闘者が！」

「モンスターと共に地を蹴り天を舞い、フィールド内を駆け回る！」

2人の頭上に浮いていたアクションカードの塊が弾け飛び、フィールド中にアクションカードがばら撒かれる。

さあ、決闘開始だ。

「アクション……デュエル！」

遊矢：4000LP

沢渡：4000LP

「先攻は俺だあー！」

沢渡は始まるなりフィールドを駆け始める。足場の悪い砂浜から早々に抜け出し、地面に横たわる石柱に飛び乗る。

沢渡は石柱の上から遊矢を見下ろしながら、手札から2枚のカードを見せつけ、高らかに宣言する。

「俺はスケール0の魔界劇団―メモロー・マドンナとスケール2の魔界劇団―ワイルド・ホープペンデュラムでP スケールをセッティング！」

沢渡は手札からモンスター2体を、デュエルディスクの両端に置く。すると、彼の両脇に光の柱のようなものが現れ、その中に、桃色の髪のような女性のようなモンスターと、ガ

ンマンのような格好のモンスターが、それぞれ浮かび上がってくる。

これがペンデュラムモンスター。ディスクの両端に存在するPゾーンペンデュラムに、魔法カード扱いとして発動できるモンスター。この次元で生まれた召喚法。

「まずはメロー・マドンナのペンデュラム効果だ！1ターンに1度、1000LP支払ってデッキから魔界劇団Pモンスターを手札に加えることができる！俺は魔界劇団1サッシー・ルーキーを選択するぜ！」

沢渡：4000LP↓3000LP

沢渡の全身に、少し顔をしかめるほどの、軽めの衝撃が走る。沢渡はそれを堪えながら、デッキから新たにモンスターを手札に加える。

「さあさあとくとご覧ください！我らが魔界劇団の誇るペンデュラム召喚を！」

「何が我らがよくよ！アンタが生み出したわけじゃ無いでしょ！」

「チツチツ、ペンデュラムが生まれて早2年だぜ？もうペンデュラムは神遊矢一人のものじゃないんだっつーの」

柚子の講義を軽くないなし、気を取り直して沢渡はデュエルを続ける。

「今回はデュエル初心者が居るみたいだし、ペンデュラム召喚の説明もしちゃうぜ？俺ってサービス精神旺盛☆やつさしい☆」

「分かったから早くしなさいよ。タイムアウトになっても知らないわよ」

「終柚子う！茶々入れすぎなんだよお前！マナーがなってないんじゃないの？」

ぶんすかとお観客席に向かって怒りながら、沢渡は説明を再開する。

「俺の場にはスケール0のメロー・マドンナとスケール2のワイルド・ホープ。ペンデュラム召喚は、この2体のPスケールの間のレベルを持つモンスターを、手札のモンスターとEXデッキに表側表示で存在するPモンスターの中から可能な限り特殊召喚できるとのさー！」

「ほら、これがペンデュラムカード。で、ここに書いてあるのがPスケールで……」

「はえー、やっぱ実物見るとわかりやすいわ」

沢渡の説明に、すかさず柚子が自分のPカードを瞬達に見せて補足を入れる。

「EXデッキって？」

「融合、シンクロ、エクシーズモンスターを入れるトコ。Pモンスターもフィールドを離れる場合はEXデッキに行くの」

言葉だけじゃまいち理解しづらい。やはり、実演や実践の方がわかりやすいような気がする。まあデュエルが進めばきつと自ずからわかるだろう。

「まずはワイルド・ホープのP効果を発動！それによってメロー・マドンナのスケールをターン終了時まで0から9に変更する！これで俺はレベル3から8のモンスターが同時に召喚可能！行くな、ペンデュラム召喚っ！」

「劇団の名悪役！レベル8、魔界劇団―デビル・ヒール！洒落た新人！レベル4、魔界劇団―サツシー・ルーキー！そして本日の主演！レベル7、魔界劇団―ビッグ・スター！」

「ははあつ！」

「ふんっ」

「きやははははっ！」

魔界劇団―デビル・ヒール ATK：3000

魔界劇団―サツシー・ルーキー ATK：1700

魔界劇団―ビッグ・スター ATK：2500

沢渡のフィールドに、3体のモンスターが一気に揃う。劇団の名の通り、どれもが派手な衣装を身に纏った隻眼の人型モンスターの姿をしている。

「やっぱりソリッドビジョンを使ったデュエルは迫力が段違いよね。あー私も時間が取れたらやるのになー」

「瑞鶴、今度暇があれば僕とデュエルデートを……」

「初月は落ち着け、な？」

エキサイティングして来た初月を、なんとか静止させるアラタ。この初月は、話す内容の大半が瑞鶴とデュエルの事なのだ。そういう点では、ハルと同じなのかもしれない

い。実際、これまでの会話の中でもちよくちよく意気投合してる節があったし。

一方、瞬は、デュエルという未知の世界に圧倒され、言葉を失っていた。まだ序の口なのはわかってている。だが、モンスターが実体化するカードゲームなんて、瞬からすれば前代未聞のだから仕方ない。隣では唯も同じような反応をしている。

そしてもちろん、ファイフティもこの場にいた。どうやら彼はあんまりデュエルには興味がないらしく、他の面々と比べると落ち着いているように見える。

「ここからが演目の始まり、というわけだね。たまにはこういうのも悪くないね。心躍るなあ」

「本当かよファイフティ……目が笑ってたくない？」

「逢瀬くん、それはデフォルトだから安心して欲しい」

はたしてそれは安心していいものなんだろうか。瞬は首を傾げるのであった。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ。さあ榊遊矢！テメエのデュエル、見せてもらおうじゃねーか！」

「言われなくとも！俺のターン！ドロー！」

遊矢：手札5枚↓6枚

「俺はスケール6のEMギタートルをペンデュラムゾーンに発動！そして魔法カード、デュエリスト・アドベントを発動する！」

「遊矢もペンデュラムを使うのか」

「両者とも初動の手札消費の激しいペンデュラムの特性を補っているな」

亀とギターが合わさったかのようなモンスターが出現し、光の柱に包まれ登ってゆく。遊矢は、自分の背丈程はある大岩に、華麗なジャンプで飛び乗り、カード効果の説明をする。

「デュエリスト・アドベントは、Pゾーンにカードが存在する場合、デツキからペンデュラム」と名のつくPモンスター、または「ペンデュラム」魔法・罠カードを1枚手札に加えることができる。俺はEMペンデュラム・マジシャンを手札に加える!」

そして、遊矢は大岩から石柱に難なく飛び移り、デツキからカードを一枚手札に加える。先程の身のこなしからするに、どうやらアクションの面では遊矢の方に軍配が上がるようだ。

「そしてもう一方のペンデュラムゾーンにスケール6のEMリザードローを発動!」

「おいおい、同スケールじゃペンデュラム召喚できないって事を知らないわけじゃないわだろうに、何やってんだよ」

「ペンデュラム召喚はまだだよ。後のお楽しみってヤツ。俺はEMギタートルのP効果発動!もう一方の自分のPゾーンにEMカードが発動した時、1枚ドロワーできる!そしてEMリザードローのP効果!もう一方のPゾーンにEMカードが存在する場合、リ

ザードローを破壊して1枚ドロワーできる！」

沢渡の茶化しを笑って返しながら、遊矢はカード効果を続け様に発動させてゆく。Pゾーンにいたりザードローが光の粒子となって霧散すると引き換えに、2枚のドロワーを行い、手札を順調に増やしていく遊矢。

「俺は手札からEMドクロバット・ジョーカーを通常召喚！ドクロバット・ジョーカーの召喚成功時、デッキからEM・オッドアイズモンスター、または魔術師ペンデュラムモンスターの内一体を手札に加えることができる！俺はこのカードを手札に加える！」

「ハハッ！」

EM ドクロバット・ジョーカー ATK:1800

某夢の国のネズミみたいな声を上げながら、遊矢の前にシルクハットを被り、黒と紫の奇術師が何処からともなく現れる。そして、遊矢はサーチしたカードを沢渡に見せる。二色の眼を持つ赤き龍——オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン。沢渡はそれを見て、真剣な表情になる。お互いにメインキャストが揃う瞬間が近づいているのだ。

遊矢は腕を広げ、声高らかに宣言する。さあ、ショーの始まりだ。

「Ladies & gentlemen！」

「なんだ？何が始まるんだ？」

「始まるのよ、遊矢のエンタメが!」

「さあご覧あれ! 本家本元、私神遊矢のペンデュラム召喚による、本日のキャスト達の御登壇です!」

先程までとはうってかわり、芝居がかった口調に切り替わる遊矢。手札から一枚のカードを見せて、

「まずは手札からスケール3の、EMリターンタンタンをPゾーンにセットし、効果を発動! 自分フィールドのEMカードを1枚手札に戻すことができます! これによりPゾーンのギタートルを手札に戻し、そして新たにスケール8のEMオッドアイズ・ユニコーンをPゾーンにセット。これでレベル4から7のモンスターが同時に召喚できます!」

カードを動かしながら、砂浜に半ば埋もれた、祭壇らしき場所へと続く階段を駆け上がる。

茶釜のような胴体を持つ狸がりザードローのいたPゾーンに入れ替わりに出現すると同時に、今度はギタートルが手札に戻り、新たに二色の眼を持つ小柄なユニコーンがPゾーンに置かれる。

そして、階段の最上段沢渡の方に振り返ると、いよいよペンデュラム召喚に入る。

「揺れる、魂のペンデュラム! 天空に掛け光のアーク! ペンデュラム召喚! 現れる、俺の

モンスター達！手札からEMペンデュラム・マジシャン、EMラ・パンダ、そして本日
の主役！二色の眼持つ龍、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

EMペンデュラム・マジシャン ATK：1500

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK：2500

EMラ・パンダ ATK：800

そう高らかに宣言した。すると、空からモンスター達が、遊矢のフィールド上に舞い降りてきた。華やかな衣装を身に纏ったEM達に混じって、けたたましい雄叫びをあげながら現れたのは、赤い体躯をもつ二色の眼を持つドラゴンだった。これが遊矢のエースモンスターである、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン。

「EMペンデュラム・マジシャンのP効果発動！このカードの特殊召喚に成功した時、自分フィールドの表側表示のカードを2枚まで破壊し、その数だけデッキからEMを手札に加える事ができる！俺はPゾーンのリターンタンタンを破壊し、デッキからスケール5のEMチェンジラフを手札に加え、Pゾーンにセッティング！」

リターンタンタンが消え、キリンの様なモンスターが入れ替わりにPゾーンに置かれる。幾つものモンスターが入れ替わり立ち替わりにフィールドに姿を現す様は、まさしくシヨーである。

遊矢はオッドアイズの背中にひらり跨ると、ゴーグルをしつかりとかけ、不敵な笑み

を浮かべながら宣言する。

「さあ行こうオッドアイズ! 一気に駆けるぞ、バトルだ!」

遊矢の言葉に、荒々しい鳴き声をあげて答えるオッドアイズ。瞬にはドラゴンの言葉は分からないが、やる気に満ち溢れているように感じられる。

遊矢を背に乗せ、オッドアイズは砂浜を駆ける。その前方、地上から約4〜5mの位置に、アクションカードが浮遊しているのが見える。

アクションカード。これがアクションデュエルの醍醐味である。フィールドに落ちているカードを利用して、戦況を変化させる。ランダム性の強さやアドバンテージの得やすさ故に嫌悪する人も多々いるのだが、それでもアクションデュエルにおける最も重要な存在であることには変わりはないのだ。

「跳べっ!」

遊矢の声に合わせて、オッドアイズが砂を思い切り蹴って飛び上がる。そのジャンプの頂点で、遊矢は立ち上がり、オッドアイズの背中から跳躍し、空中のアクションカードを見事にキャッチする。その身のこなしは、見事の一言に尽きる。

オッドアイズの背中に難なく着地した遊矢は、改めて、前方で待ち構える沢渡に攻撃宣言をする。

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、魔界劇団―デビル・ヒールを攻撃! 螺旋の

ストライクバースト！」

遊矢の命令により、オッドアイズの口から、魔界劇団―デビル・ヒール目掛け、光線のようなものが発射される。ソリッドビジョンとは思えない迫力だ。

「そしてこの時、EMオッドアイズ・ユニコーンのP効果が発動！自分の〃オッドアイズ〃 モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力を自分フィールドの他の〃EM〃 モンスター1体の攻撃力分アップさせる！俺はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力を、EMペンデュラム・マジシャンの攻撃力分、すなわち1500ポイントアップさせる！」

「ゴオオオオツ!!?」

オッドアイズボン・ペンデュラム・ドラゴン ATK:2500↓4000

Pゾーンに存在する、EMオッドアイズ・ユニコーンの目が光ると同時に、EMペンデュラム・マジシャンの身体からオーラのようなものが流れ出て、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンへと注ぎ込まれてゆく。それに併せて、オッドアイズの咆哮もより力強いものになる。味方の力を得てパワーアップしたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃が、沢渡に迫る。

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンがレベル5以上のモンスターとバトルする時、相手に与える戦闘ダメージは2倍になる！リアクションフォース！」

「くっ……! 2000のダメージは流石に許容範囲外だつての!

オッドアイズの光線が、一段と太さを増して沢渡に襲いかかる。必死に逃げる沢渡は、毒づきながら、石柱の上に置かれていたアクションカードを拾い、即座に発動させる。

「アクション魔法発動! 奇跡! モンスターの戦闘破壊を無効にし、戦闘ダメージを半減する!」

「だがダメージは受けてもらおう!」

「ぐっ……これくらい!」

沢渡: 3000LP ↓ 2000LP

デビル・ヒールの身体を覆う様にバリアの様なものが生成され、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃から身を守る。しかし、バリアに光線が直撃した時の衝撃で、沢渡の身体は石柱の上から吹き飛ばされ、砂浜へと落下する。

口に入った砂を吐き出しながら、砂の中から身体を起こす沢渡に、遊矢のモンスターの追撃が迫る。

「EMペンデュラム・マジシャンで、魔界劇団―サツシー・ルーキーを攻撃!」

「攻撃力は向こうのほうが上なんじゃ……!」

「ここでアクションマジック、アタック・フォース発動! 自分フィールドのモンスターが

自身より攻撃力の高い相手モンスターとバトルする時、モンスター1体の攻撃力を、ダメージ計算時のみ600アップする！」

EMペンデュラム・マジシャン ATK：1500↓2100

先程取得したアクションカードにより、EMペンデュラム・マジシャンが強化され、魔界劇団―サツシー・ルーキーを蹴り倒し、沢渡に戦闘ダメージを与える。

沢渡：2000LP↓1600LP

「くそっ！だがサツシー・ルーキーは1ターンに1度、破壊されない」

「まだ俺の攻撃は残っているよ。ドクロバット・ジョーカーでもう1度サツシー・ルーキーを攻撃！今度は破壊だ！」

「うっ……」

沢渡：1600LP↓1500LP

「だがこの瞬間、サツシー・ルーキーの効果が発動する！サツシー・ルーキーが破壊された時、デッキからレベル4以下の〃魔界劇団〃1体特殊召喚できる！こい、魔界劇団―コミック・リリーフ！」

魔界劇団―コミック・リリーフ：ATK1000

破壊されたサツシー・ルーキーに代わり、新たに分厚い瓶底眼鏡を掛けた、小太りのモンスターがフィールド上に現れる。残ったEMラ・パンダの攻撃力では、攻撃したところで返り討ちに遭うだけ。実質的に、遊矢のモンスターの攻撃はこれで終了したようなものだ。

沢渡のライフはかなり削れたものの、盤面的にはそこまで崩せてはいない。まだまだ油断は禁物だろう。遊矢は反撃に備え、カードを魔法・罠ゾーンに伏せておく。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。EMオッドアイズ・ユニコーンの効果も終了し、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力も元に戻る」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK4000↓25000

ターン終了の宣言と同時に、上昇していたオッドアイズの攻撃力が元の数値に戻る。

ライフコストを支払ったとはいえ、ライフ的には、僅か2ターンでかなり追い込まれてしまった沢渡。だが彼も決闘者。これくらいで戦意喪失するような人間では無い。良くも悪くも諦めが悪いのが、沢渡シンゴという少年なのだ。

服についた砂を払いながら、沢渡は自信満々にドローフュイズ突入を宣言する。まだまだ勝負はこれからだ、とでも言うかのように。

「俺のターン!」

沢渡：手札0↓1枚

「この瞬間、魔界劇団―コミック・リリーフの効果が発動！自分スタンバイフェイズ時に、コミック・リリーフのコントロールを相手に移す！さあ行つてやりな、俺の演目はこつからが山場だぜ？」

沢渡がそう言うと、沢渡のフィールドに居たコミック・リリーフが、ケタケタと笑いながら遊矢のフィールドへと移動してゆく。自分のモンスターを相手に渡して、何をすゝるつもりなのだろうか？

不思議に思うギャラリイ達を他所に、沢渡は自身たつぷりの笑みを浮かべながら、効果の説明を続ける。仕込みは終わった、ここからは此方の舞台だ、とでも言うかのように。

「コミック・リリーフのコントロールが移った時、その元々の持ち主は自分フィールドにセットされた『魔界台本』カードを一枚破壊できるのさ！」

「自分のセットカードを自分で破壊!?？ 一体何を考えて……」
「まあ黙つて見てろよ」

沢渡はそう言いながら、自分の魔法・罨ゾーンに伏せていたカードを破壊する。

「破壊したのは魔界台本『ロマンティック・テラー』！このカードが相手の効果で破壊された場合、デッキから魔界台本を任意の数まで魔法・罨ゾーンにセット出来るのさ！俺は3枚のカードを伏せる！」

破壊する対象は沢渡が決めてはいるものの、コミック・リリーフは今、遊矢のフィールドに存在するモンスターである。一応相手フィールドで発動した効果であるので、「相手の効果で破壊された」事になるようだ。早速デュエルのややこしきを見せてつけてきている。

破壊されたカードの効果により、新たに3枚の魔界台本カードが魔法・罠ゾーンにセツトされる。一体何を伏せられたのだろうか。

「そして再びワイルド・ホープのP効果発動!メロー・マドンナのスケールを0から9に!そしてペンデュラム召喚!今一度御登壇の時だ、魔界劇団―サツシー・ルーキー!」

魔界劇団―サツシー・ルーキー: ATK1700

先程破壊されたサツシー・ルーキーが、何語とも無かったかのように、再びフィールド上に舞い戻ってくる。

「あれ、あのモンスターはさっき破壊された筈じゃ」

「Pモンスターは破壊されても墓地に行かず、EX^{エクストラ}デッキに移るの。そしてEXデッキに表側表示で加わったPモンスターは、ペンデュラム召喚で場に呼び出せる。これがペンデュラム召喚の一番の特徴ね」

「えつと……それってつまり?」

「Pスケールが無事ならば、普通に破壊しても毎ターン甦つちやうのさ。いやーほんと

ヤバい召喚法だね」

「アンデットでもないのに、そんなにわんさか蘇るとかアリかよ……」

「墓地からの特殊召喚なんか日常茶飯事だけど？」

「いやそういう意味じゃなくてね？」

柚子と初月の説明を聞いて、改めて遊矢と沢渡のデッキの恐ろしさを理解する瞬と唯。たった一度の特殊召喚で、何体ものモンスターを呼び出すペンデュラム召喚。デュエルモンスターズの中でも取り分けて厄介な召喚法を操る両者の勝負の行方から、いやでも目が離せなくなる。

視点を戻して、沢渡のフィールド。彼はセットした魔界台本カードの一つを発動させる。ここからが彼の逆襲の始まりだった。

「そして先程セットした魔法カード、魔界台本『魔王の降臨』。俺のフィールドの攻撃表示の魔界劇団モンスターの種類の数まで、場の表側表示カードを破壊する！俺はお前のフィールドの魔界劇団ーコミック・リリーフと、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン、EMペンデュラム・マジシャンを破壊する！ここから先は俺の舞台、邪魔者には降板願おうかなあ！」

用済みだと言わんばかりに、コントロールを渡した自分モンスター諸共、遊矢の場のモンスターを消し飛ばしてしまう。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが破壊され

た事で、その上に乗っていた遊矢は宙に放り出され、波打ち際へと背中から落っこちてしまう。

しかし、落下しながらも、遊矢は伏せていたカードを発動させる。

「^{トランプ}罨 発動！フレンドリーファイア！相手がカード効果を発動した時、そのカード以外のフィールドのカード1枚を破壊する！

狙いは沢渡の伏せカード。

しかし、それはまさしく藪蛇だった。

「馬鹿かよ！破壊された魔界台本『魔界の宴^{エンタメ}タ女』効果発動！このカードが相手によって破壊された時、デッキから〃魔界劇団〃Pモンスターを任意の数だけ特殊召喚する！追加キャストの御登壇だ、魔界劇団―ファンキー・コメディアン、魔界劇団―プリティ・ヒロイン！」

魔界劇団―プリティ・ヒロイン：ATK

魔界劇団―ファンキー・コメディアン：ATK300

カードが減るところか、かえって増えやがった。新たに召喚された魔界劇団を含め、これで沢渡の場には5体のモンスターが集結した。前のターンとは立場がまるで逆転してしまっている。

「ファンキー・コメディアンは召喚・特殊召喚に成功したとき、自分の攻撃力を、自分の場の『魔界劇団』モンスターの数×300アップする。俺の場には5体の劇団員達。よって1500ポイントアップだ」

魔界劇団―ファンキー・コメディアン ATK300↓1800

「そしてセットしていた魔法カード、魔界台本『オープニング・セレモニー』を発動。自分の場の『魔界劇団』モンスターの数×500LPを回復。これで振り出しに戻ったというわけよ」

沢渡：1500↓4000LP

沢渡の場には5体の魔界劇団モンスター。よって2500ポイント回復する。彼のいうとおり、先のターンまでのダメージを帳消しにしてしまった。いや、振り出しというより、一気に遊矢が追い込まれてしまった。遊矢の場のモンスターは、先程の『魔界台本「魔王の降臨」』で主力のオッドアイズをはじめ、半数近くが破壊されてしまった。一方、沢渡のフィールドには高打点のデビル・ヒール、ビッグ・スターを含め5体のモンスター。誰の目から見ても、沢渡が優勢なのは一目瞭然だろう。

「魔界劇団―ファンキー・コメディアンのもう一つの効果発動！他の魔界劇団1体の攻撃力を、ターン終了時までファンキー・コメディアンの攻撃力分、アップさせる！俺はデビル・ヒールの攻撃力を上げる！」

魔界劇団―デビル・ヒール ATK3000↓4800

ただでさえ高打点だったデビル・ヒールが、更にパワーアップする。今遊矢の場にはEMドクロバット・ジョーカーとEMラ・パンダの2体のみ。どちらの攻撃力も、今のデビル・ヒールには遠く及ばない。

沢渡は調子づいて、意気揚々と更なる攻撃をする。

「バトルだ！プリティ・ヒロインで、EMラ・パンダを攻撃！」

「ラ・パンダの効果発動！―ターンに1度、Pモンスターへの攻撃を無効にする！」

だが、その攻撃は凌がれてしまう。プリティ・ヒロインの攻撃はラ・パンダに当たる事なく、虚空に霧散する。

しかしたった1回の攻撃を無効にしたところで、沢渡のフィールドにはまだまだモンスターが残っている。この調子ならば、このターンで遊矢のライフを削り切れる。

「ならビッグ・スターでもう一度ラ・パンダを攻撃！」

既にラ・パンダの効果は使用済みであるため、ビッグ・スターの攻撃を防ぐ事は出来ず、ビッグ・スターの飛び蹴りをくらったラ・パンダは爆散し、遊矢は大ダメージを受けてしまう。

「ぐっ……」

遊矢：4000↓2300LP

カーの破壊をトリガーとして、すかさずカードの効果を発動する。

「EMチェンジラフのP効果!自身モンスターが戦闘破壊された時、チェンジラフを破壊することで、破壊されたモンスターを特殊召喚する!来い、EMドロバット・ジョーカー!この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、戦闘では破壊されない」

EMドロバット・ジョーカー:DFE100

Pゾーンに存在していたチェンジラフの背中から、鎖が数本伸びてゆき、破壊されたドロバット・ジョーカーをフィールド上に釣り上げる。効果発動の代償として、チェンジラフは破壊されて居なくなつたが、これでこのターン、遊矢は攻撃を凌ぎ切る事がほぼ確定した。

沢渡は自身のプレイングミスを後悔して悔しがり、捨て台詞を吐きながら、渋々自分のターンを終了する。

「先にデビル・ヒールで攻撃してれば良かったぜ畜生……覚えてろよ!俺はカードを1枚伏せてターンエンド!ファンキー・コメディアンとワイルド・ホープの効果も終了し、メロー・マドンナのPスケールとビッグ・スターの攻撃力も元に戻る!」

魔界劇団—メロー・マドンナ:Pスケール9↓0

魔界劇団—デビル・ヒール:ATK4800↓3000

ファンキー・コメディアンは、自身の効果を使用したターンは攻撃ができない上、仮にできたとしても戦闘では破壊できないし、守備表示のモンスターを攻撃しても、基本的にはダメージは与えられない。要するに、このターンで仕留めるのは不可能になったというわけだ。

一方、遊矢はなんとか攻撃は凌いだが、遊矢の場はほぼガラ空き。手札にはEMギタートルが1枚のみ。これだけでは沢渡の盤面は崩せない。勝負の命運は、このドロロにかかっている。

「あれ大丈夫なの？遊矢のフィールド、壊滅じゃん」

「いや唯、ゲームは最後の最後まで何が起こるかはわからないモンだよ。たった一度のドロロで勝敗が決する……それがカードゲームの醍醐味なのさ！ドヤア！」

「さっすがネプテューヌ！ゲーム知識だけは豊富なんだから！」

「いやあれ程でも？なんせゲエムギョウ界の女神ですし？これくらい朝飯前だし？もつと褒めてもいいんだよ？ねえ瞬？」

感心した湖森におだてられ、得意げになって瞬にマウントを取ってくるネプテューヌ。だが悲しいかな、瞬はデュエルを観るのに夢中になっている為、ねぷアピールをガン無視してらっしやる。なんだかんだいって、デュエルという未知の世界に興味津々なのであった。

「……」

遊矢は、無言でデッキに手をかける。いつだって、どんな決闘者でも、ドローの時は必死に祈るものだ。デッキトップの一枚を手につけ、指に力を込める。

—— こんな時こそ笑え。これくらい、全然大したことないだろう？

皆を笑顔にするエンターテイナー自身が、笑顔でなくてどうする？ さあ笑ってカードを引こう。そうすればきつと、デッキも応える。遊矢は、思い切り笑顔になって、カードをドローする。

「お楽しみは、これからだ！」

勢いよく引いたカード。それを確認した遊矢の頬が上がる。

「まずは手札から魔法カード、EMキャスト・チェンジを発動！これにより手札のEMを任意の枚数相手に見せた後、そのカードをデッキに戻してシャッフル、そして戻した数＋1枚カードをドローする。俺の手札には、前のターンで手札に戻したEMギタートルが1枚。よって1枚戻して2枚ドロー！」

要するに手札交換のカードだ。遊矢は、手札のEMギタートルを公開した後にデッキに戻す。デュエルディスクの機能により、デッキが自動でシャッフルされる。そして改めて、遊矢はデッキから2枚のカードをドローする。

さて、ドローの結果は如何に。遊矢はドローしたカードをまじまじと見つめると、

につこりと笑う。

「さーて、結果は……あれ、まだまだ出るのは先ってことか。続いて手札を1枚捨て、魔法カード、ペンデュラム・コールを発動！デッキからPスケールの異なる『魔術師』Pモンスターを2体まで手札に加える！俺はスケール0の調弦の魔術師と、スケール1の龍脈の魔術師を手札に！そして、セッティング済みのEMオッドアイズ・ユニコーンと、スケール1の龍脈の魔術師で、Pスケールをセッティング！これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！」

空いていたもう片方のPゾーンに、青を基調とした衣装の、杖を持った人型モンスターがのぼってゆく。

「更にコストとして墓地に送った罫カード、ペンデュラム・ラバーズの効果！このカードが効果で墓地に送られた時、自分の墓地にモンスターカードが無ければ1枚ドロークできる！」

遊矢：手札2↓3枚

そして遊矢は、もう一枚のカードを発動する。

「そして……またまた運試しの時間みたいだ。これが正真正銘、運命のドロークタイム！手札から魔法カード、ペンデュラム・ホルトを発動！」

「また魔法カード……」

「このカードは、自分のEXデッキに表側表示のPモンスターが3種類以上いる場合に発動できるカード。発動後、ターン終了時までデッキからカードを加えられなくなる代わりに、2枚ドローできるんだ」

「サーチもドローも出来なくなる……それってキツク無い?」

「うんキツイよ。デュエルにおいて、手札アドバンテージはとても重要。それを増やす手段を封じるとなると、結構厳しいね」

手札アドバンテージが直に影響してくるデュエルモンスターズにおいて、たった1ターンでも手札を増やせないのはかなりキツイ。他のカードゲームにあるような、マナだのコストだのの概念が希薄なこのゲームならば、それは尚更のこと。

遊矢は、いいカードを引き当ててることを祈りながら、デッキから2枚のカードを引く。いつだってドローはドキドキするのだ。たった一回のドローが、勝利を導くことは日常茶飯事なのだから。

思い切り力を込めて引いたカードを、遊矢は確認する。その顔は、笑っていた。

「今一度揺れる、魂のペンデュラム! 天空に描け光のアーク! ペンデュラム召喚! 今一度舞い戻れ! EXデッキからオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン! 手札から、EMファイア・マフライオ! チューナーモンスター、調弦の魔術師!」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン: ATK2500

調弦の魔術師：ATK0

EMファイア・マフライオ：ATK800

先程破壊されたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに加え、新たに2体のモンスターがフィールドに現れた。1体は、先程のEM達と似たように、煌びやかな衣装を身につけた、炎の立髪を持つライオンだが、もう1体は、EMとは明らかに風貌が異なる、音叉のような形状の杖を持ち、白いローブを身に纏った小柄な人型モンスターだった。

「調弦の魔術師の効果発動！手札からP召喚に成功した時、デッキから他の「魔術師」Pモンスター1体を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！来い、黒牙の魔術師！」

黒牙の魔術師：DFE800

調弦の魔術師が杖に付いていた音叉を鳴らすと、何処からともなく、黒と紫を基調とした服装の、やや筋肉質な人型モンスターが現れる。

「手札に加えられないなら、直接場に出せば良いのさ！」

遊矢の言う通り、手札は増やせないが、手札を介さずにデッキから直接場に引く張ってくる事は可能だ。

そして遊矢は、フィールドに揃った2体の魔術師を利用して、ある事を行う。

「俺はレベル4の黒牙の魔術師に、レベル4の調弦の魔術師をチューニング！剛毅の光

を放つ勇者の剣!今ここに閃光と共に目覚めよ!シンクロ召喚!レベル8、
エンライトメント・パラディン
 覚醒の魔導剣士!」

覚醒の魔導剣士: ATK2500

遊矢がそう宣言すると、調弦の魔術師の身体が、四つの緑色の輪に変化して一直線に並んでゆき、その輪を黒牙の魔術師が潜ってゆく。すると、黒牙の魔術師の身体が4つの光球に変化し、やがて光の柱なってフィールドに降り注ぐ。

激しい光の後に現れたのは、純白の法衣を身に纏い、双剣を構えた剣士だった。一体何が起きたのかわからない瞬に、見かねた権現坂が説明を加える。

「シンクロ召喚?」

「チューナーと呼ばれるモンスターと、それ以外のモンスターのレベルの合計となるレベルのシンクロモンスターを、EXデッキから特殊召喚する方法だ。要するにレベルの足し算だな」

「ペンデュラム以外にも色んな召喚法があるんだな」

「EXデッキからの特殊召喚!実に燃えるよねー」

「どうやらペンデュラム以外にも色々あるらしい。奥が深いというか、複雑というか……。」

「覚醒の魔導剣士の効果! 魔術師 Pモンスターを素材にSシンクロ召喚に成功した時、墓地

の魔法カードを手札に加える！俺が選択するのは、アクション魔法、アタックフォース！」
覚醒の魔導剣士が、装備していた二振りの剣の柄同士を合体させ、それを前方で回し始める。すると、周囲のアクションフィールドの破壊された部分が、まるで時間が巻き戻るかのように治ってゆく。やがて覚醒の魔導剣士が剣を再び分離させると、それはピタリと止んだ。そして、遊矢の手にはいつのまにかアクションカードが一枚握られていた。

遊矢はバトルフェイズ突入を宣言すると、オッドアイズに攻撃命令を出しながら、サルベージしたアクションカードを発動させる。

「バトルだ！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで魔界劇団―デビル・ヒールを攻撃！そしてこの時、アクション魔法、アタック・フォースを発動！オッドアイズの攻撃力を、ダメージステップ終了時まで600アップ！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500↓3100

オッドアイズの攻撃力がデビル・ヒールを上回る。沢渡は砂浜を掛け、防御札を求めてアクションカードを必死に探す。

そして見つけたのは、藻やタニシに覆われた石造のアーチの上。しかし、取得は間に合わずに、オッドアイズの攻撃を受けてしまう。

「ぐへえっ!!?!」

沢渡：40000↓3800LP

オッドアイズの効果により2倍の戦闘ダメージを受けるが、沢渡はサツシー・ルキーを踏み台にして、遅ればせながらアーチの上のアクションカードを入手する。

そして、すかさず魔界劇団―プリティ・ヒロインのモンスター効果を発動させる。その効果は、先のターンで使用したので、軽く説明するだけで良いだろう。

「魔界劇団―プリティ・ヒロインの効果発動！自分または相手が戦闘ダメージを受けた時、相手モンスター1体の攻撃力を、そのダメージの数値分ダウンさせる！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3100↓2500↓2300
 せっかく上昇したオッドアイズの攻撃力が、元々の数値以下に下がってしまう。

しかし、これくらいで遊矢の攻勢は止まらない。

「EMファイア・マフライオの効果！自分のPモンスターが相手モンスターを戦闘破壊した時、そのモンスターはバトルフェイズ終了時まで攻撃力が200アップし、もう1度攻撃できる！オッドアイズで、魔界劇団―サツシー・ルキーをを攻撃！螺旋のストライクバースト！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2300↓2500

ファイア・マフライオの立髪が勢いよく吹き上がり、オッドアイズの前方に火の輪を作り出す。遊矢はオッドアイズの背中に再び乗り、

「行け！」

なんと、そのまま火の輪くぐりを始めた。いくらソリッドビジョンといえど、よくもまあそんな事を隠せずもできるものである。火の輪を潜ったオッドアイズの攻撃力は、プラマイゼロで元の数値に戻る。そして、サツシー・ルーキー目掛け、口から光線を発射する。

サツシー・ルーキーのレベルは4であるために、オッドアイズの効果による戦闘ダメージ倍化は出来ない。だが、それでもダメージは十分通る。

しかし、沢渡もタダではやられない。すかさず、伏せていたカードを発動させる。

「速攻魔法発動！^{アイ}アイ打ち！自分と相手のモンスター同士がバトルする時、そのダメージ計算の間のみ、自分モンスターの攻撃力を相手モンスターと同じにする！そしてダメージステップ終了時にモンスターが戦闘破壊されたプレイヤーは、その元々の攻撃力分のダメージを受ける！」

「道連れ……っ？」

「いや、サツシー・ルーキーは1ターンに1度だけ、戦闘・効果による破壊を無効にできる！破壊されるのはお前のモンスターだけだよ！」

沢渡が勝ち誇った様に言うと同時に、両者のモンスター同士の攻撃が衝突する。すると、それを中心に爆発が起き、砂と海水が巻き上げられる。沢渡は飛んできた砂から咄

嗟に顔を守りながら、勝利を確信していた。自分の勝ちだと。

近くにあった、横倒しになっている石柱に登り、そこから遊矢のやられた様を見下してやろうと思う沢渡。爆煙が晴れ、遊矢の姿が顕となる。そこには、沢渡の思惑とは裏腹に、無傷で佇むオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと遊矢の姿があった。

「な、んで……」

「墓地の罨カード、ペンデュラム・ラバーズの効果を発動したのさ。このカードを墓地から除外することで、Pモンスター体の破壊を無効にした」

一体いつ、そんなカードを墓地に落としたんだと、沢渡はこれまでのデュエルの流れを思い返す。そして、思い至った。このターンの初めの方に、ペンデュラム・コールの効果発動のコストで捨てた手札。それがこの罨カードだったようだ。

悔しそうに歯軋りをする沢渡だったが、遊矢の攻撃はまだ残っている。自信満々に、遊矢は攻撃宣言をする。

「デュエルは何が起こるか分からないものだろう？ さあ、デュエル続行だ！ 覚醒の魔導剣士で魔界劇団―プリティ・ヒロインを攻撃！」

「ぐっ？？」

沢渡：3800LP↓2500LP

覚醒の魔導剣士の二刀流による軽やかな剣戟で、プリティ・ヒロインは呆気なく倒さ

れる。プリティ・ヒロインの効果は既に使用済みなので、効果は発動しなかった。

必死に踏ん張る沢渡に、更なる追撃が迫る。

「覚醒の魔導剣士の効果発動！相手モンスターを戦闘破壊した時、その元々の攻撃力分のダメージを与える！」

「させねえ！アクシオン魔法『加速』発動！効果ダメージを0にする！」

遊矢がそう言うと、覚醒の魔導剣士が斬撃を放ってくるが、沢渡は先程取得したアクシオンカードを使用する。すると、沢渡の動きが数秒間だけ速くなり、覚醒の魔導剣士が放った斬撃を難なく回避する。斬撃が直撃した石柱は木っ端微塵に砕け散る。

沢渡は服についた砂を払いながら、すくりと立ち上がり、いきなり笑い始めた。

「遊矢、仕留め損なつたな。お前の攻撃モンスターは、ドクロバット・ジョーカーとファイア・マフライオの2体。だがその2体の攻撃を受けても俺のライフは残る！残念だな！次のターンで俺が勝つぜ！」

自分を仕留めきれなかった遊矢を笑いながら、次のターンへの展望を自信満々に言う沢渡。確かに、沢渡の言うとおり、今の遊矢の場のモンスターでは沢渡のライフは削りきれない。ドクロバット・ジョーカーでサツシー・ルーキーを、ファイア・マフライオでファンキー・コメディアンを攻撃しても、与えられるダメージは僅か600。沢渡の2500LPを削りきれない。

だが、デュエルでは一瞬の油断が命取りになる。何が起きるか分からないのがデュエルなのだから。最後まで気を抜かなかった奴が、勝つ。

「まだだ。俺は速攻魔法、瞬間融合を発動！自分フィールドから融合モンスターによって決められた融合素材モンスターを墓地に送り、EXデッキから融合モンスター1体を融合召喚する！」

遊矢が手札から、その魔法カードを発動すると、遊矢の背後に渦のようなものが出現し、その渦にオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと、覚醒の魔導剣士が吸い込まれてゆく。

今度は一体何が起ころうというのだろうか。

「勇者の剣を振るう魔道士よ！眩き光となりて龍の眼に今宿らん！融合召喚！秘術ふるいし摩天の龍！ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」

ルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3000

遊矢のその口上に呼応するように、渦の中から、新たなモンスターが飛び出してきた。そのモンスターの見た目はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと似て入るが、片目が眼帯で隠れていることと、背中に輪のようなものがぶっ刺さっているところが異なっている。

「今度は融合……」

「融合魔法によって、融合モンスター毎に決められた、特定のモンスター同士を合体させる召喚法ね。私もこう見えて融合を使うの」

「へえ……」

すかさず柚子の説明が入る。シンクロ・ペンデュラムと比べると、融合は文字通りの意味なので、まだ分かりやすい。

「融合ってロマンあるよな。男なら一度は合体ロボにうつつを抜かすものだよ、うん」
「提督古ーい。いつの話よいつの。合体ロボなんか今ではあんまり見かけないっての」
「見かけるわたわけ！合体も融合も、変わらず男のロマンなんだよ異論は認めねえ！」

融合から脱線して、潮原提督が男のロマンについて語り始めるが、瑞鶴にぼつさりと否定されてしまう。

どうでもいいが、川内そんの姿でオツサン臭い事言つてると、なんかシニールさというか、そういう類のものを感じてしまうのは気のせいだろうか。

「ルーンアイズは、融合素材となった魔法使い族モンスターのレベルによって攻撃回数
が変化するモンスター。魔法使い族である覚醒の魔導剣士はレベル8。よって攻撃回
数は3回だ！」

「うーそーだあああああああああああああつ！」

「行こうルーンアイズ！魔界劇団ービッグ・スターを攻撃！シャイニーバースト！」

遊矢はルーンアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの背中中の輪に捕まりながら、攻撃宣言をする。ルーンアイズの背中中の輪から放たれた光線は、瞬く間にビッグ・スターの全身を包み込んでしまう。

沢渡：2500LP↓2000LP

「トドメだ！魔界劇団―ファンキー・コメデイアンを攻撃！進撃のシャイニーバースト！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああつ!?」

攻撃対象となったファンキー・コメデイアンはその場から逃げようとするも、それは間に合わず、沢渡諸共ルーンアイズの攻撃に一瞬で飲み込まれてしまった。爆発音と、沢渡の断末魔の叫びが、デュエルフィールド中に響き渡る。

―― 見事なオーバーキルだった。

沢渡：2000LP↓0LP

ライフが尽きた事を告げる音が沢渡のデュエルデスクから鳴り、それとともに、モンスター達の姿を映していたソリッドビジョンも消え去る。

瞬達は観客席からデュエルフィールドに立ち入る。遊矢は瞬達の方に振り返ると、お辞儀をしながらデュエルの感想を訊く。

「どう？少しはデュエルに興味持ってもらえたかな？」

「目まぐるしい攻防だった……でもこれ、初心者には刺激強くないか？」

一進一退のバトルにハラハラさせられたのは事実だが、初心者の瞬には、とどこころ何が起きているのか分からない箇所があった。遊矢もそう言われて、すこししょんぼりとする。

「かもね……そこはちよつと反省しなきゃな。」

「相変わらず殺意高すぎるぜお前のデツキよ……エンターテイナーというか、ガチで殺しにかかってない？」

沢渡が文句を言うが、彼のいうとおり、複数回攻撃や直火^{バー}焼き^ン効果でフィニッシュを決めるのは、果たしてエンタメなのか。難しい問題である。

「エンターテイナー……それを目指してんのか？」

「ああ。今はまだ道半ばだけど、いつか父さんを追い越してみせる。俺はデュエルで皆を笑顔にしたいんだ」

「笑顔かー、それはまた難しい夢だよねー。でもほら、諦めずに努力すれば夢は叶うから！うん！ファイトだぜ遊矢っち！」

遊矢の夢語りを聞いた唯は声援を送るが、若干適当な言い方だと思っただけだろうか？

「デュエルで笑顔を、か……」

瞬は、遊矢の言葉を聞いて、そう呟く。

遊矢もまた、夢に向かって邁進する人種なのだ。それは瞬からすれば、眩しいものだった。自分にはないものだからこそ、余計にそう見えるのかもしれない。

「デュエルとかよくわかんないけど……まあなれるんじゃないか？ 努力が実るかどうはか人それぞれだけど、夢を叶えた奴は皆努力してる。だから、進む道が見えてるなら、多分大丈夫だよ」

「瞬……ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいよ」

「ちよつとデュエルに興味湧いてきたかも」

「それはもつと嬉しい。俺達のデュエルがキツカケになってくれるなんて、最高だよ！
ほら、さっきのデュエルについて色々と解説とか——」

デュエル談義が始まりそうだ。

やれやれ、これは長くなりそうだ。

彼は憎悪の中で生きていた。

始まりは、前世で見たとある娯楽作品^{ゲーム}だった。長年にわたって愛されているカードゲームを題材にした作品。いつものように、期待しながらそれを見始めた。

だが、その期待は裏切られた。

ストーリー、キャラクター、カードバトル。それら全てが散々な有様だった。はつきり言つて、誇りあるカードゲームに泥を塗る内容に、彼は怒った。

あんなものを認めるわけにはいかない。なんであんなものを作った。

その憎悪の矛先は、作品の象徴である榊遊矢^{しゅじんこう}に向けられた。エンタメとは程遠い、デュエルを汚す害虫。脚本の被害者[?]いや違う。あれは生まれながらの邪悪。生まれではならなかった存在。

気に食わなかった。あんなのが遊戯王だなんて、俺は認めない。皆もそう言つて叩いている。だから正しい。

だから自分がやる。この手で、あの屑を殺すんだ。

「いやあ派手だったね……目眩がしそうだよ」

「ふふん、志村さんはまだまだですね。強豪同士のデュエルはもつともつと迫力あるんですから!」

公園内のデュエルコートに付属している、リアルソリッドビジョンシステムの操作室。僅かに開いた扉から、話し声が聞こえる。どうやら、誰かがこのデュエルコートを借りているようだ。

ドアの隙間から中の様子を伺う。操作盤に向かっている少年と少女の後ろ姿と、コート内部の様子を映し出すモニターが見える。そのモニターに映っている人物の姿を見た瞬間、彼の中で燻っていた憎悪は、一瞬で決壊した。

「榊……遊矢……!」

それは、彼が最も忌み嫌う存在キャラクター。

彼が転生した最大の理由。アイツを糾弾し、蹂躪し、否定するために、この命はあるといっても過言ではない。その執念は狂気の領域に達するものであるのだが、転生者という存在の中には、彼のような人種はごまんといるのだ。これくらい普通なのだ。

ともかく、憎む相手の姿を確認した彼は、冷静さをかなぐり捨てると、転生した際にもらったとある力を解放させる。転生特典を暴走させ、強化する外法。その名はオリジ

オン。

彼はオリジオンに変身すると、操作室の扉を蹴破つて中に入る。憎悪に支配されている彼にとって、先客の存在など、煩わしいだけだった。

「うわあつ!? お、オリジオン!? なんでもこんなところにい!?」

「お、お兄ちゃん! お兄 ——」

オリジオンの姿を見て、助けを呼ぼうとして立ち上がった少女の側頭部を、彼は即座にぶん殴つた。彼女の意識は一撃で途切れ、ソリッドビジョンシステムの操作盤に頭を強打しながら、先程まで座っていた椅子ごと床に倒れる。

打ちどころによつては死んでいるかもしれないが、そんなことはどうでもいい。どうせ彼女も神遊矢に洗脳された愚か者なのだ。そんな奴が何人死のうが構わないのだから。

「湖森ちゃん……! 君、なんてことをするんだ!」

「うるさい黙れ! 俺の邪魔をするな!」

「ぶけふあつ!?」

口答えしてきた少年の頭を鷲掴みにし、壁に叩きつける。冷たいコンクリート壁と人間の頭がぶつかり合う、鈍い音が部屋中に響き渡り、頭を打ちつけられた少年は、後頭部から血を流しながらずると床に崩れ落ちる。

「あれ、瞬は？」

「ヒビキちゃんと一緒にトイレだつて」

「字面だけだと完全に事案だな……」

デュエルが終わり、数分が経った。どうやら瞬は席を外しているらしい。

「じゃ、そろそろ片付けましょ」

「そうですね」

さて、デュエルも終わったことだし、いい加減ソリッドビジョンを解除すべきだろう。いつまでも公共のデュエルコートを占領しているわけにはいかない。

操作室にいる志村達に、ソリッドビジョンを切ってもらおうよう呼びかけなければなるまい。

「もうリアルソリッドビジョン解除していいよ、志村ー」

唯が呼びかけるが、操作室からの返事はない。

「志村？ 湖森ちゃん？」

「大丈夫っすか沢渡さん!」

取り巻き達が驚きながら、リアルソリッドビジョンでできた砂浜に突き刺さった沢渡に駆け寄っていく。

「やれ、夢幻のスパイラルフレーム!」

「グアアアアツ!!?」

「やめろ!何やってんだお前!」

続け様に、吹っ飛んだ沢渡に駆け寄ってゆく取り巻き達に向かって、ドラゴンが口から光線を発射した。

「え」

「何」

「あ」

取り巻き達が振り返った時には、すでに光線は彼らの眼前にきていた。そのまま、何が起きたかも理解する暇すら与えられず、気絶した沢渡を巻き込んで、取り巻き達は光線に飲み込まれてしまう。爆発を起こし、まるでボールのように4人の身体が宙を舞い、そのまま観客席に頭から突っ込んでゆく。

その暴挙に、遊矢は思わず怒りをあらわにする。間違いない。これは、ソリッドビジョンを用いた暴力行為だ。

「いきなり何してんだよお前！こんな事しちや駄目だろ！」

「警察と救急車を呼ぶ！お前らはここから離れろ！」

危機的状況だと判断した潮原提督の指示のもと、翔鶴がスマホで警察と救急に通報し、瑞鶴が皆を避難させようとする。が。

「提督、電波がつながりません！」

「な!? リアルソリッドビジョンに阻まれて出られないんだだけど!?？」

そのどちらも失敗に終わる。スマホは圏外、出口はいつのまにかリアルソリッドビジョンで塞がれてしまっている。普通は観客席はソリッドビジョンの範囲外なのだが、これは一体どうした事か。

が、そうこうしているうちに、新たにドラゴンが翔鶴と瑞鶴を標的に定める。地面を揺らしながらドタドタと走ってゆく。

「これ以上は見過ごせん！超重武者ビックベン―K！ガードしろ！」

すかさずデュエルディスクを起動した権現坂が、大きな鎧武者のようなモンスターを召喚し、ドラゴンの体当たりを防ぐ。リアルソリッドビジョンだからできる芸当といえよう。

「ぬう……俺のモンスターをこんな形で披露する羽目になるとは……姿を現せ外道！ソリッドビジョンで暴力を振るうとは、それでも貴様は決闘者か！」

「そうだ！カードゲームならカードで勝負しろ！暴力反対！」

権現坂とネプテューヌが、御もつともな怒りをぶつける。ビツクベン―Kに突き飛ばされたドラゴンは、砂と海水を撒き散らしながら砂浜に倒れ、光の粒子となって霧散する。

その向こうから、何かを引きずるような音と共に、誰かが歩いてくる。遊矢はその人物を睨む。普段は温厚な彼だが、こんな事をされて黙っていられる程の聖人君子ではないのだ。

「貴様らがデュエルを語るなよ……お前らスタンダード次元のカスどもに、その資格なんてねーんだよ……」

それは、着崩した学ラン姿の少年だった。

そして、その両手で引きずっているのは、気を失っている湖森と志村。頭から血を流し、顔には何度も殴られたような痕が見られる。

「志村！湖森い！」

「あんた、一体何を……!?」

「観衆は黙ってもらおうか、な！」

《KAKUSEI ODDYES》

唯達の言葉を遮るように怒鳴り散らすと、少年の姿が、奇術師に扮した左右の目が異

なるドラゴンのような見た目に変化する。それはどこか、先程のデュエルで召喚されたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを思わせるような姿であった。

つまるところ、彼もオリジオン……転生者であった。

彼——オッドアイズオリジオンとでもしておこう——は、志村と湖森を心配して、脇目も振らずに走り出した唯に対し、躊躇いなく攻撃を仕掛ける。口から放たれた光弾は、唯の足元に着弾し、唯の身体を大きく吹き飛ばす。

「あうっ……」

「唯——」

「……何が目的なんだ、オリジンぐぶっ!!?」

アラタは怒りのままにオリジオンを問い詰める。が、オリジオンはそれすら煩わしかったのか、アラタを無言で殴り倒す。倒れたアラタをわざと踏みつけながら、彼は遊矢につかつかと歩みより、人間の姿に戻ると、力強く遊矢を指差す。

その腕には、デュエルディスクが取り付けられていた。つまり、彼もまた決闘者なのだ。

「榊遊矢、俺とデュエルしろ」

「なんだと……!!?」

「俺が勝てば、お前も含めてここにいる奴を皆殺しにする」

「つー！そんなデュエル、するわけないだろ！」

それはあまりにも残酷なゲームだった。一体何があつて、こんな事をしようというのだろうか。当然ながら遊矢は突っぱねるが、少年の方はそれが気に食わなかったのか、「拒否権なんてねえよクス！なんなら今すぐ殺してやろうかこの毒トマト小僧がっ！」

「あぐっ！！？」

「遊矢！」

と、遊矢の股間目掛け、躊躇なく膝蹴りを喰らわせて踞らせる。

「ほら蹲つてんじゃねうよ、汚ねえ色の髪見せつけるなよ不快なんだよ！」

「がっ……」

今度は遊矢の頭を踏みつけにかかった。先程デュエルすると言ったのは嘘だったのかという突っ込みを忘れるほどに、ひどい光景だった。

「やめなさいよ！出会い頭にこんな真似して……こんな事してタダで済むと思つてんの！！？」

「ギャンギャン喧しいんだよ、腐れトマトの信者共シンバが！俺の名は札道マサル！クスで卑怯者な榊遊矢を断罪する為にやって来た、正義の執行者だ！」

「俺を断罪……！！？」 何言つてんだよ！！？」 一旦落ち着いて話をs」

「黙れ糞トマト野郎！お前みたいな奴なんかと話したくもねえ！来いよ、お前をコテン

パンに負かして俺が正しいってコトを解らせてやる！」

札道マサルと名乗った男は、遊矢の言葉に耳を貸さずに一方的に罵声をぶつけると、遊矢の頭を蹴り飛ばす。鼻頭を思い切り蹴飛ばされた遊矢は、思わず意識を手放しかけるが、マサルはそれを許さず、遊矢の髪の毛を、頭皮もろとも引き千切らんとする勢いで驚掴みにし、その激痛で意識を無理やり維持させられる。

「いい加減にしろよ！おい遊矢、こんな奴のデュエルに乗る必要なんかねえ！瞬に頼んでここから締め出してもらおう！」

「アクロスなら来ないぜ？ギフトメイカーの奴らが妨害しに行ってるからな！さあ神遊矢！デュエルでお前を断罪してやる！」

マサルはそう怒鳴り散らすと、勝手に遊矢のデュエルディスクを起動させる。出会って早々暴言を吐いてくる時点でマトモな人間では無いことだけは確かだ。

解放された遊矢は、柚子の手を借りてなんとか立ち上がる。

「こうなったら仕方ない……！」

遊矢としては、デュエルを争いの道具にするのはあまり好まないのだが、どの道今のマサルには自分の言葉は通じないようだ。こうなればお望み通りデュエルをしてやろう。そうすればきつと落ち着くだろうから。

それに、皆の命がかかっているのだ。負けてられない。

「わざわざデュエルするんだね」

「そーゆー生き物なのよ、決闘者ってね」

皆が一度は思ったであろう感想を唯が呟く。それに対し、柚子は自嘲気味に笑って返した。住む世界の違いがデカすぎる。唯は、乱入者・マサルに目をやる。そしてその顔を見て、彼女は戦慄した。

それは人間がする表情としてはあまりにも邪悪で、一目でわかるほど、憎しみに満ちた表情だった。

そして、その様子を見ていた者達がいた。

ギフトメイカー・リイラとレドである。どうやってかは知らないが、遊矢と沢渡のデュエルからずっと見ていたのである。もともと、彼らはデュエルになんか微塵も興味がないので、ほとんど内容は覚えていないが。

「なんで決闘やるのかしら……普通に殴って殺して奪えば済むのに」

皆が思っけていてもあえて言わなかったであろう事を、平然と言っけてのけるリイラ。

「なんでも、決闘であのトマト頭の奴を負かしてバツシングしたいんだと。僕らが選ん

だ転生者のほとんどが彼を嫌ってるっぼいんだけど、ホント、彼何したんだろうね？」
「其れは神のみぞ知るってコトよ」

彼女はレドの言葉に、興味なきような返事を返す。メタ的な話は専門外なのだ。

彼らは、他人が知ったことではない。罪なき一般人も、自分達の手駒であるはずの転生者も。何故なら、それらは押し並べて、彼らの目的の前では無意味なものだからだ。

「ま、神様なんていないんだけどね！」

公園内 公衆トイレ

デュエルコートから少し離れた位置にあるトイレに、瞬はいた。手を洗いながら、先程のデュエルを思い返す。

「ホントに……変わっちゃまったなあ世界い……」

思い返して、改めて、深い溜息を吐いた。

艦娘の時といい、さっきのデュエルといい、今の世界は明らかにまともでは無い。ま

るで異世界に来てしまったかのような常識の齟齬を、これまで幾度となく経験してきた。まるで世界そのものが、書き換えられてしまったかのようなようだ。

だが、いくら考えても、違和感を解消する手立てはない。考えていても仕方がない。早いところ戻らなくては。気を紛らわすように、顔を洗う瞬。そこに、

「そうだね、いい加減教えるべきだろう。今の世界について」

「へああつ!?」

いきなり肩に手を置かれて、思わず某伝説の超戦闘民族スーパーサイヤ人みたいな叫び声をあげてしまう瞬。顔をあげて鏡を見ると、いつの間にやら、ファイフティが瞬の後ろに立っているのが映っていた。顔を洗っていて気づかなかったのもあるが、ほんと神出鬼没だなコイツ。

ビビって変な顔になりながら、瞬はファイフティに文句を言う。

「心臓に悪い登場の仕方するんじゃないやねえよ!?」

「ちよつとしたファンサービスだよ、驚いたかい?」

「要らねえよそんなファンサービス。犬にでも食わせてろ」

はっはっは、と爽やかに笑うファイフティ。殴りたくなる笑顔とは、今のファイフティの事を言うのだろう。うん。

瞬がファイフティに悪態をつくが、その時、トイレの外からヒビキが呼ぶ声が聞こえて

くる。そういうえば、ヒビキもトイレに来ていたんだった。ファイティと共にトイレから出ると、外で待っていたヒビキが、

「遅かった……いやなんでもない。お楽しみだったんだね……」

「そうやって男2人並んでたらなんでもホモに結びつけるのやめろ」

ファイティと一緒にトイレから出てきた瞬を見て何を思ったのか、瞬から距離を取るように後退りしやがった。勘違い甚だしいとはこの事か。

あんまりにも理不尽な疑惑を生み出された瞬の怒りの矛先は、もちろん、その実質的な元凶であるファイティへと向けらる。

「お前のせいだからなこの野郎」

瞬に睨まれても、何処吹く風といった感じに、ファイティは信頼性皆無の爽やかスマイルを浮かべている。黙って押し通す気だこいつ。

閑話休題、デュエルコートに附設されている待合室に移動する。4月末とは思えない暑さの外よりは、冷房の効いた中の方が話が進むだろうとの判断だ。実際、トイレに行っていた数分間の間だけで、瞬の身体から汗が出始めていた。

「さ、話をするとしよう」

待合室のソファに腰を下ろしたファイティが話し始める。

「今から難しい話始まるけど、いいのか？」

「いやこのタイミングで離れるとかなしじゃない？それに子供扱いしないでよね」

「子供扱いも何もお前、正真正銘の子供だろ……」

長い上に小学生には難しい話になりそうだし、先に唯達の所に戻ってもらおうと、瞬の横に座ったヒビキに声をかけてみたが、彼女はそれをつっぱね、瞬の隣に座る。

「それに、この話は私にとっても大切な気がするから」

「それってどういう……」

瞬はそう言いかけたが、ヒビキの顔を見て、言葉が途切れた。ヒビキの様子が、いつもとは明らかに違っていたからだ。

その表情は、いつもの彼女からはかけ離れた、真剣そのものといえるものだった。普段の年相応の無邪気さに溢れたものとは違う、不相応に大人びた雰囲気のようなものが感じ取られた。

「ファイティ、続けていいぞ」

「オーケイ。じゃあいこうか」

瞬の了承を得て、ファイティは話し始める。

「君の疑問について、このファイティさんが答えてあげようと思つてねえ。なんで世界が変わってしまったのかという事についての答え、欲しいだろう？」

「欲しいです」

というか説明遅すぎたんじやないですかね。導き手とかほざきながら、随分とアクロスについて放置気味のような気がするのだが。

そんな瞬の不満をガン無視しながら、ファイフティは、あっさり瞬の疑問に対する回答を告げる。

「次元統合だよ」

「じげん……とうごう?」

思わず聞き返す瞬。一体、それはなんだというのだろうか。

「ネプテューヌも兵藤一誠も桐生戦兎も、艦娘達も黒神めだかも神遊矢も、本来は全員別の世界の住人、決して出会うことの無かった者達だ」

「別の、世界?」

「並行世界論……君のようなオタクにとつては、常識中の常識だろう?」

並行世界。フィクションでは腐る程語り継がれてきた、異世界の概念。瞬はそれを聞いて、冗談かと思ったが、ファイフティの真剣な表情からするに、どうやら大真面目らしい。

瞬もフィクションには結構慣れ親しんでいるので、並行世界云々の説明については必要がない。ただ、それが現実の話だと言われると、そう簡単には信じられない。自分の生きる世界とは違う、別の世界。それが本当にあるのだろうか。

「手っ取り早く話を進めたいから、ここからは並行世界があるという前提で話を進めるよ。平たく言うと、無数に存在する世界同士が、一つになり始めている。これは危機的状况なんだ。わかるかい?」

「世界が、一つに?」

「そうさ。歴史や文化、常識から法則、共通点^{ルール}がてんでない世界同士が無理矢理一つにされるんだ。そんなことをされて、世界が無事でいられるはずが無い。2つや3つならまだしも、10や20、それ以上の数なら尚更のこと。圧縮された世界は、そのうち矛盾と飽和に耐えきれずに、滅亡してしまうのさ」

「滅亡って……」

「3、4個世界が合体するくらいならまだ許容範囲内なんだけど、億は軽く超える世界が一つになるんだ。どう考えてもキャパオーバーするだろう?それがこの世界だけで無く、他の世界でも起きています。このままだと、遠からず全ての世界は1つになった後、滅亡してしまう」

世界が滅亡する。あまりにもあつさり^とと告げられたその事実^に、瞬は現実味を感じる。ことができなかつた。そもそもさつきからファイフティの言っていることが突飛すぎて、実感が湧きにくいのだ。

しかし、ファイフティの言っていることも分かる気がする。これまで世界に対して瞬が

抱いていた違和感は、本物だった。まるで世界がまるっと変わってしまったようだと思っていたが、まさか本当に変わっていたとは。

「そしてもう一つ。統合された世界は、それに合わせる形で中身が書き換えられるんだ。単純に言うとう、初めからそれらの世界は一つだったという様に、世界の歴史が、人々の記憶が書き換えられるんだよ。君の感じている齟齬は、そこから来ているのさ」

「……」

つまりなんだ。瞬が今いる世界は次元統合の結果生まれたものでり、次元統合によって、この世界は、悪魔がいて、艦娘がいて、デュエルが広まっていて……といったように、それらがひとまとまりに存在する世界として変化してしまったということか。

そしてそれを皆、はじめからそれが当然だと思っているのだ。本来あり得ない繋がりを、そう思いこまされているのだ。

「ここで例外を一つ。次元統合で繋がった世界同士が、常に完全に混ざり合う訳じゃ無い。次元統合の過程で、一方の世界が他方の世界を完全に塗りつぶしてしまう事もあるんだ。融合ではなく、上書き。下敷きになった世界は完全に無くなってしまふんだ。あの時、次元統合の影響で、君の知る世界は消滅する寸前までいった。先で言う下敷きになりかけたんだ。それを防いだのがアクロスの力。君がギリギリの所で変身してくれただおかげで、君の世界はこの世界と融合する形で生き延びたんだ」

「えーと、つまり?」

「逢瀬くんの住んでいた世界は、次元統合の余波で一度滅びかけたのさ。あの時君が見た光景は、まさに世界が終わる瞬間だったんだよ。あの世界にはヒーローが居なかったからね。消えるのは時間の問題だったんだ。ライドアーツ落とした時は我ながら焦ったよ……」

ファイフティは当時のことを思い返しながら、ホツとしたような顔になる。異形の怪物が跋扈し、街が消滅してゆく光景。あれは比喻ではなく、正真正銘の世界の終わりだったのだ。

「なんでこんな事が起きているのかは私もわからない。ただ、ギフトメイカーはこれを利用してするのは間違いないだろうね」

「……なあそろそろ教えてくれよ。ギフトメイカーって、オリジンってなんなんだよ?俺が戦っているのは、いったい何なんだよ?」

瞬は、ついに根本的な疑問を口にした。

仮面ライダーになって早一ヶ月。いい加減、自分が敵対している存在について知るべきだと思っていた。本人達に聞いても、あの調子だとマトモに会話ができるかどうか怪しい。同じ言語を使っているはずなのに、住む世界が違いすぎててんで噛み合わないのだ。ならば、ファイフティから聞くしか無い。何か知っている可能性は高い。

ファイフティは、少し言い淀んだような表情になりながらも、まあ話すべきだろう、と前置きし、話し始める。

「いいかい逢瀬くん。ギフトメイカーというのは——」

「邪魔をしないでいただけますか？アクロス、ファイフティ」

「!?？」

その時、ファイフティの言葉を遮る様に、酷く冷淡な声が2人に向けられる。

声のした方を向くと、黒いコートを着た眼鏡の男がそこにいた。正気のこもっていない、人を人として見ていない様な目つきでこちらを見ながら、不気味に笑っている。

「お前は……?？」

「私はタロット……ギフトメイカー直属の精鋭部隊、リバイブ・フォースの一員です。以後お見知り置きを」

固まっている瞬とファイフティに、親切に名乗ってきた。カツン、カツンと、靴音を通路中に響かせながら近づいてくる。その音で我に帰ったファイフティは、即座に身構えながら、瞬に警戒を呼びかける。

「気をつけたまえ。彼、只者じゃあないぞ……!」

「ええ、我々は選ばれし者ですから。ちよつと今回は、野蠻な仮面ライダーには本筋から外れてもらわねばなりませんので。なんせ、今ここにやってきた彼は、神遊矢とかいう

奴を始末する邪魔をされたく無いとの事でした、それで手持ち無沙汰な貴方の御相手を担当することになったのですよ。暇人同士、殺し合いません？」

「遊矢を……!?」 まさか、オリジオンが——」

その時、待合室に備え付けられていたモニターが点灯する。そこには、新手のオリジオンと相対する遊矢の姿が映し出されていた。オリジオンの足元には、殴られて気絶している志村と湖森の姿も確認できる。

それを見た瞬間、瞬はキレた。妹をボコボコにされたというされたという事実が、どうしても許せなかったのだ。思わずタロットに掴みかかろうとするが、その直前、タロットの姿が忽然と消え去り、伸ばした腕は虚空を切る。

「正義のヒーローともあろうお方が、随分と野蠻ですねぇ」

「いつの間……」

いつの間にか、タロットは瞬の背後に立っていた。背後から皮肉めいた声をかけられたことで、瞬はそれに気づく。

「デメエ、湖森に何を！」

「私は何も。ただ、彼は非常に気性が荒いので……恐らく彼女が邪魔だったんでしようねぇ」

まったく悪びれもないタロット。瞬は我慢ならず、すぐさま皆のところに向かお

うと、タロットを押しつけようとする。しかし、タロットは瞬の腕をがしりと掴み、それを止める。

「邪魔するなど言っているんだ。デュエルの邪魔をするなんて無粋の極み。というか、我々の邪魔をするなよ象無象の害虫供め。身の程を知れ！」

《KAKUSEI TAROT》

丁寧な言葉遣いから一変し、強い口調で罵りながら瞬を突き飛ばすと、タロットは怪人態へと変身する。全身にジツパーが出現し、それが一斉に開いてゆく。人間としての姿の下から、法衣の様なものを身に纏った怪人が姿を現す。身体のあちこちには、タロットカードの絵柄が彫られたレリーフが存在し、顔は右半分が骸骨、左半分が黄金の仮面に覆われている。

タロットオリジオンは、右手に持った杖を、尻餅をついている瞬に向かって振り下ろしてきた。瞬は咄嗟に避けるが、杖の当たった部分の床にはクレーターの様なものが出来ていた。

「逢瀬くん、変身だ！」

「分かってる！ヒビキを頼む！」

ファイフティに言われながらも、瞬はヒビキをファイフティに預け、クロストライバーを

取り出し、腰に装着する。

「変身!」

《CROSS OVER! 想いを、力を、世界を繋げ! 仮面ライダーアクロス!》

アクロスに変身した瞬に対し、タロットオリジオンは余裕そうな態度を崩す事なく、不気味に笑いながら殺害予告をする。

「いいでしょう、貴方を地獄に落としてあげます。我々に逆らった罪は重い……死んで後悔しろ!」

「お前を倒して、皆のところへ辿り着く! 負けてたまるか!」
もう一つの戦いの火蓋が、切って落とされようとしていた。

「俺が狙いなら、俺が相手する! だから皆に手を出させない!」

「さあ始めようぜ! クソ野郎の処刑キリングタイムの時間だ!」

デッキをセットし、互いにデュエルディスクを起動させる。リアルソリッドビジョン

によるカードプレートが生成され、デイスク本体に収納されていた、EXデッキとメイ
ンデッキ用の領域がそれぞれ展開される。アクションフィールドは沢渡の時から据え
置きのため、変化はしない。

「デュエル!!？」

遊矢：4000LP／手札5枚

マサル：4000LP／手札5枚

「先攻は貰う！俺は手札のスケール8の星読みの魔術師と時読みの魔術師でPスケール
をセッティング！」

先攻になった遊矢は、早速2枚のペンデュラムカードをPゾーンにセッティングし、
Pスケールを組み上げる。今度はいきなりペンデュラム召喚を決めるようだ。

「揺れる魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！いでよ、レベ
ル7、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！レベル4、EMアメンボート！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500

EMアメンボート：ATK500

今回はオッドアイズに加え、アメンボのようなモンスターをペンデュラム召喚した。
どうやら後者はペンデュラムモンスターでは無いようだ。

遊矢は、ひらりとオッドアイズの背中に跨ると、オッドアイズでフィールドを駆け始

めた。どうやら早速、アクションカードを探しに行くらしい。オッドアイズですれ違いざまに、苔むした岩の上に鎮座していたアクションカードを取得する。

「アクションカードゲット!」

「アクションカード……忌まわしい……!デュエルモンスターズを汚す愚物に頼るとは、貴様はやはりクズだな!今に後悔させてやる……デュエリストになったことを!」

「あー、お前はアクションカードは取らないのか」

遊矢がアクションカードを手にとったことに対して、露骨に嫌悪の表情を見せるマサルを見て、遊矢はそう察する。アクションデュエルに興じる決闘者の中には、好みの問題だったり、戦略上の都合だったりで、アクションカードを使わないものも少なく無いのだ。

だが相手がアクションカードを使わないとなると、自分だけがアクションカードを使う事に、僅かながら申し訳ない気持ち湧いてくる。すでに取ってしまったアクションカードを見ながら、果たしてコイツを使つていいものかと悩む遊矢だったが、そこに、マサルの汚い言葉が飛び込んでくる。

「アクションカードを使う奴が決闘者を名乗るな!俺は認めない、アクションデュエルを!」

「なら今からでも普通のデュエルに」

「黙れクズが！ テメエみたいなカスに情けかけられるくらいなら死んだほうがマシだよ！ お前の顔も声も全部不快だ！ さっさとこのデュエルで始末してやるからな！ クズ！」
「なっ……」

そこまで嫌いならアクションデュエルではなく、普通のデュエルにするかという遊矢の提案を蹴り、遊矢を容赦なく罵倒する。ここまで言われてしまえば、流星に遊矢も黙るしかなくなる。

「……俺はこれでターンエンド」

「俺のターン、ドローー！」

マサル：手札5↓6枚

「俺は手札から魔法カード、トレード・インを発動。手札のレベル8モンスターを1体捨て、デッキから2枚ドローする」

マサルは1枚手札を墓地に送り、2枚ドローする。

「魔法カード、ペンデュラム・トレジャー発動。これにより、Pモンスターであるオッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンをEXデッキに移動させる」

「オッドアイズだと……!?？」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと同じ、オッドアイズの名を冠する未知のドラゴンの存在に、遊矢をはじめ観客席の面々も驚きの声をあげる。ひよつとして、オツ

ドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと何か関係のあるカードだったりするのだろうか？
 予想だにしないカードの登場にざわつく一同を他所に、マサルは更なる驚愕のカード
 を披露する。

「そして手札のスケール1のオッドアイズ・ドラゴンとスケール8のオッドアイズ・
 ドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング！」

「まだいるの!?!」

「冥土の土産に見せてやるよ。オッドアイズの真の力を！俺の方がお前より上であると
 いうことを！」

新たに2体の、オッドアイズの名を冠するドラゴンが、マサルのPゾーンに浮かび上
 がる。どうやら、彼もペンデュラム使いらしい。

「我が憎しみに焦がれ揺れる、忌まわしき振ペンデュラム子よ！ペンデュラム召喚っ！来やがれ、全
 てを滅ぼす我が僕達！オッドアイズ・ファントム・ドラゴン！」

「!!?!」

「あれは……」

「いや、そんな馬鹿な!?!」

マサルが、やたらと物騒な口上を唱え終わると、激しい光と轟音を伴い、マサルの
 フィールド上に1体のモンスターが降臨する。その名を聞いた時、遊矢は思わず自分の

耳を疑った。なぜならば。

「オッドアイズ・ファントム・ドラゴン……だと?」

二色の眼を持つドラゴンという点では同じだが、マサルのドラゴンは、亡霊ファントムの名の通り、その鱗のつき方が何処か骸骨のように見える。

オッドアイズ・ファントム・ドラゴンが咆哮を轟かせると、それに呼応するように、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンも雄叫びをあげる。ソリッドビジョンで作られた存在とはいえど、こうして見ていると、本当に生きているかの様に錯覚してしまいそうだ。

睨み合う両者のドラゴン。先に動いたのは、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンだった。

「バトルフェイズに突入! オッドアイズ・ファントム・ドラゴン! オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを粉碎しろ! 夢幻のスパイラルフレーム!」

マサルは攻撃宣言をしながら、手札から速攻魔法を発動する。

「速攻魔法 “オッドアイズ・デストロイ” 発動。オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃力をターン終了時まで700アップする!」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン: ATK2500↓3200

手札にあるアクションカードを使えば攻撃を凌げる。しかし、自分だけが使うのは如

何なものか。そんな後ろめたさが、遊矢の手を止める。だが、このデュエルには皆の命がかかっている。この状況で、そんな甘ったれた思考で大丈夫なのか？

悩んだ末に、遊矢はアクションに移った。

「アクション魔法発動！バトル・チェンジ！相手モンスター1体の攻撃を別のモンスターに移し替える！」

遊矢の発動したアクション魔法により、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃は、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンから外れ、その隣にいたEMアメンボートへと向かってゆく。

「そしてEMアメンボートのモンスター効果！攻撃表示のアメンボートが攻撃対象となった時、アメンボートを守備表示にすることで、攻撃を無効にする！」

EMアメンボート：ATK1000↓DFE2000

さっと身構えたアメンボートに、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃が命中するが、アメンボートは破壊される事なく、その場で踏ん張り続ける。

「チッ！アクション魔法とかいう不純物に頼りやがって……そんなんだからテメエはカスなんだよ！」

アクションカードを使った遊矢に対し、マサルは暴言を吐く。一目瞭然、明らかに苛立っている。しかし、彼は遊矢の提案を蹴り、自分からアクションカードを使わないと

言い張ったのだ。今更文句を言っても意味はないだろう。

マサルは、怒りで息を荒くしながらも、バトルフェイズを終了し、別のカードの効果を発動させる。

「オッドアイズ・デストロイのもう一つの効果発動！墓地のこのカードを除外することで、デッキから「オッドアイズ」と記されたPモンスター以外のカード1枚を手札に加える！俺はフィールド魔法、〃天空の虹彩〃を手札に加え、発動！このカードは1ターンに1度、自分フィールドの表側表示のカード1枚を破壊することで、デッキから「オッドアイズ」カード1枚を手札に加えることができる。俺はオッドアイズ・フアントム・ドラゴンを破壊！」

「フィールド魔法だつて!?？」

マサルがフィールド魔法を発動すると、遊矢が驚いたような声をあげる。アクションデュエルでフィールド魔法カードを使う人間は滅多にいないので、遊矢が驚くのも無理はないだろう。

発動したフィールド魔法により、アクションフィールドの空が、澄み渡る夏空から、赤黒い光帯が不気味に輝く、奇妙な空模様へと変化する。

「このとき、オッドアイズ・デストロイのさらなる効果！このターン、オッドアイズ・デストロイの効果の対象になったモンスターは、効果で破壊された場合1度だけ、自分

フィールド上のカード1枚を破壊することで、復活する！俺はペルソナ・ドラゴンを破壊！」

「そんなのあり!!」

「続けて、オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴンの〃P効果ア！俺の場の〃オッドアイズ〃Pモンスターが戦闘・効果で破壊された場合、自分のPゾーンのカード1枚を破壊することで、自分のエクストラデッキからミラーージュ・ドラゴン以外の表側表示の〃オッドアイズ〃Pモンスター1体自分のPゾーンに置く！そして、サーチしたカードを伏せる！これでターンエンドオ……さあ、地獄はここからだぜ？」

なんとか攻撃は凌いだが、これは恐ろしい強敵だ。更にオッドアイズを使うときた。一体どうやって、どこから手に入れたのかは知らないが、最大限に警戒しなければならぬだろう。

遊矢は、緊張感につつまれながらも、それを振り払う様に、声を張り上げ、思い切りカードをドロウする。

「俺のターン！」

遊矢：手札1↓2枚

「俺は手札から永続魔法〃星霜のペンデュラムグラフ〃を発動！そして、セッティング済のPスケールを使い、ペンデュラム召喚！いでよ、EMペンデュラム・マジシャン！」

EMペンデュラム・マジシャン：ATK1500

召喚されたのは、沢渡とのデュエルでも登場したEMペンデュラム・マジシャン。やはり、Pゾーンの張り替えに加え、2枚のサーチと、効果が便利なので、必然的に出番も多くなるのだろう。

「ペンデュラム・マジシャンの特殊召喚に成功した時、自分フィールドのカードを2枚まで破壊することで、その数だけEMを手札に加えることができる！俺はPゾーンの星読みの魔術師と時読みの魔術師を破壊して、EMドラミングコング、EMパートナーガの2体を手札に加え、空いたPゾーンにセッティングする！」

2人の魔術師が消え去り、新たにゴリラとヘビのようなモンスターがPゾーンに浮かび上がる。スケールの都合上、ペンデュラム召喚はできないのだが、どうやら遊矢はスケールではなくP効果目当てでこの2体を置いたようだ。

「まずはEMパートナーガのP効果！自分フィールドのモンスター1体の攻撃力を、ターン終了時まで、

自分フィールドの“EM”カードの数×300アップする！俺の場のEMカードは、Pゾーンを含めて4枚。よってオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力は1200アップする！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500↓3700

「更に『星霜のペンデュラムグラフ』の効果発動！1ターンに1度、『魔術師』Pモンスターがモンスターゾーン・Pゾーンを離れた場合、『デッキから『魔術師』Pモンスター1体を手札に加えることができる！俺は『竜穴の魔術師』を手札に加える！」

カードを動かしながら、遊矢はアクションカードを探す。沢渡とのデュエルの時からデュエルフィールドは引き継がれているが、今いるあたりのアクションカードは、粗方取ってしまった様だ。ここにはないと判断し、場所を移ろうとした遊矢だったが、ちょうど視界に、一枚のアクションカードが入る。

「あつた！」

「おつとアクションカードは取らせねえ！」

「ぶわあつ!?？」

バトルの前に、アクションカードを拾いに走るとした遊矢だったが、彼がそれを許すはずもなく。マサルは足元の砂を蹴り上げ、遊矢の視界を奪う。咄嗟の出来事だった為に、ゴーグルで防ぐことも出来ずにまんまと策にはまってしまい、遊矢の足が止められる。

そして、マサルは遊矢を突き飛ばし、遊矢が取ろうとしていたアクションカードを踏みつける。これでは取りようが無い。というか、今の行為はデュエルにかなりグレーなのでは無いだろうか。

このカードは諦めるしか無いな、と判断した遊矢は、バトルフェイズ突入を宣言する。「仕方ない、バトル！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンを攻撃！」

「ガアアアツ!!？」

遊矢の声に応じる様に、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが吠える。

「この時、EMドラミング・コングのP効果発動！自分モンスターが攻撃宣言時、そのモンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで600アップさせる！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3700↓4100

「まーた軽々と打点4000越えしてるよ……」

「やっぱりEMは脳筋……」

あつさりと攻撃力4000越えをしたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを見て、潮原提督とアラタは苦笑いする。先程のデュエルでも、攻撃力がモリモリ上がったのからするに、見かけによらず、遊矢のデッキは脳筋寄りのようだ。

話を戻して、仲間の力で、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンを上回る攻撃力になったオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは、威嚇する様にひと吠えすると、口から光線を発射する。風圧で海水や砂を周囲に撒き散らしながら、光線はファントム・ドラゴン目掛けて飛んでゆく。

「甘いんだよ！ 永続罫、〃ロード・オブ・オッドアイズ〃を発動！ 俺の場に〃オッドアイズ〃モンスターが存在する時、1ターンに1度、相手の攻撃を無効にする！」

しかし、マサルは前のターンに伏せていたカードを発動する。それにより、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの放った光線は、ファントム・ドラゴンの目前で霧散してしまふ。

これ以上遊矢の場に攻撃できるモンスターは居ない。正確にはEMペンデュラム・マジシャンがにはいるのだが、ペンデュラム・マジシャンの攻撃力ではオッドアイズ・ファントム・ドラゴンには敵わず、返り討ちにあうだけだ。遊矢はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの背中から飛び降りると、岩陰に隠すようにして置かれていたアクシオンカードをゲットする。

「俺はアクシオン魔法を1枚伏せてターンエンド。EMドラミング・コングとEMパートナーガの効果も終了時し、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力も元に戻る」

「いいぜえ……さあ、処刑の時間だぜ腐れトマトオ！ 俺のターン！」

マサル：手札0→1枚

「この時、〃ロード・オブ・オッドアイズ〃の効果発動！ 俺の場の〃オッドアイズ〃モンスターは、ターン終了時まで攻撃力が500アップする！」

オッドアイズ・フアントム・ドラゴン：ATK2500↓3000

「続いて魔法カード『ペンデュラム・パラドックス』発動！EXデッキからPスケールが同じでカード名の異なるPモンスター2体を手札に加える！俺は『オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン』、『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』の2枚を手札に加える！そしてこの時、再び『天空の虹彩』の効果が発動し、『ロード・オブ・オッドアイズ』を破壊！デッキから『オッドアイズ・フアング・ドラゴン』を手札に加える！そして、『ロード・オブ・オッドアイズ』が破壊された場合、デッキから『オッドアイズ』Pモンスターを1体EXデッキに表側表示で加える！俺は『オッドアイズ・レムナント・ドラゴン』をEXデッキに加える」

EXデッキに行っていた2体のドラゴンがマサルの手札に戻るとともに、マサルのフィールドから罠カードがなくなり、更なるオッドアイズが彼の手札に加わる。更なるオッドアイズの存在を周知された遊矢は、緊張しながらマサルのプレイングを見守る。ここから何がきてもおかしくないのだ。気を抜くわけにはいかない。

「俺は『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』とセッティング済みの『オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン』でPスケールを再構築！ペンデュラム召喚！『オッドアイズ・フアング・ドラゴン』！『オッドアイズ・レムナント・ドラゴン』！『オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン』！」

オッドアイズ・ファング・ドラゴン ATK2000↓2500

オッドアイズ・レムナント・ドラゴン ATK2000↓2500

オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン ATK2500↓3000

「4体のドラゴン……」

「圧巻、だな」

フィールドに並び立つ、4体の未知のドラゴン。その咆哮は空間そのものを震わせているかのように、周囲一帯に轟いた。その威圧感に、遊矢を含め、観客席の面々も思わず圧倒されてしまう。

そして、ドラゴン達の前に立つマサルは、不気味に笑っていた。お楽しみはこれからだ、これからはお前が苦しむ時間だと告げるように。

「オッドアイズ・ファング・ドラゴンの効果！このカードの特殊召喚に成功した時、自分の墓地からPモンスター以外の「オッドアイズ」モンスター1体を手札に加える！俺は墓地からオッドアイズ・アドバンス・ドラゴンを手札に加える！」

最初のターンに捨てたオッドアイズをサルベージするマサル。

「オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンは、レベル5以上のモンスター1体のリリースでアドバンス召喚が可能！俺はオッドアイズ・ファング・ドラゴンをリリースし、降臨せよ、オッドアイズ・アドバンス・ドラゴン！」

オッドアイズ・アドバンス・ドラゴン ATK2500↓3000

アドバンス召喚。レベル5以上のモンスターを通常召喚するには、自分フィールドのモンスターをリリースしなければならない。古典的にして基本的な召喚である。

そんな召喚法により現れたのは、新たなオッドアイズ。ファントム・ドラゴンと比べると、まだオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと似たような姿をしている。

「オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンの効果発動！アドバンス召喚に成功した時、相手の場のモンスター1体を破壊し、その元々の攻撃力分のダメージを与える！俺はEMアメンボートを破壊！スパイラル・バースト！」

「うわっ!!」

遊矢：4000LP↓3500LP

オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンの眼孔から、閃光のようなものが放たれたかと思えば、次の瞬間、遊矢のフィールドにいたEMアメンボートが、大爆発を起こして木っ端微塵に吹き飛んだ。その衝撃は凄まじく、遊矢を一瞬でデュエルフィールドの端まで吹き飛ばすほどのものであった。

一方、唯は遊矢を心配しながらも、マサルの行為について疑問も抱いていた。

「な……アメンボートじゃなくて、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを破壊すれば大ダメージが狙えたのに……なんで？」

「楽に終わらせたらつまらねえだろ。テメエの言葉を借りるなら……そうだ。お楽しみはこれからだ、つてやつだよ」

唯の疑問に、あっさりとして、そう答えるマサル。それは、じつくり甚振つてやるという宣言だった。立ち上がるうとする遊矢に対し、まるで邪神が人の皮をかぶっているんじゃないかと思うほどの邪悪な笑みを浮かべながら、バトルフェイズ突入を宣言する。彼の狙いは初めから決まっている。マサルは、遊矢を心配するかのようには、彼の元にドタドタと走ってきたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを指差し、悪意マシマシの声を張り上げる。

「バトルフェイズ！俺はオッドアイズ・ファントム・ドラゴンで、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを攻撃！夢幻のスパイラルフレーム！」

「オッドアイズ……！」

両者の声を合図に、2体のオッドアイズが互いに向かって口から光線を吐きだし、それが激突する。しかし、攻撃力の方は向こうの方が上。衝突した2匹の光線も、初めは拮抗しあっていたように見えたが、徐々にオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの方が押されていき、終いにはオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの光線が押し切つてしまい、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの身体を貫いた。

断末魔の悲鳴を上げながら、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが爆散する。そ

の衝撃は生半可なものではなく、砂や海水が撒き散らされると共に、遊矢の身体は10m以上は吹き飛ばされ、デュエルコートに壁に叩きつけられる。

「ぐはっ……」

遊矢：3500LP↓3000LP

うつ伏せ大の字になって地面に倒れる遊矢。全身にほとばしる痛みにも必死に抗いながら、なんとか立ち上がろうと両手に力を入れる。

この衝撃、痛みは普通じゃない。質量を持ったソリッドビジョンを用いる都合上、アクションデュエルはヘタをすると大事故を引き起こしかねない。それを防止するために、ソリッドビジョンの出力は普段は抑えられている。しかし、この衝撃は明らかにおかしい。先程の沢渡とのデュエルと比較しても、その何倍も強いのだ。

遊矢はそんな事を考えながら、よろよろと立ち上がるが、マサルは思い切り笑いながら、遊矢に更なる苦痛を与えようとする。

「オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの効果！戦闘ダメージを与えた時、Pゾーンのオッドアイズ」カードの数×1200ポイントのダメージを与える！」

「じゃあ遊矢には2400ポイントのダメージが……！」

「喰らえ。とっておきだぜ？」

とびつきりの笑顔を浮かべながらマサルが宣言すると、マサルのPゾーンにいる2体

アクロスの先制攻撃。何の捻りもない右ストレートが、タロットめがけて突っ込まれてゆく。が、タロットはアクロスのパンチを難なく受け流し、お返しと言わんばかりに、アクロスの胴体に一撃をお見舞いする。

「がふっ!?」

その瞬間、アクロスの身体に尋常じやない衝撃が走る。まるで胴体がとんでもなく重たい物に押し潰されているような、そんな衝撃が身体を貫く。そして、それを受けたアクロスの身体は、バウンドしたスーパースポールのように跳ね上がり、天井に頭から突っ込んだ後、崩れた天井と共に床に落ちる。

これは単純なパワーの問題ではない。何かカラクリがある。アクロスのその考えを察していたのか、はたまた余裕からなのかは知らないが、タロットオリジオンは、自身の能力について話し始める。

「^{strength}力 —— タロットカードに対応した21の能力の行使……それが私のオリジオンとしての力です。」

「へ、へえ……」

タロットカードについては殆ど知らないアクロスは、ただ強がるように、そう答えて立ち上がった。敵の能力は未知数。だが、それは足を止める理由にはならない。アクロスは即座に駆け出し、タロットに殴りかかろうとする。

「月……迷いの象徴。貴方の攻撃は当たらない」^{Moon}

しかし、攻撃が当たる直前に、タロットが囁くようにそう言うと、タロットの右膝のレリーフが発光する。すると、アクロスの拳はタロットの身体をすり抜け、そのまま素通りしてしまった。まるで霧を相手にしているかのように。

こうなったら一撃で決めるしかない。これ以上厄介な能力を使われて翻弄され続けるよりはマシだろう。アクロスはライドアーツをドライバーから引き抜いて、ツインズバスターの柄の部分にある差し込み口に突っ込む。

《CROSS BLAKE》

すると、ツインズバスターの刀身から赤いプラズマのようなものが放出され始める。これで一気に終わらせる。ツインズバスターを強く握りしめ、アクロスはタロットオリジオン目掛けて思い切り駆け出した。

「はあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああつ!!?」

両者が激突した次の瞬間、赤電を纏ったすれ違いざまの一撃が、タロットオリジオンの胴体に直撃した。

タロットは避けなかった。真正面からそれに立ち向かったのだ。ツインズバスターの刃は、タロットの胴体をぶった斬ることは叶わず、押し止められていた。身体一つで

必殺技を受け止めきったタロットに、アクロスは驚くが、タロットは薄気味悪い笑みを浮かべながら、自身の胴体に当てられているツインスバスターを手で掴むと、

「吊るされた男……逆境を耐えた先には、希望がある」

そう言つて、アクロスごとツインスバスターを投げ飛ばした。アクロスの身体は弧を描いて吹っ飛ばされ、待合室の椅子に叩きつけられる。椅子の残骸から身を起こしたアクロスのもとに、悠然とタロットは歩み寄ってくる。

Justice
「正義……裁きの剣は我が元に」

そう呟くと、タロットの手元に、どこからともなく一振りの剣が現れる。そして、立ち上がったばかりのアクロスをその剣で突いた。

「ぐあああああああつ!!?」

アクロスはタロットの剣による一突きで大きく吹き飛ばされ、近くのコンクリートの壁を突き破り、デュエルコートの外に弾き出される。コンクリートの残骸と共に地面を転がってゆくアクロス。実力差は明白だった。

アクロスは瓦礫の中から即座に身を起こし、落としたツインスバスターを拾いながら、再びタロットに向かつて駆け出す。ここで立ち止まっている場合じゃない。唯達のところには辿り着かなくてはならないのだ。

だが。

「隠^{Hermit}者……我が姿を秘匿する」

「姿が……」

タロットがそう呟くと、タロットの姿が周囲に溶けるようにして消え去ってしまう。明らかにこの状況で、彼が逃げるとは考えられない。そう考え、アクロスはツインズバスターを構えて周囲を警戒する。

が。

「魔^{Magician}術師……四大の力を受けよ！」

真後ろからの声に反応して振り返ったが、もう遅い。タロットがこちらに向けてかざした手のひらから、アクロス目掛け、火球と竜巻と大岩と水流が一気に押し寄せてきた。アクロスはなんとか大岩をツインズバスターで一刀両断し、火球を打ち払うと、竜巻と流水を回避する。そして、タロット目掛けて斬り込みにかかる。

ガキン!と、両者の剣がぶつかり合い、火花を撒き散らす。アクロスは、ツインズバスターを握る手に思い切り力を込め、自身の能力で筋力をブーストしているタロットの剣と鏝迫り合いに持ち込む。

「らあああつ!!?」

結果は引き分け。両者ともに剣が弾かれ、あらぬ方向へと得物が飛んでいつてしまふ。アクロスはそのまま戦いを続行しようとしたが、タロットに殴りかかろうとしたそ

の時、ある疑問が頭によぎる。

その疑問は、この襲撃によって有耶無耶になりかけていたもの。そして今は、敵の正体を知る絶好の機会なのだ。アクロスは息を切らしながら、タロットに問いかける。

「何が目的だ……?」

「はい?」

「これまで、何度もオリジオンと戦ってきた……全員訳わかんねー事ばつか口走ってたけどよ……どいつもこいつも、力と欲望に溺れて好き勝手やってたよ。あんな奴らを使って、何がしたいんだ? 何の目的でオリジオンを暴れさせる……!?」

アクロスにはわからない。ギフトメイカーが何故、オリジオンを生み出し、暴れさせるのか。そもそもギフトメイカーとは何なのか。戦闘の直前までファイフティと話していたことで、余計に気になっていた。

タロットはその問いかけをうけて、幾ばくか考えるような素振りを見せた後、

「まあ、暴露したところで減るものではないですし、教えて差し上げましょうか」

「え、いいのかよ……!?」

「どうせ貴方に我々は止められないでしょうし」

タロットは、疲弊しきったアクロスの姿を見て嘲笑しながら、あっさりと、そう言った。

要するに、ハナから脅威とは思われていないのだ。ギフトメイカー側は、自分達の邪魔をするアクロスの存在を、ただ鬱陶しい羽虫か何かだと、その程度にしか思っていなかったのだ。邪魔をしてくるから反撃はするが、ただそれだけ。居てもいなくてもいい存在だとはか見ていないのである。

タロットは腕を組むと、アクロスを鼻で笑って、自分達の目的をべらべらと語り始めた。

「神を作るんですよ」

「は？」

訳がわからなかった。

このタイミングで、くだらない冗談を言っているのかと思つたが、どうやらそうではないらしい。タロットは大真面目に、こんな馬鹿げたことを宣のたまっているのだ。まだ、厨二病を患ったイタイ思春期の男子が書いた、出来の悪いライトノベルもどきでも、もう少しマシな内容が書かれていそうだ。それくらい、突拍子もなく、馬鹿げた発言だったのだ。

あんまりにも荒唐無稽な目的を聞かされ、呆れてものも言えないアクロス。だが、アクロスを舐め腐っているタロットは、そんなのお構いなしにつづける。

「死んだ転生神に変わる、次世代の、全能の神を。オリジオンの中から生まれればよし、

出来ないならギフトメイカーの中から作ればよし。貴方達は等しく、神の踏み台なんですよ」

「なんだと……?!」

アクロスの拳をひらりとかわしながら、タロットは続ける。

「転生、という言葉くらい分かりますよね?」

「転生……あの転生だよな?生まれ変わりとか、そういう感じの」

「そうです。一柱の神による転生。その際に転生者は神からのギフト……所謂転生特典を貰います。我々はそれを更に覚醒させたもの。原点オリジンをも超えた頂点。それがオリジンオンのですよ」

転生。俗に言う生まれ変わり。死後の魂の行き場として、冥界あの世と並び立つもの。瞬は一応転生については知ってはいるが、それは空想の話としてだ。実際には信じてはいない。

だが、タロットは、実際に転生はあり得るものであるかのように話している。

「私も転生者です。貴方とは、ハナから我々と同じ次元で相手できるような存在じゃないんですよ!悍ましき旧世界の遺物め、惨めな現世人と共に消え去りなさい!」

「ぐはあつ?!?」

タロットの一撃でアクロスは大きく吹っ飛ばされ、ベンチの上に落下する。ベキベキ

ベキツ!!? と、アクロスの下敷きになったベンチが大きな音を立てて壊れる。その骸の中からアクロスは起きあがろうとするが、タロットはその隙すら与えず、一瞬のうちにアクロスの目の前に移動すると、杖でアクロスの頬をぶっ叩いた。

ベンチの残骸諸共アクロスは真横に吹っ飛んでゆき、自動販売機に激突する。衝撃で倒れ、壊れた自販機の上に横たわる形となったアクロスに、タロットは余裕たっぷり近づいてくる。

「コイツ……強い!」

「当たり前です。私はオリジオンの中でも選りすぐりの存在と自負しておりますので」
自分の力に絶対的な自信を持っている。悔しいが、彼と今のアクロスとの実力差は歴然。完全に負けイベントだった。

しかし、現実には更にアクロスに追い討ちをかけた。

「おーいおーい、タロットやーい。アクロス独り占めとか酷くねーか? おん?」

「!?」

アクロスの後方から、品のない声がとんでくる。聞いているだけで鳥肌が立つような、不快と悪意の塊のような声。

この声は聞き覚えがある。つい数日前

——

パラパラッ!!?

いことは、アクロスも充分理解しているのだが、なにもこのタイミングで来ることはないだろう。

非情なる援軍の襲来に途方に暮れるアクロスの様子をバルジは笑いながら、懐からあるものを取り出し、瞬に見せつける。それは、一枚のCDのように見える。緑色に発光するその表面には、一言、こう刻まれていた。

—— *"i g a l l i m a"*。

「俺の真の力、見せてやるぜ」

そう言うバルジは、そのディスクのような物を自分の額に押し当てた。すると、ディスクはバルジの頭の中に溶け込むようにして入っていき、しまいには完全にバルジの中に取り込まれていってしまった。

「異次元の聖遺物の力、ちよつとだけ見せてやるから覚悟しとけよ」

《KAKUSEI IGALIMA》

邪悪極まりない笑顔を浮かべたまま、バルジの姿が変化してゆく。バルジの全身にジツパーが出現し、それが一斉に開いてゆく。そこから黒い瘴気のようなものが噴き出し、バルジの全身を包んでゆく。

瘴気が晴れてゆくと、そこに立っていたのは、深緑のローブと三角帽子を身に纏い、ステレオタイプな死神が持っているような大きな鎌を携えた怪物だった。その姿は、なん

第21話 交差するオツドアイズ

榊遊矢は嫌われ者である。

彼の軌跡を描いた物語は皆が嫌っている。主人公である彼を皆が憎んでいる。

あんなもの無ければいいのに。あんなもの作りやがって。後悔と嫌悪は止まることを知らない。誰もが仕方ないとその現状を諦める。批判されるようなことをした奴が悪い。

ギフトメイカーはその怨嗟を拾う。それを解放しろ、暴れさせよと囁く。何故なら、どうでもいいから。彼らは目的以外に興味を見出さない。

原作主人公の一人や二人、殺されようが知ったこつちやないだろ？

彼方からの号哭が、微かな嘆きが、朦朧とした意識を繋ぎ止める。

(……これは)

傷つき、倒れた遊矢は、啜り泣くような吠え声に反応し、閉じかけていた目を開ける。ぼやけた視界の先には、こちらを見下ろす対戦相手と、彼の背後に立つ一体のドラゴン。先程から聞こえる嘆くような咆哮は、このドラゴンがだしているのだ。

そして、それを見た遊矢は、自身の置かれていた状況を思い出した。

(そうか、俺……オッドアイズ・ファントム・ドラゴンにやられて……)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの効果によって大ダメージを受けた遊矢は、ソリッドビジョンの砂浜に倒れていた。指を動かすことさえもままならない程の激痛が全身を襲ってくる。息を吸っている感覚さえもあやふやになり、視界もぼやけている。

リアルソリッドビジョンはダメージの衝撃をも具現化するが、今の衝撃は普通の比ではない。恐らく、マサルが装置を弄ってソリッドビジョンの出力を大幅に高めているのだ。それも、常人ならやらないレベルで。

マサルは、痛みで中々起き上がれない遊矢の前へと歩いていくと、その頭を驚掴みにして自分に向けさせ、その顔面に比喻でもなんでもなく、唾を吐く。

「情けねえなあ……やっぱりお前にや遊戯王の主人公なんぞ合わねーよ。大人しくサーカス団に入ってピエロでもやってればいいんだ」

「……」

その言葉には、この世の決闘者^{デュエリスト}に求められるものであろう、対戦相手への敬意なぞ微塵もなかった。純度100%の嫌悪をドストレートにぶつけ、あまさつえ文字通り唾を吐く様からして、コイツはもう決闘者云々以前に人として終わっていた。

遊矢は、マサル^{マサル}の暴言に対し、言い返すだけの体力も無かった。負けたら皆殺しにされる。それだけは避けたいという一心で、なんとか立ち上がったはいいものの、こうして立っているだけで精一杯なのだ。その体力もいつまで持つか分からないのだ。

よろよろと立ち上がった遊矢を見て、マサルは不快そうに顔を歪めると、プレイを続行する。

「『オッドアイズ・レムナント・ドラゴン』の効果発動！自分の『オッドアイズ』モンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時、自分フィールドのカードを1枚選んで破壊することで、自分はデッキから1枚ドローする！俺は『オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン』を破壊し、ドロー！」

アークペンデュラム・ドラゴンが光の粒子となつてフィールドから消え去り、マサルがカードをドローする。そしてマサルは引いたカードを見てニヤリと笑うと、そのカードを即座に使用した。

「速攻魔法、揺れる眼差しを発動！お互いのP^{ペンデュラム}ゾーンのカードを全て破壊し、破壊し

た数に応じて効果を適用する！」

マサルがカードを発動すると、二人を取り囲むようにして突風が吹き荒れ、お互いのフィールド上で、ペンデュラムスケールとして宙に浮いていたモンスター達が、光の粒子となって霧散する。アクションフィールドも突風により大きく荒らされ、砂や海水、設置されたアクションカードが風によって巻き上げられてゆく。

「1枚破壊した時の効果により、貴様に500ダメージ」

「うがあっ!?」

遊矢：600LP↓100LP

不意に発生した、小さな竜巻が遊矢にぶつかり、ハンマーで頭をかち割られる衝撃が遊矢に襲いかかる。たった500のダメージなのに、この威力。そしてもうライフは風前の灯火。微弱なバーンカード一枚で吹き飛ばすほどの危機的状况である。

「2枚破壊により、デッキからPモンスターをサーチ。俺は〃オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン〃を手札に加える」

手札に加えられるは、新たなオッドアイズ。それに驚く時間も与えられずに、更なる脅威が押し寄せる。

「3枚破壊により、フィールドのカード1枚を除外する。その目障りなAカードを消し去ってやる！」

でも転がっているのだから。

「アクションマジック、回避！攻撃を無効にする！」

遊矢が手札からアクションカードを発動すると、オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンの攻撃は遊矢からそれ、あらぬ方向へと飛んでいつてしまった。

しかし、遊矢は先程からその場を動いてはいない。一体いつ、アクションカードを入手していたのだろうか。

「アクションマジック……いつの間に……？」

「さっきの突風で、未取得のカードが飛んでいつてるのを見たんだ。偶然近くに飛んできた時に、それをちよつとね」

そう。先程の揺れる眼差しの発動時の突風で、アクションフィールドはめちやくちやくに荒らされた。その際、砂に紛れて飛んできたアクションカードがあったのだ。痛みでまともに動けなかった遊矢にとっては、まさしく渡に船だった。自分の方に飛んできたそれを掴み取り、首の皮一枚で繋がったというわけだ。

「ああ苛々するぜ！そんなものに頼ってんじやねえぞゴミカス！つたくこれだからスタンダード次元は雑魚なんだよ……恥ずかしくねえのかよ！おとなしくたばれよお！」

アクションカードを使った遊矢に対して、ボロクソに非難するマサル。アクションデュエルで構わないと言った以上、相手が使おうが文句を言われる筋合いは無いはずな

のだが、遊矢憎しで思考するマサルはそんな事は考えちやいなかった。ただ、遊矢を糾弾したいがためだけの発言なのだから。

「糞が！俺はスケール0の『オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン』をPゾーンにセット。そしてP効果発動。手札を一枚捨てて、EXデッキに表側表示で存在するドラゴン族Pモンスター1体を手札に加える。『揺れる眼差し』を捨てて、アークペンデュラム・ドラゴンを回収し、Pゾーンにセットイング」

先程居なくなつたアークペンデュラム・ドラゴンが、今度はPゾーンに出現する。アークペンデュラム・ドラゴンのPスケールは8。これでマサルは次のターン、レベル1〜7のモンスターをペンデュラム召喚できる、という訳だ。

「次のターンで必ず仕留めてやる……！」

マサルが忌々しそうにターンエンドを宣言する。

彼の背後に立つオッドアイズ・ファンタム・ドラゴンは、心なしか、悲しそうな眼差しで主人を見ていた。その視線に気づいたのは遊矢のみ。観客席にいるアラタ達も、オッドアイズ・ファンタム・ドラゴンを従えているマサルも、それに気づいてはいない。先程から、しきりに嘆くように吠えるファンタム・ドラゴン。そして今の眼差し。そこから遊矢は、ある推測を立てはじめる。

「あれは……！」

が、そこで遊矢の思考は止まった。受けたダメージに耐えきれずに、遊矢はその場に膝を突き、そのまま倒れる。

「遊矢あ！」

「おい……これガチでまずいやつだろ！このデュエルを続けたらまずいつての！」
柚子の叫び声が聞こえるが、もう既に、応えるだけの力も無い。

そのまま、意識が闇に溶け込んでゆく

デュエルコート外部

「あ……ああ……」

「逢瀬くん……」

アクロスの戦闘を物陰から見ていたヒビキとファイフティ。彼らの目の前に広がる光景は、まさに悪夢そのものだった。

プスプスと煙を上げながら、力なく地面に横たわるアクロス。対して、イガリマオリジオン、レイラ、ガングニールオリジオン、タロットオリジオンの4人は未だピンピンしており、アクロスを始末する気満々である。このままほっとけば、間違いなくアクロスは死ぬ。

「出てこいファイフティ。そこに居るのは分かってるんだ」

「っ……」

レイラがこちらに気づいたのか、ファイフティの隠れている木の方に向かって声をかける。これは下手に逆らわれない方がいいと踏んだファイフティは、ヒビキをその場に待たせ、しぶしぶと物陰から姿を現す。

「脅威とは思っていないと豪語するくせに、随分と私達の始末に御執心のようなね。ティーダの差金かい？」

「減らず口を……部屋に害虫がいたら始末するだろ？それと同じだ。単純に鬱陶しいんだよ、お前達は」

ファイフティの発言に対し、面倒くさそうに答えるイガリマオリジオン。

「なぜお前はアクロスに加担する？お前はただの死に損ないだ。俺達と敵対する意味など無いはずだろ？」

「……確かにその通りだ。だがしかし、私にはやらねばならない事がある。逢瀬くんを

骨の髄まで利用しつくしてでも、ね。個人的にはギフトメイカーと敵対する意味はないんだけども、君達のやっつてる事は私も看過できない。だから全力で邪魔をする」

「へえ、やっぱお前も腹にイチモツ抱えてるタイプ？いいねえ、親近感湧くなあ」

イガリマオリジオンは、ニタニタと笑いながらファイフテイに話しかけるが、ファイフテイはそれに対し、露骨に嫌そうな顔をする。ファイフテイ自身、ロクでもない人間性なのは確かだが、それでもまだ良識は持ち合わせていると自負している。しかし、イガリマオリジオン——バルジは違う。こいつは明らかに自分の快樂しか頭に無い。良心が通用しないタチの人間だ。

そんなファイフテイからの嫌悪もつゆ知らず、イガリマオリジオンは鎌を構え、倒れたまま動かないアクロスの元へと歩み寄る。

「でも残念だったな。お前がアクロスを利用して何をするつもりかは知らねーが、たった今から俺達がアクロスをブチ殺す。それだけでお前も自動的にご退場だ」

イガリマオリジオンはそう吐き捨てると、倒れたままのアクロスの首筋目掛け、鎌を勢いよく振り下ろす。そう、これで邪魔な仮面ライダーの首はすっぱりと斬れ——

——
なかつた。

振り下ろした刃が、アクロスの首筋まで後1センチの所でとまっている。

「まだ……終わっちゃいねえ……」

「瞬……」

見ると、アクロスが、自分に向かって振り下ろされた刃をがしりと掴んでいた。幾ら変身しているとしても、刃物を素手で掴むのは正気の沙汰ではないはずだ。

「つてえ……っ！手え切れる……っ！」

「今だ！そうれいっ！」

すかさずファイフティが、落ちていたツインズバスターをイガリマオリジオン目掛けてぶん投げる。ツインズバスターは、イガリマの鎌を弾き飛ばしながら、近くの木にぶつ刺さる。

ファイフティの肩を借りながら立ち上がるアクロスに、レイラはサーベルの刃先を向けながら悪態をつく。

「意外としぶとい……いや、悪運があるのか？よくもまあ懲りずに立ち上がれるものだな」

「ここで俺が倒れたら、誰が暴れるオリジオンを止めるんだ……！あんな奴らを……のさばらせはしない！お前達に……好き勝手させるかよ……！」

アクロスは、完膚なきまでに叩き潰されながらも尚、立ち上がる。

「気に入らないやつを消したい。好きな子を独り占めしたい。自分の思うように周囲を変えたい。そんな身勝手な欲望を抱えたオリジオンに、多くの人が傷付けられたのを見てきた。彼らの身勝手な理由で、関係ない人が傷付くのは許せない。身近な人が傷つくのも許せない。アクロスの力は、その為に使う。」

こんな人でなしどもに、自分達の生きる世界をめちやくちやにされてたまるものか。その憤りが、アクロスの身体をまだ動かすのだ。

「転生者だのなんだの、ごちやごちやうるせえよ……皆生きてるんだよ……背景でもなく、端役でもない。俺みたいな木偶の坊なんかと比べたら！よつほど！皆の方が！立派に生きてるんだよ！」

アクロスは啖呵を切る。立っているだけでもやつとだが、それでも倒れるわけにはいかない。

しかし。

「何ですか？もう話は終わりましたか？なら結構。生憎貴方の言葉は我々には届きません。いくら綺麗事をほぎこうが、彼らは転生者には叶わない。次元が文字通り違いますので」

「トドメを刺すぞ。確実に殺れるタイミングでやらなければ、やられるのは此方だから」

「心配すんなってのレイラちゃんよお。こおんな雑魚、瞬殺に決まってんじゃん！」
タロットはアクロスの発言をあつさりと否定した。そして、4人は満身創痕のアクロスにトドメを刺すべく、その足を動かす。

アクロスを殺す事しか考えていないレイラに、彼女の言葉に軽い調子で答えるイガリマ。ハナから対話する気のないタロットに、言葉すら通じないガングニール。全員。完全にアクロスを舐めてかかっている。自分達の優位は揺るがないと思っている。

先陣をきつて、イガリマオリゾンが鎌を構えて突っ込んできた。アクロスは思わず身構える。イガリマは、楽しそうに笑いながら鎌を振り下ろす。

「さあもつとだ！お楽しみはこれからなんだからさあ！」

その時だった。キイイイインツ!!? と、何かが凄まじい速度で向かってくるような音がした。イガリマはそれを聞いて刃を止め、空を見上げる。そして、先程よりもさらに楽しそうな笑みを浮かべながら、空に向かって声をかける。

「へえ、やつぱ来んのなお前。いいぜ、中々愉快的展開じゃんか！」

「あれは……」

アクロスもつられて空を見上げる。

空を飛ぶ、あの純白の姿には見覚えがある。確か、初めて会ったときもあの姿だったか。

「ようバルジ。この間の続きをしようぜ？」

仮面ライダーサイガ。無論変身しているのは転生者狩りだ。

背中のライニングアタッカーで飛来してきたサイガは、イガリマオリジオンを見下ろしながらそう言い、ライニングアタッカーの砲口を向ける。

「今度は逃がさねえ！ここでケリをつける！」

そう叫びながら、地上にいるギフトメイカー達に向けて機銃で攻撃を仕掛けてきた。当然ながら、近くにいたアクロスも巻き込んで。

「ちよわああああああああつ！！？」

とぼつちりで攻撃を受けたアクロスは、数発程喰らいながら吹っ飛んでゆく。その際に腰のクロスドライバーも外れ、変身が解除される。

「つてえ……なんだよ！！？」

アクロスの変身が解かれた瞬は、降りしきる弾丸の雨の中、落ちたクロスドライバーをなんとか拾い上げ、ファイティ達がいる方へと走ってゆく。このままだと瞬まで巻き添えで殺さねかねないし、何より他の皆が心配だ。

一方、三度合間見えたイガリマオリジオン——バルジとサイガ——転生者狩り。サイガは、ベルトのサイガフォンに付いているミッシヨンメモリーを外し、背中のライニングアタッカーの操縦桿に取り付け、操縦桿を引き抜く。すると操縦桿は、

フォトンブラッドの刀身をもつ二振りのトンファー型武装、トンファーエッジへと変化する。

そして、トンファーエッジをイガリマオリジオンに突きつけ、ドスの効いた声を投げつける。その手は怒りで震えていた。

「また会ったなあ……バルジイ……！」

「へえ、懲りないなあお前。それ程俺が憎い？」

「当たり前だ！ 家族を……俺の世界を滅ぼしたお前を！ 決して許しはしない！」

「世界を滅ぼした……!?？」

サイガの発言に、瞬は驚きの声をあげる。

が、イガリマオリジオンは、サイガの発言を否定する事なく、それどころか、全く悪びれていない様子で、ヘラヘラと笑いながら開き直る。

「人聞きの悪い事言うなよガキンチョ。俺はただ、やりたいようにやっただけ。それで死んだのはアイツらが弱つちかったからなんだよ分かるう？ あの程度でくたばった雑魚が十中八九悪いんだ。俺は悪くねえ！ つてな！」

「つ……このクソ野郎がつ！」

イガリマの発言にブチ切れ、サイガは目にも留まらぬ速度でトンファーエッジを振り抜く。しかし、イガリマオリジオンは、それ以上の速さで大鎌を振るい、サイガの手か

らトンファーエッジを弾き飛ばす。

瞬は、物陰に隠れながら2人の様子を伺う。果たしてサイガの言っていることが事実か否か、瞬には知る由はないのだが、転生者狩りがバルジに向けている尋常じやない憎しみと怒りが、両者の間に因縁らしきものが存在していることを証明している。

「その表情たまんねえなあ！仮面越しにだつて分かるぜ。俺が憎くて憎くて堪らないですつて顔してんのがよお！それくらい勢いで歯向かってくれなきゃつまらねーだろおがよお！」

「俺の命はテメエを殺す為だけにある！テメエみたいな腐れ外道は！俺が！殺す！」

なんだが、瞬そつちのけで殺し合いが始まつてしまった。対話を放棄した斬り合いを傍観しながら、いったいどうすべきかと考えている瞬に、ファイファイが声をかける。

「……どうする？今ならギフトメイカーを彼に任せて先に進めるけど」

「でも……置いていくつてのもなあ……」

「その必要はない」

後から来た奴に全部押しつけてしまうのは凄く迷惑なんじゃ無いのかと考えていた瞬。その考えを、ばつさりとサイガは切り捨てた。

「大方助太刀するかどうかを話し合ってたんだろうが……悪いがお前らの助けはいらねえ。コイツだけは俺が殺さなきゃならないからな！」

「？」

イガリマとサイガのタイマンが勃発して手持ち無沙汰になっていたレイラをはじめとする他のギフトメイカー達が、一斉に瞬達に襲いかかってきた。

マズイ。ヒビキを抱き抱えているせいで、アクロスに変身しようにも、両手が塞がっていてドライバーを取り出せない。ガングニールオリジオンの凶拳が、瞬に迫る。

その時だった。

「行け、DDD烈火王テムジン！」

「uAu?？」

鋭い声と共に、炎を纏った人型モンスタースターが、瞬とガングニールオリジオンの間に割り込むと共に、ガングニールの攻撃を打ち払い、地上に叩き落とした。

モンスタースターは、ガングニールの動きが止まったのを確認すると、光の粒子となって霧散する。いったい何が起きたのだと周囲を警戒する瞬やギフトメイカー達のもとに、ある人物が現れる。

「リアルソリッドビジョンを荒事に使うのは避けたいのだが……人命がかかっている仕方がない。大丈夫か？」

声の主は、デュエルディスクをつけた、銀髪眼鏡の青年だった。4月も終わりだというのに、赤いマフラーを首に巻いており、なぜか靴下は履いておらず、素足に直接スニ-

カーを履いている。青年のズボンの裾が捲られているので、どうしても目につくのだ。「邪魔するな。死ぬ」

青年の姿を見るなり、レイラは躊躇なくライフルの引金を引いた。余りの迷いのなさに、瞬は思わず縮み上がってしまう。

しかし、青年は、なんと着けていたデュエルディスクのプレート部分で弾丸を叩き落とした。弾かれた弾丸が、瞬の足元に転がってゆくのを見て、瞬はその常識外れの行動に、思わず笑ってしまう。

「誰だお前は」

「赤馬零児。あかばれいじただの決闘者だ」

「なら引つ込んでろ。お前とアクロスは面識がない。赤の他人のはずだろう。何故邪魔をする」

「私もこの中に用がある。だがお前達はここに誰かが入られたら困るのだろうか？」

「困る、と言ったら？」

「私が全力で押し通してあげよう」

赤馬零児と名乗った青年とギフトメイカー達の押し問答に、ファイフティが割ってはい。それを見てタロットは、信じられないといったような反応を見せる。

ファイフティは瞬達を庇うように、その前に立つと、いつになく真剣な表情をギフトメ

イカー達に向ける。

「行きなさい。いい加減、口だけじゃ無いって所見せないかね」

「……大丈夫、なんだな？」

「いいから。君は君のやるべきことを」

その力強い言葉に、瞬は黙るしかなかった。心配そうにファイフティの方を見ながら、瞬達はその場を離れる。

ファイフティは半ば強引に瞬達を先に行かせ、改めてタロットと相對する。そして、瞬達が建物の中に入っていったのを確認すると、

「という訳で、君達の相手は私なのーだ☆」

と、ノリノリでウインクを決めながらタロット達の方を振り返る。一方、ギフトメイカー達は、ファイフティが自分達に相對すると知って、あからさまに嘲笑してくる。

「まさか貴方が戦うつもりですか？冗談は口だけにした方がいいですよ。かつてはどうだったかは知りませんが、今の貴方はクロスドライバーを扱えない程までに落ちぶれている。そんななりで我々と勝負になる訳がないでしょう？」

「そうだね。今の私ではクロスドライバーが使えない。だからこうして逢瀬くんをアクリスにした。その歯痒さは私が一番わかっているとも」

ファイフティはそう言いながら、何処からか杖を取り出し、その柄で地面をトンと軽く

叩く。

「だから、往生際悪く足掻かせてもらうよ。それくらいしなきゃ釣り合わない」

ファイフティのおかげで、なんとかデュエルコートに入ることができた一行は、皆の元へと走っていた。時折壁越しに聞こえてくる轟音が、瞬を容赦なく焦らせる。あれからどうなった。皆はまだ無事なのか。最悪の展開にならないことを祈りながら、瞬は通路を走る。

一方で、瞬に抱き抱えられているヒビキは、いきなり現れた零児に不信感を抱いているようだった。

「いきなり出てきたけど、貴方は一体何者？」

「安心しろ、私は敵ではない。たまたま君達と目的地が同じだったので手を貸したただだ」

「んなこと言われても信用できないよ……」

「出会って数分の間を信用しろというのも無理な話だろう。だが疑っている時間はないぞ。急がなければ、死人が出る」

零児の言う通り、事態は一刻を争う。兎に角今は先を急ぐべきだ。他のことはそれか

ら考える。

タロットオリジオンとの戦いでボコボコになった通路を走り抜け、瞬達は観客席に通じる扉の前にたどり着いた。抱っこ状態から降ろされたヒビキが、ドアノブに手を掛けるが、ドアノブはびくともしなかった。

「うそ、開かない!」

「どうやらソリッドビジョンを使って塞いでいるようだ……こうなつたら操作室に行き、システムを落とすしか無い」

零児の提案を受け、瞬達はリアルソリッドビジョンの操作室に向かう。あそこからならコートソリッドビジョンを自由に弄ることが可能だし、コートに通じる扉もある。

再び廊下を駆け抜けて、操作室に入る。

「なっ……」

室内に踏み込んで、瞬は絶句した。

木製の扉はバキバキに砕かれた状態で床に放置されており、室内はこれでもかというほど荒らされていた。椅子や机は倒れ、壁や床には引つ掻いたような傷や血痕が散見される。確かここでは、湖森と志村がソリッドビジョンの操作をしていたはず。という事は、恐らく2人はここでオリジオンに襲われたのだろう。

妹が襲われているながら何もできなかった自分に苛立ち、瞬は拳を強く握りしめる。ま

たしても彼女を危険な目に遭わせてしまったのだ。

「見て！あれ！」

「……………」

その時、ヒビキが前方を指差しながら叫んだ。瞬ははつとして顔をあげる。前方には、ソリッドビジョンの操作盤と、デュエルコートを確認できるモニターが確認できる。

モニター越しにコート内の様子を見て、瞬は絶句した。そこには、まるで喧嘩にでも巻き込まれたのかと思うほど、満身創痍で横たわる遊矢と、それを踏みつける対戦相手

—— マサルの姿が。

「なんだよこれ……………何をどうやったらカードゲームでこんなに傷つくんだよ!?？」

「これ、カードゲームなんだよね……………なんであの人、あんなにボロボロに……………」

「アクションデュエルに怪我は付き物だが、これは明らかに度を越している……………ダメージ設定を弄っているのか！」

自分の想像するカードゲームとはかけ離れた惨状に驚愕する瞬とヒビキの横で、零児が操作盤を弄りながら毒づく。

アクションデュエルはその性質上、モンスターの攻撃などによりプレイヤーが怪我を負うこともある。その危険性をなるべく減らすために、小さい子供などのことも考慮して、リアルソリッドビジョンの出力を調整できるようになっている。

しかし、現在の状態はL.V. MAX。普段は使わないレベルにまで引き上げられている。こんな状況でダメージを何度も喰らえば、大事故は避けられないだろう。

「っ！封鎖は解除出来たが、ダメージ設定の変更が出来ない！誰かがコートの外から邪魔をしているのか？」

「中に入れるだけでも万々歳だ！行こう！」

零児のおかげで、なんとか中に入ることができた瞬。扉を開け放ち、アクションフィールドの中へと飛び込んでゆく。

「皆！無事か!?？」

「瞬！」

観客席の方から、皆が顔を出して瞬の方を見てくる。ボコられていた志村や湖森の様態が心配だが、とりあえずその他の皆は無事らしい。

一方、デュエルコートを見下ろした柚子は、瞬の隣に立つ零児を見て、思わず声をあげていた。

「赤馬零児……!? どうしてここに!?？」

「柚子ちゃん、あの眼鏡の人知り合い？」

「知ってるも何も、デュエル業界の最大手、レオ・コーポレーションの社長！決闘者なら知らない人はいないレベルの有名人だよ!?？」

「あー、そんなに凄い人だったのかこの人……」

観客席での唯とハルの会話を聞いて、思わず感心してしまう瞬。ちらりと零児のほうを見ると、彼は気恥ずかしそうに咳払いをし、眼鏡のレンズを光らせていた。

遊矢を踏みつけているマサルは、ギフトメイカーの手を借りて事前に締め出したはずの瞬が戻ってきたことに苛立ちを露わにし、遊矢を踏みつける足に力を込めながら、忌々しそうに瞬を睨みつけてくる。

「おいおい、部外者が入ってくんじゃねーよ。今はデュエル中だぜ？」

「んな事言ってる場合かよ……こんなになるまで痛めつけるのがデュエルだと？」

「生半可な考えで割り込んでんじゃねーよ素人が！^{トシロ}それに仮面ライダーが今更来たって遅い！もうすぐ榊遊矢は死んじまうんだからよ！」

マサルは苛立ちながらも、気絶している遊矢を強く蹴り飛ばす。頭から砂をかぶりながら、意識のない遊矢の身体は地面を転がってゆく。思わず瞬は遊矢に駆け寄る。

「何でこんな事を……」

「遊矢^{コイツ}が嫌いだからに決まってるんだろ。決闘者ならこいつの身勝手さには虫唾が走って当然だろ？憎まれる奴が全部悪いんだよ、なあ？」

「んな訳ないだろ……」

瞬は、反射的にマサルの言葉を否定していた。怒りからなのか恐怖からなのかは分か

らないが、その声は震えていた。

「嫌いだから、邪魔だから消します殺しますつて……そんな事やってなんになるんだよ！ そんな事繰り返してたら、何もかも無くなってしまおう！ それでお前はいいのかわよ!!？」

—

そう。基本的に、人間の嫌悪感に際限は無い。大多数の人間は、嫌いな奴がどうなるうが知ったこっちゃないのだから。誰もが少なからず、こう言った感情は持っているだろう。

しかし、それを制御せずに思いのままに振るう事は許されない。不快感のままにあらゆるものに攻撃をした末に残るものは無い。他者の介在を許さない自分だけの世界の
み。

が、瞬の言葉は通じなかった。

「嫌いな奴殺せるなら万々歳だよ。俺達は人生半ばで一度死んだ可哀想な身分。だからなんでもしていいんだ。いや、そうでなきゃ釣り合わないんだよ。だから邪魔するな。俺達の幸せを邪魔するな」

きつぱりと、そう言い放つマサルに、瞬は啞然としていた。今言葉を交わしている存在が、本当に自分と同じ人間いせものなのか。本当に同じ言語で話しているのか。まるで得体の知れない化け物と会話しているような気持ちになってくる。

マサルが何かを喋るために、ドス黒い何か、瞬の心の中に注がれていくような感じがする。

(ああ……どうして)

—— 何故転生者こいつらは、こんなにも容易く人間の心を捨てられるんだ？なんでこんなにも、他人を人間として見ずにいられるんだ？

一誠を執拗に狙ったオリジオンも、鎮守府を襲撃したオリジオン達も、今日の前にいるマサルも。今まで戦ってきた転生者は、どいつもコイツも自分の欲望のままに好き勝手やっていた。そして、それを悪びれる奴は一人もいなかった。

瞬にはさっぱりわからない。いや、無意識に拒絶しているのだ。何かに対する嫌悪感自体は、誰だって大なり小なり持つている。それを直視するのが怖いのだ。分かっしまえば、自分を嫌いになってしまいたいそうだから。

(コイツらは……駄目だ)

だが、拒絶するには、あまりにも醜いものを見過ぎた。転生者はどうしようもない存在だと、一瞬だけでも思ってしまった。

一度抱いた嫌悪感は自力では拭えない。そのまま、瞬の心が闇に ——

「瞬……瞬！」

「っ!!?」

強く名前を呼ばれながら身体を揺すられて、瞬は我に帰った。ぼつと振り返ると、入り口に放置していた筈のヒビキが、瞬の肩を掴んでいる。

「ヒビキ……俺は……」

呆けたような顔のまま、瞬は正面を向く。両手は、気絶している遊矢の身体に添えられている。それを見て、瞬はドキリとした。――嫌悪感を武器にしようとしていた自分に。

そんな事をすれば同じ穴の貉だ。嫌悪を嫌悪で返すな。負の感情の倍々ゲームに足を踏み入れようとすんな。そもそもそんな事をしていない場合じゃないだろう。そう言い聞かせ、瞬は顔を上げてマサルを見つめる。

それは嫌悪ではなく、理不尽に対する怒りだった。

たとえ今日出会ったばかりの人間だとしても、目の前で踏み躪られるのは許せない。ごく普通の正義感を以って、瞬はマサルの前に立ちはだかる。

「お前がなんと言おうが、俺はお前の行動を認めないし許さない。お前が何かを嫌うのは勝手だが、それを理由に誰かを傷つけようとするなら、俺は全力でお前を止める！」

果てしない闇の中、何処からか聞こえる咆哮。

それは嘆きの唄。

望まぬ蹂躪を強いられる悲しみと、それから逃れられない苦しみ。

(あ……)

潮騒の様に幾度となく繰り返されるその嘆きの声が、闇に沈んでいた遊矢の意識を引きずりあげる。

身体感覚が無くなってから、幾ら経ったのだろうか。光源のない闇の中では、目を開けているかすら怪しくなってくる。頼れるのは己が耳のみ。咆哮を繰り返しているうちに、少しずつ、身体感覚が戻ってきた様な気がしてきた。全身を覆うやけつく様な痛みに顔を顰めながら、遊矢は闇の中を泳ぐ。

咆哮の主はすぐに見つかった。それは、光なき闇の中であるにも関わらず、はっきりと姿を視認できた。

「オッドアイズ・ファントム・ドラゴン……」

本来なら邂逅するはずのない存在。遊矢の知らない、どこか遠くの世界の決闘者のエース。札道マサルというイレギュラーによつて持ち込まれた異物。そして、遊矢を焼き払つた存在。

それが、二色の眼で遊矢を見つめている。敵意は感じられない。その目を見て、遊矢は確信した。

（勘違いなんかじゃない……コイツは、泣いている）

一度目に気絶した後、目が覚めた遊矢は、嘆くオッドアイズ・ファントム・ドラゴンを見た。あの時は意識が朦朧としていたのもあつて、気のせいかと思つていたが、あれは間違いではなかったのだ。

では、何故泣いているのか。遊矢は既にその答えを知つていた。

（多分、コイツは他人を無闇に傷つけたくはないんだ）

それは一種の共感シンパシーからだつた。遊矢も元来、他人を傷つけるのは好まない性格だ。デュエルを戦いの道具として使うのも好まない。しかし、ある事情からデュエルを戦いの手段に使わざるを得ない状況に追い込まれていった。

エンタメデュエルと、勝敗が生死に直結する次元戦争下のデュエル。戦いの道具としてのデュエルを繰り返さざるを得ない状況。その板挟みに苦悩し続けた遊矢だからこ

そ、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの苦しみがよく分かる。

「お前もこんな事、続けたくないんだよな。分かるよ、その気持ち」

遊矢は、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの額に手を置く。ファントム・ドラゴンは、黙ってそれに身を委ねる。こうして触れ合うだけでも、その言葉にならない悲痛の叫びがひしひしと伝わって来る様に感じられる。

だが悲しいかな。その苦悩は自らの主人には通じない。榊遊矢への嫌悪と憎悪に駆られ、遊矢を全否定しようとして躍起になっているマサルには、届かない。

ならば一体どうすべきか。

それはもう分かっている。

「そうだ……観客も、相手も、そしてモンスターも笑顔にするのが、俺の目指すデュエル……エンタメ……」

父親から受け継いだエンタメデュエル。かつて世界を滅ぼしたとある決闘者の信じた理想のデュエル。そして、今自分が目指しているもの。今日の前に、泣いているモンスターがいるならば、それをも笑顔に変えて見せる。それが真のエンタメデュエル。

答えは決まった。後は覚醒するだけ。遊矢はオッドアイズ・ファントム・ドラゴンに暫しの別れを告げ、闇の中を上へ向かって泳ぎ始める。こういう時は、上に行けば何とかなるのがセオリーなのだ。

さあ、お楽しみはこれからだ。

「……」

視点は現実に取り替わる。

倒れたまま動かない遊矢と、それを見下ろすマサル。そして両者を固唾を飲んで見守る唯達。

「湖森……志村……」

そして、観客席に寝かされた、満身創痕の湖森と志村を、心配そうに見つめる唯。マサル——オッドアイズ・オリジオンに理不尽にも襲われた2人の意識はまだ戻らない。瞬達が来てくれたはいいものの、状況は変わらない。遊矢は気絶したままだし、怪我人を抱えてこの場から逃げられるかというと、それは無理なものだ。

ただ、傍観しているだけ。それがなによりももどかしい。友達が傷つけられても、立

ち向かうことができない自分に、唯は嫌気がさしてきそうだった。

その時だった。湖森の臉が不意に開いたのだ。意識を取り戻した湖森の顔を見て、唯は安堵する。

「ゆい……さん？」

「湖森ちゃん！大丈夫なの？？」

「ギリ大丈夫……背中とか顔とかめっちゃ痛いけど」

「よかったあ……ホント無事で良かったあ……」

涙ぐみながら、唯は湖森を抱きしめる。

同時に、隣で取り巻き達と共に気絶していた沢渡も目を覚ましたらしく、観客席の背もたれに背中を預けながら、嫌みたらしく声をかけてくる。

「俺を忘れんなよ……一応俺様もボコられた側の人間なんだぜ？」

「その調子なら大丈夫でしょアンタは」

が、柚子が一蹴。沢渡さんは今日も扱いが雑だった。

一方、潮原提督達は、コート内で倒れたまま動かない遊矢を見下ろしていた。

「遊矢くん、目覚めないね」

「あれマズインじゃねーか？もう封鎖は解かれたんだし、さっさと逃げて病院に担ぎ込まなきゃならねーだろ？」

「確かにマズイし、あのままだとデュエルもタイムアウトで強制敗北よ。でも札道マサルが、素直に私達を逃すと思う？提督も分かっているはずよ」

瑞鶴の言う通り、あの少年が自分達を逃すタマとは考えられない。というか、アレは躊躇や情けなどという言葉が通じないタイプだ。

マサルが周囲に向ける、あの眼には見覚えがある。他者を自分と同じ生き物として見ていない、背筋が凍てつきそうな眼。先日、鎮守府を襲撃したオリジオン。彼もまた、同じ眼をしていた。

(何が起きてんだよ……なんでこうも、人を人と見れない様な奴がウヨウヨいんだよ……)

そんな潮原提督の懸念なぞ知る由もないマサルは、自分に真っ向から齒向かってくる瞬を罵倒し始めた。

「先に気分を害されたのは俺だ！ヒーローならさあ、そんな屑守る価値ないって分かれよ！何原作主人公守ってんだよ、優等生气取りか！」

「んな理屈通るわけないだろ!!？」

「黙れ邪魔するな消え失せろ！神遊矢を早く殺させろよ！」

あくまで自分を正当化し続けるマサルだが、そんな理屈は転生者ではない瞬には通じない。というかただでさえ支離滅裂な理屈だというのに、転生者以外には通じないシロ

モノなのだから当然だ。

その時。

「まだ、だ」

「!?？」

下から声がした。

瞬が頭を下げると、気絶していた遊矢が、目を覚ましていた。

「チツ、しづといな。腐つても主人公補正は健在かよ」

マサルは息を吹き返した遊矢を見て、忌々しそうに舌打ちをするが、誰も耳を貸すことは無かった。

零児も遊矢の元に駆け寄り、声をかける。

「榊遊矢。その怪我でアクションデュエルは無理があるだろう。それでもやるといのか?」

「零児、心配しなくてもいいさ。コイツだけは、俺がなんとかしなきゃ駄目なんだ。この憎しみは俺一人で受け止めなきゃいけない。それを他の人に負わせることはできない。それに、こんなところで膝をついちやエンタメデュエリストの名折れだ!デュエルはまだ終わってない!まだ笑顔になっていない人がいるなら、俺のエンタメで笑顔にしてみせる!それが対戦相手や、モンスターであつても!」

側から見れば空元気に映るだろう。マサルからすれば嘖飯物だろう。しかし、遊矢は本気だった。

遊矢は、まっすぐにオッドアイズ・ファントム・ドラゴンを見つめる。目の前の、望まぬ戦いを強いられる竜をも笑顔にしてみせると、そう決意を固めていた。

瞬は、傷だらけになりながらも立ち上がる遊矢を心配し、声をかける。

「お前、いけるのか？」

「二人とも、心配してくれてありがとう。だけど、これは初めから俺がやらなきゃいけないことだ。だから、せめて最後まで見ていてくれないか？まだ皆にデュエルの楽しさ、見せきつてないし」

きつぱりとそう返し、瞬の肩を借りながら立ち上がる遊矢。その眼には、確かに闘志が宿っていた。ちよつとやそつとじゃびくともしない、固い決意。それを確かに、瞬は感じ取っていた。

ならば、瞬から言えることは何も無い。決断した後の人間に、外野が出来ることは無いものだし、そもそもこれははじめから遊矢とマサルの戦いだ。そこにアクロスという異物が介在する余地は無いのだ。だから、瞬は背中を押す。

「じゃあ見せてくれ、お前のエンタメデュエルを！」

「分かった！」

遊矢は瞬の肩から手を離し、自分の足で立ち上がる。気を抜けば崩れ落ちそうになるが、ここまで啖呵を切ったからにはそうはいかない。最後まで舞台上に立ち続けてみせる。

瞬達が観客席に移動し終えたのを確認すると、遊矢は微かに笑みを浮かべながら、デッキトップに指をかける。

「お楽しみは……これからだ！」

遊矢：手札2↓3

そして、なけなしの力を振り絞り、遊矢はカードをドロウする。

「魔法発動！ “スケールアウト・ドロウ”！自分のフィールドに存在するカードが、スケール3以下のPモンスター1体の場合、そのモンスターをリリースすること、リリースしたPモンスターのスケールの数だけデッキからカードをドロウする！俺はスケール2の“EMペンデュラム・マジシャン”をリリースし、2枚ドロウ！」

手札を補充しながら、アクションカードを求め、遊矢はフィールドを駆ける。しかし、先程のダメージが堪えているのか、その足取りはかなり重い。

「行かせるかぁー！」

しかし、マサルがそんな行為を許すはずもなく、遊矢の背中に、マサルの飛び蹴りが炸裂し、遊矢は顔面から石畳の地面に向かってはつ倒される。ここまでくると、最早

ゲームの体裁をかなぐり捨てた暴力だ。

だが遊矢は止まらない。鼻血を出しながら、遊矢は立ち上がって大地を駆ける。砂浜の端に鎮座する、一戸建て住宅程の大きさはありそうな巨大な巻貝の殻。その中に、アクションカードが確認できた。それを見ると、遊矢はまっしぐらにそれを目掛けて走る。

「やれ！あのカスにアクションカードを取らせるな！」

「くっ……そお！」

マサルの命令を受けて、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンが、哀しげに鳴きながら尻尾を振りかざしてくる。遊矢は傷だらけの身体に鞭打ち、無理やり前方に飛び込んで尻尾を躲し、アクションカードを掴み取る。

「アクション魔法、アクション・エナジー」発動！自分墓地のアクション魔法の数×5
00LPを回復する！」

遊矢：100LP↓1100LP

遊矢の墓地には使用済みのアクション魔法が2枚。よって遊矢は500×2＝1000LPを回復する。ギリギリの状態だった先程までと比べると、わずかながら余裕が出てきた。これが絶望の先送りか、希望の兆し、どちらに転ぶかはこれからの展開次第だろう。

遊矢はマサルを真つ直ぐ見据えると、手札から新たに2枚のカードを選択し、Pゾーンに発動する。

「俺はスケール8の『竜穴の魔術師』と、スケール1の『龍脈の魔術師』で、Pスケールをセッティング！これでレベル2〜7のモンスターが同時に召喚可能！今一度揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーケ！ペンデュラム召喚！EXデッキから舞い戻れ、『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』、『EMドラミング・コング』、『EMパートナーガ』、『EMペンデュラム・マジシャン』！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500

EMドラミング・コング：DFE900

EMパートナーガ：DFE2100

EMペンデュラム・マジシャン：DFE800

破壊されたモンスター達が、一斉にフィールドに舞い戻ってくる。これがペンデュラム召喚の脅威でもあり、強みでもある。

召喚されたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが、遊矢に「乗れ」と言うかのよう、その頭を下げる。遊矢は、重い身体をなんとか動かし、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの背中にもたれかかる様に跨る。

「ペンデュラム・マジシャンの効果発動！『竜穴の魔術師』と『龍脈の魔術師』を破壊

し、"EMセカンドンキー"、"EM小判竜"を手札に！同時にパートナーガの効果発動！パートナーガが召喚・特殊召喚に成功した時、自分フィールドのモンスター1体の攻撃力を。自分フィールドの"EM"の数×300アップさせる！俺はオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを選択！"

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500↓3400

Pゾーンの魔術師が消え、入れ替わりに、遊矢の手札に2体のEMが舞い込んでくる。しかし、遊矢はそれらのモンスターを召喚はせずに、バトルフェイズ突入を宣言する。

「リベンジだ！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンを攻撃！螺旋のストライクバースト！」

遊矢の攻撃命令に合わせ、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが光線を放つ。

「この時、EMドラミング・キングのモンスター効果発動！1ターンに1度、自分のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う攻撃宣言時、その自分のモンスター1体の攻撃力をバトルフェイズ終了時まで600アップさせる！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3400↓4000

パートナーガの隣にいた、ゴリラのようなモンスターが、自身の胸を激しく叩く。すると、ドラミング・キングの身体からオーラのようなものが放出され、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンへと注ぎ込まれてゆく。

攻撃力の差は1500。だがこれだけではない。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンにはまだ効果があるのだから。

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンがレベル5以上のモンスターとバトルするとき、戦闘ダメージを2倍にする！リアクションフォース！」

「無駄だ！オッドアイズ・レムナント・ドラゴンの効果発動！フィールド上のこのカードを除外することで、デュエル中に1度だけ、戦闘ダメージを半分にする！」

マサル：4000LP↓2500LP

攻撃が直撃する直前、フィールドにいたオッドアイズ・レムナント・ドラゴンがオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの前に割って入り、その攻撃を身を挺して受け止め、爆散する。

2倍からの半減で差し引きゼロ。だがダメージは通る。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃により、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンは爆散し、マサルにもダメージが与えられる。爆煙と砂煙で互いの姿が隠れ、視認が困難となる。

「やったか!!」

「それで済めばいいけどね……」

それを見た潮原提督は思わずガッツポーズをきめるが、対して初月は浮かぬ表情を見せている。

「ようやく反撃できたんだから、喜ぶべきでしょ」

「これはちよつと……いや駄目だ。明らかにマズイ」

「何がマズイの？」

「いやいや、よく考えてみなよ。見下してる奴に急に反撃されて平気でいられる人間が、この世にいると思うかい？」

ネプテューヌの発言に、初月だけでなく、ファイフティも浮かない表情で答える。遊矢の身を案じるような、はたまたマサルに呆れているかのような態度を見せる。

マサルへのダメージ。ファイフティ達の言う通り、それは虎の尾を踏み抜くに等しい行為であった。

砂煙が晴れ、傷ついたマサルの姿が顕あらわとなる。

「やりやがったなテムエ……神遊矢の分際でええええええええええええええええ!!許さねえ……殺してやる!このデュエルで息の根を止めてやる!」

傷だらけになったマサルは、自らの喉を潰す勢いで遊矢を罵倒してきた。常軌を逸した、理解を拒みなくなる程の激しい怒りの声がぶちまけられる。

見下している相手に傷を負わされたことで、マサルの怒りはあっさりと限界点を越えた。元来人間は、下に見ている存在に痛手を負わせられたら怒り散らすのが普通。特に沸点の低いマサルがこうなるのは必然だった。

怒りのままに、マサルは反撃の一手を進める。

「オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴンのP効果発動！ “オッドアイズ” モンスターが破壊された場合、手札・デッキ・墓地から “オッドアイズ” モンスター1体を特殊召喚する！俺はデッキから二体目のアークペンデュラム・ドラゴンを特殊召喚！」

まさかの2体目のアークペンデュラム・ドラゴンの出現に、皆は驚愕する。

「1枚カードを伏せてターンエンド。この時、ドラミング・コングの効果が終了し、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力も元に戻る」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK4000↓3400

バトルが終わったことでEMドラミング・コングのP効果が切れて攻撃力が下がるが、パートナーガのモンスター効果は永続効果である為、オッドアイズの攻撃力は3400のままだ。

（フアントム・ドラゴン……）

ターン終了の宣言をしながら、遊矢は、マサルのフィールドのオッドアイズ・フアントム・ドラゴンについて思考を巡らせていた。

闇の中でオッドアイズ・フアントム・ドラゴンと対話をした時から、このデュエルは、ただマサルに勝てばいいというわけではなくなった。例えこのまま勝ったとしても、全員を笑顔にできていないのならば、エンタメデュエリストとしては負けたも同然。

今フィールドにセットしたカード。これを発動できれば望みはある。しかしその前に、マサルに問わねばならないことがある。

「なあマサル」

「なんだ、サレンドーする気になったか？」

「お前には聞こえないのか？ドラゴン達の悲痛の叫びが」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴンについて聞くならば、今しかないだろう。そう思い、遊矢は質問した。馬鹿にした様に勝ち誇るマサルだったが、予想だにできなかった内容の遊矢の問いかけに、思わず素っ頓狂な声をあげてしまう。

「は？お前何言ってるの？お前そういうキャラじゃねーだろ、おい」

「俺にはずっと聴こえている。オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの嘆きが。お前の、他のドラゴン達もそうだよ」

「何が言いてえんだよ」

「きつとファントム・ドラゴンはこんな戦い方を望んでいないんだよ……人を傷つける様なデュエルを嫌がってるんだよ。きつきからしきりに、悲しそうにないてるだろ？」

一方、観客席では、いきなり変なことを言いだした遊矢を心配する声上がり始めていた。

「遊矢のやつ……いきなりスピリチュアルな事言い出したけど大丈夫か？打ちどころ悪

かったんじゃ……」

「いや……分かるよ」

頭でも打って可笑しくなったんじやないのかと心配するアラタだったが、まさかの唯が遊矢に同意し始めたのでドン引きしてしまう。

「遊矢の言う通り、あのドラゴン達は人を傷つける事を嫌がってるんだ。だけど、カードは持ち主には逆らえないから、苦しんでいる。勘だけどね」

「勘、かぁ」

「案外馬鹿にできないかもよ？古来からデュエルとオカルトは密接なものとされているからね。モンスターが決闘者に不満を抱く可能性もゼロじゃない」

初月の言葉に、アラタはきまりが悪そうに唸るしかなかった。そりゃあホビーアニメとかだとその類の話は良くあるが、それが実際にあるとはアラタには考えにくい。決闘者ではないアラタにはその真実を知る術がないのだから仕方ない。

皆が話し合っている間に、遊矢は、自分が闇の中で対話を通して知った事をマサルに語り終えた。だが悲しいかな。マサルに遊矢の言葉は届かなかった。そもそも嫌いな奴の言葉を素直に聞けるほど、できた人間はそうそういないのだから当然だろう。

「カードとの絆だの決闘者としての誇りだの、テメーにだけは言われたくねーんだよクズ！アクションカードに頼らないと勝てない雑魚の癖してよお、一丁前の決闘者面すん

な不快なんだよ！だからとつとと負けてくたばっちまえ！」

マサル：手札0枚↓1枚

捲し立てるように遊矢を罵倒すると、マサルはデッキからカードをドローする。

その時、遊矢は掠れる様な声である疑問を投げかける。

「……どうしてなんだ？」

「あ？」

「俺をそんなに憎み嫌う理由はなんなんだ？はつきりと言ってくれ！でない……納得できない」

「お前を見てるとムシヤクシヤして仕方がないんだ。笑顔になる事ばかりを押しつけて、デュエルを疎かにする！他人の気持ちも考えない人でなし！その態度が気に入らねーんだよ！」

「……」

マサルの発言は、遊矢の掲げるエンタメデュエルを完全に否定するものだった。お前がやっているのはエンタメでもデュエルでもなんでもない。それに怒っているのだと。

確かに、遊矢はエンターテイナーとしてはまだまだ未熟。それは重々承知の上だし、だからこそ日々更なるエンタメを目指している。マサルの言い分にも、正しい部分もあるのかもしれない。しかし、だ。それでも許せないことがある。

「だけど」

「？」

「お前のやってることは間違ってる。俺が悪いなら、俺が憎いなら、俺だけにそれをぶつけろ！関係ない人を巻き込むな！」

沢渡、志村、湖森。たまたまこの場にいたという理由だけで、マサルに傷つけられた人達。マサルが語った内容の中に、彼らが傷つけられる理由など無いというのに。ただ遊矢が憎いならば、その憎しみは遊矢に対してのみぶつけられるべきなのだ。否定されることなら慣れてるから。

だが、マサルは違う。関係ない人を巻き込み過ぎた。遊矢はそれが何より許せないのだ。

「関係なくねえよ。お前みたいなクズを持ち上げてるんだから同罪だ」

「っ……」

だがその反論は一蹴された。マサルは本気でそう言っているのだ。坊主が憎けりや袈裟まで憎いとはよく言うが、そんな理由で大量殺人を引き起こそうというのだから、もうどうしようもなかった。取り付く島もない。

マサルは遊矢をより一層強く睨みつけると、高らかに笑い声を上げながら、ペンデュラム召喚を行う。

「お喋りは終わりだ。俺はセツテイニング済のPスケールを使い、ペンデュラム召喚！ EXデッキから出でよ！ 『オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン』、『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』！」

オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン：ATK2800

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン：ATK1200

オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン：ATK1200

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン：ATK2500

ペンデュラム召喚により、5体のオッドアイズがマサルのフィールドに集結する。その様は、敵ながら圧巻と言わざるを得ないだろう。ステータスの低いペルソナ・ドラゴンやミラーージュ・ドラゴンも含め全て攻撃表示なのを見るに、どうやらこのターンでカタを付ける気マンマンのようだ。

「さあ死に損ないのクソトマト野郎！俺が引導を渡してやる！カードを1枚伏せてバトル！」

下される死刑宣告。遊矢が負ければ、マサルはこの場にいる全員を殺しにかかる。それだけは避けなければならない。負けるわけにはいかない。

力の限りを振り絞って、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンかな跨った遊矢は、再びフィールドを駆け回り始める。

（あのカードを使うには、今のままじゃ駄目だ……だが俺の今の盤面ではどうしようもない。ならば、アクシオンカードにかける方無い！）

微かにだが、勝ち筋は見え始めている。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは、遊矢を背中に乗せた状態で思い切り地を蹴り、大きく跳び上がる。遊矢はそれに合わせて手を伸ばし、宙に浮く形で設置されていたアクシオンカードをゲットする。

入手したアクシオンカードを確認して、遊矢は確信した。これで条件は整った。後は発動を邪魔されなければいけるはずだ。

「アクシオン魔法、『アクシオン・エナジー』！墓地のアクシオン魔法の数×500LP回復する！」

遊矢：1100LP↓2600LP

「ライフを増やしたところでもう遅いんだよ雑魚が！速攻魔法『星遺物を巡る戦い』を発動！オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンをエンドフェイズまで除外し、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの攻撃力を除外したモンスター級の攻撃力分ダウンさせる！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3400↓900

せっかく強化されたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンも、これでは返り討ちに遭ってしまう。それに、この攻撃を受ければ遊矢は負ける上、出力の上がつたりアルソリッドビジョンにより、最悪命に関わる事態になりかねない。

「罨カード発動！ 好敵手の記憶！」相手の攻撃モンスターを除外し、その攻撃力分のダメージを俺は受ける！」

「なっ、そのカードは？？」

遊矢：2600LP↓100LP

攻撃を受ける直前で、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの目前で、オッドアイズ・フアントム・ドラゴンがかき消えてしまった。

「どうやら、先程からちまちまとLPを回復していたのはこの為のようだ。しかし、せっかく増えたLPも、再び風前の灯に。その上、マサルの中にはまだモンスターが残っている。攻撃力の下がったオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが攻撃されれば、今度こそ遊矢のLPは尽きる。」

「はあーどの道お前は死ぬんだよ！ 行け、オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを粉碎しろお！」

マサルは遊矢を鼻で笑いながら、トドメを刺そうとする。が。

「アクシオン魔法『ディフェンス・シフト』！ 自分フィールドのモンスター1体を守備表示にする！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK900↓DFE2000

咄嗟にアクシオンカードを発動することで戦闘ダメージは防いだものの、先程まで

跨っていたオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの破壊に伴う衝撃によって、遊矢の身体は宙を舞い、頭から波打ち際へと落下する。

「うわああああああああああつ!!？」

「奴の場のモンスターはすべて守備表示……これではダメージは与えられない！糞が！奴のライフは風前の灯火だつてのによお！お前ら、この目障りな雑技団共を一掃しろ！」

「またしても仕留め損なつたことに苛立ち、マサルは自分のモンスターに当たり散らす。」

マサルのモンスター達が、残つた遊矢の場のモンスターを蹴散らしていく。そうして後には、がら空きになった遊矢のモンスターゾーンが残された。しかし、マサルのモンスターはすでに攻撃し終えている。わずかなライフを残し、生き延びた遊矢の姿に、マサルは吐き気を催す。

「エンドフェイズに、〃好敵手の記憶〃によって除外されたオッドアイズ・ファントム・ドラゴンは俺の場に特殊召喚される」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン：ATK2500

「奴のドラゴンが……遊矢の場に！」

「あのドラゴン……なんかさつきより生き生きとしてない？」

「いやいや、あれはソリッドビジョンだぞ。んな訳ないって……」

唯の発言を、反射的に否定したアラタだったが、言われてみれば確かに、遊矢の場に現れたオッドアイズ・フアントム・ドラゴンは、マサルに使われていた先程までと比べると、どこか活力にみちたような佇まいになっている……ようにも見える。それに、あれほどしきりに聞こえていた、嘆き悲しむ様な咆哮が、ぴたりと止んでいるのだ。

「デュエルモンスターズのカードには、精霊が宿るといふ都市伝説がある。もしかすると、あのドラゴンもそうであるのかもしれないな」

「カードの精霊、ねえ……」

零児の言葉に、半信半疑になる瞬。ただ、仮に、彼の言うことが正しいとするならば、あのドラゴンは嫌がっていたのかもしれない。憎しみをぶつける道具として使われることに。

「返しやがれ！俺のカードだぞ！」

マサルは当然のように怒り狂う。自分のカードを他人に使われるコントロール奪取系のカードは、使われた側はあまり気分が良いものではないのが普通である。しかし、マサルの場合は、誰よりも嫌う相手である遊矢に使われたことに、最大の恥辱を感じさせられていた。

顔を真っ赤にしながら遊矢の方に駆け寄ってくるマサルだったが、その時、オッドア

イズ・ファントム・ドラゴンが、マサルに向かって思い切り吠えかかってきた。

ビリビリと肌を焦すような衝撃が、フィールド中に広がってゆく。マサルは思わずビビって足を止めるが、即座に我に返り、怒りの声を漏らす。

「なんだよ……持ち主は俺だ！お前は榊遊矢を殺すための存在だ！そのために俺はこのデツキを転生特典に選んだんだぞ！それなのに、テメエは裏切るのかよ!!？」 榊遊矢に与するのにかよ!!？」

「GUUUUUUUUUUUUUUUUUUU……！」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!？」

「お前らまで……ふざけるな！お前らは俺のモンスター達だ！」

「俺のターン！」

遊矢：手札3枚↓4枚

「俺はスケール8の“黒牙の魔術師”とスケール3の“EMゴールド・ファンク”をPゾーンにセットイング！」

ガラ空きになったPゾーンに、新たに黒衣を纏った魔術師と、金色の毛の狼が浮かび上がってゆく。

「これでレベル4〜7のモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！三度現れ

よ、〃オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン〃！そして手札から、
 “EMセカンドンキー”！
 EM小判竜：ATK1700

EMセカンドンキー：ATK1000

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK2500↓3000

「小判竜が場に存在する限り、小判竜以外の俺の場のドラゴン族モンスターは攻撃力が500アップし、効果で破壊されない。そして、俺のPゾーンにカードが2枚存在し、セカンドンキーの召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから“EM”モンスター1体を手札に加えることができる！俺は“EMライフ・ソードマン”を手札に加え、通常召喚！」

EMライフ・ソードマン：ATK0

「そして、ライフ・ソードマンをリリースして効果発動！自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をターン終了時まで1000アップする！」

オッドアイズ・フアントム・ドラゴン：ATK2500↓3000↓4000

小柄な剣士が現れたかと思えば瞬く間に退場し、それと引き換えに、オッドアイズ・フアントム・ドラゴンの攻撃力を大幅に引き上げる。

「黒牙の魔術師のP効果！相手モンスター1体の攻撃力をターン終了時まで半分にし、このカードを破壊する！」

オッドアイズ・アドバンス・ドラゴン：ATK3000↓1500

Pゾーンの黒牙の魔術師がその手に持った杖を振ると、オッドアイズ・アドバンス・ドラゴンに向かって電撃の様なものが飛んでゆき、その攻撃力をダウンさせる。それと引き換えに、黒牙の魔術師はフィールドから消えていく。

「魔術師」PモンスターがPゾーンを離れたことで「星霜のペンデュラムグラフ」の効果が発動し、デツキから「魔術師」Pモンスター1体を手札に加えることができる！俺はスケール8の「調弦の魔術師」を手札に加え、セツティング済みのゴールドファングと合わせてPスケールをセツティング！」

新たにPゾーンに上がったモンスターには、瞬は見覚えがある。沢渡とのデュエルで召喚されたモンスターだったか。ただし、既にペンデュラム召喚をした後である為、いくらスケールを揃えても、このターンはもうペンデュラム召喚はできない。

「調弦の魔術師がPゾーンに存在する場合、俺の場のモンスターの攻撃力は、EXデツキに表側表示で存在する「魔術師」Pモンスターの種類×100アップする。俺のEXデツキに魔術師は5種類。よって500アップ！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン；ATK4000↓4500

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：ATK3000↓3500

EMセカンドンキー；ATK1000↓1500

回復分込みで500LPの損失。しかし、40000の戦闘ダメージは馬鹿にならない。その上、現在はリアルソリッドビジョンの出力を、人を容易く負傷させるレベルにまで上げている。遊矢を心身ともに甚振るための仕掛けが、ここにきて牙を剥いてきた。

全身の肉を削がれ、骨を砕かれるような衝撃が、マサルに襲い掛かる。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの、怒りの一発をモロに受けたマサルは、エースピッチャーが投げた豪速球のように飛んでゆき、コート^{コート}の壁に叩きつけられる。

「ふざけんな……ふざけんなよ！ 貴様^{お前}が俺にこんな勝負わせてよお……！」

「EM小判竜で、オッドアイズ・ミラージュ・ドラゴンを攻撃！」

「オッドアイズ・ミラージュ・ドラゴンの効果！ Pゾーンにオッドアイズが存在する場合、1ターンに1度、オッドアイズ1体の破壊を無効にする！」

マサル；2000LP↓1000LP

調弦の魔術師のP効果で強化された小判竜の噛みつき攻撃を、オッドアイズ・ミラージュ・ドラゴンは、自身の効果で耐え切る。戦闘ダメージは受けるが、破壊は免れた。

一見意味がないようにも思えるが、マサルはゴールドフアングのP効果を警戒したのだ。EMゴールドフアングには、1ターンに1度、EMが相手モンスター1体を戦闘破壊した際に1000ダメージを与える効果がある。なので、ここでミラージュ・ドラゴ

あああああああああつ!!」

マサル：1000LP↓0LP（LOSE）

マサルは、喉を潰すような悲鳴を上げながら、オッドアイズ・フアントム・ドラゴンが放った光線に、真正面から吞まれていった。

一方、外。

転生者狩りと交戦しているバルジ以外の3人を相手に、時間稼ぎに名乗り出たファイフティ。彼はなんやかんやで追い詰められていた。

それはもう、完全にだ。なんせ彼には戦う術がないのだ。どちらかというとな彼はサポート役。攻撃的なスキルといった類のものは持ち合わせてはいない。例えばバフが使えても、元の肉体が貧弱なのでは効果も薄い。言うなれば、攻撃魔法が使えない魔道士が最前線にほっぽり出されているようなもの。ゲームで言えば無理ゲーの類だ。

だが、彼はしぶとかった。彼の役目はあくまでも時間稼ぎ。勝つ必要は無いのだから。そして、レイラ、タロット、ガングニールの3人に追い詰められ、殺される寸前になっても尚、その態度は飄々としたものであった。

「いい加減くたばってくれないか、亡霊風情が」

「うーん、3対1でリンチしてる奴が言う台詞じゃないでしょそれ。弱く見えるぞ？」

「弱いのは貴方です。身の程を知りなさい。減らず口を叩くのをやめなさい」

サブマシンガンと剣を突きつけられながらも、軽口を叩くファイフティに、レイラは苛つく。この男とは致命的に合わない。そう確信していた。

ファイフティはこの期に及んでもなお、口を閉じなかつた。盛んにギフトメイカー達を挑発する。

「やだね。私は弁舌には自信があつてね、怒らせた人間は数知れずなのさ。ほーら、私と無駄話をたくさんして時間を潰そう。殺し合うより話s

「やれ、ガングニール！ 奴の頭を潰せ！」

「グラアツ！」

ぐしやつ。

次の瞬間。

あつさりど、ファイフティの頭が縦に潰れた。

ファイフティの背後に立っていた、ガングニールオリジオンの一撃だった。まるで蚊を殺すかの様に、ファイフティの頭部はガングニールオリジオンの両の掌で叩き潰されていた。水風船を割ったかのように、潰れたファイフティの頭から、血と潰れた脳組織が周囲に飛散する。軍服を返り血で汚したレイラは、間髪入れず、頭が潰れたファイフティの胸に、持っていたサーベルを突き刺した。完全なるオーバーキルだが、どうやら彼女も、短い間ながらもファイフティの言動に苛ついてたらしい。

どちらやり、と地面に血肉をぶちまけて倒れる、ファイフティの首無し死体。本能のままさらにぐちゃぐちゃにしてやろうと試みるガングニールを、タロットが制止する。

「ステイ、これ以上やっても無駄です。良くやりましたね貴方」

「呆気ない最後だったな、ったく」

用は済んだとばかりに、死体を放置して立ち去ろうとするレイラ達。アクロスのアドバイザーは始末した。後はどうとでもなる。

そこに。

「生存確認を怠る事勿れ。これ戦場の常識だよ?」

「!?？」

もう聞こえるはずのない声に、レイラはマシンガンを構えながらぼつと振り向く。

そこには、先程頭を潰されて死んだはずのファイフティが、生きた状態で存在していた。身体は血塗れで、首筋からは尚も赤い血が流れている。これには流石にギフトメイカー達も驚きを隠せなかったようで、レイラは呼吸を荒げているし、タロットも目を丸くしている。

ファイフティは、彼らが何故驚いているのが全く理解できない、といったようにとぼけたような顔をしており、足元に落ちていた、飛散した自分の脳組織を踏みつけ、呆れた様に言う。

「おいおい、驚く事じゃないだろう？ だって君達、散々私のことを死に損ない呼ばわりしてたじゃないか」

「いや、だって……それはティーダやバルジが」

「ああそうか、君達はこれを知らなかつたか。彼らが私をそう呼んでいたから、何も知らずに、考えずに私を死に損ないと呼んでいたのか。これはね、ちよつとした呪いだよ。不老不死のね」

不老不死。これが本当とするならば、ファイフティを始末することはまず不可能になった。なんせ死なないのだから。ならば異空間等に放逐して閉じ込めてやろうかと思つたが、生憎今すぐ実行できそうにない。

これは予想外だった、とタロットは重要事項を開示しなかった上司を心の中で責め立てながら、すぐさま撤退に走る。しかし、レイラは違った。

「なら絶え間なく身体を吹き飛ばしてやれば済むだろう。怯える必要は皆無だ」

なんとという力押し。再生するならば、それが追いつかない速度で殺せばいい。レイラは両手に持った2丁のサブマシンガンの引き金を、躊躇いなく引いた。

直後、耳を引き裂く様な銃撃音と硝煙が、瞬く間に周囲一帯を覆い尽くした。銃撃音に紛れ、びちやりという、人間の血が辺りに散らばる音も聞こえてくる。その躊躇いのなさでレイラのゴリ押しっぷりに、退散しようとしていたタロットは、思わず頭を抱えてしまう。

僅か十数秒で弾を撃ち尽くしたサブマシンガンを投げ捨て、レイラは硝煙の向こう側を真つ直ぐと見つめる。

銃撃音と硝煙が辺りから消え、現れたもの。それは。

「酷いなあ、服は再生しないんだ。これ一張羅なんだけど、弁償とかしてくれんの？」

先程と同じく、ピンピンしているファイフティだった。ただし、服は銃撃によってズダボロになっており、半裸の状態になっていた。ファイフティは、ボロボロになった上着を脱いでレイラに向かって投げ捨て、上半身は完全に裸になる。

「というか、スピードは関係ないんだよね。私はどうあっても死ねないから、君のプラン

は結実しないよ。言ったじゃ無いか、私は不死身だと」

「化け物め……」

「それ、君達が言う？」

化け物をけしかけている側に化け物呼ばわりされたファイフティは、不機嫌そうにわざとらしいため息をつくど、レイラに背を向け、瞬達のいるデュエルコートに向かって歩き出す。

そして、思い出したかの様に足を止め、一言。

「ああそうそう。この呪い、もう一つ効果があつてねえ……」

ファイフティがいい終わる直前、地面に伸びていたファイフティの影から、突如として無数のトゲの様なモノが飛び出し、タロット達を貫いた。

余りにも突然の出来事に反応が遅れ、3人はなす術なく串刺しにされてしまう。複数のクラッカーを同時に鳴らしたかの様に、一斉に鮮血が舞い上がる。血の雨を浴びながら、ファイフティは虫の息のレイラに種明かしをする。

「私が致命傷を負ったら、その時私が受けたダメージが、周囲に拡散しちゃうんだよね。一種のカウンター攻撃って奴さ」

「聞いてないぞ……」

「そりゃあ聞かされる訳無いじゃん。君達はティーダの捨て駒なんだからさ」

きつぱりと、そう断言するファイフティ。

「じゃあね」

ギフトメイカーの生死などどうでもいいのか、ファイフティはそのまま別れの挨拶を告げると、ボロボロの服に返り血のボディペイントという、明らかにヤバい格好で瞬達の元へと歩いて行ってしまった。遠くなつてゆくファイフティの背中を見届けるレイラの腕が、だらりと垂れ下がる。

瞬間、串刺しにされていたタロット、レイラ、ガングニールの身体がぐにやりと崩れ、血溜まりと共に地面に溶け込む様にして消えてしまった。

そして、何もなかったはずの空間から、死んだはずのレイラ、タロット、ガングニールの3人が姿を現す。タロットの能力で、直前で幻影とすり替わったのだ。

Hierophant

「法 皇……彼に錯誤をもたらしましょう」

「ほんと便利だなお前の能力は。しかし、法皇から幻覚能力はおかしいだろう」

「こじつけですよ。能力バトルというのは、自分のルールを如何にして世界に押し通すかの戦い。拡大解釈や捏造くらい、誰だってやってますよ」

「……ともかく、完敗だな」

能力バトル論を語り出したタロットを軽くいなし、レイラは空を見上げた。

タロットは瞬に対して、アクロスなんて自分達の敵と見なすレベルではないと言った

のだが、どうやらそれは向こう側——ファイフティも同じだったらしい。お前達なんてさしたる障害じゃ無い。こうして自分達が生き延びていること自体が、ファイフティに嘗められているということを示していた。

それが腹立たしかった。始末する価値もない、戦う価値はないと判断された、ぞんざいに扱われた怒りが、レイラの拳を震わせていた。

「覚えていろ……アクロス……ファイフティ！」

少女ね静かな怒りが、血の匂いが漂う昼下がりの公園に残された。

《WINNER YUYA》

デュエル終了を告げるブザーが鳴り響き、今度こそ、ソリッドビジョンが解除されてゆく。無機質なコートが姿を現し、マサルは、その中央で膝について頂垂れる様な体勢になっていた。

「もう、こんな事はやめないか」

遊矢は、マサルに声をかける。誰かを傷つけるためのデュエルは、続けても誰の為にもなりはしない。ひとりぼっちになるだけだ。ならばそれをやめた方がよっぽどいい。そう思つて、遊矢は声をかけた。

が。

その思いは最も容易く踏み躪られる。

「煩え卑怯者があー！」

「があつ!??!」

歩み寄つて来た遊矢を、マサルは敵意剥き出しの叫び声をあげながら殴り飛ばした。腹を扶られるような痛みにも襲われながら、遊矢は地面に背中から倒れる。

マサルはそのまま倒れた遊矢の胸を足で踏みつける。肺から空気が絞り出されるような衝撃が遊矢を襲う。マサルは、何度も足で遊矢の胸を踏みつけたり、反対の足で蹴飛ばしたりする。突然のことに理解が追いつかず困惑する遊矢に、マサルは罵倒しながら暴力を振るいつづける。

「調子こいてんじゃねーよクソが！次元戦争を経てすらこれっぽっちも成長しないクズにヨォ！お前如きが俺を見下すな！雑魚の癖に俺をそんな目で見るなあ！くたばれ！」

「何やってんだ……お前、何やってんだよ!??!」

この期に及んでまだ暴力に走るマサルを止める為、瞬は観客席を飛び出した。やめろ、こんなの決闘じゃない。ただの虐めじゃないか。この場にいる全員がそう思っていた。周囲のマサルを見る目が、侮蔑と恐怖に染まっていくが、本人は遊矢を甚振るのに夢中で気づかない。

勝負がついたにも関わらず実力行使にまで出て遊矢を甚振るマサルに対し、柚子と権現坂も見かねて止めに入る。

「ちよつとあんた、これは無いでしょ!!?」

「理由も訊かずに一方的に襲いかかり、負けたら実力行使とは情け無い。お前には決闘者としてのプライドがないのか?」

「煩い煩い!お前らに何が分かる!!? トマト野朗の信者どもが知った様な口を聞くな!」

「いい加減にしろ!」

「がつ……」

柚子と権現坂に意識が集中し、遊矢を蹴飛ばすマサルの足が止まる。その隙をついて、瞬が横から回り込んでマサルの頬を思い切り殴り飛ばした。鈍い音とともに、マサルは地面にぶつ倒れる。普通の喧嘩ならば、誰かしらがマサルにも駆け寄りたりするのだろうか、この場合、それはなかった。

瞬は遊矢を起こしながら、マサルから引き離そうと試みる。ただでさえデュエルで負傷しているというのに、これ以上やられたらたまったもんじやない。

「大丈夫か?!? しつかりしろ!」

「ああ………いてっ!」

一方、瞬にぶん殴られたマサルはというと、まったく反省しておらず、ぶたれた頬を抑えながら、マサルは上体を起こし、逆ギレをかましてきた。

「お前達こそなんだ! アクシヨンカードとかいう卑怯なモノに頼つてのデュエルなんて、恥ずかしいと思わないのか?!? それともなんだ、お前らもこの腐れトマトのよいに頭沸いてんのか?!?」

「何よその言い方! 遊矢があなたに一体何をしたつてのよ?!? 説明くらいしてくれ たつていいじゃ無い!」

「気に食わないんだよ! 此奴の掲げるエンタメデュエルがな! あんなのただウゼエだけの茶番だろうが! 決闘つてのはなあ、真剣勝負なんだよ! そこに笑顔とかいうゴミは要らねえんだつてまだ解らねえのか馬鹿どもが!」

「だからつて殴る蹴るは駄目だ。決闘者ならカードで語るべきだろう。こんな狼藉、この男、権現坂が断じて許さん!」

傷だらけの遊矢を庇う様に、権現坂が仁王立ちをする。マサルが顔を上げると、権現

坂や柚子だけではない。沢渡も、零児も、瞬も、唯も、アラタも —— 皆がマサルを睨んでいた。

予定調和の四面楚歌。誰から見ても、マサルに味方が現れることはない。

「煩い黙れトマトシンパが！ 一体全体、そんな屑の何処を好いてるんだ？ エンターテイナーなら他人からの批判を受け入れよう？！？」 こうやって反対意見を潰すからコイツみたいな奴がつけあがるんだよ！」

「批判じゃねーだろ、どうみても」

口を開いたのは、アラタだった。彼も怒っている。一誠の時といい、転生者に誰かがいたぶられる事に対し、同じ転生者として怒りを露わにしていた。

「例え遊矢がお前の言うような奴だとしても、お前の行いは許せるものじゃ無い。お前はただ、自分が気に食わないモノに当たり散らしているだけのガキだよ。そんな奴の言葉なんか、誰も聞いちゃくれない」

「煩えよカス！ 知った様な口を聞くな！」

「それは貴方の ——」

「もうやめろ」

柚子とマサルの言い争いを静止したのは、遊矢だった。

「遊矢……」

「俺のことを悪く言ったり、嫌ったりするのは構わない。けど、皆を巻き込むのはやめてくれ！俺が……俺のエンタメデュエルが憎いなら、俺だけにぶつけるよ！」

それは切実な願いだった。

遊矢は、父親の失踪を機とする世間からのバッシングや、次元戦争で心身共に幾度となく振り回されたことから、悪意に晒されるのは慣れていない。だから傷つくのが自分だけなら許せる。だが、自分のせいで皆が傷つくのは間違っているし、許せない。

ポロポロになりながらも、尚もマサルに抗う遊矢に、瞬も加勢する。

「俺は今日デュエルに出会ったばかりの素人だけだな、これだけは言える。遊矢をお前なんかと比べられてたまるか！お前のあからさまに人を傷つけるようなデュエルが、他のデュエルより優れているわけないだろ！」

素人ながらも、瞬はそう判断していた。そもそもデュエル云々を抜きにして常識的に考えても、ゲームで他人を痛めつける様な奴が認められる訳がないのだ。

だがマサルは、部外者である瞬に口出しされたこと自体にキレて、瞬にくっついてかかる。「素人なら黙ってろ！」

「……どうしてなんだ。嫌いな人がいるのは仕方ない。けど、お前達はなんでそんなに容赦なく人を甚振れるんだよ……お前ら転生者には、人の心がないのかよ……!?」
「話は平行線のまま、ただひたすらにお互いの怒りだけが蓄積されてゆく。瞬の握りし

めた拳が、プルプルと震えているのが一目瞭然だ。

それに待ったをかける様に、今まで黙り込んでいた零児が割ってはいる。

「札道マサル、君の過去のデュエル映像は見させてもらった。デュエル中の対戦相手への誹謗中傷、ソリッドビジョンを利用したアクションデュエル中の対戦相手への加害行為……君のそれは明らかに度を越している。公式大会出禁も納得だ。それに今回も、無関係の人間をモンスターで襲った上、公共物であるこのソリッドビジョンシステムを改造し、危険なレベルまでソリッドビジョンの出力を上げた事……それは到底見逃せない。然るべき処罰を下さなければならぬ」

零児の言うとおり、マサルは十分にやり過ぎている。他の皆とは異なり、ただ淡々とマサルの罪状を読み上げる零児に、マサルは恐れをなしたのか、狂った様に笑いながら後ずさる。

そして、壁に背をつけたマサルは、腕に付けていたデュエルディスクを投げ捨てると、「笑わせんなよ……間違ってるのはお前らの方だ！エンタメデュエルで負わされた俺の心の傷は、貴様らの絶望でしか満たされないんだよ……！」

《KAKUSEI ODDYES》

そう言うのと、マサルは再びオリジオンの姿に変身し、怒りの限り叫んだ。完全に自分勝手な怒りなのだが、それ程までに嫌悪していたのだ。遊戯王ARC-Vを。

遊矢をはじめとする決闘者達は、初めて見る仮面ライダーに驚きを隠せない。

「お前……それは一体!?？」

「話は後！皆は逃げてくれ！」

怪我人は唯達に任せて、瞬は暴れるオリジオンの元へと向かおうとする。

しかし、遊矢は重症であるにもかかわらず、まだ動こうとする。

「あれは……俺が……」

「無理をするな遊矢！その怪我で何ができる？勇氣と無謀は違うのだぞ」

「でもアイツは俺を憎んでいた。なら、俺が出なきや駄目だ。俺が対峙すべきなんだ」

権現坂に止められるが、遊矢は諦めない。自分を憎悪する人のせいで皆が傷ついたと

いう事実を負い目を感じているのだ。

だが、アクロスはそれを許せなかった。

「あんな卑怯者のこと気にかける必要はねーよ」

「え……」

「お前が無駄に傷つく必要は無いつて言っただよ。遊矢、これまで皆の為に頑張ってたんだろ？なら休んでろ。それにアイツを許せないのは皆同じだよ。だからその憤りは俺が持つてく。それが俺の役目だから」

湖森を傷つけられたのもあるが、アクロスは、どうしてもマサルに共感ができなかつ

た。マサルが遊矢にぶつける、常軌を逸した嫌悪。あんなものを他人に臆面もなくぶつけられる人間がいる事に、恐怖と悲しみを抱いていた。

アクロスの力で倒しても解決出来るかはわからない。だが、ともかく現在進行形で暴れるオッドアイズオリジオンを止めなければ、街はパニック一直線なのは間違いない。

嫌悪に吞まれるな。正義感を糧にして、戦え。自分にそう言い聞かせるように、仮面の下でなんとか笑顔を作り、遊矢に語りかける。

「楽しいデュエルを見せてもらったんだ。今度は俺のターンだ。怪人と殴り合うのは仮面ライダーの役回り……らしいからな」

《リンクエイジゲーター!》

アクロスは、紫色のライドアーツをドライバーに装填する。すると、手のひらサイズの鍵が、みるみるうちに一台のバイクへと変形してゆく。前にも使ったのだが、一体どうやったたらバイクが小さな鍵の形に収まっているのかが不思議に思う。

アクロスはバイクに跨り、エンジンをかける。前はエンストするという、仮面ライダーにあるまじき失態をやらかしたが、今回はちゃんとかかった。しっかりと整備していたおかげだ。

「いっちゃって、瞬!」

「おう!」

唯の言葉に力強く答えながら、アクロスは勢いよくバイクを発進させた。

同時刻

サイガに変身している転生者狩りと、イガリマオリジオンに変身したバルジの戦いは、苛烈を極めていた。

「はあああああああああああああつ!!?」

空を飛ぶサイガは、背中のフライングアタッカーから、地上に居るイガリマオリジオンに向かってフォトンブラッドの光弾を連射する。イガリマは、それを巧みな鎌捌きで弾きながら、近くにあった、戦いの余波で折れ曲がった街灯を足場にし、サイガのいる位置めがけて跳躍する。

「オラオラどうしたあ!ヌル過ぎるんじやあねーの!?!?」

「つー！」

サイガは更に高度を上げてイマリガオリジオンを躲すが、イマリガは、背中から無数の鎖を伸ばし、サイガの足にそれを巻きつける。

「墮ちろよガキンチョ。テメエは地べたを這いつくばってるのがお似合いだよ」

「墮ちるのはテメエだけだ！地獄に……墮ちろおおおおおつー！」

しかし、サイガはフライイングアタッカーの操縦桿を片方だけ引き抜き、腰のサイガフォンについていたミツシヨンメモリーを操縦桿に差し込んでトンファーエッジに変えると、それで巻き付いた鎖をぶった斬り、イガリマの拘束から逃れる。

イガリマは一人で、地上に落下する。しかし、これで終わる訳がなかった。綺麗に受け身をとって着地するなり、イガリマは鎌の刃を取り外し、サイガ目掛けてブーメランの様に投げつけてきた。

「その程度、撃ち落としてやる！」

サイガは飛んできたそれを、難なく撃ち落とした。

——が、それで済むほど甘くは無い。撃ち落とされて地上に落下していく筈だった刃が、急に角度を変え、再びサイガ目掛けて飛んできた。

「ホーミング機能付きなんだぜ、それ。それに一枚だけだと思うなよ？」

刃を失い、ただの棒切れって化した鎌を地面に突き立てながら、イガリマは空を見上

げて嗤う。すると、鎌の柄の先端から、によきつと新たな刃が生えてきて、バルジ目掛けてひとりでに飛んでいった。

決して撃ち落とせない必中の一撃が、たったひとりを目掛けてとめどなく押し寄せた。サイガが撃ち落とされるのは、時間の問題だった。

「くっ……！ フライイングアタッカーが持たない……！」

繰り返して襲ってくる刃によって、サイガの主力武装であるフライイングアタッカーもかなりの損傷を受けていた。何処かがショートしたのか、火花があちこちから飛び出る音がする。こうなったら、地上戦に切り替えだ。

壊れかけたフライイングアタッカーをパージし、サイガは地上に向けて一直線に落下してゆく。パージされたフライイングアタッカーは、その直後、飛んできた鎌の刃に一刀両断され、爆発する。

「変身……！」

サイガドライバーを取り外し、別のベルトを装着する。すると、何処からかコウモリを模したロボットが飛来し、ベルトのバックルにひとりでに装填される。

「へえ……えらく、バリエーション豊かだねえ。拍手喝采がお望みなかな？」

転生者狩りを中心に、猛烈な吹雪が吹き荒れる様を地上から見ていたイガリマは、余裕たっぷりな笑みを浮かべている。

転生者狩りが変身したのは、仮面ライダーレイ。王の鎧を模して作られた、冷血なる人造兵器。全てを凍てつかせる悪の仮面ライダー。レイは、変身時に放出した冷気で、飛んできた刃を根こそぎ凍りつかせて無力化しながら、レイは華麗に着地する。

「俺はまだやれるぞ。お前を殺すまで俺はやるぞ……！」

「じゃ、やろうや ——」

この程度で終わってはつまらない。まだまだやりたりない。イガリマは、懲りずに立ち向かってくる転生者狩りを見ながらほくそ笑む。

「ああ、これで終わらせてやる！」

レイは、足に冷気を集め、イガリマに向かって飛び蹴りを放つ。イガリマオリジオンも、負けじと鎌を振りかざし、蹴りと鎌の刃が衝突する。

瞬間、周囲に冷気と爆風が一気に拡散した。木々は凍りつき、街灯は折れかかった状態で固定され、バルジが立っていた箇所は土が抉れてクレーターができていた。両者の姿は確認できない。どうやら、両者とも衝撃で吹き飛んだらしい。

「くそっ……！」

凍りついた空き缶を踏み砕きながら、冷気の中から、変身が解けた転生者狩り ——

無東灰司が姿を現す。激しい戦いだったにもかかわらず、ライダーシステムが丈夫なのか、はたまた灰司が頑丈なのかはわからないが、それ程傷ついていないようにみえる。

白い息を吐きながら、灰司はあたりを見渡してバルジの姿を探す。辺りには誰もいない。

（奴だけは俺が殺さなきゃならねえんだ……出てこいよクソ野郎！）

灰司の生まれた世界を遊び感覚で滅ぼした、憎き存在。それを生かしておくわけにはいかない。血眼になって辺りを探すが、見つからない。その時、バルジが見つからずに焦る灰司を嘲笑うかの様に、何処からか声が聞こえてきた。

「いやー、お前面倒くさい奴だよなー。なら俺ももうちょい本気出さなきゃならないか。でもなあ、結構久々に使ったから鈍っててヨオ、転生特典の調整しなきゃならねえんだわ。だから勝負は預けるぜ。また、遊ぼうや」

間違いない。バルジの声だ。終始他人を小馬鹿にした様な物言いは、間違はなく奴だ。しかし、声のありかが見つからない。何処から声かしてるのかもわからない。

氷漬けになった公園の一角を必死に走り回る灰司。しかし、すでにその時には、バルジの声はしなくなっていた。逃げられたのだ。

「ふざけるな……っちは遊びでやってんじやねえんだよ……！」

灰司は怒りのままに、近くに生えてた木の幹に拳を叩きつける。遊びで世界を滅ぼす様な輩を生かしてはならない。

こうして、因縁の戦いの決着はまたの機会に持ち越しとなった。

轟音。轟音。爆発を経て咆哮。

おおよそ現代日本に似つかわしく無い音が、昼下がりの舞網市街に繰り返し響き渡る。

「くそっ……あいつ手当たり次第に街壊す気かよ!?」

混乱する街中にバイクを走らせながら、アクロスは悪態をつく。

その前方には、巨大化したオッドアイズオリジオン。散々馬鹿にし、否定していた遊矢に負けたという事実が余程堪えたのか、もはや理性はわすかばかりしか残っていない。マサルの様なタイプの転生者にとって、原作主人公に敗北することは最大の恥辱なのだ。少なくとも、オリジオンとしての力を暴走させるくらいには。

目の前に現れた車を蹴り飛ばし、ビルの壁面に文字通りの爪痕を残し、オッドアイズオリジオンは走る。そもそも彼は、遊戯王ARC-Vという作品自体が嫌いだった。元々この世界を蹂躪するために転生してきたのだ。だから、この破壊行為も彼からすれば、目的の一つなのだ。側から見れば、正気の沙汰ではないだろうが。

「やめろ！これ以上無茶苦茶なことは！」

「仮面ライダー……邪魔すんなよ……！」

「幾らだつて邪魔してやるよ！お前が誰かを傷つけるのをやめない限りな！」

オッドアイズオリジオンは、自分に呼びかけてきたアクロスを殺すべく、尻尾を叩きつけてきた。しかし、アクロスはバイクごと跳躍して回避し、尻尾に飛び移り、そのままバイクでオッドアイズオリジオンの尻尾を伝つて頭部まで接近していく。

「乗りやがつて……邪魔なんだよ！」

苛立ちながら、オッドアイズオリジオンはアクロスを振り払う。バイクに乗っている状態では、踏んばることは到底叶わず、アクロスは近くの看板に叩きつけられ、地上に落とされる。

ドスン、ドスン、と地面を大きく揺らす足音が、倒れたアクロスに接近してくる。顔を上げると、オッドアイズオリジオンがアクロスを凝視していた。彼は、邪魔をしてきたアクロスが気に入らないらしく、怒りの籠った唸り声をあげながら、前足でアクロスを掴み上げる。

「ウザいんだよ、お前。ぼつと出の癖に何邪魔してくれてんのさ。俺が間違つてるってのか？ 榊遊矢が正しいってのか？ ああ？？」

「少なくとも、お前は間違つてるよ」

オリジオンの言葉に、アクロスは間髪入れずに答えた。

「だから止める。お前が何度繰り返そうが止める」

「黙れよ！何でわからねーんだ？ アイツはこれからもエンタメデュエルで洗脳を続ける！デュエルを汚し続ける！決闘者として許せるわけねーだろ！」

「だったら！暴力振るう必要も、他の人を巻き込む必要もないだろ！」

誰かを嫌う事を否定はしない。しかし、その感情は免罪符にはなり得ない。無条件で嫌悪感を振りかざせる程、この世は単純にできてはいないのだから。湧き上がる嫌悪を抑えてこそ、人間社会は成り立つのだから。嫌いな奴には何をしてもいいという理屈が通るわけがない。マサルはそれにさえ気づかない。だからアクロスとは話し合えない。

アクロスを掴んでいるオッドアイズオリジオンの前脚に、力がこもってゆく。怒りでアクロスを握り潰す勢いだ。しかし、アクロスは諦めない。これだけは言わなければ気が済まなかった。

「俺はお前の言ってることは理解できない。決闘者じゃないし、遊矢とは初対面だし。だが、お前の八つ当たりで傷ついたやつがいる。それが俺は許せないんだ！」

「御託はどーでもいい！死ぬよアクロス！邪魔者は消え失せろ！」

自分の意見に反対するアクロスにキレて余計に力を込めるオリジオン。ミシミシと、アクロスの身体中が軋み始める。このままだと、胴体が粉碎されてしまいそうだ。

(遊矢が皆の為に頑張ってくれたんだ。なら今度は俺がやらなきゃ筋が通らねえー！)

リンクドライブなら力技でこの状況を打破できそうだが、がっしりと掴まれた状態ではライドアーツも使えない。しかしここでオリジオンを倒さなければ、皆は助からない。

「俺は諦めねえ……お前を止める……！」

そんな言葉も、今となつては虚勢と見做されるが関の山。万事休すか。

その時だった。

デュエルコートの方角から、一筋の光が飛び立ったのは。

「な、何？？」

壁に寄りかかつて座り込み、救急車を待つ遊矢。が、突如として彼の身体が淡い光を放ち始めた。当然ながら、唯や柚子も驚いて遊矢に駆け寄る。

「何なの？？」 決闘者って光るの？？」

「私達をなんだと思ってるのよ……！」

「何これ!? 何がおきつ……痛っ!」

突然光りだした自分の身体に驚いてたじろぐ遊矢だが、傷に触った様で顔をしかめてしまう。

皆が皆、光りだした遊矢を困惑の眼差しで見つめる。そりやあ誰だつてそうするだろう。その中で、アラタはあることを思い出した。

「いや、この光はアレだ……めだかの時の」

アラタに言われて唯も思い出した。これは新たなライドアーツが誕生する瞬間。ピルドの時と合わせて3回目の目撃となる唯は、一体今度は何が出てくるのか、と無意識ながらワクワクし始めていた。

遊矢の全身を覆う形で存在していた光は、遊矢の胸元に集まってゆくと、そこからどこかに向かつて一直線に飛んでいつてしまった。おそらく、アクロスの元に向かつていったのだろう。一同はただ、青空を割くようにして飛んでいった一筋の光を呆然と見上げていた。

「おさまった……何だったのだ今のは」

「あんまり気にしなくていいよ。大丈夫、瞬はなんとかなる」

答えにならない、根拠のない自信。

「なん、だあ……」

あまりの眩しきでオッドアイズオリジオンの目が眩み、アクロスを握り潰さんとしていた手が緩み、アクロスは地面に落下する。

「いったあ……」

地面に落ちたアクロスは、地面にうちつけた尻をさすりながら立ち上がる。ご都合主義もここまであからさまだと、ご都合主義を起こした本人すらも失笑してしまいそうになる。

その時、アクロスは自分の左手が何かを握りしめているのに気づいた。手を開くと、そこには、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンらしきモンスターの紋様が存在する、一つのライドアーツ。一体いつの間に握らされていたのだろうか。

「これでなんとかしろってことか？」

アクロスは、なんだか釈然としない気分のまま、ライドアーツをバックル上部に装填し、側面部に向かって倒す。

オッドアイズオリジオンは、トドメをさせなかつた事でさらに機嫌を悪くする。息が一層荒くなり、ミシミシと足元のアスファルトにヒビが入るほどに地面を強く踏みしめ

る。

「くそ……小賢しい真似をしゃがって……」

「待てよ。お楽しみはこれから、だろ?」

《LEGEND LINK! 播らせ播られるSSSSOUL! ladies & gentlemen! LINK PENDLUM!》

そう言いながら、アクロスはライドアーツを起動した。

すると、アクロスの頭上に、ペンデュラム召喚の際に出た様な光帯が出現し、その中から一筋の光がアクロス目掛けて一直線に落ちて来た。

「なんだ!?」

再び、オリジオンの視界が閃光で染め上げられる。だが、この距離ならば見えずともやれる。そう判断し、アクロスがいるであろう場所を、前足で薙ぎ払う。

しかし手応えがない。光がおさまり、オッドアイズオリジオンが目を開けると、そこにアクロスはいなかった。が、後ろに気配を感じる。

「ちよこまかと逃げやがって!」

サイズ差の都合上仕方ないのだが、マサルは怒りながらばつと後ろを振り返る。だが、そこに居たのは、新たな姿となったアクロスだった。

右肩は黒い法衣を、左肩は白い法衣を纏った人物を模しており、それは遊矢の持つP

モンスター、時読みの魔術師と時読みの魔術師を想起させるデザインだ。胴体には青く巨大な宝玉が浮かび上がり、複眼は赤と緑のオッドアイ。奇しくもそれは、オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンと同じだった。

仮面ライダーアクロス・リンクペンデュラムの爆誕である。

「んだよソレ……お前まであのクソ野郎のエンタメに洗脳されたつてのかわよ！ 堕ちたな仮面ライダー！」

アクロスの新たな姿を見て、オッドアイズオリジオンはあからさまに嘲笑う。遊矢の力なんか得たところで意味なんてない、そんな敵ではないと、一目見ただけでそう判断していた。

自分の気に入らない奴の味方をする奴は「洗脳された可哀想な奴」と見下す。その傲慢さが仇になっていている事に、オッドアイズオリジオンは気づかない。——どの道気がついた所で、彼がそれを反省する機会はおそらく訪れないが。

「いくら外見が変わってもヨオ、図体の差は埋まらねえんだぜえ!!？」

オリジオンは意気揚々とアクロスに向かって突っ込んできた。アクロスはそれを走って避ける。ぶつかったコンクリート塀が木っ端微塵に砕け散る。

「遊矢にアクロス足しても雑魚なのは変わらねえ！ 惨めったらしくブチ殺してやんよお！」

が、踏み潰される直前、再びアクロスは煙を吹き出した。そして、オリジオンの足が地面と接するが、何かを踏み潰したような手応えが感じられない。

まさかまた逃げたのかと思いつながら足元を見下ろすと、そこにはなんと、アクロスが2人いた。どうやらこれが、リンクペンデュラムの能力らしい。

「増えた!?」

「「お返しだこんちくしょう！」」

困惑するオリジオンだが、2人のアクロスはお構いなしにツインスバスターでオリジオンの両足を斬りつけ、転倒させる。ズシンと大きな音を立てて、尻餅をつくような形になるオリジオン。そこからアクロスはさらに分身し、続け様に立ちあがろうとするオリジオンを斬りつけ、最後は空高く飛び上がり、オリジオンを飛び越しながら頭部を斬りつけ、その背後に回り込む。

着地際に1人に戻ったアクロスは、銃形態に変形させたツインスバスターを連射しながら、必殺技を発動させる。

《PENDLUM CROSS BLAKE!》

すると、オッドアイズオリジオンを挟む様に、彼の左右に光の柱が立ち並ぶ。そして、その光の柱から、虹色のラインが伸び、オリジオンを縛り付けてゆく。

満足に動けないオリジオンは、それでもなんとかギチギチと頭を後ろに向けようとす

る。そんな彼の視界の端に映ったのは、足に虹色のエネルギーを溜めたアクロスが、空高く跳び上がる姿だった。

「負けるのか……俺が？ デュエルでも、コッチでも……？」

現実を受け入れられないオリジオンは、迫るアクロスのキックに対して、ただ唸ることしかできなかつた。

アクロスは、虹色のエネルギーを纏った右足を突き出し、オリジオン目掛けて急降下する。その背後には、遊矢が身につけていたペンデュラムの幻影らしきものが重なっていった。

「虹彩のスパイラル・ストライク！」

アクロスは技名を叫びながら、オッドアイズオリジオンの背中を蹴り抜いた。そして、硬い鱗で覆われていた身体を貫き、アクロスはオリジオンの前方へと出ていく。

「くそがああああああああああああああああああつ!!？」

オリジオンは叫ぶ。もうどうにもならなかつた。

そして彼は、自分を貫いたアクロスの後ろ姿を、憤怒の表情で睨みながら、爆散した。

—— 何故、誰も受け入れない？

マサルは、満身創痍になりながら地面に横たわっていた。

手足は動かない。気力も体力もない。今の彼は、ただ恨み言を呟くことしかできない。

（皆遊矢の事嫌ってるじゃん……なら、同じ世界にいる俺がやらないで誰がやるんだ？俺は間違ってるじゃないだろ……あんな奴許しちゃダメなんだって皆言ってたじゃんか……なんで誰も味方してくれないんだよ……）

彼は全く改心していなかった。自分の意見を受け入れない周囲を恨んでいた。

そんな事は知る由もない瞬は、変身を解きながらマサルに近づく。

「やめとけ、話すだけ無駄だ」

ふいに、瞬の肩に、手がかけられた。振り返ると、仮面ライダーレイ —— 転生者狩りがいた。

「トドメは俺だ。お前みたいな奴には人殺しは無理だ」

「殺すって……まさかコイツを？もう特典とやらもなくなってるんだし、警察にでも引

き渡せば済むんじや……」

瞬の言葉を無視し、転生者狩りは瞬を押し除け、倒れているマサルの間近に立つ。そして、上から顔を覗き込みながら、マサルに語りかける。

「最後に言い残す事は？」

「何故だ！何故俺を認めない!?？ 俺は正しいことをしてるんだ！皆榊遊矢を糾弾してただろ！嫌いなんだろ!?？ アイツが間違ってるからなんだろ!?？ 俺は代弁者なんだよ！」

マサルは、この期に及んで尚態度を改めなかった。嫌いな奴、間違っている奴には何をしてもいい。これ程までに一人の間人を激しく憎み続けるその執念に、転生者狩りはかえって感心してしまう。

だがいくら繰り返し叫ぼうが、彼に同調する者は現れない。転生者狩りは、心底見下げた奴だとも言うかのようにマサルを鼻で笑うと、マサルの胸ぐらを掴み上げ、ドスの効いた声で説教する。

「だからどうした。お前が散々甚振つてたのはキャラじゃない、この世界に生きる一人の間人だ。いい加減前世気分は捨てる。いつまで夢見てやがんだ」

「あんな人でなしを守って何になる!?？ まさかお前も榊遊矢に買収されて——」

遊矢憎しのあまり、あらぬ妄言を吐き連ね始めたマサル。あまりの醜さに、瞬も転生

者狩りも耐えきれず、彼の言葉に耳を貸す事をやめていた。悪意を隠しもしない目の存在を、どうしても受け入れられなかった。

転生者狩りは苛立ち気味にマサルを投げ捨てると、瞬の方を向く。

「ほらな。俺は多くの転生者を狩ってきたから分かる。情けをかけるだけ無駄な奴つてのが世の中にはいるんだよ。コイツみたいにな」

マサルを指差しながら、溜息混じりに転生者狩りは言った。仮面で表情は読み取れないが、その声は、まるで何かに失望したような、諦観が直に感じられるものだった。マサルの罵声をBGMにしながら、転生者狩りは続ける。

「これがお前が戦ってきた相手、転生者だ。厚顔無恥で傍若無人、自分以外は気にも留められない完全悪。世界の癌。まともな奴なんてほんのひと握りだ。口だけは達者でも、中身は屑。遍く全てを腐らせる。俺は仕事柄、そんな奴をごまんと見てきた」

「でも……命を奪うまでは……」

「殺さなきゃダメなんだ。改心するかどうかなんて本人次第、そんなギャンブルじみた事出来るわけないだろ。綺麗事じゃダメなんだよ。世界を確実に守るには、殺した方がいい」

悪人が必ずしも改心するとは限らない。再び牙を剥くかもしれない。だから殺す。償いという行為を信用できないから、その機会を初めから与えない。そうすれば確実に

安寧が訪れる。転生者狩りはそう言っている。瞬は、それに対して何も言えなかった。一理はあるが、納得できない。だがそれを言語化する事ができない。そのもどかしさに、瞬はただ、拳を強く握りしめる事しかできなかった。

ぐるんぐるんと、思考を働かせる瞬だったが、ふとある事を思い出し、転生者狩りに問いかける。

「なあ」

「お前言つてたよな？ギフトメイカーに世界を滅ぼされたつて。どういう事なんだよ？」

それを聞いて、転生者狩りは「それ聞く？」とでも言うかのように、頭を抱えてため息をつく。

（しまったな……怒りのあまり余計な事を口走ってしまったか。だが話してしまったからには、いつそのことバラした方が邪魔されなくなる）

バルジと相対した際に怒りのあまり、あの場にいた瞬の事を忘れて互いに因縁をぶつけ合っていた事を思い出す。できれば話したくないが、瞬みたいな人種には、中途半端に明かして混乱させるよりは、懇切丁寧に話した方が余計な真似をしなくなるだろうと考えたのだろう。転生者狩りは、そつぽを向きながら重たい口を開く。

「どうもこうも、文字通りだ。バルジは俺の世界を滅ぼした。遊びでな」

「遊びで……だど？」

「ああ。俺にはもう何も無い。あるのは奴への復讐心だけだ。全て、奴が奪っていったんだ。だから俺は、奴を殺すために転生者狩りを始めた」

それが彼の戦う理由。瞬の予想以上に壮絶な因縁があつたのだ。何もかもを壊されて、元凶は懲りずに好き勝手やっている。これで怒らない方がおかしいだろう。転生者狩りの拳と声が、怒りで震えているのがわかる。彼が抱く、抑え切れないほどの怒りと憎しみは、瞬には計り知れないものだった。

「お前がギフトメイカーとやり合うのは勝手だ。だが、バルジだけは俺が殺す。分かつたら邪魔はするな」

釘を刺すように、転生者狩りは瞬に忠告した。

瞬は何も言えなかった。否定する理由、邪魔する理由が無かつたからだ。他人同士の因縁に、外野がとやかく言う資格はないのだから。

「ここで、ズダボロのまま放置されていたマサルが声を上げる。

「さつきから俺を無視してんじやねえよ……クソツ……身体がうごかねえ……動けりやテメエらをぶち殺せるの……」

「ああ、忘れていた」

「がびいつ!?」

散々無視されていたマサルがしつこく喚いていたので、転生者狩りはマサルの顔面を思い切り踏んづけて黙らせる。もがもがと足元でもがくマサルを意にも介さず、転生者狩りは瞬にここから立ち去るよう促す。

「立ち去れよ。俺は今からコイツを殺す」

「……どうしてもか？」

「ああ。あれだけ醜いものを見て尚、お前は生かそうというのか？」

「俺には殺す事なんて出来ない。それだけだ」

「仮面ライダーとして戦い続ける以上、それから逃げ続けることはできない。いずれお前にも、誰かを殺さなきゃならなくなる時が来る」

瞬は、転生者狩りの言葉に、何一つまともに反論ができなかった。

「無理強いはいしがないがな。嫌ならここを去れ」

「お前、最近やけに当たりが緩くなつてないか？最初は俺を容赦なくぶん殴ってきた癖に、どういう風の吹き回しだよ？」

「……いいから行け。それともなんだ、このクズが内臓ぶち撒けられて死ぬザマを間近で見たいってか？」

「……」

幾ら悪人といえども、そんな惨い死に様を見届けらる程、瞬は強くはない。普通の人

間にとっては、間近で人が死ぬのは結構ショッキングな話なのだ。転生者狩りは、瞬の精神衛生を考慮して、こんな事を言っているのだ。

だが、目の前で人を殺しますのでどっか行ってくれ、と言われてのこのこと立ち去るような真似ができる奴はいないだろう。瞬はどうすべきが決めあぐねていた。そこに、聞き覚えのある声が割り込んできた。

「彼の言う通りにするといいいさ」

振り向くと、服がボロボロになり半裸状態になったファイフティがいた。ギフトメイカー達を引きつける囹役を買って出てくれていた筈だが、身体中に血がついているあたり、相当激しい戦いだったのだろう。

「ファイフティ……その格好……」

「いやあ派手にやられちゃった。色々あつて君に追いつくの到手間取つてね。ああ、怪我なら大丈夫。もう治ったから」

言われてみれば、ファイフティは血だけらだが、その身体には傷は一つもなかった。という事は、これは返り血かなんかなのだろうか？というか、公園からここまでその格好で来た様だが、よく騒がれなかったものである。

「逢瀬くんは私が連れてくから安心して。それにしても、君にしては随分と優しくなつたじゃないか。なんだい、彼を認めたのかい？」

「黙れ、とつとと失せろ」

「ならお言葉に甘えて。ほーら、皆が待つてるだろ。急いだ急いだ」

「ちよつと……」

瞬は、ファイフティにぐいぐいと押されるがまま、この場から引き離されてゆく。思ったよりもファイフティの力が強く、戦いで疲弊した瞬では押されてしまう。

瞬とファイフティがいなくなったのを確認すると、仮面ライダーとしての変身をようやく解いた転生者狩り——無束灰司は、マサルを踏みつけたまま、拳銃を取りだして弾丸を込める。

「さて、と」

銃口を突きつけられる。逃げ出したいが、満身創痕のマサルは既に、寝返りもうてないほどに疲弊していた。ガタガタと歯が震え、目には死の恐怖から涙が浮かんでくる。

「いやだ……こんなところで終わりたくない……せつかく転生したのに……」

「転生してまで誰かを叩く、か。随分とまあ、無駄な人生だったな。あばよ、クソ野郎」
マサルを蔑みながら、灰司は引き金を引いた。

パン、と乾いた音が響いた。

「が……」

マサルの撃たれた眉間から、血がドクドクと垂れ流される。最後まで抗おうと伸ばし

ていた腕は、力なく地面に倒れる。灰司は、マサルが死んだのを確認してから、彼から足を退ける。

マサルの命は尽きた。

最後まで他者を憎み、蔑むことしかできず、嫌悪で全てを棒に振った男は、誰にも憐れまれることなく、無様な最期を迎えた。

その時、灰司のズボンのポケットから、バイブ音が聞こえてきた。スマホに着信が来ている。灰司はマサルの死体から離れながら、通話に応答する。

「無東灰司です。転生者を一人始末しました。事後処理は頼みます」

転生者狩りとしての彼が所属する組織からだった。事後処理を任せ、灰司は足早にここから去ろうとする。事前に人払いをしておいたとはいえ、瞬がいるということとは、他の連中も来ているという事。灰司が転生者狩りである事を無闇にバラすわけにはいかない。

「次はない……バルジ……」

その目には、激しい憎しみがあつた。

瞬は、ファイティに強引に腕を引っ張られながら移動していた。

「なんで無理やり離れたんだよ」

「君も彼も、互いの考えに絶対納得しないだろ。あれじゃキリがないから、無理やり離れたんだよ」

「なんか子供扱いされてる気分なんだが」

瞬は、無理やり転生者狩りのところから引き離された事が不服の様だった。マサルは間違いない悪人だし、やったことは許せないが、殺す意味はあったのか。転生者狩りは、悪人が改心するかなんて他人からすれば実質運次第であり、そんなものに委ねるよりは殺した方が確実に安全になる、ということだ。つまりは、性善説と性悪説の違い。それが、あのやりとりを生んでいた。

ファイティは、その違いからくる意見の対立なんて不毛でしかないと踏んだのだ。互いに納得することが決していない対立なぞ、早めに断ち切るに限る。

だが、ファイティが瞬を無理やり引き離れたのは、それだけが理由ではなかった。

「それにだ。君に人殺しを見せる——死と向き合うのはまだ早い。幾ら屑でも、直接人の死を見ちゃうのは、結構キツイんだよ」

真面目なトーンで、ファイティはそう言った。

確かに、瞬はまだ死というものと向き合った事はない。だが、それを何故今更になって言い出すのだろうか。こういうのは普通、もっと前に言うべき事なのではないだろうか。

「今君はアクロスとして戦いながらも、かろうじて誰も殺していない。だけど、これからの戦いはもっと厳しくなるかもしれない。敵を殺す——命を奪わなきゃならなくなるか時がくるかもしれない。アクロスの力を使えば、オリジオン化した転生者を生かしたまま無力化することができるけど、いつもそれが出来るとは限らないんだ」

ファイフティの言う事は間違っではない。戦いである以上、死からは逃れられない。戦場に死は付き物だからだ。

転生者の持つ転生特典は、転生者の魂と強く繋がっている。だから、特典を消そうとすれば持ち主たる転生者自身の命に関わる。オリジオン化してしまえば、そのリスクはさらにあがる。だが、アクロスの力には、転生特典を転生者から安全に分離できる能力がある。だから、オリジオン化した転生者を生かしたまま、特典だけを破壊する事ができる。これを使えば、基本的には誰も死なない。

だが、それが出来ない場合があるかもしれない。今まではたまたま手を汚す事なくうまくいつてるが、いずれ手にかけなきやらなくなるかもしれない。はたまた、身近な誰かが死んでしまうかもしれない。その時に耐えられるのか。それをファイフティは

危惧しているのだ。

「命を奪う、というのはかなりキツイ事なんだ。特に君みたいな現代っ子にはね。戦い続けるには、それに耐えられる精神を育てるべきなんだ。特に君みたいな人間は、たった一つの死でも、立ち直れなくなるかもしれない」

「……」

「誰も死なない様に、殺す必要がなくなる様にするというのが一番だけでも、万が一死に直面した時に備えて、心を鍛えておく。要は重圧からの逃げ方だ。それを知っているかどうかで、メンタルの耐久性が大きく変わるんだよ」

綺麗事かもしれないが、それが一番。だが、万が一を考えて、回復の仕方を知っておく。ようは覚悟を決めろ、という事なのだ。ここから先は、死と向き合う機会が増えるかもしれない。それに耐えられるのか。それが問われているのだ。

「それにだ、あれは君の精神衛生を鑑みた上での、彼なりの気遣いだ。ならありがたく受け取るべきだよ。本当なら、殺しの現場なんか見ないに越した事が無いんだからね」

瞬は、転生者狩りの人となりをよく知らない。出会い頭にぶん殴られた事もあるし、正直言って良い印象は持っていない。だが、彼にも他人を気遣う事はできるらしい。そのことを、瞬は意外に思っていた。

そうこうしているうちに、皆がいる公園に戻ってきた。壁の崩れたデュエルコート

前に、救急車がやってきてきているのが見える。

「瞬！戻ってきた！」

唯が瞬の顔を見るなり、こちらに駆け寄ってくる。

「ただいま、皆」

「妹さんなら安心してください。一週間もすれば完治するそうです」

「よかった……」

ハルからその言葉を聞いて、瞬はほっと胸を撫で下ろす。あたりを見渡すと、丁度遊矢が救急隊員の肩を借りながら救急車に乗せられてゆくところだった。瞬は遊矢の元に駆け寄って行き、声をかける。

「遊矢、大丈夫か？」

「うん、まあね。アクシジョンデュエルで普段から鍛えてるから大丈夫だよ」

遊矢はそう言ってるものの、一番酷い怪我をしていることには変わりない。カタはついたが、傷跡はそれ以上に大きかった。

遊矢はどうやら、マサルと最後まで話が通じなかった事に、心を痛めている様だった。「俺、まだエンターテイナーには程遠いみたいだ。まだまだ俺を認めない人は居るんだって痛感した」

「だったらさ、わからせてやろうぜ。お前の決闘でさ。お前と沢渡の決闘、正直……素人

目に見ててハラハラした。だから自信を持ってよ。ここに一人、お前のデュエルに感化されたやつがいるんだからさ」

瞬は、自分を指差して言う。味方ならここにいるさと、遊矢を元氣付けるべく。遊矢はそれを聞いて、笑顔で応える。

「……ああ！次はもつと笑顔になれるデュエルを見せてやるさー！」

互いに拳を突き合わせると、遊矢は救急車に乗せられて病院へと運ばれていった。何度失敗しても、更なる高みを目指す。その姿勢には見習うべきものがあると、瞬は思った。

レオ・コーポレーション 社長室

舞網市の中心部に聳え立つ、中腹部分がややくびれたような形状の高層ビル。それが、デュエル業界の最大手である、レオ・コーポレーションの本社ビルである。

その最上階に位置する社長室。街を一望する、一面ガラス張りの壁を背に置かれたデスクに、赤馬零児は座していた。

「……で、中島。要件はなんだ？」

零児は、座っている椅子を、デスクの方から窓の方へと回転させながら、デュエルデスクを紹介して、部下からの通信に応答する。

「次元回廊に異常が？」

「はい、接続先が不安定で、此方から他の次元への移動ができないケースが多数報告されており、それに、エクシーズ次元とは1ヶ月近く通信が確認できず——」

「他はどうした？」

「融合、シンク口は今のところ接続は問題ないのですが、やはり、この次元と同様に、無秩序な改変現象が頻発しており——」

「わかった。引き続き調査を頼む。必要に応じて現地民の協力を仰いでくても構わない」

「は。承知しました」

通信が終わり、室内に静寂が訪れる。灯りの灯っていない部屋の中で、零児は椅子から立ち上がり、月明かりの差し込む窓の方へと歩み寄る。

街を見下ろしながら、零児は呟く。街を見下ろす零児の、眼鏡越しの眼光には、鋭く

も強い信念らしき物が宿っていた。

「次元戦争の二の足は踏ませない。侵略者どもの好きにはさせない……」

第22話 オルタナティブ・ランページ

ギフトメイカー・バルジは、瓦礫の山の中を歩いていった。

ここは渋谷。かつては都会中の都会だったのだが、数年前に隕石が落下した事で廃墟になってしまっている。今では一般人の立ち入りが禁止されており、誰もここがかつては都心の一部だったとは思わないだろう。

だがそんな事はギフトメイカーには関係が無い。立ち入り禁止のテープを乗り越え、半ば崩れかかった建物の中へと入ってゆく。元がなんだったのか分からない有様だが、そこには気にも留めず、とある一室にあつたハッチを開け、バルジは地下へと降りてゆく。

「元気にしてるかなー？おー？」

ここは他のギフトメイカーの面々すら知らない、バルジの実験場。彼が好き勝手やる為の空間。鉄扉を開ける彼は、心なしか浮き足だったように見える。

扉の向こうは、幾つもの鉄格子が並んでいた。バルジは、鉄格子の向こう側に向かって声をかける。

「元氣そうで何よりだ、カラス共」

「ふざけないで……何のつもりよ、一体!」

鉄格子の向こうの暗闇から、罵倒する声が飛んできた。ガチャガチャと、鎖が擦れる音も聞こえる。

「あのさあ、お前から自分の立場わかっている? お前らは俺の実験動物モルモットになっただけ? 実験動物が逆らうとかホントクソだよ?」

「人間の分際で……」

少女 —— レイナーレは、バルジを睨みつける。

レイナーレ、カワラーナ、ミッテルト、ドーナシーク。彼女達は神セイクリッド・ギア器回収の任務を受けて行動していた堕天使だ。

しかし、ギフトメイカーの生み出した転生者が暴れ回ったせいで任務は失敗するわ、体制上は敵対関係にあるリアス達悪魔サイドに捕まるわと踏んだり蹴つたりの結果だった。あまさつえ、悪魔から逃げ出せたのも束の間、目の前にいるバルジにとつちかまってこの状況に至るわけだが、プライドの高いレイナーレにとつて、この状況は許し難いものだった。

彼に捕まって早半月。普通ならば人間と堕天使では話にならない実力差があるのに、も関わらず、レイナーレ達が逃げ出せないのには、ある理由があった。

「凄いやね、これ。神滅具ロンギヌス・天逆鉞《あまのさかほこ》……だったけ? 天より来るものを

問答無用で行動不能にしちゃうんだ。たまたま殺したやつが所有者だったから貰ったんだよ。凄いだろ？」

バルジは、自身の腹に手を突っ込むと、そこから一本の槍を取り出す。これが彼が先程言っていた神滅具だ。天より来るもの——天使や神霊を磔にして動けなくする力を持つものだが、墮天使も元を辿れば天使なので、レイナーレ達も動けなくなっているのだ。

「何の用だ、貴様。わざわざ出向いてきたということは、何かしらの目的があるんだろう？ただ単に話をしにきたという訳でもあるまい」

「おお、君、中々話がわかるね。半月で俺を徐々に理解し始めているんだね、僥倖だ」

ドーナシークの言葉に、大仰な反応を示すバルジ。

「その通りだ。ちょいといいモン手に入ったからヨオ、お前らで試そうと思うんだ。いいだろ？」

そう言うと、バルジは懐から数枚のディスクの様なものを取り出し、レイナーレ達に見せつけてきた。それが何なのかは分からないが、少なくともまともなものでは無いことだけはわかる。

「全然よく無いっす！ウチらをなんだと思ってるんすか？！？」 神器で封じられてるか

らって舐めるな——」

いち早く反応したのはミッテルトだった。身の危険を感じたのか、バルジに吠えかかる様に叫ぶが、その声が唐突に途切れた。見ると、バルジが鉄格子越しに、手に持っていたディスクの内一枚をミッテルトの額に押し付けていた。

すると、ディスクはまるで再生機器に挿入されたかの様に、すつとミッテルトの身体の中に入り込んでいった。

「煩い。これだから三大勢力は。人間サマの話をもつと聞かなきゃ駄目だろ？ こうして人間を見下してる奴はな……こうなるんだよ」

バルジがそう言うと、ディスクを入れられたミッテルトが、急にその場にうずくまり出した。カワラーナが近寄ろうとするが、バルジはすかさず別のディスクをカワラーナに向かって投げつける。

「がっ……何、これえ……!?？」

「大丈夫、死なないよ。単に転生特典を得てオリジオンになるだけだから」

ディスクはカワラーナの身体に溶け込む様に入り込んでゆき、彼女の身体を激しく痺攣させる。ドーナシックとレイナーレは、一体何が起きているのだと、2人を交互に見る。

すると、うずくまっていたミッテルトの体表面に、幾つものジッパーが浮かび上がってゆき、それが一斉に開き出した。まるで皮を脱ぐかの様にして、小さな墮天使の少女

「さあ、変わるんだ」

「ふざけ ——」

口からなけなしの罵声が出た直後、彼女達の自我は霧散した。

深夜、東京某所。

終電も過ぎ、人影がめつきりと減った夜の街に、慌ただしい足音が響きわたる。蟻の頭部を思わせるデザインヘルメットを被った、武装した集団が、地下通路の出口を塞ぐ様にして集まってきていた。

ジャキリと、一斉に地下通路の出口に向かってマシンガンの銃口を構える。銃口の向けられた地下通路から、髪を金色に染め、ピアスになんかよくわからない金属アクセサリーをジャラジャラつけた、いかにもTHE・チャラ男ですといった感じの風貌の青年が出てくる。

青年は、出口を塞ぐ変な集団に困惑する。至極真つ当な反応であろう。

「え、なんすか一体……あんたら誰？」

「お前がワームである事は既に知っている。正体を現せ！」

集団のうちの一人が、銃口を突き付けながら叫ぶ。すると、ヘラヘラと笑っていた青

年の顔が、すんと、無表情になる。まるで、スイッチが切り替わったかの様に。

「ああ、なんだバレちゃってたのか。ならお前ら皆殺しにしなきゃならねーな……あー面倒くさ」

わざとらしいため息を吐き、気怠げそうに青年はつぶやく。すると、青年の姿が崩れ落ち、茶色い体色のカマキリのような怪物へと変化していくではないか。両手からは鋭い鎌のようなものが生え、背中にある脚のような部位が、不気味に蠢いている。

だが、これはあらかじめ予期していた為、集団の方は怯まない。むしろ疑惑が真実だったので、ビンゴだ。

「怯むな！撃て撃て！」

銃口を突き付けていた人物の命令を皮切りに、怪物に対して一斉掃射が行われる。夜の街に響く激しい銃撃音。これにより、怪物は一網打尽になる。―― 筈だった。

次の瞬間、怪物の姿が消えた。かと思えば、瞬く間に怪物は、自分から一番離れた位置にいた集団の一員の首を、鎌で跳ね飛ばしていた。ボトンと、頭の詰まったヘルメットが地面に落ち、ちよん切られた首から噴水の如く鮮血が噴き出す。

「ああ、ああああ！」

「おい、こら逃げるな。――」

それを見て恐れをなした一人が逃げ出し、もう一人がそれを咎めようとする。しか

し、どちらも叶わず。次の瞬間、二人は腰を堺に上下にぶつた斬られていた。何が起きたのか理解する前に、二人の生命反応が一瞬で尽き果てる。

さらに、それが合図になったのか、どこからともなく緑のずんぐりしたシルエットの怪物が複数体出現し、一斉に襲いかかってきた。近接ブレードやマシンガンで各々対応していくが、いかんせん数が多い上、奇襲を受けてしまつては対処が難しい。

万事休すかと思われたその時、ひとつのエンジン音が、この場に向かって急接近してくるのが聞こえた。怪物はそれに反応し、殺しの手を止める。

次の瞬間、横から突っ込んできたバイクに、怪物は思い切り跳ね飛ばされた。

「グガツ!?」

自分を跳ねたバイクに、敵意剥き出しで唸り声をぶつけてくる。バイクの搭乗者は、怪物の方を向きながら、バイクから降り、フルフェイスのヘルメットを脱ぐ。

二十代半ば程の、スーツ姿の若い男だった。

「すまない、本部からの呼び出しで遅れた」

男はそう言いながら、右手を天に掲げる。すると、どこからか蜂の羽音が聞こえてきた。怪物は当たりをキョロキョロと見渡す。すると、空の彼方から飛んでくる、一つの物体を見つけた。

飛来するは手のひらサイズの機械仕掛けの蜂。羽音を鳴らしながら飛んできたそれ

は、男の手の中に収まる。男はそれを、左手首に身につけていたブレスレットにセットする。

「ワームめ……殲滅してやる！変身！」

《H E N S H I N》

すると、ブレスレットを起点に、男の身体に装甲がまとわりついてゆく。そして、厚い装甲を持った仮面の戦士へと姿を変える。顔の部分からするに、それはまるで蜂の巣の様であった。その名はマスクドライダー・ザビー。

相対する怪物——ワームは、死体から切り取った腕を乱雑にザビーに投げつけ、挑発するような鳴き声をあげる。ザビーは、それを見るなり、ワームに向かって突っ込んでいく。

秘密組織 Z E C T。

擬態能力と、高速移動能力クロックアップを有する地球外生命体・ワームに対抗する唯一の組織。

そして人類が唯一ワームに対抗する術。それが、Z E C T 謹製のマスクドライダーシステムである。

「ふんっ！ぬうん！」

ザビーのジョブが、絶え間なくワームを襲う。ワームの方も、負けじと両手の鎌を振

り回すが、ザビーの硬い装甲を切り裂くのは至難の技。火花が散るだけで、傷一つ作ることができない。

ザビーは、ワームに回避の隙も与えないほどの猛攻を仕掛け続ける。時折顔面へのストリートを混ぜながら、ジョブを繰り返して、ワームを着実に後退させてゆく。

「はああー！」

焦るワームの腹部に、力を込めたザビーの裏拳が直撃し、ワームは吹っ飛んで陸橋の柱に身体を打ち付けられる。ワームは苦悶の声を上げながら、よろよろと立ち上がろうとする。が、ザビーはそんな猶予を与える気はさらさら無い。そのまま更なる追撃をしようとする。

その時だった。ワームとザビーの間に、交戦中だったゼクトルーパーの一人が、サナギ体のワームに投げ飛ばされてきた。そして、彼を投げ飛ばした個体と思われるワームが、それを踏みつける。

が、よく見ると、そのワームからは凄まじい熱気が放たれている。これは脱皮の兆候だ。ワームは脱皮することで、節足動物に似た姿へと変化すると共に、クロックアップ能力を手に入れる。ザビーの目の前で、サナギ態ワームの体表がグズグズに崩れ去り、中から鈴虫に似た姿のワームが姿を現した。

「隊長、脱皮しました！至急救援を！」

「ああくそ、成虫が増えたか！いいか、成虫態は俺がやる！負傷者は下がらせ、大丈夫な奴はこっちのサナギを！」

部下達に指示を出しながら、ザビーは増えた成長ワームを、自分の方へと引き寄せる。クロックアップが出来ないサナギ体ならゼクトルーパーでも対処可能だが、成虫体はライダーに任せるしか無い。ザビーは、ブレスレットにとまっているザビーゼクターの羽根の部分を上にあげ、ザビーゼクターを180度回転させる。

《CAST OFF》

すると、電子音声と共に、ザビーの全身を覆っていた装甲が弾け飛び、高速で周囲にばら撒かれていった。成虫ワームやゼクトルーパー達は咄嗟に避けるが、動きの鈍いサナギ態ワームの一部は、装甲がクリーンヒットし、そのまま緑色の炎をあげて爆散してしまった。猛スピードで金属の塊が飛んでくるのだ。そんなもんだったらひとたまりもないだろう。

装甲を脱ぎ捨てたザビーは、雀蜂を模したと思われる姿に変わっていた。これがザビーの本来の姿。防御面を捨て、ワームのクロックアップに対抗するための策。

成虫ワーム達は、飛んできた装甲を叩き落としながら、ザビー目掛けて突っ込んでくる。

《CHANGE

WASP》

ザビーゼクターから音声が鳴り、ザビーの複眼が点灯する。ワームは達は、口から涎のようなものを垂らしながら、再びクロックアップを始める。だが、その程度では優位性は立てられない。

「クロックアップ！」

《CLOCK UP》

ザビーは、腰に巻かれたベルトの右側にあるスラップスイッチをスライドする。

その瞬間、ザビーとワーム以外の世界の全てが、止まっていると錯覚してしまいそうに成る程に遅くなった。ゼクトルーパーが放ったマシンガンの弾も、ワームが粉碎したことでバラバラになって宙を舞う自転車も、スローモーションで動いてゆく。

勿論これは彼らの主観でしか無い。側から見れば、双方が知覚困難な程に速く動いているとしか思われぬし、それを人間が見ることは叶わない。

これがマスクドライダーシステムの切り札・クロックアップ。ライダーシステムがワームに対抗しうる最終手段であるが所以。彼方が速く動くなら、此方も速くなれば良いという理論だ。

「貴様らに好き勝手はさせない！」

「イガッ!?」

カマキリ型ワームの鎌が振り下ろされるよりも早く、ザビーの鉄拳が、ワームの顔面

を貫く。よろめくワームに、続けてザビーのパンチが襲い掛かる。

「ヴィイイイイ……ッ！」

壁際に追い詰められた同胞を見たもう一匹の方が、背中の羽根を強く振るわせて衝撃波を生成し、ザビーに向かつて放ってきた。ザビーはそれに咄嗟に気づき、後方に跳んで避ける。それを好機と見たのか、先程までザビーにボコられていた方のワームは、一気に距離を詰め、回避後の隙が生まれたザビーを、両腕の鎌で斬り付ける。

飛び散る火花。しかし今度は、しっかりとダメージが及んだ。ライダーフォームは、クロックアップ能力と引き換えに、マスクドフォームの

厚い装甲を失っている為、必然的に防御力が下がるのだ。

「クソッ！」

《CLOCK OVER》

ここで両者ともクロックアップが解除される。ワームはお構いなしにザビーに猛攻を仕掛ける。ザビーは振り下ろされた鎌を避けて背後に回り込み、ワームの背中に裏拳を叩きつける。そこに、もう一匹の方が再び衝撃波を放つ。衝撃波はザビーの背中に直撃し、ザビーは思わず膝をついてしまう。

いくらからライダーといっても、成虫ワーム2体を同時に相手取るのは一苦労だ。サナ

ギ態ワーム達は、他のゼクトルーパー達が奮戦してくれているが、成虫に対処可能なのは自分一人。さてどうするか。

そこに、此方に向かって走ってくる足音が聞こえてきた。ザビーが振り向くと、スーツ姿の青年が此方に向かってくる姿が見えた。

再び、どこからか聞こえてくる羽音。走る彼の元に、どこからか青いクワガタムシ型のガジェットが飛来し、彼の手の中に収まる。青年は、それを自身の腰に巻いていたベルトにセツトする。

「変身！」

《H E N S H I N》

青と銀を基調とした、厚い装甲が纏われる。ザビーとは違い、両肩にはバルカン砲がつけられている。これがマスクドライダー5号機・ガタックである。

「加賀美……貴様！」

「偶々近くを通りがかっただけだ。兎に角俺も加勢する！」

ガタックはやってくるなり、自分に目掛けて襲い掛かってきたサナギ態のワーム達に、肩のバルカン砲をお見舞いする。その一発は非常に強力で、サナギ態ワームは一発で爆散してしまった。

「キャストオフ！」

《CAST OOF》

襲いかかってきたサナギ態ワームの撃破を確認すると、ガタツクはベルトにセットしているガタツクゼクターの角を一気に開き、角が真反対を向く状態にする。すると、ガタツクの厚い装甲が一気に弾け飛び、その下からメタリックブルーの装甲が顕となる。顔の両縁にクワガタのツノのようなパーツが展開し、複眼が赤く光る。

《CHANGE STAG BEETLE》

ザビー同様にライダーフォームに変身したガタツクは、両肩についていた双剣・ガタツクダブルカリバーを手に持ち、カマキリ型ワームに立ち向かう。

「つたく……」

なんとも言えない気分になりながらも、ザビーはもう一匹のワームと相対する。

「はああっ！」

ガタツクダブルカリバーの横薙ぎが、ワームの腹部を斬り付ける。ワームは自身に傷を負わせたガタツクに怒り、肩目掛けて自慢の鎌を振り下ろす。しかしガタツクは、すかさずガタツクダブルカリバーの刀身でそれを受ける。

激しい金属音と火花を散らしながら、カマキリ型ワームの鎌と、ガタツクダブルカリバーの刃がぶつかり合う。両者とも鏝迫り合いによって両手が塞がれる格好になるが、ガタツクはすかさず蹴りを入れてワームを突き飛ばす。

「へああつー！」

体勢が崩れたのを見逃さず、ガタツクカリバーで縦にぶった斬られ、ワームの両腕の鎌が折られる。武器を失い動揺するワームだが、すかさずガタツクダブルカリバーの突き攻撃が襲いかかり、問答無用でぶつ飛ばされてしまう。

立ち上がろうとするワームを見据えながら、ガタツクは、ガタツクカリバーを肩に戻し、ガタツクゼクターのボタンを3回押す。

《1, 2, 3》

「ライダーキックー！」

《RIDER KICK》

ゼクターからエネルギーの様なものが、ガタツク頭部の角を經由し、右足に流れ込んでゆく。ガタツクは雄叫びを上げながら、ワーム目掛けて突っ走る。

そして、ワームの目前で勢いよく地を蹴って飛び上がり、そこから回し蹴りをワームの上半身目掛けて叩き込んだ。

「ていやあー！」

飛び回し蹴りをモロに喰らったワームは、痛みに悶え苦しみながら、ガタツクを恨む様な呻き声をあげてよろめく。そして、灰色の爆炎を上げながら、ワームの身体が木っ端微塵に粉碎された。

一方、ザビーの方も、決着がっこうとしていた。

「トドメだ……!」

ザビーに思い切り殴り飛ばされたワーム。ザビーは、左腕のザビーゼクターのボタンを押して、必殺技を発動させようとする。

その時だった。突如として、両者の間に、何者かが割り込んできた。その姿には、何処か見覚えがある。

「カブト……か?」

ザビーは、忌まわしい名を呼ぶ。

ZECTに従わないはぐれ者のライダー。自分勝手に、あらゆる面でめちやくちやに強い彼に、何度も手を焼かされている。

だが、目の前のそれは何かが違う。額から伸びる角はねじれ、背中にはグシヤグシヤの羽根が一对。肩や膝からは昆虫の足のようなものが飛び出て、うねうねと蠢いている。胸元から股間にかけてはジツパーの様なものが伸びている。

何かが違う。ザビーもガタツクも、本能的にそう察していた。

「ザビー……最弱のマスクドライバー……」

「何だと……!?」

カブトに似たそれは、ザビーを見るなり、あからさまに見下した様な態度をとる。ス

トレートに雑魚呼ばわりされたことで、ザビーも若干喧嘩腰になる。

「俺の糧になれ……!」

「なっ!?」

怪物はそう言うのと、いきなりザビーに襲いかかってきた。ワームはそれを見て、これ幸いとばかりに逃げ出す。

「待て……!」

「逃げるな、俺と戦え!」

「ぐはっ!?」

ガタツクは逃げたワームを追いかけようとするが、カブトに似た怪物はそれを許さず、ザビーに腹パンを一発食らわせると、ガタツクに向かってドロップキックを仕掛けてきた。ガタツクはそれをモロに受け、ゴロゴロと地面を転がってゆく。

ワーム退治を邪魔された挙句いきなり殴られたザビーは、怪物に殴りかかりながら怒鳴り散らす。

「お前に構ってる暇はないんだよ!」

「貴様の事情など知らん。俺は奴に挑まねばならん。貴様はその為の経験値稼ぎだ!」

「さつきから俺のことを馬鹿にしゃがって……!」

ザビーのパンチをガードする素振りも見せず、モロに受け続けているにも関わらず、

怪物は全く怯まない。怪物は、飛んできたザビーの拳をがしりと鷲掴みにすると、思い切り頭を振り下ろし、ザビーの脳天に頭突きをお見舞いする。

額を抑えながら膝をつくザビー。怪物はすかさずザビーを蹴り飛ばし、近くにいたガタツクにぶつける。

「馬鹿にされたくなければ実力を示せ。そんなんでは天童総司には勝てんぞ?」

「貴様あ……この一発で決めてやる!」

カブトの資格者の名前を出し、盛んにザビーを挑発する。ザビーは早期に決着をつけるべく、ザビーゼクターのボタンを押す。

「ライダーステイング!」

《RIDER STING》

音声が鳴ると、左腕から突き出る形になっているザビーゼクターの針の部分に、タキオン粒子が凝縮されてゆく。当たった対象を一撃で原子崩壊に導く必殺技、ライダーステイングだ。ザビーは、飛びかかりながら左拳を突き出し、怪物目掛けてライダーステイングをぶち込もうとする。

しかし、相手はそれを許さなかった。

「クロックアップ!」

「何?」

その発言にザビーは驚きの声を上げるが、次の瞬間、怪物以外の全ての動きが、大幅に遅くなった。怪物がクロックアップを使用したのだ。勿論、これはクロックアップをしていない他者には認識出来ない出来事だ。咄嗟の出来事だったので、ザビーもガタツクも、クロックアップが間に合わない。

今にもパンチを繰り出そうという体勢のまま、空中で固まるザビー。怪物はその姿を鼻で笑うと、自らの右足に力を溜めてゆく。ピキピキと、稲妻の様なものが彼の頭部の角から右足に向かって走ってゆく。

「ライダー……キック」

そして、怪物は、超低速度で空中浮遊しているザビーに、渾身の回し蹴りを叩き込んだ。ザビーの左脇腹に走る衝撃。だが、その瞬間を彼が認知することは出来ない。気づいた時には、既に彼は戦闘不能になっているからだ。

「だから言ったろ。お前は最弱だとな」

怪物はそう最後に笑うと、クロックアップを解除した。すると、ライダーキックが直撃したザビーは、大きく吹っ飛ばされ、近くの陸橋の上に叩き落とされた。ダメージに耐えかね、左腕のザビーゼクターがプレスレットを離れ、夜空へと飛んでゆく。

「なっ……影山……」

「次はお前だ、ガタツク……!」

怪物は、戦闘不能となったザビーは用済みと言わんばかりに放置し、ガタツクを次なる標的に定める。こいつは生半可な相手ではない。全力で立ち向かう他ないと決め込み、ガタツクは身構える。

そこに、此方に向かってくるエンジン音。また別のライダーでも来たのかと思ひ、ガタツクと怪物は同時にエンジン音のした方を見る。

そこには、闇夜の中で光るバイクのヘッドライトと、オレンジ色の複眼があった。よく見ると、肩や胴体にも薄橙色に光るラインが確認できる。

「なんだ……アイツは」

アイツもライダーなのか。しかし、ガタツクはあんなライダーは知らない。

「見つけたぞオリジオン！」

そのライダーは、怪物を見るなりそう叫んだ。

「チツ、アクロスか。本日2度目とは、随分と仮面ライダーごっこに熱心なんだな。鬱陶しいにも程がある」

「何をしているんだ、お前は」

「お前はお呼びじゃないんだ。今日はここまでにする」

「逃すかつ！」

突然現れたライダー——アクロスは、逃げ出した怪物をバイクで追いかける。

「ちよつとお前——」

ガタツクは慌てて追いかけるが、既に遅し。完全に見失ってしまった。

「なんだつたんだ今の……」

ガタツクは、ベルトのガタツクゼクターを外して変身解除する。変身者——加賀美新の手を離れたゼクターは、悔しそうに辺りを猛スピードで旋回しながら、夜空の彼方へと飛んでいった。

ワームではない怪物に、謎のライダー。一体何が起きているのか、今の彼には知る術はない。

数分後。

アクロス——逢瀬瞬は変身を解き、バイクから降りていた。

「逃したか……逃げ足早いなアイツは……」

あれから結局、オリジオンには逃げられてしまった。

瞬は昼間に一度だけ、先程のオリジオンを偶然見かけたのだが、その時もあつという間に撒かれてしまっていたのだ。一度たりとも目を離していないはずなのに、一瞬で数百メートル離れた位置にまで移動していた。

超スピードか、はたまた瞬間移動かはわからないが、どっちみち圧倒的不利なのは

変りない。オリジオンの目的は分からないが、放置しておくねはマズイ。何をしないでかすかわかったもんじやないから。

「……にしても、さっきの……あれも仮面ライダーなのか？」

先程オリジオンのいた場所にいた、青いやつ。オリジオンを追う事で頭がいつぱいで深く気にしていなかったが、あれは何だったのだろうか？どことなくアクロスやビルドに近いものを感じたような気もしなくもない。

「よくわかんねえな……」

新たなライダーに、目的不明のオリジオン。考えなきやいけない事はたくさんあるが、現在は深夜2時。とても眠いし、見つければ補導間違いなしだ。瞬は大あくびをしながらかヘルメットを被り、バイクのエンジンをかける。

もやもやとした気持ちを抱えながら、瞬は帰路に着くのであった。

翌朝

長かったようで短かった4月も終わりを迎え、いよいよゴールデンウィーク初日。世間はレジャーだのバカンスだのに浮かれに浮かれてらっしゃる時期だが、逢瀬家にそんなのはあまり関係がなかった。

保護者たる環四郎おじさんは忙しい身だし、湖森の怪我が完治していないし、そもそ

もレジャーだのバカンスだのに行く気もない。というわけで、いつも通りのだらけた休日を通り過ぎていた。

「いやあ長かった……まさか焼きプリン論争があそこまで過熱するとは。お前らの精神年齢の低さ舐めてたわ」

「焼きプリンなぞ邪道！カスタードプリンが至高に決まってる！」

「いや俺はどっちもいいと思うんだけどね……」

両手に幼女とパンパンのエコバッグをぶら下げながら、昼間から遠い目をしてらっしやるのは、高校生兼駆け出し仮面ライダーの逢瀬瞬。

ただいま彼は買い物帰り。途中、ヒビキのお人好しスキルが暴走してひったくり犯を捕らえるという手柄を立てる羽目になったり、焼きプリンとカスタードプリン、どちらを買うかでネプテューヌと瞬とで激しい議論が繰り広げられるというアクシデントに見舞われながらも、逢瀬家の買い出しは一応終わっていた。

「で、結局両方かー。強欲だねえ」

「まあ、湖森のお見舞いの品には丁度いいかもな。アイツも早く元気になって欲しいよ」
そう言いながら、瞬の顔が若干暗くなる。自分の力不足で湖森を再び傷つけてしまった事が、どうしても許せないのだ。

湖森は、買い出しくらい自分が行くといつて聞かなかつたのだが、前述の通り、先日

オリジオンに襲われた際の怪我が完治していないのだからと、無理やり家事も休ませて留守番させている。3度目は無いぞ。もう繰り返してなるもんか、と思いながら歩く帰路。ほんの些細なきっかけだった。

ヒビキとネプテューヌ。瞬の前方を歩く、2人の居候幼女。2人の後ろ姿を見ていた瞬は、ふとこんな疑問を抱いた。

「んあー、お前から本当に今のままでいいのか？」

「どういう意味？」

「ネプテューヌは帰る場所あるんじゃないのか？ヒビキは何か思い出したりしたのか？」

「意外……てつきりもう私達に興味無くしたのかと思ってた」

「全然。わっかんないんだよなーこれが」

そう、ファイティ曰くネプテューヌは別世界から来たらしいし、ヒビキは記憶がない。異世界人や記憶喪失者なんてフィクションの中だけだと思っていたが、こうして目の当たりにすると、どう接していいのか、少し悩んでしまう。が、本人達はさほど気にしていないように見えるので、瞬もそれに合わせて接している。

ネプテューヌはともかく、ヒビキに至っては、一体何処から来たのかも分からない。なんせ本人が殆どの記憶を失っているのだから、ある意味当然のだが、それにしても、

全くと言っていいほど、ヒビキについての情報は見つからない。ただ、妙に唯や瞬に懐いてしまったようで、こうして逢瀬家に居候する羽目になったのだ。

てかヒビキを見つけたのだから、唯が預かれよと当初は思ったのだが、唯の家は瞬と比べると割と一般寄りの家庭。そんなところが、見ず知らずの幼女を預かれる訳ないの、色々あつて逢瀬家に身を置くことになったのだ。明らかに色々とアウトな気がする。どうか警察沙汰にはなりたくないものだ。

「だけど、私は何か理由があつてここに来たような気がするんだよね……手がかりはさっぱりなんだけどね」

ヒビキはそう言いながら首を捻る。その様子を見て、ふと瞬はこう思った。

ぱつと見10歳ぐらいの少女が記憶を失うなど、明らかに普通ではない。きつと壮絶な出来事とかがあつたんだらう。そんな事を考えているのが顔に出ていたのか、瞬が我に帰ると、ヒビキが瞬の顔を覗きこんでいた。

「そんな悲しそうな顔しないで。記憶があろうと無かろうと、私は私だから」

「泣いてねーよ。ただ、色々とバタバタしてたからな……改めてそう思ってしまっただけだよ」

誤魔化すようにそう言って、瞬は顔を逸らした。

ヒビキとネプテューヌ。放置されている問題の象徴。彼女らとも、いずれは向き合わ

あの白い頭には見覚えがある。

「あそこに居るのは……灰司か？」

「……」

無束灰司 —— 転生者狩りは、電柱の影にさりげなく身を隠しながら、様子を伺っていた。

彼がこんなことをしている理由は、彼の視線の先にあるものにあつた。

(司馬神真……本部から討伐命令の下つている転生者……)

灰司の視線の先には、髑髏柄のレザージャケットを着た金髪の青年。彼は、灰司の所属する転生者狩りの組織・Alignment to Maintain the Order of Reincarnations 転生者秩序維持同盟 —— 通称 AMORE により認定された、転生凶悪犯。放置すれば世界に害をなす危険人物なのである。

事前調査によると、彼の周りで行方不明になる人間が後を耐えないとのこと。捕まえるにしろ、殺すにしろ、まずは彼が具体的には何をしているのかを掴まねばなるまい。標的は近くのファミレスに入店した。しばらくここで待ち伏せすることになりそうだ。灰司は、ファミレスの敷地の端から店舗内を凝視しながら缶コーヒートの封を開ける。

そこに、

「あれ、灰司じゃん。お前こんな所で何してんの？」

「!?？」

背後から声をかけられ、とつさに灰司は、振り返りながら拳を突きつける。

「うわっ!?？」

声の主は、突然飛び出してきた拳に驚き、尻餅をつく。灰司はその人物の顔を見て、しまった、と思った。

「瞬……」

「凄……全然動きが見えなかった」

「つてえ……いきなりソレはないだろ……あ、卵割れてねえよな……?？」

声の主は、逢瀬瞬だった。一応灰司は、現在は上司からの命令で、アクロス——瞬の監視も兼任している。無束灰司と転生者狩りがイコールであると思われるはずはないのだが、背後を取られたことで、咄嗟に手を出してしまった。

なんとか誤魔化さねばなるまい。被っている猫を脱ぎ捨てるには早すぎるのだから。

「な、なんだ君かあ……驚かせないでよ」

「驚いたのこつちだけどな……何お前、武術とかやってんの? さっきの動き、めっちゃキレ良くなかったか?」

「すみません、僕、昔から柄の悪い人に絡まれやすい体質で……それで警戒心が強くなつたというか……」

「つまりはビビりつてことですか。防御は最大の攻撃つて言うからね、うん。それで護身術かなんかも齧つたつて感じ？」

「そうそう、そんな感じですよ」

灰司の手を借りて立ち上がる瞬。尻餅をついた時に、バックの中の卵が割れていないかと確かめたが、そちらは無事だった。もし割れてたらある意味大惨事になっていたであらう。

ともかく、怪しまれずに済んだようだ。ネプテューヌが思わぬ助け舟を出してくれて、灰司は正直ありがたかった。

灰司はチャリとファミレスの方を見る。この位置からは、ターゲットの席が割とはつきりと確認できる。ターゲットたる転生者は、メニュー表らしきものを見ながら悩んでいるようで、まだ余裕はありそうだ。瞬達と適当に会話してから、適当に離れてもらうと灰司は考えていた。

「そちらは？ 妹さん……じゃないですよ。明らかに血が繋がっている気配ないですし」

「自称女神の居候」

「自称じゃないんですけどー!??」　ちよつと最近扱い雑過ぎないかなー!??　私、ネプテューヌは瞬に抗議しまーす!」

灰司が、瞬の隣にいるネプテューヌに興味を示し始めた。そりゃあ、買い物帰りの同級生が幼女引き連れてくるのだから、気になるのが人間の性。もちろんこれは、灰司にとってはただの話題逸らしでしか無い。

一方、灰司に聞かれた瞬は、ドストレートに事実だけを告げるが、ネプテューヌは、ぞんざいな扱いをされたことに対して文句を言ってくる。

「ははっ、元気な彼女さんだね。これは唯さんも、幾ら幼馴染みといえどらうかうかしてられないかもね」

「何一つ合ってねーよ! 唯とはそんな関係じゃねーし、俺にロリコン趣味は無いつてーの!」

「私にヒロイン属性はちよつとね……女神ってほら、皆の為にあるべき存在だし、誰か一人と愛を育むのは存在的に矛盾してるというか……」

灰司の茶化しに、二人揃って分かりやすく取り乱す瞬とネプテューヌ。ネプテューヌに至っては、気まずそうに目を逸らしており、なんか若干キャラが崩れかかっているような気がする。

と、ここでネプテューヌが、あることに気づいた。

「あれ……ヒビキちゃんは？」

「え」

ネプテューヌに言われて、瞬は辺りを見渡す。

頭数が足りない。ヒビキが居なくなっていた。

「まさかあいつ、またフラフラと人助けに行っちゃったのか？何、遺伝子レベルでお人好しなの？」

「探しに戻ろうよ。ね？」

「そーだな。悪いな灰司、邪魔した」

「あーうん、それじゃ」

瞬とネプテューヌは、ヒビキを探す為この場を離れていく。二人が見えなくなったのを確認すると、灰司は猫を被るのをやめ、再び鋭い目つきでファミレス内を観察し始めた。

標的はまだ逃げていない。呑気にランチタイム中だ。

(さて、邪魔者もいなくなつたし、再開と行くか)

空になった缶を握りつぶしながら、灰司は標的を暫く観察するのであった。

一方、こちらでは、買い物帰りの別のグループがいた。

「悪いな姫終。ウチの買物に付き合わせてしまつて」

「いえ、先輩の監視が私の任務ですから」

第四真相・暁古城と彼の監視役・姫終雪菜。なんやかんやで2人が出会つて丸一月は立っていた。その辺りの事情を知らない周りの人からは、既に同棲中だの交際中だのと思われ始めているのは語るまでも無い。2人は多分認めないだろうが。

それは2人の目の前を歩く、古城の妹・凧沙も同じだった。

「2人とも仲良いよねー。ほんと古城くん、最近になつてやたらとモテるようになってない?」

「気のせいです気のせいです! ホント最近の若い子は、男女2人組が並んでると直ぐ恋愛関係に直結するんだからあー!」

「いや古城くんもその『最近の若い子』の一人だからね?」

色々と省くが、古城はこの一ヶ月の間に、獅子王機関の舞威媛だの異国の王女様だの、色々と濃い女性と立て続けに出会つたり、昔からの付き合ひのあつた子と色々とあつたりと、兎に角、ラノベ主人公街道を突き進んでいたわけである。古城だって、その辺りを突つ込まれたら取り乱さざるを得ない。

乾いた笑いを浮かべる古城。その時、雪菜が2人をよびとめた。

「ちよつと待つてください」

「どうした？」

「あの子……迷子かなんか、でしょうか？」

雪菜が指差した先には、10歳くらいの女の子が、5歳くらいの男の子の手を引いて歩いている。男の子の方は泣きじやくっており、必死に母親を呼んでいるのに対し、女の子はというと、涙ひとつ流さずに時折男の子の頭を撫でながら落ち着かせようとしている。

それを見て、古城は一瞬、めんどくさそうだしほつとこうかと思った。これまでの生活を振り返って、些細な好奇心がデカい事件につながっていることが多々あった気がする。てかそればかりだった。偶には平和に過ごしたいんだがなー、とぼやく古城であったが、これを放置すれば、風沙と雪菜の視線が痛くなることは間違いない。それは困る。というか、すでにその2人が子供達の元に行っちゃってる。早くも選択肢を奪われていた古城は、溜息をつきながら2人の後を追って子供達の元へと向かう。

「迷子かなんか、お前ら」

「私はちがうよ？この子が泣いてたから一緒に親探ししてるんだ」

女の子の方——ヒビキはそう言ってるが、側からみれば、迷子であることを悟られまいと強がってる様に見えないのは古城だけだろうか。

「安心してください。私達も手伝いますから、ね？だから泣かないで。きつとお母さん

に会えますから」

雪菜は、泣いている男の子に目線を合わせる様にしゃがみ込みながら、男の子の頬を伝う涙を指で拭い、元気付ける。なんか途中で古城の方をチラリと見ていた気がするが、多分気のせいじゃないだろう。

「これは心強いです！ありがとうございます！」

「キミ、歳の割に凄いしっかりしてるよねー」

協力してくれることに対する礼を言うヒビキに、風沙がごもつともなツツコミを入れる。古城はヒビキを見て、なるほど、たしかに小学生くらいだというのに、随分としっかりとした子だ。これは風沙に匹敵するかもしれない、と若干教育ママじみた感想を抱く。

それを察知したのか、風沙が古城の方に顔を向け、鋭い指摘をしてくる。

「古城くん、また変なこと考えてない？」

「俺をもうちよつと信用してくれてもいいんじゃないか……流石にここまでぞんざいに扱われ続けると凹むというかなんというか」

「ともかくGOです！レッツツ親探しツアーー！」

「なんで嬉しそうなんだお前」

「少しでもこの子を安心させようと思って。ほら笑って！再開の時は笑顔が一番なんだ

からさー！」

わからなくもないような意見に古城は苦笑する。
どうやら、第四真相には平穩は訪れないらしい。

十数分ほど経って、親子の再会は叶った。

母親と再開した男の子は、笑顔で古城達に手を振りながら、母親に手を引かれて帰っていった。それを見送った古城は、今度はヒビキに着目する。

「あとはお前だけだな」

「あれ、私も迷子にカウントされてた……？」

「何故されてないと思ったんだ」

本人は必死に否定しているが、ここまできたらアレだ。迷子をもう一人送り届けるくらい朝飯前だ。

と、その時だった。

「いたいた、ヒビキい！お前またふらふらと人助けしてたのかよ？」

「あ、瞬」

人の流れに逆らう様にして、一人の少年——逢瀬瞬がやって来た。ヒビキは瞬の顔を見るなり、何処かばつの悪そうな顔になる。

「ごめん……でもほっとけないじゃん？」

「お前の人助け癖は分かったから、勝手に一人でうろちよろするんじゃないやありません。わかりましたか？」

「はーい……」

瞬に叱られ、しよんぼりとするヒビキ。

「貴方がこの子の？」

「ああ、保護者……みたいなもんだな」

雪菜の問いかけにそう答えると、瞬は、ヒビキの手をやや強めに引く。

「さ、帰るぞ。ネプテューヌも心配してたんだ、ほら」

「あ、ちよつと」

その強引なやり方に、ヒビキだけでなく、古城達も微かに怪しいものを感じる。だがよその家庭にとやかく言うことは出来ないし、ただの思い過ぎかもしれない。

そこに、こちらに向かっ近づいて来る話し声。その声に反応してヒビキは振り向き——そして戦慄した。

「とりあえず来た道に戻るしか無いか。つたく、どこ行っただ？」

「でもほら、ヒビキちゃんくらいの年齢なら多少ほつといても問題ないんじゃないかなー？」

声の主はヒビキを探してやって来た2人だった。それが誰かなんて言うまでもないのだが、ここはあえて言っておこう。

声の主は —— ネプテューヌと、逢瀬瞬。

単刀直入に言おう。

瞬がもう一人居た。

「……………え？」

ネプテューヌも、ヒビキも、そして2人の瞬も、それを見て固まってしまふ。部外者たる古城達は、状況が読み込めず、彼らとは別の理由で混乱する。

「双子さん……………」

「いやいや、んなわけ無い……………」

風沙の言葉をバツサリ切り捨てるヒビキ。ヒビキの手を握る瞬の力が、強くなつていつているような気がする。

「まさか新手的オリジオンか？」

「ふざけるな偽物。俺が本物だ」

「いや待てよ、俺が本物だって！だよなネプテューヌ！」

「俺が本物だよな、ヒビキ。お前は分かるよな？」

2人の瞬は、ヒビキとネプテューヌに、それぞれ自身が本物であることを確認する。古城達も、いよいよこれは只事ではないと判断し、警戒体制を取る。古城は風沙を庇う様にして立ち、雪菜も背負ったギターケースをいつでも開けられるようみ身構える。

2人の瞬に問い詰められる形となったネプテューヌとヒビキは、ダラダラと冷や汗を流しながら固まる。どつちだ、一体どちらが本物なのだ？というか、もう一人の方は一体なんだというのだ？訳がわからなさすぎる。

ネプテューヌと手を繋いでいた方の瞬は、バクバクと心臓を鳴らしながら、あることを思いつく。

「……来いよ偽物。俺が本物だって証明してやる」

だがその案を実行するには、この衆人環境化ではやりにくい。

瞬は、目の前にいるもう一人の自分に対して、自分についてくるよう提案する。提案された側も、敵意剥き出しの表情で、それを了承する。

「いいよ、やってやる。俺が本物だって示してやる」

東京タワーからそう遠くない場所にあるレストラン『ピストロ・ラ・サル』の店内にて。

「で、なんだ。俺が影山を襲撃したと？」

「ホントにアレはお前じゃないんだよな？」

加賀美は、テーブルをはさんで向かい側に座る男・天道総司に、念を押すように問いかける。もちろん、周囲に聞こえないくらいの声量で。ZECTは秘密組織、他言無用なのだから。

天道は、鯖味噌を一口食べると、呆れた様に答える。

「だから言ってるだろう。そもそもする必要がない」

そう言っではいるが、彼は言葉よりも行動で示すタイプ。出会って数ヶ月が経つが、未だに加賀美は、天道が何を考えているのかイマイチ掴みきれていない。だから、余計に神経質になる。

「少なくとも奴はクロックアップをしていた。だが、ワームにしては何か妙なんだよな……なんかよくわかんないけど、明らかに……世界観的に違うような？」

「兎に角気をつけろ。やつの目的がまだわかってない以上、いつ何処で出くわすかわからない。それに、コテンパンにされたせいかな影山の機嫌も悪い。距離とった方がいいかもしれない……で、お前なら心配いらないよな」

ZECTも、カブトに酷似した謎の存在に自陣営のライダーが襲われたせいかな、いつ

も以上にピリピリとした雰囲気を感じていた。一応忠告はしたが、天道なら大丈夫だな、とも思ってしまう加賀美であった。なんかコイツならなんとかしてしまえそうだし。

椅子の背もたれに背中を預け、加賀美はでかいため息をつく。ZECTに入ってから——というか天道と出会ってから——似たような事は色々とあったが、今回もまた、色々と厄介なことになりそうだ。

その時だった。コンコンと、近くの窓を軽く小突くような音が聞こえてきた。まるで誰かを呼びにきたかのようなようだ。天道が窓に目をやると、窓の向こう側には、手のひらサイズのカブトムシ型のメカ——カブトゼクターが浮遊していた。それを見て天道は察する。

——ワーム出現だ。

「今日は次から次へと……人気者は辛いな」

鯖味噌を完食した天道は、代金をカウンターに置き、店の外に停めてあったバイクに跨り、颯爽と走り出す。加賀美も、店主に一言声をかけてから、慌ててその後を追うのだった。

人が少ない公園にやってきた、二人の瞬。

彼らだけでなく、ヒビキもネプテューヌも緊張している。なんせ、なんでこんなことになっているのか、全然分からないのだ。果たしてこれをどう收拾すればいいのだろうか。

二人の瞬は、互いに視線を一度たりとも外すことなく睨み合う。ピリピリとした、緊張感あふれる雰囲気を取り巻いていた。

「で、策って?」

「簡単だよ……あまり乗り気じゃないけど!」

ヒビキの疑問に、瞬は半ばヤケクソ気味にそう答えると、クロスドライバーを取り出して装着する。

「変身……っ!」

《CROSS OVER! 思いを、力を、全てを繋げ! 仮面ライダーアクロス!》

2人の瞬のうち、一方がアクロスに変身した。ファイフティは、あまり容易に変身するなど言っていたが、混乱した瞬の頭では、これくらいしか咄嗟に思いつかなかつたのだ。さて、これで証明になれば良いのだが。

「これで満足か?」

「そんなの証拠になるか! 俺から盗んだんじゃ無いのか?」

もう一人の瞬は、痛いところをついてきた。確かに、そう言われてしまえば、瞬には

それが事実無根であることを周りに証明することは困難。いわゆる悪魔の証明である。

そもそも、アクロスに変身したからといって、だからどうしたというのだ。変身した方がいいが、その後のことを考えついていない。つまるところ、無駄だった。

「どーすんだよもう……これじゃ俺、無駄に変身しただけじゃん……」

「殴ればいいんじゃないかな」

「いやでも自分で自分の顔を殴るのは気がひけるといっつか」

「いや何してんの。何やりたかったの。意味わかんないっての」

その場にしゃがみ込んで項垂れるアクロス。もう一人の瞬も、思わずツツコミを入れてしまう。

そこに、

「何ですかコレ……」

「灰司!!?」

先程別れたはずの灰司が通りかかった。彼もこの光景を見て、目を丸くしてしまっている。困り果てたアクロスは、解決できる出来ない関係なしに、兎に角この場に現れた新たな第三者に泣きついた。

「俺の偽者が出たんだよ!どうにかならないのかよ!!?」

「偽者か……チツ」

事情を知った灰司は、思わず舌打ちをしてしまった。

(ターゲット追跡中だというのに、面倒事起こしやがって……)

そう、彼はまだ転生者狩りの任務中。アクロスなんか結構つてる余裕は無いのだ。だがアクロスはというと、なんか割と本気で困っている様子。ここで放っておけば、アクロスとの関係に亀裂が入り、監視任務に支障をきたしかねない。それに灰司は「偽者」の正体に、ある程度の目処が立っていた。それが本当なら、尚更看過出来ない。

結局、灰司に逃げ道はなかった。不機嫌そうに低く唸りながら、灰司は両者の間に割って入ってゆく。

「偽者……擬態……可能性としては充分だが……」

ぶつぶつとそう呟きながら、瞬の前に立つ。

「えつと……まさか俺が偽者だとか言わないよな?」

「……」

「え、なんで黙ってるの」

不安からか、あからさまに取り乱しだす瞬。灰司は瞬の目の前で、腕を組んで考えこんでいるが、それが余計に皆を不安に誘う。見ているだけで、春の真昼間のはずなのに、妙な寒気を感じてしまう。

「あの一? 話聞いてま

その瞬間。

瞬の鼻頭に灰司の拳が思いっきり突き刺さった。

弧を描きながら吹っ飛ぶもう一人の自分の姿を、アクロスは何とも言えない表情で見ている。

そして数秒遅れて。

「はにやあああああああああああああああつ!?」

「結局殴ったあああああああつ!?」

（残念だが、ワームの擬態を見破る手段は無え。なら実力行使が確定だろ）

あんだだけ勿体ぶつときながら結局力づくという、拍子抜け極まりない結果に、幼女2人が思わず大声で突っ込むが、仕方がなかった。灰司には他に打つ手が無かったのだ。

ワームは人間の姿形だけでなく、記憶も完璧にコピーしてしまう。故に他人が見分けることは不可能。だから、こればかりは実力行使した方が手っ取り早いのだ。力づくでどうにかするしか無いという時点で、人間側には不利な2択なのだ。

「さてと、結果は……」

灰司は冷やかな目つきで、殴り飛ばされた方の瞬を見下す。

「何故、分かった?」

「偶々だよ。ただ、変身してる方より生身の方が殴りやすかったから殴っただけさ」

「お前酷えな」

「くそっ……!」

殴り飛ばされた方の瞬は、腫れた頬をさすりながら悪態をつく。すると、その姿は蜃気楼の様に揺らいでゆき、鈴虫の怪人のような姿——ワームへと変化していく。

「うわあつ!? 気持ち悪う!?」

「うげえ……」

「うわあああああつ!?」

「とりあえず助かった! 灰司は下がってる、あとは俺がやるから!」

こうなれば後は単純、倒すだけの事。皆を下がらせ、アクロスはワームに向かって突っ走る。ワームの両腕をがっしりと掴み、皆のいる位置から引き離してゆく。

それを横目に灰司はヒビキ達を避難させると、中断させられていた転生者の追跡を再開すべくスマホを取り出す。その画面には標的の位置情報が示されている。どうやらまだ動いてはいないらしい。それを知って思わず頬があがる。

「すみません、僕は用事があるので! では!」

とりあえず断りだけ入れておきながら、この場を立ち去る。後は灰司がいなくともなんとかなるだろう。この言葉が果たしてアクロスに届いているのかは曖昧だが。

仮面ライダーザビー・影山瞬である。昨夜オリジオンにコテンパンにされたせいで、頭に包帯を巻いていたり頬にガーゼが貼られていたり酷い有様だったが、それでも彼は任務にあたっていた。

ワーム発見の連絡を受けて現場に一番乗りしたかと思えば、ZECTが関与していないライダーの発見。これまでも散々ZECTに従わないライダー達に手を焼いてきたが、今回は全くの別。あれはZECTが作ったライダーですらない。そんなものがワームと戦っているとなると、流石に本人に問いただす必要がありそうだ。

「お前に恨みはないが、怪しい奴が調べられるのは当然のことだ。多少強引な手になるが、な」

影山はワームを追うアクロスの後ろ姿を見つめながら、自身の部下達にアクロスを追跡するように命令するのだった。

都内某所。陸橋の上を、1人の男が歩いていた。

ハンチング帽を被った長髪の男。手には大きなギターケースが一つ。彼の名は風間大介。女性に人気のカリスマ美容師にして、ZECT製のマスクドライダーシステムの適合者の1人である。だが、兎に角自由人な彼は、あまりその事を深く気にしてはいない。今日も、自分の腕を求める女性の元へと歩いていた。

が、そんな彼の目の前に、一つの人影が立ちはだかる。

「……風間大介だな」

「すまない、急いでいるんだ」

「仮面ライダードレイク……貴様も俺の踏み台になれ。太陽へ至る為の……な」

「お前、ZECTの関係者か？」

風間は、男の話を聞いて険しい表情になる。コイツは風間がライダーである事を知っている。ということは、ワームかZECTの関係者の可能性が高い。色々あつてZECTにあまりいい印象を抱けていない風間は、思わず警戒体勢をとる。

「話すことはない。話しても理解はできない。なぜなら、俺は太陽だからだ。全てを遍く焦がす者だ……！」

《KAKUSEI KABUTO》

男の全身にジツパーが浮かび上がり、それが一齐に開いてゆく。そして、まるで被っていた人間の皮を脱ぎ捨てるように、その姿が変化してゆく。中から現れたのは、先日ザビーを襲撃した、カブト似の怪物だった。

「向かい風、か……」

風間は商売道具の入ったギターケースをその場に置くと、懐から棒状の物体を取り出す。すると、どこからともなく、トンボ型のガジェット——ドレイクゼクターが風

間の元に飛来し、彼の頭上を旋回し始める。

そして、飛来してきたドレイクゼクターは、風間の持つ棒状の機械の先端に、まるで本物のトンボのように停まる。そのシルエットは、まるで銃のようだった。

「変身!」

《HENSHIN》

風間がそう言うと、ゼクターを持つ右腕を起点に装甲が形成されてゆく。風間

仮面ライダードレイクは、変身し終えるなりゼクターの引き金を引く。光弾がドレイクゼクターの口吻部分から発射され、怪物の身体に直撃する。しかし、あまり効いていないように見える。

怪物の方は、飛んできた光弾を腕で防ぎながら、ドレイクに一直線に突っ込んできた。

「ふんっ!」

「っ!」

振り回された怪物の腕を、ドレイクはマスクドフォームの厚い腕装甲で防ぐと、今度はドレイクゼクターの銃口を怪物の身体に密着させた状態で引き金を引く。ゼロ距離ならまた違った結果になるかもしれない。そう思いながら、ドレイクは引き金を引く。

ババババツ!!? と銃撃音と火花が連続して発生する。しかしそれでも怪物は怯まない。もう片方の腕が、ドレイクの側頭部に勢いよく叩きつけられ、ドレイクは陸橋

の手すりに身体を打ちつけられる。

「あまり乗り気じゃ無いが……ただでやられる訳にはいかないな」

ドレイクは元来戦うのはあまり好きでは無い性なのだが、相手は一筋縄ではいかなさそう。それに、いきなり戦いを挑んでくるような奴は総じてマトモじゃない。どうあがいても戦う以外に道は無い。

ドレイクは、避けられない戦いに憂鬱になりながら、ゼクターの尾の先端のグリップを引っ張る。

「キャストオフ」

《CAST OFF》

すると、ドレイクの装甲がパージされ、猛スピードで周囲に拡散していった。厚い装甲の下から、トンボのシルエットを模したようなデザインの頭部、翅を思わせるような形状の肩アーマー等が顕になる。仮面ライダードレイク・ライダーフォームである。

怪物は、飛んできたマスクドフォームの装甲を避けながら、ライダーフォームになったドレイクを見てほくそ笑む。まるで、それを望んでいたかのように。

「そうこなくちゃ面白くない。ザビーは雑魚だったからな。せいぜい足掻けよ？ お前が足掻けば足掻くほど、それを打ち破った俺はヤツに近づけるんだ」

「ヤツだと……？」

「ああ。お前はその為の通過点……踏み台になれ」

怪物はそうのたまうと、再びドレイクに向かって突っ込んできた。ドレイクはそれをひらりと躲すと、すれ違いざまに怪物の背中に肘鉄を入れる。そして、間髪入れずドレイクゼクターによる射撃も撃ち込む。

すると、怪物はぐるんと大きく身体を回転させ、回し蹴りを放ってきた。ドレイクは後方に飛んで躲すが、怪物の回し蹴りが当たった陸橋の手すりは粉々に砕け散ってしまった。装甲の薄くなったライダーフォームで、コイツの攻撃を受けるのはあまり良くはなさそうだ。

「ならば……クロックアップ！」

《CLOCK UP》

ドレイクは、腰のベルトについていたスイッチをスライドする。すると、ドレイク以外の全てがまるで止まったかのように遅くなる。クロックアップしたのだ。

「甘い。クロックアップ」

が、それで済むわけもなく。

怪物も負けじとクロックアップをして対抗してきた。ワームでもライダーでも無い存在が、クロックアップをして来たという事実には、ドレイクは驚きを隠せない。

「驚く事じゃ無いだろう。俺だってカブトだ。クロックアップくらい出来て当然だろう

「？」

「カブトだと……?」

「おっとお喋りはここまでだ。続きといこうぜ?」

怪物——カブトオリジオンは、早々に会話を切り上げると、ファイティングポーズをとる。会話の糸口は無し。むしろ戦う事を要求されている。ならば、どうしてもやるしかないのだ。

通常とは異なる時間の流れの中、両者は三度衝突する。

先手はカブトオリジオン。地面を勢いよく蹴り、瞬く間にドレイクの懐に潜り込み、腹部に強烈な一撃を加える。ドレイクの身体がくの字に折れ曲がるが、ただでやられるような彼ではない。がしりと、殴るために突き出したカブトオリジオンの腕をホールドし、そのまま思い切り捻りあげる。

骨を折る気マンマンの行動だが、そうはいかない。カブトオリジオンはドレイクの手を振り払うと、左肩を突き出してゼロ距離でタックルを仕掛け、ドレイクを退かせる。

「ハッハアッ!」

「うぐっ?」

鳩尾目掛けてハイキックを繰り出しも、ドレイクはそれを腕でガードする。そして、ドレイクはカブトオリジオンの顔面にドレイクゼクターの銃口を突きつけ、再びゼロ距

離で銃撃を浴びせる。流石に今度は効いたのか、カプトオリジオンの身体が若干蹠踉めく。

しかし、向こうはまだピンピンしている。すぐに体勢を整えると、カプトオリジオンは目にも留まらぬ速さで地を蹴り、跳び膝蹴りをかましてきた。

「くっ!!?」

猛スピードで迫り来る膝に対し、ドレイクは前方へと跳躍する。

(何をやる気だ!?)

わざわざ当たりに来たのか、とは思わなかった。ドレイクは、跳び膝蹴りの為に突き出されたカプトオリジオンの太腿に足を置き、さらにそれを踏み台にして高く跳び上がった。そして、カプトオリジオンの頭上を取った彼は、水平に広げていたドレイクゼクターの羽根を畳み、それを後ろに倒し、尾の部分についていたコックを引っ張る。

「ライダーシューティング!」

《RIDER SHOOTING》

その音声と共に引き金を引く。すると、銃口からサツカーボール大の光弾が、カプトオリジオンの脳天目掛けて発射される。真上からの一撃。カプトオリジオンは咄嗟に見上げる。

しかし、それは間に合わず。直後、カプトオリジオンの脳天に光弾が着弾し、彼を起

点に赤い爆炎が巻き起こった。

《CLOCK OVER》

「とんでもないヤツだったな……」

クロックアップを解除したドレイクは、息を切らしながら爆炎を見つめる。いきなり襲いかかってきたから否応なしに応戦したが、かなりの難敵だったのは間違いない。ともあれ、降り掛かってきた火の粉を払えたらのだから良しとしよう。ドレイクは踵を返し、その場を立ち去ろうとするが。

「残念……だったな」

その声を聞いて、ドレイクは戦慄する。彼の背後で、ゆらりと、爆炎の中から立ち上がる一つの影。

カブトオリジオンは、まだ死んでいなかった。

「な………!?？」

「ライダーキック！」

ドレイクが振り返るよりも早く、カプトオリジオンの回し蹴りがドレイクの胴体を横に切り裂くように直撃した。物体を原子崩壊に導くタキオン粒子を纏った蹴りが、ドレイクを一撃で変身解除に導く。

変身を解かされた風間大介は、口から血を垂らしながら陸橋の手すりに倒れかかる。握っていたグリップが手から溢れ落ち、ドレイクゼクターは空の彼方へと飛び去ってゆく。

「ぐ……うう……」

「大したことないな」

「何故、生きている……」

「単純な事だ。俺が強かったから死ななかつたんだ」

あつけらかんとした態度で答えるカプトオリジオン。その時にはすでに、風間の意識は薄れ始めていた。カプトオリジオンは、変身を解いて陸橋の下を見下ろす。パーカーのフードを深く被っているため、その顔はよく見えない。

「これで2人目か。さあ、次は……」

そう呟いた瞬間、陸橋の下を2台のバイクが通過した。それを見て、カプトオリジオンの変身者の頬がつりあがる。あのバイクには見覚えがある。前世から知っている。

「カプト……ガタック……丁度いい、リハーサルと洒落込むか」

2人のライダーを発見したオリジオン。まだ倒すべきライダーは残ってはいるが、今の実力を試すいい機会だ。彼は、打ち破った風間には目もくれず、陸橋の手すりを乗り越え、下の道路へと飛び降りていった。

一方、逃亡したワームを追って、人と人がギリギリすれ違えそうかという程狭い路地を走るアクロス。

擬態能力を持った奴を逃したら間違ひなく厄介なことになる。それは分かっているが、空飛ぶ敵を追跡するのは至難の業だ。ネプテューヌライドアーツを使えば空は飛べるが、あれは翼を大きく広げなければ飛べず、この狭い路地では翼を満足にひらけないし、とてもじゃないがバイクも使えない。つまり、アクロスが追いつける絶望的だった。

「H a h a ツ!!??」

頭上からワームが嘲笑うかの様な鳴き声をあげながら、衝撃波を放ってくる。狭い路地にいるアクロスはそれを避けることもままならず、モロに食らってしまった、ひっくり返り、近くに設置されていたエアコンの室外機頭を強打する。

頭を押さえながら起き上がるアクロスだったが、その時には既にワームはいなくなっていた。

「くそっ！思い切り舐めやがって！」

仕方なしに変身を解きながら、瞬は路地を抜け出す。するとそこは、学校の近くだった。先程いた公園よりも、家から遠い位置だ。無我夢中でワームを追っていたらかなり離れたところまで来てしまったようだ。置いてきたヒビキ達が心配になり、瞬は引き返そうとする。

そこに、

「おいアンタ、さっきの……」

「あ」

先程別れた筈の古城達と遭遇した。

「さっきの兄弟喧嘩……か？あれは丸く収まったか？」

「いや俺に男兄弟なんていねーよ……」
「たく、人間に擬態する怪人とか、この間も似たような奴と戦ったつてのによ……」

「擬態？戦った？」

「いやなんでもない。とりあえず、あれは兄弟でもなんでもないから。すまなかつたな、巻き込んでしまつて」

「あ、はい」

思わず初対面の人に対して愚痴つてしまい、慌てて誤魔化す瞬。あんなもの、無闇矢鱈に赤の他人に説明すべきではないだろうし。

「とりあえず大丈夫だから。ごめん、巻き込んでしまつて」
「なにも頭下げなくても……大丈夫大丈夫。へーきだから」

とりあえず、変なことに巻き込んでしまつたことは謝らねばと思い、瞬は頭を下げる。風沙は謝罪など必要ないと言うが、瞬としては、少なからず迷惑をかけてしまつたのだから、謝らなければならぬ。

「……？」

瞬は頭を上げるが、なにかが引つ掛かつていた。

(この子……なんか見覚えあるんだよな……)

そう。風沙の顔を見た時から、彼女の顔に見覚えがあるような気がして仕方がないのだ。思い出そうとしてもなかなか思い出せない。

「なんだよ、人の妹の顔をまじまじと見て……」

「古城くんやめなよー。なんか見苦しいよ？」

「いや、どつかで会つたような気がしたんだけど……気のせいかな？」

「おいお前、ナンパにしてもそれは稚拙すぎやしねーか？」

風沙の顔を見ながら必死に思い出そうと苦悩する瞬だが、その姿は完全に不審人物そのもの。故に先程から古城に警戒されまくっている。側から見れば謝罪した直後にこれなのだから、そりゃあそんな態度にならざるを得ないだろう。

ポケットに手を突っ込み、中でライドアーツをカチャカチャと触りながら考えている内に、瞬は思い出した。

（あ、もしかしてあの時の？）

そう。一ヶ月前、瞬はネプテューヌと出会う直前に、凧沙と会っている。転生者に襲われる直前の場面で偶然やってきて、結果的に彼女を守った。あの時は直後にガングニールオリジオンが襲いかかって来たので、色々と有耶無耶になってしまったのだが、どうやらあれから無事だったようだ。

「大丈夫……みたいだ。よかった」

「えっと、何ですか？」

「ああ、こっちの話。なんでもないから、ほんとに」

なんだか知らないうちに納得して、こちらを見て安堵の表情になる瞬に、戸惑いを隠せない凧沙。そりやそうだ。

「怪しいな……凧沙、こいつ知り合いか？」

「ううん、知らないよ？」

瞬が助けに入った時は凧沙は意識を失っていたため、当然ながら凧沙側からすれば面識はない。それが余計に古城と雪菜の瞬に対する不信感を募らせてゆく。こうなってしまうえばきつと何やっても怪しまれる。瞬は完全にドツボにはまっていた。

「うーん……」

「怪しいですね……」

なんとか記憶の違和感は払拭できたが、これまでの言動のせいで完全に不審者扱いされてしまっている。古城と雪菜からの警戒心バリバリの視線が痛々しく感じてくる。こりやたまらん、さつさと立ち去った方が無難だと思い、瞬は足早にその場を立ち去ろうとする。

「じゃあ俺はこれで——」

「おうせくーん、みーつけたっ！」

「!?」

その時だった。瞬が自分の通ってきた路地の方を振り返った直後、ねっとりとした不快な声が耳に入ってきた。路地の奥の方に目をやると、そこにはライダースーツの上から汚れた白衣を着たバルジがいた。

「俺ってやつぱりツイてるよなあ！ちよいと新兵器の試運転したいなーって思ってたらよお、的の方からやってくるとか、ホント最高だよなあ！」

「ギフトメイカー……何しに来たんだ!?」

「お前個人には恨みはないが……運が悪かったな。その原作キャラ共々コイツらの餌になつてくんねーかな？」

バルジはニタニタ笑いながらそう言うと、パチンと指を鳴らす。すると、上半身が炎に包まれた怪人と、朽ちた包帯を全身に巻いた怪人が、バルジの背後から瞬目掛けて飛び掛かってきた。

「やれ、イノケンティウス、タイヤード。さあ、貴様は新要素まで辿り着けるかな？」

「ブウウウウウウツ！」

「ギイイイイイイイツ!!？」

「っ！」

対話もへつたくれもなかった。顔を見せたと思ったら数秒で殺しにかかってきた。襲い掛かってくるからにはやるしかない、瞬はクロスドライバーを取り出そうとするが、

「危ないっ！」

「うおっ!!？」

雪菜が咄嗟に瞬を抱え、飛び掛かってきたオリジオン達を回避する。ズサアツ!と身体が地面に擦れる音を立てて、2人は地面に突っ伏した状態になる。

そして、雪菜と瞬を守るかのよう、古城が2人とオリジオン達の間立ちただかる。

「プツ！」

燃え盛る怪人 —— イノケンティウスオリジオンが、唾でも吐きかけるかのよう

に、小さな火の粉を口から吐き出した。ほっといてもすぐに消えてしまいそうなほど小さなその火は、古城の手前の地面に落下し——大きな火柱を生み出した。

「うわあつ!!?」

「きやあつ!!?」

火柱と共に巻き起こった熱風が、暁兄妹の身体を吹き飛ばす。古城の身体は瞬の後方まで吹つ飛んでゆき、風沙の身体は近くの街路樹に打ちつけられ、彼女の意識は瞬く間にブラックアウトする。

古城は身体を起こしながら、オリゾン達を見据える。古城には見覚えがある。先月、彼はオリゾンと戦った。あれは何故だか知らないが、矢鱈と古城を目の敵にしており、その必死さに古城は異様なものを感じずにはいられなかった。今目の前にいるオリゾン達も、同じだった。まるで彼らと自分達がこうして相對している事自体がひどく不自然であるかのような、そんな感覚だった。

「早く逃げろ!そいつらは危ない!」

「いえ、貴方こそ逃げるべきです。事情は存じませんが、貴方を狙った攻撃なのでしょう?ならば逃げてください。ここは私達がなんとかしますので」

雪菜はそう言うと、即座に立ち上がって持つていたギターケースを開け、その中身を取り出す。中にあったのは、楽器ではなく一振りの槍だった。冷たく輝く銀色の槍。そ

れはおおよそ、中学生の女の子が持つようなものではない。そんなものをさも当然のように取り出している彼女は、一体何者なんだろうか。

瞬はそんな事を考えながら、よろよると立ち上がる。兎に角、赤の他人である古城達を巻き込むわけにはいかない。狙いは自分なのだ。なら瞬が立ち向かえば済む話だ。それで周りへの被害が収まるなら万々歳だ。が、それを遮るように古城が声をかける。

「妹を—— 風沙を連れて逃げてくれ。事態はよくわからないが、あいつらがまともじゃないってのは十分わかった。そしてお前が標的らしいってのもな。なら選択肢なんかないに等しいだろ……お前が逃げるんだよ」

「おいまで、お前から本気であいつらと戦うってのかよ!!」

当然ながら瞬は反発する。瞬は古城が第四真祖であることを知らないし、古城は瞬が仮面ライダーであることを知らない。お互いに戦いに巻き込ませまいと相手を逃がそうとする、善意からなる言動なのだが、それ故に主張が平行線に陥ってしまう。

「ごちやごちや言ってる場合じゃ——」

古城の台詞が途切れる。イノケンティウスオリジオンが炎でできた剣を投擲してきたのだ。炎の剣は古城と瞬の間を突っ切り、はるか後方の郵便ポストに突き刺さり、ポストを燃え上がらせる。

確かに、ここで四の五の言っている余裕はない。瞬は、気絶した風沙の方を見る。人

命と怪人討伐。どちらが大事ななんて考えるまでもない。

「……任せていいんだな!?？」

「ああ。こう見えてこういう類のいざこざには慣れててな、妹を巻き込みたくはないんだ。だから風沙と一緒に安全圏まで逃げてくれるとやりやすい。結構派手にやるからな」

瞬としては、見ず知らずの他人にオリゾンとの戦いを任せるのは気がひけるが、戦えない人を逃すことが優先されるべきだということもわかっている。隣で倒れている風沙を背負い、瞬はこの場から離脱する。古城達がこの場を切り抜けることが可能かどうかは瞬にはわからないが、とりあえず今はこうするのが最善のように思える。ここで瞬が戦いに加勢したら、気絶している風沙を誰が守るというのだ。

「くれぐれもうちの風沙に変な気起こすんじゃないぞ」

「先輩は風沙ちゃんのことになるとほんと口煩くなりますね……」

「いくらなんでもほぼ面識のない女子中学生相手にそんな真似しねーよ……」

最後まで若干とげとげしい会話を終え、瞬は風沙を背負ってこの場から立ち去る。非戦闘員（瞬については古城達が勝手にそう判断しているだけだが）がいなくなつたことで、これでもやくやく戦いになりそうだ。なんせ古城の眷獣はどいつもこいつも馬鹿みた

いな破壊力の持ち主故に、周りへの被害が尋常じゃないのだ。

(大丈夫……なんだよな、あいつら)

古城は、風沙とともに逃げた瞬間のことを一瞬考える。瞬の先ほどまでの言動もあつてか、古城は瞬のことを信用できていない。しかし、だからといって瞬がオリジオンに襲われるのを静観するのも、妹を戦いに巻き込むのもお断りだ。

「おいおい、お前らは関係ないだろ。邪魔の極みなんだけだよおー」

「いきなり襲い掛かってきいてそりやねえよ。何者だ？」

「俺はギフトメイカーのバルジ。よろしく……つーか俺が悪いの？俺のせいじゃないし。近くにいたお前らが悪いんだし」

「何が目的なんですか？さっきの人はどういう関係で？」

「だーかーらーあー！部外者がごちゃごちゃうるせーんだよ！なんでお前らみたいなカスの一から十まで説明しなきゃならねーんだ！俺はお前らの親でも先公でもねーんだよ！とつとと実験兵器の錆にでもなんでもなつちまいやがれ！」

バルジは、本当はアクロス相手に試したかったようなのだが、古城達の強情っぷりに折れたのか、古城達で妥協することにしたようだ。やけくそ気味に、2体のオリジオン達に顎で指図し、古城達に襲い掛からせる。

「来ますー！」

「わかつてる！」

今日はもう厄介ごとから解放されたんだと思っていたが、どうやらそうではないらしい。どうあがいても、事件に巻き込まれる星のもとに生きているのかもしれない。

古城と雪菜は、一か月ぶりとなるオリジオンとの戦いに身を投じることとなった。

ビルの隙間を縫うように、2台のバイクが疾走する。

加賀美と天道、2人の男が戦場へと向かっていた。

「ワームはこの先だ！」

他に車も歩行者も居ない道を、バイクで猛スピードで駆け抜けようと、加賀美は更にバイクを加速させる。

その時、突然加賀美の目の前に人影が出現する。フードを目深く被った男が、何の前触れもなく2台のバイクの目の前に現れた。辺りには人つ子一人居なかつたはずなのに、だ。

「うわあつ!!？」

加賀美は慌ててブレーキをかける。バイクは男の直前でギリギリ停止するが、人身事故が起きる寸前だったにも関わらず、男の方は微動だにもしない。

「お前——」

「昨日の続きをしよう、ガタツク」

「!!?」

加賀美の声を遮るように、男が話しかけてくる。その発言内容を聞いて、加賀美と天道は即座に男を警戒する。マスクドライダーシステムを知っているということは、間違いなく一般人ではない。

男は、鼻で笑いながら加賀美のバイクを蹴飛ばす。すると、バイクは加賀美を乗せたまま宙を舞い、天道の後方の歩道橋の上へと打ち上げられてしまった。加賀美は途中でバイクから転落するも、受け身をとって華麗に着地し難を逃れる。

「まともな人間じゃないな、お前」

「何を今更。変身」

《KAKUSEI KABUTO》

男はそう言うのと、全身に力を込め、怪物——カプトオリジオンの姿へと変身する。

「お前は昨日の……!」

「昨日は邪魔が入ったが、今回はそうはいかない。3人目の踏み台はお前だ」

「3人目……すでに2人目を倒したという事か」

「そうとも。今回はリハーサルを兼ねるからな、容赦しないぞ」

カプトオリジオンは歓喜で身体を震わせながら、天道達の方へと歩み寄ってくる。そ

れに呼応するように、空の彼方から目にも止まらぬ速度で、2つの鉄の塊が飛来する。一つはガタツクゼクター、もう一つは、赤いカブト虫型のガジェット——カブトゼクター。

加賀美はガタツクゼクターを、天道はカブトゼクターをキャッチすると、あらかじめ腰に巻いていたライダーベルトにゼクターをセットする。

「変身っ！」

「変身！」

《HENSHIN》

《HENSHIN》

すると、ベルトを起点に厚い重装甲が天道と加賀美に纏わりついてゆく。それが全身を覆い切ると、両者それぞれの複眼が光る。

仮面ライダーガタツクと、仮面ライダーカブト。

その姿を見て、カブトオリジオンは目に見えて興奮する。

「さあ、腕試しといくか！カブトオー！」

その頃、瞬は風沙を背負って逃げていた。

まさかほぼ初対面の女の子を背負って逃げる羽目になるとは思わなかった。果たし

て古城達は無事なのだろうか、やはり自分が言った方が良かったんじゃないだろうかと
考えてしまうが、向こうは瞬が仮面ライダーである事なんて知る由もないし、風沙の安
全性を考えるとこれで良かったのだと瞬は思っていた。

「はあっ……、はあ……」

少なくともここまで来ればマシだろうと、瞬は風沙を下ろしてその場に座り込む。女
子中学生を背負って全力疾走したのだ。いくら戦いの中で身体が鍛えられつつあると
いつても、これはキツイ。

というか、押し付けられたはいいが、その後のことを何にも考えていなかった。風沙
はまだ起きない。果たして瞬は、ちゃんと風沙を古城の元に帰してやれるのかだろう
か。

「どーすんだよもう……いやまあ、この子のことも心配だけどさあ」

近くのフェンスに手をつきながら、これからどうしたらいいのかを考えていた瞬。そ
ここに、

「瞬!?? どーしたの一体!??」

「唯!??」

なんと、偶然にも唯と鉢合わせしてしまった。なんとという幼馴染みパワー。しかしど
うしてこんな時に限ってやたらと知り合いに出くわしてしまうのか。まるで物語の導

入が下手糞なライトノベルみたいだ。

「いやあ、こうして会えるなんて……私達ってそれほど強固につながっているってコト？」

「なんかその言い方やだなあ……」

「で、背中にJ.C女子中学生背負って何してるの……？まさかとは思うけど誘拐とか……？」

「俺がそんな真似すると思ってるのか？」

案の定、背中の風沙のことを突っ込まれてしまった。確かにこれは誤魔化しようがない。戦いに巻き込ませまいと考えての行動だったのだが、内心後始末的なヤツはどうするんだと瞬は頭を抱えていた。

とりあえず唯に事情を話す。唯がそのまま引き下がってくれる可能性は皆無だし、それなら問題を共有させて一緒に悩んだ方がいくらかましだ。

「かくかくしかじか」

「へえ……（適当）」

今ので伝わったのか……と、唯の適当そうな相槌に不安を感じる瞬。

「とりあえず瞬、その子は私がおぶりますのでご安心を。てかヒビキちゃんたちほつぱりばなしでしょ？一旦回収するなりなんなりしてあげたら？」

「助かる……ちよつと疲れてきたところだったんだ」

唯の言葉で、瞬はヒビキとネプテューヌの存在を思い出す。すぐに戻ってこられると思つてあの場に置き去りにしてきたのだが、随分と厄介な状況に放り込まれてしまったみたいだ。あのまま放置しておくのはよくない気がするが、かといつてすぐに帰れそうにない。一応彼女らもそこまで子供じやないので、電話で先に帰つておくようにでも言つておくかとスマホを取り出し、ネプテューヌに連絡する。

しかしいくら掛けねど応答はない。スマホゲームのし過ぎで充電切らしたりでもしてるのか？とため息をつきながら瞬は空を見上げる。先ほどまで綺麗な青空が広がっていたが、今は圧倒的曇天。今にも雨が降り出しそうな空模様だ。

「勝手にうろちよろしてなきやいいけど……特にヒビキはすぐ人助けに走るから……」
「あはは……よっこらせつととつ」

瞬に代わつて唯が風沙を背負うが、立ち上がろうとした際に少しよろけて数歩後退する。

そこに、ストンと。

先ほどまで唯が経っていた場所に、ギラギラとおぞましく刃を光らせたサーベルが突き刺さっていた。

思わず、二人の呼吸が止まる。

予兆はなかった。ただ、一瞬のうちに、さも最初から当然のようにそこに存在していたかのように、一振りの剣がアスファルトに斜めに突き刺さっている。自分が知らないうちに、ほんのちよつとの偶然で死を回避していたという事実^に気づいた唯は、みるみるうちに自らの血の気が引いていくのを感じた。

サーベルを使う人物に、瞬は心当たりがある。なんせついこの数日前にも戦ったのだから。サーベルの突き刺さり方から飛来してきた方向を判断し、その方向を向いて瞬は叫ぶ。

「出て来いよ……レイラ……」

その声に呼応するように、閑静な団地内に乾いた靴音が響き渡る。瞬たちの前方には、美麗な軍服を身に纏った銀髪の少女の姿。

ギフトメイカー・レイラ。三度^{みたたび}、瞬を殺すためにやってきたのだ。彼女は、ハイライトの存在しない瞳を向けながら、感情のまるで籠っていない冷たい声で出会った喜びを語る。

「会えてうれしいよ、アクロス」

「全然そうは見えないけどな……」

「早速死ね」

それはあまりに唐突だった。会話の流れを意図的にぶち壊すように、レイラはどこからともなくサブマシンガンを取り出し、瞬めがけて弾丸を撃ち放った。瞬は咄嗟に横に跳んで回避する。弾丸は瞬の背後のフェンスを貫き、その向こう側にあつた団地の駐輪場を瞬く間に鉄くずへと変えてしまう。粉碎された自転車車の残骸やら駐輪場の天井のベニヤ板やらが周囲に散乱する。

これはまずい。明らかにまずい。というか今日は何だというのだ。ギフトメイカーはアクロスなんぞ脅威とは思っていないとのたまっていた癖に、今日に限ってやたらと瞬に襲い掛かってくるのは。もとよりあんまり信じる気にはなれなかったが、やはりあの発言はただの戯言だったということなのか。

兎に角、瞬がすべきことは決まっている。

「唯、その子を手を連れてここから離れろ！」

「大丈夫なの!! ねえ!!」

「大丈夫に決まってるだろ。てめえの幼馴染みだろ、信じてよ」

精一杯強がりながら、瞬は唯に風沙を連れて逃げるように呼び掛ける。きつと向こうもこれが強がりだつてことはわかっている。今の瞬ができることは、二人を戦火から逃がすことと、この強がりを実際に変えることのみ。

「じゃあ信じる! 勝手に事件に巻き込まれて勝手に勝手にお陀仏とか許さないからね!」

「死ぬ気も死なせる気もさらさらねえよ！」

レイラのサブマシンガンから放たれる横殴りの銃弾の雨を必死に避けながら、唯と約束をかわす。唯はいまだ目覚めない風沙を背負い、レイラに単身立ち向かう瞬を横目にその場から逃げ去る。その後ろ姿をちらりと見た後、瞬はアクロスに変身すべくクロスドライバーを取り出そうとする。

しかし、レイラはそれを許さない。弾倉が尽きたサブマシンガンを放り出し、また新たなサブマシンガンをその手に持つ。そして、それを瞬めがけてぶつ放す。瞬はクロスドライバーと取り出す暇もなく、弾丸の雨に降られないように回避を余儀なくされる。これでは変身はおろかドライバーを取り出す余裕すらありはしない。

「くそ……武器の貯蔵は十二分ってか！いつまでこんな理不尽な鬼ごっこを続けなければいんだよ!!」

「無限にだ。私の武装に制限はない。なんせいくらでも生み出せるのだからな」
「物質創造！それがお前の転生特典か……！」

武器を創造する。単純ながら厄介な能力だ。なんせそんな能力があれば、まず消耗戦が無意味と化する。武器の消耗という概念が一切ない。体力を度外視すればいくらでも戦えるのだから。銃が弾切れになったら新しく残段MAXの銃を生成すれば済むし、剣が折れれば新たな剣を生み出せばよい。

だがそれ以上に、あらゆる武器を使いこなすレイラの戦闘技術が厄介なものとなっている。瞬は戦闘のプロというわけではないので断言はしかねるが、レイラは強い。瞬からすればまさにそれは鬼に金棒だった。

しかしレイラは、瞬の発言を聞いて何か可笑しい所を感じたのか、弾丸の尽きたサブマシンガンを投げ捨てながら笑う。

「転生特典だと……？随分とおかしなことを言うな」

「え？」

「これは転生特典ではない。私の生まれ持った能力だ」

てつきり瞬は、ギフトメイカーは全員転生者なのだと思っていた。しかし彼女は転生特典を持っていないという。瞬は転生者についてはまだ詳しくない為、それがどういふことかは分からない。

だがレイラは、この程度の情報を漏らそうが別に構わないといった感じに、瞬の疑問を払拭するような発言を重ねる。

「そもそも私は転生者ではないからな。オリジオンとしての姿を期待していたようだが残念だったな。それともなんだ、よもや人間の姿をした相手じゃ戦いづらいつらいとか言うんじゃないだろうな？」

瞬は答えなかつた。

「ああ答える必要は無いよ。今ここでお前は死ぬんだからな」

拳銃を連射しながら、レイラはじりじりと瞬との距離を詰める。間一髪で瞬はそれを避けていくが、とうとう退路がなくなってしまう。T字路の突き当り、背後は高いフェンスをはさんで線路。横に逃げようにも、フェンスをよじ登ろうにも、その前に撃たれる。

「終わりだ、アクロス——！」

「——！」

冗談じゃない。こんな幕引きがあつてたまるか。こうなればイチかバチか、撃たれる覚悟で動くしかない。レイラの引き金にかけられた指と、瞬が動き出そうとする。

その時だった。

《KAKUSEI KABUTO》

すぐ近くで、そんな音がした。その音を聞いて、瞬もレイラも動きを止める。

この禍々しい音声には聞き覚えがある。転生者がオリジオンに変身する時のものだ。これが出たということは、近くで誰かがオリジオンに変身したということ。瞬は頭を右に向ける。

そこには、赤いカブトムシのような姿をした怪物と、それと相対する二人の男の姿があった。怪物の姿に瞬は見覚えがある。間違いない、昨日から瞬が追い続けていたオリ

ジオンーカプトオリジオンの姿があった。

「お前は昨日の……!」

「昨日は邪魔が入ったが、今回はそうはいかない。3人目の踏み台はお前だ」

「3人目……すでに2人目を倒したという事か」

「そうとも。今回はリハーサルを兼ねるからな、容赦しないぞ」

カプトオリジオンが、男たちに接近する。まずい、このままでは彼らが危ない。しかし、瞬はいまレイラに殺されようとしている。いったいどうして助けることができようか。焦燥にかられる瞬だったが、そこに、どこからか虫の羽音のようなものが聞こえてくる。空を見上げると、空を覆う雲の隙間から、何か猛スピードで地上に向かって落ちてきているのが見えた。

赤いカプトムシ型のガジェットと青いクワガタムシ型のガジェット。それは風を切る勢いで飛来し、レイラの手から拳銃を叩き落としつつ、男たちの掌へと収まってゆく。

「変身っ!」

「変身!」

《HENSHIN》

《HENSHIN》

すると、ベルトを起点に厚い重装甲が二人の男に纏わりついてゆく。それが全身を覆

い切ると、両者それぞれの複眼が光る。上半身は厚い装甲に覆われている一方、下半身は相対的に装甲が薄いように見え、黒地のアンダースーツが目立っており、どこかアンバランスなものを瞬は感じている。

(なんだ……あれ)

あれもライダーなのか……？と疑問に思う瞬。しかし、その疑問を抱いている場合ではない。レイラの手元から武器が消えた今がチャンスだ。瞬はクロスドライバーとアクロスライドアーツを取り出し、即座にアクロスに変身する。

「変身！」

《CROSS OVER！仮面ライダーアクロス！》

そのままレイラの頭上を飛び越えて、彼女の背後へと回り込む。

レイラは、さんざん妨害していたアクロスの変身を予想外の存在に邪魔されたことで、あからさまに不機嫌になり、サーベルを両手に出現させて斬りかかろうとする。

しかし、その直前、何の前触れもなくレイラの手からサーベルが零れ落ちた。攻撃に對して身構えていたアクロスは、来ると思っていた攻撃が来なくなったことに困惑を隠せないでいる。

「時間切れ……か……！」

忌々しそうにつぶやくレイラの手は震えている。いや、手だけではない。彼女の身体

はほとんど動かなくなっていた。手も足も、今の位置から前に出すことができない。まるで何かに止められているようだ。それでも彼女は、無理矢理身体を動かしてアクロスを殺そうとする。なぜなら、それが彼女の存在価値だからだ。

しかし、彼女の身体は言うことを聞かない。どうすることもできなかった。レイラとしては大変不服だが、ここは撤退するしかない。レイラは、少し離れた位置で戦闘を始めたカブトオリジオンに呼び掛ける。

「チツ……いとりあえずそこのお前、アクロスの始末を任せただぞー！」

「待てー！」

アクロスが駆け寄るよりも早く、レイラの足元にジツパーが出現し、それが開く。レイラの身体は、ジツパーが生み出した漆黒の穴の中へと沈んでゆく。逃げる気だ。しかしアクロスも黙って見ているわけにはいかない。アクロスもそのあとに続こうと、地面にできた漆黒の穴へと足をのぼす。

しかし、穴はアクロスを拒絶した。踏み出した足には、しっかりとした地面の感触が伝わってくる。穴が開いているはずなのに、落ちない。レイラは問題なく穴の中へと沈みこんでいるというのに、だ。

「覚えていろよアクロス……お前は必ず私が殺す……いー！」

恨み言を吐きながら、レイラの全身が穴の中へと沈み切り、それと同時にジツパーが

閉じて焼失する。その目は、最後までアクロスをにらんでいた。

いったい何が起きたのかさっぱりわからないが、とりあえずレイラは去ったようだしきなり殺しに来たいてそれを完遂することなく勝手に帰るとか何しに来たんだろうかと思いたくなる。なんだか拍子抜けした気分だ。

「いやいや！ オリジオンがまだいるだろ！」

そう。まだ戦いは終わってはいない。近くでは謎のライダー2人がカプトオリジオンと交戦中だ。ならば加勢しない手はない。アクロスは謎のライダー——カプトとガタックに加勢すべく、オリジオンめがけて走り出す。

「とりゃあー！」

カプトと殴り合っていたカプトオリジオンの背後から、アクロスは跳び蹴りを仕掛ける。カプトとガタックに集中していたオリジオンはそれを事前に察知できず、背中にもろに蹴りをくらってしまう。

昨夜アクロスと遭遇しているガタックは、アクロスの姿を見て驚く。

「お前は昨日の……！」

「どうした加賀美」

「こいつは昨日現れた謎のライダー……！」

ガタックからすれば、アクロスは敵か味方かわからない素性不明の存在だ。警戒する

のも無理はない。

「お前はいつたい何者なんだ!!」

「話は後でする! 少なくとも俺達の敵は共通、ならば今はとにかく共闘した方がいい!」
いろいろと事情を説明すべきなのだろうが、今はオリジオンをどうにかするのは最優先だ。とりあえずお互いの敵が共通であることを告げ、共闘を持ちかけようとする。

カプトオリジオンは、完全なる部外者であるアクロスが乱入してきたことが気に入らなかったようで、回し蹴りをアクロスに叩き込み、近くのフェンスへと叩きつける。

「有象無象がごちゃごちゃと……! アクロス、そんなに俺の糧になりたいのか? なら望み通り打ち倒してやるよ!」

「ぐ……………」

「らあああああ!」

すかさずガタツクがオリジオンに殴りかかるが、オリジオンはそれを片手で難なく受け流し、仕返しといわんばかりにガタツクの胸に肘鉄を打ち込み、腹に蹴りを打ち込んでガタツクを吹き飛ばす。

「弱いな。これならさっきのドレイクの方がマシだった」

「お前……既に風間を!!」

「ああ。俺はすべてのライダーを倒す。俺こそが太陽なのだから!」

「??」

状況が読み込めないアクロスをよそに、カブトとガタツクはゼクターホーンを動かす。すると、カブトとガタツクを覆っていた厚い装甲が一气にはじけ飛び、周囲に拡散する。アクロスは咄嗟に腕でガードして顔を守るが、そもそも鉄の塊が猛スピードで飛んできて無事に済むはずがない。ガードした腕に跳んできた装甲がぶち当たり、鈍い痛みが両腕に走る。

マスクドフォームからライダーフォームに変身したカブトは、顎から下に向かって伸びていた角が上がり、複眼が青く光る。そのフォームは先ほどまでとは異なり、非常にスタイリッシュなものに変化していた。ガタツクの方も、折りたたまれていた側頭部の角が上がり、複眼が青く発光する。

《CHANGE BEETLE》

《CHANGE STAG BEETLE》

「あれは……!」

アクロスはガタツクの方には見覚えがあった。昨晚カブトオリジオンを追っていた際にその姿を目撃したからだ。しかし、マスクドフォームの方は見ていなかったのだ、この時まで気づかなかったのだ。

ライダーフォームになったカブトとガタツクを見て、さらに感情を昂らせるオリジオ

ン。

「ようやく本気を出したか……さあ、俺の速度に付いて来い！クロックアップ！」

「クロックアップ！」

《CLOCK UP》

すると、アクロス以外の3人の姿は一瞬にして消え失せてしまった。先ほどのワームの時と同じだ。

「またこれだ……一体皆どこに消えたんだ?!」

クロックアップに対抗するすべはおろかその存在さえ知らないアクロスでは、はなから同じ土俵に立つことすら不可能だった。たとえ脅威への対抗策がなくとも、脅威の存在さえ知っていれば最低限助かる道は開ける。しかし、脅威を認識さえできないとなると話は別。早い話、この時点でアクロスがカプトオリジオンに勝利することは不可能だった。

困惑しながらあたりを見渡すが、常人にはクロックアップの世界を認識することは不可能。そんなアクロスの背中に、クロックアップの世界からオリジオンの一撃がやってきた。

「ぐうううううっ?!」

背中に衝撃が走ると同時に、アクロスの身体が宙を舞い始める。それを認識した時に

はずでに、アクロスの胸部に二撃、加えられていた。キツクなのかパンチなのかすらわからない。ただ攻撃されたという結果だけがアクロスの認知下に加えられる。

先ほどとは反対方向に吹き飛ばされるアクロス。しかし、そこにさらなる攻撃が加えられ、アクロスの身体は再び逆の方向へと吹っ飛んでゆく。その様子は、まるでアクロスをボールに見立てた、透明人間たちのバトミントンのようであった。

(何がおきてるんだ……まったくわからねえ！)

手も足も出なかった。クロックアップの世界にただ一人はいることのできないアクロスが集中攻撃されるという結果。一撃しか加えていないにもかかわらず、すでにアクロスはポコポコにされていた。

それでも立ち上がる。きっと手はまだあるはずだ。考えろ、思考をやめるな。諦めなければまだ手は――

《RIDER STING》

「え」

立ち上がった直後だった。

突如としてとびかかってきた仮面ライダーザビーのライダーステイングが、がらあきのアクロスの胸に直撃した。

「ぐあああああああつー！」

もとよりワームやオリジオンのクロックアップで一方的にやられていたアクロスはその一撃で変身解除にまで追い込まれる。クロスドライバーは瞬の身体から外れ、道路の反対側まで滑るように転がってゆく。瞬は衝撃で5メートルほど吹っ飛ばされ、近くの電柱に身体を強く打ち付けられた後、地面に落ちる。

先ほどから理解が追い付かない。瞬を置き去りにしているいろいろなことが起こりすぎている。瞬は立ち上がろうとするが、身体に力がうまく入らない。まるで羽をもがれた虫のようにもがく瞬のもとに、変身を解いたザビー——影山が姿を現す。

「なんだ……お前……！」

「それは此方の台詞だ。上の命令なんだよ、ZECTの関与しないライダーシステムの存在が確認されたから本部まで連行しろってな」

「ZECT……？ライダーシステム……？いったい何のことだ……？」

満足に動けない瞬を取り囲むように、大勢のゼクトルーパーが現れ、瞬の両腕をつかみ上げる。銃を突き付けられた瞬に、影山は言う。

「さあ、本部まで同行してもらおうか」

「これ強制連行だと思っんですがそれは」

その頃。

公園に残されたヒビキとネプテューヌ。

「瞬、まだ戻らないね」

「だね」

ワームを追って行ったきり、瞬が戻ってこない。すぐに戻ってくるだろうと思いが、待ってみたものの、戻らない。

ヒビキとネプテューヌは、ある一つの可能性に至る。それはアクシデントの発生。予想以上に苦戦しているのか、はたまた別種の厄介ごとに巻き込まれているのかは定かではないが、どうやらこれは長い待ち時間になりそうだ。

「先帰っちゃおう？」

「なら連絡でもいれなきゃね」

こうなったら先に帰ってしまおうと考えたネプテューヌは、その旨を瞬に伝えるべく、スマホを取り出し電話をかける。が、電波状況が悪いのか、繋がらない。液晶に映

るアンテナマークはゼロ。こりやだめだ。

「あつれー？電波通じないぞーおつかしーなー？」

「ちよつとねぶねぶ、何処行くのー？」

「電話かけようにも電波通じてないみたいだから、ちよつと通信環境いい場所求めて旅に出てくるねー」

「ならあんまり遠くまで行かない事、いいね？」

「はーい」

通信環境の良い場所を求めてネプテューヌは公園から離れてゆく。1人残されたヒビキは、トイレにでも行こうとする。
が。

「駄目じゃないか、一人でこんな場所にいたら」
え

瞬間、ヒビキの視界が真横に倒れた。

ドサリと音を立てて、ヒビキの身体が地面に倒れる。遅れて感じてきた側頭部の痛みで、ようやく自分が殴り倒されたのだとヒビキは理解した。

なんとか視線を上に向け、ネプテューヌに助けを求めようとするが、更なる一撃が頭頂部に炸裂する。頭部への二撃による痛みで意識が徐々に薄くなつてゆくヒビキに、頭上から声がかけられる。

「運が悪かった、なんて思わないでくれよ。悪いのは運じゃない、君なんだ。だつて一番近くにいたんだ。君みたいな弱い女子供が一人でいるなんて、どうぞ好き勝手して下さいと言つてるようなもんじゃないか、ねえ？」

声の主は、しやがみ込んでヒビキの顔を覗き込む。レザージャケットを着た金髪の男だ。一見するとただ笑っているようにしか見えないが、その瞳は酷く無機質。転生者特有の、人を人として見ていない目だ。その発言も、支離滅裂な自己正当化にすぎない。ヒビキは知る由もないが、彼の名は司馬神真。灰司が追跡していた転生者だ。

「転生者狩りの追跡も振り切れたし、これで漸く趣味に没頭できる。ああ興奮してきちゃうなあ……」

(ねぶ………てゅー………)

司馬の遙か後方には、この場から離れてゆくネプテューヌの後ろ姿。朦朧とする意識

の中で、ヒビキは助けを求めようと手を伸ばすが、その喉からは既に声が出ることなく、彼女の意識は途絶えた。

意識が完全に落ちたヒビキを縛り上げると、司馬はウキウキ気分でヒビキを担ぎ上げてその場を立ち去る。彼の向かう先には一台のワゴン車。

助けは、来ない。

第23話 太陽に近づく飛翔（イカロス・ハイ）

—— 嗚呼愚かなイカロス。

—— 蠟の翼で空へと羽ばたいたイカロス。

—— 太陽に翼を焼かれ、地に堕ちたイカロス。太陽に近づいたが故に、彼はその身を滅ぼした。

ただそれだけの話だ。

これは、太陽に焦がれて次元を超えた男の、破滅への道筋。

カプトオリジオンと交戦を続けていたカプトとガタツク。クロックアップが終了してもなお、3人は戦う。

それを横目に、影山は乗ってきた装甲車へと瞬を連行する。自分をうちのめし馬鹿にしたカプトオリジオンは気に入らないが、それよりも任務が優先される。私怨をぐつと

こらえ、抵抗する瞬を車内へと無理矢理押し込もうとする。

が、ガタツクがそれに気づいた。影山の行動は、傍から見れば民間人を無理やりどこかに連行しているようにしか見えなかった。

「おい!! なにやってるんだよ!!」

カプトオリジオンがカプトと殴り合っている隙をつき、ガタツクが影山に詰め寄る。

「こいつは昨夜お前が目撃した未確認ライダーだ。こいつが何者であれ、詳しく調べるのは当然だろ?」

「だからって……」

「逃げんなよガタツクウ……! お前は俺の糧になるんだよ!」

影山に反論しようとしたが、戦いの最中話し合いをしているのが気に食わなかったカプトオリジオンが、カプトの頭上を飛び越えてガタツクの元へと着地し、横から飛び膝蹴りでどついて会話を終わらせる。頬に膝が直撃し、サッカーボールのように吹っ飛んでゆくガタツク。カプトオリジオンは、影山の方を一瞥すると、

「負け犬に興味はない、とっとと失せろ」

と、あからさまに影山を見下したような反応を示す。影山はそれに怒りをあらわにするが、

「お前との勝負は昨晚ので着いただろう? 俺はお前より強い。お前は俺より弱い。その

「事実が変えられるとでも？」

「貴様あ……！一度勝ったくらいで調子に乗りやがって……！」

「俺とお前とでは勝負にならない。矢車ならまだまつとうな勝負になったかもしれないが……お前じゃどのみち無理だな。俺ははじめから結果が見えている勝負にかまけている暇はないんだ」

全否定であった。言いたいだけ言うと、カプトオリジオンは影山の前から去り、立ち上がったガタツクに再び攻撃を仕掛け始めた。

それは、頭の傷口が開きそうなほどの屈辱だった。噛み締めた唇からは血が滲んでいた。しかし、本人の言う通り、カプトオリジオンは強い。ましてや今の影山はまだ怪我が完治していないため、彼の言う通り勝負にならないかもしれない。

「隊長、搭乗完了しました」

「あ、ああ……よし、この場を離脱する」

部下からの報告で我に返った影山は、装甲車に乗り込みこの場から離脱を始める。

「待てー！」

「戦いから逃げるな！」

「ぐふっ！！」

動き出した装甲車を追いかけてやうとするガタツクだが、戦いから逃げることを許さな

いカプトオリジオンがその腹を蹴り上げて妨害する。

その後から、カプトのクナイ型武装・カプトクナイガンの刃が襲い掛かってくる。カプトオリジオンは、それを振り返ることなく片腕で防ぎ、身体を素早く捻って回し蹴りをくりだす。

「ふっー！」

カプトオリジオンの回し蹴りに対し、カプトはハイキックで応戦する。両者の足がぶつかり合い、膠着状態に陥る。ぐぐぐ、と力を込めて、互いに互いの足を力で押し切ろうとするが、両者とも譲らない。

「今だー！」

そこに、オリジオンに鳩尾を蹴られてダウンしていたガタツクが、肩のガタツクダブルカリバーを、オリジオンに向かって投擲した。オリジオンはそれを避けるべく、あげたままの足を素早く下ろし、上半身をマトリックスの如く大きく後ろに逸らしてそれを避ける。

ガタツクはすかさず残ったもう一振りのカリバーを投げる。オリジオンは上体を逸らした体制のまま地面に手をつくすと、バク転をしながら飛んできたダブルカリバーを蹴って弾いた。

「なっ……！」

ブーメランの如くもどつてきたダブルカリバーを肩に戻して、ガタツクはオリジオンに向かつて走る。そしてオリジオンに向かつて飛び蹴りをかます。

しかしオリジオンはそれをパンチ一つで返り討ちにした。ガタツクが地面に落ちると同時に、今度はカブトの猛攻が始まる。

「来い、カブト！」

「——！」

オリジオンの挑発を意に介さず、カブトはオリジオンの胸部を貫くような鋭いパンチを繰り出す。オリジオンはそれを防御する素振りも見せずにモロに喰らうが、あまり効いていないように見える。

カブトはそれに動じる事なく、オリジオンの首元目掛けて反対側の腕を振り下ろす。オリジオンはそれも防ぐことなくそのままうける。

「どうした、お前の力はずっと上だろう！」

オリジオンはそう叫びながら、カブトの腕を掴もうとするが、カブトは素早く腕を引き、逆にオリジオンが伸ばしてきた腕をへし折る勢いでチョップを振り下ろし、オリジオンの腕を叩き落とす。

「まだ隙が多いな」

「ああ、だが俺はまだ強くなる。あんたを倒せるほどになー！」

何がこのオリジオンの、カブト打倒という執念を滾らせているのか、誰にも分らない。ただ、彼は本気でそれをやろうとしていること、その熱意だけはガタツクにもカブトにも伝わってくる。

オリジオンは雄叫びをあげながらカブトに殴りかかるが、カブトはその拳を容易く打ち払い、返しにオリジオンの脇腹に拳を叩き込み、オリジオンの頭を殴り倒す。

「はあっ!」

「ぐあっ!!?」

カブトのハイキックを腹に受け、オリジオンは大きく吹っ飛ばされる。カブトはオリジオンの方に悠々と歩を進める。

「トドメを刺す!ライダーキック!」

《1、2、3……RIDER KICK》

「ライダーキック」

《1、2、3……RIDER KICK》

カブトとガタツクは、それぞれゼクターに付いているボタンを押しした後、ゼクターホーンを左に倒し、再度右に倒す。すると、ゼクターからタキオン粒子が、頭部の角を経由して右足に流れ込む。

そして、ガタツクはオリジオンの方に走りながら飛びかかり、跳び回し蹴りを、カブ

トはオリジオンの至近距離まで近づいて回し蹴りを、同時に叩き込む。

ダブルライダーのキックが直撃し、オリジオンは膝をつく。流石にこれで倒れただろうとガタツクは思っていたが、どうやら違うようだ。

「ぬう……ぐ、ぐうおおおおおおおおおっ！」

渾身の雄叫びをあげながら、オリジオンは立ち上がった。その直後に人間の姿に戻ったが、彼は身体の随所から血を流している。満身創痍だが、まだ生きていた。

「なっ……まだ生きているのか??？」

「当たり前だ……俺が負けるはずが無い！だがこれでハッキリしたよ……俺がまだ力不足だということがね……」

「まだやるのか」

「ガタツクとあと1人、そいつを倒したら再戦とする。お前との決着を待っているぞ、カブトー！」

「まっ……」

オリジオンだった青年はそう吐き捨てると、常人離れた跳躍力で隣の線路を飛び越え、線路の向こう側へと逃げていってしまった。

2人は変身を解く。そして加賀美は、オリジオンの捨て台詞で、ある事に気づく。

「あと1人……まさかアイツも??？ 天道、俺は奴を追う。お前は影山を追ってほしい」

「まったく、ZECTも懲りないな。これではまるで悪役のする事だ」

加賀美はそう言い残し、即座にバイクで走り出す。というか、陸橋の上まで投げ飛ばされていたはずだが、一体いつの間に近くに持ってきたのか、そしてよく壊れていなかったな、とか突っ込んではいけない、いいね？

天道としても、先程のライダー——アクロスについては多少ながら気になってはいるし、ZECTが組織外のライダーについてあまりよく思っていないことから、影山に連れ去られた少年がロクな目に合いそうにないというのは容易に考えられる。後者については、果たしてそれがZECT製でないライダーにも適用されるのかどうか、些か疑問ではあるが。

「夕飯の仕込みでもしようと思ったが……これは忙しくなりそうだ」

夕飯の事を考えながら、天道はバイクのエンジンをかける。

そこに、

「あのさあ、ちょっと頼みごとがあるんだけどいいかい？天道総司くん」
ファイティン
男からのコンタクトが、あった。

一方、ZECTに捕らえられることとなった瞬。装甲車に無理やり押し込まれ、周囲の異様さにオドオドしているうちに、ZECT本部へと着いていた。

手錠をはめられ、ゼクトルーパーに囲まれながら、瞬は車から降ろされる。場所は何処かの地下駐車場だろうか。ここまで外の景色を見る事が出来なかったため、ここがどのあたりに位置せるのか、瞬には見当もつかない。

「なんなんだよ、あんた達は……」

「話は中で聞く」

瞬が思わずぼやいた言葉に、ゼクトルーパーにうちの1人が冷たく答える。まるで犯罪者みたいな扱われ方をされながら、瞬は建物の中へと連れていかれる。

クロスドライバー含め、貴重品は全て取り上げられてしまった。唯は風沙を連れてうまく逃げてくれただろうか。オリジオンに立ち向かっていった古城達は無事なのだろうか。ネプテューヌとヒビキはほったらかしにしてしまったがどうしているのだろうか。瞬は不安から、この場にはいない皆の心配ばかりしてしまう。

色々と考えているうちに、瞬は一つの扉の前に立たされる。ゼクトルーパーが扉を開くと、中には刑務所の面会室のような内装の部屋が広がっていた。

「入れ、尋問を行う」

突き飛ばされるような形で、瞬は部屋の中に押し込まれる。瞬は強引に、部屋に置かれたパイプ椅子に座らされ、両脇にゼクトルーパーが佇む。

瞬が着席すると同時に、ガラス窓の向こう側の扉が開く。扉を開けて中に入って来たのは、瞬を殴り飛ばしてここに連行して来た男——影山であった。影山は、瞬からはガラス窓を挟んで反対側の椅子に座り、話し始める。

「さあ、話をしようか」

「……」

「お前の個人情報調べさせてもらった。逢瀬瞬、16歳の高校生。両親は既に他界し、妹と共に叔父の手で育てられる——」

影山は、手に持った書類の内容を読み上げ始める。瞬の生年月日、住所、家族構成、学歴 ect……瞬はそれを延々と聞かされ続け、時折、読み上げられたものの確認を取られる。こうして、自分の人生の足跡を赤裸々に読み上げられるというのは、なんだか恥ずかしい気分になる。

一通り資料を読み終わった影山は、資料を乱雑にカウンターの上に置く。

「経歴上は何かしらの組織との関係性は見出せないか。しかし、まだ秘密裏になんらかの組織と通じている可能性も否めない」

「俺怪しい者じゃないですよ」

「信用できるか！そういう台詞が出る時点で信用性は皆無なんだよ！」

「デスヨネー」

どうかにかこの場を切り抜けなければ、と思うが、緊張しすぎて思うような言葉が出ない。右も左も分からない状態に陥るのはもう何度目になるのかは分からないが、今回はまた違った方向にマズイように思える。

自身に落ち着くように言い聞かせ、瞬は口を開く。ふと、気になったことがあるのだ。「あの……ベルトの方はどうなってるんすか？」

「それなら……」

そう言うと、影山は机の下からクロスドライバーを瞬に見せつけ、机の上に置く。手を伸ばせば届きそうな距離だが、瞬と影山の間は一枚のガラスに隔てられている上、瞬は手錠をかけられているため、それは出来ない。

「言っておくがお前の元に返ってくることは二度とない。あれは後ほど解析班に回す。お前の使っているライダーシステムは、我々のモノとは大きく異なる。あれは何だ？あんなモノを持つてるお前は何者なんだ？」

瞬に詰め寄る影山。さて、どうしたものか。強引なやり方だが、影山の行動は筋が通っている。アクロスという未知の存在に対し、その解明を試みる。向こうからすれ

ば、アクロスが敵か味方かわからないのだから無理もない。

だが、素直に話したところで、彼等は信じるのだろうか。瞬自身も含め、転生者だのオリジオンだの、そういった類の話を簡単に信じるような奴はいない。そもそも瞬もそこまでアクロスの力について詳しいわけではない。

「素直に話したら釈放されるんですよね……？」

「それは上が決めることだ」

瞬は恐る恐る影山に聞いてみたが、その結果は御覽の通り。明らかに帰す気がない。
（やべえなコレ……俺これからどうなんの？何されんの？無事に帰れんの？）

必死に考える。瞬には、このZECTとやらがどんな団体なのかわからない。だが、なんだかよく分からないうちに殴り倒されてここに連行されたもんだから、当然ながら信用はできない。それに、馬鹿正直に話した所で無事に帰してくれるとは到底思えない。良くて飼い殺し、最悪ベルトだけ手に入れて瞬は終了じゆうされるのが関の山だ。

—— 早い話、ゲームオーバー話みだった。どう足掻いても、自力でここを切り抜けられるビジョンが浮かばない。

どうせ助からないなら。いつその事ごと全部話して ——

「……駄目だ」

すんでのところで、瞬は踏み留まる。

瞬を力ずくで拉致した組織だ。馬鹿正直に洗いざらい話せば、唯達も危険に晒されるのは想像に難くない。それはだめだ。ただでさえギフトメイカーとの戦いに巻き込まれているというのに、これ以上皆を危険に晒すわけにはいかない。

瞬は顔を上げ、率直に述べる。

「お前達を信用できないし、皆を危険には晒せない。だから言えない」

「なんだと……？寝言は寝て言えよ餓鬼イ……」

「馬鹿よせ！影山さんの前だぞ！！？」 それに下手に傷を負わせたら面倒だろうがー」

瞬の横にいたゼクトルーパーが、瞬の反抗的な態度に苛立ち、思わず瞬の胸ぐらを掴み上げ、それをもう一人のゼクトルーパーが静止する。

「くそっー！」

ゼクトルーパーに乱雑に突き飛ばされ、瞬は椅子に身体を打ちつけられるようにして座らされる。思うようにいかない現状に苛立ち、影山の顔が歪む。

が、いくら意地を張ろうがどのみち瞬は助からない。アクロス周りを除いて個人情報握られている以上、もはやどうしようもなかった。その事実には影山はほくそ笑み、席を立てて瞬に背を向ける。

「こども臆せずZECTに歯向かうとは、相当な命知らずなのか馬鹿なのか……まあいい、ひとまずお前は独房行きだ。どうせ逃げられはしないんだ」

ガラス越しにゼクトルーパーに、瞬を独房に連行するように指示を出す。さらに奥深くへ、連れて行かれる。

「……？」

ネプテューヌは、一本の大木の下である存在と睨み合っていた。

ここは先程までいた公園からそう遠く無い、寂れた神社。瞬がクロスドライバーを拾った場所でもあるのだが、その事は彼女は知らない。

電波環境の良い場所求めて小旅行していたら、いつの間にもやらヒビキがいなくなっていた。どこを探せど見つからず、あつたのは買物袋のみ。その後、いなくなつたヒビキを探して近くを探し回っている最中に、この神社に立ち寄つた彼女だったが、ある存在によつてここで足止めを食らっていた。

「……」

御神木らしき大木の根元。そこには一匹の猫。自分の髪色と同じ毛色の猫に、ネプテューヌは、妙な親近感を感じていた。こうして間近で相對しても微塵も逃げる気配を見せないのを見ると、随分と人間慣れしているようだ。

「ま、私は女神なんですけどねー！ドヤア！」

一体誰に對してのドヤ顔なんだろうか。そしていきなり地の文に反応するなど言い

たい。ネプテューヌにそう突っ込みをいれるかのように、猫の目がジト目に変わる。

「んー、困ったなー。今猫にあげられるようなもの、持ってないんだよねー」

「にゃーん」

流れ的になんかあげたりした方がいいのかな、と思うネプテューヌだったが、生憎手持ちはゲーム機とチョコレートと玉葱のみ。後ろ2つは猫の体にはよろしくないものとされているものなので、あげたくてもあげられない。

やばいな、折角主人公らしいシチュエーションが巡ってきたのに、これじゃ主人公らしいことなんも出来ないぞ。そう思っただけで焦るネプテューヌ。はてさてどうしようかと考えていたのだが、

「いやいやいやーそれよりもヒビキちゃん探し！一体どこに行つたのやら……」

本来の目的から外れることなかれと自分に言い聞かせて、ネプテューヌは自分の頬を叩き、気を取り直してヒビキ搜索を再開する。買い物袋をほっぽり出して一体何処に行つたのやら。

まったく困つた子だ、と呆れながら神社を後にする。がら

「……あのー？」

鳥居をくぐり抜けてから数分歩いたあたりで、背後から猫の鳴き声が聞こえてきた。ネプテューヌはチラリと後ろを見る。そこには、先程神社にいた猫が鎮座していた。

「駄目だよ、着いてきても。あげられるもんは無いし、ウチじや多分ペット飼えないし。他の人にねだりなよー」

「ねーむう」

振り返ってちよつと強めに言ってみたが、通じていないのか無視しているのかはわからないが、猫は逆にネプテューヌに近づいてくる。そして、凄い跳躍力を活かしてネプテューヌに飛びついてきた。

「ひゃうあつ!?」

両手が買いい物袋で塞がっているネプテューヌは、猫の体当たりになす術なく押し倒されてしまう。なんか買いい物袋から卵が割れる音がしたがそれは聞かなかったことにしたい。

ネプテューヌを押し倒した猫は、甘えるような鳴き声をだしながら、のしのしと彼女のまな板な胸部を踏み締め、ネプテューヌの頭部に向かって歩いてくる。そして、首を伸ばしてネプテューヌの頬を舐め始めた。

「あれ……これ、懐かれちゃった？懐かれる要素あつたかな……」

なんか頬にザラザラした感触が伝わる中、凄まじいスピードで野良猫とフラグを立ててしまった事を疑問に感じるネプテューヌ。だが彼女は基本的に能天気なので、これも自分の主人公気質が成せる技だということで納得してしまった。

だからといってこの猫を連れて帰るわけにはいかない。多分瞬が反対する。しかしこんなに懐かれては置いて帰るのには一苦労しそうだ。

「はあー、主人公は辛いなー」

メタじみた台詞を吐きながら、ネプテューヌは起き上がる。先程から空模様が怪しくなってきた。これは一雨降るんじゃないだろうか。できればその前に見つけない、と思いつながら、ネプテューヌは立ち上がる。

「……あれ？」

そんな彼女の視界に、あるものが映る。

明らかにじめじめとした廃工場。敷地を覆うコンクリートの隙間から雑草が茂っているあたり、かなり長い間放置されているのだろう。その建物の入り口から少し離れたあたり。古びたコンテナが積み上げられている箇所に、誰かがいる。

ネプテューヌはその顔には見覚えがあった。なんせさつきも会ったのだから。

彼の名は無東灰司。転生者狩りのエージェントだ。

市内郊外 雑木林

一方、2体のオリゾンと戦う羽目になった古城と雪菜。

2人は、なるべく人気ひとけのない場所を目指して移動していた。古城の眷獣は揃いも揃っ

て破壊力の塊。そんなもんを街中で解放すればどうなるのかは言うまでもない。故に、周りへの被害が及ばない場所まで逃げていた。

バルジは、実験がてらにアクロスにオリジオンをぶつける手筈が狂ったことを愚痴りながらも、移動する戦場について行っていた。最低でもデータが取ればいいらしい。だが逃げ回る2人については本気でつまらないと思っっているようだ。

「おいおい、つまんねーのなお前ら。周りに気い使って逃げ回るとか……別にいいだろ、周りを巻き込んでみさ。それで死んだら本末転倒だろ？」

「お前はそうなんだろうが俺は違うんだよ！」

「良い子ぶるなよ。巻き込まれて死んだやつはそいつが悪い、それでいいってのに……」

「ふざけんなよテメエ……んな道理通る訳ねえだろ……!!」

「俺と話している暇があるのかな？」

バルジの自分勝手な考えに嫌悪感を示す古城だったが、突如として古城の足元の感覚が柔らかくなり、目線が下がる。下を見ると、古城の膝から下が地面に埋まっていた。慌てて足を引き抜くと、乾いた泥団子を潰したような感触がした。

「地面が柔らかく……!!??」

ぱつと後ろを振り向くと、古城のすぐ後ろまでタイアードオリジオンが迫ってきていた。タイアードの振り下ろされた拳を、咄嗟に腕でガードする古城。

そして、劣化した足元の砂を蹴りながら後方に飛ぶ。砂で目眩しを狙ったのだが、劣化した砂粒はタイアードの顔に届く前に霧散する。

「……………」

タイアードは無言で古城に飛びかかる。古城はタイアードの攻撃を、近くの木を盾にしてやり過ぎそうとする。しかし、その木はタイアードの拳が触れた瞬間、まるで砂のように崩れ落ちてしまった。その拳は、崩れた木を貫通し、古城の胸元に突き刺さる。

「グッ……………」

殴られた瞬間、古城は肺から空気が放り出されているような感覚がした。助走をつけた渾身の一撃は、古城の身体を近くの木に猛スピードで叩きつける。

咳き込みながら古城は立ち上がるが、先程からなんだか胸元に肌寒さを感じる。見ると、古城の着ていたパーカーの殴られた箇所に、虫に食われたように穴が空いていた。

「は……………」

「タイアードは触れるモノ全てを劣化させるのさ。お前の腕、はたして動くかな？」

「……………あれ？」

バルジに言われるがまま、古城は左腕に力を込める。しかし、左腕は動かない。だらんと垂れ下がったままだ。痛みも熱も感じ取れない。まるで神経が通っていないような感じだ。

「まさか、さつき攻撃を防いだ時に……」

「御明察。俺の邪魔をした罰だ。思う存分いたぶられてくれ！」

バルジはタイアードにそう命じ、物陰に身を隠す。仮面ライダーが相手ではないからか、今回は自分は戦わないつもりらしい。

タイアードオリジオンは、地面を指でなぞりながら古城に接近し、跳び蹴りを繰り出す。とにかくコイツに触れるのはやばいと判断した古城は、即座に避けようとするが、足がうまく動かない。足元を見ると、先ほどと同じように、古城の足が地面に沈んでいた。古城は急いで足を引き抜こうとするが、それよりも早く、タイアードオリジオンの足裏が古城の胴体に着弾した。

「いつ!!」

蹴とばされた古城は、雑木林を突き抜け、隣の遊水池のほとりまで転がっていく。吹っ飛んできた古城に驚いて、池にいた水鳥が一斉に飛び去ってゆく。

「クソ……満足に動けねえ……」

「H A H A H A……!」

池に架かった橋を這う這うの体で渡る古城に、タイアードオリジオンが追い付く。この状態で逃げるのは非現実的な案だ。どうあがいても、撃破一択しかない。

タイアードオリジオンは、追い詰められつつある古城を見て笑っている。それを見

言うまでもない。なんせ先程まで散々味わされたのだから。

バキバキと、橋の随所が音を立てはじめ。ガクンと、水平だった橋桁が、タイアードの方へと傾いてゆく。タイアードの能力で、橋全体が急速に劣化していつているのだ。早く止めなければ、と古城は駆け出すが、すでに遅し。池に架かっていた橋はバラバラになって崩壊し、タイアードと古城は池の中に落つこちていった。

「ぶはっ……いっへおおお……いっへ」

藻や水草の生い茂る水中へと、古城の身体が沈んでゆく。諸説あるが、吸血鬼は水に弱い。それは古城も例外ではなく。一刻も早く水中から這い出なければ、古城が負ける。

だが、これはチャンスだった。今ならば、最大級のダメージをタイアードにぶち込める。古城は素早く橋の残骸にしがみつぎ、いち早く岸に這い上がる。

「疾きやがれくレ在レれ、獅子ス・アウルムの黄金ム！」

古城はここにきて、ようやく眷獣を解放した。周囲に凄まじい稲妻を迸らせながら、稲妻の身体を持つ雷光の獅子が古城の背後に顕現する。古城が最初に開放した眷獣だ。その嵐のごとく荒れ狂う強大な力の塊は、ただ存在するだけで、周囲に雷を落としてゆく。

タイアードはそれをみてマズいと判断したのか、慌てて池から這い上がろうとする。

しかし、それよりも早く、雷光の獅子がタイアードに向かつて水面に飛び込んでゆく。「感電しやがれこの野郎！」

池に背を向け、古城は走り出す。

瞬間、池全体が黄金の稲妻に包まれた。

灰司は、廃工場内の様子を伺っていた。

（司馬神真……ここが奴の根城か）

組織からの命令で始末することになった転生者。そいつを追い続け、ようやくこの場に辿り着いたのだ。

しかし、この廃工場内には無数の罠が仕掛けられている。唯一の入り口にも、巧妙に隠されてはいるが、赤外線センサーらしきものが設置されている。用意周到に張り巡らされた罠を確認しながら、灰司は、転生者にしては頭が回る奴だな、と感心していた。

ともかく、この罠を解除しなければ侵入は厳しい。仮に侵入できたとしても、すぐに撮り逃してしまうだろう。まずは罠の位置を探る必要がある。灰司は、手持ちのダークライダーの力の中から、この状況に役立ちそうなやつがないかと探り始める。

そこに、喧しい頭痛の種がやってきた。

「あれ、さっきの根暗そうな人だ」

(クソツタレ……邪魔しに来てんじゃねーよ)

なんという事でしょう。猫を抱えたネプテューヌが、いつの間にか灰司の背後に立っていたではありませんか。あまりのタイムミンクの悪さに、灰司は思わず舌打ちをする。が、即座に猫をかぶって取り繕う。相手は子供だ、適当に言いくるめれば何とかかならずだ。

「な、なんですか……?」

「いや、こんなところで何してるのかなーって思いました」

それはこっちの台詞だ、と灰司は思わず言いたくなつた。先程は瞬と一緒にいたはずだが、一体どこにいったのやら。保護者ならばその責任を果たしてもらいたい。子供に仕事の邪魔をさせるな。

らしくないとは思いますが、穏便にネプテューヌをこの場から引き離そうと試みる。

「ほら、この辺は危ないですから……君は帰りなさい」

「いやーあのさあ、帰りたいたいのはやまやまなんだけど……ヒビキちゃんかどっかに行っちゃってさあ……見つけるまではどうしても帰れないんだよね……瞬も帰ってこないし」

「マジかよ……」

できることならさっさと瞬に押しつけてやろうと考えていたのに、肝心の瞬が行方知れずになっていてという事実には、思わず悪態をつく灰司。なんでこうも厄介事に巻き込まれるんだアイツは。

アテが外れて頭を抱える灰司。ネプテューヌの好奇心が、容赦なく灰司の被った猫に損害を与えてくる。

「で、何してるの?」

「君には関係ないでしょう。君が探してる人は多分ここにはいませんよ……ほら行った行った」

「じゃあさ……瞬とヒビキちゃん探すの手伝ってくれない?」

「いや僕は忙しいんですよ」

「こんなところでじっとしてただけじゃないか」

「ああギタギタにしてえ……」

「なんか急にキヤラ変わった?」

「!?? いやなんでもないなんでもないです!」

危ない危ない。ネプテューヌのしつこさに若干心の声が漏れ出てしまっていたようだ。なんとか取り繕うが、灰司の胃痛メーターは上昇する一方。これだから子供は嫌なのだ。

「兎に角此処に瞬はいませんよ。ほらさっさと他の場所を探しにでも行つたらどうですか」

「手伝つてくれないの？友達なんですよ？」

（誰が友達だ！あんな考えなしの馬鹿タレと友達になつてたまるか！）

ネプテューヌの発言に、思わずカチンときてしまふ灰司。瞬はただ組織の命令で監視しているだけであり、灰司の転生者狩り業に無駄な首を突つ込む邪魔者でしかないのだ。

それに灰司に友達なんてものはない。既に皆世界ごと死んだのだから。灰司の全てはもう残つてはいないのだ。

「にやおうー！」

「あつー！」

その時だった。灰司の苛立ちを察知したのか、ネプテューヌの腕の中の猫が、この刺々しい雰囲気から逃れるかのように、ネプテューヌの腕からするりと抜け出し、工場内へと向かつて走り出してしまった。

「待つてー！どこいくの？？」

「馬鹿野郎お前何やって——」

猫を追いかけるネプテューヌと、それを慌てて止めようとする灰司。先程灰司が調べ

たとおり、工場内には罨がたくさん張り巡らされている。そんな場所に不用意に踏み込めばどうなるか、言うまでもないだろう。

ネプテューヌが工場内へと一歩足を踏み出したその瞬間。下にスイッチでもあったのだろう。彼女の足元で、カチリという音がした。

「ひゅ?」

すると、どういう絡繰かは不明だが、壁の隙間から一本のナイフが、ネプテューヌ又目掛けて飛来してきた。ナイフの軌道は、一直線に彼女の側頭部を直指している。

「くそ! 世話が焼ける!」

兎に角、どうにかしなければならぬ。灰司は悪態をつきながら、地面を強く蹴り、一瞬のうちにネプテューヌの間近に接近し、飛来してきたナイフを素手で叩き落とした。少し手に傷がつき、少量の血が飛び散るが、大した事ではない。

「つたく、こんな馬鹿が女神だとは……ゲームギョウ界ってやつは何考えてんだ、つたく……」

「なんかデイスられた? てか大丈夫!? 血出てるけど……」

「誰のせいだと思ってるんだ」

「あうっ」

負傷を心配してくれるのはありがたいが、原因はネプテューヌである。灰司の中での

ネプテューヌに対する評価は、右肩下がりで一直線であった。散々振り回してくれた腹いせに、デコピンを一発彼女にくれてやる事にした。

デコピンを食らったネプテューヌは、額を抑えながら唸る。その様子を見て、いい気味だと灰司は鼻で笑う。

「というか、なんか急にガラ悪くなったね？ さつきと全然キャラ違うじゃん……てかそっちの方が自然体なんじゃ？」

「あ、やべ」

思わず被つてた猫をかなぐり捨ててしまっていたようだ。ネプテューヌに指摘され、ようやく灰司はそれに気づいた。そして、こんな凡ミスを頻発するなんてらしくもない、と軽く自己嫌悪に陥る。

不機嫌そうに舌打ちをしながら、あたりをぐるりと見渡す。巧妙に隠されてはいるが、そこかしこに罠が張り巡らされている。灰司一人ならなんとかなるが、さつきのような事を防ぐにも、ネプテューヌを不用意に行動させるわけにはいかない。

「……まあいい、兎に角お前は勝手に動くな」

「でも猫をほつとけないよ」

その言葉に灰司はイラツときた。何我儘ほざいてんだクソガキ、と。

しかしながら、ほんの少しの間といえ、ネプテューヌとあの猫の間には縁ができてし

まっている。彼女の善性は、それを放っておくことを許さなかった。

そして灰司は、人の善性の厄介さというものを知っている。それは時として、灰司のような人間にとっての1番の敵になる。理屈や大局をガン無視して、それらを打ち破つてしまう。転生者狩りとして幾人も転生者を殺し、捕らえてきたが、そういった「善意」に邪魔をされたことは数えきれない。

「……」

「……」

無理矢理にでも黙らせることは可能だが、敵のお膝元で騒ぎを起こすのは愚の骨頂。かと言って今更畏地帯のど真ん中からネプテューヌを帰すのは骨が折れるし、そもそも本人にその気はない。

ぶっちゃけると、灰司に選択肢は既に無かった。頭が痛くなりそう（というかもうなっている）だが、本人の身の安全の為に、彼女を連れていくしかない。ゲームギョウ界ならともかく、この世界ではネプテューヌは基本的に無力な存在なのだ。

「ついて来い。怪我したくなければ、俺から決して離れんなよ」

「合点承知っ！」

「……駄目そうだなこれ」

今日はきつと厄日なんだろう。灰司はそう思わずにはいられなかった。

神代邸

都心から少し離れた位置にある豪邸に、加賀美は来ていた。ヨーロッパとかその辺りにありそうな庭園を抜け、豪邸の玄関前までやってくる。

庭先で待っていた加賀美のもとに、白いタキシードを着た茶髪の青年が姿を現す。彼の名は神代剣。名門貴族、デイスカビル家の末裔にして、ZECTのマスクドライダーシステムの資格者の一人である。

「忠告はありがたいが、気持ちだけ受け取っておこう。心配は無用だ」

「奴は強敵だ。お前一人じゃ多分勝てない」

「随分と舐められたものだな。俺は全てにおいて頂点に立つ男、無論戦いにおいても同じことだ。それが分からないお前ではあるまい？」

「……」

駄目だこれ、話聞いてくれそうにないぞ。元よりプライドの高い剣が素直に忠告を聞いてくれるとはあまり思っていなかった加賀美だが、案の定それが的中し、げんなりとしてしまう。

「まあせっかく来たんだ。茶でも飲んでゆくがいい」

「だからそんな場合じゃ……」

もてなしてくれるのは有り難いが、今はそんな場合ではない。いつオリジオンがここにやってくるのか分からないのだ。しかし剣は加賀美の呼びかけにも応えず、屋敷の中へと入ってゆく。加賀美も剣を追い、中に入る。

2人が着いたのは、客室だった。室内はいたるところに華美な装飾が施されているが、テラスに通じる窓にはカーテンがかかっており、部屋は若干暗く感じる。

「む、カーテンが閉じているではないか」

剣がそれに気づいて、カーテンを開ける。

「よう……」

カーテンを開いた窓の向こう側には、カプトオリジオンが佇んでいた。

「っ!?？」

「入るぜ」

カプトオリジオンはそう言うと、容赦なく窓ガラスを蹴破って部屋の中に入ってきた。大きな音を立ててガラスが砕け、破片が室内に散らばってゆく。剣は咄嗟に顔を腕で覆いながら、部屋中に飛び散るガラスの破片から逃れる。

「俺の屋敷に土足で踏み入るとはいい度胸だな……!」

「そんなことどうだっていいだろう。どうせこれからここは戦場になるんだからな」

「お前の目的はなんだ?!? 何故ライダーを襲う?!?」

「カブトだ。俺が用があるのはカブトだけだ」

加賀美の問いかけに、オリジオンはそう答える。加賀美と剣は、それを聞いて訳が分からなかった。カブトが狙いならば何故、他のライダーを襲っているのだ? 奴がライダー打倒にもやす信念はかなりのものだ。しかしそれならば、余計に訳が分からない。二人の疑問を察したのか、カブトオリジオンは、ガラスの破片を踏み砕きながら答える。

「レベリングだよ。俺が強くなってカブトに挑むための踏み台になれと言ってるんだ」

「貴様……この俺を踏み台呼ばわりとはいい度胸だな。ふざけるのも大概にしたらどうだ?」

その答えを聞いて、剣が思わず反発する。

すべては前哨戦。言うなればRPGで大ボスに挑むための経験値稼ぎ。カブト以外のライダーは、そのためだけに倒される存在だと言っているのだ。

「口だけならどうとでも言える。御宅を並べる暇があるなら俺と戦え、そして完膚なきまでに倒される。お前達を倒す事で俺は更なる高みにのぼるのだ……!」

「調子に乗るな……俺は全てにおいて頂点に立つ男だぞ？」

《STANDBY》

その音声と共に、剣の足元に小さな穴が空き、そこからサソリ型のガジェット——
サソードゼクターが這い出てきて、剣の手のひらのなかめがけて跳躍する。

「変身」

《HENSHIN》

剣は、剣型モジュール・サソードヤイバーの鏢の部分にゼクターをセットする。すると、ヤイバーを持っていてる右手を起点に剣の身体が装甲に包まれてゆく。紫を基調とする装甲に、随所にオレンジ色の管が繋がっている。これが剣のもう一つの姿、仮面ライダーサソードである。

「さあ挑んでくるが良い、俺が完膚なきまでに打ち倒してやろうじゃないか」

「そうはさせない！変身！」

《HENSHIN》

カブトオリジオンを止めるべく、加賀美もガタックに変身しながら突っ込んでゆく。

「馬鹿の一つ覚えとはこのことか。お前の攻撃は既に見切った！」

「ぐあああつ！」

カブトオリジオンはそう叫びながら、突っ込んできたガタックを軽く蹴り飛ばす。ガ

タツクは壁際に置かれていたキャビネットにぶち当たり、キャビネットをぶち壊す。

一撃で吹っ飛ばされたガタツクと入れ替わりに、サソードがサソードヤイバーを構えて突っ込んでくる。カプトオリジオンは腕でガードするが、サソードはそのままカプトオリジオンを屋外へと押し出し、力任せにヤイバーを振り下ろす。

「俺を馬鹿にしているのか？ならとんだ命知らずだな！いいだろう、貴様をねじ伏せてやる！」

「そういう大言は勝つてから言えよ。そんなこと言つて負けたら大恥ものだぞ？」

サソードの剣撃をカプトオリジオンは素手で受け流すと、オリジオンはサソードの肩目掛けてハイキックをぶち込む。衝撃でサソードヤイバーを落とすサソード。オリジオンは続けて反対側の足でサソードを何度も蹴り付け、締めめにドロップキックを浴びせ、サソードの身体をを庭の塀にぶつける。

ぶっ飛ばされたサソードを鼻で笑いながら、オリジオンは更なる追撃をしようとするが、そこにガタツクが後ろから奇襲を仕掛けらオリジオンを羽交い締めにする。

「無駄だと言つただろ！」

「ぐはっ？？」

カプトオリジオンは難なくそれを振り解き、ガタツクの顔を殴り飛ばす。よろけて塀に手をつきながら、ガタツクはゼクターホーンを展開し、キャストオフをする。

「キャストオフ！」

《CAST OFF……CHANGE STAG BEETLE》

「キャストオフ！」

《CAST OFF……CHANGE SCORPION》

ガタツクに続いてサソードも、サソードヤイバーの鏢に取り付けていたサソードゼクタの尻尾を押し込み、キャストオフをする。サソードのバイザー型の装甲が一斉にパージされ、中から、紫色のサソリが巻き付いたようなデザインのリライダーが姿を現す。リライダーフォームに変身した2人は、同時にオリジオンに攻撃を仕掛ける。カプトオリジオンの両サイドから、サソードヤイバーとガタツクダブルカリバーの刃が迫る。

「ふんー！」

しかし、オリジオンは腕を軽く振るうだけでガタツクダブルカリバーを振り払った。

「闇雲に突っ込んで勝てると思っただか？」

《RIDER SLASH》

ガタツクを見下す発言をするカプトオリジオン。しかしその時、サソードが必殺技を発動させる。タキオン粒子とポイズンブラッドがサソードヤイバーの刀身に凝縮され、等身が紫色に輝く。振り払われるよりも早く、光子を纏った一撃が、ゼロ距離でオリジオンに解き放たれる。

すかさずガタツクも、振り払われた直後に、二振りのガタツクダブルカリバーを合体させて鉄の形にし、オリジオンの胴体を挟み込む。挟み込んだ瞬間、周囲に凄まじい電流が迸る。

「ライダーカッティング！」

《RIDER CUTTING》

「ぐ……ぬうおお……ぐああああああああつー！」

ダブルライダーの剣撃が、オリジオンの身体を貫く。オリジオンの口から、大量の血が流れ出て、足元の芝生や煉瓦を赤く染め上げる。

「やったか……？」

「いや……残念だったな……！俺はこんな場所では死なん……！俺は超えるんだ……ヤツを超える！折角転生して得たチャンスを、こんな前座で不意にしてたまるかあああああああああああああああ！」

全身に染み込んだタキオン粒子により、身体中に電流のようなものを送らせるカブトオリジオンは、満身創痍になりながらも、尚も倒れなかった。ついさつきカブト・ガタツクと戦ってライダーキックをぶち込まれた上でこれなのだから恐ろしいにも程がある。

ここまでくると、その執念は最早呪いに等しかった。曇天を吹き飛ばしそうな程の雄叫びを上げながら、カブトオリジオンはガタツクとサソードの顔面を掴み、人形遊びを

するかのようになり、両者の頭を衝突させる。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！ライダーキック！」

そしてそのまま、至近距離で回し蹴りをかまし、2人を吹き飛ばした。

「があああああああああああああああああああつ?!?」

「ぬうあああああああああああああああああつ?!?」

身体の随所から火花を散らしながら、2人は吹っ飛んでゆく。ゼクターが飛んでゆき、サソードとガタツクの変身が解ける。カブトオリジオンも、変身を維持する体力が尽きたのか、変身を解除してその場に膝をつく。

「……連戦は……骨が折れる……」

当初の想定を超えるダメージに、男は耐えきれずに座り込む。

しかし、座り込んでいる時間はない。これで残るはカブトただ一人。彼との戦いに勝利すれば、男の悲願は叶うのだ。それまでは、倒れる訳にはいかない。たとえ幾ら血を吐き骨を折ろうとも、転生で得たチャンスを不意にしたくはないのだ。

男は、傷だらけの身体を引きずるようにして、血の跡を作りながら神代邸を後にする。その身体に、ポツポツと雨が降りかかりだす。

まるで血を洗い流すかのように、雨が降り出していた。

あれからいくら経っただろうか。

影山の手によって瞬は独房に放り込まれていた。

「……」

ゼクトルーパー達に乱雑に独房に投げ込まれ、瞬は床に倒れ伏している。後ろ手に手錠がかけられている為になかなか立ち上がれず、這って移動するしかない。

兎にも角にも、壁を利用して身体を起こすべく、壁際に移動を試みる。なんとか壁際まで移動すると、壁に背を預け、天井を見上げてため息をつく。

「なんだよ……今日は随分と厄日じゃねーか……」

今日1日の出来事を振り返っていると、ザビーのライダースティングを喰らった箇所がズキンと痛むのを感じた。置いてきてしまったヒビキとネプテユース。オリジオンに立ち向かっていった古城と雪菜。なんとかレイラの魔の手から逃がせた唯と凧沙。彼らは大丈夫なんだろうか。

これまでも、そして今日だって、自分の至らなさのせいで、見ず知らずの人達を戦いに巻き込んでしまっている。

「あーくそ……俺なんもできてねえ……」

瞬は思い返しているうちに、自分の情けなさにだんだんむかつかいてきた。ただただ周囲に巻き込まれるだけで、何にも変わっちゃいない。中身がすっからかんだから、こう

して手も足も出ないような状況に勝手に流される。

瞬がもつとちやんとしていれば、少しはマシになっていただろうか。

「どうなるんだろう、俺」

だんだんと気分が落ち込み始めていたその時。

ガシャンと大きな音を立てて、天板の一部が外れ、床に落ちてきた。

「え、何……？」

当然ながら、突然の出来事に戸惑う瞬。目の前に落ちてきた天板は、まるで誰かが蹴飛ばしたかのように凹んでいる。

瞬が困惑していると、天井に空いた、人一人は通れそうな大きさの穴から、見覚えのある人物が独房内へと降りてきた。その人物は、イマイチ信用ならないが、有能な人物だった。

瞬はその人物の名を口にする。

「ファイティ……！」

「ただいまお助けに参りました、てね。ちよっと手を上げてくれないかな？」

そう言うファイティは天井裏から華麗に着地し、瞬を立たせると、なんと瞬の手錠を素手で引きちぎった。ビスケットを砕くかのように呆気なくバラバラになった手錠だったものが足元に落ちていくのを見て、瞬は思わず身震いしてしまう。

が、その時、独房に近づいてくる複数の足音が聞こえた。先程の音で気づかれたらしい。瞬が何か言うよりも早く、天井の穴からもう一本の腕が伸びてきて、瞬の手を掴んで引つ張り上げる。

「なっ……」

「逃げ出した!?？」

音を聞きつけてゼクトルーパー達がやって来るが、その時には既に独房内に瞬の姿はなく、凹んだ天板と手錠の残骸だけが残されていた。

瞬の脱走により、各所が一斉に騒がしくなる。

警報が鳴り響き、階下から大量の忙しない足音がしているあたり、そうとう焦っているのだろう。当然つちや当然だが。

「こっちだ」

「うわ暗っ！」

ファイフティに急かされるがまま、瞬はハッチを潜り梯子を降りてゆく。近づいてくる足音から逃げるように、ハッチを閉じて梯子を飛び降りる。

ハッチの先は真つ暗でじめじめとした地下通路だった。相当古いのか、備え付けられた蛍光灯はほとんどが点灯しておらず、僅かに点灯しているものも、消えかかっていた

り極度に光が弱かったりとしており、まるで心霊スポットかなんかのような雰囲気を感じていた。

ファイフティは壁に手をつきながら、先程からずっと先頭を走っていたもう一人の男

—— 天道総司に声を掛ける。

「君と接触できたのは僥倖だったよ、天道総司くん。君がいなかったらこんなにもスムーズにいかなかっただろうね」

「おぼあちゃんと言っていた。人助けというのは義務だ。特に俺みたいな人間にとつてはな」

「あんたは一体……?」

「俺は天の道を行き、総てを司る男 —— 天道……総司」

「はあ……?」

よくわからない奴、それが瞬が天道に抱いた第一印象であった。天を指差しながら、なんだかよくわからないことを喋っている。そのくせ佇まいはやけに自信に溢れている。はつきり言つてとつつきにくい。瞬も引き気味に天道の後ろ姿を見つめるしか無かった。

そんな瞬の背中をファイフティが押しながら、今後の展開について話し始める。

「まあ話は後だ。僕らのすべきことは二つ、クロスドライバーの奪還とここからの脱

出だ。ドライバーの在処に心当たりは？」

「影山とかいう奴に盗られたままだ」

「だよねえ……ひとまずここを離れよう。ドライバーなら最悪私一人でも取り戻せる……と思う」

「できるのか……」

地下通路を歩きながら、盗られたベルトをどうするかについて話してゆく。あの後どこにやられてしまったのか、正直予想がつかない。ただ、じっとしていても戻ってはこない事だけは確かだ。壊されたりしないうちに取り返す算段を考えておかねばなるまい。

そんなことを話していると、先頭を歩いていた天道が、思いだしたかのように口を開いた。

「お前もライダー……選ばれし者か」

「……？ 間違つては……ないのかな？」

何をどう問われているのかよく分からないが、瞬は奇妙な緊張感に襲われた。天道から発せられる、まるで瞬の挙動の一つ一つを見定められているかのようなプレッシャーは、気のせいだと思いたい。

緊張感に押しつぶされ、瞬は黙り込む。ただ水の跳ねる音の混じった足音だけが、地

下通路内に響き渡る。瞬が黙り込んでいると、天道がさらに問いかけてきた。

「どうだ、なってみて」

「え」

「ライダーになってみて、どうだったと聞いている」

その質問を受けて、瞬は黙り込む。

そして、少し考えてから、吐き出した。

「俺なんかまだまだだ。守るべき人を巻き込んでばつかで、何かに振り回されるばかりで……今だってそうだ。まったくもって不甲斐ない」

「それも無理はない。俺が世界の中心だからな」

……何をいつているのだろうか、この人は。突拍子のなく理解のしがたい言動に、瞬は首をかしげる。ぼかくんという効果音が聞こえてきそうだ。

「世界からすれば、俺以外の全ては俺という中心点に巻き込まれている端役にすぎない。地球が太陽の周りを回っている事を恥じるか？それと同じだ」

「スイマセンマツタクワカリマセン」

「要するにあれだよ、ほら。全ては自分中心に回っているから、自分以外の奴は振り回されるのは仕方ないって事……ああもう言語化しづらいなあ。まあ私的な解釈を入れるとだね、いくらヒーローでも一人で全部を守るなんて至難の業さ。頼れる所は頼る、や

れる所は妥協しない。それを続ければ次第に出来ること、守れる範囲も増えていくはず
さ」

「それ本当にあつてる？ なんとなくいい感じに纏めようとして中身空っぽになつてない
？」

ファイフティの解釈違いか、はたまた天道がぶつとんでやがるかは定かではないが、とりあえず無茶苦茶な回答だということだけはわかった。こんな慰めかたがあつてたまるか、と突つ込まずにはいられない。

その時、瞬とファイフティのやりとりを聞いていた天道が、僅かに微笑む。

「なんすか、急に笑つてさ」

「知り合いに似ててな。暑苦しい奴だが、あの正義感の強さは一目置けると思つている。それを忘れるな。それを無くさない限り、お前はいくら迷おうが何度でも走り出せる」

「まよつても、ねえ」

「そんなこんな話しているうちに、ほら見てみなよ」

ファイフティに促されるまま、瞬は前を見る。暗い地下通路の果てに、光があつた。外が見えてきたのだ。そこから見えるそとのけしきは、あいつの間にやら雨になつてはいたが、ここと比べれば遙かに明るい。もう少しで地上に到達できそうだ。

しかし、

「おめでたいな。まさかZECTから逃げられるとでも?」

そこに立ちはだかる人影が一つ。通路の終端から影が伸びている。雨に濡れ、満身創痍のその姿を、瞬は知っている。

「影山……」

「悪く思わないでくれたまえ、全て上からの命令でね。これ以上勝手な真似をするようならば命の保障はない」

「相変わらず乱暴だな」

「なんとでも言えよ。この際貴様も倒してやる」

影山は天道を睨みつける。天道はそれを意にも介さず、涼しげな顔をしたままだつた。

すかさずファイフティが、クロスドライバーの在処を尋ねる。

「クロスドライバーの在処を言いたまえ。あれは凡人に扱える代物じゃない」

「ドライバーなら俺が持っている。他部署に渡す前にこんな事になったからな。ほんと迷惑にも程がある」

そう言うのと、影山はクロスドライバーを取り出して嫌味つたらしく見せびらかす。彼からすれば、ただでさえ面倒臭い仕事の途中だというのに、余計な仕事を増やされたのだから、当然ながら不機嫌にもなるだろう。

影山はクロスドライバーをしまうと、こちらに近づいてきながら話を続ける。怪我のせいかな、その足取りは若干重い。

「俺達の使命は人類の命運を左右している。その為にも、お前のような不確定要素を放置するわけにはいかない。それが我々に牙を剥く前に、手綱を握らなければならぬ」

「いや、でも俺は別にあんた達と敵対する気は無かったんだし……」

「そう、我々は別に君達と敵対する気は当初はなかった。少なくとも君が先に仕掛けてこなければこんな事にならなかつたんじゃないかな？ 実力行使ではなく、対話の道を選べば穏当な結果になつた筈だ」

「未知の存在相手に信用なんて、そんな博打じみた事ができるわけないんだよ。わずかな可能性に賭けちゃ駄目なんだ。盤石に、確実にやらなければならぬ。大人の世界ってのは基本的にそうできてくる。そこに感情を持ち込まれちゃあいい迷惑だ」

影山の言うとおり、得体の知れないやつを信じるというのは、一種の博打だ。ましてやZECTのように世界を守るといふ重大な役目を担う組織にとつて、些細な決断一つが人類の命運を分けかねない。そんな状況下では、安全牌以外を選ぶことは至難の業だろう。

双方とも言い分に一理はある。これはただ、考え方の相違の結果なのだ。そしてそれは、どうしようもない断絶でもある。

「黙って待っていればよかったんだ。そうすれば最低限命の保障がなされるルートに入ることだってできた。それが堅実だった。だがお前は、そのチャンスを自ら踏み躪った。だから殺されても文句は言えないんだよ……！」

「随分と短絡的だな。短気は損気という言葉を知らないのか？」

影山と天道、両者の手の中に、それぞれゼクターが飛来してくる。

対話は無用。否、初めからそんなものはなかった。

「変身」

《HENSHIN》

両者ともライダーに変身し、互いに殴りかかる。拳と拳がぶつかり、火花が飛び散る。続いて蹴り同士がぶつかり合うが、ザビーの方が吹っ飛ばされ、地下通路の外に弾き出される。どうやら怪我で踏ん張りがあまり効かないようだ。しかしザビーは諦めることなくカプトに挑みかかる。

カプトはザビーの攻撃を適宜受け流しながら前進し、ザビーに次いで地下通路の外に出る。カプトに殴り飛ばされたザビーは、雨を斬るかのよう走り出し、カプトに迫る。

「カプト！今日こそお前を……！」

「やめておけ。お前まだ昨夜の傷が治っていないだろう」

「そんな事は関係ないだろ……！お前も大人しく投降しろ！」

情けをかけられて怒るザビーのジャブを、カブトは悉く受け流してゆく。ザビーが突き出した拳を、カブトが片っ端から手で受け流している様は、まるでザビーがカブトに弄ばれているかのようだ。

痺れを切らしたのか、ザビーは大きく跳び上がり、ジャンプパンチを繰り出してきた。しかし、ジャブでさえ全て防がれたにも関わらず、そんな隙の大きい攻撃がカブトに当たるはずもなく、簡単に避けられ、ザビーの拳は地面に激突する。

「フウー……キャスト、オフ！」

《CAST OFF……CHANGE WASP》

怪我のせいなのか、ザビーは息を切らしながら、ゼクターを回転させてキャストオフをする。瞬間、装甲が一斉にパージされ、周囲に散らばってゆく。瞬とフィフティは、咄嗟に物陰に隠れてやり過ぎすことを余儀なくされる。

「キャストオフ」

《CAST OFF……CHANGE BEETLE》

カブトもすかさずキャストオフで装甲を飛ばし、飛んできたザビーの装甲を弾き飛ばしつつ、装甲のパーズと同時に攻め込んできたザビーに応戦する。

「うらあー！」

「っ」

まずは、飛んできたザビーの拳を掴み、そのまま投げ飛ばす。地面に叩きつけられたザビーは、素早くカブトの手を振り解き、横に一回転しながら立ち上がりざまにカブトの顎目がけ、アッパーカットをくらわせようとする。

しかし、カブトはそれを難なく叩き落とす。ザビーを蹴り飛ばす。地下道の壁に激突したザビーは、懲りずに殴りかかってくるが、それは片手で防がれ、逆にカブトのパンチを腹にくらい、大きく吹っ飛ばされてしまう。

「凄い……圧倒してる……」

「感心するのは後だ！今ならドライバーを奪い返せる！」

ファイティに言われるがままザビーの方を見ると、彼の後方にクロスドライバーが転がっているのが見えた。どうやら、さっきの衝撃で落としたらしい。

兎に角今がチャンスだ。瞬は雨の中走り出し、ドライバーを取り返そうとする。

「させるか！クロックアップ！」

《CLOCK UP》

しかしそれを妨害すべく、ザビーがクロックアップを発動する。降り注ぐ雨水も、瞬の足も地に着く事なく静止しているかのようになり、スローモーションになる。

普通の人間はクロックアップに対抗する手段を持たない。できるのはワームと、ZECT製のマスクドライバーシステムのみ。

だからこの時点で、ザビーの最後の障害は自ずと決まっていた。静止した雨水を掻き分けるように、ソレはザビーに近づいてきていた。

「カプトオ……！お前は関係ないだろ！何故こいつを庇う！」

「巻き込んだのはお前だろうに。そんなに不穏分子を恐れているのか？」

カプトはザビーの怒りを受け流しながら、ゼクターホーンを左に戻し、ゼクター側面のスイッチを順に押ししてゆく。ライダーキックで早々に蹴りをつけるつもりらしい。

ザビーもそれを迎え撃つべく、ゼクターのスイッチを押す。

「いつもいつも俺達の邪魔を……！」

「何人たりとも、天の道を歩む俺を妨げることはできない！」

《RIDER STING》

《RIDER KICK》

カプトの右足と、ザビーゼクターの針の部分に、それぞれタキオン粒子がチャージされてゆく。そして、両者はほぼ同時に必殺技を繰り出した。

ザビーの左腕はカプトの胸元を、カプトの右足はザビーの左脇腹を、それぞれ抉るような勢いで目掛けて動き出す。2人とも避けはせず、ただ相手より先に攻撃を当てて撃破することのみを考えている。先に倒せば、それで済む

《CLOCK OVER》

クロックアップが終わると同時に、必殺技が命中し、周囲に衝撃波が拡散する。カブトは右足を上げたまま、ザビーは左腕を突き出したまま動かない。

「え？な、何が起きたんだ？！」

瞬はその様子を見て困惑しながら、クロスドライバーを拾い上げる。なんせ側から見れば、一瞬のうちにカブトとザビーが必殺技を打ち合ったような状況になったのだ。

「……………ぐふっ」

長い沈黙の後、先に倒れたのはザビーの方だった。突き出した拳は、僅かにカブトに届いてはいなかった。やがて腕がだらんと下がり、がくりと膝をつき、カブトの足元へと倒れ込む。そして、腕のザビーゼクターがブレスレットから外れ、空の彼方へと飛んでゆき、変身が解除される。

カブトは足を下ろすと、倒れた影山に目もくれずに、傍に停めてあったバイクに跨る。

「待て……貴様らぁ……………」

「感謝するよ天道総司。おかげで全て解決した」

「あ、ありがとうございます」

瞬は呻き声を上げている影山の方をチラチラと見ながら、天道に礼を言う。天道は振り返ることなく、バイクのエンジンをかけながら、

「次からは気をつけるんだな。次はお前自身で切り抜ける」

「ハイゼンシヨシマス」

「厳しいねえ君は。まあ今回は奇跡的に協力してくれたようなもんだし、当然か」

ファイティよ、後半の内容を本人の前で言うんじゃない。多分それは心の中で思っておくだけで済ますべき内容だから。

瞬は、バイクで雨を突つ切り走り去つてゆく天道を見送りながら、上記の意味を込めた拳骨をファイティにくらわせた。やっぱりコイツは駄目な気がする。

とりあえず、早いところこの場を離れなければ。ZECTの追手が来るし、色々ほつたからかしてきたものをどうにかしなければならぬ。あれから皆はどうなったのだろうか。オリジオンと戦わされている古城達に、風沙を任された唯、置いてけぼりにしてしまったヒビキ達。ここから一気に忙しくなりそうだ。

「……よし、行かぬーと」

瞬は、雨の中、拳を握りしめながらそうつぶやいたその時、手のひらに硬い感触があった。

あり得ない。手には何も持つてはいない筈なのに。首を捻りながら、瞬は握りしめた拳を開く。開いたその手のひらの中には、どこか見覚えのあるものが。

「これって……」

カブトのライドアーツ。

いつの間にか、それが手の中にあつた。

ヒビキが最初に感じたのは、コンクリートの床の冷たさだった。

じんじんと痛む頭をおさえながら、ヒビキは起き上がる。薄暗く、じめじめとした廃倉庫のような場所だった。光源は床から遥か高くにある天窓のみ。その天窓から見える空は、今にも雨が降り出しそうな曇天だった。

「あ、起きた」

「君は……」

すぐ近くでした声に反応してぱつと横を向くと、ヒビキと近い年くらいの、頬に傷のある銀髪の女の子がヒビキの顔を覗き込んでいた。

「ねえ、ここって……」

「ほかにもいるよ」

少女がヒビキに、あたりを見るように促す。

促れるままあたりを見渡してみると、そこかしこに10歳前後の子どもたちの姿が確認できた。何もわからず困惑する者、恐怖で泣き出す者、まだ気絶している者——あわせて20人前後いるだろうか。もしかして、彼等もヒビキと同じように、無理矢理連れてこられたのだろうか。

意識を失う寸前に、ヒビキに話しかけてきた青年。彼はいつたい何者で、何のために子どもたちをここに集めたのだろうか。

「なんなのこの状況？ いったいどうして私達はこんなところに集められたの？」

「さあ……わたしたちもわかんないんだ。だけど一つだけわかる。わたしたちを連れてきたアイツはろくでもない奴だって、おかあさんが言ってるの」

「……うん？ おかあさんも近くにいるみたいない方だけど……？」

「わたしたちのことは気にしないで。霧崎^{きりさき}律^{りつ}刃^は。そう呼んで」

なんだか少女の話し方が変だぞ？ と思つたヒビキだったが、あえて何も言わなかった。世の中にはいろんな人がいるのだ。これも個性なのかもしれない。

「私はヒビキ。こんなことを言うのも変だけどさ、ここで会つたのも何かの縁……だつたりするのかな」

「縁……かあ……」

その時、突如として、壁に設置されていたモニターが点灯し、1人の男の顔が映つた。耳にピアスをジャラジャラつけた金髪の男。柔和そうな笑みを浮かべてはいるが、その顔に温かいモノなど微塵も感じない。

その顔にヒビキは見覚えがある。間違いない、自分を連れ去つたヤツだ。

男 —— 司馬神真是、口元だけを吊り上げた歪な笑みを浮かべながら、まるで学校

の先生のように、あくまで友好的だと言わんばかりに振る舞いながら、モニター越しに声をかけてくる。

『やあ、皆元気そうで何よりだ。これからここに居る皆で楽しいことをしようじゃないか、ねえ?』

「なんなんだよ!いきなり連れてきて!けーさつ呼ぶぞけーさつ!」

「ママア〜!おねえちゃああああん!」

「気持ち悪い……」

反発する者、泣き出す者、嫌悪する者。多種多様な反応を示す中、ヒビキと律刃は無言だった。困惑していたのもあるが、この異様な状況に警戒していたのもある。そんなふたりの態度が物珍しかったのか、司馬はモニター越しにヒビキ達に視線を向ける。

『おや、その2人。随分と大人しいね。俺の経験則からすると、こういう時は泣き叫んで暴れるのが普通の反応だと思っただけどね』

「……」

『まあいいや。本題に入ろう』

無言で睨み返すヒビキ。司馬は楽しさを抑えきれていない様子で、早速本題に入る。その態度は完全に場違いだった。

『突然だけど俺はね、君たちみたいな未来溢れる子供達が惨殺されるのを見るのが趣味

が、少年の最後の言葉となる。血が飛び散り、少年の生命が終わる。ワームはその様子を見て、嬉しそうに鳴く。

「あああああ……あああああああああつ！」

そのシヨッキングな光景を見た別の少年が、その場にへたり込んでしまう。その背後には、ワームの姿。その後は言うまでもないだろう。次々と子供達が殺されていく。ヒビキと律刃も、ただ逃げるしか無かった。逃げ場なんてどこにもないのに。

その頃、別の子供達の一団は、廃倉庫内のコンテナが迷路のように積まれた一角に逃げ込もうとしていた。あそこならば少しは目を誤魔化せる。そう考えた奴がいたのだろう。しかし、その目論見は潰える。

「あれ……どうしたんだよシヨータ」

「……」

「マリちゃん？」

先頭を走っていた数人がふいに立ち止まり、集団全体を堰き止める。不審に思い、彼らの知り合いが声をかける。しかし返事はない。すると、

「ごめんね」

「え」

「俺達、実は人間じゃないんだ」

彼らは振り返りながら、擬態を解く。

——子供達の中に、既にワームが紛れ込んでいたのだ。

「死んでね、皆」

「あああああああああああああああつ!!?」

「きやあああああああああああああつ!!?」

友達だと思っていたのが、全く別の存在だったことに対する絶望を感じながら、無惨にも彼らは殺された。小さな身体がバラバラに引き裂かれ、血肉が当たり一面に散らばってゆく。この光景を見れば、きつと生き延びても、トラウマモノ間違いなしだろう。

その光景を横目に、ヒビキと律刃はコンテナの中に隠れる。運良くワームに見つからずにここまですることが出来たが、それも時間の問題。既に半数以上の子供達が殺されている。そう遠くないうちに、自分達に魔の手が迫るのは避けられない。

「わたしたち、おしまいなのかもね」

「冗談じゃない……っ!こんな馬鹿げたことがあつちや駄目だ……!」

コイツは狂っている。本当に彼は同じ人間なのだろうか。あの皮膚の下にはちゃんと赤い血が流れているのかと疑いたくなるような感性だ。少なくとも、ヒビキはあれを人間とは思いたくは無かった。

ヒビキは、司馬への恐怖よりも怒りを覚えていた。殺されることは怖くない。それ以

上に、無辜の人々が命を弄ばれるのを許せない。そして、ヒビキにはそれをどうにか出来るだけの力が——

（……あれ？）

そこまで考えて、ヒビキは戸惑いを感じた。今のは何だ？今湧き上がってきた感情モソはなんだ？その原動力はどこなのだ？

だが、それを堪えることが出来ない。立ち止まってられない。この理不尽に対する怒りを止めてはいけなさと、身体が叫んでいるのを感じる。

そしてヒビキは気づいた。これは正義の心。自分が忘れていただけで、今なおそこにあるもの。かつての自分が一体どうやって、それと関わってきたのかは思い出せないが、一つだけわかったことがある。記憶を失う前の自分も、きっとこのような怒りを抱ける人間だったのだと。

「……」

ヒビキは立ち上がる。瞬がこの場にいれば止めさせようとするだろうが、彼女はどうしても黙ってやり過スごすことが出来なかった。

「……いっくのっ」

「……ごめん、無理。ただ逃げるなんて出来ない」

律刃の手を離し、ヒビキはコンテナの外の様子を伺う。辺りに子供達の死体が散ら

ばっている。チラホラ生き残っている者の姿も見えるが、あれがワームの擬態という可能性もある。

策はない。だがそれが足を止める理由にはならない。こんな悪趣味なシヨーに付き合つてなんかいられない。ヒビキは、殺戮の空間に足を踏み入れようとする。

その時。

「待てよ」

そう言つて、コンテナから飛び出そうとしたヒビキの手を、律刃が掴んで引き止める。その声のトーンは明らかに低い。まるで別人のように顔付きが変わっているように見える。それでもヒビキは行こうとするが、律刃の手を振り解けない。

律刃は前髪を上げ、ヒビキの両手を取つて言う。その時、ヒビキには、律刃の顔の傷が光っているように見えた。

「いい加減^{オレ}私もこんな悪趣味なシヨーのせいで吐き気マシマシになってきたところなんだ。ここは私^{オレ}に任せろ。全部わたしたちがバラバラにしてやつから」

その頃の唯はというと。

「……マジでこれどうすれば良いんだろうか」

一向に起きない風沙を前に、腕を組んで絶賛悩み中であつた。

とりあえず何処かの公園に適当に入り込み、ベンチの上に風沙を寝かせてみたはいいものの、ここからどうすればいいんだろうか。というかこの子は誰なんだろうか。ギフトメイカーから逃すべく彼女を任されたというのは分かるが、これはあまりにも気まずい。

外は絶賛雨真つ最中。この場には屋根があるからいいものの、あんまりここから動きたくはないというのが本音だ。

「つたくー、これ私が男だったら事案間違いなしの絵面だよなー」

唯は空いているベンチに腰掛け、足をぶらぶらさせながら空を見上げ、口をこぼす。別に今の状況自体に不満があるわけではない。説明不足な点に文句垂れているのだ。

「にしても雨かあ、雨降る前に帰れると思って傘持ってきてなかったんだよなー濡れたくないなー」

一向に止まない雨に、若干ナイーブな気持ちになりかける唯。

はあ、とため息をついたその時。

「そこから離れなさい！」

「びゃああああああああああああつ!?？」

なんかメカメカしい銀色の槍の穂先が突きつけられた。思わず唯は悲鳴をあげて距離をとる。一体何事か。

見るからに鋭そうな槍にビビり散らしながらも、唯は槍の持ち主の方を見る。そこにいたのは、中学生くらいの女の子——姫終雪菜であった。彼女は警戒心バリバリで唯を睨みつけているし、なんか雪菜の後方には傷まみれのおねーさんが倒れていらつしやる。一体全体なんだこれは。

雪菜は銀槍——雪霞狼を構えながら、唯に問いかける。

「貴女は一体何者で、風沙ちゃんに何をしようとしているのですか？返答次第では刺しませんがよろしいですね？」

「あのう経緯とか事情とかはちゃんと話すんで、その槍おろしてくれませんか？それになんか後ろに人倒れていない？あれ私の幻覚とかじゃないよね？」

「正当防衛ですのであしからず」

雪菜はあつけらかんとしているが、これでは明らかに危ない人にしか見えない。やべえよこれどうしたらいいんだ。

唯が冷や汗ドバドバ出しながら考えていると、近くの草むらからガサゴソと音がした。まるで何かが此方に向かってきてきているようだ。この状況でなんか来るのはさすがに勘弁いただきたいものだと思易しだす唯。

草むらをつつ切つて現れたのは、暁古城であった。彼も彼で、ボロボロになっているし、背中になんかへんな男の人を背負っている。意識のない人を連れ回るのがトレンド

になってたりしてないよね？と思わずにはいられないだろう。

古城は冷や汗まみれの唯と雪霞狼を構えた雪菜を見て即座に状況を察したのか、慌てて二人の間に入って止めにかかる。

「ストップストロップ！いきなり襲い掛からない！お前そんなに血気盛んなやつだったか？？」

「先輩……すみません、ついカツとなつてしまつて……で、その背中に背負つてらつしやる人は？」

「ああこれ？さっきの怪物の正体だよ。ほつとくのもアレだし連れてきたんだけど……この人、未登録魔族みたいだぜ？大丈夫なのかな……」

なんでこの場に要救助者が三人も集まっているんだ、と思わず頭が痛くなる三人。おまけに風沙を任せたはずの瞬は、風沙を唯に任せてどっかに行つてしまつていて、まるで共通の知人が不在の時のような何とも言えない雰囲気あたりには漂っていた。

頭を抱えて唸りながら、古城は素性の知れない唯に問いかける。

「で、アンタは何者で、なんで風沙と一緒にいるんだ？」

「じつはかくかくしかじか」

唯もすべてを理解しているわけではないが、ここまでに至る経緯をとりあえず説明し、自身が怪しいものでないということを証明しようとする。仮面ライダーやるのは良

いけど、守るべき人をほっぽりだすのはよくないのだ。次会ったらそこんところをきつく言わねばなるまい。

とりあえず唯の説明のおかげで事情を理解したらしく、雪菜が頭を下げてきた。まあ、友人が見知らぬ人と一緒に居たら警戒したくなるのも無理はないだろう。

ちなみに瞬が仮面ライダーであることは伏せている。普通の人は言っても眉唾物だと思うだろうし、本人以外の人が高ローの正体をベラベラ喋るのもどうかと思っただらだ。

「で……その人は大丈夫なんですか？」

「多分大丈夫だよ。瞬はそう簡単に倒れるような奴じゃないよ」

「信頼してるんですね」

「おうよ、10年来の付き合いだよ？いい所も悪い所もだいたい把握済み、それが幼馴染の長所なのよ」

そう強がる唯だったが、心配していないわけではない。仮面ライダーになって以降、自分の知らない所で、瞬は普通に生きていても巻き込まれないような出来事に巻き込まれている。それが不安でもあるし、不謹慎だが寂しくもある。

なんだか瞬だけが、勝手に先に進んでしまっているような感じがする。今まで一緒にいただけあって、唯は他の誰よりもそれを感じている。

今からでも追いかけてあげなければ。瞬に会って色々と言ってやらねば。そう思いながら、唯はベンチから腰を上げる。

「じゃあ私はこれで……いつまでも部外者がいたらお互い気まずいでしょ？それに瞬のやつも探しに行かなきやならないしさあ」

「なんなら手伝おうか？元はといえば俺が風沙を頼んだせいでもあるからさ」

「気持ちだけ受け取っておくから——」

古城達も瞬を探すのを手伝おうと申し出てくれるが、唯はそれを断って公園の出口へと向かう。

その時、唯が向かう先にあつた公園の出口に、一台のバイクが停車する。雨の中、合羽も着ずにびしょ濡れの乗り手は、唯の顔を見るなり、被っていたヘルメットを脱ぐ。

それは、よく知っている顔だった。

「あ、唯」

「おやおや、よもやこんなところで再開するとはね」

バイクに乗っていたのは、瞬とファイフティだった。どこか間の抜けたような声を出す瞬に、先程まで色々と考えこんでいた唯は、雨の中一直線に瞬へと駆け寄り、瞬をぼこすか叩いたりバイクをゆさゆさと揺らし始めた。

「あ、じゃないが！あ、じゃないんだってば！」

「やめろやめろバイク倒れるう！」

「ばかばかおばかあ！幼馴染たる私を差し置いてどこほつつき歩いてたんだよう！」

「それは悪かった！でも追い回されたり尋問されたりでこっちも大変だったんだよ……ごめんな、いきなり巻き込んだじまって」

「巻き込むのはいいいよ!?」でも人のこと巻き込んだいて途中下車とかマジありえないんだって！いつつも蚊帳の外とかホントモヤモヤするんだよ!?？」

「うぶおあバイク倒れるう！」

感情に任せてバイクを揺さぶりすぎたのか、バイクスタンドを下ろしていなかったのが仇となり、バイクは瞬を跨らせたまま横転してしまう。またもや雨で濡れた地面にぶったおれる瞬。足がバイクの下敷きにならなくてよかった、と胸を撫で下ろしながら、フイフティと共に倒れたバイクを起こしてゆく。

そして、バイクを張り倒した唯の頭にお仕置き代わりに軽くチョップを叩き込み、唯の両肩に手を置いて、改めて話を聞くことにした。

「で、お前の主張をもう一度聞かせてもらおうか」

「巻き込むのは構わないよ。でも、置いてけぼりは許さない」

「……やっぱりそう言うか」

「わかってたんならよし」

瞬的には、唯を危険な目に合わせたら彼女の親と湖森に合わせる顔が無くなってしまうので、極力唯は巻き込みたくない。だが、唯はそんなのお構い無しに首を突っ込むと宣言しちやっっている。そして瞬は知っている。コイツを説得するのは無理だと。唯との10年来の付き合いがそう物語っている。

ならば、唯に危害が及ばないように自分が頑張るしかあるまい。瞬にはその為の力があるのだから。前回のようなことは繰り返させない。

そう決意しながら、瞬は再びバイクのエンジンをかける。当然のように唯がファイフティからヘルメットを奪い取って瞬の後ろに乗ってくるが、今更突っ込むのもあれだろう。

そこに遅れて雪菜と古城もやってきた。

「無事だったんですね。良かったです」

「2人も、巻き込んでしまっただごめん」

「ま、まあ、とりあえず無事でよかったですよ。風沙のこともありがとう」

「途中でほっぽり出してただけだね」

「あのまま仲良く御陀仏よりはマシだろうに」

周りへの被害に無頓着なレイラと戦うのだから、あの時は唯に任せるのが最善策だったと思う。まあ結果的に元の鞘にもどって一安心だ。

「ファイフティ、ネプテューヌとヒビキの居場所は分かるか？あいつら、勝手にうるちよろしてなけりやいいけど」

「勿論だとも。バイクの方にナビを付けておいたからね」

そりやあ良かった。このまま当てもなく街中を走り回るのは流石に無理があつたので、ファイフティに頼んでおいたのだ。本当ならスマホで電話を掛ければいいのだが、なぜか2人とも繋がらないし。

2人について考えを巡らせていると、無性に不安になってきた。早く行かなくては。瞬はヘルメットを被り、バイクのアクセルを回そうとする。そこに、古城が声をかけてくる。

「自己紹介、まだだったよな？俺は暁古城」

「姫終雪菜です」

確かに、ここまで関わっておきながら、まだ互いに名前を知らなかった。一応互いに恩があるわけだし、名前を知らないというのは流石に失礼だろう。

「諸星唯だよ」

「逢瀬瞬だ。2人とも、ありがとな」

「びーも」

互いに遅い自己紹介を交わし、瞬はバイクを走らせた。

雨の中、瞬と唯を乗せたバイクが遠ざかってゆくのを、古城と雪菜は見送っていた。
が。

「なんで貴方は此処に残ってるんですか？」

「いや今の流れるに彼女が一緒に行くべきだと思つてね。それに流石に3人乗りは無理だよ。私は徒歩でゆくさ」

何故かファイフティが置いてけぼりをくらっていた。というかコイツ、先程から半分居ないもの扱いされていたような気がする。

雪菜の問いかけに、半笑いになりながら答えると、ファイフティは雨に濡れながら、鼻歌混じりに瞬の後を追いかけていつてしまった。古城は、ファイフティのあのローブみたいな服装、絶対水含んで重くなってるよな、とか思っていた。

ともかく役目は終わったので、風沙を起こして帰ろうする古城。

「……ともかく帰ろうぜ。あんまり雨に濡れると風邪ひくし」

「いやでも、この人達どうすれば —— あれ？」

雪菜が指差した先には、先程までオリジオンにされていた2人がいた筈だった。しかし今は、そこには誰もいなかった。

神代邸近辺

天道は、バイクを走らせている途中、ふと加賀美の事を思い出した。

たしか加賀美は、他のライダーの元へと向かうと言っていたような気がする。一時停止の標識に従い、天道はバイクを停車させる。ちようど今、天道は神代邸の近くにいます。

カブトオリジオンは、全てのライダーを倒すと豪語していた。ならば、神代剣――

仮面ライダーサソードも奴の襲撃を受けてもおかしくない。そしてやつは、いずれ再び天道の元へとやってくる。何がしたいのかは不明だが、向こうがその気なら迎え撃つてやろうではないか。

天道がそう考えていると、どこからか救急車のサイレンらしき音がこちらに近づいてくるのが聞こえてきた。

「まさか……」

ある予想のもとに、天道は再びバイクを走らせる。

そうして天道が神代邸にたどり着いた時には、神代邸の者の前に救急車が停車していた。そして、門の向こうから、担架に担がれた怪我人が運ばれてくる。それは、天道のよく知る人物達だった。

「加賀美……」

神代剣と加賀美新。満身創痍の2人が、救急車の中へと運ばれていた。―― 奴

は、もう2人を撃ち破っていたのだ。

救急車に担ぎ込まれる2人を眺めていると、救急隊員達に続いて、門から1人の老人が出てくる。彼は神代剣に使える使用人。剣からはじいやと呼ばれている。じいやは天道に気づいて、天道の元へと駆け寄ってくる。

「天道様。坊つちやま達が何者かに襲われて……私は丁度家を離れておりまして、帰ってみればこのような……」

「ああ、一步遅かったようだな」

「しかし坊つちやま達をここまで痛めつけるとは……何者なんでしょうか」

「あんたはあいつらについて行くんだ。敵の狙いは俺だ」

「は、はい……気を付けてください」

怪我人2人とじいやを乗せた救急車が遠ざかり、天道だけがこの場に残される。

「……」

天道はバイクを降りて、神代邸の敷地へと足を踏み入れる。

庭は、ひどい有様だった。そこかしこが荒らされ、あちこちに血痕が残されている。その中から、建物の裏手に一筋に伸びる血痕があった。こんな分かりやすい痕跡を残すような馬鹿はそうそういないだろう。十中八九、誘っている。

だが、行くしかない。天道は、罫を承知の上で血痕を追うことにした。

「出てこい。狙いは俺だろう？」

天道は、血痕を追いながら呼びかける。すると、天道の前方で物音がした。たしかこの先は裏門だった筈。

天道は裏門に辿り着く。其処には、血痕の終点が居た。

「待っていたぞカブト。俺は4人のライダーを倒した……今こそ、決着をつけよう」

「望む所だ」

今、カブトとカブトの再戦が始まろうとしていた。

「……か……」

ドアガラス越しに部屋の様子を伺いながら、灰司は呟いた。

ここまで幾度となくトラップに襲われてきたが、その都度対処しながら、最深部まで辿り着くことができた。ネプテューヌを守りながらの道中だったので、いつも以上に灰司は疲弊している。

部屋の中には、ずっと付け狙っていた転生者・司馬神真の姿が見える。彼は、モニター越しに子供達に殺されてゆく様を眺めながら、ゲラゲラと笑っている。どう考えてもまともじゃない光景に、灰司はぐつと歯を食いしばる。

彼はゲーム感覚で子供達を殺していたのだ。それも何度も。血飛沫が飛び散る様を見てはしゃぐその姿は、人の姿をした化け物と形容しても差し支えない程の嫌悪感を出

している。

オマケに、どうやって手懐けたのかは知らないが、ワームまで使っている。これは厄介なことになりそうだ。

「皆を助けないと……あのままじゃ皆殺されるよ!?？」

「わかつている」

灰司を急かすネプテューヌ。こんな時、女神の力が使えれば良かったのだが、あいにくこの世界では彼女は無力な存在。どうしようもない。

灰司もネプテューヌの気持ちはわかつてはいる。しかし、ワームへの対処と司馬の捕縛。両方をやり遂げなければならぬが、それができない。戦闘要員があと一人いれば、何とかかなりそうなのだが

——

「ん、あれ……」

「どうした」

ネプテューヌが、何かに気付いたように指をさす。その先——司馬のいる部屋の隅、そこには金属製の縦長ロッカーが鎮座している。その半開きのロッカーの中から、何かが垂れ下がるようにして見えている。

灰司達がロッカーに注目していると、ギイ……、と音を立てて、ロッカーの扉が開い

てゆく。

その中身を見て、二人は驚愕した。

「な、に……う？」

「まさか……」

中に入っていたのは、バラバラに切断された司馬神真の死体だった。

今部屋の中でモニターを見てゲラゲラ笑っている彼と、全く同じ容貌をしたバラバラ死体が、ロッカーの中に詰め込まれていた。では今生きている司馬は一体なんなのか。灰司はその答えを既に知っている。ネプテューヌも、それを既に見ている。

「え、何、どゆこと？」

「どうもこうも無え。コイツは多分 ——」

「あーあ、バレちゃったかあ」

その時、今までモニターを見ており灰司達に気づくそぶりも見せていなかった司馬が、突然灰司達の方に顔をむけてきた。

「いやあ、中々いい趣味してるよなあコイツ。成り代わってみてよく分かったよ……」
司馬はそう言いながら椅子から腰を上げ、眉一つ動かさずに一歩ずつ近寄ってくる。一歩ずつ前進するたびに、司馬の姿が揺らいでゆき、人間とは到底思えない姿へと変化してゆく。

焦げ茶色の皮膚に、肥大化した複眼、背中から生える萎びた羽根。人間に擬態する地球外生命体・ワームだ。それも、先程瞬に擬態していたものと同一の個体。時系列的には、どうやら灰司達がここにくる直前に、本物の司馬を殺して成り代わったようだ。

「せっかくだから仲間も呼んでみたんだけど、こりやあ癖になる。弱い奴が死から逃れようと右往左往する様は最高に笑えるよ」

「理解できない……こんなのゲームでもなんでもないし、ゲーム呼ばわりすることが間違っている！少なくとも私は、人の命を弄ぶゲームなんて許せないんだから！」

「餓鬼がごちゃごちゃ煩えつての。お前らもすぐに殺してやる。そして俺達の中で生き続けるんだ」

ネプテューヌの怒りを軽くあしらひ、ワームは爪を立てながら歩み寄る。灰司はネプテューヌを庇うようにしてじりじりと退がるが、通路の奥の方から呻き声のようなものが近づいてくるのに気づく。おそらく、他のワームがこっちに来ているのだろう。

早くやるしか無い。ワームに対抗するならば、クロップアツプが可能なマスクドライダーシステムしかない。灰司はダークカブトに変身しようと考え、ライダーベルトを腰に巻く。

その時だった。

『グギャアアアアアアッ！』

司馬が付けっぱなしにしていたモニターから、人間のものとは思えない断末魔が響き渡った。

おかしい。そんなはずはない。集めたのは何の力もないただの子供。そんな奴らにワームが負けるはずがないのに、今の悲鳴は一体なんだというのか。

ありえざる事態に動揺しながら、司馬に擬態していたワームは、モニターを凝視する。灰司達もつられてモニターを見る。

そこには。

「あはははははははははっ！見せてよ！もつと見せてよ！じゃないとばらばらにしちゃうからね！」

モニターの向こうでは、律刃が大勢のワーム相手に無双していた。

「ほらそー！ー」

華麗なバック宙でワームの突撃を躲しながら、律刃はワームの頭に足でしがみつ、ランドセルの中に入っていた2本の彫刻刀をワームの側頭部目掛けて振り下ろす。

ワームは断末魔と体液の飛沫を上げながら、自分達が殺してきた子供達の血の海の中に倒れる。律刃はワームの上から降りると、陽気に鼻歌を歌いながら、血の滴る彫刻刀

を指揮棒のように振り、周囲を取り囲むワーム達に言う。

「ねえ、次は誰からばらばらになりたい？わたしたち的には誰からでも大歓迎だよ？宇宙人をばらばらにするのははじめてだから、わくわくしちゃうよね！」

（この子……一体なんなの？ただの彫刻刀であんな真似できる？てか身のこなし的に明らかに普通の小学生じゃないし……）

コンテナの中に隠れながら様子を見ているヒビキも、律刃にドン引きしていた。彼女が一体何者なのかは分からないが、少なくとも普通じゃない。だからかし、この状況を打破できるのは、律刃しかない。だから今は、頼るしかない。

律刃は鼻歌を歌い続けながら、ワーム達に近づいてゆく。想定外の犠牲にたじろぎながらも、ワームの中の一体が、律刃に無謀にも突っ込んでゆく。

「遅いよ」

しかし、ワームの振り下ろされた爪は空を切る。律刃の姿が忽然と消えてしまったのだ。驚くワームだったが、次の瞬間、ワームの背中に激痛が走った。

振り返ると、そこには、ワームの背中に彫刻刀を突き刺した状況の律刃がいた。

「宇宙人の開き、いっちよあがり」

ワームが吠えるよりも早く、律刃はワームに刺した彫刻刀を素早く動かした。すると、まるで魚の開きを作るかの如く、ワームの背中が切開かれ、体液を撒き散らしなが

らワームはぶっ倒れた。

「グギャアアアアアア！」

「そっつー！」

仲間の死に怒りを感じたワームが飛びかかってくるが、律刃はすかさず彫刻刀を投げつける。飛ばされた二振りの彫刻刀は、ワームの脳天と

胸部に突き刺さり、一瞬でその生体反応を奪い取る。

律刃はワームに刺さった彫刻刀を回収しにいかうと、この血生臭い場に似合わない、可愛らしい足取りで歩き出す。獲物を無くした敵が見逃されぬはずがなく、2体のワームが丸腰の律刃に襲い掛かる。

しかし、

「甘いんだよ。俺達を倒そうってんなら少しは考えて立ち向かってこいよ化け物が」

そう言うと律刃は、すかさずランドセルから彫刻刀の入っていたケースを取り出し、その中に入っていた別の彫刻刀を装備すると、両サイドから飛び掛かってきたワーム達にブツ刺した。

ワームの死体から彫刻刀を引き抜くと、律刃はため息をつきながら、まるで誰かに語りかけるかのように言う。

「まったく油断すんなよな。今のお前がなんなのかちゃんとかわかってんのか？……行く

ぜ、あつという間にばらばらにしてやるからな？」

その瞬間、何かの合図でもするかのように、律刃の目が光った。

ワーム達はそれにお構いなく突っ込んでくる。しかし、突如として律刃の周囲に濃い霧が立ち込めだし、ワーム達の視界が白一色に塗りつぶされてしまう。

困惑するワーム達に、律刃からの死刑宣告が下される。

「さあお片付けの時間だ！ 擬・解体 聖 母！」

そう叫んだかと思えば、次の瞬間、律刃が霧の中から姿を現した。いかにも必殺技らしい流れだったというのに、何もなかったというのか。ヒビキも、霧に囚われたままのワーム達も、同じ事を思っただろう。

しかし、それは突然来た。

何の前触れもなく、ワームの内の一体から血飛沫があがり、断末魔を上げながら床に倒れる。それを皮切りに、次々とワーム達はその身体から血飛沫ど断末魔を上げながら、その命を散らしていく。そして、全てのワームが死んだと同時に、霧が晴れる。

後には、ヒビキと律刃と、僅かに生き残った子供達だけが残されていた。子供達は、たった一人でワームを殲滅した律刃に恐れを成して、部屋の間でガタガタと震えている。そりゃあこんなものを見せられて怖がるなという方が無理だろう。

ヒビキとしてそれは同じだった。返り血に塗れた律刃は、最初に会話した時と変わらな

い調子で語りかけてくる。あんな事をやっておきながら、平然としている。ヒビキはそれが怖かった。

「さ、帰ろうか」

「君は一体……？」

手を差し伸べる律刃に、ヒビキは震える声で問いかける。

そう言われると、律刃は、無邪気にこう答えるのであった。

「霧崎律刃。ものをばらばらにするのが好きな、ただの女の子だよ。」

「ありえない……ありえない！ただの子供にこんな真似が！」

律刃による虐殺の一部始終をモニター越しに目撃していた、司馬に擬態したワームは、机を叩きながら怒鳴り散らす。

（あのガキ……ひよつとして転生者か？）

一方で、灰司は、律刃の正体にある程度気づき始めていた。

転生者ならば、例えば子供だろうとあんな事が出来てもおかしくはない。それに、律刃の外見に、彼は見覚えがある。彼女の言動からするに、あの転生者の転生特典は

「くそ！こうなればヤケだ！俺の手で皆殺しにしてやる！」

そこまで考えた所で、司馬に擬態したワームが自棄になって灰司に牙を剥いてきた。灰司は思考を中断し、ネプテューヌの手を引いて素早く通路側に引き下がる。

それと同時に、灰司達の背後の窓ガラスを突き破りながら、ダークカブトゼクターが灰司の元に飛来してくる。

「そうは行かせねえよ。変身！」

《HENSHIN》

灰司はそう啖呵を切りながらゼクターをベルトにセットし、ダークカブトに変身してワームを迎え撃つ。ワームの鉤爪がマスクドフォームに重装甲と激突し、火花を散らす。

ワームの初撃を難なく受け止めたダークカブトは、即座にワームを蹴り飛ばすと、ネプテューヌを抱え、ダークカブトゼクターが突き破った窓から地上に向かって飛び降りる。

「うおおっ!?？」

「たかが2階からの飛び降りだ、びびる必要なんざねえつての！」

ダークカブトを追って、ワーム達も窓を突き破って飛び降りてくる。ガラスの破片が降り注ぐ中、ダークカブトはネプテューヌの背中を押しして逃がそうとする。

サナギ態のワームの群れを引き連れたコオロギ型のワームは、じりじりとダークカブ

トににじり寄ってくる。

「逃さないと言つたら？安心しろ、お前達は俺達の中で生き続けるんだ。だから怖がらなくていいんだ」

「表面上はそうかもしれない。だが俺はそんなの真つ平御免だ。まったく反吐が出る。てんせいしゃクソ野郎とクソ野郎ムのブレンドなんざノーサンキューの極みだ。どの道お前を野放しにはできないしな、さっさと終わらせてやるよ」

《CAST OFF……CHANGE BEE TLE》

ダークカブトはゼクターホーンを動かし、ライダーフォームに移行する。パージされた装甲が容赦なくサナギ態のワームを蹴散らしてゆき、一部のワームはそのまま緑色の爆炎を上げながら木っ端微塵に砕け散る。

同胞の死に憤りながら、コオロギ型ワームは背中の羽根を素早く動かして真空の刃を解き放ってくる。しかしダークカブトはそれを難なく飛び越え、そのままワームの懷まで潜り込み、肘鉄をぶち込む。

「ぐっ……」

「っはあっ！」

ダークカブトは仰け反ったワームの顔面に、続け様にパンチを叩き込み、さらに腹パ
ン数発、脇腹へのハイキック3発、回し蹴り1発を続け様に命中させてゆく。反撃の隙

など与えやしない。ただ速やかに標的を殲滅する戦い方だ。

生き残っていたサナギ態のワーム達が、背後からダークカブトに飛びかかるが、ダークカブトはすかさずカブトクナイガン・アックスモードで振り向きざまにワームを一刀両断し、爆散させる。彼らは最早戦いの土俵にすら立っていないかった。

「コピーする相手を間違ったんじゃないのか？」

「黙れよ！ならお前を倒して俺がお前になってやる！」

ダークカブトの言葉に苛立ち、ワームは殴りかかる。が、

「やめとけよ。お前如きに俺が務まっただまるか」

ダークカブトはカブトクナイガンを素早く振り抜き、ワームの片腕を切り落としてしまふ。血飛沫と悲鳴がワームから発せられ、片腕を失ったワームは地面に倒れる。ダークカブト的にはこれで殺せると思っていたのだが、案外相手もしぶとらしい。

だがそれがどうした。それならまだまだ殴ればいい。斬れば済む話だ。ダークカブトは倒れたワームの胸ぐらを掴み上げ、そのまま何度もワームの顔面を殴りつける。その姿はまるで、カツアゲをする不良のようであった。一体どちらが悪なのだろうか。

「……勝手に動いちゃ駄目だからね。危ないんだよ？」

「なあ」

その戦いを廃工場の建物入り口付近の物陰から見ていたネプテューヌは、自身の腕の

中に抱かれた猫にそう語りかける。

なぜか妙にネプテューヌに懐いているらしく、呑気なのは、はたまた状況がわかっていないのかはわからないが、猫はのんびりと欠伸をしながらダークカブトの戦いを静観している。

「しかし、あの人も仮面ライダーだったなんて驚きだよねー。いいなあ、私も女神モードになれたらなあ。しばらくお仕事サボってたからレベル1になってるかもだけど」

自分が戦えないことひ菌痒さを感じながらも、それを仕方なしに受け入れ、ネプテューヌは物陰でやり過ぎそうとする。猫をぎゅつと抱きしめ、ぽつり。

「ごめんね、——。こんな不甲斐ないお姉ちゃんで……あれ？」

そう言つて、彼女は首を傾げた。はて、今変なことを口走つたような気がする。しかしながら、それがなんなのかさっぱりわからない。

「なんかおかしな事言っちゃった感半端ないんだけど……どゆことよこれ？」
「ぬーあ？」

腕の中の猫と共に首を傾げるネプテューヌ。まだ物忘れに苦しむ年頃じゃないというのに。

ネプテューヌがうんうんと唸っていると、ガコンと、彼女の近くにあつた、廃工場の入り口である鉄扉が開く音がした。そして、扉の向こうから、数人の子供達が顔を見せて

る。律刃の活躍で生き延びた子供達だ。勿論、律刃も、そしてヒビキの姿もその中に確認できる。

「あ……ネプテューヌ！」

「ヒビキ！無事だったんだね！」

お互いに気づき、再会を喜び合う。迷子同士がようやく合流できたのだ。

そんな2人の様子を遠巻きに見ていた律刃は、保護者目線で言葉を送るが、

「良かったね再会できて。うん、わたしたちが頑張った甲斐があつたよ」

「あ……うん……」

「怖がらなくていいよ」

「いや怖がる要素しかないよ……」

あんな血みどろの惨状を作つて子供達にトラウマ植えつけといてよく言うよ。ヒビキもネプテューヌも思わず律刃から距離を取る。よく見れば周りの子供達もガタガタ震えっぱなしである。これはメンタルケアに苦労しそうだ。

が、そこでワームが逃げ出してきた子供達に気づいた。ダークカブトにゴコゴコにされてはいるが、それでも許せなかつた。司馬しづまの娯楽を台無しにした律刃を。

「貴様はさっきの——許さねえ！貴様も死ねえ！」

ワームは、自らの腕を掴んできたダークカブトの手を振り払うと、金切り声をあげな

がら、口から毒々しい色の液体を嘔き出した。その液体は強い酸性を示しており、人体など容易く溶かし尽くしてしまうシロモノだ。

猛スピードで放たれたそれは、無防備な子供達目掛けて飛んでゆく。ダークカブトも、律刃も、アクシオンを起こそうとするも、圧倒的に時間が足りない。間に合わない。「ハッハア……人たりとも生きて帰すわけねえだろ！死ねえ！」

「させるかあ！」

ワームが上記の台詞を吐き捨てたその時。

コンクリート塀を飛び越しながら、廃工場に隣接していた雑木林の中から、一台のバイクが飛び出してきた。そして、そのバイクの乗り手らしき人物が、銃らしきもので溶解液の弾を瞬時に打ち落とすってしまった。

一体この局面で、誰が邪魔しにきたというのだ。

バイクの乗り手は、ヘルメットを外す。その顔は、ワームにとってもダークカブトにとっても見覚えのあるものだった。

「……またあつたな虫野郎。こんな子供を手にかかけようとは、腐った野郎だ」

「あのう……瞬、ここ何処？また戦場？」

逢瀬瞬。一度退場した筈の彼が、舞い戻ってきたのだ。

バイクの後ろに載っている唯は状況を飲み込めていないのか、辺りをキョロキョロと

見渡している。

「瞬！」

「悪いな、お前らをほっぼりだしちまって」

瞬の姿を見てネプテユーンとヒビキが駆け寄ってくる。瞬が離れていつてしまったせいで、これまで散々な目に遭わされたのだ。彼女達には申し訳ないことをしたな、と瞬は2人の頭を撫でながら謝罪する。

が、今は再会を喜び合うような場合ではない。邪魔をされて不機嫌そうなワームと、交戦中だったダークカブトがコチラを見ている。

「アクロス……！」

「はっ！誰かと思えばクロックアップのできない雑魚ライダーか！お前は呼びでないんだよ！さっさと死ね！」

「そーいやあお前とやり合うのはこれで3度目だったっけな。いい加減うんざりしてるんだ、ケリつけようぜ」

ダークカブトと取っ組み合いながら、クロックアップのできないアクロスなぞ敵ではないと豪語するワームだが、瞬は不敵に笑いながら新たなライドアーツを取り出す。その赤いライドアーツには、こう書かれていた。

—— K A B U T O 。

それに気づいた瞬間、ワームの顔色が変わる。コピーした司馬の記憶から、とある可能性に辿り着いてしまう。それが正しければ、今ある優位性は無くなってしまう。

「唯、離れてろ」

「うん」

唯達を安全な場所まで下がらせると、瞬はバイクから降りながら、あらかじめ巻いていたクロスドライバーに、アクロスライドアーツとカブトライドアーツを装填する。

「変身！」

《CROSS OVER！思いを、力を、世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！LEGEND LINK！LINK KA BUTO！》

長つたらしい変身音声が流れ、いつもの様にアクロスに変身した後、アクロスの頭上に、何処からともなくアクロスと同じくらいの大きさのカブトゼクターに酷似したユニットが飛来してくる。

飛来してきたそれはアクロスの頭上で羽ばたきながら、ワーム達を威嚇するかの様に数度複眼状の部位を光らせると、パーツ毎にバラバラになってアクロスに引っ付いていく。ゼクターホーン部分はアクロスの額にくっ付き、本物の仮面ライダーカブトのようなシルエットを作り出し、鉄の羽根はアクロスの背中にくっ付き、スイツチらしき部位

はアクロスの腕にくっ付き、残りの部位は胸部や脚部にくっ付き、赤い装甲に変化する。これぞ天の道を行くライダーとの繋がり、結晶、仮面ライダーアクロス・リンクカブトである。繋がった時間は僅かなれど、その縁は確かに今結実したのだ。

「その姿……また新たなフォームか！」

「は！変にゴタゴタつけやがって！速攻で叩いてやる！」

ワームはダークカブトのカブトクナイガンによる一閃を躲すと、クロックアップで即座にアクロスを叩き潰そうとする。ダークカブトも即座に反応し、ワームと同時にクロックアップ状態となる。

例え片腕しか無かろうと、コイツを始末できるはずだ。最悪の予想が実現する前に終わらせて ——

「言っただろ、ケリをつけるってな」

「……あ、ああ！」

その声を聞いた瞬間、胸に強い衝撃を受けると同時にワームは絶望した。

ゴロゴロと地面を無様に転がったワームは、見上げる。そこには、クロックアップの世界でも、普通に活動しているアクロスの姿であった。彼もまた、クロックアップの世に突入してきたのだ。

「情けねえな、たかがイーブンになっただけだろ？まさかお前、自分が完全有利じゃない

と発狂するタチか？」

「前の様には行かないぞ……さあ、突っ走るぜ」

クロックアップした2人のライダーは、狼狽えるワームに突っ込んでゆく。まずはアクロススの攻撃。鋭い右ストレートがワームの顔面を捉え、ワームを仰け反らせる。そこにすかさず、ダークカブトのカブトクナイガン・ガンモードによる射撃が命中し、ワームはなすすべなく撃ち抜かれてしまう。

入れ替わりに、アクロススの連打がワームの腹部に食い込み、ワームはくの字に折れ曲がって吹っ飛んでゆく。ぶち当たったドラム缶の山がガラガラと音を立てて崩れ、ワームはその下敷きになってしまう。

クロックアップならばそれは避けられた筈なのだが、ワームはそうしなかった。いや、できなかった。今やクロックアップの有無という圧倒的な優位性を崩されたワームは、みるみるうちに戦意を喪失していた。コピーしま司馬神真の性格に引き摺られ、対等な戦いに恐れを抱き始めていたのだ。

「ひいっ！ ああ！ くそ、お、お、俺を守れよ！」

「逃すか！」

「おい待てそいつは俺の —— ああクソツタレ！ また子守かよ！」

サナギ態ワーム達に足止めを命じながら、司馬に擬態していたワームはクロックアップ

プで逃げ出した。ダークカブトの制止を振り切り、アクロスはそれを追ってクロックアップで駆け出す。

雨粒が地面に着くよりも速く、瞬きよりも速く、両者は駆ける。しかし、アクロスとワーム、双方のメンタル面での差異が、その距離差を埋めてゆく。

双方は工場地帯を抜け出し、近場の河川敷にまで移動していた。雨が降り頻る中、必死でクロックアップしながら逃げるワーム。しかし、その足取りはだんだんと力無いものになってゆく。元より弱い者イジメしか出来ない小心者だった司馬神真の記憶の影響を受けて、どんどん弱気になっていつているのだ。

「来るなあ！来るなって！」

「もう追いついてるんだよ！」

叫ぶワームだが、それよりも早く、追いついたアクロスがワームを殴り飛ばした。びしゃびしゃと水飛沫を上げながら、濡れた地面に倒れるワーム。

アクロスは、ライドアーツを一旦挿入口まで戻し、再度ドライバーにセットする事で、必殺技を発動させる。

《RIDER CROSS BLAKE》

「はあっ！」

アクロスは雨を突っ切りながら、空高く飛び上がる。すると、アクロスの全身を覆つ

ていたカプトゼクターに酷似したユニットがアクロスから分離し、アクロスの両足に新たな形でくっついてゆき、ちょうど、アクロスの下半身がカプトゼクターと一体化したかの様な形状となる。

そして、アクロスはその状態のまま、ワームめがけて一直線に急降下する。足の先は、ちょうどゼクターホーンと一体化している。このまま突き刺す算段らしい。ワームは情けない悲鳴を上げながら逃げようとするが、これまでに食らったダメージが響いて上手く身体を動かせない。

ワームは闇雲に腕を振るう。しかしそれはもはや悪あがきにもならず、アクロスの脚部のゼクターホーンが、ワームの身体を突き破った。

「うわっ………とっ？」

通常フォームに戻りながら着地したアクロスは、胴体にでかい穴が空いたワームの姿を見る。ワームは、司馬の姿とワームの姿を交互に取りながら、アクロスに向かって恨めしそうに手を伸ばす。

「ふ、ぎ、け、る ——」

言い終わる前に、終わりが来た。

致命傷を負ったワームの身体は、赤い炎を撒き散らしながら爆散した。後には何も残らなかった。

「……ふう」

戦いが終わり、雨に濡れながらほっと一息つく。

ともかく、早く戻らなくては。さっきの二の舞はもう懲り懲りだ。アクロスはどっと押し寄せた疲労を押し殺して、皆の元に戻ろうと足を動かす。

その時だった。

何気なく目をやった、川の対岸。そこにアクロスは、あるものを見た。

「あれは——」

川の対岸にある遊歩道。そこに、土砂降りの雨の中、2人の男が佇んでいる。

一方は天道総司。雨に濡れながら、ただただ無言で目の前の人物を凝視している。その胸の内は誰にもわからない。もう一方はカプトオリジオンに変身していた青年。ライダー達との連戦で満身創痍であるにもかかわらず、その目は今なお闘志に燃えている。リベンジマツチが、幕開けようとしていた。

「待ってたんだぜ、天道お……」

「……その執念にはほとほと呆れかえる。何故そこまで俺を倒したがるのかには興味はないが、いいだろう。乗ってやる」

神代邸から場所を移し、雨降る川岸に2人は対峙する。雨は一層強まり、川の水位は

更に増してゆく。他の人が見れば、間違ひなく危険だと判断し、2人をこの場から引き離そうとするだろう。

だが、そんなことは起こり得ない。2人は今か今かと戦いの時を待ち侘びるかにように、互いを凝視している。幾許かの静寂ののち、それを破るかのように、羽音を響かせながら、天道の元へとカブトゼクターが飛来し、天道の腰のライダーベルトにひとりで収まる。

「変身」

「変身」

《HENSHEIN》

《KAKUSEI KABUTO》

天道がカブトに変身すると同時に、青年の方もカブトオリジオンに変身する。

そして、両者ともに一斉に駆け出して間合いを詰める。まずはカブトオリジオンの先攻、ひねりのない右ストレートが、カブトにむかって放たれる。しかし、カブトオリジオンの拳がマスクドフォームのカブトの腕装甲に阻まれ、ガキンツ!! と、大きな音を立てる。

カブトは左腕で受け止めたオリジオンの拳を振り払うと、即座にカブトクナイガン・アックスモードを振りぬき、オリジオンの胸部を横一文字に斬りつける。しかし、カブ

トオリジオンは素早く身を引いたため、カプトクナイガンの刃はオリジオンの胸に浅い傷をつけるだけに終わり、たいしたダメージを与えることができずに終わった。

「ふううあああああああつ!!」

カプトオリジオンは地面を強く蹴って目にもとまらぬ速さでカプトの懐に潜り込み、装甲の薄いベルト周辺にパンチを叩き込もうとする。だがカプトがそれをみすみす食らうはずもなく、間合いを詰めすぎたのがあだとなり、オリジオンは横っ腹に蹴りを食らってごろごろと地面を転がってゆく。

遊歩道と川を隔てる柵に身体をうちつけられ、おおむけに倒れるオリジオン。びっくりとも動かない彼の姿に、対岸から見えていた瞬は「これで終わったのか」と思う。カプトは、おおむけに倒れたカプトオリジオンに問いかける。

「もう終わりか？あれほど俺達を倒すと豪語したのに」

「んなわけあるか……俺はあんたを倒すまで死ねないっ!!」

それに呼応するように、カプトオリジオンはぼつと起き上がり、カプトの複眼めがけて肘鉄をかます。カプトは頭を捻って避けようとするが、先ほどまでよりも速かったその一撃は、流石のカプトも完全には避けきれず、側頭部にオリジオンの肘が食い込み、カプトの体制が崩れる。

カプトオリジオンはその隙を見逃さなかった。立て続けにハイキックを数発叩き込

み、カブトをじりじりと後退させてゆく。カブトは抵抗せずに、オリジオンの猛攻をただただその身に浴び続ける。そして、オリジオンは大きく飛び上がり、両足を使ったドロップキックをカブトにむかって放つ。

だが、肘鉄を受けてから無抵抗だったカブトは、そこでカブトクナイガン・アックスモードを思いきり投げ、ドロップキックでこちらに飛び込んできたオリジオンに、その刃を叩きつける。オリジオンのキックはカブトの胸に、カブトが投げたクナイガンの刃はオリジオンの脇腹に突き刺さる。オリジオンは痛みに悶えながら地面にたたきおとされ、カブトはその場に膝をつく。

戦いはまだ終わらない。カブトオリジオンは、突き刺さったカブトクナイガンを引き抜いてはその場に放り捨て、地面に膝をついているカブトを挑発する。

「クロックアップを使えよ。もっと本気で来い！」

「……………いいだろう」

《CAST OFF……………CHANGE BEETLE!》

その挑発に応えるように、カブトはベルトのカブトゼクターのホーンを右に動かし、クロックアップの可能なライダーフォームへと変身する。カブトオリジオンは、カブトのキャストオフによって周囲に弾き飛ばされたマスクドフォームの装甲を打ち払うと、歓喜の震えるような声で叫ぶ。

「そうだ……それだ……！もつといくぞお！クロックアップだ！」

「そちらがその気なら付き合つてやる。クロックアップ」

《CLOCK UP》

両者ともにクロックアップ状態に入る。二人に降り注いでいた雨が、まるで空中で静止したと錯覚するほどに、その速度を遅くする。空に浮いた雨粒をかき分けながら、カプトオリジオンはカプトに向かって突っ込んでくる。

カプトは跳んできたオリジオンの拳を片手で打ち払うと、身体を素早く捻つて回し蹴りを叩き込む。オリジオンは回し蹴りをくらいながらもその場に踏みとどまり、カプトの両肩をがしりと掴むと、自身の頭部についている角を思いきり振りかざした。頭突きで一瞬だけ、カプトの体勢が崩れる。オリジオンは、そこに続けて両の拳を使ってカプトの頭をぶん殴ると、力任せにカプトを蹴り飛ばした。

ずさささ……っ!!と後退するカプト。しかし彼はまだ倒れない。軽やかなステップを踏みながら、一瞬で開いた間合いを詰め、お返しと言わんばかりにオリジオンの顔面を容赦なくぶん殴る。オリジオンはカプトの腕をがしりと掴み、心の内を吐露する。

「あんたは俺の憧れだった……あらゆる意味で完璧な存在で！その生きざまは、多くの人を魅了してきた！」

「で？」

「だから超えたい！同じカプトになったのだから！全てのライダーを下し、最強である事を証明したい！憧れのあんたを超えたいんだよ！」

それが理由。本来ならかなうはずのなかった、憧れのヒーローとの対峙。それが今かかって対することに対する歓喜が、カプトオリジオンに力を与える。強すぎた憧れは。「あの人のようになりたい」から「あの人を超えたい」の境地まで行き着いた。だから止まらない。止まらない。なぜなら、ゴールはすぐ目の前にいるのだから。

カプトオリジオンは掴んだカプトの拳を下へと叩きおとすと、もう片方の拳でカプトの顎を抉るかの勢いでぶん殴った。しかしカプトは、アッパーカットで打ち上げられた勢いを利用して、そのままきれいなムーンサルトキックをカプトオリジオンに食らわせる。カプトは着地するなり、よろけるカプトオリジオンに向かってハイキックを食らわさせてオリジオンを吹き飛ばす。

そして、心境を吐露したオリジオンに問いかける。

「その先は？俺を超えて何をしたい？」

「先なんてない！憧れつてのは昇華しなきゃ意味が無いんだ。燻らせ続けると、人を狂わせちゃう。俺はそうなる前にチャンスを手にした。ならば、やるしかないだろ！」

ただ超えるだけ。壁を超えた先にあるものにはさしたる興味はない。ただ超えたいから超える。根底にあったのは、生粋のチャレンジャー精神だった。彼からすれば、た

とえどれほどの人を傷つけようとも、壁を超えることに比べれば些事たるものでしかない。他の転生者とはまた違った意味で、彼も狂っていた。

そんなカプトオリジオンに、天道はこう告げる。

「おばあちゃんが言っていた……他のものがいくら輝こうとも、太陽の輝きには届かない。お前は、俺にはなれない」

「なめるなああああああああああああああああああつ!!」

心の底からの叫びとともに、カプトオリジオンは天高く飛び上がる。そして、左足を突き出した姿勢のまま、一直線にカプトめがけて急降下してくる。——ライダーキックだ。

カプトオリジオンの跳び蹴りがカプトに迫る。しかし、カプトはオリジオンに背を向けたまま、一切動じない。いや、彼もまた、同じ技で迎え撃とうとしていた。

「ライダー……キック」

《RIDER KICK》

すでに準備は済んでいた。

カプトがそう呟きながら、ゼクターホーンを右に再度倒すと、電子音声とともに、ゼクターからタキオン粒子が放出され、カプト頭部の角を経由し、カプトの右足に粒子が集まってゆく。

を動かすオリジオンの視界に、カプトの背中が映る。

それを見て、彼は確信した。自分の思いは間違つてはいなかったのだ。あの日、画面越しに抱いた憧れは正しかったのだ。

（ああ、幸せだ —— ）

そう思いながら、カプトオリジオンは爆発した。生じた爆風は周囲の雨水と川の水を思いきり吹き飛ばし、カプトはおろか、対岸に居た瞬にまでそれを叩きつける。

爆風の中から、カプトオリジオンの正体であつた青年が、満身創痍の状態でとびだし、地面に叩きつけられる。きている服は原型をとどめない程にポロポロに敗れ、体中の傷から血が流れだしては雨水にとけこんでいく。

次第に、雨がやんでゆく、カプトは、右手を空に掲げ、人差し指を天高くつきたてる。すると、まるで勝者を祝福するかのように雲が切れ、そこから顔をのぞかせた太陽が、カプトを照らし始めた。カプトは終始無言だったが、その佇まいは暗に告げていた。

——俺こそが太陽だ、と。

「……………」

青年は、雲の隙間から覗いてきた日の光に包まれながら、意識を手放した。

太陽を目指して飛んだイカロスは、翼を失い地に堕ちた。彼も天の道に焦がれ、目前で潰えた。

だが——
その顔は、満足そうだった。

《RIDER KICK》

「せやあ！」

一方、此方も決着がついていた。

灰司——ダークカブトの回し蹴りが、彼の周囲を取り囲んでいたワーム達に炸裂し、ワーム達は一齐に爆散する。

「終わったん……だよね？」

「なんかよくわかんなかったけど、これで一件落着つて感じ？」

「あー、なんか終わった途端にどっと疲れが——」

そう言いかけて、ヒビキは扉に寄りかかりながら不器用な様子でその場に崩れ落ちる。ヒビキだけでない。唯も、ネプテューヌも、子供達も、皆一齐にその場に倒れこんでゆく。

そうして、全てが意識を喪失する。ただ一人平然としていたダークカブトは、皆が意識を失ったのを確認してから変身を解く。

「悪く思うな」

灰司が撒いたのは催眠ガス。これから灰司は、皆から今回の事件についての記憶を消すのだ。

アクロスの監視任務を受けている以上、瞬や彼に近しい人間に灰司の素性を知られるのは不都合なのだ。普段は細心の注意を払ってはいるが、今回はやむを得ずネプテューヌにバラしてしまったので、仕方なしに記憶処理を施す事にしたのだ。

おまけに、今回の事件はかなりショッキングなものであった。生き残った子供達の精神的ダメージを和らげるべく、この処理は避けられないものであった。ちなみに唯やヒビキについては記憶処理をするまでもないのだが、この場にいたのでついでに受けてもらう事にしよう。

ちなみに経費が結構かさむので、灰司的にはあまりこういう事はしたくないらしい。

「ああ面倒くせえ。さっさと終わらせてやる」

「へえ、こんな事するんだな」

しかし、ここでする筈のない、灰司以外の声が聞こえた。灰司は咄嗟に隠し持っていた拳銃を、声のした方に向けて構える。

「悪いな、俺息止めるのだけは得意なんだよ」

声の主 —— 霧崎律刃は、得意げに笑いながらドラム缶の上に腰掛ける。コイツを

始末すべきか、と一瞬考えた灰司だったが、即座にその考えを破棄する。

A M O R E は転生者そのものを憎む組織ではない。あくまで世界の秩序を維持するために、悪しき転生者と戦うのだ。転生者だからといってむやみやたらに殺していいわけではないのだ。灰司も転生者狩りの端くれ、その程度のこととはちゃんとわきまえてい

る。
「お前、転生者狩りなんだろう？」

「……やはりお前も転生者だったか」

「俺達を殺すのか？」

「いや、A M O R E が裁くのはあくまで悪人だけだ。転生者なら誰彼構わず殺すなんて独裁者じみた事してたまるか。まあ……お前のこれから次第、だな」

「へえ意外。俺の経験上、お前みたいな奴は融通効かない奴ばっかだから、てつきり殺すのかと」

偏見のこもった律刃の反応に、そんなの悪役と変わんないだろう、と灰司は吐き捨てる。
「俺の記憶は消さないのか？」

「記憶処理は金がかかる。俺みたいな一介のエージェントにや結構厳しいんだよ。だから言っておく。今回のことは口外するな。いいな？」

「安心しろ、口の堅さには自信があるんだ」

軽口をたたき合いながら、灰司と律刃は別個にこの場から立ち去ってゆく。後には、巻き込まれた女子供のみが残されていた。

その夜、逢瀬家では。

「……で？」

「だからさあ、この仔すつかり私に懐いちやつてさあ……全然離れてくれないんだけどどうしたらいいの？」

「黙りなさいこん畜生。うちにペット飼う余裕なんてないんだよ！ただでさえ居候二人増えて大変だつてのに、これ以上叔父さんの負担増やそうとするな。悪魔かお前は」
「女神だよ！悪魔呼ばわりとは失敬な！」

猫を膝に乗せながら、きらきらとしたおめめで懇願するネプテューヌを、容赦なく瞬は一蹴した。瞬の言うとおり、現在の逢瀬家の家計はほぼ全部環四郎おじさんが担っている。別に生活が苦しいわけではないのだが、それについてはわりと本気で申し訳ないと思っているので、これ以上の負担は増やさせまいと瞬は意固地になっているのだ。

が、そんな瞬の思いを無碍にする一言が、

「まあいいんじゃないかな、その代わり世話はちゃんとするんだよ」

「叔父さんは樂觀的すぎんだよ……」

まさかの叔父さんからのOKサイン受領である。本人がOKしてしまった以上、もうどうしようもない。歓喜の雄たけびをあげる幼女二人を眺めながら、瞬は思わず頭を抱えるのだった。

とある場所。廃病院のような場所の一室で、埃をかぶった患者用ベッドに腰掛けながら、バルジはつぶやいた。その手には、DISCのようなものが数枚。室内には彼以外に、窓の外に目を向けて佇んでいるレイラに、犬のように断続的に唸り声をあげるガングニールオリジオン、そして、ベッドの上に寝かされた二人の人影が存在している。

「実験は部分的に成功。しっかし、これを自前で調達できないのが難点だよなあ」

「ほんとお前はいつ見ても悪趣味だな。一体どんな教育受けたらそんな糞野郎になるんだ？」

そんなバルジに対し、レイラは壁に身体を預けながら悪態をつく。その表情からするに、本気でバルジのことを嫌がっているように思われる。バルジはレイラの発言を意に介していない様子で、ケラケラと笑いながら、

「悪趣味とか言うなよ。お前らがそろいもそろって頭脳労働できねえから俺が一手に引き受けてんだぞ？」

そう言って、持っていたDISCのうち1枚をレイラに投げ渡す。

「いい加減オリジン化の一つや二つ、やってくれないかねえ？ お前だけだぞ、ギフトメイカーの中でオリジンになれてないの」

「黙れ。私は私のやり方で行く」

「あつそ」

くだらない意地張りやがって、と言うかのように、バルジはレイラを突き放す。

一方で、レイラは話を切り替える。

「お前が私を呼び寄せたのはこれが理由ではないはずだ」

「ああそうだが？」

糞みたいな享楽主義者のバルジと生真面目なレイラとでは水と油。上記の会話で実るものは何もないということは、お互いに重々承知しているはず。それなのにわざわざレイラを呼んだというからには、それ以外に、バルジ側に何らかの事情があるはずなのだ。

「お前さ、最近頭痛が酷くなってきているだろ？」

「……ああ」

「それ、なくしてやろうか」

バルジがそう言った瞬間、バルジの背後の壁が一斉に蠢いた。

否、それは壁では無かった。何か無数の、小さいものが壁一面にうごめいている。

レイラはそれに気づいた瞬間、ここから逃げ出そうとするが、それよりも早く、それらが一斉にレイラにとびかかっていた。

「不調はどうにかしてやるからさ。大人しくギフトメイカー続けていてくれや、哀れな負け犬ちゃん」

ひどくなつてゆく頭痛の中、少女は意識を手放した。

1章―池袋編

第24話 AM10:00/池袋ジャック・ザ・ボマー

5月2日未明・都内某所

視界に広がるは、燃え盛る火の海。

元は大層豪華な家屋だったのだろう。華美な装飾の施された額縁やシャンデリア、椅子やテーブルの残骸が、それを物語っている。しかし、それらは既にあるべき姿を失っている。炎に巻かれ、砕け、潰れたそれに、元の価値はなかった。

「な、なんで……ワシが……」

瓦礫の下から、しわがれた声が発せられる。そこに、1人分の足音が接近する。「よう死にぞこない。俺のことを覚えているか？」

足音の主は、しわがれた声にそう言いながら、声のしたあたりの瓦礫を力を込めて踏みつける。すると、ぐちゅりという気色悪い音がして、しわがれた声が途切れた。瓦礫と瓦礫の間から、おびただしい量の血がにじみ出る。文字通り潰されたのだ。

足音の主は、焼け崩れた天井の穴から、空を見上げてつぶやく。

まるで、誰かを呼ぶかのように。

「さあこいよ■■■■……俺を殺しに來い……!」

その直後、もうひとつの足音が聞こえた。あり得ない。既にここにいる人間は全員殺したはずだ。全員の死にざまの一部始終をこの目に収めたのだから間違いない。サイレンは聞こえてこないことから察するに、消防車や救急車が来たわけでもない。この状況で、外部からの侵入者でもやって来たというのか。

男は、燃え盛る瓦礫の山をぐるりと見渡す。生命反応はない。そこに、背後から声がかけられる。

「おいおい、こりゃ随分と派手にやってんなあ」

「誰だ!」

そう叫んだ時には、既に彼の喉元にナイフが突きつけられていた。

刃が当たらないように、なんとか目線を動かす。ナイフを突き立てていたのは、目元から頬にかけて走る傷と真っ白な髪が良く目立つ、小学生ぐらいの女の子だった。

この場に圧倒的に似つかわしくない存在だが、男は察していた。コイツは転生者^{どうるい}だと。相手の転生特典も大方の目処がついている。

「お兄さん、ここになにしているの?これ、あなたが全部やったの?」

少女が問いかける。見た目に違わない、あどけない声だった。しかし油断はしてはな

らない。彼女はおそらく自分と同じ転生者、見ただ目で判断するのは三流のやることだ。しかし一体、何故彼女は自分の邪魔をしに来たのだろうか？

喉元にナイフを突きつけられたまま、男は逆に問い返す。

「お前……AMOREか？」

「いや、通りすがりの殺人鬼だ。たまたま散歩していたらこの火事を見つけてな……要救助者がいるかと思つて飛び込んだはいいけど……この調子だと、生存者はゼロみただいな」

「ヒーロー気取りか？なら引つ込んでろ！」

男は肘鉄をくらわそうとするが、その肘は空を切る。

少女は、ひらりと身をかわし、火の手が回つていない箇所に着地する。

「月に代わつて御仕置きされてみるか？ちよつくら残虐だけだな！」

ナイフを突きつけながら、少女はそう言った。

5月3日早朝・都内某所

闇の中で、こんなやり取りがあつた。

「これを、この住所に」

『いや、それなら宅配業者に頼んだ方がいいんじゃないですか?』

「本当なら俺が直接届けたかったんだが、生憎俺は今命を狙われているんだ。それに、追っ手もこれを血眼になって探している。だからある程度腕つぶしの立つ奴じゃないと任せられないんだ。その点貴女は大丈夫だ。なんせ■■■■■だからね」

『失礼ですが、誰からそれを?』

「仕事柄そういったものに縁があつたのさ。それで貴女のことを知つた」

『……』

「怪しむのも無理はない。なんせこれはひとつの命がかかっているんだからな。頼む、金ならいくらでも積む」

『まあ、報酬については文句ないのですが……』

5月3日早朝 AMORE本部内

どこかの世界に存在する、AMOREの本部。その施設内の、とある部屋。

プロジェクターの光以外に光源のない真っ暗な部屋の中で、ミーティングのようなものが行われていた。プロジェクターの脇に立つのは、目の下に隈をつくった壮年の男性。ところどころに金の装飾が施された白い制服に身を包み、自身の前に立つ数人のA

MORE隊員と思しき若者たちに、本日 of 作戦内容を伝えているようだ。

壮年の男性に相對するのは、様々な服装の若者たち。青いバンダナを巻いた金髪の青年だったり、全身包帯まみれの男だったり、どうみても無理のある魔法少女コス of 成人女性だったりと、どうみても世界を守る使命を負う者には見えない格好の奴らだった。

壮年の男性は、プロジェクターに映し出された数人の顔写真を指示棒で指し示しながら、ミーティングを締めくくった。

「……これが今回のターゲットだ。すべて必ず生かして捕えること。以上」

「質問いいですか？」

ミーティングを切り上げようとした壮年の男性に、バンダナの青年が手を挙げて質問する。

「なんだ」

「あのう……ターゲットの背景とかの説明はないんですか？いつもはあるのに……」

「それを教えて私に何か得があるのか？ないだろう？君たちに求めるのは、命令を確実に成功させるに足る実力だけだ。つたく、相変わらず君は反抗的だな……これ以上無駄な口答えをするようなら、降格も辞さないがいいのかね？」

「いえっ……はい、なんでもないです」

男性の高圧的な態度にいち隊員であるバンダナの青年は黙り込むほかなかった。ち

らりと同僚達を見てみると、他の皆はただ静かに話を聞いているだけ、一見すると真面目に話を聞いているだけのように見えるが、その実は「コイツに何言っても無駄」という、一種の思考停止に陥っているのだ。

バンダナの青年が黙り込んだのを確認すると、壮年の男性はプロジェクターを片付け、去り際に部屋の証明をつけると、不機嫌そうに退室していった。男性の姿が見えなくなったのを確認すると、緊張の糸が解けたのか、隊員たちが一気にだらけたような態度になる。

「どうした、あんまり乗り気じゃないみたいだが。お前が応森さんとの関係が微妙だからと言っても、あれはまずくないか？」

「だってさあ……ただ理由も聞かずに転生者捕えろとか言われてもさ、なんか納得しにくいというか……そう思わないっすか？」

「考えるだけ無駄よ。あたし達は所詮下っ端。上には上の考えがある……下っ端には想像もつかないような、ね」

想像もつかない考え。それが不安の種でないことを祈りたい。

バンダナの青年は、そう祈りながら、貰った作戦内容の記された資料に目を通していった。

5月2日早朝

あれから少したった頃。

少女は早朝の街をひとり歩いてた。

「逃げられちゃったねえ……まあ、あもーれには気をつけろっておかあさん言ってたし。変に目をつけられる前に逃げだしといて正解かもね」

そう、結局、燃え盛る洋館での死闘は決着がつかなかったのだ。決着がつく前に、AMOREに介入されてしまい、互いになりふり構わず逃げだしたのだ。あんな場所にとら自分まで捕まってしまう。こちとら善良な転生者だというのにな。

鼻歌を歌いながら、少女は朝焼けに包まれた街を歩いてゆく。早く帰らないと親が心配するだろう。いくら前世ではいい年した大人だったといえど、今の自分は小学生。夜遊びには早すぎる年齢だ。

そんなことを思いながら歩く少女。その手の中には、あるものが握られていた。「しっかし……これ、なんだろうね？あの転生者からくすねたんだけど……」

それは、透明なケースに収められたチップのようなものだった。それが何なのかは見当もつかないし、恐らく彼の大事なもののだろうが、持ってきてしまったものは仕方がない。

「まあいいかな。あの人がさっきのようなことを続けるなら……また会えそうだしね。」

返すのはその時でいいかも」

彼女は、随分と気楽な様子だった。

少女はチップを短パンのポケットにしまうと、鼻歌を歌うのを再開した。

これがつっかけで、翌日彼女は、実質的な指名手配犯にされてしまうことを、少女はまだ知らない。

同じころ。

人気の少ない小道を歩いていた男は、あることに気づいた。

「クソ……さっきのガキに盗まれたか……！」

どうやら何かを盗まれたらしい。落としたとかではない。確実に、あの洋館での決闘の最中に奪われたのだと、男は確信していた。

「はあ……面倒なことになったぜ畜生……まあ、優先事項は他にもあるんだ。それをやっていきやあ見つかるだろ」

悪態をつくものの、すぐに気持ちを切り替えた。落とし物を回収することも大事だが、他にもやることがあるのだ。

たとえそれが、誰にも理解されないとしても、だ。

起点を語るとするならば、これくらいで十分だ。

これは、よくある因縁の話。

5月3日AM10:00

「ぬわああああああん疲れたもおおん」

都内のある大学の空手部の部室である、臭く狭い和室の中に響くデカくて不快な声。頭をタオルで拭きながら、襖を勢いよく開け放つ浅黒い男が一人。

彼の名は田所浩二。周りからは野獣と言われている24歳の大学生だ。浅黒い膚にイボの乗った汚い不細工面、ステロイド疑惑が尽きない、そこそこガツチリしてる身体付きにやや高い声。人望はない。

「チカレタ……」

野獸に続いて入ってきたのは、小声で愚痴をこぼす坊主頭のアホ面男・三浦智将。田所より年齢は下だが、学年で言えば先輩にあたり、この迫真空手部の主将もしている。ものすごい馬鹿頭の持ち主だが、主将なだけあって腕っ節は確かだし、飯をホイホイと奢ってくれる気前のいい一面もある。

「辞めたくくなりますよ〜部活う〜せつかくの休日朝練とかキツスギイ！」

「お、そうだな。おい木村あ、隅っこにいないでコッチに来るゾ」

ズボンを脱いでシャツとブリーフだけになった三浦は、部屋の隅で雑誌をチラチラ読み始めた青年に話しかける。

彼の名は木村直樹。野獸達よりは綺麗な顔立ちの、爽やかそうな青年だ。空手部の中では一番の後輩かつ唯一の常識人であるが、野獸をわりと本気で嫌っている。

「なんだよ木村、何嫌そうな顔してるんだよ?」

（だって野獸先輩臭いし煩いから近付きたくないんだよなあ）

まあ、体臭を差し置いても、好んで近づきたい存在ではない。

三浦に金集るわ部活サボるわ下品だわ2浪だわ非常識だわ、と底辺のオンパレード。そんな人間と深く関わりたくないというのが本音だ。なんでこんな部活に入ってしまったんだろうか、と儂げな顔になる木村。

（いやまあ、空手は大学でも続けたいなと思ってたけど……まだ入ったばかりだけど、や

めようかな……)

「何読んでんだよ、見せろよ見せろよ」

「あ」

自分のせいで木村が思い詰めてるとは梅雨知らずな野獣は、木村の読んでた雑誌を無理やり奪い取ってパラパラとめくり始めた。見たところ普通の週刊誌であるようだが、ふとある一文が彼の目に留まった。

「爆破事件?何これ」

「池袋を中心に頻発してるんですよ。今朝も電車が遅延してましたよ」

「はえー、俺電車通学じゃないから知らなかったわ」

そう。近頃、池袋近辺で次々と謎の爆発騒ぎが起こっているのだ。爆発の原因は不明だが、既に死傷者がでていよう、世間では不安の声が上がっている。

「カッチャマもすっげー怖がってたゾ。なんとかしてやりたいゾ」

「なんとかかって……僕らみたいな一般人に出来ることなんてありませんよ。だいたい僕らがでしゃばらなくても、警察とかがなんとかしてくるでしょ」

木村に正論を言われ、「あ、そっかあ……」と三浦は眩き、部屋の隅に畳まれていた布団の束に背中を預ける。

が、そこで野獣が調子こいてこんな事を言い出した。

「お前さ木村さあ、俺達空手部だよなあ？爆弾魔くらいでビビってたなら、一体何のために練習してるのか、これももう分かんねえなあ」

「野獣もいいこと言うなあ。よし、俺も犯人捕まえて刑務所にぶち込んでやるぜ」

馬鹿なのかコイツらは、と言いたくなる木村だったが、実際この2人は馬鹿だしそれを言ったところで意味がないのでグツと飲み込む。どうせなら野獣だけ爆殺されればいいのに。

兎に角早く帰らねば。このままだと自分まで巻き込まれる。

厄介ごとは御免だと言わんばかりに、木村はジャージを羽織ってスポーツバックを肩にかけると、部室を後にしようとする入口の襖に手を掛ける。しかし、木村の行動は遅すぎた。

野獣ががしりと、木村の肩に手を置く。

「逃げるのか？先輩達に任せて1人だけ帰るのか？」

「はいそのつもりですが？警察ごっこならあんたら2人でやっててください。僕を巻き込まないでって散々言ってますよね？」

「拒否権はないってそれ一番言われてるから。それに空手の修行と思えばいいじゃねえか」

「普段部活サボりまくってる人間が言っているいい台詞じゃない」

年上への敬意もへつたくれもない辛辣な言葉をぶつけまくるが、野獣は引き下がらない。何故こいつはここまで躍起になっている？ 打算でしか動かないような野獣が犯罪者退治に乗り気になるワケがない。裏があるに決まっている。

それがわかっているからこそ、木村は帰りたいのだ。今まで野獣が欲望に駆られて突っ走ったせいで、どれだけ散々な目に遭ってきたか。今日こそは逃げてやるのだ。

しかし木村は失念していた。敵はもう1人いたのだ。

そいつは、野獣と口論している木村の横から近づき、木村の手をがしりとつかんだ。

「ホラホラ、木村も行くぞー。正義の味方みたいで格好いいだろオオ!?」

「あ、ちよ……三浦先輩!? 何するんですか!? やめっ……おいコラ! 離せポンコツハゲ入道!」

必死に抵抗する木村だったが、三浦の怪力になすすべなく、部室へと引き戻されてしまふ。この人は悪意がない分余計厄介なのだ。

—— ああ、今日も駄目だった。

木村は諦めたような顔をしながら、三浦に担ぎ上げられていった。

5月3日AM 11:17 池袋

「……こんなはずじゃなかったんだがなあ」

道端のベンチに腰掛け、空を見上げながら、瞬はそうぼやいた。

まだ午前中だというのに、酷く疲れた気分だ。隣では、アラタも半分死んだような顔で缶コーヒを啜っている。隣のベンチでは、そんな2人を見つめておろおろしている志村。

さて、何故男性陣が揃いも揃ってこの有様なかというと、だ。

「いやあ荷物持ちがいると捗るよね」

「偶には遠出してみるものですね。近場じゃ手に入らないあれやコレが

がこんなに……欲を言えば秋葉原まで行きたかったんですけどね」

「お前目的忘れてない？これは湖森の回復祝いなんだからな？」

そう。舞網市での一件でオリジオンに怪我を負わさせた湖森が、ようやく完治したと
いうので、景気付けに池袋まで遠出してきたのだ。なんでも、湖森が行きたい場所がある
んだとか。

しかしついてきた他の面々があれ買いたいこれ買いたいと色々注文つけてきた結果、
それに付き合わされた瞬とアラタは疲弊しまくっていた。まあこれには連日のファイフ
ティとの特訓の疲れもあるっちゃあるのだが。

それにしても、今はゴールデンウィーク真つ只中だから、てつきり皆それぞれ遊びに行っていて不在だかと思いきや、まさかいつものメンバー全員が集まるとは思っていなかった。集合を呼びかけた張本人である瞬は、駅前に集まった顔ぶれを見て、皆どんな暇なんだと呆れたような、笑ったような顔になった。

そんなこんなでぐでーつとしてゐる2人のもとに、女性陣と灰司が帰ってきた。

「2人ともお疲れ様です。僕なら大丈夫ですから、2人は休んでいてくださいね」

「灰司くんも来てくれるなんて思わなかったよ。僕らだけじゃキツイ……」

「いいですよ、ちょうど暇でしたから。それに僕だつて仲間ですからね」

瞬に缶ジュースを手渡しながら、爽やかな笑顔をむける灰司。瞬はそれを受け取りながら、すげえな気遣いレベルMAXかよ、と感心する。モテる人種というのはこういった奴を指すのだろう。

ハルは手に持っていた袋を灰司に手渡し、瞬とアラタの間にどしりと座り込む。何故わざわざ狭いところに座るんだ。そしてそれを見た唯がフシャーツ！とハルを威嚇する。猫かお前らは。

唯を宥めながら、瞬は灰司から渡された缶ジュースを口にする。冷たく甘いグレープジュースが、瞬の身体を癒してゆき、少し体力が戻ったような気がした。

しばらく経って、思い立ったかのように唯が立ちあがる。

「あ、次あそこ行くねー！じゃつ後で！」

「勝手にしてくれ……」

「あ、まっつてよー！置いてかないでえ！」

「2人とも大丈夫？キツかったら私に言ってくれていいからね？」

女性陣＋灰司が居なくなり、再びアラタと瞬（＋おまけで志村）だけがこの場に残された。5月のくせに凄まじい光を放つ太陽に身を焦がされながら、瞬は考えていた。

そして、ふと、思考が口から洩れた。

「転生者ってなんなんだろうなあ……」

「いきなりなんだよ」

「いや、前にファイフティやギフトメイカーの連中が言ってたんだよ。転生者がどうたらこうたらって」

転生者。最初にその言葉を聞いた時は、馬鹿げていると思った。

今の瞬が言えたことではないが、とんだ絵空事だというのが、その単語を聞いた時に抱いた感情だった。しかし、ギフトメイカーはそれを大真面目に言うのだから、どうしたものかと頭を抱えるほかなかった。

転生者をオリジオンに変えて、その中から新しい神さまを生み出す。荒唐無稽にして、迷惑極まりない。仮にそれが事実だとしても、間違いなく碌なことにならない。

「転生者か……アニメとかラノベとかの世界だけの話かと思つてたけど、本当にいたなんて……事実は小説よりも奇なり、というのかな？」

「神さまから凄い力を貰つて？前世の記憶と人格を持ったまま漫画やアニメの世界に転生して？欲望の限り好き放題やる？笑えねーよ。馬鹿馬鹿しいにも程がある」

「あれ、逢瀬くんいつもより機嫌悪くない？」

「悪くなるに決まつてるだろ。身勝手な転生者の身勝手な理由で、これまで多くの人が傷つけられてきたし、そしてこれからも多くの人が傷つけられるんだ。これで怒らない方がアレだよ」

瞬のその言葉には、転生者という不条理に対する、確かな怒りがこもっていた。

これまでも、多くの人が転生者とギフトメイカーに傷つけられてきた。気に入らない奴を痛めつける、気に入つた異性を手に入れる、そのためならばどうなろうが構わない。瞬に限つた話ではなく、そんな考えは世間一般では受け入れられないのだ。

苛立ち気味のため息をつき、瞬は空を見上げる。

「……まともな転生者とやらに会つてみたい、というのは贅沢なんだろうか」

「……」

その言葉に、アラタは沈黙するしかなかった。

なぜなら彼も転生者。だが、今それを言い出すことはできない。今の瞬が転生者に抱

くイメージは最低レベル。そんな状態でカミングアウトすれば、少なくとも今の人間関係は崩れ去ってしまう。それに、身勝手な理由でこの世界に転生したという点では、アラタもそこいらの転生者と変わらないのだ。だから、何も言えない。その資格がない。

晴天のGWの雰囲気とは裏腹に、瞬達の周囲だけが、一気にどんよりとした雰囲気になってしまう。志村は、この雰囲気に耐えられないのでどうにかしたいとは思うものの、何もできないので、ただ一人でベンチの隅に座り込んでいるほかなかった。

そこに、見知らぬ声が割り込んできた。

「君達、ちよつといいかい？」

「えつと……どちらさん？」

声をかけられた瞬は、空を見上げていた顔をおろす。

眼鏡とスーツを着用した、厳つい顔の男が話しかけてきた。歳は20代中盤くらいか。ぱつと見、どこかのエリートサラリーマンみたいな雰囲気を感じさせているその男は、スーツのポケットから名刺のようなものを取り出し、瞬に差し出してきた。

「俺は裁場誠さいばせいいち」。武偵をやっている」

そう言つて、彼はスーツの襟のあたりに付いている徽章を見せてくるが、瞬はさっぱり分からない。

「武装……探偵？」

「名前通りだよ。凶悪化した犯罪に対して武力によって立ち向かう探偵の事さ」

武偵というワードがピンとこない瞬に、横からアラタが説明を加える。要するに警察みたいなもんか、と雑な理解をした上で、瞬は名刺を受け取り、男の話を聞くことにした。

「俺は今、池袋連続爆破事件を追っている。君もニュースで聞いたことくらいはあるだろう」

「ありますけど……」

勿論、瞬達も事件についてはニュースで連日耳にしている。今朝も池袋まで行くこと知った瞬間、叔父に咎められたものだ。

「要するに聴き込み調査ってこと？」

「そういう事だ。協力していただけるだろうか？」

そうは言ってくるものの、瞬達は何にも知らない。

「いや、俺達この辺の人間じゃないんで良く知らないっすね」

「ニュースで報道されている内容以上のことは知らないぜ？」

「そうか。時間を取ってしまつて申し訳なかった」

裁場はそう言つて、立ち去ろうとする。

「すみません、お力になれなくて」

「謝る必要はないさ。君たちも気をつけたまえ。カラーギャング、スネイクハンズ、首無しライダーえとせとらetc……爆弾魔以外にも、この街は色々と危ないからね」

……ん？

裁場が何を言っているのか、瞬は分からなかった。聞き違いだろうかと思ひ、横のアラタを見ると、アラタはアラタでなんだか唾然とした顔で、「マジかよ……まさかそこまでクロスしちゃう？」と呟いているが、一体何のことなのだろうか？

——真面目そうな雰囲気纏っている癖に、変な人だ。

それが、瞬の、裁場整一という人間に対する第一印象であった。

「さーて、アイツらの買ひ物ひと段落してる頃合いかもだし、そろそろ行こうぜ」

「そうだな。あーまた荷物持ちかあだりいなあ……」

「まあ荷物持ちくらいやってやろうよ、ね？」

店の方に目をやると、レジに並んでいる唯の姿が、自動ドアのガラス越しに見える。休憩時間が終わるといふ事実^{る。}に苦しみながら、重い足取りで唯のもとに向かおうとする。

その時だった。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!? と。

瞬達の頭上で爆発が起きた。

正確には、爆発したのは瞬達のいた場所のすぐそばにある雑居ビル。そのワンフロアが吹き飛んだのだ。

池袋の空に、黙々とたちのぼる黒煙と火の粉に、瞬とアラタを含め、辺りの人々は皆釘付けだった。だが、呆然としていない場合ではない。命の危機が、迫っていた。

爆発の衝撃で、ビルの屋上に建てられていた広告用の看板が、地上に向かって落下してきている。落下地点は、瞬とアラタの今立っている場所だ。

「やべっ……おい逢瀬っ！逃げろお！」

「あっ」

一足先に我にかえったアラタが、瞬の首根つこを掴んで走り出す。身体を覆うように迫る影から、必死に足を動かして逃げる。ぶわりと、素早い物体が通過したような感覚を背中に感じたのちに、ズガシヤアアンツ!!? と大きな音を立てて、ひしゃげた看板が地面に衝突する。

勢い余ってすっ転んだアラタは、息を切らしながら後ろを振り返る。そこには、五体満足で大の字になって転がる瞬と、ひしゃげた看板があった。どうやら、誰も下敷きにならずに済んだらしい。

「大丈夫か!!」

「あ、はい……なんとか……」

爆発音を聞いて引き返してきた裁場が、地面に倒れこんでいる瞬に手を差し伸べる。瞬はその手を借りて立ち上がり、ビルの方を見る。

「また……起きたというのか!!?」

「なんだよ……なんなんだよ畜生!」

「これが……さつき言っていた爆弾魔の仕業だったのか?」

黒い煙を上げるビルを呆然と見上げながら、瞬は身体を振るわせる。それは恐怖からか、怒りからかは定かではない。

その時。

「た、助けてください!階段がくずれちゃって出られないんです!」

煤けたガラス窓の向こうから、大声で助けを求める声があった。それは、今にも終わってしまいそうな、切羽詰まった声だった。

その声を聞いた途端、裁場と瞬は、黒煙を上げるビルに向かって一目散に走り出した。

「何やってんだお前ら!死ぬ気か!!」

「あ、ちよつとアンタら……!」

「さてよ二人とも!いくらなんでも無茶だつて!」

周囲の静止を歯牙にもかけず、両者はビルの中へと入ってゆく。下の方はまだ火の手が回っていないとはいえ、既に一部の天井板が床に落下しているのがちらほらと確認できる。あまり長居はできないだろう。もう止まっているであろうエレベーターを無視し、裁場は迷うことなく非常階段を上り始める。瞬も慌てて裁場の後を追う。

「何故君まで来るんだ!! 君は戻るんだ!」

「嫌です! 2人でやった方がより多くの人を助けられる!」

階段を駆け上がりながら、両者は互いを帰そうと口論を繰り返す。

純粋な正義感で動いているがゆえに、互いに譲れない。自己犠牲の精神同士が激しくぶつかり、対立しあう。

言うことを聞こうとしない瞬に苛立ちを覚えたのか、裁場は階段に足をかけた状態で立ち止まり、叱りつけるように言う。

「いいか!! これは遊びじゃないんだ。君みたいな子供が行っても死体が増えるだけだ。そんな事、俺は許容しない」

「わかっています。でも、俺にできるなら、やらない訳にはいかないんです!」

瞬は、真つ直ぐな目を向けながら、そう言い返した。

自分にはアクロスの力があるのだから、それを手にしたのだから、そうする義務があるのだ。人を助けられる力が、手段があるというのに、それを使わない、しないという

ことは、逢瀬瞬という人間にはできないのだ。

だって、彼女もきつとそうするだろうから——

だがしかし、裁場はそれを認めるわけにはいかない。それは武偵という職業柄か、はたまた大人としての責任か。

「できる出来ないの話じゃない！死にたいのか!!」

「本気だよ。何言われようが俺は——」

瞬が言い返そうとしたその時、激しい轟音と衝撃が響き渡った。

「うわあああああああつ!!」

振動で階段から瞬の足が浮き上がり、瞬は10段近くの高さから投げ出され、後方の踊り場まで放り出される。背中に数度激痛が走り、瞬の口から少量の血が吐き出される。

「裁場さん……っ!」

瞬は歯を食いしばって起き上がり、階段の上の方を見る。しかし、そこは既に瓦礫と炎で埋まってしまった。僅か数メートル先で、メラメラと炎が燃え上がっている光景に、瞬は思わず立ちすくんでしまう。

どうやら、もう一発爆発が起きたらしい。上の方は、一酸化炭素の煙が充満してしまっている。ここから先は生身で向かうのは厳しいだろう。それに、いつまでもここに

居座るわけにはいかない。助けるにしろ引き返すにしろ、ここはもうこの手しかなかった。

「ならば……変身！」

《CROSS OVER! 仮面ライダーアクロス!》

瞬は、クロスドライバーでアクロスに変身して、先に進むことにした。これならば炎や煙もある程度防げるし、瓦礫をどかすことも容易だろう。水を操れるようなライドアーツがあればよかったのだが、生憎そんなものはない。アクロスのスーツ越しにも、すさまじい熱気が瞬の身体に伝わってくる。

「裁場さんも無事だといいいんだが……」

炎をかき分けながらそう呟く。瞬よりも近い位置であの衝撃をうけた彼は、果たして無事でいるのだろうか。そうであってほしいと思いつつ、アクロスは階段をのぼり始めた。

「……………」

次の踊り場にたどり着いたとき、奇妙なものが見えた。誰かが廊下を走っていったのだ。

ひよつとして裁場なのかと思ひ、アクロスは廊下を覗き込んだが、そこには誰もおらず、ただ煙の充満したボロボロの廊下だけが広がっていた。しかし、その中で一つだけ、

キラリと光るものがあつた。

「ん？」

手近にあつたそれを、アクロスは拾い上げてみる。それは、一本の彫刻刀だつた。それを見たのは小学校以来だろうか。おまけに、明らかについさつきこの場に置かれたかのようにまだ真新しい。

「なんなんだよ、一体」

廊下の端は、もう一つの非常階段に通じている。ならば、さつき廊下を走つていった誰かも、そこに行つたのだろうか。

「……とにかく、先に行かないと」

この彫刻刀の持ち主の無事を祈りつつ、アクロスは階段を再び上り始めた。

外では、爆発音を聞きつけて唯達も戻ってきていた。

「はあ!! お兄ちゃんがあの中に!!」

「ああそうなんだよ! 止める暇もないくらい程にな!」

「マジで何考えてんの……」

アラタから、瞬が燃えるビルの中に飛び込んでいったことを聞かされ、皆血の気が引いたような顔いろになってゆく。

中でも唯は、一番動揺していた。

(瞬……変わった……?)

そう。

10年近く共に過ごしてきた仲だから分かる違和感があった。

瞬は、世間一般でいうところの「良い奴」というカテゴリーに含まれる人間だと、唯は思っている。なんだかんだ言いながら、唯の無茶ぶりにも大体乗ってくれるし、唯やヒビキほどではないが、困った人間を放ってはおけない性分だ。

だが、いくらなんでも、ここまでやる奴だっただろうか？他人のために命まで張れる人間だっただろうか？

そんなのは普通の人間ではない。躊躇いなく自分の命を張れるようなものを、少なくとも普通の人間とは定義しないだろう。瞬は、仮面ライダーになってから変わった。いや、もしかすると、もともとそうだったのかもしれない。誰も知らなかっただけで、逢瀬瞬という人間は、そういう生き物だったのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、唯の中に、ある感情が浮かんできた。

それは、また、1人遠くに行ってしまったような、自分が置いて行かれたような孤独感と疎外感。このタイミングで普通は出てこないような類の物。

(ほんと、ずるいよ……)

幼馴染の変化に対し、唯は、気づけばそう呟いていた。

「唯さん、唯さん」

「……」

「はむっ」

「ひよわあああつ!!」

突然、耳たぶを誰かに甘噛みされた感覚が唯を襲い、思わず彼女は恥ずかしい声をあげてしまった。

「は、ハル!! いきなる何すんの!!」

「呼んでも返事なかったんで」

だからって耳を甘噛みするのはないだろう。それもこんなに多くの人がいる中、同性に。あまりに刺激が強すぎたのか、山風が口をあめぐりと開けて呆然としているではないか。ひよつとしてハルにはそっちの気があるのだろうか。別にどうでもいいけど。

「で、何」

「灰司くんがいません」

「ほんとだ……どこ行っただろう……」

そう言われてあたりを見渡してみると、確かに、灰司の姿が見当たらない。どこにいったのだろうか？

辺りには、騒ぎを囲う群衆しか見当たらなかった。

Alliance to maintain the order of reincarnations
 転生者秩序維持同盟：通称「AMORE」。またの名

を転生者狩り。

転生者だって人間だ。善人もいれば悪人もいる。そして彼らは共通して転生特典を持つ。その大半は、やれ幽波紋だの個性だの宝具だの魔法だのといった、何処かの世界の誰かさんがもっていたような、異世界の力だ。そんな力で暴れられれば、最悪世界が滅亡してしまう。それを憂いた一人の転生者が組織した有志団体が、AMOREの前身となっている。

やむを得ない場合や、余りにも凶悪な転生者を除いて、基本的にはAMOREは転生者を積極的に殺す真似はしない。あくまで彼らは自警団。殺戮者ではないのだから。故に。

「よう、転生者狩りさんよお。最近ここら辺の転生者を次々と倒してらっしやるそうじゃないっすかあ？」

「酷くない？俺達セカンドライフを満喫したいだけなんだよ……なんで邪魔するの？マジ許せないんだけどー」

「だからさあ、ストレス解消兼ねていっちょ仇討ちさせてもらおうわ！ギフトメイカーに貰ったこの力でなあ！」

—— こんなことになつても、自分から打つて出られない。

灰司の目の前には、お揃いの革ジャンを身に纏つた3人の男が立ち塞がる。その後方には、灰司と同じ年くらいの少年がぶつ倒れている。男達の手には、くしゃくしゃになつた万札が数枚。大方、カツアゲをした直後だつたのだろう。転生者になつてまで、オリジオンになつてまでやる事がカツアゲとは、正直言つて恥ずかしくないのだろうか。

そんな風に憐れむような目を向ける灰司に、男達は更に激昂する。不良という生き物は、プライドだけで生きていけるようなもの。それを傷つけられたと判断したら最後、その原因を排除するまで止まらないのだ。

「つーか、俺随分と有名人じゃねえか。なるべく正体露見しないようにしてたつもりだつたんだがなあ」

「へっ！転生者の間で持ちきりなんだよ、仮面のヒーローが転生者倒しまくつてゐるってな！」

「ちなみにオメーの正体はお仲間ボコつて聞き出したぜ？ちなみにソイツは俺様がこんがり焼いて病院送りにしたぜ！ザマーミロ！」

「俺達3人の力を合わせれば転生者狩りだって屁じゃねえ！行くぜ！火吹、水亀！俺達の新たな力で蹂躪してやろうぜ！」

「やっちまいましたよう、木花のアニキ！」

《KAKUSEI FUSHIGIBANA》

《KAKUSEI LIZARDN》

《KAKUSEI KAMEX》

3人のチンピラは、それぞれ自身の転生特典を発動し、オリジオンとしての姿を眼前にさらす。背中にラフレシアに似た花を咲かせ、頭部から毒液を垂れ流すのは、フシギバナオリジオン。その後ろで、大きな翼を広げながら口から小さな炎の吐息をもらして此方を威嚇してくるのはリザードンオリジオン。そして、大砲を生やした大きな甲羅を背負い、のしのしと大きな足音を立てている大亀はカメックスオリジオン。

この世界には存在しえないポケモンの力を持った異形達が、灰司を睨みつけていた。灰司は彼らを見て、ほくそ笑む。

お前らなんぞ大した相手にならないんだぞ、と存外に告げるように。

「なるほど、純粋な戦闘特化型か。やりやすくて助かる」

《standing by》

オリジオン達を挑発するように、これ見よがしにカイザフォンを取り出し、変身コードを入力していく。

正体が露見しているならば、コソコソ隠れて変身する必要はない。全員ぶちのめせば後処理もいらぬ。

「変身」

《complete》

カイザフォンがドライバーにセットされると同時に、黄色いフォトンブラッドのライオンが灰司の身体を包み込み、カイザのスーツが出現する。親指を下に突き立てながら、首を掻く切草をし、オリジオン達をさらに挑発する。

「さあかかってこい。てめえらが誰に喧嘩売ったのか、その腐った身体に教えてやるよ」

熱で変形したドアを蹴り飛ばし、アクロスは部屋の中に入る。そこには、地上とは比べ物にならない程酷い光景が、そこに広がっていた。

元は喫茶店だったその場所は、地獄になっていた。瓦礫が上半身が潰れた死体や、黒焦げになってしまい老若男女の区別がつかなくなった死体がアクロスの視界に入り、思わず吐きそうになったが、助けを求めてきたあの声を思い出してなんとかこらえ、歩を進める。助けを求める声が聞こえてきたのはこのあたりの階層だった気がするが、果た

してこの状況で声の主はまだ生きているのだろうか。そうであってほしい。

「誰かあ……いませんかあ……」

「!?」

瓦礫の向こう側から、か細い声が聞こえた。アクロスは即座に反応し、声のした方向かう。

行く手を阻む瓦礫を蹴り砕き、要救助者の居る空間にたどり着く。瓦礫が砕かれる音に反応し、うずくまっていた要救助者がアクロスの方を振り向く。そして、アクロスと彼女は、互いに素っ頓狂な声をあげた。

「と、トモリさん!! あんた何してんだよそんなところで!」

「あ、あれえ!?」 アクロスう!? な、なんで君が来るのお!?」

悲報：知り合^{トモリ}いだった。何なのこの人。児童誘拐事件の時も確か助けたような気がするのだが、よっほどの巻き込まれ異質だったりするのだろうか。なんだか一気に緊張の糸がほどけるような感じがして、アクロスは力なく笑う。

そこに、少し遅れて裁場がやってくる。

「大丈夫か!」

「え、あ、はい」

顔を煤だらけにしながら、裁場はトモリにそう声をかける。そして、トモリの横にい

たアクロスに目をやると、一気に険しい顔になった。

「っ！お前は一体……」

「あ、やばい」

裁場はアクロスの姿を見て、完全に警戒してしまっている。そりゃあ、傍から見れば変なスーツを着た得体のしれない人型実体なのだから、警戒されるのは仕方ないだろう。おまけに状況が状況だ。最悪爆弾魔だと思われてもおかしくないだろう。

どう言い訳したものかと悩むアクロス。そこに、

「火中にわざわざ飛び込んでくる馬鹿発見♪」

「！！」

アクロス達をあざ笑うような声が、火の向こうから聞こえた。ぱつと一同が声のした方を振り向くと、そこには一体の怪物オリゾンがいた。

ダイナマイトを思わせる形の頭部に、煤けた猫の仮面のようなものが引っ付いている。さらにデフォルメ化された爆弾のような形状の両肩からは、導火線のような紐が何本もぶら下がっており、その先端からは煙がのぼっている。

さしずめ、ボマーオリゾンといったところだろうか。ボマーは、姿を現したアクロスを見るなり、何かに感心するかのような素振りを見せる。

「仮面ライダーが来た……ってことは、それなりに効果があったという事だな？」

「まさか、俺を呼ぶただけにやったのか？」

「自惚れるな、お前はただの前座さ。お前には用はない、さっさと始末してくれる！」
そう言うのと、ボマーオリジオンは即座にアクロスに殴りかかってきた。

兎に角まずは非戦闘員を逃がすのが先だ。アクロスはそう判断し、オリジオンの拳を受け止めながら、裁場達に先に逃げるように告げる。

「くそ！2人は先に逃げて！」

「……っ！ああ、わかった！」

声をかけられた裁場は、一旦アクロスを警戒するのを中断し、人命救助のほうを優先する。トモリを抱き上げると、廊下の方へと走り出す。

「ちよつと!! まさかこんなところで戦うつもり!! いくらなんでもやばいって！」

「大丈夫だ、俺もこんな場所で死ねない」

去り際のトモリのもつともな意見にそう返すと、アクロスはボマーオリジオンの掴んだ拳を思いきり自分の方へと引き寄せ、そこに強烈なパンチを加えた。ボマーオリジオンは数歩後退するも、ニヤリと笑いながら、足元の火のついた瓦礫をアクロスに向かって蹴り飛ばしてきた。

「っ！」

アクロスは蹴り飛ばされた瓦礫を蹴り碎き、オリジオンの懐めがけてジャンプパンチ

を繰り出す。ボマーオリジオンはそれを身体で受け止めると、アクロスの身体をがっしりと掴み、そのまま壁めがけて勢いよく投げ飛ばした。

燃える壁を突き破り、アクロスは廊下まで投げ出される。起き上がろうとするアクロスに向かつて、ボマーオリジオンは、手のひらをかざす。すると、オリジオンの手のひらから、凄まじい熱気が放出され、アクロスを再び壁へと叩きつけた。2度も壁に叩きつけられてなお起き上がろうとするアクロスに、ボマーオリジオンは鼻で笑う。

「なんだ……思ったより大したことないな。いいから邪魔をするな、お前の出る幕じゃないんだ」

「いくらだつて邪魔してやるよ！お前ら転生者の好き勝手にはさせない！」

アクロスはそう啖呵を切つて立ち上がり、再びボマーオリジオンに向かつて突っ込んでゆく。

「馬鹿の一つ覚えみたいに突っ込んでくんよ……爆殺！」

その様子を見て、ボマーオリジオンはほくそ笑みながら指を鳴らす。

すると、一瞬だけ、アクロスの腹部あたりが歪んで見えたかと思えば、次の瞬間、アクロスの腹部が爆発した。苦悶の声を漏らしながら、アクロスは三度壁に叩きつけられる。

「が……っつ！！」

「インスタント・ボム……殺傷力は低いが、まあ連発すれば済む話だ」

そういうと、ボマーオリジオンは何度も指を鳴らした。アクロスは咄嗟に前に転がる。すると、アクロスが先程までいた地点が小さな爆発に包まれた。続いて、アクロスの前方数センチの位置が爆発する。もう少し転がる距離が長かったら、直撃していただろう。

3発目は、アクロスの頭を狙っていた。爆発の前にくる空間の歪みを頼りに、アクロスは頭を横に倒してそれを躲す。そして、4発目がアクロスの足元に放たれる。

アクロスはそれを跳んで躲しながら、ツインズバスターを自らの手に出現させ、ガンモードに変形させたツインズバスターの引き金を引く。向こうが遠距離攻撃をしてくるならば、こちらもやってやろうではないか。

「やあー」

次々と迫り来る爆発攻撃を躲しながら、ツインズバスターを連射するアクロス。攻撃の後隙を狙って放たれた数発の光弾が、ボマーオリジオンの胸部に命中する。

硝煙をあげながら、ボマーオリジオンがよろける。アクロスも、こんな火災現場に長居するわけにはいかない。消防車のサイレンが聞こえてきているし、このままだと消防活動の邪魔になる。

「こんな場所からはさっさとトンズラさせてもらうぜ」

「やれやれ……これ以上人死にがでるのは勘弁願いたいものだ……な！」

男—— 裁場はそう言うのと、ズボンのポケットから拳銃のようなものを取り出し、その銃口を真上に掲げながら、なんと割れた窓から地上に向かって飛び降りた。

「うわあああああああああああああああああああああああああああああ！」

裁場のすぐ上に、ビルから投げ出された男が落ちてくる。死への恐怖からくる鼻水と涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら落ちてくる男を、裁場は冷静に自身の元へと引き寄せると、手に持った拳銃らしきものの引き金を引いた。

すると、銃口から凄まじい速度でワイヤーのようなものが射出され、ビルの壁面にその先端が突き刺さった。繋がれたワイヤーによって、2人の落下速度は抑えられ、2人は安全に着地する。助けられた男は、自分が助かったことを理解すると、その場にへたり込む。

「た、たすかった……」

「さて、後は……」

へたり込んだ男の元に、救急隊員が駆け寄っていく。裁場は鎮火されつつあるビルを見上げる。

あと一人、帰ってこなければならぬ人間がいる。

それから1分ほど経って、瞬が地上に戻ってきた。

「はあ……はあ……」

「瞬！」

戻ってくるなり、泣きそうな顔をした唯が、野次馬をかき分けながら瞬の元に駆け寄ってきた。

「ホント何考えているわけ?! 瞬ってこういうキャラじゃなかったでしょ! 何簡単に命投げ出そうとしてるのさあ!」

「今回ばかりは看過できないな。まったく、いつの間にそんなにヒーロー気質になりやがったんだお前?」

「ごめん……でも、どうしてもいかなきゃって思ってた……」

唯やアラタが、瞬の軽率な行いを非難してくる。彼らの言い分は最もだ。いくらヒーローとしても力を持っていようが、いきなりこんな真似をされたら、周囲の人間からすればたまったもんじゃない。なんせ、最悪の場合もありえたのだ。瞬もそれをわかってるからこそ、彼らの言葉に委縮する他なかった。ただ黙って、泣きつく唯の頭を撫でることしかできなかった。

そこに、つかつかと近づいてくる足音。救急隊員の静止を振り切り、その足音の主は

瞬の隣へとやってくる。足音に気づいた瞬が顔をあげると、そこには、険しい顔をした裁場が立っていた。

裁場は、瞬の胸倉をつかみ上げ、怒鳴った。

「この馬鹿野郎！」

「っ！」

「え、どちらさん……」

そのあまりの剣幕に、周囲が静まり返った。

「正義感が強いのは結構なことだ。だがな、自分の命を捨てようとするんじゃない」

「……」

「そんな救い方はやっては駄目だ。命を救っても、心は救えない。お前がこれから人を助けたいと思うなら、まずは自分を大事にすることだ。死して英雄になるというのは、救われた者に十字架を背負わせるだけなんだ」

彼の言っていることは正しかった。

行き過ぎた正義感は、時に身を滅ぼす。それは独善という名の悪になり果てるという形ではなく、自己犠牲という形でも成り立つ。自己犠牲で救われた人は、確かに命は救われるかもしれない。しかし、その心は傷つく。自分なんかのために他人が傷ついたという事実に対する罪悪感という形で、当人をむしばむのだ。

裁場は胸倉をつかんでいた手を放し、瞬の両肩に手を置き、諭すように言う。

「君は1人じゃないんだ。頼むからそんな真似はやめてくれ。君の友達を、家族を、泣かせるんじゃない」

「裁場さん……」

「……すまない。気が立ってしまった」

裁場はそう言い残すと、瞬に背を向けて歩き出す。

「……………」

裁場の残した言葉の一つ一つが、瞬にひつついて離れなかった。

5月3日 AM13:40 池袋某所

池袋の何処かにある、どうやって利益出してるんだと言いたくなるほど入居者が少ない、古臭いアパート。

その2階外通路、とある一室の扉の前に、2人の男が立っていた。金髪グラサンのバーテンダー風の男と、ややくたびれたドレッドヘアの男だ。彼ら——平和島静雄と田中トムは、テレクラ代金の回収業者、要は借金取りじみたことをやっている。今日もまた、代金を滞納している顧客の元へとやってきたのだ。

「鍵は掛かっている、と」

当然ながら扉は鍵が掛かっけていて開かない。最初のインターホンに応じて顔を出した部屋の住人は、静雄達の顔を見るなり、速攻で扉を閉めてしまったきり、全く反応しない。そりゃあ金払いたくないんだから、向こうから開けるわけがない。

「ほーらお宅さん、大人しく支払ってくださいよ。早いとこ払えば穏便に済むんだよ」

扉の向こうにいる客相手に、やさしく諭すように言うトム。これですんなり出てくればいいのだが、残念ながらそうはならない。大抵口論になったり、時には乱暴な手に出ることだってある。そして、今回のケースでは、引きこもって無反応を貫くことが選択されていた。

留守というのはありえない。なんせ2人は、この部屋の住民がこの中に入っていくのを、つい先ほど見たのだから。丁度帰宅した時に訪問したということになる。強情な客にしびれを切らしたのか、静雄がドアノブに手をかけながらトムに尋ねる。

「扉引きちぎっていいすかね」

「やめとけ、また弁償しなきゃならなくなる」

「それもそうですね。じゃあ——」

そう言いながら、静雄はドアノブから手を離す。

その時だった。

閃光と熱風と轟音が、一瞬にして辺りを包みこんだ。

トムは、何が起こったのか分からなかった。反射的に顔を腕で守ったが、熱風に煽られ、トムは外通路の柵に身体を打ちつけられる。

「何が……どうなって……」

恐る恐る顔をあげる。

目の前には、先程まで自分達の前に鎮座していた扉が、煙を上げながらドロドロに溶けかけた状態で転がっていた。先程の衝撃といい、まさかと思いつながら、トムは外れた扉の向こう側を覗き込む。

そこには、下半身が消し飛ばされた死体が、廊下の奥に転がっているのが見えた。死体は焼け爛れ、玄関口から死体までの間には、血の道が出来上がっている。床や壁は穴が開いており、そこからは下の部屋が顔をのぞかせている。両隣と下の部屋が空き部屋だったのが幸いか。

あまりの光景に、トムは絶句せざるを得なかった。仕事柄、時たま血を見るようなことはあるが、いくらかんでもここまでの光景には慣れていない。しばらく呆然としてい

たが、トムははつと我に返る。

「静雄は？」

そう。静雄はトムよりもより近い位置で爆発に巻き込まれた。しかし、通路には静雄の姿が見当たらない。

まさかと思ひ振り返つて下を見ると、そこには、地上の駐車場にぶつ倒れている静雄の姿があつた。爆風で吹き飛んで落ちたのだ。

「お、おい!!」

思わず声を荒げながら、慌てて静雄の元に駆け寄る。落ちたとしても2階ほどの高さだし、静雄の頑丈さを考慮しても死んでいるようなことなれないと思うが、それでも大事な後輩だから心配なのだ。トムが階段を駆け下りて静雄に駆け寄ると、静雄は頭を押さえながら起き上がっているとところだった。爆発に巻き込まれたというのに、まるで滑つて転んだレベルのリアクションだった。

「つてえ……」

「良かった静雄、大丈夫だった——」

「……」

「静雄？」

「……また服が駄目になつちまつたじゃねえか」

その顔には、青筋が浮かんでいた。

大事な弟がくれた服が、また一つダメになってしまった。それはもう、彼を怒らせるには十分すぎた。

（ああ、爆弾魔さんよ。お前詰んだぞ）

警察に電話しながら、トムは色々と諦めたような顔をする。何故なら爆弾魔は、池袋で一番怒らせてはいけない人間を怒らせたのだから。

まだ見ぬ爆弾魔に、早くも哀悼の意をあらわにするのであった。

同時刻、とある駐車場にて。

「むぎやあああああああああああああああああああああああああああー！」

断末魔がコンクリートジャングルに響き渡った後、停められていた車のうちの1つが、凄まじい音を立てて空に舞い上がった。断末魔の主であるフシギバナオリジオンは、車を1台吹き飛ばしたのちに、別の車にぶつかかり、そこでようやく停止する。勿論、車の方は無残にもスクラップになってしまった。

ブチブチと、身体にまとわりつく蔦を乱雑に引きちぎりながら、カイザは自身が殴り飛ばしたフシギバナオリジオンに接近してゆく。

「もつと踏ん張れよ。損害賠償いくらすると思ってるんだよ?」

「テメエが殴り飛ばすのが悪いんだろ?」

「俺だって、テメエがここまで吹っ飛ばすとは思わなかったんだ。お前らを過大評価しすぎた」

「何い?!」

「転生特典貰ってイキる奴が強い訳ねえってのは分かりきっていることなのにな……転生者狩りに真っ向勝負挑んでくるから、相当実力に自信があるんだろ?と思っていたが、結局はただの考えなしだったということか」

カイザは、僅か1分足らずでここまで追い詰められたフシギバナオリジオンに対し、呆れたようにため息をつく。

3人と彼とでは、勝負になっていなかった。3人の猛攻に対し、カイザに変身している灰司の方はほぼ無傷、対してオリジオン3人組はかなり焦っていた。フシギバナオリジオンはすでに満身創痍、残る2人もかなり疲弊している。この時点で、軍配がどちらに上がっているかはほぼ明白であった。

フシギバナオリジオンに吹っ飛ばされた車が、カイザの後方に落下してくる。それが接地した瞬間、その衝撃で車は爆発を起こした。爆炎を背後に迫りくるカイザの姿は、オリジオン達にとっては恐怖でしかなかった。

きり蹴とばされてしまった。だが、流石の灰司と言えど、鈍重なカメックスオリジオンを吹き飛ばすことは難しかったようで、カメックスオリジオンはなんとかその場に踏みとどまる。

「なめんなあー！」

「うがああー！」

カメックスオリジオンは、背中中の砲門から高圧水流を発射し、リザードンオリジオンは、再び口から火炎を吐き出す。大量の炎と水が激しくぶつかることで、周囲に大量の蒸気が発生し、全員の視界が白く染まる。

「やったか!!」

「よし、今のうちに兄貴をー！」

あれで倒せれば御の字、無理でも多少の足止めにはなる。そう判断し、リザードンオリジオンとカメックスオリジオンは、兄貴——フシギバナオリジオンの救出と離脱を試みる。

しかし、それは叶わぬ夢となる。

《EXCEED CHARGE》

「何……！」

蒸気の向こうから、リザードンオリジオンのいる方に向かって、誰かが走ってきてい

る。この状況で聞こえる、切羽詰まった声。間違いなくカイザではない。

「いやだあああああ！捕まっつてたまるかあああああ！」

蒸気をかき分けるようにして出てきたのは、フシギバナオリジオンだった。泣きそうな声をあげながら逃げるその姿には、彼らが普段兄のように慕う威厳など、とつくになくなっていた。

それでも構うもんかと、リザードンオリジオンは手を伸ばす。が、

「遅い」

フシギバナオリジオンのすぐ後ろから、デジカメ型ツール・カイザシヨットを右手に構えたカイザが飛び出し、そのまま、逃げるフシギバナオリジオンの背中に、カイザシヨットを使った強烈なパンチが浴びせられた。

「あ、に、き………！」

「ぐああああああああああああああああああ？？」

背中を勢いよく押されたフシギバナオリジオンは、勢いよく前方にかつとんでゆき、その果てで悲鳴をあげながら爆発した。オリジオンとしての力を喪失したチンピラが、アスファルトの地面にうつ伏せになってぶっ倒れる。

カイザは、フシギバナオリジオンに変身していたチンピラに近づくと、その両腕に手錠をかける。すると、チンピラの身体が光の粒となて霧散してゆく。これは転生者捕縛

用の特殊手錠。手錠をかけるだけで、すぐさま転生者をAMOREの留置所に転送できるのだ。

まずは1人。残った2人も片付けようと、カイザはあたりを見渡すが、そこには既に誰もいなかった。

「逃げたか……」

灰司は変身を解く。戦闘直前に居た路地の方を振り返ると、先程の転生者達にボコされた被害者が横たわっている。救急車でも呼んでやるべきだろうとスマホを取り出す。その時、取り出したスマホがブルリと振動した。

画面を見ると、そこにはメールの通知が一件。差出人はAMORE局長。本部からの通達だ。

灰司は、スマホに送信されてきた画像ファイルを開く。

そこには、煤煙を掻き分けるようにして壁に開いた穴から出てくるとある人物の顔が写っていた。

その顔に、灰司は見覚えがあった。見た瞬間、思わず乾いた笑いが漏れた。

「なんとも……数奇な巡り合わせだな」

小学生くらいの体躯に、白い髪。顔には大きな傷跡。その両手には鋭く刃を光らせるナイフ。小学生には到底似つかわしいその獲物の存在が、彼女がまともな存在でない

頑なに主張している。

彼女の名は霧崎律刃。

またの名を ■■■■■・■■■■■

「……」

事件から数時間後、警察の事情聴取を終えた裁場は、とあるビルの屋上から池袋の街を見下ろしていた。

彼の脳裏には、あの炎の中で出会った仮面の戦士の姿が浮かんでいた。それを思い出すたびに、彼の顔つきが険しくなる。

(あの姿は……間違いなくアクロス。まさか既に資格者がいたとはな……)
知りえるはずのないその名を、彼は反芻していた。

そして、その手には、クロスドライバーによく似た物体が握られていた。

第25話　PM5：52／数多の邂逅の狭間で

回想2：後悔のデータ

—— 私が、生まれたせいなんですよね？

この悲劇も、今の惨状も。

—— ああ、やめてくれ。

そんな顔をしないでくれないうか。そんな事言わないでくれないうか。これはお前のせいなんかじゃない。生まれたことが悪いなんて、そんな道理があつてたまるか。

悪いのは全部向こうだ。彼女を死なせ、俺達をバラバラにしたアイツらが悪いんだ。

だから、俺は君を逃す。それが彼女と俺の望みだし、奴らへの一番の復讐になるからだ。

—— なんて、そこまでするんですか？真つ当に生み出された訳でもない、異物そのものの私に、そこまでできるのですか？

—— 私には、わからない。

——今は分からなくとも、いつかわかる時がくる。人間ってそういうもんだぜ？
お前の幸せが、俺とアイツの願いなんだ。きつと、世の中の親ってこんな気持ちなんだろうな。今ならわかるよ。

——だから安心してほしい。

——生まてきて幸せだった、生きていてよかったと思えるような未来を、お前に与えてやる。

現在

「……はっ!!」

薄暗い部屋の中で、彼は目覚めた。

どうやら、少し眠っていたらしい。そんな余裕はないはずなのに。どうやら、思っていた以上に疲れがたまっていたようで、いつの間にか日が傾いてきているのが、部屋の窓から見てとれる。

ここはあるビジネスホテルの一室。ロングコートを羽織り、帽子とマスクとサンダ

ラスで頭部を徹底的に隠したその人物は、部屋の明かりもつけずに、この中でじつとしていた。受付でもこの格好だったので、フロントの従業員はめちやくちや怪しんでいたが、彼にはそうしないといけない理由があった。

理由は単純明快、彼は今、追われている身である当時に、追っている身であるからだ。

「……………」

しかし、随分と懐かしい悪夢を見てしまった、と彼は思う。正確には、まだ1年前の出来事なのだが、到底思い出したいくない過去であることだけは確かだ。あれを思い出し、てしまうたびに、悲しさと怒りで身体が震えて仕方がない。この思いは、未だに払拭できない。

手のひらを見つめながら、彼はこう言った。

「絶対に、俺がなんとかしてやるから……」

P M 5 : 1 6

「つ、か、れ、たあ……」

瞬の事情聴取が終わったときには、既に夕方になっていた。

あの後、警察や消防隊からもビルの中突っ込んでいったことをこつてりと怒られ、すっかり瞬はしよぼくれていた。まあ、あんなこととして怒られない方がおかしいのだ。

自らの行いが軽率だったという点に関しては、反省する他ない。

警察署から出てくると、唯達が待つてくれていた。結構長い間経っていたと思うのだが、待つていてくれたことには感謝するしかない。

「御免な、せつかくの休日潰しちまって」

「瞬が謝ることじゃないよ。まさか巻き込まれるなんて思ってもみなかったし。てか、怪我とか大丈夫?」

「アクロスに変身してたから平気だよ。それに、これくらいの怪我ならもう慣れたから」
「それはそれで大丈夫じゃないわよ」

大鳳の冷静な突っ込みに、瞬は言い返せずに縮こまる。

「もう夕方だし帰ろうか。一希さんが腹すかせてるかもだし」

「姉貴自活能力皆無だからなあ。悪いけど俺たちは帰らせてもらうぜ」

アラタは、家で待つている姉のことを心配している模様。瞬達はあつたことがないのだが、話を聞く限り、どうやら一人にしたらいけないタイプの人らしい。

ざっと全員の様子を伺うと、各々顔に疲れがモロに出ている。ハルは少し名残惜しうに、部長らしく解散宣言をする。

「じゃあ現地解散としましょうか。ところで灰司さんはどこにいったのでしょうか」

「あれ、そういえばいないね……」

解散宣言をしながら、ハルが気づいた。

言われてみれば、灰司がいない。どこにいったのだろうか？

「爆発騒ぎが起きた直後は私たちと一緒にいたよね？」

「ええ、そうだったわ。電話は……出ないわね」

大鳳が電話をかけてみるが、反応はない。

「まあ、子どもじゃあるまいし大丈夫じゃない？」

「んな無責任な……ここあんまり治安よくないらしいから、放置はよくないんじゃないか？あいつ見るからに不良とかに難癖付けられそうな雰囲気してるじゃん」

「なんで僕の方をジロジロ見ながら言ってるの？」

志村のほうをチラチラと見ながら、灰司を心配するそぶりを見せる瞬。灰司の素性を知らない瞬達は、本気で灰司のことを心配しているのだ。流石に揃っていないのに帰るわけにはいかないだろう。

「よし、灰司迎えに行こうぜ」

「いや瞬は無理しないで……」

「無理してないよ。連日いろんな事件に巻き込まれてつからさ、少々タフになってんのよ」

「……ならいいけどさ。あんまり独断専行とかよしてよね」

「え、あ、うん」

——唯のやつ、なんか様子おかしくないか？

瞬はそう思いながらも、いったいどこがそうなのかまではわからなかった。何も言い出せなかった。

同時刻・池袋某所ビル内

瞬がぐったりしている頃、どこかで見た事あるようなトマト頭がぐったりしていた。

「疲れたなあ……」

「お疲れ遊矢。インタビュー大変だったね」

「いやー人気者は辛いなあ」

「無理してそんなキャラにしなくていいから」

色々やりきった感満載の顔をしながら、遊矢は柚子から受け取った缶コーラをがぶ飲みする。柚子は疲れ切った遊矢の姿を見て、なんか羨びたトマトみたいだ、と思っただけ。まあ実際そうなんだけど。

今日、遊矢とはある雑誌のインタビューを受けていたのだ。一応彼もプロデュエリスト。そして、アクションデュエルの開祖たる父を持ち、かつ自身はペンデュラム召喚の

パイオニア
先駆者という肩書きを持つ。要は色々とネタになる人物なのだ。昔ほどではないが、今でもたまに、今日のようにインタビュ―や対談が設けられる事がある。

今日は『榊遊矢と彼の身近な人に聞く！ユースデュエル界のアレコレ！』というテーマだった為、幼馴染みかつデュエル塾・遊勝塾の仲間である柚子も呼ばれたのだ。

「正直言つてデュエルの時よりも緊張するんだよなあ……何度やつても慣れないな。でも、今回は柚子が一緒だったからいくらか気が楽だったよ」

「まさか私もインタビュ―受けることになるなんてね。まあ遊勝塾の宣伝にもなったし、いい機会だったかも」

「こうしてデュエルについて語ると、自分ももっと上を目指さなきゃなって思うんだ。もっと皆を笑顔にできるようなデュエルをしてみせる。そして父さんを追い越してみせるって！」

「あたしも、いつまでもユースに甘んじる訳にはいかないわ。絶対プロになって追いついてやるんだから！」

話しているうちに盛り上がり、疲れも忘れ、遊矢と柚子は互いに拳を突き合わせる。その姿は、異性の幼馴染み同士というよりも、同じ道を進む好敵手ライバルであった。

「じゃあ帰って特訓といこうぜ」

「上等よ」

思い立ったが吉日。即断即決。遊矢たちは帰ろうとその場を離れる。

ビルの外に出ると、一気に熱気が全身を包み込むようにして襲い掛かる。まだ5月だというのに、随分と太陽は熱心に仕事をしているようで、若干げんなりとした気分になる。

ビルの前の信号は赤。この暑い中信号待ちはキツイものがある。手持ち無沙汰気味に、遊矢は横を見る。そこには。

「狭スギイ！イクイクイクイク……ンアーツ！」

「黙れ早漏野郎！それくらいでイクな！ほら三浦先輩も引つ張つて！」

「チカレタ……」

なんかいた。

具体的には、浅黒くて体臭のきつそうな男がビルとビルの隙間に挟まっていた。

「何してんだこの人たち……」

見るからに関わつちやまずいのは明らかだ。ビル同士の隙間に上半身が挟まっている浅黒い男をどうにかすべく、坊主頭の男とさわやかそうな雰囲気の方が彼を引つ張つ

ている。その姿はどこか滑稽だった。周囲の人々は関わりたくないのか、露骨に嫌そうな顔をしながらそれを素通りしている。遊矢もできればそうしたいが、生憎信号待ちをしているので離れられない。迂回しようにも面倒くさい。

何とも言えない顔で遊矢がその光景をチラチラ見ていると、引つ張っていた2人の男が、こちらに気づいて声をかけてきた。

「あ、すいません。ちよつといいですか?」

「え、俺達に言ってる?」

「当たり前だよなあ?」

しらばっくれようと思ったが、坊主頭の男の圧に押され、遊矢は黙り込んでしまう。男たちは柚子にも声をかけてくるが、柚子は嫌そうな顔をしながら言い返す。

「何ですか一体?ナンパですか?」

「ンなわけではないゾ。仮にそうだとしてもお前ら両方とも俺のタイプじゃ無いから絶対しないゾ」

「はあ。」

なんだこの坊主頭、いきなり失礼なこと言いやがって。坊主頭の無神経な発言に、思わず柚子の額に青筋が浮かぶ。それに気づいたのか、もう一人の男がすかさずフオロをいれてくる。

「ああ気にしないでいいよ、この人馬鹿だから」

「……で、何の用ですか?」

「見ての通り助けてほしいんだ。先輩が自分の太さを省みずにこんな隙間に突っ込んだから、僕たち苦労しているんだよね」

「助けてえええ! 痛いし狭いし暗いし臭いよおおお! 木村あ三浦あ! あくしろよおおおおお!」

「黙っててください。それと臭いのは十中八九あんたの体臭だろ」

青年はそう言つて、ギャーすか騒ぐ浅黒い男を叱責する。その発言の中に、明らかに私怨が混じっていたのは気のせいではないだろう。

柚子も関わりたくないと思い、適当な理由をつけてこの場から離れようとする。

「あのー私たち急いでるんで……」

「情けは人の為ならずとカツチャマから習わなかったのかゾ?」

「いやそれ助けを乞う側が言うべき台詞じゃないし!」

「僕からも頼むよ。個人的には助けたくなくないどころかあのまま放置して帰りたいんですけど、助けないと野獣先輩に変な因縁つけられるんだ……頼む! 僕の平穩のために君たちの力を貸してほしい!」

「ええ……」

建前をかなぐり捨てて本音まっしぐらな青年の頼みに、思わず遊矢たちは呆れてしまう。完全に自分の保身の為じゃん、という突っ込みすら口にするのも馬鹿馬鹿しくなるほどだった。

はてさて、彼らを助けるべきか否か。男たちの後方で騒いでいる被害者の醜態、坊主頭の威圧、青年の本気で助けを求めるか如くかわいそうな目付き。それらを総合的に判断し、遊矢はため息交じりに結論を出した。

「仕方ない……助けよう、柚子」

「ええっ?! この人たちを?!」

「その方が手っ取り早い気がしてきた」

「ああもう……しょうがないわね……!」

その言葉に、青年は歓喜の声をあげた。

「ありがとう2人とも!じゃあ早速てつだってほしい!」

「やれやれ……」

頭を抱えながら、遊矢と柚子は男の元へと向かう。どうやら自分は、災難から逃れられない星の元にいるらしい。そんな自嘲めいた考えが、遊矢の頭をよぎるのだった。

「追うわよ！爆弾魔！」

「導入部分キンクリしやがったなこいつ」

遠山キンジの休日は、神崎・H・アリアのその一言であっけなく吹き飛ばされた。

「池袋で頻発する爆破事件、知らないわけではないでしょ？」

「武偵高にいたら嫌でも耳に入るってーの」

わざとらしい溜息をつきながら、キンジは答える。

ここは東京都立武偵高校。レインボーブリッジ南の人工島に設立された、武装探偵の養成機関である。キンジもアリアも、武偵見習いとして日々訓練に励んでいる。

そして、武偵高の生徒は、民間から有償で依頼を受けることができ、その成否も成績に反映される。世間を騒がせる凶悪犯の追跡だつてできる。確かに、爆破事件の犯人捕まえられたら評価もうなぎ上りかもしれない。しかし、キンジは乗り気ではない。

「いや流石にきつくはないか？春先から掲示板に張り出されてはいたけど、全員リタイアしてる難関依頼だぞ？」

「だからよ。武偵として見過ごせないでしょ」

「なんで俺の周りのヤツらは話を聞いちゃくれないんだ……」

キンジの悲痛な叫びは、出た瞬間に虚空に掻き消える。全国の主人公諸君に安寧が訪れることはないのである。

「あんたは私のパートナーなのよ？拒否すればどうなるか、わからないわけではないでしよ？」

「つたく……ああ分かったよ、行けばいいんだらう？」

自分の意見が通らないことには慣れてる。アリアの横暴っぷりにも慣れてる。彼女の言うとおりに、キンジはアリアのパートナーなのだ。ならば、火中の栗とわかつていようが飛び込むしかないのだ。彼女を引き戻せるのは自分だけなのだから。

「まあ行けるだけ行ってみるか……なんかくでもない雰囲気しかないけど」
「事件は全部ろくでもないものばかりじゃない。ほら、行くわよ」

学生寮を飛び出した2人を、その人物は遠くから静観していた。

その手には、ぐしやぐしやになったキンジの顔写真が握られている。

「遠山キンジ……お前を殺してやるよ……」

——というような経緯で始まった今回の仕事だったのだが。

「ここが昼間爆発騒ぎがあったところか……」

2人は、昼間に爆発騒ぎがあったというアパートにやって来た。本来ならばもつと早く来たかったのだが、謎の黒バイクと変な集団のチェイスに巻き込まれたり、ホモの三人組に絡まれたりとさんざんな目に合ったのだ。道中のさまざまトラブルのせいで、キンジ達の気力は既にごっそり削られていた。

今2人は、現場付近を流れる川の橋の上から、事件現場を眺めていた。橋から見える現場には、既にビニールテープが張られている。今から行っても、既にわかりやすい証拠は警察の方で見つけているだろう。だが、2人は武偵。そんな理由で諦めるなんて論外だ。

「もう一件の現場も見て回るか？結構な家事になったらしい」

「ようやくまともな捜査ができる……なんで本編に入る前にここまで苦労するのよ……」

「それについては同感だ。さ、暗くなる前にいこうぜ」

そう言って、キンジは橋を渡り終え、土手の上へと踏み出す。すると、

「ちよいと待て、その兄ちゃん、わしらと遊ばないか」

「……………」

「……………変態だ」

後ろから声をかけられ、振りかえるキンジとアリア。そこには、禪と地下足袋だけを身に纏ったおっさんと、いかにも浮浪者ですといったいで立ちのおっさんが立っていた。2人ともアリアには目もくれず、キンジの方を凝視している。

キンジは身震いした。今の「遊ぶ」のニュアンスに、危険なものを感じたからだ。そんなキンジの気持ちに気づいてないのか、知っていて無視しているのかは定かではないが、おっさんはキンジの肩に手を置いて続ける。

「土手の下で糞遊びしようぜ」

「嫌だー」

なんか明らかに文字に起こしてはいけないような、ピー音で隠さなきゃいけないような単語があつたような気がする。とにかく、こいつは危険だ。

キンジとアリアは、それほど多いわけではないが、それでも数少なくない死線を潜り抜けてきた。ゆえにわかる。目の前にいるのは、そういった死線とはまったく別種の危険性を有している。明らかに異質なものであつた。

「まさかこいつらもイ・ウー!!」

「いや、流石にこんな奴らを仲間認定したら可哀想だと思うぞ……気持ちにはわかるけど！あとむやみに銃抜こうとしない！」

「だけどつ……」

おっさんと浮浪者に引つ張られるがまま、キンジは土手の下へと連れてゆかれる。こんな状況といえども、むやみに銃を抜くわけにはいかないのだ。ゆえに、アリアもキンジも迷っている。

すると、おっさんがふと、アリアの方を見た。彼は、アリアをまじまじと見つめると、心底げんなりとしたように一言、こう言った。

「すまないが幼女はNG」

「だれが幼女よこの変態野郎！あたしは高2だつてんだろぅがっ！」

あの野郎、アリアの地雷踏みやがった。気にしている幼児体型のことを指摘されたアリアは、激昂して今にも発砲しそうになる。やめてくれ、今やったら洒落にならない。

「待て待て！いくらかんでも撃つたらマズいだろ!!」

「いや公然猥褻で突き出してやるわよ!!」

「どかちゃんや、お主のストライクゾーンは40歳以上だったと記憶して居るが……」

「にいちやんがいけないからこいつで」妥協するぜ。折角上京したのににいちやんと連絡付かねえとか、悲しくて気が狂う」

キンジ達の絶叫を意に介することなく、おっさん達は嬉々として変態トークに花を咲かせている。キンジは必死におっさん達の手を振りほどこうとするが、彼らは予想以上

に力が強く、なかなか振りほどけないでいる。

「兄ちゃんみたいなモヤシ野郎が、土方仕事で鍛えたこの身体に勝てるわけがねえぜ」
「楽しみじゃなあ、けつの穴こじ開けるの楽しみじゃなあ！」

「大変不謹慎なこと言うんだけど、こういうのって俺みたいな男子高校生よりもっと別の人がやられるのが普通じゃないかなあ！」

残念だがキンジよ、世の中には特殊な嗜好を持つ人も多数いるのだ。事実、おっさんはひどく興奮した様子で、キンジのズボンのベルトを外そうとしてくる。

キンジの貞操が危ぶまれる中、アリアは手をこまねいている。体格では圧倒的に不利、拳銃もむやみに使えない以上、どうすればいいのか。

「もう何とかしなさいよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

その声を、聞いた者がいた。

「そこまでだ！」

「ぐひゃあっ！」

そんな情けない悲鳴を上げて、浮浪者が横に吹き飛んだ。

「誰や、わしらのプレー（意味深）の邪魔をする奴は！」

おっさんは慌ててキンジから手を放し、あたりを見渡す。しかし、あたりには誰もいない。アリアは相変わらず自分の目の前にいる。彼女はまだ銃を抜いてはいないし、仮に接近戦にもちこんでいたとしても、距離的に、浮浪者を攻撃できるわけがない。

正体不明、現在地不明の邪魔ものを警戒するおっさん。しかし、その人物は既におっさんの背後に回り込んでいた。

「捕まえたぞ、彼を離すんだ」

「お前、こんなことしてタダで済むと思うなよ、お前の故郷糞まみれにしと」
「うええええええいっ!!」

おっさんがそう言い終わる前に、乱入者の見事な一本背負いが炸裂した。綺麗に投げ飛ばされたおっさんは、縁石に頭を強打し、ふらふらと立ち上がった後、

「ああ〜気が狂う！」

そう言っておっさんは気絶した。浮浪者の方は、気絶したおっさんを背負うと、橋の下の方へと逃げ帰っていった。

「た、助かった……まじでやばかった」

かくして、キンジの貞操は守られた。キンジとアリアは、力なくその場にへたり込む。これまで生きていた中で、冗談じゃないくらい危なかったような気がする。武偵として

潜り抜けてきた死線よりも生きた心地がしなかった。願わくば、今後一生このような目にはあいたくない。ほんとに、だ。

緊張が解け、乾いた笑いをこぼすキンジの元に、救世主が駆け寄ってくる。

「大丈夫か？」

救世主の正体は、背が高めの茶髪の青年だった。その場にあおむけに寝転がっていたキンジは、彼から差し伸べられた手を取り、上体を起こす。

「ああ、お陰様で……情けない所さらしまつたな……くそつ……」

「助かったわ……で、アンタ何者よ？なんか随分と身のこなしが良かったけど……」

「仕事柄手荒事が多くてな。とにかく、無事でよかった」

安堵するキンジ達の元に、土手の上の方から声がかけられる。声のした方を見ると、土手の上から数人の少年少女が、此方に向かって駆け下りてきていた。

それはチャラそうな見た目の男子高校生だったり、緑の髪に黒いリボンが特徴の小柄な少女だったり、興奮気味のボブカットの少女だったり、もみあげがやや長い茶髪の少女だったり、まあなんだ、いろいろとやってきていた。

彼らが誰かなんてキンジ達には知る由もないが、念のため言っておくと、アラタ、山風、ハル、大鳳である。瞬達とは別行動で灰司を探しに行っていたのだ。

「あの人たちは？」

「ああ、ちよつとバイクエンストしちゃってて……あいつらが助けてくれたんだ」

「ちよつとおおつ!! どこ行ってたんですか!!」

「見ちゃいけないものを見てしまった気がするのよね……気のせいと思いたいけど……」

「いやあ見事な立ち回り……逢瀬さんよりすごいのでは?」

「さつきのおっさん達、どっかで見覚えがあるような……まさか、な?」

大鳳は本能的に忌避感を抱き、アラタは、先ほど達のおっさん達に心当たりがある様子。前世の記憶をも辿ってみるが、脳が知ることを拒否しているのか、なかなか思い出せないでいる。

「とにかく、ありがとう。あの……名前を聞いてもいいか?」

キンジは、青年に名を訪ねる。

青年は、それに答える。

「俺か?俺はけんぎきかずま剣崎一真。君たちが無事でよかったよ」

話は数刻前に遡る。

「これを、この住所に」

依頼人を名乗ったその人物は、見てくれからあからさまに怪しかった。なんせ、帽子を目深くかぶり、顔にはサングラスとマスク、その上大きなトレンチコートを身に着けている。こんな格好をしてれば『どうぞ私は不審者です。通報なり逮捕なりご自由にどうぞ』と言っているようなものである。

しかし、セルティはそれについては別段驚くようなことはなかった。仕事柄、自分の正体を知られたくないという依頼人もたまにいるのだ。セルティの仕事は、所謂運び屋。社会のアングラな部分を駆け回る、いろいろな臭い仕事だ。

目の前の依頼人は、住所らしきものが書かれた紙を渡しながら、セルティに頼み込んできた。

『いや、それなら宅配業者に頼んだ方がいいんじゃないですか?』

セルティは冷静に、PDAで文字を打ち、その画面を依頼人に見せる。訳あって彼女は声を出せない。なので、基本的にセルティはこのようにしてコミュニケーションをとっているのだ。

セルティの指摘に対し、依頼人は肯定するかのようにならず。かなりアンダーグラウンドな世界の住人である彼女に頼むというのは、依頼者か運搬物、どちらかに後ろ暗い事情があることに他ならないのだ。

「本当なら俺が直接届けたかつたんだが、生憎俺は今命を狙われているんだ。それに、追っ手もこれを血眼になつて探している。だからある程度腕つぶしの立つ奴じやないと任せられないんだ。その点貴女は大丈夫だ。なんせ■■■■■■だからね」

依頼人の発言に、セルティは動揺した。なぜならそれは、ごく一部の人物しか知らないことだからだ。普通ならば決してたどり着くことのないその事実をさりりと言いつた依頼人に、セルティは警戒態勢を取る。そして、その出所を訊く。声はないはずだが、PDAに打ち出されたその文章からは、ぴりついた雰囲気確かに伝わってくる。

『失礼ですが、誰からそれを？』

「仕事柄そういったものに縁があつたのさ。それで貴女のことを知つた」

『……貴方は何者なんですか？』

「お互いのためにも、無用な詮索はよしてくれないか。依頼が果たされるまで、私の素性を明かすわけにはいかない」

答えになつていない。その件については話す気はないらしい。

セルティが纏うぴりついた雰囲気動じることなく、依頼人は話を続ける。

物がスピードを上げてセルティに突っ込んでくる。そして、口から光線のようなものを吐き出してきた。

すかさずセルティは、バイクごとジャンプをし、空中でハンドルを右にきり、化け物と正対する。化け物が放った光線は、誰もいない道路を容易くめぐり取ってゆく。

(これでも食らっていろ!)

セルティは心の中でそう毒づきながら、影の大鎌を振りかざす。大鎌の鋭い一撃は、化け物の頭部上半分を気持ち悪いくらいに綺麗に切断する。化け物の光線が止まり、セルティは地面に着地する。

——なぜだろうか。これで終わったとは全然思えない。

そして、その予感は的中する。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

(やはりこれくらいでは死なないか……!)

鼻から上を失った化け物は、早朝の街一体に轟くような咆哮をあげながら、再び動き出した。セルティはすかさずUターンをし、再び化け物に背を向ける。

「UBBNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNNN!!」

化け物が叫ぶと、頭部の切断面からいくつも触手のようなものが生えだし、セル

ティに向かって伸びてきた。すかさずセルティは大鎌で触手を切断するも、触手は即座に再生し、再びセルティに襲い掛かってくる。もうなんでもありである。

これまでも何度もドンパチに巻き込まれてはきたが、まさか自分と同じ真正正銘の化け物と戦うことになるうとは思わなかった。果たして今回は無事に帰ってこられるのだろうか。今回の依頼を受けたことを後悔しながら、セルティはT字路を右に曲がる。そして、歩道橋を潜り抜けた直後だった。

「だーいぶっ♪」

(へっ!!)

いきなり、上から誰かが落ちてきた。セルティの背中に、何者かの体重を感じる。振り返ると、小学生くらいの女の子が、セルティにしがみついていた。

「ごめんね、乗せてもらおうよ」

(え、いや、何?)

彼女はそれだけ言って、後ろの方を指さした。

「ちよつと厄介な事になってな……ほらきた」

セルティは、これ以上厄介なことになるの!! と叫びたくなつた。きつと自分に顔があつたら、露骨に嫌そうな顔になっているだろう。そう思いながら、少女が指さした先を見てみる。

そこには、先ほどの化け物に加えて、複数人の男女がこちらに向かつて走ってきていた。バンダナを巻いた青年や、どこぞの魔法少女のようなコスチュームに身を包んだ少女、全身包帯まみれのマツチヨに、空飛ぶ車椅子に腰掛けた女性。まるで下手な少年漫画や中二病系ライトノベルにでてきそうないで立ちの少年少女が、一斉に追いかけてきた。

「なんで逃げるんすか！ちよつと話を伺いたいただけなんすよマジで！ほんとややこしくしないでくださいよおおお！」

先頭を走るバンダナの青年が、悲痛そうに叫ぶ。

「不審者感丸出しの格好で追っかけきたらそりやあ逃げるよね」

「いや事情聴取から逃げるから……ほら！任意同行拒んだら厄介なことになるんだって！君のためにもほら、ついてきてよ！」

「やだよ。あなたたちは信用できない。おかあさんも大体同じだよ。いい加減にしないとバラバラにしちゃうけどいいの？」

（あれ、さつきと雰囲気が全然違う……？）

少女の言動に、セルティは違和感を感じた。

なぜなら、先ほどまでとは全然雰囲気が違うのだ。どこか大人びた印象だったのに、今は、すごいあどけなさというか、そういった類のものを彼女から感じる。

としたが、少女は続けざまに触手を斬りつけ、細切れにしてしまった。

化け物はキヤタピラをさらに早く回して追い付こうとする。しかし、化け物もまた忘れていた。勝手に割り込んできた第三勢力の存在を。

「さつきからためえ邪魔なんだよぶん殴るぞ！」

「吠えるな煩い口縫い合わせるわよ！」

「邪魔するな！」

白い少女を追ってきた集団が、一斉に化け物に襲い掛かってきたのだ。ある者は自身の身体に巻かれた包帯を伸ばして、ある者は手に持ったステッキからビームを放って、ある者は指先から無数の弾丸を放って、各々が思い思いの方法で攻撃を仕掛けてきた。

化け物はセルティ追跡の邪魔をする少年少女が。少年少女は白い少女を追う邪魔をする化け物が。互いが互いを邪魔ものと認識した、それが衝突を引き起こした。

「今のうちに！」

少女に促されるがまま、セルティはバイクを走らせる。唯一戦闘に参加していないバランダの青年が、遠のいてゆくバイクを指さしながら、泣きそうな声で叫ぶ。

「ちよ、気持ちわかるっすけど逃げられちゃうっすよおおおお！俺戦闘向きじゃないからあれ一人で追うの無理なんすよおおおお！」

その時、誰の耳にも届かない泣き言を叫ぶ青年の元に、一人分の足音が近づいてくる。

「面倒なことになってんな……」

「あ、先輩！」

そこに現れたのは、無東灰司だった。

「朝っぱらからギャーギャー騒いでんじやねえつての。そんなやつ一瞬で始末しまえよ」

「でもコイツ、再生するしめっちゃでかいんすよ……」

青年の泣き言を聞いた灰司は、同僚たちと戦う化け物を一瞥すると、青緑色のバックルとグリップのついた緑色のゲームカセットのようなものを取り出し、バックルを腰に巻き付ける。

「ならコイツで殺すか」

《仮面ライダークロニクル！》

「ここは任せろ、変身」

《ガシャット！天を掴めライダー！刻めクロニクル！今こそ時は極まれり！！》

バックル前面にある「A」と書かれたボタンを押し、カセットをバックルに差し込む。すると、グラフィックを模したゲートが上部に放出されるとともに、灰司の前面に針のない時計が表示され、ゲートが自動的に降下する。そして、灰司の身体は緑と黒を基調としたライダー——仮面ライダークロノスに変身した。

クロノスは、自分に向かってやってくる化け物を挑発しながら、こういった。「こいよ化け物。俺が神判を下してやる」

PM 5:00

というようなことがあった。

「しかし、なあ」

灰司は、スマホの中の律刃の画像を見つめながら、そうぼやいた。

一体彼女が、何故この事件に絡んでいるのかはわからない。だが、むぎむぎ彼女を信じてやるほどの義理はない。たとえ犯人でなかつても、事件をいたずらに引つ掻き回すような輩を放置するわけにはいかない。不確定要素はあつてはならない。本気で何かを守りたければ、性悪説を支持すべきなのだ。

「守りたきやすべてを疑え……か」

—— 守るものなんかないのに？

自分で発した言葉が馬鹿らしくなって、思わず灰司は笑みをこぼした。だいたい、今更自分が何かを守るだなんて、おこがましいにもほどがある。なんせ、既に彼は何もかも失った後なのだから。

「しかしこの街はアマスベに負けず劣らずイカれてやがるぜ。」

灰司は、スマホをしまつてあたりを見渡す。彼の周囲には、何人もの不良少年が彼を取り囲むようにして立っている。今の時代に、こんな奴らがまだ存在していることに心底驚いている。なるべく目立たないように猫を被っていたつもりだが、彼らのような人種にとっては、絶好のカモのように思われたのだろう。目立たないように生きるのは思つた以上に難しいようだ。

先頭に立つリーダーらしき青年が、灰司にガン飛ばしてくる。見るからに頭が悪そうで、話も常識も通じなさそうな雰囲気、灰司は内心辟易していた。

「おいそのスカした糞野郎くううん？俺達さあ、ちよいとお金に困ってんのよ。未来ある若者への先行投資と、その態度で俺達を不快にした慰謝料、合わせて一人3万くらい寄付してくれませんかあ？」

こいつらは転生者ではないようだが、頭の出来はどうこいどっこいだ。灰司は青年のガバガバ理論に呆れながら、とりあえず返答してみた。話を通じるとは思えないが、一応、だ。

「アホか。俺はお前たちより年下だから、お前の理論に則ると、俺の方が未来ある若者ということになると思うんだが。それにだ」

「あ？」

「仕事の邪魔すんなKY野郎」

青年にここから先の記憶はない。理由は単純明快。灰司に顔面ど真ん中をぶん殴られたからだ。

鼻血をまき散らしながら、リーダー格の青年は地面に倒れ伏した。それを見て、周囲の不良少年たちが、一斉に灰司に敵意をむき出しにする。丁度いい獲物から、自分たちに歯向かう不屈き者へと、認識が切り替わる。

「……治安の悪さはどこの世界も変わらないな」

しかし、灰司に彼らに割くような時間はない。

灰司は驚異的な跳躍力で飛び上がり、殴りかかってきた不良の頭を踏み越え、そのまま包囲網を軽々と飛び越える。

「てめえ！俺を踏み台にするとはいい度胸だな！」

「くそっ！リーダーの敵討ちだ！野郎ども行くぜ！」

躍りになって灰司を追いかける不良少年達。面子をつぶされた彼らの怒りはとどまることは知らない。どこまでも敵を追う、獣でしかない。

灰司は、近くの曲がり角を右折する。不良少年たちも、その後の続く。が、曲がり角を超えた先には、灰司の姿はどこにもなかった。右折した先は一本道。隠れられるような場所もないはずなのに、だ。

「いねえぞ！何処隠れやがった!!」

「小賢しい奴め……どこまで俺達を馬鹿にすりゃあ気が済むんだ！」

馬鹿にするも何も、勝手に挑んで勝手に返り討ちにあっただけなのだが、彼らにそんな道理は通じない。

辺りには、負け犬の遠吠えだけが響き渡っていた。

その様子を、灰司はカーブミラー越しに見ていた。

そこは、兎に角異質だった。生物は微塵も存在せず、静寂だけが闊歩する無機質な都会。そして、随所に散見される鏡文字。ここは、鏡の世界。普通の手段では決して立ち入ることは叶わず、されども一度入れば帰還できる保証はないし、長居すれば消滅してしまう。そんな場所に灰司はいた。

鬱陶しい不良少年たちから逃れ、一息ついた灰司だが、そこに再びスマートフォンを着信音が鳴る。電話に出ると、AMOREの上司からだった。

『随分と騒がしかったようだが、一体……』

「ああ、野良犬に絡まれていただけだ。それよりも、オリジオンが見つかったのか？」

『そうだ。場所はそう遠くない、すぐ向かってくれ』

新たな仕事。転生者狩りに安息はないのだ。

灰司は通話を切ると、鏡の世界をさっそうと駆け抜けていった。

P M 5 : 3 3

瞬達は、二手に分かれて灰司を探していた。一応ながら、チーム分けとしては、瞬・唯・志村・湖森

「つたく、何処行きやがったんだ」

「だけどさ、置いて帰るのもあれだもんね……あんまり遅くならなきゃいいけど」
「僕らの方が迷子になったりしてね」

志村と唯は随分と気楽そうに見えるが、本当に大丈夫なんだろうか。既に日が落ちかけているし、あんまり買えるのが遅くなると家族に怒られてしまう。

そう思いながらも、灰司探しを続ける瞬達は、とある公園に立ち寄った。すると、
「おっい瞬くううううん！」

見覚えのある変なおおねーさんが手を振りながら此方に走ってきた。こんなこととしてくるような年上の女性の知り合いは一人しかいない。もちろんトモリさんである。

実質的なファーストコンタクトで既に彼女に対する心象が地に落ちている瞬は、露骨に嫌そうな顔をする。一応彼女を助けたことはあったものの、それとこれとは別なのだ。

「うわあ不審者だ」

「不審者じゃないってえの！港トモリ、ピッチピチの19歳だつてばよ！まあもうじき二十歳の誕生日なんだけどね」

「クソほどどうでもいい」

特に必要のないトモリの誕生日の情報を受け取らされた瞬は、さつと後ろに引いて唯にバトンタッチする。一応瞬よりは仲いいだろうし、それならば唯に押し付けた方がいいに決まっている。

「トモリさん、どうしたの？」

「事情聴取終わったから追っかけてきたんだ〜」

「この人知り合い？なんか変な人だなあ」

「うん、悲しいことに知り合いなんですよね」

悲しいことに、である。悲観している瞬だったが、そこにもうひとつ、聞き覚えのある声がかけられる。

「君は……また顔を合わせることになるとは、奇遇だな」

瞬はその声を聞いて、ぱっと顔を上げる。眼鏡越しにもわかるその眼光の鋭さは、たった数時間で忘れることはできない。瞬は声の主の名を、恐る恐る口にする。

「裁場さん……」

そう、昼間に出会った武偵の青年・裁場誠一であった。隣には、見知らぬ男性が一緒に立っている。

「彼が君と話がしたいというので、連れてきた」

そう言つて、裁場は隣に立っていた男性にバトンタッチする。となりの男性にも見覚えがある。あのビルから投げ出された所を、裁場に助けられた人だ。片目が隠れるほど長い前髪以外に、これといった特徴のない、細身の男だ。

「ああ、お前もあの事件に巻き込まれたのか。君、炎の中突っ込んでいった人だろ？この武偵さんから話は聞いたよ。勇気あるなあ……ありがとう」

「俺は何にもできていませんよ。ただ余計な迷惑をかけただけで」

「そうだ。君の行いは褒められたものではない。正義感だけで突っ走れば、自他を傷つける事につながるといふことを肝に銘じておけ」

「はい……」

念を押すように、再度叱られてしまった。だが、彼の言っていることは間違つてはいないのだ。本気で瞬のためを思つて、このようなことを言っている。ゆえに、瞬は裁場

に反論ができない。

自省して黙り込んだ瞬。裁場は、男のほうに話しかける。

「ご自宅までお送りしましょうか？」

「いや、いい。外せない用事があるんだ」

「そうか……それなら、ここで。君も、俺みたいなやつとは二度と出会わないことを願っているよ」

そう最後に言い残し、裁場と男は去っていった。唯は、裁場の言動に不満がある様子。

「あれが瞬が言っていた人？なんか感じ悪い……」

「いや、でもあの人の言うとおりだ」

しかし、瞬は唯の怒りをなだめる。あの叱責は、瞬の至らなさが原因なのだから、此方が怒る正当性はないのだ。瞬はそれを理解している。それでも納得いかない態度を見せる唯とトモリだったが、

「あの人……裁場さんがいなかったら、あの男の人は助かっていない。俺じゃ届かなかった命を、あの人は救ってしまえる、そんな人なんだよ。俺なんかよりも立派な……ヒーローだ」

その言葉を聞いて、唯は何も言えなかった。それでもなおも、トモリはなんとか反論しようとして、瞬をほめようとする。

「いやいや、瞬くんは立派だって！2回も助けられた私が保障す……」

と、言いかけたところでトモリの声が止まった。瞬は、どうしたと声をかけようとしたが、その前に、トモリは突然お腹を押さええてうずくまりだした。

「おなかいたたたたたたた……」

「え、ちよちよちよ大丈夫?!」

「ごめんね、わたし昔からおなか弱くて……些細なことですぐこうなっちゃうんだよね……」

「あーわかります。僕も小さいときはそんな感じでしたよ」

志村は変なタイミングで共感するんじゃない。

まるで陣痛でも始まったのかといわんばかりに痛がるトモリは、公衆トイレのある方へと歩き出す。その足取りは、まるで生まれたての小鹿のようにプルプルと震えている。

「大丈夫、少し休んだら治ると思うから……いででで……」

「ならいいんだけど……一応トイレまで連れて行ってあげますよ」

湖森が心配して、トモリをトイレに連れていった。

遠出してきたはずなのに、結局いつもと変わらないじゃねえかと、瞬は自嘲するのだった。

「……………」

その人物は、それを見ていた。

帽子とマスクとサングラスで顔を隠した典型的な不審者ルックスの彼(?)は、公園の茂みに身を隠している。10人中15人は怪しい奴だと断言するような格好のその人物は、必死に息を殺しながらサングラスの下で目線を動かす。

その顔が向いている方向には、先ほど裁場達と別れた瞬達がいるのだが、彼(?)が瞬達に注目しているのか、はたまた裁場達に着目しているのか、それは他者からは判断しかねる。

彼(?)は、手元のスマホの画面に目をやるかのように、顔を少し俯かせる。画面には周囲のマップが表示されており、そのうえでは赤い点が一方向に動いている。マップ上でなにかの位置情報を見ているのだろう。その人物が動いていないにもかかわらず、マップ上の赤い点が動いているのを見るに、確かめているのはその人物本人の位置情報ではないことだけは確かだ。

「さあどうくる…………お前の餌はここにいます……………」

限りなく小さな声で、そう呟く。

彼(?)の役割は陽動。そのためにわざわざ首無しライダーに大枚をはたいて、自分

の命よりも大事なものを預からせたのだから。

そして、それが無駄にならないことを知っている。これから何が起きるかも知っている。そのうえで、多くの人を巻き込んでしまっている事実には申し訳ないとも思っている。

だが、やめるわけにはいかなかった。

これは、自分の半生への決着なのだ。

「ボマー……いや、……今日こそお前から取り返す……」

同時刻

公園の一区画。とあるベンチにて。

ハゲとデブ、ふたりの中年男性がベンチに腰掛けて会話をしていた。

「また予算申請きてますよ……そう簡単に通るわけがないというのに、ほんと、何考えてるんだか」

「現場の奴らは我々事務側のことを何にもわかつちやあいない。向こうは向こうで、我々のことを、現場をわからない上役と思っっているだろうが、それはお互いさまではないかと私は思うのだよ。違うかね？」

「私も最近になってようやく理解できましたよ。上に立つというのは、中々に苦勞しますねえ」

スマホの画面を見たハゲがため息をつき、話を聞いたデブが共感するかのようにならず。なんだかよくわからないが、いろいろと仕事のことでも不満があるようだ。

そんな、どこにでもあるような、ありふれた光景。そこに、一人の男がやって来た。

フードを目深く被り、顔を隠したその男は、デブとハゲの前に立つ。2人の方も、自分達の前に突然現れ、無言で立ち尽くしている男に不気味さと鬱陶しさを感じ、追い払おうとする。

「なんだね君は。私達に何か用でもあるのか」

「……………」

「何とか言ったらどうだ？ 私は忙しいんだ。君のような人間にかまっている暇などないのだよ」

「そうですね。言つときますけど、不審者として通報してもいいんですよ？ そうすれば——」

「見つけたぞ。AMORE 経理課長・篠原治、人事部長・八手恵一だな？」

「え」

2人のおっさんに詰められたフードの男は、2人の名前と立場を言い当てた。彼の言

うとおり、彼らもまた、AMOREの職員。しかし、彼らは灰司のように前線で戦う実働部隊というよりかは、どちらかという事務的な役割を担っている。

フードの男は、2人を見下すかのように立っている。しかしながら、おっさん達は彼に対する心当たりがない。

「俺の顔を忘れたとは言わせんぞ」

「な、貴様は——」

男たちは、フードを脱いだその人物の素顔を見て、驚愕の表情を浮かべる。そして、大声を上げようとしたハゲ頭の男の顔面を驚掴みにすると、ぎりぎりとなりの男の身体を片手で持ち上げてゆく。

デブの方はベンチから転げ落ち、尻餅をついたままじりじりと後ずさってゆく。ハゲを助けるという選択肢は、その男の頭には浮かばなかった。そんなことをする度胸もなかった。ただ歯をガチガチと鳴らしながら後ずさってゆくことしかできなかった。

「なんでっ……今更……!」

「起爆だ」

瞬間、ハゲの中年男性の頭が風船のように破裂した。

その音は、瞬達の元にも聞こえてきた。

パンという、現代日本には不釣り合いな乾いた音が、周囲の喧騒を一気に鎮静させる。それから少し遅れて、周囲に焦げ臭いにおいが漂い始めた。

「何?! 今の音なに?!」

「なんだこの焦げ臭いにおい……」

「あっちの方からするね……行ってみる?」

「ちよ、危ないって! ねえトモリさんも逢瀬くんもとめな……って行ってる!!」

「お兄ちゃんが止まるわけないんだよなあ」

静止しようとする志村の声を振り切り、瞬達は異臭のする方へと走り出す。

少し走ると、人気のない噴水広場にたどり着いた。なぜかこのあたりだけ、やけに静まり返っており、噴水の音だけが周囲に木霊している。瞬が異様な静けさに違和感を感じて立ち止まっていると、前方から、なんだかやけに切羽詰まったような足音が聞こえてきた。

「~~~~~!!」

それは、声にならない悲鳴を上げながら、必死の形相で此方に走ってくる太った中年男性だった。顔は恐怖と鼻水と涙でぐしゃぐしゃになり、着ているスーツは思いきり崩れている。相当ひどい目に合ったことがうかがえる。

「あの、何かあったんですか」

その光景は、後からやって来た唯達もしつかりと目にしていた。志村は情けない声を上げて尻餅をつき、トモリは湖森にそれを見せまいと、咄嗟に目隠しをする。今の爆発を聞いて、公園内にいた人が何人も集まってきた。

「ひ、ひとがはじけとんだ……!」

「これも爆弾魔の仕業、なの?」

「あくあ、見ちゃったか」

呆然とする瞬の前に、フードを被った男が現れる。この場に似つかわしくない、つまらなさそうな声を上げながら。瞬は、恐る恐るきいてみる。

「お前がやったのか……?」

「おいおい、またかよ」

「また……?」

その言葉に、瞬は違和感を覚えた。男はフードを脱ぎ、顔をさらす。

「あんた、さっきの……!」

それは、先ほど裁場と一緒にいた男だった。先ほどの穏やかそうな態度とは打って変わって、いかにもワルですといったような雰囲気を全身から醸し出してる。男は、瞬の顔を見て、心底面倒くさそうにでかい溜息をつく。

「勘弁してくれよ。なんで1日に2回も邪魔されなきゃならねえんだ?」

「俺だつて好きで巻き込まれてるんじゃない。そもそもお前がこんなことしなきゃいいだけじゃないのか」

「やだね。事情を知れば最低でも50%くらいは俺に正当性があると思うぜ？ まあ死んでも教えないけど」

「人殺しに正当性なんかあつてたまるか！」

あくまで、自分が間違つているとは認めない。その態度は、瞬が今まで戦つてきた転生者達と同じだった。

男は、火のついたたばこをその場に投げ捨てると、

「ついでにひと暴れといきますか！一応ギフトメイカーから頼まれたんでね！この力を授けてくれた音つて奴に報いなきゃあ、男が廃るつてもんだぜ！」

《KAKUSEI BOMBER》

そう言つて、オリジオンに変身した。その姿は、数時間前に瞬が戦つたボマーオリジオンの姿だった。

「ふうっ！」

ボマーオリジオンは、口から無数のシャボン玉を吐き出す。放たれたそれは風に流されるがままに漂い、周囲のものに触れた瞬間、割れると同時に爆発を引き起こした。

「うわあああああああああつ！」

彼女は、突然の出来事に困惑する瞬を嘲笑う。そして、その場でくるりと回ってウインクを決めると、

「変身☆」

《KAKUSEI BOOGIE POP》

彼女はオリジオンへと姿を変えた。全身に開いた状態のジツパーが現れ、まるで着ぐるみを着るかのようになり、それらが一斉に閉まってゆく。

ジャラジャラと鎖を巻きつけた円筒状の帽子に、裾が長すぎて引きずっているマント。そして、不気味なほどに満開の笑顔を浮かべた骸骨頭。まさしく、テンプレートのな死神を彷彿とさせるものであった。

「アタシはリバイブ・フォースの藤宮泡不ふじみやほうふまたの名をブギーポップオリジオン！イカよろく、つても今からアンタ死ぬけどね。いやマジで」

リバイブ・フォース。以前戦ったタロットオリジオンも、自身のことをそう名乗っていた。彼曰く、ギフトメイカー直属の精鋭だとか。つまり、目の前の彼女も、タロットオリジオンに匹敵する強敵であるということだ。予期せぬ強敵とのエンカウントに、思わず瞬の息が詰まる。

その様子を見て、藤宮泡不——ブギーポップオリジオンは、品のない笑い声をあげる。「え、もしかしてビビってる？なら仮面ライダーって案外大したことないんじゃないか？」

「く……」

目の前に立ちはだかる2人のオリジオンの気迫に、無意識ながら気圧される瞬。そこに、追い打ちをかけるように、

「おいおい泡不ちやん、独断専行はダメって言ったでしょ？ ほら、数の暴力でいこうってあれほど言ったよね？」

「アクロス、今日こそ息の根を止めてやる」

「ややお邪魔虫君。単刀直入に言うけど死んでくれない？」

「……！」

聞き覚えのある声に、瞬はぱつと振りかえる。そこには、見覚えのある敵たちが待ち構えていた。レドにレイラ、バルジにガングニール。ギフトメイカー側も勢ぞろいだ。彼らの背後からは、2人の見知らぬチンピラが歩いてきている。瞬は知らないが、彼らは数時間前に灰司と戦った転生者達だ。

これで1体8。状況は絶望的だった。

「変身」

《KAKUSEI IGARIMA》

「いい加減僕も戦線に立ってみようかなって思ってたさあ。喜べよアクロス、僕が直接蹂躪してやるよ」

《KAKUSEI BLADE》

バルジがイガリマオリジオンに変身するとともに、レドもオリジオンとしての姿をあらわにする。天を刺すような勢いで伸びる一本のツノに、煤けた銀色の甲冑。その胸元には、緑色に染まったスパードマーク。彼が動いたびに、ガシヤガシヤとその全身が音を立てる。その姿はまるで、継ぎはぎの甲冑を身に纏ったカブトムシの怪人だった。

「ギフトメイカー・レド、ブレイドオリジオン。アクロス、お前で遊んであげようか」

舞網の時よりも絶望的な状況だ。瞬はあまりにも絶望的な状況に、心が折れそうになる。しかし、ここで折れるわけにはいかない。瞬には、守るべき人たちがいるのだ。それが、そばにいる、だから、ここで瞬が言うべきことはひとつだった。

「みんな逃げろ！」

「いやいや！瞬は大丈夫なの!! 1体8とか正気の沙汰じゃないよね!!」

「そもそもお前らは戦えねえだろ！だから逃げてくれ！俺なら大丈夫だから！」

唯は何か言いたげだったが、志村が強引に彼女の手を引っ張って逃げようとする。

「行こう……唯ちゃん。僕らじゃどうしようもない」

「……っ！瞬、無茶しないでよね！」

「湖森ちゃんも！ほら！」

「う……うん！」

唯達の姿が遠くに消えてゆくのを横目に見届けながら、瞬はクロスドライバーを腰に装着し、アクロスライドアーツをドライバーに装填する。

「変身！」

《CROSS OVER! 仮面ライダーアクロス!》

「シヤラクセエ! 俺達に楯突こうってんならぶつ殺す!」

「俺達はヒジョーにイラついてんだ! なんせ兄貴をぶつ倒されてんだからよオ〜!!」

《KAKUSEI LIZARDN》

《KAKUSEI KAMEX》

2人のチンピラも、リザードンオリジオンとカメックスオリジオンにそれぞれ変身する。

「さて、数も実力もこちらに軍配が上がっていると思うんだけど、それでもやるのかな?」

「やるよ。お前らのやっていることは見過ごせない」

生きて帰れる見込みはない。今日が命日に、ここが死に場所になってしまいかもしれない。そう思いながらも、アクロスはギフトメイカー達の前に立つ。どうしても見過ごせないから。許せないから。死の恐怖を正義感で誤魔化しながら、アクロスは今この場に立っていた。

アクロスは、一歩踏みだす。今まさに、戦いの火ぶたが切つて落とされようとしていた、その時だった。

「おいおい、1対8は無しだろ。俺も混ぜろよ」

そんな声があったかと思えば、突然、何かアクロスとギフトメイカー勢の間に、イツチヨクセンに降り注いできた。まるで隕石でも降つてきたかのような衝撃と、大量の土埃が舞い上がる。

少しして、土煙が徐々に晴れてきた。両社の間の落下地点に立っていたのは、漆黒のスーツに黄金と白銀の装甲、赤黒いマントを纏った騎士の如き出で立ちの仮面の戦士。アクロスも、ギフトメイカー達も、本能的に察していた。こいつは転生者狩りだと。

「その声……転生者狩りか!!」

「今の俺は仮面ライダーソロモンだ。」

「お前……」

「勘違いするな、俺とお前は仲間じゃない。俺は俺の目的の為にここに来た」

ソロモンは、大剣カラドボルグの剣先をイガリマオリジオンに突き付けながら、そう吐き捨てる。イガリマオリジオンは、自身に向けられている明確な殺意に全く動じることなく、へらへらと笑いながらソロモンを盛んに挑発する。

「懲りないやつだな。よっほど死にたいと見た」

「それはコッチの台詞だ。テメエだけは俺の手で殺す……!」

「寝言は寝て言うもんだぜ? 雑魚が勝手に死んだだけだ。何故俺が責められなきゃならない?」

「バルジイ!」

それは一瞬だった。

激昂したソロモンのカラドボルグによる一撃と、イガリマオリジオンの大鎌が、激しい音を立ててぶつかった。ぎりぎりどつり合いが繰り広げられる中、イガリマオリジオンは、自身の背後で待機しているレイラとガングニールオリジオンに、命令を下す。

「まあ俺様は優しいからさあ、お前の遊びに付き合つてやるよ。レイラ、ガングニール、お前らは逃げてつたガキどもを始末しろ」

「無論だ」

「イツチヨクセンニ、ブンナグル!」

「行かせるか!」

イガリマオリジオンの命令を受け、レイラ達が唯達を追おうとする。それを阻むべくアクロスも駆け出すが、すかさずブレイドオリジオンがその背中めがけて斬りかかってきた。

「ぐう……」

「駄目じゃないか……逃げるなんて、さあ！」

続くブレイドオリジオンの第二撃を、アクロスは咄嗟に構えたツインスバスターの刃を以て弾いた。金属同士が激しくぶつかり合う音が響き渡り、周囲の空気がぶるぶると震えるのが目に見えて分かった八日気がした。

「おいおい、前は俺なんか眼中にないって言ってますでしたっけ？」

「部屋の中を小蠅が飛んでいたら目障りだろ？それと同じさ。別に殺す必要はないけど、死んでくれた方が僕たちにとっては快適なんだよ……ねえ！」

その方が楽だから。アクロスとギフトメイカーの間には、圧倒的な意識の差があった。そして、ギフトメイカーの方は、そんな態度でいられるだけの力を有していた。

ブレイドオリジオンが勢いよく振り下ろした剣を、アクロスは間一髪で避ける。誰にも当たらなかった

剣は、アスファルトを思いきりえぐり取り、周囲にもひび割れを生じさせる。目の前の敵は、ガングニールオリジオンに負けず劣らずのパワーを持っている。あの剣の一撃に当たるのはまずい。たった一発うけただけの背中が、既に熱を持っている。

「あたしのこと忘れてもらっちゃあ困るんだけど！」

「ぐああっ！」

ブレイドオリジオンに集中していたアクロスだが、突如として背中に鋭い痛みが生じた。痛みを堪えながら振り返ると、ブギーポップオリジオンが笑っていた。

アクロスはすぐさま駆け出そうとしたが、自身とブギーポップオリジオンとの間を走る、ギリリと光る何本もの線に気づく。金属ワイヤーが、彼女の手から伸びていた。

「そいつは生身の人間くらいなら容易く切り落とせる優れものよ。流石に仮面ライダーとかじゃそううまくはいかないけど、それなら死ぬまで斬り続けるだけ。あたしの経験値になつてもらうから、覚悟しろよ!」

「経験値つて……ゲームじゃねえんだ……ぞつ!」

アクロスは即座にツインスバスターでワイヤーを切断する。ブギーポップオリジオンが続けて何本ものワイヤーを手のひらから放ってくるが、アクロスはそれを斬り伏せながら、彼女へと距離を詰めてゆく。

「まじ? ワイヤーあつさり攻略されちゃう感じ!??」

「せやあつ!」

ワイヤーが思ったよりもあつさりといなされてゆく事実には困惑するブギーポップオリジオンの横っ腹に、ツインスバスターの刃が叩き込まれた。それは斬るといふよりも、ぶつ飛ばすと言った方が近い。攻撃をうけたブギーポップオリジオンは、悲鳴を上げながら地面を転がってゆく。

「きやあああああつ!?？」

「お前頭悪いんじゃないの? 数の差考えろってーの!」

「わかつてらあ!」

すかさず、ブレイドオリジオンが背後から斬りかかるが、アクロスもツインズバスターで応戦する。両者共に振りかざされた刃同士がぶつかり、弾き合う。

ブレイドオリジオンの一撃は重い。少しでも気を抜くと、あつという間に押し切られそうだ。

「ぐぬう……」

「ほら、もつと本気出せよ!」

「っ……!」

ブレイドオリジオンの重い一撃に耐えきれず、刃を防いだツインズバスターが、アクロスの手から弾き飛ばされる。得物を失ったアクロスに、勢いよく振り上げられたブレイドオリジオンの刃が遅いかかった。

「ぐあああああつ!」

火花を撒き散らしながら、アクロスの身体が大きく吹き飛ばされる。そこに、ボマーオリジオンが真つ黒な球体を投げってきた。それはアクロスに当たると同時に、小規模な爆発を引き起こし、アクロスに連続してダメージを与える。その球体は爆弾だったの

だ。

続けて爆弾が何個も飛んでくるが、アクロスはツインスバスターを拾い、ガンモードに変形すると、飛んできた爆弾を光弾で迎撃する。爆弾は空中で爆発し、黒煙と衝撃波を巻き起こす。

「くそっ……！こっとなつたらレジエンドリンクだ！」

《LEGEND LINK! 揺らせ揺られるSSSSOUL! ladies & gentlemen! LINK PENDLUM!》

不利を悟ったアクロスは、ペンデュラムライドアーツをドライバーに装填し、仮面ライダーアクロス：リンクペンデュラムへと変身すると、腹部の宝玉から螺旋状のビームを解き放った。

「はああああああああっ！」

「ダイアーサンダー！」

アクロスの放ったビームは、ブレイドオリジオンの放った電撃と相殺され、爆発を引き起こす。発生した爆風を掻き分けながら、アクロスはブレイドオリジンに向かって突っ走る。ブレイドオリジンは続けざまに電撃を連発するが、アクロスはそれを紙一重で躲してゆく。

そしてアクロスは、ドライバーに装填していたペンデュラムライドアーツをツインス

バスターの持ち手にある挿入口に差し込み、自らの頭上に向かってツインスバスターの引き金を引いた。すると、一瞬だけアクロスの身体が煙に包まれたかと思えば、次の瞬間には、アクロスの姿が幾人にも増えていた。ペンデュラムライドアーツの能力の一つである分身能力を使ったのだ。

「分身か！小賢しい真似を……！」

「落ち着けよ。分身は全員ぶちのめすのがセオリーつてもんだ。ボマー君、纏めて爆殺してしまいな！」

面倒なことになったと怒りをあらわにするにボマーオリジオン対し、イガリマオリジオンは脳筋理論じみた考えで一蹴してしまう。ボマーはそれに嬉々として賛同すると、「言われなくともそうさせてもらうぜ！」

突っ込んでくる分身アクロス達に向かって、手のひらから無数のシャボン玉をうちだした。

凄まじい爆音を立てて、分身たちが霧散してゆく。しかし、本物のアクロスに攻撃は命中していない。爆炎の中から、処理し損ねた分身アクロスが数体、ボマーオリジオンとブレイドオリジオンの懐へと突っ込んでくる。

「しゃらくせえ！リザードスラッシュュ！」

ブレイドオリジオンがそう叫ぶと、彼の尻からトカゲの尻尾のようなものが出現す

る。その先端は、鋭い刃のような形状をしていた。そして、ブレイドオリジオンはその尻尾を勢いよく振り回し、自身に向かってきた分身アクロスを一刀両断する。

ボマーオリジオンも、分身アクロスの頭にそつと触れる。すると、先ほどの中年男性たちのように、分身アクロスが爆発して跡形もなくなった。

「出て来いよ雑魚アクロス。頼みの綱の分身共は全滅したぜ？」

「ああ、出てきてやるよ。望みどおりにな！」

《LEGEND LINK! SET UP! ネプテューヌウウウ!》

その声と共に爆風を突っ切り、リンクネプテューヌとなったアクロスが上から現れた。紫のラインが走る黒い機械チックな翼を広げ、急降下を仕掛けてくる。

「せええええええええええいっ！」

「だからお前と僕では実力の差つてのがあるんだよ！」

ネプテューヌライドアーツの能力で、刀身が大きくなったツインズバスター・ソードモードを構え、勢いよくブレイドオリジオンに斬りかかる。ブレイドオリジオンも、負けじとアクロスを馬鹿にしながら剣で迎撃しようとする。

ガキッ!! と大きな音を立てて、両者の刃が再び激突する。そこにすかさず、ブギーポップオリジオンがワイヤーを伸ばしてアクロスを捉えようとするが、アクロスは飛んで回避しながら、そのワイヤーをツインズバスターで切り裂く。ブギーポップオリ

ジオンは、空を飛ぶアクロスを忌々しそうに見上げながら愚痴をこぼす。

「雑魚のくせに空飛ぶとかうざくない？」

「わかるよ分かる。ならこうするしかないよね。バツファローマグネット！」

ブレイドオリジオンは彼女の愚痴に頷きながら、剣を地面に突き立てる。すると、空を飛んでいたアクロスの身体が、ガクリと大きく傾いた。

「なんだ!？」

別に攻撃がされているわけでもない。ただ、身体が急に重くなったのだ。アクロスは踏ん張って高度を上げようとするが、高度は上がるどころか下がりに続ける。いや、ただ下がっているだけではない。これは――

「引き寄せられている……!!？」

「磁力を操っているのさ！仮面ライダーといえど、そのスーツにはたんまり金属が使われているだろう？この力にあらがえるわけがないのさ！墮ちろ！お前如きがのうのと空飛んでんじゃあねえ！」

「うああああああああああああつ!!」

ブレイドオリジオンの剣を起点として、強い磁力が発生しているのだ。それに、アクロスのスーツが引つ張られている。必死にあらがうアクロスだったが、全身を引つ張る磁力に逆らえず、次第にアクロスは地面へと落ちてゆく。

それでもなおもあがくが、そこに、ブギーポップオリジオンがワイヤーを素早く伸ばし、アクロスの足にそれを結び付けると同時に、もう一本のワイヤーでアクロスの右翼をぶった切ってしまう。ワイヤーと磁力の組み合わせで、さらにアクロスの落下速度は上がる。

「ぶった切られちまいな！捕食網！」
ブレデターネット

「!!」

そして、とどめと言わんばかりに、アクロスの落下地点に、ブギーポップオリジオンが蜘蛛の巣のようにワイヤーを広げる。あのワイヤーの威力は十分に理解している。変身しているといえど、突っ込んだらマズい。しかし、避けられない。

アクロスのあがきもむなしく、彼はなすすべなく、鋼鉄ワイヤーでできた蜘蛛の巣のど真ん中に突っ込んだ。

「せええええええい!!」

仮面ライダーソロモンに変身した転生者狩り——灰司は、怒りのままにイガリマオリジオン——バルジに斬りかかる。

しかし、彼の怒りを乗せた一撃は、イガリマオリジオンの大鎌に軽くないなされる。

「軽いね、軽い！君い、弱体化してないか？それともなんだ、主人公補正でも切れて、そ

れが実力だったりするのかな？どっちにしても、笑っちゃまくらいなんてことないねえ！ほらほらあ！」

「ふざけるなっ……テーマエは……生きてちやいけない人間だ……！絶対に俺が殺すんだ！」

いつもの飄々とした態度はどこへやら、ソロモンは激昂しながら何度もカラドボルグを振りかざす。当たれば即致命傷にもなりうるラスボスクラスの斬撃を、イガリマオリジオンは臆することなく、一つ一つ、冷静に対処してゆく。右からの一撃を受け流し、左からの一撃を弾き、上からの一撃を受け止めては押し返す。

スベックでは上回っているはずのソロモンは、怒りでその差を自ら縮めてしまっているのだ。ゆえに、イガリマオリジオンが優位に立てている。イガリマオリジオンもそれを理解しているからこそ、ソロモンの冷静さを一層奪うべく、盛んに挑発を繰り返すのだ。

そこに、半ば放置気味だったリザードンオリジオンとカメックスオリジオンが乱入してきた。そして、仲間を倒した転生者狩りに一矢報いようと、背後から飛び掛かる。

「俺達も加勢するぜ！こいつは許せねえ！兄貴のかたき討ちだ！」

「転生者狩り、覚悟おおおおおおおおおお！」

ガツンと、リザードンオリジオンとカメックスオリジオンのパンチが、ソロモンの後

頭部に直撃した。しかし、それが却って、ヒートアップしたソロモンの怒りをさらに上のレベルへと押し上げた。

「邪魔するな雑魚が！」

《オムニバスローディング！SOLOMON BREAK！》

ソロモンは苛立ち気味に、腰のドウムズドライバークルにセットされている、オムニフォースワンダーライドブックを一度閉じ、ベルト上部にあるスイッチ・ドウムズライドを1回押す。すると、カラドボルグの剣先から赤い衝撃波が解き放たれ、リザードンオリジオンとカメックスオリジオンを吹き飛ばした。

ソロモンは情けない悲鳴を上げてぶっ飛んでゆくチンピラ達に目もくれず、必殺技を発動し終えると、一目散にイガリマオリジオンに斬りかかってゆく。吹き飛ばされた二人は、悔しそうに歯ぎしりをしながら、その様子を見ていた。

「つ、つええええ……」

「くそお……俺達なんか眼中にないって感じだぜ……」

両者の実力差は圧倒的なもの。いくら馬鹿なチンピラ達であっても、2度もコテンパンにされてしまえば嫌でもそれが理解できてしまう。自分達の実力ではソロモンにはかなわない。ソロモンのスペックも、それを操る転生者狩り自体の実力も、隔絶されたものだ。ここで、ソロモンに挑むことがかなわないのならば、もうひとりの敵に彼らの

意識が向くのは、ある意味当然だったといえよう。

チンピラ達の視線は、ブレイドオリジオンと戦っているアクロスの方に向いていた。ちっぽけな意地を糧に、傷だらけの身体を引きずるようにして立ち上がり、アクロスの方へと歩いてゆく。

「あの知らねえ仮面ライダー殺せばいいじゃん」

「だな！あわよくばあの力を奪っちゃまおうぜ……！」

アクロスの方へと走ってゆくチンピラ達には目もくれず、ソロモンはイガリマオリジオンに斬りかかる。しかし、何度斬りかかっても、ソロモンの攻撃はイガリマオリジオンには届かない。ソロモンが振り下ろしたカラドボルグの刃を、イガリマオリジオンは素手で受け止める。ソロモンは力を込めて押し切ろうとするが、なぜかそれができない。

そんな彼を嘲笑うように、イガリマオリジオンが言う。彼は、本気で自分が悪くないと思っっているのだ。彼の言葉で、ソロモンの怒りがさらに燃え上がる。

「だからなんで責められなきやあならないんだ？ただ単に弱い世界が一つなくなっただけだってのに」

「俺の世界を侮辱するな！」

「俺たち転生者は一度死んだ身だ。理不尽にも一度目の生を奪われたんだ。だからさ、

何やってもいいじゃん。俺達を一度死なせた世界のことを省みる義理なんてないじゃん？てか世界をめちゃくちゃにする権利だつて俺達にはあるんだよ！俺達は正当な権利を以てこれをやつてんだよ！それを綺麗事ほざいてめちゃくちゃにする権利がてめえらなんかにあるわけねえだろうが！」

バキンと、音がした。

イガリマオリジオンが、カラドボルグの刃をへし折つたのだ。本来ならば、折れるはずのないもの。それを、奴はいとも簡単にやつてしまった。

「いい加減消えな！俺様を否定する奴は全員消えてもらわなきゃあいけねえなあ！」
「があああああああああつ！！」

下から斬り上げるかのような、大鎌の一撃。その一撃で、ワンダーライドブックが、切り裂かれた。力の源を失い、ソロモンは変身を維持できなくなり、その場に膝をつく。

砕け散るようにソロモンの姿が掻き消え、その下の素顔があらわになる。ダークライダーの仮面をかぶり続けた少年の素顔が、アクロスの眼前にさらされる。

「く、そ、が……！」

その光景は、満身創痍となったアクロスもしかと目にしていた。

「灰司……!! お前だったのか!!」

変身の解けたソロモンの中から現れたのは、無束灰司だった。アクロスの予想だにしない事実。それは、彼の冷静さを奪うには十分だった。

「よそ見している場合か！しぶといんだよねえ君は！」

「ぐっ……」

ブレイドオリジオンの一撃を受けた衝撃で、レジエンドリンクが解かれ、基本形態に戻ったアクロス。スーツのあちこちには、痛々しい傷跡ができており、随所から煙が上がっている。誰がどう見ても、限界だった。このままでは、アクロスのスーツが破損し、装着者である瞬間の生命が危ぶまれる。

その様子を見たボマーオリジオンは、今こそと判断し、アクロスから逃げようとする。「逃げるな！」

「何？俺様が律義にお前らと戦うと思ってるの？」

「くそっ！」

「させないよ、ライトニングスラッシュ！」

アクロスは慌ててボマーオリジオンを追おうと走り出すが、ブレイドオリジオンが割って入り、電撃を纏った剣の一突きで、アクロスの身体を地面へと押し戻す。焼けるような痛みが、アクロスの肺から空気を押し出そうとする。

そこに、逃げたはずのボマーオリジオンが馬乗りになる。

「逃げるのはフリだ！二度も邪魔されてよお、俺が怒らないとでも思ったかあ!! お前は邪魔だ！俺の目的を果たす前に爆死してもらうぜ！爆裂鎮魂歌！」
ハートレスシャウト

「っ……………」

ボマーオリジオンがそう叫ぶと、彼の両手が炎に包まれる。もはや、もがくだけの体力すら、アクロスにはなかった。

「起爆だあああああああああああああああああああ！」
炎の拳が、アクロスの眼前に迫る。

筈だった。

バチンという音があった。それと同時に、ボマーオリジオンの動きが止まっていた。

少し遅れて、ボマーオリジオンの左肩から硝煙が上がり始めた。誰かが撃ってきたのだ。しかし、痛みはない。オリジオンに変質した彼には、通常兵器など通用しないのだ。

から。事実、銃弾の当たった左肩からは、血の一滴も流れてはいなかった。

彼が動きを止めたのはダメージを受けたからではない。拳銃なんぞで転生者に挑もうとした命知らずの顔を見てやりたかつたからだ。アクロスも、ソロモンも、他のオリゾン達も、乱入者を凝視する。

それは、眼鏡をかけた、スーツ姿の男だった。ぱつと見は、少し怖い顔つきをしたサラリーマンのように見える。しかし、その手には拳銃が握られており、彼が一般人ではないことを如実に示していた。そして、その男のことをアクロスは知っている。なぜなら、アクロスは彼と既に会っているからだ。

「あんたは……!」

「デメエ……」

男の名は裁場整一。フリーの武偵だ。

彼は、戦場のど真ん中であるにもかかわらず、冷静沈着であった。まるで、こんな慣れっこだと言わんばかりに。そして、彼は灰司は姿を見て、一瞬驚いたような顔を見せるが、即座に表情を削ぎ落としてブレイドオリゾンの方を向き、口を開く。

「俺も混ぜてもらおうか」

「あ?なんだお前。やんのかゴラア!?」

「捻り潰されるのとすり潰されるの、どっちがいいか選ばせてやるぜえ?」

突如として現れた裁場に下品な罵声を浴びせるオリジオン達だったが、彼らの提示した選択肢は、そのどちらも選ばれる事はなかった。

彼が選んだのは、第3の選択。裁場は、躊躇いなくそれを選んだ。

「なら、お前たちを倒す」

裁場がそう言いながら掲げた手。その手には、アクロスにとって非常に馴染み深い、かつとんでもないものが握られていた。

何故なら、それは――

「クロスドライバー!??」　なんでアンタが……」

《UKNIGHT》

そう、彼が取り出したのは、アクロスが今身につけているモノと全く同じ、紛れもないクロスドライバー。鈍い光沢も、あの形状も、間違いなくクロスドライバーそのもの。見間違えるはずがない。

動揺するアクロスの目の前で、裁場は、紫色のライドアーツをドライバーに装填する。そして、胸元で両手を合わせて、

「変身!」

《CROSS OVER》

そう言って、ライドアーツの装填部をスライドさせ、横に倒した。

《正義の意志をフュージョライズ！不撓不屈のウォリアー！仮面ライダーユナイト！》

裁場の背後に、光り輝く渦が出現し、そこから装甲のようなものが渦の回転に沿って裁場の近くに飛来してくる。そして、盾のような形状をしたプレートが裁場の両肩に引付くと、それを皮切りに装甲が次々と裁場の全身に装着されてゆく。

肩には水晶のついたシールド状のアーマーが、背中には長槍を背負い、腰には銃の入ったホルスターがぶら下げられている。

その姿はまるで近代西洋の軍服を思わせる。

「貴様……何者だ？」

「俺の名は仮面ライダーユナイト。まさか、再びギフトメイカーとやり合うことになるとは思ってもみなかった」

腰のホルスターから銃を取り出し、銃口を構えながら、彼は告げる。

「お前ら、纏めて裁かれてみるか？」

P M 6 : 0 0

「ひひひひひひひひ！！」

「くっせー！」

唯と志村は、ガングニールオリジオンとレイラから必死に逃げていた。湖森とトモリは別方向に逃げてしまったため、2人がどうなっているのかはわからない。無事であつてほしいと願うしかない。

2人にあらがう術などない。圧倒的な実力差の前に、ただ逃げるしかなかった。

「アクロスの仲間……いや、何の力もないお荷物か。貴様ら個人に恨みはないが、バルジ様の命令だからな。死んでもらうぞ」

「冗談じゃない……まだ死ぬるか!」

「威勢だけは一丁前……くだらないな」

レイラに啖呵を切りながらも、逃げることにしかできない。その現実には、唯の心を着実に消耗させていた。

なぜ自分にはなにもできないのか。なぜこうして逃げることにしかできないのか。瞬にすべてを押し付けて情けなくはないのか。そんなことばかり考えてしまう。

「ぜえ……ぜえ……」

「志村!! 足遅くなっているけどお!!」

「無理無理無理無理! 体力尽きるううううううううううううううううううう!」

逃げることに数分。根っからのもやしっ子な志村の体力が、早くも尽きかけていた。息は絶え絶え、心臓はバクバク。顔もなんか形容のしがたいような凄まじい形相になり果

えないんだって！いつも蚊帳の外とかホントモヤモヤするんだよ！！？

——巻き込むのは構わないよ。でも、置いてけぼりは許さない。

ただ守られているだけの分際で、そんな言葉を吐く資格があるとでも？

置いていかれたくないと吠えているくせに、今の自分はただのお荷物でしかない。そんなんでは彼と一緒に居たいだって？遠くなるのが嫌だって？

今の瞬を形作る、最初の一押しは自分がやった癖に？

「私だって……………」

守られるだけの都合のいい幼馴染ヒロインに収まつてるんじゃない。突つ走つて、追い付いて、追い抜く。背中に居座る庇護者から、ともに同じ視点に立つ英雄ヒロインになつてみせろ。

そのほうが、諸星じぶん唯らしいではないか？

「私だってやってやるんだああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

自分の不甲斐なさへの怒りで我を忘れ、ただがむしやらに走り、 GANG ニールオリゾン の顔面目掛けて綺麗なフォームの跳び蹴りをぶち込んだ。

いくらフィジカル面で圧倒的に有利な GANG ニールオリゾン といえど、空中では踏ん張りようがない。唯の蹴りをもろに喰らった GANG ニール は、そのまま背中から地面に墜落し、潰れたカエルが如き苦悶の声を漏らした。

「瞬ばっかに押し付けてられるか……何が何でも隣に立つ」

ほんの些細な意地と、疎外感と、寂しさと、いろんな感情がごちゃ混ぜになったままの状態、唯は立ちふさがる。とにかく今は逃げない。どれほど無謀でもあがいてやる。多分、そのほうが性に合ってる。

レイラはそれが心底面白くなかったようで、手に持ったサーベルを投げようとする。

「ほう、友のために無謀にも我らに挑むか。身の程を知れ、凡人」

「駄目だ！逃げよう！」

「……っ！！」

唯が身体を動かすよりも速く、レイラの手からサーベルが放たれる。圧倒的に、絶望的に、間に合わない。

血飛沫が、生まれる。

聞こえたのは、血飛沫の音ではなかった。

ガキンツ!!! と、金属同士が激しく衝突する音であった。

ならばと、レイラはサーベルで斬りかかる。一体何者かは知らないが、邪魔をする以上敵でしかない。殺す理由はそれだけで充分だった。常人にはまず認識できない程の速さを誇る一閃。しかし、乱入者はその一撃を難なく剣で受け止めてしまった。

「何者だ、貴様は！」

「助けを求める声があった。だから来た」

凜と透き通るような、かつ、力強さも秘めた声が、そう口にした。それがさも当然であるかのような、超然とした気迫を、志村は第一に感じた。

そして彼女は、レイラのサーベルを彼方へと弾き飛ばすと、唯達の方を振り返って安否を確認する。

「怪我はないか？」

風になびく緑色のポニーテール。眼前の敵を鋭く見据える、強さとやさしさを併せ持った目付き。ビルの隙間から差し込む夕日を反射して輝く、荘厳な装飾の施された、ファンタジックかつどこかSFチックな銀色の鎧。左手に握られた、淡い紫色の光に包まれた片手剣。

その姿は、異世界より現れた一人の女騎士だった。

彼女の姿に、志村は息をするのを忘れるほどに、圧倒されていた。

「君は一体……」

「貴女、どこかで……」

そして、唯はその人物を知っている。

半月ほど前に、オリジオンに拉致された大鳳を救出したという、一人の騎士。「我々の邪魔をするとはどういう意味か知ってのことか？」

「知る必要がどこにある？ 私はただ、己の騎士道に従っただけに過ぎない」

レイラの脅しに臆することなく、騎士は名乗りを上げる。

異界の女神に従いし、その名を。

「ゲエムギョウ界一の護神騎士、セラ・フルルスローネ、参る！」

第26話 PM6：23／玩具の涙

回想3：喪失感

もう、幾ばくかしか思い出せない記憶があった。

「兄貴く今夜勉強教えてくれよ中間テスト近いんだって！」

「いいぜ？その代わりお前の小遣いから家庭教師代を支払ってもらうぜ？」

「ケチ！弟が落ちこぼれていいのか？」

「ははは、それは困る」

——弟と駄弁りながら家を出て。

「今回も学年1位……さっすが優等生！」

「次は絶対負けないから！あたしが一番だって証明してやるわ！」

「青春だねえ。うん、いいねえ」

「あんた教師だろ、放置してていいのかよ」

——学校に行けば仲間たちと楽しく過ごして。

「ねえ、いつになつたらあたしたちの仲を打ち明けるの?」

「いや……だつて面倒じゃん……」

「面倒とか言うんじゃないわよ!! あんたが及び腰だから、余計に公表しづらくなつて

んじゃない!」

「このまま秘密の関係、つてのもロマンティックじゃないか? お前、こういうの好きだろ」

「~~~~~!」

——甘酸っぱくて、それでいていつ終わりが来るかわからない、淡くて若い恋があつて。

「おかえりなさい、随分と遅かったね」

「あれ、親父もう帰つていたの?」

「聞いたぞ、学年1位だったんだつて? さつすが自慢の息子だ!」

「そりゃあね。次もとつてやるよ。他の奴には負けたくないしな」

「いいなあ、俺も兄貴みたいな頭脳があればなあ」

「そういうお前は随分とサッカー頑張っているじゃないか。人には得手不得手があるん

「だから、お前はそこでがんばればいいだろう？だからといって勉強を疎かにする言い訳にするのはなしだぞ？」

「は〜い……」

——家に帰れば心安らぐ、家族団欒があつて。

「おやすみ、また明日」

『ええ、おやすみ、憎たらしいあたしの彼氏様』

——多分だけど。

未来のことなんかよくわかんないけど。

「おやすみ、俺」

今日も明日も明々後日も、それなりの一日が始まつて、それなりの一日が終わる。

筈だったんだ——

「誰か……誰か返事をしてくれよ……」

少年がひとり、火の海を渡っていた。

帰るべき家はもうない。少し目を離れた隙に、瓦礫と灰の山になってしまった。出迎えてくれる家族はいない。父も母も弟も、みんなひとつに溶け合い、人間とは程遠い生

き物にされてしまった。

つい数時間前までは、普通の日常が営まれているはずだった。そして、これからもそれが続くはずだった。しかし、それはすべて奪われてしまった。こんなにもあつけない、それでいて完膚なきまで。少年を残して、世界はあつという間に滅びたのだ。

「アア、ハイジクンジャナイ。アア、オトウサンハパイナツプルトイツシヨニレイゾウコデベンキョウチュウヨ？ オフロワイタカラサクニユウシナサイ。エエ、ママノバカ！」
「黙っていてくれ……お願いだから喋らないでくれ……」

30人ぐらいの人間が一つに融合したゲル状の肉塊を、少年はそばに落ちていたバツトで鬱陶しそうに何度も殴打する。殴るたびに、目玉がボロボロと落ちるし、耳が分裂する。少年以外の生き物は、皆こうなてしまった。今や、まともな生き物の形をしていないのは、この世界には彼一人しかない。

「オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ。オヤスミ、アタシノカレシサマ——」

彼の腕の中に抱えられた肉塊からは、壊れたオルゴールのように、繰り返す、そう発せられている。恥ずかしくて打ち明けられなかったけど、将来をぼんやりと誓い合った仲だったのに。今胸の中にいる彼女は、目も耳も髪も手も足も全部一緒ににされ、うねうねと地面を這いずることしかできない獣と化してしまった。

PM 5:52

アクロス以外に現れた、クロスドライバーを持つ者。その存在に、戦々恐々するもの、戸惑いを隠せない者。各々が、思い思いの反応を示していた。

「ユナイト……だと……？」

灰司は、忌々しそうにユナイト——裁場誠一を見つめていた。

一方バルジは、裁場のことを知っていたのか、旧友に会ったかのようなリアクションを見せる。

「久しぶりだなあ！まさかまだこの界限にいるとは思わなかったぜ！」

「バルジか。お前も懲りない奴だ……次はこの世界を壊すのか？」

「おいおい、俺様は好きで壊しているわけじゃあない。俺様の趣味に耐え切れない軟弱な世界の方がわるいのさ！」

バルジ——イガリマオリジオンは、ユナイトの発言を鼻で笑う。それを聞いて、ユナイトは心底軽蔑し切ったような声で、糾弾を続ける。コイツには何を言っても響かないけど、それでも、言わずにはいられなかった。

「これまでもそうやって正当化してきたんだ。だが、それもここまでだ。お前を何とんでも止める」

「笑わせるなよ。俺を取り逃がした挙句転生者狩りも辞めた癖して、何今更俺の目の前

に現れてんの？馬鹿なの？死ぬの？」

「ああ、何度だつて現れてやるさ。お前らのような奴がいる限り、俺は何度だつて立ち上がる」

その声には、強い意志があつた。たとえどんな困難な道のりだろうと乗り越えてしまふような、そんな氣迫を、アクロスはユナイトに感じていた。

そこで、話の流れをぶつた切るように、空氣を読まない罵声が飛び込んできた。リザードンオリジオンとカメックスオリジオンだ。彼らは話の内容は全く理解できていなかったが、ただ一つ分かったことがある。そこにいる第三者は自分たちの敵だということだ。彼らからすれば、ユナイトの方が戦いに割り込んできた空氣の読めない糞野郎という認識だつた。そしてそれは、その属性は、チンピラが怒るにはちよいどいいものであつた。

「しゃらくせえ！ユナイトだつたろうがユニオンだつたろうが知つた事か！俺達の天下を邪魔する奴は誰だろうとぶちのめす！」

「木花兄貴の仇を取らせてもらう！仮面ライダー、ぶつ殺してやらあああああああああああつ！」

「馬鹿つ、むやみに突つ込むんじゃあないつ！」

ブレイドオリジオンの静止を振り切り、リザードンオリジオンとカメックスオリジオ

ンが、ユナイトに向かって突撃してゆく。ユナイトは、泰然自若とした様子で、それを待ち構える。

「ふん」

「あぐっ!!」

ユナイトは、自らの元へと急接近してきたカメックスオリジオンを、すれ違いざまに投げ飛ばした。少なくとも、アクロスの目にはそう見えた。

投げられたカメックスオリジオンは、訳が分からないうった様子の顔を見せながら、地面に叩きつけられる。そこに、ユナイトの蹴りが舞い込んでくる。道端の小石を蹴とばすかのような感覚で、地面に倒れたカメックスオリジオンが蹴とばされる。

仲間をコケにされたりザードンオリジオンは、怒りのままに、身体に炎を纏いながら翼で滑空してくる。

「テメエツ！俺のダチをコケにすんじやあねえ！」

「君たちの友情は大したものだ、しかし……」

《フュージョンマグナム！》

「進むべき道を大きく踏み外したな。友が道を誤った時は正してやるのも、友の責務ではないのか？」

ユナイトは臆することなく、手に持った銃でザードンオリジオンの翼を撃ちぬい

た。震え上がるほど、正確な一発だった。翼を撃ちぬかれたリザードンオリジオンは、バランスを崩して腹から地面に落下する。ユナイトは、墜落したりザードンオリジオンに続けて発砲する。

アクロスと灰司には、その光景をただ見ているだけしかできなかった。あまりにもレベルが違い過ぎるのだ。

「動きに無駄がない……」

「……………」

「クソがつ……俺を……馬鹿にするなああああ！」

地面に転がっていたカメックスオリジオンが、背中の砲門から高压水流を解き放った。ダメージはないかもしれないが、足止めとしては充分すぎる性能だ。しかし、ユナイトはそれを華麗に飛んで回避し、おまけとして真上からフュージョンマグナムによる射撃をカメックスオリジオンに撃ち込んでゆく。

「いてえ……いい加減に……しろよおおおっ！」

カメックスオリジオンは怒りをばねに起き上がり、着地したばかりのユナイト相手にタックルを仕掛ける。だが、その直線的でわかりやすい攻撃が当たるはずもなく、軽くユナイトに避けられた挙句、お返しといわんばかりに、すれ違いざまに脇腹に鋭い手刀を食らい、カメックスオリジオンはその場にうずくまってしまう。

そこに、ユナイトからの無情な死刑宣告が下される。リザードンオリジオンは銃撃のダメージでまだ動けない。なぜか、ギフトメイカーの面々もボマーオリジオンも助けに入らない。理由は単純明快、彼はユナイトの実力を測る被検体にされたのだ。馬鹿なカメックスオリジオンは、ここに来てようやくそれを理解した。しかし、それはあまりにも遅すぎた。

「トドメだ、この一撃でお前を倒す！」

《UNION PUNISH!》

ユナイトがフュージョンマグナムの引き金を引くと、紫色の光弾が発射される。リザードンオリジオンは素早く飛んで躲すが、鈍重なカメックスオリジオンは回避が間に合わず、光弾が着弾する。

すると、大柄なカメックスオリジオンの身体が浮き上がり、地上3〜4m辺りの位置に固定される。カメックスオリジオンはジタバタともがくが、その身体はその場に固定されたまま、動くことはできない。

「か、身体が浮いて……!」

「水亀え!?」

狼狽えるオリジオン達を見据え、ユナイトは飛び上がる。そして、空中で右足を前に突き出し、跳び蹴りの体勢になる。

そして、それに応えるかのように突風が発生したかと思えば、狼狽えるカメックスオリジオンが、突如としてユナイトの方に引き寄せられるように移動し始めた。

風の終点は、ユナイトの右足の裏。これは竜巻なのだ。ユナイトの右足に吹き寄せられた旋風は、やがて、赤と紫の竜巻へと変化してゆく。

——引き寄せられている。そう気付いた時には、カメックスオリジオンのすぐ近くにまで、ユナイトの足が迫っていた。

「や、ヤメロオ！俺はこんな所で終わりたくないんだ！俺は最強n」

「裁かれろ！」

みつともなく泣き喚くカメックスオリジオンの声をぶった斬るようにユナイトがそう言うと同時に、赤と紫の竜巻を纏ったユナイトのキックが、カメックスオリジオンを貫いた。

「なああああああああああああああああああああああああああああつ!!？」

カメックスオリジオンは、断末魔をあげながら爆発した。アクロスは、爆発で発生した衝撃を踏ん張るので精一杯だった。

そしてユナイトは、爆風の中を貫くように飛び出して着地する。そこからやや遅れて、カメックスオリジオンに変身していたチンピラ・水亀が地面に墜落する。完全なる

勝利が、そこにはあった。

木花に続いて水亀も失つたりザードンオリジオン——火吹は、仮面ライダー達に怒りをあらわにする。

「ああ……くそ！よくも2人をやりやがったな！絶対許さねえ！」

「仲間の為に怒れる点は評価する。だが、何故その気持ちも他者に向けられなかった？そこに君が転生者狩りに目をつけられた理由があるんじゃないのか？」

「黙れ！俺達転生者は特別なんだよ！お前ら現地の雑魚共とは違う！選ばれた主人公なんだよ！」

まただ。アクロスは、このような主張を何度も聞かされてきた。他人を傷つけておきながら、それを悪と思わずに正当化する。そんな悪魔じみた主張にはうんざりしていた。

——やめてくれ、それ以上言うな。さもなければ、怒りで我を失ってしまう。だから、そんなみつともない事をほざかないでくれ。

無意識のうちに、アクロスの拳は震えていた。

その時だった。

「やめやめ、帰るよ」

ヒートアップするリザードンオリジオンを嗜めたのは、ブギーポップオリジオンで

あった。彼女は、ワイヤーを伸ばしてリザードンオリジオンを無理やり拘束すると、引きずるようにしてその場を離れようとする。

「いい加減力量差を理解したらどうだい？ お仲間2人やられてるんだよ？ 君も倒されたくないじゃん？」

「俺は負けねえ！俺はああ！」

「黙れ」

「うっ……」

なおも吠えるリザードンオリジオンに苛立ちを覚えたブレイドオリジオンが、リザードンオリジオンに腹パンを1発食らわせる。すると、クリティカルヒットしたのか、1発喰らっただけでリザードンオリジオンは変身が解け、気を失ってその場に崩れ落ちてしまった。ギフトメイカーの面々も、それぞれ変身を解くと、先ほどまでの敵意はどこへやら、何もかも終わったかのように、その場を離れだす。

オリジオンとしての姿を解いたバルジは、倒れている灰司の元へとつかつかと歩み寄ると、髪の毛を掴んで灰司の頭を持ち上げ、その顔面に唾を吐く。

「お前も、復讐なんて非生産的な行為なんかやめて、好きなように生きればいいのさ。それができないからお前はゴミなんだよ」

「デメエ……何様のつもりだ……！」

「バルジ様のもりだぜ！まあなんだ、次はもつと俺の玩具らしく、面白可笑しくなっていてくれや。それじゃあな！今日の戦いはクソつまんなかったぜ！」

そう言つて、灰司の頭を地面に叩きつけると、一発蹴りを入れてからその場を後にしていった。そこにあつたのは、強者と敗者という、単純明快にして絶対的な差だつた。

バルジたちに続いて、ボマーオリジオンも逃げようとする。

「俺も貴様らに付き合っている暇はない……もうすぐなんだ。もうすぐ会えるんだ……！」

「待てっ……く……く……！」

逃げようとするボマーオリジオンを追いかけようとするアクロスだが、全身に走つた痛みで足が止まり、それは叶わなくなる。その場に膝をついたアクロスに目もくれず、ボマーオリジオンはどこかへといつてしまった。

あとに残されたのは、アクロスとユナイト、そして灰司の3人だけであつた。

「……」

アクロスとユナイトは、互いに向き合いながらベルトを外す。ベルトが外れると、アクロスとユナイトの姿はテレビの砂嵐のようなシルエツトとなりながら消失し、変身が解除される。

変身を解いた瞬間の顔を見て、裁場は驚きながらも、どこか納得したような表情をみせ

る。

「君、だったのか」

「あんた、仮面ライダーだったのか……」

瞬は驚きのあまり、そこから先の言葉が出てこない。それは裁場も同じだったのだろう。話を逸らすかのように、彼は目線を逸らす。その先には、満身創痍の身体を無理やり立ち上がらせている灰司の姿があった。

裁場は、覚悟を決めるかのようにごくりと唾をのみ、灰司に話しかける。

「久しぶりだな、灰司」

「っ……今更どの面下げて……っ！」

「やはり、君はその道に進んだんだな。あの日、世界を失ったその日から」

互いに面識のあるような物言いだ。瞬のあずかり知らぬところで、彼らは面識があるのだろうか？ 灰司は、いつもの態度からは想像もつかないような、ひどく取り乱したような態度で、裁場を強く拒絶する。

「なんなんだよ！ 今更ヒーロー面して俺の前に現れんなよ！」

「分かっている。俺が間に合っていれば、バルジを取り逃がしていなければ、君の世界は滅ぼされずに済んだ」

「だから転生者狩りをやめたってのか？？」 そして力を手に入れたから、今になって

やって来たつてののか!!? なにもかも遅いんだよ!」

「ちよちよちよちよいとまで!全然話についていけねえんだけど!! とととにかくお前ら落ち着けてーの!」

灰司は、満身創痍の自身の身体のことを気にもかけずに、胸倉をつかんで裁場に殴りかかろうとする。だんだんヒートアップしてきた2人を落ち着かせるべく、瞬が半ば強引に話に割り込んだ。その行為が、結果的に2人を多少なりとも落ち着かせることとなった。

「……………すまない」

「……………チツ」

灰司は舌打ちをしながら、裁場から手を離し、近くのベンチに腰を下ろす。

「というか……………お前が転生者狩りだったのか?」

「……………」

「その沈黙はYESととつていいんだな?じゃあ、バルジに世界を滅ぼされたつてのは……………」

デリケートな質問だから、簡単には答えてくれないだろうと思いつつも、一応聞いてみた。そうしなければ気が済まなかった。だが、瞬の予想に反して、灰司はあっさりとは返答してくれた。おそらく、瞬の目の前であそこまで敵意むき出しにしていた以上、

もう隠す必要もないと踏んだのだろう。

「俺はこの世界の人間じゃない。他の世界で生まれ、転生者狩りとしてこの世界に送り込まれてきた」

異世界人だと。灰司はそう言ったのだ。そういえば、以前ファイフティが異世界についてあれこれ話をしていたが、あれは本当だったのだ。あの時は半信半疑だったが、こうして異世界人を目の当たりにすると、信じるほかなくなってしまう。

驚いている瞬の様子が馬鹿らしくったのか、灰司は吐き捨てるように言う。

「何驚いてやがる。転生者がいるんだから、異世界人だつているだろ。転生して別世界に来ているか、転生せずに来ているか、その程度の違いしかねえつての」

「それも……そうか……」

そう言われると、納得せざるを得なかった。

だが、瞬の疑問はそれだけではなかった。

「そもそも転生者狩りつてなんなんだよ？なんで転生者と戦うんだ？」

そうだ。これまで、オリジオンやギフトメイカーが転生者狩りと呼ぶから、瞬も何となく便乗して灰司のことをそう呼んでいたのだが、そもそも転生者狩りとは何なのか、瞬にはわからない。その疑問に答えたのは、裁場だった。

「転生者狩りというのは、転生者のあいだの通称……いや、蔑称に近い。正しくは、

Alliance to Maintain the Order of Reincarnations
転生者秩序維持同盟——通称AMORE^{アモレ}。実際には、

悪さをする転生者をとらえる、警察組織みたいなものだ」

「え、殺さないのか？」

「ギフトメイカーの連中みたいに、よほどの凶悪転生者でない限りは逮捕という形をとっている。そんなに血なまぐさい組織じゃあないんだ、あそこはな」

それは裏を返すと、ギフトメイカーは殺害命令が出ているほどに危険な奴らであるということだ。奴らは、それほどまでの危険人物だったのだ。そんな奴らを、瞬は相手にしているのだ。そりゃあ一筋縄ではいかないわけだ。

裁場の説明を聞き、へえ、と相槌を打つ瞬。すると、

「もういいだろ、この馬鹿にレクチャーしている場合じゃない。俺はやらなければならぬんだ。どけよ」

ずっと地面に腰を下ろしていた灰司が、話の腰を折った瞬に毒づきながら立ち上がり、瞬と裁場を押し分けつつその場から立ち去ろうとした。おぼつかない足取りで進む彼を心配して、瞬が声をかけようとするも、灰司は鬱陶しそうに瞬を押しつけて進んでゆく。

そこへ、灰司の行く手を阻むようにして、裁場が立ちはだかる。灰司は強引に押し分けようとするが、裁場は動かない。

「……どけよ」

「悪いがそれはできない」

「どけって言ってんだろうが！」

「できないと言っている！」

お互いに譲ることなく、大声で怒鳴り散らす。

しばらく沈黙が流れた後、裁場が口を開いた。

「……君はバルジに復讐したがっている。その気持ちは分かる。だが、それを成してしまえば君はどうなる？」

「……ええ？」

裁場の問いかけの意味が、瞬には理解できなかつた。

眉をひそめる瞬を放っておいて、裁場は続ける。

「今の君からは、バルジへの復讐心以外のものが感じられない。ひよつとして、復讐が完遂できるならば、死んでも構わないと思っっているんじゃないのか？復讐が終わった後の未来なんて眼中にないんじゃないのか？」

「え、それって……」

瞬が何か言おうとする前に、それを遮るように、裁場はこう言った。

「復讐が終わったら死ぬ気なんだろ、君は」

しばらくの間、あたりに充満していた沈黙を最初に破ったのは、瞬だった。

「な……嘘だろ……？」

「……………」

灰司は何も言わない。裁場も沈黙を保っている。

瞬は、そんなわけがないと、裁場の言葉を否定するかのようになり、そうであってほしいと願うかのように、ベンチに座って俯いている灰司の方を見る。彼は無言を貫いている。崩れかけた噴水から流れる水の音だけが、しばらくの間流れていた。

——本当は、瞬もわかっている。この沈黙は、肯定の意であると。

しばらくたって、灰司が口を開いた。

「何驚いてるんだよ」

「え、だって……」

「俺はすべてを失った。家族も友も、故郷も、なにもかもだ！お前は耐えられるのか？何もかもを失い、自分の命一つだけが残された孤独に！生き残ってしまったこの苦しみが分かる訳ねえだろ！」

「……………サバイバーズ・ギルドか」

生き残った罪悪感^{サバイバース・ギルド}。大規模な災害や事故から生き残った者が抱く、自分だけが助かったことや、他者を助けられなかったことに対する自責の感情。それは、生きる気力を奪うには充分すぎるほど苦しくて、ただの温室育ちの逢瀬^{ヒトリ}瞬には決して祓えぬほどに、途方もなく深い闇。

80億人の屍の上に立っている灰司。その闇は尋常じやない程に、彼を蝕んでいるのだ。灰司は俯いたまま、瞬の反論を事前に封殺するように吐き捨てる。

「生きてりやいいことあるって言いたいのか？なら無神経甚だしそ。どうしようもない死にたがりだつてこの世にはいるんだ」

「……………」

——どうすればいいのだ？

瞬としても、バルジ達ギフトメイカーのやっていることは見過ごせない。灰司の復讐心も理解できる。だけど、何もかもを失った彼にとつては、自分からすべてを奪ったバルジに対する復讐心しか残ってはいないのだ。そしてそれを取り去ってしまったら、彼はどうなる？瞬がバルジを倒すにしろ、灰司が復讐を果たすにしろ、どの道灰司の未来はないのだ。そしてそれを、ただ黙って見ていていいのか？

しかし、瞬には何もできることはない。瞬にはどう転んでも、灰司を死へと追いやることしかできない。なにより本人がそれを望んでいるのだ。いくら手を差し伸べたと

ここで、本人がそれを拒否するのだからどうしようもない。

「今のきみは、バルジへの復讐心で無理矢理希死念慮を抑え込んでいるに過ぎない。だから、バルジへの復讐が果たせない状況に陥った時点で、きみはその命を燃やし尽くしてしまおう」

「だつたらなんだ。まさか、俺を止めるとか言い出すんじゃないだろうな」

「君をここまで追い込んだのは俺の責任だ。君の復讐の終わりを人生の終点にはさせやしない。それが俺にできる償いだ」

「じゃあ止めてみるよ。目の前のガキ人救えやしなかった、テメエの正義とやらで！」
灰司はそう叫びながら、掌サイズの黒いカードデツキを取り出し、裁場に見せつけるように掲げる。すると、どこからかバツクルのようなものが出現し、ひとりでに灰司の腰に装着される。そして、灰司はバツクルにカードデツキを挿入する。

裁場も、再びクロスドライバーを装着し、ユナイトライドアーツをバツクルに装填し、ユナイトに変身する。

「変身！」

《CROSS OVER!正義の意志をフュージョライズ!不撓不屈のウォリアー!仮面ライダーユナイト!》

すると、裁場がユナイトに変身すると同時に、幾つものシルエットが回転しながら灰

司に重なってゆき、彼の身体にアーマーを装着させてゆく。そうして、黒い甲冑の戦士——リユウガに変身した灰司は、近くに停めてあった誰かのバイクに近づいていく。そして、バイクのサイドミラーに、吸い込まれる様にして消えていった。

「か、鏡の中に入った!?」

驚いた瞬間がサイドミラーを覗き込むと、そこには、鏡の向こう側から此方を凝視するリユウガの姿があった。しかし、後ろを振り返れども、そこにあるはずのリユウガの姿はない。本当に鏡の中に入ってしまったのだ。

鏡の中にいるリユウガは、向こうから裁場を挑発する。こっちの土俵に上られるもんなら上がってみやがれと、そう言っていた。

「来いよ」

「そうか……なら、君の土俵に乗ってやる」

「え」

ユナイトはそう言うと、腰のホルダーから、一つのライドアーツを取り出し、バックルに装填した。

《LEGEND LINK! If you don't fight, you can't survive! 龍騎イ!》

すると、赤い蛇龍が何処からか飛んできて、ユナイトの身体に纏わりつくようにして

合体してゆく。そして、赤い鎧に身を包んだ竜騎士へと姿を変えた。瞬は知る由もないが、これが、仮面ライダーユナイト・リンク龍騎である。

レジェンドリンクを終えたユナイトは、一度だけ瞬の方をちらりと見ると、リュウガと同じように鏡の中へと吸い込まれるようにして消えていった。

「え、ちよ、おいっ!」

瞬は鏡越しに、相対するユナイトとリュウガに呼び掛けるが、その声は2人には届かない。

「俺は君を止める。君を死なせるわけにはいかない!」

「煩えんだよ……俺の邪魔をするってんなら、アンタだろうと殺す!」

リュウガの怒りに呼応するかのようになり、黒龍——ドラグブラッカーが空の果てから飛翔し、リュウガの周囲を旋回し始める。リュウガは、それを横目に、バックルのカードデッキから一枚のカードを取り出し、左腕に着けている龍召機甲ブラックドラグバイザーに読み込ませる。

《STRIKVENT》

すると、その音声と共に、リュウガの右腕にドラグブラッカーの頭部を模した手甲・ドラグクローが出現する。負けじとユナイトは、左腕に備わった、ドラゴンの頭部を模したアームキャノン突き出す。おして。

「はあああああつ！」

ユナイトはアームキャノンから、リユウガはドラグクローから、それぞれが灼熱の炎を放った。赤と青の炎は空中で激しくぶつかり合い、空を斬るかのような大爆発を引き起こす。

「うわっ!!」

そしてその衝撃は、鏡伝に瞬の居る現実世界へと伝播した。鏡越しに一部始終を見ていた瞬は、発生した衝撃で、戦鬪の余波でボロボロになった噴水に頭から突っ込んでしまふ形で吹き飛ばされてしまふ。

「つてえ……そうだ！2人は!!」

慌ててバイクのミラーを見ようとすが、先ほどの衝撃でバイクは倒れ、サイドミラーは粉々につ砕けていた。これではどうなっているのか見ることができやしない。

割れた鏡の向こう側から、2人が戦う音が聞こえる。そしてそれは、瞬には止めることができない戦い。どうしようもなくなつて、横倒しになつたバイクの前で膝をつく瞬。そこに、幾つもの足音がこちらに近づいてくるのが聞こえてきた。

「ここに居た！」

「大丈夫?! なんとも……ないとは言えなさそうね……」

「おーい！瞬、なんだ今の衝撃は……」

「瞬さくん！このあたり、すっごく惨状ですけど、なにかあったんですか？」

山風は大鳳、アラタにハル。分かれて灰司を探しに行っていた面々と合流した。彼らの後ろからは、見知らぬ男子高校生と幼女、背の高い青年が歩いてきている。

「何よこの荒れよう……まるで激しい戦いがあったみたいね……」

「まるで何かが爆発したような……まさか、ここでも爆弾魔が犯行を？」

「爆弾魔……テレビで聞いていたあれか？こうして目の当たりにすると、聞いてた以上にやばそうだな……」

彼らはいったい何者なのかと聞こうとしたが、その時、急に瞬の身体のあちこちにできた傷が痛みだし、発声が阻害される。それを見た大鳳が、心配そうに駆け寄ってくる。「すごい傷だらけじゃない……またギフトメイカーと戦ったのよね？唯達は？灰司は見つかったの？」

「……ああ、そうだ！唯は!! 湖森は!!」

大鳳の言葉で、瞬は思い出した。そうだ、唯達は GANG ニールオリジオンとレイラに襲われていた筈。瞬も助けたかったのだが、戦いでそれどころじゃなかったし、灰司や裁場に関するあれこれが衝撃的すぎて思いつきり失念していた。一体あれからどうなったのだろうか？慌てて立ち上がり、駆け出そうとする瞬だが、その時、身体中の傷が一斉に痛みだし、瞬の足を止めてしまった。

再びその場に膝をつく瞬。今すぐにも走り出したいが、傷を負った身体がそれを許してはくれない。行かなくてはならない。手を伸ばさなくてはならない。だけど、できない。アラタが瞬に肩を貸し、ハルも瞬に寄り添う。

「唯……湖森……」

「無理せず少し休みましょう。多分……無事ですから……」

「根拠は？」

「勘」

「ええ……」

ハルのその言葉に呆れるアラタだったが、同時に、そうであってほしいと願わずにはいられなかった。

PM5：56

ガングニールオリジオンとレイラに追われていた唯と志村。そこに現れたのは、以前大鳳を助けた謎の少女騎士・セラであった。

「騎士、か。騎士、ねえ」

「なんだ」

「私は騎士が何よりも嫌いなんだ。蜂の巣と剣山、どっちがお好みかな？」

レイラは、片手にサーベル、片手にライフルを持ちながら尋ねる。まるで「寿司とハンバーグ、何方が好き？」と訊くかのように。それくらいの感覚で尋ねていた。そして、その目は笑っていないかった。

ガングニールオリジオンは、レイラの背後で低い唸り声を上げながら此方を凝視している。その姿は、さながら犬のようにも感じられた。

「どちらもノーサンキューだ。お前のような奴からの質問など、答えるだけ無駄と相場が決まっている」

「死にたいんだな。ならばお望み通り、お前を蜂の巣にしてから剣山にしてやるよー」
「2人とも伏せろー！」

セラに言われるがまま、唯と志村はその場に伏せる。すると、先ほどまで彼女たちの頭があつた位置を、ライフルの銃弾が飛んでいった。レイラが発砲したのだ。撃たれた弾丸は誰にも当たることなく、遠くにあつた自販機に銃痕を残してゆく。

「ひいひいっ!!」

「ここは私が何とかする、だからお前らはここから早く逃げるんだ！」

「あ、貴女はどうするの?! 戦う気?!」

「無論だ!」

唯の言葉にそう返しながら、セラはレイラの投げたサーベルを剣で弾き飛ばす。弾か

れた剣はくるくると回りながら宙を舞い、ガングニールオリジオンの背後の地面に突き刺さる。

「やるぞガングニール！この邪魔者を我々の手で始末するのだ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

レイラの命令を受けて、ガングニールオリジオンがセラに飛び掛かる。ガングニールオリジオンは、空中で右足をセラの方に突き出し、跳び蹴りの体勢になる。すると、ガングニールオリジオンの踵から鋭い突起のようなものが出現する。あれでセラを蹴り抜く算段だ。

しかし、セラは冷静に剣を構える。

「必剣・流星返し！」
メテオカウンター

セラの剣の刀身が、激しく紫色に発光しだした。そしてセラは、ガングニールオリジオンの跳び蹴りに対し、剣で迎撃する。

鏑迫り合いじみたことは怒らなかつた。セラの剣とガングニールオリジオンの右足が触れた瞬間、ガングニールオリジオンの身体ははるか後方へと吹っ飛ばされていた。たった一瞬、目にも見えない速度で振り上げられた剣が、彼(?)の身体を押し返したのだ。唯と志村には、何が起こっているのか理解できなかつたが、レイラは忌々しそうにセラを睨みつけながら、

「小癩な……なら次はこれだっ！」

「銃弾如き、全部打ち払って見せよう！」

虚空から2丁のサブマシンガンを取り出し、迷うことなくその引き金を引く。普通の人間なら容易く蜂の巣になるような速度で降り注ぐ、横殴りの銃弾の雨。唯と志村は慌てて射線上から身を引くが、セラは、自身に向かつて降り注ぐ銃弾の雨を、すべて一本の剣で弾き出した。

「うわわわわわわわわわわわわわっ!!」

「相変わらず容赦ないっ！」

銃弾の雨から逃れながら、唯はセラの方を見る。彼女は全く被弾していない。身に纏っている鎧には銃痕の一つもついてはいないどころか、彼女の足元には、バラバラになった銃弾が次々と落ちてきている。本当に、彼女は銃弾をすべて斬り伏せてしまっているのだ。一体、どんな風に経験を積めば、あの領域にたどり着くのか、唯には想像もつかなかった。

セラの力量を息を呑むようにして見守っていた唯。志村は、そんなことしている場合じゃないと言うかのように、彼女の肩をたたく。

「あ、あの人に任せて逃げようよお！ここにいたら命がいくつあっても足りないんだけ

どお!!」

「でも……」

志村の言っている通り、今逃げなければ、セラの救援が無駄に終わってしまう。そんなことはわかっている。しかし唯は、どうしてもセラを放ってはおけなかった。

——また逃げるのか？自ら遠ざかるのか？

——追いつきたい、隣に立ちたいと願ったそれは？偽りだったのか？

「……………」

「どうしたんだよ唯ちゃん!! 今立ち止まったらまずいつて! ホント死ぬから! 逢瀬くんもアラタくんも、みんな悲しむって! 唯ちゃん!」

志村が必死の形相で叫ぶが、今の唯には全く届いてはいない。

——隣に立つためには、どうしたらいい？

「なら次はこれだ!」

そう言うと、レイラはサブマシンガンをその場に放り捨て、虚空からロケットランチャーを取り出した。まるでギャグかと言わんばかりの光景だったが、笑っていられる状況ではない。レイラは、肩に担いだそれを、セラめがけて発射した。大きな発射口から放たれるのは、4発のミサイル。自動車の2〜3台は軽くスクラップにできてしまうほどの威力を持ったそれが、一人の騎士と2人の一般人めがけて発射された。

セラは今度も斬り落とそうと剣を構えるが、そこで、唯と志村が未だに逃げていない

ことに気づいた。当然ながら、彼女は焦る。これでは、自分がここに来た意味がなくなってしまう。いくらセラでも、ミサイルを爆発させずに処理するのは不可能。この距離でミサイルを斬り伏せれば、唯達は十中八九爆発に巻き込まれる。

「お前たち、何をしている!! 早く逃げろ!」

「ほら、騎士さんもそう言ってるし、早く!」

志村が必死の形相で、唯の手を引っ張る。しかし唯は、この状況に似つかわしくない、虚ろな表情をしている。

(私は何を望めばいい? 隣の隣に居続けるためには、何が必要?)

守られているばかりの自分は嫌だ。置いていかれるだけの自分は嫌だ。安全圏で見ているだけの自分は嫌だ。だけどそこから踏み出すための力がない。非力である限り、唯は現状から抜け出せない。いつまでも幼馴染みに守られ続けるだけの、人の形をしたお荷物。

じゃあもう一度、今一度、自分の心に問いかけてみようじゃないか。ここから飛び出すには何が必要で、何をすべきだと思う?

その答えは、はじめからわかりきっていた。

——単純明快。

——戦える力を望めばいい。立ち向かえる術を手に入れば全て解決じゃあないか。

「くそっ！間に合わないっ！」

セラの剣が、一発目のミサイルと触れ合う。セラはなんとかミサイルを破壊しまいと、必死に押し堪える。しかし、そんな彼女の行為を無に帰すかのように、彼女の頭上を残り3発のミサイルが通過してゆく。標的はもちろん志村と唯。

「も、もうだめだああああああああああああああっ！」

唯の手を引つ張りながら、志村が泣き叫ぶ。

ああ、もう駄目だ。次の瞬間には「志村優始ここに眠る」と書かれた墓石の下で永眠することになるだろう。短い人生だった、悔いしかない。

そう諦めて、志村は目を閉じる。

しかし、いつまでたっても爆発と熱風は志村を焼き尽くすことはなかった。

「……………？」

覚悟していた苦痛がいつまでもやっつてこないことを怪訝に思った志村は、恐る恐る目を開ける。

「え……………」

最初に目に入ったのは、暖かな光だった。それはまるで、春の麗らかな日差しのように、志村と唯を包み込んでいる。そして、その発生源は――

「……………ゆい、ちゃん？」

「……………」

唯だ。彼女がかざした手のひらを起点に、2人を包み込むようにして、ドーム状に広がっている。これはバリアだ。ミサイルから2人を守るためだけに生み出された障壁。光の正体はそれだった。

恐る恐る、志村は唯の顔を覗き込む。普段の彼女からは想像もつかない、人智の範疇を大きく外れたような、何も読み取ることのできない、形容しがたい表情だった。ただ、緑色に発光する彼女の虹彩に、志村は底知れぬ不気味さを感じ取っていた。

その異様な光景に、この場にいた全員が圧倒されていた。一瞬で、この場の主導権が切り替わっていくのが目に見えて分かる。今ここは、彼女の独壇場であると。

「な、ん、だ……………」

これにはセラもレイラも、ガングニールオリジオンも、驚きを隠せなかった。

誰もが困惑する中、唯はバリアを解除すると、悠然とした態度でレイラへと近づいてゆく。

「き、貴様はなんだ!! 貴様はただの人間のはず! どうして、どうやってこんなことを

……」

「驚くことはないはずだ。貴様らはこれを知っているはずだろうか？」

唯は、レイラとセラに向かってそう言う。しかし、彼女たちは内容自体よりも、彼女から発せられる、あまりにも冷ややかな声にぞつとしていた。今日の前にいる少女は、ほんとうに諸星唯なのだろうか？まるで彼女の姿を借りて、なにか高次元的存在が顕現したと言われた方がまだ納得がいく。それに、「これを知っているはず」とは、どういうことなのだ？必死に考えても、2人には心当たりがない。

「■■■■、■■■■の名のもとに命ずる」

取り乱すレイラの顔に手をかざすと、唯はそう告げる。なんらかの単語を発したはずなのだが、なぜかノイズが走ったかのように聞き取れない。

唯は、レイラに向かって、こう言った。

「己を取り戻すがいい、異邦の旅人よ」

瞬間、レイラの頭にとつともない衝撃が走った。

(?!)

まるで頭を直接シェイクされているかのような衝撃が迫る。あまりのショックに思わず吐き出しそうになるが、なぜか吐き出せない。いや、心臓の鼓動以外のすべてが止

められてしまったかのような、そんな感覚がレイラの全身を支配している。

得体のしれない感覚に怯えるレイラだったが、そこに、ある光景ビジョンが浮かび上がる。

——姉さんの剣術はほんとすごいよ。私なんか全然だよ。

——何言ってるんだ。お前の魔術の腕は相当なもの、流石自慢の妹だ。

——そっかなあ、嬉しいなあ、照れるなあ。

暖かな日差しの中、草原に腰を下ろして最愛の妹と駄弁る光景。しかし。

(しら、ない……こんな記憶、わたしは知らない……！)

『いいや、知っているはずだ。貴様はただ見失っているだけなのだ』

こんな記憶はないはずだ。なぜならレイラは生まれた時からギフトメイカーの一員として妹と共に邁進してきたのだから。

有り得ざる記憶を必死に否定するレイラ。しかし、どこからか聞こえてきた唯の声
が、レイラの思考をを否定する。

——安心して、お姉ちゃんが守るから。

——ほんとに？ほんとにまもってくれるの？

——当たり前でしょう？妹を守るのは姉として当然のことなんだから！

幼い妹を安心させるために張った虚勢も。

——ハッピーバースデー、誕生日おめでとう。

——双子なんだから、姉さんもハッピーバースデーじゃん。

——いやいやいや、私はこういうのはあんまり似合わないというか、性に合わないというか……

姉妹揃って祝われ、照れ臭かった誕生日の思い出も。

——絶対に、絶対に取り戻す！だから待っていてくれ……！私は、何年かかろうともお前と帰る！

妹と生き別れ、再開を誓った旅立ちの夜も。

「なんだ!! 私は何を見せられている!! 私は知らない!こんな記憶があるはずがないんだ!」

何一つ、レイラは知らないのだ。あんな風に笑う妹を、^{レイラ}姉は知らない。知らないはずなのに、それはとめどなくレイラの頭に流れ込んでくる。膨大な見知らぬ記憶の洪水に、レイラは精神はなすすべなく翻弄されていた。まるで自分が自分でなくなるような、アイデンティティのすべてが木端微塵にされていくような、想像を絶する苦痛がレイラに降りかかる。

注がれてゆく記憶達を必死に否定するレイラ。しかしそこに、再び唯の聲がかけられる。

『名乗れ、自らの名を』

「GUUUUUUU?」

「唯ちゃん……その子に何をしたんだ……?」

志村もセラもガングニールオリジオンも、ひどく困惑した様子だった。

それもその筈、豹変した唯がレイラの顔に手のひらをかざした途端、レイラが頭を押さえて苦しみだしたのだ。弾を打ち尽くしたロケットランチャーをその場に放り捨て、発狂しながら頭をかき乱すその姿には、先ほどまでの冷酷な処刑人だった彼女の面影は微塵も感じられなかった。

被っていた軍帽を地面に投げ捨て、髪を結んでいたリボンをほどいては噛みちぎり、自らの肩を抱いて空に吠えたり、頭をがんがんと地面に何度も叩きつける姿は、先ほどまでとは別ベクトルの恐怖を志村に植え付けていた。

「違う違う違う……わたしはレイラで……いやそうじゃなくて、レイラでもなくて、ああええと……」

頭を抱えてその場にうずくまるレイラ。その目は尋常じゃない程に血走っているし、頭からは血がどくどくと流れ出ていた。彼女はやがて、思い出したかのように立ち上がってはコートを脱ぎ棄てて、頭を振り乱したかと思えば、全身を震わせながらこんなことを口走った。

「いやいやいやいや、わたしはレイラ！バブル様に誠心誠意尽くす奴隷なのです！いい

やこれも違う！あたしはレイラ、クソ雑魚捨て駒ヒットマンのレイラちゃんだからあ……いや、ええと……ああこれだ……ご主人様の世界滅亡をサポートする敏腕メイドのレイラちゃんだぞっ☆……もしくはこれか？べ、べつにあなたがすぎだから転生特典を与えるんじゃないんだからねっ！頑張つてあげなさいよ？そしたらあなたのお嫁さんに……じゃなくてえ……ふええ、はずかしいけどバルジおにいちゃんのためにがんばるよお……えちえちアポカリプス系チアガールのレイラだよお……これもちがつてえ……」

はつきり言つて、恐怖でしかなかった。あらぬ方向に土下座をしたかと思えば、反対方向を向いて何かに祈りを捧げ、かわいらしくウインクを決めたかと思えば、誰に充てているのかわからないツンデレ発言を繰り出す。挙句の果てには顔を赤らめながらチアガールの真似事までする始末。ひとつひとつのシチュエーションはよくよく聞けば萌えるのだろうが、この状況では逆に得体のしれないものとしか感じられなかった。

志村もセラも、恐怖におののいていた。一体何がどうなっているというのだろうか。これは明らかにおかしい。そう感じてはいるものの、その実態は全く理解できない。ただ、レイラの痴態と奇行を見守ることしかできなかつた。

「ど、どうしたんだ？さつきから何言ってるんだ？」

「ふあいとおく……れいら、がんばるよ……お風呂にするっ……はんにする？それとも、

て・ん・せ・い?」

「お、おい? 本当に大丈夫なのか?」

敵対していたとはいえど、これは心配になるレベルだ。思わずセラが駆け寄るが、レイラは子どものように笑うだけで何もしない。敵だったセラが目の前にいるというのに、だ。

志村は、唯の方を見ながら、恐る恐る訊いてみた。

「唯ちゃん……一体この子に何したの……?」

唯からの返事はない。それどころか、彼女は微動だにしない。志村は、身体の震えに無理矢理逆らいながら立ち上がり、唯の肩に手を置く。

すると、唯の身体がぐらりとその場に崩れ落ちた。

「え!! ちよつと唯ちゃん!!」

志村は必死に倒れた唯の身体を揺さぶる。彼女からの反応はないが、呼吸はちゃんとしている。どうやら気絶しているだけのようだ。どうしてこうなったのだろうか? 志村には見当もつかないし、彼女を目覚めさせる方法もわからない。

志村が必死に唯に呼び掛けるその目の前では、先ほどまで奇行に走っていたレイラが、ピタリと奇行を辞め、その場に座り込んでいた。そして、まるで何かを悟ったかのように、空を見上げながらこんなことを言いだした。

「……そうだ、違うんだ」

「ちがう？」

「あの子はレイラじゃあない。わたしのいもうとはそんなまえじゃなかったようなきがする」

それは、先ほどまでの彼女なら決して言わないはずの言葉であった。しかし、今の発言は、上の空気味ながらも、どこか確信めいたような声色だった。

そこから、どんどんとレイラという人間の意識は崩れ去っていった。もはや、彼女を構成するあらゆる要素を、彼女自身が信じられなくなっていたのだ。壊れかけた頭で考えれば考えるほどに、彼女の自意識は崩壊の一途をたどってゆく。その様子が、セラや志村にも一目瞭然だった。

「わたしだつてそうだ。わたしもれいらなんかじゃなかったようなきがする……」

自分の名前も、過去も、何もかもを信じられなくなつた彼女。ぼろぼろになつた精神では、言葉を紡ぐことさえ厳しくなっている。

そして、最後にかすかに残つた彼女の自意識は、かすれるような声で、セラと志村の方を向きながらこう問いかけた。

「——じゃあ、わたしはだれなのでしょう？」

それが、彼女の発した最後の言葉だった。その言葉を発したのを最後に、レイラは、口

からよだれを垂らしながら喃語なんごを繰り返すだけの存在になってしまった。まるで中身だけが赤ん坊に戻ってしまったかのようだった。自分と同年代と思わしき少女が、指をしゃぶりながらばぶばぶと言う姿は、襲い掛かってきた相手とはいえど、見ていてなんともいえない気分させられるものだった。

志村とセラは、その異様な光景をただただ見ていられるだけしかできなかつた。ガングニールオリジオンも、事態の一部始終を静観していた。理性のない狂犬である彼(?)からしても、一連の光景は恐怖そのものでしかなかつたのだ。

「だー、ばぶーぶえーぶえー……あーい！」

まるで赤ん坊の様なふるまいを見せる一人の少女。そこには、先ほどまであつた敵意も不安も、何もかもが消え失せていた。

どれほどの間、それを静観していただろうか。その沈黙を破つたのは、セラでも志村でも、ましてやガングニールオリジオンでもなかつた。

「あーあ、何してくれてんだよ」

志村の後ろから、品のない声が出た。ばつと振りかえると、そこには紫色のライダースーツの上に白衣という、端的に言つてセンスの欠片もない服装をした男が立っていた。志村はそいつの名を知っている。

「君は……バルジ!!」

「そ、よく覚えてくれてるじゃあねえか！俺様うれい……なあっ！」
「ぶべらっ！！」

バルジはそう言いながら、志村の顔を思いきり蹴とばした。痛みが頭を伝って全身を震わせ、鼻血がだらだらと垂れては地面に赤い染みを作り出してゆく。

バルジはもがいている志村を踏み越えると、指をしゃぶるのに夢中なレイラの元へとたどり着く。

「……までぶつ壊してくれちゃってさあ、折角の洗脳が台無しじゃあないか」

「洗脳だと……？彼女はお前たちの仲間ではないのか？」

「おいおい、何寝ぼけたこと言ってるんだ？コイツはただの傀儡だよ。都合のいい俺様の玩具さ」

「あうー？」

バルジの足元では、レイラがはいはいをしている。今の彼女にはバルジの言っていることが微塵も理解できない。そうするだけの知性が失われているのだ。バルジはしゃがみこんでは、レイラの頭に手を当てて、彼女の頭を隅々まで確認する。

眼や耳や頭頂部やうなじを舐めまわすかのように観察し終えた後、にんまりと笑いながら何度もうなづく。

「うーん……もう一回ぐらいならいけるか……？あんまりやりすぎると脳みそ壊れちゃ

うんだよなあ。でも、30回も「虫」の挿入に耐えたんだし、今回も行けるっしょ！」
「30回、だつて……?」

「ああそうさ。なんせコイツの精神力は凄まじいものだからな、何度洗脳しても自力で解いちまう。そのたびに俺様が洗脳し直してるとつてわけよ。ついでに性格もいじつてツンデレ花嫁にしたり恥ずかしがり屋な妹チアガールに変えたりとしているがな」

変態だ、と志村は思った。まさかエロ同人みたいなことを実際にやっている奴がこの世にいるなんて思わなかった。しかし同時に、コイツならやっていてもおかしくないという思いも、どこかで感じていた。それはおかしいと言いつ返してやりたかったが、非力な志村が言ったところで、バルジには雑魚の戯言としかうけとられないだろう。まあそもそも、コイツに何を言っても無駄なのだが。

レイラを担ぎ上げたバルジ。そこに、セラが剣を突き付ける。彼女は、鋭い目でバルジを睨みつけている。しかし、バルジはなんでそんな目で見られているのが理解できないようで、とぼけたように彼女に訊く。

「……何の真似だ？」

「先ほどから黙って聞いていれば、貴様の言動は目に余る」

「え、まさかお前こいつを心配してんの? うつそお! コイツはなあ、いなくなった妹を探して俺達までたどり着いた挙句、妹を返せとかほざきやがったんだ。マジ有り得ねえだ

ろ？だから返り討ちにしてから洗脳して、俺様専用のモルモットとして調教してやったのさー！」

まるで悪いのは向こうだと言わんばかりの発言。しかし、これがバルジという人間の在り方だった。自分の非は決して認めず、周りに責任転嫁する。そのような生き方しかできない社会不適合者にして、天性の人格破綻者。

平たく言うと、彼ははいはいけない人間だった。セラが即座に斬り殺すことを決意するくらいには。そう決断した彼女は、素早くそれを行動に移した。

「せえいっー！」

「無駄だつての！」

しかし。

セラの神速を超える居合を、バルジは片手間に受け止めてしまった。

「悪いな、俺は玩具レイラの修理をしなきゃあならない。だから今回は見逃しといてやるよ。運が良かったな」

「くそっ………待てー！」

バルジは乱雑にセラの剣を奪ってその場に投げ捨てると、レイラを抱きかかえたまま人間離れた跳躍力で飛び上がって、どこかへと行ってしまった。放置気味だったガングニールオリジオンも、慌ててバルジについていった。

「思った以上に厄介な奴らだな……」

セラは、バルジが消えていった方角を見つめながら、忌々しそうにそう言った。

志村は鼻血をぬぐいながら立ち上がり、セラに礼を言う。

「ありがとう、助けてくれて」

「騎士として当然の務めを果たしたただけだ。それよりも彼女、まだ目覚めないのか？」

「うん……どうしたらいいんだろう」

志村は、足元で気を失っている唯を見ながらそう言った。

先ほど彼女が見せた力。あれはいったい何だったのだろうか？レイラがあんな風になったのは？わからないことだらけだ。とてもじゃないが、志村一人には抱えきれないものだ。志村は気絶したままの唯を背負うと、瞬の元へと戻ろうとする。きつと彼はまだ先ほどの公園にいるはず。見たことを可能な限り伝えて、共有したい。

志村はそう思いながら歩き出そうとするが、ふとその足を止めて振り返る。そして、セラにこう言った。

「セラさん……だっけ？君も一緒に来ない？」

PM6：11 ミラーワールド内

鏡の世界で、ユナイト・リンク龍騎とリュウガの戦闘は続いていた。

「……チイツー！」

瓦礫まみれの地面の下から、リュウガが這い上がる。

2人が今いる場所は、現実世界において先ほどギフトメイカーと交戦した公園だが、両者の炎の衝突で、周囲は先ほど以上の荒れようとなっていた。ここが現実世界だったら大惨事になっていたであろうことは想像に難くない。

リュウガは、炎に包まれた大地を見渡す。奇しくもそれは、自分以外のすべてを失ったあの日の光景に似ていた。それを思い出してしまったリュウガは、仮面の下で忌々しそうに舌打ちをする。

「出て来いよ。どうせ生きてんだろ」

「……………」

リュウガの呼びかけに応じるように、なぎ倒された街路樹の影からユナイトが無言で姿を現す。その姿を見たドラグブラッカーが、リュウガの周囲を旋回しながら威嚇の咆哮をあげる。しかし、ユナイトは動じない。

リュウガは、ドラグブラッカーの尾を模した剣を構えながら言う。

「贖罪のつもりか？ならお前は根本的にやり方を間違えている。邪魔すんなよ」

「いいや、これが俺のやり方だ。どう言われようとも、これが俺の使命だ」

「この堅物野郎！」

リュウガが剣で斬りかかるが、ユナイトは左腕のアームキャノンを盾代わりにしてそれを防ぐ。

「お前がバルジを取り逃がしたせいで、奴は俺の世界に来た！そして、俺の世界を壊した！」

「ああ、だから俺はA M O R Eを辞めた。お前の世界を救えなかった俺に、あそこに居続ける資格はなかったからな」

取り逃がしたこと、間に合わなかったこと。裁場のその2つの過ちの末に生まれたのが、今日の前にいる無束灰司という人間だ。だからこそ、彼は見過ごせないのだ。たった一つ残った命が、死へと向かおうとすることを。例え、それを本人が望んでいることだとしても。

ユナイトはリュウガの剣を払いのけると、右手に持っていたフュージョンマグナムで光弾をリュウガに撃ち込む。胸部装甲から煙を上げながらのけぞるリュウガだったが、即座にドラグクローから青い火球を撃ちだして応戦する。ユナイトのフュージョンマグナムから放たれた光弾と、ドラグクローの火球が相殺し合い、小規模ながらも再び爆発が起きる。

煙の向こう側から、ユナイトの声がある。それは、固い決意に満ちたものであった。

「まだまだ、俺はまだやれるぞ」

「いい加減諦めろよ……俺は救つてほしいだなんて一度たりとも頼んでない！お前の差し伸べた手はじやまでしかないんだって理解しろよ！」

「それでも手を伸ばす！無理だとわかつていても、望まれていなくても伸ばす！それが、あの日、お前という存在に手を伸ばせなかった……俺にできる贖罪だ！」

——ユナイトの脳裏に浮かび上がるのは、肉塊と灰に包まれた終焉世界。ホストアホカリプス

生き残った命はたったひとり。どうあがいても元には戻せず、滅びを待つだけの世界に、生き残つてしまった少年の号哭がこだまする。

自らの手が届かなかった。その至らなさが、無力さが生んだ地獄を、彼は見届けるだけしかできないかった。

「押し付けがましいことをほざいてんじや！ねえよ！」

「っ！！」

リュウガはそう叫びながら爆炎のなかを一直線に突っ切り、ユナイトの顔を思いきり殴りつけた。しかし、ユナイトは殴られながらも、リュウガの腕をつかみ取つて思いきり投げ飛ばした。ポロポロになった石畳の上に背中から落ちるリュウガ。

しかし、彼は立ち止まつていられない。役立たずの分際で、自分にたった一つ残された生きる道を独善でつぶそうとする、目の前の男がどうしても許せなかった。バルジにもらった傷が開くことを厭わずに立ち上がり、力の限り声を張り上げる。

「まだ、だあああああつ！」

「……いや、残念だがそれは無理だ」

しかし、ユナイトがそれを制止する。その言葉を聞いて、リュウガは自分の手のひらに視線を下ろす。

リュウガの手が、輪郭が、周囲に拡散するかのようには消え始めていた。時間切れだ。ミラーワールドにおいて、現実世界の存在の活動時間は限られている。それを超えれば、その肉体は消滅する。

「クソツ……時間切れか」

「どうする？ 現実世界で続けるつもりか？」

「言っただけだ、俺はテメエが何と言おうとも先に進む！」

リュウガはそう叫びながら、ユナイトの腕を振り払う。それと同時に、彼の叫び声に呼応するかのようにドラグブラツカーが青い炎をユナイトに向かって吐きかけてきた。

咄嗟に回避しながらも、フュージョンマグナムを構えるユナイトだったが、当のリュウガはドラグブラツカーの炎に紛れて姿をくらましていた。

「……やはり君はその道を選ぶのか」

たとえなんと言われようが、止めるしかないのだ。男もまた、その道だけしかない。

——未だ脳裏に鳴り響く号哭に苛まれながら、男は歩を進めた。

PM 6 : 37

『ながい、道のりだった……』

「そうだね。ドライブすつごい楽しかったね」

『それで済ませていいもんじゃないと思うんだが』

日暮れの街。とある一区画。人気のない高架下にバイクを止め、セルティと少女は一時休憩に入っていた。

あれから半日以上の間、街のあちこちでいろんな奴らに追いかけられたのだ。それは、今朝のコスプレ集団だったり、人間に擬態する地球外生命体だったり、土方姿の変態だったり様々だったが、2人を疲弊させるには充分だった。

人通りの少ない場所にバイクを止めたセルティは、ぼんやりと空を見上げる。自分に口があつたら、きつと溜息をこぼしているだろう。

「その荷物をしつこく狙っているけど、いったい何なの？」

『私も知らない。だが、わざわざ私を頼ってきたんだ。余程知られたくないブツらしい』少女にそう聞かれるが、セルティにも、一体それが何なのかはわからない。だがセルティは、その中身を積極的に知ろうとは思わなかった。プライバシー保護の観点というのもあるが、裏社会では、余計な好奇心が命取りになる。必要以上のことは知るべきで

はないのだ。それにそういった類のものは、大抵ろくなものじゃないから。

——その光景を、一步離れたあたりで見ている人間がいた。平和島静雄と田中トムである。昼間に爆弾魔の事件に巻き込まれた2人は事情聴取を受け、出てきたところをこうしてセルティと出会ったのだ。彼女から愚痴を聞かされた静雄は、同情するかのよう
に語り掛ける。

「お前も大変そうだな」

『ああ、きつと新羅が今日の出来事を知ったら顔色変えて抱き着いてきそうだな』
「だろうな。アイツの喧しさが容易に想像できる」

セルティはそうPDAに打ち込みながら、心配性な同居人の顔を思い浮かべる。というか、予想以上に仕事に長引いてしまっている。なんせ、目的地に向かおうとするたびに邪魔が入るのだ。

変な旧友に思いをはせていた静雄だったが、ふと、セルティの横にいる少女の姿が目に入った。

「で、このガキはなんなんだ？」

『なんか勝手についてきたんだ。えっと、名前はなんて言ったかな』

「霧崎律刃」

彫刻刀が収まったプラスチックケースを片手に、少女は名乗る。なんで彼女は彫刻刀

を常備しているのだろうか。そんなに使う機会はないと思うのだが。律刃に危なっかしさを感じたトムは、律刃の手から彫刻刀のケースを取り上げる。

「彫刻刀振り回すのはよせつての。つたく、最近のガキはなんでこうも危険物振り回すことに躊躇がねえんだ？」

「あー返してよー、わたしたちにとってはアイデンティティじみたものなんだつてばー」
『あれ？』

その時、律刃の短パンのポケットから何かが転がり落ちるのを、セルティは目撃した。律刃は彫刻刀のケースを取り戻すのに集中していて、落とし物に気づいていないし、自分以外に気づいた様子もない。セルティはそれを拾い上げる。

それは一見すると、透明なケースに収められたICチップのようなものだった。なんらかの機械の部品だったりするのだろうか。

「おいセルティ、なんだそれは」

『この子が持っていたみたいなんだけど……何のチップなんだろうか？』

「おい、お前なんか心当たりとかないのか？」

「ないよ。たまたま拾っただけだもん」

つまりは、彼女もこのチップについては知らないということだ。一体これが何なのかはわからない。いくら頭を捻ってもわからないので、とりあえず一旦棚に上げることに

した。

——その判断が正しいことを、ほんのわずかに祈りながら。

PM6：41

いくら走つただろうか。逢瀬湖森と港トモリは、日暮れの池袋の街をただひたすらに走り続けていた。

自分たちを追つてきたオリジオンから必死に逃れるために、がむしやらになって見知らぬ土地を走り続けたのだ。追つてくる気配がないことに気づいたのは、逃亡劇の幕開けから30分以上が経つた時のことであつた。

「もう……いませんよね……？」

「多分、そうじゃないかな……ああ疲れた……」

2人はその場に座り込む。ぶっ続けて走り続けたせいで、もう心臓はバクバク鳴っているし、汗はだらだら、息も絶え絶えになつていた。これ以上走つたら、身体がバラバラになつてしまふそうさ。ビルの隙間を通る微かな風すら、今の二人にはひどく涼しいもののように思えていた。

湖森は、

「あれ、そーいや唯さん達は？」

「そういえば……どこに行っただろう」

あたりを見渡すと、一緒に逃げていた筈の唯と志村がどこにもいない。今この時になるまで、全然気づきもしなかった。ひよつとして、無我夢中で逃げていたせいで、何処かではぐれたのかもしれない。もしくは、唯達は奴らに殺されてしまったか――

「いいやそれはない！唯さんが死ぬわけではない！」

ふと頭に浮かんできた最悪の想定。湖森はそれを必死に拭い去ろうとして、ぶんぶんと頭を振る。だが、それはトモリも同じなのだ。最悪の場合がちらついてしまつて仕方がないのだ。

「私だつてそう思いたいよ？で、でもさあ……あの、オリジオンだつて……？あいつら明らかにやばそうだったじゃんか……唯ちゃんは無事だつて信じたいけど、最悪の場合つてのがどうしても頭からはなれないんだよ……！」

「あのう……さつきからなんか騒々しいつすけど、なんかあつたんすか……？」

恐怖におびえる2人だったが、そこに、申し訳なさそうに声がかけられる。一体何者だと思ひながら湖森が顔を上げると――そこには、端的に言つて変な奴らがいた。

もう一度言おう。変な奴がいた。冗談ではない。どこぞの魔法少女みたいなおコスチュームに身を包んだ少女だったり、全身包帯に身を包んだ変態だったり、パンツ以外は全部ボディペイントで誤魔化している変態だったり、ワ○ピースの敵役かと言いたく

なるような体格のおっさんだったり、様子は様々だったが、まともな外見の奴は1人もいなかった。

あかん、こいつらは関わっちゃダメな奴だ。そう思った湖森とトモリは一目散に逃げだそうとするが、行く手を阻むかのように、魔法少女コススの少女と青いバンダナを巻いた青年が立ちちはだかる。

「なんかオリジオンがどうたらこうたらとか言っていたけど、まさか出くわしちゃったクチで?」

「え、知ってるんですか!!」

「湖森ちゃん、話に乗らない!こいつら怪しすぎるつての!」

まるでオリジオンを知っているかのような口ぶりに、驚く湖森。ということは、目の前の青年は少なくとも、一般人ではないのかもしれない。

トモリの静止も聞かずに、湖森は彼らとの対話を試みる。

「知ってるも何も……俺達はAMOREだぜ?」

「あもーれ?」

聞きなれない言葉に首をかしげる湖森。すると、話を聞いていた包帯の男が、釘を刺すようにバンダナの青年に言う。

「おい、現地住民にそうホイホイと漏らすんじゃない。記憶処理剤のコストもバカに

ならない。そんなんだからお前はいつまでも下つ端なんだよ。少しは灰司さんを見習えつてんだ」

「え、あなたたち……灰司さんの知り合い？」

「マジすか!! 先輩の知り合い……先輩ストライクゾーン広すぎないすか? 女子中学生から女子大生まで手籠にしているとか凄すぎるっす!」

なんか盛大に勘違いしているようだが、青年の暴走っぷりに湖森は口をはさむ余裕がない。

青いバンダナを巻いた金髪の青年は、白い歯をみせて笑いながら名乗った。

「俺は御手洗倫吾。みたらいりんご俺達についてりゃあ大丈夫っすよ!」

P M 6 : 5 3

「お~~~~~い!逢瀬くーん!」

唯を背負った志村は、セラと連れて先ほどの公園へと戻ってきていた。無我夢中で逃げていたのもあつて、帰り道が分からず不安だったのだが、そこは文明の利器に頼った。あのごたごたでスマホが壊れていなくてほんと助かった。

ちなみにセラは、戦いが終わるとすぐに鎧を脱ぎ、以前大鳳の前に姿を現した時同様に、緑色のコートに身を包んでいる。やはりあの鎧姿は、現代日本では目立つのだろう。

「志村と唯が戻ってきたぞー！」

「なんかひどくくたびれたような……あれ、その人は？」

仮面ライダーとギフトメイカーの激戦の爪痕が残るその地に、一部を除いた全メンバーが再集合していた。2人の無事を喜ぶ者、隣のセラに興味を抱く者に加え、なんだか見知らぬ顔も混じっているが、それはそれ。此方に気づいた瞬が、ベンチに腰掛けながら手を振り返してくる。

「志村が無事でよかったよ」

「生きた心地しなかったあ……まあセラちゃんと唯ちゃんのおかげで何とかあったんだけど」

「ん、セラ……？」

志村に促されるがまま、瞬は、志村の隣に立っていたセラに視線を向ける。

「お前は……！」

「セラだ。セラ・フルルスローネ。偶然通りすがり、彼らを助けた」

「そっか……ありがとな」

「随分と怪我をしているようだが……それにここの荒れよう……何かあったのか？」

「まあ、色々と」

セラは、あちこちボロボロの噴水広場の様子を怪訝そうに見渡しているが、今の瞬に

は彼女の疑問に答えるだけの氣力がない。

一方、かつてセラに助けられたことのある大鳳は、セラに気づくなり彼女に駆け寄り、頭を下げてきた。セラのほうも大鳳に気づくなり、彼女の元氣そうな姿に安どしたような表情を見せる。

「貴女はあの時の……！」

「久しぶりだな。元氣そうで何よりだ」

「逢瀬から聞いたよ、お前が大鳳を助けてくれたんだってな。礼を言わせてほしい」

大鳳に続いて、アラタもセラに頭を下げる。本来なら自分が行くべきだったにもかかわらず、オリジオンにけがを負わされてそれがかなわず、赤の他人である彼女にそれをさせてしまったのだ。

2人からの礼をもらったセラは、それを誇ることなく、さもそれが自然であるかのようにかえす。

「騎士として当然のことをしたまでだ」

「騎士かあ、誰かに仕えていたりするの？」

「ああ。だけど今はその人がいなくてな。探しに来たんだ」

「奇遇ね、今私達も友達探しの最中なのよ」

「……………！」

「逢瀬? どうした?」

大鳳の言葉で、瞬は灰司のことを思い出した。

灰司は転生者狩りで、詳細は不明だがギフトメイカー・バルジへの復讐をもくろんでいる。おそらく、瞬達に近づいたのも何か理由があつてのことなのかもしれない。瞬は、灰司のことを何にも知らない。知らなすぎすぎる。こんなありさまで、彼のことを友達と言うのは烏滸がましいのではないだろうか?

そして、皆に言うべきなのだろうか。灰司の素性を打ち明けてもいいのだろうか? したら、どうなるのだろうか?

「——いいや、なんでもない」

「ならいいんですけどね」

——それはできない。少なくとも、人の秘密を勝手にべらべらしゃべるような行為はやっちゃいけない。灰司だって、このことは知られたくないのだろう。今回瞬にばれたのだから、全くの偶然なのだ。

だから、瞬は黙秘という選択肢を選んだ。向こうはそうは思っていないだろうが、瞬にとっては、目的は違えど、灰司は同じ敵と戦ってきた仲。秘密を共有してあげるだけの義理はあるのだ。

一方、瞬がそんなことを考えているとはつゆ知らずな志村は、先ほどから気になつて

いることを訊いてみた。あの黒髪の目付きの悪い少年と、ツイントールのちびっこはいつたひ何処のどいつなのだ？

「その人は？」

「ああ、灰司探しを手伝ってくれてるんだ」

「俺は遠山キンジ、武偵高校の生徒だ。で、隣のがアリア。俺のパートナー……だ」

「なんで言いよごんだのよ？」

「へえ、僕ナマ武偵見たの初めてだなあ」

「……どことなくあたしを見る目が動物園のパンダを見るような感じなのは気のせいじゃないのよね？」

——そりやあどう見ても小学生だしなあ、お前。

志村やセラに物珍しそうな視線を受けるアリアを見ながら、キンジはそう思ったが、声にだしたら間違いなく風穴まみれにされるので言わなかった。

「……………」

「どうしたんだ逢瀬、セラの顔をじろじろ見て。まさか一目惚れか？唯がいながら何他の子にうつつぬかしてんだお前」

「うっせえわ。お前もいいのか、大鳳セラかのじよに取られるかもしれないぞ？」

「NTR百合ですか、個人的にはすんごいそそりますね」

「誰もお前に話してねえんだよ」

ハルの空気の読まない発言に突っ込みを入れながら、瞬は、隣で眠っている唯の顔を覗き込む。

「似てないよなあ……」

「何が？」

「いや、どう見ても似てないんだよ」

「だから何の話なんだ」

謎の少女騎士・セラ。そしてギフトメイカーの一員であるリイラ。見た目も中身も全然違うはずなのに、彼女たちを見るたびになぜか既視感を感じてしまう。何故か唯に似ていると結論付けてしまう。まるで、数式とその答えだけがポンと提示されていて、その過程が全く開示されていないような、どうにもしつくりこない感覚が頭から離れない。

考察しようにも情報が少なすぎるし、先ほどからの傷が痛んで思うように考えがまとまらない。ひよつとすると、自分の感じている違和感は気のせいなのかもしれない。はたまた、これは世界の理なんだから疑問に思う必要すらないんですよ、とでも押し付けられているのかもしれない。

思わぬ難問に再開し、苦悩する瞬。それを、痛みに苦しんでいる顔と勘違いしたのか、

キンジが心配そうに声をかけてくる。

「どうしたんだ？」

「えつと……確かお前は、キンジだったっけ」

「ああそうだが。なんかお前、痛がつているように見えてさ……やっぱりその怪我、まずいんじゃないか？」

「いいや大丈夫、慣れてるから」

「慣れてるって……普段どんな生活送ってんだお前？俺も一応武偵だからさ、仕事で同じくらいの怪我を負ったことあるけど、結構つらかったぞ？」

「……話で聞いていたよりも危険なんですね、武偵高校って」

慣れというのは恐ろしいもので、ここ最近、瞬はこの程度の怪我ではあんまり動じなくなってきた。少なくとも一誠と共闘した時よりも、自分のダメージに無頓着になっている。今の瞬は、身体のあちこちにあざや擦り傷ができていて、背中には多くの切り傷ができていて、瞬はそれをさほど大したことないと考えてはいるが、キンジが心配するのも無理はないだろう。

スポーツマンや戦士にとって、怪我に慣れるというのは、自分の傷に無頓着になるというのはよくないのだ。自分のダメージを測れないというのは、自分のコンディションを測れないのと同義。そんな状態で身体を酷使すれば、必ず反動がやってくるのだから

ら。

「あんまり無理しない方がいいぞ。無茶しすぎると、肝心な時になってそのツケが来るもんだ」

「……肝に銘じておく」

「で、どうしたんだ？なんか悩んでいるように見えるけど？」

「なーんかなあ、納得いかないというか……理屈の分からないなぞなぞのような……そんな感じのことで悩んでいる」

「??？」

キンジとアラタの頭にいくつものはてなマークが浮かび上がる。そりやそうだ。だって瞬ですらよくわかっていないのだから。

「俺はもつと知る必要があるのかもしれない」

「何を？」

「……いろいろとな」

「答えになっていませんよ」

「で、あの人は誰？あの人も武偵だったりすんの？」

「剣崎さんのことですか？いやあ、なんか色々とはぐらかされちゃうんですよね〜不思議系男子ってやつだったりするんでしょうか？」

「……………」

志村の指さす先では、劍崎が自身のバイクに腰掛けながら缶コーヒーを飲んでいる。瞬達に遠慮して、わざわざあんなところにいるのだろうか。なんだか巻き込んでしまつて申し訳ない気分だ。

「はっ！こんなことしてる場合じゃない！キンジ、あたしたちが何をしに来たか忘れたの?!」

「そりゃあ、爆弾魔事件の捜査だけど……………」

どうやらすっかり忘れていたようだ。まあ、変態に絡まれた挙句さんさん人探しに付き合わされたんじゃないやあインパクト的に忘れてしまつてもおかしくないだろう。

キンジとアリアは急いで立ち上がる。

その時だった。

——ダンッ!!

「危ないっ!」

「えっ」

突如として鳴り響く銃声。それと同時に、劍崎が叫びながらキンジをかばうようにして飛び出した。瞬間、劍崎の頬をかすめるようにして、何かがものすごいスピードで飛んでいった。かばわれたキンジが劍崎の顔を見ると、彼の右頬から赤い血が垂れてい

た。

一体何が起きたのだと考える暇もなく、新たな銃声が鳴り響いた。今度はキンジが剣崎を抱き寄せるような形で横へと転がって、2人は銃撃を回避する。

「キンジっ!! 一体何が……」

「外したか……」

忌々しそうな声と共に、物陰から狙撃手が姿を現した。それは、金の装飾が施された黒いメカニカルなボディに赤と青のラインが両腕と両脚に刻まれた怪物。その両手には自動拳銃が握られている。

——間違いはない、オリジオンだ。

「結構射撃の腕には自信があるんだけどな。こう見えて俺、アサルト強襲科だし」

「強襲……もしかしてお前、武偵高校の生徒なのか!!」

強襲科とは、キンジ達の通う武偵高校の学科の一つ。主に剣や銃器による実力行使をこなす、武偵高校の中でも飛び切り危険な学科である。目の前のオリジオンは、確かにそう言った。

こいつは、武偵の癖に人を殺そうとした。それは、目の前の彼が同業者でもなんでもなく、ただの犯罪者であることを示している。

「……………?」

血をぬぐいながら、劍崎はある違和感に気づいた。

負傷の仕方があきららかにおかしい。負傷の原因と結果がちぐはぐになっている。普通ならば、銃で撃たれたら風穴があいたりするだろう。だが、劍崎は銃で撃たれたはずなのに、その頬に出来た傷は明らかに切り傷だった。

「お前は一体——」

「問答無用！ギフトメイカーからの命令だ！お前ら全員、このガンズが皆殺しにしてやるぜ！」

キンジは、躊躇いなく発砲してきたオリジオンに向かって銃口を向ける。その瞬間、オリジオンはすかさずキンジの脇腹目掛けて発砲する。

「なっ……！——」

自動拳銃から放たれたのは弾丸ではなく、斬撃だった。銃口から弾丸の如く放たれた斬撃は、キンジの脇腹をいとも容易く切り裂き、地面に鮮血をぶちまけながら飛んでいく。斬られたショックで、キンジの手から拳銃が零れ落ちる。

瞬は思わず助けに入ろうと、クロスドライバーを取り出そうとするが、それを妨げるかのように、ギフトメイカー達にポコポコにされた傷が痛みだす。

「ぐ……」

「その傷で戦うのは無茶ですよ！」

「何なのよ一体！銃の癖に斬撃飛ばすとかイカれてるんじゃないの!!」

「抜剣・絢爛たる女神騎士《コード・ヴァルキリア》っ！」

瞬の肩を担ぎ上げて逃げようとするハルに、オリジオンは発砲する。放たれた弾丸は斬撃に変じて彼らに襲い掛かろうとするが、騎士モードへと変身したセラとアリアがその間に入り、それぞれ剣とナイフでその斬撃を斬り伏せる。オリジオンは攻撃を防がれたことに一瞬顔色を変えるが、即座に気を取り直して、再び銃の引き金を引く。

しかし、それをさせまいと、アリアは素早く手に持っていたナイフをオリジオンの腕に向かって投げつけた。目にもとまらぬ速度で投げられたそれは、オリジオンの右腕に深々とぶつささり、そこから赤い噴水を巻き起こす。それは、オリジオンを怒らせるには充分だった。

「つてえなあー！何しやがるんだこのガキっ！」

ダダダダダンツ!! と、立て続けに鳴り響く銃声。それはいくつもの斬撃となつて、アリアとセラに迫りくる。

いくら2人でも、これをすべて防ぎきれるかと言われれば、不安が残る。だが、回避なんてしようものならば、後ろにいる瞬達に斬撃が襲い掛かる。肉の壁になるしか道はない。

「がはっ……」

しかし、その役割は2人には回ってこなかった。その役回りを引き受けたのは、セラでもアリアでもない。

「け、剣崎さん！なにやっつてんだよ!!」

2人の少女の前に立ちふさがったのは、剣崎だった。2人をかばった結果として、身体のおちこちに切り傷が生じ、そこから赤い血がポタポタと流れている。だが剣崎は、その傷にお構いなしに立ち上がり、オリジオンの方を睨みつける。

「皆離れてくれ。ここは俺が何とかする」

「!!」

そう言うと剣崎は、どこからか銀色の四角いバツクルのようなものと、1枚のカードを取り出す。カードに書かれているのは、◆ A C H A N G E。それはトランプだった。

「まさかとは思うけど……あんたはもしかして……?」

瞬の問いかけを背中で受けながら、剣崎は、バツクルにトランプを挿入する。すると、バツクル横から何枚ものトランプが連なって伸びてゆき、ベルトとなつて腰に装着される。待機音が鳴り響き、周囲が固唾を呑んで見守る中、剣崎はオリジオンを見据えながら、右手を前方へと伸ばしてゆく。

そして。

「ヘシンー！」

《TURN UP》

劍崎は右手首を反対方向に捻ると、即座に右手をバツクルの方に戻しながらバツクル右のターンアップハンドルを引くと同時に、反対に左手を前に突き出す。すると、カードリーダー部分が回転して、スピードマークが刻印されたプレートが出現するとともに、劍崎の前方に等身大の、青く光り輝く板・オリハルコンエレメントが出現する。

勢いよくバツクルから投影されたオリハルコンエレメントは、目前まで迫ってきていたガンズオリジオンを軽く弾き飛ばす。

「なっ……まさかあんた……」

「おいおい嘘だろ？この世界、ほんと何でもありだなー！」

驚愕の表情を見せる瞬達の前で、劍崎はオリハルコンエレメントを走り抜ける。

エレメントを潜り抜けた劍崎は、濃い青色のインナーの上から銀を基調とした配色の装甲を纏い、頭部には大きな雫のような形状の仮面を被った戦士へと、姿を変えていた。彼は、腰に携帯していた剣を抜きながら、ガンズオリジオンに挑んでゆく。

「貴様は……仮面ライダーブレイドッ?! 何故お前が?!」

「俺を知っているのか……アンデッドではないようだが、人に危害を加えるつもりなら俺が止める！」

——彼の名は仮面ライダーブレイド。
運命に抗う過程にある英雄である。

第27話 PM7：14／夜会は美味しいラーメン屋の屋台で

PM6：30

「ヴェイ！」

「ぐっ……」

結論から言わせてもらおうと、劍崎——仮面ライダーブレイドの攻撃に、ガンズオリジオンは追い詰められていた。

瞬達全員の皆殺しをギフトメイカーに命じられて襲撃を仕掛けた彼だが、暗殺に失敗。やむを得ず交戦することとなった。手負いの仮面ライダーとその他大勢の原作キャラとモブキャラ相手に手こずることはない和高を括っていた彼だが、運の悪いことに、もう一人の仮面ライダー・ブレイドが居た。

そしてそのまま、ブレイドの剣による攻撃になすすべのないまま追い詰められていた。

「く、そ、がああっ！」

「撃たせるかつ！」

ガンズオリジオンは苛立ち気味に銃の引き金を引こうとするが、それをさせまいとブレイドが手に持ったブレイラウザーでオリジオンの腕をぶつ叩き、銃をその手から叩き落とさせる。石畳の上をすべるように、オリジオンから銃が離れてゆく。

ガンズオリジオンはやけくそ気味に殴りかかるが、がら空きになった胴体にブレイラウザーの刃が叩き込まれ、オリジオンは膝をつかさされる結果となった。

「て、めえ……俺に膝付させるとかマジでねえし……」

「よし、相手の銃を叩きおとした！これでいける！」

「いいや志村、全然終わってねえよ」

喜ぶ志村に釘を刺すアラタ。その前では、ブレイドが膝をついたガンズオリジオンに斬りかかろうとしていた。

ガンズオリジオンにブレイラウザーの刃が迫る。その直前で、ガンズオリジオンは新たに自動拳銃を手の中に生成して、ゼロ距離からブレイドの腹を撃ちぬいた。火花をまき散らしながらよろけるブレイド。ガンズオリジオンは高笑いしながら、拳銃の引き金を引く。

「馬鹿め、得物があれだけだと思ったか！」

「くっ！」

ガンズオリジオンはブレイドの腹を蹴とばして間合いを取ると、手に持った自動拳銃から次々と斬撃を解き放った。

「あれ、効いて……ない?」

「コイツを使つたのさ」

ブレイドはそう言いながら、一枚のカードを見せつける。そのカードには、◆7 M E T A L と書かれている。

ブレイドのライダーシステムは、カードに封印した不死身の生命体・アンデッドの力を使つて戦う。ブレイドが使つたカードは、自身の肉体を硬質化させる。◆7 M E T A L。その能力によつて自身の肉体を硬質化させることで、ガンズオリジオンの斬撃を耐えきつたのだ。

そのまま、ブレイドは狼狽えるガンズオリジオンの懐に飛び込み、その顔面を思いきり殴り飛ばす。

ガンズオリジオンは踏ん張ることもできずに、バレーボールのシュートの如くスピードで吹っ飛び、石畳の上を何度も跳ねていく。もとより彼は射撃一辺倒の人間であり、接近戦は不得手。武偵高校でもお世辞にも実力が高いともいえず、狙撃科への転属を打診されているくらいだ。ゆえに、まだバトルファイトの終結にすら至っていない時期のブレイドにこうも後れを取っている。

背中への痛みを耐えながら、ガンズオリジオンは落とした得物を拾おうとするが、そこに、セラが剣を突き付けながら尋ねる。

「なんで私達を狙う？」

「目障りなのさ！俺達転生者の天下にやあ、お前らみたいな善性の権化みたいなやつらは居るだけで破滅ルートまっしぐらなんだからよお！」

「どうしても相容れないということか、おまえたち転生者とは」

「その気がないって言ってるんだろがっ！」

ガンズオリジオンはそう叫びながらセラに飛び掛かるが、即座にブレイドに足を掴まれ、地面へと引きずり倒される。起き上がろうとするオリジオンだが、その時、ズキンと腕が痛みだす。最初にアリアのナイフで刺された箇所が、今になって痛み出したのだ。腕を動かそうにも、激痛でそれがままならない。片腕では起き上がることは難しい。

ブレイドは、ブレイラウザーの柄の部分にあるオープントレイを展開する。そこには、何枚ものラウズカードが収納されており、ブレイドはそのうちの二枚を取り出すと、ブレイラウザーに読み込ませる。

読み込ませたのは、◆ 3 BEAT”と、◆ 6 THUNDER”。

《BEAT, THUNDER》

そして、オリハルコンエレメントをくぐると、ブレイドの変身は解けていた。

仮面ライダーをはじめて目の当たりにしたキンジとアリアは、柄にもなく目を丸くしていた。

「本当だったのか……あの都市伝説」

「え、都市伝説？」

「ああ、人知れず異形の怪物と戦う仮面の戦士の噂、結構みんな噂しているぞ？」

「なにそれ全然知らないんだけど」

まさか仮面ライダーが都市伝説になっていようとは。

それにしても、今日一日だけでふたりも新しいライダーに出会うことになるとは、正直言つて予想外であった。新たなライダーに興味を抱いた瞬は、傷ついた身体を引きずるようにして、剣崎の前に立つ。

「貴方も……仮面ライダーだったんですか？」

「あなたも、つてことは……まさか……？」

瞬の質問で、仮面ライダーであることを悟った剣崎は、目を丸くする。瞬は、ただ黙って頷く。どこかのファイブティは「不用意にライダーであることをバラさない方がいい」と言っていたような気がするのだが、とうの瞬はというと、疲労と驚きでそんなことは忘れてしまっていた。

「なんで自分からバラしたんだ？」

「いや、なんとなく話してみたいな〜って思っただけ」

「そうか」

そう言われてしまうと、剣崎としてはそれ以上追及できなかつた。一応剣崎としても、自分の把握していないライダーの存在には驚いてはいるのだが。

で、ここから仮面ライダー2人の対談が始ま——らなかつた。なんか盛大に脱線が始まろうとしていたのをギリギリのところまで本題に引き戻したのは、ずっと蚊帳の外にいた大鳳だつた。

「……で、これからどうすんの？」

「灰司くんは見つからないし、湖森ちゃんともはぐれちゃつたし……どうすんだらうね」
そう、問題は何にも解決しちやいなかった。当初の目的である灰司との合流は果たせていないどころか、ギフトメイカー襲撃のごたごたで湖森（とついでにトモリ）もどつかに行ってしまった。キンジ達の持っていた医療キットで応急処置は済ませたとはいえ、瞬は怪我人だし、唯はなぜか気を失っているしで、むしろ深刻化しているような気がする。

ここで、部外者でありながら本来の目的を全く果たせずにただただ巻き込まれた被害者であるアリアが、現状に対して文句を言いだした。

「と、とりあえず色々と説明を要求するわ!」

「さっきの怪物の事、仮面ライダーのこと……あんたたちは何か知っているのか?」

「そう言われてもなあ……俺もなにがどうしてこうなってんのかよくわかんないんだけど。」

「そうだな。私もいろいろと話したいことがあるのだが、ここじゃあおちおち話もできやしない。どこか落ち着いて話のできる場所があればいいのだが……」

「俺達完全に蚊帳の外だよな、山風」

「もう慣れたかも」

アリアの発言を皮切りに、各々が抱えていた不満だの話したいことだのが混沌の如くぶちまけられ、一気に喧しくなった。アリアと一緒に瞬と剣崎に詰め寄るキンジ。何か言いたげなセラに、蚊帳の外であることを愚痴るアラタと山風。瞬も皆の気持ちはわかるのだが、とりあえず一旦落ち着いてほしい。

そんな無秩序めいた騒々しさに一喝したのは、瞬ではなく、これまでずっと沈黙を保っていたいたある人物であった。

「あーもううるさいんじゃないっ! 目覚めて早々なんなのこの騒がしさはっ!」

そう、唯だ。ブレイドとオリジオンとの戦闘の間もずっと意識を取り戻すことなく、ずっと近くのベンチで寝かされていた彼女が、いつの間にか目を覚ましていたのだ。予

想だにしていけない事態だったが、こうして彼女が目覚ましてくれたことについては、瞬は素直に嬉しかった。

瞬は、やいのやいの言いながら群がる皆を押しつけながら、身体を起こした唯に近づいてゆく。

「お前……一体何があつたんだよ……全然目を覚まさないと思つたら、あつさり目覚めやがつて……心配せんなよ、つたく」

「いや、私もなにがなんだかよくわかんないんだよね……知らない間に気絶しちやつてみたいでさあ……え、嘘じゃないよ？いやほんとだつて！」

いつも通りの彼女の様子に、瞬はどこか安堵していた。

そんな二人の間に流れる雰囲気を一言でぶっ壊したのは、瞬の隣に立っていたハルであった。彼女は、空気の読まない腹の音を盛大に鳴らしながら、場の空気を微塵も読んでいない提案をしてきた。

「まあ積もる話はあるだろうけどさ、皆腹減らないっすか？」

「お前ほんと空気読まないな！湖森ちゃんも灰司の奴も見つかっていないのに、それどころじゃないだろうが!!」

「でも腹が減つては戦はできぬと……」

「飯を言い訳にしたらタスク放り出してもいいってか？んな道理が通るかよ。おい、逢

瀬もなんか言ってやれよ」

「……ごめん、正直言うと体力的にキツイから休みたい」

湖森を、大事な妹を探しに行きたいのはやまやまだだった。しかし、今の瞬には見知らぬ土地を駆けずり回るだけの体力が残っていないのだ。応急処置でマシになったとはいえ、まだ身体のあちこちに残っている傷がじんじんと痛むし、オリジオンとの連戦と昼間の事情聴取、それと大きささまざまな出来事の連鎖で心身ともに疲弊している。じつとしてる場合じゃないはずなのはわかってはいるのに、動く気力がない。

というか、昼間はビル爆破事件からの事情聴取のコンボのせいで、瞬は昼食を食べていないのだ。そんな状態でギフトメイカーとの激戦に挑んだのだから、当然動く気力もなくなる。セラも、瞬の疲弊っぷりを感じ取ったのか、瞬の意見に賛同する。

「見たところ彼は相当疲れているようだ。何かをするにしろ、情報整理を兼ねて一旦どこかで休まないか？」

「それならよさそうなところがありましたよ、ほら」

ハルがそう言つて、スマホの画面を見せる。そこには、この周辺のマップが表示されていた。

その中に、赤いピンがひとつ立っているのが確認された。場所はそう遠くない。

その場所は——「露西亞壽司」。

PM7：14

「……」

「……」

「おつちゃん、豚骨ラーメン5人前！モヤシマシマシ麺多めで！」

——— いったいなぜ、こんなことになってしまったんだろうか？

柊柚子と榊遊矢は、ラーメンを前に駄弁るホモたちを横目に、そんなことを考えていた。

「すっげえいい匂いだゾ、秋吉先生の手作りラーメンを思いだすゾ」

「げ、やめてくださいよ三浦先輩。俺大学外であるムエタイ野郎のこと考えたら吐き気がするんだよ」

「それは先輩が真面目に部活やらないからでしょうが」

——— あのあと、茶色いステハゲ新生物こと野獣を助けた遊矢と柚子だったが、馬鹿坊主こと三浦が「腹減ったなあ」とぬかしやがったので、路地の入口付近にあったラーメン屋の屋台に来ていたのだ。まあ味については満足のいくものだったので、これはこれでいいかもしれないと遊矢は思っている。

「美味しいなこのラーメン。今度は遊勝塾の皆もつれてこようぜ」

「それについては同感ね……でもこのこつてり具合、カロリーが不安だわ……」

「その分動けばいいだろ」

「それもそうね」

そんな風に、柚子と若干惚気気味にラーメンを啜っていると、木村が申し訳なさそうに言ってきた。

「ごめんね、迷惑かけちゃって……お詫びには程遠いだろうけど、ここは僕たちがおごるから」

「そんな……それこそ気が引けますよ。自分で払いますから」

「へいよー」

「おほーこの香り、見た目！たまんねえよなあ！」

野獣の舌の肥え具合だけは素直に褒められるんだよなあ、と思いつながら、木村も麺を啜る。度々部活終わりに外食をすることがあるのだが、大変憎らしいことに、野獣の選んだ店はどれも料理がおいしいのだ。木村的には、それ以外の部分については、あの美食センサーだけ残して死んでくれないかなと思うくらいに酷いのだが。

そんな風にラーメンを食ってる一行。そこに、もう一人客がやって来た。その客は、野獣の後姿を見るなり、嬉しそうに声をかけてくる。

「見覚えのあるステハゲがいるなあと思ったら田所先輩でしたか」

そう言われて遊矢が振り返ると、そこに立っていたのは、どことなく爬虫類を思わせる顔つきの青年だった。野獣の知り合いかなかなかだろうか？

「レプティリアンだああああ!!」

「失礼な、ぼくはれつきとした人間だよ。決してレシートリザードなんかじゃあない」

いや誰もレシートリザードなんか言ってるねえよ、てかレシートリザードってなんだよ。すると、野獣が青年の肩に手を回しながら、嬉しそうに紹介を始めた。

「コイツは遠野まづうち、俺の彼氏だ」

「やだなあ先輩、見ず知らずの他人にぼくらの仲を明かすなんて……恥ずかしいじゃないですか」

「急にのろけだしたぞこの人……」

「あ、俺替え玉頼むぜ」

気持ち悪いとか言っただけとはいけない。現代においてLGBTQへの配慮を欠かすような輩は存在価値ゼロなのだから。遊矢もそれをわかってはいるからこそ、急にのろけだしたことに對する突っ込みだけで済ませたのだ。このご時世に、他人の愛の形にやいのやいの言うのは馬鹿のすることなのだ。

遠野は自身の肩に回されていた野獣の手を払いのけると、野獣の隣に座り、ラーメンを注文し居始めた。

「でさあ、俺達爆弾魔探しているわけよ。捕まえたら感謝されまくってウハウハよ！そしてあわよくばお金貰えるかもしれないし！」

「遠野さん、この野獣ほかのいうことなんか無視して構いませんからね？いくら恋人でも悪いことは悪いと言わなきゃ付け上がりですよ」

「動機はどうあれ、街の平和につながるのいいと思うけどね」

「恋は盲目とはこのことなんだろうか……」

「おい店主、替え玉何時まで待たせるんだよ？これ以上待たせるようならけ○あな確定な？」

遠野の無理のある好意的解釈に呆れる木村達の横で、一向に来ない替え玉に苛立ちを隠せない野獣が、店主に怒鳴る。

そういうえば、先ほどから店主が動いていない。野獣の声にも反応を示さない。麵を茹でていた鍋からは沸騰した水が噴き出しているし、手に持った湯切り網からはぼたぼたとお湯がまな板の上に垂れている。流石に遊矢も不審に思い、声をかけてみるが、店主からの反応はない。ずっとこちらに背を向けたまま、微動だにしない。

その時、柚子がこんなことを言い出した。

「ちよつと待つて……なんか、カチカチ音がしない？」

「音？」

柚子に言われるがまま、遊矢達は耳を澄ませる。すると、お湯のぐつぐつと煮立っている音に混じって、カチカチという音がしている。時計の針の音なんかじゃない。屋台に備え付けられているのはデジタル時計だからだ。

——音は、店主の頭部から発せられている。

「いい加減にしろよクソハゲ野郎！いくら常連の俺だからって堪忍袋の緒が切れるってもんだぜ！！ 何とか言えよこの野郎が！」

「野獣、やめるんだゾ……」

ここで、とうとうしびれを切らした野獣がカウンター越しに身を乗り出し、店主の肩を強く掴んだ。そして、そのまま店主を強引に振り向かせる。

こちらに向いた店主の顔を見て、一同は愕然とした。

その顔には、生気も理性も感じられなかった。黒目があらぬ方向を向き、口からはよだれが垂れている。そして何よりも目立ったのは、その額。店主の額には、小さなデジタルタイマーのようなものが埋め込まれるようにして存在していた。そして、その液晶に表示されているカウントは「3」。あまりの異様さに静まり返る一同の前で、タイマーのカウントが「2」を経て「1」になる。その時になって、ようやくある考えが頭に浮かんだ。

——このカウントは何なのだ？ゼロになった時に何が起こるといふのだ？

わからないが、兎に角ここを離れなくてはいけない。膨れ上がる原因不明の恐怖心が、そう言っていた。

「田所先輩危ない！」

カウントがゼロになる。それと同時に、いち早く正気に戻った遠野が、野獣の肩を強く引つ張る。

瞬間、爆炎を伴いながら、店主の頭が風船のように破裂した。

バガアアアアアアアアアンツ!!と大きな音を立てながら、ラーメン屋の屋台が木っ端みじんに砕け散り、生じた爆炎が暖簾に引火したりガスボンベを破損させながら、さらに大きく激しいものへと進化していく。爆風に煽られて吹っ飛び、ビルの壁に叩きつけられる遊矢達。熱風と壁に挟まれ、口から赤い液体が漏れ出しているのが感じる。

そんな遊矢達の目の前で、たちまち都会の片隅に豪勢なキャンプファイヤーが出来上がっていった。

「が……な、なんだよこれっ！」

「店主さんが爆発した……!!」

和気藹々とした雰囲気も、今の出完全に吹き飛んでしまった。一体何が起きたのか、理解が追い付かない。ただ一つ確実にわかっていることは、ラーメン屋台の店主が目の前で殺されたということだけであった。

遊矢達と同様に吹っ飛ばされた三浦は、さつきと変わらない呆けた顔で火に包まれた屋台を眺めていた。そして、なんとも呑気な感想を一言。

「秋吉先生の正拳突きより痛いゾ」

「そんなこと言っている場合じゃあないですよ三浦さん……これはいったい何なんですかね？」

「さあ？最近の屋台つてすごいサービス精神豊富なんだな俺すつごいびつくりしたゾ」

駄目だこの馬鹿坊主、状況何にもわかつちやいない。予想通りの馬鹿っぷりに、木村と遠野はあきれてものも言えなかつた。こいつに何言つても無駄だ。なんせ図体だけでかい子供のようなものなのだから。そこに年長者としての威厳なんて見出すなんて不可能なのだから。

そんなことよりも、野獣はどうなったのだろうか。木村はあたりを見渡す。すると、野獣は近くのゴミ箱に尻から嵌っているのが発見された。身体には熱々のラーメンスープがぶつかかっており、服は生ごみとラーメンで汚れていた。その姿を見て、遊矢は思わず顔をしかめる。木村に至っては、無事な野獣の姿を見て露骨に嫌そうな顔をしている。

「なんだ生きてたのか、心配して損した」

「おい木村あ！先輩に向かつてそれはねえだろうが！」

「木村さんはなんであそこまで田所さんを嫌っているんですか？」

「あの人我儘で下品でドケチだからね……多くの人が先輩に恨み抱いてるんだよね」

それを遠野から聞いて、よくそんな奴と交際続けられるなあと感心する遊矢。全く好きになる要素がないのだが、一体遠野は野獣のどこを見て恋人関係にまで至ったのか不思議でならなかった。

その時、野獣の視界の片隅で、誰かが動くのが見えた。

沸点の低い野獣は、即座に判断した。その人物は何か知っていると。

「あ、待てこら！お前かこれやったの！！ テメエが爆弾魔か！！ こんなことしてタダで済むと思ってるのか！！」

「田所先輩、危ないですって！やめましようよ！」

言いがかりに近い流れだったが、殺されかけて怒り心頭の野獣には関係ない。とにかくこの怒りをどこかにぶつけねば気が済まなかった。その場から逃げるように立ち去ってゆく影を追い、路地の奥へと飛び込んでゆく野獣。それを心配して後を追う遠野と木村。三浦のほうは状況が読み込めていないのか、先ほどからずっと燃え上がる屋台を呆けた顔で眺めている。

「ど、どうするのよ遊矢」

「……なんとなくだけでも、あの人ほっといたらマズい気がする」

「それって爆弾魔の方？それともあの土気色のホモの方？」

「どっちもだよ」

出会いも最悪、印象も最悪だけど、放っておくのは目覚めが悪い。理由はそれだけで充分だった。

兎に角この場を離れよう。遊矢と柚子は、その場で呆けている三浦を引きずりながら、野獣たちの後を追うのであった。

PM8：40

ギフトメイカー達は、とあるビルの屋上に集合していた。

すでに日は落ち、空には星々が、眼下では街明かりが灯り始めている。まるで今現在、いくつもの騒動が並行して進行中であることなど歯牙にもかけていないかのように、不気味で非情なまでに、この街は平常運転であった。

レドとリイラは、どこことなく生暖かい夜風に当たりながら、屋上から夜の街を見下ろしていた。

「5月だつてのにひどく蒸すなあ……流石大都会だ」

「早く帰ってエアコンの効いた部屋でゴロゴロしたい。汗は乙女の天敵なのよ?」

階段に通じるドアが開け放たれ、レイラを担いだバルジと、彼に付き従うガングニールオリジオンがやって来た。バルジは、レイラを床に寝かせると、どこからか本ものコードが伸びるヘルメット状の装置を取り出しては彼女の頭に取りつけ、コードを持っていたノートパソコンに接続する。そして、パソコンの画面を眺めながら、面倒くさそうにぼやく。

「あーあ、こりやオーバーホール必要かもなあ」

「……そいつ、また壊れた?」

「ああそうだよ。しかも今回は外的要因による故障だ。まさかアイツにあんな力があるなんてな……」

「アイツって?」

「そりゃあ、アクロスに金魚の糞みてえに引っ付いてる女だよ……ええと、名前なんて言ったっけ? 転生者ですらないモブキャラの名前なんていちいち覚えてらんねえんだよなあ……」

バルジはそう言いながら、パソコンのキーボードをカタカタと叩き始めた。

目の前で年頃の少女が心身ともにいじくりまわされる光景を眺めながら、レドは横にいたりイラに問いかける。

「一応姉だろ？あいつにいいくりまわされて何とも思わないのか？」

「別に。無能な姉を持ってしまつて恥ずかしいつたらありやしませんわ。昔から空気も読めない堅物でしたからねえ……そんなんだからいつまでもオリジオンに覚醒させてもらえないのよ」

「ふっ、恐ろしいほどに冷酷だね」

「ギフトメイカーに身内の情なんか期待するだけ無駄よ……レドだつてそれは承知の上でしょ？」

姉と妹。そこに身内の情はなかった。

元々レイラは、望んでギフトメイカーになつたわけではない。彼女は、居なくなつたレイラの行方を追う過程でギフトメイカーに辿り着いた。そして、ギフトメイカーに下つた妹を取り換えそうと必死になつていたが、ギフトメイカー側はそれを疎ましく思い、レイラをリンチした拳句バルジの技術で洗脳を施し、人間としての尊厳を極限まで破壊しながら都合のいい玩具としてこれまでこき使つてきたのだ。

レイラは望んでギフトメイカーに下つたのだから、姉のことは鬱陶しいゴミとしか思つていなかった。レイラの思いは今もなお踏みじられ続けている。そして、それを知りながら助けようとする者はいない。そこに救いはない。

なんとも悪辣な光景だろうか。そして、それを実際にやつてしまつたバルジの悪趣

味つぷりには、レドは内心辟易していた。だが、そんな感情を共有する相手はいない。今もレドの心の中に巣くつたままだ。

そんなことを考えていたレドだったが、ふいに、屋上の扉が乱暴に開け放たれる音で彼は現実には引き戻される。扉の方を見ると、険しい顔をした壮年の男性——ティードがやってきていた。

「はあ……来たよ」

レドはティードの顔を見るなり、露骨にげんなりした表情になる。それに気づいたティードは、無言でつかつかとレドの元まで歩み寄り——その頬を思いきり引っ叩いた。

「——っ！」

ビンタを喰らったレドは、頬を赤く腫らしながらティードを睨みつける。叩かれた箇所が熱を持ち、じんじんと痛みを発していたが、そんなことはどうでもよかった。ティードは、そんなレドの反抗的な態度が癪に障ったのか、続けて数発、レドの頬を引っ叩く。

「おめおめと敗走なぞしおって……やる気あるのか？」

「なんも仕事してねえ癖に一丁前に叱ってんじやあねえよクソ親父。」

「俺は仮面ライダーを殺せと言ったはずだ。仕事のできない部下を叱責するのは上司の

役目だ」

「働かない怠け者についてくる奴なんかいねえよ。本気で誰かの上に立とうとするなら自分から動けよ」

レドのその言い草にキレたのか、ティーダは手刀をレドの首筋目掛けて振り下ろす。レドはそれを難なくよけ、手刀は彼の背後にあつた屋上のフェンスにぶち当たる。手刀の当たつたフェンスは、ガシャンと大きな音を立てて、まるで刃物か何かで切り裂かれたようにボロボロになっていた。

続けてティーダはレドを殴ろうとするが、背後から何者かがティーダの腕をつかんでそれを止める。キツと振り返りながら睨みつけると、そこには笠原がいた。相変わらずの鉄面皮だが、目だけはティーダの言動に呆れかえっているのが、サングラス越しでもわかつた。

「久しぶりに顔を見せたと思つたが……何のつもりだ?」

「おお怖い……貴方のその短気っぷり、改善した方がいんじゃないですか? そのせいで何人のメンバーが死んだとお思いで? 皆知らないだろうから言いますけど、人的資源は有限なんです。もっと丁寧に扱うべきではないでしょうか?」

「命令通りに動かない奴を人材というほど俺は甘くない」

ティーダはそう言いながら笠原の手を振りほどくと、屋上の隅で縮こまっている

ザードンオリジオン——火吹と、ガンズオリジオン——半崎平一のほうに近づいていくと、レドと同じようにビンタをする。血を吐きながら床に倒れ伏す2人に、ティーダの罵倒が容赦なく浴びせられる。

「お前らもだ！何のために貴様らを転生させ、オリジオンに覚醒させたと思ってる？俺は慈善事業でこんなことをしてるんじゃない。貴様らに求められているのは、俺の命令を果たすことだけ。それができないようであるならば、命を以てその代償を支払ってもらうことも辞さないが……どうだ？」

その言葉に2人は何も言い返せなかった。否、言い返す勇氣、氣力すらなかった。彼らはオリジオンに覚醒させてもらった際に、ティーダの力の一端を垣間見ている。その時に植え付けられた恐怖が、2人を完全に支配しているのだ。

ティーダは放心状態にある半崎と火吹を放置し、泡不や GANG ニールオリジオンのいるほうを向くと、彼女たちに対しても罵声を浴びせ始める。

「ギフトメイカーだのリバイブ・フォースだのと銘うっているが、貴様らも同類だ。仕事のできない能無しに居場所も価値もない。切り捨てられたくなければ、必死に働け。それが社会というモノだ」

ティーダの発した価値のないという発言に反応したのは、半崎だった。彼は、わなわなと震えながら、狼狽えるようにティーダに縋りつく。

「お、俺が無価値だと……!? 俺が無価値……んなのは嫌だ！折角転生したのに、ここでも無能扱いかよ……!」

「なら結果を出せば済む話だ。せいぜい頑張るのだな」

「がッ……」

ティーダはそう言いながら自身に縋りついてくる半崎を蹴とばすと、空中にジツパーで転移ゲートを生成すると、その中へと消えていった。ジツパーが完全に消えたのを確認すると、リイラがわかりやすいため息をついた。その様子からすると、これがティーダの平常運転であるようで、彼女はだいぶ辟易している模様。

リイラは、屋上に座り込んでいるレドにハンカチを手渡しながら、ティーダの癩癩に愚痴をこぼす。

「今日のティーダ、やたらと機嫌悪かったわね。ほら、大丈夫なの?」

「……殴られるのは慣れてる。それにしても、僕達の話すらまともに聞かないなんてな」そう。ティーダはレド達の話に耳を傾けようとするそぶりすら見せなかった。新たなライダー・ユナイトのこと。謎の力に目覚めた諸星唯のこと。更に言えば、2度に渡って邪魔をしてきた少女騎士・セラのことさえも未だに話していないのだ。社会のあれこれについて語る癖に、肝心の彼自身がその基本たる報連相ができていないのだから、レド達からすればとんだお笑い種だった。

ティーダが傍若無人にふるまっている中、ずっとレイラの「再調整」をしていたバルジは、そんなティーダの醜態を嘲笑う。仮にもギフトメイカーのリーダーだというのに、ティーダには人望なんてものがなかった。

「相変わらずおつかねえなあティーダの奴。今どきあんな言い方じゃあ誰もついてこないってのに」

彼はそう言うと、パソコンの電源を切り、放心状態になっている半崎と火吹の元へと歩いてゆく。レイラの調整は済んだらしい。

「その分俺様は優しいぜ？ただ出来ない部下を叱るだけじゃなく、手助けまでしてやるんだからな」

「手助け……？」

「おう。俺様がお前を強くしてやるから感謝しとけ」

バルジは不気味に笑いながら火吹と半崎の肩に手を回すと、2人を半ば強引に連れて、ティーダの出でいった扉から屋上を後にした。

「では私も。仕込みがありますので」

「アタシも行くわ！あのおっさんなんもしねえ癖に偉そうだしパワハラするしでマジ空気悪い！戦闘になったら呼んでね☆」

「ウウウウウ……」

笠原も泡もも GANG ニールも、各々の理由で屋上から姿を消す。後には、レドとリイラだけが残された。レドは、リイラから借りたハンカチを押し付けるようにして彼女に返すと、口元の血を手で拭いながら歩き出す。

「どこ行くの？」

「リベンジマツチだ。流石にあれじゃあ消化不良すぎる。足手纏いがいなきやもつと痛めつけられたつてのに」

「へえ……ねえ、私も連れていきなさいよ。最近引きこもりっぱなしで暇だったから、久々に暴れたいのよね」

「勝手にしなよ」

そう言いながらも、レドはリイラの同行を止めはしなかった。彼女の実力はティイダに迫るものがあることを、彼は知っている。彼女ならば、火吹のように足手纏いにはならないはずだ。それに、丁度先ほどのティイダの罵倒にイラついていたところだ。

つまるところ、ストレス解消。自分よりさらに格下の存在を蹂躪することで、レドは腹の内にたまったそれを解消しようとしている。

「サンドバッグぐらいにはなってくれよ、仮面ライダー」

その声は、胸の内に抱えた苛立ちと、自分が負けるはずがないという自信に満ち溢れていた。

P M 7 : 5 3

オリジオンから逃げていたら、AMOREエージェントの一団と出くわした湖森とトモリ。彼女らは、彼らと共に近くの個室制の焼き鳥屋に集まっていた。この店は飲み会などにうってつけのようで、本日も大学生やサラリーマンの集団があちこちで騒がしくしていた。

そんな中で、焼き鳥をほおぼりながら、御手洗倫吾は湖森達にAMOREについて説明する。

「AMOREっていうのはねえ、平たく言うと……警察みたいな感じっす。悪いことしてる転生者を捕まえて、更生させる」

「へえ、そうなんだ」

きつと男の子だったらすごい興奮するのだろうが、湖森は女の子。倫吾から説明を聞かされても、いまいちパツとせず、適当に生返事で済ませるだけであった。トモリの方はというと、名前は知っていたらしく、実在していたことに驚いている様子。

「転生者の知り合いから冗談半分に聞いていたけど、実在したんだ……」

「まあ基本秘密組織だからな……つたく、なんでそうベラベラ喋るんだ阿保倫吾」
アホッブル

「酷いっすねえ下澤さん！」

守秘義務もへったくれもない社会人失格の倫吾に呆れているのは、全身包帯男こと下澤卷密しもさわまきみつ。その横では、20歳くらいでありながら魔法少女コスに身を包んだイタい女性・池映寧理いけうつしねいりが、でっかいビールジョッキに並々と注がれたビールを浴びるように飲んでいる。倫吾の話によると今は仕事中和のことなのだが、いいのだろうか？

まるで知らないサークルの新歓に無理矢理参加させられたような居心地の悪さがトモリを襲う。でもお腹はすいているので、甘んじて焼き鳥は食べるのであった。人間も生き物であるがゆえに、生理的欲求には逆らえないのだ。

トモリは隣の湖森に泣きつく。成人女性が女子中学生に泣きつくとか恥ずかしくもないのだろうか？

「どうしよう……ねえ湖森ちゃん、ほんとどうしたらいいと思う？」

「いやネギマ頬張りながら訊いてる時点で全然真剣じゃないですよね？」

「ねえ、瞬くんに連絡できないの？ 私着信拒否されてるからできないんだよね」

「駄目、お兄ちゃんのスマホにつながらない」

トモリの着信拒否は自業自得じゃないのか？ と思いつながら、湖森は先ほどから何度も瞬のスマホに電話をかけてはいるものの、一向につながらない。念のため唯にも電話をかけてはいるが、そちらも出ない。東京のと真ん中で電話がつかないはずがない。オリジオンと戦っている中でスマホがぶつ壊れでもしたのだろうか？

「困ったなあ……他の皆の電話番号知らないしなあ……どうしたらいいんだろう」

「そんな時はあく飲めばいいのさあく！」

「うわ酒臭っ！近寄らないでよ気持ち悪い！てか私中学生だから飲めないし！」

「寧理やめんか！つたく、貴様の酒癖の悪さは筋金入りだな……」

べろんべろんに酔った成人済み魔法少女こと寧理が湖森にダルがらみしてきたが、隣に座っていたボディペイントパンイチ野郎こと古峰諭太ふるみねろんたが彼女の頭に拳骨を叩き込んで静止させる。非常識極まりない見た目とは裏腹の酷い常識人っぷりに、湖森は見ているだけで頭がおかしくなりそうだった。彼女の脳内は、もうやだこの変態集団から解放されたい、という思いでいっぱいだった。

寧理と古峰から距離を取るように、湖森はトモリと身を寄せ合う。そこに、向かいに座っていた、右半分がバニースーツ、左半分がチャイナドレスという、控えめに言って頭おかしい服装をしている美女・着半藤殊宮きはんふじことみやが、警戒心バリバリの湖森に問いかけた。

「ねえ、あなたたちを襲ったオリジオンはどこに行ったかわかるかしら？」

「……と、言われましてもねえ……無我夢中で逃げていたから、どこに行ったのやら。唯ちゃんたちの方を追っかけていったんだらうけど、あれから大分時間がたっているし、居場所なんて見当もつかないなあ……」

「それもそうっすよねえ……それにしても、今回の仕事マジでキツすぎないっすか？」
「うむ、霧崎律刃とかいう転生者を何としても捕らえよって指令が下ったが、詳細が伏せられているのだ」

「……なんか話聞いただけでも怪しき満載なんだけど？」

この人を捕えてください。ただしその理由は伏せられている。

こんなの、どう見たって怪しい。素人目から見てもそれは明らかだ。こういう時は、大抵何かしら裏があるというのが鉄板だ。

「そうねえ……でもまあ、上の考えることなんか、一介の転生者であるあたしたちには理解できないわよ」

「そくそく、私たちは命令通り転生者と戦って捕まえるだけ……現場作業員なんてそんなもんよ」

思考放棄に走っている殊宮と寧理の様子を見て、社畜ってこういう人たちを指すんだろうなあ子どもながらに悟ってしまう湖森。それはある意味で楽なのだろうが、危険な道でもあるのだ。それをこの人達はわかっているのだろうか？

その時、倫吾のスマホから着信音が鳴りだす。

「あ、ごめんなさい。ちよいと上からの連絡っす。ここで話すのもあれなんで席外しますね」

そういつて倫吾はスマホを片手に席を立ち、店の外に出ていったが、守秘義務違反してるくせに今更こそそこそと電話する意味があるのだろうか。

湖森とトモリは、小さな声で囁き合う。

「マジでどうしよう……」

「私でもわかる。この人たち、私達をどうにかするつもりだよ」

素人目でもわかる。彼らは湖森達を解放する気がないのだと。理由はわからないが、倫吾達は湖森達の身柄をなかに利用するつもりなのかもしれない。だいたい、いきなり悪い転生者を退治する警察組織なんて言われても信じられるわけがない。見た目からして不審者まみれの奴らを馬鹿正直に信じられるほど、湖森もトモリもお人よしではないのだ。

しかし、か弱い女性2人だけで、これだけの大人数から逃げられるはずもなく。個室焼き鳥屋という環境も、彼女達にとって逆風となっている。人数差・周囲の環境・土地勘の無さエトセトラ……ともかく、様々な要因が積み重なり、2人を追い詰めているのだ。

「お願いだから……誰か助けてください……」

ともかく今の2人には、窓越しにそう祈るしか道はなかった。

PM8：54

「はあっ……くそっ……」

無束灰司は、身体を引きずりながらミラーワールドから這い出てきた。

振り返ると、鏡越しにドラッグブロッカーが吠えている。果たして、上手く撒けたのだろうか。裁場の実力は灰司よりも上だった。戦場に立ち続けてきたキャリアの差が、実力差となつてこの結果を招いた。だが、灰司は立ち止まっていられないのだ。

懐から取り出した注射器に収められたAMORE謹製栄養剤を乱雑に体内にぶち込みながら、灰司はふらふらと狭い路地を彷徨い歩く。

「ほんと、余計なんだよ……どいつもこいつも……」

灰司の頭の中は、バルジへの憎悪と、今更になつて出しゃばつてきた裁場への憤りでいっぱいだった。なぜあそこで邪魔をする？ 役立たずの癖になぜ今になつて救うなどふざけたことをぬかせるのだ？ もう彼の役目は終わっているのだ。今更、裁場誠一という人間のに与えられる役割なんてものはないのだ。それがなぜわからない？

思い通りにならない現実と、それをどうにかするだけの力がない自分の無力さに苛立ちながらも、灰司は歩を進める。とにかく、立ち止まっていたくなかった。そうしなければ、バルジを逃しそうだし、裁場にまた止められるかもしれないからだ。

ふらふらと歩き続けた灰司は、いつの間にか路地を抜けていた。

その時だった。

「あぶない！」

「っ！」

その声に反応して、灰司は即座に後ろに跳んだ。急な運動で身体のあちこちが悲鳴をあげるかのように痛みを発するが、そんなことはどうでもよかった。

振り返ると、先ほどまで灰司の居た場所には、黒いバイクが一台止まっていた。どうやら人身事故一歩手前だったようだ。しかし、AMOREのエアースエージェントであるはずの灰司が、何故バイクに轢かれかけたのであろうか。いくら負傷しているとはいえ、接近するバイクに気づかないはずがないのだ。

理由は簡単。なぜなら、そのバイクはエンジン音が全くしていなかったことに加え、無灯火だったからだ。

そして、バイクの乗り手——首無しライダーは、満身創痍の灰司を見るなり、バイクを降りて心配そうに駆け寄ってきた。

『大丈夫か？ なんか酷い怪我だが……』

「おー誰かと思えばこの間の転生者狩りさんだ〜」

「なっお前は……！」

首無しライダー——セルティの後ろから顔を出したのは、霧崎律刃であった。

前にあつた時は、別段悪事を働いているわけでもなかったので見逃したのだが、どう
いう風の吹き回しか、今回の剣の重要参考人になってしまったている転生者の少女。バル
ジを追うことも大事だが、灰司もAMOREのエージェント。仕事はしつかりとこなさ
なければならぬ。

『知り合いなのか?』

「まあ、うん」

「霧崎律刃……お前がなぜ事件に巻き込まれている?」

「わかんないんだよね。いつも通りわるいことしてるひとを切り刻んでただけだよ?」

とほけたように律刃はそう答える。まるで、自身に心当たりも悪気もないことで親に
叱られた子供のようになり、そんな無責任な無邪気さがそこにはあつた。

「それよりも首無しライダーさん。目的地つてここなんだよね?」

『ああ、そうなんだが……それにしても、この荒れようは一体……?』

「あ……?」

セルティは律刃に言われて、後ろを振り返る。

そこは、一見すると廃病院のように見えた。都会のど真ん中にこれほど立派な廃虚が
残っていたことも意外だったが、その荒れようは端的に言つて異様であつた。全体的に
ひどく焼け焦げたように煤けており、そのうえから何かが引つ搔いたような跡が随所に

ついている。2階部分は、異常なまでにきれいに球状に抉れており、そこから見える内
部は、真っ白いカビで覆われている。

一体ここで何があつたのかうかがい知ることができない程に、この建物はちぐはぐな
荒れ方をしていた。その異様な光景に、灰司も圧倒されていた。

ここを最終目的地に設定した、依頼人の思惑はいつたい何なのか。ここまで狙われる
ような荷物を運ばせた理由はいつたい何なのか。セルティには、依頼人に聞いたのだした
いことがたくさんある。基本的に依頼人のプライバシーは尊重するのだが、依頼がきつ
かけで、今日一日だけで何度も変な騒動に巻き込まれたのだから、そのあたりの弁解ぐ
らいは欲しいものだ。

そんな思いを抱きながら、セルティは目の前の廃墟を見上げる。

彼らは知る由もないが。

一連の事件の発端は、すぐそこにある。

第28話 PM8：10／引力で結ばれたクソツたれな 関係

PM8：10 露西亜寿司店内

池袋のとある場所にある寿司屋。

名前の通りロシア人が経営する寿司屋とのことで、物珍しき半分で入店した瞬達。今いるメンバーの大半が寿司なんて未体験ということ、みんな揃って目を輝かせていた。なお瞬とアラタはというと、カウンター寿司つて高いんだよね？高校生の金銭的にはめっちゃ不安なだけだなあ……と半分憂鬱な気持ちになっているのだが。

とりあえずテーブル席に座り、お茶あがりでもいただきながら、状況と情報を整理することにした。とにかく今日はいろんなことが起きすぎていて皆混乱気味なのだ。

「うわっ……………!!」

店の前で客引きをしていたデカイ黒人にもびっこりしたのだが、入店してからもびっこりした。店の入り口に一番近いカウンター席に、マスクと帽子とサングラスでこれで

もかというほどに顔を隠し、分厚いロングコートを着た人物が座っていたのだ。こんなにコテコテに怪しい風貌の人間をこれまでに見たことがあっただろうか？

しかしながら、その人物は無言でカウンタ―席に座っているだけ。関わり合いになりたくなくてスルーしているのかは定かではないが、板前も普通に接客しているし、他の客も気にしていない。瞬達もなるべく触れないでおこうと思ひ、そのまま店の奥に進んだ。

席に着くなり、唯はセラの顔をまじまじと見つめはじめた。顔に息がかかりそうな距離まで顔を近づけ、舐めるように観察する。なんかふたりの背後にキマシタワーがうっすらと建ちかけている気がするが、あれは幻覚と思いたい。

「うーん」

「な、なんだ。私の顔をまじまじと見て」

「不思議だなあ……なんでか知らないけど、実質的に初めて会ったはずなのに他人のよくな気がしないんだよなあ……もしかして生き別れの姉妹だったりする？」

やはり、瞬の感じている違和感は、唯自身も感じているらしい。まあ本人はいたって呑気なもので、生き別れの姉妹（仮）の登場に喜んでる様子を見てると、真剣に悩んでいるのが馬鹿らしく思えてくる。なんだかすごく無駄なことだ悩んでいる感が半端ないのだ。

顔をひっこめた唯は、あらぬ妄想に没頭し始める。セラは首を横に振りながら、呆れたように言う。

「……どうだろうな。私は親の顔を知らないから何とも言えないな」

「てことはマジで姉妹だったりして！唯ちゃんがお姉さんでセラさんが妹でさ！」

「志村、ふざけたこと言わないで。真面目な話の最中なんだからさ」

「ええ……ぼく、まじめじゃないとおもわれてるの……？」

調子に乗って変なことを言いだした志村は、山風にぴしやりとキツイことを言われ、隅の方の席で縮こまって湯飲みに口をつける。

閑話休題、くだらないおしゃべりはここまでにして、そろそろ本題に入るとしよう。

丁度頼んでいた寿司もやって来たので、それをつまみながら会議がはじまった。

「これまでの状況を整理しようか」

「お願いします」

「お前も参加するんだよ」

他人任せにしようとしていた唯が、瞬に諫められる。

「まず、セラ……だっけ？お前の見たことを話してくれないか？」

「ああ」

瞬に言われて、セラは語り始めた。レイラ達に襲われる直前で、一般人であるはずの

唯が謎の力を發揮してそれを防いだことと、その力を受けたレイラが「壊れてしまった」ことを。

「ギフトメイカー・バルジ……奴にとつては同じギフトメイカーですら玩具扱いか……」
「つまり……あのレイラも被害者だつてことか」

話を聞けば聞くほど、バルジの悪辣さだけが強まってゆく。これまで何人もの転生者を相手にしてきた瞬だが、比喩物にならない程に邪悪だ。

そして、そんなバルジに洗脳されていたレイラ。これまで何度か彼女に殺されかけた瞬であるが、それが彼女の意思に反して行われたことと知った今は、敵意よりも憐憫を抱いていた。彼女もまた、バルジの被害者なのだ。

「だつたらどうするんだ？ 助ける気じゃないだらうな？」

「……志村、お前の目には、さつき見たレイラがどんな風に映つた？」

「え、僕に聞くの？！」

突然話を振られた志村は、自分に話が回ってくるとは思つておらず、心の準備ができずに戸惑つたが、1, 2分ほどうんうんと唸りながら考えた挙句の果てに、ひとつの答えを出した。

「……とつても苦しんでたよ。初対面の僕から見ても可哀想なくらいに」

「そうか」

「え、まさかお前……あいつを助ける気じゃないよな？」

「助けるよ。それが唯からもらった、俺の正義だ」

「瞬……」

例え殺し合った相手だったとしても、それが本人の望む者でないとするならば、瞬としては看過はできなかった。ビルドオリジオンの時もそうだった。彼は最終的に自ら変わろうとしていたのに、ギフトメイカーの意思で暴れさせられていた。あの時は助けられたのだ。今回も行けるはずだと、瞬は思っていた。

しかしアラタは不服なようで、瞬に文句を言ってくる。

「アイツはギフトメイカーだぜ。そんなの助けたって……」

「そんなのは関係ないだろ。ヒーローが助ける人を選び好みをしちやいけない。その人を本気で助けたいと思ったら、その気持ちを大事にするべきなんじゃないかな」

「劍崎さん……」

「先輩ライダーからのちよつとしたアドバイスさ」

劍崎は微笑みながらそう言うと、熱い緑茶に口をつける。

ヒーローとは、助けを求める人に手を差し伸べられる人の事。そこに貴賤はない。それをやってしまったら、それはもうヒーローとは言えないのだ。

話を変えて、次は唯の謎の力とやらに踏み込んでみよう。しかしながら、瞬は半信半

疑の様子。まあ信じられないのも無理はないかもしれない。

「で、唯。お前が変な力に目覚めたって言うけど……本当なのか？」

「いや、それが全然覚えてないんだよねえ。何があったのやら……セラ、本当に私がやったの？」

「やったな。思い切りやってた。あれは何だ、前々から使えていた……とかではないのか？」

「嫌、そんな筈はないね。私は生まれも育ちもごくごく普通のJKでっせ？あんな馬鹿恐ろしい能力を前々から持ってたら、今頃とつくにスーパーヒーローの仲間入りしてるね」

冗談交じりに笑い、気丈にふるまう唯。彼女の言っていることが本当なのだとしたら、その原因はどこにあるのだろうか？血統か、それとも外的要因によるものなのか。とにかく今は分からないことだらけだ。なんせ本人が覚えていないのだから、他者にわかるわけがないのだ。

しばらく考えたけど、先に志村がギブアップを宣言したので、皆がそれに同調する形で、この件は後回しにされてしまった。結構重要なことだと思うのだが、瞬達には他にも考えるべきことがあるのだ。

「この話は後回しにしない？考えるだけ無駄な気がする……」

「そう……だな。じゃあ話を変えて、当面の問題をおさらいしようか。まずは例の爆弾魔。志村たちが撮ってくれた奴の顔写真があったんで、そいつを元に調べたところ……奴の身元が分かった」

キンジはそう言いながら、志村のスマホに保存されていた、ボマーオリジオンに変身した男の顔写真を表示させる。瞬はこういうのにあんまり詳しくないのでよくわからないのだが、こんな短時間で分かるものなんだろうか？

「赤浦健一、25歳。機械工学に精通した若手の技術者だ。1年前まで仲間と共に小さな工場を営んでいたようだが、原因不明の火災により工場が全焼してからは他のメンバー共々消息不明になっている。都会のど真ん中で起きたから、結構大騒ぎになっていたんだ」

「あ、そういうえばこの人の顔ニュースで見たかもしれない。けっこう大きな騒ぎになってたよね？」

「そうそう、池袋のど真ん中での火災だったから、すごい目立ってたのよね」

大鳳達が赤浦の画像を見ながら頷いている。彼女ら曰く、連日報道されるくらいの大事件だったらしいのだが、瞬にはピンとこない。それほど大騒ぎになったのなら、普段ニュース番組を見ないような人でも知っているはず。おそらくこれは、次元統合によつて生まれた歴史なのだ。故に瞬はそれを認識できていないのだ。

しつくりこない様子の瞬と唯だったが、他の皆は気づいていない。キンジはスマホを操作して、言及した火災についてのネット記事を画面に表示する。そこには、赤浦の他に、二人の男女の顔写真も掲載されていた。ひとりは、額にサングラスを引っさげた青髪の男。もうひとりは、白衣を着た、血できそうな雰囲気を漂わせる茶髪の女性だった。「こつちが赤浦健一あいでうの同僚。相藤レイと青島慈愛あおしまじあい。彼らも火災事故以降消息不明となっている。思いつき怪しくないか？」

「死んだ……とかじゃないの？」

「いや、焼け跡からは2人の死体は見つかってはいない。故に生死不明ってことらしい」
皆が自分の知らない話題に突入している時の疎外感とは、なんとも居心地が悪い。折角の寿司も味気なく思えてしまう。瞬はそれをごまかすかのように、次の話題にうつる。兎に角、敵の素性が分かっただけでも一歩前進だ。

「次に湖森と……ついでにトモリのこと。多分、オリジオンから逃げてる途中で唯達とはぐれてしまったんだらう。電話は繋がらない。どうしたらいいんだらうなあ……」

「そりゃあ……しらみつぶしに？」

「アホか唯。そんなんで見つかりや苦労せんわ」

「だよね……湖森ちゃん、危険な目にあつてなきやいいけどさあ……」

瞬と唯は、湖森の顔を思い浮かべる。仮面ライダーになってからは、色々と苦労を掛

けてしまっている。今日は湖森の全快記念の遠出だったのにも関わらず、三度巻き込んでしまったこと。それと、怪我のせいですぐには助けに行けない今の現状が、非常に腹立たしく思えてくる。

その屈辱を少しでも紛らわそうと、次の問題にうつる。黙り込んでいると、ますます自己嫌悪に陥りそうだと。

「3つ目は、さっきの武偵のオリジオン。次はいつ襲ってくるかわかったもんじやない……いつも通り、話通じなさそうな感じだったしなあ」

「……普段お前らはどんな生活送ってるんだ?」

キンジが呆れたように言うが、話の通じない相手と毎日のようにドンパチやってる生活を望む奴がどこにいるというのだ。瞬だつて望んで戦っているわけじゃない。できれば戦いたくはないのだが、オリジオンによつて傷つけられている人を守るために必死に戦っているのだ。

続けて瞬は何か言おうとしたが、ふと言いよどんでしまう。

果たして、これを伝えるべきなのだろうか。短い間とはいえ、一緒に過ごした友人の秘密を、勝手に暴露していいのだろうか。きつと彼は望まないだろう。だが、シヨックが大きくなる前に伝えてしまった方がいいのかもしれない。

瞬は意を決して、カミングアウトした。

「それに裁場誠……仮面ライダーユナイトと、転生者狩り……灰司のこと」

この場にいるものの中では、瞬以外は知らなかった、ふたりのライダーの素性。それを明かした。

真横でそれを聞いていたアラタは、素つ頓狂な声をあげて困惑する。

「え、何言ってるんだよ……え、灰司が転生者狩り？てかユナイトって何？」

「灰司は転生者狩り……仮面ライダーだった。俺も知ったのはついさっきだったけどな」

「マジで言ってるのかそれ……目立たない奴だと思ったら、そんな裏の顔があったのかよ……」

驚きすぎて若干放心気味になっているアラタ。しかし、瞬だつて驚いているのだ。これまでちよくちよく戦場で顔を合わせていた転生者狩りの正体が、こんなに身近にいたのだから無理もないだろう。おまけに本人は、ユナイトと戦いを始めて以降音沙汰無し。今頃、灰司はいったいどこで何をしているのだろうか。

そして裁場誠——仮面ライダーユナイトの存在。彼がなぜクロスドライバーを持つているのか、そしてどういう目的で仮面ライダーとして戦っているのが謎である以上、安直に彼を信用していいのか、疑問符が残る。

しかし、瞬は彼らともう一度会うべきだと思った。わからないのなら、本人から聞け

ばいい。ろくに話もしないで、その人を理解できるはずがないのだから。

「そして、もう一人のクロスドライバーの持ち主、裁場誠一。あの人が敵か味方がわからないけど……とにかく俺は、もう一度あの2人に会って話をしなきゃいけないと思う。」
「私たちが道草食っている間にそんなビックイイベントが起きていたなんて……九瀬川ハル、一生の不覚なり……お詫びとして着ているスク水を自ら切り刻んで……」

「それ切腹のつもりなの？てか今日も着てきてたの？」

「何よそれ、変態？」

「アリアさんもきつと似合うと思うんですけどね」

「お断りよー」

泣きながらシャツを捲り上げるハル。その下には、紺色のスクール水着がてかてかと輝いていた。ご丁寧に名前の記入された白いゼッケンも貼られている。あれインナーを見せてるんじゃないやなくてスクール水着だったのかと驚く一方で、ハルの変態っぷりに一同ドン引きしていた。おまけにアリアにスク水薦める始末。なんか向こうは今にも銃を抜きそうになっているが大丈夫なんだろうか。

これまでの重苦しい雰囲気とは一変し、なんか一気に騒がしくなった。ハルを落ち着かせながら、山風が問いかける。

「で、どうするの？帰る気……は、皆なさそうだね……」

「まあ無視して帰るにしましては、深入りしすぎた感があるよなあ……」

「あんたたちと一緒に進んでいけば、あたしたちが追っている爆弾魔にも辿り着けるってことでいいのよね？」

「かち合う可能性は十二分にあるかもね」

てんでバラバラな始まりだったが、行き着く先はだいたい同じ。

瞬は寿司をもう一貫食べると、おもむろに席を立つ。

「ん、どこ行くんだ？」

「トイレだったの」

そうかい、とそっけなく返すと、アラタは再び談笑に戻っていった。

瞬は若干にぎやかな店内から外れ、静かなトイレに向かう。途中だった。

「……………さつき、赤浦健一と言ったな？」

「!!」

突然に、後ろから声をかけられた。

驚いて振り返ると、そこには、先ほど店の入り口付近にいた怪しい風貌の人物が立っていた。まるで瞬の退路を断つかのように。

それよりも、今コイツは赤浦健一の名前を発した。先ほどの会話を聞いていたのかと思っただが、瞬達のいた席は店のかなり奥の方だし、声のポリウムは絞っていた。他の

客の話し声も加味すると、この不審者の席からは瞬達の会話内容を聞き取るのは、よっぽど耳に自信がないと困難なはずなのだ。

それとも、コイツは赤浦が起こしている事件に何らな形の形で関与していたりするのだろうか？ 目の前の人物の風貌の怪しさが、どんどん瞬の警戒心を増幅させてゆく。

「アンタ……何者だ……？ まさか奴の仲間じゃ……」

「いや、俺はどちらかというと被害者……否、標的に近い」

コイツは何を言っているのだ？

瞬が不審者の発言の意図を汲み取れずに首をかしげていると、彼(?)は瞬の肩にぼんと手を置いて、こう言った。

「君たちがなぜ赤浦を追っているのかは知らないが、一応忠告しておく。これ以上はやめておけ」

「忠告だつて……?」

「これは俺と奴の問題だし、真つ当な解決手段なんてない。たぶん、俺とアイツのどちらかが死なないと終わらない」

「結局のところ、何が言いたいんだ……?」

「他人の喧嘩に横やり入れんな死にてえのか馬鹿野郎、つてことだよ」

不審者は、冷ややかな声でそう言った。

何が何でも自分が終わらせる。そんな固い決意の込められた冷たさだった。が、そうは言っても簡単にはいそうですかとは言えない。

「いきなりなんなんだよアンタは……そんなことを初対面の怪しい奴に言われても信じられない」

「それは至極真つ当な意見だ。だがな……この件に関しては本当に君たちは部外者なんだ。単純な正義感で介入されたら余計こじれて、俺と奴の喧嘩どころじゃすまなくなる。それは俺も君たちも望まないはずだ。だから手を引いてほしい。俺だって、これ以上ことを大きくしたくない」

「だったら素性くらい名乗ってもいいんじゃないのか？それとも、明かせない理由があるのか？」

「……俺は追う側でもあり追われる側でもあるからな。すまないが俺から言えるのはここまでだ」

そう言うのと、その不審者は勝手口から店を出ようとする。

ドアノブを捻りながら、瞬に向かつて一言、こう言った。

「安心しろ、代金なら既に支払った後だ」

いや無銭飲食の疑い晴らしても不審者なのは変わらないし、そもそも追われている癖にすさまじく怪しい恰好で寿司食いに来るとかいう悪目立ちやるとか馬鹿なのかとか

色々と言つてやりたかったが、彼(?)の言うことがどうも納得いかない瞬は、その人物を呼び止めようとする。

急に出てきといつて引つ込んでると言われ、言われたとおりに引つ込む奴も納得できる奴もない。どう考えても、ここまで巻き込まれた奴に対して言うことじゃない。それに瞬は、ボマーオリジオンの被害に2回も合い、その脅威を身に染みて理解しているからこそ、ボマーオリジオンを放置してはいけない存在であると認識している。目の前の人物は、自分とボマーの問題だから自分でなんとかすると言っているが、それまでにでる被害を考慮すると、瞬としてはどうしても引き下がれない。

「やっぱり俺は、あんたの言うことは何一つ納得できない！あいつは放置すればどんどん——」

「危ない！」

瞬が怒鳴るのと同時に、不審者がそう叫びながら、瞬を突き飛ばした。

すると、どこからか目にもとまらぬ速さで一本の剣が飛んできて、ドアを通過してその向こうの壁に突き刺さった。あまりにも早すぎて、突き刺さった音すらも置き去りにするものだった。

瞬が突き刺さった剣に呆気にと取られていると、どこからか聞き覚えのある声が飛んできた。

「節 ^{Temperance} 制の剣を躲すとは……流石、無力ながらも転生者というべきですか」

そう言いながら、路地の果ての闇から姿を現したのは、黒いコートを着た眼鏡の男だった。眼鏡越しに此方を覗いている、人を人として見ていない様な冷たい目をしたその男を、瞬は知っている。

ギフトメイカー直属の精鋭転生者であるリバイブ・フォースのひとり、タロットオリジオン。舞網で交戦したその男が、再び瞬の前に現れていた。

「見つけましたよ……こんなところに隠れていたのですか」

「な、お前は……」

「では改めまして自己紹介を。私はリバイブ・フォースが一人、とつきほく二十鬼占。またの名をタロットオリジオンと申します。以後お見知りおきを……そしてさようなら」

《KAKUSEI TALOT》

二十鬼はお辞儀をすると、オリジオンとしての姿をあらわにする。身体のあちこちに浮かび上がるタロットカードの絵柄が彫られたレリーフ、右半分が骸骨、左半分が黄金の仮面に覆われている頭部。その姿はまぎれもなく、前に出会ったタロットオリジオンであった。

タロットオリジオンは、手に持った杖を突きつけながら瞬に言い放つ。

「アクロス、再び合間見えませんでしたね。ついでです、纏めて始末してしましましょう」

「くそ……よりによってギフトメイカーが出てくるとは……」

「あんたを追っている奴らってギフトメイカーなのか?! てか転生者だったの?!」

「そんなことよりもここから逃げるぞ!このままだとこの店がぶっ壊れかねない!」

彼(?)の言葉に従い、瞬は開け放たれたままの勝手口から外へと飛び出した。不審者も瞬に続いて勝手口に飛び込む。その瞬間、先ほどまで瞬達の立っていた箇所が一瞬で円形に抉れた。音すらない破壊であった。

向こうは完全に殺す気で来ている。それならばアクロスに変身して応戦するしかない。瞬はクロスドライバーを装着しながらタロットオリジオンに突進する。兎に角店にいる人達を巻き込まないように、タロットオリジオンをこの場から引き離す。

「邪魔です、The Tower 塔!」

「え、あれ、え?」

タロットオリジオンがそう叫ぶと、抑え込んでいた筈のタロットオリジオンの身体を、瞬がすり抜けてしまった。瞬は突然消え去った質量に困惑しながら、前のめりに倒れこむ。

「無意味です。貴方の行いはバベルの塔の如く、無駄に終わりました」

「いったい幾つ能力があるんだコイツ……!」

「そして、The Sun 太陽の逆位置。貴方のすべてが停滞する」

「しまっ……」

タロットオリジオンが不審者に手をかざしながらそう告げると、彼(?)の身体の動きがピタリと停止する。身動きを封じられてしまったのだ。タロットオリジオンは、壁に突き刺さった剣を引き抜くと、動けない不審者の胸元に突き立てようとする。

その人物を死なせるわけにはいかないと、瞬は判断した。それは打算的な意味ではなく、純粋な正義感からくるもの。アクロスライドアーツを取り出してクロスドライバーに装填すると、タロットオリジオンに向かって体当たりを仕掛ながら変身する。

「変身ー!」

《CROSS OVER! 仮面ライダーアクロス!》

「邪魔なんですよー!」

タロットオリジオンは不審者に突き立てようとしていた剣を、突っ込んできたアクロスに向かって投げつけた。しかし、アクロスはそれを片手で打ち払い、真上に打ち上げる。これにはさすがのタロットオリジオンも驚いたようなそぶりを見せるが、アクロスは構わずに、剣を打ち払ったのとは反対側の拳でタロットオリジオンの脇腹をぶん殴る。

タロットオリジオンがよろけると同時に、彼の能力が途切れ、不審者が解放される。

そのままアクロスは、不審者を庇うようにタロットオリジオンの前に立ち、ツインズ

バスターを構える。

「前よりはマシになっていきますね、貴方」

「そりやあれから何度か戦ったからな。経験値溜まってんだよ」

「やはり貴方には我々の脅威となる素質がある……早急に始末するべきでしょう」

タロットオリジオンはそう言いながら杖から幾つもの火球を生み出し、自身の周囲に旋回させる。その声には僅かながら、自身の手を煩わせる者への苛立ちのようなものがかもつているように聞こえた。

アクロスは、背後にいる不審者の方を見る。兎に角彼はギフトメイカーから狙われており、赤浦健一について何かを知っている。情報源として、そもそも被害者として、助けないわけにはいかなかった。アクロスは彼(?)の手を引っ張りながら、タロットオリジオンのいる方とは逆方向に駆け出す、同時に、タロットオリジオンの周囲を回っていた火球が、一斉に彼らの後を追うように動き出す。

「逃がしません、貴方達を野放しにするわけにはいかないのです!」

「くそつ、迎撃するにしろ兎に角ここから離れた場所に行かないと!」

「それもそうだな!戦うにしてもここは狭いし目立つからな!」

さあ、追いかけてこの始まりだ。

ちなみにこの時。

タロットオリジオンの火球から逃げながら、アクロスはこんなことを考えていた。

「やべ、これ無銭飲食にならないかな……」

命のやり取りの最中とは思えない、何とも言えない悩み。しかしながら、仮面ライダーが犯罪行為とか笑えないのも事実。

兎に角、他の皆が払ってくれていることを祈ろう。
そう思いながら逃げるのであった。

P M 8 : 4 4 焼き鳥屋『健太焼』裏手

「……………」

通話を切った御手洗倫吾は、呆然としていた。

ダラダラと冷や汗が流れていることさえも気に止まらない程に、今の彼は困惑していた。

「そんなこと……できるわけないっすよ……何考えてんすか上は……」

電話の相手は、A M O R Eの上層部からだった。倫吾の上司は、部下の些細な失敗を

針小棒大に取り扱ったり、部下の手柄を自分の手柄のように自慢するような、世間一般でいう典型的なブラック上司なので、部下達から苦手意識を持たれている。故に倫吾も、気が乗らないながらも仕方なしに電話に応じたのだが、彼から告げられた命令に耳を疑った。

——あんなこと、できるわけがない。能力の問題ではなく、倫吾の中にある、人間として当たり前持っている良識が、それを実行することを拒んでいる。上司としては尊敬できなくとも、世界を守る責務を負うにふさわしい一線というものを持つていた筈の上司が、本気で人間とは思えなくなった。

困り果てた倫吾は、下澤巻密に相談することにした。チームメンバーの中では一番の古株である彼ならば、きつと自分の意見に賛同してくれるだろうと思いつながらの行動だったのだ。彼をメールで店の外に呼び出し、事情を話す。

しかし、彼は倫吾の期待を見事に裏切った。

「それが俺達の仕事ならやるしかないんじゃないか？俺達下っ端が何言っても無駄だよ」

「で、でもこんなの……明らかにおかしいつすよね!! AMOREは正義の組織じゃないかっつんすか!!」

「AMOREの目的は多次元の秩序維持だ。そのためなんだつす……オリエン

嫌な予感がする。

倫吾は、冷や汗を全身から吹き出しながら店の方を振り返る。スマホを落としたことに気づかない程に、彼は動揺していた。なんとなくついてしまっている予想がはずれていることを願いながら、彼は個室に戻る。そうだ、あんなことできるわけがない。今も店内では皆が和氣藹々とやっているはずなんだから。そうであつてほしい。そう思いながら、倫吾は戻る。

だが。

その希望はすぐに葬り去られた。

「え……」

席に戻った彼が見たのは、死んだように眠る湖森とトモリ、そして、彼女たちを取り囲むようにして某立ちしている同僚たちの姿であつた。先ほどまでの和氣藹々とした雰囲気はどこにもない。店内の他のボックス席では、いつもと変わらない賑やかさが存在していることが、余計にこの場の異様さを強めているように思えた。

うわ言のように「え？」とつぶやきながら、倫吾は湖森やトモリの肩をゆする。死んではないだろうだが、彼女たちは目覚めない。2人が殺されたわけでもないことに内心安堵しながらも、震える口で同僚たちに問いかける。

「なに、やってんすか」

その問いかけに答えるものは居ない。皆、無言で湖森達を見下ろしている。

「あんなふざけた指令を……ほんとにやっちゃったんすか……？ 嘘つすよね？」

縋りつくように何度も問いかける倫吾だったが、誰も答えない。しかし、倫吾も察していた。この沈黙は肯定の意であると。自身の問いかけは、それを補強しているだけに過ぎないと。

ぱつと後ろを振り返る。そこには、冷やかな表情を浮かべた巻密が立っている。

「嘘であつてくれよ……こんなの、あんまりつすよ」

そう言った瞬間、倫吾は後頭部を思いきりぶん殴られて意識を手放した。

思惑が、加速する。

P M 8 : 4 8

ミラーワールドから抜け出した裁場は、武偵としての仕事をこなしながら灰司の行方を追っていた。仕事とは無論、爆弾魔——ボマーオリジオンの搜索だ。

彼の手によって、今日だけで5人が死んだ。昼間のビル爆破事件はかなりの騒ぎとなったが、それとは裏腹に、死者はたったひとりだけであった。同時刻のアパート爆破事件も、玄関前にいたパーテン服の男が軽傷を負っただけで死者は爆発源の部屋の住人

ひとりだけ。事件の大きさと犠牲者の数が酷くちぐはぐだった。

そして、この世界の住人たちは気づいていない、被害者たちの本当の素性を、裁場は知っていた。

「やはり、狙われているのはAMOREの元隊員……それも、あの事件の関係者として疑われていた人物ばかりだ」

ではなぜ、わざわざ爆殺という目立つ方法でやるのだ？彼の転生特典を駆使すれば、ビル火災を起こすほどの爆発を起こさずとも、ターゲットだけを爆殺することができるはずなのだ。まるで、誰かにわざわざ見せつけているかのようだ。

——では、誰に？

「ん、あれは……」

思考する裁場だったが、ふいに、視界の果てに見知った顔を見かけた。

何かから逃げるように、路地から飛び出してきたそれを、裁場は知っている。

「アクロス……いや、逢瀬瞬……何をしているんだ？」

PM8：56 廃虚前交差点

目の前にそびえたつ廃虚を見上げながら、セルティは待っていた。

ここが、依頼の際に提示されていた最終ポイント。託されたブツをここまで持つてく

ることが、彼女に課せられた依頼であった。少し前に、依頼者から「近くまで来ているからもう少し待ってくれ」と言われたので、こうして待っているのだ。

彼女から少しばかり離れたところでは、律刃と灰司が地面に座り込んでいた。

「帰りなよ、キミは関係ないはずだよね？」

「お前を見張っているんだ。組織が何を考えてんのかは知らねえが、お前を見張っているばおのずとそれがわかる」

「ふーん、キミって変に真面目なんだね……でもそれは建前。ほんとはまだ傷が癒えていないだけ、そうでしょう？よかったらわたしたちがなんとかするけど？」

「余計悪化しそうだからナシだ。お前の転生特典はだいたいわかっているからな」

そう毒づきながら、灰司は目の前の廃虚を見上げる。

律刃の言っていることは事実だった。今はまだ万全ではない。悔しいが、バルジを確実に殺すためには体力を回復しなければならぬ。故に、灰司はここにとどまっている。

そして、セルテイ達からもらった情報をまとめ終えた灰司は、口を開いた。

「……お前らの話を総合するに、お前らの持っているナニカ……それをギフトメイカーとAMOREの双方が狙っているようだ」

「キミもAMOREなんですよ？その辺は知らないの？」

「俺に下った指令じゃないから知らん」

『転生者、か。誠に信じがたい話だ……遊馬崎あたりだったら羨ましがらるんだけれども』

情報をまとめる過程で転生者について知らされたセルティは半信半疑だったが、そもそも自分がデュラハンの癖に今更輪廻転生を否定するのなあとも思っていた。自分含めてオカルティックなものをいくつか目の当たりにしているのだから。

話を聞く限り、彼女達はギフトメイカーだけでなく、AMOREにも追われている。恐らく今朝出会った際に倫吾達が従事していたのも、その任務の一環だろう。

(どこだ?どこに中心核がある?)

事件の中核がいまだにわからない。どこか遠くにあるような気がしてならない。身体中にとめどなくはしり続ける痛みを忘れてしまうくらいに思索にふけていた灰司だったが、そこに、此方に近づいてくる。一つの足音が耳に入る。

灰司が反応するよりも早く、律刃が手に持っていた彫刻刀を一本、足音のする方に向かって投げた。ギラリと刃を光らせながら飛んでいくそれは、闇の中から現れたひとつの手によって受け止められる。その手は、キャッチした彫刻刀を鬱陶しそうにその場に投げ捨てると、闇の中からぬつと手を伸ばし、手の主の姿を灰司達の元へと晒す。

「見つけたぜ……」

「あなたは昨日の爆弾魔さん……また殺し合う？」

そこから現れたのは、ボマーオリジオンだった。

彼は律刃の方を見るなり、手のひらから火花をバチバチと走らせながら彼女を睨みつける。

「お前のせいで予定が狂った。だからお前からブツを取り返した後にたつぷりといたぶることにした」

「わたしたちとしては特にあなたに恨みつらみはないんだけど……おかあさんの望みなら殺すよ」

両者は相對する。そこに、セルティも灰司も、介入の余地はなかった。

「待てや爆弾魔あ！人殺しかけといて逃げるとか人間の屑がこの野郎……い！」

「先輩マズいですよ!! あれどうみてもまともじゃないですから！」

そこに、何とも不快な甲高い怒号が飛んできた。ボマーオリジオンが、自身の走ってきた方を振り返ると、茶色いステハゲと馬鹿面坊主がこちらに向かつて走ってきていた。

ラーメン屋の屋台での犯行で巻き込まれた野獣たちが追い付いてきた。特に一番危ない目にあつた野獣は怒り心頭のように、遠野が心配して静止するのも聞かずに、握りこぶしを携え、三浦と共にボマーオリジオンに突っ込んでいこうとする。

片手を軽く薙ぎ払うだけで、野獣と三浦もホラホラツシユを中断させ、ふたりの胴体から空きにした。

そして、非常に苛立ったような声でこう言った。

「ホモ共のお遊戯会に付き合っている暇はない……本物のラツシユつてのはなあ、こうするんだっ！」

「又ツ!!」

「あつ……」

『その二人、危ない!』

野獣と三浦は慌てて身構えるが、ギリギリ間に合わない。次の瞬間、ボマーオリジオンはホラホラツシユを凌駕するスピードでラツシユを繰り出した。いくらホモといえども生身の人間とオリジオンとは、基礎ステータスの時点で圧倒的な差異がある。ボマーオリジオンの強烈なラツシユをもろに喰らった野獣たちは、バレーボールのシュートの如き勢いで地面にたたきつけられた。

びくびくと痙攣している野獣たちに、木村たちが慌てて駆け寄る。いくら嫌いな先輩といえども、さすがにこの状況ではそうは言っていられないのだろう。

「ふたりともしっかりしてください！」

「迫真空手が……通じない……だと……」

「アーイキソ……」

絶望したような顔をしながら、野獣と三浦は気を失った。

邪魔者を無力化したボマーオリジオンは、再び律刃の方に向かって歩き始める。

『お前が何を考えているのかは知らないが、その子に手を出すなら——』
セルテイが身構える。

そこに、またしても乱入者が現れた。

「しごといですね。ですがこれはどうでしょう？」

「同じ手を二度も喰らうかっての！」

アクロスがタロットオリジオンと戦いながら此方に転がり込んできた。

ツインズバスターでタロットオリジオンの剣と鍔迫り合いを繰り広げながら、アクロスはボマーオリジオンと律刃の間に割って入ってゆく。その最中、瞬はいくつかの見た顔の存在に気づいた。

「遊矢、灰司!! なんでここに……」

「そういう瞬こそ、なんで……てかこれ、どういう状況……?」

その疑問に答え得る者はいない。この場にいる全員が、無軌道な邂逅の連鎖の果てに、ここにたどり着いただけに過ぎないのだから。

「感動の再開のところ悪いのですが、死ね！」

「うわっ!!」

何が起きているのかわからずに立ち尽くす空手部の面々の前で、タロットオリジナルの火球をツインズバスターで弾き飛ばしていくアクロスだったが、タロットオリジナルは電撃を纏った杖をアクロスに向かって投げつけてその身体を大きく吹き飛ばし、変身解除に追い込む。

クロスドライバーが身体から離れ、灰司の足元まで転がってゆく。変身解除された瞬間は、ごろごろと転がりながら、停めてあったセルテイのバイクに激突する。

タロットオリジナルは地面に落ちた杖を拾い、瞬に追撃をしようとする。しかし、
「それっ♪」

律刃がタロットオリジナルの首筋目掛けて彫刻刀を投げつけた。だが、その彫刻刀は首に刺さる直前でタロットオリジナルにキャッチされてしまう。

「ごめんね。おかあさん、随分と正義感とか強い人だからさ。あなたみたいな人は許せないんだ」

「ほう、転生者の身でありながらギフトメイカーに逆らうのですか。なんとも愚かな」

そう言うのとタロットオリジナルはキャッチした彫刻刀を一枚のタロットカードに変化させると、それを律刃に向かって投げた。律刃は隠し持っていたカッターナイフでそれを切ってしまうとするが、タロットカードはカッターナイフの刃をすり抜け、律刃

の腹部に深々と突き刺さった。黒いシャツが血で赤く染まり、律刃はその場に膝をつく。

小さな口から少量の血を吐き出しながら、律刃は刺さったカードを乱雑に引き抜いて投げ捨てる。そのタロットカードに書かれていたのは「愚者^{The Fool}」。まるで律刃のことを馬鹿にするようなチョイスであった。

そこに、背後からボマーオリジオンが飛び掛かってくる。すかさず律刃は振り向いて反撃するが、負傷により反応が遅れ、その頬にボマーの一撃を喰らい、地面に倒れる。それと同時に、彼女の短パンのポケットから何かが転がり落ちる。それは、少し前にセルティに見せた、チップのようなものが入った透明なケースだった。ボマーオリジオンはそれに気づくと瞬時にその手を伸ばし、ケースを回収する。

「あ、しまった」

「貰ったぜ……！返してもらったぜ！」

そう言いながら、ボマーオリジオンは律刃を蹴とばした。幼い少女の身体が、血をまき散らしながら瞬の目の前まで転がっていく。瞬は腹を押さえてうずくまる律刃に手を伸ばそうとするが、そこに、タロットオリジオンが真上から攻撃を仕掛けてきた。

「アクロス、その裏切り者の転生者共々死になさい」

タロットオリジオンと共に、何本もの氷の刃が瞬と律刃に向かって降り注ぐ。変身す

る暇も、避ける暇もない。瞬にできるのは、律刃の肉壁となることのみ。瞬は意を決して、目の前の少女の肉壁になろうとする。

しかし、突如として瞬に向かって降り注がれるはずだった氷の刃が、空中で砕け散った。その音を訊いて瞬がぼつと真上を見上げると、降ってくるはずだった氷の刃が次々と砕かれていった。一体何が起きているのかと困惑する瞬だったが、即座に我に返る。

十数本の氷の刃が同時に襲ってくるならば回避は不可能だが、タロットオリジオンの手にある一本だけならばまだなんとかなる。そう判断した瞬は、律刃を抱き寄せながら、上から降ってきたタロットオリジオンの身体を軽く手で押して、その落下軌道を僅かにずらす。瞬めがけて落下攻撃を仕掛けたはずのタロットオリジオンは、僅かに逸れて瞬の真横に着地する。

「誰です、我々に仇なす者は！」

「俺だ」

その声と同時に、タロットオリジオンの顔面に光弾が撃ち込まれた。

光弾と声飛んできた方を、瞬は見る。そこに立っていたのは。

「間に合ったようだな」

「裁場、さん……」

裁場誠一だった。紆余曲折あって、彼もここにたどり着いたのだ。

裁場は、フュージョンマグナムの銃口を構えながら此方に近づいてくる。しかし、ボマーオリジオンはお構いなしに瞬に向かつて飛び掛かってくる。

「はあああああああああああつー！」

「つぶねえー！」

ボマーオリジオンは勢いよく拳を突き出す。瞬は咄嗟に頭をひっこめてそれを躲すが、ボマーオリジオンの狙いは瞬の首ではない。正確にはその背後、セルティの乗ってきたバイクの荷台に括りつけられた依頼物。括りつけていた紐を引きちぎりながらそれを手元に引き寄せると、バリバリと外装のバッグを破いてゆく。

その作業の傍ら、ボマーオリジオンは手のひらから極小の手榴弾のようなものを生成すると、瞬とタロットオリジオンがやって来た方——息をひそめながら事態を静観していた不審者目掛けてそれを投げた。

「……………！」

瞬間、その人物は爆炎に包まれた。

ビー玉サイズの爆弾が引き起こした爆発は、瞬く間に人間一人を軽く焼き殺すほどの熱量へと変化する。不審者は、火に包まれたコートや帽子を咄嗟に脱ぎ捨てることで、炎が全身に燃え広がるのを回避する。そして、燃え上がる炎の向こう側から、どこか気だるげそうな、だけど芯が確かにあるような、そんな声がする。

「相変わらずっ……やることが過激だなお前……」

コートが焼け焦げ、ボロボロの白衣が現れる。つけていたサングラスとマスクが落ちる。

コートの下から現れたのは、額にサングラスをひっさげ、青い髪をした、190cmはありそうなほどの長身の男だった。露になったその顔を見て、ボマーオリジオンは歓喜の声をあげた。待ち焦がれていたものがようやく目の前に現れた時のような、クリスマスプレゼントを目の前にした子供のような、そんな無邪気さのこもった声だった。

瞬はその男の顔に見覚えがあった。なんせついさつき顔写真を見せられたのだから。青髪の男に睨まれながら、ボマーオリジオンはその男の名前を呟く。忌々しさと歓喜が入り混じった、まるで空気を震わすかのような声だった。

「見つけたぜ相藤レイ……」

「最悪だな、赤浦……。 temeエとこんなに早く再開する羽目になるなんてな……」

青髪の男——相藤レイと、変身を解いたボマーオリジオン——赤浦健一は、互いに睨み合う。

「この場所が何か、お前は知っているか？」

「知っているもなにも……。ここが、俺達の居場所だった……！お前がぶち壊した、俺達のすべてが詰まった場所だ！」

「一つ付け加えるのを忘れてるぜ？ここは、俺と彼女の愛の巣になるはずだった場所だ」
「……………まだそんなこと言ってるやがんのか？」

「なるね！お前はわざわざ俺のためにアイツをここまで運んできてくれたんだらう！！
既にこの廃虚にあったブツは俺が手に入れている。だから、ピースは揃ったんだ」

そう言いながら、赤浦はバッグを引きちぎってその中身を引っ張り出す。中には、銀色のアタツシユケースが納められていた。赤浦はアタツシユケースについていたテンキーに、迷うことなく4桁の数字を打ち込み、その封を開ける。

その中身を見て、赤浦とレイ以外の全員が絶句した。

「なんだよ……………それ……………」

その中に入っていたのは。

バラバラになった女の子だった。

「どういうことだ？これは一体なんだ？なんでこのタイミングでこんなものが出てくるのだ？」

瞬もセルティも裁場も灰司も遊矢も木村も律刃も、わけがわからなかった。

それは、酷く綺麗だった。眠っているかのように安らかな表情をした少女の頭部。間接ごとに分解された腕と足。透き通るような白い肌を見せる胴体。天使の輪を思わせる、頭部についた金属の輪。防腐処理などでは到底不可能な清潔さに、誰もがこう思った。

『「こいつは……人間じゃ、生き物じゃない」』

勢いよくアタッシュケースが開かれた衝撃で、少女の二の腕が一本、セルティの足元まで転がっていく。セルティはそれを拾い上げる。そして気づいた。

「こいつは冷たい。冷たいが、それは生物が死んで冷えたとか、そういう類の冷たさではない。もつと無機物めいたものだ。」

つまり、これは死体ではなくて――

「そうさ。こいつは死体じゃない。彼女は俺達が作り上げた最新鋭のアンドロイドなんだからな」

答え合わせのように、赤浦はそう言った。

彼女こそが、今回の事件の発端。

ひとつの夢の結晶が招いた、愛の暴走。

ここから語られるのは、その前日譚だ。
プロローグ

第29話 PM9:02 / 望まれて生まれた生命

10年前

とある昼下がりの高校の教室にて、少年と少女が語り合っていた。

少年の名は相藤レイ。頭の良さに自信があるだけで、人並みに笑い、人並みに悲しむことのできる、普通の少年だ。彼は、目の前の少女に対して、自身の夢を熱く語っていた。

「人型ロボットを作りたい？」

「そうそう！誰もが一度は憧れるもんじゃあないの？」

「馬鹿なこと言わないで。どれだけの人がそれに挑み、諦めてきたと思っているのよ？」

「ええ？折角転生したんだからさあ、なんかでつかいこと成し遂げたいじゃん」

「それならハーレムでも作ってなさいよ」

「すでに皆やった後だってーの！めぼしい美少女はみんな他の転生者が取っていった

の、お前も見えていただろうが」

「まあその前に貴方の性格じゃどんな女の子でも寄つてこないわよ。せいぜいわたしみたいなもの好きぐらいが関の山。わかつているでしょう?」

相藤レイの必死のプレゼンテーションを、冷めた態度でいなす少女。彼女の名は青島慈愛。幼いころから頭脳明晰であるがゆえに、周囲を冷めた目でしか見ることできない哀れな少女。そして、後ろの席で2人の会話をずっと聞いていた少年が、ここにきて口をはさんできた。彼の名は赤浦健一。どこか拗ねた雰囲気、どちらかという陰気な部類の人間だ。

3人は転生者だった。人生半ばで不幸にもその生涯を終えた彼らは、何の因果か、こうして第2の青春を謳歌していた。他にもたくさん転生者がいたが、その大半は原作キャラと繋がりを持ちたがり、気に食わない原作キャラを虐めたり、転生者同士で殺し合ったりと、かなり殺伐とした人生を歩んでいたが、レイ達はそんなことには興味はなかったのだ、のらりくらりと躲しながら、普通の人間と同一ような生活を送っていた。

そして、前世の知識というアドバンテージを多少生かしながらも、基本的には自分の力で努力して名門高校に進学した彼らは、こうして夢について熱く語り合っていた。

「お前らさつきから何話してんだ?人型ロボット?」

「三人寄れば文殊の知恵と言うじゃないか。俺達の頭脳を合わせればきつといける!俺

はそう信じている！」

「船頭多くして船山に上るとも言うぞ。そうならなきやいいがな」

「ああもう、赤浦！お前は どうしていつも そうなんだ？ お前みたい にさ、現代人 っ て の は ロマン っ て の が ない ン だ よ ー ！」

「ああ？」

「……でも、面白そうね」

「正気か慈愛、コイツの世迷言に乗る気かよ？」

「折角第二の人生を得たのに、なにも残さずに人生終えたら意味ないじゃない。他の奴らのように、原作だキャラかから奪うような生き方じゃなくて、何かを生み出して残す。そんな生き方をわたしはしたいの」

「そうそう、その方が建設的だ。」

「……お前らだけじゃ心配だしな。俺も乗ってやるよ」

「そう言うと思つたぜ！じゃあ早速始めよう。なんせ果て無い道のりだ。さつさと始めえと——」

——3人の夢は、そうして始まつた。

3人は、それぞれ違つた形の天才であつた。赤浦健一は機械工学、青島慈愛は人工知

能の、相藤レイは突出した箇所は無いものの、幅広いオールラウンダーな天才として、互いの得意分野を駆使して、彼女を作り上げた。最初はレイに半ば強引に巻き込まれた他の2人だったが、夢を追い続けるうちにいつしか本気になっており、熱意が暴走して無茶苦茶なアイデアをレイに提示しては、彼を困らせることも多々あった。

そして、同じ夢を追い続けてから、7年の月日がたった。彼らの夢がこの世界に形を以て産み落とされたその日のことを、レイは今でも鮮明に思い出せる。彼女の歩き出したその日を、彼は生涯忘れることはない。

「できたぜ……最終調整完了だ。あとは実際に動かしてみたらでないと微調整は難しいな」

「人格データのインストール、無事に完了よ。あとは電源を入れるだけよ」
「そうか………ついにお前が動くんだな」

眼の下に隈を作りながら、レイは歓喜の声を上げる。

彼らの目の前には、夢の結晶が座らされている。肩まで伸びる銀髪に、生気を感じない美しい寝顔。天使の輪のように浮かんでいるリング状の精査機構マルチレーダー。人間のものとは思えないくらいにきめ細かな白い肌。長めのサイドテールへと整えられた銀色の髪。背中には折り畳み式の飛行機構プロトシステム。ノースリーブのシャツとプリーツスカートを履かされた「彼女」は、起動の時を待っていた。

レイは、睡をぐくりと呑み込みながら、項うなじの電源スイッチ入れた。起動音なんてものはない。ただ、ゆっくりと「彼女」の瞼が開いた。

「ここは何処ですか?」

「お、問題なく動いてるじゃねーか」

そんな第一声と共に、作業台の上に座らされていた彼女は目を覚ました。身体を手に入れて、最初に目にしたのは、笑顔で此方を覗き込んでくるレイの顔だった。

レイは作業用として付けていたゴーグルを外しながら、少し考える。そして、考えた後に言った。

「ここは……そうだな、お前を作った研究室だ。俺達がお前を作った……いわば親みたいなもんだな」

「ちよつと、なに親面してるのよ? 精神ソフトウェア面作つたの私よ?」

「それを言うなら身体ハード作つたの俺だぜ?」

「だあーうるせえ! お前らの変態仕様をちゃんと稼働可能なレベルに調整したのは誰だと思つてんだ?!」 4 徹させられるこっちの身になれよ!」

彼女そつちのので、科学者同士が物理で殴り合いを始めやがった。大の大人が子供じみた剣かを繰り広げるさまを、生まれたばかりの「彼女」はじーつと見ていた。無駄に瞳を輝かせながら。生まれたばかりの「彼女」にとっては、目に映るすべてのものが新

鮮に見えるのだろうか、レイ達の喧嘩は見せるべきではないと思う。間違いない。

しばらくの間、三人はやいのやいのと言ひ合ひを繰り返して来たが、自分たちに向けられる、あまりにも無垢な目線にいたたまれなくなつたのか、慈愛が停戦を申し出た。

「きよ、教育に悪いからやめましょう」

「そうだな……あの純粋な目で見られたら叶わんよ……うん」

「すまないな……見苦しいものを見せちまつて」

「滑稽でした」

「鼻で笑われてるー!!」

早くも鼻で笑われた3人。彼女が最初に学んだことがこんなでいいのだろうか。幸先が思いやられるとはこういうことだろうか。

兎に角形だけの停戦協定を結びおえると、慈愛は次の課題に手を出し始めた。

それは非常に重要なものだった。

「名前……名前、何にしようかしら」

名前だ。名前とは、人間が生まれた時に最初に貰う贈り物であり、概念を区別するための最重要事項。それに名前は基本的に一生モノだ。ゆえに、慎重に選ばなくてはならない。

どういう名前が良いだろうか。どんな願いを乗せるべきか。どんな子になってほし

いか。できればそれを盛り込んだ名前にしたいが、全然絞り込めない。慈愛はうんうんと悩みながら、部屋をうろうろとする。この世に一人、また新たな親バカがここに誕生していた。

「なまえ……なまえ……ああ全然決まらないいいいい！」

「それなら決まっている」

彼女の名前決めに悩んでいる慈愛と対照的に、レイはすでに決めていたようだ。レイは「彼女」の肩に手を置くと、考えていた名前を伝える。

それが「彼女」が最初に受け取った贈り物だった。

「イスタ。それがお前の名前だ」

「イスタ……それが、わたしの……」

「なるほど……今日は復活祭^{Easter}。だからイスタ、か。レイにしてはいいネーミングじゃないの」

別に、レイも身草も慈愛も十字教信徒ではないが、たまたまその日がそうだったから、そんな安直だけど、悪くはない名前が、彼女につけられた。

「つてなにが復活だよお前。復活も何も、コイツはいま生まれたばかりか知らうが」

「いいや、これは俺達の夢の結晶さ。誰もが子供の頃に考えたことあるような絵空事。みんなが大人になるときに捨てていったそれを拾ってくみ上げた、そんな夢を蘇らせた

のが彼女だ。そう思った方がロマンあるだろ？」

「レイ、お前ほんとわけわかんねーこと言うよなあ」

レイの意味不明な講釈に、赤浦は頭を抱える。レイとは長年の付き合いだが、これだけはいくらたつても理解できない。

だが、レイにとっては、それでいいのだ。レイはイスタのことを、誰もがうち捨てた夢の跡から生まれた存在と定義した。誰にも理解されなくとも構わない。なぜなら、ロマンに理解は求められていないのだから。

「で、だれがおとうさんでだれがおかあさんになるか決めた？」

「決めなくていいだろ、俺達は俺達だ」

慈愛の問いかけに、レイはあっけらかんとした顔でそう答える。

そして、イスタに手を差し伸べながらこう言った。

「よろしくな、イスタ」

「……………はい」

イスタは小さくうなずき、レイの手を取って握手をした。その時、慈愛には、イスタがわずかにほほ笑んだように見えた。まだ感情が希薄だということにだ。

こうして、少し変わった4人の共同生活が幕を開けた。

イスタが生まれて半年がたった。

彼女の学習能力は申し分なく、性能も上々。予想以上の結果を残していた。レイ達との日々を過ごす中で、イスタは多くのことを学んでいき、人間らしくなっていた。性能面でも、レイや赤浦がときどきはつちやけながらも新機能を（ときどきはつちやけながらも）追加した結果、当初の予定を遥かに上回る多機能性を手に入れていた。

また、レイ達は転生者や異世界転移者相手に自家製の装備や便利グッズの製造販売を始めていた。元々イスタの開発資金を稼ぐために始めていたのだが、彼らの優秀さが転生者や転移者間で広まり、小規模ながらも優れた技術力を持つ技術者集団として認知されていったのだ。そしていつしか、それが食い扶持となっていた。

そんなある日のこと。

「レイ、貴方また仕事サボってませんか？昨日も仕事赤浦さんに押し付けていましたよね？」

「サボってねえし、ちゃんとやってたし」

「馬鹿言うな。昨日の仕事はほとんど俺がやったんだよ。お前何してた？ただイスタの身体にべたべたと触っていただけじゃねえか。セクハラか？」

「セクハラじゃねえよ！イスタの機能チェックに決まってるだろ！設計者である俺が一番把握してなきゃいけないってのに……これも赤浦、お前が勝手に変な機能追加するの

「が悪いんだろーが」

「は？俺の追加した熱光線が邪魔だったのか？」

「うちのイスタにそんな危険な行為させられつかよ。俺達は戦闘マシン作ってんじやないの」

サボって漫画雑誌を読みふけていたことを咎められたレイが、赤浦と喧嘩を始めていた。これはよくあることで、働き者の赤浦と昼行灯なレイは兎に角意見が対立しやすいのだ。最初はイスタも必死に止めていたが、半年もすれば流石に慣れたのか、半ば適当に止めるようになっていった。

「あんまりだらけてばっかいると御仕置きですよ。ケツバットとロケットパンチで乳首ドリル、お好みなのをどうぞ」

「おい誰だイスタに乳首ドリルなんか伝授した奴ー」

なんか下品な言葉がイスタの口から飛び出したことについて、親心から心配の声をあげるレイ。しかし親の心子知らずとはよくいったもので、無情にもイスタの鉄槌がサボり魔レイに下される。その名もロケット乳首ドリルスーパーターボ。イスタの両手が発射され、器用にレイのシャツを捲り上げると、彼の両乳首を掴んで猛烈な勢いで回転しだした。

その回転は乳首がねじ切れるどころか、逆に乳首を中心にレイの身体全体が激しく横

ミュレーションしなくてもいいんだけどなあとレイは思うのだが、そもそもレイがだらしがないのが悪いというのが他の2人の結論だった。

赤浦はレイのだらしなさっぷりにため息をつきながら、先ほどのいざこざがきっかけで床に落ちた漫画雑誌をレイに向かって投げつける。

「たりめーだろ、お前年頃の娘の前で成人向けのやつ読むとか、どうぞ嫌ってくださいと言ってるようなもんじゃねえかよ」

「うるせーやい！てかさ○ゲーもマ○ジンも成人向けじゃねえし！表紙のグラビアだけ見て判断してんじゃねーよ！俺からしたらグラビア邪魔なんだわ！」

「へーへーそーですかー。さっすがなまけものあいとうくんだ」
「お前なあ覚悟しとけよ——」

皆が寝静まった夜。イスタはひとり、研究所内を歩いていった。

彼女はアンドロイドであるが故に睡眠を必要としない。よって皆が寝静まるこの時間には非常に暇なのだ。本来ならば生き物ではない彼女が「退屈」という感情を抱くことはないはずなのだが、慈愛が張り切り過ぎた結果、人間に近い情動を獲得している彼女は、それに近い結論を導き出していた。

昼間は慈愛が若干過保護気味なために傍から見ればやや窮屈な暮らしをおくつてい

るように見えるイスタだが、この夜の間だけは真に自由となる。静まり返った階段を上がり、テラスへと向かう。

階段を上がりながら、今夜はどうしようかと彼女は考えた。今日は飛行ユニットの自己点検でもしようか。今日は雲量も風量も少ないし、夜間飛行にはうってつけだろう。そんなことを思いながら、テラスに続く扉を開ける。すると、微かな夜風が流れ込んでくるとともに、彼女の目にひとつの影が映った。

あの青髪とだらしのない顔は嫌でもわかる。レイだ。

彼はイスタに気づくかなり、微笑みながら声をかけてきた。

「おう、まだ起きてたのか」

「その言葉をそっくりそのままお返しします。それに、そもそも私はアンドロイドですので睡眠は必要ありません」

「それもそうだな」

「何をしているのですか？」

「人間ってのはな、ときたま意味もなく空を見上げたくなる生き物なんだよ」

レイの言っていることが、イスタにはよくわからなかった。レイは胡坐をかきながら、傍らにあった缶ビールに口をつける。

「何の意味があるのでしょうか……?」

「意味なんかなくてもいいんだよ。意味のないことができるからこそ、人間はここまで進んできた俺は思っているよ」

レイの発言内容をよく考えてはみたものの、やはりイスタにはわからない。機械であるイスタは、どうしても理屈や合理で物事を考えてしまう。幾ら人間に近い情動を持つているとはいえ、風流などを理解するのは、今のイスタにはまだ難しいことなのだ。レイもそれをわかつているからこそ、あえてこのようなことを話しているのだ。レイは膝をポンと叩くと、とある提案をした。

「よし、ならばちよいと人間チックな思考の練習でもしようか」

「それを機械にさせるのはどうかと思えますけど」

「まあまあ、思考実験の一環だと思つて俺と語りあかそうじゃねえか」

レイはそう言いながらイスタの肩を抱き寄せ、自身の隣に座らせる。イスタははじめは抵抗しようと思つたが、よくよく考えれば断る理由もないし暇つぶしに丁度いいと判断し、あえてレイの提案に乗ることにした。

2人は月明かりに照らされたテラスに座り込み、夜空を見上げる。今夜は雲の一つもないので、非常に星が良く見える。生憎ここは都会なので見える星はそれほど多くはないのだが、それでも都会っ子のレイとイスタには充分綺麗に見えた。

イスタが空を見るのに夢中になっていると、レイがこんな質問をぶつけてきた。

「生まれてきて、どうだった？」

「……………質問の意図がわかりかねますが」

「そのまんまだよ。お前が生まれて早半年。これまでの日々はどうだったかって聞いてんだよ」

「それって……………感想を求めてるってことですか？」

イスタがそう訊くと、レイはこくこくと首を縦に振った。

これはイスタにとっては、非常に難題だった。ロボットやAIというのは、基本的に自分の意見——自意識を有していない。3人の類稀なる技術力と多少の転生特典のおかげで、イスタは例外的にそれを克服してはいるものの、彼女もアンドロイド。故に、自分の意見を考えるという行為に対し、苦手意識を持っていた。

知恵熱というか、オーバーヒートでもしてしまうんじゃないかと自分で思うくらいに、脳回路をフル稼働して考えるイスタ。その様子を見ていたレイは、アドバイスをする。

「難しく考えなくていいんだ。アレが楽しかっただけのコレが良かっただけの、その程度でいいんだって」

単純に考えろと言われても、イスタには難しい。ひよつとしてレイは、意地悪のつもりでこんな質問をぶつけてきたんだろうか。

「今のイスタには難しすぎたかあ……残念だ……」

レイのその言葉に、イスタはカチンときた。

なので意趣返しとして、今度は彼女の方から質問をぶつけてみた。

「なら私からも質問です。なんで私を作ったんですか？」

「そりゃあ簡単だよ、作りたかったからさ。人間のようふるまえるロボットをこの世界に誕生させる……誰もが夢見て、挑み続けるそれに、俺も関わりたかった。この思いは前世から変わっていない。それにさ、そーゆーロボットがいたら面白くないか？」

あつけらんかとそう言ったレイの態度に、イスタはするはずのない頭痛を感じた。思った以上に軽い内容に拍子抜けしたのもある。

「面白そうだから作ったとでも言うんですか……？」

「きっかけなんてそんなもんだよ。俺達は一度死に、文字通り生まれ変わった。だからこそ、この第二の生を悔いのないものになりたいと思っている。だからこの夢を引っ張り出して、馬鹿みたいに頑張ったんだ。そしてお前が生まれた。それについてはすげえ嬉しい。子供のころからの夢がかなって、今俺はすっごく幸せなんだ」

「じゃあレイは今夢がかなった状態ということですか」

「いや、人間の夢つてのは終わりが無い。一つ叶えたらまた別の夢が生まれる。今俺はな、お前が“生まれてきてよかった”と言えるようにしてやりたいと思ってる。それ

が俺の新しい夢だ」

きつぱりと、レイはそう言った。

彼は、本気でイスタのことを大事に思っているのだ。彼女のこれからの歩みがどのようなものになるかと、彼女がそれを悔いることがないようにと、今も願っている。願われているイスタの身からすると、なんともいえない恥ずかしさがそこにはあった。

それを何とか取り繕うように、レイにいつものように毒舌を放つ。

「……普段アレな癖に、なんでこういう時に限って恰好つけるんですか？」

「それがパパに対して言うことですかーええ？」

「レイがパパとか死んでもいやです」

「そんなあゝ」

レイはシヨックを受けながらも、どこか嬉しそうだった。それはきつと、ひとつの夢がかなった嬉しさと、新たな夢を育てる楽しさが、彼にそうさせているのだ。

いつか自分も、そう思えるのだろうか。

イスタは、レイを見ながらそう思うのであった。

ある日のこと。

赤浦は依頼者の下での仕事を終えて研究所に帰ってきた。

「……邪魔だな」

リビングに入るなり、全身からアルコールの匂いを放出しながら部屋の入り口で爆睡しているレイの姿が目に入った。どうやら酔いつぶれて床で眠っているようだ。

レイはともかく、慈愛はどこにいったのだろうか。照明やテレビがつけっぱなしのリビングには、床で雑魚寝しているレイ以外の姿は確認できない。見る者がいない癖に喧しいテレビの電源を切ると、どこからか話し声が聞こえてきた。

「この声は……イスタと慈愛か」

声は上の方から聞こえる。おおかた、イスタのメンテナンスでも行っているのだろう。

赤浦は階段を上り、声のする方へと向かう。声は2階にある慈愛の自室から聞こえている。

「いや私アンドロイドなんで下着とか要らないんですけど」

「そうはいつでも、イスタは女の子でしょ？流石にノーパンノーブラはまずいでしょ。レイにいやらしい目で見られるわよ？」

「それは嫌ですね。ぜひお願いします」

「よろしい、じゃあこっちおいで」

少しばかり開いた扉からは、慈愛に新品のブラジャーを押し付けられて困惑するイス

タの様子が見える。流石にここを覗くほどの気概はないので、赤浦は咄嗟に目を逸らすと足音を極限まで小さくしながら部屋の前を通り過ぎようとする。

しかし、次の瞬間、部屋の中で慈愛はイスタを突然抱きしめた。

それを見た赤浦は、微かに開いた扉越しに呆然としていた。

「なんでこの流れで抱きしめられてるんでしょうか……？」

「ひんやりしてるから好きなのよ……たとえ血の通っていない冷たい身体だとしても、その中にある心はいつまでも暖かいものであつてほしい。私たちはそう願っているわ」

傍から見れば、仲睦まじい光景。

しかしその時の赤浦には、それがなぜか非常に苦しいものに見えてしまった。

(なんだ……？この気持ちは一体なんだ？)

チクリと、赤浦は自分の心が痛むのを感じた。

何とも言えない気持ちに、赤浦は困惑したままその場で立ち尽くす。原因は不明。この感情がどういうもので、なぜ湧き上がっているのかわからない。それなのに、なぜかそれから目を逸らすことができない。放置してはいけないと心が叫んでいる。

慈愛とイスタの仲睦まじい声を背中で受けながら、自分に芽生えた未知の思いに、赤浦は困惑し続けるのであった。

イスタが稼働した日から2年が経つ頃のこと。

イスタはいつも通り、慈愛に稼働実験の終了を報告していた。

「今日の稼働実験のメニュー、完了しました」

「うん、完璧ね。じゃあメンテナンスが終わったら昼食としましょうか。ほら男ども、用意しなさいよ」

「わかったわかった……ああ面倒クセエ、カップ麺とかでいい？」

「駄目よ。一応味覚センサーとか、人工臓器とかの稼働実験も兼ねてるのよ？それに、この子には出来るだけ多くのことを経験してほしいと思ってるの」

「そんなんだからお前ガリガリなんだよ。運動云々以前にもつとちやんと飯食え」

「元々太らない体質なんだってーの」

男どもがやいのやいのといつも通りの口喧嘩を繰り広げていると、インターホンが鳴った。

「誰かしら？」

「お客様が来たみたいだな。イスタの点検は俺がやっておくから、慈愛は客を頼んだ」

レイにイスタの点検を任せ、慈愛は研究所の玄関の扉を開く。

そこには、白いスーツに身を包んだ金髪の男が立っていた。アンモナイトのようになねった髪型をした、奇怪な男だった。その後ろには、同じく白いスーツを着用した男女

が10人ほど待機している。その様子は、酷く不気味だった。

「私はこういうものです」

「え、あ、はい」

男は張り付けたような笑顔を浮かべながら、名刺を手渡してくる。そこには、『AMORE 外部技術部長・黄堂城花』と書かれている。

「AMORE、聞いたことぐらいあるでしょう？ 貴女も転生者なのですから」

「もちろんありますけど……一体、どういうご用件でしょうか？」

AMOREは、転生者ならば知らない者はいないほどの巨大かつ秘密の組織。直接組織の者と出会うのは初めてだが、慈愛も名前だけは聞いていた。しかし、わざわざ自分たちの元までやってくるとは、何が目的なのだろうか？ 慈愛は、少なくとも自分たちはAMOREに目をつけられるような悪事は働いていないと自負してはいるものの、やはりこうして対面すると、ポイ捨てのような些細な悪事にすら怯えてしまう。

僅かばかりに恐怖心を抱きながら、慈愛は黄堂と名乗った男とその一味を応接室へと案内する。そして、淹れたてのコーヒーを用意し、テーブルに向かい合って座る。

ひりつくような緊張感に包まれながら、黄堂が口を開いた。

その内容に、慈愛は絶句した。

「……………なんですって？」

「おや、その年で難聴ですか？なら耳に入るまで何度でも繰り返しましょうか……イスタを我々に売ってほしい」

「それはできないわ！」

開口一番に飛び出たのが、その発言。それを聞いた慈愛は思わず取り乱し、テーブルを強く叩く。コーヒーの入ったマグカップが倒れ、応接室の床にコーヒーがぶちまけられるが、そんなことを気にしている余裕はなかった。

「イスタを買い取ってどうする気なの？転生者と戦わせる？それとも危険分子として処分する？」

「それはお答えできません。なんせ我々は秘密組織ですから、色々と話せないことが多いのです。ですがご安心ください。勿論貴女の言い値で買いますし、イスタを売って頂ければ、貴方達をAMOREの技術者として雇用します。悪い話ではないと思うのですがね」

慈愛は、首を縦に振ることはなかった。できるわけがない。仮に売るとしても、黄堂の提示する条件では全然釣り合わない。

イスタは慈愛にとって娘のようなもの。イスタの人格面の設計を担い、誰よりも深く彼女の心に寄り添ってきたからこそ、人一倍イスタを大事に思っているのだ。

「調べによると、イスタ開発を主導したのは君ではなく相藤レイの方だ。なぜ君がそこ

まで彼女に入れ込むのがわからない。君は彼に巻き込まれただけじゃないか」

「ええ……はじめはそうだったわ。でもね、9年間も付き合ってくれば嫌でも愛着がわくってことが分からないかしら？ 私はイスタを自分たちの娘のように大事に思っている。そんな娘をいきなり売り渡すような、人でなしに転生したつもりはないわ！」

例えば、目覚めの日を夢見ながら何度もイスタの人格データのシミュレーションを繰り返した夜。

例えば、様々なものを見て知って学んでゆく彼女の姿をすぐそばで見っていた時に感じた誇らしさ。

例えば、イスタとレイと赤浦の4人で過ごした楽しい日々。

初めはレイに誘われる形で見た夢だったけど、いつの間にかそのすべてが愛おしいものになっていった。自分の命が続く限り、そうであってほしいと思うようになった。それを見すみす手放すことなんて絶対にできない。

なぜなら、彼女は家族だからだ。血は繋がっていないどころか、一般的には生き物というカテゴリーに含まれてすらいない存在だが、それでも、イスタは家族だった。そんな家族を売り払うなんて真似は絶対にできなかった。

「だいたい、いきなりやってきてはイスタを超越せだなんて、そんなの強盗と何が違うのよ!! 兎に角イスタは売り物じゃない。いくら貴方たちが世界を守る秘密組織だとし

ても、その要求は呑めないわ。他の2人もきつと同じことを言うはずよ」

感情が高ぶりすぎたせいかわ、いつの間にか慈愛の瞳から一筋の涙がこぼれていた。それほどまでに必死に反論したのだ。黄堂は、慈愛の意見を黙って聞いていた。

しばらくの間沈黙が保たれていた室内に、口を開いたのは黄堂だった。

「なら交渉決裂、ということぞで」

そう言うとう黄堂は腕を上げて、背後に控えていた部下たちにこう告げた。

「やれ」

「え」

黄堂にそう命じられた白服が、リモコンのようなものを懐から取り出し、そのボタンを押す。

瞬間。

途方もない閃光と熱風が、部屋中を駆け巡った。

爆心地は、入り口近くにいた白服。そう、黄堂はあろうことか、部下を人間爆弾に仕

立て上げたのだ。

当然ながら、文字通り爆発した白服は即死。応接室は粉々に吹き飛び、瞬く間に火の海と化した。崩れ落ちた天井や壁が瓦礫となつて周囲に散乱し、爆発に巻き込まれた慈愛はみるも無残な状態で床に転がっている。

この様子を見て、話を聞かされていなかつたのか、白服のひとりが、突然の出来事に困惑して黄堂に問いかける。

「黄堂さん!! 一体何を……!!」

「殺せ、我々AMOREの理想に反するクズ転生者共だ。殺したつて罪にならんさ」

「な、何考えてるんですか!! それじゃあギフトメイカーと何m」

口答えた白服の命はそこで途絶えた。黄堂が彼の頭部を真正面から拳銃で撃ちぬいたからだ。

飛び散つた鮮血が部屋を包む熱気で焦げ付き、壁にへばりつく。その様子を見て他の隊員達は声も出せない程におびえるが、黄堂は人間味を感じさせない程の冷たい声で、彼らに訊く。

「私に逆らうのかい?」

「……………いい、いえ! さ、さ、逆らいません! 従いますとも! 従いますとも!」

「宜しい、では残りも始末してイスタをいただくとしようじゃないか」

すっかり怯え切った白服達は、ガタガタと震えながら応接室から出てゆく。

炎に包まれた応接室に一人残った黄堂は、床に倒れている慈愛に声をかける。辛うじてまだ息をしていた彼女は、ボロボロになったソファアに腰掛けている黄堂を睨みつける。

「さいしよから……こうするつもりだったのね……」

「いや、私としても不本意だよ。君たち程の頭脳を失うのは大変残念だが、悪意に染まるくらいならばここで消えてもらった方が世界のためだ。君たちの研究成果はすべていただいたうえで死んでもらう」

「だめ……イスタは……渡さない……!」

「死にぞこないめ、とつとと死んでろ」

黄堂は自身の足に縫りつく慈愛を蹴とばすと、瓦礫の山に腰掛けながら、空を見上げて笑った。

「さて、仕事開始だぜ」

その音は、地下室で点検作業中だったレイとイスタにもしつかりと聞こえた。

「なんだ今の音……」

「私が確認してきます」

「あ、おいちよつと、まだ点検終わってねえんだけど！」

まだ点検がすべて終わっていないにもかかわらず、イスタは一目散に音のした方へと駆け出していく。慌ててレイはそれを追いかけていくが、その胸の内には、妙な胸騒ぎがあった。

地下室の階段を上がり、地上へと向かう。

扉を開けると、真つ先に飛び込んできたのは耐えがたい熱風だった。

「なっ……これは!!」

地上に上がったふたりが見たのは、火の海に包まれた研究所だった。

団欒の時を過ごしたりビンゴも、日夜研究開発に明け暮れていた作業室も、跡形もないほどに破壊されていた。天井や壁はあちこちが崩落し、すべてを燃やし尽くさんとする勢いで炎が噴き出している。10年間の結晶が、みるも無残に破壊されていく様を、レイとイスタはただ茫然と見ていることしかできなかった。

言葉を失っているふたりだったが、そこに、階段を降りてこちらへと近づいてくる足音が聞こえてきた。階段の方を見ると、そこには、重火器を携えた白服の男女が数人ほどいた。

「誰だお前らは!! まさかこれをやったのはお前らなのか!!」

「相藤レイだな、死ね！」

レイの声を無視して、白服たちは手に持ったサブマシンガンを一斉に撃ってきた。対話の余地はない。問答無用で此方の命を奪いにきていた。

「危ない！」

咄嗟にイスタが射線上に割り込むと、手のひらからバリアを生成して銃弾を弾く。念のためにと実装しておいたのだが、まさかこれを実際に使う時が来るとは思わなかった。サブマシンガンを全弾撃ち尽くした白服たちは、物陰に隠れながらリロードしようとするが、すかさずイスタは背中の飛行ユニットを用いて瞬間的に距離を詰めると、目からレーザー光線を放ち、白服たちの重火器だけを的確に破壊していく。

得物を失った白服たちは狼狽えて逃げ出そうとする。しかしその瞬間、白服たちの身体が爆発し、木っ端微塵に弾け飛んだ。新たに追加された爆炎が容赦なく逃げ道をふさいでゆく。

行く手を阻む炎に毒づきながら、レイは突飛のない理不尽に不満をあらわにしていた。

「なんだよ一体……どうしてこんなことに……？」

「情報不足ですね。ですが、まずは慈愛と健一を助けるのが最優先事項ではないでしょうか？」

イスタの言葉で、レイは我に返った。

そういうえば、彼らは無事なのだろうか？なぜこうなっているのかは知らないが、まだどこかにいるであろうふたりを探しに行かなければならない。

「……そうだな、行こう」

「ですな」

2階の階段を上る2人。2階は、一階以上に酷い有様だった。壁は吹き飛び、天井は影も形もなくなっており、夜空に輝く星が見える。火の勢いは一階を凌駕するモノであり、少しでも触れたらそのまま死んでしまいそうなほどだった。

瓦礫の中を進んでいくレイとイスタ。確か、慈愛は客と共に応接室に向かったはずだ。だから、彼女がもしまだ逃げていないとするならば、きっとそこにいるはずだと考えていた。

「()……だよな？」

「はい、私の中のデータによると、確かにここが応接室……」

イスタの情報を頼りに、応接室だった場所にたどり着いた。2階より上は跡形もないほどに崩れており、もはやどこがどの部屋だとか、そういうのを目視で判断することは不可能になっていた。

外れて床に落ちている応接室の扉を踏み越え、炎の海を一步一步進んでいく。

そこで、見つけてしまった。

「……………慈愛？」

20年近く共に過ごしてきた家族が、転がっていた。

足は瓦礫に押しつぶされてぐしゃぐしゃになり、顔には深い火傷痕、腹部には深々と突き刺さった鉄筋。どう見ても、無事ではなかった。

「慈愛っ……………どうしたんだよ！何があつたんだよお!!」

「これは……………何があつたのですか!!」

慌てて駆け寄る2人。そこに、再び白服が姿を現す。

その手には、拳銃が握られていた。

「殺せ！交渉決裂だ！」

「危ない！」

咄嗟にイスタがレイの前に立ち、指先からワイヤーを飛ばして白服の手から拳銃を叩きおとす。叩かれた手を押さえながら此方を睨みつける白服だったが、そこに続けてイスタのロケットパンチが炸裂し、彼の身体を数メートルほど吹き飛ばしてゆく。殴り飛ばされた白服は、そのまま2階から放り出され、地上へと落ちてゆくが、レイ達にはそれを気に留めている余裕などなかった。

瓦礫の中で虫の息になっている慈愛を抱きかかえるレイ。唐突に目の前に現れた悲劇に、彼の心はぐしゃぐしゃになっていた。辛うじて息はあるが、それもいつまで持つ

かわからない。彼女の意識を必死につなぎとめるかのように、レイは何度も慈愛に問いかける。

「何があつたんだよ!! おい……教えてくれよ……!」

「AMOREが……イスタを奪いに來たの……」

「嘘だろ……だつてAMOREは世界を守る組織だろう!! それがどうしてこんなことをするんだ!!」

「わからないわ……どこから嗅ぎつけたのかさっぱり……でも、アイツらはイスタを渡す気がないと知るや否や、研究所をめちやくちやに……」

なんで、なんで、なんで、なんで。どうして、こんなことに。

うわ言のようにイスタはそう繰り返していた。

「それは君が生まれたからさ、イスタ」

その声に、反応するものがいた。

レイとイスタが声のした方を向くと、そこには白いスーツを着た金髪の男——黄堂城花がいた。彼は、火の海の中だというのに、やけに涼しげな顔をしている。

レイとイスタは瞬時に理解した。コイツが元凶であると。

「お前か……お前がこんなことを……! 何故だ!! 何故こんなことをした!!」

「君達は危険だからだ」

「何……………?」

「彼女の完成度は非常に素晴らしいものだ、そこは素直に称賛されるべきだろう。しかし、それが万が一悪意ある者の手に渡ってしまったえば、途轍もない脅威になる。そしてそれは、イスタを作り上げた君達にも当てはまるのだ。君たちは自分たちがあくまで中立的存在だと思っっているようだが、我々からすればそのような中途半端な存在は黙認できない。優れた技術者を野放しにするわけにはいかないんだ。故に、君たちの手綱を握りたいと思っっていたのだが……慈愛君は拒否した。だから始末した」

「あんた達は世界を守る組織のはずだろ?! それがなんでこうなる?!」

「世界を守るためには、少しの不穏分子の存在も許されない。君たちのような存在は許容できないんだ」

黄堂がばちんと指を鳴らすと、ぞろりと、瓦礫に隠れていた白服たちが一斉に姿を現す。一体どこにどうやって隠れていたのかは知らないが、レイ達を取り囲んで重火器を構えている。逃がす気はないらしい。

「相藤レイ! 貴様はAMORE職員を爆殺した……よつて抹殺する!」

「ふざけんな……ふざけんな!」

どうやら、研究所襲撃事件を「レイ達がAMORE隊員たちを謀殺するために仕組んだ事件」にすり替える算段らしい。当然ながらそんなことをされたらたまつたもんじゃ

ない。レイは兎に角どうにかするしかないと判断し、体を動かす。

その直後、パンツ！と乾いた音が鳴ったかと思えば、それと同時にレイがその場に倒れた。その音は何を意味するのか、イスタはもちろん知っている。

レイが撃たれたのだ。その証拠に、白服たちのもっている拳銃の内のひとつから、硝煙が上がっているのが確認できる。

「なっ……」

どうやら撃たれたのは足らしく、レイはまだ生きていた。しかし、撃たれた左足からは血がだらだらと流れており、逃げるのは難しそうだ。

白服のうちのひとりが

それが、

「私の家族に……手を出すなあああつ！」

「ぶがっ!!」

加減なんてしなかった。イスタは思いきり、白服の顔をぶん殴った。人間の比ではない、アンドロイドのフルパワーで殴られた白服の頭は原形すらとどめず、水風船のように破裂した。鮮血が飛び散り、頭を失った胴体が床に倒れる。

同僚の死によってパニックに陥った白服のひとりが、イスタに向かって火炎放射器の引き金を引こうとする。しかし、イスタは自身に向けられた火炎放射器の銃身を殴って

大切なものを奪おうとする者達への、明確な敵意。それは、これまでの生活の中では決して抱くことのない感情であった。生まれてはじめて抱いた怒りに、イスタの意識は呑まれつつあった。

恐怖からその場にへたりこんだ白服に視線を向ける。彼は、声もまともに出せない程におびえていた。しかし、イスタにとつては敵でしかない。彼女は右手をドリルに変形させると、躊躇いなくそれをロケットパンチとしてはなつた。ぶちゆりと、男の胴体にサッカーボール大の穴が開く。

「だ、だめだ……こんな奴に勝てるわけ」

じゅぼっ。

弱音を吐いた白服の首を、高周波ブレードで跳ね飛ばす。

「な、なかまのかたきいいいいいいいいいいいいいっ!!」

ギユガガガガガガッ!!

仲間の敵討ちを敢行した白服は、丸鋸でミンチにした。

「あぼ、ぼぼぼぼぼぼぼぼ……」

ビリリリリリリリっ!!

泡を吹いて倒れた白服は、高圧電流で感電死させた。

怒りに任せて白服たちを惨殺していくイスタの姿を、レイは呆然とした表情で見ている。

た。そして、その様子と共に見ていた黄堂は、酷く失望した態度をとった。

「残念だ……君たちの愚かさは私の予想を遥かに超えていたよ。もう、無理だ」

「待てっ！殺してやるっ……逃げるな……！」

黄堂はそう言うと、逃げ出した白服たちに続いて研究所から立ち去ろうとする。ここまで火の手が広がった以上、自分たちが手を下すまでもなくレイ達は焼死すると踏んだのだろう。

しかし、イスタの怒りは止まらなかつた。返り血塗れになった身体で、黄堂を追いかけようとする。

「待って……それ以上……手を汚さないで」

「っー」

激昂したイスタを止めたのは、瀕死の慈愛だった。

その言葉で、イスタは我に返った。

「あ、ああ………わたしは、なんてことを……！」

そしてその場にしゃがみこみ、自らの犯した行為を理解し、嘆いた。

今自分は何をしていた？それはもうわかっている。自分は今、怒りに駆られて人を殺してしまった。

幼いイスタの心に、殺人の罪の意識が容赦なくのしかかる。彼女自身も意外だったの

だが、悪人だからと言って、自分たちをきずつけたからといって、その命を奪ってもいいと判断できるほど冷徹にはなれなかった。どうやら、思った以上に自分は人間らしくなってしまうみたいだ。

それを慈愛もわかつていたのか、掠れるような声でイスタに語りかける。

「ずいぶんと……人間らしくなったのね……嬉しいな、わたし……」

「慈愛……」

「あんな奴の言うことなんか真に受けちゃ駄目よ……わたしは、間違ったことをしたとは思っていないから」

「でも……でも……!」

「娘のために体張ったんだよ……こんなに誇らしいこと、ある……?」

「わけわかんないんですよ……なんでそこまで笑っていられるんですか!! 今にも死に

そうだっていうのに!」

「わたしたちは、イスタが生まれてきてくれてよかったと思ってる」

そう言いながら、慈愛はイスタの頬を撫でる。その手は酷く震えており、相当無理して動かししていることがイスタにも伝わった。

そして、慈愛は。

残り僅かな力をすべて使い果たしながら、イスタにほほ笑んだ。

「大丈夫……あなたは私たちの……自慢の娘よ……」

「慈愛……じあい……」

それが、彼女の最後の言葉だった。

だらんと首が垂れ下がると同時に、その瞳からは既に光が失われ、火傷の残った身体には早くも蠅が寄ってきている。イスタの両手の温度センサーは、慈愛の身体から体温というモノがなくなっていくことを告げているし、瞳に内蔵された生命体センサーは、イスタの抱きかかえるモノからは生命反応を微塵も感じないということを告げている。

青島慈愛は、死んだのだ。

イスタの各種センサーがそれをしつこく伝えている。頭ではわかっているはずなのに、あるはずのない心がそれを否定したがっている。もしもイスタに涙腺があったら、とつくのとうに泣き出しているだろう。それほどに、悲しかったのだ。

「嘘ですよね……嘘ですよね……！死んだふりとか貴女らしくないですよ!! 目覚ましてください!」

「よせ……よせよ!もう、死んだんだよ……!」

慈愛の死を認めずに、必死に慈愛の身体を揺さぶるイスタを、レイが制止する。

イスタが振り返ると、レイは泣いていた。煤まみれの顔を涙でぐしゃぐしゃに濡らし

て、身体を震わせていた。いつものへらへらとした態度など微塵も感じさせないくらいに、その顔は悲しみと怒りに満ちていた。

両者ともに、その場から動くことはなかった。じわじわと火の手が近づいてきているが、それを気に留められるほどの余裕がなかった。あまりにも唐突で、残酷な理不尽が、レイとイスタの心を抉っていた。

しばらくして、慈愛の亡骸を抱きかかえたまま、イスタが口を開いた。

「私が、生まれたせいなんですよね？」

ぼそりと、そう言った。

その声は震えていた。

「この悲劇も、今の惨状も。私が生まれたから……なんですよね？」

「……………」

ふざけるな、と。

レイは掠れた声でそう反論していた。

ああ、やめてくれ。そんな顔をしないでくれないか。そんな事言わないでくれないか。そんな顔をさせるために、お前を作り出したんじゃない。生まれたことが罪だなんて言わせるような、残酷な現実の方が悪いに決まっているだろう。

レイは、必死に反論した。イスタに、自分たちの夢が、イスタの存在が間違っている

だなんて言わせないために。泣きじやくりながら彼女の言葉を否定した。

「これはお前のせいなんかじゃない！生まれたことが悪いなんて、そんな道理があつてたまるか！悪いのは全部向こうだ……慈愛を死なせ、俺達をバラバラにしたアイツらが悪いんだ！」

「でも……彼らは私をなんとしても捕らえようとするでしょう。そして、そのために邪魔なレイや健一を殺す。そんなの……私は耐えられない……」

イスタは慈愛の亡骸を抱きしめながら、泣きそうな声で言う。

「奴らの思い通りにさせてたまるかよ……俺もお前も、赤浦も……みんな生き延びるんだ……！だから、俺は君を逃す。それが彼女と俺の望みだし、奴らへの一番の復讐になるからだ」

「なんで、そこまでするんですか？真つ当に生み出された訳でもない、異物そのものの私に、そこまでできるのですか？私には、わからない」

「今は分からなくとも、いつかわかる時がくる。人間つてそういうもんだぜ？お前の幸せが、俺とアイツの願いなんだ。きっと、世の中の親つてこんな気持ちなんだろうな。今ならわかるよ」

イスタにそう言いながらも、レイは内心で降りかかった理不尽に怒りをぶつけずにはいられなかった。なんでだ？なんでイスタにここまで言わせるような仕打ちを受けな

ければならないというのだ？自分たちはそれほどまでに悪いことをしたというのか？

前世と現世ともに順風満帆な人生を送ってきたレイは、世界を呪ったことはなかった。心が張り裂けるような悲劇というのは自分には絶対に降りかからないだろうという謎の自信を抱いていたし、多少の不運くらいは自力で何とか出来ると思っていたからだ。だが、この時レイは、生まれてはじめて世界の理不尽さを呪った。

だが、世界を呪うこと以上に、彼にはすべきことがあった。自らの存在のせいで悲劇を招いてしまったことを悲しみ、目の前で泣いている娘に、どうしても言わなければならぬことがあった。

レイは、イスタを後ろから抱きしめると、噛み締めるようにこう言った。

「だから安心してほしい。生まてきて幸せだった、生きていてよかったと思えるような未来を、お前に与えてやる」

「……………」

彼女には笑顔でいてほしい。それがレイの願い。だからこそ、こんな悲劇が最後であつていいはずがなかった。バットエンドではなく、ハッピーエンドを望んだ。彼女が、いつかそう思える日を迎えてほしいと常日頃から思っていた。

レイは、イスタを抱きしめながら、彼女のうなじについている電源ボタンに触れる。すると、イスタの瞳から光が消え、彼女の身体がその場に崩れ落ちる。

「ちよつと眠つてろよ……お前には、重すぎるだろ」

レイは、イスタの電源を落としたのだ。

そして、動かなくなつたイスタから、彼女の人格データの入つたチップを抜き取ると、それをスマートフォン程の大きさの、専用のケースに収める。

「忘れた方がいい。今日のこと、慈愛のことも……お前が背負うべきじゃないんだ……」

レイは、イスタの記憶を弄ることで、彼女に、今日の出来事について忘れさせるつもりなのだ。

これが本当に、彼女の為になるのかは分からない。慈愛だつたらどうするだろうか。ぶん殴つても反対するだろうか。だか、今のレイに出来ることといえば、これくらいしかなかったのだ。

そして、イスタの辛そうな顔を、見続けるだけの度胸が、レイにはなかった。そんな情けない自分が憎たらしくて、涙があふれてたまらなかつた。さつき散々泣き喚いたはずなのに、どこからこんなに出てくるのかと思うほどに。

「弱いな……俺え……」

辛うじてまだ無事だった装置を稼働させる。応急処置くらいはできるかもしれない。そこに、ひとつの声がかけられる。

「よう」

「お前、無事だったのか……」

レイはその言葉を聞いて、振りかえる。

瓦礫の影から出てきたのは、赤浦だった。彼も身体のあちこちに火傷を負っているが、それ以上に目を引くものがあった。それは、彼が引きずるようにして手に持っている、黒焦げになった人間の死体だった。驚いて言葉を失うレイだったが、赤浦はそれを用意にも介さず、その焼死体を乱雑に地面に投げ捨てる。

「こいつらだろ、慈愛を殺したのは」

「お前……殺したのか……」

「正当防衛だ。俺も殺されかけたんだ」

赤浦はそう吐き捨てながら、よろけながら壁に手をつく。

「最後にひとつ、言っておくことがある」

「最後つて……まさかお前……」

その言葉に、レイは動揺した。

よく見れば、赤浦の顔色はかなり悪い。まるで今にも死にそうなほどにだ。もしかすると、彼は既に致命傷を負っており、今はかなり無茶をしている状態なのかもしれない。慈愛に続いて赤浦までいなくなってしまうたら、自分はどうすればいいのだ？そんな

の、耐えきれない。

赤浦を心配して駆け寄るレイ。それは友として当然の行動だった。

しかし。

その思いは、赤浦の次の一言で完全に消え去った。

「あいつらにイスタを売っぱらう話を持ち掛けたのはな、俺なんだ」

「……………なんだった？」

訳が分からなかった。

言葉の意味ではなく、その真意。

一体なにがどうなったら、その行動に行き着くのが、レイには理解できなかった。衝撃的な事実に呆然としているレイに、かまわず赤浦は続ける。

「俺は、最近になってようやく気付いたんだがな……好きだったんだよ、慈愛を」

そう言った赤浦は、どこか上の空だった。

これが酒の席とかだったならば、笑いながら恋愛相談などに発展したのだろうが、こんな状況でそんなことを言われても反応に困るし、なによりも慈愛はさつき死んだのだ。レイは、このタイミングで慈愛への恋心を打ち明ける赤浦の動機が、全く理解できなかった。

困惑するレイだったが、赤浦は自分語りをやめないどころか、さらに調子よく話し続ける。その内容は、次第に狂気じみたものへと変わっていった。

「だけど、アイツの愛は全部イスタが持っていてしまう。アイツが生まれてから俺の愛は届かなくなった。端的に言うところ……邪魔だった」

「邪魔ってお前……お前だって……イスタにテメエの夢詰め込んだんじゃないのかよ!!」

「嘘じゃあないよ。ただ、邪魔になったただけだ。ただアイツらが慈愛を殺すのは予想外だったよ。だから奴らは半分くらい殺した」

「ふざけるな！お前のせいで慈愛は死んだぞ！」

大切な人を奪った張本人が目の前にいて、さらにそいつが全く悪びれずに意味不明な理論で正当化を図る。それは、レイを激怒させるには充分すぎるものだった。

レイは泣きながら身草の胸ぐらを掴み上げ、近くの壁に叩きつけた。なんども、なん

ども、赤浦の後頭部を壁に叩きつける。壁に血がつくくらいにはやっただろうか。それでもなおレイの怒りと悲しみは収まらなかつたし、赤浦は薄ら笑いは剥がれ落ちることはなかつた。赤浦の人間性に気づけずに友人として接してきた自分が情けなかつた。

しばらくたつて、赤浦が再び口を開いた。

「ああ、慈愛は死んだ。だが、イスタとお前がまだ生きている」
「へ？」

「慈愛はもう居ない。だつたらさ、慈愛が愛したイスタを壊したら、きつと俺が一番になる筈なんだ。俺に注がれる筈の愛を横取りしたアイツをぶつ壊せばよお……俺の愛の方が強くて正しいつて事にならねえかあ？ん？」

訳が分からなかつた。

あまりにも理解しがたいその発言にレイは動揺して、思わず赤浦の胸倉をつかんでいた手が緩んでしまう。

コイツは狂っている。

嫉妬というのは、ここまで人を狂わせるモノなのだろうか。

「何言つてやがる……全然理解できねえんだよ！寝言なら寝て……いや、血迷い事なら地獄でほざけよ！」

常軌を逸した身草の物言いにレイは激昂するが、興奮した身草は、胸倉を掴み上げて

いたレイの手を乱雑に振り払うと、逆にレイの手を捻り上げ、地獄の形相で吠え散らした。

「俺と彼女はまだ途切れちゃあいない！この赤い糸はよお、三途の川を隔てて繋がっているんだっ！」

「ふざけるなよ……そんな理由で、何もかもぶち壊したつてのかよ……」

「だからよお………そいつを寄越せ！」

「なっ……」

そういうと、赤浦はレイの左手に向かって手を伸ばし始めた。レイの左手には、イスタの人格データの入ったチップが握られている。

——渡すわけにはいかない。自分たちの夢の結晶であり、子どもであり、すべてである彼女を、こんなやつに渡してはならない。そう決意すると、レイは右の拳で思いきり赤浦の顔面を殴り飛ばした。ボゴツ!!と鈍い音を立てて、赤浦の身体が床に崩れ落ちる。レイは即座にイスタの身体に人格データを戻してから彼女とともに逃げようとする。

が。

「逃がさねえよ……人の恋路邪魔しといてよお、それは筋が通らねえよ」

《KAKUSEI BOMBER》

「な、お前、その姿は……………！」

立ち上がった赤浦は、異形の怪人——ボマーオリジオンに姿を変え、レイに襲い掛かってきた。

「あいつらに貰ったこの力、お前になら存分に振るえるぜえ！」

「ふざけ」

レイが何か言い終わる前に、ボマーオリジオンの拳がレイの腹部に触れる。

瞬間、ボマーオリジオンの手が爆発した。

「ぼか……………かはっ……………」

容赦ない高熱と衝撃がレイの全身をずたずたにしてゆく。血塗れでその場に崩れ落ちるレイの手から、イスタの人格データの入ったチップが零れ落ちる。レイは慌てて拾おうとするが、ボマーオリジオンはその手を思いきり踏んづける。傷だらけのレイの口から、苦悶の声と血を口から吐きだされる。

赤浦はオリジオン態を解除しながら、イスタの人格データのチップを拾い上げる。レイが何か言いながら縋り付いてきたが、赤浦はそれを鬱陶しそうに蹴り飛ばす。そこにもはや、友情なんてものはなかった。今の彼には。20年来の友情よりも優先するべきものがあるのだ。

それよりも、イスタの中身が赤浦の手に渡ってしまったことが問題だ。会話の流れか

らするに、奴はイスタを壊すつもりなのだ。しかし、レイの予想とは裏腹に、赤浦は行動に移さなかった。手に入れたチップをまじまじと見つめながら、赤浦は地べたに這いつくばるレイに問いかける。

「……奪つたはいいがよお」

「……………」

「こんな状態でぶつ壊しても意味がねえんだよなあ。俺が壊したいのはこんなチップじゃない、完全な形のイスタをぶつ壊してこそ、俺の愛は証明される。そう思わないか？」

「思うわけ……………ねえだろ……………」

仮に今、慈愛が生きていて赤浦の言葉を聞いたならば、レイ以上に激しく彼を拒絶するはずだ。彼女がイスタを自分以上に愛していたことをレイは知っているし、当然ながら赤浦も知っているはずだ。しかし、赤浦はそれを知っていながらもイスタを壊すと言っているのだ。愛した者の愛するものを踏みじろうとしている外道への友情を、レイは切り捨てることにした。

ずるずると、傷ついた身体を引きずりながら、イスタを守るように立ちふさがる。

もう、イスタはレイの夢の結晶なんかじゃない。慈愛の生きた証なのだ。それを失うわけにはいかなかった。

「……………テメエの恋は一実ならねえよ」

レイはそう毒づきながら、懐からリモコンのようなものを取り出し、あるボタンを押す。

赤浦は、完璧な状態のイスタを壊さなければ意味がないと言っている。ならば、それが叶わなければいい。そこに賭けることができれば、たとえ一時しのぎだとしても、この局面だけは切り抜けることができるはずだ。

「……………何をしている?」

「イスタの緊急用の遠隔操作リモコンだよ……………こいつがあればイスタの機能を外から使える」

「なんだと……………そんな機能俺は知らないぞ?」

「おいおい、イスタの設計は俺だぜ? イスタの機能については、本人の次によく知っている。なんなら、彼女自身が知らない機能もな。これもそのうちのひとつだ」

《DIMENSION WARP実行》

「次元転移だと……………!!」

そう、彼は別の世界に逃げようとしているのだ。

レイがリモコンのボタンを押すと、レイとイスタの身体が光に包まれた。赤浦が慌てて手を伸ばすが、間に合わない。光は次第に強くなり、それと反対にレイとイスタ

の姿はおぼろげになってゆく。このままでは目的がかなわない。愛が遠ざかってしま
う。そんなことは許さない。

赤浦は、せめて邪魔者であるレイだけでも殺そうと拳を振り上げる。

最後に、光に包まれたレイはこう言い残した。

「絶対にイスタは取り返す。たとえ何年かかっても、俺はあいつに未来を届けてやる
んだ——」

その言葉を最後に、レイとイスタの身体が激しい光に包まれ、赤浦は思わず目を背け
る。

数秒経って、光が収まった頃には、その場に残されていたのは赤浦だけであった。レ
イとイスタは、別の世界へと姿を消していた。

「……………逃がすかよ」

ぼそりと、赤浦が呟いた。

「何年たつても、何十年たつても、お前たちを見つけ出す！俺の愛の証明はまだ終わっ
ちやあいなんだっ！絶対に！俺の愛を！天国の慈愛に届けてやるからなあ！見てい
てくれよ……………慈愛い……………じあいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいいい！！」

狂気の愛の叫びが、果てしない夜の闇にこだました。

かくして、因縁は始まったのだ。ひとりには夢と未来を守るべく、ひとりには己の愛を証明すべく。互いに決して理解は示されず。あるのは怒りと悲しみ、そして愛。

——それは、1年の歳月を経て再び巡り合う。

——余談だが、この一件はAMOREの一部が独断行動を起こした結果であり、事態を重く見たAMORE局長は内部監査を徹底したものの、首謀者たちはすべての罪を黄堂に押し付けてまんまと責任逃れを果たし、黄堂自身も、懲戒免職通知を受けた翌日に失踪を遂げてしまったのだという。

現在 PM9：03 研究所跡地

そして現在になって、赤浦とレイは再開した。

赤浦の方は、勝手に暴走して慈愛を殺したAMOREへの制裁と、レイとイスタの殺害のためにオリジオンとして暴れ、一方レイは、イスタの再起動用のツールと人格データを回収するためにこの世界へと戻り、その間にイスタの身体を守る役割をセルテイに依頼。その結果として巻き起こったのが今回の事件だったのだ。

そして、軍配は赤浦の方へと上がりつつあった。彼の手元に、イスタの身体と人格なかみ、そして再起動用のツールが揃ってしまった。

「俺の勝ちだな」

赤浦はそう言いながら、再起動用のツールを見せびらかす。それは、人間の腕くらいの厚さの円盤状の装置であった。赤浦はそれをイスタの頭部にあるリング状のユニットに接続し、操作していく。

既にバラバラに分解されていたイスタの身体は組み上げられている。あとは、人格データの再インストールが完了すれば彼女は再び目覚めることになる。

「起動だ……さ、一年ぶりの目覚めと行こうぜ、イスタ」

赤浦はそう言いながら、イスタのうなじの電源ボタンを押した。

すると、一年もの間眠り続けていた機械少女の瞼がわずかに動いた。

「動いた……目覚めるぞ、彼女が！」

「なにがどうなってるのか、これもうわかんねえなあ」

遊矢も野獣もセルティもタロットも瞬も、この場にいる誰もが固唾を呑んでその光景を見ていた。

ガシヤリと、イスタの頭部にくっついていた再起動用ツールが地面に落とされる。目覚めたばかりのイスタは、状況が読み込めずに困惑しているようで、不思議そうな顔を

してあたりを見渡している。ずっと休止状態だった彼女の記憶は、研究所の火災の日で止まったままなのだ。

「ここは……私は……これまで何を……」

「久しぶりだな、イスタ」

「健一……レイ……なぜふたりとも睨み合っているんですか？」

見知らぬ人たちに囲まれて警戒心をバリバリにとがらせる彼女だったが、その中に見知った顔を見つけ、少し安堵する。そして、彼女は赤浦の本性をまだ知らない。彼女の中では、赤浦はいまだに大切な家族の一員なのだ。

レイはイスタに、赤浦の本性を打ち明けるべきかと考える。ただでさえ慈愛を失って不安定になっているところに、慈愛を間接的に死に追いやったのが彼だと教えれば、彼女はショックを受けるかもしれない。いや、それどころでは済まないかもしれない。悩んでいるレイだったが、その葛藤は杞憂に終わった。

『ほらよ』

ザシュ。

そんな軽い音を立てて、レイの背中にナイフが突き刺さった。

「な、こ………う？」

レイは困惑したまま、その場に膝をつく。

「誰だ……誰がやったんだ!!」

瞬はあたりを見渡す。しかし、レイを刺したのは赤浦でもタロットオリジオンでもない。2人ともレイの前方にいたため、彼の背中を刺すことなど不可能なはずだからだ。他の奴らには、彼を刺す動機がない。一体誰がやったというのだろうか？

裁場もその考えに至ったのか、必死に周囲を警戒している。

その時。

『そこまでだ。イスタ再起動、誠にご苦勞であつた』

「!!」

酷く尊大な、他者を見下しているのが丸わかりな声がかけられた。

この場にいた全員が声のした方を振り返る。すると、背後にそびえたつビルの屋上に、幾つもの人影が見えた。月をバックにしている為、影になつてよく見えないが、屋上から此方を覗く影たちは、そのどれもがなんともいえない形をしている。

何が起きているのかわからずに呆然としている瞬達だったが、影たちのいる方から、再びこえがかけられる。

それは端的に言うとう、あまりにも唐突過ぎる勝利宣言であつた。

『君たちの働きは見事なものだつた。だが残念だな、最後に勝つのは我らだと決まつて

いるのだよ。イスタとアクロスは、我々AMOREが貰い受ける』

第30話 PM11:24 /それが業であるならば

『君たちの働きは見事なものだった。だが残念だな、最後に勝つのは我らだと決まっているのだよ。イスタとアクロスは、我々AMOREが貰い受ける』

盤外から発せられた、理不尽極まりない宣言。

それにいの一番に怒りをあらわにしたのは、赤浦だった。ねつとりと、それでいて怒っているのがまるわかりなほどに震えた声を喉から捻りだしながら、血走った眼付きで声のした方を見上げる。

「また……邪魔をするというのか……?」

『おかしなことを言うな。イスタが邪魔だった君とイスタを欲した我々とで、各々の利害は一致していた。それを私利私欲からふいにしたのは君だろう、ボマー』

「慈愛を殺しといて何言ってやがんだお前。他人の恋路を邪魔しやがってよお……のうとうと生きてるとか許されねえよなあ……?」

1年前のことを蒸し返してネチネチと詰め寄る赤浦だが、彼に怒る資格はないのだ。

常識的に考えれば、あの悲劇の引き金を引いたのは双方の責任。そしてそれに怒りを抱く資格を有するのは、レイだけなのだ。一体どの面下げて怒っているというのだろうか。レイの心の中から怒りがふつふつと湧き上がってくる。

その横で、瞬は先ほどの宣言の内容について考えていた。

奴らはアクロスを貰い受けると言った。一体、何のために？ AMOREについては少し前に灰司や裁場から少し聞いただけであんまり分かっているとは言えないのだが、彼らがこんなことをして何になるというのだろうか？

「なんでアクロスまで奪われなきゃいけないんだ？ お前たちは何が目的だ？」

『貴様に拒否権はない。現在、逢瀬湖森及び港トモリの身柄を拘束している。我々の要求がのめないならば彼女たちの命の保障はない』

その言葉に、瞬は耳を疑った。戦いで熱を持った身体が、一気に冷えていく。

「湖森を預かったって……どういふことだよ!!」

『そのままの意味だ。返してほしくば、我々の要求を呑め』

声の主は、冷たく、そう言い放った。意味が分からなかった。

あまりの横暴さに、裁場も元AMORE隊員として怒りをあらわにする。

「お前たち……それでもAMOREか!!」

『世界を守るためにだったらなんだって……そういう組織じゃないか。まさか清廉

潔白な正義の味方が存在するとも思ったのか？ そんなのは絵空事にすぎんというのに』

「こんなこと……創設者は絶対に黙って見ていないぞ！ アイツはそんな絵空事を掲げてAMOREを結成した！ 必ずお前たちは処罰される！」

『あんな青二才の戯言に付き合っついていられるほど純粹じゃないのだ。なんせ私は大人だからね』

声の主は、裁場の言葉を意にも介さず、傲慢な態度を崩すことはない。赤浦やタロツトも含め、声の主が言っていることに納得している者は、この場に誰一人としていない。「何故だ……何故お前たちはイスタを欲する！ 一度のみならず、二度も！」

『相藤レイ、君は要注意人物に指定されている。転生者でありながら優れた技術力を持ち、アンドロイド・イスタの開発にも成功した。そんな能力を有する君を放置するわけにはいかないんだ。過ぎた力は必ず世界の毒となる……転生者なら、わかるはずだが？』

レイの怒号に対し、冷酷に答える。それは1年前に、レイが言われたことと同じだった。

その可能性があるから。かもしれないから。リスクマネジメントという観点からすれば合理的な考えなのだろうが、踏みつぶされる側からしたらたまったもんじゃない。

可能性の話で大事なものを奪われようとしているというのに、それを黙って受け入れられるわけがない。

だが、声の主は聞き入れない。1年前と同じように、レイの言葉を一蹴する。

『だからイスタは預からせていただく。君達の存在が悪意あるものの手に渡る前にね。不穏分子は早急に排除せねばならない。なんせ我々転生者はひとりひとりが強大な力を持つ……いわば生ける核爆弾なのだよ。そんな奴らを相手に世界を守っているんだ。故に我々には、僅かな失敗も許されない』

「……ふざけんな。世界を守ってくれとか言つたくせに、お前たちは慈愛を殺した」
『彼女は我々の敵となる道を自ら選んだのだ。殺されても文句はあるまい』

「慈愛が悪いつてのかよ!! あいつは、あいつはただ……俺達と同じ夢を追いかけてただけで……」

『転生者は、世界をゆがませることしかできない、死にぞこないの異物。そんな奴らが一丁前に夢を見るなど悍ましく、危険極まりないにもほどがある。転生者を野放しにすることがどれほど危険か、転生者犯罪の横行する現在がはつきりと証明している。故に、君達は我々に管理されなければならない』

声の主は、大きく咳払いをしたのちに、続けて言う。

『そしてだ。私が相藤レイに言ったこと。それはアクロス、君にも当てはまるのだよ。』

何処に属するでもなく、ただ己の心に従ってその力を振るう。君はヒーロー気取りでいるようだが、我々からすればそのあり方は転生者共となら変わりない。いや、それ以上に悪質だ。アクロスの方は君が思っているよりも強大……君のような不安定な年頃の少年が持つべきでないのだ。ちよつとの刺激で善にも悪にも転がり得るイーブン……そんなギャンブルじみた存在がいること自体が、世界にとつて悪なのだ。故に通告する。クロスドライバーとライドアーツを、纏めて全部引き渡せ』

要するに、信用していいのだ。

世界というのは、ほんのちよつとのきつかけで大きく変化してしまうし、人の心というのは、些細なことで善にも悪にも染まる。そんな不安定な世界を守ろうとするならば、人の心という不確定要素を信頼することはできないのだろう。ましてや、強大な力を持った人間がどうなるかという悪い実例——転生者という存在を、AMOREはよく知っている。だから余計に人の心を信じることができななのだ。

だからといって、このような暴挙を許していいはずがない。どんな大義名分があろうとも、悪の芽を潰すために罪のない人を盾にするなんてことがまかり通っていいはずがないのだ。こんなの、正義の組織がやることじゃない。

『我々の要求をすべて呑めば人質は解放しようじゃないか』

「ふざけるな！ そんな言い分が通るわけないだろ！」

レイがそう叫んだ瞬間、声のした方から凄まじい速度で何かがレイに向かって飛んできた。赤ん坊ほどの大きさはあろうそれが衝突した瞬間、肺の中身が根こそぎ捻りだされるかのような衝撃がレイの全身に駆け巡り、その身体は九の字に折れ曲がった状態ではるか後方へと吹っ飛んでゆく。

レイにぶち当たったものは、その衝撃で原型を失って周囲に飛沫する。瞬の顔に飛び散ったものからは、独特の匂いが漂っていた。

それは塗料のようなものだった。恐らく、ペンキか何かなのだろう。今飛んできたのはその塊——いわば巨大なカラーボールのようなものだったのだろう。

皆がペンキ塗れになって痙攣しているレイに気を取られている隙に、2発目の巨大カラーボールが発射される。今度の標的は赤浦だった。しかし赤浦は即座にボマーオリジオンに変身すると、即席の爆弾を生成してカラーボール目掛けてぶん投げる。カラーボールと衝突した爆弾は即座に爆発し、周囲に爆炎と塗料の雨を降らせる。

「一時撤退だ……だが覚えておけ。俺の恋路は誰にも邪魔はさせねえからな……」

「ほんとうに、この世界の住人は総じて悪運が強い。ではまた時を改めてお会いしましょう」

いたずらに被害を拡大させながら、タロットとボマーは爆炎と塗料の雨に紛れて撤退していった。

「逃げるな爆弾魔！とつと俺に捕まって●俗代になりやがれ！」
『うるさいぞこのステハゲ、黙っている』

逃げたボマーオ리지オンに罵声を浴びせる野獣が目障りだったのか、今度は野獣目がけてカラーボールが飛んできた。それは野獣と、ついでに近くにいた三浦や木村も巻き込んで破裂し、彼らをペンキ塗れにしたうえでぶっ飛ばした。

「イスタっ！こっちだ！」

「くっ……ペンキのせいで視界が……っ！」

煙を掻き分けながら、瞬はイスタに手を伸ばす。彼女とは初対面だけでも、彼女をA MOREに渡すわけにはいかない。渡したくない。あんな傲慢な言い分を認めるわけにはいかない。そんなある種の反発心から、瞬はイスタの元へと駆け寄ろうとする。

しかしそこに、また別の何かが猛スピードでイスタに向かって飛んできた。それは黄色いリボンがぐるぐる巻きにされた球状の物体だった。その球体はイスタに着弾するや否や、ほどけて一本の長いリボンになって彼女の身体にまきついて、その身体を拘束する。そして、リボンでぐるぐる巻きにされたイスタは、まるで何かに引き寄せられるかのように、声の主達のいる方へと引っ張られていく。

「待てっ……！」

ペンキ塗れのレイが必死に手を伸ばすも、届かない。

再び、イスタは彼のもとを離れてしまった。

『アクロス、最後通告だ。クロスドライバーを引き渡せ。期限は深夜2時ジャスト。プラネットプラザで待っている』

イスタを手に入れた声の主はそう言い残し、沈黙した。瞬達が少し目を離した隙に、ビルの屋上からのびていた影たちは跡形もなく消えていた。

完全に漁夫の利を取られた。その悔しさはレイだけでなく、ほぼ無関係であるはずの瞬達も感じていた。

レイは涙を流しながら、怒りのままに地面に拳を叩きつける。

「くそっ……ようやく目覚めたつてのに……！なんだよ！俺達のしたことがそんなに悪いってのかよ!!」

「さっぱり状況が読み込めないんだけど……なんかただ事じゃないだけは分かった……」

その横で木村が、皆の気持ちを代弁するかのようにそう呟いた。それを皮切りに、この場にいた全員が思い思いに口を開いた。

「なんだよアイツら!! よくわからんがああ生意気つぶりに頭に来ますよ!!」

『なんだか余計に厄介なことになってないか……?』

「湖森が攫われた……どうすれば……」

状況は分からないけど、本能的に声の主が悪い奴だということだけは分かったのか、怒りをあらわにする野獣と、依頼は完遂したけどそのまま離脱するは雰囲気的に難しうだな、と思つてその場にとどまるセルテイ。その横では遊矢が真剣な表情でどうすべきかを考えている。皆混乱しているのが明らかだった。

しかし瞬は迷つてはいなかった。

各々が迷つたり考えたり怒つたりしている中、ひとりその場から立ち去ろうとする。その手を、裁場が掴んだ。瞬は振りほどこうとしたが、裁場は離さない。

「待て、ここは俺が行く。君は待つていたまえ」

「……………放せよ」

「断る」

「放せつて言つてんだよ。湖森達を助けに行かなきゃなんねえんだよ」

「だからそれは俺が行くと言つているんだ。君を戦わせたくない。むやみやたらに危険に突っ込んでいくのがヒーローとでも思つているのか!!」

「じゃあなんでもかんでも他人から取り上げて、自分ひとりでやろうとするのが大人なのかよ!!?」

ここでカチンときて、瞬は言い返した。一般的に、家族が危険な目にあつている状態で諭すようなセリフを言われても、火に油を注ぐだけなのだ。自分が冷静でないことは

自分が良く分かっている。それでも、じつとしているわけにはいかなかった。

裁場もそう言われることをわかっていたのか、眉一つ動かさずに瞬の手を強く引き、自らの方を向かせ、説教を続ける。

「子供が戦場に向かおうとしているのを静観するのが大人とでも？俺はAMORE隊員として、多くの戦場を経験した。その中で、君の様な若者が死んでゆくのを何度も目にしてきた。君にその虚しさが、悲しさが想像できるか？これは遊びなんかじゃない。君が傷付けば皆の心が傷つく。君がつけられる傷は、君の後ろにいる皆の傷にもなる。それを黙って見過ごすわけにはいかない。君みたいな子供に戦ってほしくない」

裁場は瞬の肩に手を置きながら、必死に頼み込むかのようにそう言った。

瞬は、しばらく黙り込んだ後、そつと裁場の手を肩から退けながら言う。理解はできるけど納得はできない。その答えは変わらなかった。

「あなたの気持ちも分からなくはない。けど、黙って助けを待つことなんて俺にはできない」

「そんなことをまだ言うつてののか？」

「そうしないと——」

瞬がそこまで言いかけた時。

バキイツ!! と、鈍い音とともに、裁場が吹っ飛んだ。誰かが、横から裁場をぶん殴つ

たのだ。

ビルの壁面に側頭部を打ちつけられた裁場は、そのまま地面にずると崩れ落ちてゆく。裁場がかけていた眼鏡は、彼の顔を離れて宙を舞い、地面に叩きつけられるように落下して砕け散る。

一体誰が殴ったのか。裁場と瞬は、同時に拳のとんできた方向に目をやる。

「何をっ……!」

「イライラするんだよ……お前のその偽善っぷりがな!」

そう罵倒したのは、灰司だった。彼が裁場を殴り飛ばしたのだ。

呆然とした顔をしている裁場に、灰司は続けて罵声を浴びせる。

「戦ってほしくないだど? 死んでほしくないだど? 俺の気持ちなんかまったく考えてねえ癖に出しやばるなよ……余計な真似すんなよ、この役立たずが!」

「——っ!」

その言葉に、裁場は何も言い返せなかった。

灰司も、そして瞬も、裁場の手を払い除けた。端から、彼の助けを求めている者はいなかったのだ。灰司の言うとおり、裁場のやろうとしていたことは偽善、余計なお世話だったのだ。

灰司は、立ちあがろうとした裁場を突き飛ばすと、すたすたとその場から立ち去ろう

とする。

「待て……」

裁場はそう言いながら灰司に手を伸ばすが、全て無視された。灰司は路地を抜け、夜の街へと消えていった。

灰司がいなくなつてからしばらくして、裁場はどこか気の抜けたような顔のまま立ち上がり、ふらふらとした足取りで歩き出す。瞬が声をかけても、反応はない。誰の声にも耳を貸す事なく、裁場は灰司がいなくなったのと同じ方向へと歩を進める。

「灰司を止められないならば、せめて今回の事件だけは俺が……」

そう。彼はまた別の目的で動き出していた。平和のために罪なき人々を利用する、A MOREの横暴を止めるために、彼は単身で挑むつもりなのだ。

瞬が声をかけたが、またまた返事はなかった。慌てて後を追いかける瞬だったが、裁場の足の予想以上の速さに、曲がり角ひとつで見失つてしまう。首や目を動かして探すも、見つからない。夜の街のどこにも、裁場の姿を見つけることはできなかった。

後には、落胆の表情を浮かべたままその場に座り込むレイと、ただ巻き込まれただけの野次馬達が残された。

——裁場先輩、よろしくお願いします！一緒に平和を守りましょう！

元気な声でそう言った少女は、穴という穴に成人男性の足程の太さはあろう金棒を突っ込まれた死体となって見つかった。

——俺はヘマなんかしませんよ。家族のため、生活のために絶対に勝ち続けます。

家族思いの青年は、記憶をすべて消された上で改造人間となり、悪の手先として討伐された。

——見ろよこの風景の美しさを。俺達の居た世界では決して見れない美しさだろ？

数多もの世界の美しさに魅了された少年は、直径5cmの球体に身体と精神を押し込まれ、永遠の苦痛を味わい続ける末路となった。

——この曲良いですよ！皆さんもぜひ聞いてくださいね！

音楽好きな内気な少女は、転生者に身体を入れ替えられて何もかも奪われ、自分の身体を手に入れた転生者の手によって、犯罪者として処刑された。

AMOREエージェントの殉職率は非常に高い。対峙する転生者は総じて強力な転生特典を持つからだ。ましてや広域指名手配されるレベルとなると、世界の2, 3個は片手間感覚で滅ぼせるのがデフォルトになってくる。AMORE側にも転生者はいるのだが、実力者となると少ない。故に多くのエージェントが戦死または再起不能となっていた。

そして裁場は、その全てを看取ってきた。15歳で入隊して10年間、数多もの同胞の最期を見てきた。中には人としての尊厳を根こそぎ奪うかのような悲劇もあった。そして不幸にも、彼はそれを回避できるだけの力を持っていた。

「……………」

殉職者の墓に手を合わせながら、裁場は嘆く。

仲間の死に出くわすたびに、自分が強者であることが嫌になる。なぜ守るべき弱者だけが犠牲となり、自分が生き残ってしまうのか。その思いは日に日に強くなる一方だった。

それが決定的になったのは3年前。

ある日裁場は、別の世界でギフトメイカー・バルジと交戦して逃げられた。

当時はまだギフトメイカーの悪名がそこまで広まっていない——彼らの危険性が十分に把握されていないのもあって、民間人もAMOREエージェントも含め、多くの人間がその犠牲となってしまう。その時も10人がかりでバルジに挑み、半数近くが再起不能となった。

なんとか五体満足で戦いを切り抜けた裁場は、急いで逃亡先の世界を特定し、そこに赴いたが——すべてが手遅れだった。

「なんてことだ……」

裁場が目にしたのは、地獄だった。

街は焼かれて灰と瓦礫になり、人は粘土のように混ざり合った歪な存在となり果て、どこもかしこも血の匂いばかり。そこに生命は皆無だった。どこまでも広がる屍の海が、視界一面に横たわっていた。

それでも裁場は、生存者を探さずにはいられなかった。

「君……名前は……？」

「……………」

その少年こそが、無東灰司。

裁場は、少年の身体を抱きしめながら涙を流した。その涙は頬を伝い、嗚咽を吐き出し続ける裁場の口へと入ってゆく。

一人だけでも助けられたことへの喜びと無力な自分への怒りがごちゃまぜになった涙は、吐き気がするような味だった。

数日後、AMOREの局長への事後報告の際のことだった。

局長が、こんな事を言い出した。

「ああそうだ、先日君が助けた少年だが……」

「?」

「本人の希望でAMOREに入隊することになったよ。復讐のためにすべてを投げうつ覚悟を決めているとのことだ。あんなに若いというのに……大したものだ」

その言葉に、裁場は絶句した。

折角助かったというのに、何故わざわざ再び地獄につきおとすような真似をするのだ? そんな真似が許されるはずがない。義憤に駆られて思わず司令官に掴みかかろうとする裁場だったが、司令官はそんな裁場の心境を理解していたようで、すかさず補足説明をいれる。

「仕事の過酷さも危険性もすべて話したうえで、彼は了承した。本人が強く望んでいるとあれば、それを止める資格はない……私はそう思っている」

「そういう問題じゃ……!」

裁場がそう言いかけた時、部屋の自動ドアが開く音がした。裁場が振り返ると、そこには、先日助けた少年——灰司が立っていた。

「君……AMOREに入ったというのは本当なのか!!」

「ああ。俺はあいつに復讐をする。そのために入った」

「何故だ……折角助かったというのに……何故君は……!」

「家族も友人も、帰る場所も……俺にはないんだよ……俺にはもう、復讐レしかないんだよ

……！俺からすべてを奪ったアイツを殺す……そのためなら命だつて惜しくない！」
少年は、裁場に掴みかかりながらそう叫んだ。

司令官が少年をなんとか裁場から引きはがし、彼を落ち着かせようとする。裁場は放
心状態で、その場に突っ立っていた。それしかできなかつた。

「……………辞めます」

気づけば、そう呟いていた。

もう、耐えられなくなった。

死に向かう命を見ることが、怖くなった。

「……………」

突発的にAMOREを退職した当初は、死のうかと思つたが、すぐに自分にその資格
がないことに気づいた。死にぞこないの自分が自死を選んではいけないのだ。それ
は、死んでいった者達に示しが見つからない。

でも、どうすればいいのだ？

答えは出ない。

虚ろな目をして、真つ暗な自室の中で天井を見上げて呆けていた裁場だったが、そこ
に、運命がやってきた。

「おやおや……折角選ばれたというのに、随分と暗い顔してるね」

するはずの無い、自分以外の人の声。

顔をあげると、こちらを覗き込む不審者の姿。その手には、バツクルのようなものが握られている。

「仮面ライダー……だろ？俺にやれというのか？」

これまで戦ってきた転生者の中には仮面ライダーも大勢いたので、転生者で無い裁場でも知っている。裁場が出会ってきたその全てが、ヒーローの仮面を被った人でなしであつたが、目の前の人物は、自分にそれと同類になれとでも言うつもりなのだろうか？だとしたら笑う他ないだろう。

自然と、裁場の口から笑い声が漏れていた。ファイティはそんな裁場の姿もお構いなしに話を続ける。

「知ってるなら話は早い。君は世界を救える力を持ったんだ。救世主になる気はあるかな？できればあつて欲しいものなのだけど……」

「今更……そんなものになれるはずがないだろ……」

絞り出すように、裁場はそう言った。

目の前の命ひとつ救えずにのうのと生き延び続けている死にぞこないに、救世主なんて大役がつとまるはずがない。というか、その資格すらない。

裁場が黙り込んでいると、ファイフティが口を開いた。

「自分に嘘をつくなよ。君の本音はどうなんだい？」

「……」

「君の経歴は此方で既に調べてある。君は、他人が犠牲になるのを認められなくて、それでも犠牲をなくせない自分が嫌なんだろう？ならば、君ひとりで全部救えば問題ないじゃないか。そして、傷つくのも犠牲になるのも君ひとりだけ。それがお望みなんだろう？この力があれば、それを為し得るだろうさ」

「……………」

「さ、どうする？」

ファイフティに差し出されたバツクルを見つめながら、裁場は考えた。自分にもつと力があれば、他の誰かが戦う必要がなくなる。そうすれば、他の人は傷つかない。それを何よりも望んでいたのは、自分ではないのか？

そう理解してしまえば最後、裁場はファイフティの言っていることに頷くほかなかった。

どうやら、この心の中に宿っていた正義感は、思った以上に強いものだったらしい。死という選択肢を選ばせない程に。がっしりと、呪いのように心身を縛り付けていた。ならば、全てを救って見せよう。この命が果てるまで、救い続けて見せよう。それが、裁

場誠一という人間に課せられた宿命のろいであり、罪過なのだから。

裁場は、フイフティから差し出されたクロスドライバーとライドアーツを手取る。

「……………選ばれてやるよ。死にぞこないらしく、全てを救済し続けよう」

——こうして裁場誠一は仮面ライダーユニイトとなった。

同時に、武偵高校の卒業生だった彼は、それを生かして私立武偵としての活動も行うようになったという。

現在

夜の街の喧騒を突き破るかのようになり、裁場は全力疾走していた。

逢瀬瞬や無束灰司を戦わせるわけにはいかない。すべて自分ひとりで片付けなければならぬ。その一心で裁場は走る。目的地はひとつ、プラネットプラザ。この街にある商業施設にして、AMORE側から提示された取引現場。

ボマーオリジオン——赤浦健一も、恐らくだがそこにやってくるはず。AMOREもギフトメイカーも、すべて自分だけが戦えば済む。すべてを自分ひとりで解決すればそれでいい。誰も傷つけないのだから。そう思いながら歩道橋を駆け上がる裁場だったが、その中間地点に、立ちふさがる人物がいた。

その人物は、まるで子供を諭す直前の教師の様な顔をしながら、ため息交じりに声を

かける。

「大人気ないねえ、裁場くん？」

「ファイフティ……」

裁場は、忌々しそうにその名を口にす。どうやら彼もまた、ファイフティと面識があるらしい。

歩道橋のど真ん中に立ちふさがっていたファイフティは、金属製と思わしき、よくわからない装飾の施された杖をつきながら、裁場の方へと歩いてくる。そして、裁場を憐みのこもった笑みを浮かべながら、まるで休日に街中でいじめられっ子に出くわしたいじめっ子のように、馴れ馴れしく声をかけてくる。

「全く変わらないなあ。悪い意味で、だけど」

「しばらく顔を見せないと思ってたが……何故、逢瀬を選んだ？」

裁場はそんなファイフティの言動に眉一つ動かすことなく、低い声でそう問いかける。ファイフティは裁場が何故怒っているのかを察したようだが、あくまでも自分が悪いことをしているとは思っていないようで、無責任にも肩をすくめながらへらへらと笑う。

その態度が裁場の怒りに火をつけた。裁場は目にもとまらぬ速さでファイフティの胸倉をつかみ上げると、歩道橋の手すりに彼の身体を押し付ける。歩道橋から上半身を乗り出す形になったファイフティは、背中の下を走る車たちに臆することなく、笑みを崩さ

ずに裁場の問いかけに答える。

「選ばれたものはいしよがない。いや、クロスドライバーの出自を考慮すれば、あれは必然だったのかもしれないね」

「そんなことはどうでもいい。どういふつもりなんだ!! なぜ彼みたいない子供が仮面ライダーになつたんだ!!」

「何が不満なんだい? 逢瀬くんのポテンシャルはなかなかのものだ……きつと君と肩を並べられるだろうに……いや、もしかしたら君をしのぐかもしれないよ? 頼もしいと思わないかな?」

「そういう問題じゃない! こんな戦いに身を投じるのは俺の様な大人だけでいいはずだろう……何故、何故逢瀬瞬を——」

ファイフティの胸倉をつかみながら裁場がそこまで言いかけた瞬間、ファイフティが大声を上げて笑い出した。それに驚いた裁場は思わず、ファイフティの胸倉を掴んでいた手を緩めてしまう。その隙をついて、ファイフティは身体をよじって裁場の手を振り払うと、持っていた杖の柄先で裁場の腹を軽く小突きながら、裁場から距離を取る。

その間、ファイフティはずつと笑っていた。まるで裁場の言動のすべてを馬鹿にするかのように。そして、杖の先端で一回だけ歩道橋の橋桁を強く叩くと、馬鹿でかい溜息をつきながら、心底呆れたようにこう言った。

「笑わずにはいられないよ……裁場誠一、君の傲慢っぷりにはね！」
「傲慢だと……？」

「ああ、先ほどのAMOREの声明とタメを張れるレベルでの傲慢っぷりさ！おまけにそれに無自覚とはつくづく救いようがない……君とさっきのAMOREのお偉いさんの言ってることの、どこがどう違うというんだい？」

「……………何が言いたい？」

裁場のその言葉を、ファイフティは鼻で笑う。

君の馬鹿さ加減には心底うんざりだよ、とでも言うかのように。

「逢瀬くんや灰司くんを戦わせたくないというエゴを押し通し、彼らの意見意思には耳を貸さない。他人の意思を尊重することなく、己の信念のためにそれを否定する。その一点においては同じ穴の貉だよ。それでヒーローを気取るようならば……クロスドライバーを没取することも吝かではないのだがね」

ファイフティは手に持っていた杖の先端を裁場の喉元に突き立てながら、釘を刺すように言う。酷く冷たい声だった。

そう。裁場の、瞬や灰司に対する言動は、本人達の意思を認めていないものだ。真つ当な大人としての責任感から来る正しいものであると同時に、どこまでも独りよがりではない意見だ。本気で彼らを戦いから遠ざけたいと思うのなら、彼らの意見もよく

聞くべきだったのだ。だが、裁場はそれが不十分だった。そうなってしまった理由はただ一つ。

「私はね、君が望んだから力を授けたんだ。君の贖罪意識に共感したわけじゃあない。君の自責の念に他人を巻き込むな。私はそんなくだらないもののために君を仮面ライダーに選んだのではない」

「……………」

そう告げるとフィフティは杖を下ろし、裁場に背を向けて歩き出す。

裁場はただ静かに、歩道橋の下の道路を見下ろしていた。その脳裏に浮かぶは、死んでいった同僚たちの顔。AMOREエージェントとして最前線で転生者達と戦ってきた中で積み重なってきた、自責の念。目の前で命を散らしていった年下の同僚達と、屍の山で落胆する少年の顔が、どうしても離れないのだ。

死にゆく命を減らしたいという願いと、戦ってでも成し遂げたい思い。曲げるべきなのは、どちらなのだろうか。おそらく、どちらも尊いもので、天秤にかけることも烏滸がましいのかもしれない。だが、裁場はその価値を図ることを辞めるわけにはいかなかった。

「……………どつちにしろ、やることは変わらないさ」

そう呟き、裁場は顔を上げた。

まずは現実の問題を片付ける。それは一種の逃避なのかもしれないが、間違いなく、裁場がしなければいけないことなのだ。

「傷つくのは俺だけでいい。それが俺の正義だ」

裁場は、自らに言い聞かせるように、そう呟いた。

P M 2 3 : 4 4 プラネットプラザ2階

御手洗倫吾が目覚めて最初に感じたのは、床の冷たさだった。

ひんやりとしたタイル張りの床は、臙げになつていた意識を確固たるものにするには充分すぎるものだった。起き上がったあたりを見渡すと、兎に角暗い。服を着たマネキンが陳列されていたり、商品棚に積まれた玩具のパッケージがあつたりするところを見るに、どうやらデパートかなんかだろうか。それもとくに営業時間の過ぎ去つた。

子供の頃に、誰もいない無人のデパートで好き放題する妄想を一度はしたことがあるだろう。シチュエーションは確かに叶っているのだが、それ以上に暗く静まり返つたこの空間への恐怖の方が勝っていた。好奇心なんて刺激されるわけがない。

「ハハハ、一体……」

手探りで暗闇の中を歩くうちに、倫吾は、少しずつ暗闇に慣れてきた。少し歩いてみると、壁に行き着いた。どうやら自分が今いるのは、デパートの中でもかなり端っこの

方らしい。ここからは、壁をつたって歩いてゆくことにした。手探りで進むならば、その方が安全だからだ。

「嘘つすよね……皆があんなことするはずないつすよね……」

気を失う前に見たあの光景。眠らされた湖森とトモリの姿と、それを平然と見つめている同僚たちの姿がフラッシュバックする。たった数分前まで和気藹々としていたはずなのに、どうしてあんなことができようか。あれらを思い出すたびに、吐き気がこみあげてくる。

あれはきつと悪い夢だったんだ。そう思ったかだったが、そしたら今の状況が説明つかなくなる。今自分が置かれている状況が、否が応でもあれが夢なんかじゃなかったことを思い知らせてくる。

その時だった。

「……………」

ガサゴソと、近くで音がする。

こんな真つ暗闇の中で、誰が何をしているというのだろうか？倫吾はビビりながらも、AMORE隊員としての意地を頼りに音源に向かって手探りで歩いてゆく。自らが、怖さを打ち消せるほどの行動力を持ち合わせていることに、この瞬間だけは嫌悪した。

少し歩くと、暗闇の中で揺らめく光源らしきものが見えてきた。警備員が懐中電灯でも持って巡回しているのだろうか。

倫吾は念のため、商品棚の影に隠れながら様子を伺う。懐中電灯を持った人影が、吹き抜け脇の通路を歩いている。その姿は、人影自身が手に持った懐中電灯で明るく照らされている。あの嫌でも目立つ痛々しい魔法少女コススの女性を、倫吾は知っている。寧理だ。

知った顔に思わず安堵し、倫吾は物陰から這い出て背後から彼女に声をかける。

「ね、寧理……こんなところで何を……？」

「あら倫吾、ようやく目が覚めたのね」

振り返った彼女は、いつも通りに受けごたえする。しかし、倫吾はあることに気づいた。

寧理が振り返った際、彼女が手に持っていた懐中電灯によって、ほんのわずかな間だけ照らされた吹き抜け。そこに、何かがあったように見えた。しかし、暗闇になれたとはいえ、辺りは暗いので光源なしではよく見えない。

気のせいだろうかと考えていると、寧理の背後からもうひとつの影が現れる。懐中電灯の光に照らされたその人物もまた、倫吾のよく知る顔であった。

「終わったぞ」

「巻密……終わつたつて、何やつてたんすか？一応チームメイトなんだし教えてくれないじゃないつすか」

「見ればわかる——ほら」

巻密がそう言つて吹き抜けの方を指さすと同時に、暗闇に包まれていたデパート内の照明が一斉に点灯する。眩しい光に思わず目を瞑つてしいそうになる倫吾だったが、彼の目に飛び込んできたのは光だけではなかつた。

「え……？」

その光景は、倫吾の声を奪うには充分なものだつた。

倫吾の目に映つていたのは、吹き抜けから吊るされた2人の女性——湖森とトモリの姿だつた。

3階通路の手すり天井から伸びる縄で吊るし上げられた彼女たちは、眠つたまま微動だにしない。ゆつくりと吹き抜けの下の方に視線を向けると、1階の通路から此方を凝視する殊宮と古峰の姿がそこにはあつた。高さにして10数メートル。あの高さから落ちたら、よくて大怪我、最悪死亡するだろう。一般人であるはずの彼女たちがそんな状態に置かれていること自体がおかしいのだ。

「なに、やつてんすか……？」

「仕事よ」

やつとのことで絞り出したその言葉に、寧理は冷たく、端的にそう言い放った。
これが、仕事？

たった数時間前に出会ったばかりの人間を文字通り吊るし上げる仕事とはなんだ？
A M O R E の仕事内容を思い返してみても、こんなことをする必要がまるで分らない。
なんでこうなっているのだ？そして、なんで寧理も巻密もこんなに平然としている
のだ？倫吾は、彼らがこんなことをするような奴ではないということはよく知っている。
る。

状況が読み込めずに混乱している倫吾の様子を見て、巻密は、なんで驚いているのか
わからないとでも言うかのように、不思議そうな顔をする。

「何驚いてるんだ？たった数時間前に出会った人間に対して、随分と入れ込んでい
るじゃないか」

「いやおかしいっすよ！会ったばかりの人間にこんな仕打ちをする方がおかしいじゃな
いっすか！！」

「それは彼女達が人質だからだよ」

動揺する倫吾に、更なる声があつつけられる。

「え、なんであんたが此処に……？」

商品棚の影から姿を現したのは、白い制服を身に纏った壮年の男性——倫吾達の直属

の上司だった。

普通、上の役職の者は滅多に前線に赴かない。いつも本部に引きこもっては、倫吾達のようなフィールドエージェントに通信越しなどで命令するような感じなのだが、どういうわけか、こうして前線に出てきている。

いや、彼がなぜここにいるのかなんてどうでもいい。

問題は発言内容。人質と、そう言ったのだ。一体何に對する人質なのかはわからないが、少なくとも彼女たちがこのような扱いを受けていいとは、倫吾には到底思えなかった。立場の違いを忘れ、思わず上司に掴みかかろうとするが、その瞬間、倫吾の頬に鈍い痛みが走るとともに、彼の身体は横に吹っ飛ばされる。

ガシャンと大きな音を立て、玩具の箱がうず高く積み上げられていたワゴンを押し倒すような形で尻餅をつく倫吾。彼が顔を上げると、そこには、上司を守るように立ちほだかる巻密の姿があった。いきなり自分を殴りつけた同僚のその目は、人形のように無感情だった。その様子を見て、倫吾は彼らはまともじゃないと判断する。

「どういう……ことなんすか……」

「ああ、君は聞いていなかったのか」

「だ、だっておかしいじゃないですか……こんなの正義の味方がすることじゃあないっすよ……?俺は、純粹に平和を守りたくてAMOREに入ったんすよ!!」

「我々は正義の為に戦うのではない。秩序の為に戦うのだよ」

上司がそう言うと、いつの間にか下の階にいたはずの殊宮と古峰までもが、倫吾の前に立っていた。

そして、彼らは一斉にぞつとするような冷たい笑みを溢しながら——本性をあらわにした。

《KAKUSEI THE・HAND》

《KAKUSEI INKLING》

《KAKUSEI CHAOS SOLDIER》

《KAKUSEI TEXIRO・FINALE》

「あ、ああああ……!」

倫吾の目の前で、同僚達がオリジオンに変化していく。

巻密は両手が肥大化した怪人に、寧理は全身が黄色いリボンでぐるぐる巻きにされ、マスクット銃を両手に持った怪人に、古峰は全身から泥のようなものを垂れ流すイカのような怪人に、殊宮は黒いボロボロの甲冑を身に纏った怪人に、それぞれ姿を変えていた。

オリジオンと化した巻密達の背後で、上司が笑っている。どうして彼が笑っていられるのか、倫吾には理解できなかった。これは明らかな離反行為。トップが知ればよくて

懲戒解雇からの牢獄送り、最悪抹殺されるほどの重罪だ。

尻餅をついたままその場から動けないでいる倫吾を、上司は嘲笑う。

「長官のお花畑っぷりには心底うんざりさせられるよ。世界を守るためには泥水を啜る覚悟がなくてはならんというのにな……不穏分子は極限まで排除するのみ、だ。アクロスもイスタも回収し、我々が管理する。それでこそ秩序は守られるのだよ！」

「そんなの秩序でもなんでもない……ただの支配だ……！俺はこんなことをするために組織に入ったんじゃない！世界を守るためにAMOREに入ったんだ！」

「おいお前ら、有事に備えてデモンストレーションでもやったらどうだ？丁度ここに的があるようだしな」

上司がそう投げかけると、オリジオン達が一斉に倫吾の方を向く。

瞬間、倫吾ひとりに幾人分ものの殺気が浴びせられる。それは、命の危機を知らせるには充分すぎた。

それでも、倫吾は呼び掛けずにはいられなかった。

「皆、目を覚ませ」

——バシユン。

倫吾が何か言おうとした直後、殊宮が変じたオリジオンが、手に持っていた剣で容赦なく倫吾を斬りつけた。

A M O : 0 0 公園

公園にて、瞬達は合流した。ついでに遊矢とか野獸ステハゲとかセルティとかもいる。大所帯過ぎるだろという突っ込みはない。する奴も余裕もない。

瞬から事情を聴かされたアラタは、腕を組んで悩む。

「少し目を離れた際にそんなことになってるなんてな……」

「また蚊帳の外!! 私を放置しないでよー」

またまた自分のあずかり知らぬところで事態が進展していることに対して、唯は不満たらたらだった。そんな彼女に瞬はほかほかと殴られながら、なんか言動がネプテューヌまんまなんだよなあ、と留守番中の自称女神の顔を思い出してげんなりしながら、話を進める。

「……と言った具合に、思った以上にややこしいことになっている」

「ボマーはイスタつて子を狙ってるんだろ? ならボマーも確実にそこに来るんじゃないのか?」

「うん。あの執着具合からすると、絶対来るよ。おかあさんもそう言ってる」

「ならA M O R E・イスタ・ボマーのいずれかを追うにしろ、どの道目的地は同じになる

んじゃないかしら？」

アラタの発言に、律刃と大鳳が同意する。確かに、現状は全ての陣営がイスタを手中に収めんとして動いている。キンジや野獣はボマー、レイはイスタといった具合に各々で目的は違うが、そのどのゴールを目指す過程でも、ぶつかる障害は変わらない。

「ともかく事態は一刻を争う。俺はこれから湖森と（ついでにトモリも）助けに行く」「じゃあ相手の要求を呑むの？」

「それは……」

大鳳の問いに、瞬は答えられなかった。

クロスドライバーを差し出せば、湖森達はかえってくる。瞬としては、当然のことだが妹である湖森の安全が最優先だ。どんな代償を払ってでも彼女を取るだろう。それでいい——

（——それでいいのか？）

——とは思えない。

AMOREに攫われたアンドロイドの少女・イスタ。要求を呑もうが拒もうが、どの道彼女を見捨てることになる。湖森達が戻ってきました、で済ませていいのか？それで本当にハッピーエンドなのか？

瞬が悩んでいると、それを察したレイが縋り付いてきた。

「まさかお前、イスタを見捨てるのか言うんじゃないだろうな……？」

「っ!! そんなつもりは……」

「頼むよ……あいつを取り返してくれ! あいつを……渡したくない……頼む……」

「……………」

こちらに泣きつくレイの姿を見て、瞬ははつとした。

見ず知らずのアンドロイドを差し出すことはできない。身近な人のためにほぼ初対面の他人を犠牲にするような、狭量な人間にはなれない。それをしてしまえば、切り捨てた瞬自身も、それを知った湖森達も苦しむ。何より、仮にもヒーローを名乗る人間が命の選別をしてはいけないのだ。ヒーローは救う命を選ぶ資格のない存在なのだから。

同時に、瞬の脳裏に裁場の言葉がよぎる。

“——むやみやたらに危険に突っ込んでいくのがヒーローとも思っているのか!!”

戦ってほしくないという彼の気持ちも分かる。それは良識ある大人がもつ、ごく一般的な感情だ。できることなら瞬もそうしたいと思っっているが、どうしてもそれができない。すべてを裁場に押し付けて自分たちは安全圏で結果待ち、というのを果たして許容できるだろうか？

瞬が考えこんでいると、劍崎が問いかけてきた。

「どうするんだ?」

言われるまでもなかった。

そんなの、はじめから決まっている。

「助けるに決まってるんだろ……湖森達も、イスタって子も助ける。クロスドライバーだつて渡さない。ひとつだつて取りこぼしはしない!」

悩む必要は無かった。

これまでと変わらない。誰かが助けを求めている、自分にはそうできるだけの力がある。おそらくだが、仮面ライダーとして戦っているうちに、そうせずにはいられなくなっていたのだ。

ギフトメイカーや転生者が、多くの人を傷つけていることを知ってしまったから。被害者の存在を知ってしまった以上、それに手を伸ばすことを辞めて日の当たる場所でのうのと生き続けることはできないし、きつと耐えられない。

その考えに至ったのは、瞬だけではなかった。

「私も納得できない。ガツンとカチコミ入れて、思いきり言つてやろうじゃん! お前は間違っている」つてき!」

「同意見だ。弱きを助け強きを挫く……それが私の騎士道だ」

唯とセラは、そう言いながら強く頷いた。

否、彼女達だけではない。

「助けたいんだろ？ならその気持ちに嘘をつくべきじゃない。俺も力を貸す」

「思った以上に大事になったけど……これも何かの縁だ。俺達も手伝う」

「勝手に決めるなっ……まあアタシもあの……オリゾンだっけ？一発風穴開けてやりたいと思ってたのよね」

「なんかよくわかんねーけど、俺を殺しかけやがったうえに無視とかバツチエ頭に来ますよ！絶対文句言ってやる！連れてけよ！頼むよ！」

「瞬には前に助けられたからな。俺もできる限り力を貸す！」

『ここで帰るのは気分が悪い……乗り掛かった舟だ、私も最後まで付き合おう』

劍崎もキンジもアリアも野獣も遊矢もセルティも、同じ気持ちだった。ここで降りることを望む者は誰一人としていなかった。

ある者は正義感。ある者は事態の片棒を担いだ責任。ある者は恩返し。ある者は憤り。目的も感情も今一つ纏まらないが、行き先は同じだった。

「行こう。全てを終わらせに」

一斉に、足を踏み出す。

この乱痴気騒ぎの終幕は、近い。

第31話 AM1:23 / 破滅を誘うサーキット

AM1:00 プラネットプラザ付近

夜の池袋の街を、なんか変な集団がぞろぞろと歩いてた。

「なんか、すっごい大所帯だよね……」

「今更何も言うまい」

志村のつぶやきに、セラがそっけなく返す。

彼の言うとおりに、瞬達はかなり大勢で行動している。仮面ライダーに決闘者デューエリストにホモ、首無しライダーに武偵に騎士に小学生と、かなりバラエティ豊かな面子が集まっている。おまけに、そのうちの半分くらいは、もともと別の事件を追っていた部外者と来た。なんで全員で律義にAMOREの元へと向かっているのかという疑問は当然わいてくる。最後尾を歩いてた大鳳が、「なんで君達同行しているの」組筆頭であるキンジとアリアに問いかける。元々彼らはポマーオリジオンの事件を追っていたところを、アラタ達が無理矢理巻き込んだ形となっているからだ。

「……わざわざあなたたちまでついてくる必要は無かったのに」

「武偵が依頼を投げ出すのは許されない。それに、イスタを狙っている以上、関係者は全員ここにあつまってくるはずだ。あの場からいなくなつた奴を含めて、全員がな」

「キンジ、その言葉に嘘はないのよね？もし嘘だつたら風穴開くけどいい？」

「安心しろよ武偵の坊主……赤浦は絶対来る」

イスタを追えば必ずボマー——赤浦に行き着くと思つているキンジと、半信半疑なリア。しかし、レイはキンジの考えに強く同意している。ボマーをよく知るレイが言うのだから、きつとそうなのだろう。

「それにしても、首無しライダーの噂がホントだつたなんて驚きですねー」

『……驚かないんだな、君達は』

「まあ色々と化け物を見てきたと言いますか……慣れ、なのかな」

『その遠い目、なんか凄く不安になるからやめてもらつていいか？』

「で、だ。直接戦闘は俺と瞬、セラが担当するとしてだな……」

「わたしたちもやるー！」

『君の実力を過小評価しているわけじゃないんだけど、それはちよつとできないな』

「流石に小学生に戦わせるのは大人として感じ悪いというか……」

「三浦さん、なんか腹減んないですか？」

「腹減つたなあ」

「ですよねえ」

「数分前まで自分をコケにされていたことに怒ってた人とは思えない会話だなあ……」

瞬の後方では、セルティの存在に興味津々のハルだったり、冷静に戦力分析をしている剣崎だったり、空気を読まずに腹減ったと言いつつ出すホモ2匹だったり、なんだかわけやわちやした会話が繰り広げられていた。これから喧嘩売りに行くとは思えない雰囲気である。

それをちらりと見ながら、出発前のあの真剣な顔はなんだと愚痴をこぼす瞬。

「あれ、おにいさんそれ……」

「え？」

瞬の腰に巻かれたクロスドライブバー——正確には、その側面にぶら下がっているライドアーツ用のホルダーを指差している。このホルダーは、某猫型ロボットのポケットのように異次元空間となっており、際限なくライドアーツを入れられるようになっていいる。ベルトを巻いていない時は、ベルト部分共々バックルに格納されている。

瞬が何か言おうとする前に、律刃はライドアーツホルダーに手を突っ込んだ。慌てて瞬が彼女の手を引っっこ抜こうとするが、それよりも早く、律刃はとあるものを引っ掴んでいた。

それは、最初にボマーオリジオンと遭遇したビルで拾った彫刻刀だった。クロスドライバーのベルト部分にぶら下がっていたライドアーツホルダーと一緒に突っ込んでいたので、ベルトを外す際にそのままホルダーごと収納されてしまっていたのだ。

「……………お前のだったのか？」

「うん。爆弾魔追つてるときに落としてみたみたい」

なんでそんな危ないもん持ち歩いているのかとか、なんであんな危ない場所にいたんだとか、色々と言いたかったのだが、瞬の内心を察した律刃はとてと走り去り、アラタの背後に隠れてしまう。

そうこうしているうちに、瞬達は、AMORE側から取引現場として指定されたシヨツピングモール・プラネットプラザに到着していた。

既に営業時間を過ぎたシヨツピングモールは、不気味に沈黙を保っている。流石に都心と言えど、この時間帯に外を出歩いている人は少ないので、それが不気味さに拍車をかけている。

時刻は深夜1時ジャスト。取引時刻まで1時間を切ろうとしているが、そもそもはじめから決裂するどころか、成立しえない取引だ。期限は目安でしかない。それはきつと向こうも同じだ。あんな取引なんて、最初から何の意味もなしてはいないのだ。

「……なんだよなっ……」

「地図上ではここなんだけど……」

スマホの地図アプリを見ながらアラタの問いに答える唯。

その時、

「おっと、ここから先は通さないぜ？」

「誰だお前は?!」

なんともシチュエーションにピッタリな台詞が飛び込んできやがった。

瞬の声に答えるように、街路樹の影から、学ランのような格好をした長髪の青年が姿を現す。その左腕には、遊矢や柚子のモノと同じ機種デュエルディスクが装着されている。

「俺はサキユラス、デュエリスト決闘者だ。ギフトメイカーの命を受けて貴様らの邪魔をしに来た

……さあ決闘だ!」

そう言うと、サキユラスは左腕に装着したデュエルディスクを、瞬達に見せつけるように突き出す。それと同時に、リアルソリッドビジョンのカードプレートが出現する。相手はやる気満々だ。

しかし、この場にいる決闘者は遊矢と柚子のみ。

ここは自分がいくしかないお腹をくくり、遊矢がズボンのポケットからデュエルディスクを取り出しながら、皆の前に出ようとする。

「丁度いい、一度転生者と直接話がしたいと思っていたところだ」
「は？」

しかし、その申し出を受けたのは、遊矢でも柚子でも、瞬でもなかった。

その声は、瞬達のはるか後方からしていた。

振り返るとそこには、いつの間にか1台の黒いリムジンが停車していた。そして、リムジンの後部座席の扉が開かれ、そこから一人の男が姿を現す。

その人物の姿を見て、瞬も遊矢も、そしてサキュラスも驚愕した。なぜならその人物は、この状況で出てくるにはあまりにも唐突過ぎる存在だったからだ。おまけに、彼らはその人物のことを知っている。

サキュラスは忌々しそうに、その人物の名を口にした。

「なんでここでお前が出てくるんだよ……赤馬零児！」
そう。

赤いフレームの眼鏡をかけ、灰色のタートルネックセーターの上から、針金が入っているのかと思わざるを得ないような形状をした赤いマフラーを首に巻き、スニーカーを素足履きした銀髪の青年。

彼の名は赤馬零児。

レオ・コーポレーション社長にして、この次元屈指の実力を誇る決闘者^{デュエリスト}。その名と実

力は、この世界の決闘者ならば誰もが理解している。それほどまでの強者が、何の前触れもなく表れたことに、この場にいる誰もが驚愕と困惑の表情を浮かべずにはいらなかった。

零児は、そんな周囲の反応を気にすることなく、ズボンのポケットかた灰色のデュエルディスクを取り出して左腕に巻き付け、腰のデッキホルダーからとり出したカードデッキをデュエルディスクにセットする。

すると、セットされたデッキが自動的にシャッフルされるとともに、デュエルディスクの液晶パネルが点灯し、格納されていたEXデッキが展開する。そして最後に、リアルソリッドビジョンでできたカードプレートが生成される。

——準備万全であった。

「どうした、決闘がお望みなのだろうか?」

「けっ……まあいい、ギフトメイカーに送り込まれた決闘者はもう1人いるんだ。他の奴らの相手はそいつに任せることにするさ。貴様ほどの実力者を下せれば、きつとギフトメイカーも俺を認めてオリジオンにしてくれるはずだからな」

「ご丁寧な説明台詞を舌打ち交じりに言い切るサキュラス。」

「零児……どうしてお前が……」

「転生者……君たちの存在については、わが社が独自に調査を進めている。この前はよ

くも舞網にわで暴れてくれたものだ。君たちが何を考え、何を思い、何を企んでいるのかは知らないが、この前の様な暴挙を繰り返されては敵わない。だからこうして、転生者きみたちと話をする機会を待ち望んでいた」

「流石大企業の社長……ぬかりないというか、末恐ろしいというか……」

「念のため榊遊矢に監視をつけていて正解だった。どうやら転生者は余程彼が嫌いらしい……この一週間だけでうようよと釣れたよ」

そう。零児は少し前に舞網で暴れたオッドアイズオリジオン——札道マサルの一件で転生者の存在を認識し、それを危険視し、独自に調査をしていた。

その結果、なぜかやたらと榊遊矢を敵視する転生者が多かったので、遊矢の周囲を監視することで転生者を探し出し、それを捕まえることで調査を進めていたのだ。

それを知った遊矢は当然反発する。知らない内に転生者を誘う餌にされていたのだから、怒るのも無理はない。

「俺を知らない内に餌にしてたつてののかよ!!」

「それについては後で詫びよう。ともかく、ここは私が引き受ける。この先に用があるのだろうか？早く行きたまえ」

「あ、ああ……任せたぞー!」

色々と言いたいことがあったが、今は湖森達を助けるのが最優先だ。瞬は何か言いた

げな遊矢の手を引つ張りながら、プラネットプラザの入口へと走っていった。

後には、零児とサキュラス、そしてリムジン内に待機している零児の部下数名が残される。

両者が思ったことはただ一つ。

これで邪魔者は消えた。思う存分戦える。

「決闘!!」^{デュエル}

赤馬零児：LP4000 HAND×5

サキュラス：LP4000 HAND×5

プラネットプラザ1階 中央吹き抜け通路

零児の予期せぬ乱入のおかげで、難なく店舗内に侵入できた瞬達。

本来ならば既に営業時間は過ぎていて、自動ドアも動かなくなっているはずなのに、何故か普通に動いていた。恐らくだが、AMORE側が勝手に稼働させているのだろう。

「それにしても、閉店後のショッピングモールって不気味だよね……まさしく、沈黙の巨大迷宮って感じかも」

「勝手に戦場にされて、お店の人達はいい迷惑だろうなあ……」

唯と志村が呑気なことを言っているが、その内容自体はまあまあ領けるものだった。普段ならば大勢の客で賑わっているであろうシヨッピングモールも、酷く閑散としている。照明やエスカレーターが普通に稼働している分、余計に不気味な印象を抱かせるのだ。

「よくわからないけど、助かったんだよな？」

「ああ。零児の実力は折り紙付きだ。あそこはあいつに任せても——」

遊矢がそう言いかけた時だった。

「覚悟しろ！AMOREに逆らう不届き者め！」

「うわっ!!」

吹き抜けの上の方から声がしたかと思えば、次の瞬間、瞬達のすぐ目の前で、ガシャーン!と大きな音がした。

一体何事だと瞬が前方を見ると、そこには、ひしやげたシヨッピングカートが転がっていた。今の音は、誰かが上階からシヨッピングカートを投げ捨てた音だったのだ。下手をすれば誰かに当たって視認が出ていたかもしれない。その事実を認識しただけで、瞬の身体は軽く震えあがる。

「外したか。まあもとより当たるとは思っていないかつたし、これで終わってしまったのは味気ないからな」

目の前に設置された、2階へと続くエスカレーターの上段。そこに、素肌の上に白いコートという、若干寒そうな格好の青年が仁王立ちしていた。青のメツシユの入った、戦闘民族ばりに逆立った黒髪と、コートの下から垣間見える、鍛え上げられた筋肉が、彼を只者ではないと暗に告げているような、そんな印象を瞬は受けた。

青年は、自身の左腕に装着したデュエルディスクを見せつけると、エスカレーターの最上段から1階へと飛び降りた。高さにして20数段。それほどの高さから飛び降りれば、骨の1、2本は軽く折れるはずなのだが、階下へと着地した青年はそんなそぶりをつゆも見せず、ペタペタと足音を立てながら、瞬達に接近してくる。

「オレは恐竜崇おそれたつたか。AMOREエージェントと決闘者を兼任している」

「今度はAMORE……！」

「ここから先は通さない。オレのリングで全員K.O.してやるよ」

ギフトメイカーの次は、AMORE配下の決闘者デュエリストが現れた。

もう、さっきのように都合のいい増援はやってこない。ならば、やることはひとつだった。

「ここは俺が何とかする」

「遊矢……」

そう言いながら、遊矢が皆の前に立つ。

決闘者の相手ならば、同じ決闘者がするのが筋というモノ。それならば、遊矢か柚子がこの役目を引き受けるしかない。それに遊矢は、決闘者である共にエンターテイナー。決闘という名の舞台から逃げるような真似はどうしてもできない。

瞬は何か言いたげだったが、間髪入れず遊矢は彼の背中を押す。

自分に構わず先に行け。助けたい人がいるんだらう？と諭すように。

「妹さん、ちゃんと助けてやれよ？」

「……わかった」

瞬はそう言うと、皆を引き連れて先に進む。竜崇は行かせまいとして、カードを数枚、手裏剣のように投擲するが、投げつけられたそれらは、律刃が彫刻刀で全部バラバラに切り裂いてしまった。その様子を見て、竜崇はわざとらしい溜息をつく。

後には竜崇と遊矢と、彼を心配して残った柚子の2人が残される。竜崇は自分のデッキをシャッフルしながら、カード手裏剣を外したことについて愚痴をこぼす。

「やっぱ実力行使はむいてないのかもなーオレ。肝心な時に限って外すんだよなーこれ」

「決闘者ならカードで勝負しなさいよ」

「やっぱそうするしかないか……その方が性に合ってるんだらうな」

竜崇はそう言うと、デッキをデュエルディスクにセットし、目を覚ますかのように、自

分の両頬を数回叩く。

そして、遊矢を指差して宣言する。

「こいよ神遊矢！オレが完膚なきまでにぶっ倒してやるぜ！」

「瞬達の邪魔はさせない！お前を倒して、先に進む！」

デュエルディスクを取り出しながら、遊矢も負けじと啖呵を切る。

「遊矢がやるなら私も！私だって決闘者なんだから！」

「柊柚子、お前は観客だ」

遊矢がやるならと、自身も戦おうとする柚子。

しかしそんな彼女が鬱陶しかったのか、竜崇はズボンのポケットから一枚のカードを取り出し、柚子目がけて投げる。

柚子はそれを難なく避けるが、カードが床に刺さった瞬間、カードから鎖の様なもの
が跳びだし、柚子の身体を拘束する。

「柚子!!」

「安心しろ、決闘デュエルが終われば解放してやる。さあ始めようぜ、新時代の決闘デュエルを！」

「新時代の決闘……?」

《フィールド魔法発動、"クロス・オーバー"》

遊矢のデュエルディスクが起動し、デュエルプレートを生成すると同時に、アク

シヨンフィールドを生成する。アクションカードと青い半透明の足場が空中にいくつも出現し、周囲は淡い光に包まれる。

「決闘^{デュエル}！」

遊矢：LP4000 HAND×5

竜崇：LP4000 HAND×5

また一つ、戦いの火蓋が切られた。

プラネットプラザ 正面入口前

瞬達を先に行かせる為に、サキュラスを足止めすることとなった零児。

「先攻はお前さんにやるよ。かかってきな！」

「ならそうさせてもらおう……私は魔法カード『隣の芝刈り』を発動！自分のデッキ枚数が相手より多い場合、デッキ枚数が相手と同じになるように、デッキの上からカードを墓地に送る！」

「いきなり芝刈りかよ……ふざけやがって」

「私のデッキ枚数は45枚。君は35枚。よってその差……10枚のカードを墓地に送る」

そう言うとき零児は、自分のデッキトップからカードを10枚取り出し、それを纏めて

デュエルディスクの前面にある墓地に送る。

それを見て、サキュラスは早くも先攻を譲ったことを後悔し始めていた。転生者である彼は、零児の使用するデッキの特性をよく理解している。零児のデッキは墓地活用が非常に得意。初手で10枚も墓地を肥えさせられた以上、ここから零児の怒涛の展開が始まることは容易に想像がつく。

だが、サキュラスは焦りながらも、未だに余裕も捨ててはいなかった。

（ふっ……いくらお前が強かろうが、お前は既に俺の土俵に入っているんだ！お前の知らない決闘を見せてくれる……！）

それが強がりかどうかは、本人以外にはわからない。だが、大抵の決闘者ならば、口をそろえてこう言うだろう。

“決闘を続ければわかる”と。

「そして、永続魔法“地獄門の契約書”を発動。その効果により、デッキから“DDスワラル・スライム”を手札に加える」

「来るか……！」

「ほう、その顔を見るに、君はどうやら私の戦術を知っているようだ……ならば望み通り、君の期待に応えよう。私は手札の“DDスワラル・スライム”の効果発動！このカードと手札の“DDバフオメット”を素材に融合召喚を行う！黒き翼をもつ異

形の神よ、自在に形を変える神秘の渦よ。今一つとなりて新たな王を生み出さん！融合召喚！レベル6、”DDD烈火王テムジン”！」

DDD烈火王テムジン：☆6 ATK2000

零児がそう言うと、零児の手札から青緑のスライムのような生物と、山羊の頭と大きな翼をもつ悪魔が飛び出し、光の渦となつて零児の頭上で溶け合い、ひとつとなる。そして、その渦の向こうから、炎の剣と大盾を持った人型のモンスターが現れる。

だが、これで終わりではない。ここからが零児の操る”DD”の真骨頂だ。

「更に私は、墓地の”DDネクロ・スライム”の効果発動し、ネクロ・スライムと墓地の”DDプライウド・オーガ”を除外することで、融合召喚を行う」

”隣の芝刈り”で落としたカードか……まったく、運がいいな」

「自在に形を変える神秘の渦よ、誇り高き戦鬼と一つとなりて、真の王と生まれ変わららん！融合召喚！レベル7、”DDD神託王ダルク”！」

DDD神託王ダルク：☆7 ATK2800

サキュラスが愚痴をこぼす前で、零児の墓地から髑髏を携えた黒いスライムと、鎧と大鎌を装備した鬼オウガが飛び出し、テムジンの時同様に光の渦に溶け込む様にして消え、そこから、鎧を身に纏った悪魔の女騎士が現れる。

”DDD烈火王テムジン”の効果！自分フィールドに他の”DD”モンスターが特殊

召喚された時、墓地から “DD” モンスター1体を特殊召喚する！私は “DDバフオメツト” を特殊召喚！」

「GUUUUUUU！」

DDバフオメツト：☆4 ATK1600

墓地から呼び出されたのは、テムジンの融合素材となったバフオメツトだ。地面に空いた穴から勢いよく飛び出したバフオメツトは、翼を大きく広げながら着地する。

「更に墓地の “DDスワラル・スライム” を除外し効果発動。手札から “DD” モンスター1体を特殊召喚する！現れる、全てを統べる超越神…… “DDD死偉王ヘル・アーマゲドン” ！」

DDD死偉王・ヘルアーマゲドン：☆8 ATK3000

零児の手札から呼び出されたのは、軽く2〜3mはありそうな巨大なモンスター。水晶の塊のような形の胴体の上に顔が乗っかているさまは、形容しがたい、異様な威圧感を放っている。これが零児のエースカードであるペンデュラムモンスター、その名もヘル・アーマゲドン。

「そして、手札からチューナーモンスター “DDナイト・ハウリング” を通常召喚し、効果発動。ナイト・ハウリングは、召喚成功時に墓地の “DD” 1体を攻守を0にして復活させる。私は “隣の芝刈り” の効果で墓地に送られた “DD魔導賢者コペルニクス

“を特殊召喚する”

DD魔導賢者コペルニクス：☆4 ATK0

ヘル・アーマゲドンに続いて零児の手札から呼び出されたのは、空間に口と目だけが現出したかのような化け物だった。そいつはフィールドに現れるなり地面に向かつて長い舌をのぼすと、まるで穴からひっぱりあげるかのように、虚空から謎の機械のようなものを吊り上げる。

「私は“DDバフオメット”の効果発動。ナイト・ハウリングのレベルを3から2にする。そして、レベル6のテムジンにレベル2となったナイト・ハウリングをチューニング！その紅に染められし剣を掲げ、英雄たちの屍を越えていけ！シンクロ召喚！生誕せよ！レベル8、”DDD呪血王サイフリート”！」

DDD呪血王サイフリート：☆8 ATK2800

バフオメットのレベル変動効果を使って呼び出されたのは、血に濡れた大剣を担いだ騎士だった。

「更に、レベル4のバフオメットとコペルニクスでオーバーレイ！この世の全てを統べるため、今 世界の頂に降臨せよ！エクシーズ召喚！生誕せよ、ランク4！”DDD怒濤王シーザー”！」

DDD怒濤王シーザー：★4 ATK2400

零児がそう言うと、零児の目の前の地面に暗い穴のようなものが出現し、バフォメツトとコペルニクスが紫色の光となってその穴に吸い込まれていく。そして、光が爆発するようなエフェクトが現れた後、黒い鎧と大きな金棒を装備したモンスターがフィールドに現れる。

これがエクシーズ召喚。エクシーズモンスターがレベルの代わりに持つ、『ランク』という数値と同じレベルのモンスターを複数体並べ、それらの上に重ねる形でEXデッキからモンスターを特殊召喚する方法だ。

融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラム。4種のモンスターを先攻1ターン目に並べる展開力の高さと、それを迷いなくスムーズに行える判断力の高さが、DD——ひいては零児の恐ろしさなのだ。転生者であるサキュラスは、前世の知識から知ってはいたが、いざ目の当たりにすると流星に気圧され気味になってしまう。

「私はこれでターンエンド」

零児は4体の大型モンスターを立ててターンを終わらせた。

神託王ダルクには、効果ダメージをライフゲインに変換する効果。シーザーにはバトルフェイズ終了時に、このターンに破壊されたDDを蘇生する効果、サイフリートには魔法・罠の無効効果が備わっている。相手の攻めに対する最低限の対処手段は確立されている……はずだ。

「なら俺のターン！」

サキュラス：HAND5↓6

張り詰めた空気の中、サキュラスのターンに突入した。

「俺は手札から『オルフェゴール・プライム』を発動。手札の『星遺物―『星盾』』を墓地に送り、2枚カードをドロウする。」

「星遺物……聞いた事のないカードだな……」

零児が未知のデッキに警戒する中、新たにドロウしたカードを見て、サキュラスはニヤリと笑った。

「魔法カード”予想GAY”！自分フィールドにモンスターがいない時、デッキからレベル4以下の通常モンスター1体を特殊召喚できる！」星杯に誘われし者”を特殊召喚！」

星杯に誘われし者：☆4 ATK1800

魔法カードの効果により、ボロボロの外套に身を包んだ青年が出現する。零児はサイフリートの効果を使わなかった。使うタイミングを計っているのだ。

しかしその時、ふいにサキュラスが笑い出した。

「見てろよ社長さんよお……あんたらの時代遅れの決闘とは違う、俺の新時代の決闘をな！」

「新時代の決闘だと？」

新時代の決闘。それが何を意味するのか、この時の零児には想像がつかなかった。

しかし、零児はそれをすぐに理解することとなる。

サキュラスが天を指さすと、サキュラスが召喚した「聖杯に誘われし者」が赤い光となつて空へと上がっていく。零児が空を見上げると、そこには、謎の枠の様なものが浮かび上がっており、光はそれに突っ込んでいつている。

「現れる、破滅に誘うサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はトークン以外の通常モンスター1体。俺は「星杯に誘われし者」をリンクマーカーにセット。サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク1、聖杯竜イムドゥーク！」

聖杯竜イムドゥーク：LINK1（上）ATK800

枠の中から、途轍もない閃光と共に降り注いできたのは、一匹の小型のドラゴンだった。あどけなさの中に凛々しさを同居させるそのモンスターだが、零児はそれには微塵も意識が向いていなかった。

零児が意識していたのは、もっと別のモノ。

モンスターという結果ではなく、その召喚法^{かてい}。

「リンク召喚……だど？」

自分の知らない、未知の召喚法。

その存在は、零児から冷静さを奪うには充分だった。こんな衝撃は、初めてペンデュ

ラム召喚を目撃した時以来だろうか。

「お前まだ気づかないのか？ デュエルディスクをよく見ろよ……！」

「何？」

サキュラスに言われるがまま、零児はデュエルディスクに目をやる。

「モンスターゾーンが……一つ増えている!!」

カードプレートの形だった。何故か2か所、本来はなかったでっばりの様なものが存在する。液晶画面で確認すると、右から2番目と4番目のモンスターゾーンの上に、もう一つのモンスターゾーンが存在している。本来モンスターゾーンは5か所のみのもので、ずなのだ。

サキュラスは、零児を指さしながら得意げに言う。

「言ったはずだ。ここからは新時代の決闘だとな……さあ、存分に惑うが良い！」

「……………」

プラネットプラザ1F西口

瞬達を先に行かせるべく、竜崇の相手を引き受けた遊矢。

鎖で縛られた柚子が見守る中、最初のターンが幕を開ける。

「先攻は俺が行く！ 俺は手札から、スケール8の『竜穴の魔術師』とスケール5の『慧

眼の魔術師”でペンデュラムスケールをセッティング!”

「……………」

「そして“慧眼の魔術師”のペンデュラム効果発動!もう片方のペンデュラムゾーンに“魔術師”“EM”が存在するとき、自身を破壊することで、デツキから他の“魔術師”をペンデュラムゾーンに置くことができる!俺はデツキからスケール一の“龍脈の魔術師”をセッティング!”

ペンデュラムゾーンに出現した、金と黒の法衣を身に纏った魔術師が瞬時に霧散し、新たに白い法衣を身に纏った赤毛の魔術師がペンデュラムゾーンに出現する。これでペンデュラムスケールは1と8だ。

「揺れる、魂のペンデュラム!天空に描け光のアーク!ペンデュラム召喚!現れる、俺のモンスター達!EXデツキから“慧眼の魔術師”!手札から“EMセカンドンキー”、“オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”!」

EMセカンドンキー：☆4 DFE2000

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：☆7 ATK2500

慧眼の魔術師：☆4 ATK1500

遊矢がそう宣言すると、天空に浮かび上がった光の輪から、3体のモンスターが出現する。

1体は先ほどペンデュラムゾーンで破壊された慧眼の魔術師。もう1体はロバの様なモンスター。そして最後の1体は、2色の目を持つ赤いドラゴン——遊矢のエースモンスターであるオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンだ。早速主役のご登壇である。「セカンドンキーのモンスター効果！ペンデュラムゾーンにカードが2枚存在する状態で召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから“EM”モンスター1体を手札に加える！俺は“EMドラクロバット・ジョーカー”を手札に加え、通常召喚！」

「ヤハッ！」

EMドラクロバット・ジョーカー ☆4 ATK1800

「ドラクロバット・ジョーカーは、召喚に成功した時、デッキから“EM”オッドアイズ”魔術師”ペンデュラムモンスターの内、1体を手札に加えることができる」

遊矢が手札に加えたのは、特殊召喚時にサーチ効果が使える”EMペンデュラム・マジシャン”。本来なら初手で使いたかったのだが、生憎今の遊矢の手札には、手札のこのカードを特殊召喚するすべがない。なので、ここは

「俺はレベル4の“EMドラクロバット・ジョーカー”と“慧眼の魔術師”でオーバーレイ！黄金の竜騎士よ、風の秘獣と一つとなりて招来せよ！エクシーズ召喚！現れる、リンク4！昇竜剣士マジエスターP^{パラティン}”！」

ドラクロバット・ジョーカーと慧眼の魔術師が紫の光となり、遊矢の目の前に現れた黄

金の渦に吸い込まれてゆく、そして、2体が吸い込まれていった光の渦から、ユニコーンに跨り、鎧を身に纏った竜人が飛び出してくる。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド。そしてこの時、マジエスターPの効果を適用する。エクシーズ召喚したターンのエンドフェイズに、デッキからペンデュラムモンスター1体を手札に加える」

遊矢はカードを1枚セットするとともに、デッキからペンデュラムモンスター1体を手札に加える。手札に加えたのは防御用のモンスター。相手がどんなカードを使ってくるかわからない以上、防御用のカードを保持しようとするのは当然の心理だろう。

「オレのターン！」

竜崇：HAND×5↓6

「相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、手札から『ダイナレスラー・バリーオニクス』を特殊召喚できる！こい、バリーオニクス！」

「シャアアアアアツ！」

ダイナレスラー・バリーオニクス：☆3 ATK1600

竜崇の手札から出てきたのは、人型の恐竜の様なモンスターだ。そいつは出てくるなり、遊矢を威嚇するかのようにつける。

「そして、手札から『ダイナレスラー・パンクラトプス』を特殊召喚！こいつは自分

フィールドのモンスターの数が相手より少ない場合に、手札から特殊召喚できるのさ！」

ダイナレスラー・パンクラトプス：☆7 ATK2600

続いて出てきたのは、2本の足で直立するトリケラトプスだった。

「うわ……すごいむさくるしそう……」

「まだまだ行くぜ？オレは手札から『魂喰いオヴィラプター』を召喚！オヴィラプターは召喚成功時に、デツキから恐竜族を1体手札に加えるか墓地に送ることができる」

竜崇の展開はまだ終わらない。次に出てきたのは、卵泥棒の異名を持つ恐竜・オヴィラプトル。大きな卵を抱えて出てきたそいつは、出てくるなりその卵をかち割ってしまった。そして、割れた卵の中から一枚のカードが飛び出し、竜崇の手札に加わる。

「そして、手札に加えた『ダイナレスラー・イグアノドラツカ』の効果！手札から恐竜族1体を墓地に送り、イグアノドラツカを特殊召喚する！」

ダイナレスラー・イグアノドラツカ：☆6 ATK2000

あつという間に、竜崇のフィールドには4体の恐竜が出現してしまった。

しかし、だ。これだけモンスターを並べて素直に終わるとは、どうしても思えない。きつとまだ何かをしてくるはずだ。遊矢の中に存在する、数多の決闘によって磨かれてきた、決闘者としての勘とでも言うべきものがそう告げている。

そして、その勘はあっさりとの中する。

竜崇は、拳を天高くつき上げ、不敵な笑みを浮かべながら、こう豪語した。

「見とけよ榊遊矢！これが新時代の決闘だ！」

「新時代の決闘……？何をやる気なの？」

「現れる、勝利の頂に続くサーキット！アローヘッド確認！召喚条件は『ダイナレスラー』モンスター2体！」

竜崇がそう叫ぶと、イグアノドラツカとバーリオニクスが赤い光となって上つてゆく。遊矢が上を見上げると、光の向かう先には、見たこともない形をした、何かの枠の様なもの浮かんでいる。

「オレは、ダイナレスラー・イグアノドラツカ」と、ダイナレスラー・バーリオニクスをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2！ダイナレスラー・テラ・パルクリオ！」

ダイナレスラー・テラ・パルクリオ：LINK2（左／上）ATK1000

上つていった2本の光が枠にぶつかると同時に、枠の内側から凄まじい閃光が解き放たれる。そのあまりの眩しさに、遊矢は思わず目を逸らす。

数秒程して光が収まり、遊矢は恐る恐る目を開ける。するとそこには、赤い装甲を身に纏った、鶏冠トウカの様な部位を持つ恐竜が立っていた。

遊矢は、モンスターの出現に驚いたのではない。驚いたのは、その方法だった。なぜなら、それは。

「リンク……………召喚……………？」

「え……………今、何したのよ……………？」

全く知らない、未知の召喚法だったからだ。

アドバンス、儀式、融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラム。遊矢の知る召喚法に、リンク召喚なんてものは存在しなかったし、そんなものを使ったことのある決闘者は、4つの次元のどこにも存在しなかった。しかし、デュエルディスクが違反行為を検知していないということは、この召喚法はルールに則ったものということになるのだろうか。

わけがわからない。予想外の出来事に戸惑いを隠せない遊矢は、竜崇の方を見る。彼は不敵に笑っていた。その顔を見るに、今の遊矢の反応も織り込み済みということらしい。

「カードプレートをよく見ろよ」

「あ……………あ!!」

呆然とする遊矢の様子を鼻で笑いながら、竜崇はそう促す。

遊矢は困惑しながらも、自身のデュエルディスクから生成されているカードプレート

に目をやる。そこには遊矢のモンスター達とペンデュラムスケールが並んでいるだけで、なんら変わったところは――

「――いや、なんか変だ！これは一体……？」

「おお、意外に早いんだな」

カードプレートの形が変わっている。直線的なフォルムだったカードプレートに、何か2か所、本来はなかったでっばりの様なものが存在する。液晶画面で確認すると、右から2番目と4番目のモンスターゾーンの上に、もう一つのモンスターゾーンが存在している。

「オレは親切だからよお、教えてやるよ。それはEXモンスターゾーンだ」

「EXモンスターゾーン…………？」

「そう、リンクモンスターはEXデッキからEXモンスターゾーンに召喚されるモンスター。その恐ろしさは――お前がこれから身を以て味わうことになる」

「リンク召喚……そんな召喚法があったなんて……」

自分の知らない、未知の召喚法。

何の因果か、かつてペンデュラム召喚という未知の召喚法を生み出した遊矢が、今度はリンク召喚という未知の召喚法に驚かされている。あの時とは、完全に立場が逆転していた。

「言つたはずだぜ、新時代の決闘を味わえつてな」

不敵な笑みを浮かべながら、竜崇は言う。

「お前は既にオレのリングに上がつちまつてるんだよ！さあここからが本番だ！せいぜいお前のお得意のエンタメデュエルとやらで足掻いて見せるよ」

プラネットプラザ・地下駐車場

月明かりの入らない地下駐車場には、数名のAMOREエージェントが屯していた。

その全員がうつろな表情をしており、時折言葉にならない呻き声の様なものを上げながら巡回している様は、明らかに異様で、彼らはまともではないというのが、一目瞭然だった。彼らは皆、操り人形と化しているのだ。

その様子を、バルジ達は静観していた。

地下駐車場の柱の影に身を潜めながら、彼はほくそ笑んでいる。その後ろには、妙にウキウキとしているリイラと、そんな2人から距離を取っているレドの姿も見える。

彼らの傍らには、大型トラックが一台。だが、AMOREの連中はそれに気づいていない。なぜなら、バルジの手により、トラックには認識障害装置が取り付けてある。それを使えば、周囲からは「見えない」と認識させることなど造作でもないのだ。

「いくらイスタとアクロスが欲しいからってあそこまでやるか？」

「必死過ぎてキモイよね」

「……………」

イスタ欲しさに部下を操り人形にするAMORE側の所業に引いてるバルジだが、少なくともお前にだけは言われたくないだろう。そう思うレドだった。

レドは昔から、バルジのこういうところが嫌だと思っていた。レド自身も充分に興味が悪い方の人種だという自覚はあるのだが、それに他人を巻き込もうとするバルジのスタンスが気に入らなかった。それに、奴は自分以外のすべてを見下しているのが、節々から見て取れる。そんな奴とは一緒にいたくないというのがレドの本音なのだが、向こうは平気な顔をして絡んでくる。

——正直に言って、鬱陶しかった。

これから大勝負だというのに、こんな気分では勝てる戦も勝てなくなる。負ければティーダの叱責バツハラが待っている。撤退しただけでぶち切れるのだから、負けでもしたら殺されかねない。

「どうしたのレド、なんで私達から距離取っているのかな？」

「……………別行動だ、僕はアクロスを殺しに行く。その方がいいだろう？」

レドが自分達から距離を取っていることに気づいたりイラだが、レドの返答に興味な

さそうに返事をする。彼女はいつもこんな感じなのだ。子供のように気まぐれで自分勝手だが、その分単純でわかりやすいし、少なくともレドは彼女のことは嫌いではない。「邪魔すんなよバルジ、お前は転生者狩りで遊んでやがれ」

去り際に、レドはバルジにそう吐き捨てる、非常階段へと続く扉の中に消えていった。

その様子を見ていたリイラが、心配そうにバルジに訊く。

「いいの？あいつを独断専行させて。ティードに怒られるよ？」

「気にしない気にしない、あんなパワーハラ野郎のことなんて気にする価値もないよ。てか何？レドのこと気にかげちやって……もしかして好きなの？」

「いや、あの子いい玩具になりそうだから、ほっとけないのよね」

「それな！」

リイラの言葉に、バルジは笑顔で同調する。悪人たちの、クソとしか言いようのないやり取りだった。

その時、ガコンと、トラックのコンテナの内側で音が鳴った。しかし、トラックに積まれた認識障害装置の効果によって、AMOREの隊員達は気づかない。

「さ、レイラちゃんもハンドレッドも暴れてらっしゃいな☆」

バルジがトラックのコンテナを開く。

コンテナの解放から少し間をおいて、最初に出てきたのは、赤と緑の蛍光色の鎧を身に纏ったオリジオン。背中からは蠟燭のような形状の突起がいくつも確認でき、両の目元あたりから胴体を伝い、足首までジッパーが伸びている。そして、胴体には赤茶けた”100”の文字がでかかど存在している。

続いて出てきたのは、変わり果てた姿のレイラだった。今までの軍服とはうって変わって、いつものコートの下には露出度の高いメイド服を着せられている。目はギンギンに充血し、頭は包帯でぐるぐる巻きにされた上に、人の手ほどの大きさの虫のようなものが、彼女の頭に尻尾をぶっ刺している。

レイラはバルジの方を見ると、挨拶代わりにウインクをする。今までの彼女ならば、絶対にしないであろう仕草だ。

「再洗脳の具合はどうかかな？」

「大丈夫です！お陰様で、こんなに惨めで無様な操り人形になりました！ご主人様、ありがとうございます！」

媚びるような声をあげながらダブルピースをキメるレイラ。そこには、冷酷に仮面ライダーの命を狙う戦士としての彼女はなかった。どこまでも惨めで、無様な一匹の奴隷の姿だけがあった。そして、それを憐れむことのできる者はこの場にはいないのだ。

隣では赤と緑の怪物——ハンドレッドオリジオンが、背中の蠟燭のような突起から炎

を吹き出しながら、近くに置かれていたカラーコーンをティッシュのように丸めている。そして、興奮気味にカラーコーンの残骸を握りつぶす。

「ニンゲン、ヨワイ！ワタシ、ツヨイ！」

「わかりました☆主人様☆☆可哀想な無能操り人形のレイラちゃんにお任せあれ☆」

レイラは両手でハートマークを作りながらそう言うと、コンテナ内に安置されていた2本のモップを手に取り、A MORE 隊員達のいる方へと向かっていった。

トラックに積まれた認識障害装置の効果範囲外に出たことで、A MORE 隊員達はようやくレイラの存在に気づく。

「さ、お片付けの時間だぞ♡」

「くそっ……いつの間に……!!」

「燃え燃え急死^{キユン}♡」

A MORE 隊員のひとりが慌てて腰の拳銃を構えるが、それよりも早く、レイラがモップの柄の先を勢いよくその隊員の首目がけて突き刺した。

モップは、隊員の首をいとも容易く貫通する。ブジャアアアッ！と、貫かれた首から大量の血が噴き出る。A MORE 隊員は、自分のみに何が起きたのかを理解する間もなく、その命を散らした。

「コイツ……っ！」

「ニンゲンダアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

「のぶっ!!」

すぐさま別の隊員が駆け付け、レイラに向かって発砲する。

しかし、ハンドレッドオリジオンがその間に瞬時に割って入り、腕を軽く一振りする。それだけで、発射されたはずの弾丸はレイラに当たることなく、地面に落ちる。ハンドレッドオリジオンが弾丸を素手で叩きおとしたのだ。

銃が利かないなら、と、今度は各々の能力に頼った戦法に切り替えるAMORE隊員達。ある者は両手から炎を生み出し、ある者はチーターに変身し、ある者は髪の毛を梁のように尖らせて発射する。

しかし、

「効かないんですよねー☆これくらいでやられちゃあ奴隷失格ですしっ」

「ニンゲン、クロス！」

レイラがモップを一振りするだけで、10人近くいたAMORE隊員達があっけなく吹き飛んだ。

否、それだけではすまない。至近距離にい3人の隊員については、胴体を真っ二つにぶった切られて即死していた。

血と内臓をまき散らしながら、地下駐車場の壁に叩きつけられる死体たち。それは、

生き残った者たちの怒りに火をつけるのには充分だった。

「ああ、品名木しななき！織戸芝おとしば！御嵩みたけ！」

生き残っていた隊員が、殺された仲間たちの名を叫ぶ。洗脳されているとはいえども、どうやら仲間意識は健在らしい。拳をわなわなと震わせ、雄たけびを上げながら殴りかかる。他の隊員達も同じだ。武器を手に取り、死した仲間の敵討ちの為に駆け出す。

少年漫画やヒーロー作品ならば、仲間の死をトリガーに感情を爆発させてパワーアップ——という展開が待ち受けているだろう。残酷な悪役に血反吐を吐きながら逆転勝利したためでたしめでたし、となるのが理想、のはずだ。

だがしかし。

いくら感情を爆発させようが、埋めようのない差というモノは存在するのだ。

「死んじやつてくださいごしゅじんさま雑魚共♡」

「ザアコ、ザアコ！ザコニンゲン！ワライトマンナーイーグヒヤヒヤヒヤヒヤ！」
ブワツ！と、ハンドレッドオリジオンの拳とレイラのモップが弧を描く。

それだけだった。

ベキベキベシヤベシヤボキボキベツコンツ
!!!!!!
と、盛大な音を立てて、彼女達に突っ込んで来た隊員達が全員即死した。

きつと、彼らには走馬灯を見る間すらなかったのだろう。

それほどまでにあっさりとした最期だった。

骨が砕かれるとか、身体がちぎれるとかの次元ではなかった。文字通り、攻撃が当たった箇所より上の身体が原型を残さずに吹き飛んだのだ。腰に攻撃を受けた者は腰から上が無くなり、頭に攻撃を受けた者は首が跡形もなく粉碎され、残った身体の部位が、血肉をまき散らしながら慣性の法則に従って前のめりに倒れてゆく。

可憐なメイド服におびただしい返り血を浴びながらも、レイラは笑みを崩さなかった。

幾度となく洗脳を施されたことにより、彼女本来の倫理観はおろか、自我すら存在しないに等しい。彼女は心身共にバルジの奴隷になっっているのだ。レイラは血塗れのままバルジの元に駆け寄ると、笑顔で彼に抱き着いてきた。

「見てくださいましたか？主人様！レイラちゃんのお掃除さつりくしよ！もーっと頑張りますので、いっぱいほめてくれたら嬉しいな☆」

「おーよしよしよしよし！よくやった！よくやったぞお人形ちゃん！やつぱはメイドだよなあ！気分転換を兼ねて調整した前の彼女は生意気すぎてクソだったからな、これくらい無様に媚びて食える方が興奮するってもんだぜ！」

「二応ここに女の子いるんだから、すこーし自重してほしいかなあバルジ君？ 私じやなかつたら即通報案件だからね？」

イチヤイチャしている人でなしカップルに、一部始終を見ていたリイラが笑いながら突っ込みを入れる。勿論、彼女も本気ではない。むしろ姉の醜態が見られて満足そうである。

「さて、俺らも行こうぜ。こんな雑魚ばかりじゃあ実験相手にもなりやしねえ、そうだろ？」

「ウンー！」

「そうですねー！レイラちゃんの可愛^わさをもっともっと知らしめてやるのです☆」

バルジの言葉に元気いっぱい頷くレイラとハンドレッドオリジオン。

彼らの前には、死体だらけの地下駐車場が広がっている。その向こうには、シヨツピングモールへと通じるエレベーターホールが、自動ドア越しに確認できる。

「ま、前座は終わったようだし？ 私も久々に暴れましようか」

リイラはそう言うと、大きく伸びをしてから振り返る。

既にバルジ達はエレベーターホールに向かっている。先ほどまで虐殺行為を働いていたとは思えないその和気藹々っぷりは、見る者が見れば戦慄し、嫌悪するほどのものだった。しかし、リイラは根っからの悪人なのでそんな気持ちは微塵も湧かない。

彼女の心の中にあるのは、まだ見ぬ惨劇への期待だけ。自分の力でどれほど凄惨な光景を築き上げられるか、その1点だけだ。

「それに、あの子たちもここにやってくるようだし、ほんと濡れちやいそう♡」
 そう呟きながら、じゅるりと舌なめずりをする。

リイラは鼻歌交じりにバルジ達の後についていくのだった。

プラネットプラザ2階 中央通路

決闘者達の相手を遊矢と零児に任せ、瞬はプラネットプラザの2階にやってきていた。
デュエリスト

階下からは、激しい決闘デュエルの音が聞こえてくる。瞬達は決闘者デュエリストではないので遊矢達に助太刀することができないが、勝利を願う気持ちは充分にある。今はそれを念じるしかない。

止まっているエレベーターを自力で上った先の通路は、フードコートに隣接していた。昼間ならば多くの客で賑わっている空間なのだが、今はがらんとしており、フードコート全体が底知れぬ不気味さを放っているように感じられる。

「2階に来たけど……湖森ちゃん達はどこに……？」

「油断するな、ここは敵地のだ真ん中だ。」

キンジの言うとおりだ。ここは敵地のだ真ん中。いつどこから敵がやってくるかわからない。

既に瞬達はAMORE側の刺客とギフトメイカー側の刺客の両方と出会っている。ここはギフトメイカーとAMOREと瞬達、三つ巴の戦場となっているのだ。

周囲を警戒しながら、瞬達はフードコートに入ってゆく。少しでも遮蔽物がある場所の方が安全だろうという考えと、ひよつとしたらここに敵が潜んでいるかもしれないという考えの2つが、その行動の根拠となっている。マツピングして安全地帯を広げるように、慎重に歩を進める。乾いた足音が、フードコート内に響く。

ふと、先頭を歩いていたセラが唯に問いかけた。

「なんだ、さつきから人のことジロジロと見て……流石に私といえど、そこまで見つめられたら気になるんだが」

「うくん……………」

「唯、こんな時に何考えてんだよ?」

先程から、唯がセラのことをチラチラ見ながら何かを考えているようなのだ。瞬は彼女と長い付き合いであるが、こんな真剣な表情の彼女はあまり見たことがない。

セラの方も、チラチラ見られては気になって仕方がない。一体どうしたんだと言

うかのように、唯にぐいっと顔を近づける。唯もそれに応じるかのように、セラの顔を覗き込む。

数分ほどそんな時間が続いた後、唯が口を開いた。

「なんか、セラちゃんを見てるとね……他人とは思えないんだよね」

「ただ掘り返すんだこの話……そりゃまあ、気にはなるけどさ」

なんとなく予想はついていたが、やはりそこに行き着いた。

最初にセラやリイラを見た時に感じた妙な既視感。あれはやはり瞬の思い違いではなかったのだろう。

「セラだけじゃない。ギフトメイカーのリイラ、アイツを見た時も同じようなものを感じた」

「……だれだっけ？」

「ほら、ビルドオリジオンの時にいた……」

「居たっけ？」

「……………」

唯に聞いたのが間違いだったのかもしれない。そもそもあの時は、彼女の相手をネプテューヌに一任していたから、唯達からすれば印象が薄いのも致し方ないのだ。

一方セラの方は、リイラの名前に心当たりがあったようだ。

「リイラ……ギフトメイカーの事は噂程度に知っているが……そうか、彼女も……」
「気になる？」

「彼女の残虐性はギフトメイカーの中でも指折りと聞く。そんな奴と一緒にされるとは誠に心外だ」

少し怒ったような声でそう言うセラ。瞬は怒っている彼女の顔を見て、そんなに悪名高い存在と自分に共通点を勝手に見だされているのだから当然の反応だろうと思うと同時に、それほどまでにギフトメイカーの悪評は広まっているという事実を再認識する。やはり、彼らを野放しにはできない。

そこに、ちよつと離れたところで話を聞いていた志村が、恐る恐る声をかけてきた。なぜこんなにビビっているのかというと、たつた今セラがリイラの話で若干怒り気味になったからだろう。

「セラ……ちやん？」

「どうした？」

「さつきからずつと疑問に思ってたんだけどさ……セラちやんって何者なの？」

志村の発言で、そう言えばそうだったと思い出す瞬と唯。

瞬達は、何か知らないけど唯達を助けてくれた親切な人程度にしか彼女のことを知らないのだ。彼女と出会ってから、ガンズオリジオンの襲撃やらブレイドとの出会いやら

イスタの一件の露見やらで色々であって訊く機会を逃していた（ほとんど瞬の方からその機会を放棄していた）ので、出会って数時間が経過した今に至っても、瞬達はセラのことをほとんど知らない状態であつた。

「私？私はただの騎士だ」

「騎士……何かの比喩……じゃないよな。それにしては全然そうは見えないけど」

「これは隠密行動用の服装だ。ここだと鎧姿は目立つからな」

そういうセラの今の服装は、志村達を助けに入った時の鎧姿ではなく、緑色のロングコートに身を包んでいる。瞬は大鳳拉致事件の際に彼女の鎧姿を見ているので、現代日本じゃあの鎧姿は目立つだろうとうなずく。

「じゃあなんでここに来たの？」

「仕えていた主人が行方知れずとなっていてな……探しに……というか迎えに来たんだ」

「セラのご主人様ってどんな人？」

「そうだな……子供っぽくて、我儘で目立ちたがりですぐ仕事をサボるが……正義感があつて、人気者で、私の……光なんだ」

そう言ったセラの顔には、微かな笑みが浮かんでいた。それは、その人のことをそれだけ大事に思っていることの、一番の証拠なのだ。

それに瞬は、セラの人物評に当てはまる人物に心当たりがあった。

「なんか唯みたいだな」

「えー？そう？」

「……半分からい当てはまってないような気がする」

……どうやらそう思ったのは瞬だけらしい。唯達の何とも言えない反応に耐えられなくなった瞬は、気を紛らすように、再び同じ疑問について思索を始める。

唯。セラ。リイラ。

彼女たちに対して瞬が感じるものが、気のせいであつてほしいと無性に思う。ここから先はまだ考えるべきではないとでも告げているかのように、そんな思いが胸の内で広がっていく。

「多分だけど、何かある。俺達の計り知れない何かがあるんだ」

「私も気になるが……今はそれを考えている場合じゃないだろう。全てを片付けてから考えよう」

「お姉ちゃんもその意見、賛同するから！」

「ちなみに生き別れの姉妹説は無しだからな。絶対に認めん」

「ひっどい！」

なぜか姉貴面してきた唯を冷たくあしらうと、セラは瞬達の元を離れて周囲の警戒に

戻る。セラの態度に唯は不満そうだが、ほぼ初対面の人間に姉貴面されて良い気分になる奴は極めて少数派だろう。

「おいそこ、イチヤついてんじやあねえ!」

「野獣先輩、遠野さんの乳首いじりながら怒鳴っても説得力皆無ですよ」

「先輩やめてください……人前でこんな……ああつ♡」

「何しとるんじやお前らは!!」

瞬と唯がぺちやくちや喋っていたのが気に食わなかった野獣が叱責するが、そういう野獣も遠野と文字通り乳繰り合っていたので完全にブーメラン発言である。というかそういうのは家でやれ。

ハルはというと、流星にモノホンの同性愛者を目にしたことがなかったらしく、興味津々で色々と訊いている。よくこの流れで訊く気になったものだ。

「え、ホモなんですか?」

「なんだよホモで悪いか?あんまりうるさいとLGBTQ差別で訴えるぞ」

「いえ……純粹に行為の内容とか気になりますねえ!」

なんちゆう質問しとるんじやお前は!と、この場にいた全員が思わず突っ込んだ。女の子がそんな質問しちや……だめだろう。

ハルはまだまだ色々と言ってきたが、見かねた木村がハルを野獣から引きはが

す。これ以上彼女を野放しにしていたら、とてもじゃないが文字に起こせないような猥談が繰り広げられかねない。というか野獣と女子高生が並んでいる時点で十分アウトなのだが。

「変な目で見ちゃ駄目よ山風、愛の形は人それぞれなんだから」

「そうだよね……思い返せば軍隊でも同性愛は結構多かったもんね」

大鳳と山風は野獣と遠野がゲイカップルであることに対して、そこまで驚いてはいない様子。軍隊では昔から同性愛が多い。それは艦娘が活躍する現代でも同じであり、大鳳達は直接目にしたことはないのだが、現役時代には、艦娘同士のカップルや憲兵同士の痴情のもつれ等の噂を耳にしたことがある。

この一連の流れを黙ってひと通り聞いていたレイだが、流石に喧しいと感じたのか、ここで叱責する。

「あまり騒ぐな、ただでさえ集団で行動してるというのに、大声出したら確実に気づかれる」

『ここは敵地のど真ん中だ。もう少し真面目にしてほしいものだが……』

「すみません、うちのドブ野郎が……殴って黙らせますので」

「もう殴られてるんですがそれは」

木村が、頭にたんこぶを作った野獣の頭を下げさせる。人一倍甲高い声の癖して一番

うるさかったので、木村が日頃の恨みを込めて一発ぶん殴ったのだ。勿論野獣は殴り返そうとしたが、愛する遠野の前でそんな見苦しい格好を見せるわけにはいかないと判断したのか、しぶしぶと木村に従う。

その時だ。

近くで、ドサリという音がした。

「なんだっ!!」

「ほら気づかれちゃったじゃあないか!」

ぱつと音のした方へと振り向く一同と、ビビりちらかす志村。

音がしたのは瞬達の後方、フードコートの端の方だ。そのあたりは丁度フードコート
の仕切りが存在するため死角となっており、仮に誰かが隠れ潜んでいたとしても、今い
る位置からは確認しようがない。

敵に気づかれたのか、はたまた湖森が逃げてきたのか。音だけでは判断はできない。
音からするに、誰か床に腰でも下ろしたり、重たいものを床に置いたりでもしたのだろ
うか。考えていても仕方がない。ここは危険を承知で確認していくしかないだろう。

セラとキンジが先行して音源の方に近づいてゆく。

敵なのか、そうでないのか。どちらにせよ、兎に角目視で確認しなければならぬ。

フードコートを抜け、吹き抜けのある中央通路に出る。すぐ近くの柱の影。そこに誰

かがいる。柱から、僅かに人間の指先が見えるのだ。

「……そこにいるのは誰だ？」

キンジが声をかける。隠れている人物は動かない。

そろりそろりと、拳銃を構えながら歩み寄る。向こうからの反応はない。奇襲や偵察目的ならばあまりにも迂闊だし、既に自身の存在がばれているこの状況でいまだに動かないというのはありえない。普通だったなら開き直って攻撃してくるなり逃げるなりといった行動をとってくるはずだ。

それをしないということは、奇襲や偵察目的の敵ではないということなのか。もしくは、動かないのではなくて動けないのではないのか。

『………安心しろ。不意打ちを仕掛けてこようと、私が初撃を防いで見せる』

「あたしだったらそもそも不意打ちすらさせないわよ。キンジ、早くしなさい」

頼もしいことを言うセルティと、それに張り合うアリア。それを聞き流しながら、セラとキンジは柱のそばまでやって来た。

意を決し、ばつと柱の影から飛び出すように移動し、拳銃を構えるキンジ。

しかし、そこにいたのは敵ではなかった。

「おい、おま……え………!!」

正確には、その人物には敵対できるほどの力が残されていなかった。

そこにいたのはひとりの怪我人だった。青いバンダナを頭に巻いた青年が柱に背中を預けた状態で座り込んでいる。全身に真新しい痣や切り傷を無数に作り、頭から血を流している。見るからにただ事ではない。彼の歩いてきたであろう道が、血痕となつて示されている。

青年の姿を見て、アリアの静止を振り切つて駆けよる瞬達。青年は、駆け寄つてきた瞬の顔を見ると、呻き声をあげながら、瞬の名前を口にする。

「逢瀬……………瞬さん、つすよね……………」

「おい、あんた大丈夫か!!」

「傷は深いが治療すればまだ間に合うわ。私達が外まで運んで救急車を呼ぶから、まずは応急処置を!」

「それならドラッグストアとかから何かしら取つて来た方がいいんじゃないのか? こんだけ店があるんだ、一軒ぐらいあるだろ?」

「ぼ、僕とつて来ます!」

そう言つて、木村が近くにあつたドラッグストアに入つてゆく。

それにしても、瞬のことを知っているとは、この青年は何者なのだろうか?

「俺は御手洗倫吾……………AMOREエージェントつす」

「……………!?」

その言葉を聞いて、この場にいた全員が身を強張らせる。

AMOREという事は、彼は敵なのだろうか？それならば、この怪我の具合はなんなのだ？なぜ彼は怪我を負っている？負傷した仲間を囮にした、AMORE側の作戦の一環かなんかのだろうか？

瞬達が警戒する中、倫吾は咳き込みながら訂正する。彼が咳き込むたびに、彼の口から血が流れ出る。

「俺は敵じゃあない……そもそも、こんな怪我で戦えるわけないつすよ……逢瀬さんのことは、灰司先輩から聞いてるつす……お願いします！仲間たちをとめてください！」

「喋るな、傷が開くぞ」

「灰司の知り合いなのか？今あいつがどこにいるか分かるか？」

「いや、無理つすね……灰司先輩は局長直属のエリートで、俺達一般隊員とは指揮系統が違うんで……俺もわかんないつす……じゃなくて！」

「？」

「ごめんなさいつす……おれ……湖森ちゃんたちを助けられなかった……」

倫吾は瞬の手を取りながら、申し訳なさそうにそう言った。彼の目から、血の混じった悔し涙がこぼれる。それは、自らの不手際と無力さへの憤りだ。

しかしレイは、謝り倒す倫吾の胸倉を怒りそのままにつかみ上げる。2度もAMORE

の横暴に巻き込まれた被害者からすれば、倫吾は憎きAMOREの一員であることには変わりない。倫吾の謝罪の言葉も、信用するに足らない虚言としか受け取れなかった。

倫吾の怪我の具合などお構いなしに、レイは倫吾を問い詰める。

慈愛に続いて、イスタまで奪われてたまるか。彼の頭の中は、その気持ちだけでいっぱいだった。

「おいお前、AMOREのエージェントなんだろ!! 答えろ! こんなことしてまでイスタが欲しいのか!! 世界平和のためなら、踏みつけられる人間が出て構わないってのか!!」

『やめろ! 相手は重傷なんだぞ!!』

セルテイが止めに入るのも聞かずに、レイは倫吾の胸倉をつかんで激しく揺する。その度に、揺すられた衝撃で傷口が開き、倫吾は苦悶の声をあげる。

倫吾は開いた傷口の痛みにも苦しみながら、なんとか声を紡ぐ。

「俺だって……ほんととはとめたいんすよ……でも、俺ひとりじゃ出来ないんすよ。一緒にきた仲間が全員洗脳されて……俺は偶然洗脳から逃れたんすけど、戦力にならないからって殺されかけてこのザマっす……」

「洗脳……そうまでして欲しいのか……?」

なんとAMOREは、意に沿わない人員から自由意思を奪ったうえで、無理矢理悪事

に加担させているというのだ。これには瞬も剣崎もキンジもセルティも戦慄した。人間としては結構なクズである野獣も、流石にドン引きしている。

しかし怒りと憎しみにとらわれたレイは、倫吾を柱に叩きつけ、怒りのままに吐き捨てる。

自分から大事なものを奪ったAMORE。そのメンバーが目の前にいる。その事実
は、AMOREそのものを憎むようになったレイの怒りと憎しみを放出させるには充分
すぎるものだった。

「はっ…さっすが悪の組織AMORE……なんだ？イスタの技術を吸収して世界征服で
もしようってのか？ああ!!」

「訂正させていただきます。AMOREは悪の組織なんかじゃあない……今回の件は、AM
OREの一部が独断で動いているんです……おれたちは知らない内にその片棒をかつ
がされていたんすよ……俺以外のメンバーは全員洗脳されて、お偉いさんに従っていま
す……」

「だから許してくださいってか？洗脳されてたから、知らなかったから許せと……？ふ
ざけるな！お前たちが俺から何もかも奪おうとしていることには変わりない！お前も
同類だよ……！死んでしまえ——」

「やめろレイ！」

レイが倫吾をぶん殴ろうとした瞬間、瞬がレイの顔面を殴り飛ばした。

観葉植物の植えられた鉢植えをなぎ倒し、鈍い音を立てて床にぶつ倒れるレイ。レイの手が離れた倫吾はその場に崩れ落ち、ごほごほと血の混じった咳をする。さっきの衝撃で傷が開いたのか、その頭からは血が流れていた。

頬を押さえながら瞬を睨みつけるレイ。

瞬は、レイに睨まれながら静かに、諭すように言う。

「……………あんたがやりたいことは何だ？復讐じゃないだろう……………」

「瞬……………」

「あんたのやりたいこと……………いや、今すべきことは、イスタを取り返すことだろ」

「でも……………」

「レイの気持ちもよくわかるよ……………けど、今は復讐よりも優先すべきことがあるんじゃないのか？俺だってAMOREのやってることは許せない。けど今は湖森達を助けることのほうが大事だと思っている。あんただって同じだ。レイは、復讐とイスタのどちらを選ぶんだ？」

「……………」

レイの気持ちはよくわかる。誰だってあんなことをされたら憎しみを抱くし、瞬だって、AMOREのやっていることを許すつもりはないし、少なからず怒りや憎しみも抱

いている。

だが、今はそれ以上に湖森達の保護を優先しなければならぬ。復讐という一時の感情に任せて、大事なものをみすみす手放すような真似はしてはならないし、あつてはならない。復讐なんてものは、助けるべき人を助けてからでもできるのだから。

辺りがしんと静まり返る。

しばらくして、倫吾が再び口を開く。

「俺は、どうしても許せない。イスタがどうのこうのはよくわからないけど、仮面ライダーをおびき出すためだけに、罪のない一般人を人質にするのは許せないんすよ……！ そんなの、完全に悪役のやることじゃあないっすか！俺は、こんなことをするためにA MOREに入ったんじゃないんすよ……！お願いします……こんな正義を認めないで……全部否定して、ぶち壊してほしいっす！」

「……わかった。だから君は安静にしてて」

「包帯とかパクってきました！」

「木村も悪よのう」

「黙れおしやべりクソ野郎」

戻ってきた木村から包帯などを受け取り、大鳳が応急処置をしてゆく。艦娘現役時代に何度か経験があつたのか、その手際はなかなかのものだった。

しかし、それは最後まで成し遂げられなかった。

皆が応急処置の光景を見守る最中、バンツ！と乾いた音が響き渡る。大鳳は作業中の手を止め、辺りを見渡す。

大鳳の足元にできた真新しい銃痕から、か細い硝煙が立ち上っている。一体どこから撃ってきたのだろうかと一同が襲撃者を目視で探していると、上の方から声がした。

「見つけたわよ御手洗倫吾。役立たずのカス！」

「洗脳も失敗してよお、あまさつえ裏切るとか、それでもAMOREエージェントかよ？」

「寧理……古峰……！」

声が出したのは、近くにある3階に通じるエスカレーターの上の方だ。

そこには、魔法少女（実年齢20代半ば）こと池映寧理と、半裸ボディペイントの変態こと古峰論太ふるみねろんたがいた。2人とも異常に目が充血している上に、半開きの口からよだれを垂れ流している。正気を失っているのが一目瞭然だ。

レイも流星におかしいと思っただのか、倫吾から手を離し、冷静に寧理と古峰を見つめる。

「お前の言ってたお仲間さんか？こりゃあひでえな……確かに正気を失っている」

「ど、どうするの逢瀬くん……なんかこの人達完全に目がイっちゃってるよお……！」

2人の異様な雰囲気には怯える志村。それに対して、セラとアリアが素早く剣を鞘から抜こうと身構える。臨戦態勢に入ったのだ。

しかし、そんな彼女達よりも、闘志に満ち溢れた者達が居た。野獣と三浦だ。意図してか、はたまたせずつてか、彼らはセラ達を庇うように立ち、ぽきぽきと拳を鳴らしながら古峰を睨みつける。特に野獣は怒り心頭のように、今にも殴りかかりそうな形相で古峰を睨みつけている。

野獣は本能的に察していたのだ。先ほど自身をペンキ塗れにしたのは古峰であると。

「お前か……さつき俺をペンキ塗れにしたのは！もう許さねえからなあ？」

「おい木村あ、この半裸野郎倒そうぜ？」

「え、い、いやあそんなこと……」

「じゃあけつの穴舐めろ」

「やめてくれよ……(絶望)」

後ろ向きな発言をした木村に対し、野獣が臭い尻を突き出してくる。ズボン越しに臭う悪臭に、思わず顔をしかめる木村。その脳裏には、合宿の際に風呂場で見た野獣の黒いイボケツが浮かんでおり、木村に耐えがたい吐き気を催させる。嫌なもん思い出させるんじゃないかと思わず野獣の尻を蹴とばしたくなつた木村だが、とてもじゃないがそれではできない。野獣の尻を蹴とばすと言うのは、排泄物を踏むのと同じだからだ。

野獣と三浦は完全にやる気だった。こうなったら野獣は意地でも自分の決めたことを変えない。それは木村もよくわかつている。乗り気ではないが、やるしかなかった。先輩の意見には絶対服従なのが体育会系の習性なのだ。それに逆らうことは不可能だ。

「ホモの癖に生意気な！ インク塗れにしてやんよ！」

「お、ホモ差別か？ じゃけんSNSで炎上させましようね〜」

いや拳で戦うんじゃないんかい。今のは完全にその流れだっただろ。確かに今の時世ならば効果抜群なんだろうけども。

「ステハゲの癖に嘗めやがって……パワーアップした俺を見せてやる！」

《KAKUSEI INKLING》

「良いわあ、みじめったらしい最期にしてあげるから覚悟しなさいよ！」

《KAKUSEI TXILO・FINALE》

野獣の間抜けな発言にキレながら、古峰はインク塗れのイカのような姿をしたオリジオンに姿を変える。同時に、今まで若干放置気味だった寧理も、リボン塗れの薄汚い魔女のような姿のオリジオンに変身する。

身構える瞬だが、今度は律刃が前に立つ。どうやら寧理の相手を引き受けるつもりらしい。

「あのリボン女はわたしたちが殺すよ？」

「できれば殺さないでほしいっすね……きつとぶつ倒してオリジオン化を解けば正気に戻るはずっす……ほんと、お願いします……皆にこれ以上悪事を働かせたくないんです！」

物騒なことを言いながら彫刻刀の刃先を寧理に向ける律刃に、志村に背負われた倫吾が懇願する。こんなことになってしまったけど、それでも倫吾にとっては苦楽を共にしてきた同僚なのだ。殺されていいはずがないと思うのは当然だろう。

それを聞いた律刃は、やれやれ、といった感じに溜息をつく。骨が折れそうだが、やれなくはない。今の溜息は、そういったニユアンスのそれだ。

志村に背負われながら1階へと向かう倫吾が、去り際に瞬に伝える。

「湖森ちゃん達は3階っす！」

「わかった！ここから先は一気に突っ切る！変身！」

《CROSS OVER！思いを、力を、世界を繋げ！仮面ライダーアクロス！》

瞬がアクロスに変身すると同時に、一行は3手に分かれる。

山風・ハル・志村・遠野は負傷している倫吾を保護すべく外へ。

空手部と律刃は2体のオリジオンとの交戦に。

残りの面々は湖森達を助けるべく3階へと。

さあ急げ、狂想曲はまだ始まったばかりだ。

第32話 AM1:50 / 可憐なる捕食者

プラネットプラザ3階

アクロスは仲間と共に、止まったままのエスカレーターを駆け上がる。

背後で始まったドンパチに目を向けている余裕はない。イスタと妹（とトモリ）を一
刻も早く助け出さなければならぬ。取引がすでに決裂している以上、彼女達の安全保
障も既に烏有に帰した。ここは戦いを引き受けた彼らを信じて先に進むしかないのだ。

先頭を走っていたアクロスだが、エスカレーターの最上段に足をかけた状態で不意に
立ち止まった。

「どうした、何か……え？」

剣崎が怪訝に思い声をかけるが、その先に広がる光景を見た瞬間、その声は途中で止
まった。

「なにこれ……入った時にはなかったよね？」

3階に辿り着いた彼らの前に見えたのは、異様な光景だった。

うねうねと蠢く触手のようなものが、まるで木の根のように天井一面を覆っている。

触手からは謎の粘液が滴り落ちており、床はところどころが粘液で濡れていた。アクロス達がこの建物に入った時、吹き抜け越しに見えた3階の天井には、こんなものはないかかった。

この異様な光景に、思わず尻込みしてしまう一行。だがしかし、湖森達を助け出すためには、踏み込むほかない。

一步、アクロスが足を踏み入れる。床に広がる粘液は、なんとも言えない粘付きを披露している。スーツ越しに不快感が伝わってくるが、粘液の粘り気は動けなくなるほどのモノではない。

他の面々も、アクロスに続いて3階に足を踏み入れる。

その時だった。

「駄目ですよね〜ほんと。取引不意にするとか、悪いお兄ちゃんにもほどがありますよ」「ああ……思った通りのクソ野郎だ。正義の味方の風上にも置けない」

ねちやりとした足音と共に、通路の向こう側から誰かが歩いてきた。足音は2人分。誰かがこちらに向かってきている。

曲がり角から姿を現したのは、一言で言うに変態だった。

ひとりは、全身包帯ぐるぐる巻きの人物。体格や素肌が垣間見える顔から判断すると、大学生くらいの男だ。衣服らしいものは短パンと、肩にかけている白いコートくら

いしか身に付けていない。見た目からして変態としか言いようがない存在だった。

もうひとり、右半分がバニースーツ、左半分がチャイナドレスという、センスの欠片もない変な服装の女だった。スタイルもいいし、顔も美人の部類に入るのかもしれないが、服装がそれを補って余りあるレベルでぶっ飛んでやがる。こんなのと付き合うなんて罰ゲーム以外の何物でもないだろう。そんな存在だった。

下の階で出会った魔法少女とボディペイント野郎に匹敵するレベルの変態に、警戒心むきだしで身構える一行。

すると、バニーチャイナの女が口を開いた。

「わたくしは着半藤殊宮。きはんふしことみや あなた方……これはAMOREに対する裏切り行為と判断して宜しいのですよね?」

「解せぬ。貴様らは平和の敵ということになるが……なぜその道を選んだのだ? 返答次第ではこの下澤巻密が貴様らを葬ることになるだろう」しもさわまきみつ

「またかよ……!」

「どうする?」

「ご丁寧に名乗ってくれたが、正直言ってこんな変態達とは関わり合いになりたくない。だが、おそらくこいつらを突破しなければアクロス達の目的は敵わない。

(俺が相手をして皆を先に行かせるか……それとも……?)

悩むアクロス。

そこに、

「ひやつはあああああああああああああつ！開け風穴ア！」

「消し炭になりなサーイ！イヤツホウウウウウウウウウウツ！」

吹き抜けの下の方から、世紀末じみたテンションの掛け声と共に、燃え盛る炎が吹き上げてきた。

最初、アクロスはAMORE側の増援かと思つたが、巻密達の反応を見るに、どうやらそうでない模様。向こうも驚いているようだし、なによりこのチンピラじみた声には聞き覚えがある。

勢いの落ちた火柱と入れ替わるように飛び上がったのは、2体のオリジオン——ガンズオリジオンとリザードンオリジオンだった。ガンズオリジオンの方は変わりないのだが、リザードンオリジオンの方は、赤みがかった体色が黒くなっている上、人型だったシルエットが、翼竜に近いものに変化している。パワーアップでもしてきたのだろうか？

リザードンオリジオンの背中に跨りながら、ガンズオリジオンはキンジとアリアに向かって意気揚々と銃口を向ける。

「遠山キンジイ！テメエの相手は俺だということを忘れたか！さあ再戦と行こうじゃあ

ないか!」

「転生者狩りは居ねえようだがよお!俺はバルジ様の力添えで進化した!お前らなんぞ一捻りつてわけだあ!」

威勢のいい怒号と共に、リザードンオリジオンが口から灼熱の炎を吐き出してくる。アクロスチーム、AMORE双方はさつとそれを避けるものの、炎が通ったあたりの床はグズグズに溶けてしまっており、下の階まで貫通する穴ができてしまっている。

リザードンオリジオンが炎を吐き出すと同時に、その背に跨っていたガンズオリジオンがキンジとアリア目がけて飛び掛かってきた。

バババババツ!! と、ガンズオリジオンが飛び掛かりながらキンジとアリア目掛けて銃を撃つ。2人は他の面々に流れ弾を浴びせまいと、アクロス達から離れながら銃弾の雨を躲してゆく。

「邪魔はさせない……卑怯堂々と殺し合いをしようじゃあないか、ええ!!」

「なんでだ!! なぜ俺達を狙う!!」

「気に食わないからさ!お前は光の中で生きる存在、俺達は闇に押し込まれて生かされる存在!そこにあるのは羨望と嫉妬のみ!お前は嫉まれる側の人間なんだよ!」

キンジの問いかけにそう返しながら、ガンズオリジオンはナイフを投げる。

恐ろしいほどの速度で投げられたそれは、キンジの頬をかすめ、出血させる。

ガンズオリジオンは拳銃を乱射しながら2人を追う。

「お前を殺し、俺がそこに座る！これは椅子取りゲームだ！主人公という椅子に座る奴を決める椅子取りなんだ！」

「勝手に言っただけよこの野郎……あんたなんかじゃ力不足だつーのっ！」

「簡単に変わりが務まるような人生送ってねーんだよ……とりあえずしよつ引かれろ！」

お互いに啖呵を切りながら、銃を構える。

身勝手な羨望を打ち砕くための戦いが、はじまる。

AM2:00

プラネットプラザ1階西

リザードンオリジオンの放った業火は、床を溶かしてアクロス一行を分断していた。

アクロスとアラタから見て、溶けた床の向こう側には、セラと唯が取り残されている。

そして、アクロス達の目の前には、AMOREの刺客達が今すぐにも殺さんとする勢いで此方を睨んでいる。

「キンジ達は大丈夫なのかよ……!!」

「大丈夫だ……ぼつと出の転生者よそものなんかにはやられるようなたちじゃねえよ、多分」

ガンズオリジオンに追われてこの場からいなくなつたキンジ達を心配するアクロスに、アラタはそう返す。

アラタは「緋弾げんきのアリア」についてはそこまで詳しいわけではない。だが、あの2人がそう簡単にやられるような奴ではないと信じている。転生特典もらいもの便りの転生者なんかに負けるはずがないんだと、自分に言い聞かせるようにアクロスに言う。

——アラタ自身も同類なのだが。

どうするべきかを考えていたアクロスだが、ここで、穴を隔てた向こう側から、唯が声をかけてきた。

「瞬！アラタ！そつちは大丈夫なの!!」

「大丈夫だ！唯は先に行け！俺達は回り込んで——」

「あなたたちはわたくしがぶつた斬つて差し上げますわ。光栄に思うことです……ねっ！」

《KAKUSEI CHAOS SOLDIER》

唯を先に行かせようとしたアクロスだが、そうはさせまいと、殊宮がカオスソルジャーオリジオンに変身し、斬りかかってきた。

まずい。アクロスに変身している瞬はともかく、生身のアラタはぶった斬られたら致命傷になりかねない。

アクロスはオリジオンを迎え撃とうと、腰にぶら下げているツインスバスターを抜刀しようとするが、それには僅かばかり時間が足りない。ならばと咄嗟に計画を変更し、アクロスはアラタを守るように前に立ち、自身が肉壁になろうとする。アクロスのスーアの防御力ならば、数回斬られても平気だからだ。

カオスソルジャーオリジオンの剣が、アクロスに迫る。

その寸前、

「へシンッ！」

《TURN UP》

「ばぐれぺまっ!!」

カオスソルジャーオリジオンの真横から青い畳の様なものが突っ込んできて、彼女を勢いよく吹き飛ばした。まるでバットで打たれたボールのように飛んでいったカオスソルジャーオリジオンは、近くのケータイショップのカウンターに頭から突っ込む形で落下する。

アクロスは何が起きたのかわかっていないが、アラタは知っている。これはオリハルコンエレメントだと。

アラタが畳の飛んできた方を見ると、そこにはブレイドバツクルを装着した剣崎が居た。

「コイツの相手は俺がする。お前たちはもう一人を！」

剣崎はそう言うと、自身の前方に展開されたオリハルコンエレメントに突っ込んでいき、ブレイドに変身しながらカオスソルジャーオリジオンに向かっていった。

「お前の相手は俺だ！」

「……………現地民は黙っててくださいませんか？」

カオスソルジャーオリジオンは、自身に不意打ちをしたブレイドにキレたようで、標的を彼に変える。

ブレイドが相手してくれている今の内だと、アクロスはアラタを連れて反対側の通路に回り込もうとする。しかし、ここに敵はもう一人いるのだ。

「俺吾が世話になったな、アクロス。仲間に押し付けて先に行きますってのがそう何度も通じると思ったか？お前はここで倒れる。この戦いをお前の仮面ライダー人生最後の1ページにしてやる。光栄に思うがいい」

下澤巻密。全身包帯まみれの変態が残っている。

彼は包帯の隙間から鋭い眼光をアクロスに向けている。そこには人間らしさの類は微塵も感じられない。まるで肉の鎧を着こんだロボットのような雰囲気だった。

アクロスは、無言で巻密の前に立つ。倫吾の名前が出た瞬間に、これだけは言っておかねばならないと、そう思った。

「あいつは、お前たちのことを心配してた。取り返しがつく今のうちに止まってくれて願ってた。止めてくれて俺に頼んだんだ」

「それがどうした？俺達はAMOREの意向に従うのみ。従えなかった軟弱者のことなど知ったことか！だいたいアイツはお荷物の癖に一丁前にリーダー気取りで邪魔だったんだ。だからあのタイミングで切り捨てられたのは幸運だったと思っっている」

ポキポキと拳を鳴らしながら近づいてくる巻密。

瞬は倫吾のことをほとんど知らないが、彼の願いは信じるに足るものだと思っっている。だが、ボロボロになつてまで、正気を失い悪事に手を染めようとしている仲間を助けてほしいと願ったあの青年の願いを、コイツは否定させられた。

——彼らを洗脳した奴は、随分と悪趣味なんだな。

アクロスは、仮面の下でそう小さくつぶやく。

「俺としてはあの役立たずのことは一刻も早く忘れたかったのだが……よくも思い出させてくれたな。礼代わりに貴様を消し飛ばしてやる」

「……どうしても逃がす気はないようだな」

「初めからそのつもりだ！」

《KAKUSEI THE HAND》

そう言うのと、オリジオンとしての姿を現した巻密は、軽く右腕を振るった。

瞬間、ガオンツ！と音を立てて、アクロスの足元が跡形もなく消し飛んだ。

「何が起きたんだ!!」

「……やはり覚醒したばかりで安定せぬか」

巻密——ザ・ハンドオリジオンはそうぼやきながら、再び右腕を振るう。

何が起きたのかはわからないが、避けなきやマズいことになる。そう判断したアクロスは、右腕が振り下ろされると同時に一気に前方に向かって駆け出し、ザ・ハンドオリジオンに向かって体当たりを仕掛ける。

アクロスに壁際に押し込まれたザ・ハンドオリジオンは、苦し紛れに自身を押ししているアクロスの背中をぶつ叩く。

「ぐっ……」

一瞬だけアクロスの押し込みが弱まった隙について抜け出し、ザ・ハンドオリジオンは三度右腕を振るう。すると、アクロスの頭上にあつた、天井から案内板を吊り下げた支柱が跡形もなく消え去つた。

「痛っ……!」

支えを失つた案内板がアクロスの頭に直撃し、アクロスは苦悶の声をあげる。

ザ・ハンドオリジオンは左手でアクロスの胸倉を掴み上げると、右拳でアクロスの顔をぶん殴ろうとする。しかし、アクロスは首を傾けて回避する。ザ・ハンドオリジオンは右拳を即座に引っ込めると、再び殴りかかる。

だが今度はアクロスに逆に突き出した自身の拳を掴まれ、そのまま投げ倒されてしまう。ずしんと音を立てて背中から床に倒れるザ・ハンドオリジオン。彼はふらふらと立ち上がりながら、アクロスに語りかける。

「貴様の選択は間違っている。本気で人質を救いたいならば大人しく降伏すべきだったのだ！ 貴様の選択は人質をいたずらに危険にさらすだけだということがなぜわからぬ？」

「でもそれはイスタを見捨てることになる！ そんな終わり方を望んでる奴は俺達の中には誰一人としていないんだよ！」

確かに、AMOREの要求を呑めばこんな戦いをする必要は無かったし、湖森達の安全も保障される。

だが、瞬はレイが泣きながら懇願してくるのを見てしまった。彼の抱える因縁を聞いてしまった。それを無視することができなかった。赤の他人を犠牲にした安寧を受け入れることができなかつた。そしてそれは、他の皆もそうだった。

だから今ここに立っている。取捨選択を拒んで、全てを拾い上げるために。

バチコンツ！と音を立てて、両者の拳が激突する。

ザ・ハンドオリジオンは、以上を以て結論を下した。仮面ライダーアクロスの脅威性にはそのライダーシステムのスペックだけでなく、逢瀬瞬のパーソナリティも絡んでいる。双方の速やかな排除又は管理が必要である、と。

「やはり貴様は危険だよ。貴様の様な未熟な精神性の持ち主がそんな力を持っているは駄目だ。大佐の言うとおり、貴様は生かしてはおけない。ここで殺す！」

「えーと、俺の相手は……」

他の奴らが早々にバチバチと臨戦態勢に入的过程中、相手が見つからずに手持ち無沙汰気味にキョロキョロしているリザードンオリジオン。そんな彼の視界に、ある人物が映る。

それは、この場の雰囲気紛れて先に進もうとするアラタ達だった。

もとより我慢のガの字も知らないようなクソ転生者だったりザードンオリジオンは、パワーアップした力を一刻も早く振るいたくて仕方がなかった。そんな彼からすれば、

そろりそろりとこの場から離れようとするアラタ達の姿は、格好の的でしかなかった。こいつらを殺しても何ら問題はないだろう。

なぜならば自分達は転生者だから。転生者とそうでない奴らの間には絶対的な差というモノがあるのだ。分不相応に戦場に立つ目の前のアラタ達ゴミカスに、それをわからせなければならぬ。

「なんかやばくない……?」

「ウオーミングアップだ! 進化した力、お前らで試させてもらおうぜ!」

「やっぱりろくなやつじゃねええええええええええええ!」

リザードンオリジオンの標的が、この場からひっそりと立ち去ろうとしていたアラタと大鳳に切り替わる。

いくら転生者といっても、アラタは何の力もない一般人。大鳳も、元艦娘だけであり、艀装がなければちよつと鍛えた一般人程度でしかない。しかも相手はやる気満々の、灼熱の炎を操るオリジオン。

要するに2人ではオリジオン1体を相手取るなんて到底不可能ということだ。

リザードンオリジオンの口内に、炎が充填される。

それと同時に、アラタと大鳳は一目散に逃げだした。

プラネットプラザ1階中央通路

遊矢VS竜崇 ACT I O N D U E L

「リンク召喚……だつて……!!」

「なにあれ……あんな召喚方法、知らない……!」

本来この世界に存在するはずのないリンク召喚^もを披露した竜崇に、驚きを隠せない遊矢と柚子。

戦いに飢える恐竜たちの後方から、竜崇の声が響く。

「驚くのも無理はない。なんせ異世界の召喚法だからな」

「異世界……?でも、俺の知ってる世界ではリンク召喚なんてどこも……」

「まあもつとじっくり味わえよ。決闘^{デュエル}はまだはじまったばかりなんだからさ」

竜崇はそう言いながら不敵に笑う。まるで遊矢達の反応を楽しんでいるかのようだ。

転生者である彼からすれば、遊矢達の反応はあまりにも予想通り過ぎていて、かつ滑稽なものだった。

だが、竜崇はこれを望んでいたのだ。

決闘^{デュエル}の最先端をひたすら追い続けていた彼にとって、この世界の決闘^{デュエル}は退屈でしかな

かったのだ。古いルールに存在しない召喚法に存在しないカード。それらが使えないことに日頃から苛ついていた。だから、様々な世界を自由に行き来できるAMOR隊員という立場を使い、この世界にリンク召喚を持ち込んだのだ。

それをいざ実行に移した今この瞬間、竜崇は、これで自分の望んだ決闘デュエルができると、歓喜に震えていた。

(神遊矢！時代遅れの決闘者であるお前を打ち倒し、オレが新時代を作る！)

上官に半ば強引にこの世界に呼ばれた時はあまり乗り気ではなかったが、こうしている今は、招集されたことに感謝しかない。

任務なんてどうでもいい。今はひとりの決闘者デュエリストとして、目の前の遊矢ていきを叩きのめしたくて仕方がなかった。

竜崇は上機嫌でプレイを続行する。

「オレは墓地の”幻創のミセラサウルス”の効果発動。墓地からミセラサウルスを含む恐竜族モンスターを任意の枚数除外することで、除外したモンスターの数と同じレベルの恐竜族をデッキから特殊召喚する。オレは”幻創のミセラサウルス”と”ダイナレスラー・バリーオニクス”の2体を除外し、レベル2の”ベビケラサウルス”を特殊召喚！」

ベビケラサウルス：☆2 ATK500

”ダイナレスラー・イグアノドラツカ”の特殊召喚のコストとして墓地に送ったミセラサウルスの墓地効果を適用することで、新たなモンスターを呼び出した竜崇。呼び出されたのは小さな恐竜だった。

「そして”魂喰いオヴィラプター”のもう一つの効果！オレの場の他の恐竜族モンスター1体を破壊し、墓地の恐竜族を1体特殊召喚する！イグアノドラツカを蘇生！」

ダイナレスラー・イグアノドラツカ：☆6 DFE0

竜崇がそう言うのと、”魂喰いオヴィラプター”がその身体からオーラの様なものを生み出し始める。そと同時に、隣の”ベビケラサウルス”から人魂の様なものが飛び出し、オヴィラプターの口内へと吸い込まれてゆく。

すると、呼び出されたばかりの”ベビケラサウルス”が爆散するとともに、その爆炎の中からリンク素材として墓地に送られた”ダイナレスラー・イグアノドラツカ”が再び姿を現す。

「さらに破壊された”ベビケラサウルス”の効果発動！ベビケラサウルス”が効果で破壊された時、デッキからレベル4以下の恐竜族1体を特殊召喚する！現れる、”ダイナレスラー・カパプテラ”！」

ダイナレスラー・カパプテラ：☆4 ATK1600

竜崇の怒涛の展開は終わらない。

爆散し霧散してゆく”ベビケラサウルス”だった粒子が再集結しながら、プレラノドンを人型にしたようなモンスターが出現する。

竜崇はカードをプレイしながら大きく飛び上がり、空中に浮かんでいた台座の端に置かれているアクションカードをゲットする。

「そしてアクション魔法”追撃^{ついは}！自分フィールドのモンスターの数が相手と異なるとき、その差の数までフィールドのモンスターを破壊できる！俺は”昇竜剣士マジエスターP”を破壊する！」

「うわっ!!」

アクションカードの効果により、遊矢の場の”昇竜剣士マジエスターP”が爆散する。竜崇のフィールドのモンスターの内、マジエスターPの守備力を突破できる攻撃力を持つのは”ダイナレスラー・パンクラトプス”のみ。そして、パンクラトプスの攻撃力は”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”より上だ。

竜崇は少しでもダメージを多く与えるために、攻撃表示の”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”ではなく、守備表示のマジエスターPを破壊したのだ。

「バトルだ！ダイナレスラー・カパプテラ”で”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを攻撃！」

「攻撃力はオッドアイズの方が上……ってことはアクションカード狙い！」

柚子の予想通り、竜崇はアクションカードを狙いに行った。

彼は壁を勢いよく蹴って更に高所にある空中に浮かぶ足場に飛びつき、そのままよじ登る。負けじと遊矢も「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」の背中に飛び乗り、そこからさらに跳んで空中の足場に上る。

両者が飛び移った先の足場には、それぞれアクションカードが1枚ずつ。

バトルの結果はアクションカードの内容に委ねられた。

「ご明察だ！アクション魔法、バイアタック！」ダイナレスラー・カパプテラ”の攻撃力をターン終了時まで倍にする！」

ダイナレスラー・カパプテラ：ATK1600↓3200

「アクション魔法」回避！攻撃を無効にする！」

遊矢のアクションカードの効果により、飛び掛かってきた”ダイナレスラー・カパプテラ”を、”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”が跳んで回避する。

「ピンポイントで”回避”を引くとは運がいいな。だがよお……破壊の方法はまだまだあるんだぜ……！」

「！！」

”ダイナレスラー・パンクラトプス”の効果発動！ダイナレスラー”モンスタラー”体をリリースし、相手フィールドのカード1枚を破壊する！こいつはフリーチェーンの効

果だから、このタイミングでも使えるのさ！俺は”ダイナレスラー・カパプテラ”をリリースし、”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”を破壊！」

「^{トラップ}罠 カード発動、”^{エクストラバック}臨時収入”！ペンデュラムモンスターが表側表示でEXデッキに加わった時、このカードに魔力カウンターを1つセットする！」

臨時収入：COUNTER×1

竜崇は攻撃が無駄に終わったカパプテラをリリースして効果を発動する。すると、リリースされたカパプテラが光となって”ダイナレスラー・パンクラトプス”の両腕に集約されるとともに、パンクラトプスが勢いよく飛び上がって”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”に馬乗りになる。

”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”は苦しそうに吠えるが、パンクラトプスはお構いなしにその両拳をオッドアイズの両側頭部叩きつける。

すると、殴られたオッドアイズは爆散し、すさまじい爆風を周囲にまき散らした。それは何かに捕まっていなければ立つこともままならない程の威力であり、柚子は鎖で縛られたまま壁際まで転がってゆき、爆風に煽られた遊矢は足場から転落してしまう。

「おわあああああああああああつっ!!」

「遊矢!!」

悲鳴をあげる遊矢だったが、丁度落下地点には”EMセカンドンキー”が居たため、

その背中に飛び乗る形でなんとか無事に地上に降りることができた。それを見て柚子は安堵する。相変わらなず危なっかしい決闘だ。デュエル

遊矢はセカンドンキーの背中から降り、竜崇を見上げる。

竜崇は既に2枚目のアクシオンカードの目前まで近づいていた。遊矢の近くにはアクシオンカードはない。なんとかして彼に追いつかなくては、差をつけられる。

「またアクシオンカードを……！そうはさせるか！」

「返り討ちにしろ、パンクラトプス！EMセカンドンキー」に攻撃だー！」

慌てて走り出す遊矢だが、そこに竜崇からの攻撃命令を受けた。ダイナレスラー・パンクラトプスが膝を前に突き出しながら飛び掛かってきた。飛び膝蹴りだ。

遊矢は咄嗟に屈んでそれを躲すも、パンクラトプスの飛び膝蹴りは、遊矢の背後にいたセカンドンキーに命中し、蹴りが命中したセカンドンキーは爆発四散する。守備表示であるために戦闘ダメージこそ発生しなかったものの、その衝撃はすさまじく、遊矢の背中を思いきり前方へと押し出す。

地面にうつぶせに倒れた遊矢に、上から竜崇が語り掛けてくる。その手には、新たなアクシオンカードが握られている。またしてもおくれを取ることもなかったのだ。

「パンクラチオンの味はどうだい？身体にくるよな？」

「なんの……！俺は手札の”EMバロックリボー”の効果発動……！自分のモンスター

が戦闘破壊された時、手札からこのカードを特殊召喚する！さあおいで、バロツクリボー！」

EMバロツクリボー：DFE3000

「ならば、魂喰いオヴィラプター”で攻撃！そしてこの時、アクション魔法”アンコー”を発動！墓地のアクション魔法”バイアタック”の効果のコピーして発動するぜ！オヴィラプターの攻撃力を倍に！」

魂喰いオヴィラプター：ATK1800↓3600

遊矢は負けじと壁モンスターを展開するが、アクションカードの効果で攻撃力を上げられて突破されてしまう。

「これで壁は消えた！ダイナレスラー・テラ・パルクリオ”で直接攻撃！」
ダイレクトアタック

遊矢：4000LP↓3000LP（-1000）

そして、壁モンスターの居なくなった遊矢に直接攻撃が命中する。

”ダイナレスラー・テラ・パルクリオ”のアクロバティックな一撃を受け、遊矢は膝をつく。

竜崇はその隙に空中の足場に飛び移り、3枚目のアクションカードを入手する。

「ダメージはあまり通せなかったが……まあいい、どのみちお前はオレを輝かせる踏み

台になる定めよ……！カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

思ったように攻めきれなかったことを愚痴りながら、伏せカードをセットしてターンを終える竜崇。

対して、なんとか1ターン凌ぎ切った遊矢は、内心ほつとしていた。

（思った以上に苛烈な攻め方だ……気を抜いたら押し切られる……動揺したらダメだ！）

竜崇の猛攻に気を抜く暇はない。少しでも気を抜けばそこから崩れるからだ。いくら相手が未知の召喚法を使うからといっても、それに対して動揺してはいけない。事実、遊矢はこのターン、得意とするアクションカードの応酬においても劣勢に立たされてしまっている。

平常心を失うな。冷静に、かつ楽しく決闘しろ。デュエルそう言い聞かせるように深呼吸をしながら、遊矢はドローフエイズに入る。

「俺のターン！ドロー！」

遊矢：HAND×2

「俺はセツティング済みのペンデュラムスケールを使いペンデュラム召喚！今一度舞い戻れ、”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”！そして手札から”EMペンデュラム・マジシャン”！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：☆7 ATK2500

EMペンデュラム・マジシャン：☆4 ATK1500

既にセツティング済みのペンデュラムスケールを使い、再びペンデュラム召喚を行う遊矢。しかしここで、ある違和感に気づく。

「あれ……う？なんで……う？」

”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”の位置がおかしい。

同時にペンデュラム召喚した”EMペンデュラム・マジシャン”よりもかなり前に出ている。怪訝に思いながらデュエルディスクから伸びるカードプレートを確認すると、オッドアイズのカードは、カードプレートに新たに生まれたでっばりの部分に存在している。竜崇曰く、そこはEXモンスターゾーンだったか。

なぜ、こんなことになっているのだろうと不思議に思っていると、その疑問に答えるかのように、竜崇が笑いながら語りかけてきた。

「EXデッキからのペンデュラム召喚する場合はEXモンスターゾーンにしか出せない。これでペンデュラム召喚の無限の大量展開も制限されるってことだ」

「何?! それじゃあ……」

「ああ、今まで通りに進めると思うな。言っただけだ、新時代の決闘^{デュエル}を味わうがいいとな」

竜崇によつて開示された新たなルール。それは遊矢にとつては大きな痛手であつた。倒されても何度でも大量展開できるといふペンデュラム召喚の強みが半減したようなものだ。今までの様な無限湧きはできない。破壊前提のプレイングを見直さなければならぬ時が来たのだ。

だからといつて臆するわけにはいかない。

ここは任せろと啖呵を切つた以上は友情に嘘はつけないし、決闘者として逃げるなんて言語道断だ。

遊矢はそう決意しながら、プレイングを続行する。

「EMペンデュラム・マジシャン」の効果発動！特殊召喚成功時に自分フィールドのカードを2枚まで破壊し、その数だけEMモンスターを手札に加える！」

手札に加えたのは、「EMウィップ・バイパー」と「EMバリアバルーンバグ」の2枚。相手の苛烈な攻撃をしのぐためにも、アクションカード以外の防御手段も常に抱えておきたいのだ。

「俺はEMウィップ・バイパー」を通常召喚」

EMウィップ・バイパー：☆4 ATK1700

遊矢が召喚したのは、紫色の蛇だつた。こいつは遊矢のエンタメデュエルの顔役のうちの一体ともいえるモンスター。アクションデュエルにおいても結構な頻度で使用し

ている。

召喚されたウィップ・バイパーは竜崇を威嚇すると、すると遊矢の身体を上つてゆき、その腕に絡みついてゆく。

「そしてバトルだ！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」で「ダイナレスラー・テラ・パルクリオ」を攻撃！螺旋のストライクバ——」

「パンクラトプスの効果発動！パンクラトプス自身をリリースし、”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”を破壊！」

竜崇がそう命令すると、パンクラトプスがオッドアイズに特攻し、盛大に自爆した。効果で道連れをしやがったのだ。

オッドアイズは撃破されるが、発動中の「エクストラバック臨時収入」に2つ目のカウンターが点灯する。

臨時収入：COUNTER×2

「ならば、EMペンデュラム・マジシャン」で「ダイナレスラー・テラ・パルクリオ」を攻撃！」

「オレは、ダイナレスラー・マーシャルアング」を手札から捨てて効果発動！「ダイナレスラー」モンスターが自身より攻撃力の高い相手とバトルする時、そのバトルによる戦闘破壊を無効にし、バトルフェイズを終了する！」

竜崇：4000LP↓3500LP

ペンデュラム・マジシャンの攻撃は確かにテラ・パルクリオに命中した。しかし、ペンデュラム・マジシャンの攻撃が当たる寸前にテラ・パルクリオの周囲にバリアの様なものが出現し、その破壊を防いだ。戦闘破壊こそできなかったものの、この効果はダメージをなくすことはできない。よって竜崇には戦闘ダメージだけは伝播する結果となった。

遊矢の場にはまだウィップ・バイパーがいるが、バトルフェイズが終了させられたため、攻撃はできない。竜崇は何もできなくなった遊矢を見て思わずほくそ笑む。

「バトルフェイズは終了、続いてメインフェイズ2だ」

「お前が何もしないというならば、此方から仕掛けるまで！ 罠^{トラップ}カード発動！メタバー

ス！こいつはデッキからフィールド魔法カードを1枚選んで発動できるのさ！オレが発動するのはこいつだ！榊遊矢！これがお前を敗北という名の闇に沈める舞台だ！フィールド魔法”ワールド・ダイナ・レスリング”発動！」

竜崇がそう言いながらフィールドゾーンに魔法カードを発動する。それを見て、柚子も遊矢も意外そうな顔をする。システム上は可能なのだが、アクションデュエルにおいてはフィールド魔法を使うプレイヤーは少ない傾向にあるからだ。

竜崇と遊矢を取り囲むように、フェンスに囲まれた円形のフィールドが地面からせり

上がる様にして出現する。フェンスの向こう側には無数のシダ植物の様なものも生えだしており、さながらここだけ密林と化したような光景となっていた。もちろんこれはソリッドビジョンによるものなのだが、その威圧感はなかなかのものだ。

「そして”ワールド・ダイナ・レスリング”が発動したことにより、”ダイナレスラー・テラ・パルクリオ”のモンスター効果が発動し、墓地の”ダイナレスラー”1体をサルベージ出来るぜ。オレは”ダイナレスラー・カプテラ”を回収する……ほら、ターンエンドを宣言しろよ。お前のターンだろうが」

得意げそうにそう言う竜崇。

呆気にと取られていたが、今は遊矢のターンなのだ。しかし、遊矢にできることはなにもない。

「くっ……ターンエンド……!」

「ならばいかせてもらおう。オレのターン、ドロ!」

竜崇：HAND1→2

遊矢が悔しそうにターンエンドを宣言すると同時に、入れ替わるように竜崇がデッキからカードをドロする。

「……このターンでお前をリングに沈めることが決まったようだ」

「強気だな……その口振り、余程いいカードを引いたみたいだな」

遊矢のその言葉に、竜崇はにやりと笑って返す。

「今一度現れよ、勝利の頂に続くサーキット！アローヘッド確認！召喚条件は”ダイナレスラー” モンスター2体以上！俺はフィールドの”ダイナレスラー・イグアノドラツカ”とリンク2の”ダイナレスラー・テラ・パルクリオ”をリンクマークにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク3！”ダイナレスラー・キング・Tレツスル！”

0 ダイナレスラー・キング・Tレツスル：LINK3（左下／下／右下）ATK300

テラ・パルクリオの時と同じような演出を経て顕現したのは、覆面を被ったTレツクスだった。その巨体が1歩足を動かさだけで地響きが起こり、唸り声だけで周囲の空気が激しく震える。それを一目見た柚子は縛られていることも忘れて逃げようとするが、当然ながら満足に動けるはずもなく、ただリングの外で無様にもがくだけに終わる。

正対している遊矢も、内心では恐怖していた。

リンクモンスターを素材に更なるリンク召喚を決めてきた竜崇。彼はここから何を仕掛けてくるのだろうか。

「リンクモンスターをリンク素材にする場合、そのリンクマークの数と同じ数のリンク素材として扱うことができるのさ。そしてこの時、リンク素材となった”ダイナレス

ラー・テラ・パルクリオ”の効果が発動する！パルクリオがリンク素材として墓地に送られた時、墓地の”ダイナレスラー”1体を効果を無効にして特殊召喚できる。オレはリンク素材としたイグアノドラツカを復活！」

ダイナレスラー・イグアノドラツカ：☆6 D F E O

リンク素材となったイグアノドラツカがよみがえる。

「ダメ押しでもういつちよ行くぜ！オレは手札からチューナーモンスター、”ダイナレスラー・コエロフィシラット”を通常召喚！」

「チューナー………つてことはシンクロ召喚を?!」

「当然だ！オレはレベル6の”ダイナレスラー・イグアノドラツカ”にレベル2の”ダイナレスラー・コエロフィシラット”をチューニング！屈強なる太古の王者よ、全ての敵を蹴散らせ！シンクロ召喚！現れよレベル8!”ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット”！」

ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット：☆8 A T K 3 0 0 0

けたたましい咆哮をあげながら現れたのは、ワニのような頭部と刺々しい背びれを持つ、紫色の肌をした恐竜だった。その大きさは”ダイナレスラー・キング・Tレッツスル”と並び立つほどのものであり、その2体が並んでいる様はまさに圧巻というほかないものであった。

遊矢も柚子も、すべきではないとはわかっていながらも、思わず彼らに圧倒されてしまふ。

「デツカイ……てか強そう……」

「ああ。こいつはほんとに強いぜ?」

得意げになる竜崇の後方で、2体の恐竜が唸り声をあげる。

血を寄越せ、今すぐにでも戦いを味合わせると、そう催促しているように感じられた。しかし、遊矢としては、あんな大型モンスターの攻撃を受けるわけにはいかないので、ウィップ・バイパーの効果をここで使うことにした。

「俺は、EMウィップ・バイパー」の効果発動!お互いのメインフェイズに1度、フィールドのモンスター1体の攻撃力と守備力を入れ替える!俺は、ダイナレスラー・キング・Tレッスル」の攻撃力と守備力を――」

「ははははははははっ!そりゃあ無理だぜ!」

「……何がおかしい?」

ウィップ・バイパーの効果を使おうとした遊矢だが、竜崇がそれを聞いて大笑いする。一体何がおかしいというのだろうか。

むつとする遊矢と柚子に、呆れながら竜崇が説明する。

「リンクモンスターには守備力が無いんだよ!だから攻撃力と守備力を入れ替える効果

なんて効かねえし、守備表示にもならない！常識だぜ……あ、そっか。この世界にはリンクモンスターはいないんだっけ？」

理屈としては、エクシーズモンスターと同じだ。

エクシーズモンスターはレベルを持たないので、レベルを参照する効果を受けないし、適用できない。それはもちろん遊矢も知っている。

リンクモンスターも理屈としては同じで、守備力が0なのではなく、ない。故に守備力を参照するウィップ・バイパーの効果は適用できないのだ。

「そんな……ずるいわよ……！」

「榊遊矢、お前だつてペンデュラム召喚で似たようなことしてたんだからさ、お前にオレを責める資格はないんだぞ？そこんとこしつかり理解してる？」

遊矢がペンデュラム召喚の創始者であることを引き合いに出しながら、逐一自分を正当化する竜崇に、柚子は怒りが抑えきれないでいた。この身体が自由ならば、自分が^{デュエル}決闘であいつをぶん殴れるというのに、それができないこの現状が悔しくてたまらなかつた。

しかし、今更知ったところで、既にウィップ・バイパーの効果が発動してしまった以上、キャンセルはできない。ここから遊矢はウィップ・バイパーの効果の適用先を決めなければならぬ。

（ならば、ダイナレスラー・ギガ・スピノサバットだ。アイツはシンクロモンスターだからウィップ・バイパーの効果を通じる——）

キング・Tレツスルに効果が通じないならば、シンクロモンスターであるギガ・スピノサバットに使おう。攻撃力3000のモンスターを1体でも弱体化できればそれといいと判断し、遊矢は効果の適用先を選ぼうとする。

しかし、竜崇はそれを読んでいた。

そして、事前に手に入れていたアクションカードで遊矢の行動を先回りして潰しにかかった。

「お前の考えはお見通しだ！オレはアクション魔法^{マジック}「透明」を、ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット”に対して発動！これでスピノサバットはこのターン、相手の効果を受けねえ。ウィップ・バイパーの効果も通じねえってことだ。だが発動しちゃったからにはよお、効果処理は最後までしてもらおうぜ？」

「……俺はウィップ・バイパーの効果の対象をオヴィラプターに変更。攻撃力と守備力を入れ替える」

魂喰いオヴィラプター：☆4 ATK1800 / DFE500 ↓ ATK500 / DF
E1800

2体の大型モンスターへの効果適用ができない以上、こうする他なかった。

竜崇は笑いながら、蹂躪開始を宣言する。

「じゃ、遠慮なく蹂躪するぜ……バトルフェイズ！オレはダイナレスラー・キング・T
レックス」で”EMウィップ・バイパー”を攻撃！」

「頼むウィップ・バイパー！アクションカードを狙うぞ！」

竜崇の命令を受け、”ダイナレスラー・キング・Tレックス”が遊矢のいる方へと走つてくる。

遊矢はアクションカードでこの状況をどうにかすべく、ウィップ・バイパーの尻尾を自身の手巻き付けながら飛び上がる。それと同時に、ウィップ・バイパーは遊矢の期待に応えるように自身の身体を長く伸ばし、発動中の”ワールド・ダイナ・レスリング”のフェンスを顎で噛んで掴む。

そして、遊矢はウィップ・バイパーの身体をワイヤーロープのように使い、リングから離れようとする。

しかし、

「アクション魔法^{マジック}”ブレイクアップ”！自分フィールドのカード1枚を破壊し、自分モンスター1体の攻撃力を300アップさせる！オレは”ワールド・ダイナ・レスリング”を破壊し、キングTレックスの攻撃力を300アップ！」

ダイナレスラー・キング・Tレックス：ATK3000↓3300

竜崇がアクションカードを発動すると、「ワールド・ダイナ・レスリング」が消滅し、それと同時に、リングを支えとしてたウィップ・バイパーと遊矢も落ちてしまう。

悲鳴をあげながら落ちる両者に、キング・Tレックスルの鋭い爪が迫る。

避けることはできない。

「張ったフィールド魔法をすぐに破壊した!!」

「ワールド・ダイナ・レスリング」には、お互いに1ターンに1体のモンスターでしか攻撃できないデメリットがあるからな……お目当てのテラ・パルクリオのサルベージ効果も使い終わったし、総攻撃には邪魔だろ？オレ達の決闘はこんな狭いリングじゃあ収まらねえのよお!」

「ぐあああああああああああああああああつ!」

「遊矢!」

遊矢：3000LP↓1400LP

キング・Tレックスルがウィップ・バイパーの尻尾を掴み、遊矢目がけて勢いよく投げつける。

投げられたウィップ・バイパーは遊矢に激突するとともに消滅し、遊矢は勢いよく吹っ飛び、近くのテナントのシャッターに叩きつけられる。

「止めだ!ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット」でEMペンデュラム・マジシャン

”を攻撃!”

立ち上がろうとする遊矢。しかし、その動きは遅い。

竜崇の命令を受け、最後に残ったペンデュラム・マジシャン目がけてギガ・スピノサ

バットの右脚が飛んでくる。この一撃を受ければ遊矢のライフは尽きる。

「これでフィニッシュだあああああああああつ!!」

「遊矢あああああああああつ!!」

柚子の絶叫をBGMとして伴いながら、ペンデュラムマジシャンの鳩尾にギガ・スピノサバットの右脚がめり込む。その瞬間、ペンデュラムマジシャンは苦悶の声をあげながら爆発四散し、突風が吹き荒れる。

勝利を確信した竜崇が勝利の雄たけびを上げるその目の前で、爆炎が遊矢の姿を覆い隠していく。

「——オレの、勝ちだ」

AM2：08

プラネットプラザ正面入口前

零児V S サキュラス

サキュラス：4000LP

零児：4000LP

「リンク召喚、か」

「ああ。これが俺の力……お前を倒す力だ」

本来この世界に存在するはずのない召喚法・リンク召喚。それを目の当たりにした零児は、懐かしい感覚に包まれていた。

それは今から2年前。榊遊矢がとあるプロ決闘者デュエリストとの公式試合の最中に、これまで確認されていなかった新たな召喚法・ペンデュラム召喚を生み出した時のことだった。モニター越しにその試合を見ていた零児は、それをきっかけに遊矢に大きな関心を寄せるようになった。以前まではプロとしてデュエル界のトップに君臨し続けた零児にとっては、あの時抱いた感情は新鮮そのものであった。何としてでも追い付きたい、追い越したい、抜かされてたまるものかという、好奇心と対抗心と憧れの入り混じった感情を胸に、自力でペンデュラムカードを作り上げ、自分のものとした。

そして今、その時に近しい感情が零児の中に蘇っている。

未知の召喚法を使う目の前の相手は、一体ここから何を見せてくれるというのか。期待の眼差しを込めた視線を受けながら、サキュラスは決闘デュエルを続ける。

「俺は”レスキューラビット”を召喚。そして”レスキューラビット”を除外し、効果発動。こいつは自分をフィールドから除外することで、レベル4以下の同名の通常モンスター2体を特殊召喚できるのさ。俺は”聖杯を戴く巫女”2体を特殊召喚！」

レスキューラビット：☆4 ATK300

聖杯を戴く巫女：☆2 DFE2100

安全ヘルメットを被ったウサギがフィールド上に召喚されたと思いきや、ウサギはすぐさま消滅し、入れ替わりに、杖の様なものを持ち、巫女装束の様な衣装に身を包んだ少女型のモンスターが2体姿を現す。デュエルのルール上はあり得ることなのだが、ソリッドビジョンの存在も相まって、全く同じ姿をした少女が並んでいるというのは、どこかシュールさを感じずにはいられない。

「星杯竜イムドゥーク」が場に存在する限り、俺は通常召喚に加えて”星杯”モンスター1体を召喚できる。俺は”星杯竜イムドゥーク”をリリースし、”星遺物―『星杯』”をアドバンス召喚！」

星遺物―『星杯』：☆5 ATK0

サキュラスの目の前に、巨大な蒼銀色に輝く謎の機械の様なものが出現する。それは

青く光っており、何とも言えない神秘的な雰囲気を放っている。

「そしてイムドゥークの効果発動！イムドゥークがフィールドから墓地に送られた時、手札から”星杯”モンスター1体を特殊召喚する！来い、”星杯の妖精リース”！」

星杯の妖精リース：☆2 DFE2000

間髪入れず、サキュラスが新たなモンスターを呼び出す。

呼び出されたのは、小さな銀色の妖精だった。妖精は無邪気に笑いながらサキュラスの周囲を何周か飛び回った末に、”星杯を戴く巫女”の型に乗っかる。

「リースが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから”星杯”モンスター1体を手札に加える。俺は2体目の”星杯に誘われし者”を手札に加える……再び見せてやろうか？リンク召喚を！」

「またリンク召喚をするのか!!」

「アローヘッド確認！召喚条件は”星杯”モンスター2体！俺はフィールドの”星遺物——『星杯』”と”星杯の妖精リース”をリンクメーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2！”星杯剣士アウラム”！」

星杯剣士アウラム：LINK2（右下／左下） ATK2000

現れたのは、剣と盾を装備した少年剣士だった。

「墓地に送られた”星遺物——『星杯』”の効果！通常召喚したこのカードがフィールドを

離れた時、デツキから”星杯”モンスター2体を特殊召喚する！俺は”星杯に選ばれし者”2体を特殊召喚！」

星杯に選ばれし者：☆3 ATK1600

サキュラスのフィールドに、剣と盾を装備し、赤いマフラーとゴーグルを身に付けた銀髪の青年が2人出現する。どことなく先ほど召喚された”星杯剣士アウラム”に似ているように見えるのは気のせいではないだろう。

「アローヘッド確認！召喚条件は”星杯”モンスター2体！俺はフィールドの”聖杯を戴く巫女”と”星杯に選ばれし者”をリンクメーカーにセット！サーキットコンパイン！リンク召喚！現れる、リンク2！”星杯神楽イヴ！”」

星杯神楽イヴ：LINK2（右／左） ATK1800

現れたのは、”星杯を戴く巫女”と似た少女だ。恐らく同一人物（という設定のモンスターカード）なのだろうが、持っていた杖は光を放っていたり、服装が若干異なったりしている。少年漫画風に表現するならば、”覚醒した”とでも表現すべきだろうか。

零児が冷静に観察していると、サキュラスが得意げそうに解説を入れてくる。しかしそれは親切心からではなく、マウントを取りたいという傲慢さからの行為だということ、誰が見ても明らかであった。

「リンクモンスターはEXモンスターゾーンか、リンクモンスターのリンク先——リン

クマーカーの指し示す先にしか特殊召喚できない。脳死で出来る芸当じゃないのさ、リンク召喚はな」

サキュラスは自身のリンク召喚を随分と鼻にかけている様だが、零児は意に介さない。寧ろ、この程度で得意げになっているサキュラスに内心呆れていた。

確かに、未知の召喚法自体には驚かされた。しかし、それだけだ。

いくら特別なモノを有していようが、その程度で奢る様では底が知れるというものだ。例え今サキュラスと対峙しているのが零児でなくとも、ある程度の実力者ならば、サキュラスの態度は全くもって「強者」ではない。寧ろ弱く感じるモノでしかない。とんだ期待外れだ。

そんな感情が籠った零児の目線を受けたサキュラスは、それが大層面白くなかったように、舌打ちをしながらカード効果を発動する。

「俺は、星杯剣士アウラム」の効果発動！アウラムのリンク先にいる2体目の”聖杯に選ばれし者”をリリースし、墓地の”星杯竜イムドワーク”をアウラムのリンク先に特殊召喚する！」

サキュラスがそう言うのと、”星杯に選ばれし者”が消滅するとともに、アドバンス召喚のリリースによつて墓地に行ったイムドワークが復活する。

「4回目ええええ！アローヘッド確認！召喚条件はリンクモンスター2体以上！俺は

フィールドのイヴとイムドワークをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク3！”星杯戦士ニンギルス！”

星杯戦士ニンギルス：LNK3（右／上／左） ATK2500

「墓地に送られた”星杯神楽イヴ”の効果！手札から”星杯に誘われし者”をニンギルスのリンク先に特殊召喚！」

4回目のリンク召喚で出現したのは、”星杯に誘われし者”と同一人物と思われる青年だ。しかし、古びた外套に身を包んでいた”星杯に誘われし者”とは異なり、青く光る鎧と鎧を身に着けており、その存在感はなかなかのものだ。

「ニンギルスの効果発動！ニンギルスがリンク召喚に成功した時、自身のリンク先の”星杯”モンスターの数だけドロウする！」

ニンギルスが出されたのはアウラムの存在するEXモンスターゾーンの下。ニンギルスのリンク先には、”星杯剣士アウラム”と”星杯に誘われし者”の2体の”星杯”モンスターがいる。故にドロウ枚数は2枚となる。

「俺はドロウした魔法カード”星遺物の醒存”せいぜんを発動！デッキトップを5枚確認し、その中に”星遺物”カードが存在する場合、そのカードを手札に加え、残りのカードを全て墓地に送る」

サキュラスはデッキの上から5枚カードをめくってゆく。めくったカードは”星遺

物を巡る戦い”：”星遺物―『星杖』”：”星遺物―『星櫃』”：”タスケルトン”：”
メタルフォージェフュージョン
 錬装融合”の5枚。手札に加えるべきカードはこの中だと”星遺物を巡る戦い”

が妥当だろう。残りは墓地で真価を発揮したり、リリースが必要な最上級モンスターばかりだ。既に召喚権を使いきっている以上、モンスターは持つてきてもこのターンは使えないだろう。

サキュラスはそう判断し、”星遺物を巡る戦い”を手札に加え、残りの4枚を墓地に送る。

「俺は墓地の”聖杯に選ばれし者”2体を除外し、手札から”星遺物の守護竜メロダーク”を特殊召喚！」

星遺物の守護竜メロダーク：☆8 ATK2600

サキュラスがそう言うと、彼の目の前に、煤けた色合いの翼竜が出現する。

「こいつは手札・墓地の通常モンスター2体を除外して特殊召喚できるモンスター。そして、メロダークがフィールドに存在する限り、相手モンスターの攻守は俺の場のドラゴン族モンスターの数×500ダウンしてしまうのさ」

DDD怒涛王シーザー：TK2400↓1900

DDD呪血王サイフリート：ATK2800↓2300

DDD神託王ダルク：ATK2800↓2300

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン：ATK3000↓2500

「そして」星杯戦士ニンギルス」の効果発動！お互いのフィールドのカードを1枚ずつ墓地に送る！俺は」星杯に誘われし者」と」DDD怒涛王シーザー」を選択する！」

ニンギルスが手に持った槍を振るうと、零児のフィールドの」DDD怒涛王シーザー」と」星杯に誘われし者」が光の粒子となって霧散する。

「フィールドから墓地に送られたシーザーの効果発動！デッキから」契約書」カード1枚を手札に加える」

零児は墓地に送られたシーザーの効果を使い、次のターンへの布石を打つ。

サーチしたカードは融合召喚を行える効果を持つ」魔神王の契約書」。今すぐ使えるカードではないが、それでもあった方がいいのだ。

それを見てサキュラスはほくそ笑む。

次などあつてたまるか。たかが原作キャラの1人に自分が負ける道理はないと高をくくりながら、カードを発動する。

「フィールド魔法、」星遺物との邂逅」発動。これにより」星杯」モンスターの攻守は300アップする」

星杯戦士ニンギルス：ATK2500↓2800

星杯剣士アウラム：ATK2000↓2300

星遺物の守護竜メロダーク：ATK2600↓2900

「これで準備は完了……さあ、思う存分蹴散らしてやる！バトルだっ！」星遺物の守護竜メロダーク”で”DDD死偉王ヘル・アーマゲドン”を攻撃い！」

「……………っ！」

零児：4000LP↓3600LP

フィールド魔法とメロダークの効果により、零児のモンスターの打点は悉くサキュラスのモンスターのをそれを下回っている。おまけに零児の場には攻撃を防ぐカードがない。メロダークのプレス攻撃により、ヘル・アーマゲドンは跡形もなく粉碎されてしまった。

ヘル・アーマゲドンには、味方モンスターが破壊された際にその攻撃力を自身の攻撃力に加える効果を持つ。だからサキュラスは真っ先にヘル・アーマゲドンを撃破したのだ。

「続いてニンギルスでサイフリートを破壊！」

「くっ……だがこの時、サイフリートの効果発動！フィールドの表側表示の魔法・罠カード1枚の効果を決のスタンバイフェイズまで無効にする！私は”地獄門の契約書”を選択！」

零児：3600LP↓3100LP

サキュラスの命令に従い、ニンギルスが槍を振り下ろす。

零児は破壊される寸前にサイフリートの効果を発動する。

”契約書”カードは、維持し続けることで大きなアドバンテージを稼げるが、代償として自分スタンバイフェイズ毎に効果ダメージが発生する。このターンに受ける戦闘ダメージの量によつては、次のスタンバイフェイズに契約書の効果で自滅しかねない。なのでそれを回避すべく、零児はサイフリートの効果を使ったのだ。

”DDD呪血王サイフリート”の効果発動！サイフリートが墓地に送られた時、自分ワールドの”契約書”カードの数×1000LP回復する！」

零児：3100LP↓4100LP

零児のワールドには発動中の”地獄門の契約書”が1枚。よつて零児は1000LP回復する。

「最後に、”星杯剣士アウラム”で”DDD神託王ダルク”を攻撃！そしてこの時、速攻魔法”星遺物を巡る戦い”を発動！星遺物の守護竜メロダーク”をエンドフェイズまで除外することで、神託王ダルクの攻守の数値をメロダークの攻守の数値分ダウンさせる！」

「何っ?!」

DDD神託王ダルク：ATK2300 / DFE2000 ↓ ATK0 / DFE0

サキュラスがカードを発動すると、メロダークが禍々しいオーラとなつて実態を失うと共に、そのオーラが信託王ダルクに纏わりつき、彼女をみるみるうちに弱体化してゆく。

これでダルクの攻撃力はゼロ。対してアウラムの攻撃力はフィールド魔法の上昇分を加味して2300。大ダメージは逃れられない。

「ぬう……っ！」

零児：4100LP↓1800LP

アウラムの剣撃によつてダルクが悲鳴を上げながら一刀両断される。

零児は戦闘ダメージを暗いながらも、膝をつくまいとなんとか踏ん張る。発生した爆風が零児のマフラーを激しく靡かせ、周囲の街路樹を揺らし、電灯にヒビを入れる。

「俺は魔法カード”貪欲な壺”を発動。墓地のモンスター5体をデッキに戻してシャッフルし、2枚デッキからドロウする。さらに墓地の”メタルフォーゼフュージョン錬装融合”の効果発動。墓地のこのカードデッキに戻し、1枚ドロウ」

サキュラスがデッキに戻したカードは、星杖・星櫃・イヴ・イムドウーク・巫女の5枚だ。

これでサキュラスの手札は2枚の消費で1枚増えたことになる。

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド。そしてこの時、”星遺物を巡る戦い”の発動

コストとして除外されたメロダークが帰還する」

サキュラスがカードを2枚伏せると同時に、メロダークが再び彼のフィールドに舞い戻ってくる。

それを零児は無言で見ていた。

「……………」

「恐れをなしてビビってんのか?」

「リンク召喚……………存分に堪能させてもらったよ。ならば私もそれに応えるまでのこと。それがエンタメデュエルではないのかね?」

「はっ、何がエンタメデュエルだ! 決闘は真剣勝負、どんな手を使ってでも勝てばいい。負ければ無意味! お前だってそれを理解しているはずだぜ?」

「それはそうと…………勝ち誇るのはまだ早いと思うぞ。勝負はまだ決していないのだからな」

零児はそう言うと、デッキに指をかける。

彼の言うとおり、まだ勝敗はついていない。決闘デュエルに限った話ではないが、僅かな油断、

高慢が勝敗を大きく左右するのだ。その点では、サキュラスはまだ未熟というほかない。本人は認めないだろうが。

零児は眼鏡を光らせながら、カードをドロウする。

「ここからは私のプランニングだ。心行くまで堪能していくがいい」

AM1:48

プラネットプラザ2階・フードコート

フードコートで古峰諭太——インクリングオリジオンと対峙することとなった迫真空手部の3人。

同時に戦闘を開始した律刃と寧理——ティロ・ファイナーレオリジオンは、早々にフードコートを飛び出し、アクロバティックな空中戦を繰り広げている。

バンツ！と、インクリングオリジオンが、フードコート内の椅子の座面に乱雑に足を置く。これは威嚇だ。とつとと失せろと言外に告げているのだ。

しかし、野獣も三浦も動かない。野獣の方はオリジオンの意図を読み取ったうえであえて無視しているのだが、三浦のほうは多分わかっていない。恐らくだが、「椅子に足乗つけるなんて行儀悪いゾ〜コレ」程度のことしか考えられていないと思う。少なくとも木村の目にはそう映っている。

一向に自分の意に従わないホモ達に痺れを切らしたのか、インクリングオリジオンが

口を開いた。その声色には「言わなきやわかんねーとか馬鹿なのか、察せよステハゲ」という、野獣達への苛立ちが込められていた。

「まさかとは思うが、生身の人間が俺に勝てると思っているのか?」

「その偉そうな態度、頭に來ますよ?」

「初対面の人にそんな態度取ってたら友達出來ないゾ」

「三浦先輩は黙っててください」

ほきほきと、野獣が拳を鳴らす。

同様に、チラチラと三浦がインクリングオリジオンを見る。

見事なまでに対話は不成立だった。そもそも互いに対話できるほどの知性がないので当然ともいえるが。

インクリングオリジオンは、足を乗つけていた椅子を乱雑に蹴とばす。それが、戦いの合図だった。

「どうしても邪魔すると言うならば、崇高なる我らの使命の前に死ぬ!」

「フアツ!!」

インクリングオリジオンはそう吐き捨てながら、手に持った水鉄砲のようなものから何かを撃ちだした。そのあまりにも早い一撃に、一介のホモである野獣は反応できず、もろに顔面にそれを喰らってしまう。

瞬間的に、野獣の視界が黒く染まる。今の一撃は目潰しを狙ったものだったのだ。血は流れてはいないが、何かが野獣の目元にぶっかけられたような感触がする。

「野獣?!」

「へーキへーキ、平気だから……!」

三浦が心配するが、野獣はそう返す。

野獣が今顔面にくらったものは、別に毒液とかそういう類のものではない。この妙に鼻につく匂い、生温かくて粘り気のある感触を、野獣は知っている。

「インクか……くそ、目が……!」

少し前に投げつけられたカラーボール。それと同じだ。

野獣の顔にかかったインクは、彼の目を一時的に潰すことに成功している。先ほどから野獣達を見下す発言を繰り返してばかりだが、どうやら相手は慎重派のようで、万全を期して、目を潰したうえで仕留めるつもりらしい。

兎に角、まずは顔についたインクを拭うのが先だ。インクが目染みたくらで発せられた痛みを顔をしかませながら、野獣は手で目元のインクを拭い去る。ねっちよりとした不快な触感が目元から手に移動し、野獣の視界が開ける。

初手からこんな真似をしやがって、と野獣は怒り心頭だった。兎に角あのオリジ^{イカ}オン^{野郎}をぶん殴って血塗れにしてやらなければ気が済まない。

が。

「あれ、どこにいった？」

気づいたときには、インクリングオリジオンの姿が消えていた。

辺りを見渡すと、そこかしこがインク塗れになっている。椅子やテーブルは押し倒された上にインク塗れになっており、近くでは野獣同様にインクで目潰しされた三浦がウロウロしている。

この調子では、三浦にオリジオンの居場所を聞いても恐らく無駄だろう。三浦の役立たずっぷりに舌打ちをしながら木村に声をかけようと思ったが、姿が見えない。

その時、

「ここだよステアハゲ野郎」

足元でインクリングオリジオンの声が出たかと思えば、次の瞬間、野獣の下顎にオリジオンの拳がめり込んでいた。

顎を中心とした鈍い痛みが野獣に襲い掛かり、野獣は背中からインク塗れの床に倒れる。

「デメツ……どこから……！」

野獣は起き上がって反撃しようとするが、身体に纏わりつくインクの重みが、その動きを遅くする。

いや、何かがおかしい。いくらなんでもこれはインクの粘り気ではない。まるで文字通り、ぬかるみの中にあるような重さだ。野獣の身体はインクの世界から起き上がることは敵わずに、ずっとインクの上に倒れたままだ。

それに、視線が低すぎる。仰向けに倒れているのだが、やけに床が近くに見える。これではまるで、野獣の身体がインクの中に沈んでいるようではないか。

そう考えていると、突然、野獣の首元に圧迫感が生じた。目をやると、野獣の頭の近くの床にかかっているインクの中から、インクリングオリジオンの腕が伸びており、野獣の首を絞めているのだ。

「お前はもう捕らえた。後はあそこの馬鹿坊主だけだ」

野獣のすぐ後ろで、インクリングオリジオンの声が出た。なんとか目を動かすと、野獣の頭のすぐ近くから、インクリングオリジオンの頭部が突き出ていた。まるで水上の得物を水中から引きずり込もうとするかのように、オリジオンが野獣をインクの中から抑え込んでいる。

ずぶずぶと、徐々に野獣の身体が沈んでゆく。

どうやらこのインクの中は異次元空間か何かになっているようで、見た目以上の深さを有している。オリジオンが最初に姿を消したのも、こうしてインクの中に潜っていたからなのだろう。

野獣はそれを理解したが、だからといってこの状況が解決するわけではない。こうしている間にも、野獣の首はさらに強く絞められている。このままでは絞殺されてしまう。

「後輩は既に俺が捕らえている……このまま殺す！」

インクリングオリジオンはそう言うのと、インクの中からもう片方の腕を引き上げる。その腕の先には、首を絞められてもがいている木村の身体があつた。木村は一番最初にやられていたのだ。

ここで、ようやくインクを処理できた三浦が、後輩たちの危機を目にすることになる。三浦の目に映つたのは、今にも死にそうな野獣と木村の姿。

馬鹿な三浦でもわかる。自分がどうかしななければ野獣達が死ぬと。だから、一目散に駆け出した。

——何故か尻を丸出しにして。

「野獣！ 木村！ 待つてろすぐ助けるゾ！ 迫真空手肆の型——結乃阿納！」

三浦はそう叫びながら、インクリングオリジオン目がけてヒップドロップを繰り出した。オリジオンに迫るむちむちとしたホモ坊主の尻。その悍ましい光景から逃れようと、インクリングオリジオンはインクの中へと再び潜行しようとする。

しかし、そこに追い打ちをかけるように、三浦の尻穴からブフォオオオツと下品

!!!!!!!!!!!!

極まらない爆音が鳴った。尻を突き出した体勢でこの音、そしてたちまち周囲を包み込むこの刺激臭は、誰もが知っている。

——わざわざ明言しなくてもわかるだろうが、ここはあえて明言しよう。

三浦の渾身のオ○ラが、インクリングオリジオンの顔にぶっかけられた。

「~~~~~」

三浦のオ○ラをもろに浴びたインクリングオリジオンは、声にならない悲鳴をあげながら、野獣達から手を放してインクの中に潜り込んでいった。そりゃあそうだ。

そしてだ。

インクリングオリジオンが至近距離でオ○ラを浴びたということは、当然ながら傍にいた野獣と木村もそれをモロに浴びたということ……

「臭すぎイ！イクイクイクイクイク……」

「ふももえんぐえげぎおんもえちよつちよつちやつさつ……」

御覧の有様である。

野獣はびくびくと汚らしく痙攣しているし、木村も普段の真面目なキャラが木っ端微塵になるレベルで悶絶している。というかこうなるんだつたら結局首絞められるのとは大差ないと思うのだが、そのところは三浦的にはどうでもよかったのだろうか。

三浦は死にかけてる後輩二人を見て、いい仕事したなくとも言っているかのよう

「……………なにこれ？」

逢瀬湖森は目を覚ますと、ロープでぐるぐる巻きにされら状態で天井につるされていた。

人間、あまりに驚きすぎると声を失うようで、湖森は自分が置かれている状況を理解した途端に、声にならない悲鳴をあげた。

どれくらい無音の悲鳴を上げ続けただろうか。掠れ気味ながらも声を取り戻した湖森は、当然の疑問を口にする。

「どうなって……………なんでこうなっているんだっけ…………？」

彼女のすぐ横では、トモリが同じようにぐるぐる巻きにされた状態で吊るされている。湖森とは違って、まだ意識を取り戻してはいないようだ。じんわりと頭に痛みを感じる辺り、どうやらぶん殴られて気絶させられ、その間にこんな状態に置かれたらしいということはおわかった。

自身も怖いのだが、彼女が言ったように、2人は同じロープの両端に巻かれている。そして、そのロープは天井付近で天窓の枠に固定されている。なので片方のロープが千切れてしまえば、もう一方も自重で落下することになる。いわば運命共同体なのだ。

少女たちがパニクっている、そこに、乾いた足音が近づいてきた。

湖森達は動きを止め、足音のした方を見る。彼女達が吊るされている位置より少し下、3階の中央通路から、彼女達を見上げる壮年の男性がいた。

「初めまして。私は苛木いらぎじんさく甚作。うちの倫吾たちが世話になったな」

「倫吾たちの上司……?」

男はそう名乗ると、近くのベンチに腰掛ける。

「な……なんなのこれ!!」

「君達は人質だ。アクロスとイスタ、その双方を我々AMOREの手に収めるための、な」

「人質って……そんなこと……」

「だがそれも徒労に終わったようだ。君の兄は我々との取引をふいにした。よって君達を生かす理由もなくなったというわけだ」

苛木はそう言うと、手元の端末を操作する。すると、空中に映像が投映される。

映像の中では、オリジオンと戦うアクロスが映っている。いや、アクロスだけではな

い。アラタも遊矢も、ブレイド見や空手部知やセラらやキンジぬも、皆がこの建物内で戦っている。映像の内容は各々の戦いの光景に切り替わった後、プツンと途切れる。

苛木はベンチに腰掛けたまま、わざとらしく嘆く。

「彼らが大人しく要求を呑めば楽に済んだのだが……何故こうも意に沿わぬというのだ」

「初めからその気なんてない癖に、よくもまあぬけぬけとそんなことが言えますね」

その時、苛木のズレた嘆きを、とある声がぼつざりと切り捨てた。それは湖森ではないし、トモリでもない。声がしたのは、苛木の足元だった。

彼の足元に、白い少女が鎖で縛られた状態で転がっている。ノースリーブのシャツとスカートを着用し、自らの頭上に天使の輪を思わせる機械を浮かべた少女だ。

「誰……………?」

少女　ー　イスタは、苛木を睨みつけている。

今彼女を縛り付けているのは赤片シャトー・ド・イフ聖鎖。見た目は普通の鎖とそう変わらないものの、物理的・概念的な強度を限界まで高めている。AMORE内では主に強力な転生者に対して使われる事が多い。鎖の「縛り上げる」という概念そのものを強化しているがため、この拘束を撃ち破るのは至難の業なのだ。

苛木は、足元に転がっているイスタを足蹴にしながら、余裕たつぷりに言う。それは、

赤片聖鎖の存在からくる優位性によるものか、はたまた苛木自身の実力からくるものなのかは、外からは窺い知ることはできない。

「開口一番にそんな言葉を吐けるとは余程の怖いもの知らず……おっと、お前はアンドロイドだから恐怖なんてものとは無縁だったな、イスタ」

「この建物のあちこちに爆弾や各種トラップを仕掛けてあるのは既に感知済みです。大方、取引後に建物を爆破して敵対者を皆殺しにする腹積もりなのでしょう……貴方の部下もろとも」

「え………じゃ、じゃあ倫吾くんたちは……？」

「御手洗倫吾に関してはクビにした。洗脳もうまくいかない役立たずの癖に本作戦に反対したからな……あれだけ盛大に送別会ホコホコにしをやったんだ。とつくに死んでるだろう」

それを聞いて、湖森達は絶句した。

彼女はまだ社会に出たことはないが、それでも苛木の言っていることはが間違っているのはわかる。ブラック企業さながらの悪事を、まったく悪びれることなく言えるその精神性に、湖森とトモリは戦慄していた。

しかし、苛木は彼女達の反応が解せないようで、わざとらしく肩をすくめてつらつらと妄言を吐きつづける。それは、湖森達にとつては聞くに堪えないものであった。

「何を驚くことがある？崇高なる我らの理念に従えない層が一人消えただけのこと……」

役立たずが排除されるのはこの世の摂理だろう？」

「おかしいよ……そんなの……」

「調和を乱すものは消えるべきだからな」

「黙りなさい！」

呆氣に取られる湖森達の前で妄言を積み重ねる苛木だったが、ここでイスタが、その妄言達を一蹴する。

「慈愛を死に追いやったのは貴方達だということは知っています。貴方は自分が恨まれる立場だということをおわかっていないようですね」

「憎いか？機械の癖に憎しみを感じるというのか？それならばお門違いも甚だしい。我々は正義と平和のために動いているのだ。君に使われている技術を徹底的に調べ上げて吸収すれば、転生犯罪者に煮え湯を飲まされ続けてきたAMOREの技術力は大きく躍進するはずだ。さすれば全次元秩序維持も叶う。私は大いなる善行を為しているのだよ」

「慈愛を殺したり、意に沿わない部下を洗脳したりもですか？」

「大儀の前の小事、だ。我々の意に沿わない身勝手な転生者が一人死んだだけだ。理想の礎になることに感謝してほしいものだがね……」

湖森はそれを聞いて、悟った。

ああ、駄目だ。こいつは話が通じない。自分の理想の為ならばあらゆる手段が正当化され、その過程で生じる犠牲を一切考慮しない邪悪だ。少しでも異を唱えたものは彼に排斥され、死してなお踏み躪られつづける。

そんな悪を、湖森は許せなかつた。こんなことを許容してなるものか。きつと兄も同じことを言うはずだ。

そう思った次の瞬間には、彼女は口を開いていた。

「馬鹿じゃないの……思想だけで人がついてくると思ったら大間違いよ！」

「馬鹿は君だよ逢瀬湖森。清廉潔白な方法ではもはや間に合わない。どんな手を使っても我々が理想を実現せねば、その前に人類の愚かさによって世界が終わりかねない。後の世の者も分かるはずだ。我らの行いは平和のための大いなる善行であつたと！」

「踏みつけられる者のことを考慮しないからそんなことを言えるのです！ 貴方のやり方では、レイの様な人間がたくさん生み出される！ 少しばかり人類史を振り返ればすぐわかることでしょう!!」

イスタも苛木の暴論を否定する。

しかし次の瞬間、苛木はキレた。

「立場をわきまえろ！ 貴様らは取引材料と人質ということを忘れたか！ その口を閉じぬと言ふのなら今ここで壊しても構わぬのだぞ!! 我々が欲しいのはイスタの技術の

ニツクに陥る。こんな心臓に悪いブランコは初めてだ。サーカスの空中ブランコだって命綱代わりのワイヤーがいくらあるだろうに。

しかしこの時、イスタの瞳に搭載された各種センサーは、爆炎の中にいる者達を正確に感知していた。否、そんなデジタルな情報ではなく、機械にあるはずのない勘や超感覚じみたもののような形で、彼女は理解していたのかもしれない。

もくもくと立ち上がる黒煙と共に、床を貫通するように開いた穴から、何か飛び上がってくる。それはイスタと苛木の目の前に華麗に着地するとともに、彼らの足元に無造作に何かを投げ捨てる。

ドサリと大きな音を立てて床に投げ捨てられたそれを目にして、湖森達は絶句した。それは全身黒焦げになった人間の死体だった。顔面はまるで耕されたようにぐしゃぐしゃになっており、焼け焦げた皮膚の随所には溶けかけたガラスの破片のようなものが刺さっている。微かに残った輪郭から、その死体の性別が女性であることだけは読み取れるが、もはやそれが誰であったのかは外観からは判別不可能だった。

「僕たちが一番乗りだね」

「コイツは果敢にも俺達に向かっってきたから殺してやった。障害が多いほど恋は燃えるとは言うけどよお……これはちつとばかり許容範囲外だな」

「来たか、ギフトメイカー」

苛木は部下の死体を目の当たりにしても眉一つ動かすことなく、ただ二言だけ、そう言った。

この反応を目にして、湖森達は結論付けた。苛木甚作は自分達とは決して相いれない存在だ、と。部下を殺されても無反応を貫けるような非情さを有する人間との取引なんて成り立つはずがない。

黒煙の中から現れたのは2人。ひとりには、派手ながらの赤いシャツを着た、湖森とそう歳が変わらなさそうな小柄な少年——レド。もうひとりは、レザージャケットを羽織った青年——赤浦健一。

一番イスタを渡してはいけない連中が、真っ先にゴールに到達してしまったのだ。

赤浦は周囲を一瞥すると、歓喜の声をあげながらイスタに向かって一目散に駆け出した。

「待ってたぜイスタ……いさあ、俺の愛の生贄になってくれないか?」

AM1:55

プラネットプラザ 3階中央通路西側

唯とセラは、触手に覆われた天井の下を走っていた。

なし崩し的に彼女達が最奥に向かうことになったのだが、思った以上にこのプラネット
トプラザは広い。結構な距離を走ったはずなのだが、未だに湖森達は見つからない。

だが、変化もあつた。

天井を覆う触手のようなもの。進むにつれてその密度がだんだんと増してきている
のだ。これが何を意味するのかはまだわからないが、少なくともこの先には何かがある
という証拠ともとれる。セラも唯も、自身が感じ取った勘を信じ、こうして進んでいた。

「この先だ。ここから触手は伸びている」

「なにがあるんだろう……」

天井から滴り落ちる粘液を避けながら走ること数分。

2人がたどり着いたのは、隅っこにある資材倉庫だった。その扉は固く閉ざされてい
るが、扉と天井との隙間からは無数の触手が伸びている。ここが天井に広がる謎の触手
の発生源であることは一目瞭然だった。

扉は粘液まみれとなっており、見るからにべたべたしていて触る気が失せてくる。だ
が、ここに何かがあるのは間違いない。

「だけど……触りたくないなあ……」

「それなら簡単だ。消し飛ばせばいい」

「え？」

ち主なんて、唯は知らない。

「貴女は……だれ……？」

「酷いなあ、初手私を斬り殺そうとしたでしょ？せめて顔見せの時間くらいは欲しかったな〜ほんと」

明かりの元に姿を現したのは、ゴスロリ衣装に身を包んだ少女だった。しかし、その外見は明らかに普通の人間ではない。紫色の髪の毛の隙間から、昆虫の触覚や脚のようなものが何本も覗かせていたり、背中から蝶の羽根のようなものが生えている。そんな異形の少女が、倉庫内に置かれていた木箱に腰掛けている。

唯は彼女を見たことがある。半月ほど前、ビルドオリジオンの事件の際に、ギフトメイカーの一員として立ちふさがった少女の名前を、唯は知っている。

少女は、わざとらしく大あくびをすると、腰掛けていた木箱から降りて、一歩、唯達の方へと歩み寄る。

「いや〜待ちくたびれたわ。こうしてセンサーを張り巡らせたはいいけど、思った以上に遅いんですもの。折角の興奮が冷めちゃうところだったのよ？」

「その常軌を逸した邪悪さ……扉越しにでもわかるさ。お前が触手の発生源……でいいんだな？」

「ええそうよ。私はギフトメイカーのリイラ。出来損ないの姉がお世話になったよう

ね」

「姉だと……?」

少女が名乗ると同時に、彼女の背後から何者かがセラに向かって飛び掛かってきた。その人物は手に武器のようなものを持っており、~~その~~得物でセラを攻撃しようとしている。

セラは咄嗟に剣を構えてそれを防ぐ。ガキンツ と大きな金属音が鳴り響き、火花が飛び散る。襲撃者は攻撃を防がれたと判断すると、~~!!!~~即座に得物を手放してセラから距離を取る。

カランと音を立てて、襲撃者の武器がセラの足元~~!!!~~に落ちる。

それは一本のモップだった。見た目は木製だが、あの硬さや音は金属だった。おそらく、見た目だけは木製で中身は金属製のだろう。

「誰だ!! 姿を現せ!」

セラは襲撃者にそう呼び掛ける。

直後、彼女目がけて闇の向こうから何本ものナイフが飛んできた。セラは剣でそれを弾き飛ばすと同時に、足元に転がっていたモップを、ナイフの飛んできた方向に目がけて蹴り飛ばした。モップはビュンと風を切りながら飛んでいき、壁にぶち当たると同時にほつきりと2つに折れて散らばる。

唯は、セラが弾き飛ばして足元に落ちたナイフを見て、軽く震えあがる。セラが居なかつたらおそらく既に唯は死んでいる。今この状況において、彼女は足手纏いでしかない。そんな事実を改めて思い知らされた唯は、拳を強く握りしめる。

「乱暴はだめですよ？大人しく無抵抗でお嬢様に食べられてください☆」

8 本目のナイフが弾き飛ばされた瞬間、唯の背後から、この状況にそぐわない媚び媚びな萌え声が聞こえてきた。

一体いつの間に後ろに回り込まれていたのだと驚きながら、唯は自身の背後にいろであらうもう一人の敵に対して反射的に肘鉄を喰らわせようとするが、唯が突き出した肘は空をきる。声の主は既にそこにはいなかった。

否、彼女は既に正面に移動していた。

それは、透き通るようなポリウム溢れる銀髪をツインテールにしたミニスカメイドだった。黒いワンピースの上からリボンやフリルが大量に盛られた白いエプロンを付け、頭には血の滲んだぐるぐる巻きの包帯の上から、フリルのあしらわれたヘッドドレスが載せられている。露出した肩やニーソックスとガーターベルトの組み合わせと、何から何まで徹底的にこてこての萌えを追求したような存在が、そこに居た。

そして、そのメイドの顔を、唯とセラは知っている。

だが、見知った口から発せられたのは、とんでもなく素っ頓狂な台詞だった。

「やつほく☆みんなの玩具兼サンドバックをやらせてもらってます♡ 役立たずメイドのレイラちゃんですっ♡ お嬢様のために残虐の限りを尽くして抹殺しますので、みなさん燃え燃え滅ツ☆してくださ〜い♡」

「は……え？なんかキヤラ思いきり変わってない？」

レイラと名乗った目の前の少女の変わりように、唯もセラも思わず間の抜けた声を出した。

唯は、彼女には一方的に襲われてばかりでほとんど会話したことがないが、それでも今のレイラが正気ではないことは分かる。漆黒の軍服に身を包み、冷酷に自分達の命を狙ってきたあの彼女と、今日の前にいる彼女が全然結びつかない。誰かがレイラに成り代わっているとされた方がまだ納得できるレベルだ。内面に共通点が全然見いだせないのだ。

敵ながらレイラの変貌に戸惑いを隠せない唯達の反応を見て、レイラはくすくすと笑いながら、嬉々として語りだす。

「ああ、これ？あんたが壊しちやったからさ、もう一度洗脳してもらったのよ。私としては惨めつたらしくて結構気に入ってるのよ……私を連れ戻しに来た勇敢なお姉さまは、哀れなメイド人形に成り下がりました。BAD END、ってね♪」

まるで万引きを自慢する中学生のようなノリでとんでもないことを暴露したレイラ

に、唯とセラはドン引きしていた。彼女の話どおりならば、リイラは自身の姉を嬉々としてこんな風に変えさせたのだ。一体どうすればこんなことをして平気でいられるのか、唯には想像もつかないし、したくもなかった。

「ギフトメイカー……お前らもイスタとやらを狙っているのか？」

「ええそうよ。でも私個人としてはそこまで興味はないの。興味があるのは……貴女達」

リイラはそう言いながら、セラと唯を指さす。

自分達に興味があるとは、一体どういうことなのだろうか？

「私達は同類なの。切っても切れない縁で結ばれた運命共同体……というか運命そのものなの」

「冗談じゃない……誰があなたみたいな性悪と一緒にだ……！」

「はあ、どうやら何も知らないようで……まあいいか、そのほうが手っ取り早く済むし。特に貴女はまだ力を使いこなせていないみたいだし、私の手を煩わせないで済みそうね」

リイラはそう言いながら、唯達に歩み寄る。彼女が一步步くたびに、その背中から触手の様なものが一本ずつ伸びてくる。

唯は、まるで蛇に睨まれた蛙のように、その場から動くことができなかった。リイラ

が何を言っているのか微塵も理解できないが、目の前の少女が危険人物だということは分かっている。これからとんでもなく碌でもないことが起きるといふことも分かっている。だが、威圧感と恐怖心が唯の足をがっしりと掴んで離さないのだ。

狂気の化身は笑う。

大好物にありつける喜びを全身で受け止め、脳内を快樂物質で満たしながら告げる。

「何もかも忘れて、私の中で身も心もひとつになりましたでしょうか？ その方が今よりずっと素敵でしょう？」

それはある者にとっては死刑宣告で。

またある者にとっては死線デッドラインの始まりで。

——ある者にとっては、覚醒の始まりだった。

第33話 AM2・33 / 軌跡の果てより来る異眼（ビヨンド・ザ・オツドアイズ）

AM1:59

プラネットプラザ3階倉庫前

最初に動き出したのは、リイラだった。

「そーれっ！」

軽めなノリの掛け声と共に、彼女は天井へと伸ばしていた触手をベリベリと引き剥がし、唯達めがけて鞭のように振り下ろした。

唯は慌てて身を屈めながら吹き抜けのある方へと逃げ出す。外れた触手は勢いよくバウンドしながら、今度は隣のセラに狙いを定める。

しかし、セラは瞬時に剣を振り抜き、自身に向かってきた触手を切断する。人間の動体視力を遥かに凌駕する一閃により、触手はただの肉でできた残骸に成り下がった。

リイラは続いて数本の触手を伸ばすが、それらも全てセラの剣撃によってあっさりど

切断されてしまう。

ここでレイラは考えた。触手センサーを大規模に展開して消耗している今の状態で、やる気満々のセラを相手取るのは面倒くさい。ならばもうひとりの、簡単な方からやってみよう。

「決めた、あっちから先に食べちゃおう」

「なっ……待て！」

レイラはセラを無視して、天井から引き剥がしたものは別に、もう2本程触手を背中から生やすと、その触手を脚のように使って唯を追い始めた。触手の先で壁を蹴り、その勢いを以て一気に唯との距離を詰めてゆく。

セラは、そうはさせまいと動くが、その時、彼女の足元に何本ものナイフが突き立てられる。

セラが振り向くと、血走った目をしながらモップを構えたレイラが、セラめがけて突っ込んできていた。

「お嬢様の邪魔はさせませんっ！ 貴女の相手はこの敗北クソザコメイドのレイラちゃん
が相手しますっ☆」

「……戦う前から敗北クソザコメイドを自称するなよ！」

当然の突っ込みを入れながら、セラは剣でモップを切断しようとする。レイラも負け

じと、セラの胴体を粉碎する勢いでモップをぶん回す。狙うは鳩尾。セラは知らないが、レイラのモップは人体ぐらいは軽く粉々にできる代物（Made in バルジ）だ。まともには当たれば即死は免れない。

それを知らないセラだったが、その程度の情報アドバンテージの差では彼女を殺すことはできない。ガギンツ!! と激しく火花を飛び散らせながら、セラの剣とレイラのモップが衝突する。

「わたし、騎士って嫌いなんですよね。なので死んでくれませんか？」

「それはできない。貴様らの悪辣さを看過するわけにはいかないし、私にはやらねばならないことがある——！」

片や、異界より現れし騎士。

片や、哀れな玩具と化した少女。

不要な戦いの火種が、またひとつ生まれた。

そして、レイラとの追いかけてこに興じさせられることとなった唯はというと。

「なんでっ……こっちに向かってくるのさ!」

「弱そうなやつから狙うのが狩りの基本なのよ。覚えておきなさい」

「おぼえておきたくないいいいいいいっ!」

迫りくる触手だったり溶解液だったりを必死にかいくぐりながら逃げていた。

とうか湖森達を助けに来たつもりなのに、なんでこんな人の形をした化け物と追いかけてこしなきゃなんなのだ。なんでギフトメイカーに横やりを入れられなければならないのだと、不平不満を心の中にため込みながら、唯は必死に走る。

此方を刺し殺さんとするような勢いで飛んできた触手を、唯は前方の柱に飛びつきながら避ける。

標的から外れた触手は床に勢いよく突き刺さり、そこに二の腕ほどの直径の穴を残して引っ込んでゆく。それを見て、唯の血の気が一気に引いてゆく。

(やっぱ無理だ! 私なんの力もないし……勝てない!)

感じたのは、圧倒的格差。

肉食獣に追い詰められた草食獣の如き恐怖感が、唯の心を覆ってゆく。

「しぶといわね、貴女」

「……」応運動神経には自信があるんだよね」

伸ばした触手を引っ込めながら、リイラが近づいてくる。それは、人の形をした恐怖

の象徴にしか見えなかった。

だが、それを悟られないように、唯は強気に言葉をかえす。

勝率0%でも、逃げの一手を選ぶ気はさらさらない。

何故ならば。

(ここで逃げたらまた瞬が遠くなる……！瞬や皆が戦つてゐるのに、逃げることもな
てできない！ここで逃げたら女が……諸星唯の名が廃る……！)

それはただの意地でしかないということは、唯自身も理解している。デッドエンドへ
の片道切符であることも分かっている。

だが、引けない。

それ以上に、幼馴染みに置いていかれることの方が、唯にとつては怖いのだから。

そんな唯の感情を知つてか知らずしてか、リイラは笑みを浮かべる。

「貴女さあ、本気で私と戦おうとか思っている？」

「乙女の意地を勝手に読み取らないでよね」

「いや、馬鹿だなあと思つて」

それは、リイラからすれば至極真つ当な感想だった。

つかまつっていた柱から身体を離し、床に足を下ろした唯の動きがピクリと止まるが、

リイラは気づかずに続ける。目の前の弱者の思い上がりを排するために。

「貴女は間違ひなく弱い。こうして私に抗う術を持たないレベルで。にもかかわらずつまらない意地張つて戦場に立つて……誰の背中追いかけてるのか知らないけどさ、きつとそいつも内心では鬱陶しいと思つてるわよ。そんなことすら考えられないから、馬鹿だと言つたの……わざわざ言わせないでよ……ねっ！」

「いっ……」

瞬間、リイラの右ストレートが唯の頬にめり込んだ。もろに一撃を喰らつた唯は女の子らしからぬ声をあげながら、側頭部から床に倒れる。

わざわざ素手で殴つたのは、手加減したからではない。その逆、唯を心身ともに追ひ詰めたうえで喰らうためだ。彼女の志を否定したうえで、その全てをむさぼる。そのほうが楽しいから。そこに理屈なんてなかった。

「ほら、つまらない意地張るのなら、それに見合う道化つぷりで楽しませてよ！そのほうが楽しいじゃない！」

唯を煽り立てるリイラの頭に生えていた触覚から電撃が飛ばされた。

床に倒れていた唯は、リイラから離れるように床を転がつて電撃を回避していく。だが、攻撃の雨は止まない。

間髪入れず、リイラの触手が飛んでくる。まだ立ち上がれないでいる唯の身体を3等分にしようと、先の尖つた2本の触手が迫りくる。それは、ただの女の子を殺すにはい

ささかやりすぎともいえる代物にも感じられた。

が、唯も黙って殺されることを望んではいない。ダンツ!!! と彼女は手で勢いよく床を押し、その反動を利用して起き上がる。その動きは、まるで地面に倒れるのを逆再生したかのような不自然さが見受けられるほどのものだったが、これは純粹に彼女の身体能力が為した技だ。またまた標的を外した触手たちは、唯の身体の代わりに床をえぐり取ってゆく。

が、少女のギリギリの綱渡りもここまでだった。

彼女が顔を上げた時には、既にリイラは触手を切り離し、唯の眼前に迫っていた。

いや、リイラだけではない。天井一面に木の根のように張り巡らされていたリイラの触手が、一斉に唯に向かって伸びてきていたのだ。

「お疲れ、そしてさようなら。貴女と話すことなんて何にもないからね」

「ま——」

心底詰まらなさそうにリイラはそう言いながら、唯の鳩尾を殴りつける。

それと同時に、天井に張り巡らされたおびただしい数の触手が、唯の身体を貫かんとして突っ込んで来た。

AM2：00

プラネットプラザー1階西通路

遊矢VS竜崇

「は、はははは」

勝利を確信した竜崇の口から、歓喜の音が漏れる。

”ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット”の攻撃により”EMペンデュラム・マジシャン”は戦闘破壊され、それに伴う爆発によって生じた爆炎は、瞬く間に遊矢を覆い隠した。

観戦していた柚子が茫然自失となっているが、そんなことは知ったことではない。竜崇は勝つたのだ。完膚なきまでに遊矢を打ち負かした。AMORE隊員として命じられた仕事は果たしたし、決闘者^{デュエリスト}としてのプライドをかけて全身全霊で勝利した。

彼の中にあるのは、勝利に対する満足感だった。

兎に角今は、苦勞して手にした勝利を嘔み締めよう。敗北の苦澁を呑む羽目になった

遊矢の有様を思いつきり笑ってやろう。優越感で気が大きくなった竜崇は、高笑いをしながら遊矢の方へと一步步み寄る。

が。

その優越感はその一言で吹っ飛んだ。

「残念だが、決闘は^{デュエル}はまだ終わってないぞ」

爆炎越しに、遊矢の声が出た。

それと同時に両者を隔てていた爆炎が掻き消え、遊矢の姿があらわになる。

遊矢は倒れてはいなかった。”EMペンデュラム・マジシャン”の戦闘破壊には成功したが、遊矢のライフは1400から減ってはいない。本来ならば1600ポイントのダメージを受けて尽きてなければいけないのに、だ。

固まる竜崇に対して、遊矢は肩で息をしながらネタばらしをする。

「俺は手札の”EMバリアバールンバク”の効果を発動していた。モンスター同士がバトルする時、こいつを手札から捨てることで、その戦闘で発生するお互いへの戦闘ダメージを0にする効果……それを使って凌いだんだ」

そう、竜崇はすっかり失念していた。前のターンに”EMペンデュラム・マジシャン”の効果で手札に加えていた”EMバリアバールンバク”の存在を。サーチカードは基本的に相手に公開されるため、竜崇も”EMバリアバールンバク”が遊矢の手札にあ

ることを知っていたにもかかわらず、だ。リンク召喚を自分だけが使えるという優越感が、彼の判断を鈍らせたのだ。

ちなみに、遊矢としてはもっと早くバリアバルーンバクの効果を使ったかったのだが、最初の攻撃の際は、いきなり空中に放り出されたせいで間に合わず、発動できなかったのだ。しかし、今回は間に合った。

だが、いくらダメージを凌いだと言っても、遊矢のフィールドはがら空き。対して竜崇のフィールドにはまだ攻撃していない”魂喰いオヴィラプター”が残っている。”EMウィップ・バイパー”の効果で攻撃力が下がっている為、このターンでライフを削ることはできないが、少しでもライフを削るべく、竜崇はオヴィラプターでの追撃を宣言する。

「オレは”魂喰いオヴィラプター”で攻撃―」

それと同時に、竜崇は再び走り出す。”ダイナレスラー・キング・Tレッズル”の背に飛び乗り、そこから更に跳躍して空中に浮かぶ足場に乗る。

彼が何を狙っているのかは、一目瞭然だった。

「あいつ……アクションカード狙いかっ!」

そう。この決闘はアクションデュエル。そうなれば、ここぞという時にアクションカードを取りに行くのは至極真つ当だろう。

そして、今回の決闘では、アクションカードの攻防において遊矢が後手に回ってしまっている。基本的にアクションカードは使ったもん勝ちである。これ以上竜崇に使われてしまえば差は開くばかり。

遊矢も負けじと走り出すが、アクションカード取得を手伝ってくれるモンスターが居ない今、カード収集能力において、両者には決定的な差があった。竜崇は足場の上から地上の遊矢を見下ろしながら、手に入れたアクションカードをこれ見よがしに見せつけた後、それを発動する。

「アクション魔法^{マジック}、ハイダイブ！モンスター1体の攻撃力を10000アップするー！」

「——俺は墓地のバリアバルーンバクのもうひとつの効果を発動！相手^{ダイレクトアタック}が直接攻撃してきたとき、手札から“EM”モンスター1体を墓地に送り、自身を墓地から特殊召喚する！」

EMバリアバルーンバク：☆6 DFE2000

アクションカードが手に入らないならば、それ以外の手段で凌ぐまでだ。

遊矢は前のドローフェイズにドローした“EMユニ”を捨て、効果を発動した。すると、地面からデフォルメ化された大きな猊が出現し、その巨体で遊矢を守るようにして立ちふさがる。

オヴィラプターの現在の攻撃力は1500。それに対してバリアバルーンバクの守

備力は2000。竜崇の他のモンスターは皆攻撃を終了している以上、これでは突破しようがない。竜崇は悔しがりながらターンエンドを宣言する。

「くそっ……オレはこれでターンエンド……！」

ダイナレスラー・キング・Tレックス：ATK3300↓3000

魂喰いオヴィラプター：ATK1500↓500↓1800／DFE1800↓500

ターン終了と共に、竜崇のフィールドのモンスターのステータスも元に戻る。

「次のターンで仕留めてやるさ」

「どうすんの上遊矢……」

柚子は不安そうに遊矢を見つめる。

遊矢のフィールドには、バリアバールンバクとカウンターの溜まりきった”臨時収入”のみ。ペンデュラムゾーンのカードは前のターンに自分で破壊してしまったので、次のドロローでなんとかしてペンデュラム召喚の準備を整えなければ負けてしまう。ここから一体どうするつもりなのだろうか。

遊矢は無言で、デッキに指をかける。

兎に角、ドロローしないことには始まらない。

「俺の——」

ターン突入を宣言しながら、カードをめくろうとしている指に力を籠める。その時だった。

目も開けられない程の閃光が、遊矢の後方で発生した。

数分前

プラネットプラザ3階中央通路

リイラは、崩れ落ちた吹き抜けの一部を見下ろしていた。

その一角は、リイラの触手攻撃によって2階を貫通し、1階まで粉々に崩れ落ちていた。触手一本でも床に穴を開けられるほどの威力なのだ。それを何十本も喰らえば、当然ながら崩落する。仮に、奇跡的に触手攻撃を受けてもなお即死していなかったとしても、3階から1階までは10数メートルはある。そんな高さから生身の人間が落ちて無事で済むはずがない。

リイラは、1階にできた瓦礫の山に向かって飛び降りる。勿論、触手をロープ代わりに使って、安全に、だ。

彼女の目的は唯の殺害ではなく捕食。だからこそ、わざわざ確認の為に下に降りたの

だ。

「ふうん、てつきり覚醒してるかと思っただけど……あれはまぐれだったのかしら？」

レイラの脳裏に浮かぶのは、唯の中に宿る、レイラを退けたというあの力の存在。

レイラの映像記憶を抽出して得た情報から、唯が食べごろになったと期待してわざわざ前線に出てきたのだ。先の蹂躪劇の際も、ひよつとすると唯が反撃してくるかもと期待していたのだが、この光景を見るに、どうやらそれは見込み違いだったようだ。

レイラは足元にあつた瓦礫をひとつ、山の頂上から蹴り落とす。瓦礫は固い音を立てながら、山のもともまで転がり落ちていく。

「案外つままないのね。所詮は仮面ライダーの腰巾着か」

レイラはつまらなさそうにため息をつきながら、瓦礫の山を悠々と降りてゆく。そして、彼女の足が1階の床につく。

そこで、彼女の顔に笑みが現れた。

「……へえ」

瓦礫の山を下りきつたレイラは、その光景を目の当たりにして感心していた。

彼女の心の中は、待ちわびていたものをようやく目にするのできた嬉しさと、それを我が身に取り込むことのできる優越感でいっぱいだった。

恍惚とした表情を浮かべる彼女の視線の先。

そこにいたのは。

「——この私を呼んだのはお前か」

「そうだけど、何？眠ってたところをたたき起こされて気分でも優れないのかしら？」
此方を凝視する声の主に、リイラは開き直るようにそう言い切る。

リイラの前にいたのは、ひとりの少女。肩まで伸びた金髪も、ダボつとした肩だしパーカーも、パーカーの裾に隠れて、まるで下に何も吐いていないように見えるが確かに存在している短パンも、その少女が諸星唯であると主張しているし、彼女を知る者がいればそう答えるだろう。

だが、彼女を取り巻く雰囲気、それを否定している。彼女の全身から放たれる、この世のものとは思えないほどの重圧感が、目の前の少女が、そんな普通の存在ではないということ、全身全霊で主張している。

そして、それをリイラは待ちわびていたのだ。

「おはよう。てつきり目覚める前に死んじやうかと思っただけど……そうならなくてよかつたわ」

そして、リイラの期待は実現した。

諸星唯は、リイラの期待通りに、レイラを壊した力を引き出してくれている。普段の彼女が絶対しないような、冷酷な表情をこちらに向けてきてくれている。もう、リイラ

の中は喜びと興奮でいっぱいだった。

「それでこそよ。それでこそ、食べ甲斐があるというものよ！」

口から涎を垂らしながら身体をくねらせるリイラ。側から見れば色んな意味で危ない子ではない。

が、唯はそれを冷たくあしらう。

「ごちゃごちゃ煩い。私はお前を倒して先に行く。邪魔をするんじゃない」

「そう硬いこと言わないでよ。私達はぶつかり合う運命にあるのよ……貴女も分かっているでしょう？これを避けることなんてできないって！」

「プロポーズのつもりか？なら口下手にも程がある。そんな言葉では誰も振り返らないぞ」

言葉のドツジボールを繰り返しながら、両者は距離を詰めていく。

理解は不要。ただ魂の奥底から湧き上がる宿命に背中を押されるがまま、少女たちは身体を動かす。

「いただきます」

「かかってきやがれこの虫女」

瞬間。

2人の身体から目も眩むほどの閃光が迸った。

かつて、赤馬零児はある仮説を立てた。

曰く、神遊矢——いや、正確にはその内側に巣くっていた存在は、カードを創造する
ちからを有していた可能性があるという。

現に、彼はかつての戦争の中、異次元の決闘者との接触を通して数多のカードを生み
出してきた。ペンデュラム召喚だけでなく、融合・シンクロ・エクシーズをも我が物と
し、成長してきたのだ。

だが、それを実証するにはあまりにも時間がなかった。照明されるよりも早く事態は
進み、そして、戦いの末にその力の根源は封じられた。

だから、あんな奇跡はもう起きない。

——筈だった。

その光は、遊矢まで届いていた。

まるで遊矢の背中を押すように、大事なものを届けに来たかのように、それは遊矢の背中を照らしていた。

（なん、だ？これ……）

柚子や竜崇があまりの眩しさに目を逸らす中、遊矢は奇妙な感覚にとらわれていた。

何かが胸の内から沸き上がり、形を持つとうとしている。具体的に何が生まれようとしているのかは、まだわからない。しかし、遊矢はこの感覚を知っている。それは遊矢が長らく感じていなかったもので、悪魔ズアークの力がこの身からなくなつた今では、おそらくもう二度と感ずることはないであろうものだった、はずだ。しかし、それは今確かに遊矢の中にあつた。

新・た・な・カ・ー・ド・の・創・造。

それは遊矢が——正確には、遊矢の中に居た悪魔ズアークの手により、幾度となく行つてきたモノだ。だが、今はすでに悪魔ズアークは封じられているため、遊矢にそんなことができるはずがない。

しかし、現に今、遊矢の頭の中には、見たこともないカードビジョンの姿が浮かんでいる。

なぜ今になって、それが可能になつたのかはわからない。

（なんだかよくわからないけど……きつとこれは、俺を応援してくれているんだ！なら、

エンターテイナーとしてそれに応えるつきやない！」

だが、遊矢はそれを受け入れていた。

力強く背中を押してくれているこの光を裏切りたくはない。その一心で、頭の中に生まれたビジョンに手を伸ばす。

光はいつの間にか収まっていた。

目の前では、竜崇が腕を組んで遊矢の出方を伺っている。

「……………」

遊矢は、自身の左腕に装着されているデュエルディスクに目をやる。

新たに生まれたカードの気配を、そこに感じていた。

やることは変わらない。いつも通り、笑って始めるだけだ。

「レディース&ジェントルメン！ここまで散々やられっぱなしだったけど、ここからは俺のターンだ！俺にはライフもデッキもまだ残っている！ここで折れるわけにはいかないんだ！」

遊矢は口角を精一杯上げて、エンタメデュエルの始まりを宣言する。

「ほう、その顔……………ここから勝つつもりか？ならば見せてみる！」

「ならお言葉に甘えて……………そらよっ！特殊召喚されたモンスターが相手フィールドに存在し、相手フィールドのモンスターが自分フィールドのモンスター数以上の場合、”E

Mラディツシユ・ホース”は手札から特殊召喚できる!”

EMラディツシユ・ホース：☆4 ATK500

売り言葉に買い言葉とはよく言ったものだ。大口を叩きながら遊矢が召喚したのは、根菜類で出来た身体を持つ子馬だった。

そして、遊矢はにやりと笑う。その顔を見て、柚子は悟った。

「あの顔……遊矢のエンタメデュエルが始まるのね……!」

「準備も整いましたし、それでは榊遊矢のエンタメデュエルの新顔をお見せいたしましたよ!」

胸元にぶら下げているペンデュラムを揺らしながら、遊矢は声高らかに宣言する。

新たに生まれたものを、手にしたものを、今現実には解き放つために。

「現れよ、天空に描く光のサーキット!」

「?!」

「まさかお前……!」

その文言を聞いて、柚子も竜崇も驚愕の顔をする。彼らの予想が正しければ、それは遊矢の口から絶対聞けるはずもないものであり、遊矢にはできるはずのないことだからだ。

しかし、そんな2人の反応とは裏腹に、遊矢の宣言の直後、遊矢のフィールドに居た

”EMバリアバルーンバク”と”EMラディッシュ・ホース”の2体が赤い光となって天に昇ってゆく。そして、光の行く先には、サイバーチックなデザインのゲートが浮かび上がってる。

「アローヘッド確認！召喚条件はペンデュラムモンスターを含む効果モンスター2体！俺はフィールドの”EMラディッシュ・ホース”と”EMバリアバルーンバク”をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2！」

ビヨンド・ザ・ペンデュラム
ビヨンド・ザ・ペンデュラム
軌跡の魔術師：LINK2（右下／左下） ATK1200

閃光を轟かせながら現れたのは、白い法衣に身を包んだ、赤髪の女魔術師だった。風に吹かれて垣間見える、長く伸びた彼女のスカートの後ろの方の中布は、左右で赤と青に分かれており、さがならペンデュラムスケールを表しているように見える。

竜崇は、あり得ざる奇跡を目の当たりにし呆然とする。

彼の知識が正しければ、今の遊矢にはリンク召喚を行えるはずがない。彼はリンクモンスターを持つていないし、存在も知らないし、そもそもカードの創造さえも今はできないはずがないというのに、だ。

「なぜ、お前がリンク召喚を……あり得ない……既にあの力はお前にはないはず！今の
お前にはカードの創造など到底——」

ター効果もペンデュラム召喚も使えない。しかし、遊矢の手札は一枚のみ。これではどうあがいてもペンデュラム召喚はできない。要するに、このターンはこれ以上動けなくなる。

だが、竜崇は忘れていた。

彼はアクションデュエルと、遊矢を真正面から打ち破ることに固執しすぎていたあまり、とんでもないものを残してしまっていた。

それに気づかず悪役感たつぷりににやついている竜崇だったが、次の遊矢の一言が、その笑みを容赦なく奪い取った。

「……2人とも、このカードの存在を忘れてない？」

そう口にした、遊矢の顔は笑っている。

彼が指さす先。そこには、

「そう、”臨時収入”！」
エクストラパック

最初のターンに発動した永続罫カードが、破壊されずに残っていた。

竜崇は最初のターンに召喚した”ダイナレスラー・パンクラトプス”の効果を使っていれば、これをいつでも破壊できたはずなのに、そうしなかった。遊矢を、彼の十八番であるアクションデュエルで完膚なきまでに打ち倒そうとするその執着心が、竜崇の判断を鈍らせていたのだ。

「俺は、臨時収入」を墓地に送り効果発動！カウンターが3つ乗っているこのカード
フィールドから墓地に送ることで、デッキから2枚ドロウする！」

「なっ……」

「このカードを残しておいてくれて助かったよ。俺の命運はまだ尽きちゃいない……お
楽しみはこれからだっ！」

自分の慢心と執着が生んだミスに苦しめられる竜崇の前で、遊矢はカードを2枚ド
ロウする。

それは、ある者にとっては敗北への第一歩であるとともに——ある者にとっては勝負
の運命を左右する一手となる。

そして、勝利の女神は。

「——来た！」

——彼に微笑んだ。

「俺は魔法カード”アメイジング・ペンデュラム”を発動！自分のペンデュラムゾーン
にカードが存在しない時、EXデッキからカード名の異なる表側表示の”魔術師”2体
を手札に加える！」

遊矢はドロウしたカードの内の1枚を、即座に使う。

今遊矢のEXデッキには、前のターンに自分で破壊した”竜穴の魔術師”と”龍脈の

「魔術師」の2枚が存在する。これらを回収して発動すれば、ペンデュラムスケールの確保の問題は解決される。

「俺はEXデッキからスケール8の”竜穴の魔術師”とスケール1の”龍脈の魔術師”を手札に加え、ペンデュラムスケールにセッティング！」

「ドローで……変えやがった……！」

「三度揺れる魂のペンデュラム！ 天空に描け光のアーク！ ペンデュラム召喚！ EXデッキから甦れ！ オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン！」 EMラディッシュ・ホース！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン：☆7 ATK2500

EMラディッシュ・ホース：☆4 DFE2000

2体のモンスターがEXデッキから帰還するとともに、ペンデュラム召喚の成功によって、遊矢に課せられていた”軌跡の魔術師”のデメリットも解除される。”臨時収入”のドローでうまい具合にカードを引き込めたが故にできたことだ。

特に、本決闘中^{デュエル}3度目の召喚となる”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”は、相当やる気に満ちているようで、フィールドに出現するなりけたたましく咆哮をあげる。その咆哮は場の空気を激しく震わせ、砂嵐の如く童崇の肌につつかってゆく。

「そして、”軌跡の魔術師”のもうひとつの効果！ 自身のリンク先にレベルの異なるモンスター2体が同時にペンデュラム召喚された時、フィールドのカード2枚を破壊でき

るー！」

「アクシヨン魔法、^{マジック}」効果暴走！相手モンスターの効果を無効にし、500ポイントのダメージを与える！お前のライフは残り200！これで終わりだあ！」

「俺は手札から”EMレインゴート”を捨てて効果発動！効果ダメージを0にする！」

”軌跡の魔術師”が解き放った魔力弾が火の玉に変化して遊矢に襲い掛かるが、遊矢の目の前に、レインコートと一体化したような見た目の山羊が現れ、身を挺して遊矢を火の玉から庇う。”軌跡の魔術師”の効果こそ不発に終わったが、効果ダメージはかわすことができたのだ。

「そして俺は手札から”EMフレンドンキー”を召喚！フレンドンキーは召喚成功時に、墓地のEMを1体復活させる！俺は墓地から”EMウィツプバイパー”を特殊召喚！」

EMフレンドンキー：☆3 ATK1600

EMウィツプ・バイパー：☆4 ATK1700

「そしてウィツプ・バイパーの効果！ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット”の攻撃力と守備力をターン終了時まで入れ替える！」

ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット：ATK3000／DFEO↓ATK0／D

FE3000

「これであいつの攻撃力は0！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンで攻撃できれば終わりね！」

「それは不可能だぜ！」ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット」とダイナレスラー・キング。Tレックスル”はな、自身以外のモンスターを攻撃対象に選択できなくさせる効果がある。2体ともだ！その意味、分かるよな？」

「あ……………」

「……………しまった！」

ようやく掴んだ勝利の光に喜ぶのも束の間。竜崇に反撃が届く寸前で、それは瓦解した。

”自身以外を攻撃対象に選択できない”モンスターが相手フィールドに複数体並んだ場合、攻撃対象に選択できるモンスターが相手フィールドに存在しないこととなり、こちらからの攻撃が封じられることとなる。その為、いくら遊矢が高打点のモンスターを揃えたり、相手モンスターを弱体化させても、攻撃そのものが封じられたのでは意味がない。

遊矢のライフは残り200。竜崇にターンを渡してしまえば、確実に負ける。しかし、攻撃する手段がない。どうにかして2体のうちどちらかを効果でフィールドから退けるか、モンスター効果を無効化するしかないのだが――

「……は……もうひとりの新人にお任せあれっ！Lady s and gentle men！」

遊矢は笑顔でそう言いながら、指をパチンと鳴らした。

彼の反撃の手はまだ終わってはいない。なぜならば、遊矢の奥の手はまだ盤面上に現れてはいないからだ。

「新人……まさか……!!」

遊矢の口振から、竜崇がこれから起こることを察した瞬間、竜崇と遊矢を取り囲むように強い風が吹き始める。それは瞬く間に竜巻となつて、フィールド全体を包み込む。ソリッドビジョンじゃなかつたら、今頃この施設はとんでもない有様になつていただろう。

竜巻はこれから起こることを予想している。だが、それを止める手段がない。苦虫を噛み潰したような顔をすることしかできない竜巻の前で、遊矢は新たな力を今まさに披露しようとしていた。

「そのまさかさ！再び現れよ、天空に描く光のサーキット！アローヘッド確認！召喚条件は“EM”、“魔術師”、“オッドアイズ”モンスターを含む効果モンスター3体以上！俺はフィールドの“EMラディッシュ・ホース”と“EMセカンドンキー”、リンク2の“軌跡の魔術師”をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク

召喚！現れる、リンク4！嵐を突き破る2色の眼！”まなこオッドアイズ・テンペスト・ドラゴン”！”

オッドアイズ・テンペスト・ドラゴン：LINK4（左／右／左下／右下） ATK2500

竜巻を切り裂きながら現れたのは、二色の眼を持つ銀龍だった。

機械の様な翼を赤と青に光らせながら、それはフィールドに降り立つ。

「オッドアイズの……リンクモンスターだと……!? あり得ない！」

竜巻は、その銀龍を見て狼狽えることしかできなかった。これまでの流れ的に、なんとなく来るのではないかと薄々思っていたが、いざ目の当たりにしてしまうと、彼らちっぽけな覚悟なんてものは、いとも容易く粉々に吹き飛ばされてしまった。

”軌跡の魔術師”はまだ有り得た。前世の世界でも存在したカードだからだ。しかし、目の前のドラゴンは違う。あんなモンスターは存在しない。

竜崇に限った話ではないが、転生者は原作知識を有しているが故に、原作キャラに優位に立てる。それは未来の筋書きシナリオと敵の手札を知ってるが故の精神的な余裕からくるもの。言わば攻略本片手に挑むゲーム攻略だ。なので彼らは、それが通用しない想定外の事態に弱い。

遊矢が編み出したオリジナルのリンクモンスターの出現によって、竜崇の優位性はな

なくなった。普通の転生者ならばこの時点で絶望するのだろうが、竜崇は違った。

彼はその場から一步も動かなかった。

彼の心の中に巣食う決闘者としてのプライドが、それを許さなかった。

たとえ目の前に敗北を突きつけられたとしても、最後まで倒すべき相手を見据え続ける。それが決闘者としての流儀だと、竜崇は思っていた。

「オッドアイズ・テンペスト・ドラゴン」の効果発動！このカードが「EM」ペンデュラムモンスターを素材にリンク召喚に成功した時、自分フィールドの「EM」モンスターの数までフィールドのモンスターを選んで、その効果を無効にする！」

「……………」

「これで攻撃ロックは解除された！いける！いつちやつて遊矢！」

「バトルだ！」

「……………すげえよお前。やつぱり腐つても主人公というべきか……………これだから原作主人公と敵対するのは嫌なんだ。どうあがいてもオレ程度じゃあ運命力が決定的に足りない。

AMORE程度おれたちの闇なんか、主人公おまえらの輝きでかきけされてしまう……………」

負けを悟った竜崇は、恨めしそうにそう言った。

それは、主人公という存在に対する羨望だった。

羨ましくて仕方がないけど、敵わないことも知っている。自分の力で打ち倒せるかも

しれないけれども、その可能性を信じきれない。だからあえてAMOREに入り、闇の中で戦う人生を選んだ。

オッドアイズ・テンペスト・ドラゴンの生み出した暴風で、竜崇が事前に位置を把握しておいたアクシオンカードは全て吹き飛ばされてしまった。今から探しに行けばギリギリ間に合うかもしれないが、彼はもう諦めていた。

彼の根底にあった諦観を勝利の女神は見抜いていたが故に、軍配は向こうに下された。

「オレの負けだ……行けよ、とつととオレをK.O.して、先に行くがいいさ」

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」で「ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット」を攻撃！

「……………！」

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」がレベル5以上の相手モンスターとバトルする時、戦闘ダメージを2倍にする！リアクシオン・フォーஸ்！」

オーバーキルもいい所だ。竜崇のライフは残り2500。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの素の攻撃力でも即死するほどしかない。この攻撃を回避できなければ、竜崇のライフは尽きて敗北してしまう。

が、ここで駄目押しの一発。

「オッドアイズ・テンペスト・ドラゴン」の効果！ペンデュラムモンスターが相手モンスターとバトルするとき、戦闘ダメージを2倍にする！」

攻撃力3000の”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”が、攻撃力0の”ダイナレスラー・ギガ・スピノサバット”に攻撃した場合に発生するダメージは3000。しかし、”オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン”の効果で戦闘ダメージは倍になるうえ、そこからさらに”オッドアイズ・テンペスト・ドラゴン”の効果で戦闘ダメージは倍加する。

倍の倍で4倍。数値にして、12000ポイントのオーバーキルが襲い掛かる。そして、それを回避する手段はない。

「螺旋のストライク・バーストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」
 「うわあああああああああああああああああああああああああつ!!」

竜崇：2500LP↓0LP（―12000）

あれから、どれくらい斬り合っただろうか。

それすらわからなくなるほどに、2人は苛烈な殺し合いを続けていた。
「お掃除されなさいっ☆」

レイラがあざとそうにウインクしながら強酸入りバケツをセラに向かつてぶちまけるが、セラは近くにあったマネキンを投げつけ、飛んできたバケツの口の向きを変える。ばら撒かれた強酸はセラではなく、近くのエスカレーターに降り注ぎ、ジュージューとヤバそうな音を立てている。

攻撃を去なされたレイラは間髪入れず、何処からかティーカップを取り出しては、それをセラ目掛けてぶん投げる。

セラはそれを難なく斬り伏せる。

が、

「馬鹿☆」

その瞬間、ぶった斬られたティーカップが爆発した。

発生した爆発は瞬く間にセラの身体を包み込んでゆく。

「騎士なんて単細胞生物、楽勝だもんねっ??さっすがレイラちゃん!可愛くて強くて雑っ魚い?!”

黒い煙をたちのぼらせながら燃え上がる炎の前に、矛盾極まりない自画自賛を吐き連ねるレイラ。その目はギンギンに充血しているどころか血涙を流しており、頭に巻いた

包帯からは血が滲み出ていた。

だが、彼女は今宵の戦いにおいてはいまだに無傷に等しい。

それにもかかわらず、彼女は血を流している。

「…………げふっ」

咳き込んだ彼女の口から、血が吐き出される。

吐き出された鮮血が、白いエプロンを赤く染めてゆく。

(もう、長くないかな…………あたし、無理しすぎたみたい)

徹底的に貶められ、歪められた彼女の自我は、自らの状態を察していた。

バルジによって幾度となく洗脳を重ねがけされ、心身ともに改造を繰り返された彼女の身体は、とつくのとうに限界が来ていた。ましてや今の彼女は、今宵の戦いに合わせて急ピッチで改造された為、碌に調整ができていない。

このまま戦い続けられ、先に倒れるのはレイラだ。

それは彼女も理解している…………筈だった。

(でも、その方がクソ雑魚奴隷メイドのレイラちゃんらしいよねっ！)

歪められた彼女の意識は、そう判断していた。

自らに罰を、恥辱を、尊厳なき最期を。今の彼女は、自ら陵辱を望み、自ら奈落に落ちるように施されているのだ。それはもはや、自力では止めることはできない本能と化

していた。

レイラはボロボロの身体に鞭打ち、完全に、確実にとどめを刺すべく、目の前で燃え上がる炎に突っ込んでいく。

手に持った金属製の鈍器モツプを強く握り締め、精一杯の笑顔で周囲に愛嬌を振りまきながら、彼女は目の前の敵を殺しに行く。

が、

「せやああああああつ!!?」

「あつ……?!」

それは、予想通りだった。

レイラが炎に到達する直前で、炎の壁を突き破りながら、セラの剣先がレイラ目掛けて突っ込んできた。

ガキンツ!!? という金属音が響き渡り、レイラの手からモツプが離れてゆく。

まるで喘ぎ声みたいな悲鳴をあげながら、レイラはその身体をくの字に折り曲げて壁に激突する。

ずるずると床に崩れ落ちるレイラに剣先を突きつけながら、セラが炎の中から這い出してくる。銀色の鎧はその表面を煤けさせているが、セラの身体には傷ひとつなかった。

「誰が……単細胞生物だつて？」

「あう……」

セラに剣を突きつけられるレイラ。誰がどう見ても、勝負はついた。

筈だった。

「……まだだよ」

「お前……」

「まだ、です！」

レイラはそう言うのと、突きつけられていたセラの剣先を素手で掴んで押し上げ始めた。

当然ながら、素手で剣の刃を掴めば血が出る。目や口や手のひらから鮮血を垂れ流しながら、彼女は抗おうとする。

「やめろ。その身体で戦えば死ぬぞ」

「情けのつもり？ やめてよね、クソ雑魚奴隷メイドのレイラちゃんにもプライドがあるんだから………ねっ！」

セラの情けも一蹴し、血塗れになった手で突きつけられた刃を押しつけ、レイラは走り出す。

そして、もう片方の手に持っていたナイフを、セラの喉元目掛けて突き刺そうとする。

して血塗れの腕——を伸ばしてきた。

咄嗟にセラは回し蹴りをレイラの顔面に喰らわせ、彼女を蹴り飛ばす。近くの質屋のガラスケースに頭から突っ込む形で倒れるレイラ。頭の半分近くが血に塗れ、片腕は折れるほどの傷を負いながらも、彼女はなおも立ち上がるうとする。怪我の具合も相まって、その光景はまるでゾンビのようだった。

そこに、

「案外早くボロが出たな。耐用年数が尽きかけてんのか」

「お前は……!」

品のない声が市かかと思えば、次の瞬間、セラの頬に傷ができていた。

死角からの、常軌を逸した一撃。ほぼ無傷だったセラにできた最初の傷。

セラがぼつと振り返ると、ライダースーツの上から白衣を着た青年——バルジが立っていた。

「よう、また会ったな女騎士サマ!ウチのクソメイドが世話になってるよ……にしてもスゲエ奴隷根性だな。我ながら恐ろしいぜ」

仲間が死にかけているというのに、バルジはへらへらと笑っている。やはり、彼には人の心はないのだろうか。

レイラはバルジが来ているのに気付いたのか、ガラスの破片を身体のあちこちに食い

込ませながら、バルジに向かって笑いながら手を伸ばす。

「ご、しゅじん……さま……みてて、レイラちゃんが殺すよ……」

「おーよしよし！すっげえ無様だな！ちゃんとボロボロになつてるようで何よりだ！」

「……………まさか、その為に彼女を洗脳してこき使っているのか？」

「当たり前だろ。コイツは俺様達に歯向かった身の程知らずなんだ。だから死ぬまで賤め続けられなきゃあいけない。その為にコイツを暴れさせてるんだ。趣味と実益を兼ねた資源の有効活用だよ」

敵対者を傀儡に変えて使い潰す。それは酷く合理的で悪趣味で——この男らしいやり方だった。

そのことを理解したセラは、一気に顔を曇らせる。

セラの目の前では、血塗れのレイラがバルジに跪き、彼の靴を舐めている。セラには、レイラが本当はどんな人間だったのかは知る由もない。だが、レイラがたとえ悪人だったとしても、こんなに貶められ、墮とされるべきだとは、セラにはどうしても思えなかった。

バルジはレイラに靴を舐めさせながら、上機嫌で彼女を馬鹿にする。

誰も聞く気はないというのに、彼はそれを辞めない。

「妹思いのお姉ちゃんは妹を取り戻すために、自ら妹ちゃんの悪いお友達のお玩具になっ

て一生を終えました！BADEND！めでたしめでたしどうだ、すっごい興奮するだろう？」

「なんで笑っていられるんだ？」

「楽しいからに決まってるじゃん。楽しいことを好きなかだけやる、それを否定する権利は誰にもない！それにな、世界のすべてはいずれ俺様達のモノになるんだ。俺様は未来のカミサマだ！なら今好き勝手にしてもいいだろうがよお……」選ばれた者にはその権利がある！」

もう、支離滅裂だった。

湧き上がる欲望を抑えることをやめ、悪意の限りを尽くし、正当化を拗らせに拗らせた身勝手の権化が、目の前にいた。

レイラを回収しに来た時と、今。セラがバルジと関わったのはたったそれだけなのに、それだけで理解した。

（こいつは………私の一番嫌いな人種だ！人を何とも思わない精神性、人を平気で踏みつぶす驕り高さ……コイツを野放しにしては駄目だ！今ここで倒す！）

セラは剣を握る手に力を籠める。騎士として、他者を踏みつけるような輩を許してはおけない。

そして、床を強く蹴り、バルジに向かって勢いよく斬り込もうとする。その動きは、常人にはまず認識不能なレベルで速かった。傍から見れば、セラが一瞬消えてバルジの目

の前に瞬間移動したように見えるだろう。

普段はあまり進んで殺生を行わないセラだったが、今だけは違った。コイツだけは生かしてはいけない。一瞬で始末しなくてはならない。心の奥から湧き上がる正義感が、目の前の邪悪を今ここで殺すべきだと叫んでいる。

そして、セラの剣がバルジの頭上目がけて振り下ろされる——筈だった。

「——蠢け」

たった一言、バルジはそう言った。

瞬間、セラの全身に激痛が走った。

「な……………っ!! がっ……………!!」

原因不明の激痛によって、バルジに肉薄する寸前でセラの動きが止まる。彼女の手から剣が零れ落ち、セラは目の前のバルジに寄りかかる形で倒れる。

彼女の身体に起こった異変は、激痛だけではない。セラは指一本動かせなかった。まるで首から下が無くなってしまったのように、ピクリとも動かない。ただ、身体の内側から刺されているような激痛だけが伝わってくる。

何が起きたのかわからない顔をしているセラに、囁くようにバルジが種明かしをする。

「俺様の嫌いなタイプの女を教えてやろう。俺様はな、お前みたいに真っ直ぐな目をし

た利他主義じみた馬鹿が死ぬほど嫌いで……汚したくなる」

ぞくりと、セラに悪寒が走る。

「少し前に、お前に”虫”を仕込んだいた」

「虫……？」

「ああ、精神を犯し、俺様の傀儡に仕立て上げる木偶坊虫……一度寄生されれば俺様の手で何時でも自在に人格を改造できる」

「——あの時か！」

そう。

最初の不意打ちの時点で、セラは敗北していた。

頬を斬られた時に、既に虫を入れられていたのだ。

次第に、セラの視界がぼやけてきた。意識も薄れ始めている。おそらく、全身に走る痛みも含めて虫が原因なのだろうということは分かるが、今のセラひとりではどうすることもできない。

ぼやけて暗くなつてゆくセラの視界に、気持ち悪い笑みを浮かべるバルジが映り込む。

「お前はどんな風に変えてやろうか？卑怯上等な悪女、妖艶な保険医、低能野生児……考えてるだけで勃ってきた……！」

「ふぎ、けるな……わたしには使命が……！」

「ごちやごちやうるせえんだよ、とつと堕ちろ雑魚が」

バルジは自身に寄りかかっているセラを突き飛ばし、彼女の腹を踏みつける。

これからセラは、レイラのように死ぬまで恥辱の限りを尽くされる。やりたくないことをやらされ、積み上げてきたアイデンティティを徹底的に破壊される人生を送るだろう。否、それはもう人生ではなく、玩具としての未来といったほうが適切なのかもしれぬ。ともかく、セラ・フルスローネという少女の人生はここで終わる。

彼女の胸の内には、後悔しかない。

本来の使命も果たせずに、騎士道精神に突き動かされるがままに首を突っ込んだ戦場で野垂れ死ぬ。そんな終わりを、認めていいはずがない。

（ああ——ごめんなさい。パープルハート様。私は貴女に巡り合うことができない——）

そこで、セラの意識が途切れた。

それは憧れだった。

少女が見たのは、或る星の輝きだった。

無邪気で、能天気で、それでいて誰よりも全てを愛していて。その輝きは光も闇も一緒くたに引き寄せてゆく。なんとも危なっかしくて——それでいて、愛されている。

少女は、危なっかしくも愛おしいその煌めきを目の当たりにして、こう思った。

——わたしもあんなふうにかがやきたい。あれのためににかしてみたい。

それが、誰も知らぬ少女の始まりだった。

選り取った道が、苦難の道だったのは言うまでもない。始めは誰も少女の歩みに目もくれなかつたし、自らの非力さを呪う夜を幾度となく過ごした。

しかし、いつしか彼女の歩みを目の当たりにして——ともにその道を歩む仲間ができた。少女の歩みを認める者が出てきた。ひとりの憧れからはじまったそれは、いつしかその煌めきにも認識されるようになり、頼られるようになっていった。

そして、幾度となくその煌めきと共に、闇に立ち向かい続けた彼女は、いつしか人々からこう呼ばれることになった。

——護神騎士、と。

「……………あん？」

ふと、バルジは異変に気付いた。

目の前に倒れているセラの様子がおかしい。

「虫は脳味噌の奥底まで入りきっている……命令も書き込んだ。コマンドなのになぜ動かない

……………」

洗脳は完了した。洗脳完了までの間、相手の自由を奪う木偶坊虫ウッドエン・ドールの神経毒ももう時期消える。だというのに、セラはびくりとも動かない。

ひよっとすると今ので死んだのではないだろうか、とも思ったが、自分の技術に絶対的な自信のあるバルジは、その可能性を即座に否定する。

「おいレイラ、この女騎士の安否を確かめるんだ」

「かしこまりましたご主人様っ」

バルジはその辺に倒れているレイラに、セラの安否を確かめさせようとする。

心身ともに壊れる寸前だということにも関わらず、レイラはボロボロの身体に鞭打ちながらバルジの命令に嬉々として従う。一言喋っただけで、彼女の口からは何度も血が吐き出される。もう彼女の身体は限界に近いのだ。

身体のあちこちにガラスを刺したまま、レイラはセラに近づいてゆく。モツプを構え、ナイフを忍ばせながら、一步一步着実に前進してゆく。そして。

レイラのモツプの先端がセラに触れる寸前のことだった。

音もなく。

モツプが切断された。

「え……………？」

呆気にとられるレイラ。

しかし、彼女には状況を理解するだけの時間はなかった。

次の瞬間。

「ぼふあつ!!」

レイラの身体は音もなく切り裂かれ、鮮血の噴水へと姿を変えた。

音はない。ただ、斬られたという事実だけしか認識できていない。

「何が起きてやがる!!」

想定外の事態に焦るバルジは、前方を見る。

「……………」

ゆらり、と。

先ほどまで指ひとつ動いていなかったセラが、立ち上がっていた。

最初は洗脳が失敗したのかと思つたバルジだったが、それにしても様子はおかしい。目の前の少女から放たれる雰囲気の変化が、ただ事でないことを嫌でも思い知らせてきている。

セラから向けられている感情は、先ほどまでの、バルジに向けられていた敵意とは比較にならない、否、それとはまた別種の——そもそも、同じ人間に対して向けられているものですらないのかもしれない。

まるで虎の尾を踏んだような、神の逆鱗に触れたような、途方もない禁忌を犯してしまつたかのような。バルジの今の現状を表現するならば、そう形容する他ないだろう。

普通の人間ならば恐れをなして悲鳴を上げたり逃げたりするのもかもしれない。だが、この男は違つた。

「なんだなんだあ？その力はよお！お前只者じゃあねえな！！？」

その言葉は、恐怖からくるものではなかつた。

それは好奇心。

彼はこの時、自分がなにか凄いものを引き当てたのだと直感で理解していた。故に、

それをさらに知ろうとして、セラに一步近づいてゆく。

が。

「失せよ」

「——っ!!」

一言、少女がそう発しただけで、バルジの身体は後方へと吹っ飛んでいった。

バルジはショーカーースに背中から突っ込んでかち割り、粉々になったガラス片と共に床に転がされてゆく。

だが、彼の顔は笑っていた。

「すげえなお前！ただの正義馬鹿だと思っていたが、ここまでやってくれるなんてさあ！最高だ！もっとその力を見せてくれ！もっと研究材料らしく俺様を楽しませてくれよ！」

予想だにしなかった玩具の出現に、彼は完全に歓喜していた。

もうそのあたりで転がっているぼろ雑巾なんかどうでもいい。今は目の前の新しい玩具でもっと楽しみたい。イスタを手に入れるというティーダからの命令は、この時点でバルジの脳内から跡形もなく吹き飛んでいた。

セラは、大笑いしているバルジに顔色一つ変えることなく、床中に散らばっているガラスや商品を踏みつぶしながら近づいてゆく。

眼孔全体を緑色に光らせ、全身から赤いオーラの様なものを発しながら近づいてゆくその姿には、先ほどもまでの騎士らしきなんてものはどこにもなかった。

「——いいだろう、そこまで死にたいのなら見せてやろう」

バルジの言葉に、そう答えるセラ。

その直後。

セラが全身から激しい光を放ちながら、バルジに向かって突っ込んで来た。

同時刻

プラネットプラザ正面入口前

零児VSサキュラス

零児がドローフェイズ時のドローを行おうとしていたその直前のことだった。突如として、零児の後方で激しい爆発が発生した。

「何だっ!？」

「あれは——!」

思わずサキュラスも零児も決闘^{デュエル}を中断し、謎の爆発に意識を向ける。

爆発の衝撃はかなりのモノで、そこそ建物から離れているはずの零児の足元にまで瓦礫が転がってきている。一体何が起きたのだろうか。

プラネットプラザの方を見ると、3階部分に大きな穴が開いている。恐らく、何かが壁を突き破って外まで吹っ飛んできたのだろう。

状況把握に努めていた零児だったが、そこに、瓦礫の中から嬉しそうな声が聞こえてきた。

「さいっ……こうだなあ……やるなあ……お前!」

「な、に?」

「ば、バルジ様!!」

瓦礫の中から、一人の男が立ち上がる。

紫のライダースーツの上に白衣を羽織った長身の男——バルジだ。

これまでほとんど傷らしい傷を負っていなかったはずの彼が、服を煤けさせ、頭から血を流している。ギフトメイカー配下の転生者であるサキュラスは、その事実を目の当たりにして驚愕していた。

「何が起きたんですか?! 何が——」

そう言いかけた時だった。

プラネットプラザの外壁に空いた穴から、激しい光を放つ何か飛び出してきた。

「なんだっ……………!!」

「まぶっ……………目がつ……………!!」

そして、雲に覆われ星ひとつない夜空を白く染め上げた。

その閃光は、零児の全身をくまなく包み込んでいた。

だが、不思議と悪い気分ではなかった。むしろその逆だ。その光は、まるで零児に力を与えているかのように感じられた。柄ではなのだが、根拠とかではなく直感でそう思った。

(不思議だ——だが、悪い気分じゃあない。私に何かを与えようとしているのか…………?)
そう思った瞬間、零児の手元がより激しく光り輝き始めた。

「なんだ……………?」

零児は自分のデュエルディスクを見る。

デュエルディスクに内蔵されたEXデッキが光を放っている。

何が起きているのだと確かめようとする零児だったが、その時、光がより激しさを増して零児の視界を白く塗りつぶした。

「これは——!?」

「——はっ!」

零児が次に目を開くと、先ほどまでの閃光は跡形もなく消えていた。空を見上げると、ぽつぽつと雨が降り始めていた。

(さっきの光景はなんだ……?)

零児はくらくらする頭を抱えながら、先ほどの光景を反芻する。

あの光の中で見た光景。あれがなんだったのかは見当もつかないが、柄にもなく、あれに安心感を覚えている自分がいる。不思議なことに、そのことに奇妙さは感じない。

そして、だ。

先ほどデュエルディスクから発せられたあの輝きに対して、零児の経験からくる勘が告げている。あれにはきつと意味があると。

零児は、先ほど激しい光を放っていたEXデッキを確認する。

そして、驚愕した。

(これは——)

「おい赤馬零児」

零児が自身のEXデッキを見て驚いていると、同じく正気を取り戻したサキユラスが声をかけてきた。零児は我に返ってサキユラスの方を見ると、サキユラスは先ほどと同じように、余裕たっぷりの笑みを浮かべていた。

「決闘再開と行こうぜ。まあ結果は見えているんだけどな！ はははははははっ！」

「——勝ち誇るのはまだ早いだろう。君も決闘者ならばそれくらいわかっているはずだが」

「言ってる！ 次のターンでお前を蹂躪して——」

「私のターン！」

零児：2000LP・HAND×0↓1

サキユラス：4000LP・HAND×1

零児はサキユラスの言葉を遮って、デッキからカードをドロ―した。

リンク召喚には驚かされたが、それで己の決闘を見失うほど軟ではない。

冷静さを崩すことなく、零児は決闘を続行する。

「スタンバイフェイズ時に、”地獄門の契約書”の効果で私は1000ポイントのダ

「ダメージを受ける……が、」地獄門の契約書の効果は「DDD呪血王サイフリート」の効果によって無効になっている。よって私はダメージを受けない。そして、スタンバイフェイズが終了したことで、」地獄門の契約書の効果は復活する」

「踏み倒しは得意のようだな」

「リスクをいかに軽減するか……金の世界ではそれを常に考えねばならない」

「だがちよつと待った！俺もスタンバイフェイズ時に、墓地の」星遺物—『星盾』」の効果を使わせてもらおう！」星遺物—『星盾』」はお互いのスタンバイフェイズ時に1000LPを支払うことで墓地から特殊召喚できる！」

サキュラス：4000LP↓3000LP

星遺物—『星盾』：☆8 DFE3000

「そしてこの時、お前も手札か墓地からモンスターを1体特殊召喚できるぜ？さあどうする？この誘いに乗るか？」

「ならば私は墓地の」DDバフオメット」を特殊召喚」

DDバフオメット：☆4 ATK1400↓1100

サキュラスの誘いに乗った零児の墓地から、翼を持った魔人が復活する。

「地獄門の契約書の効果発動。私はデッキから」DDD超視王ゼロ・マクスウェル」を手札に加える。そして永続魔法「魔神王の契約書」を発動！その効果により、墓地

のテムジンとシーザーを融合する！燃ゆる覇道を歩む王よ、押し寄せる波の勢いで、新たな世界を切り開け！融合召喚！出現せよ！極限の独裁神、” D D D 怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク”！

D D D 怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク：☆10 ATK 3500 ↓ 3000

地面からおどろおどろしい咆哮を轟かせながら現れたのは、零児の倍近い体軀はあろう、大柄な魔人だった。どことなく前のターンに除去された” D D D 怒濤王シーザー”に似てはいるものの、全体的に刺々しさと禍々しさが増しているように見える。カエサルとはシーザーの別の読み方。故にこの2体は似ているのだろう。

初手で大型モンスターを呼び出した零児。しかし、これで終わるわけがないというのは、前のターンで証明されている。

「更に墓地の” D D ネクロ・スライム”の効果発動。墓地からネクロ・スライムと” D D 制覇王ガイゼル”を除外し融合する。絶大なる支配者よ、神祕の渦と一つに溶け合い、覇道の頂きを渴望せよ！融合召喚！D D D 烈火大王エグゼクティブ・テムジン”！」

D D D 烈火大王エグゼクティブ・テムジン：☆8 ATK 2800 ↓ 2300

カエサル・ラグナロクに続いて、地面を突き破ってもう1体の悪魔が姿を現す。ぱつと見は” D D D 烈火王テムジン”に似てはいるが、腕が4本に増えた上に、1つの大盾と3本の剣を装備した3刀流となっている。名前からしてテムジンの進化形態なのだ

ろう。

「墓地の”DDラミア”の効果！発動済みの”魔神王の契約書”を墓地に送り、このカードを特殊召喚する！いでよ、チューナーモンスター、”DDラミア”！」

DDラミア：☆1 DFE1900↓1400

「そしてこの時、エグゼクティブ・テムジンの効果が発動する。私の場に”DD”モンスターが召喚・特殊召喚された時、墓地から”DD”モンスター1体を特殊召喚する。私はサイフリートを復活させる」

DDD呪血王サイフリート：☆8 ATK2800↓2300

エグゼクティブ・テムジンの効果により、再びサイフリートが現れる。

が、幾ら大型モンスターを呼び出そうとも、サキュラスの場にいる”星遺物の守護竜メロダーク”の効果で弱体化するうえ、サキュラスのモンスターはフィールド魔法の効果で強化されている。このままでは削りきることは難しい——サキュラスはそう思っていた。

——この時までには。

「君にひとつだけ言っておこう」

「はっ。」

「決闘に絶対はない。どれほど最善を尽くそうとも、どれだけ優位に立とうとも逆転の

可能性を常に考慮してこそ一流……いや、三流決闘者デュエリストでもそれくらいの心構えはある。ましてや——」

零児は、サキュラスを指さして、彼の驕りをつきつける。

「君のように、自分だけの武器百なんてものに胡坐をかいているような者を、強者とは呼ばない。そんな個性つよみだけでは決闘デュエルを制することなど不可能に近い」

「何を言い出すかと思えば……要するに俺だけリンク召喚できることが羨ましいんだろ？ 案外お前も大したことないんだな」

「逆だ………リンク召喚が君達転生者だけの特権と思つたら大間違いだ」

「………なんだって？」

その言葉に、サキュラスは引つ掛かりを覚えた。

そしてこの時、零児は賭けていた。出所の分からない勝利の女神の手を引くことに。

零児は、どちらかというと合理や理論を重んじるタイプの人間だ。それは決闘デュエルにおいても変わらない。偶然という不確定要素に頼り切ることなく、鉄の理性を主軸に置いたうえで、綿密な戦略の元にデッキを回して相手を下す。それが赤馬零児の決闘デュエルだった。

だが、今だけは。

彼は、降つてわいた幸運に賭けることにした。

「現れる、大いなる力のサーキット！」

「?!」

零児がそう宣言したのを聞いて、サキュラスは驚愕した。なぜならばそれは、零児が決してできるはずのないリンク召喚の宣言だからだ。

この世界にはリンク召喚は存在しない。リンク召喚を行えるのは、転生者である自分達のみのはずだ。

だが実際に、目の前では零児の頭上にゲートが出現している。そして、零児の場にいる2体のモンスターが、赤い閃光となってゲートに吸い込まれるようにして浮かび上がっていく。

「召喚条件は“DD”モンスター2体。私は“DDリリース”と“DDバフオメット”をリンクマーカーにセット。リンク召喚！現れる、リンク2、“DDD深淵王ビルガメス”！」

DDD深淵王ビルガメス：LINK2（右下／左下） ATK1800↓1300

全身から禍々しいオーラを放ちながら現れたのは、剣や槍、斧など、幾つもの武器を携えた青い肌の悪魔だった。半神半人の英雄王の名を持つ異次元の王。本来ならば赤馬零児が扱えるはずのないリンクモンスター。それが今、サキュラスの眼前に姿を現していた。

「馬鹿なっ……なぜお前がリンク召喚を……」

「今回ばかりは救われたよ……カードの創造というやつにな」

「創造だと……？あり得ない！櫛遊矢はともかく、お前は普通の人間！そんな真似がで
きるはずがない！」

「ああ、創つたのは私ではない。誰かは知らないが——神は私に味方した」

それは偶然なのか、必然なのかはわからない。だが、サキュラスはそれを偶然ではな
いと感じていた。

これは不条理だ。まるで世界が、ギフトメイカーに与する転生者の思い通りになんぞ
させるものかとも言うかのように、まるでサキュラスを負かそうとするかのように、
運命が横やりを入れてきたのだ。

動揺するサキュラスの目の前で、零児の独壇場が繰り広げられる。

零児自身も未だに信じられないのだが、与えられたこの力を無駄にするわけにはいか
ない。そう自分を律しながら、決着への一手を進めてゆく。

”DDD深淵王ビルガメス”の効果発動！デツキからカード名の異なる”DD”ペン
デュラムモンスター2体を選び、ペンデュラムゾーンに発動する。その後、私は100
0ポイントのダメージを受ける」

零児：2000LP↓1000LP

「私はスケール10の”DD魔導賢者ニユートン”とスケール4の”DDD死偉王へ

ル・アーマゲドン”をペンデュラムスケールにセッティング！これでレベル5から9のモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！EXデッキから”DDD死偉王ヘル・アーマゲドン”！手札から”DDD超視王ゼロ・マクスウエル”！”

DDD超視王ゼロ・マクスウエル：ATK2800↓2300

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン：ATK3000↓2500

「私はヘル・アーマゲドンのペンデュラム効果発動。それによりモンスターゾーンのヘル・アーマゲドンの攻撃力を800アップする」

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン：ATK2500↓3300

「バトルだ。私は”DDD超視王ゼロ・マクスウエル”で”星遺物―『星盾』”を攻撃！

そしてこの時、ゼロ・マクスウエルのモンスター効果発動！」

「何?！」

「ゼロ・マクスウエルが守備表示モンスターとバトルする時、その守備力を0にする！」

星遺物―『星盾』：DFE3000↓0

「そしてゼロ・マクスウエルは守備貫通効果を持つ！貫け、ゼロ・マクスウエル！」

「ぐああああああつ?!」

サキュラス：3000LP↓700LP

実質的な直接攻撃を喰らい、サキュラスは大きく吹っ飛ばされる。その衝撃で、自動

ドアのガラスを突き破り、破片の海に背中からダイブするサキユラス。

「だが、俺は」バーニングナックラー B K ベイル”の効果を発動する！戦闘ダメージを受けた時、コイツ

を手札から特殊召喚し、その数値分のライフを回復する！」

B K ベイル：☆4 D F E I 8 0 0

サキユラス：7 0 0 L P ↓ 3 0 0 0 L P

すると、サキユラスのライフが回復すると共に、身を守るようにパットを両手に持ったボクサーのようなモンスターが出現する。

だが零児は躊躇しなかった。する必要もなかった。

「ならば” D D D 呪血王サイフリート”で” B K ベイル”を攻撃する」

サイフリートの大剣により” B K ベイル”は一刀両断される。

「続いて” D D D 怒濤壊薙王カエサル・ラグナロク”で”星杯戦士ニンギルス”を攻撃。そしてこの時、カエサル・ラグナロクの効果発動。このカードがバトルする時、私の場の” D D ” または” 契約書 ” カード1枚を手札に戻すことで、カエサル・ラグナロクとバトルするモンスター以外の相手モンスター1体を、カエサル・ラグナロクの装備カードにする！私は” 星遺物の守護竜メロダーク”を装備！」

「なにっ……！」

カエサル・ラグナロクの背後から無数の腕がメロダークに向かって伸ばされ、メロ

ダークを捕縛する。メロダークは必死にもがくが、逃れることはできない。

そして、メロダークが居なくなつたことで、メロダークの効果で下がっていた零児のモンスター達の攻守も元に戻る。

「バトルは継続中だ！ 行け、カエサル・ラグナロク！ ジ・エンド・オブ・ジャツジメント
 ！」

「^{トランプ}罠カード、”星遺物が齎す崩界”！ 俺の手札・場・墓地から”星遺物”モンスター1体を除外することで、自分フィールドのリンクモンスター1体の攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分アップさせる！ 俺は墓地の”星遺物―『星櫃』”を除外し、ニンギルスの攻撃力を星櫃の攻撃力分アップさせる！」

星杯戦士ニンギルス：ATK2800↓5300

”星遺物―『星櫃』”の攻撃力は2500。よつてニンギルスにその数値が加算され、攻撃力は5800にまで上昇する。これでカエサル・ラグナロクを返り討ちにしたうえで、零児のライフも削りきれる。

しかし、

”DDD烈火大王エグゼクティブ・テムジン”の効果発動。自分ターンに1度、魔法・罠カードの発動を無効にする」

「なぬっ……！！」

エグゼクティブ・テムジンの効果によって罌カードの発動が封じられ、攻撃力増加もなかったことにされてしまう。カードの発動を無効にされようが、支払ったコストは帰ってこない。”星遺物が齎す崩界”の発動時に除外した”星遺物―『星櫃』”は除外されたまま。払い損である。

これでニンギルスの攻撃力は元のまま。このままでは戦闘破壊とダメージは逃れられない。

だがサキユラスの墓地には、前のターンに”星遺物の醒存”で墓地に送った”タスケルトン”がある。こいつで攻撃を防ぐことは可能だ。

「くそっ……こうなれば墓地の”タスケルトン”の効果発動！こいつを墓地から除外することで、モンスター一体の攻撃を無効にする！」

サキユラスがそう叫ぶと、ニンギルスの前に骸骨のヴィジョンが浮かび上がる。カエサル・ラグナロクは構わずに手から光線を放つが、放った光線はニンギルスに当たることなく、骸骨のヴィジョンに吸い込まれるようにして消えてしまう。

だが、こんなものはその場のぎでしかない。零児のフィールドにはまだまだモンスターが残っている。それも、どいつもコイツも馬鹿みたいに高ステータスの奴ばかりが。

「ほう。ならばヘル・アーマゲドンでニンギルスを攻撃だ！地獄触手鞭！」

ヘルテンタクルウィップ

「ぐっ……い！」

サキュラス：3000LP↓2000LP

零児の命令に従い、ヘル・アーマゲドンが光線を放つ。再び狙われたニンギルスだが、今度は守る術がない。光線に貫かれたニンギルスは断末魔を上げながら爆散し、サキュラスに戦闘ダメージが伝わる。ヘル・アーマゲドンの攻撃力もニンギルスの攻撃力も効果で変化している為、ダメージは通常よりも大きなものとなる。

膝をつくサキュラス。彼の頭の中は、疑問で埋まっていた。

何故だ？何故零児がリンク召喚をできたのだ？何故自分が追い詰められている？

これまでサキュラスは、自分だけが使えるリンク召喚で好き勝手やってきた。未知の召喚法に狼狽え、困惑したまま負かされてゆく相手を見ると興奮した。

しかし、相手も同じ武器が使えることを知った途端に、その余裕はなくなつた。

これはサキュラスに限つた話ではない。一部例外はいるが、転生者というのは、大多数が転生先のルールをガン無視した転生特典ちからを持つている。それは原作キャラ達には決して理解も利用もできない彼らだけの特権。そんな力を生まれながらに持つているが故に、同じ土俵に立つ相手という者が存在しないし、その存在を想定できない。

だから、対等な戦い立つ場において存在する一瞬の緊張感に、彼らの精神は耐えられない。要は、優位性が失われた途端に、一気に精神的に弱くなるのだ。

そんな状態で、サキュラスに勝機はなく、ましてやこの次元でも指折りの実力者である零児に勝てる道理がある訳がなかった。

ガタガタと震えるサキュラスだが、まだ決闘デュエルは続行中。零児のエグゼクティブ・テムジンがアウラムに襲いかかる。

「エグゼクティブ・テムジンでアウラムを攻撃！」

「うがあああああああああああああつ!!」

サキュラス：2000LP↓1500LP

”DDD深淵王ビルガメス”で直接攻撃ダイレクトアタック!

もうサキュラスを守るモンスターは居ない。攻撃力1800のビルガメスの直接攻撃を受ければ、サキュラスは負ける。

だが、まだ最後の砦は残っている。

一枚だけ残っている伏せカード。それを使うしか、サキュラスが生き残る術はない。

「……………かかったな!」トラップ 罠カード、”波紋のバリアーウエーブフォース!”ダイレクトアタック 相手が直接攻撃をしてきた時、相手フィールドの攻撃表示モンスターをすべてデッキに戻す! あひやひやひやひや! 終わりだあああああああ!

狂ったように笑うサキュラス。その態度に、当初の余裕は完全に存在していなかった。

セラに吹つ飛ばされたバルジは、プラネットプラザを突き抜けて外に放り出されてい
た。

だが、その顔は笑っている。

「はは」

彼は歓喜に震えていた。

それは未知なるものを目の当たりにできた喜び。新たな玩具を見つけた嬉しさか。
どちらにせよ、それはまともな感情ではないことだけは確かだ。

そんな感じに大笑いをしていたバルジの元に、ひとりの少女が降り立つ。

その全身から放たれていた激しい光は既に止んでいる。緑色の髪を逆立たせ、眼孔を
緑色に光らせ、激しい光の代わりに全身から赤黒いオーラを吐き出しながら立つその少
女騎士は、冷酷にバルジに向かって剣先を突きつけている。

笑っているバルジに対して、セラが訊く。

「何を笑っている」

「笑うしかねえだろ！だってこんなもん見せられてよお！興奮しないわけあるか！」

悪魔のように邪悪な笑みを浮かべながら、バルジはそう言った。

彼は最高に興奮していた。ギフトメイカーになってから、否、転生してからの人生の
中でも、こんなに興奮したのはそうそうない。それほどまでに興奮していた。実際、現

在彼のある部分[・]は勃[・]つていた。

それに対して、セラは何も言わない。

普段の彼女ならば、ここでバルジに対してなんらかの否定的なアクションがあるはずなのだが、今は違う。驚くべきほど静かに、冷酷にバルジを見ていた。

しばらくの間、沈黙が走っていた。

やがて、沈黙に耐えきれなくなったバルジが、口を開いた。

「なんとか言えよ！ さつきから黙り込んでさあ！ 折角俺様の玩具認定をもらったんだ！ 喜んでほしいもんだぜ！」

「残念だが—— 貴様にそんな時間は与えられない」

バルジの身勝手な意見をバツサリと切り捨てながら、セラはバルジの背後を指さす。

——バルジはなんとなく、指さす先に何かあるのかを察していた。

あれほどの閃光が夜の街に轟いたのだ。嫌でも目立つはずだ。そして、この状況でバルジと戦うような人間は、ひとりしかない。大変不快だが、バルジはそれをわかつている。

だから、自分の背後にいるその人物が次に言う台詞も、彼の予想通りのモノだった。

「見つけたぞ、バルジ！」

「——負け犬の癖にしつこいな、お前」

傷だらけの転生者狩り。

無東灰司が、戦場に到達した。

「あれだけ馬鹿みたいに光つてりやあ嫌でもここに行き着く……ま、テメエが此処にいるとは幸運ここに極まれりって感じだな」

「散々ボコられといてよくもまあそんな減らず口が叩けるよなあ。やつば馬鹿だなお前」

「言つてろ」

バルジと口論しながら、灰司はその腰にカイザドライバーを装着し、カイザフォンにコードを入力していく。

一方、セラはというと、灰司がやって来たのを確認するなり、用済みだといわんばかりにバルジに背を向け、プラネットプラザの内部に戻ろうとする。

「おい、どこ行く?」

「私は……探しに行かなくてはならない。近くにいて、私の求めるべきものがここにいる——!」

「おい逃げんなつ! お前は俺様の玩具なんだぞつ!」

そんなうわ言を吐きながら走り出したセラを引き留めようとするバルジ。

折角面白そうな玩具を見つけたというのに、それを手放すわけにはいかない。そう思

いながら、彼は瓦礫の中から立ち上がって彼女を追おうとする。

しかし、すかさず灰司がバルジに向かって、手に持っていたカイザブレイガンを発射する。黄色いフォトンブラッドでできた光弾がバルジの足元をかすめ、その足を無理やり止めさせる。

「言つたはずだ、お前の相手は俺だとな」

何度も何度も、カイザブレイガンを撃つ灰司。

バルジが足を止められている隙に、セラは悠々とプラネットプラザ内へと戻っていつてしまった。

「……………クソツたれが。そこまで死にたいならお望み通り殺してやるよー」

玩具の奪還を妨害されたバルジは怒り振動だった。

だが、灰司もまた、怒っていた。目の前に自分から全てを奪った怨敵がいるのだから当然だ。

灰司は怒りのままに、カイザフォンをカイザドライバーに装填する。同時に、バルジもオリジオンとしての姿に変身する。

「変身っ!」

《complete》

「変っ身!」

《KAKUSEI IGARIMA》

お互いにカイザとイガリマオリジオンに変身し、向き合う。

「行くぞバルジ。今日こそお前を葬ってやる」

「俺の遊びの邪魔すんなよクソガキ、マジだるいわ」

そして。

両者は衝突する。

第34話 AM2：44／インクリングとティロ・フィナーレ

プラネットプラザ2階・中央通路

シヨップिंगモールにある、とある高級洋服店。

さまざまなブランド品が並ぶその店は、甚大なる被害を受けていた。

「っー」

ガシャンツ！と音を立てて、シヨウウィンドウが破壊される。

中に立っていたマネキン達はバラバラになり、それらが身に付けていた衣服もビリビりに破れて商品価値を喪失する。

そして、砕け散ってゆくガラス片の雨の中を、人間の形をしたなにかが飛んでゆく。

「がっ……」

飛んでいる、いや正確には吹き飛ばされているのは、ティロ・フィナーレオリジオン。口から血を吹き出しながら、彼女はガラス片とマネキンの残骸の散らばる通路へと投げ出される。

それに続く様に、バラバラになって飛び散る破片の中から、彫刻刀を逆手に持った小さな少女が飛び出してくる。

その目は、幼い子供のものとは思えないレベルでギラギラしていた。ティロ・フィナーレオリジオンはその目を知っている。

あれは獲物を狩る目だと。

だが、彼女は仕事でここにいるのだ。

洗脳によって勝機を失いながらも、持ち前の責任感を糧に立ち上がり、内心で強がりながら、目の前の律刃てきに対して口を開く。

「霧崎律刃、貴女を手配する理由はなくなっただけど……そうまでして死にたいのね？」

「それってそつちの勝手な都合だよな？ わたしたちはともかく、おかあさんが迷惑してたんだよな」

そう。

律刃がAMOREに狙われる理由となったのは、彼女が赤浦からイスタの人格データ入りのチップを、そうとは知らずに奪ったからだ。だが、イスタはもう既に復活しているので、AMORE側には律刃を重要参考人として手配する理由がない。

が。

そんな理由で彼女は止まらない。

「でも、おかあさん的にはあなたたちが許せないみたいだし、それならわたしたちも同意するしかないよね。」

「分ならず屋共め、そこまで死に急ぐというのなら私が望み通りにしてやるわっ！」

自分に何か徳があるわけではないが、それはAMOREのやっていることを許せるかどうかとは別だ。律刃はあくまでも徹底抗戦の構えを示している。

その意思を聞き取ったティロ・フィナーレオリジオンは、それならば打ち倒すまでと判断し、腕に巻き付けていた黄色いリボンを触手のように素早く伸ばしだした。

「こっちは本気で世界平和の為に戦つてんのよ！なんとなく許せないとか、ほっとけなとか、そんな曖昧な理由で戦うんじゃない！そういう思い上がった考えの奴が一番邪魔なのよ！」

「思い上がったっているという点ではそっちも同じだよね？こっこのを五十歩百歩ついでうんだよ？」

罵声と共に繰り出されるティロ・フィナーレオリジオンのリボン攻撃を、律刃は彫刻刀を自在に振り回して弾いてゆく。ぱつと見は普通のリボンのはずなのに、まるで鉄を斬っているかのように彫刻刀の刃が全く通りやしない。というかどうみても金属音みたいな衝突音がしているあたり、おそらくこのリボンはただのリボンではないのだろ

う。

4 回目のリボン攻撃を凌いだ律刃。そこに、渴いた音が耳に入ってきた。

律刃は反射的に、自らの側頭部を守るかのように彫刻刀の刃を動かす。すると、何か
が彫刻刀の刃に弾かれるような音がした。

「正義の味方の癖にせこいね」

「……ちいっ！」

律刃は彫刻刀を下ろしながら、ティロ・フィナーレオリジオンのほうを睨む。

ティロ・フィナーレオリジオンは、マスケット銃の銃口を向けながら律刃に向かって
舌打ちをする。その銃口からは、真新しい硝煙が上がっていた。今の音は、ティロ・フィ
ナーレオリジオンの狙撃の音だったのだ。

続けて4発、同じ音が鳴る。

それが何の音なのかは、律刃は見ずとも分かった。ただ、反射的に身体を捻り、壁を
蹴る。その動きで、自身を貫かんと発射された弾丸を回避していく。それはあまりにも
軽やかすぎる身のこなしだった。

が、

「——んっ？」

銃弾を躲し終え、再びオリジオンの懐へと潜り込もうとした律刃だったが、意図せず

その足が止まり、前のめりに倒れそうになる。

足元に視線を下ろすと、左足に黄色いリボンが巻き付いている。ティロ・フィナーレ オリジオンのリボンだ。銃弾を囷にすることで、律刃に気づかれることなくそれを巻き付けていたのだ。

リボンを切断しようにも、先ほどの接近戦でこのリボンの強度は嫌というほど思い知っている。手持ちの武器ではコイツに傷一つ与えることもできない。

律刃はリボンの切断を諦め、視線を再度前に向ける。

そこには、ティロ・フィナーレ オリジオンが何丁ものマスケット銃の銃口をこちらに向けた状態で立っていた。両手だけではなく自身のリボンも使い、十数ものの銃を構えながら、勝ち誇ったように彼女は叫ぶ。

「フルバースト誠掃射っ！全身蓮コラにでもなつてなさいっ！」

（あ、まずい）

律刃がそう思ったのと同時だった。

数にして18。それだけの数のマスケット銃が、一人の少女目がけて一斉に火を噴いた。

通常を遥かに超える速度と威力、そして連射力を以て放たれた無数の弾丸が、律刃を蜂の巣にすべく襲い掛かる。おまけに彼女は、切断不能なリボンで身動きを封じられて

いる為、それから逃れることはできない。

結果として。

おびただしい硝煙越しに、弾丸が人体を貫通する生々しい音がした。

プラネットプラザ2階 フードコート

迫真空手部の3人とインクリングオリジオンとの戦いは、端的に言つて空手部の劣勢となつていた。

「ぐらあつー！」

「ヒギイツ!!」

インクリングオリジオンはフードコートの随所に飛沫しているインクに潜航しながら、的確に死角からの攻撃を命中させていく。

いくらホモといえども、機動力の差がありすぎる。

「ホラホラホラホラホラホラホラホラホラアツ!!」

野獣は苦し紛れのホラホラツシュを繰り返すものの、インクリングオリジオンはイン

クに潜ってそれ回避し、野獣の足元から手を出してはインク弾を命中させる。

インク弾は野獣の汚い肌に着弾するなり爆発を起こし、野獣の身体を押し除けてゆく。

「駄目だっ……インクのせいで全然攻撃が当たらない……!」

「せめてインクを洗い流せればいいんだけど……あっ!」

その時、木村が何かを思いつく。

彼はインクで滑る床をなんとか走り抜けて野獣のところまで辿り着くと、野獣のズボンのポケットに手をつまむ。

なにを勘違いしたのか、野獣が無駄に甲高い声で喘ぎ始めたが、そんなのはどうでもいい。不快な騒音を意識の外に追いやりながら、木村は野獣のズボンのポケットの中から銀色の箱状の物体を取り出す。

それがなんなのかは言うまでもない。ライターだ。

「先輩、ライターお借りしますっ!」

「あ、これ盗るなっ!」

野獣が文句たれるが、そんなものに耳を傾けている余裕は木村にはない。ライターの蓋を外し、天下スイッチに指をかけながら、天井にあるスクリーンプレー目掛けて跳ぼうとする。

そう、木村はスプリンクラーの水で周囲のインクを処理しようというのだ。完全に流すことはできない可能性が高いが、それでも、ベとベとのインク塗れの今よりは状況がマシな方になるかもしれない。そんな一縷の望みを胸に抱きながら、木村はライターを点火する。

「スプリンクラーを作動させる気だな!! そうはさせるかっ!」

が、木村の目論見に気付いたインクリングオリジオンが、それを阻止すべく木村にむかつてインク弾を発射する。

発射されたインク弾は木村の手からライターを弾き飛ばす。スプリンクラーの作動するすんでのところで、ライターは木村の手から離れ、床へと落ちてゆく。悔しそうな顔をする木村に、インクリングオリジオンの嘲る声がぶつけられる。

「そんな猿知恵で勝てると思ったのか? 所詮お前らはただのホモ野郎、我に勝てるはずがないっ!」

インクリングオリジオンの言葉に続くように数発、インク弾が木村に着弾する。背中にインク弾を受けた木村は、苦悶の声をあげながらテーブル席の上に墜落する。

それと同時に、薄黄色の液体で濡れた床に、火のついたライターが落ちてゆく。

(え?)

インクリングオリジオンが違和感に気付いたのもつかの間。

ボワツ!!!!!!と。

フードコート¹の床が勢いよく燃え上がった。

「なんだとっ!!」

一瞬にして足元が火の海と化したことに、インクリングオリジオンは驚きを隠せないでいた。

「近くの店の厨房から拝借してきた油だ!こいつで火事を起こせばライター²の火よりもでっかい炎がでるっ!スプリンクラーも作動するっ!」

「無駄だっ!」

インクリングオリジオンは、すかさず天井のスプリンクラーに向かってインク弾を放ち、それを破壊する。これで木村の目論見は潰えたとほくそ笑むオリジオン。

しかし、

「な、なんだこれ……インクが固まって……」

「こんだけ熱されればインクも固まりますよね?そうすれば、貴方はインクに潜航なんて出来なくなる!」

そう。

火事になるほど大きな炎を発生させれば、それだけの熱が発生する。そして、インクリングオリジオンがばら撒いたインクも熱で凝固する。

そして、床一面に広がった炎はインクリングオリジオンの身体にも燃え移る。油まみれの床を踏んでいた彼の足にだって油はついてるのだ。

周囲のインクを固められて潜行も封じられたインクリングオリジオンは、全身を焦がす痛みには耐えながらも、尚も立ちをはだかるホモ達を始末せんと挑みくる。

「ぐっ……はっ……！」

「迫真空手八の型・キムランス（素手）っ！」

「ぬがああああああっ！」

一瞬。刹那の差で先制を取ったのは木村だった。

槍の如き鋭さを持った木村の突きが、インクリングオリジオンの腹に深々と突き刺さる。体内から根こそぎ空気を搾り出す様な痛みが、オリジオンの全身に迸ってゆく。

そして、木村の止めの一蹴りで、オリジオンは一気に吹き飛んだ。

燃え上がる炎を背中で突き破り、フードコートのテーブルや椅子をボウリングの様に薙ぎ倒しながら、オリジオンはフードコートの壁に激突する。

壁に叩きつけられたインクリングオリジオンは、ずるずると崩れ落ち、炎の中へと沈んでゆく。

「よくやったゾ〜木村。何言ってるのかわからないけどいいゾ〜コレ」

その様子を見ていた三浦が、木村に駆け寄りながら彼を褒め称える。

いつのまにかフードコートはそこら中が燃え上がっていた。そして、インクリングオリジオンが壊したのとは別のスプリングラーが消火のために作動しており、三浦の頭を濡らしてテカらせていた。

「やりますねえー！じゃ、後は俺がトドメ刺しますね〜」

三浦が木村の奮闘を讃えていると、先程まで空気だったくせにやけにご満悦顔の野獣がやってきた。後輩と先輩にやらせといて、最後だけは自分が頂く算段らしい。

「……………で？」

「なっ…………」

「お前らさ、嘗めすぎ。基礎スペックから違うっていうのに、ただの人間がオリジオンに勝てるわけねえだろ」

ガシリと、炎に包まれたインクリングオリジオンの手が、野獣の手首を掴む。

そして、屈辱と怒りの籠ったインクリングオリジオンの渾身の一発が、野獣のきたないイボの目立つ顔面に突き刺さった。

「や、野獣！」

「ばっ……ぐはっ……!!」

三浦の叫び声が耳に届くよりも早く、野獣の身体が吹っ飛ぶ。

インクリングオリジオンに殴り飛ばされた野獣は、フードコートの机や椅子を薙ぎ倒しながら吹っ飛んでゆき、窓ガラスを突き破ってフードコートのテラス席まで放り出される。

大きな水飛沫を立てながら、野獣はテラスに倒れる。冷たい水が、野獣のシャツの内側に滑り込んでくる。

いつの間にか、外は土砂降りの雨になっていた。

「や、ばい……痛すぎィー！逝く逝く逝く……」

痛みで意識が飛びそうになる野獣だが、インクリングオリジオンへの反抗心だけを頼りに、なんとか飛びそうな意識を手元に手繰り寄せる。

土砂降りの雨に打たれながら野獣が飛び起きると、インクリングオリジオンが屋内から野獣を凝視していた。その目には、格下と思っていた相手に反撃されたことに対する屈辱の感情がにじみ出ているのがよくわかる。

それを見て、向こうからの反撃が来ると思い、野獣は即座に身構える。

が、

「……あれ？」

インクリングオリジオンは野獣を追撃せずに、屋内にいる木村達の方へと突っ込んでいった。

てつきり野獣を狙いに行くはずと思っていた木村達は、自分達の方に突っ込んでくるインクリングオリジオンに対してわずかに反応が遅れる。

インクリングオリジオンは身体に炎を残したまま、木村に殴りかかろうとするが、そこに三浦が割って入り、木村を庇う。

「ぐっ……！」

「三浦先輩っ！」

鼻血をまき散らしながら壁に激突する三浦だが、自身のダメージも顧みず、真上から降り注ぐ消火用スプリンクラーの水を浴びながら、自身を心配して駆け寄ろうとする木村の背中を押す。

「俺に構わず攻撃するんだゾー！」

「あ……はいつ！ナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメナメツ！」

三浦の後押しを受け、木村はインクリングオリジオンに対してラッシュ攻撃を繰り出した。オリジオンの身体の炎が自身に燃え移るのも厭わずに、木村は攻撃を続ける。

野獣や三浦と比べれば威力は多少落ちるものの、その分スピードは優れている。これ

までの戦闘で傷を負っているインクリングオリジオンは、それを躲しきることができず、もろに数十発喰らい、まるでバットで打たれたボールのように飛んでゆく。

が、オリジオンは即座に近くの柱を掴み、無理やりその場に踏みとどまる。

そして、そのまま柱を掴む手に力を込め、思いつきりそれを突き放す。プールの内壁を蹴って泳ぎ出す水泳選手のように、勢いをつけ、木村目掛けてつつこんでくる。

そこで野獣が叫ぶ。

「三浦っ！伍の型だっ！」

「！よくわかんないけどやってやるゾ！迫真空手伍の型・保茶魔ポッチャマっ！」

「なっ……………」

野獣に言われるがまま三浦が両手をかざすと、三浦の手のひらから無数のシャボン玉が勢いよく発射される。

それはインクリングオリジオンに触れるなり激しく爆発し、木村の眼前に迫っていた彼の身体を吹き飛ばす……………が、何か様子がおかしい。

「あ……………くっ……………からっ……………！ぐあああああああああああああつ！！」

インクリングオリジオンは、三浦の攻撃を受けた部分を押さえながら激しくのたうち回り始めた。

三浦の使った技はあくまで牽制程度の威力しかないはずなのだが、それにしてはこの

痛みがりはいささか大袈裟すぎるような気がする……と木村は違和感を抱く。三浦はというと、そんなことは全く考えられておらず、自分が相手に大打撃を与えたことを純粋に喜んでいる。

「おいお前！ 今のはどういう仕組みだっ!! お前ら人間じゃねえのかよっ！」

「人間じゃないゾ、ホモだゾ」

「手からバブル光線放つホモがいてたまるかっ！」

「秋吉先生は鉄板噛み千切れるし、ゆうさくはスズメバチに何回刺されても蘇るし、姉ちゃんは目からビームや靈魂発射するんだけどなあ」

インクリングオリジオンのもっともな突っ込みに対し、身近な人達を例に出して反論する三浦だが、明らかに比較対象がおかしいことに三浦は気付いていない。

床に転がりのたうち回るインクリングオリジオン。

そこに追い打ちをかける様に、背後から首をホールドされる。

首を絞められて苦しみながら、なんとか首を回して後ろを見ようとするインクリングオリジオン。

そこには、雨でずぶ濡れとなった野獣がいた。彼の腕が、オリジオンの首を絞めていた。

オリジオンが何か言おうとする前に、野獣が口を開く。

「もしかしてだが……おまえ水に弱いんじゃないのか？」

「……っ！」

「その顔……ビンゴだな？俺や三浦さんにトドメを刺さなかったのも、雨やスプリンクラーに濡れずに攻撃する手段がなかったからだ。この土砂降りじゃあインクを飛ばしてもその前に溶けちまいそうだしな」

そう。

野獣達は知らないが、インクリングという生き物は泳げない。それも、水に入れば浸透圧差で一瞬で身体が解けてしまうほどに。それを知っていたが故に、彼は雨やスプリンクラーの下にいる野獣や三浦に手を出せなかった。三浦のバブル光線で大ダメージを受けた。

そして、そんな致命的な弱点を知ってしまったら、相手がどんな手に出るのかは明白だった。

「くそっ……こんなやつ……！こんなホモ共につ……！」

「おいおい同性愛差別かよ、どうやらお前は心までバケモンらしいなっ！」

悪態をつくインクリングオリジオンだが、その首をホールドする野獣の腕にさらなる力が増えられ、ずるずると引きずられてゆく。

引きずらる先は明白。土砂降りの雨が降り注ぐテラスだ。

三浦のバブル光線であればほど苦しんだのだから、土砂降りの雨にさらされればどうなるのかは明白だ。

だからこそ、オリジオンは全力で抵抗する。

「ぐらあああああああああああああああつー！」

火事場の馬鹿力というやつなのか、インクリングオリジオンは雄叫びを上げながら、自身の首にまわっている野獣の腕を掴むと、彼を強引に引き剥がし、投げ飛ばした。

汚い悲鳴をあげ、雨晒しのテラスに放り出される野獣。

だが、遅かった。

既に、木村と三浦が近くまできていた。インクリングオリジオンは、野獣達に完全に囲まれていた。

周囲は火と雨、焼けこげた身体ではインクを吐くこともままならず、仮に吐けたとしても周囲の炎によってすぐに乾いてしまう。

早い話、彼は詰んでいた。

「いくぞ2人とも！秋吉先生のシゴキの成果見せようぜっ！」

「サボり魔の癖に調子いいこと言わないでくださいよ……まあ今回ばかりは乗りますけどね！」

「おし、じゃあぶち込んでやるぜ！」

狼狽えるインクリングオリジオンと、一斉に気合をいれる迫真空手部。
そして、

「「迫真空手十の型・武知破ブッチャッつ！」」

ドゴンツ！！？！！？と。

3人の同時攻撃をモロに喰らったインクリングオリジオンは、悲鳴を上げる間もなく雨の中へと突っ込んでいった。

吹っ飛んだオリジオンはテラスを飛び越し、雨の降りしきる池袋の夜空へと飛んでゆく。その身体は、雨に濡れた箇所から、まるで常温下に置かれたドライアイスのように煙を立てながら薄れていく。

そして、その落下地点はというと、水着の男女で賑わう、ガラス張りの天井のナイトプール。

「く、そがあああああつ……クソツタレがああああああああああああああああああああつ！」

落下地点をそらそうにも、満身創痍なその身体は動くことを許さない。ただ、断末魔を上げながら恨むことしか、今の彼にはできなかつた。

そして。

ガシャンツッ！と激しい音を立ててガラスを突き破り、水が貯められたプール内へと墜落した。

プラネットプラザ1階東

多数の銃痕の残る通路にて。

先程まで戦っていた律刃が硝煙の中に消えたのを見て、ティロ・フィナーレオリジオンは勝利の笑みを浮かべていた。

足元には、律刃が使っていた彫刻刀が散らばっている。それらは全て刃が折れており、もはや使い物にならない。

「あなたが悪いのよ。あなたが余計な真似をするから拗れた！あなたが大人しくしていればこんな戦いをせずに済んだのよ！」

「——それは無理な話だ」

が、それを一瞬で裏切る声。

それは先程まで戦っていた律刃の声だ。聞き間違えるはずがない。

しかし、今ティロ・フィナーレオリジオンの耳に届いている声は、まるで別人の様に

しか聞こえなかった。

声真似だとかそういうものではない。雰囲気がガラリと変わっているのだ。先程まで感じていた、底知れぬ恐怖の中から湧き上がる無邪気さがぴたりと止み、代わりに静かなる義憤が声に纏わりついている。まるで、誰か別の人間が律刃の口を使つてしゃべっている様だ。

薄れゆく硝煙の中、律刃はそこに無傷で立つていた。

困惑するオリジオンに、彼女は語りかける。

「ヒトの善性を縛ることなんてできない。というか、あれを放置していたら教育に悪い。親心としては、どうしても止めに入らざるを得ないと思つてる」

「……………何を言つている?」

ティロ・フィナーレオリジオン——池映寧理は、動けなかった。

律刃の雰囲気の変貌を受け入れられない。幼いながらも聡明だった彼女とはうって変わり、どこか異様に大人びた雰囲気をだしている。まるで、子供の皮を被った大人の様な——

「お前……………まさかその特典は……………!!」

そこまで考えて、彼女はある可能性に思い至つた。

それを感じ取つたのか、律刃は薄ら笑いを浮かべている。

そして、彼女は口を開いた。

「ああ、アンタの思っている通りだよ」

一説によると。

それは子供の怨念の集合体だという。

絶大なる繁栄を迎えていた霧の都で生まれたそれは、魔術師の手によりあつけなく霧散した——筈だった。

しかし、一度生まれられたモノの記録は消えることはない。残された噂や信仰により、それは反英雄として人類史に刻まれた。

結論から言おう。

今この世界に存在する霧崎律刃という少女は、ジャック・ザ・リッパーという英霊と、とある転生者の魂がひとつの肉体に宿った、あり得ざる存在なのだ。

混ざり物の存在ゆえに、本来のクラスである暗殺者ではなく分身として定義された。

これは律刃の中に宿る「彼」も望んではいけないことだ。

「彼」が願ったのは、ほんのささいなことだ。

だが、*〃*彼*〃*を転生させた者の悪意が、それとも転生先の世界の法則ゆえか、結果として誕生したのが、霧崎律刃という存在だ。

転生という不正行為^{ズル}によって生まれたエラー。

そんな彼女は今。

本領を發揮しようとしていた。

「憑依……いや精神同居！なんて悍ましいっ！」

「ああそうだ。オレはジャック・ザ・リツパーと混じり合い、受肉した存在。本来ならば彼女とは別の存在としてこの世に降り立つはずだった転生者だ……これで満足か？」

「いや、そんなことはどうでもいい！どのみちAMOREに逆らうものは始末するっ！」
ティロ・ファイナーレオリジオンは、頭の中に浮かび上がった悍ましさを振り払うかの様に、律刃に向かってリボンを伸ばす。

「憑依なぞ許すものかつ！それは人間の尊厳を破壊する——最悪の行為なんだっ！」

ティロ・フィナーレオリジオン——池映寧理は、憑依系転生者を忌み嫌っている。

理由は簡単、憑依とは他人の尊厳を汚す最低の行為だからだ。

見ず知らずの他人に身体をなすすべなく横取りされるのだから、される側からすればたまつたもんじやない。

事実、過去には凶悪な憑依能力者による犯罪が問題となった末、AMOREは憑依能力者の掃討作戦を執行するまでに至つたのだ。

故に彼女をはじめ、AMORE内では憑依に対してネガティブな印象を持つ隊員が少なくない。

中には過激な意見を持つに至るものもいるという。

そして、寧理はそのうちのひとりだった。

故に、彼女は律刃に対して最大限の殺意を向ける。

目の前の存在を生かしてはおけない。

彼女はAMOREの邪魔をする敵であり、他の存在に文字通り寄生することでしか生きられない、転生者の恥だ。

普段は理性によって心の奥底で封じられている悪感情が、洗脳によってその枷を外さ

れ、牙を剥こうとしていた。

この瞬間、池映寧理は正義を捨て、完全なる悪となった。

いつときの感情に突き動かされるがままに、気に入らないものを排除する悪になったのだ。

それを知ってか知らずしてか――

「おかあさんのこと悪く言っただから、ばらばらにしてもいいよね?」

彼女は、隠し持っていた得物を取り出す。

それと同時に、肉体の主導権が■■■■から律刃ジャックに切り替わる。

「ナイフ!?」 一つの間になん?」

いつの間にか、律刃は彫刻刀ではなく鈍い光沢を放つ果物ナイフを持っていた。

彼女達はここにいたるまで、このプラネットプラザを広範にわたって駆け回った。そのどこかで、ティロ・ファイナレオリジオンの目の届いていないタイミングで調達したのだろう。

新品のそれを自在に扱いながら、ティロ・ファイナレオリジオンのリボンをいなししてゆく律刃。

彼女は、中にいる■■■■おかあさんに問いかける。

「ねえ、あの人解体していいでしょ?」

「おいおい、相手さんは正気を失っているだけだぜ？ 殺すのは無しだ。ぎりぎり死なない程度に頼む」

「おかあさんは相変わらず注文が多いなあ……」

「すまないが、殺すのは周りの雑魚で我慢してくれ。他人から悪く言われるのは慣れるから、さ」

えー、といいながら、律刃はナイフを構える。

そして、宝具を使った。

「マリア・ザ・リッツバー・フレイク解体聖母・偽魂——」

「——え？」

それは一瞬だった。

ナイフの刃を抜いた律刃は、瞬く間にティロ・フィナーレオリジオンの背後に移動していた。

律刃の方を振り返った彼女が何か言おうとする。

しかし、声より先に出たのは、おびただしい量の鮮血だった。

「ひぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああつ!!」

真つ赤な噴水ができあがった腹部を押さえながら、悲鳴をあげてその場にうづくまる

ティロ・ファイナーレオリジオン。その姿は、みるみるうちにボロボロに崩れ去ってゆき、元の人間——寧理の姿に戻ってゆく。

しばらくして、血を流し過ぎた彼女は、力なくその場に倒れこむ。びちゃりと、床に広がった血が飛び散り、律刃の背中にかかる。

“ちゃんと生きてる……よな……?”

「たぶん、ね。おかあさんとのやくそくだもん」

勝敗は決した。

返り血まみれの少女は、鼻歌を唄いながらその場を後にする。

それを咎めるものは、もういない。

プラネットプラザ2階・中央階段前

バンツ!! という音と共に、天井に埋め込まれていた照明が破損し、その機能を喪失する。

理由は簡単。

アクロスがザ・ハンドオリジオンに殴り飛ばされ、天井に激突したからだ。

「くっそ……いつてえ……!」

天井の破片とともに床に落ちてきたアクロスは、自身の叩きつけられた天井を見上げる。天井を覆っていた筈の気味の悪い触手は、既に消え失せていた。あれがなんだったのかはいまだに不明だが、それについて思案するだけの余裕はない。

顔を正面に向けると、アクロスを殴り飛ばしたザ・ハンドオリジオンがこちらに向かって走ってきている。

ザ・ハンドオリジオンは、走りながらその右腕を振るう。

それは誰にも当たることなく、空を掻く——だけでは終わらなかつた。

「な」

ガオンツ！という音がしたかと思えば、次の瞬間、アクロスの目の前にザ・ハンドオリジオンがいた。

距離にして10メートル以上は開いていたにもかかわらず、一瞬でそれが無くなつた。何が起きたのか理解できていないアクロスの顔面に、ザ・ハンドオリジオンの左拳が突き刺さる。

「ぐっ……う……っ」

殴り飛ばされながら、何が起きたのかを思考するアクロス。

だが敵は、思考を巡らせている暇を与えてはくれない。

ザ・ハンドオリジオンが再び右腕を振るう。すると、ザ・ハンドオリジオンに殴り飛

ばされ、彼から離れる形で吹っ飛んでいた筈のアクロスは、次の瞬間にはザ・ハンドオリジオンに胸倉を掴まれていた。

瞬間移動とかそういう類のモノかと思ったが、殴られる直前と周囲の風景の見え方と
いうか、視点が同じ辺り、オリジオン側は一步も動いてはいない。まるでアクロスの方
が引き寄せられたかのような動きだった。

「ハメられてたまるかつ！」

このままでは格ゲーでいうところのハメ技ルート一直線だ。

最悪の袋小路を察したアクロスは、ザ・ハンドオリジオンの腕をなんとか払いのける
と、急いでオリジオンから距離を取る。

そして、腰に携帯していたツインスバスターを銃形態ガンモードに変形させると、射撃一辺倒の
遠距離戦に切り替える。

「くそっ……なんなんださっきのは……!!」

ツインスバスターを連射しながら後退するアクロス。

こいつはいままでオリジオンのように単純なフィジカル勝負では済まなそうだ。
先ほどにハメ技の絡繰を見抜けなければ同じことの繰り返しだ。それまでは不要に近
づかない方が――

「――逃がすかよ。お前の墓標は既に決定されているっ！」

「ぬぁにつ!!」

ザ・ハンドオリジオンが忌々しそうにそう怒鳴りながら右腕を振るうと、10メートル以上はあったであろう両者の距離が、瞬時に10分の1以下にまで縮まった。アクロスの逃げの一手は一瞬で瓦解したのだ。

ツインズバスターによる威嚇射撃の網をすり抜けてアクロスの眼前までたどり着いたザ・ハンドオリジオンは、右の拳でアクロスを殴りつけようとする。

が、アクロスはツインズバスターの銃身でオリジオンの腕を下から突き上げる形で殴りつけ、オリジオンの腕の軌道を上にずらす。アクロスの側頭部を扶るように進むはずだったオリジオンの腕の軌道は上に逸れ、アクロスの頭上をかすめる。

その隙を利用し、アクロスは構え直したツインズバスターの銃口をザ・ハンドオリジオンの腹部に押し当て、ゼロ距離でツインズバスターを連射した。内部で生成された特殊エネルギー弾はその姿を外気に晒すことなく、ザ・ハンドオリジオンの腹部を何度も貫いてゆく。

「ぶっぶがっ……………!! やったな貴様っ!」

腹から硝煙を吐き出しながらよろけるザ・ハンドオリジオン。そこに間髪入れず、アクロスの蹴りが滑り込んでくる。

アクロスとしては渾身の一発のつもりだったのだが、相手は曲がりなりにも正規の訓

練を受け、最前線で戦ってきたAMOREエージェント。アクロスのキックで押されながらも体勢を崩すことなく、吹っ飛びの勢いが落ちた瞬間に、一気にアクロスとの距離を詰めてゆく。

ブンツ!! とザ・ハンドオリジオンは右腕を振るう。すると、先ほどのように、両者の距離がほぼゼロになる。

が、同じ手をそう簡単に受けるわけにはいかない。

アクロスはそれを見越して、ソートモート剣形態に変えたツイインズバスターを振り下ろしていた。要は置き技だ。

照明が破壊されて薄暗くなっていたこともあって、その認識が遅れたザ・ハンドオリジオンは、自らツイインズバスターの刀身の軌道に頭から突っ込むこととなり、その脳天にツイインズバスターの刃を喰らってしまう。

豚の鳴き声のような悲鳴をあげながら、ザ・ハンドオリジオンは吹っ飛んでゆく。近くの家電売り場の入り口に置かれたワゴンを押し倒し、オリジオンは地面に尻をつく。肩を上下させながら呼吸を整えるアクロス。

彼は、これまでの戦いの中で、相手の能力に気づきはじめていた。

「その右腕……：そいつがお前の能力のトリガーなんだな？」

「ああ、馬鹿正直に何度も使えばわかるよな、そりゃ。だが、俺が何をしているのかはわ

からないだろうー！」

「空間、だろ。削ってるのは空間だ！」

「つ……察しがいいな。伊達に視線を潜り抜けてはいないという訳か」

ザ・ハンドオリジオンは、予想以上のアクロスの察しの良さに素直に賞賛を送っていた。

アクロスの言う通り、今彼が持っているのは「空間を削る力」だ。元より隠す気はなかったが、気づかないならばそれはそれで滑稽だとも思っていた。

「だが、これでも手加減はしているんだぞ？お前の身体にこの能力を直接当てれば致命傷になるのだからな」

「……まだやるのか？さっきの一撃、かなり効いたと思うけど？」

「当たり前だ。俺達は世界平和のために戦う。そのためには手段は選ばない！」

ザ・ハンドオリジオンはそう言うと、ぱつと立ち上がってアクロスに殴りかかってきた。

その動きはあまりにも速すぎたので、アクロスも反応が遅れ、その顔面にオリジオンの拳が直撃する。

拳を受けたアクロスは一瞬ふらつくが、なんとか踏ん張って耐え、オリジオンを殴り返す。

鈍い音と共に、殴られたザ・ハンドオリジオンがよろける。

「こつちも伊達にライダーやつてないんだよっ！」

「しぶといなこの野郎っ！一般人は大人しく引つ込んでやがれ！戦場に軽々しく出られちゃあこつちの迷惑でしかないんだ！」

ザ・ハンドオリジオンがそう叫びながら腕を振り下ろすと、ガオンツ！と音を立てて、アクロスの立っていた箇所的空間が削れる。

アクロスはオリジオンの腕の動きを見て、即座に前に飛んで空間掘削を回避する。その直後、アクロスのすぐ後ろで空間が削れる音が鳴り、アクロスの背中を振るわせる。

「消え去れ！お前の様な部外者がいていい場所じゃないんだよっ！」

ザ・ハンドオリジオンの懐に飛び込んだアクロスは、オリジオンにもう一発入れようとするが、負けじとザ・ハンドオリジオンがもう一度空間を削ろうと腕を振ろうとする。が、アクロスはその腕をがっしりと掴んで静止させる。

「多分、その意見は受け入れられない」

そして、ザ・ハンドオリジオンの先程に言葉に対して、そう言った。

「俺は、物語の中のヒーローが遠い存在のように、自分には届かない位置にいるものだっと思ってた。見ず知らずの人の涙や笑顔に本気になれて、自己犠牲を軽々しく選べるような人種ヒーローになんてなれないと思ってた」

「……………」

「けど、仮面ライダーになってみて分かったんだ。俺はそういうハードルを軽々しく超えられてしまう人種だったってことを」

そう。

この池袋を訪れてから、その片鱗はあったのだ。

こうして戦っている今も、昨日のビル火災のときもそうだ。

以前までは身近な人の為だけに戦っていた瞬だが、今は違う。

彼は今、妹を助けるという気持ちに加え、ほとんど初対面であるはずのレイとイスタを救うという気持ちも糧として戦っているのだ。要は、見ず知らずの他人の為に命を張れる様になってしまったのだ。

それがある人は「ヒーローとしての進歩」と捉え、ある人は「人間としての崩壊」と捉えるだろう。

しかし、この瞬間。

逢瀬瞬は着実に、以前よりも一歩先に進み出していた。

「世の中には、安全圏で大人しくできない人種がいるんだ。それが——俺だ！」

彼は、自覚したのだ。

ただ力を与えられただけの存在ではなく、自らがヒーローであることを。

故に、止まらない。

止まるわけにはいかない。

「俺はイスタのことなんて全然知らないけど、だからといってほつとくこともできない！湖森も助けるし、イスタも助ける！取捨選択なんかしてたまるかっ！俺はそういうヒーローになるんだ！」

「何も知らないから貴様はそんなことが言えるのだ！そんな欲張りが通用するほど現実には甘くないんだ！」

「欲張らないでヒーローができるかっ！！」

《CROSS BRAKE》

本人は気づいてはいないが。

彼が口にしたのは、まさしくヒーローの本質だった。

アクロスは叫びながら、掴んでいたザ・ハンドオリジオンの腕を押しつける様に手放すと、クロスドライバーのライドアーツ挿入口を上にあげ、再度下ろす。

硬く握りしめた拳に赤黒い稲妻が走り、終結してゆく。

ザ・ハンドオリジオンは、必死になって腕を振り下ろそうとする。
そして。

空間を削る右手を滑るように乗り越えたアクロスの渾身のパンチが、ザ・ハンドオリ
ジオンの右頬に衝突した。

第35話 AM3:00 / 再来のロストウイール

プラネットプラザ2階・洋服店

ショッピングモールのテナントのうちのひとつである、なんてことのない洋服店。数多の服が陳列されてるこの場所では、先ほどから、この場にふさわしくない音——銃声が散発していた。

その発生源となるのは3人。

武偵高校の生徒である神崎・H・アリアと遠山キンジ。そして、彼らと敵対する異形の怪人、ガンズオ리지オンだ。

他の皆を先に行かせるべく、ガンズオ리지オンの相手を引き受けた2人。

その戦いは既に、両者ともに何回引き金を引いたのか曖昧になっってしまうほどに、続けられていた。

「くっそ……あっただけ弾数無限とかずるいつてのー!」

「ないものねだりをしてもしようがない……約束通り、俺達がコイツを引き留めるしか

ねえんだ！」

キンジは半ばやけくそ気味に、隠れていた商品棚の影から身体を乗り出し、ベレッタの引き金を引く。狙うは当然ガンズオリジオンだ。

発射された弾丸は、一直線にオリジオンへと向かってゆく。

しかし、ガンズオリジオンは近くに置かれていたマネキンを掴んで盾にすることで、キンジの射撃を防御する。そして弾をすべて防ぎ切った後、弾除けにしたマネキンをキンジ達の方に向かって、思いつきりぶん投げた。

「こんなのっ！」

アリアは苛立ち気味に得物を双銃から双剣へと切り替えると、飛んできたマネキンを切り裂く。当然ながらマネキンは真つ二つに切断され——その奥から、ガンズオリジオンの足が飛び出してきた。

マネキンを投げたのは攻撃の為ではない。視界を妨げるためだったのだ。

「ボラアッ！」

「ぐっ……………！」

突発的に飛びこんできたオリジオンの蹴りを、アリアは咄嗟に腕を交差させてガードする。

しかし、オリジオンの蹴りの威力は相当なものであり、小さなアリアの身体は、埃を

まき散らしながら床を滑ってゆく。蹴りを防いだ両腕が、メキメキという音を立てるのが、アリアの耳にも入ってきた。武偵高校特性の防弾防刃制服を着ていなければ、きつとアリアの両腕の骨は粉碎されていたことだろう。

「この野郎……なめんなっ！」

オリジオンの蹴りでダメージを負ったアリアだが、彼女もただではやられない。

アリアは即座に、ガンズオリジオン目がけて拳銃の引き金を引く。

勿論狙いはその脳天。常人では回避するのも困難な一発が迫る。

しかし、

「無駄だっ！」

アリアの放った弾丸は、ガンズオリジオンのアームキャノンの砲身によって見事にね返されてしまう。子気味良い音と共に弾かれた弾丸は、カラカラと音を立てて床を転がってゆく。

そして、お返しと言わんばかりにガンズオリジオンは手に持った拳銃を発砲してきた。

「こんな弾丸っ！」

キンジは瞬間的に判断していた。

避けるのではなく、迎え撃つ判断を。

足ではなく腕を動かし、手に持ったベレッタの引き金を引く。発射された弾丸は、ガンズオリジオンの放った弾丸と空中で激突し、互いに本来の軌道を逸れ、あらぬ方向に飛んでゆく。

咄嗟の銃弾撃ちが成功した事に、一瞬安堵するキンジ。

が、甘かった。

「なっ……」

キンジが弾き飛ばした弾丸の背後。そこに、ギラギラと輝く2発目の弾が存在していた。

あの時、ガンズオリジオンは一瞬で2発の弾丸を発射していたのだ。1発だけの弾丸を想定していたキンジの反撃では、2発目の弾丸に対処する術も時間もなく、2発目の弾丸はキンジの腹部を貫いてゆく。

「ぐっ……」

「流石だぜ！」

弾丸で腹を貫かれたキンジは、口から血を吐き出しながら膝をつく。

狙い通りの結果を引き寄せたガンズオリジオンは、調子に乗ってガッツポーズをする。

そして、キンジにトドメを刺すべく、アームキャノンの砲口を向けて発射準備に入る。

向けられたアームキャノンの砲口内に、光が充填されてゆく。

「キンジっ！」

それを見たアリアは、咄嗟に2人の間に割って入る。

ガンズオリジオンのアームキャノン目掛けて放たれるアリアの弾丸。それはアームキャノンにはわずかな傷をつける程度の蟻の一穴でしかないが、僅かかながら、オリジオンの意識をキンジから逸らすことには成功する。

その隙について、キンジは腹の痛みを堪えながら立ち上がり、ガンズオリジオンに飛びついた。同時に、アリアがオリジオンに飛びつき、その首筋にナイフを振り下ろそうとする。

2人の行動によって、オリジオンのアームキャノンの砲口がずれ、チャージの終わっていたアームキャノンは、あらぬ方向にビームを発射する。

「ぬわっ……っ？」

「ちよっっ？」

誤射されたビームは、3人のいた床を粉々に破壊した。

足場を失ったキンジ達は、瓦礫と共に1階へと落ちてゆく。2人の手にあった武器も、彼らから離れるように落下する。

突然の出来事ながらも、キンジとアリアは、それぞれ受け身を取りながら着地するこ

とで、落下の衝撃を最小限に抑えることに成功する。対して、オリジオンの方は、まるで溶けて落ちたアイスのように、べちゃりと床に叩きつけられる。

「くそっ……余計な真似をしやがって！」

「逃がさないわよ！」

悪態をつきながら立ち上がるガンズオリジオンに、二丁の拳銃を携えたアリアが突っ込んでゆく。

彼女の手に握られたガメハンドから、硝煙と共に弾丸が放たれる。

しかし、ガンズオリジオンはアームキャノンの砲身で弾丸を弾き飛ばし、懐に飛び込もうとしてきたアリアの腹を蹴り飛ばす。

「きゃああああっ!?？」

拳銃を取り落としながら、悲鳴をあげて吹っ飛ぶアリア。

ガンズオリジオンは倒れたアリアに追撃することなく、彼女に背を向け、手負いのキングジを狙いにいく。

誰がどう見ても、明らかな舐めプ。そんな扱いを受けたアリアが怒らないわけがなかった。

「まちな……ささいよー！」

「邪魔すんなよ……オメーは対象外だ」

「なんですつて?」

「お前は俺にとつてのトロフィーワイフなんだよ。狙った女をわざわざ殺しちゃうバカがいると思うか?」

「なによそれ……あたしは物じゃない! あんたみたいな気持ち悪い音なんかこつちから願ひ下げよ!」

落下時に取り落とした剣を拾いながら、ガンズオリジオンに気持ち悪い言動に、必死になつて言い返すアリア。

オリジオンはそれをバックに、キンジに迫っていた。

カチャリと、左手のアームキャノンに砲弾を装填する。先程使ったビームではなく、実弾で仕留めるつもりらしい。彼は、アームキャノンの砲口をキンジに向けながら、自らの目的を明かす。

「俺の標的は端から遠山キンジ、お前だけだ」

「俺が……? なんて……?」

「気に入らないんだよ。平穩ラフコメと鬪争バトル。そのどちらにも染まりきれないどつちつかずの癖に、きつちりとそのどちらにおいても美味しい所はいたでいる。そんなお前を羨み、嫉んでいる奴は俺以外にもごまんという。俺はな、そういつたやつらの代表として、お前を殺しに来たんだよ……遠山キンジ!」

ドパンツ！と音を立てて、ガンズオリジオンのアームキャノンから、彼の恨み嫉みの籠った砲弾が発射される。

キンジは床を強く蹴って真横に飛んで、飛んできた砲弾を避ける。避けられた砲弾は床に着弾するなり、凄まじい熱風と衝撃を周囲に撒き散らした。

「うおおおおおおおおおおつ!!?」

身体を焦がすような爆風に煽られながら、床をゴロゴロと転がってゆくキンジ。

彼はなんとか立ち上がると、弾丸を拳銃に装填しながら、ガンズオリジオンの身勝手な主張をバツサリと切り捨てる。

「ふざけんなよ！そんな理由で殺されてたまるか！」

「出る杭は打たれる、だ。お前は俺にとつて、床板から飛び出ている杭なのだ！」

「そんなしょうもない理由であたしのパートナー殺そうつての!! ほんと、ふざけるのもいい加減に——っ!!」

ガンズオリジオンに怒っているのはキンジだけではない。アリアもまた、その身勝手さと気持ち悪さに怒りと嫌悪感を露わにしていた。

双剣を構えながら、ガンズオリジオンに背後から斬り込もうとするアリア。

しかし、その動きが突然止まった。

そして、次の瞬間には、カランと音を立てて、アリアの手から双剣が零れ落ちていた。

「おい、どうした!!」

それを目にしたキンジは、思わず足を止めてアリアに声をかけるが、彼女からは苦悶の声しか帰ってこない。

アリアの顔は、まるで苦痛に耐えているかのように歪んでいる。

——結論から言おう。

アリアの腕には、ヒビが入っていた。

先程、ガンズオリジオンの蹴りを両腕を使って防いだ時に、彼女の腕は大ダメージを受けたのだ。防弾防刃制服を以てしても、あの一撃を防ぎ切ることとはできなかった。

「アリアっ!!? お前腕を——」

「よそ見してるんじゃないやあねえ! お前は俺に黙って殺されてりやあいんだよ!」

「ぐはあっ!!?」

キンジがアリアを心配した、その隙を、ガンズオリジオンは逃さなかった。

ガンズオリジオンは、いつの間にかキンジの背後に回り込んでいた。

それに気づいたキンジだが、遅かった。振り返る間も与えられずに、次の瞬間には、ガンズオリジオンの手刀がキンジの後頭部に命中していた。

まるでスイカ割りでもするかのようには、一切の容赦なく振り下ろされたその一撃は、

グシャリという鈍い音をキンジの後頭部から絞り出させるとともに、彼の身体を床に伏せさせた。

「なっ……」

「終わりだよ、遠山」

そう呟きながら、ガンズオリジオンのアームキャノンから、2発目の砲弾が発射される。

アリアは腕の痛みを押し殺し、キンジの元に向かって走り出す。

そして次の瞬間。

爆炎が、生まれた。

その爆発は、またもや周囲の床を破壊し、3人を直下の地下駐車場へと突き落とす。

キンジはおろか、アリアやガンズオリジオン自身も巻き込み、破壊的な爆風と衝撃が周囲に撒き散らされてゆく。それでもなお、ガンズオリジオンはピンピンしていた。

「死んだな……死んだなあっ！」

今の爆発で自慢の装甲は吹き飛んでしまったが、それでも優位性はゆるがない。いくらキンジが原作主人公といっても、所詮は人間。オリジオンである自分が負けるはずが

ないと、ガンズオリジオンは勝ち誇っていた。

そうして、最後に惨めに吹き飛んだキンジの死体でも確認しようと思つて、瓦礫の海を歩いて渡り出したガンズオリジオン。

直後、彼のアームキャノンが爆発した。

「なああああああああああああああああああつ!?？」

あまりにも唐突すぎる

「爆発の規模が大きすぎると思わなかったのか？俺が手榴弾を砲口にぶち込んでやったんだよ」

「な、馬鹿な……」

ガンズオリジオンは振り返る。

そこには、

「やあ、誰が死んだつて？」

「なんだとおおおおおおおおおおおおつ!?？」

全身灰まみれになったキンジとアリアが立っていた。

だが、キンジのその雰囲気は先程までとは違う。なんだか妙にキザな印象だ。

——それがなんなのか、何が起きているのか、ガンズオリジオンは知っている。

「しかもお前……ヒステリアモードになつていいるな!?? 一体いつなつたんだ!??」

ヒステリアモード。

それは、遠山キンジの個性ちから。異性に対する性的興奮をトリガーとしたバッワッアッブッのリミッター解除。ガンズオリジオンは、万が一のことを考え、キンジがそうならないように最新の注意を払っていた。

しかし、最後の最後でやらかした。

こうして、目覚めさせてしまった。

「しかし、なんだ……どのタイミングで……」

あの爆発の直前、アリアがキンジに駆け寄っていた。その後のことはガンズオリジオンにはわからないが——偶然にしろ故意にしろ、兎に角、キンジがヒステリアモードになるような出来事が起きたのだ。

せつかく、ヒステリアモードにならないようにしていたのに、それを乗り越えてきやがった。

その事実を理解したガンズオリジオンは、怒りと嫉妬にかられるがままにアームキャノンを構える。

「……このラツキースケベ野郎があああああああああああああつ！ふざけんな、そー

ゆーところが嫌いなんだよおおおおおっ！」

「黙ってる！」

が、ガンズオリジオンに撃たせまいと、アリアが地面に落ちていた自分の剣を思いきつり蹴り上げた。

柄の先端を正確に狙い撃った剣蹴玉ソートシュート。蹴飛ばされた剣は、ザシュッ！と音を立てて、オリジオンのふくはらぎに剣が深々と突き刺さる。

「がっ……」

「ありがとうアリア！最後は俺がなんとかする！」

キンジはそう言つて拳銃に弾を込めながら走り出した。

さっきの爆発で装甲を失った今ならば、ガンズオリジオンを撃ち抜ける。

「くそっ！ならばこの一撃で切り裂いて——」

「遅い」

バツ！と。

拳銃を構えたのは同時。しかし、引き金を引いたのはキンジが先だった。ガンズオリジオンが引き金を引くよりも早く、キンジのベレッタから弾丸が発射された。

狙うは銃口——鏡撃ミミキちだ。

ヒステリアモードになったキンジの方が、瞬発力では上だった。

返しながらカオスソルジャーオリジオンを蹴り飛ばして距離をとる。

「ほら、時代遅れの平成ライダーさん。無謀にも我々に齒向かって……仮面ライダーの名が聞いて呆れます」

「何の罪もない一般人を人質に取ってる時点で、お前らはヒーローでもなんでもないんだ！お前達が何と戦い、何から世界を守っているのか、俺にはよくわからないけど……少なくとも、今のお前達を正義の味方だとは俺は思わない！」

それは、この戦場で何度も繰り返された言葉。決して交わることのない平行線。

片や、全次元の平和のために少数の心を踏み躪るのを良しとし。

片や、犠牲ありきの平和を良しとせず。

どちらもその原動力は正義であるが故に、言葉程度ではとまらないのだ。それは、純な善と悪の戦いよりも遥かに厄介なモノであった。

「不穏分子を駆逐しなければならぬ。場当たりのな対処では無く、圧倒的な武力を持たねば世界が減ぶ。それが何故わからない？」

「協力を申し出るといふのもあつたはずだろ？ 何でわからない？」

「だから言っているだろう！お前らは守られるべき弱者なんだ！私たちが転生者からお前らを守ってやるから大人しくしてくれないかなあつ？」

「それは……犠牲の言い訳にならないっ！」

《◆?2SSLASH》

ブレイドがそう言いながら、ブレイラウザーに1枚のカードを読み込ませる。すると、ブレイラウザーの刀身が青く輝きだす。

カオスソルジャーオリジオンは、2本の剣を同時に振り下ろしながら、思いの丈を叫ぶ。洗脳によって歪められた正義感、すでに醜悪な傲慢に成り下がっていた。

「何故お前は戦う?!? お前は部外者、我らの戦いに首を突っ込まず、アンデット退治でもしてればいいんだっ!」

「それだけが俺の使命じゃない!他人の涙以外に理由なんかいらぬ!誰かの涙が許せないから仮面ライダーをやってるんだ!」

ガキンツ!と音を立てて、カオスソルジャーオリジオンとブレイドの剣がぶつかり合う。

僅かな差によって鏝迫り合いに打ち勝ったブレイラウザーの刃が、カオスソルジャーオリジオンの剣の軌道を跳ね上げる。

そして、ガラ空きとなった彼女の胴体に、ブレイドの一撃が滑り込み、彼女を吹き飛ばす。

「っ!」

口の中に広がる鉄の味を噛み締めながら、カオスソルジャーオリジオンは剣を地面に

突き立て、強引に身体を床に着地させる。

そして、

「時空走破斬っ！」

「なっ……っ！」

距離にして10メートル。

それだけの間合いを一気に無に還し、カオスソルジャーオリジオンが、一瞬にしてブレイドに肉博する。

わずかに反応が遅れるブレイド。そこに、カオスソルジャーオリジオンの二刀流が容赦無く降りかかる。

ブレイドは咄嗟に、手にしていたブレイラウザーでガードをするが、圧倒的な速度と腕力で振り下ろされたオリジオンの刃は、ブレイドの手からブレイラウザーを容易く弾き飛ばし、彼の身体をVの字に斬り裂く。

「ぶはっ……っ！」

斬りつけられた胸部アーマーから火花を散らしながら、ブレイドはその場に膝をつく。

ブレイドの胸部アーマーには、先の一撃に起因する深い傷が刻まれており、周囲の床には、ブレイドから飛び散ったアーマーの破片らしきものが散見される。

その有り様を目にしながら、カオスソルジャーオリジオンはほくそ笑んだ。

——終わりだ、と。

「あれほど大言壮語を吐き連ねたくせに、この程度なの？やはり現地民はこの戦いに関わるべきでは——」

「今だ！」

トドメを刺そうとオリジオンが近づいた瞬間のことだった。

膝をついていたブレイドが、カオスソルジャーオリジオンの両手首を掴む。そして、

一気に彼女の身体を引き寄せ、

「ウエイツ！」

「ぬぶっ……ぷっ？」

彼女の下顎目掛け、頭突きを喰らわせた。

上部の尖った水滴状のブレイドの顔部アーマー、その形状を利用した一撃が、カオスソルジャーオリジオンの身体を上へと跳ね上げる。それはさながら、ツノを突き上げたカブトムシの様だった。

完全に油断しきっていたカオスソルジャーオリジオンは、ブレイドの反撃によつて後ろによろける。得物である二振りの剣も、彼女の手から零れ落ちてゆく。

「ウエエエエエエエエエエイツ!!？」

ブレイドは即座に立ち上がると、よろめくオリジオンに向かって、渾身のドロップキックをくらわせる。彼の全体重を乗せた至近距離からの一撃はまさに一級品の威力であり、カオスソルジャーオリジオンは、ヤギの鳴き声みたいな悲鳴と共に吹っ飛んでゆく。

体勢を整えたブレイドは、落ちていたブレイラウザーを拾い上げる。

そして、ブレイラウザーのオープントレイを展開し、そこから3枚のラウズカードを取り出す。

取り出したのはパンチ力を強化する ♠? 3 BEAT”、電撃を発生させる ♠? 6 THUNDER”、肉体を鋼鉄化させる ♠? 7 METAL” の3枚。ブレイドは取り出したそれらをブレイラウザーでラウズする。

《♠? 3 BEAT・♠? 6 THUNDER・♠? 7 METAL》

「これで……トドメだ」

《LIGHTENING METEOR》

3枚のカードをラウズし終わると、ブレイドの右拳が鉄のような質感に変化すると共に、電撃を纏い始める。

拳を固く握りしめて走り出したブレイドを迎え打つべく、剣を全て失ったカオスソルジャーオリジオンは負けじと立ち上がる。それはAMOREとしての意地か、はたまた

洗脳で正気を失っているが故に成せる技なのかはわからない。

必殺技が撃たれる前になんとかしなくてはならない。

そう判断したカオスソルジャーオリジオンは、雄叫びを上げながらブレイドに向かって走り出す。

そして、

バキンツ!!? と。

電撃を纏ったブレイドのパンチが、カオスソルジャーオリジオンの鎧を砕いた。

AM2：48

プラネットプラザ2階

止まっているエスカレーターを駆け下りる、2人分の足音。

それを追う、全てを焼き尽くす灼熱の炎。

「ひゃっはあああああああああああつ！パワーアップした俺のデモンストレー

シオン相手になつてくれよおモブ共よおっ！」

「ふざけんな！それ俺達をころすといつてるようなもんだらうがっ！」

「言い返さなくていいから足を動かして！死ぬわよ!!」

バルジの手によつてパワーアップを果たしたりザードンオリジオンは、有頂天になりながらアラタと大鳳を追いかける。その台詞はもはや、現代日本よりも世紀末に転生した方が良かったのでは？と思わざるを得ないレベルで終わっていた。

リザードンオリジオンの口から放たれる火炎放射を紙一重で回避しながら、アラタ達はエスカレーターを駆け下りる。アレに当たったら火傷どころか、熱いと感じる前に全身が消し炭になりかねない。

「ぬうらあっ！」

2階に到着した大鳳は、近くにあつた観葉植物の植えられた鉢を持ち上げると、エスカレーターの最上段から2階に向かって飛び降りてきたリザードンオリジオンめがけて、それを思い切りぶん投げた。

艦娘を引退した身といえども、その力は並の少女を上回る。

大鳳が投げた鉢は、リザードンオリジオンの吐く炎を飛び越し、彼の額にぶち当たつて碎け散る。

聞くに耐えない破壊的な音が発生するとともに、リザードンオリジオンのジャンプの

軌道がエスカレーター上からずれ、彼の身体が空中に投げ出される。

そして、リザードンオリジオンは、吹き抜けを通じて1階まで落下していった。

「今のうちに離れるわよ!」

「だな……悔しいが、今の俺たちじゃあ何にもできないしな」

躊躇いなく鉢をオリジオンに投げて撃ち落とすという行動に出た大鳳を末恐ろしく感じながら、アラタは彼女の言葉に従って通路を走る。

すぐ近くに1階に通じるエスカレーターがあるが、その近くには、落下していったリザードンオリジオンがいる為、選択肢としては論外だ。行くならば、他の階段かエスカレーターしかない。

しかし、

「アレくらいで死ぬと思ったか!? 俺は天下無敵の転生者サマだ! お前ら雑魚とは違って世界に愛される身なんだよねえっ!」

「なっ……!」

下で伸びているかと思っていたリザードンオリジオンが、1階から吹き抜けを通じ、たった1回のジャンプで、大鳳の真横まで飛び上がってきた。

予想以上の復活が早い。

大鳳は身構えようとするが、リザードンオリジオンは彼女のアクションを許さず、そ

のまま彼女を押し倒す。

「大した人気もない艦娘風情が、俺に一矢報いたつもりかあ？調子乗るのも大概にしるよー！」

「くっ……」

押さえつけられた大鳳は、リザードンオリジオンの口内に凄まじい熱気が溜まつていくのを感じた。彼は、この至近距離からの火炎放射で大鳳を焼き殺す気なのだ。

彼女はなんとかして脱出しようと試みるが、リザードンオリジオンの力は相当なモノであり、大鳳の力を以てしても、オリジオンの身体はびくともしない。

暴れる大鳳を押さえつけようとして、リザードンオリジオンの腕の力が増す。大鳳の腕を押さええているリザードンオリジオンの手の爪が、大鳳の肌に食い込んで出血を起す。

「絶体絶命……ね」

大鳳は、身体では尚も反抗を続けていたが、彼女の心の中には、早くも諦めの感情が芽生え始めていた。

（まあ、元々わたしは死人だったんだし、いいよね……あるべき姿に戻るだけ）

もとに、もどるだけ。

精神とは逆に、いまだに生存を諦めてはいない自分の身体に、そう言い聞かせる。

アラタは無事に逃げられたらどうか、と、最期に大事な家族について思いを巡らせた大鳳。

そこで、気づいた。

(いやあり得ない！アラタが私を置いていくわけがない！アラタは、どんな無茶をしても私を助けにくる。そういうヤツだ！)

舞網鎮守府の時もそうだった。

結果としては惨敗だったが、アラタは大鳳を助けるために、生身でオリジオンに立ち向かった。その一件以来、彼はファイフティにわざわざ弟子入りしてまで強くなろうとしている。

そんな彼が、大鳳が身代わりになろうとしている今を許せるだろうか？

答えは簡単。

「テメエ大鳳に何してくれとんのじゃあこの腐れトカゲ野郎！顔面マリアナ海溝にしてやろうかつ!?」

グサリ、と。

怒り心頭で暴言を吐き散らしながら、アラタが手に持っていた包丁を、リザードンオリジオンの側頭部にぶっ刺した。

完全に、意識外からの一撃。

それを思いきりくらったリザードンオリジオンは、刺された箇所から血を噴き出しながら、情けない悲鳴をあげる。

「大鳳からどきやがれっ！」

その隙に、アラタはリザードンオリジオンを蹴り飛ばし、大鳳の上からどかす。蹴り飛ばされたオリジオンは、包丁で刺された頭から血を流しながら、シヨツピングモールの床をゴロゴロと転がってゆく。

そして、オリジオンから解放された大鳳の手を引つ張り、彼女の身体を起こす。

「悪い、得物とつてくるのに時間かかった」

「あ、ありがとう……それはそうと、包丁なんてどこから……」

「近くの家具屋からパクってきた。盗んできちまったけど、お前の命に比べたら安いもんだろ。怪我はないか？」

「ちよつと腕から血が流れているくらいよ、大丈夫」

怪我の具合を心配するアラタに、大鳳は強気に笑いながらそう返す。

そんな2人を睨みながら、リザードンオリジオンは、頭に刺さった包丁を引き抜いてその場に投げ捨て、ゆらりと立ち上がる。

そして、

「あああああああああもうイライラ止まらねえよおおおおおおおおお

『危ないっ!』

地上まで2メートルを切ったというところで、ガクンと、2人の身体が何かに引つかかった。

見ると、黒いネットのようなものが、アラタ達の真下に広がっている。通路一面を覆う、弾力のあるそれが、2人の身体を支えているのだ。

そして、ネットの外側には、黒いライダースーツに黄色い耳付きのフルフェイスヘルメットを被った首なしライダーが佇んでいた。このネットは彼女の、影を自在に操る能力によって生み出されたものなのだ。

恐る恐る、ネットから地上に降り立ったアラタと大鳳は、下で待っていたセルティに礼を言う。

「せ、セルティ……助かった……」

「正直忘れてたわ」

『忘れてもらっては困る。ずっといたのだが……私はそんなに影が薄かったのだろうか?』

瞬達と合流して以降、いろんな意味で放置気味だったことにしよげるセルティ。

が、のんびり会話している暇はない。

「お喋りしてる余裕がお前らにあるのかい!?」

バツ!と。

背中の翼を広げながら、リザードンオリジオンが2階から飛び降りてきた。

セルティは何も言わず(というか頭がないので言えないのだが)、手に影でできたバツトを生成する。

そして、

「ぬぎゅおえっ!!?」

突っ込んできたリザードンオリジオンを、フルスイングでぶっ放した。

カキーン!と、影でできているはずのバツトから金属的な快音が鳴り響くと共に、リザードンオリジオンは天高くぶっ飛ばされる。

その勢いは、吹き抜けを経て3階の天井にぶつかった程度で止まることは一切なく、そのまま天井を突き破り、空を覆う雨雲に向かってぶっ飛んでゆく。

「凄い……」

「やべえな」

一部始終を見たアラタと大鳳は、語彙力の欠片もない簡単な言葉を口にする。

その直後だった。

『ん?』

空を見上げていたセルティは、何かに気づいた。

何かがかつちに向かつてきている。

赤くて大きい何かが、降り注ぐ雨粒に匹敵する速さでこちらに向かつてきている。

それは、

「なっ……」

「メガシンカだあああああああああああああつ！俺は！負けないつ！」

全身に炎を纏いながら急降下してきている、リザードンオリジオンだった。

その姿は大きく変動しており、翼竜を人型にしたような見た目から、完全な翼竜の体型へと変化していた。おまけに、その体色は黒くなり、その身に纏う炎も、赤から青へと変わっている。

進化の限界を超えた進化。

バルジの処置によってパワーアップした姿。

今の彼は、もう既にリザードンオリジオンでは無くなっていた。さしずめ、メガリザードンオリジオンといったところだろうか。

彼は全身に青い炎を纏いながら、アラタ達のいる位置目掛けて落下してきている。その様子はまるで流星のようだった。

「まずいわ……あんなのが落ちてきたら建物がもたない！」

「どうすんだ!?？」

『任せろ』

狼狽えるアラタ達だったが、それとは対照的に、セルティは冷静に対処しようとしていた。

セルティの手に握られた、影でできたバットが、その輪郭を失ってゆく。そして、バットを構成していた影が、みるみるうちに増大化し、アラタ達を守るかのように変形を始める。

それは網だった。

プラネットプラネットの通路ほどの幅を持つ影の網で、落下してくる凶星を受け止めようというのだ。

メガリザードンオリジオンと、影の網が接触する。

すると、グインツ！とネットが伸び、メガリザードンオリジオンの巨体を押しとどめる。

「やったのか？」

希望的観測を口にするアラタ。

しかし残念ながら、その期待は儚くも崩れ去る。

「ぐらあああああああああいつ!!?」

バチンツ！と。

怒声をあげたりザードンオリジオンが、セルテイの影シャドウネット網を食い破った。

「なっ……」

「嘘でしょ?」

(マズイっ……!)

想像以上の相手のパワーに、3人はなす術がなかった。

影による呪縛を突き破ったメガリザードンオリジオンは、地上にいるアラタ達を食い殺さんと急降下をしてくる。

もう、なす術なんて無い。

声にならない悲鳴をあげるアラタだったが、それでも大鳳だけは守らねばならないと思いい、必死に彼女に手を伸ばそうとするが、間に合わない。

オリジオンの牙が、迫る。

《LEGEND LINK! ドララララララア! CRAZY DIAMOND!》

「!」

メガリザードンオリジオンの牙がアラタの身体に食い込もうとする、その瞬間だった。

突然この場に響き渡る、クロスドライバーのレジエンドリンクの音。

その直後、メガリザードンオリジオンの身体が一気に真上へと引つ張り上げられた。

「なんだ!?」

その様子は、まるで、釣り竿かなんかで釣り上げられたんじゃないかと思ってしまうほどのものだった。

メガリザードンオリジオンは空中でもがきながら、自分がプラネットプラザの天井にぶち明けた大穴を見上げる。

大穴の上。その縁に、誰かがいる。

「お前は……お前は……」

「……………」

そこに立っていたのは、ひとりの仮面の戦士だった。

アラタは最初にそれを見た時、てつきり、瞬がアクロスに変身して駆けつけてくれたのかと思ったのだが、一目で分かった。アレはアクロスではない、と。

「アクロスじゃない……じゃああれが逢瀬の言っていた……!」

「ユナイト……! また貴様かあつ!」

メガリザードンオリジオンは、忌々しそうにその名を叫ぶ。なぜならそれは転生者狩りに並ぶ、自らの仲間を打ち破った怨敵だからだ。

穴の縁に立って彼を見下ろしていたのは、仮面ライダーユナイトだった。

だが、普段とは見た目が違う。メガリザードンオリジオンが以前に出会った時とは異なり、ユナイトはデフォルトのアーマーの上から、白いプロテクターを上から着用している。

彼らは知る由もないが——これは仮面ライダーユナイト・リンク、クレイジー・ダイヤモンドだ。

「その姿はなんだ?! 俺に何をした?!」

「俺はただ直しただけだ。お前が大穴を開けたこの建物の天井をな」

その言葉を受けて、メガリザードンオリジオンは周囲を見渡す。

そこには、空中に浮かぶいくつもの瓦礫があった。

オリジオンはその瓦礫が元は何だったのかを知っている。それは、彼がぶち破った、このプラネットプラザの天井だったものだ。

それらが浮上している。彼の身体同様に、まるで何かに引き寄せられているかのように、上へと浮き上がっている。

(俺は知っている……クレイジー・ダイヤモンド……まさかっ?!)

ここでオリジオンは、ユナイトの行っていることを理解した。

クレイジー・ダイヤモンド。それはとある世界において、とあるひとりの少年が得た

幽波紋スタンドの名だ。

その能力は物体の修復。ユナイトは今、その力を得て使っている。ユナイトはそれを使って、オリジオンが破壊したプラネットプラザの天井を直した。

それによって、地上に散らばった瓦礫は元あった天井に向かつて引き寄せられている。そしてそれは、メガリザードンオリジオンの身体に突き刺さっている瓦礫も例外ではない。元の位置に戻ろうとしているそれが、オリジオンの身体を引っ張っているのだ。

全てを理解したメガリザードンオリジオンは背中に刺さっている瓦礫を取り除こうとするが、まなじり完全な翼竜形態になってしまったが故に、その短い手では背中に届かない。結果として彼は、ただもがくことしかできずに、ユナイトのいる、プラネットプラザの屋上駐車場まで浮上させられてしまう。

「助けてっ………折角転生したんだっ！ムシヨおくりなんかやだああああああっ！」

「だったら最初から悪いことなんかするな」

泣きわめくオリジオンに、ユナイトは冷たく言い放つ。

そして、

《UNION PUNISH! CRAZY DIAMOND》

『助かった、のか』

ユナイトの手によって、完全に修復された天井を見つめるアラタ達。

ユナイトの実力を目の当たりにした彼らは、ただただ圧倒されていた。

ザ・ハンドオリジオン——下澤巻密を撃破した瞬は、アクロスの変身を解いて壁に寄りかかっていた。

連戦によって、瞬の体力は尽きかけている。多分今眠りについたら、1週間は平気で眠っていられそうだと、瞬は確信していた。

そこに、ずっと物陰に隠れていたレイがやってくる。

「終わった……のか?」

「ああ、ここはな。先に行った唯達はどうしてるかな……」

瞬は呼吸を整えながら、先に行った唯とセラの身を案じる。

彼女達だけでない。今この場で戦っている皆の無事を、瞬は祈っていた。それは気休め程度にしかならないというのによくわかっているが、それでも瞬は祈らずにはいられなかった。

「そこは皆の実力を信じるしかない。俺たちは俺たちの、出来ることをやるしかないんだよ」

「そっか、そうだよな……なら、行くしかないよな」

レイの声を耳を傾けながら、瞬は立ち上がる。

その時だった。

突如として、プラネットプラザ全体を激しい揺れが襲った。

「ぬわっ……な、なんだ!?!?」

壁に手をつきながら、瞬は、何が起きたのかを把握しようとする。

「地震じゃない……爆発……まさかっ!?!?」

何かを察したレイが、震源地に向かって走り出した。

それを慌てて追いかける瞬。あちこちで戦闘が頻発しているこの場で、非戦闘員であ

るレイを一人にするわけにはいかない。

「おい待てよレイっ……一人で先に行ったら危ないって——」

先を走るレイを呼び止めながら、彼に追いつくべく全力で走る瞬。

モヤシが擬人化したようなレベルのヒョロヒョロ体型のくせに、レイは矢鱈と足が速かった。元陸上部だった瞬でも、見失わない様にするのが精一杯だ。

そして。

「やっと……止まって……追いついた……」

時間にして30秒。

それだけの追跡劇を経て、2人は震源地に辿り着いた。

瞬の身体に、オリジオンと戦っていた時以上に、どつと疲れが押し寄せてくる。壁に手をつき、息を切らしながらも、瞬は目の前の惨状を見つめる。

そこには、

「よう、一足遅かったなレイ。イスタはご覧の通り——俺の手の中だ」

炎と瓦礫の海の中、イスタの首を掴み上げている赤浦健一の姿があった。

彼の周囲に転がっているのは、瓦礫だけではない。

瓦礫に紛れて、湖森とトモリが倒れているのを、瞬は見逃さなかった。

「お前……何をした!?？」

怒りで声を震わせながら、瞬は赤浦に訊ねる。

「何って、邪魔だから吹き飛ばした」

「なんだと……」

「もしかして、あそこのよくわかんねー人質どもの事で怒ってんのか？あれはオレの管轄外だ。AMOREの馬鹿が勝手にやった事だしな、まあ、息はしてるんじゃないかな？」

あつげらんかと、赤浦は言い放った。
それを耳にした瞬間の拳が震える。

赤浦に首を掴まれているイスタは、煤けた顔をレイのほうに向けながら、苦しそうに声を出す。

「レイ、来ちゃ……駄目」

「それは出来ない。俺はお前と再会するためだけにこの1年を生きてきた。今更止まらない。赤浦を倒して、お前と2人で日の当たる世界に帰るんだよ」

「お前らの夢は叶わない……オレが壊すからだ。お前らがいたから、慈愛はオレのモノにならなかつた。だから、彼女の愛を独り占めするために、オレはオレの手でお前らを消し去らなきゃならない」

赤浦もレイも、それぞれの抱く思いは以前と変わってはいない。

再開を望む執念と、愛の独占を目論む狂気。

仮面ライダーだのAMOREだのギフトメイカーだのといった要素は、所詮ただの添え物。^{フレック}今回の事件は結局のところ、この2人の対立に終始するモノでしかない。

「碌に戦う術を持たないお前と、オリジオンに覚醒したオレ。同じ転生者といえども、オレとお前じゃハナから勝負にならないという事は分かっているはずだろう。それでもやる気とか、狂ってないか？」

「お前にだけは言われたくないな……こちとら娘^{イスタ}取り返しに来たんだ。親は子のためなら、いくらでも狂ったことをしでかせる生き物なんだぞ？」

レイも赤浦も、両者共に譲らない。

瞬は湖森とトモリを安全な位置まで移動させながら、2人の対話を聞いていた。

瞬は2人の因縁を詳しくは知らない。せいぜい、レイから軽く教えられた程度だ。それでも、赤浦の狂気性は身に染みてわかる。

あいつは倒さなくてはならない。自らの手でその機会を手放した、もう2度と叶はずのない愛。そのために、ひたすらに破壊を撒き散らし続けるこの男を、なんとしてもここで止めなければならぬ。

そう感じとった瞬は、クロストライバーを腰に装着し、アクロスに変身しようとする。その時だった。

赤浦は、瞬の方をチラリと見て、こう言った。

「言葉をぶつけ合うのにも飽きた。とりあえずひと想いに吹き飛ばしてやるか」

その言葉が合図だった。

赤浦が指を鳴らした瞬間。

激しい閃光と熱風を伴って、再びプラネットプラザ全体が激しく揺れた。

第36話 AM3:10 / 覚悟VS責務

プラネットプラザ 地下駐車場

「げほっ……ここは何処だ……?」

逢瀬瞬は、瓦礫の海の中で目を覚ました。

目覚めて早々、何気なく腰に手をやった瞬は、腰に巻きつばなしだったクロスドライバーがなくなっていたことに気づいた。何処にいったのだろうか。

というか、一体何が起きたのだろうか?

ひとつの疑問を胸に、全身をくまなく走る痛みに突き動かされるがまま、瞬は歩き出す。

「確か……レイと一緒にボマーの所まで辿り着いて……それから……」

歩きながら、ここに至るまでの経緯を思い返す。

瞬はAMORE側の刺客であるザ・ハンドオリジオンを撃破した後、レイと共に、爆発の起きた箇所までやって来た。そこでボマーオリジオン——赤浦健一と再開し戦お

うとした瞬間、奴が引き起こした爆発に巻き込まれた。

その結果が今だ。

プラネットプラザは広範囲にわたって崩壊を起こしており、ひどい有様となっていた。我ながらよく生きていたものだと、瞬は自分の運の良さに笑わずにはいられなかった。

彼が意識を失っていた時間は数十秒。だが、この状況下においては、数十秒という時間は、状況を激変させるには十分過ぎるものであった。

「レイっ！湖森っ！トモリ！返事してくれ！」

瓦礫の上を歩きながら呼びかける。

返事はない。

（まさか、崩落に……いや嘘だ！まだ生きてるはずだ！）

瞬は、頭の中に浮かんだ最悪の予想を振り払うかの様に、必死に呼びかける。

その時だった。

「また会ったな、逢瀬瞬」

「!!？」

突然、名前を呼ばれた。

ぱつと瞬が後ろを振り返ると、そこには、今回4度目となる顔があった。

眼鏡をかけた、険しい顔つきの男——裁場整一が、そこに立っていた。

彼の手には、アクロスのライドアーツが刺さったままのクロスドライバーが握られている。おそらく、瞬が落としたものを彼が拾ったのだろう。

「何故ここに来た？君はもう戦いに関わるなど言っただはずだ。既に君のクロスドライバーは俺が回収している。君が戦う術はもうなくなつたんだ」

「それで止まる様なら仮面ライダーやつてないんだよ。それに俺は、レイの願いを犠牲にしてまで平和な世界に戻る気もない。レイもイスタも、湖森もトモリも、皆を助けるには、戦うしかないんだ」

「だから俺が全部なんとかすると云つただろう。戦つて傷つくのは……俺だけで構わない」

以前会つた時同様に、裁場は瞬を戦いの場から降ろそうとしてくる。

だが、瞬はそれを受け入れられない。

「あんたが俺のためを思つて言つてくれているのは知つてるよ。でも理屈の問題じゃない。これは約束なんだ……唯との」

「約束だど？」

「唯が、俺を逢瀬瞬おほにしてくれた。だから、それに応えなきゃいけないんだ。それを裏切ることはできない」

一向に引き下がらない瞬。

だが、裁場もそれは同じだった。

大切な人を助けたい一心で立っている瞬と、これ以上誰も傷つかないようにと願っている裁場。どちらもかたくなに譲らないが故に、もはや話し合いで解決できるような状態ではない。

「君はまだそんなことを——」

裁場は声を張り上げようとして

「なんでもかんでも他人から取り上げて、自分ひとりでやろうとするのが大人なのかよ!!?」

「戦つてほしくないだど? 死んでほしくないだど? 俺の気持ちなんかまったく考えてねえ癖に出しやばるなよ……余計な真似すんなよ、この役立たずが!」

「笑わずにはいられないよ……裁場誠一、君の傲慢っぷりにはね!」

「私はね、君が望んだから力を授けたんだ。君の贖罪意識に共感したわけじゃあない。君の自責の念に他人を巻き込むな。私はそんなくだらないもののために君を仮面ライダーに選んだのではない」

（——!!?）

その時。

突如として裁場の脳裏にフラッシュバックする、鋭い言葉の数々。それを振り切るように身体を動かそうとするが、脳内でリフレインするその言葉たちが、裁場の身体を地面に縫い付けて動くことを許さない。

瞬に何か言おうとしても、それは呻き声にしかならない。

認めたくないだけで、裁場はすでに分かっているのだ。自分の行いは、他人を心配する心から来ているのではなく、自己満足でしかないということに。誰も救えなかった、無力な過去の自分を否定したいがための、浅ましい行為でしかないことに。

それが頭の中に浮かんでしまった裁場は、動けなくなっていた。

そこへ、

「おーおーおー、ライダー同士で仲間割れはよせよ。今令和だぞ？いつまで平成気分であるわけ？」

「お前は……レド！それにボマーも……！」

声のした方に、ぱつと首を向ける瞬。

そこに居たのは、赤いシャツを着た金髪の少年——ギフトメイカー・レドであった。彼も爆発に巻き込まれたのか、全身煤まみれな上に服もボロボロになっているが、そんなの平気だぜ、と言わんばかりにびんびんしている。

その隣には、ボマーオリジオン——赤浦健一が佇んでいる。ずっと俯いてはいるが、

そのギラギラした目だけはまっすぐに瞬達を捕えている。

瞬と裁場は我に返り、同時に身構える。

「おつ、やる気に満ち溢れてるね。僕もバルジの悪趣味に嫌々付き合わされてるんだ。本当なら君たちで憂き晴らしをしたんだけど……ティードに雷落とされるのもアレだから、もっと確実な方法で倒すことにするよ」

「何をやる気だ……!!?」

レドはそう言うのと、瓦礫の後ろから何かを引き摺り出す。

瞬はその引き摺り出されたものを見た瞬間、思わず叫んだ。

「湖森!!?」

そう。

なぜならそれは、ずっと助けようとしていた妹だったのだから。

彼女もかなりボロボロになってはいるものの、まだ息はある様だ。2回も爆発に巻き込まれているくせに生きているのは、この兄にしてこの妹ありと言うべきだろうか。

瞬は我を忘れて駆け出し、湖森を助けようとする。

クロスドライバーが無くたって構わない。変身できなくとも、家族の為にならいくらでも命を張ってやる。

そう意気込んで突っ込んできた瞬を、レドは笑いながら見ていた。

「そう、君の妹だ。これを——こうだ！」

「!?？」

レドは一枚のカードを取り出し、湖森に押し当てる。

すると、湖森の身体がみるみるうちにカードの中へと吸い込まれるようにして、消えてしまった。

「なっ……何をした!?？」

「カードに封印した。人質の持ち運びが便利になるからね」

「湖森を返せ！目的は俺なんだろう!?？ なら俺だけを狙えよ!?？」

「ヒーローになった時点でさ、敵にこういう手段を取られることも考慮してなきやダメだよ。本当、清々しいまでのテンプレ反応をどうもありがとさん。仮面ライダー……アアッ！」

「ばふしっ!?？」

人質作戦という卑怯な手に出たレドに怒りを燃やす瞬だったが、湖森が文字通りレドの手の中に治っている以上、迂闊に手が出せない。

レドはそんな瞬の様子をケラケラと笑いながら、無抵抗の瞬を殴りつけた。

殴られた瞬の身体は、瓦礫の山を一気に転がり落ちてゆく。

ゴツゴツした瓦礫の斜面に身体を傷つけられながら、アスファルトで舗装された最下

層まで落とされる。

「ギフトメイカー……どこまで卑劣なんだ……!!?」

「そうカツカするなよ。てか、僕はまだ優しい方だと思うよ？バルジだったら、目の前で爆殺どころか、バケモンに変化させて襲い掛からせるくらいの事はしてただろうしさ」
「お前……五十歩百歩という言葉を知ってるか？」

レドの卑劣な手段に、裁場も怒りを抑えきれないでいた。

が、レドはバルジを引き合いにだして正当化を試みる。レドはバルジのことを嫌っているが、結局のところ、彼らは同類でしかないのだ。

裁場はクロスドライバーに手をかけてはいるものの、湖森が人質に取られている以上、迂闊に変身ができない。

「くそっ……なんとかして湖森を取り返さないと……!」

瓦礫の山の麓まで転がり落ちた瞬は、下から瓦礫の山の頂上で睨み合うレドと裁場を見つめていた。

瞬のクロスドライバーは、現在裁場の手にあるため、瞬は変身できない。仮に出来たとしても、その場合は湖森の身が危ない。

どうすればいい。

どうしたらいい。

(どうしたら……いいんだよ……!!?)

瞬はレド達の方を見上げながら、悪態をつく。

が、ここで気づく。

(あれ? ボマーのやつ……何する気だ?)

ゆらり、ゆらりと。

レドの後ろに立っていた赤浦が、ゆつくりとレドに近づいていつている。先程までずっと黙り込んでいた彼だが、一体何をする気なのだろうか。

不気味なまでに沈黙を保ち続ける赤浦に、警戒を強める瞬。

だからその沈黙は、瞬の予想を遥かに上回る早さで破られた。

「マイン・ザ・ドッグス！」

「!!?!」

湖森を封印したカードをチラつかせながら優位に立っていたレド。

その後頭部に、いきなり強い衝撃が加えられた。

グシャリと、聞くに耐えない鈍い音が響き渡るとともに、レドが殴り倒される。

何が起きたのだと後ろを振り向くレドだったが、ここで自分の手足が金属製のリングのようなもので拘束されていることに気づく。

こんなことをするのは、できるのは、この場には一人しかいない。

「なっ!?? 赤浦っ……お前何考えてんだよ!?? ギフトメイカーである僕にこんな真似をしてタダで済むとでも!??」

レドは後頭部から血を流しながら、自身の背後にいた襲撃者——赤浦に罵声を浴びせる。

レドが先程まで立っていた場所には、血走った目をした赤浦が立っていた。彼は、仲間だったはずのレドを見下すかのような目つきをしている。

突然の敵の仲間割れに、裁場は動揺を隠しきれない。

「何!?? お前ら……仲間じゃないのか!??」

「いい加減にしろよ……これはさあ、俺と慈愛の問題なんだ。AMOREとかギフトメイカーとか仮面ライダーがでしゃばっていい話じゃねーんだよオ……爆破すぞ」

「ふざけんなっ……ただの転生者の分際で……っ!」

「動くなよ。無理に恥ずそうとすれば、その拘束具は爆発する」

飼い犬に手を噛まれるとはまさにこのこと。赤浦の言葉を聞いたレドは、顔を歪ませる。

目の上のたんこぶだったギフトメイカーをあっさりと無力化した赤浦は、ボマーオリゾンへと姿を変えると、自身を警戒している仮面ライダー達に顔を向ける。

「今日はツイてない。誰も彼も横槍が入りすぎて、己の目的を果たせないでいる……お

前らだつてそうだろ？この一日だけで何度邪魔をされた？何度ゴールから遠ざけられた？いい加減に足踏みばかりのスゴロクから一抜けしたいんだよ、俺はさ」

「悪いがお前がゴールに辿り着くことはない。俺がここでお前を倒すからだ」

同情を求めるかのように被害者ぶるボマーオリジオンを、裁場は軽くあしらいながら、カチャリと、自身のクロスドライバーを腰に装着する。

ボマーが地を蹴つて裁場に突貫しようと動き出すのと、裁場がライドアーツを装填し終わったのは、同時だった。

「変身っ！」

《CROSS OVER！仮面ライダーユナイト！》

ガッ！！？！！？！！？ と、ユナイトとボマーオリジオン、両者の拳がぶつかり合う。ぶつかり合った拳達は、まるで反発しあう磁石のように弾き上げられる。

「ほらあつ！」

《フュージョンマグナム！》

拳を弾かれたユナイトだが、即座に腰のホルスターに携帯していた銃型武装・フュージョンマグナムを引き抜き、速射した。まるで西部劇のガンマンの如き光弾銃の早撃ちが、ボマーオリジオンの腹部に命中する。

が、この程度で止まるような相手ではない。

ボマーオリジオンは、デフォルメ化された爆弾のような形をした肩アーマーを取り外すと、その導火線を噛む。そして、ボマーの口が導火線から離れたときには、そこには火が灯っていた。

そして、その爆弾をぶん投げながら、ボマーオリジオンはたずねる。

「火薬100%の特製爆弾と、プラスチック爆弾の雨。どちらが好みだ？」

「悪いがどちらも却下だ」

《LEGEND LINK! Unbreakable golden spirit! C
RAZY DIAMOND!》

ユナイトはそう吐き捨てると、別のライドアーツをクロスドライブの左スロットに装填する。すると、銀色とピンク色で構成されたプロテクターのようなのがユナイトの背後に出現し、彼に覆い被さるようにして装着されていった。先程アラタ達の前で曝け出したフォーム・リンククレイジーダイヤモンドである。

レジェンドリンクをし終えたユナイトだが、間髪入れずにボマーオリジオンが、左手に握りしめていた、ビー玉サイズの無数のプラスチック爆弾をばら撒いた。

ユナイトは眼前には、火薬たっぷりの肩パッド爆弾と、横殴りの雨のように降り注ぐ大量のプラスチック爆弾。

だが、彼はその場から一步も動かなかった。

「ドラララララララララララララララララララララララアイツ!!?」

ユナイトは目にも止まらぬ速さのパンチのラッシュで、爆弾の雨を迎え撃った。

「なっ……なんだっ……!!?」

まるで手が何本にも増えたかのように錯覚してしまうほどに素早いラッシュ攻撃が、小さなプラスチック爆弾の雨を完全に弾いていた。

いや、弾いているのではない。

戻されている。

殴られた爆弾達が、黄色いオーラを纏いながら、自身が生み出された場所であるボマーオリジオンの手のひらの中へと、戻って出ているのだ。

そうして、数秒のラッシュの後。

ボマーオリジオンが生み出した全ての爆弾は、爆発することなく無力化されていた。

「くそっ……そりゃあ相性最悪にも程があるぜ!!?」

「だろうな。これ以上破壊をばら撒かれても困るからな」

ユナイトの反則めいた能力に、思わず文句を垂れるボマーオリジオン。

その時、それまでずっと2人の戦いをずっと見ていた瞬が、ここで動き出した。

「そっだっ!今のうちに湖森を!」

ずっと2人の戦いを見ていた瞬だが、そんな場合ではない。

今レドはボマーに拘束されて動けない。ならば、今こそ湖森が封じ込められたカードを奪うチャンスだ。

瞬は、ユナイトとボマーの激戦を迂回しながら瓦礫の山を登り、うつ伏せの状態で固定されているレドの元まで辿り着くと、彼の手の中にあつたカードを奪い取る。

レドの手には他にも何枚かカードが握られており、どれが湖森が封じられたものなのかはわからなかつたので、瞬はとりあえず全部奪い取つてみた。

「返せっ……!」

レドの言葉を無視して、取り上げたカードを確認する瞬。

そこには、「港トモリ」「相藤レイ」「イスタ」「逢瀬湖森」と書かれた4枚のカードが存在していた。何処となくブレイドの使うラウズカードに似たようなデザインなのは、気のせいだろうか。

レドは、あの崩落のどきどきに紛れて、レイ達も封印していたのだ。

予想が当たつてしまつて苦虫を噛み潰したような顔になりながら、瞬はレドにたずねる。

「どうやったたらカードに封印された奴らを解放できる?」

「僕の転生特典でしか解放できない。だけど僕がそんなことするわけがないだろ? 君の

一緒にいた遠野や山風やハルも、この凄惨な光景に言葉が出なかった。

志村は何度もえげずきながら、死体の海から目を逸らす。これ以上見続けていると、冗談抜きで胃の中身が空っぽになるまで吐いてしまいそうだからだ。

死体の海を視界に入れまいと、後ろを向く志村。そこへ、幾つもの声と足音が近づいてきた。

「あれ、アンタ達逃げたんじゃなかったのか!?」

「決闘デュエルしている間にこんなことになってたのか……」

「なんだこれはたまげたなあ……すっげえ崩壊してるゾ〜コレ」

「すごいわね……」

「なんかバコスカ殴り合ってる音がするよ?」

アリアにキンジ、遊矢に柚子、迫真空手部に律刃、剣崎にアラタに大鳳にセルティ。各々の戦いを切り抜けた仲間たちが、この場所に続々と集まってきていた。

皆が皆傷だらけだが、その目は死んではない。誰もがまだ、無事にこの戦いを終えて帰るのだという信念のもと、心と身体を動かしていた。

志村は仲間たちの無事に安堵し、彼らに駆け寄っていく。

「みんな……無事でよかった!」

「志村、お前まだ逃げてなかったのか? ったく、皆考えてる事は同じってことかよ!」

「?」

「逢瀬達がまだいない。きつとこの先にいるんだ」

アラタはそう言って、死体の海の果てにある、瓦礫の壁を指差す。

そこは、プラネットプラザの崩落によつて生じた瓦礫が、地下駐車場を分断していた。そしてその奥から、何やら誰かと誰かが殴り合っているような音が断続的に聞こえてきている。

それを聞いた全員が、薄々勘付いていた。

あそこに逢瀬瞬はいる、と。

『どうする? 助けに行くのか?』

「ああ。まだ終わってないなら助太刀に行く。言い出しつぺがいなきや話にならないからな」

「そうだよな。じゃ、いこうか」

セルティの問いかけに、皆が一斉に頷く。満場一致だった。

意を決して、アラタが先陣を切つて死体の海に足を踏み入れる。すべては、仲間を助けるために。

その時だった。

キイイイイイイイイイイイイイイイイイインツ!!?!!?!!? と、脳味噌を直接揺さぶるような破壊音と共に、何かがアラタ達の間を通り抜け、瓦礫の壁へと突っ込んでいったのは。

その音は、凄まじく不快なものであった。

まるで脳味噌に稼働中の電動ドリルをぶち込まれたかのような、脳味噌が比喻でなく木っ端みじんになってしまいそうな、そんな衝撃がアラタ達を襲い、彼らの身体を地面へと押し倒す。平衡感覚がなくなり、意識が消失と覚醒を繰り返し続ける。

吐きそうになるような不快感に耐えながら、アラタは顔を上げる。

そして、〃ソレ〃を見た。

「あれは……………なんだ?」

アラタが、ぐわんぐわんと未だに揺れている脳味噌で、必死に絞り出した第一声がそれだった。

追突した瓦礫の壁は跡形もなく吹き飛び、その向こう側の光景をアラタ達に曝け出していた。そこには、ボマーオ리지オンと謎の仮面ライダーが戦っており、そしてその前では、地面に倒れたギフトメイカーの傍らに立ち尽くす逢瀬瞬の姿も確認されている。

瓦礫を吹き飛ばした〃ソレ〃は、そこに立っていた。

“ソレ”を、アラタ達は知っている。

金色のシヨートヘア。肩を出した裾の長いパーカーと、その下に隠れたスパッツ。よくわからないメーカー製のスニーカー。どれをとつても、何度見ても、それはアラタ達のよく知る存在だった。

だが、何かが違う。

見た目は同じはずなのだが、その身から漂わせている雰囲気が決定的に違う。

震える唇で、アラタは“ソレ”の名前を口にする。

「唯……なのか……？」

諸星唯。

“目醒めた”彼女が、そこにいた。

一番驚いていたのは、間近で“ソレ”の飛来を目撃していた瞬だった。

「なんなんだよ、これは……！！？」

途轍もない速度でつつこんで瓦礫を吹き飛ばしながら、目の前に現れた“ソレ”を見た瞬は、目を疑った。

脳を揺さぶる破壊音によって立つこともままならなくなり、瓦礫の山に伏せていた瞬だが、「ソレ」を目にした瞬間、おぼろげだった意識が強引に覚醒した。

「唯……………」

“ソレ”は、瞬のよく知る人物だった。諸星唯。毎日の様に顔を合わせていた幼馴染み——の筈だ。

しかし、その身に纏う雰囲気は明らかに普段と違う。

何処をどう見ても、生物学的には間違いなく諸星唯であるはずなのに、瞬の魂が「それは違うのでは？」と否定してしまう。まるで唯そつくりになられたロボットか何かと相対しているような気分になってくる。

「唯……………どうしたんだ？」

瞬の問いかけに、唯は答えない。

彼女は無言を貫いている。人間味を微塵も感じさせない眼差しだけが返ってくる。

ひよつとすると、これが志村が言っていた“目醒めた唯”なのだろうか。

「ぼふっ……………だ、が……………」

その時、瞬の後方では細かい呻き声がした。

ぼつと振り返ると、そこには一人の少女が倒れていた。ぼさぼさになった紫髪、ボロボロになったゴスロリ衣装、口から流れ出ている赤い血。それらすべてが、彼女が酷く

瞬の言葉をバツサリと否定したのは、リイラだった。

瞬はリイラの元へと駆け寄ると、彼女の肩を掴んで問い詰める。

「どういふことだよ?!? 何か知ってるのか?!?」

「知ってるよ、でも教えない。教えたところで私以外にはわからないだろうし」

「なに……?!?」

「でもひとつだけ事実を教えてあげるわ。アレは最初から彼女の中に眠っていた力。私達が干渉しなくても、遅かれ早かれ目醒めていたモノ。それが私との衝突で目醒めてしまった」

「なんだって……?」

瞬は、唯の方を振り返る。彼女はすでに、リイラのすぐそばまで来ていた。

ゆっくりりと、唯が手を伸ばす。

たったそれだけの動作のほずなのに、瞬は震えあがった。まるで巨大怪獣の足元に放り出されたような気分だ。いつ踏み潰されるかわかったもんじやない。そんな恐怖が、瞬の全身を包み込んでいた。

だが、怖がっているわけにもいかない。勝手に震える唇をなんとか自分の意思のままに動かして、瞬は唯に声をかける。

「待てよ唯、何をする——」

瞬がそう言いかけた時だった。

ここでようやく、唯が口を開いた。

「ひれ伏せ」

一言、そう発した。

それだけで、先程まで戦っていたはずのユナイトとボマーオリジオンが、まるで見えない手か何かに押さえつけられたかのように、地面に押し倒された。

そしてそれは、瞬とリイラも同じだった。

彼らもまた、ユナイトタチのように地面に押し付けられていた。凄まじい重圧に、身体が押し潰されてしまいそうになる。首を上げるのがやっとなほどだった。

「なんだっ……コレは!?？」

「成長はやすぎないっ……ダメ、このままじゃ逆に喰われる!?？」

唯の『覚醒』について何かしらを知っているリイラにとつても、この行動は予想外だったようで、先程までの比較的余裕のあった態度が崩れ始めている。

まるで死にかけの蟬のように手足を動かすリイラに、唯が声をかける。

「何を怯えている？お前の望み通り出てきてやったんだ、感謝こそされれど、恐怖されるいわれはない」

「……いや、あつけないなあと思って」

「ああ、呆気ない。あれほど強がっていたくせに、態度だけだったとはな。心底拍子抜けしたよ。正反対の力を持つお前とぶつかり合えば、何かを思い出すと思つたが——やはり、ひと想いに取り込んでやるのが手つ取り早いかな」

そう言いながら、唯はリイラのそばで座り込み、彼女の首に手をかける。

そこに、

「待てよ唯……何しようとしてんだよ、お前」

「なんだ人間。まだ立つのか？」

寸前で割り込んできた瞬の声。

リイラの首を握る手に力を込めようとしていた唯——の姿をした何かは、その手を離して、瞬の方を見る。

酷く冷たい眼差しに身体を貫かれながらも、瞬は続ける。

瞬は、全身に重くのしかかっている重圧に必死で耐えながら、両手で地面をしつかりと押さえ、立ちあがろうとしていた。

「お前が何をしようとしてるのかは分からないけど、それだけは駄目だ。本物の唯ならそれを望まないはずだ」

「……おかしなことを言う。私が偽者？ いや違う、私も諸星唯だ。私はいわば諸星唯に眠っていた力の根源、それが意思を持ったもの。危機に瀕した彼女を救うために現れた

「防衛機構だ」

「お前がなんでそこにいるのかはわからないけど……ぼつとでの癖に、俺の幼馴染みを勝手に動かしてるんじゃないやねえよ！これ以上事態がややくしくなつてたまるかっ！」

唯がどうしてどうなつていいのかわからないけど、ここでひれ伏しているわけにはいかない。瞬はその思いだけを糧に、途方もない重圧に逆らつて直立する。

足はガクガクと震えているし、連戦によつてついた傷口からは、いまだに血は流れつぱなし。そんな有様でも、瞬は立ち上がらざるを得ない。こんな得体の知れない奴に唯を好き勝手させてたまるものか。その思いを燃やし、瞬は「彼女」に肉薄する。

しかし、

「ふん」

「がっ……」

「彼女」は容易く瞬をあしらうと、お返しと言わんばかりに、瞬の身体に強烈な打撃をお見舞いし、彼の膝を地に付かせる。

「彼女」の足元にひざまづく形となつた瞬に、彼を非難するような声が振りかけられる。

「お前が守らないから私が動かざるを得なかつた。彼女はわたしたちの中で唯一覚醒していないが故、自力で身を守る術がない。だから防衛機構として、代わりに私が生み出

された。私は、お前の無力の象徴なのだ。なあ……仮面ライダーアクロス」

瞬は、「彼女」の言葉を聞いて黙り込んでいた。

一体、こいつはなんなのだ？

なんでこんなものが唯のなかにある？アイツは、諸星唯は、普通の女の子のはずだろう馬鹿でお調子者で後先考えなくて、でも誰よりも優しく他人のことを考える。そんな普通の女の子だったはずだ。それは瞬と出会った時から変わっていない。

それがどうして、こんな得体の知れないモノに身体を奪われなきゃならない？彼女が何をしたというのだ？

混乱と畏怖で呼吸が荒くなる瞬に、「彼女」の冷ややかなる声がかげられる。

「お前と諸星唯じゃ力不足だ。だからここから先は私がやる。お前は大人しくすつこんでいろ、コレはお前の手に余る」

不甲斐ない宿主とそのパートナーに対する戦力外通告。

そのために「彼女」は姿を現した。

「彼女」は、身動きできないリイラにトドメを刺すべく動き出す。全ては、宿主を守るため。脅威を取り除くため。ひとりの少女のために生まれた守護者は、少年の真横を素通りして、脅威の排除に赴く。

「お前の分まで戦って、運命を断ち切る。その方が幸福だろう？」

「……………」

瞬は、考えていた。

いや、考えるまでもなかった。

怯える必要も、戸惑う必要もない。

初めから、言うべき言葉は決まっていた。ただ、ぶつけるべき相手が増えただけのことだ。

「彼女」の一言が、瞬に火をつけていた。

がしりと、「彼女」の手を掴んで、瞬は立ち上がる。

「さつきから何勝手なことを言っただけ……？」

「勝手ではない、諸星唯が望んだのだ。『守られ続けるだけなんて嫌だ、私も瞬の隣に立ちたい。』その願いに応じて私は呼び出された。故に、だ。無力なお前らに変わって戦いを引き受ける。悪い話ではないはずだが？」

その言葉で、瞬は確信した。

というか、キレた。

——コイツ、何様のつもりなんだ？と。

「お前は馬鹿だ！お前だけじゃない……AMOREも裁場も、馬鹿じゃねえの!!？」

何が「お前の代わりに戦つてやる」だ!?? ふぎけるな!!? 勝手に他人の力量を決めつけで推し測つて、そいつから何もかも取り上げて救つた氣になつて……そんなもんが「助ける」であつてたまるか!!? それは、ソイツの頑張つてきたこと……いや、存在や意思を否定しちまうようなもんだぞ!!? 人を助ける立場の奴が一番やつちやいけないことなんだよ!」

瞬は、必死になつて叫んでいた。

その言葉は、今もなお「彼女」の重圧に押し潰されているユナイト——裁場にも突き刺さつていた。いや、それはもとより、裁場に対してぶつけられるべき言葉だつたのだ。

「何が言いたい?」

眉を僅かに動かして、「彼女」がたずねる。

そして、瞬の言いたいことは、次の一言で集約された。

「余計なお世話だつて言つてんだよ、この野郎!!?」

そう叫びながら、瞬は「彼女」の顔を殴りつけた。

それが大切な幼馴染みの顔であるということも忘れた、感情任せの一撃。なんの力もないただの人間の拳は、「彼女」の頬骨を完璧に捉えていた。

そして、少年の拳が着弾した瞬間。

閃光が、再び生まれた。

第37話 AM3 : 21 / ふたりで歩む資格

PLAYBACK 4・Ver. 逢瀬瞬

逢瀬瞬には、何もなかった。

物心ついた時から、瞬には親がいなかった。

否、正確には6歳より前の記憶があやふやなのだ。どこそこに遊びに行っただとか、アレを買ってもらったとか、そういうのは覚えているのだが、それを誰と経験したのかを覚えていない。自分と共に過ごした人についての記憶だけがすっぽりと抜けている、なんとも歪な記憶喪失であった。芽生えていた幼い自我が、気づいたらまっさらになっていた。

記憶とは、心とは、他者と共に紡いでゆくもの。人との関わりの記憶が心を作るのだ。だから、その片方が欠落した逢瀬瞬は、酷く歪なものだった。同年代の人間とは何ら変わらない知能を持ちながらも、ロボットののような感受性を持った木偶人形。それが逢瀬瞬。

そうして一度リセットされた瞬は——驚くべき程に、周囲に対して無関心になっていた。

具体的に言えば、

「おいオカマやろう！おれたちが男らしくしてやるからカンシャしとけ！」

「やめてっ……ぶふっ!!」

「男らしさのけいこだい、一回1000円な！ほらほら立てよ！」

——教室内で公然として行われている虐めの現場を見ても、何とも思わないくらいに。

普通の人間ならば、止めに入ったり便乗して虐めに加担したり、はたまた関わり合いになるのを避けるために避けたりするだろう。そこには、いじめられっ子やいじめっ子への嫌悪感だとか怒りだとか哀れみだとか、そういうものが生じるはずだ。それは小学生だろうと変わらない。

しかし、当時の瞬はそれすら抱かなかった。ただ、完全な無。何も感じない、情動反応が欠落したかのような反応。背景が何かしやべっているな、とぐらいにしか感じなかった。心を動かされることのない、生を感じさせない情動が、続くはずだった。

——この時まで。

「ふざけるなあああああつ！」

突如として教室内に響き渡る甲高い声。そのあまりにも威勢のいい声に、教室中が一瞬静まり返り、そのあとすぐにどよめきが波のように教室中に伝播してゆく。瞬も異変

を感じ取ったのか、柄にもなく教室を見渡してみる。
が。

「何やってんだこのくそやろうがキイイイイイック！」

「ぼふあああつ!!」

次の瞬間、大柄ないじめっ子の身体が瞬に向かつて吹っ飛んできた。ガシャンと大きな音を立てて机や椅子をなぎ倒しながら床にぶつ倒れるいじめっ子。どこかにぶつけたのか、その膝や額からは血が流れていた。

瞬はいじめっ子が飛んできた方向に視線を向ける。そこには、金髪の女の子がいじめられっ子に手を差し伸べている光景があった。

「き、きみはだれ……」

「だいじょうぶ? けが……はあるよね……ないはずないよね……」

女の子はどこからか絆創膏を取り出すと、ボコボコにされていたいじめられっ子にそれを張ろうとする。しかし、ここでいじめっ子がキレた。

「どけー」

「ぬっ!!」

近くにいた瞬を無理矢理椅子から引きずり落とすと、なんと、瞬の座っていた椅子を持ち上げて女の子目がけてぶん投げた。他者に痛みを与える側として君臨し続けた6

「7年の短い人生の中で、初めて他者から痛みをもらったという事実には、彼の幼い精神が耐えられなかったのだ。」

この場にいた誰もが目を逸らした。どんな馬鹿力でぶん投げたのかは知らないが、椅子は見事なまでに女の子に向かって飛んでいる。彼女の負傷は避けられない。そう思っていた。

しかし、

「スターキイイイイイイックッ！」

女の子は、仮面ライダー顔負けの綺麗なフォームによる跳び蹴りで、飛んできた椅子を迎撃した。蹴りの命中した椅子は、投げたいじめっ子目がけて跳ね返ってゆき、彼の顔面に勢いよく背もたれから突っ込んでいった。勿論近くにいた瞬は慌てて避けた。

ガシャガシャガシャンツ!! とけたたましい音を立てていじめっ子のが倒れる。

あとはもうしっちゃんかめっちゃんかだった。

「ぶっ殺す!ぶっ殺す!ぶっ殺す!」

「よわい者いじめをするようなひきょうものぼうげんなんかいたくもこわくもないわ!ぜんいんまとめてたおしてあげるよ、かくごしな!」

「女のくせになまいきなんだよ!よくも徹人をやりやがったな!ゆるさん!」

「みんなで徹人のかたきうちだ!いくぞ!」

いじめっ子グループが一斉に女の子に向かって飛び掛かっていった。

怪我を負わされた友達の話と言えば聞こえはいいのだが、そもそも公然で虐めをやっておいてそれを咎められた側なので、全然同条はできない。むしろ、この瞬間、虐めを止めるためにやってきた彼女が、この場で一番ヒーローらしかった。

が、流石に女子1人で男子5、6人を相手取るのは厳しい。しかし、止めに入ろうにもそんな勇気を持つような奴はいない。誰もが彼女の敗北を悟り、逃げ出していた。

「……………」

——あの時、なんであんなことができたのか、今でもわからない。

——この時のことは、今でも鮮明に覚えている。

「ばいんっ!!」

気づいたら、瞬はいじめっ子グループの内のひとりの後頭部を殴り飛ばしていた。

バランスを崩したいじめっ子は、前方にあった机に顔面から突っ込み、ぐしゃりという不快な音と血をまき散らした。その光景を見た大人しい方の女子が悲鳴をあげようとしたが、あまりの衝撃で文字通り声を失ったのか、その喉からは掠れた吐息だけしか出てこなかった。

いじめっ子が机と熱いキスをした瞬間、彼の頭部から飛んできた何か固いものが、瞬の頬にぶち当たる。それは歯だった。生え変わったばかりの永久歯が、ポロリと取れた

のだ。その光景に、いじめっ子も女の子も、思わず動きを止める。

最初に口を開いたのは、いじめっ子のうちのひとりだった。

「な、に……やりやがった……？」

「……………」

「なんとかいえよ！てかだれなんだよお前！」

「……………助けてくれたの？」

「……………やるぞ」

瞬は女の子の傍らに立ち、無意識のうちにそう言っていた。

彼女もその一言で何かを察したらしく、無言で大きく頷いた。

「かずがふえたところで何かかんけいねえ！まとめてぶったおす！」

「おおおおおおおおおおおおお！」

「うるさいからはやくおわらせよう」

「だね。もうこいつらのかおみたくもないよ」

戦いの火蓋が、切って落とされた。

この後は全校集會が緊急で開かれ、更に關係兒童の保護者も呼ばれて大事に發展した。いじめつ子連中は勿論、いじめつ子グループ相手に大立ち回りした瞬達もしこたま怒られた。もう小学生時代の叱責が全部まとめてやってきているんじゃないかというほどに怒られた。

いじめつ子連中は瞬達以上に酷く叱責された上、まとめて転校していったのだが、ふたりの大立ち回りがトラウマになったのか、いじめられつ子はクラス替えで別の学級に移動してしまった。そこだけは至らなかつたな、と今も反省している。

これは後に環四郎から聞いたことだが、当時の担任教師は虐めを黙認していたことを問われ、新年度が始まってまだ一カ月もたつていないというのにも関わらず、別の学校に飛ばされたらしい。ご愁傷様です。

そうして、数時間にわたつてカミナリを落とされまくつて泣きじやくつた後のことだつた。

「すけだちありがとね！あたし、諸星唯！となりのクラスなんだ！」

「……………逢瀬瞬」

互いに名を告げる。

互いにめちやくちやに叱られて泣き腫らした顔だつた。しかし、不思議と後悔はなかつた。

これがふたりの、あまりにも苛烈な出会いだった。

唯と出会ってからは、瞬は兎に角振り回されまくった。

ある日は「近所の山の頂上まで競争な！」といきなり言われて山に連れて行かれた挙句、行方不明になっていた近所の飼犬を連れ帰ってきて飼主に礼を言われたり、またある日は「よし夏だ！海だ！海水浴だ！」とうるさいので渋々一瞬に海に行けば、迷子探し×3や更衣室の盗撮犯を捕まえて褒められたりと、なんかもう無茶苦茶だった。

普段がしつちやかめつちやかな癖に、それ以上に周囲に幸せを与えてしまう。それが諸星唯の本日からだったのだ。

もちろん瞬は、最初は彼女のはちやめちやつぷりに振り回されるだけであった。何度余計なトラブルに巻き込まれたかはもう数え切れない。だが不思議と、心地良い日々だった。

そうして、唯と出会って数年の時が経った。

中学入学を間近に控えた頃、夕暮れの帰り道の途中のことだった。

瞬はぼつりと、つぶやいた。

「時々さ、虚しくなるんだ」

「いきなり何？ 詩人じみた台詞なんか言い出して。中二病？」

「やめろ、お前ほどイタクねえわ」

唯の揶揄いに軽くツツコミを入れる瞬。

空を見上げながら、彼は続ける。

「自分が、空っぽに感じる。何も持っていない、木偶の坊に思えてしまうんだ」

「そう？」

「笑うなよ。割と真剣なんだぜ」

「いや、笑うしか無いじゃん。アンタそういうキャラだった？」

「青年期特有のアレだって……お前だってそうだろ？」

「いやいや、私はさあ、皆ハッピーの精神の持ち主なワケですじゃん？。でもさ、私が

昔っからこんな言葉掲げてたと思うかい？ 分かってるんでしょ」

「……たしかに、お前にそんな事考えるほどの頭は無いわな」

「うわひでえ。女の子にバカって言いやがったよこいつ」

まあ割と唯が馬鹿なのは事実でしかないのだが。テストで0点とか取るようなやつが馬鹿じゃなくてなんだというのだ？

頭の出来を馬鹿にされた唯は、膨れつ面をしながら先を歩くが、ふと、何かを思いついたかの様に「あつ」と声をあげる。

「そうだつ！ そんなに空つぽが怖いなら、私があげようか？」

「どういう事だよ？」

「中身の話さつ」

唯は横断歩道の白い部分だけを踏んで渡る。

そして、渡り切った先でくると一回転して、さも名案が思いつきましたと言わんばかりの嬉しそうな笑顔をこちらにむけながら、唯は両手を広げ、自らの考えを口に出す。

「瞬はさ、自分の役目とか、そういうのがないから不安になつてるんだよ。なら今はひとまず、私と一緒にものを目指せばいいじゃん。最初は誰かの受け売りでもいいよ。ただ、続けていければ、いつかきつと瞬のモノになると思う。瞬なら続けられるさ、私が保証するさー！」

「お前と一緒……お前の人助け精神を、俺が？」

目指すべきものがないなら、自分がそれになつてやると。唯はそう言っているのだ。

しかし瞬には、できる気がしなかった。自分と彼女は別の人間だ。自分は彼女のように、誰かを助けることなんてできない。

「誰かの受け売りだつていいよ。単純に、瞬がやりたいことやってれば、そんな気持ちす

ぐ吹き飛ばよ」

「……なれるのかな、俺に」

「瞬ならでできる。初めて会った時、何も言わずに私に助太刀してくれたんだ。瞬には素質があるんだよ、きつと」

そう言いながら瞬の肩をポンと叩くと、唯は一人で先へと走ってしまふ。

誰かを助ける。何もない自分に、果たしてそれができるのだろうか？正直言つて、うまくやれる自信がない。

だが不思議と、できる様な気がしていた。

(あいつが……背中を押してくれているのか?)

唯の言葉を反芻する度に、胸の奥に熱い何かを感じ取る。

無根拠に自分を信じてくれる彼女。その思いを裏切るのは、なんだかとてももつたいない様な気がして仕方がない。

それならばいつそのこと。

「やってみるか」

彼女の言う通りに、やってみるのもいいのかもしれないと、瞬は思っていた。

この時から、『逢瀬瞬』は始まった。

その時から、瞬の中にソレが宿った。

そして、今――

????

「……懐かしい夢を見たな」

気がつくとは瞬は、真つ白な空間で大の字になっていた。

「彼女」をぶん殴った瞬間、閃光に包まれた彼は、これまでずっと過去を思い返していたのだ。

身体を起こすと、どこまでも広がる真つ白な空間。地平線も何も無い、ただっぴろい空虚な場所だけが鎮座している。

白一色の世界に存在する色といえ、ここで寝ていた瞬と――

「……ふにゃ？」

瞬の隣で眠っていた唯だけ。

こんな状況だというのに涎を垂らして眠そうな顔をしている彼女だが、瞬はそれを見て呆れると同時に、安堵していた。

いつもの唯だ。

「彼女」に突き動かされてはいない、普通の女の子だ。

「お前も、見たのか？」

「うん」

瞬の言葉に、唯は首を縦に振る。どうやら彼女も、瞬と同じ夢を見ていたらしい。

二人は、気が遠くなるほど真つ白な空間を、ただ見つめていた。

さつきまで血反吐を吐きながら戦いまくっていたのが嘘に思えてしまうような、それくらいさつきぱりとした風景だった。

どれくらい空白を眺め続けていただろうか。

何気なしに瞬が上を見上げた、その時だった。

「まさか、だ。まさかあの一撃で、諸星唯を目覚めさせるとはな」

「!?」

瞬と唯の二人しかいないはずの空間に、するはずのない、第三者の音が発せられた。背後から聞こえてきた声に驚き、ぱつと振り返る二人。

そこには、「彼女」がいた。

服装も髪型も声も何もかもが唯と瓜二つ。しかし、中身はまるで違う。どこまでいつでも「彼女」は、人間性のかけらもないシステムでしかない。

身構える瞬に、「彼女」は問いかける。

「そのままですて戦いたいのか、お前達は」

「？」

「傷つくような役目は他人に任せて、自分はぬくぬくと安全地帯に引き籠もることを望む。それが人間ではないのか？」

「……………」

瞬が「彼女」の言葉にどう返すべきか考えていると、先に唯が口を開いた。

「貴女が誰なのかはわからないけど、私達を思ってくれているのは知ってるよ。でも、それは受け入れられない。それは諸星唯じゃない。誰かの涙を見てしまったら、いつだって何度だって火中の栗を拾いに行く。それが諸星唯なんだよ」

「は…………？いや、何言ってるんだよ？お前おかしいぞ…………」

「コイツはそーゆー人間なんだ。自分だけすつこんでるつてのができるわけないだろ。

本人が望んでいない救いは毒にしかならないぞ」

「……………」

ありえない、と言う様な顔で固まる「彼女」。

そこに追い打ちをかけるかのように、瞬が続ける。

「俺は、誰かの為に傷付きたいと思ってる」

「なんだと？」

「俺は仮面ライダーになってから、いろんな奴を見てきた。どいつもこいつも、俺なんかにはないようなすげえものを持っていた」

そう。

瞬は自分の空虚さを知っている。新しい出会いのたびに、それを思い知らされてきた。

兵藤一誠のように心を燃やせるようなモノも、桐生戦兎のように確固たる信念も、黒神めだかのような大志も、榊遊矢のような夢も、天道総司のような強大な自我も、遠山キンジのような覚悟も、剣崎一真のような意志の強さも、そのどれもが瞬からすれば羨ましくて、輝かしいモノだ。

皆、自分には無い何かを持っている。自分にはないと思っているからこそ、それが尊いモノである事を知っている。そんな人達が生きるこの世界を守りたい。あれらが、悪意に踏み潰されてはならない。

そのための礎は、自分が引き受ける。それを踏み躪ろうとするならば、何度だって立ち上がる。

「誰もが譲れない信念とかがあって、それが傷つけられることが許せない。だから、この憤りは絶やさずに持っていたい」

「私だって同じだよ。誰かが泣いたりするのは嫌だし、それを見て見ぬ振りつてのは気分が悪い。ヒーローってそーゆうもんだと思うんだけどね」

「狂っているぞ、お前ら……」

瞬と唯の答えを聞いた。『彼女』は、目に見えて狼狽えていた。

こんな自己犠牲精神旺盛な存在を、『彼女』は知らない。

元より『彼女』は、宿主である諸星唯を守るために自我を獲得した。しかし、守るべき当の本人から不要と断じられてしまった以上、『彼女』は今、おおいに混乱していた。しかし、だ。

同時に『彼女』は、それをどこか「良かった」と思ってもいた。

「だが、その方がお前達らしい。それでこそ、私が目醒めるに値する存在なのかもしれない」

「え……?」

そう言った『彼女』は、何処か憑き物が落ちたような、すつきりした顔をしていた。

「お前達の覚悟は嫌という程分かったよ。これ以上私がでしゃばる意味はなくなつた」

「お望み通り、制御権を返そう」

「制御権……?」

「ああ。私の役目は終わった。大人しく消えて、諸星唯に全てを託す。だが、ここから先は運命との戦いだ。逃れる術はない。それでもお前達は——己を貫けるのか? 立ち上がるのか?」

そう問いかけると、『彼女』の身体が光の粒子となつて、唯の中に溶け込むようにし

て消えてゆく。『彼女』が流れ込んでくる度に、唯の中になんとも言えない、暖かさと力強さの様なものが伝わってくる。

消えゆく『彼女』に唯が何かを言おうとするが、『彼女』は唯の唇に指を当てて、彼女の発声を妨げる。

最後に残った口で、『彼女』はこう言った。

「せいぜい私を使いこなしてみせろよ、
 ■^諸 ■^星 の ■^唯 —」

そうして、二人の意識は現実へと舞い戻った。

気づけば、瞬は瓦礫の山の上で座り込んでいて、唯は瞬の前でぶっ倒れていた。

それは、現実時間にしては刹那のひと時に過ぎなかつたもの。しかし、二人にとっては何より大切な、成長の瞬間だった。

瞬は、目の前で倒れている唯に手を差し伸べる。

「……唯、立てるか」

「立てるよ」

瞬の手を借りながら、唯が立ち上がる。

「やっと、同じ場所に立てたね」

「ああ」

心も立場も違ったけど、今こうして、2人は同じ立ち位置に居られる。

守る守られるの一方通行でも、教え諭される一方通行でもなく、互いに切磋琢磨し合
い、背中を預ける仲間に、彼らはなったのだ。

「……やっ」と

瞬は唯と手を繋ぎながら、後ろを振り返る。

そこには、瓦礫の山の麓からこちらを見上げている、満身創痍の裁場がいた。先程ま
でユナイトに変身してボマーオリジオンと戦っていたはずだが、いつのまにか変身もと
けている。

ボマーオリジオンの方は、瓦礫に背中を預けるようにして倒れている。どうやら両者
は相当激しくやり合ったようだ。

裁場は、瞬達の覚悟を決めたような顔を見ながら、悲痛そうに叫ぶ。

「なんで……なんでそんな目ができる?!?」なぜお前達は立ち上がれる?!?」長年戦い
に身を置いていたわけでもない、戦いに身をおかねばならない理由もないのに、どうし
てだ?!?」まさか、正義感だけでここに立っているのか?!?」

しかし。

叫びながらも、裁場は分かっていた。
本当は羨ましいのだ。

自分が見失っていったものを、目の前で失われるのを見てきたソレを持つている瞬と唯が。ソレが失われてしまうかもしれないことが。これ以上失いたくないから、全部自分一人でどうにかしようとした。

裁場の脳裏にこびりついた、正義感に満ち溢れた戦友達、凄惨たる末路。それが、裁場を孤独な戦いに駆り立てる。逢瀬瞬を否定したがっている。

瞬が、裁場に手を差し出してくる。

「クロストライバーを返してくれ」

「……無理だ、俺はお前達を信じてやれない。俺の目の前では、お前達のような目をした奴らから死んでいった。今でも頭に焼き付いて離れないんだ……彼らの顔が」

「なら、これから信じさせるまでだ。俺達は死なないって」

「……………」

瞬と唯の力強い顔つきに、裁場は何も言えないでいた。

——これではまるで、自分が悪じゃないか。

誰かが傷つくのが嫌だから、自分以外の誰かから傷付くという可能性を奪おうとした。だがそれは、自分と同じ思いを持つ者に関しては余計な者でしかなかった。ファイフ

ティはそれをわかっていたからこそ、裁場を否定していた。

もう、裁場には瞬達の前に立ち上がる資格がない。否、初めからなかったのかもしれない。それを理解してしまった裁場は、黙り込んでしまった。

「……………」

そして。

長い長い沈黙の後、裁場は口を開いた。

口から出たのは、羨望の言葉だった。

「……羨ましいよ。俺も昔は、お前達みたいな顔ができていた」

「前にできていたんだから、多分今もできるはずだよ」

「分かっている。俺がどれだけ突っぱねようとも、お前達は折れないということは」

「ああ、あんたが何度邪魔をしようとも、俺達は変わらないぞ」

「ならば……お前達を試す」

「試す……？」

裁場はそう言うと、懐からクロスドライバーを取り出した。

差し出されたソレを、瞬は見つめていた。一体どういうつもりなのだ？

瞬が差し出されたクロスドライバーを見つめてみると、裁場はそれを半ば強引に押し付けるかのように、瞬に返却する。

「今から始める戦いで、お前達の覚悟を俺に示してみせろ」

裁場がそう言った直後、近くで瓦礫が崩れ落ちる音がした。見ると、先程まで動いていなかったボマーオリジオンが、再び立ちあがろうとしていた。

ボマーオリジオンは大変怒っているようで、口元から血を流しながら、自分の邪魔をし続ける仮面ライダー達に怒りをぶつける。

「さつきから俺を蚊帳の外にしていると、お前ら舐めてんの？部外者の癖にしゃしゃり出てんじゃあねーよこのクソカス野郎共ツ!!？」

ボマーの怒号に臆する者は、誰もいなかった。

瞬と唯は、互いに軽口を叩き合いながら、ボマーオリジオンと相對する。

「戦えんのかよ、お前。敵はめっちゃ強いからさ、こちとらあんまりお前にまで氣い回せねえかもしれねえぞ。いいのか？」

「ははーん、随分と調子こいてない？言つとくけど、私の方が運動神経も上だし、お節介の先輩だよ？先にヒーローになったからって、あんまり見くびらないでよね」

「言つてろよ。さつきまで自分の力に呑み込まれてたのは誰だよ」

「私だよ。いいから行くようよ。何もかも終わらせてさ、こんな所、さつさと出よう」

（——っ！）

この瞬間。

裁場の目には、消えていった数多の戦友達の姿が、見えた気がした。

自分も瞬達のように、熱い正義のハートを胸に戦っている時があった。だがいつしか、悲劇を繰り返すうちになくなってしまった。目の前でなくなっていくソレを眺めるうちに、見るのが怖くなってしまった。

（俺も……アイツらのようにできるのか？あの時のような気持ちを、持っていないのか……？）

答えはまだ出せない。だが、彼らを失うのだけは嫌だと、強く思った。

一步、裁場は足を踏み出す。

心身ともに擦り切れた戦士が、再び歩き出そうとしていた。

その頃、少し離れた位置で一部始終を見ていた志村達はどういうと。

「何が起きたんだ、あれ」

「さあ……？兎に角、唯ちゃんが正気に戻った……ってことでいいのかな？」

「これももうわかんねえなあ」

何が起きたのかさっぱり分からず、絶賛混乱中であつた。

だが、なんだかんだで危機的状況を脱したというのだけは、雰囲気で察していた。あとはボマーオリジオンさえどうにかしてしまえば、事件のかたはつく……筈だ。

「俺達も加勢した方がいいのか……? どうする?」

ここで見守っているよりも、自分達も加勢した方がいいのではないか? と思つた劍崎は、死体の海に一步足を踏み入れる。

その時だった。

「劍崎さんの身体……いや、ブレイドのバックルが光っている!!?」

「なあつ!!?」

突然、劍崎の懐にしまつてあつたブレイバックルから、眩しい光が発せられた。

その眩しさにたまらず一同は目を覆うが、その直後、ブレイバックルから凄まじい勢いで一筋の光が飛び出し、瞬のいる方目掛けてとんでいった。

「……なんだつたんだ、今の」

「分からないけど……多分、あれは逢瀬を助けてくれる筈だ」

暗い地下駐車場を照らしながら飛んでゆく一筋の光を見届けながら、アラタはそう言った。

その光は、最後の一押しとなる。

その光は、まるで吸い寄せられかのようにして、瞬の手のひらに飛び込んできた。手に伝わった衝撃に思わずふらつきながらも、瞬は自身の手のひらを覗き込むと、そこには、見たことのない、新たなライドアーツが握られていた。

ややデフォルメ化されたブレイドの顔の記された、青いライドアーツだった。

「これは……」

「いいじゃん、新たな力とか燃えるよね」

唯の言葉に頷きながら、瞬はクロスドライバーを腰に装着し、アクロスライドアーツとブレイドライドアーツをバックルに装填する。

そして、

「変身ー!」

《CROSS OVER!正義の意志をフュージョライズ!不撓不屈のウオリアー!仮面ライダーユナイト!》

「変身っ!」

《LEGEND LINK!Fight your destiny, awaken, warrior! LINK BLADE!》

瞬と裁場は、2人揃ってアクロスとユナイトに変身する。

アクロスが変身した直後、何処からともなく大きなランプが飛んできて、アクロス

の周囲を旋回し始める。そして、そのトランプ達が、勢いよくアクロスにぶつかることも、その形を変えてゆく。

背中にぶつかった数枚は赤いマントに、肩にぶつかったものはスパーダマークを模した形状の肩アーマーに、胸にぶつかったものは、ブレイドのモノに酷似した形状の胸部アーマーに、顔にぶつかったものは、ブレイドの顔を模したフェイスプレートとなって、アクロスの顔を覆った。

そして、アクロスの左手には、ブレイラウザーに似た形状の剣が出現する。アクロスはそれを強く握りしめ、刃先をボマーオリゾンに向けて叫ぶ。

「仮面ライダーアクロス：リンクブレイド、反撃開始だ！」

これより、この夜最後の戦いが幕を開ける。

第38話 AM3 : 25 / 歪んだ愛を唄う街

アクロス達がボマーオリジオンとの決戦を始めたその頃。

今回のイスタ及びアクロス奪取作戦を指揮していたAMORE隊員・いらぎじんざく苛木甚作は、頭から血を流しながらプラネットプラザの出口を目指していた。

ボマーオリジオンの爆破に巻き込まれた彼は、片腕は折れ、背中は焼け爛れ、身体のうちこちから血を流している。まさしく満身創痍、這う這うの体で逃げていた。

普通なら既に意識を失ってもおかしくない程の大怪我なのだが、苛木は逃げながらも、その顔に邪悪な笑みを絶やしてはいなかった。

「ふう、ははははっ……」

笑う度に、苛木の口から血が零れ落ちる。中も外も、彼の身体はボロボロを極めている。

2回も至近距離で爆発に巻き込まれながらもいまだに歩ける程度の負傷で済んでいるのは、苛木の生存能力の高さと、彼の着ているAMORE特製の強化制服の性能の合わせ技がなせる事だろう。

「どいつもこいつも何故わからない……!!? これは世界を守るための行いだっ!だと
いうのに、この未開の猿共は……!!? 誰が転生者からお前達を守ってやってるとい
うのだ!!?」

苛木は、折れていない方の腕でプラネットプラザの壁を叩きながら、自らの邪魔をし
てきた者達への呪詛を吐きまくる。

本来の目的だったイスタも、アクロスへの人質として捕らえていた女共も、ギフトメ
イカーの少年にカードにされて奪われてしまった上、とあるルートから入手した手段で
オリジン化させた隊員達も全員倒されてしまった。

もはや、苛木に勝機はなかった。

だが彼は諦めてはいない。ここを生き延びればまだなんとかなる。とあるルートか
ら仕入れたオリジン化のノウハウはまだ生かせるし、自身の権限を使えば、失った部
下の代わりの人員はいくらでも招集できる。まだ、やりなおせる。

「1年前にイスタを手にいれようとした時だって、なんとかなったんだ。私の権力を使
えばこの程度の失態は簡単に無かったことに——」

「なると思ったのか? んな都合のいい話を通るわけないだろう、組織の面汚しめ」
が、運命は彼を見放した。

苛木の野望はここで潰えることとなった。

ずっと俯き気味に歩いていた苛木が顔を挙げると、彼が目指していたプラネットプラザの出口に、誰かが立っているのが見えた。

出口の自動ドアのガラスから覗く街灯の光による逆光と、凄まじい豪雨のせいで、苛木からはその人影の詳細を確認することができない。

「誰だお前たちは……そこを退け！」

苛木は出口を塞ぐように立つその人影達に怒鳴り散らす。

人影達は苛木の言葉に無反応を貫きながら、プラネットプラザ内部に入ってくる。

プラネットプラザ内の照明に照らされ、人影達の素顔が露わとなる。

一人は、ウェーブがかった黒い長髪の、痩せ型の中年男性。コートからズボン、ブーツまで全身真っ白な衣装を身に纏い、上着の胸ポケットにはよく分からないブローチのようなものをつけている。

もう一人は、真っ白なAMORE隊服を着た、高校生くらいの少女。アホ毛のようなものがびよこんと立った黒い髪に、やけに目立つ白いカチューシャをつけており、ミニスカートから覗かせている太腿には、ホルスター付きのベルトを巻いている。

少女の方はともかく、問題は男のほうだ。

苛木は男の素性を知っている。あの白い服装は間違いなくAMOREの一員なのだ
が、彼の場合はそれ以上にヤバイ。

まるで喉元にナイフを突き立てられたかのような重圧を身に受けながら、苛木はその男の素性を口にする。

「四切宮局長……なんで貴方が……?!?」

「私がいることに対して何か文句があるのか？むしろ私の方が君に文句を言いたいのだがね」

しきりみやつぐろう

四切宮嗣郎。

彼こそがAMOREの創設者にして、組織を束ねる局長だ。

四切宮は、満身創痍の苛木にツカツカと歩いて近づいてくる。土砂降りの雨の中にとたというにも関わらず、その身体は全く濡れていなかった。

「君の悪事は全て調べさせてもらったよ。一年前の事件——青島慈愛あおしまじあいの殺害及び、イス夕強奪未遂の件もね」

「なっ……何故ソレを?!? 私に繋がるモノは全て完璧に切り捨てたんだぞ?!? 今更私に辿り着けるはずがない!!?」

「まさか君如きが私を欺けると思っていたのかい？だとしたら心外だな。組織内で私がどう呼ばれているのか、知らないわけではあるまい」

「『全能』……ふざけやがって!!?」

苛木は怒りのままに四切宮を突き飛ばそうとするが、突き出した腕は四切宮に触れる

事も叶わず、虚空を押すにとどまる。

ばつと後ろを振り返ると、四切宮はいつのまにか苛木の背後に回り込んでいた。まるで瞬間移動でもしたかのような動きだった。

苛木は腰に携帯していた自動小銃を抜くと、ノールックで四切宮目掛けて引き金を引く。しかし四切宮は、まるで埃を払うかのようにウデを一振りするだけで、放たれた弾丸をはたき落としてしまった。

四切宮の人間離れた身体能力に驚きを隠せない苛木。恐怖のあまり自動小銃を取り落とし、四切宮から離れようとする。

「ふざけているのは君の方だろう。我々AMOREは影に生きるもの。転生者絡みの事件を除いて、必要以上に異世界に関与してはならない。だが、君はやりすぎた。世界を守ることを建前に、悪徳転生者との不正な取引に加え、何の罪もない民間人を人質にとつての脅迫……懲戒免職ではすまないだろうね」

淡々と、四切宮は苛木を糾弾する。

AMOREのトップに立つものとして、世界を守る者として、組織の名誉を貶めた裏切り者を決して許しはしない。

苛木は淡々と接近してくる四切宮に狼狽えながらも、必死に自らの言い分をぶつけようとする。

「あ、貴方のぬるいやり方では世界を守ることなんて到底不可能なんだ！ギフトメイカーの台頭によって、転生者犯罪の脅威は日に日に大きくなる一方だ。今までのやり方やあ駄目なんだ！本気で世界を守ろうというならば、不穏分子を滅ぼして我々自身が絶対的な力で管理するしかないのだ！」

「ソレはダメだ。そんなことをしてしまえば、我々も悪徳転生者と同じになる。君がやろうとしていることはただの独裁だ。AMOREは転生の秩序を守るための組織、それ以上でもそれ以下でもない。君はソレを履き違えた。だからこそ、罰しなければならぬ」

「ふざけるな……こうなったら貴様を始末して私がAMOREのリーダーに——っ！」

あらゆる面で否定されて自棄になった苛木は、四切宮を力尽くで排除すべく襲い掛かる。傷だらけの身体にも関わらず、手にナイフを持ち。血気迫った顔で四切宮に迫る。

しかし、バシバシバシンツ!!? と。

苛木がナイフを振りかざそうとした瞬間、どこからか伸ばされてきた光の鞭が、苛木の身体を思い切り跳ね飛ばした。

「がががっ……っ！」

跳ね飛ばされながら、苛木は目を動かし、自分を滅多打ちにした人物の姿を捉えようとす。

「往生際悪すぎるんとかやうか? いい加減諦めなよオッチャン、ウチと局長の手をこれ以上煩わせないで欲しいんやわ」

そこに滑り込む関西弁。

苛木を滅多打ちにしたのは、ずっと四切宮の傍に佇んでいたカチューシャ少女だった。両手に光の鞭を持った彼女は、まるで虫でも見るかのような目で苛木を見ていた。全身を鞭で滅多打ちにされた苛木は、自動ドアに頭から突っ込んだ。大きな音を立てて自動ドアのガラスを突き破り、土砂降りの野外に転がってゆく。

二度の爆発に加え、今の鞭による乱打。もはや彼に立ち上がるだけの力はなかった。「なんだっ……何だ貴様は……!?」

雨ざらしになりながら大の字になっている苛木に、カチューシャ少女が近づいてくる。

彼女は鞭をしまうと、制服の襟首を見せつける。そこには、赤いメビウスの輪を模したバッジがついていた。

「トクエンか、貴様っ!!?」

そのバッジを見て、苛木は少女の正体を察した。

特務援別部隊、通称「トクエン」。

AMORE隊員の中でも特に優秀な者だけが選ばれる、局長直属のエリート隊員だ。

他の部隊や部署とは完全に独立した指揮系統を持ち、局長の命令を除き、基本的に単独で任務を遂行する。余談だが、灰司もトクエンの一人である。

少女は手錠を取り出すと、動けなくなつた苛木の手首にソレをかける。すると、苛木の身体は光の粒子となつて霧散してしまつた。牢獄に転送されたのだ。

四切宮は、元凶を捕らえ終わつた少女の元に近づいてゆき、彼女に^{ねむら}労いの声をかける。「お疲れ様まほろ。君がいてくれたおかげで助かつたよ」

「褒めても何もでーへんつての。ウチにかかれば、前線を退いたオツサンなんか朝飯前やつての。てかわざわざ局長が出てこんでもよかつたんとちやうの？」

「アクロスとユナイト、それと相藤レイ君には多大な迷惑をかけてしまつたからね。せめてもの償いとして、尻拭いは私自らがしなければならぬのは当然だと思ふがね」

「そーですか。じゃ、さつさと後始末を済ませて引き上げようや」

まほろと呼ばれた少女は四切宮にそう声をかけると、後始末をすべく、再びプラネットプラザの内部に入ってゆく。

彼女はボロボロになつた屋内を歩きながら、AMORE専用の通信端末を起動させる。先程苛木をしばき倒した際に、彼からくすねたものだ。

通信端末の画面には、一人の少年の情報が表示されていた。

「逢瀬瞬 16歳、仮面ライダーアクロス……」

まほろが閲覧しているのは、瞬に関するデータだった。

彼女はそれを、懐かしむような顔をしながら閲覧していた。

「ほんま、瞬は根っからのヒーローやなあ。全然変わらへんわ」

瞬の仮面ライダーとしての活躍を知ったまほろは、そう言つて微笑みながら、プラネットプラザの深部へと消えてゆく。

その後ろ姿は、どこか嬉しそうに見えた。

プラネットプラザ・地下駐車場

時刻は午前3時を過ぎ、外の雨はゲリラ豪雨じみた激しさとなっている。

激戦に次ぐ激戦により半壊したプラネットプラザにて、最後の戦いが幕を開けていた。

アクロス、ユナイト、そして唯。自身の行手を阻まんと挑みかかってくる3人を排除すべく、ボマーオ리지オンは手のひらで生成した爆弾を投げる。

「何人いようが同じことだ！何度だって爆破する！イスタを壊さなければ、俺の愛は証明できない！」

全てを葬らんとする激しい爆発に紛れて、ボマーオリジオンの魂の叫びが、3人の戦士達にぶつけられる。

しかし、彼らはとまらないし、ボマーの言葉に反応もしない。

元より両陣営にはさしたる因縁はないし、戦う必然性もない。故に、両者間では対話など成り立つ筈もなく、単なる言葉と暴力の応酬に終始する他しかなかった。

容赦ない熱風と衝撃がアクロス達を襲う中、その隙間を縫うようにしていち早く脱したユナイトが、銃型武装・フュージョンマグナムを構えながら、ボマーオリジオンに向かって突撃する。

「散々爆撃は受けたんだ！お前の爆撃の癖は見切っているー！」

「クソがつー！」

ユナイトのフュージョンマグナムの銃口から放たれた光弾を、ボマーオリジオンは超小型のプラスチック爆発を投げて防ぐ。

そして、光弾が当たった衝撃で起爆した爆弾の爆風に乗って、ボマーオリジオンは上に飛び上がると、そのまま急降下してユナイトに蹴りをお見舞いする。

「とりゃあつー！」

「ぬうっ……………！」

しかしユナイトは、ボマーオリジオンの足を掴んで跳び蹴りを防ぐと、そのまま力の

限りボマーオリジオンの身体を振り回し、後方へと投げ飛ばした。

投げとばされたボマーオリジオンが到達する、その着弾点。素早く次の行動に映るべく、そこに目をやったボマーが見たのは、煤まみれになりながら剣型武装・ツインズバスターを構えたアクロスであった。あの爆発の嵐を、アクロスは耐えきっていたのだ。滞空しているが故に体勢を整えられないボマーオリジオンの正中線に滑り込むかのように、アクロスのツインズバスターの刃が振り下ろされる。

「つおあああああああつ!!」

火花と血をまき散らしながら、ボマーオリジオンが地面に叩きつけられる。実際には身体はまだ繋がって入るが、一瞬だけ、身体が真つ二つになったかのよな感覚がボマーの全身を包み込む。まるでスイカ割りのスイカのような気分だ。

「ふざけんよ……何も知らないくせに俺の前に立ちはだかるんじやあねえよー」

地面に叩きおとされたボマーオリジオンは、なおもアクロスに掴みかかろうとする。そもそもこれは、赤浦健一と青島慈愛の問題なのだ。そこに仮面ライダーもAMOR Eも、ギフトメイカーでさえも入る余地はない。

それをわかつろうとしない他者に、彼は怒りを燃やしている。

全てを灰に返す勢いで、ボマーオリジオンはアクロスの胸倉を掴み、拳を振り上げる。しかし、

「わったし忘れんなあつ！」

「ぼべっ!!」

仮面ライダーたちよりやや遅れて爆風を突っ切ってきた唯が、ボマーオリジオンの頬を思いつきり引つ叩いた。

ぱつと見は、なんてことのない、生身の人間の平手打ち。しかし今の唯は、もう既にただの守られるべき普通の人間ではないのだ。叩かれたボマーオリジオンは、猛烈な勢いで吹っ飛んで死体の海に頭から突き落とされる。

「唯っ!!? 大丈夫だったか!!?」

「大丈夫!全然ピンピンしてる!」

「はっ……ばあっ……」

近くに転がされていたAMORE隊員の死体を乱雑に蹴飛ばしながら、死体の海から起き上がるボマーオリジオン。

アクロスは唯の無事を確認すると、ボマーの方に向かって瓦礫の山を降りてゆく。

「レイから聞いたよ、お前のことは」

「ここでようやく、アクロスがボマーオリジオンの言葉に反応した。」

「その上で、お前を止めるって決めたんだ」

「何様のつもりだよお前……ふざけんのも大概にしるよ」

「レイは俺達に助けてくれって頼んできた。だから、応えなきゃいけないんだよ。それが、逢瀬瞬——仮面ライダーアクロスの生き方なんだ！」

言葉を紡ぎながらボマーのすぐ前まで辿り着いたアクロスは、そのままボマーを思い切り殴りつけた。鈍い音を立てて、立ち上がったばかりのボマーオリジオンが膝をつく。

しかし、彼にも意地がある。ボマーオリジオンは膝をついたまま、アクロスの腹目掛けて拳を叩き込む。

すると、ボマーの拳がアクロスに触れた瞬間、そこを中心として凄まじい爆発が発生した。

「俺は爆破の化身だ。爆弾生成だけで無く、肉体全体を起爆させることだって造作もないんだぜ？」

熱風で全身を焦がされながら、勝ち誇ったように笑うボマーオリジオン。

ここまでの連戦で疲弊した所に、ゼロ距離の爆発をモロに受けたのだ。仮面ライダーといえども、これだけやれば戦闘不能は確実だろう。ボマーはそう思いながらほくそ笑んでいた。

が、

「勝ち誇るのはまだ早いだろ……捕まえたぞ、赤浦！」

ガシリと。

ゼロ距離での爆発をモロに喰らったはずのアクロスは、倒れることなく、ボマーオリジオンの腕を掴んでいた。

よくみると、アクロスの全身がまるで鉄のような光沢と質感に変わっている。ボマーオリジオンはそれをみて、ある可能性に至る。

「メタル化っ……！　そうか、ブレイドの力を使えるという事は——！」

「そうか、お前転生者だからわかるんだよな……俺より詳しいもんなあ……ブレイドの力についてさっ！」

今のアクロスは、ブレイドの力を使うことができる。ならば、ブレイドの持つラウズカードの力を使うことができるのは容易に想像がつく。

ブレイドの所持するラウズカードには、全身を硬質化させる。◆？7：METAL”のカードが存在する。アクロスはその力を使い、爆発を防いだのだ。

「今だ2人とも！」

ボマーオリジオンを掴んだまま硬質化を解除したアクロスが、後ろに向かってそう叫ぶ。

するとアクロスの背後から、ユナイトと唯が同時に飛びかかってきた。

「てりゃあっ！」

「なんかすごい風圧。パンチっ！」

ユナイトのフュージョンマグナムによる射撃と、唯の正拳突きによって発生した凄まじい風圧が、アクロスの肩越しにボマーオリジオンに命中する。

ボマーオリジオンは血反吐を吐きながら吹っ飛ばされてゆき、地下駐車場の柱にぶち当たって地面に倒れる。

「トドメだッ！」

ヨロヨロと立ち上がったボマーオリジオンに、間髪入れず殴りかかろうとするユナイト。

しかしその拳は、ボマーオリジオンに受け止められてしまう。

「調子乗るのも大概にしとけよ。ハナから俺たちは対話する必要がない関係性だ。つまんねー会話のキャッチボールよりかは、暴力と主張のドツチボールの方がお似合いだとおもわねーか？」

「何が言いたい？」

「殺し合い継続だっつってんだろーがこの馬鹿どもがっ！シアーハートアタック、起動せよっ！」

「後ろだ、伏せろっ！」

ユナイトは言葉を受けて、アクロスは反射的に身を屈める。

すると、瓦礫の山をぶち破りながら、けたたましい咆哮を轟かせ、巨大な骸骨を乗つけたキヤタピラの怪物が現れた。

ボマーオリジオンはユナイトの手を振り払ってそいつに飛び乗ると、その怪物——アナザー・シアーハートアタックに命令する。

「焼き払えっ！」

ボマーオリジオンがそう命ずると、アナザー・シアーハートアタックは、悍ましい唸り声を上げながら、空っぽの眼孔や鼻腔、口内といった、至る所から灼熱の炎を放出しだした。

一瞬にして、半壊した地下駐車場が火の海に包まれ、死体と瓦礫と炎が散乱する地獄絵図が生み出されてゆく。まるで、絵の具まみれのキャンバスの上から更に大量の絵の具を塗りたくるかのような暴挙だ。

「くっ……」

「熱いっ……めちやくちや熱い！」

全方位から迫り来る凄まじい熱波に、アクロスも唯も顔をしかめずにはいられない。

そんな彼らの姿を見下ろしながら、口から血を垂らしたボマーオリジオンは、両手に爆弾を手持って高らかに叫ぶ。

「さあ、第二ラウンドと行こうか……邪魔ばっかりでいい加減ウンザリしていたんだ。

俺はお前らを殺して先に行く！こんなクソツタレた障害物レースなんぞ、全部消し炭にしてやるよ！」

アナザー・シアーハートアタックの火炎放射により、地下駐車場は火の海と化した。

そして、その熱波は、離れた位置にいたアラタ達にも容赦なく襲いかかってきた。

「あつつう!!? アカンこのままじゃ焼け死ぬう！」

「カード燃えるって！やばいって！」

「兎に角逃げるぞ！皆、俺についてこいっ！」

このままではみんな仲良く真っ黒焦げ不可避だ。

そんな結末は当然嫌なので、剣崎の先導の元、アラタ達は来た道を引き返して地下駐車場を後にする。

火の手が回っておらず、まだ出口が塞がっていない方へと走る一同。

その途中、セルティがある事を思い出していた。

『私はあれを知っている——アレは今朝のヤツだ』

「知ってるのセルティ？」

「朝わたしたちを追ってきたバケモノだよ。あれつきり姿を見せないと思ったら——あ

れ、ボマーの一部だったんだね」

「一部……!?」

律刃の言葉を聞いたアラタは、地下駐車場の出口へと通じるスロープを駆け上がりながら、熱波に包まれた後方を振り返る。

（マジで規格外すぎんだろっ……！……だいたい、転生特典に“キラークイーン”を持ち込むとか馬鹿だろ!?） 逢瀬も唯も、あんなのに勝てるのかよ……!?）

転生者であるアラタは、ボマーオリジオンの転生特典を知っている。それ故に、恐怖せずにはいられない。

しかし、友としては、彼らの勝利を願わずにはいられない。

どんな無茶な相手だろうと絶対に撃ち破り、そして皆で帰るのだ。そう、約束したのだから。

（頼む……死ぬんじゃねーぞお前ら……！）

望みは託された。

それが叶うか否かは——直に明らかとなる。

プラネットプラザ 地下駐車場

彼の視界の先、火の海の中で佇むモノ。それは、ひとりの少女だった。

「……………」

ボマーオリジオンは、その少女を知っている。

諸星唯。

転生者でもないにもかかわらず、仮面ライダー達と共に自身に食らいついてきた、得体の知れない存在だ。

彼女の服装は、先程までの肩出しパーカーとはうってかわり、ぴっちりしたレオタード風の衣装の上にメカめかしい装甲がくつついたという、まるで何処かの変身ヒロインかなんかの様な格好となっていた。

誰もがそれを見れば、笑ってしまうだろう。

しかしボマーオリジオンは、その変化を真剣に受け止めていた。アレが単なるコスチュームチェンジのはずが無い。きつと何かがあるはずだ。

「なんだ小娘……なんなんだよ、その姿」

「私も知らないよ」

ボマーの言葉に、短く返す唯。

その顔は、未だに闘志に燃えていた。

「でも、これがきつと私の力なんだよね。なら私は、精一杯振るわせてもらうよ」

それは、独り言に近い言葉だった。

まるで何かを確かめるかのような。はたまた自分に言い聞かせているかのような。そんな、ただの通過儀式であった。

そして、唯の言葉に呼応するかのようには、火の海の中から、新たな人影が立ち上がる。アクロスとユナイトだ。装甲の表面に焦げ跡を作りながらも立ち上がる2人のライダーに、ボマーは思わず身震いしてしまう。

「お前らまで……なんで……」

「倒れるわけないだろ……コッチもお前を倒して皆で帰るんだよっ！」

「ようやくお前を裁ける。この騒乱も、片がつく」

《FINAL UNION PUNISH!》

ユナイトは、腰のホルダーから龍騎ライドアーツを取り出すと、フュージョンマグナムの銃身上部のスロットに装填する。

「フウ——」

唯は、腰を深く落として、拳を構える。

その拳には、緑色の光が集まりつつあった。

《RAUZING CROSSBREAK!》

アクロスはドライバーに装填していたブレイドライドアーツを抜き取ると、ツイーンズ

第39話 AM6:00 / そして朝は訪れる

摩天楼の隙間から、朝日がアスファルトを照らしている。

赤浦健一は、這う這うの体で雨上がりの街を歩いていった。

既に彼にはオリジオンとしての力——転生特典は無い。仮面ライダー達の力によって、彼の力の根源は破壊されたのだ。今の彼は、前世の記憶を持つ点を除けば、肉体的には普通の人間だ。

「ただだっ……今回は負けたが、まだ次があるんだよっ……！」

仮面ライダー達の必殺技を受けた彼は、勢いよくプラネットプラザから吹き飛ばされていた。しかしそのおかげで、こうして逃げ仰せている。

満身創痍だが、まだ死んではない。生きている限りチャンスはある。

そんな希望を胸に、赤浦は傷ついた身体を引きずりながら、朝焼けの中を歩いていた。しかし。

神は、赤浦を見逃さなかった。

「……………」

歩道橋の終端。

そこに、平和島静雄が、居た。

「……………なんだお前」

歩道橋を塞ぐように立っているバーテン服の男に、赤浦はガンを飛ばす。

静雄の背後には、色々と諦めたような顔をしたドレッドヘアーの男性の姿をも確認できてる。

「退けよ。往来妨害でサツに突き出されてーか」

赤浦は、ヨロヨロと歩を進める。

こんなことをしている場合ではない。早くこの街を離れ、再びイスタとレイを破壊する為の準備を始めなければならぬ。

血を流しながら、赤浦は静雄を押し除けて進もうとする。

その時、静雄が口を開く。

「セルティのやつから聞いたよ。あの爆発、お前がやったんだってな」

「……………」

静雄の台詞に、赤浦は首を傾げる。

はて、自分はこの男に何かしたのだろうか？

心当たりがないのも無理はない。赤浦が爆殺していたのは、苛木配下の元AMORE隊員のみ。静雄は単に、それに巻き込まれただけの被害者でしかないのだ。

「結構大変だったんだぞ？」 服は焦げるわかるく火傷するわ瓦礫ぶち当たって血流すわ……よくもやってくれたよな、お前」

ピキリと、静雄の顔に青筋が浮かび上がる音がした。

その瞬間、ゾクリと赤浦の背筋が凍りつく。これは恐怖だ。今自分は、目の前の男に恐怖しているのだ。

静雄は青筋を立てながら、赤浦の腕を掴んで締め上げる。

「一応知り合いから、テメーがボコボコにされたって聞いたから、ある程度は抑留下がつた……と思いたかったんだが、やっぱ気が済まねえんだわ」

「何が言いたい」

「お前……因果応報って言葉、知ってるよなア？」

朝日に照らされ、静雄のサングラスが光る。

直後。

メタバキドグシャメメタアバコスカズバシャンツ!!?!?!?!と。

聞くに耐えない盛大な音を立てて、今宵の騒動の根源に、池袋まちの洗礼が降り注がれた。彼の愛は、この街からも見放されたのだ。

同時刻、プラネットプラザ前。

セルティが、ふと何かに気づいたかのように空を見上げた。

『終わったみたいだな』

「……なにが？」

『静雄がボマーにトドメを刺したってさ。ほら、静雄のやつ、ボマーの爆破殺人に巻き込まれて凄く怒ってたから』

「うん、わたしたちがメールしておいたもんね」

「どうやら、律刃がメールで静雄に連絡したようだ。」

「オーバーキルもいいところだ。」

「ネットで聞いたことあるよ……池袋の怪物バーテンダー。あれマジの話だったのか」

「この街も、武偵高校に負けず劣らずの魔境よね……」

それを聞いたキンジとアリアは、改めてこの街の異常っぷりに戦慄するのだった。も

う当分は池袋に行きたくないと、二人は強く思っていた。

周囲では、くたくたになってベンチに背中を預けている遊矢だったり、バイクに寄りかかって一息をついている剣崎だったり、洗脳が解けて気絶したAMORE隊員をボコそうとして、三浦に羽交締めにされてるステハゲだったりと、いろんな方法で戦いの幕引きを噛み締めている各々がいた。

そして、その横。

「……………うん？」

地べたにしゃがみ込んだ瞬の前。

そこには、レドによってカードにされた者達——湖森、トモリ、レイ、イスタの姿があった。

ゴマーオリジオンを倒した後、瞬達はレド——ブレイドオリジオンを問い詰めて、湖森達のカード化を解く術を聞き出そうとした。しかし、彼はいつの間にか姿を消していたのだ。やはりギフトメイカー、中々に逃げ足が早い。

途方に暮れた一同だったが、ある方法があった。

それは、

「あれ、わたし……………確かカードにされていた筈。なんで……………」

「お前らが封印されていたカードを、ブレイラウザーに読み込ませたんだ。アイツがブ

レイドなら、同じブレイドの力でなんとかなるんじゃないかって思って。そしたらドンピシャだったってワケよ」

困惑する湖森に、意気揚々とアラタが説明する。

そう、オリジオンといえども、レドも曲がりなりにはブレイド。ならばその力は、本物の仮面ライダーブレイドと何らかの形で相互性があるに違いないと、アラタは考えたのだ。これは、彼が転生者であるが故に思いつけた解決策だ。

湖森は、身体を起こす。

そして、自分を見つめている兄の方を向く。

「……おかえり」

「ただいま」

兄妹は半日ぶりに、挨拶を交わし合う。

「帰ろう、みんなで」

「うん」

「その前に事情聴取だけどな」

「まじか……まあ仕方ないよね」

いつのまにか周囲には、何台ものパトカーや救急車、消防車が集まっていた。あれだけ派手に暴れたのだ、これで警察や消防がこないなら先進国として終わっているだろ

う。

一体どうやって説明すべきだろうか。

待ち受けているであろう事情聴取を想像して気が重くなりながらも、瞬達は日常へと歩き出す。

目の前には、目が眩むほどに眩しい朝日が輝いていた。

プラネットプラザ1階 食料品売り場

「げほっ………！　ぐふっ………！」

ボマーオリジオンが倒れたのと同時刻。

食料品売り場のワゴンの上につっ倒れていたリイラは、意識を取り戻すなり、その口から血を吐き出した。

ガシャン！　と大きな音を立てながら、リイラはワゴンの上から降りる。

身に纏っていた綺麗なゴスロリ衣装は、破れたり血に濡れていたりと、戦闘の余波で見ても無残な有様と化していた。

しかし、ボロボロにされながらも彼女は笑っていた。

「予想以上にやるじゃん……おまけにこの感じ……ひよつとして覚悟決めちゃった系？

「不思議なことに、リイラは離れた位置で起こった唯の覚醒を感じ取っていた。

リイラは床に転がった青果達を踏み潰しながら歩くと、近くに陳列してあったリンゴに齧り付く。ジャリジャリとリンゴを芯ごと齧りながら、リイラはご機嫌そうにあたりをうろちよろする。

「いいよねー、強くなってるよねー。まじ最高なんだけど」

あの時。

唯の中で目覚めた「彼女」に、リイラは瞬殺された。

たった一回の蹴りで、リイラは沈められたのだ。

だが、彼女は笑っていた。

「しかし、あの子は強かったなー。まさか私がワンパンで沈められちゃうなんて。ま、その方が食べ応えあるもんね」

リンゴを完食したリイラは舌なめずりをしながら、出口の方向へとフラフラと歩き出す。

その顔は笑っている。まだ見ぬ逸材に興奮している。

「さて、次はもつと楽しませてほしいわ☆」

ゾツとするような笑みを浮かべながら、リイラは朝日に照らされた外へと歩き出し

た。

同時刻

身体を揺すられながら、セラは目を覚ました。

「……私は一体」

気づけば、彼女は鎧姿のまま地面に倒れていた。

空を見ると、とつくに雨は止み、日は登り始めている。

先程まで自分は何をしていたのだろうか？ なんだかやたらとズキズキと痛む頭を

抑えながら、セラは雨に濡れた身体を起こす。

彼女が身体を起こすと、とある人物がそばに居ることに気づいた。

「ようやく目を覚ましたか」

「お前は……」

それは、赤いフレームの眼鏡をかけた、灰色の髪の青年だった。季節外れの赤いマフラーとタートルネックに、素足のままスニーカーを履いていたり、服装はほんのりとイカれている。

セラは、彼の顔を何処かで見たことがあるような気がするが、どうも思い出せない。

セラが呆然としていると、青年の方から名乗ってきた。

「私は赤馬零児。少なくとも君の敵ではない」

「……そうか思い出した。お前は確か、ギフトメイカー側の決闘者デュエリストを引き受けていた奴だな」

名前を聞いて、セラは零児のことを思い出したようだ。まあ、彼女は零児とは会話していない為、覚えていないのも無理はないだろう。

「教えてくれ、あの後……私はどうなった？」

セラは、頭を抑えながら零児に尋ねる。

「残念だが、私では君の質問に答えることはできない」

しかし零児は、セラの質問に対して首を横に振るだけだった。

「決闘デュエルの途中だったので、事の推移は分からない。私が駆け付けた時には、ここで君が倒れていた」

「そうか……」

「先程遊矢達ユウヤがここから出ていくのを見た。どうやら、全て終わったようだな」

それを聞いたセラは、頭を抑えながら自嘲気味に笑った。

「騎士失格だな、私は。何も出来ずに、無様に倒されるとはな」

「それは違う。見たところ、君の身体はそこまで負傷していない。倒されたというより

……力尽きたといった方が適切だろう」

「たいして変わらないさ。私は最後まで戦い抜けなかった。護神騎士失格だ」

セラは、自らの力不足を悔やんでいた。

騎士として人を守る為、最後まで立ち続けなければならぬということにも関わらず、先に戦闘不能になってしまった。これほど惨めことはそうそうないだろう。

硬く握りしめた拳に、悔し涙がこぼれ落ちる。

こんなのではダメだ。もつと強くならなくては。

そう何度も脳内で反芻しているセラを、零児は暫しの間、無言で見つめていた。

そして、ふと思いつ出したかのように、こう言った。

「悔しがっているとこすまないが、ひとついいか？ 君、帰る場所がないのだろうか？」

「！」

「どうしてわかった、とでも言いたそうな顔だな。なに、簡単なことだ。以前私は、君と似たような顔をした者と関わったことがあってね。それ故に君の事情を察することができた」

微笑みながらそう言った零児を、セラは警戒の眼差しで見つめていた。

この男は、明らかに只者ではない。王としての、人の上に立つものとして有している

べき風格を、彼は持っている。

純粋な戦闘能力で零児を振じ伏せようと思えば出来そうだが、それはセラの騎士道に反するし、そもそもそれは悪手だとしか思えない。ここはひとつ、話を聞いてみるのが最善だ。

そう判断したセラだったが、零児の次の一言は、彼女にとって意外なものだった。

「もしよければ、手を組まないか？」

突然の申し出に、セラは困惑した。

そしてすぐに、彼女は警戒心をむき出しにする。

「……なぜ私に協力しようとする？」

「私はこの世界を守りたい。我々も転生者とやらには手を焼いていてね、少しでも彼らに対抗できる戦力が欲しい。それに、君もなんの手がかりもないまま、別の世界で人探しを続けるのは大変だろう？ 我が社の力を使えば、君の目的ももっとスムーズに果たせると思わないか？」

「っ！ 何故お前がそれを知っている!?？」

「舞網市は我がレオ・コーポレーションの手の中にある。君が舞網市内で人探しに奔走していたのは、街の監視網を通じて把握している。勿論、君が別の世界から来たということも、だ」

セラは、零児の言葉に何も言えなくなってしまった。

こいつには全てバれている。セラが別の世界の人間であることも、この世界に来た目的も。一介の騎士と大企業のトップという立場の違いが、両者の間に圧倒的な差を生んでいた。

「どうする？ 別に断つても構わないが」

「……………」

零児の申し出を受けたセラは、深く考えこんでいた。

少なくとも、赤馬零児は敵ではない。だが、安易に彼を信じてても良いのだろうか？ シチュエーション的には明らかに怪しき満載だ。

しかし、彼の持つ立場の力というのは侮れない。彼の言うとおりに手を組んだ方が、セラの目的である■■■■の搜索も捗るのではないだろうか。事実、この世界に来て3ヶ月が経とうとしているというにも関わらず、彼女の目的は全く果たせてはいない。自分の世界の為に、これ以上時間はかけたくない。

セラは悩む。信じるか信じないか、二つの選択肢の間で揺れ動く。

そして、しばらく考えた後。

「……………いいだろう。せいぜい利用させてもらおうさ」

「構わない。元よりそのためにこの話を持ちかけたのだから」

そう言うのと、両者は互いに不敵な笑みを交わし合う。

信じるに足る足らないは関係ない。目的の為ならばなんだってすると、出発の際に誓ったのだから。

セラは零児の手を借りながら立ち上がると、零児に連れられるがまま、近くに止めてあつたリムジンに乗車する。

「ひとまず、我が社まで来てもらおう。詳しい話はそれからだ」

2人に乗せたリムジンが走り出す。

それは、新たな交わりの始まりだった。

少し前

プラネットプラザ・屋上駐車場

ボマーオリジオンが倒される少し前。

仮面ライダーサイガに変身した灰司は、イガリマオリジオン——バルジと絶賛交戦中だった。

「死ねっ！ バルジイ！」

ズババババババツ!!? と。

灰司にしがみつきながら歓喜の声を上げるハンドレッドオリジオン。が、灰司はまだ終わってはいない。

バラバラになって落ちてゆくサイガドライバー。その下から、全く別のベルト——ゴーストドライバーが姿を現した。灰司はもう一本のベルトをつけていたのだ。

そのベルトには、すでに変身用のアイテム——眼魂アイソウルが装填されている。

「変身ッ！」

《カイガン！ ダークライダー！ 闇の力！ 悪い奴ら！》

ハンドレッドオリジオンにしがみつかれながらも、灰司はゴーストドライバーのレバーを引く。すると、眼魂からパーカーのようなものが飛び出して被さり、灰司の身体を変身させる。

落下しながらも、パーカーを纏った白い骸骨のようなライダー——仮面ライダーダークゴーストに変身した灰司は、そのまま両手で印を結ぶ。

すると、ダークゴーストの全身から白い波動のようなものが解き放たれ、しがみついていたハンドレッドオリジオンの身体を思いっきり吹き飛ばした。

「バアアアアアアッ!?」

「デメエは引つ込んでやがれッ！」

悲鳴を上げながら吹き飛ばされてゆくハンドレッドオリジオン。

ダークゴーストはそこに間髪入れず、サングラスを模した剣・サングラスラッシャーをぶん投げた。

勢いよく投げられたソレは、音すら立てずに、ハンドレッドオリジオンの脳天に深々と突き刺さる。

「消えろ、これは俺とアイツの戦いなんだ」

スタツ、と華麗に着地するダークゴースト。

それと同時に、サングラスラッシャーが突き刺さったハンドレッドオリジオンの身体が爆発する。

断末魔をあげながら落下してゆくハンドレッドオリジオンに、両者とも目もくれず、互いに睨み合う。

「あーあ、やつば弱いなー。ま、アイツは失敗作だったから別に構わねーんだけど」

仲間が倒されたというのに、イガリマオリジオンは酷く淡白な反応だった。

ダークゴーストは分かりきっているが、これがバルジという人間だ。兎に角自分本位でしか考えられず、他人のことなど気にも留められない、真正の人格破綻者。それが彼だった。

「邪魔者は消えた。続きをやろうぜ」

「まだやる気かよ……飽きないなあっ！」

しぶとく自身に食らいついてくるダークゴーストを鬱陶しく感じたイガリマオリジオンは、彼を一撃で葬るべく、いつの間にか刃が戻ってきていた大鎌で斬りかかる。

それは常人には反応不可能なほどの速さだった。

しかし、ダークゴーストは違う。幾千もの戦場を潜り抜けてきた歴戦の狩人の目には、はつきりとイガリマオリジオンの動きが見える。

「テメエの動きは見切ってたよッ！」

ダークゴーストは、振り下ろされた大鎌を最小限の動きで回避すると、そのままの流れでイガリマオリジオンの腕を掴む。

そして、ゴーストドライバーのレバーを4回引く。

《ダイカイガン！ ダークライダー！ オオメダマ！》

すると、ドライバーから巨大な眼球型のエネルギー体が勢いよく射出され、イガリマオリジオンに容赦無くぶち当たる。

その余波は凄まじく、イガリマオリジオンにダメージを与えるにとどまらず、2人が立っていた周囲の足場を丸ごと破壊し、2人はプラネットプラザの3階へと落下してゆく。

瓦礫と共に床に背中から衝突するイガリマオリジオンと、瓦礫を避けながら難なく落下するダークゴースト。

「この一撃で蹴りをつける」

「同感だ。いい加減俺様も帰りたくて仕方がないんだ」

立ち上がりながら、ダークゴーストの言葉に強気に答えるイガリマオリジオン。

イガリマオリジオン——バルジは、鬱陶しい灰司との戦いを終えて帰る為。ダークゴースト——灰司は、バルジを殺して復讐を完遂する為。抱いている思いは異なれども、これ以上この戦いを続けたくないという点では、両者は一致していた。

「終わりだ、バルジ！」

《ダイカイガン！ ダークライダー！ オメガドライブ！》

ゴーストドライバーのレバーを一回引くダークゴーストと、大鎌を再び構えるイガリマオリジオン。すると、ダークゴーストの足とイガリマオリジオンの大鎌に、それぞれエネルギーが集約されてゆく。

そして、両者は同時に動き出す。

ダークゴーストは飛び蹴りを。イガリマオリジオンは鎌による一閃をそれぞれ放つ。

激しい音と火花を周囲に撒き散らしながらぶつかり合う、ダークゴーストのキックとイガリマオリジオンの大鎌の刃。

そして。

重き因縁の籠ったその迫り合いを制したのは。

「ぜやあああああああああああああああああああああつ!!?」

「
—
ダークゴースト、灰司だった。」

迫り合いに負けたイガリマオリジオン、バルジの手から鎌がこぼれ落ちると共に、迫り合いを制したダークゴーストのキックが、大鎌の刃を越えてバルジの身体に直撃する。

「グヌギヤあああああああああつ!!?」

オリジオンとしての姿を維持できなくなったバルジは、断末魔をあげながら遙か後方へと吹っ飛んでゆく。天井からぶら下がる案内板を突き破り、エスカレーターを真正面から突き破り、まるでサッカーボールのように、全身ズダボロとなって床をバウンドする。

漸くバルジが止まった後、カランと音を立てて、彼の頭のあたりから何か零れ落ちる。

それは一枚のDISCだった。銀色に輝くそれは、バルジから離れるように近くの階段に向かつて転がってゆき、階段をつたって階下に落ちてゆく。それにダークゴーストが気付いた様子はない。

ダークゴーストの変身を解いた灰司は、満身創痍のバルジの元に辿り着くなり、腰に

携帯していた拳銃の銃口をバルジに突きつける。

「勝負あったな。これで……俺達の因縁も終わりだ」

そう口にした灰司の声は、震えていた。

それは復讐が成就する事に対する歓喜なのか、復讐完遂を前に昂った憎悪なのか、はたまた奪われたものを思い返したが故の落胆から来るものなのかは、灰司本人にも分からない。

だが、油断は禁物だ。

バルジの悪趣味っぷりは群を抜いている。死に際になってさえも、それは決して油断してはならないものだ。

この時の灰司は、それを失念していた。

「なんちって☆」

「何……っ!?」

バルジがそう言った瞬間、灰司は反射的に身構える。

が、一手遅かった。

灰司が身構えるのと同時に、どこからか光の矢が飛んできて彼の脇腹に突き刺さった。

「ぬぐああああっ!?」

突き刺さった光の矢はすぐに霧散するが、矢の刺さった脇腹がみるみると赤く染まっ
てゆき、灰司から立つだけの力を奪い去ってゆく。

怨敵を前に、脇腹を抑えてその場に膝をつく灰司。

そこに、カツンと、誰かの足音が近づいてくる。

灰司が顔を挙げると、そこには黒い髪の少女が立っていた。しかしその目はレイラ同
様に異様に充血しており、目元には幾何学模様じみた痣が浮かび上がっている。

少女の名はレイナーレ。かつて不幸にもオリジオンの事件に巻き込まれたことが
きっかけで、部下共々実験動物モルモットにされた哀れな墮天使だ。

レイナーレはバルジに近づいてゆくと、無言で彼を担ぎ上げてゆく。

「やっぱ持つべき相手は優秀な奴隷だなあ！ 頼むぜレイナーレちゃん、俺様を連れて
離脱するんだ！」

「待ちやがれ……っ！」

灰司は脇腹の出血も厭わずにバルジに手を伸ばすが、それはレイナーレに担ぎ上げら
れたバルジには届くことはなかった。

バルジを担いだレイナーレは、背中から墮天使の象徴たる黒い羽を出現させると、そ
のまま天井を突き破り、朝焼けの中へと飛び去っていつてしまった。

後に残されたのは、満身創痍の少年ただひとり。

り10歳近く年上とか信じたくないし、つくづく大人だからといってまともだとは限らないことを痛感させられる。レイといいトモリといい、なんでうちの周りの大人ってこんな奴しかいないのだろうかと、瞬は本気で自らの環境を嘆くしかなかった。

レイがダウンすると入れかわりに、その傍らに立っていたイスタがレイに代わって謝罪をする。

「申し訳ございません……私は止めたのですけども、レイがここまで馬鹿だとは思わなくて」

「俺も正直驚いてるよ」

「なんか瞬、また変な人連れ込んでるね」

「うんうん」

イスタと瞬がレイの奇行に呆れていると、騒ぎを聞きつけたネプテユヌとヒビキが、リビングから顔だけを出して好き勝手なことをほざく。

こつちだつて好きで連れ込んでいるわけではない。向こうから勝手に上がり込んできたのにこの言い草はないだろう。

「私がこうしてレイといられるのは、皆さんの尽力があつてこそです。深く感謝申し上げます」

「まあ、なんだ。お前たちのおかげで、俺は大事なもんを3度も失わずに済んだ。本当に

ありがとう、そして、これからよろしくな」

レイは胸を押さえながらなんとか立ち上がり、握手を求めてくる。

瞬も一応先ほどの箒投げで、夜間訪問に対する制裁は終わったので、挨拶ぐらいは応じてやるか、と差し出された手を取る。

なんとも格好悪くてしまらない挨拶だけでも。

レイの抱く感謝の念は、握手を介してしっかりと瞬に伝わった。

数多もの勇士達が血を滲ませた戦いの果てに守られたものは、今確かに瞬の目の前にある。

その事實は、少年を笑わせるには充分だった。

Requiem for the avenger

第40話 その男、不倶戴天につき

ゴールドデンウイーク最終日がやってきた。

すでに日が昇ったアパートの部屋の中で、無束灰司は目を覚ます。

「……………今日もまだ、だ」

半分死んだような命にも、また新しい一日がやってきてしまった。洗面台で顔を洗いながら、壁に掛けてある時計を見る。時刻は午前8時ジャスト。

朝食前に日課の筋トレを行おうとするが、腹筋を始めようとした途端に脇腹のあたりがずきりと痛んだ。灰司は顔をしかめながら服をめくると、その下には何重にも巻かれた包帯が存在していた。先日、池袋でバルジに逃げられる直前に、奴の配下となった墮天使レイナスにつけられた傷だ。

「……………クソが」

傷を見てみると、思い浮かべたくもない怨敵の顔が浮かんできてしまい、灰司は朝から機嫌を悪くした。復讐を誓ってから、灰司の機嫌の悪くない日など皆無に近いのだ

が、今日は一段と悪いような気がした。

が、ここでさらに灰司の起源を悪くする出来事が起きる。

バルジの顔を少しの間でも忘れようと筋トレを始めようとした灰司だったが、その時、インターホンが鳴り響いた。しかも連打してやがる。

灰司はハンガーに掛けていたA M O R Eの制服を羽織ると、舌打ちをしながら玄関に向かう。

基本的に灰司はA M O R E内外問わずぼっちであり、彼のところを訪ねる物好きなど、馬鹿みたいに灰司を慕って来る倫吾ぐらいしかいないだろう。なので、この時点で灰司は来客は十中八九倫吾だと踏んでいた。仮にそうでなくとも、朝から他人の家のインターホン連打する常識知らずには一言文句を言わねば気が済まない。

繰り返されるインターホンの音にイライラしていた灰司は、文句を言いながら勢いよくドアを開け放った。

「おい倫吾！お前朝っぱらからなに迷惑行為してんだ！ちったあこっちの事情を考え……ろ？」

文句を言いながら、灰司は気づいた。

倫吾の手前にいる、もう一人の訪問者の存在に。

藍色の髪を小学生くらいの女の子が、今にも泣きだしそうな、しかしどこか覚悟を決

めたような顔で灰司のことを見上げていたのだ。

灰司は少女を見つめる。彼女は一体何なのだ？ 倫吾のやつはどうしてこんな子供を自分のところに連れてきたのだ？ 返答次第では拳骨が必要になってくるかもしれない。

灰司からの無言の圧力を受け取った倫吾はぶるりとその身を震わせる。なんとか、灰司の不機嫌メーターがみるみるうちに上昇していくのが目に浮かんできたので、倫吾は爆発する前になんとか事情を説明しようと試みる。

が、それよりも早く、少女が灰司の手を取った。

そして、頼み込んできた。

「お願いします！お姉ちゃんを助けてください！」

「——何？」

行江飛鳥ゆくえあすか。それが彼女の名前だった。

灰司が文字通り朝飯前だったので、3人は朝食がてら近くのファミレスに立ち寄り、そこで詳しい話をすることにした。

テーブル席に案内された3人は適当に注文をし、

「この子は先日A M O R Eが保護した被災者っす」

「被災者だと?」

「はっ」

数多に存在する世界。しかしそれらは、常に崩壊の危機と隣り合わせの存在なのだ。時たま、ひとつ、あるいは複数の世界が滅茶苦茶になってしまふような大事件が起きてしまう。それは転生者が原因だったり、もともとそうなる下地が世界にあつたりと、原因は多岐にわたるのだが、A M O R Eではそういった次元災害の被災者の保護や復興支援も行っている。

だから、A M O R E隊員である灰司からすれば、飛鳥の境遇は、日本人が街中で外国人を見かけた時に「ちよつと珍しいな」と思う程度のものだつた。

しかし。

倫吾の次の発言で、その考えは崩れ去つた。

「この子の世界は、既に滅ぼされているっす。バルジに」

「……………」

その名前を聞いて、灰司は思わずその身から殺気を漏らした。

まただ。

奴はどれだけの悲劇を振り撒けば気が済むのだろうか。

いや、本人は無自覚なのだ。初めから善悪の物差しが欠如しているバルジは、自身の悪辣さに死ぬまで気付けない。

「わたしの居た世界は……お姉ちゃんとわたしを残してみんなアイツが壊していきました」

曰く、彼女の居た世界はバルジの「実験」で滅亡した。奴が暴れだしたのをすぐに感知し、AMOREの部隊の応戦もむなしく全滅したとのこと。結果として、飛鳥と、彼女の姉である一薫（かおる）だけが生き残った。

その後は姉妹揃ってAMOREで保護されていたのだが、数日前に薫が突如として保護施設から失踪。解析したところ、バルジが施設の職員を洗脳して彼女を連れ去る姿が監視カメラに記録されていた。洗脳された職員は、現在洗脳の解除方法を探るべく檻付きの病院に収監され、薫の行方を追跡しているとのことらしい。

ここところ、灰司はこの世界での仕事に追われていたため、こうして倫吾から伝えられるまで詳しい内容を知らなかったのだ。

「それで……飛鳥ちゃんはお姉さんを探しに行くって聞かなくて……俺の次元転移に引っ付いて無断でこっちに来ちゃったんすよ」

「……これだから子供は嫌いなんだ」

「俺達も世間一般では十分子供っすけどね」

何の目的で薫を拉致したのかは考えたくもないが、悪趣味の擬人化とも揶揄されるバルジのことだ。どうせ人体実験でもするのだろう。アイツは他人の尊厳を踏みにじるのが生きがいのような奴なのだ。

そして、薫はきつとまだバルジの近くにいます。レイラのケースからして、奴は自分の玩具は自分の手元に置いておこうとするはずだ。

現在ギフトメイカーは、この世界を活動の中心に据えている。自分たちの邪魔をする仮面ライダーの排除に躍起になり始めた今、彼らがそれを放棄して別世界に逃げるといふことは考えづらい。

彼らのような悪徳転生者は、一般的にプライドが重力圏を突破しており、自分以外のすべてを見下している。彼らは自分の思い通りにならないものは何が何でも排除するし、そのための力を持っている。そういう人種なのだ。

だから、十中八九ギフトメイカーは、そしてバルジはこの世界にいる。コップを握る灰司の手が、怒りと憎しみで震えていた。しかしその時、ふとある疑問が浮かび上がり、その怒りを鎮める。

「……何故俺のところに来た？」

「……………」

そう訊かれた倫吾は、都合悪そうに目を逸らす。てか、下手な口笛吹始めているし、汗

をだらだらと流してやがる。

この時点で灰司は確信した。倫吾こいつの入れ知恵だと。

倫吾の口の軽さは筋金入りだ。彼ならば、何を漏らしてもおかしくはない。

ぶすぶすと、傍にあつたフオークで軽く倫吾の手を刺しながら、一体どういうことだと問い詰める灰司。一応倫吾はまだ怪我が完治していないのだが、そんなことはどうでもいい。痛みと恐怖に震えながら、倫吾は必死に言い訳をする。

「お、俺さあ……ちよくちよく飛鳥ちゃんと薫ちゃんに会いに行つてたんすよ。それで、先輩のこともちよろつと話してて……」

「お前の口の軽さは矯正が必要なようだな。縫うかはんだ付けされるか、どっちか選べよっ。」

「いやホント反省してます！してますからあ！はんだ付けとか洒落になんないっすよ!!」

「倫吾の言い訳を聞いて、灰司は呆れるほかなかつた。

仮にも警察組織（のようなもの）の一員だというのに、倫吾はすぐベラベラと喋ってしまう。コイツの辞書には守秘義務という単語が多分載っていないのだろう。先輩として一度くらいバチボコに説教せねばなるまい。

そう息巻いていた灰司だったが、それを遮るように、飛鳥が灰司の手をとって頼み込

んできた。

「灰司さん、とても強いんですね？それに、アイツのことも知っている……それなら、わたしたちの気持ちもわかると思っています」

「……………」

「お姉ちゃんを取り返してください！ わたしにとつての、残された唯一の家族なんです！」

涙を流しながら懇願する飛鳥。

しかし灰司は、

「どうでもいい」

「え？」

「俺は俺の為だけにヤツを殺す。お前の事情なんか知ったことか」

少女の願いを、冷たく突き放した。

願いを突き返された飛鳥は、涙を流しながら呆然としている。見かねた倫吾が文句を言おうとするが、それを遮る様に、灰司はテーブルを強く叩く。

そのあまりにも大きな音に、店内が静まり返る。

「これは俺とバルジの問題だ。余計なもん持ち込もうとするんじゃないやねえよ」

「先輩？どこ行くんすか!?!?」

「」

「仕事だ。倫吾、そいつの御守はお前がやれよ」

「ちよ、先輩!!」

倫吾が何か言おうとしていたが、そんなことに付き合っている暇はなかった。

灰司は自分の食べた分の代金を倫吾に押し付けると、さっさと店を出て行ってしまった。

頼みを突っぱねられた飛鳥はというと、

「っ!」

「まっ、飛鳥ちゃんまで……っ!?」

倫吾の制止も聞かずに、泣きながらファミレスを飛び出して行ってしまった。

「どうすりゃ良いんだよ……」

それを見て、慌てて立ち上がる倫吾。

狼狽している場合ではない。見失ってしまう前に、一刻も早く飛鳥を追いかけなければならぬ。

倫吾は急いで支払いを済ませると、病み上がりの身体に鞭打ちながら、飛鳥を追いかけて走り出した。

同時刻 逢瀬家

「よう、遊びに来たぜ」

「フシヤアアアアアアアッ！」

「ぎよええええええええええ!!」

逢瀬家に遊びに来たレイは、玄関扉を開けた瞬間、猫に思いつきり顔を引つ搔かれた。

「こらっ！なにやってるのさ!! それは爪とき用に板じやないんだってー！」

「ネプテューヌが寝坊して朝ごはん用意しなかったから気が立つてるんだよ……ごめんね」

騒ぎを聞きつけてパジャマ姿のまま階段を駆け下りてきたネプテューヌが、興奮気味に何度もレイを引つ搔く猫を慌てて引きがす。猫はレイから引き剥がされて瞬の腕の中に納まってもお爪を立てている。率直に言つて殺意高すぎる。

猫に引つ搔かれてぶっ倒れたレイを介抱しながら、イスタが挨拶代わりに説明を加える。

「レイは昔から動物に嫌われやすい体質なんです。犬に噛まれた回数は数知れず、酷い時は動物園を脱走したパンダにゲロかけられたこともあったんですよね」

「解説は良いから治療プリーズイスタあ……大丈夫？俺顔面崩壊してない……?」

「大丈夫です、いつも通りの下品な顔つきです」

一応生みの親の1人なのだが、イスタは割とレイに対しては容赦ない物言いをするよ
うだ。が、ちやつかりレイに絆創膏を手渡しているあたり、ひよつとするとただのツン
デレなのかもしれない。

猫を宥めながら2人のやりとりを眺めていた瞬だったが、そこに、レイ達の訪問を聞
きつけたのか、なぜか既に遊びに来ていてお花を積んでいた唯が廊下の奥の方から
ひよつこりと顔を出す。

「あ、イスタちゃんおはよう〜！」

「おはようございます唯さん。朝早くにお邪魔して申し訳ございません」

「いいってことよー！」

「いやお前もお客様だし！家主こつちイ！」

家主そつちのけで会話を始めた2人にツツコミを入れる瞬。

ところで、彼らは一体何しに来たのだろうか？

「で、何の用だ？」

「単刀直入に言わせてもらおう。クロスドライバーを調べさせてほしい」

瞬が用件について尋ねるなり、レイは頭を下げてそう頼み込んできた。

ほんとにいきなりぶつ込んでできた事にもびつくりしたが、その内容についてもびつ

りした。クロスドライバーを調べたいとは、一体全体どうしてなのだろうか？

「そりやまあ……なんで？」

「興味が湧いたからだだよ。間近であの力を見てしまったからな……科学者としては興味をそそられる一品だよこいつは。それに、何もわからないでいるよりは、少しでもコツについて知っておいた方が、お前にとつてもいいんじゃないのか？ どうせクロスドライバー^{それ}について碌に知らないんだろ？」

「それはそうだけど……」

「私は気になるなあ。ぜひ調べてもらおうよ、面白そうじゃん！」

「頼むよ！ 金払うからさあ！ 一回きり見せてくれれば僕はそれで満足するんだ。お願いだから、ネネ、いいだろう？」

「わかったよ……壊すなよ？」

瞬としても、未だクロスドライバーは未知の物体だ。来歴・仕組み・その他もろもろエトセトラ……気にならないと言ったら嘘になる。これもファイフティが変に勿体ぶつて碌に説明しないからだ。ほんと役に立たねえなあの不審者。

このような心情もあつてかレイの懇願に押し負けた瞬は、仕方なしにレイにクロスドライバーを手渡す。

その直後だった。

「それは出来ない相談だ」

「その声は……ファイフティ！」

振り返ると、リビングの入り口付近にいつの間にかファイフティが立っていた。何時何処からどうやって入ってきたのか知らないが、もう逢瀬家のセキュリティもクソもへつたくれもあつたもんじゃない。どいつもコイツも他人の家になすがと上がり込みすぎだろう。

ファイフティは瞬とレイの間に割って入ると、レイからクロスドライバーを強引にひつたくる。レイは当然ながらそれを取り返そうとするが、ファイフティは伸ばされたその手を力強く叩き落とす。

「転生者であるという時点で私は君を信用していない。そんな君にクロスドライバーを触らせたなら何をされるか分かったもんじゃない」

「誰だか知らないけど初対面の人間にそんな事言うんじゃないっての。何？俺そこまで信用ない？」

叩かれた手を摩りながらキレ気味にそう言うレイ。両者の間にバチバチと火花が飛び交い始める。

これはマズイと思った唯が、喧嘩を回避しようと2人を仲裁しにかかる。

「じゃあファイフティが見張ればいいじゃん。どうせ暇なんでしょ？」

「よし決定！」

「兎に角転生者である君は信用できない！ ほらその汚らわしい手を離せ！ クロスドライバーを逢瀬くんに戻すんだこの薄汚い青髪め！」

「転生者だからなんだ!! 差別か?!? 転生者差別かお前！ フィフティっパリらしいな！」

が、唯の仲裁もあつけなく無駄となり、2人はたちまち掴み合いの喧嘩を始めた。あわわわとしてゐるネプテューヌや、ヒビキに醜い争いを見せまいと彼女の目をふさぐ湖森に、場の雰囲気を感じ察して瞬の腕の中で毛を逆立てる猫だったり、もう部屋中混沌まみれだった。

大の大人が2人そろって醜い喧嘩を始めやがったのだが、朝早くから他人の家に押しかけてまで何やってるんだこいつらは、と呆れずにはいられない。

いっそのこと纏めてたたき出して、ここの家主が誰なのかを思い知らせねばなるまい。ここは暇な老人の屯する病院の待合室ではないのだ。そう決意した瞬は、箒と塵取りを手にとって2人の喧嘩を両成敗しに入ろうとする。

その時だった。

すぽーん！と軽快な音を立てて、レイの手からクロスドライバーがすっぽ抜けて、あらぬ方向へと飛んでゆく。一体どうしたらそうなるのか、物理法則もへったくれもないほ

「ライダーパンチッ!!!!!!!!!!!!!!」
メキヤメキヤボグンッ!!!!!!
と。
笑って誤魔化そうとする馬鹿2人の顔面に、これまでの戦いによつて鍛え上げられた瞬の鉄拳が勢いよくめり込んだ。

それから少し経って。

馬鹿2人を力づくで黙らせた瞬は、割れた窓ガラスをの処理をファイフティとレイに押し付け、庭先に飛んでいったクロスドライバーを探すことにした。

「どこに行ったんだ……? あれだけ大事にしとけて普段から言つてた本人が一番雑なんだよなあ」

そんなに広くない庭なのだが、碌に手入れをしてないがために草木が生い茂つていて、コンクリート塀がほとんど見えない有様だ。

そんな荒れ放題の庭を見て一瞬気遅れする瞬だが、意を決して、ガサガサと草木を掻き分けながら進むことにした。

そして、隣家との境界線であるコンクリート塀にたどり着いた。

「あつたあつた、こんなところに……うわあ泥まみれだ」

そこで、生い茂った雑草の隙間から鈍い光沢を放っている、クロスドライバーを見つけた。

クロスドライバーは雨上がりのぬかるんだ地面にどっぷりと浸かってしまっており、泥だらけになっていた。正直言つて触りたくは無いが、回収するしか無い。

瞬は意を決してクロスドライバーを拾い上げる。

そして、顔を上げた時。

「……………あ、こんにちは」

コンクリート塀の上に腰掛ける女の子と、目が合った。

「……………どちらさん？」

……誰だ？

知らないうちに人の家の庭に上がり込んで、そのくせきつちりと挨拶はする。親の教育がなってるのかわからないのか、一体どちらなのだろうか？

だが悲しいかな、この1ヶ月半の間に色々とありすぎたせいで、瞬の感覚は麻痺してしまっていた。なので、いきなり自宅の敷地内に現れた少女に臆することなく、声をかけていった。

「……………どうした？」

「あの……お兄さん、仮面ライダーアクロスなんですよね？」

「!!?」

が、少女の口から出たのは、予想外の単語だった。

何故彼女がアクロスの事を知っている？ 新手の転生者とかだったりするのだろうか？

瞬の麻痺しかけていた警戒心が、一瞬で再生される？

「い、いやー、なんのことか分かんないなあ」

瞬はしらを切るが、先程の反応が既に答えになってしまっているため、無意味である。少女もそれをわかっているのか、じーつと、煙んだ目をこちらに向けてきている。

膠着状態に入る両者。

そこに、

「みーつーけーたああああっす！」

「げっ……」

突然、少女の背後から、青いバンダナを巻いた包帯まみれの青年が現れた。

少女はその声を聞くなり、明らかに「やべっ!!?」とでもいうかのような顔をし、即座にコンクリート塀から飛び降りる。

「勝手にうるちよろしたら駄目っすよおっ！ 危ないし、俺に雷飛ぶからっ！」

「そっちの事情なんか知った事ないし。役立たず集団のAMOREなんかより、仮面ライダーの方がずーっと頼りになるんだからっ！」

「ちよ、ちよつと待て!!? AMOREって……一体どういう事なんだよ!!? わけわかんねーんだだけ!!?」

少女は瞬の背後に隠れる様に回り込みながら、バンダナの青年に対して叫ぶ。

瞬はもう何がなんだかよくわからなかった。いきなり人の家の敷地に上がり込んで喧嘩とかやめてほしい。迷惑極まりないので、今すぐにも追い払ってやりたい。

瞬はとりあえず、背後にいる少女を守りながら、茂みから出ていく。

(でも……このバンダナ野郎、どっかで見た様な……)

目の前のバンダナの青年に相對した瞬だが、青年に何処か見覚えがある様な気がしてならなかった。だが、どうしても思い出せない。一体どこで彼を見たのだろうか？

足に少女を守りながら、青年のことをなんとか思い出そうとする瞬。

その時だった。

「トウーッ！　ヘアーッ！」

「ザラアッ!!?」

バコーンッ!!?!!?!!?!!? と。

瞬の背後から雫が飛び出し、青年を思いつき蹴り飛ばした。

鼻頭を蹴られた青年は、よくわからない悲鳴を上げながら後方にぶつ倒れ、背後のコンクリート塀に頭を強打する。めちやくちや痛そうな音があたりに響き渡り、瞬は思わず目を逸らしてしまう。

そして、瞬が再び視線を正面に向けた時、そこにあつたのは、呻き声を上げる青年としてやったりと言わんばかりにドヤ顔をキメる唯の姿だった。

「ちよつ……いきなり実力行使してんじやあねえよっ!?」

「いやだつてどうみても危険な匂いがプンプンしてたし」

「理由になつてないから！ てかどう見ても怪我人だつてのによく躊躇いなく蹴り飛ばせるな!?」 ほらお前、大丈夫か!?」

いくら敷地に勝手に上がり込んできたといえども、包帯まみれの奴を心配しないわけにもいかない。瞬は茂みの中に沈んでいるバンダナの青年を引っ張り上げ、軒下までひきずつてゆく。

「て、キミどこかで見た事あるよーな……あ！」

「やつと思ひ出してくれた……おうぶつ！ 池袋以来になるっすかね……」

唯は蹴り飛ばした後になって、青年の素性を思ひ出したらしい。

ここで瞬も思ひ出した。

この青年は確か、プラネットプラザで仲間だったAMORE隊員に裏切られ、リンチ

にあつて死にかけていたAMORE隊員だ。彼は瞬達に助けられた後、志村達が外に連れ出して救急車で運ばれていったはずだ。

名前は確か——

「御手洗倫吾です……ちよつとお話よろしいつすかね……」

青年——御手洗倫吾はそう言うのと、白目をむいて気絶した。

直後、逢瀬家にいた面々は大いに混乱した。

「先日は本当に申し訳ありませんでした！」

「こちらこそいきなり蹴飛ばしてごめんなさい……」

30分くらい経つた後、意識を取り戻した倫吾は、目を覚ますなり瞬達に土下座をした。

ちなみに病み上がりの倫吾を蹴り飛ばした唯はというと、瞬から拳骨をもらった上で正座させられていた。そんな彼女をイスタは、「早とちりするからこうなるんだよ……」
と言う様な目で見ている。

「えつと……いきなり謝罪されても困るんだけど」

「いやいきなり謝罪から入らずしてどうするっていうんすか！ 洗脳されていたとはいえ、俺の仲間達が皆さんに危害を加えたって事実は変わりませんし……なんなら首と乳首を切り落として並べても足りないくらいなんすよ！」

「いやそこまでしなくていいからな!?？」

ガチ土下座をしたまま更なる詫びを入れようとする倫吾を、瞬は慌てて止める。別に倫吾を罰したいわけではないし、そうしたところで意味がないのもわかっている。

一方レイは、イスタを庇う様に立ちながら倫吾を睨みつけている。彼からすれば、A MOREは自分からいろんなものを奪ったも同然の存在なのだ。敵意を抑えろという方が無理な話だ。

そして、倫吾が追いかけてきていた少女——行江飛鳥は、先程から倫吾に警戒心を剥き出しにしており、ずっと唯の背後に隠れている。こちらはどうしたものだろうか。

ともかく、逢瀬家の人口密度がまた一段階増してしまった。人集まりすぎにも程がある。

「本日伺ったのは、これをお渡しする為です」

そう言うのと倫吾は、一枚の封筒を手渡してきた。

開けてみると、中には一枚のディスクケースが収められている。

ケースからディスクを取り出し、リビングに置いてあるブルーレイデッキに装填す

る。

すると、テレビの画面に、痩せた壮年の男性の顔が映し出された。

『逢瀬瞬、でいいんだな？これを見ているのは』

「うおっ!?」

『私は四切宮嗣郎。AMOREの創設者にしてリーダーを務めている』

「！」

「こいつが、AMOREの……」

瞬はテレビの画面を見つめたまま、ごくりと唾を呑む。

四切宮嗣郎。これまで断片的にしか実情を知らなかった組織・AMOREのトップ。

レイは画面に映ったその姿を見るなり、握り拳を震わせる。今にも画面を殴りつけにいきそうなほどに、だ。

緊張感に包まれる中、ビデオレターの再生は続く。

『先日 の件について、此方から詫びねばなるまい。私の部下が非道な真似をしてしまい、本当に申し訳ない』

画面の中の四切宮は、そう言って深々と頭を下げた。

そして彼は頭を上げると、再び淡々と話し始める。

『池袋事件の首謀者連中は既に処分を下した。洗脳されていた隊員達も、洗脳が完全に

解けるまで入院という措置をとらせていただいた。誠意の代わりにはならないかもしれないが、本件についての感謝料を口座に振り込んでおこう。無論、相藤レイにもだ」

「そんなもんが謝罪に……なると思っているのかよ」

『組織の方針としては、基本的に転生者絡みの案件を除いてその世界には深入りしないというというのが。私個人としては、君達を敵とは思ってははいない。寧ろ、同じ敵と戦う戦友でありたいと思っている。では、諸君らの健闘を祈る』

そう言つて、ディスクの再生は終わった。

しばらくの間沈黙が流れた後、唯が口を開く。

「なんか、思ったよりマトモそうな人だったね」

「……いくら金を積まれようが謝られようが知った事か。俺がお前らを信じることは永遠にない。何度生まれ変わっても、お前らの過ちを忘れはしないからな」

「レイ……」

レイは、倫吾に冷たくそう言い放つ。

倫吾に当たり散らしても意味がないことはわかっているものの、どうしてもAMOR E全体を憎まずにはいられない。しかし、イスタの前で暴力的な手段に出るわけにもいかず、レイは必死に堪えるしかなかった。

四切宮からのビデオレターが終わり、重苦しい雰囲気にも包まれるリビング。

そこに、ネプテューヌが飛鳥を指差しながら、素朴な疑問を投げかける。
「でき、この子は誰？」

「ウチで保護してる子つす。色々あつて付いてきちゃいまして……まあ用事はもう済んだので大丈夫つすよ。ほら飛鳥ちゃん帰るつすよ！」

「帰らない」

「え」

きつぱりと、飛鳥はそう言った。

そして、自身の腕を掴んでいた倫吾の手を振り払うと、瞬の服の裾をぎゅつと強く握りしめ、目に涙を浮かべながら叫んだ。

「わたしは帰らないっ！ おねーちゃんを見つけるまで帰らないっ！」

「いやでもっ……ギフトメイカー絡みつてなるとお姉さんだけでなくキミにも危険が及ぶかもだし！ てかさんなことしたら俺が上に保護責任問われて叱られるしっ！」

必死になって飛鳥を説得しようと試みる倫吾。

だがその時、彼の発したとあるワードに、瞬が反応した。

「ギフトメイカー絡み、と言ったな」

「あ、やべ」

「……色々と話してもらおうぞ」

瞬に肩を掴まれた倫吾は、ダラダラと冷や汗を流す。彼の口の軽さが、要らぬトラブルを引き寄せた瞬間である。彼に拒否権なんかなかった。

暁家

暁古城の朝は遅い。

第四真祖、要するに吸血鬼である彼にとつて、日光とは毒だ。流石に身体が焦げるとかいうレベルでは無いが、日光に当たると古城は頭がうまく回らなくなる。まあそのせいで補習常習犯なのだが。

が、そんなことはつゆ知らずな世話焼きな妹・凧沙に叩き起こされたので二度寝するわけにもいかず、現在こうして大欠伸を連発しながら遅めの朝食を取っていた。

「せっかくの休みなんだから、ゆっくり寝かせてくれよ……」

「だーめっ！　せっかくの休みだからこそ早く起きるんだよー。朝日を浴びれば古城くんもきつと目が覚める！　てゆうーか古城くんは雪菜ちゃん待たせてるんだからね？」

その辺りの自覚は欲しいかなあ」

「もう目覚めてるよ……つたく、なんでどいつもこいつも朝から元氣爆発してるんだか、わけわかんねーんだからもう……」

「別に私は待つてゐるわけでは……というか朝早くから先輩の家にお邪魔してしまつて申し訳ないというかです……」

風沙の言うとおりで、晝家には既に雪菜が来ている。流石にこのまま待たせつぱなしと、いうのもアレなので、古城は急ぎ目になってトーストを飲み込む。

その時だつた。

古城が朝食を摂り終えると同時に、インターホンが鳴つた。

「誰だろう……？」

「俺が出るからいいよ」

古城は、口周りに付いたパン屑を水で流してから、玄関の扉を開ける。

そこには、改まつた様な顔をした男女3人が立っていた。

古城がちよつとびっくりして固まっていると、先に彼らが口を開いた。

「なあ、あんた第四真祖なんだろう？」

「なんでそれを……」

「先輩、彼らは人間ではありません」

「え……？」

いきなりこちらの素性を口に出されて古城が戸惑つてゐると、古城の背後からぬつと顔を出しながら、雪菜がそう言つた。

訪問の唐突っぷりからして明らかにただものではないと思つてはいたが、相手が人外——魔族とあれば話はさらに変わってくる。

古城も雪菜も、凧沙に対しては第四真祖のあれこれは伏せてあるし、それに凧沙は過去のとある事故が原因で魔族にトラウマを抱いている。どちらにせよここで話をするのは不都合でしかない。

というわけで、古城と雪菜は凧沙に留守番を任せ、他所で話の続きを聞こうという事にした。

「ちよつと出掛けなきやいけなくなつた。留守番頼む凧沙！」

「こゝ、古城くん!?」

凧沙が何か言おうとしていたが、古城は慌てて訪問者達をマンションから引き離し始めていた。

……どうやらのんびりとした休日はお預けのようだ。

主人公に、休みは無い。

第41話 爆炎の傀儡武神

都内某所、とある廃ビル。

そのワンフロアは、酷い有様だった。

壁はぶち抜かれ、床には剣で斬りつけたかのような痕。窓という窓はぶち抜かれ、備え付けのデスクはバラバラに破壊されている。十五の夜でもここまでならないだろうというレベルで、完膚なきまでに荒らされていた。

そんな部屋のご真ん中、唯一無事だったデスクの上に、バルジは腰掛けていた。

「なにこの荒れよう……アンタ一体何やらかしたのよ？」

「聞くまでも無いだろ。大方の予想はつく」

エレベーターから出てきたリイラとレドは、部屋の惨状を目の当たりにして、驚きと呆れの混じったような声をあげる。

同僚の来訪に気づいたバルジは、いつものようにケラケラと下品な笑みを浮かべながら、2人を迎える。

「いやあ実験失敗。マジでやらかしたわ」

「……だろうな。この部屋の様子を見りやあわかるっての。いいから詳細プリーズ」

バルジの事を一方的に嫌っているレドは、バルジに冷たくそう言い放つ。

が、バルジは他人の心が分からないので、レドの態度を意に介さず、いつものように馴れ馴れしく語り始める。

「俺様さー、あのダーククライダー君にイガリマの特典台無しにされちゃったんだよね。だからちよいとムカムカして、実験で憂さ晴らしてたワケよ」

「お前でもムカつく時があるんだな。知らなかった」

「レド、おめーは俺様をなんだと思ってるんだ。人並みの心の機微は有してるはずだぞ。いや嘘つけ、とレドは突っ込んだ。

コイツに人並みの心の機微があったら、間違いなくここまで破綻してないだろう。レド自身も極悪人の部類だが、バルジに比べたら遥かにマシだという自負はある。それくらい、目の前の男はイカれているのだ。

「で、その後どうなったの？ なんとなく予想はついてるけど、どうすならバルジ自身の口から言ってる欲しいかなー私は」

「オツケー、リイラちゃんの熱い言葉に答えちゃうぜっ☆ まあなんだ、イライラして実験動物で実験してたら暴走しちゃうってさ、逃げ出しちゃったんだよ。あーめんどくせえ」

「自業自得じゃねーか馬鹿野郎」

それを聞いたレドがもつともなツツコミを入れる。

「あの実験動物、AMOREからわざわざ盗ってきたわりには精神的にかなり不安定なんだよね。つたく、いい暇つぶしになると思ったんだけどなあ。どうせなら妹の方も一緒に拉致すりゃよかった」

「……ろくな事にならない気がする」

「そう？　最高だと思っけど」

「やっぱお前らいかれてるよ」

狂人どもに囲まれたレドは、早くも頭痛を感じていた。

バルジがハマしたというのを笠原から聞いて、いつもの仕返しとして馬鹿にしてやろうと思ったのが間違いだっただ。こうなるんだったら顔出さなきやよかった。

そんな感じにレドが一人で後悔していると、突然バルジは、何かを思いついたような声を上げた。

「……………いい事考えた」

ぞくりと、レドに悪寒が走る。

バルジの目は、キラキラ輝いていた。

天統市内某所。

謎の墮天使3人組の来訪を受けた古城と雪菜は、とりあえず近くの公園で彼らの話を聞くことにした。

彼らの名はカラワーナにドーナシックにミットルテ。明らかに何かを警戒しているようなそぶりを見せていたり、古城の素性を知った上で来ていたり、どうやら相当訳ありなようだ。

「つまり……自分達は仕事でこっちにきたけど、怪物に襲われて捕まっていた。そしてリーダーがまだ捕まったままだから助けてほしいと」

「はい」

「知つての通り、我々墮天使は悪魔とは敵対関係にある。だから悪魔達に助けを求めめることはできないし……そもそも、任務に失敗した我々を上が許してくれるかどうかも……」

「……どうするっ？」

「うーん……」

雪菜と共に悩む古城。

はつきり言う、古城き彼女達をあんまり信用できない。かといってこうも熱心に頼まれてしまった以上、拒否するのもほっとくのもなんだかバツが悪い。

「本当は自分達でなんとかしたい。しかし、私達ではどうしてもアイツに勝てないの」「そんな時に、第四真祖の噂話を耳にした。我々三代勢力の間でも、あんたの事は結構噂になつてゐるつすから……噂通りなら、アイツからレイナーレ様を取り返す力になつてくれるかもしれない。だからこうしてやって来たんだ」

「あの方は我らの大切なリーダーなのだ……頼む、この通りだ！」

古城があまりにも優柔不断なもんだから、とうとうドーナシーク達は土下座までしました。

突然の土下座に、古城と雪菜は呆気にと取られている。

よく見ると、彼らの手は震えていた。きつと彼らは、恥を忍んで、藁にもすがる思いで古城の元に来たのだろう。それほどまでにレイナーレに身を案じているのだ。

それを蹴る事は、古城達にはどうしてもできなかった。

「……」まで本気でたのまれちまったらよ、拒否権ないようなもんだろ。いいよ、協力してやる」

「先輩がやるならば、私もです。皆さんの力になります」

結局、古城の善性が怠さに勝ってしまった。

後手に回らざるを得ない、圧倒的に不利な状況。果たして、どうすべきなのだろうか。
「……思ったよりキツイな」

「ええ。互いに最新の注意を払うべきでしょう」

「その方がいい。相手は兎に角話が通じない」

古城達の言葉にドーナシークが頷く。

そして、彼からの忠告がその後続いた。

「いいか、もしバルジと退治したら、絶対に奴と対話しようとするな。するだけ無駄だ。そして自分の大事なモノには意識を集中させておくん。アイツは兎に角他人を苦しませることに関しては天才の域、アキレス腱を少しでも見せればそこから罠り殺しにされかねないのだからな」

場所は変わって逢瀬家。

紆余曲折あって、飛鳥の境遇を話す事になった倫吾。

彼は、バルジが飛鳥の世界を滅ぼした事、その上更に飛鳥の姉すらも実験に使うべく拉致したことも、包み隠さず話した。

瞬達は、それを静かに聞いていた。

「なるほどな……ギフトメイカーの奴等、どれだけの被害を出せば気が済むんだ」

「家族も友達も奪っておいて、その上でお姉さんまで奪うつもりなの……許せない」

倫吾の話聞いた瞬の声は、怒りで震えていた。

普段ふざけまくっているネプテューヌでさえも、飛鳥の境遇を聞いて、バルジに怒りを露わにしている。

「面目無いつす……AMOREおれたちが不甲斐ないばかりに……」

正座したままの倫吾が、申し訳なさそうにそう口にする。

自分達の力不足が招いた結果がこの場にいるが故に、倫吾はそれに腹が立っているのだ。
だ。

もちろん、瞬は倫吾を責めても何にもならないことも理解しているのだが、レイは違うように、あからさまに倫吾を責め立てるような眼差しを向けている。

「ところで飛鳥ちゃん、お姉さんの手がかりとか無いの？」

「ううん」

唯の言葉に、飛鳥は首を横に振る。彼女はもう飛鳥を助けるつもり満々のようだ。

飛鳥は、瞬の服の裾を一層強く握りしめながら、倫吾に自らの決意を告げる。

「兎に角、わたしはお姉ちゃんが見つかるまで帰らない。ここに居座ってやる」

「……嘘だろ、また居候増えるの？ どいつもこいつも、うちを迷子センターかなんかと勘違いしてないか？」

今更ながら、我が家に幼女ばかり集まってくる現状にツツコミを入れる瞬。

自称女神、記憶喪失幼女に続いて家（というか世界）なき子ときたもんだ。ほつとけないのだが、流石にこれ以上抱えたら家計的にキツくなる。一体どうしたものか。

かくなる上は、早いこと解決して姉妹揃って帰ってもらおう他無い。

「やってやるよ……こうなりややるしかねえっ！ 俺がお前の姉ちゃんを絶対に見つけてやるから！」

「おお、いつもに増してやる気に満ちてるねえ瞬！ なら私も頑張っちゃうから！」

半ば自棄になって頼みを承諾してしまった瞬。それを聞いた時の飛鳥の表情の明るさといったら、なんとも目が眩みそうなほどのものであった。

その頃、土手の上では。

「つ、か、れ、た……」

ジャージ姿の欠望アラタは、息も絶え絶えになりながら道路に膝をついた。

アラタより先を走っていた大鳳と山風は、アラタが膝をついたのを見て、呆れたよう

に息を吐く。

「だらし無いわね。せっかく私が付き合っただけだから、もっと頑張りなさいよ」
「いやお前らのペースが早すぎるんだよ……っ！ 元軍人と普通の高校生じゃ明らかにスタミナとかに差があるだろっ!!？」

「それくらい叫べるならまだ平気でしょ……ほら頑張つて。アラタがやるつて言い出したんだから、そう簡単に投げ出しちゃダメだよ」

大鳳も山風も冷たかった。可愛い顔してとんだスパルタである。

かつて オリジオンに大鳳が襲われた際、アラタは何も出来なかった。その無力感からアラタは、自分も強くなろうと決心したのだが、勢いでファイフティに特訓を申し入れたのが運の尽き。アラタは連日ハードなトレーニングをこなす羽目になっていた。今もその真つ最中だ。

今日はファイフティが不在なため、自主練として体力作りのための走り込みをしている。

で、同居人である元艦娘の大鳳と山風も一緒にやらないかと誘った結果がこれだ。引退したとはいえど艦娘、普通の人間よりは鍛えられている。アラタは彼女達の走るペースについていくので精一杯だった。

「ちよつと休憩しない……っ？ さすがにやべえよ……」

「いやまだいけるでしょ。瞬は池袋で半日近く戦いまくってたんだし、アラタもいけるよ、多分」

「基準がおかしいの分かつてます^{アンダスタン}?!?」

「ほら立って、まだまだ走るわよ」

「勘弁してくれ……」

大鳳に無理矢理立ち上がらせられながら弱音を吐くアラタ。

大鳳を守る為に強くなりたくないと願っているくせに、今の自分じゃ彼女以下だ。アラタは自らの弱さを痛感し、情けなく思う。

そこに、

「ア……………アア……………」

「なに、あれ」

山風が指差した先。

そこには、虚な目をした少女がふらふらと歩いている姿があつた。顔はやつれており、

少女の異様な様子に、周囲の人達は引き気味だった。道を歩いていた大学生のカップルや草野球をしていた男達、はてには土手の下で汚らしく遊んでいた土方まで、誰も彼もが少女を遠巻きに見ている。

「なんやあいつ、せっかくおっさんと糞遊びしていたのに……嫌だねえ（興醒め）」

「あれ大丈夫なのかよ……通報とかするべきかな？」

「てかんなんウ○コ臭くない？ 近くの土方、臭ってない？」

「何あの子……クスリかなんかやってんのか？」

「いやでも高校生くらいよね？ あの歳でそれはないと思う……」

少女の姿を見た大学生くらいのカップルがそう口にする。

すると、

「あああああああああああああああああああああああッ!!？」

《KAKUSEI LAMA》

少女は喉が潰れるような勢いで絶叫した。

それと共に、少女の全身にジツパーが現れて一斉に開いてゆくとともに、そこから炎を吹き出しはじめる。

「あれって……」

「間違いない、オリジオンだ！」

「ドコイニルウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウツ!!？」

「

全身をくまなく炎に包まれた少女が叫ぶと同時に、彼女の全身にまとわりついていた

炎が残らず弾け飛ぶ。

炎の下から現れたのは、背中にさまざまな武器を背負い、薄手の鎧を着た怪人だった。変身時の音声から、便宜上ラーマオリジオンと呼称すべきだろうか。

オリジオンを目の当たりにした周囲の人達は一斉に逃げ出す。

「うわあああああああつ!!?」

「なんだあいつ!!? と、とにかく逃げようこれ明らかにやb

声がひとつ、途切れた。

オリジオンが背負っていた槍を、草野球をしていた男性のうちの一人に向かってぶん投げたのだ。

男性は断末魔を上げる間すらなく、槍が当たった顎から上が跡形もなく吹き飛んだ。ぐらりと、頭がなくなった男性の死体がその場に倒れる。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああつ!!?!!?」

悲鳴があがる。

日常が崩れ去り、阿鼻叫喚の地獄が生まれる。

「くそつ……どうすりゃいいんだよ……!」

「アラタ無理だつて! 瞬を呼ぶしかないよ!」

山風と大鳳に引つ張られるがまま、アラタはその場から逃げ出す。

しかし不幸なことに、アラタ達はラーマオ리지オンの次の標的として選ばれてしまった。

オ리지オンは口から凄まじい熱波を吐き出し、逃げていたアラタ達の背中にそれをぶち当てて吹き飛ばす。

「がっ……熱っ!!?」

「ぐう………」

背中に一撃をくらったアラタ達は、地面にぶつ倒される。

内臓が押し出されそうになる程の衝撃に襲われ、背中には、ジリジリと肌を焦がすような痛みが纏わりついている。

ラーマオ리지オンは言語化し難い唸り声をあげながら、背中に背負っていた剣を手にとり、倒れたアラタ達に向かって斬りかかろうとする。

「嘘だろ——」

その時だった。

「とりやアツ!!?」

「ドコブリヤツ!!?」

突然、横から誰かが飛び蹴りをオ리지オンにぶち込んだ。

そして、ラーマオリジオンを蹴り倒した人物が、アラタ達の前に姿を現す。

「なんだ、お前らか」

「灰司……!?」

それは無束灰司だった。

「邪魔だ退け、俺が片付けてやる」

《DESIRE DRIVER ENTRY》

灰司はそう言ってアラタ達を押し除けてラーマオリジオンの前に立つと、黒い楕円形のドライバーを腰に装着する。その中央には、黄色いコアがはめられている。

そして灰司は襲いかかってきたラーマオリジオンの剣を避けながら、ドライバー右部に黄色いバツクルを装填し、そのレバーを引く。

《SET WARNING》

「変身」

《WORLD YOU LIKE A CUSTOM SELECTION! GIGANT BRASSSTER!》

「目障りだ、手っ取り早く片付けてやる」

バツクルを頭部から生えた鹿の角と、建設重機を模したアーマーの目立つ仮面ライダーに変身した。その手には、大きな銃火器——ギガントブラスターが握られている。

「仮面ライダーシーカー……目標を殲滅する」

シーカーに変身した灰司は、ギガントブラスターを連射する。

しかしラーマオリジオンは、背中に背負った薙刀を手に持つと、それを勢いよく振り回して銃撃を弾いてゆく。薙刀と大剣の二刀流だ。

「随分と器用だな！」

ズバババババババツ!!? と、絶え間なくシーカーのギガントブラスターが火を噴く。

ラーマオリジオンは取り回しが難しいはずの薙刀と大剣を軽々と扱いながら、ギガントブラスターの掃射をいなしてゆく。彼女には未だに一発も命中してはいない。

「ならばこっちだっ！」

《GIGANT HAMMER》

銃撃を容易くいなししてしまったオリジオンに対して、業を燃やしたシーカーは、右側のパワードビルダーバックルに装填していたギガントブラスターバックルを外し、代わりに左側のギガントコンテナバックルから新たな小型バックルを取り出して、パワードビルダーバックルに装填する。

すると、シーカーの手からギガントブラスターが消え、代わりに巨大な青いギガントハンマーが出現する。

「ドコダアアアアアアアアッ!!？」

「喧しいんだよ少しは黙れっ！」

薙刀と剣を振り回しながら叫びまくるラーマオリジオンに、シーカーはキレながらギガントハンマーをぶつける。

ギガントハンマーでぶっ叩かれたラーマオリジオンは、骨が砕けるような音を鳴らしながら土手の上から転がり落ちる。

「はあああああああああアッ!!？」

土手から転がり落ち切って立ちあがろうとしたラーマオリジオンだが、そこにすかさず、シーカーがギガントハンマーを振り下ろしながら飛びかかってきた。

振り下ろされたギガントハンマーは地面にぶつかるとなり、周囲に凄まじい衝撃波を撒き散らし、オリジオンの身体を吹き飛ばす。

そしてその衝撃は、土手の上のいたアラタ達にまで伝わってきた。

「うわあつ!!？」

「山風捕まれっ！」

そして土手の下。

剣を取り落としたラーマオリジオンは、残った薙刀を片手に、ハンマーを構えたシーカーに突撃してゆく。

「どりゃああああっ！」

「!!??」

薙刀の刀身に炎を纏わせながら突撃してきたラーマオリジオンに対して、シーカーはギガントハンマーで迎え討つ。

空気を切り裂きながら振り回されるギガントハンマー。それに対して、咄嗟に薙刀を体の前に突き出し、身を守ろうとするラーマオリジオン。

しかし、細い薙刀ではハンマーを防ぐことはできず、ハンマーの勢いに押され、オリジオンの手から薙刀が溢れ落ちる。

そして。

ドゴオオツ!!? という鈍い音と共に、ラーマオリジオンの胴体にギガントハンマーがめり込み、その身体を猛烈な勢いで吹っ飛ばした。

「グギャアアアアアアツ!!??!!??」

吹っ飛ばされたラーマオリジオンは悲鳴を上げながら、川の対岸へと飛んでゆく。

そして遠く遠くへ飛んでゆき——見えなくなってしまった。見事なまでの場外ホームランだ。これでは逃してしまったも同然だ。

「クソツ、やり過ぎたか……コイツはパワーがあり過ぎる。使用は控えるべきだな」

予想以上にやり過ぎて結果的にオリジオンを逃してしまった灰司は、舌打ちをしながら

らシーカーの変身を解く。

そしてそのまま立ち去ろうとするが、ひとつの声がある。

「待てよ灰司っ！」

灰司が振り返ると、先程の戦いを見ていたアラタが、土手の上から駆け降りてきていた。

「お前……本当に仮面ライダーだったんだな……」

「だからどうした」

「無事でよかった。池袋でいなくなっただけだから、皆心配してたんだぞ」

「余計なお世話だ。そもそもお前らに接触したのはアクロスの監視の為。別に俺は、お前らに対して友情だの絆だのといったものは感じてない」

「なに……？」

同級生として心配していたアラタに、灰司は冷たくそう言い放つ。

それにはアラタもむっとうとしてしまう。

「そして俺は転生者が嫌いだ。だから俺に関わるな、そして邪魔するな。それだけは覚えておけ」

それだけ言うと、灰司はポケットから錠前の用なものを取り出し、そのロックを外す。すると、その錠前は急速に変形し、一台のバイクとなる。

灰司はヘルメットを被ってそのバイクに跨ると、そのまま颯爽と走り去ってしまった。

一人残されたアラタの元に、遅れて大鳳達が土手の上からやってくる。

「なに話していたの？」

「……………なんでもねーし。結構薄情なんだな、アイツ」

去り行くバイクを見つめながら、アラタはそう呟いた。

川を渡った先にある、とある無人の公園。

シーカーに吹っ飛ばされたラーマオリジオンは、そこに倒れていた。

「ア、アア……………」

ぐぐぐ、と力を入れて、身体を起こす。

オリジオン化によって頑丈になっているとはいえ、流石に野球ボールみたいに吹っ飛ばされたら相当なダメージになる。

ヨロヨロと立ち上がったラーマオリジオンは、身体のあちこちから断続的に火を噴きながら歩き出す。

「アア……………ドコニイルノ……………」

譫言うわごとのようにそう繰り返しながら、オリジオンは歩き続ける。

噴き出す炎の量は次第に増えてゆき、ついにオリジオンは変身を保てずに、近くの木に手をつけて地面に膝をつく。

「はあ、はあ……………」

ラーマオリジオンに変身していたのは、薄紫色の髪の少女だった。

顔はやつれ、瞳は煙くすみ、着ている服はポロポロで、全身に痣や傷がついているという、文字通りの死に程になりながらも、彼女は歩みを止めない。

血を流しながら立ち上がり、幾度となく繰り返された嘆きを口にする。

「ああ……………飛鳥、どこに居るの……………お姉ちゃんを置いていかないで……………ここに居るよお、ここに居るヨオ……………!!?」

彼女の名は行江ゆくえかおる薫。

行江飛鳥の姉にして、たった一人残された家族。

そして、バルジの実験動物だ。

第42話 ひとりぼっちな君への贈り物

「……なんで俺達、こんなところにいるんだろうか」

やたらとカラフルな景色を目の前に、ベンチに腰掛けていた逢瀬瞬はそうぼやいた。
「流れるにき、飛鳥のお姉さん探しに移行する筈だったよなコレ」

「そうっすよね」

瞬の隣に座る御手洗倫吾が相槌を打つ。その目が死んでいるのは、多分負傷のせいではない。

少しばかりの間を置いて。

浮かれに浮かれた人混みの中で、瞬は思いの限り叫んだ。

「なんで俺達遊園地であそんでるんですかねえっ!?」

フェニックスワンダーランド。

瞬達の暮らす街にある、多彩なアトラクションとステージショーが人気のテーマパーク。

正直言つて瞬は、このテーマパークの存在を全く認知していなかった。

おそらくだが、艦娘やデュエルモンスタースターズと同様に、次元統合の影響で出現したのだろう。ファイフティから説明はされたといえども、自分の過ごす世界が知らない間に全くの別物へと変貌していく様子には、未だ慣れない。

そんな話はさておき。

現在瞬は、唯を本気で叱りたいと思つていた。

「むんぎやあああああああああああああああああああつ！」

「たーまやーつ！」

「それ花火のかけぬぎやあああああああああああああああ口から色々と吐きそうだあああああああああああああつ!?」

肝心の唯は、目の前のジェットコースターを満喫してやがった。

おまけにクラスメイトの志村優始しむらゆうしと九瀬川ハルくせがわまで呼んで一緒に遊び出す始末。

飛鳥はというと、瞬達の側ですっかりいじけてしまつている。切実な願いを胸にやつてきた筈なのに、遊園地で遊び呆けている。そんな現状に耐えきれないのだ。

と、その時。

「いやー楽しかったなあ！ よし次はミラーハウス行こうぜ、最下位はポップコーン全員分を奢りねっ！」

ジェットコースターを堪能し切った唯達が降りてきた。

ちなみに志村とハルは、無理矢理ジェットコースターに乗せられたせいで気分を悪くしており、向こうのベンチで死にかけている。

瞬はさすがズベンチから立ち上がり、唯に詰め寄ってゆく。

「んなことしてる場合かよ!!? 俺達はバルジを探してボコすために出かけたの！ 決してゴールデンウィーク最終日の思い出づくりのためなんかじゃないんだからねアンダスタンツ!!?」

「殴らないで馬鹿になるからっ!!? 仕方ないじゃん、バルジどころかギフトメイカーの奴ら、基本的に神出鬼没で探しようがないじゃん!!? フィフティはどっか行っちゃったし、もうなんかどうしようもなくないつ!!?」

開き直りやがる唯を、瞬と飛鳥がボコボコ殴りまくる。

10年以上一緒にいたが、こいつがここまで能天気だとは思わなかった。本気で泣きたくなる。

「そ、それにさ……飛鳥ちゃんがお姉さん取り返した後の話も考えるべきだよ」

「何? 言い訳の続き?」

「飛鳥ちゃんのメンタルケアだよ。飛鳥ちゃんはバルジに何もかも奪われて、すっかり傷付いている。だから、それを少しでも癒せないかなーって……」

「それ唯さんが遊びたいだけですよね。小学生だからって馬鹿にしなくてもええます？」

「飛鳥にそう言われて固まる唯。」

女子小学生に凶星を突かれて固まるとか、恥ずかしくないんですか？

「一通り唯にお灸を据え切った瞬間は、飛鳥に平謝りする。」

「ごめんな飛鳥、俺がコイツをとめてやってたら……」

「ホントそうですよね。彼女の手綱を握れないとか、仮面ライダーとして恥ずかしくな
いんですか？」

「その時だった。」

何気ない少女の一言が、ふたりにクリティカルヒットした！

「ななな何を言っているのか飛鳥ちゃん!!?」

別に私と瞬はそんな関係じゃあないんだからねーっ!!? あんまりあることない事
言うのと背筋捻りパンみたいにしちゃうけどいいかなーっ!!?」

「ままま間違つてもコイツと付き合うとかあり得ないからなっ!!? 今以上に疲れるの
が目に見えてる、俺が5人居ても足りねーよ！」

目に見えて狼狽し出す唯と瞬。

その様子はまるで、システムのバグったロボットか何かのようにしか見えなかった。あまりにもコテコテすぎて、いつの間にか復活していた志村とハルも、思わずツッコミをいれてしまう。

「唯ちゃんさあ、毎日のように逢瀬くん家に入り込んでる時点で、説得力ゼロどころかマイナスだよな」

「逢瀬さんも逢瀬さんで、なんだかんだ不平不満言いながら唯さんと付き合い続けているあたり、だいぶズブズブだと思えますけどね」

オーバーキル！

逢瀬瞬と諸星唯は倒れたっ！

瞬と唯はダウンしてるし、倫吾は相変わらず包帯まみれだし、志村は吐き気がぶり返してベンチと一体化しているしで、もう何もかもめちやくちやだった。

その惨状を見た飛鳥の口から、無意識のうちに笑いがこぼれる。

「っははは」

「あれ、飛鳥ちゃん笑った？」

「わ、笑ってないです！ 幻聴幻覚ですよきつと！」

ほかほかと倫吾を叩きながら必死に否定する飛鳥。

と、ここですつと空気だったヒビキとネプテューヌが、飛鳥の肩に手を置きながら語りかけてきた。

「子供は笑つててなんぼだよ。笑顔を恥ずかしがる必要なんてナツシング、笑いたきや笑えばいいのさっ」

「うんうん、やっぱり人の笑顔は元気をもらえるね。これだからお人好しはやめられないんだよ」

いやあんたらも子供ですよ。

復活した瞬は、しばらくネプテューヌに冷めたような目を向けた後、ぼそりと言った。

「……さつきまでずっとコーヒーカップで目を回していたガキどもがなんか言ってるよ」

「黙れ女神キツクツ!!？」

「あぶぶばっ!?？」

直後。

自称女神の飛び蹴りが瞬の腰を貫いた。

てっ！』

「おーっ！ いっちやえ勇者えむーっ！」

「わんだほーいっ！ ほら飛鳥ちゃんも応援しないとっ」

「え、えーと……が、がんばれえー……」

すっかりノリノリのヒビキ達に引つ張られるように、飛鳥も戸惑いながら声援を送る。

その顔には、ぎこちないながらも笑顔が浮かべられていた。

「あの子達……確か、〃ワンダーランズ×ショウタイム〃だったかな。僕らと同い年なのに凄いいね。おまけに魔王役の天馬司くんはてんまつかさクラスメイト……マジで凄いなあ」

「語彙力なさすぎて全然褒めてるように聞こえないんですけど」

志村とハルは、〃ワンダーランズ×ショウタイム〃の面々が同級生であるという点に驚いている模様。

もちろんその記憶は、次元統合によって改変された後の記憶であるのだが、転生者でもなんでもない2人はそれに気づけない。

そして、志村や飛鳥達から一列後ろの席。

瞬と唯と倫吾は、シヨを眺めながら飛鳥の境遇について話し合っていた。

「AMOREに保護されてから、飛鳥ちゃんはひとりぼっちだったんすよ。お姉さん――

「薫さんは保護した当初からずっと意識不明でしたし、2人とも保護の名目で施設内に閉じ込められていましたから」

「……可哀想だね」

「俺もそう思っつて、ちよくちよく飛鳥ちゃんがいる施設に顔出しては、AMOREの任務で行ったさまざまな世界の話をしてあげてたんすよ。その時についてうっかり、灰司先輩や瞬さんの話をしてしまったら、勝手についてこられてこの有様つすよ……」

「お前は秘密組織とかにいるべき人間じゃないと思うぞ」

「灰司と同様に、倫吾の口の軽さを心配する瞬。彼の辞書には守秘義務という言葉は恐らく存在しないのだろう。」

でも倫吾の口の軽さのおかげで、結果的に飛鳥は羽を伸ばす事ができている。

あくまで結果論だが、その点だけはいいかもしれない。

「……多分、灰司も同じなんだよな」

「いきなり何、どうしたの瞬」

「灰司も、バルジに全てを奪われた。飛鳥とは違って、真正正銘のひとりぼっちになった。そりゃあ、復讐しなけりゃ生きていけないよな……」

「そうつすよねえ。灰司先輩はあんまり自分の事語りたがらないつすから、俺もその辺は噂でしか知らないんすよね……」

何もかも失い、友達と遊ぶ事も家族に甘える事も出来ず、身を守る為に施設内に軟禁される日々。

飛鳥の境遇は、大の大人でも辛い筈だ。それを10歳で経験している彼女は、それ以上苦しむ筈なのだ。

だから、こうして飛鳥が遊園地で楽しんでくれている事が喜ばしい。ここに彼女の姉がいれば、飛鳥の笑顔はもっと良いものになっているだろう。

「……何としてもでも2人を再開させなきゃ、だよな」

「うん。たったふたりの姉妹だもん、離れ離れのままなんて、残酷にもほどがあるよ」
シヨールを観て笑う飛鳥の様子を見て、改めてそう思う2人なのだ。

それからもう、瞬達はめちやくちやに遊びまくった。

お化け屋敷では、恐怖のあまり気絶した志村を背負う羽目になった。

スペースショットでは、予想以上の加速に全員揃って白目を剥いた。

ミラーハウスでは、壁にぶつかりまくってたんこぶをたくさん作った。

そうしているうちに午後4時になっていた。

背伸びをしながら、唯が満足そうな顔をする。

「いやー楽しかったよねー」

「目的忘れてないよな？ バルジと飛鳥の姉を探すためにわざわざ出てきたんだからな？」

「忘れてない忘れてない……うん」

いや、その顔は絶対に忘れてるだろう。

瞬は心の中でそう突っ込んだ。

「あれ、ちびっ子どもはどうした？」

「トイレっすね」

「そっか」

現在は、ヒビキ・飛鳥・ネプテューヌのちびっ子3人のトイレ待ち。彼女達のトイレを済ませたら、瞬達はフェニックスワンダーランドから退園するつもりだ。

欠伸をしながら3人を待つ瞬。

そこに、

「おーにーいーちゃんんんっ!!?」

「っ!!?」

突然、とてつもないさつきを感じ取った瞬。

慌てて振り返ると、そこには怒りの形相の妹・湖森の姿があった。

フェニックスワンダーランドに来て早々に逸れてしまいそれつきりだったので、瞬は心配していたのだ。

「あ、湖森……お前今までどこ行つてたんだよ？　ここに来て早々にいなくなつてさ……一応心配さ

「白々しいんじゃないこの野郎っ！」

「ぎゃああああああああつ!!??」

瞬間、湖森は手に持っていた土産袋でフルスイングで瞬をぶん殴つた。

中身は不明だが、相当に中身が詰め込まれた土産袋をモロに鳩尾に食らつた瞬は、土産袋の重力と遠心力を一気にその身に受け、派手に吹っ飛ばされる。

そして、地面に盛大にぶつ倒れた瞬の体を、湖森は思いつき踏みつけながら、思いの丈を言葉にし始めた。

「全然探す心配すらなかつたよね!!?　L●NEめちやくちや送つたけど既読ついてなかつたよね!!?　おかげ様でこっちは、修学旅行の自由行動で孤立する陰キャ男子の気分なんだわっ！　少しは妹大切にしてくれっ！」

ぐうの音も出なかつた。

完全に鎮圧された瞬の様子を見て、志村とハルは震え上がっていた。

「湖森ちゃんも意外と怖いんだね」

「女性はみんなそんなもんですよ」

瞬が助けを求めてきているが、ほとんど瞬が悪いので知ったこっちゃない。

無情にも、瞬は湖森からボコボコにされ続けるのであった。

その頃。

用を足し終えて手を洗っていた飛鳥達。

「ねえ」

「どうしたの、いきなり」

ふと、手を洗いながら、ネプテューヌが尋ねてきた。

「飛鳥ちゃんの世界ってどんな感じだったの？」

「それを聞いて何になるんですか。傷口抉るのが目的だったりしませんよね」

「いやいや滅相もないっ!!? ただ知りたいだけだっつて！」

飛鳥に疑いの目を向けられて取り乱すネプテューヌ。

飛鳥としては、ネプテューヌの質問には、できれば答えたくない。色々と思いついて

しまい、辛くなるからだ。

しかし、ここでヒビキまでもが、ネプテューヌと同じように好奇心を輝かせながら訊いてきやがった。

「私からもお願い。飛鳥ちゃんのことをもつと知りたいの」

「やめてよ……ちよつと考えれば、話したくないって分かるでしょ。何考えてんの……」

2人突き放そうとする飛鳥。

しかし、ヒビキは飛鳥の手を取り、更に懇願してきた。

「飛鳥ちゃんの世界を覚えているのは、飛鳥ちゃんとお姉さんだけでしょ？ それってあまりにも……寂しいなって思ったんだ。だから知りたいの、飛鳥ちゃんの生きていた世界を。それが、無くなってしまった飛鳥ちゃんの世界に対する、一種の『弔い』になると思うから」

「……………」

ヒビキの言葉を受け、考えこむ飛鳥。

飛鳥としては、失ってしまった過去を思い返すのは辛い事なのだが、それを自分の中にしまいこみ続けて風化させたくない、という気持ちも確かに持っている。

ヒビキは、そんな飛鳥の思いを見抜いていたのだ。

「……………はあ」

飛鳥はひとつ、ため息をつく。

そして、ぼつりぼつりと、自分が生きていた世界の話を話し始めた。

「……………わたしの世界は、普通だったよ。不思議なことは何にも起きないけど、退屈はしてなかった。お父さんはちよつと馬鹿だけど家族思いだったし、お母さんは怒ると怖いけど、どんなときもわたしとお姉ちゃんを大事に思ってくれていた」

ひとつひとつ、丁寧に噛み締める様に。

なくなってしまったものを語る飛鳥の瞳には、涙が浮かび始めていた。

「クラスメイトの篠田しのだくんはスポーツが得意で格好よくて、友達のかさねちゃんは頭が良くて、よく勉強を教えてもらっていたな。近所のタミエ婆さんは歳の割にはひょうきんだったし、隣に住んでるまーちゃんは兔に角わんぱくで、お姉ちゃん共々手を焼かされたっけ」

話す度に、飛鳥の瞳から涙が流れる。

止めようと思っても止められない。それらが、もう二度と戻ってこないものだと知っているからだ。

「そして、お姉ちゃんは……………ドジで人見知り気味でちよつと馬鹿だけど、一緒にいると安心できる、自慢のお姉ちゃんなんだ」

ポロポロと涙を流しながら、飛鳥は自らの心中を搾り出すかの様に語った。

やがて、悲しみに耐えきれなくなった飛鳥は、大泣きしながらその場に崩れ落ちる。

「前まではなんとも思っていないかったけれど、今となっては……全部全部、かけがえのないものだったんだ……!!? それをバルジは奪った！ 壊した！ そんなの……許せる訳ないじゃん……っ！」

「お、落ち着いて飛鳥……っつてのは無理だよね」

「ご、ごめん飛鳥ちゃん。悲しい事思い出させちゃって……」

最後まで話を聞いたヒビキとネプテューヌは、予想以上に大泣きしてしまった飛鳥を宥める。

そしてヒビキは、悲しみと憎しみで泣き崩れている飛鳥の身体を、そっと抱きしめた。

「大丈夫……なワケないか」

「……ごめん、感情的になりすぎた」

「ううん、憎んで当然だよ。飛鳥ちゃんにはその権利がある」

「……話を聞いてくれてありがとう。これで少しでも……わたしの世界を覚えてくれたらいいかな」

「忘れないよ……絶対に忘れないから」

ヒビキは飛鳥を抱きしめながら、噛み締めるようにそう約束する。ネプテューヌもそれに同意するように、強く頷く。

それからしばらくの間、辺りには飛鳥の嗚咽が繰り返されていた。

——そこに、邪魔者が現れる。

どこからか、ガタリという音がする。

「ミツ、ケタ」

「なっ——！！？」

音のした方を振り向く少女達。

そこでは、灰司に吹っ飛ばされていたラーマオリジオンが、トイレの窓から顔を覗かせていた。

それを見た飛鳥は、心臓が縮み上がる。足がすくんで、その場から動けなくなってしまう。

「あ、ああ……………！！？」

「ミツケタ……………ミツケタ……………オイデ、オイデ……………！！？」

ラーマオリジオンが窓枠に手をかけると、ミシミシミシツ！！？ と激しい音を立てて、窓枠が周囲の壁ごと粉々に砕けてしまった。

壁が一面丸々崩れたことで、やたらと開放的になった女子トイレ。

ラーマオリジオンは讒言の様に同じフレーズを繰り返しながら、飛鳥達の方へと歩み寄ってくる。

「逃げよう飛鳥ちゃんっ！　ここで死んだらお姉さんに会えなくなるって！」

「そうそう!!?　足を動かして!!?　兎に角今は逃げ一択だからっ！」

「あ、あ……うん」

足がすくんで動けない飛鳥を、ヒビキとネプテューヌが引きずる様にして動かしながら、オリジオンから逃げる。

逃げ出した3人を見たラーマオリジオンは、背中に背負っていた槍を取り出すと、それをぐっと構え、投げの姿勢に入る。

ラーマオリジオンは、槍を投擲するつもりなのだ。

「ニガサナイ……アスカ……ッ!!?」

ぐっと力を込め、ラーマオリジオンは槍を投げる。

オリジオンの手から離れた槍は、螺旋軌道を描きながら飛鳥の頭目掛けて飛んでゆく。

が、

「とりやあつ!!?」

ラーマオリジオンが投げた槍は、トイレを飛び出したあたりで、突然、横から飛んできた謎の鉄パイプに弾かれて地面に落ちてしまう。

「又ウウウウウウウウウウウウウウウウッ!!?」

怒りのこもった呻き声をあげながら、トイレから飛び出して辺りを見渡すラーマオリ
ジオン。

そこに、

「ホラアツ!!？」

「ガブツ!!？」

背中への一撃をうけ、ラーマオリジオンはよろける。

が、オリジオンはすかさず背中中の薙刀を手に取ると、そのまま自分の周囲を斬り払う
ように一回転した。

しかし、薙刀には何かを切った感触はない。

困惑しながら辺りを見渡すラーマオリジオン。

邪魔者は、目の前にいた。

「お前が男なのか女なのかは知らねーけど、女子小学生のトイレ覗くとか完全に事案だ
ろ」

逢瀬瞬。

クロスドライバーを腰に巻いた彼が、ラーマオリジオンの前に立ち塞がっていた。

彼が、鉄パイプで投擲槍を弾き、オリジオンの背中を蹴飛ばした張本人。

「これ以上飛鳥に悲しい思いをさせてたまるかよ……覚悟しろよ。変身っ！」

《CROSS OVER! 思いを、力を、世界を繋げ! 仮面ライダーアクロス!》
瞬は、バックル右スロットにアクロスライドアーツを装填してアクロスに変身すると、すぐさまラーマオリジオンに攻撃を仕掛ける。

「ジャマダツ!!? ジャマダツ!!?」

ラーマオリジオンは邪魔が入った事に怒り、アクロスを抹殺せんと、炎を纏わせた薙刀を振り回してくる。

アクロスは、腰に帯刀していたツインズバスター・ソードモードを取り出し、その刀身で薙刀を防ぐと、そのまま目一杯力を込め、薙刀を押し返す。

「コシヤクナ……ッ!!?」

初撃を防がれたラーマオリジオンは、今度は口から灼熱の炎を吐き出した。

「うわ熱っ!!?」

アクロスは咄嗟に横に転がって火炎放射を回避する。

全く掠つてすらいはないというのに、凄まじい熱気が襲いかかってくる。恐らく、あの火炎放射を生身で受けていれば即死だっただろう。

「危ねえだろっ!!? 骨まで溶かす気かっ!!?」

「ヌブゲツ!!?」

地面を転がったアクロスは即座に立ち上がると、一気にラーマオリジオンとの距離を

「ジャマスルナ、ツテイツタヨネ」

「……するに決まってる。お前が何をしたいのかは知らないが、暴れさせるわけにはいかないんだ」

ラーマオリジオンは、手元に戻ってきたブーメランを再び投げようとする。

そこに、

「てーりやあつとなつ！」

「ブツ!!?」

飽きるほど聞いた声と共に、ラーマオリジオンの後頭部に蹴りが炸裂した。

その衝撃で、ラーマオリジオンの手からブーメランがこぼれ落ち、オリジオンの身体は地面にぶつ倒れる。

そして、ラーマオリジオンの背後から、誰かが姿を現す。

「さーんじょうつ!!? こっからは諸星唯バトルモードのステージだいつ！」

アクロスには分かっていた事だが、それは唯だった。

池袋の時と同様に、ぴつちりしたレオタード風の衣装の上にメカめかしい装甲がくっついたという、まるで何処かの変身ヒロインかなんかの様な格好となっている。

改めて見ると、中々に目のやり場に困る格好だ。どうにかならないものだろうか。

「瞬、加勢しにきたよっ！」

「唯……他の皆は？」

「もう逃げたよ。飛鳥ちゃん達は倫吾に任せてきた」

それなら安心だ。

アクロスと唯は、立ちあがろうとしているラーマオリジオンと対峙する。

ここからが本番。

だが、2人ならば負ける気がしないと、不思議とそう思っていた。

「お前大丈夫なのかよ、まだ戦い慣れてないんじゃないのか？ コイツかなり強いぞ」

「足手纏いになる気はさらさらないからねっ！ 一気にぶん殴って終わらせるよっ！

」

その頃志村達は、物陰からアクロスと唯の戦いを見ていた。

「あれが唯ちゃんの新しい力……暴走してた印象しかないから、なんだか新鮮だな」

「志村さんは暴走の場に居合わせていましたからね、そう感じるのもむりはないでしょう」

唯のバトルモード（仮称）を初めて目の当たりにした志村とハルは、それに興味津々

の模様。

倫吾も倫吾で、ヒビキ達の肩に手を置きながら、アクロスの戦いを見守っている。

「すごいな……短期間でここまで成長するなんて。苛木の奴が焦る訳っす」

資料でしか知らなかったアクロスの戦いを目の当たりにし、倫吾は改めてその凄さを
実感する。

まだ戦い始めて1ヶ月弱しか経っていないにも関わらず、かなり戦い方が様になっ
ている。ひよつとすると、灰司に匹敵するかもしれない。

そんな人物を敵に回していた事に、今更ながら恐ろしさを感じる。

「つと、考えごと集中しすぎたらダメっす。今は飛鳥ちゃん達を守ることに集中しな
いと。安心するっすよ飛鳥ちゃん、あの怪物は仮面ライダーが絶対に——」

飛鳥を元氣付けながら、倫吾は後ろを振り返る。

そこに、飛鳥の姿はなかった。

アクロスと唯がラーマオリジオンと交戦を開始してから、暫く経った頃。

「ようアクロス、せっかくのゴールデンウィークだったのに、派手に無様に戦ってるねえ

「……よくもまあ飽きないもんだ」

ありとあらゆるものを馬鹿にしているかの様にしか聞こえない声で、上の方からした。

アクロスはラーマオ리지オンと掴み合いになりながら、声のした方を見る。

「あそこにいるのは……バルジ!?」

紫のライダースーツの上に白衣を羽織り、狂気的な笑みを絶えず浮かべている一人の男——バルジだ。

彼は、メリーゴーランドの屋根の上に腰掛けながら、アクロスとラーマオ리지オンの戦いを見物していた。

「バルジ……このオリジオンもお前の作業なのかっ!?」

「That's Aリーツ!!? 逃げ出した時はマジで凹んだが、予想以上の暴れっぷりで結果オーライだっ!」

「今度は何を企んでいるの!?? 飛鳥ちゃんにした事を、私達は絶対に許さないからっ!」

アクロスも唯も、バルジに敵意剥き出しの眼差しを向けている。バルジの所業を鑑みれば当然だろう。

しかし当のバルジは、なんで2人が怒っているのか全く理解できておらず、心底不思

議そうに首を傾げながら、2人を落ち着つかせようとする。

「まあ落ち着けよ。せつかくの機会だ、俺様の楽しい実験あそびの踏み台あいてにでもなってくれよ

……………ほら」

バルジかそう言うと、彼の背後からひとつの影が姿を現す。

それを見たアクロスは、啞然とした。

アクロスだけではない。

唯も倫吾も志村もハルも、湖森もヒビキもネプテューヌも、誰も彼もが啞然として固まっていた。

なぜならば、それは。

「本日の実験の主役はコチラツ!!? デデンツ、なんと行江飛鳥ちゃん10歳! パパもママもお友達もゼーんぶ奪われた挙句に、お姉ちゃんとまで離れ離れになった、とびつきりの逸材だっ!」

「……………」

「あす……………か?」

虚ろな目をした飛鳥だったのだから。

「この程度で台無しになるような尊厳なんか持つてる奴が悪いに決まってるんだろ、馬鹿かお前。弱い奴が悪い、選ばれなかつた奴が悪い。悔しかつたら復讐なりなんならやつてみやがれよ、どうせ無理だろうけど」

息を吐くように神経を逆撫でするバルジの発言で、アクロスは理解した。

——^{バルジ}彼は生まれてはいけない存在だ。今ここで倒さなければならぬ。

バルジの実験^{あそび}は、始まったばかりだ。

第43話 故に、人は彼を天災と呼んだ

飛鳥がオリジオンにされた。

そのシヨックはあまりにも大きかった。

家族も友達も全て奪われ、挙げ句の果てには自分自身すら奪われてしまった少女は、獣のような雄叫びをあげながらアクロスに襲いかつてゆく。

「……………嘘つすよね？」

御手洗倫吾は、目の前の光景を受け入れたくなかった。

「飛鳥ちゃんがオリジオンになるなんて、嘘なんすよね？」

「……………現実ですよ、腹立たしいことに」

倫吾の隣にいる九瀬川ハルも、静かに怒りを燃やしていた。

「……………」

「飛鳥……………」

ネプテューヌとヒビキは特にシヨックが大きいようで、ほとんど放心状態になってしまっている。

心を通わせた直後にこれなのだから当然だろう。

「やめろっ……！　飛鳥、正気に戻れよ!!?　バルジに何もかも奪われて、その上玩具にされて………それでいいのかわ!!?」

誰もがショックを受けている中、アクロスは飛鳥——シータオリジオンの攻撃をかわしながら、彼女に何度も呼びかける。

しかし、アクロスの声は届かない。

メリーゴーランドの屋根の上に腰掛けているバルジは、大笑いしながらその光景を眺めていた。

「ひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！　いくら声かけても無駄無駄、そいつは既に本能のままに暴れるだけの怪物！　いい加減理解しろよ、ヒーローってのはなんでも馬鹿ばつかなんだ？　いや、馬鹿だからヒーローなんかになって俺様達に歯向かうなんて愚かな真似するんだよな!!　可哀想！」

「ふざけるな！　飛鳥はお前の玩具なんかじゃないっ！　飛鳥だけじゃない、誰もかれも、お前の玩具にされるために生きてるんじゃないやねえんだよっ!!」

「玩具じゃない」だと？　そんな言葉、聞き飽きてあくびも出ねえよ。可哀想おもしろそうな面してる奴が十中八九悪いに決まっているだろ」

暴れまわるシータオリジオンを取り押さえようと四苦八苦するアクロスに、バルジの

心無い言葉が浴びせられる。

バルジの言い分は、いじめられっ子に「虐めたくなるような見た目をしているお前が悪い」と言っているようなものだ。ジャイアニズムも真つ青になるレベルでイかれてい

る。
アクロス自身も、既にバルジとの対話などできるわけがないと諦めきっている。それでも、灰司や飛鳥の境遇を思うと、言葉をぶつけずにはいられなかった。

「なんで……なんでギフトおメイカーは……っ!! こうも人の心がないんだよっ!! 本当

に赤い血が通ってんのかよ!! たかが一回転生した程度で、ここまで化け物になれる理由がさっぱり分からない……っ!!!」

「何それ褒め言葉? いやー照れるねえ。嫌いな奴からの罵声は最高の誉め言葉だ!」

「シータオリジオンを投げ飛ばしながら、これまでの戦いの中でギフトメイカーに対して感じてきた怒りをぶつけまくるアクロス。しかし、どれだけ怒りをぶつけてもバルジはまるで堪えていない。まさに暖簾に腕押しというべきか。」

「本当ならすぐにもバルジを殴り飛ばしたいが、暴れまわるシータオリジオンをどうにかしない限りはそれができない。かといって、シータオリジオン——飛鳥に攻撃するなんて真似は、アクロスにはできない。」

そこに、

「どうばあああんっ！」

「ゴボダオベツ!!?!」

ラーマオリジオンを蹴り飛ばしながら、唯が乱入してきた。

ラーマオリジオンを踏みつけている唯の目は、普段では考えられない程に冷たかった。彼女もまた、バルジに対して怒っているのだ。

「瞬、さっさとコイツを倒しちやおう。これ以上アイツと同じ空気吸ったら狂ってしま
いそうだし」

「……………ああ」

怒りで震える声でそう口にするアクロス。

そこに、更なる乱入者が姿を現す。

「見つけたぞバルジ……………今日こそテメエを殺してやる……………っ!!!」

サイドカー付きのバイクに乗って現れたのは、仮面ライダーカイザ。
その変身者は勿論、

「カイザ……………灰司か?!?」

「アクロス、引っ込んでいろ。コイツは俺が殺す！」

カイザ——灰司はアクロスを冷たく突き放すと、そのままバイクでバルジの居る場

イガンの銃撃を喰らわせようと銃口を向ける。

が、引金を引く寸前で、倫吾がそれを止める。

「やめるっす灰司先輩！ そのオリジオンは飛鳥ちゃんなんだ！」

「っ!!??」

倫吾の声を聞いたカイザの動きが一瞬止まる。

が、カイザはそれを振り切るかのように、右手のカイザブレイガンの引き金を引く。

「ガガガガガッ……!!??!!??」

カイザブレイガンの銃口から発射された光弾は、シータオリジオンに次々と命中してゆく。

その度に、シータオリジオンの口から苦悶の聲が零れ落ちる。

「それがどうした、オリジオンになつたならば倒すまでのことだ！ どうせ撃破すれば

元に——」

「やめとけよ」

そう吐き捨てながら、続け様にブレイガンで斬りかかろうとするカイザ。

しかし、突然横から伸びて来た腕に手首を掴まれて阻まれる。

腕の伸びて来た方に視線を向けると、いつの間にかバルジがカイザの真横に立っていた。

「バルジッ……なんのつもりだ!?!?」

「そのバンダナ野朗の言うとおりだ。お前は幼気な少女をぶった斬るつもりか? ひえくつ、仮面ライダーの風上にも置けない非道っぷり、俺様じやなきや見逃しちゃうね」

「どの口が言ってたんだこのクソ野郎ッ!!?!?」

カイザはバルジの腕を振り払い、カイザブレイガンでバルジを斬りつけた。

完全に殺すつもりの一撃だったし、間違いなくバルジを両断した——感覚はあつた。

しかし、バルジは平然としている。一滴も血が流れていないどころか、彼の身体には傷一つついていない。

「なんだと……?!?!?」

「もうひとつ言っておかなくちゃいけないことがある。あのオリジオン、倒したら死ぬぜ?」

「なっ——」

「正確には、あいつらの洗脳のために使っている虫はな、寄生対象が強いダメージを受けると、脳内で爆発するんだよ。言わば人間爆弾さ」

「バルジ……!!」

「ならテメエを殺せば済む話だツ!!??!!?」

拳を震わせながら怒るアクロス。

対してカイザは、バルジを殺せば洗脳は解けると考え、ベルトに刺さったままのカイザフォンのENTERキーを押し、必殺技を発動させる。カイザスラッシュでバルジを斬り殺すつもりだ。

が、

「それはだめだゾ~~~~~~~~つ? 滅つ!!!」

気持ち悪いほどに媚びまくった声と共に飛んできたナイフが、カイザの手に握られていたカイザブレイガンを弾き飛ばした。

ナイフの飛んできた方を振り向くアクロスとカイザだが、そこに間髪入れず、続けざまに何本ものナイフが飛んでくる。

2人は別々の方向に跳躍してナイフの雨を避けると、その発生源を睨みつける。

そこには、

「ご主人様を傷つける奴は、クソ雑魚負け犬メイドのレイラちゃんが皆殺しにしちゃうぞっ☆」

ぞっ☆

………酷い顔色をしたメイド服姿のレイラが居た。

明らかに健康な人間がしてはいけなような顔色の酷さに加え、頭に巻いた包帯から

血がにじみ出ていたり、焦点の在っていない目と、誰がどう見てもまともな状態じゃない。

唯から話は聞いていたとはいえ、彼女の予想以上の酷さに、敵ながらアクロスは心配せずにはいられなかった。

「お、おい……………？ お前本当に戦えるのか？ 下がっていた方がいいんじゃないの？」

「大丈夫です！ わたしはバルジ様専属の奴隷メイドですので！ 手足が千切れようと内臓がなくなろうと、全身全霊でご奉仕するだけですうっ？」

「っ……………」

その異様さに、アクロスはたじろいでしまう。

以前にあった時とはまるで別人だ。

恐らくだが、彼女にも飛鳥同様に寄生虫による洗脳が施されているのだろう。

「何をぼさつとしているんですか!! 戦闘の真ただ中ですよ！」

「……………っ、そうだ！」

レイラの異様さに圧倒されていたアクロスだったが、ハルの声で我に返る。

そして、横から唯も声をかけてくる。

「瞬っ！ レイラの相手は私がやるから瞬は飛鳥ちゃんを！」

「ああ！」

唯に鼓舞されながら、アクロスは再びシートオリジオンを止めるべく走り出す。

彼の前方には、炎を纏った武器を持った二体のオリジオン。

（待っている飛鳥……絶対に俺達が助け出してやるからな………！）

一方、レイラと対峙することになった唯は、レイラのモップ攻撃をパンチ一発で弾き飛ばしながら、彼女の懐へと飛び込む。

「どんぶりやあッ!!」

唯はそう叫びながら、渾身の正拳突きをレイラの胴体に叩き込む。

たった一回の突き、それだけで周囲に突風が巻き起こり、レイラの身体ははるか後方へと吹っ飛んでゆく。

ジェットコースターの支柱に叩きつけられたレイラは、口から血を吐きながら立ち上がる。

「ゆるっ………しません………！ 貴女はわたしが殺します………ぶち殺しちやいますっ

？」

「ごほっ、ごほっ、と断続的に咳き込むレイラ。その度に、彼女の口から赤い液体が漏れ出してゆく。それと同時に、頭に巻かれた包帯からも、鮮血がにじみ出ては頬を伝う。どう考えても、唯のパンチ一発でこうなるはずがない。」

唯は、レイラの状態を察していた。

「ボロボロなんだ……この子もバルジに全身を滅茶苦茶にされて、もう限界なんだ…………！」

「ごほっ……げぼっ……！ たとえこの身が滅びようともっ……ご主人様の邪魔はさせませんっ？」

「どうわっ!!」

レイラは再びと結交じりの咳をしながら唯の心配を一蹴すると、懐からパリパリに乾いた雑巾のようなものを取り出し、ブーメランのように投げつけてきた。

唯は側転しながらそれを避け、その勢いを保持したままレイラに突撃する。

その背後から、ヒュンヒュンと風を切り、街頭や木を切り倒しながら雑巾のブーメランが迫りくる。

「ご主人様の為に死んじやってください……いつ？」

レイラは生気の籠ってない笑みを浮かべながら、何処からかティーポットを取り出し、その蓋を外す。

すると、ティーポットから灼熱の炎が飛び出し、まるで意思を持つているかのように、唯めがけて襲い掛かった。

背後からは切れ味抜群の雑巾ブーメラン。前方からはタイルを溶かすほどの灼熱の炎。どちらを喰らっても致命傷待ったなしだ。

が、その程度で臆する諸星唯ではない。

「それはノーサンキューだっ!!」

「なっ——」

唯は背後から飛んできた雑巾ブーメランを素手で掴むと、前方から迫りくる炎に向かってそれをぶん投げた。

切れ味抜群の雑巾ブーメランは、炎を容易く切り裂いてゆき、元の持ち主であるレイラ的首筋目掛けて跳んでゆく。

「いのっ!!」

レイラは咄嗟にナイフを取り出して雑巾ブーメランを弾き飛ばすと、既に眼前まで迫っていた唯の顔面目掛け、そのナイフを振り下ろそうとする。

が、唯はすかさずナイフを持ったレイラの腕を掴み、そのまま押し倒した。

「大人しくして! あなた、もう身体が限界なんじゃないの?!」

「限界……? そんなことはどうだっていいの……! わたしはクソ雑魚奴隷メイドの

レイラちゃん。バルジ様の玩具として、壊れるまで従うだけ……!」

唯に取り押さえられたレイラは、血を吐き出しながら必死に自身の存在意義を主張する。だがそれは、バルジによって植え付けられた偽りでしかない。

ヒトとしての尊厳を極限までそぎ落とされた少女の姿を見た唯は、どうしてもそれを敵だとは思えなかった。

「私は元のあなたがどんな人間だったかなんて知らない。でも、こんな終わり方は絶対にダメ。操られて、貶められ続けて、弄ばれる。それを壊してはいおしまいだなんて能天気な人間には、私はなれない」

「ごほっ……げほっ……! 敵に情けをかけるなんて言語道断ですう!」

「もう動かないで、さつきから血を吐いてばっかじゃん! このままだと死んじゃうよ!?」

「バルジ様の栄光の為なら、わたしは死んでもいいんですっ? わたしは身も心もトボフアツ!!」

そこまで言って、レイラは激しく吐血した。

白いメイド服が真っ赤に染まり、戦闘によって緩んだ頭の包帯からもどくどくと血が流れている。

血を流し過ぎたレイラには、もやは意識を保つだけの力すらなかった。唯に取り押さ

えられたまま、彼女は気絶していた。

「まだ死んでない。けど……」

レイラはまだ息はしているが、このままだといつ死んでもおかしくない。しかし、今彼女を助けたところで、洗脳が解けない限りは何度でもこれが繰り返される羽目となる。

彼女を救う方法はただ一つ。

「瞬、早くバルジを倒して——！——」

唯はレイラを取り押さえながら、バルジと対峙する仮面ライダー達を見つめるのだった。

そして、バルジに挑もうとする仮面ライダー達はというと。

《EXCEED CHARGE》

「てやあああああああああああああつ!!!」

カイザショットを右手に装着し、必殺技・グランインパクトを発動させながらバルジに突撃するカイザ。しかしバルジは生身の右手でそれを受け止め、受け流してしまう。

そこに間髪入れず、アクロスがツインスズバスターで斬りかかるが、バルジはそれも素手で受け流し、ついぞといわんばかりにアクロスの横っ腹に蹴りを叩き込み、アクロスを蹴り飛ばしてしまった。

怒りマックスのライダー達の波状攻撃を生身で対処し続けるバルジは、つまらなさそうにあくびをしながら、

「ぬるいよなア……考えなしに攻撃して勝てる相手じゃねえつてのがまだわかんねえのか？ つたく、これだから馬鹿ヒローは嫌いなんだ。人間の自由の為に戦う？ 世界平和？

今どき小学生でもそんな妄想してねえよ！ 強くて選ばれた俺様の様な奴が好き勝手する。それこそが世界の真理だつていい加減理解しろよ！ こっちは馬鹿猿の相手するのも飽き飽きしてるんだつての！」

そう吐き捨て、アクロスとカイザをパンチ一発で吹っ飛ばした。

カイザに至つては、ご丁寧にベルトを木っ端微塵に粉碎している始末。

「がつ………ぐう………」

「ぐつ………だが、俺にまだ……！」

《Deal……Decide Up! Deep(深く) Drop(落ちる) Danger(危機)!(仮面) Rider Demons!!》

ベルトが破壊されたことでカイザの変身が解け、生身で地面を転がる灰司だが、即座

に受け身を取って立ち上がると、新たなドライバーとスタンプの様なデバイスを使い、新たなライダーに変身する。

灰司が腰に巻いたバックルにスタンプ型のデバイスを押し付けると、その姿が、顔面と胸部アーマーが蜘蛛の巣のようなデザインとなった仮面ライダー——デモンズに変化した。

「デメエだけは許さねえ！ 俺から全てを奪ったお前だけはっ!!!」

「そう熱くなるなよ。復讐者が激情に駆られるなんて、最上級の死亡フラグだぜ？」

「お前がそれを言うなっ!!!」

灰司——デモンズはそれをバルジの戯言を怒りながら切り捨てると、指先から何本もの蜘蛛の糸をのぼし、バルジを拘束しようとする。

しかし、バルジが軽く触れるだけで、糸はあつというまにボロボロに朽ち果ててしまう。

「こつちの攻撃がまるで通じていない……」

「アクロス、よそ見は厳禁だぜ？」

「！」

バルジがニヤつきながらそう言った直後、アクロスの身体が宙を舞った。

「はっ……!!」

垂れる。

辺りを見渡すと、そこには凄惨な光景が広がっていた。

跡形もなく消し飛んだメリーゴーランドに、支柱が折れてレールごと倒壊したジェットコースター。先ほどまで多くの客で賑わっていた筈の遊園地。その一区画が、見るも無残な姿になっていた。

瞬は傷ついた身体を引きずりながら、クレーターの中心部に向かう。

そこには、ラーマオリジオンとシータオリジオンが倒れていた。彼らもまた、バルジの一撃に巻き込まれたのだろう。

「ア……………ア……………」

「ゴバ……………ド……………」

二体のオリジオンは、呻き声をあげながら互いに手を伸ばす。

それと同時に、両者の変身が解け、人間としての姿が露となる。

一人は、藍色の髪をシニヨンにした幼い少女・行江飛鳥。もうひとり、薄紫色の髪の高校生くらいの少女。その顔は、どこことなく飛鳥に似ている。

その顔を目にした飛鳥は、目を見開いた。

「おねえ……………ちゃん……………う？」

「あ、すか？」

倫吾の言葉を聞いて、血相を変える志村達。

バルジの度を超えた悪辣っぷりに、誰もかれもが怒りをこらえることができないでいた。

しばしの沈黙の後、耐え切れなくなったヒビキが泣き出した。

「なんで……なんでそんなことができるの!!」

「転生者に非ずんば人に非ず、とでも考えてるんでしょうかね……どちらにせよ、私も柄にもなくブチぎれそうです」

ハルは表情を変えることなく、冷静そうにそう言っただけのもの、その身体は怒りで震えている。

この場にいる誰もが、ひとつの結論を下していた。

——バルジは生きてはいけない存在だ、と。

そして、クレーターの中央。

動かなくなった灰司を踏みつけながら立っている、一体の怪物がいた。

端的に表現するならば、それは全身真っ黒な人型のコブラとでもいうような見た目を

していた。身体の内にはボトルのようなものが刺さっており、腹部に空いた大きな穴の中では、底の見えない漆黒が胎動している。

それはかつて、地球を破壊せんとした地球外生命体の力。

愛と平和を謳うとある仮面ライダーによって打ち倒されたはずの厄災が、ここに舞い戻っていた。

「さて、そろそろトドメ刺してやるかな」

「くっ……………」

バルジ改めエボルトオリジオンは、踏みつけたままの灰司にトドメを刺そうとする。

「やめろバルジっ！」

それに気づいた瞬間が慌てて駆け寄るが、圧倒的に間に合わない。

エボルトオリジオンの手のひらで生成された黒いエネルギー球が、灰司にむかって放たれる。

——その寸前。

「……………あれ？」

エボルトオリジオンの右手に溜められていたはずのエネルギーが、突如として霧散してしまった。

困惑するエボルトオリジオンだが、続けざまに、全身から黒い霧を吐き出しながら彼の変身が解け、人間に戻ってしまった。

そのことに困惑するバルジだが、即座に理解する。

「……………チツ、もう限界かよ。やっぱりこの力、使うのは一筋縄ではいかねえか」
 「なんだ……………？ 変身が解けた……………？？」

戸惑う瞬間の目の前で、バルジは苛立ち気味に灰司を蹴とばすと、そのまま踵を返して歩き出す。

「くそっ、撤収だ！」

「りようか、ごほっ……………ぼはあっ!!! 訳立たずのお二人の回収については、このクソ雑魚
 奴隷メイドのレイラちゃんにお任せくださいほげほっ!!!!」

撤収に入ったバルジに続いて、ボロボロのレイラが飛鳥と薫を両脇に抱えてついてゆく。その顔には正規の籠ってない笑みが浮かべられており、断続的に吐血交じりの咳を繰り返している。

唯に取り押さえられていた彼女だが、唯がエボルトオリジオンの攻撃から皆を守ることを優先したために、拘束を解いてしまったのだ。

「待てっ……………！」

逃がすまいとバルジ達の後を追う瞬だが、傷だらけの身体ではまともに走ることがで

きず、傷が痛んでその場に蹲ってしまおう。

「瞬、無茶だつて！ その傷じゃ戦いどころじゃないでしょ！！」

慌てて唯が駆け寄り、その場に崩れ落ちた瞬の身体を支える。

霞む瞬の視界に、悠々と立ち去るバルジ達の背中が映る。

「くそっ……………くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

変わり果てた姿となった遊園地に、少年の慟哭がこだました。

!!!!

「

第44話 Avengeの敗走↓合流

バルジとアクロスが交戦する少し前までさかのぼる。

「手がかり、ないっすねえ……」

「無いわねえ……」

「ああ……」

墮天使三人組は、ベンチにもたれかかれながら力なくそう口にした。

その隣のベンチでは、彼らに付き合わされた暁古城と姫柊雪菜が、同じようにぐったりとしている。

5月上旬といえど、気温だけは真夏日。地球温暖化を本気で恨みたくなるような猛暑だった。

「あの腐れマッドサイエンティストお……どこにいるのよお……」

「マッドサイエンティスト呼ばわりはやめた方がいい、アザゼル総督に飛び火する」

「いや総督がマッドなのは事実っすよね」

カラワーナ、ドーナシーク、ミットルテの三人は、うだうだと言いながらベンチに身

を預ける。日本の初夏の猛暑とレイナーレの見つかからないことによる焦燥感が、彼らの心身を猛スピードで消耗させてゆく。

その横では、古城と雪菜がギフトメイカーについて話し合っていた。

「二応、先月遭遇した際に獅子王機関に調査を依頼したのですが、今のところ有力な情報は見つかっていません」

「政府の組織でも情報がさっぱり見つからないって……一体奴は何者なんだ……？」

先月バルジと遭遇し、オリジオンと交戦した二人。

あの戦闘の後、雪菜の所属する特務機関・獅子王機関側でもギフトメイカーの存在について調査を始めたのだが、有力な情報はつかめていない。あれだけ派手に暴れていながら、国家機関にほとんど認知されていなかったのが不思議なくらいだ。

まさしく五里霧中中でも言うべきか。

そんな感じで疲弊しきっていた古城一行。

そこに、救いの手が差し伸べられる。

「おーやあ〜？ その方々、何かお困りのようですねえ？」

「んあ？」

若干メスガキじみた声が真上から浴びせられ、古城は閉じかけていた瞼を開く。

古城の視界に入ってきたのは、此方の顔を覗き込んでいる、額にゴーグルをつけた黄

緑色の髪の少女だった。年齢的には古城とそう変わらないように見える。そして、その手にはチラシのようなものが確認される。

「……………受け取れと？」

「逆にこの状況で拒否とか人の心とかなんか？」

「……………はあ、わかったよ。受とりやあいんだろ」

半ば強引に、少女に手渡されたチラシを目にする古城。

チラシには、**裁場武装探偵事務所**——**迷い猫探しからテロリストの殲滅までなんでもおまかせ!**と書かれている。どうやら**武偵事務所**の宣伝に来たようだ。

「探偵事務所…………? あかねえ、そんなもので解決出来たら苦労しないっての! 人間風情がウチらのてだすけなんかできるわけないっしょーが!」

「馬鹿…………! ミットルテ、何ナチュラルに正体ばらそうとしてんのよ!!」

少女をうざったらしく思ったミットルテは、暑さと焦燥感で参っているのもあつてか、ついうつかり自らの素性を透かすような発言をしてしまい、カラワーナに止められる。

しかし少女は、うんうんと頷きながらぼん古城の肩に手を置く。後方彼氏面とはこのことを言うのだろうか。

「わかってますよ分かっています。あなた方が人間でないことぐらい、このGUMIちゃ

んにはオミトオシなんですよねえ」

「!!」

その言葉を耳にした、雪菜以外の全員の動きが止まる。

「お前……何者だ？」

「わたしは一介のJKシンガーだよ。ちよつと裏事情を聞きかじっている程度の、ですけども」

古城に問いかけられた少女は、チラシを見せびらかしながらニヤリと笑う。

この時点で、半ば結論は出ていた。

彼女は一般人ではない。人間であるか否かに関わらず、彼女には何かがある。

「……………案内してくれ、その探偵事務所とやらに」

「え、先輩正気ですか!!」

「蜘蛛の糸だろうと藁だろうと、今はさすがのしかねえだろ」

「お、決断速いね。なら早速案内しちゃうよ、私に付いて来いっ!」

古城の返答を聞いた少女は、目を輝かせながら一行を案内する。

一抹の不安を抱えながらも、古城達は少女についていくことにした。

天統市某所

「ほらこつちですよこつち！」

少女——GUMIに案内されるがままに、古城達はじめじめとした雑居ビル内の階段を上る。

さつき通過した入り口には苔が生えてたし、隣の壁にはナメクジが這っているしで、こんな場所に本当に探偵事務所なんかあるのだろうか。仮にあっても怪しさ全開だろう。

暁古城は現実の探偵というモノをよく知らない。少なくとも、ドラマや漫画のようにポンポンと難事件に巻き込まれるような死神めいたものではないことだけは確かだ。というかそんな奴がいたら真っ先に逃げるだろう。

そんな感じに、早くも少女についていったことを後悔し始めていた古城。多分、雪菜や墮天使3人組も同じ気持ちなはずだ。

3階分ほど階段が上がった先に、ひとつの扉が見えてきた。

どうやら、この先がGUMIのいう探偵事務所らしい。

「おーい裁場あつ！ 超無愛想なお前さんに代わって、激力ワシンガー系JKのGUMI様がお客さん連れてきてやったぞつ！」

GUMIは威勢のいい声をあげながら、古びた扉を思いつきり開け放つ。

ソファーとテーブル、デスクに冷蔵庫と、必要最低限の家具しか置かれていない事務所の一室が、底には広がっていた。

そして、窓際のデスクには、一人の男が座っていた。

古城より一回りは年上のように見える、険しい目をした眼鏡の男だ。

「なんだ、今こっちは食事中なんだ」

——そう言った男は、ウスターソースの容器を口に加えていた。

それを目にした古城達は戦慄した。

「……」
「……」
「……」

険しい目をした大人がソース直飲みしているという衝撃的な光景に、古城も雪菜も固まっている。これどう反応したらいいんだよ。マヨラーの亜種かなんかか？

まるで未知の生命体を目にしたときの様な目線が、目の前にいる眼鏡の男に向けられる。

「裁場……またウスターソース直飲みしてる……健康に悪いからやめなよ。それよりもほら、このGUMIちゃんお手製のライス定食でも如何かな？」

「いやそつちもそつちでだいぶアレだと思うけど!!」

そう言いながらGUMIが冷蔵庫から取り出したのは、山もりの白米、白米、白米

………なんだこれ地獄かね？

常人の理解を遥かに逸脱した食事の光景に、古城も雪菜もすっかり固まってしまった。もう理解したくもない。

ライス料理の数々を差し出された男はというと、空になったウスターソースの容器を握りつぶしながら、さも自分が常識的であるかのようにGUMIの料理を否定し始めた。

「そんな栄養バランス終わっている食事を頼んだつもりもないし、そもそもお前みたいなバイトを雇ったつもりもないんだが？」

「いやウスターソース啜ってる奴が言う台詞じゃねえし！ てかこいつバイトでもなんでもなかったの！！ じゃあなんで客引きなんかやってんのこの人！！」

「善意から………に決まってるじゃん」

「何ですかその間。すつげえ訳ありそうにしか聞こえないんですけど」
もうツツコミどころしかなかった。

不信感マックスになった古城達は、回れ右して帰ろうとする。こんな場所にいたら時間を無駄にするどころか気が狂いそうだ。

が、それを眼鏡の男——裁場整一が呼び止める。

「まあ折角来たんだ、話を聞こう」

「あ、はい……………」

先程とはうって変わり、真面目なトーンで男はそう言った。先程までウスターソース啜ってた奴と同一人物とは到底思えない変わりようだ。温度差で風邪ひきそうだ。

あまりの馬鹿馬鹿しさに帰ってしまおうかと思っていた古城達だったが、裁場の雰囲気の変わりように気圧され、その場から動けないでいた。まるで蛇に睨まれた蛙にでもなったかのような気分だ。

「なんだこの威圧感……………ただの人間と思っていたが、どうやら違うようだ」

「私にはわかる……………こいつ、歴戦の戦士だ……………それも尋常じゃない修羅場と死線を潜り抜けている、モノホンの猛者だ」

「ま、マジすか学園……………もし敵に回したりでもしたら、ウチらじゃ太刀打ちできないかもしれないっすね……………」

先程まで「たかが人間の探偵風情」と見下していた墮天使たちも、裁場のオーラを感じ取ってその評価を改める。彼らも素人ではない。相手の力量を推し量る程度のことにはできるのだ。

「君達の素性については既に周知している。第四真祖に獅子王機関の劍巫、それに神の子を見張る者の使者たる墮天使……………ここに来たことは、所属勢力では太刀打ちできないモノに挑みに来たか、表立って探れないモノを探りに来たか。そのど

ちらかなのだろうか？」

「……………お前たちは何者なんだ？　政府の特務機関や三大勢力について随分詳しいようだが。本当にただの武偵なのか？」

「単に仕事柄そういうのに詳しくなってしまっただけの、ただの探偵だよ」

ドーナシークの指摘に、裁場は微笑を浮かべながらそう返答した。

ただ口角をあげただけだというのに、そこには「それ以上の詮索はしないほうがいい」と、言外に告げているかのように思えた。

「俺の素性なんかはどうでもいいさ。さ、ここに来たわけについて話してもらおうか。そうしないと話が始まらないだろう？」

「えつと……………え、俺が離さなきゃダメ？」

裁場に事情説明を催促された古城は、助けを求めるかのように雪菜達の方を見る。

が、非情にも雪菜や墮天使3人組は、無言で古城に視線を投げ返してきやがった。つまり、大役を押し付けられたということだ。

なんでこうも貧乏くじばつか引くんだろうか、と自分を軽く呪いながらも、仕方なしに古城は話し始めた。

「実は——」

古城が軽く事情を説明し終わった後、裁場はきつぱりところ言った。

「端的に言おう。君達はこの件から手を引け」

「?!」

その言葉に、驚きを隠せない古城一行。墮天使たちに至っては、声を荒げて反論する始末だ。

「それってどういうことよ?!」

「そんなことできるわけないっすよ!!」

突然そう言われども、古城達はともかく、墮天使達は納得できるわけがない。

彼らは裁場を睨みつけるが、裁場はその視線に臆することなく、話を続ける。

「仲間を助けたいという気持ちは十分に理解できる。だが、相手が悪すぎる」

「相手が悪すぎるって……その、バルジとかいう奴は、そんなにも危険な相手なのですか?」

「危険どころじゃない、奴は厄災そのものだ。下手に挑んで楽に死ねる可能性はまずないだろう。そもそも、君達が一度彼のモルモットにされながらもこうして五体満足でい

ること自体が奇跡のようなものだ。それをみすみす手放すような真似は、俺個人としては看過できない」

「ふ……ふざけるな！ 俺達ではアイツに勝てないと、お前はそう言いたいのか!!」
「やめてくださいドーナシックさん！ 気持ちは分かりますが落ち着いて！」

実力を侮られたと感じたドーナシックは、思わず立ち上がりつつ裁場に拳を振るおうとするが、見かねた雪菜がすかさずそれを制止する。

「別に君達を馬鹿にしているわけじゃない。アイツには俺でも勝てるかどうかわからない。ギフトメイカーの中でも最低最悪の人格破綻者にして危険人物。それがバルジという存在なんだ」

「そんな……やばい奴なのか……？」

「ああ。第四真祖である君であろうとも、奴との交戦はしちやだめだ。奴はお前のような正義感にあふれた人種とは相性最悪、例えるならな。パーでチヨキに挑むようなものだ」

「……………」

古城と雪菜は、裁場の言葉に全く反論することができなかつた。

裁場は、小学生に自然災害についてレクチャーするように、懇切丁寧にバルジという存在の危険性について話した。

古城達がバルジと対峙したのはほんの僅かな間だったが、それでもこいつが善人ではないということだけはすぐに分かった。しかし、実態はそれを上回る化け物だった。

普通ならば、今の裁場の話は一笑されてしかるべきものだろう。だが、場の雰囲気それを許さなかった。異様なまでの信憑性というか、そういう類のものが、今の話には存在していた。

沈黙が事務所内を包み込む。

「……………駄目よ」

「どうした？」

しばらくして、沈黙を破ったのは、カラワーナだった。

彼女は瞳に涙を浮かべながら、その心中をぶちまける。

「例え敵わない相手だとしても、どうしようもない厄災だとしても、それでも諦めるわけにはいかないの……！ レイナーレ様は私達の大切なリーダーなの！ 苦しんでいるのに見捨てるような真似は絶対にできないの！」

「そうっすよ……！ 確かにウチらは後ろ暗いことはやってた！ でも……小悪党にだって意地とか尊厳があるんすよっ！！ それを踏みにじられていいことにはならない筈っす！」

「何より俺は、奴のすべてを見下したような眼が気に入らない！俺達をさんざん弄んだアイツに一矢報いなければ、俺達の汚された尊厳や誇りは戻ってくることはないのだ！」

カラワーナに続き、ミットルテとドーナシークも胸の内を曝け出す。

誇り、尊厳、絆。それら全てを嘲るように弄んだバルジに、彼らは怒らずにはいられなかった。それは墮天使故のプライドからくるものではない。この世に生きるモノとして当たり前持っているはずの生命の尊厳が、彼らの義憤を煽り立てているのだ。

彼らの義憤を受け取った古城は、それを嘔み締めながら、ゆつくりと口を開いた。

「……俺には、この声を無視することはできない」

「……………」

「あなたには敵わないかもしれないけど、俺だつて何度か死線は潜り抜けてきたつもりだ。そのどれもが、巨大な悪意に踏みじられそうなるものを守るための戦いだ。だから、こいつらの言ってることはわかる、つもりだ」

「……例え敵わないと知っていても、か？」

「そんなもんで止まるようなもんじゃねえだろ。あんだだつて知ってるはずだぞ、そういう人種を」

古城の言葉を受け、黙り込む裁場。

そう。

裁場は古城の言わんとして理解しているし、彼の言う“人種”とやらを、痛いほどに知っている。何故なら、彼もかつてはそうだったからだ。

かつての裁場がそうであろうとし、貫けなかったその在り方を、目の前の少年は持っている。その輝きを持つものと、裁場はついこの間も出会っている。そして、それを止める手段を自分は持ち合わせていないということも、裁場は理解している。

「……また根負けしてしまったのか、俺は」

またしてもそれを思い知らされてしまった裁場は、無意識のうちに呟いていた。

「? 一体何を——」

雪菜がそう言いかけた時だった。

デスクに置きっぱなしにされていた裁場のスマートフォンから、着信音が鳴りだした。

「あ、裁場。ほら電話っ」

GUMIからスマホを投げ渡された裁場は、通話に出る。

そして、しばらくの間古城達に背を向け、通話をしていた。

「……………そうか、わかった。今そちらに向かう」

数分後、裁場はそう言って通話を終えた。

そして、古城達の方を向き直り、ある提案をしてきた。

「戦う気概があるなら付いて来い。きつとそれが、お前達の望む結末に繋がるはずだ」

「……………ああ、飛び込んでやるよ。地獄だろうが何だろうが、喜んで足を踏み入れてやる！」

裁場の言葉に、古城達は強くうなずいた。

彼の意図は、すぐに理解できていた。

裁場に続いて、事務所を後にする一行。

——その目は、かつてないほどに決意に満ち溢れていた。

同じ敵を追う英雄たちは惹かれ合う。

それがたとえ、地獄に繋がる道であろうとも。

その頃の逢瀬家。

「……………」
和室に広げられた敷布団の上には、満身創痕の灰司が寝かされていた。

バルジに逃げられた後、志村達と別れた瞬達は、満身創痕の灰司をひとまず逢瀬家まで連れ帰り、応急処置をして布団に寝かせた。全身に巻かれた包帯からは今も血が滲んでおり、彼の目は閉じたままだ。辛うじて息はしているようだが、予断を許さない状態だ。

そんな灰司の様子を見ながら、枕元に座っていた倫吾がぼつりと言う。

「無茶だったんすよ……灰司先輩、先日の戦いの傷もまだ癒えてないってのに、バルジに挑むなんて……やっぱり、復讐の為なら死んでもいいと思ってるんすかね……」

「……………」

池袋で、灰司が転生者狩りであることを知った直後。

裁場整一は、灰司は復讐を終えたら死ぬつもりだと断言していた。そして、灰司はそれを否定しなかった。

彼には帰るべき場所も、帰りを待つ者もない。全てを奪ったバルジへの復讐心のみが、心の死んだ灰司を突き動かしている。

故に、灰司は己の身を省みない。傷の癒えない身体を復讐心で無理矢理動かした結果がこれだ。

「……………俺にはわからない」

「お兄ちゃん？」

「灰司を止めてやるべきなのか、そうでないのか、俺には分からない。灰司が復讐に走る気持ちには理解できるけど、それで死んでもいいってのは納得いかない。でも、どうしたらいいんだ？ どちらを取っても灰司は納得しない……俺の我儘で、灰司の復讐を否定していいのか？」

瞬は分からなくなっていた。

事情を生半可に知ってしまったが故に、灰司を止めることができなかつた。

復讐を止めるのも、復讐を成し遂げさせるのも、きつと灰司の為にはならない。部外者たる瞬にできることは何もない。八方塞がりだつた。

「もう少ししたらAMOREの回収班が来るので、そしたら向こうの医療機関に搬送するつす。それまでここで寝かせてあげてほしいつす」

「まあそれくらいならいいけど……」

瞬が悩んでいる横で、倫吾の言葉にそう返す湖森。

きつとこの場に叔父・還四郎がいたらびつくりするだろう。家に見知らぬけが人がいるのだから当然だ。

暫しの間沈黙が流れた後、思い出したかのように瞬が口を開いた。

「……………ちびっ子たちの様子は？」

「駄目。ヒビキちゃん、すっかりふさぎ込んでんじやつてる。ネプテューヌが慰めているけ

ど、全然だよ」

「そりやそうだよな……俺達だって同じなんだからさ」

心を通わせたと思つた矢先にこれなのだ。瞬達だつてつらいのだから、特に幼いヒビキにはシヨツキング極まりないはずだ。

灰司は重傷を負い、飛鳥はバルジの手に墜ち、バルジは滅茶苦茶強くなっている。絶望の3コンボに見舞われた一行は、すっかり意気消沈してしまつていた。いつもは明るい唯でさえも、どんよりと暗い表情を浮かべてしまつている始末だ。

普段の騒がしさとはうって変わつて、まるでお通夜みたいな雰囲気と化してしまつた逢瀬家。

そこに玄関の方から、空気を読まない不審者の声が響き渡つた。

「やつほくくくつ、みんなの北極星・イケメン導き手のファイフティさんが久しぶりに遊びに来たよくくく」

恐らく自分で考えたと思わしき謎の2つ名を名乗る怪しいイケボが、どんよりムードを容赦なく破壊しやがった。

その声を聞いた瞬と唯は無言で立ち上がると、足音をできるだけ殺した早歩きで玄関に向かつてゆく。

玄関では、黒いローブを着たイケメン不審者ことファイフティがにこやかに手を振つて

いた。

「いやあ、揃いもそろって酷い怪我だね。調子はどうか逢瀬くん」

「今までどこ行つてたんだこの役立たずパンチッ!!!」

「ぼばおえっ!!」

先の戦いには全く姿を見せなかつた癖してのうのうとお見舞いに來た不審者に、唯の鉄拳が炸裂した。

鼻血を吹き出しながら盛大にぶつ倒れるファイフティだが、彼を心配するものはひとりもない。彼に人望がないというのもあるが、そもそもファイフティに構っている余裕がないのだ。

そのままファイフティを踏みつけようとする唯だが、瞬に制止させられる。

「やめろ唯、怪我人が寝ているんだぞ」

「あ、ごめん瞬……コイツの顔見たらどうしても一発入れなきやつて思つて」

「それはわかる」

悲しいかな、ファイフティに味方する奴はこの場にいないのだ。普段の神出鬼没っぷりに加え、ミステリアスかと思わせといてやたらと一部の人間（主にアラタ）に対してきつく当たるし、声も見た目も無駄にイケメンなのが余計に怪しさを増長させている。擁護しようがない。

「というか、逢瀬くん随分と元気そうだね？ バルジに半殺しにされかけたって聞いてたけど、なんかびんびんしてるしさ」

「俺はあんまり奴にボコられなかったからな……それ以上に重傷な奴がいる」

「……ああ、彼か」

瞬の言葉に、ファイフティは素っ気なくそう返した。

「なんか露骨に興味なくしたね」

「うん、だつて興味ないし。私は仮面ライダーの導き手だよ？ 逢瀬くんや裁場は気にかけるけど、彼——無束灰司は違うだろう？ あれはただの紛い物だ。そんなものに興

味はないさ」

「そういう所で信頼度下げてるってわかつてる？」

唯の鋭い指摘に、ファイフティは張り付けたような笑みで返す。

最近になって、ファイフティは瞬達とそれ以外に対する態度の差が露骨になってきたような気がする。子供だつてもう少し建前とか使いこなしているだろうに、コイツはどれだけ幼稚なのだろうか。

瞬が元気そうなのを確認したファイフティは、灰司の心配謎微塵もすることなく、そそくさと帰ろうとする。

「元気そうだし、私は帰るよ」

「マジで帰る気だ……灰司を微塵も心配しないあたり、ほんとうに人の心とかないな……」

「だって私には関係ないし。そもそも、彼には事あるごとに色々邪魔されてきたからね。個人的に嫌いなんだよ」

「……なんとなく予想はしてた」

ベルトを奪ったアラタといい、どうやらファイフティは一度嫌った人間はとことん嫌い続ける性分らしい。融通が利かないというか、子供っぽいというか……。

鼻歌交じりに帰り支度をするファイフティだったが、玄関扉に手を伸ばしたその時、瞬がファイフティを呼び止める。

「待てよファイフティ」

「……………なんだい？」

「バルジの奴を倒したい。何か手はないか？」

「ほう？」

その言葉を聞いたファイフティの眉が、僅かながら動いた。

「……それは、無束灰司の復讐の手助けでもするためか？」

「いや。どうしても助けなきやいけない奴がいる。復讐の為なんかじゃない、踏みにじられているモノの為に、俺はあいつを倒さなきやいけない」

そう。

灰司とバルジの因縁云々の以前に、瞬自身にも、バルジと戦う理由が出来ていた。

瞬は、故郷も家族も友達も失った上、自由と尊厳すらも奪われようとしている行江姉妹の姿を目の当たりにしてしまった。飛鳥の抱く孤独感を、悲しみを理解してしまった。

——だから、その元凶を許すわけにはいかなかった。

ファイフティは、瞬の決意に満ちた表情をしばらくの間見つめていたが、やがて、まるでこの成長を喜ぶ親か何かのように微笑を浮かべた。

「……少し見ない内に、随分とヒーローらしい顔をするようになったじゃないか」

「導き手を名乗る癖に放任主義すぎるんだよ」

「自由意思を尊重していると言ってもらいたいところだね」

いまいち役に立っていないくせに一丁前に保護者ヅラするファイフティに、瞬は強気に言い返す。

その時だった。

「逢瀬さん大変っす！　ってうわあ変な人がいるっ!!」

酷く動揺した様子の倫吾がどたと走ってきた。人の家の廊下を走るんじゃない。

おまけにファイフティを見て驚く始末。いや変な人というのはまちがってはいないの

だが、まるで妖怪か何かでも見たかの様な驚きようだ。

「ど、どうしたの……？　なんかめっちゃ慌てるけど」

「は、灰司先輩がいなくなっただんすよ！」

「なっ——?!」

倫吾の言葉に驚く瞬と唯。

「あの怪我で抜け出したのか?!　冗談じゃないぞ?!」

「そうなんすよ！　いくら灰司先輩が強くても、あんな状態じゃまず勝てないっす……」

そもそも、野垂れ児ぬ可能性だつて……」

「兎に角手分けして探すぞ！」

「うん！」

倫吾の話聞いた瞬と唯は、直ちに家を飛び出し、灰司の搜索を開始する。

灰司の怪我の具合からすると、戦うのはまず無理と言つていいだろう。なんせ素人でも一目でわかるレベルの大怪我を負っているのだ。あんな状態で街を彷徨っていたら、あつという間に救急車に囲まれるだろう。

(灰司の奴、本気なのかよ……いくらなんでもこれは焦りすぎだつての……！)

瞬は夕暮れの街に飛び込んでゆく。

灰司の復讐に対するスタンスについては、いまだに整理はついていなかった。

市内某所

「……………俺はやらなくちゃいけないんだ」

夕暮れの中、灰司はボロボロの身体を引きずるように歩きながら、うわ言のようにそう繰り返していた。

歩くのもやつとなはずなのに、それでも灰司は止まらない。

理由はひとつ。

「俺は、お前を殺さなきゃいけない……バルジ、お前は生まれるべきじゃなかった……！」

存在してはいけない命だ……！」

全てを奪われ、たった一つ残された復讐心。

その終わりが自らの命の終わりだということとは、灰司自身がよく知っている。

最期に残ったそれが、今もなお彼の身体を動かしている。それがある限り、何が何でも倒れるわけにはいかない。

「今夜で……終わらせる……！」

血の跡を残しながら、灰司は向かう。

再戦の時は、近い。

第45話 復讐前夜～決意と悪意と嗤うモノ～

逢瀬家前

灰司を探して瞬が飛び出していった直後。

とある一団が、逢瀬家の前にやってきていた。

気だるげそうなパーカー少年とギターケース担いだJC、自称シンガールのJKに眼鏡のおにいさん（28）、おまけに墮天使3人。ここまで列挙すればもうお分かりだろうが、古城達である。

バルジを捕まえに行くぞと意気込んでやってきた古城達だったが、そうしてたどり着いたのが何の変哲もない民家だったので、古城達はなんだか拍子抜けしたような気分だった。

「あのお……ここ何処ですか？」

「バルジに挑むのだろう？ ならばここに来るのが手っ取り早い」

困惑気味のミットルテの質問に裁場はそう答えると、戸惑う古城達を放置してインターホンを鳴らす。

「まさかここが奴の本拠地……？」

「それにしても、普通の家にしか見えませんけど……？」

古城は裁場の行動に戸惑いながらも、「この流れでここに来たのだから、きつと何かあるはずだ」という考えを捨てきれない。

戦士としてはまだまだ未熟な部類である古城だが、裁場の行動の節々からうつすらと漂っている、所謂強者のオーラの類の存在を、確かに感じ取っていた。それ故に、今の裁場の行動にも何かしらの深い意図があると考えているのだ。

そんな感じに深読みする古城を他所に、インターホンを数回鳴らし終わった裁場は、居住者がドアを開けるのを待たずして、自分から玄関扉を開ける。

「入るぞ」

「え、まだ返事が——」

「はーい、どちら様ですかー？」

鍵のかかかっていなかった玄関扉が開くと同時に、玄関のすぐ近くにあつた部屋から、中学生くらいの少女が出てきた。

逢瀬湖森である。

何時ものように人当たりのよさそうな笑顔を浮かべながら玄関にやってきた彼女だったが、かつてに玄関に上がり込んでいる裁場達の姿を目にした途端、一気に真顔に

「いつの間にか家からいなくなってたんだよね。わたしは知らない。そのファイフティならなんか知ってるかもね」

「この流れ知ってるわ……日本のRPGでよくあるたらいまわしよ」

湖森の無責任じみた回答に、カワラーナは思わずそう口にする。

「そうか、なら上がらせてもらう」

「え、ちよつと待って、勝手に上がり込まないで?!」

湖森の返事を聞いた裁場は、彼女の許可すら得ずに、ずげずげと逢瀬家に上がり込むと、玄関のすぐ近くに位置するリビングの中を覗き込む。

するとそこには、悠々とソファでくつろいでいるファイフティの姿があった。

「よく来たな待ってたぞ、エアギター弾き語りしながら」

「似合わない冗談はやめろ」

「ギャグにマジレスはご勘弁だよ」

ちよつとした冗談が裁場に通じなかったことに軽くショックを受けながらも、ファイフティは裁場の呼びかけに応じる。

裁場はリビングに入ってファイフティの目の前に立つと、眼鏡の奥の鋭い眼光を突きつけながら、ファイフティに瞬の居場所を尋ねる。

「逢瀬瞬はどうした？」

「あー、彼ならついさつき出ていったよ。ったく、なんでわざわざ無束灰司の為に駆け回ってるんだか。本人が死にたがってるんだからほっときやいいのに」

「っ……………!!」

ファイフティのその言葉を聞いた裁場の顔色が、一瞬でかわる。

そして彼は無言で踵を返し、逢瀬家を飛び出していつてしまった。

あまりにも素早すぎる一連の動きに、古城達はおるかファイフティですらも、反応がワ
ンテンポほど遅れてしまう。

「えっ、えちよつと待って!! どこ行く気!!」

「なんだかよくわからないですけど……付いて行くしかないですね」

古城達も戸惑いながらも、走り去ってゆく裁場を追いかけてゆく。

そうして後には、ファイフティがひとり取り残される。

「やれやれ、そこまでして彼らを案じるとは……相変わらず優しすぎるねえ、裁場くんは」

だが、ファイフティは君のそういうところを見込んだうえで仮面ライダーにしたのだ。

走り去る裁場の後姿を眺めるファイフティの顔は、先ほど瞬に向けた時同様に、子を見守る親の様な優しさと寂しさに満ちたような表情を浮かべていた。

日が完全に沈み切った学校の屋上に、灰司は居た。

屋上階段の上の、貯水タンク脇に腰掛けながら、夜の闇に吞まれゆく街を見下ろす灰司。その手には、空になった缶コーヒーがあつた。

ばたんと音を立てて、屋上階段に通じる扉が閉じる。

誰かがやってきたようだ。

「何しに来た」

灰司は扉の方を振り返ることなく、屋上にやってきた人物に声をかける。

その人物——逢瀬瞬は、無言で梯子を上ると、灰司の腰掛けている貯水タンクの根元までやってきて、灰司の方を見上げる。

「話しに来た」

「お前、俺を止めに来たとか言うんじゃないだろうな」

「……………」

灰司の言葉に、瞬は答えることができなかった。

世間一般において、復讐についての意見は、肯定派と否定派の真つ二つに分かれています。肯定派は、当人が本当に望んでいるのならば復讐に走っても構わないと主張し、否

定派は、復讐心を悪しきものと断じ、復讐にすべてをなげうつことを否定する。

だが、瞬はその答えを出せないでいた。これまで、復讐なんてものとは縁のない人生を送ってきた彼は、こうして復讐者を目の当たりにして、初めてそれについて考え始めたのだ。

しばらくの間、沈黙が走る。

そして。

瞬は、ひとつの結論を出した。

「多分、俺が首を突っ込む資格はない」

「そうだ。これは俺と奴の問題だ」

「だから、お前の話を聞きたい」

「前後関係がめちゃくちゃだぞ、お前」

「滅茶苦茶じゃない」

呆れる灰司だが、瞬は引かなかった。

「——このままお前がいなくなったら、俺は永遠にわからないままなんだ。一緒に戦ってきたはずなのに、お前のことを何も知らないままに別れることになる。それだけは駄目だ」

「わけわかんねーことほぎいてんじゃねえ。抽象的すぎるんだよ、パプリカでもキメて

んのか？」

「俺だつてどう言つたらいいのかわからないんだよ。でも、今お前と話さないと、きつと後悔すると思う。だから俺はここに来た。唯達にも内緒でな」

「……………はあ」

瞬の灰司は観念して、瞬の話に付き合つてやることにした

どの道、この怪我では瞬時にこの場から離れることなんてできない。

瞬は灰司の腰掛けている貯水タンクに背中を預けると、こんなことを聞いてきた。

「灰司。確かお前、別の世界から来たんだよね？」

「なんだ、もう深掘するところはないと思うが」

「お前の居た世界って、どんな感じだったんだ？」

「……………」

その問いかけは、灰司を沈黙に誘うには充分すぎた。

しんと静まり返る屋上。

そして。

そして。

長きにわたる沈黙の後、灰司は苦悩しながら口を開いた。

「……………俺の居た世界は、ここに変わらなかつた。くだらないことを笑つたり泣いた

りできる、そんな普通の奴らが生きる、ありふれた世界だった。それなりの家族愛を持った親、手のかかる弟、世話焼きな幼馴染み……こんなことを言うのは柄じゃねえんだが、まあなんだ。多分、恵まれていたんだろ？うな、俺は」

「……………」

「——それをアイツは踏みにじった!!」

そう叫びながら、灰司は、手に持っていた空き缶を握りつぶした。ぐしゃりと音を立てて、空き缶がゆがむ。

「アイツが呆然とする俺になんて言ったかわかるか？」

「——この程度で滅ぶなんて、ほんとくだらない世界だな！玩具にすらなりやしねえじゃねえか！」

「奴はそう言った。あんな奴を生かしておいたら、この世界も同じ末路をたどるのは明白だ……アイツは……アイツは、生きてはいけない存在なんだよ！」

あんな狂ったやつがいるだなんて、人間の姿をした人だなしがいるだなんて、知りたくなかった。そんな叫びを、瞬は確かに聞き取った。

瞬はバルジと会話をした覚えはほとんどない。しかし、戦場で幾度となく見聞きしてきた彼の言動は、正直言って瞬からしても目に余るものであった。彼から直接的な危害を受けたわけでもない瞬ですら、彼にはことさら強い嫌悪感を抱いている。

バンバンと、灰司は怒りのままに何度も空き缶を叩き潰す。

何度も叩き潰された空き缶は、縦にひしゃげていた。それほどまでに、灰司の怒りは強いのだ。

素手で空き缶をプレスしてしまった灰司の馬鹿力に若干ビビり散らしながらも、瞬は灰司に問いかける。

「お前、復讐を果たした後はどうするんだ？」

「答える義理があるとでも？」

「いや、だって……短い付き合いだけどき、俺達は一緒に戦ってきただろ」

「アホか。俺はお前を戦友と認めた覚えはねえぞ」

「そりゃあ、立場や目的は違うし、最初は有無も言わさずボコボコにされたりもしたけどさ……一応、共通の敵と戦ってきたじゃんか。それつてもう戦友では？」

「……………」

瞬の言葉に、灰司は面食らったような顔をしていた。

信じられない馬鹿でも見たかのように、呆気に取られていた。

「……やっぱり裁場の言ってたように、復讐を終えたら死ぬつもりなのか？」

「別にいいだろ。もう俺が死んでも悲しむ奴は居ない。なんせ全員死んでるんだからな」

「悲しんでくれる奴がいらないなんて、そんな悲しいこと言うなよ。AMOREの仲間たちだって、きつとお前が死んだら悲しむはずだろ。それにさ、俺だって悲しいよ。同じ敵と戦ってきた間柄以前に、同級生だろ」

(コイツ、知らねえ間に随分と馬鹿ヒーローになったな……)

瞬の言葉に黙って耳を傾けていた灰司は、そう思いながらため息をつく。

出会った当初、「灰司は瞬のことを有象無象の悪党転生者と同類と思っていた。

AMOREエージェントとして数多もの悪と対峙し続けたことで擦り切れてしまった灰司には、当時の瞬は、実現できもしない綺麗ごとを吐き連ねる無能、ひいては偽善者の面を被った悪にしか見えなかった。

だが瞬は、灰司の予想を裏切り、ヒーローとしての成長を積み重ねた。

その結果が今だ。

馬鹿ヒーローの道を進み続ける彼の姿に、灰司は感心する他なかった。

「だから死ぬなよ。それが俺からお前に言う、唯一の我儘だ」

「……………」

瞬はそう言うのと立ち上がり、屋上を去ろうとする。

「何処へ行くんだ。俺を連れ戻しに来たんじゃなかったのか？」

「別に俺はお前を止めたくてここに来たんじゃない。お前と話すのは今しかないと思っ

てここに来たんだ」

「なんだその言い方、最初から俺が死ぬ気だつて分かつてたようじゃねえか」

「もう一度言う、死ぬなよ」

そう言つて、瞬は扉の向こう側へと消えた。

藍色の空の下に一人残された灰司は、瞬の階段を下つてゆく足音が完全に聞こえなくなった頃になって、些細な愚痴を漏らした。

「……………そいつは聞けねえ願いだつての」

——あの日のことは、鮮明に覚えている。

2年前 とある世界

「見つけたぞ!!」

「……………ンあ? お前誰だよ?」

何時ものように実験動物を使って一般市民を虐殺した帰り道。

バルジとリイラの前に、一人の少女が立ちふさがった。

黒くてごつい軍服に身を包んだ銀髪の少女だ。その顔立ちは、バルジの傍らにいますりイラによく似ていた。

彼女の名はアステア・ライトレア

——後のギフトメーカー・レイラである。

「ようやく見つけた……リベラ！ 4年間、ずっと探してたんだぞ!! 突然いなくなつて……色んな世界を巡りながら探したんだ」

「……………誰？」

しかしリベラ——否、リイラは、目の前の少女について、まるで見知らぬ他人でも見るかのような目を向けている。

バルジはバルジで、まるで珍獣を見るかのような視線を少女に向けている。

アステアはそんな目線を受けながらも、涙ぐみながらリイラを抱きしめる。

「な、何……？ なんなのこいつ……!!」

「……4年間も離れ離れだったんだ。お互い随分と様変わりしているから、わからないのも無理ないか。私だ、アステアだ。お前の姉で、たったひとりの家族のアステア・ライトレアだよ……!! さ、帰ろうリベラ。義兄さんも心配しているぞ」

「……………」

少女の言葉に、黙って耳を傾けていたリイラ。

彼女はしばらく考えたあと、ようやく思い出したようだ。

「……………ああ、お姉ちゃんか」

「思い出してくれたか、リベラ」

「うん。バッチリと……………ね」

リイラが微笑む

その直後だった

グオバシャアツと。

リイラの左腕が鮮血と共にアステアの背中から勢いよく突き出した。

断末魔をあげる間すらなかった。

一瞬にして腹部にドーナツホールを開けられてしまったアステアは、訳が分からない
 とも言うかのように眼球を動かしながら、

リイラがアステアにぶつ刺した腕を引き抜くと、支えを失った彼女の身体は、綺まる

で水風船が破裂した時のような勢いで風穴から血を噴き出しながら、その場に崩れ落ちてゆく。

「今更のこのこと私の前に姿見せるとか、一体どんなおめでたい頭してるのかしら。バカみたい」

伸ばされたアステアの腕を乱暴に蹴り飛ばしながら、リイラは彼女に唾を吐き捨てる。

リイラの発言を聞いたアステアは、目を丸くしていた。

彼女の発言が、理解できなかった。

「ギフトメイカーになって私は生まれ変わったのよ。毎日が楽しくてたまらない。人の悲鳴を、絶望を、憎悪を生み出すのがやめられない。こんな刺激的なものがあるなんて、故郷に居た時は考えたこともなかったわ。わかる？ わたしはいますっごい幸せなの！ だから邪魔しないでよ。愚図で無能なお姉ちゃん？」

（なん……で、だ……？）

アステア・ライトレアは朦朧とする意識の中、困惑していた。

生き別れた妹を探すために始めた冒険、その終幕がこんなものであっていいはずがない。

だが、リベラに何があったというのだ？ 離れ離れになって4年、その間に何があっ

たらこうなるというのだろうか？

考えたくても、できない。

腹を貫かれたアステアは、その命を散らそうとしていた。全身が冷たくなっていくのを感じるし、思考は纏まらなくなってきた。どうあがいても、彼女の命はここで終わる。

(ああ……ごめん、リベラ………)

——だが、ここで死んだ方が、幸せだったのかもしれない。

何故ならば、ここには人間の皮を被った厄災が居たのだから。

「あー気持ち悪かった。さて、なんかイラつくからもう一度刺すか」

リイラはもう一度アステアをぶっ刺そうと、血塗れの左腕を振り上げる。

が、一部始終を黙って見ていたバルジがそれを制止させる。

「待てよリイラ、殺すなんてもつたいねえだろ」

「……いやいや、勘弁してよ。こちとら大嫌いなお姉ちゃんに抱き着かれたせいで最悪な気分なんだけど？」

「わざわざ俺様達の元まで来てくれたんだ。殺してハイおしまいってのはあつけなさす

きん」

「じゃあどうすんのよ？ どのみちコイツ、じきに死ぬけど？」

「まあ任せろつての。この天才バルジ様にかかれば、コイツを最高の実験動物おもちゃにしてやる」

そう言うバルジは、どこからかフラスコの様なものを取り出す。

その中には、見たこともない虫のようなナニカがもぞもぞと蠢いていた。

「俺様の仲間を奪おうだなんて……身の程を知れよ、雑魚。ちよつとムカついたからよ、お前の身も心も弄んであげるぜ」

フラスコから、蟲が零れ落ちる。

それは、死にゆく少女の顔に――

それからしばらくたった後。

「気分はどうだ？」

ガラクタの山の頂上に腰を下ろしたバルジは、目の前で跪いている少女に声をかけた。

無言で跪いている彼女だが、先ほど穴を開けられたはずの腹は完全にふさがっており、目は不気味なまでに充血し、綺麗な顔に浮かび上がった血管の中では、なにかがも

ぞもぞと蠢くような挙動を見せている。

「頭に霧がかかったような、最高さいあくな気分です。」

落ち着いた声色で、軍服の少女はそう答えた。

バルジはガラクタから腰を上げると、全てを見下しているかのような下品な笑みを浮かべる。

「今日からお前はレイラだ。我らがギフトメイカーの為に思う存分すべてを投げだしてくれや」

こうして、アステア・ライトレアは生まれ変わった。

ギフトメイカー・レイラ。

その役割は、実験おもと動物ちや。バルジの気の赴くままに弄ばれるだけの、都合のいい肉塊。

そこにアステアの尊厳はない。起こしたくもない惨劇を起こし、やりたくもない奉仕を行い、最愛の妹からは蔑まれる。

傍から見れば、その様子は学校でよくある虐めに見えるかもしれない。

だが、彼女がそれに憤りや屈辱を感じることは決してない。何故ならば、彼女は既に心身ともに玩具になってしまっているからだ。玩具は何も感じない。

その地獄から解放される日は、まだ――

げられたせいで精神はほぼ崩壊しているしで、仮にここから解放されたとしても、彼女がまつとうな人生を送れる可能性は限りなく低いだろう。

だがバルジは、否、ギフトメイカー達はレイラの命には微塵も拘泥しない。

彼らにとつてレイラとは、その程度の存在でしかないのだ。そこに仲間意識はない。

「ま、中々に楽しめたぜ？ 最愛の妹を探してやつとのことで再会したと思つたら、今では身も心も玩具にされて、妹からも蔑まれる毎日だもんア。さぞ惨めだろうよ。お前もそう思うだろ、レド君」

「趣味悪すぎるんだよ、お前」

話を振られたレドは、露骨に嫌そうな顔をしながらそう吐き捨てる。

レドはバルジのことが嫌いだ。ボスであるティーダの頼みでもなければ、こんな悪趣味野郎を助けようなんてことを絶対しないくらいには。

「ティーダに命令されて来たけどさ、この調子だと僕たちの来た意味無くない？ こいつ助けなくてもいいんじゃないかな」

「わたしはレイラの無様な最期が見たくて付いてきただけだし？ まあ、同好の士として、必要なら手を貸すわよ」

「ああ、思いつきり遊んでやろうじゃねえか。この世界でよおつ!!」

心底嬉しそうにハイタッチをするバルジとレイラを前にしたレドは、顔をしかめなが

らそつぽをむく。

一応レドも愉快犯じみた性格の持ち主だが、こいつらほど露骨に開く趣味に走る気はない。

——傍から見れば同じ穴の貉でしかないのだが。

「で、どーするのよ？ わざわざわたし達を呼んだってことは、それなりに何か考えているんでしょうね？」

「当たり前だつての。まずは——」

リイラに惨劇あそびのプランを尋ねられたバルジは、嬉々としてそれを話そうとする。

その時だった。

「見つけたぞゲロカス共ツ
!!!!!!」

直後。

圧倒的な爆発が彼らを包んだ。

公演の敷地全体が激しく揺れ、土埃が土砂降りの雨のように降り注いでくる。

その中で、ギフトメイカーの面々は涼しい顔をして不動を保っていた。

バルジは白衣についた土埃を払いながら、土煙の向こう側に確認できた人影に対し、

ため息交じりに文句を垂れる。

「あのさあ、空気読めよ。こっちはさんざんお前の復讐ごっこに付き合わされて辟易してるんだっての。いい加減にしてくれよ、俺様男にストーカーされるような趣味ないんだけど」

土煙が晴れる。

そこに立っていたのは、無東灰司だった。

昼間の戦いで負った傷はおろか、先日の池袋での戦いで受けた傷すら完治していない、立っているだけでやっとなほほどにポロポロの身体で、彼はこの場にたどり着いていた。

この場を目撃している部外者がいたならば、即救急車送りにされるのは想像に難くない。それほどまでに傷つきながらも、灰司は立っている。バルジに敵意をむき出しにしている。

それほどまでに、執念を燃やしているのだ。

「なに被害者ヅラしてんだ……お前が俺から何もかも奪ったんだろぅがっ!! お前さえいなければこんなことにはならなかつたんだよっ!!」

灰司はそう叫ぶと、ポロポロの身体に鞭打ちながらバルジに掴みかかろうとする。

しかしバルジは、灰司の腕をいとも容易く掴みとってしまふ。

「お前は生まれてはいけない存在だ。お前が生きている限り、悲劇は終わらない!! 今
日ここでっ! テメエを地獄の果てまで突き飛ばしてやる!」

「雑魚で馬鹿の癖にイキってんじやねーよ。今まで俺様に一度も勝てなかったお前が、
俺様を殺す? 無理無理、無理に決まっただらろっ!! 寝言はあの世で言うんだなっ!!

—

そしてバルジは灰司の腕を押しのと、怒りのままに灰司の身体を蹴りとばした。

彼からすれば、灰司は顔を合わせるたびに罵詈雑言を吐きながら襲い掛かってくる邪
魔者でしかない。その辺を飛んでいる蚊やハエと同じような存在でしかないのだ

だが、灰司からすれば、バルジは全てを奪い去った憎き相手。己の命を賭してでも殺
さねばならない仇。

両者の間には、圧倒的な認識の差が存在していた。

「ま、身の程を知らない死にぞこないを相手をするのにも飽いてた頃合いだ。ここらで
いっちょトドメをさして因縁の清算とでも洒落込むか」

「ほざけ、清算されるのはテメエの罪だ」

《DESIRE DRIVER ENTRY》

灰司はそう吐き捨てながら立ち上がると、デザイアドライバーを腰に装着する。

そして、ドライバーの両サイドに、それぞれパワービルダーバツクルとギガントコ

ンテナバツクルを装填する。

《SET WARNING》

バツクルがドライバーに装填されると同時にブザー音のような音が鳴り響き、灰司の背後に工事現場の様な半透明なエフェクトが浮かび上がる。

「変身っ!!」

《KAKUSEI EVOLT》

《WOULD YOU LIKE A CUSTOM SELECTION》

両者は敵意剥き出しの眼差しを躲し合いながら、灰司は昼間にラーマオリジオンと戦った時に変身したライダー・シーカーに、バルジは先ほど手に入れた新たな姿・エボルトオリジオンに姿を変える。

《READY……:FIGHT!!》

ドライバーの音声と同時に、灰司の変身したシーカーの複眼が赤く発光する。その光は、彼の怒りと憎しみを現しているかのようだった。

復讐劇、再演。

今宵、決着が着く。

ベキョベキョバコバココンツと激しい音を立てて、まるでティッシュを丸めるかのようにギガントブラスターがひしゃげ、ぐしゃぐしゃの鉄塊となってしまった。

「くっ……やはり……」

「そのまま死ねっ!!」

エボルトオリジオンはそう叫びながら、無造作に腕を振るう。

なんてことのない薙ぎ払い。たったそれだけで、シーカーの身体はまるで新幹線のように真横に吹っ飛んだ。

腰のデザインアダライバーが粉々に粉碎されたことでシーカーの変身が解除され、灰司は生身をさらけ出しながらコンクリート塀に激突する。

灰司が衝突したことによりコンクリート塀は崩れ、瓦礫の下に灰司の姿が埋もれてゆく。

「今のでベルトは破壊されたはずだ。さ、次はどいつで来る？」

「舐めんじゃねえっ!!」

《DRIVE! TYPE NEXT!》

瓦礫に埋もれた灰司を挑発するエボルトオリジオン。

直後、その声に呼応するように、ダークドライブに変身した灰司が瓦礫の下から姿を現す。

「はあああああああああああああああああああつ!!」

身体のうちこちに乗っかった瓦礫を跳ねのけながら、ダークドライブの右ストレートがエボルトオリジオンに迫る。

エボルトオリジオンは軽く手を突き出すだけでパンチの軌道を逸らすと、がら空きになったダークドライブの胴体に左の拳を勢いよく突き出す。

「がはっ……!!」

「言つたはずだぜ、効かねえってな」

「黙れっ……お前だけは俺が殺さなきゃダメなんだっ……!!」

腹部に強烈な一撃を受けたダークドライブは、よろよろと数歩後ろに引き下がる。しかし、心にともした憎悪の炎を糧に、彼はその場に踏ん張る。

エボルトオリジオン——バルジはその姿を嘲笑いながら、ダークドライブの頭部に向かって手を伸ばす。

「痛みは一瞬だ。ブラックホールで頭を消し飛ばしてやるよ」

「吹き飛ばすのは temeエの方だっ!!」

《ネクスト!》

エボルトオリジオンの手がダークドライブの頭に触れる直前、ダークドライブはドシフトブレスのイグナイターを押しして必殺技を発動する。

すると、ダークドライブの両手に漆黒のタイヤ状のオーラのようなものが浮かび上がる。

「吹き飛ばクソ野郎っ!!」

ダークドライブがそう叫ぶと同時に、タイヤ型のオーラを纏った拳がエボルトオリジオンの胴体に突き刺さった。

ダークドライブの一撃を至近距離で受けたエボルトオリジオンは、身体のうちからスパークを吐き出しながらのけぞる。いくら規格外のラスボスの力を持っているといえども、至近距離から必殺技を受ければ多少はダメージが通るのは当然といえよう。

「やりやがったなお前……死にぞこないの雑魚の分際で、俺様に噛みついてんじやあねえってのっ!!!」

「ほざいてる!! 今日がテメエの命日になるんだよっ!!」

バキィツ!!!!!! と激しい音を立てて、エボルトオリジオンとダークドライブの拳がぶつかり合う。!!!!!!

しかし、両者ともに拮抗していたように見えたのはほんの一瞬で、ピキピキピキピキツ!!! とおとをたてながらダークドライブの拳、もといスーツにヒビが入り始める。

「宇宙生物相手にダークドライブで勝てるワケねーだろっ!! 格も実力も、何もかもがちげーんだよオツ!!」

「ぐっ……………このおっ……………!!」

エボルトオリジオンの常軌を逸したパワーに、ボロボロになってゆくダークドライブのスーツ。複眼は既に碎け、腰のベルトからは警告音とスパークが飛び散り、今にもダークドライブの力は失われようとしている。

このままでは、変身が維持できなくなる。生身でエボルトオリジオンの攻撃を受ければ、たとえ灰司が万全の状態であろうとも、即死は免れないだろう。

「くっ……………ならばコイツだっ!!」

ダークドライブではもう対抗できないと判断した灰司は、咄嗟に拳を引っ込めて後方に跳躍する。ボロボロだったダークドライブのスーツは、灰司が地面に着地すると同時に、ボロボロになって崩れ去ってゆく。

急に灰司が拳を引っ込めたことで、エボルトオリジオンは勢い余って目の前の地面を思いっ切り殴り飛ばしてしまう。

その衝撃で周囲の土が根こそぎ吹っ飛び、局所的な土砂災害が発生する。

「往生際悪いなあ、正義の味方ってやつは。さ、どうせ次のベルトに乗り換えてるんだろ
う？」

「視界が土埃で覆われる中、エボルトオリジオンは土埃の向こう側に声を投げる。すると、それに答えるように、土埃越しに複眼が金色に発光する。」

その後、

《チェーン………ナウ！》

土埃の壁を突き破って黄金の鎖が飛び出し、エボルトオリジオンの四肢に絡みつく。その鎖の伸びてきた方向には、黄金の魔法使い——仮面ライダーソーサラーに変身した灰司が立っていた。

エボルトオリジオンは左腕を咄嗟に引くことで鎖を回避すると、極小のブラックホールを生成してその鎖を消し飛ばし、左腕の自由だけは死守する。

「チツ、一本逃したかつ………だが両足は封じた!! この隙に叩き込んでやる!!」

「お次は魔法使いってか!! だが効かないんだよねエツ!!」

バルジは唯一自由が利く左腕を前に突き出すと、手のひらから極太の光線を発射する。

見るからに禍々しいその光線を前にしたソーサラーは、回避行動をとらずに、右手の指に填めたリングを腰のベルトにかざす。

《リフレクト………ナウ！》

すると、ベルトから音声が鳴ると同時に、ソーサラーの前に黄金に輝く盾が出現し、エボルトオリジオンの放った光線を跳ね返してしまった。

「何イツ?!」

「消し飛べツ、テメエ自身の攻撃でっ!!」

ソーサラーがそう吐き捨てた直後。

跳ね返された光線が、エボルトオリジオンの全身をくまなく焼いた。

バルジ——本名・草宮創^{くさみやそう}。

彼は生まれながらの異常者であつた。

なにか悲劇的な出来事だとか、悪に走らざるを得なかつた事情だとか、そういう類のものは一切存在しない。

ただ、その精神の在り方がヒトとして間違つていた。

物心がつく頃には、彼は破綻していた。

人の不幸を笑い、他者の絶望を好み、破滅と崩壊を尊ぶ。

普通ならば、単なる終末論者や破滅論者で済んだのかもしれない。

だが彼には、それを自らの手で作り上げてしまえるだけの力と頭脳があつた。それこ

それが、宇宙最大の不幸であった。

そして。

彼は10歳にして、己の生まれた世界を滅ぼした。

念のために言っておくが、彼は別に滅ぼしたくて滅ぼしたわけではない。

ただ遊んでいたら、結果的に人類が絶滅したただけだ。

世界が滅んだ余波で、彼自身も死んでしまったが、満足のいく結果だった。

だが不幸なことに、彼には「次」が与えられてしまった。

転生しても、彼の性質は変わることはなかった。

前世の記憶を思い出した直後に、今世での家族をバラバラにしてムカデ人間にした。

話しかけてきた可愛いクラスメイトは、鶏や豚とまぜこぜにされて泣きわめきながら死んでいった。

自身に逆らった奴らは、全員ミンチにされた上でひとつの肉団子になった。

自分を倒そうとしてきた勇敢なる若者は、自我を奪われ、守るべき命を嬉々として狩る殺人マシンとして使い潰された。

そうこうしているうちに、その世界は滅亡した。前世と全く同じである。

気の向くままに実験さつりくを繰り返した結果、その世界の人類は絶滅したのだ。某宇宙の無法者を上回る悪辣さつりくっぷりだ。

そうして壊れてしまった遊び場せかいを眺めながら、「さて次はどうするか」と考えていたバルジに、ひとつの出会いが訪れる。

「お前、俺の仲間にならないか？」

「……………誰だ？」

「俺達はギフトメイカー。後に世界を支配する者だ」

バルジ以外の生命が途絶えたはずの世界で、彼に語り掛けてくる声があった。

興味本位でバルジが振り返ると、そこには邪悪な顔をした壮年の男——ティーダが立っていた。

顔を一目見ただけで、バルジは理解した。目の前の男は、自分の同類だと。

「最高だぜ、その話乗ってやんよ」

バルジは少し考えた後、ティーダの話を快諾した。

ここならばいくらでも地獄が見られる。ここでなら自由に滅茶苦茶にできる。

ギフトメイカーという場所は、バルジにとってはまさに天国だった。なんせ、いくら

でも世界を滅茶苦茶にできるし、その上同好の士までいるのだ。

仲間を得たバルジは、水を得た魚のように、より一層実験に精を出すようになった。その結果、数多の世界が滅亡していった。

しかし、バルジはそれを気に留めることはない。悔いることもしない。

同情の余地などない、最低最悪の天災。

人間社会に決して適合することのないバグ。

それこそがバルジという存在なのだ。

故に、彼は何としてもここで殺さなくてはいけない。

生まれながらにして、すべての世界の天敵。

今宵、彼の命運は尽きることとなる。

現在

「ハアッ……………ハア……………」

ソーサラーはその場に膝をついていた。

元より満身創痍の身の上、それを度外視して多数のライダーの力を使い潰すつもりで、全力で行使しているのだ。今こうしている時も、少し気を抜いてしまうと、魔力で生成した鎖が維持できずに霧散してしまいそうなのを、必死に押しとどめている。

そして、

「……………今のは効いたぞ」

自分で放ったビームをモロにくらったエボルトオリジオンも、ソーサラー同様に地面に膝をついていた。

ソーサラーの疲労に加え、ビームが直撃したとも相まって、エボルトオリジオンの両足と右腕を縛り付けている鎖は今にも千切れそうなほどに劣化している。少しでも力を籠めれば簡単に引きちぎることができそうなのだが、そのための力がない。

（まだこの特典を使いこなせてねえのもあるが、まさかここまで苦戦させられるとはなあ…………クソツ、最悪な気分だ…………！）

苦痛に顔をゆがませながら、エボルトオリジオンは唯一鎖の巻き付いていない左腕を使って、右腕と両足に巻き付いている鎖を引きちぎる。

すると、ずっと戦いを静観していたリイラが、ケラケラと嗤いながらバルジのほうへと近づいてきた。

「血を吐くな服が汚れる」

「ぶがっ」

吐血しながらリイラに駆け寄るレイラだったが、服が吐血で汚れることを嫌ったリイラによって、思いっきり殴り倒される。

そして、血を流しながら地面で痙攣しているレイラをいないものとしながら、リイラはエボルトオリジオンに尋ねる。

「で、どうするの？ 助太刀とが必要？」

「いいや……………お前らには他の連中の相手をしてもらうさ。ほら見ろ、来やがったぜ」

エボルトオリジオンはそう言いながら、リイラ達の背後に視線を向ける。

そこには。

「ごめん、遅くなった」

「余計なお世話かもしれないけど、助太刀に来たよ」

黒髪の少年と金髪の少女。

逢瀬瞬と諸星唯がいた。

「馬鹿で間拔けな自殺志願者共の登場だ」

「テメエみたいなサイコ野郎になるくらいなら馬鹿で結構だよ」

「っ……………」

瞬達の目の前に現れたのは、昼間よりもさらに痛々しい姿と化したレイラだった。

モノクロのメイド服を頭部からの流血で赤く染め、目の焦点は微塵もあつてはいない。その様子は、まるで危ないクスリかなにかでもやっついているかのようにしか見えず、敵とはいえども、瞬も唯も憐みの眼差しを向けずにはいられなかった。

「せつかくのお遊びだ、盛大にやろうぜ？」

「飛鳥ちゃん達をどこにやったの!!」

「ああ、あの死にぞこないのクソガキ？ それなら、今お前の首をぶつた斬ろうとしてるけど？」

「!!」

エボルトオリジオンにそう言われて咄嗟に振りむく唯。

そこには、今まさに薙刀をぶん回そうとしているラーマオリジオンが居た。

「唯っ！」

「っ！」

瞬と唯は互いに別々の方向に転がり、薙刀を回避する。

「唯は飛鳥達をつ!! 俺はレイラ達をどうにかする！」

「わかつてる！」

そしてそのまま、ふたりは反対方向に走り出す。

瞬はレイラとガングニールオリジオンの方に。唯はラーマオリジオンとシータオリジオンの方に。

「さあかかってこいっ!!」

「これはもしかして……もしかしてけどっ、レイラちゃん、本気出さなきゃいけない感じですかあ？」

「どうせお前はじきに壊れる。なら最後の祭りくらい盛大にやってやったほうがいいさ。思う存分暴れてやりな」

息を切らしながら、エボルトオリジオンはレイラにそう告げる。

それを聞いたレイラは頬を紅潮させながら、空元気を極めた返事と共に瞬の前へと跳躍する。

「はあああああああああああああああああああいつ♡ レイラちゃん、壊れまああああああああああああああああああああすうっ☆」

《KAKUSEI ALTAIR》

レイラが声を張り上げると同時に、ブチブチと、彼女の額の血管が音を立てて千切れ、そこから鮮血が流れ出る。

それに合わせるように、レイラの額からヘソのあたりにかけてジツパーのようなもの

が出現し、ズズズズズ、と上がってゆく。ずっと生身で戦っていた彼女が、オリジオンとしての姿をさらけ出すようにしているのだ。

心身ともにボロボロになった洗脳メイド少女は、真つ黒なボロボロの軍服を着た怪人へと姿を変えてゆく。顔はまるでテレビの砂嵐のように歪んで判別できず、ボロボロの軍服から覗かせている肌は、様々な漫画や小説のページを切り貼りしたような、不気味な姿となっている。

「ある時は非常な殺し屋、ある時はクソ雑魚奴隷メイド……そんなレイラちゃんの正体はっ!!! 森羅万象をねじ伏せるアルティルオリジオンなのでしたあああああああああああつ!!! きやはっ☆」

どろり、と。

アルティルオリジオンと化したレイラのこめかみから、赤い血が流れ落ちる。砂嵐と化した顔面から、血が断続的に流れている。

それを目にした瞬は顔をゆがませる。だがそれは、敵意によるものではない。瞬の中にあるのは憐憫。

何もかもを踏みじられ続け、こうなってしまうほどに使い潰されてしまった目の前の少女に対する、憐みの感情だった。

「……………それでいいのかよ、お前」

「? 何を言ってるのかさっぱりわからないんですけど?」

「お前の事情は唯から聞いてるよ、バルジの野郎に操られているんだって。お前が元々はどんな人間だったかは知らないけど、多分、こんなことを嬉々としてやるような奴じゃないんだろ?」

悲しみと憐みのこもった声で、瞬はアルタイルオリジオン——レイラに語りかける。

本来ならば、何度も自分を殺そうとしてきた相手に対して書けるような言葉ではないことは、瞬自身も理解している。

ただ、部分的ながらも事情を知ってしまった以上、このままレイラを倒しても後味が悪くなる。

瞬はそう思っていた。

たとえ彼女が洗脳される以前からどうしようもない人間だったとしても、自分の意思を奪われて弄ばれているという事実が変わらないし、それを放置するなんてことは絶対にできない。

——そんな我儘を貫き通せる奴こそが、ヒーローなのだ。

「お前を救い出すのは——俺達だつ!!」

《CROSS OVER! 思いを、力を、世界を繋げ! 仮面ライダーアクロスつ!!

》

クロストライダーにライドアーツをセットし、アクロスに変身する瞬。

それを目にしたアルタイオリジオンは、サーベルの刃先でコンクリートの地面を軽く挑発、あるいは宣戦布告。その行為にどんな意図があるのかは、本人達の間でしか知りえない。

そして。

今宵二度目となる因縁の衝突が、生まれた。

「……………帰りたいなあ」

目の前で繰り広げられている戦闘を前にして、レドはそうぼやいた。

元々レドはバルジのことが嫌いだ。頼んでもいないのに彼の実験あそびに付き合わされて
いる上に、言動の節々から漂ってくる傲慢さが気に食わない。

善に様々な形があるように、悪にも様々な形がある。レドとバルジでは、その相性が致命的に悪いということだ。

いまこうしてここにいるのも、リーダーであるティータの命令だからに過ぎない。それがなければこんな場所に来ていない。故にレドは、様々な因縁がぶつかり合うこの戦

場で、ひとり手持ち無沙汰に観戦を決め込んでいたが。

悪党少年の些細な平穩は、ここで終わった。

「……………つたく、正義のヒーローってやつは勘が鋭すぎて嫌になるな」

レドはそう口にしながらか振り返る。

そこには。

「ギフトメイカー、お前らに恨みのあるヤツはごまんといるんだ。ここからは俺達も加勢させてもらう」

敵意をむき出しにした眼鏡の男——裁場整一がいた。

否、彼だけではない。

暁古城に姫終雪菜、カワラーナにミットルテにドーナシーク（あとおまけでGUM I）。瞬達とは別口でギフトメイカーに迫ろうとしていた彼らが、遅ればせながらたどり着いたのだ。

「ユナイト……それに一緒にいるのは、第四真祖にバルジの元モルモットの墮天使か」

「この場に傍観者はいらぬ。どちらかが全滅するまで止まる気はない、そうだろう？」

—

裁場はそう言いながら、ユナイト専用の銃型武装・フュージョンマグナムの銃口を突

きをつける。

が、レドは特に抵抗することなく、気だるげそうに両手をあげてしまった。

「パスパス、僕は今ちよつと戦えないからね。」

これは事実だ。

一見すると健康体に見えるレドだが、彼は先日の池袋での戦いで、自身の転生特典にもダメージが入っており、オリジオン態を維持することすら困難な状態だ。いくらギフトメイカーといえども、生身で仮面ライダーと戦うなんて無謀な真似をする気はさらさらでない。

そんなレドの態度を見て、見下されたと感じたドーナシークが激昂する。

「ふざけているのか!! それとも我々のことを馬鹿にしているのか!!」

「代わりの相手ならいるからさ、ほら」

「なんだと……?」

裁場が怪訝そうに眉をひそめた直後だった。

バシユンツ!! と、白い光の筋が凄まじい速度で飛び出し、裁場の足元に着弾した。

裁場が足元を見ると、地面に人差し指の幅くらいの大きさの穴が開いている。まるで銃弾か何かでも撃ったかのようだ。

再び裁場が顔をあげた時、そこには、先ほどまでいなかったはずの人物が居た。

一見清楚そうに見える黒髪の少女。だが、頬はやつれ、その目は明らかに正気を失っている。そして背中からは、カラスの翼のようなものが生えている。

それが誰なのかを、墮天使達は知っている。

「レイナーレ……さま……さま……!!」

そう。

彼らが探し求めていた大切な人。

墮天使レイナーレ。

バルジによって洗脳され悪の手先と化した少女が、そこにいた。

「わたしが、倒します」

「僕を守れ、そいつらを殺せ。複雑な命令なんて必要ないだろう？」

「了解しました」

《KAKUSEI SIESTA》

レドの命令を受けたレイナーレは、抑揚のない返事をしながらオリジオンへと変身する。

大量のジッパーに覆われながら彼女が変じたのは、ウサギとカラスが入り混じったような姿をした怪人だった。白い軍服のようなものを身に付け、手には洋弓のようなものを持っている。

シエスタオリゾン。

それがオリゾンとなった彼女の名前だった。

対話による奪還の道は途絶えた。ならば方法はひとつしかない。

「こうなったら戦うしかないっ!! ぶん殴ってでも目を覚まさせるんだ!」

「やってやるっす! うちらのリーダーを取り返して見せるっ!!」

「ここから先は俺達の聖戦だっ!!」

《CROSS OVER! 正義の意志をフュージョライズ! 不撓不屈のウォリアー!
! 仮面ライダーユナイト!》

墮天使達は光でできた武器を生成し、雪菜は背中の中のギターケースから雪霞狼を取り出して構え、古城は眷獣を呼び出す態勢に入る。そして裁場は、クロスドライブにライドアーツをセットし、ユナイトに変身する。

墮天使に第四真祖、剣巫に仮面ライダー。

傍から見たら寄せ集めにしか見えないパーティーだが、彼らの目的はただ一つ。

——ギフトメイカーという悪に報いを。

「やるなら勝手にやってくれ、どうなるうが知ったこっちゃないからさ」

「元よりそのつもりだ。ここで終わらせてやる」

二度あることは三度ある。

ここでもまた、因縁の衝突が発生しようとしていた。

加速させる。

あの公園で大乱闘でもすれば、間違いなく周囲の住宅街への被害が出る。というか、バルジと灰司が本気で殺し合っておきながら、ほとんど周囲への被害が出なかったこと自体が奇跡なのだ。

それを最小限にするべく、まずは敵を誘い出す。

ただ敵を倒せばいい相手側とは違い、アクロスには周囲の被害に気を配る義務がある。

——ところが、悪党とヒーローの決定的な差にして、ヒーローの隙となる。

「イツチョコセンニイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イツ!!」

「なあっ!! 上からあ!!」

バイクを走らせるアクロス。その真上に、奇声を上げながら、ガングニールオリジオンが空から降ってきた。

空を飛べるはずのないガングニールオリジオンの、空からの奇襲。想定外の攻撃に僅かながら反応が遅れたアクロスは、乗っていたバイクごと前方に吹き飛ばされ、突き当りにあった土手を乗り越えて河原までゴロゴロと転がってゆく。

「どうやって……………!! っいつ、どこから降ってきた…………?」

「コウエンカラ……………トンデキタ」

「嘘だろ!!」

なんと GANG ニール オリジオンは、律義にもアクロスの疑問に答えてくれた。それに思ってたよりも力技だった。

……と、ツツコミを入れている場合ではない。今は殺すか殺されるかの戦いの真っ最中だ。

知性の感じられない唸り声をあげながら、GANG ニール オリジオンが殴りかかってくる。アクロスは GANG ニールの馬鹿力は痛いほどわかっている。一発でも喰らえば大ダメージは確実だ。

アクロスは横に転がってパンチを避けて立ち上がると、続く GANG ニール オリジオンの二撃目を左手で逸らし、そのまま腕の付け根目がけて左手でチョップを叩き込む。

「お前とは嫌になるほど戦ってきたんだ、受け流し方くらい身に付いてんだよ!!」

肩関節にダメージが入り、苦悶の声をあげる GANG ニール オリジオン。

アクロスは追撃の手を緩めることなく、そこに続けざまに連続でパンチを叩き込み、GANG ニールに着実にダメージを与えてゆく。

「ドガアアアアアアアアアアアッ!!」

「ぬあつ!!」

が、戦局は一変。

アクロスのラッシュ攻撃をなすすべなく受けていたガングニールオリジオンが、雄たけびを開けながらアクロスのパンチを払いのけると、仕返しと言わんばかりに殴りかかってきた。

アクロスはなんとかその拳を受け止めるが、ガングニールオリジオンの馬鹿力に徐々に押され始める。

「くそっ………！ コイツ、更にパワーが増してやがる！」

「オマエツ!! コロスツ!! ナグリコロスツ!!」

「おまけにちよつとずつ知能も上がってるしよおっ!!」

バキィツ!!! と、音を置き去りにして両者の拳がぶつかり合う。

これまでには押されるままだったが、数々の戦いを乗り越えてアクロスが成長した今、アクロスとガングニールオリジオンは互角の肉弾戦を繰り広げていた。

「フシヤアアアアアツ!!」

「目くらましかつ!!」

ガングニールオリジオンの拳が引つ込むと同時に、彼の首に巻かれていたマフラーが触手のように伸張し、アクロスの視界を覆わんとしてくる。

アクロスは伸ばされてきたマフラーを素早く掴むと、それを思いつきり引つ張ってガ

ングニールオリジオンの身体を引き寄せる。

そして、

「どらっしやあああああああああああああつ!!!!!!」

アクロスは全体重をかけたタツクルで、ガングニールオリジオンの肉体を思いつきり吹き飛ばした。

限界を超えて引つ張られたマフラーは千切れ、その切れ端は砂のように崩れ去ってゆく。

「さんざんお前らギフトメイカーの悪辣っぷりを目にしてきたんだ。その程度の小手先の技、なんてことないんだよ」

「……………グウ」

が、アクロスの敵はもう一人いることを忘れてはいけない。

「戯たわむれはここまでです☆ 大人しく蜂の巣になってくださいっ♡」

いつの間にかアクロスの真上に浮遊していたアルtailオリジオンが、媚び媚び声をあげながら両手に持ったサブマシンガンを掃射してきた。

アクロスのそばにガングニールオリジオンがいるというのに、彼女はお構いなしにサブマシンガンをぶっ放す。仲間意識のなの字もあつたもんじやない。

「くっ……………痛え……………! いつものことだけど、仮面ライダーに変身してなかつたら即死

だった……」

アクロスのスーツの頑丈さに救われたが、痛いものは痛い。

這う這うの体で銃弾の雨から逃れるアクロスだが、そこに追撃が来る。

「じゃじゃーんっ☆ レイラちゃんのベコベコハンマーっ！ キュートな版画にしてあげるうー！」

「うおおおおおっ!!」

アクロスが顔をあげた先では、漫画とかでしか見たことないような馬鹿でかい金槌をもったアルティルオリジオンが、今まさに飛び掛かろうとしていた。

アクロスが慌てて前方に転がり込むと同時に、アルティルオリジオンの金槌が地面に触れる。

すると、ズシンツツ!!!!!! と、まるで某ガキ大将のリサイタルを耳元で聞かされたかのような衝撃がアクロスの全身を襲う。攻撃は確かに避けたはずなのに、ダメージが減衰している気配が微塵も感じられない。

が、それだけではなかつた。

「まだまだ行くよーっ!!」

「え」

アルティルオリジオンが指をパチンと鳴らすと、アクロスを取り囲むようにして、空

ば、今頃串刺しになっていたのは想像に難くない。

「眩反吐が出るほどしいくらいほどの正義のヒロインっぶりね、笑つちやうわ。——だけどね、貴女の相手にももつと適任者がいるってことをご存じない？」

「……………やっぱりあなたもここにいるんだね、リイラ」

唯が空を見上げると、そこにリイラが居た。

彼女は背中から昆虫の羽のようなものを生やし、それを動かして空に浮かんでいた。

その人物の乱入に対して、唯はどこか冷めたような反応だった。まるで、最初からそれを予期して怒下のようなようだ。

「そうよ。池袋の時は全然話にならなかつたけど、成長してその力を使いこなせるようになった今ならば、デイナーとして不足無しといったところね」

リイラの言葉を受けて、唯は自分の手のひらを見つめる。

つい最近になって覚醒した、名前すらわからない力。

池袋の一件で目覚め、制御に成功したこの力のことを、唯は何も知らない。

「あなたは……………この力について何か知ってるの？」

「それは“失われた女神の力”。遠い昔に朽ち果てたはずの、その残骸。確かなのはそれだけよ」

それが何を意味するのかは、唯には理解できない。

だが、リイラはこれ以上のことは話す気がないらしい。

「続きは………ディナーの後にしましようか？」

「ごめんだけど、あんたの今日のディナーはお預けになるかもね。だって私、食べられる気なんてさらさらないから啦！」

ゾゾゾゾゾゾゾゾゾゾと、リイラの真下の地面から、新たな触手がいくつも出現する。

それと同時に、唯の全身が光に包まれ、ぴっちりしたレオタード風の衣装の上にメカめかしい装甲がくつついた、何処かの変身ヒロインかなんかの様な格好の戦闘スタイルに移行する。

「デザイアモード
願能装束」

「？」

「それがこの姿の名前。たった今そう名付けた」

「あつそ、どうでもいいからさつきとくたばつてよ」

「そつちこそさつきとくたばれっ！ 飛鳥ちゃん達を助けるのは私だっ！」

そして。

世界の摂理を逸脱した二人が、再び衝突した。

「さあ始めるわよっ!! テメエら全員もれなくグサグサバキバキにして差し上げますので、ごかんしやしてくださいましっ!!」

「レイナーレ、あんた口調滅茶苦茶過ぎない!!」

バトルの幕開けは、シエスタオリジオンとカワラーナのそんなやりとりからだった。

シエスタオリジオンが洋弓の弦を引つ張ると、何処からともなく光の矢が弓に装填される。

そして、放たれる。

「キヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ!! 死んじやえ死んじやえ」

「うわっ!!」

シエスタオリジオンの放った光の矢は、まるで生きているかのように自在に軌道を変えながら、執拗にユナイトを射抜かんと追跡してくる。

いや、彼だけではない。直後に放たれた何本もの光の矢が、古城や墮天使達にも同じように自動追尾を仕掛けてきている。彼女は——レイナーレは、本気で皆殺しにする気なのだ。

「目を覚ますっす! ウチらずっと一緒にやってきたじゃんかよオ!!」

「こちとらギンギンになるレベルで正気よオツ!! それにねえ、バルジ様に改造してもらいながら裏切った負け犬なんか必要ないのよねえ!」

「血の涙流しながら殺しにかかっている奴が正気なわけないっての!!」

光の矢を回避しながら、カワラーナが眩く光る魔力弾を指先から放つ。

魔力弾は、空気を切り裂きながら一直線にシエスタオリジオンに向かうが、その鼻先を目前にして、横から飛んできた光の矢に貫かれて消滅する。

「無駄よ、あんた達と私の実力差を知らないわけではないでしょう?」

「たかが実力差ごときで諦めるわけにはいかないの! あんたは私たちの大事なリーダーだしつ、それにこのまま糞みたいなマッド野郎にやられつばなしだなんて、墮天使のプライドが許せない!」

絆と反骨心を糧になんとかしてシエスタオリジオンに食らいつこうとするカワラーナだが、及ばない。

自由自在に軌道を変える光の矢が、執拗にカワラーナの身体を貫こうとしてくる。

「このつ……しつこいっての!」

「やめろレイナーレッツ!! 正気に戻れツ!! 操り人形のままでいいのか?! お前はそんなタチじゃあないだろう?!」

「さつきからギャーギャー煩いのよ、バルジ様を満足させられなかった失敗作の玩具の

癖にツ!!」

「ツ!! 避ける!!」

ドーナシック達の必死の呼びかけを煩わしく感じたレイナーレー——シエスタオリジンは、キレ気味に光の矢を乱射する。

複雑怪奇な軌道を描きながらドーナシックに迫りくるそれは、古城が叫ぶよりも早く、ドーナシックの胴体を幾度も貫いた。

「げはっ……………」

「おいアンタツ!! 大丈夫か?!」

「先輩っ、後ろから来てますツ!!」

血を吐きながら膝をついたドーナシックに思わず駆け寄る古城。そこに、雪菜が雪霞狼せつからろうで光の矢を弾き飛ばしながら注意を促す。

古城の背後には、迫りくる無数の光の矢。

圧倒的に、回避が間に合わない。

光が来る——その直前。

「屈めツ!!」

「ぬおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

滑り込むユナイトの声。

咄嗟にそれに従って身をかがめる古城とドーナシーク。

その直後、ユナイトの右手に握られていたフュージョンマグナムから放たれた光弾が、古城達に迫っていた光の矢達に次々と命中していった。

カワラーナの魔力弾が効かなかった通り、この光の矢を打ち消すことは不可能。だが、起動を逸らすことはできる。互いに正面衝突したフュージョンマグナムの光弾と光の矢は、互いに軌道を予期せぬ方向に曲げられ、そのまま周囲の地面や遊具に激突して霧散する。

「す、す……い……」

「この程度、造作もない。なるべく光の矢を逸らすんだ、打ち消したり撃ち落としたりができない以上、それが最善策だ」

「簡単に言ってくれるなあ！」

さも全員ができる前提で言っているかのようなユナイトの物言いに、古城は頭を伏せたまま悪態をつく。

「ただの人間風情が一丁前に抵抗しちやつてさあ……！ あんただけはただでは殺さないわっ！！」

「強がるのはやめたらどうだ。もう既に限界が近いんじゃないのか？」

「は、何言ってるのよ。私はまだ——がつ、ああっ?!」

ユナイトの言葉を鼻で笑おうとしたシエスタオリジオンだったが、その言葉を途中まで紡いだところで、突如として激しい頭痛が彼女を襲った。

引こうとしていた弓をその場に落とし、頭を抱えながら苦しむシエスタオリジオン。彼女の豹変に困惑する墮天使達とは対照的に、ユナイトと、戦いを観戦していたレドだけは冷静さを保っていた。

「やっぱバルジの奴、はじめから使い潰す気じゃないじゃん。洗脳のクオリティもレイラと比べたらはるかに劣っているし、素体への負担の軽減も全く考えていない。まあそういう用途で改造してるんだから、当然なんだけどもさ」

「何を……………言っているんだ……………!?」

「早く助けないと手遅れになるということだ。このままじゃ彼女の身体が持たない」
「!!」

ユナイトの言葉で、ようやく墮天使達はレドの発言内容を理解した。

バルジはあえて、レイラ以上に負荷を伴う洗脳と改造をレイナールに施した。ただそのほうが面白そうだから。それ以外の理由は、彼にはない。

これがバルジの趣向。

放っておけば全てを遊びの資材として使い潰してしまう、究極の篡奪者にして破壊者。何としてでも止めなければならない災厄。

「兎に角スピード勝負だ。取り返しのつくうちに、全てを終わらせる」
「やってみやがれよ雑魚。生まれ変わった私の本領はこれからよ」

調子を取り戻したシエスタオリジオンが弓を構えるのと、ユナイトがフュージョンマ
グナムの銃口を向けるのは、同時だった。

そして。

光の矢と光弾が、再び衝突した。

そして、本戦。

仮面ライダーソーサラー——灰司と、エボルトオリジオン——バルジは、互いに目に
見えて消耗し始めていた。

怪我の関知しない内から連戦に身を投じていたソーサラーと、渾身の一撃をそのまま
跳ね返されて大ダメージを負ったエボルトオリジオン。

先に膝を地面から話したのは、ソーサラーだった。

「つ……………さあ、邪魔者はいなくなつたんだ。第2ラウンドと行こうぜ」

「ケツ、どいつもこいつも寄つてたかつて俺様の邪魔をしやがる。ヒーローってのはい

つから集団リンチを正当化する卑怯者の集団に成り下がったんだ、ああ？」

「被害者ヅラしてんじゃねえぞこのゴミクス野郎っ!!」

ソーサラーは怒りのままに地面を蹴って走り出す。

それと同時に、エボルトオリジオンの両足を縛り付けていたボロボロの鎖が霧散し、ソーサラーの変身も解除され、灰司の素顔が露となる。魔力切れで鎖はおろか、変身すら維持できなくなったのだ。

もう魔法使いの力は使えない。

灰司は的確かつ迅速に、数多の手札の中から次の一手を選び取る。

「変身ッ!!」

《バグルアップ！ デンジャー！ デンジャー！ デンジャー！》（ジェノサイド！）デス・ザ・クライシス！ デンジャラスゾンビ!!（Wooooo!!）《》

灰司が選択したのは、仮面ライダーゲーム・ゾンビゲーマー。

どうやら、満身創痍の肉体をゾンビの不死性で補うつもりのようなのだ。それほどまでに、灰司は戦闘を継続しようとしているのだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「魔力枯渇したからって次はゾンビアタックかよ。どうした、出血多量で思考能力に

ぶつてきたりしてんのか、ああ？」

鎖が消えたことで自由を手に入れたエボルトオリジオンは、手のひらから光線を放つ。

それは完璧な形でゲンムの顔面に直撃するが、突撃してくる彼を止めるには至らない。ゾンビゲーマーの不死性で攻撃を無理やり耐えながら、ゲンムはエボルトオリジオンの眼前まで進撃する。

「消えろッ!!!」

「目障りなんだよゾンビ野郎！ そのままくたばりやがれっ！」

バキィッ!!!! と激しい音と火花を飛び散らせながら、ゲンムとエボルトオリジオンの拳が衝突する。

両者の拳がぶつかった直後、同極の磁石同士が反発し合うように、2人の身体が間反對の方向に吹っ飛んでゆく。

ゴロゴロと地面を転がりながらもなんとか体勢を整えて立ち上がろうとするエボルトオリジオンだったが、そこで異変に気付く。

「ッ!! なんだッ……身体が重い………」

「………今の一撃で、テメエの体内に高濃度のバグスターウイルスをぶち込んだ。

感染すれば即座に発症しちゃうくらいにドギツイやつをな」

そう。

ゲラムは先ほどの一撃で、エボルトオリジオンの肉体に超高濃度のバグスターウイルスを注入していたのだ。それにより、エボルトオリジオン——バルジの肉体は、現在進行形で著しく衰弱していつているのだ。

バグスターウイルスは、普通の方法では治療不可能な常識外のウイルス。通常の者と比較しても毒性を極限まで増幅されたそれは、エボルトオリジオンの身体を猛烈に蝕んでゆく。

だが彼は、ただで終わるような男ではない。

「おいおい、俺様の頭脳を見くびってもらっては困るんだ。こんな病氣、すぐにでもこの場で治療してやるぜ」

「させると思うのか？」

次の瞬間、エボルトオリジオンの目の前にいたはずの灰司の声が、後ろから聞こえた。その異変に気付いた時には、すでに手遅れだった。

「ライダーキックッ!!」

《RIDER KICK》

「ッ!! いつの間に変身をおおおおのおおのおおのおおのおおのおおのおおをおをおをおおおお!!」

ゲムムからダークカブトに変身を切り替えた灰司が、クロツクアップで灰司の真後ろに回り込み、ライダーキックを今まさに叩き込もうとしていたのだ。

バグスターウイルスに感染したことで反応速度の鈍っていたエボルトオリジオンでは、攻撃には気づいても回避行動が間に合わず、結果として、顔面に全力のライダーキックをぶち込まれ、サッカーボールのようにぶっ飛んでいってしまった。

「があああああああああああああああああああああつ!!!!!!」
 「はあ、はあ……とりあえず、今のは効いただろ……これでもまだ遊びだとかほざくつもりかよ、この糞野郎」

公園のフェンスを突き破り、アスファルトの上に放り出されたエボルトオリジオン。ダークカブトはふらふらとした足取りで、エボルトオリジオンの元へと歩み寄ろうとする。

「遊びに決まってるんだろ。俺様は転生者、選ばれた人間だ。他の凡庸な雑魚共とは違うんだって何度も言ってるだろ」

「……………もう、ここから先は喋らねえぞ」

負傷のせいで訛りのように重くなった足を動かしながら、ダークカブトはそう宣言した。

憎しみをぶつけるのにも、他者を踏みつけるのにも、言葉はいらぬ。元より対話の

余地がない相手だったのだから、これまでのやり取り自体が無駄でしかなかった。ここから先は、より効率的に傷つけあうことができる。

《1, 2, 3》

再びダークカブトはライダーキックを放とうと、ベルトに装着されているダークカブトゼクターのボタンを押す。どす黒いタキオン粒子が頭部の角を経由して、ダークカブトの右脚に収束してゆく。

ガシヤン、とゼクターホーンが動かされると同時に、ダークカブトは空高く飛び上がる。

そして、空中で右足を前に突き出し、全力のライダーキックでエボルトオリジオンに引導を渡そうとする。

もはや、両者の間には雄たけびすら存在しない。

ようやくエボルトオリジオンが立ち上がった時には、既にダークカブトの右足が眼前に迫っているところだった。

(これで終わる……これで、終わらせられる…………！)

勝利を確信するダークカブト——灰司が。

「フェーズアップ」

ライダーキックを受ける直前に、エボルトオリジオンはそう口にした。
すると。

ゴワアアツと。

エボルトオリジオンの全身から赤黒いガスのようなものが噴き出し、灰司の意識を数秒の間だけ吹き飛ばしてしまった。
!!!!!!

「……………何が起きた？」

数秒間のブラックアウトから復帰した灰司が最初に目にしたのは、粉々に砕け散った
ダークカブトゼクターだった。

マスクドライダーシステムの動力源であるゼクターが破壊された以上、灰司はダーク
カブトの変身を維持できない。結果として、再び灰司は生身をさらけ出すこととなつて
いた。

周囲には赤黒いガスのようなものが充満しており、視界は殆どふさがれている。灰司以外にもギフトメイカー達と交戦している輩はたくさんいたはずなのだが、彼らはどうなっているのだろうか。

「お前、俺様を本気にさせちまったんだぜ？ 後悔しても知らねえからな？」
ガスの向こうからバルジの声がする。

声のした方を灰司が凝視していると、そこからバルジが姿を現した。が、その姿は先ほどまでとはまるで違う。

全体的はシルエットはエボルトオリジオンに似ているが、赤黒い体色だったのが全体的にモノクロに変化しているほか、まるで体内から突き破ってきたかのような生え方をした全身のトゲや、後頭部から垂れている赤いコード……というか血管のようなもの、そして不気味に胎動する露出した脳味噌など、グロテスクさが寄りましたような見た目に変化している。

見るからに痛ましい姿に変貌しながらも、彼は笑っている。

「エボルトオリジオン・フェーズ2。ここからは遊びなんかじゃねえ、本気でテメエを排除するための戦いだ」

ここからが彼の本気。

本気となったバルジ——エボルトオリジオン・フェーズ2を目の当たりにした灰司だ

が、彼のやることは変わらない。

敵を討つ。それだけだ。

「変身」

カードデッキを腰のVバックルに装填し、仮面ライダーリュウガに変身する。

それと同時に、何処からともなく赤黒いガスを突き破り、リュウガの使役する黒龍型のモンスター・ドラグブロッカーが飛翔してくる。

拳を強く握りしめるリュウガ。

痛みはとつくに麻痺している。これならば、死ぬ気で戦える。

全てを滅茶苦茶にしてしまう生まれながらの厄災と、命を投げ出した復讐者。両者の決戦は、次なるステージに移行する。

第48話 呪縛を解くのは正義の心

水飛沫と土埃が降り注ぐ中、レイラ——アルtailオリジオンは爆心地を凝視していた。

森羅万象^{ホロフシコン}によつて召喚した大量のハンマーによる圧殺。逃れようのない一撃で、アクロスの息の根を止めることに成功した。

手元の一つを残して召喚したハンマーを消去したアルtailオリジオンは、アクロスの生死を確かめるべく、ハンマーを肩に担ぎながら悠々と歩いてゆく。

「死んだかな？」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオウ？」

アルtailオリジオンの声に、唸り声で応えるガングニールオリジオン。

その様子はまるで、飼い犬と飼い主のようだった。

「ぺっしゅんこのぐっしゅぐしゅになつてるかなー？ なつていたらご主人様に褒められたいなっ☆」

血の涙を流しながら、うきうき気分です歩を進める。身体は既に限界を迎えているはずなのに、なおもバルジの為に生きようとする。自分が何をしているのかすらわからないままに使い潰される。そんなことがあっていいはずがない。

アルタイルオリジオンが、アクロスの存在した辺りの地面を軽く足で叩く。

その直後だった。

「せいやあああああああああああああああああああああああああああつ！

—

《PENDLUM CROSS BREAK!》

「がはっ!!」

奇術師とドラゴンの入り混じったような姿——リンクペンデュラムとなったアクロスが、真後ろからアルタイルオリジオンに跳び蹴りをぶち込んだ。

アクロスは死んではいなかった。ハンマーによる一斉攻撃の寸前にリンクペンデュラムにフォームチェンジし、瞬間移動で包囲を抜けていたのだ。

必殺技をもろにくらったことで、ハンマーを取り落とし、近くの草むらに頭から墜落するアルタイルオリジオン。口から血を流しながら顔をあげた彼女の目の前には、まるでシヨアの真つ最中の奇術師を思わせる悠々とした態度で佇むアクロスが居た。

「レディースエーンドジェントルメーンツ！ 華麗……とはいかねえが、脱出シヨアは

成功したぜ？」

「……まだ生きていたのオ？ ヒーローってのはどいつもこいつもほんつとしぶといね。反吐が出るほど嫌いになっちゃいそっ☆」

「死ぬわけねーだろ。俺にはまだ救えてない奴がいるんだ」

「じゃあもういつペン食らわせてアゲルウツ♡ ぐっちゃぐちやミンチに生まれかわれっ♡」

「そいつはもう喰らわねえツ!!」

激昂したアルtailオリジオンは、新たなハンマーを手元に召喚すると、それをブーメランの如く投擲した。

何十キロもの鉄の塊がピッチャーの剛速球並みの速度で飛来してくる。これを生身でくらえば、そのままぶち当たった部位が消し飛んでしまいかねない。

「なら……コイツでも喰らいなツ!!」

「!!」

アクロスがそう叫ぶと、アクロス・リンクペンデュラムのローブ状のアーマーが変形し、ドラゴンの尾を形成する。そしてそれを思いつきぶん回し、アルtailオリジオンの投擲したハンマーを警戒な音と共に打ち返してしまった。

アクロスを殺すべく投擲された超質量の鉄の塊が、そっくりそのままアルtailオリ

ジオンの脅威となつて牙を剥く。

「チツ!! 森羅万象第三楽章・表象展観ツ!!」

舌打ち気味にアルタイルオリジオンがそう叫ぶと、彼女に迫りつつあつたハンマーが消失する。

入れ替わりに、ガングニールオリジオンが弾丸のような速さでアクロスに突撃してきた。

「オマエ、ブツコワスツ!!」

「コイツツ……………!!」

その驚異的な速さに、アクロスは回避するのが精いっぱいだった。

ガングニールオリジオンの突き出した拳は、アクロスの喉元ギリギリをかすめて通過してゆく。これまでの知性の欠片もない無軌道な暴走ではない。人の形をした殺人マシーンとして、的確に殺しにかかってきている。

油断をすれば、そのまま殺される。

ガングニールオリジオンの本気の一撃を回避したアクロスは、より一層気を引き締め、オリジオン達と対峙する。

「ドウワアツ!!」

「そちらっ!!」

ガングニールオリジオンのドロップキックをアクロスは華麗な身のこなしで回避すると、腰に携帯していた銃剣・ツインズバスターを抜き、すれ違いざまにその刃をガングニールオリジオンの胴体に叩き込む。

勿論、この程度で倒れるような相手ではない。ガングニールオリジオンは脇腹に一撃を受けながらも、全くひるむことなくアクロスに襲い掛かってくる。

「てえ〜いつ♡」

「くっ!!」

そこにすかさずアルマイルオリジオンが加勢し、サーベルの二刀流で斬りかかってくる。アクロスは、片手にツインズバスターを持つてアルマイルオリジオンの剣撃をいなし、反対側ではガングニールオリジオンの猛攻を受けて鉄橋の土台に叩きつけられる。が長続きするわけもなく、2人の同時攻撃を受けて鉄橋の土台に叩きつけられる。

「ざーこざーこ♡ ご主人様の邪魔なんか絶対させないんだから♡」

「どうでもいいけど、口調コロコロ変わりすぎじゃねーのお前……それも洗脳の影響だったりするのかな？」

川の浅瀬から起き上がりながら軽口をたたくアクロスに、アルマイルオリジオンは目に見えて不機嫌そうな態度をとる。

そして、手元にマスケット銃を出現させると、その銃口をアクロスに向ける。

これが常人から見たクロックアップ。アクロスは超高速で移動しながらガングニールオリジオンを真上に吹っ飛ばし、アルタイルオリジオンの得物をツインズバスターで両断した。それを現実時間では1秒もかからない内に成し遂げていたのだ。

「ずるいずるいずるいっ!! そっただけクロックアップとかズルいの極みだよっ!!」
「2対1の時点でズルいだろうっ!」

「コヒュッ」

クロックアップによって1秒足らずでアルタイルオリジオンの目の前に到達したアクロスは、駄々をこねるアルタイルオリジオンに悪態をつきながら、飛び膝蹴りを至近距離から叩き込む。

胸部に叩き込まれた鋭い一撃は、一瞬だけアルタイルオリジオンの呼吸を妨害するとともに、彼女の口から血の混じった痰を吐き出させる。

至近距離からの飛び膝蹴りを喰らい、サッカーボールのように飛んでいくアルタイルオリジオン。

そこにすかさず、ガングニールオリジオンが雄たけびを上げながら突撃してくる。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

「ライダーキックッ!!」

が、それを見抜いていたアクロスは、即座にタキオン粒子を右足に充填させると、振

り向きざまの回し蹴りを真正面からぶち込んだ。

骨が折れるような音を発しながら、ライダーキックツを受けたガングニールオリジオンが吹っ飛んでゆく。アルタイルオリジオンとは反対側、無素のクレーターに覆われた川辺に。

「はあっ……はあ……」

足を振りぬいたアクロスは、その体勢のまま息を切らす。池袋の時よりはマシとはいえ、一日に二度戦うのはそこそこに疲れる。

そこにべちやりと、アクロスの真後ろで液体が地面にこぼれるような音がする。

振り返ると、口から血を吐きながら立ち上がるアルタイルオリジオンの姿がそこにはあった。

「ゴフウツ……!!」

「っ……!! もうやめろツ！ これ以上はお前が持たないだろっ!!」

「ご主人様じゃない癖にごちゃごちゃ煩いっ!! わたしはクソ雑魚奴隷メイドのレイラちゃん!! この身この魂が朽ち果てようとも、ご主人様の為に全てを捧げるっ!! それがレイラちゃんの命の使い方なののおおおおおおおおおおおおおおおのおおのおお♡」

「そんな命の使い方、俺は認めねえぞっ……!! たとえ腐り果てた悪人でも、そんな風に

命を投げ出していいわけがないっ!! 償うことも悔いることもできずに使い潰されるなんて、そんな結末には絶対させないっ!!」

《LEGEND LINK!! SET UP!! ネプテューヌツ!!》

ダツ!! と、アクロスとアルティルオリジオンが同時に地面を蹴る。それと同時に、アクロスは腰のホルダーからネプテューヌライドアーツを取り出し、ドライバーに装填しているカブトライドアーツと取り換える。

アクロスがライドアーツを付け替えると、リンクペンデュラムの装甲が解除され、入れ替わりに紫色に発光する黒い装甲がアクロスの全身に装着されてゆく。それと同時に、手に持ったツインズバスター・ソードモードにも新たな刃が追加され、片手剣から大剣に変化する。

リンクネプテューヌ。アクロスが最初に手に入れた絆の結晶だ。

「ぶった切ってあげるううううううウウウウウウツ!! 森羅万象第一ゴハアツ

!!」

アルティルオリジオンは無数のサーベルを自分の周囲に召喚すると、そのうちのひとつを手にとってアクロスを迎え撃とうとする。

が、剣を構えようとした寸前で、彼女はまたしても吐血する。

それが致命的な隙となった。

アクロスはツインズバスターの柄にネプテューヌライドアーツを差し込んで必殺技を発動させると、その柄を強く握りしめる。

紫色の光が刀身に充填され、アクロスの複眼が紫色に発光する。

そして。

目も眩むほどの閃光が、アルタイルオリジオンと GANG ニールオリジオンの視界を塗りつぶした。

ユナイト、暁古城、姫終雪菜、ミットルテ、カワラーナ、ドーナシーク。

彼らは6人がかりでシエスタオリジオンと化したレイナーレに挑んでいながら、戦況は互角だった。

理由は単純。

「さあズタズタのベキベキにしてあげるわッ!! 貫かれなさいッ!!」

「くそっ、この光の矢……滅茶苦茶うざったいぞっ!!」

シエスタオリジオンは墮天使達の攻撃の隙間を縫うように移動しながら、弓を引いて

光の矢を放つ。

射程は無限、何処までも標的を追尾する掟破りの飛び道具。それが一齐に、ズバババババツ!! と空気を無理やり押し開けるような音を立てながら、ヒーローたちを亡き者にせんと襲い掛かる。

「このっ……………おおおおッ!!」

「避けるだけ無駄だ、兎に角軌道を逸らすしかないっ!!」

ユナイトの声がした直後、ギヤリギヤリギヤリッ!! と激しい摩擦音を立てながら、光の矢が雪菜の雪霞狼の穂先を滑ってゆく。

「しぶといわねっ……………いい加減くたばりなさい失敗作どもッ!! バルジ様の期待に沿えなかった欠陥品の癖によくもまあこのうと生きていられるわね!」

「あんなマッド野郎の玩具になるくらいなら、失敗作で結構結構っ!! いい加減聞き飽きたし、さっさとくたばって正気にもどれっのっ!!」

「カワラーナ……………いいわ、まず貴女からなぶ弑してあげる」

バシユンツ、と放たれたカワラーナの魔力弾を最小の動作で回避しながら、シエスタオリジオンはそう口にした。

瞬間、場の空気が一気に変貌する。

まるでここからが本気だとも言わんばかりに。

「あんたってやつは……ふざけるのも大概n」

カワラーナの言葉はそこで途切れる。

理由は単純明快。

シユルルルルルンツと。

眼にもとまらぬ速度で放たれた光の矢が、ロープのようにカワラーナの首に巻き付いていたからだ。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「かつ………はっ………!!」

何が起きたのかわからない、といった表情を浮かべながら、光の矢によって

彼女の首元には、長く伸びた光の矢が巻き付いている。その有様はもはや矢というよりも光のロープと行った方が適切のように見える。

「おいカワラーナツ!!」

ドーナシークが慌てて駆け寄ろうとするが、

「邪魔」

「がっ………!!」

次の瞬間には、彼の首にも同様に光のロープが絡みついていた。

シエスタオリジオンは首つり状態となったふたつを乱雑に振り回し、遠心力をも利用して2人を絞殺せんとする。

このままだと2人とも仲良く首吊り死体は確定。しかし単純な物理攻撃では、あの光のロープを破壊することができない。

「ならばもつと破壊力のある一撃を食らわせるまでだっ!!」

「そんなものがあるのか!?!」

古城の言葉にユナイトは無言でうなずくと、折りたたんだ状態で背負っていた槍型武装・ユニオンジャルグを手取る。

そしてそれを2つに分割し、腰に携帯していたフュージョンマグナムとガチャガチャと組み合わせ、長い銃身を持つライフルへと変形させる。これこそがユナイトの奥の手。槍と拳銃を合体させたライフル・アブゾーブスナイプの完成だ。

「槍と拳銃が合体した……………!!」

「そのままぶっ放すっ!!」

ユナイトが銃口を空に向けてと同時に、ガシャンガシャン!! とアブゾーブスナイプの砲身の表面が変形し三脚となる。シルエットだけ見れば野外に置かれた天体望遠鏡だが、実際には滅茶苦茶物騒なシロモノが、この場に出現していた。

そして、スコープを覗き込みながらユナイトがアブゾーブスナイプの引き金を引く。

ズバンッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
 と地面を激しく揺らしながら、二発の弾丸が発射される。

《EXTEND CROSS BURST!!》

二発の弾丸がカワラーナとドーナシークを吊っている2本のロープに触れた瞬間、その弾丸達は極小のブラックホールに変化し、ロープを虚空へと引きずり込む形で切断してゆく。

極小といえどもその吸引力、それによって生じた突風はすさまじいものであり、シエスタオ리지オンもユナイトも、戦闘に参加していた全員（十遠くからじつと観戦していたGUMI）を空中に巻き上げる形でその場から吹き飛ばしてしまう。

「おおおおおおおおおおおっ!?」
 「ちよおおおおおおおっ!?」

「いくら助けるためとは言ってもブラックホールはやりすぎじゃないっすかあああああああああああああああああ
 ああッ!!」

「手持ちではこれが最善策だったんだ、許せ」

「あのさつきから気配消しながら観戦してただけのか弱い一般ピーポーの私を巻き込まないでくださいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッ!!」

そして飛んで飛ばされ、一行は住宅街の端にひっそりとくつつくように存在していた

廃工場まで吹っ飛んでいく。なんだか神の意志的なものが介在しているような特撮ワープロ展開のような気がするが、あのまま住宅街のど真ん中の公園で戦い続けるよりは、周囲の被害に気を配る必要性がないぶんやりやすい。

ドサドサドサドサツ!! と人間の耐久力をガン無視した高さから落下していくユナイト達。しかし、ユナイトとシエスタオリジオンは自前の耐久性で、墮天使達は黒い翼で、古城・雪菜・GUMIの3人は墮天使達たちに抱えられる形で、それぞれ転落死を回避する。

「大丈夫か、お前ら」

「やりすぎよっ……まあおかげで助かったけど」

ユナイトの言葉に、首に巻き付いたまま残った光のロープを引きちぎりながらそう答えるカワラーナ。

彼らの目の前には、血を吐きながらよろよろと立ち上がるシエスタオリジオン。

「ふざけるんじゃないわよっ!! 全員纏めてワイルドに串刺しにしてやるっ!!」

「先輩、出番ですよっ!!」

シエスタオリジオンが大量の光の矢を放つと同時に、古城が無言で前に出る。

その周囲には、荒れ狂うほどの濃密な魔力の奔流が生まれていた。

「疾く在れ、九番目の眷獣、アルナスル・ミニウム双角の深緋ッ!!」

「皆さん、先輩から離れてくださいっ!!」

雪菜に言われるがまま、一斉に古城から距離をとるユナイト達。

古城が叫ぶと同時に、彼の背後に緋色の双角獣バイコーンが出現し、その双角を激しく振動させる。

自身の膨大な魔力を高周波の振動に変換し、周囲のあらゆる物体をずたずたにしてしまふ破壊の化身。最初に顕現させた“獅子の黄金”とはまた違った方向性の破壊兵器が、ここに顕現していた。

双角獣の角から発せられる高周波音波は、うねりながら飛来してきた光の矢をずたずたに切り裂いてしまふ。規模が尋常ではないとはいえ、ただの物理現象が通用したあたり、どうやらあの光の矢にはちゃんとした物理的実態が存在するようだ。

そうして光の矢を粉碎した振動は、そのまま周囲の地面ごとシエスタオリジオンを蹂躪する。神代の兵器すら粉微塵にしてしまふ破壊の権化が、彼女の全身を貫いてゆく。

「あ、あれ、レイナーレさん、死んじやわないっすよね……」

「先輩ストツプっ!! これ以上眷獣を暴れさせたらあの人死んじやいますッ!!」

「いややらせたのお前だからな!!」

流石にやりすぎたと判断した古城がすぐに眷獣を非実体化させたことで、シエスタオリジオンを襲う暴力は中断された。

高所から落とされるわ超音波で全身ズタズタに切り裂かれるわで、シエスタオリジオンは既にボロボロ になっていた。

しかし彼女は諦めない。自らの命よりもバルジを優先するようにマインドコントロールされているシエスタオリジオンは、満身創痕の身体に鞭打ちながらなおもユナイト達との戦いを続けようとする。

「なめ、やがってええ……………!! 転生者でもない雑魚の分際でバルジ様の邪魔を……………!!」

「トドメだ、一気に全てを叩き込むツ!!」

「なんだか虐めをしているよう気分だが……………すまん、これもお前を救うためだ!」

ザツ、と。

ユナイト達が横一列に並ぶ。

彼らの思いはひとつ。これ以上弄ばれる前に、彼女を救う。

「これで終わらせますツ!!」

「ああ、こんな胸糞悪い遊びは終わりだ!」

「やってやるつすよ、ここまで来たからにはっ!!」

「レイナーレには悪いけど、全力でぶっ飛ばすわよ!」

”レダルス・アウルム獅子の黄金” ツ!!」

「だから俺、こういう共闘は苦手なんだって……」

レイナーレの生存を不安視する者、その不安を払拭しようとする者、やらかしたのではないかと不安になる者と、様々な反応を見せる面々。

しばらくして、土煙が晴れる。

そこにいたのは、ボロボロになって地面に横たわるレイナーレだった。

それを目にしたドーナシークが慌てて駆け寄り、レイナーレの生死を確認する。

「……………息はしている、死んではないね」

「でも、これだけボロボロにしちゃったんすから、きつと目が覚めたらブチ切れつすよね」

「それでもいいよ。死んでいたらそれすら叶わないんだからさ」

ミットルテの言葉に、GUMIはそう答える。

ともかく、彼らの当初の目的は達せられた。あとは目覚めたレイナーレが正気を取り戻していればミッションはコンプリートだ。

「……………最後の最後で何い感じに台詞取ってるんだお前」

「いやそうしないとわたし存在感マイナスになっちゃうからね!!」

一人の少女を救うための戦い。

その最後は、なんとも気の抜けた幕引きだった。

時間は、ユナイト達の加勢する直前に遡る。

行江姉妹を救うべく、立ちはだかるリイラと交戦を始めた唯。

これまで何度か相まみえた2人だが、実際のところ、池袋の時は力が出せずに逃げ惑うだけだったり、かと思えば完全な暴走状態にあつたりと、イーブンの勝負は一度もできていない。そして今も、単純な人数差で言うならば全くイーブンな状態ではない。唯一人に対して、リイラとオリジオンと化した行江姉妹。1対3である。

それに対して不平を言ったところでリイラは耳を貸すような奴ではないし、行江姉妹に関しては完全に理性を失つてるので言葉すら通じない。だから唯は、考えるのをやめていた。

全員ぶっ倒して、行江姉妹を助ける。

それこそが最適解だと、唯は知っている。

「邪魔ツ……するなあツ!!」

唯は一步前に踏み出すと同時に、握り拳を前に突き出した。

つい先ほどデザイアモードと名付けたその力。これで何ができて、何処までやれるのかはいまだ未知数。ならばここは、流れに身を任せるしかない。人間、ある程度割り切りが肝心なのだ。

「えーつと、なんかすさまじいインパクトツ!!」
「ワ?」

拳を突き出しながら叫ぶ唯。

それと同時に、凄まじい衝撃波が発生し、技名に困惑する素振りを見せたラーマオリジオンを宙に舞いあげる。

本当ならばかっこいい必殺技名とかを叫びたかったが、残念なことに唯は馬鹿なので、即興でかっこいい技名を口にするのができなかった。残念!

そして唯自身も、まさかパンチ一発でこんなことになるとは思わなかったので、自分の拳をまじまじと見つめながら困惑する。

「なんか出た……」

が、そんな余裕はない。

いつの間にか、リイラが唯の真上に飛来していた。

「いつからここにギャグ空間にでもなったのかしら、せつかくのダイナーショーなんだから真面目にやってくれない? メインディッシュがそれじゃ食欲も失せるっても

のよ」

「っ!!」

「さあ、おたのしみはこれからよ下ごしらえの開始よ」

ブオンツ!! と大きな音を立てて、レイラの背中の羽根が振動する。

たったそれだけでいくつもの真空の刃が発生し、一斉に唯を切り刻まんと襲い掛かる。

「どうわああああああああつ!!」

唯は情けない声をあげながら真横に転がり、真空の刃を回避する。標的から外れたそれらは、唯の背後にあったフェンスをずたずたに切り裂いてゆく。

その情けない姿を、レイラは空から啜う。

「その姿はただのコスプレ? なら大したことないわね」

「言ってくれるなあ!」

「口だけは達人なようだけど、わたし以外のこと忘れてない?」

レイラがそう言った直後、唯の鼻先をかすめる形で真横から炎の矢が飛んできた。

それがシータオリジオン——行江飛鳥ゆくえあすかのものだということに唯が気づいたのと、シー

タオリジオンが飛び掛かってきたのは同時だった。

「いおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!」

奇声を上げながら上体を思いつきり逸らし、飛び掛かってきたシータオリジオンを素通りさせる。腰の骨がバキバキになるような回避手段を選んだことを軽く後悔しながら、唯は体勢を整える。

「いつてえ……膝曲げるべきだったかも！」

「だーかーらあーつ、遊びでやってんじゃないのよオツ!!」

唯のふざけた態度が気に食わないリイラは、再び羽根を強く振動させて真空の刃を飛ばす。

「同じ手は喰らわないっ!!」

唯は威勢よく啖呵を切りながら、右腕を最大速度で降り抜く。

すると、振りぬいた右腕から衝撃波が放たれ、リイラの真空の刃と正面衝突を起こし、対消滅する。

「……………ずるくない？」

「私だつて好きでやってるんじゃないんだいっ!! そもそもなんで狙われてるのかわからないんだよこつちは！」

唯は空を飛びリイラに向かってがむしやらに腕を振るい、やたらめつたらと衝撃波を飛ばしまくる。リイラはなんだか大変不服なようだが、唯は望んでこんな力を手に入れたわけではないし、そもそもなんでこんな芸当ができていいのか理解できてすらいな

そのままシータオリジオンの攻撃を押し返そうとする唯だが、そうする暇もなく、シータオリジオンの背後から槍を構えたラーマオリジオンが飛び掛かってくる。

「ッ!!」

唯は咄嗟にシータオリジオンを突き飛ばしながら一歩下がると、眼前に槍を振り下ろしてきたラーマオリジオンの鼻頭を思いつきりぶん殴った。肉の焼けるような音と熱さが生じるが、唯は歯を食いしばって必死にこらえる。

「2人ともっ……バルジなんかには操られていいのっ!! 全てを奪った相手に従って使い潰される、そんな終わり方でいいのっ!!」

「ダアアアアアアアアアアアアッ!!」

「ドオオオオオオオオオオオッ!!」

唯の呼びかけに対して返ってくるのは、自我持ち性もない雄たけびのみ。こうなれば力づくでも正気に戻すしか方法がない。

意を決した唯は、身を屈めてラーマオリジオンの槍の薙ぎ払いを避けると、足払いで彼女を転倒させ、ついでに槍を奪い取る。

そして、その槍でラーマオリジオンを刺突する。

「ヴォウッ!!」

「たあっ!!」

手を纏めてズタズタに切り裂いてゆく。

「これが私のつ、デザイアモードになった諸星唯サマの実力よおおおおおおおおお
おおおおお!!」

ダンッ!!! と勢いよく足を地面におろしながら叫ぶ唯。その顔は既に、一人のヒーローの風格を漂わせていた。

オリジオン達は大ダメージを受けた上に触手は全滅。そんな状況に追い込まれたりイラは当然ながら不機嫌そうな顔になる。

「……………使えないヤツ」

「へっ、」

「でも、今の一撃は悪手だったと思うわよ」

「?」

リイラが指さす先。

そこには――

「あーあーあーあーツ!! こんなになるまでやられちゃってさあ!! 折角俺様が色々といじくってやったつてのに、なんでここまで惨敗しちゃうかなあああああああああああ
あああああああ☒」

「なんつ……………だ!!」

ラーマオリジオンとシータオリジオンが吹っ飛んだ先では、リュウガ灰司とエボルトオリジオンル・フェーズ2が激戦を繰り広げていた。

互いに激しく損耗した中、両者の間に滑り込むようにして吹っ飛んできたオリジオン達を目にしたエボルトオリジオンは、凄まじくハイテンションな罵声を彼女達に浴びせる。

が、次の瞬間。

エボルトオリジオンはにつこりと笑いながら、倒れているラーマオリジオンとシータオリジオンの額に手を当てる。

「だけど、俺様は優しいからね。こうなったら、俺様の中に取り込んで死ぬまで使い潰してやるよ」

「お前……………何をする気だ!!」

《ADVENT》

エボルトオリジオンが何かをする前に止めるべく、リュウガはドラグブロッカーを呼

び寄せて攻撃を仕掛けようとする。

しかし、一步遅かった。

「——フェーズ3・吸収」

瞬間、エボルトオリジオンの両腕が著しく肥大し、ラーマオリジオンとシータオリジオンの身体を瞬く間に呑み込んでいつてしまった。

両腕から始まった体組織の肥大はあつという間にエボルトオリジオンの全身に行き渡り、彼の身体はすさまじい速度で変化してゆく。

全身から漆黒の炎を噴き出し、背中にはドラゴンの翼のような器官が生成される。極めつけに両肩には、苦悶の表情を浮かべたラーマオリジオンとシータオリジオンの頭部が生えてしまっていた。

エボルトオリジオン・フェーズ3。

全てを食いものにしてしまう最低最悪の厄災は、またしても進化を果たしてしまつた。

「ぎ、かかつてこいよ」

得意げに挑発するエボルトオリジオン。

常人ならば、既に心が折れていたかもしれない。しかしリュウガ——灰司は折れない。復讐しか残されていない彼には、折れるという選択肢ははじめから持ち合わせては

いないのだ。

「関係ねえよっ………テメエがいくら進化しようが関係ねえ！ 俺の手で殺してやる！」

「だから無理だっつってんだろオがッ！！」

いくつもの激突が繰り返された今宵の決戦も、終幕を迎え始めていた。

これが最後の激突。

最終戦が、はじまる。

第49話 因縁決着（ requiem for the Avenger ）

ラーマオリジオンとシータオリジオンを吸収し、フェーズ3にまで到達したエボルトオリジオン。

その進化は、アクロス達も目にしていた。

「なん……………だと」

「飛鳥ちゃん達を取り込んだ……………!!」

各々の戦いを終え、今宵の動乱の始発点である児童公園に戻ってきたアクロス達は、その光景を前に絶望していた。

救うべき相手である行江姉妹を吸収したどころか、更なる進化を果たしてしまったエボルトオリジオンを前に、勝利のビジョンがまるで見えない。どうやったらこの厄災を止めることができるのだろうか。

ますます人間からかけ離れた姿となったエボルトオリジオンは、半狂乱になりながら叫び散らす。

「俺様は天才だア！ この俺様が負けるはずがないっ!! この世界は余すべく俺様の玩具になってりやあいんだよオ!!」

エボルトオリジオン——バルジは叫ぶ。

全てを見下し続けてきた彼にとつて、灰司を瞬殺できずにここまでの激戦を繰り広げる羽目になっていること自体が、耐えがたいほどに不快だった。そのストレスと戦闘によるダメージで、バルジの冷静さは失われようとしている。それは誰の目から見ても明らかだった。

リュウガ——灰司は、叫び散らすエボルトオリジオンを前に、冷静に剣を構える。因縁に終止符を打つために。

「テメエのクソみてえな持論は聞き飽きたんだよ、とつとと死ねっ!!」

剣を構え、突撃する。
が、

「——ガハッ!!」

突如として、リュウガの仮面の内側が赤く染まった。

灰司が吐血したのだ。

「……………ええ?」

突然動きを止めたリュウガを目にしたアクロス達が困惑する。

そこから数秒ほど遅れて、リュウガの手から剣が零れ落ち、同時に膝をつきながらリュウガの変身が解除された。

露になった灰司の顔は、不自然なまでに青ざめていた。全身がガタガタと震え、目や口からはおびただしい量の流血が生じている。それは戦いで負傷したただとか古傷が開いたとか、そう言った類のものではない。

これではまるで先ほどのレイラと同じだ。

アクロスがそう思った直後、エボルトオリジオンが口を開いた。

「なあ、知ってるか？ 転生者がひとつしか転生特典を持たない理由を」

「なんだ……いきなり………？？」

突然、わけわからないことを言い始めたエボルトオリジオンに、誰もが困惑する。

だがエボルトオリジオンは周囲の反応に全く意を介すことなく、ベラベラと頼んでもいない説明を始める。

「転生特典つてのは、平たく言うと、扱う資格のない力を無理矢理使うためのチートなんだよ。大抵の力つてのは、持つべき人間、振るう資格を持つ者が世界に定められている。俺様達が転生者に与える特典つてのはな、その摂理を捻じ曲げて力を行使させているんだ。そんな力を複数も持つてみる。ひとつならまだ耐えられるだろうが、ふたつ、みつ……数が増えれば、いずれお前の身体は耐えられなくなる」

「……………何を言ってるんだ？」

「積載オーバーだつて言ってるんだよ。サイガ・ソーサラー・ダークゴースト・リュウガ・メタルビルド・デモンズ……………よくもまあそんだけのライダーの力を行使できたもんだ。大方、俺様を殺すためにA.M.O.R.Eの長官にでも貰ったんだろうが、限界が来ちまつたつてわけだ」

「……………そう、なのか？」

ユナイトの変身を解いた裁場が、灰司に駆け寄りながら問いかける。

灰司は沈黙を貫く。

「まさか……………そうなのか？ 無束灰司、君はこれを知っていたから……………自分の身体が長くは持たないと知っていたから、復讐にこだわっていた……………!! そうなんだな!!」

「だつたらどうした……………言つたはずだ、俺には復讐コレしかないってなア……………!!」

灰司はそう吐き捨てる、裁場を突き飛ばしながらよろよろと立ち上がる。

その顔は、生気が微塵も感じられないほどに青ざめており、目は異様なまでに充血し、耳からは断続的に血が噴き出して彼の白い髪を赤く染めている。それほどまでに傷つきながらも、灰司は立ち上がる。復讐を果たすべく、目の前の怨敵に挑もうとする。

転生者達を倒す力を得るべく大量のダークライダーの力を獲得した灰司だが、その強

大過ぎる力は、着実に灰司の身体を蝕んでいた。なんせ彼が変身するライダーというのは、怪人にしか変身できないなかったり寿命を代償としてきたりと、どいつもこいつも危険極まりないモノばかりなのだ。そんな力を無理矢理扱おうとするのだから、その負担は尋常ではない。

だが、灰司はそれでも構わなかった。復讐を遂げられるのなら、その後がどうなるうが知ったことではない。

もとより復讐の後なんてないのだから。

「来いッ、ダークキバットっ!!」

灰司は天高く右手を掲げ、口から血を溢しながら叫ぶ。

すると、何処からともなく黒い蝙蝠——ダークキバットが飛来し、灰司の手に噛みつく。

《ガブリッ》

「変し——」

「させるかよバーカッ!!」

が、エポルトオリジオンはすかさず手のひらから光線を発射し、狙い撃ちでダークキバットを破壊してしまった。

一撃で木っ端微塵になったダークキバットの欠片が周囲に飛び散り、灰司のポロポロ

の身体を吹っ飛ばしてゆく。

「があああああああああああつ!!」

「灰司ツ!!」

アクロスが反応するよりも早く、エボルトオリジオンは灰司の前に移動すると、そのまま彼の首をつかみ上げて絞め始める。

「がつ……………ぐお……………!!」

「何ともまあ……………つまらない幕引きだな。さんざんデカい口叩いた結果がこれかよ、マジ白けるわ」

「このつ……………灰司を離せツ！」

首を絞められる灰司を黙って見てられなくなったアクロスが、咄嗟に助けに入ろうとするが、エボルトオリジオンは光線を放ってアクロスを牽制する。

「ヒーローってのはほんと空気読めねーんだな。邪魔すんじゃねーよカス」

「するに決まってるだろ……………黙って見ているわけにはいかねーだろ……………それが仮面ライダーだつ!!」

「だから邪魔するなって言ってるんだろーが頭悪いのか脳味噌空っぽなのかあ☒あ!!」

牽制してもなおも介入しようとしたアクロスを鬱陶しく思ったエボルトオリジオン

は、アクロスを思いきり殴り飛ばして変身解除に追い込む。

アクロスの変身が解けた瞬は、まるで投げられたボールのように、勢いよく地面をころころと転がってゆく。

「ギャラリーが邪魔だな……………いっちょ全員吹っ飛ばしてやるか。ふんっ！」

そして、アクロス以外も鬱陶しく感じたエボルトオリジオンは、軽く全身に力を籠める。

すると、エボルトオリジオンの身体からどす黒い衝撃波のようなものが周囲に向かって解き放たれ、裁場達を容赦なく襲った。

古城も雪菜も墮天使達もGUMIも裁場も、衝撃波をモロにくらった面々は、声を発する暇もなくその意識を途絶させる。唯一、殴り倒されて衝撃波が直撃しなかった瞬だけが、辛うじて意識を保って地面に這いつくばっていた。

敵も味方もほとんどが倒れ伏した中、エボルトオリジオンは灰司の首を絞めながら、倒れ伏した面々を罵倒する。

「弱い弱い弱い弱いッ!! まさかこんな雑魚共にレイラも GANG ニールも負けたつての
かよ!! あーあ、マジで失敗作だな!」

「っ……………さつきから好き放題言いやがって!!」

「あ、お前まだ動けんの? 何その生命力気持ち悪っ、前世ゴキブリか何かだったりするん

の？」

立ち上がろうとする瞬間に露骨に嫌悪感を示すエボルトオリジオン。怪人体であるが故に表情が読み取りづらいが、きつとすさまじく下劣な表情をしているのだろう。

瞬は立ち上がって灰司を助けようとするが、先ほどの衝撃波の余波を受けたせい、身体がしびれて十分に力が入らず、立っているのが精いっぱいだ。

と、その時。

首を絞められていた灰司が声を発した。

「ほざい……………てる」

「あ？」

「俺はまだ負けてねえぞっ…………勝ち誇った気になりやがって……………」

「だーかーらあーっ、もうお前は負けてんの！　っーか俺様に勝とうと思った時点で身の程知らずだよ。首絞めてるんだからさっさと汚物まき散らして死ねよ。それともなんだ、首引きちぎった方がいい？」

灰司は自らを絞め殺そうとしているエボルトオリジオンの腕を掴むと、引き剥がそうともかく。しかし、ダークライダーの力の負荷と戦闘で負った傷、そして首を絞められていることによる酸欠でまともな力が入らない。

今もなお、エボルトオリジオンの首を絞める力は強くなっている。このままでは窒息

死の前に首が潰れそうだ。

ミシミシと危険な音を発する灰司の首。しかし、灰司にも瞬にも、どうすることができない。

圧倒的なまでのデッドエンド——のはずだった。

「……………は？」

その異変は、突然だった。

灰司の首を握りつぶす勢いで絞めていたエボルトオリジオンだったが、ふいに、何かが身体の中に入ってくるかのような感覚をおぼえ、その手を緩める。

エボルトオリジオンの手が緩んだことで、絞殺寸前だった灰司はその場に投げ出され、激しく咳き込む。灰司の首元は、尋常じゃない力で首を絞められ続けたことにより、首の皮膚が擦り切れて激しく出血しており、見るに堪えない程に赤くなっていた。

「げほっ……………げほっ……………!!」

「灰司!!」

「……………なに、しやがった？」

ドクンと、エボルトオリジオンの頭が胎動する。

灰司に駆け寄る瞬の存在が全く気にならなくなるレベルで、エボルトオリジオンは自身の真後ろに注目していた。

オリジン状態の変身を解除しながら、バルジは後ろを振り向く。

先程から身体の様子がおかしい。原因不明の耐えがたい吐き気と眩暈が全身を襲っており、気を抜くとその場に倒れてしまいそうになる。まるで酷い風邪でも引いたかのような気分だ。

「……………何をしやがったっていつてんだよ」

「……………」

ゆっくりとバルジが振り返った先には。

酷く冷たいまなざしを向けるレドの姿があった。

エボルトオリジンの放った衝撃波は、当然ながら公園の端に居た唯とリイラにも平等に襲い掛かっていた。

直撃すればたちまちに意識が途絶するのは確実。

——のはずだった。

「はあっ!!」

「そーれっ☆」

衝撃波が到達すると同時に、唯とリイラは衝撃波に向かって片腕を突き出す。

すると、2人に牙を剥こうとしていたどす黒い衝撃波が、いともあっけなく霧散してしまった。もちろん、2人には全くダメージはない。

「へー、思ってた以上に順調に覚醒していつてるのね。僥倖僥倖」
ぎょうじょうぎょうじょう

「いやー、適当に腕突き出してみたらできちゃった……私だんだんと化け物になっていつてない？」

リイラから感嘆の声を浴びせられながら、衝撃波にむかって突き出した腕を見つめる唯。その額には、冷や汗のようなものが浮かんでいる。

願能装着^{デザイアモード} 便宜上そう名付けたその力がいったいどれほどのものなのかを、唯はいまだに把握できていない。腕を振るうだけで真空の刃を飛ばせたり頑丈なバリアを張れたり、もうめちやくちやだ。おまけにリイラの口振りからして、これ以上の”先”がある模様。

(どこまで……この力はどこまでいけるの……!!)

限界の分からない力。それを振るうことが酷く恐ろしい。

これまで対峙してきた転生者達は、どいつもこいつも強大な力を嬉々として振るって来たように見えた。

だが唯は、彼らのようにはなれない。

彼らのように、訳の分からずに力を臆面もなく震えるほどに狂うことはできない。

「……………」

「いつまで自分の手のひらとにらめっこしているつもり？ そんなに死にたいなら死ね

ば？」

「!!」

が、唯には考えている場合はない。

リイラが苛立ち気味に放った真空刃が、唯を切り刻まんと迫りくる。

「その手はもう喰らわないッ!!」

唯は腕を振るって衝撃波を生み出すと、リイラの衝撃波と相殺させる。

それを見たリイラは舌打ちをしながら、発生した土ぼこりと突風を真正面から突っ込んで唯に肉薄しようとする。

「料理の癖に抵抗しないでよ、踊り食いは趣味じゃないつてのに」

「そもそも食人の時点で十分趣味悪いよッ!!」

「いーけないんだー、他人の趣味にケチつけるなんて駄目なんだーっ!!」

「どわわわわわわわあっ!!」

中々倒れない唯に苛立ちを隠せなくなってきたリイラは、先の鋭い触手を何本も背中から伸ばし、唯に突き刺そうとする。が、それすらも唯に危なげなく避けられ、余

計にフラストレーションをためる結果となる。

地面から突き出した触手は唯にパンチ一発で粉砕され、羽根から飛ばした真空刃は相殺され、先ほどからリイラの攻撃は何一つ通っていない。しかし、唯のほうもまた、攻撃を受け流す以上の行動に踏み切ることができない。

完全なる千日手。

両者の戦いを一言で表すならば、それが一番ふさわしいだろう。

「面白くない……っ、ついこの間覚醒したばかりの癖にちよこまかと逃げちゃってさあ……！　ほんと面白くないんだけどッ！！」

「こっちは貴女の相手をしている場合じゃないっての！！　早くバルジの野郎をぶっ倒して飛鳥ちゃん達を助けるんだ！！」

「っ……………」

唯のパンチで十数本目の触手が破壊され、その破片がリイラの頬に付着する。

その瞬間、リイラの中で何かのスイッチが切れた。

「……………もう帰る」

「えっ！！」

唐突にリイラはそう言うと、攻撃の手を止める。

唯に迫りつつあった触手は一斉に萎びてその場にへたり込むと、茶色く変色して崩れ

始める。そしてリイラは唯に背を向けると、何処かへと飛び去ってしまった。唯の言葉すら完全に無視して、リイラの姿が夜空へと消えてゆく。

唯は呆気にとられたような顔をして、枯れゆく触手の群れの中からそれを見つめていた。

「逃げ……いや、あれは多分……飽きた……のかな？」

唯はそう呟きながら、去り行くリイラの背中を見つめる。

今のリイラの撤退には何か作戦があつたとか、戦いを辞めざるを得ない事情があつたとか、そういう類のものは一切ない。唯でもそれは容易に理解できた。

彼女は飽きたのだ。いや、見下していた唯からの予想以上の反撃を受け、興がそがれたと言ふべきか。ともかく、リイラの気まぐれによつて唯は生き延びた。

しかし、それを喜んでいる場合ではない。

「つ、こうしている場合じゃない！ 行かないとツ!!」

まだ最大の敵が残っている。

唯は即座に踵を返すと、未だ健在のバルジの元へ、そして彼と戦っている仲間たちの元へと走り出した。

そして、場面は戻る。

「レド、お前……何をしたんだ……!!」

いつの間にかバルジの背後に立っていたレド。

瞬は、何がどうなっているのか理解できなかった。

同じギフトメイカーであるはずの両者が、まるで敵対しているかのような雰囲気になっっているのだから当然だろう。

「おい、お前何を……いや、何を入れた!!」

柄にもなく取り乱すバルジに、レドは冷ややかな目を向け続ける。

「返してやったんだよ、お前の落とし物を」

「落とし物……だと?」

「ああ。お前が池袋で転生者狩りに負けて落としたいガリマのDISC。そいつを再びお前の体内にぶち込んだんだ」

瞬にはレドの言っている内容が理解できなかったが、バルジの驚いたような表情を見る限り、それはおそらく彼にとってはマズいことなのだろう。

バルジはどこか焦ったような様子でレドに掴みかかる。そこに、先ほどまで満ちあふれていた余裕は微塵も感じられない。

「ふざけるんじゃないやねえぞ……………お前、何をしたのかわかってんのか!!」

「わかっているに決まっているだろ。それでも僕はこうするよ。バルジ、お前の悪趣味っぷりに付き合わされるのはうんざりだ。だからこうした」

「ふざ……………けんじゃねえ……………つ!! ふざけんじゃねえぞおおおおおおお
おおおおおとおおとおお!!」

予想だにしなかった仲間の裏切りに、バルジは我を忘れて激昂する。そうして怒りのままにレドを殴りつけようと手を伸ばしたその時だった。

ブクブクブクブクツ!! と、バルジの右腕の表皮が、まるで水面のように泡を生み出し始めた。

「……………あ」

バルジが声をあげた時だった。

ボゴボゴボゴボゴッ!! と。激しい音を立てながらバルジの身体が膨張しはじめた。

気泡を発生させていた右腕を起点に、バルジの細い身体がみるみるうちに膨れ上がってゆく。

風船に空気を入れて膨らませているとか、そんな生易しい比喻ではとてもではないが表現できないほどの悍ましい速度で、バルジの身体は膨張し、人間としての形を喪失してゆく。

瞬も唯も、いつの間にか意識を取り戻していた裁場も古城も雪菜も、その場にいた全員が動きを止め、その悍ましさに釘付けとなっていた。

「不おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ぐうっ……………!! 煩っ……………」

肉の塊と化したバルジから発せられる雄たけびは、アクロス達の全身をくまなく揺さぶり、周囲の建物の窓ガラスを根こそぎ破壊してゆく。

ただ一人、これを引き起こしたレドだけが、この異変の渦中で満面の笑みを浮かべていた。

「なっ……………これは一体っ……………!!」

「見ろよ仮面ライダー! これが転生特典のオーバードーズってやつだッ!!」
「それってバルジがさつき言ってた……………まさか!!」

レドの言葉を聞いた瞬は、先ほどのバルジの言葉を思い返す。

そう。

転生特典の多重投与は、人体を蝕む。

先程嬉々としてバルジが説明していた現象が、今まさに彼の身に起こっていた。

「お前、仲間じゃなかったのかよっ!!」

「いくら同僚といつても限度つてもんがあるんだつての。聞きたくもないスプラッター
トークを聞かされ、見たくもないしやりたくもない殺戮劇に付き合わされ……ホント、
人の心が分からない奴とか味方にはいらなんだよね」

レドが愚痴交じりに弁明している今も、彼の背後ではバルジだった肉塊が膨張を続け
ている。

そしてそれは、血や脂を噴き出しながら瞬達の方へとゆつくりと近づき始める。まる
で何かを求めるかのように、ブクブクに膨れ上がって原型を失った腕(?)を伸ばして
くる。

その先には、満身創痍で動くこともままならない灰司。

意識が飛んでいたせいで状況が理解できていない古城達だったが、それでもマズいと
いうことだけは分かっていた。

「なんかやばいって……おい、これ何とかした方がいいんじゃないっ!!」

「無東灰司っ!! 早くそこから逃げるんだっ! 何かマズいことになっ……!」

必死に灰司に呼びかける裁場だが、ふいに彼の傷口が痛み出し、その声途切れる。
本当ならば助けに行きたいが、バルジの衝撃波をモロにくらったダメージが大きすぎ
て、裁場自身もその場から動けない。

無東灰司は完全に、肉塊に吞まれてしまっていた。

「……………(´)は。」

無東灰司が目を覚ますと、辺り一面が脈打つ血肉に覆われていた。

地面はブヨブヨと不快な踏み心地だし、壁や床のあちこちから体液らしきものが噴き出している。そしてなにより生臭い。不快で仕方ない。

傷だらけの身体を無理矢理動かして前進する。

理由は分からないが、そうしなければならぬという強い確信があった。

「……………やっぱり、か」

数メートルほど前に進んだところで、灰司はそう呟いた。

彼の目の前には、胸から下が肉壁に埋まった男——バルジがいた。

「テメエ……わざわざここまで来たつてのか……？ ヒーローつてのは相当な死にたがりらしいな」

「お前が俺を取り込んだからここに來れたんだ。わざわざ呼んでくれてありがとな、クソ野郎」

この期に及んでもなお神経を逆撫するような言動をやめないバルジだが、その顔は憔悴しきつている。転生特典の多重投与オーバードーズによる暴走が、彼の身体を今もお弱らせ続けているのだ。

その様子を見て、灰司は確信した。

——今ならば、殺せる。

長きにわたる因縁に蹴りをつけることができる。

しかし、その前にやらなければならないことがある。

「……………いつまでこっち見てやがんだお前ら、鬱陶しいんだよ」

「……………あなたは？」

「灰司、さん？」

灰司が見上げた先には、バルジと同じように壁に埋め込まれたとある少女たちの姿があった。

行江飛鳥と行江薫。バルジに人生を狂わされた純然たる被害者たちが、そこにいた。

彼女達は、まるで一身に救いを求めるかのような目付きで灰司を見つめてくる。灰司はそれを、酷く煩わしく感じていた。

「おねがい、します。たすけて、ください……………わたしたちを、たすけて……………くだ

さい」

「……………」

弱弱しく助けを懇願する飛鳥の声を、灰司は無言で聞いていた。

——灰司の答えは、決まっていた。

「ドウラアツ!!」

灰司は持てる力を振り絞って、バルジ達の埋まっている壁を殴りつけた。

ブヨンとした不快な弾力が、拳伝に灰司に伝わってくる。酷く不快だったが、それを掻き消すかのように!!!灰司は力と声を振り絞って拳を肉壁に押し当てる。

すると。

ボゴボゴボゴボゴツ!!!!!! と一面の肉壁が激しく振動したかと思えば、激しく煙を噴き

出しながらドロドロに溶け始めた。

「あああああああああ!!!!あああ!!!!」

「おおおおおおお!!!!」

ドロドロに溶けた肉壁の濁流に流されながら、飛鳥と薫が肉の床まで落ちてくる。彼女達を縛る肉塊はもう存在せず、完全に自由を取り戻していた。

そして彼女達が解放されたということは勿論、バルジも自由を取り戻している。ドロドロに溶けた肉塊から這いずり上がるかのように、バルジが姿を現す。しかし、バルジは見るからに消耗しきっていた。おそらく立っているのもやっとなほどのだろう。

「灰司さん……」

「うるせえ、黙ってる」

灰司は飛鳥に冷たくそう言い放つと、行江姉妹の身体を掴んで近くの壁に強く押し当たった。

ぎゅうぎゅうと肉壁に押し込まれた飛鳥と薫は、何が起きているのかわからないといったような顔で灰司のを見つめている。

その身体は徐々に肉塊に沈み込み始めている。しかし、それは2人をここから出すためのもの。灰司は2人に肉壁を通り抜けさせようとしているのだ。

「な、なにを………?!」

「観客ギャラリがいたんじやおちおち復讐に集中できやしねえ。だからテメエらをここから出す」

「出すって……じゃあ灰司さんは?!」

「俺は………あのクソ野郎を殺す。その後のことは知らねえ。だが、きつとお前らは助かる。あの馬鹿みてえにまつすぐなヒーローが、お前らを助けるだろうさ」

「そん——」

飛鳥の声が途切れる。

行江姉妹の全身が肉塊に埋もれたのだ。後には、脈打つ肉壁だけが残されている。

後のことはアクロスに任せる。血で汚れ切った自分には、誰かを助けるなんて真似はできないし、その資格もない。

それに、命を投げうってでも復讐を成し遂げようとしている者からすれば、傍から見ている第三者は邪魔でしかない。誰もいない方がかえってやりやすい。これまでのA MOREとしての仕事でも、それは同じだった。

「やっ、と」

ゆつくりと、灰司は振り返る。

振り返った先には、肉塊の中でふらふらと佇んでいる怨敵バルジの姿。

これで邪魔者はいなくなった。

心置きなく、バルジを殺せる。

「ようやく——この時が来たな」

数多もの命を奪い続けてきた人の姿をした厄災・バルジ。

彼に向けられていた復讐の刃は、すぐそこまで来ていた。

灰司はふらつく足取りで、立つだけで精一杯でまともに動けないバルジに近づいてゆく。

彼もまた、戦いの傷と転生特典の多重投与オーバードーズによる副作用で全身ボロボロだった。視界は霞みかすみ、身体が内側から裂けるような痛みが絶え間なく襲い、自分の発した言葉すら半

分ほど聞き取れていない。

だが、ここまで来た。

この復讐の刃を届かせる寸前まで来ることができた。それだけが、たまらないほどに嬉しかった。

「最期に訊くぞ」

「……………あ？」

「今まで奪った命に何か言うことあんדרろ」

バルジにとって、その問いかけはするだけ無意味であることは分かっていた。ただ灰司は、殺す前にな訊いてみたかった。

灰司に胸倉を掴まれたバルジは血混じりに咳き込むと、いつも通りの下品な笑みを浮かべて灰司の問いかけに答える。

「まさかとは思うけどよオ……俺様に謝罪求めてんの？ はっ、一体全体俺様のどこがどう悪かったってんだ？ 死んだアイツらは全員俺様の遊びに耐えうる玩具じゃなかった。ただそれだけの話だろ？」

「……………」

あまりにも予想通りな返答に、灰司は思わず笑みを浮かべてしまった。

コイツとこれ以上話しても何にもならない。わかりきっていた筈なのに、それをこの

期に至っても確かめようとする自分の馬鹿真面目さ加減にも、笑わずにはいられなかった。

「わかったよ——これでお前を全力でぶっ殺せる」

——ああ、今日はなんて幸せな日なんだろうか。

これほどまでに笑えたのは一体いつぶりくらいか。

血と傷に塗れた顔に引きつったような笑みを浮かべながら、灰司は拳を振り上げる。そして。

——厄災バルジに、鉄槌バルジが下された。

第50話 復讐の果て、或いは序章の終わり

それは決定的だった。

一人の復讐者の放った拳は、鈍い音を立てながらバルジの鼻頭に直撃した。

「ふがっ……………」

転生特典の多重投与オーバードーズをもろに受けてまともに体を動かせないバルジに、灰司の憎しみ全開の拳を避けるすべはなかった。鼻血を噴き散らしながら、立っているのもやっとだったバルジの身体が大きく揺れる。

だが、この程度で灰司の復讐心が満たされるわけがなかった。

「があああああああああああああああああああああつ!!」
顔を殴られて大きくふらついたバルジの左膝に、踏みつけるような灰司の蹴りが直撃した。

ベキヨリツツ!!! と、嫌な音を立ててバルジの膝が逆方向に折れ曲がる。片足を失い、やじろべえのように体をふらふらとさせることしかできなくなったバルジに、さらなる

追撃がやってくる。

「これは■■■■の分だっ!!」

片足を折られて肉塊の床に倒れたバルジに馬乗りになった灰司は、血塗れの拳でバルジを殴りつける。

当然ながら、まだまだ灰司は手を緩めない。

「これは■■■■の分っ!! これは親父のツ、これは母さんのツ!!」

ベグシャツ!!! ボグツ!!! バギョツ!!! と。

灰司は勘定に任せてバルジの肩の骨をへし折り、肋骨を粉碎し、内臓を押しつぶす。とてもじゃないが常人に見せられた光景ではなかった。

淡い好意を抱いていた幼馴染み。馬鹿みたいな青春を送っていた学友。やんちゃで手のかかる弟。自分と弟を育ててくれた両親。その全てを奪い去った目の前の男に、怒りと憎しみの限りをぶつける。

それを止める相手はいないし、おそらくその資格を持つ者もない。もしいるとしたら、それはきつと底抜けの馬鹿かバルジと同等の悪党しかいないだろう。

「はアツ……ハアツ…………」

幾ら殴ったか分からなくなるほどまで殴り終えた灰司は、血塗れの両手でバルジの胸倉を掴み上げる。

「へっ……………ばば……………」

ありつたけの怒りと憎しみをぶつけられたバルジは、もはや元の容貌が思い出せないレベルで変貌していた。顔面は陥没と腫れで見れたもんじやないし、手足はすべて有り得ない方向にねじ曲がり、あちこちに内出血痕が確認される。

そんなバルジの無様な姿を凝視しながら、灰司は拳を振り上げる。

「——一度と生まれてくるんじやねえぞ、この人でなし」

それが、灰司からバルジに向かってかけられた最後の言葉であった。

まともな四肢を失った彼に、避ける術はなかった。

灰司の生身の拳が、バルジの顔面に突き刺さる。

ぼろきれのような有様だったバルジの身体が、背中から勢いよく肉塊の床にダイブする。肉塊にぶち当たったバルジの身体はサッカーボールのように元氣よく跳ね上がり、何度も何度も地面をバウンドしてゆく。何回かそれを繰り返したのち、バルジの身体は、ジューザザザザザザザツ!!と派手な音を立ててようやく着地する。

「……………ああ」

バルジは呻きながら手を伸ばす。その手は、手首から先がありえない方向に曲がり、指はまるでぐしゃぐしゃに丸められたティッシュシユのように骨から砕けていた。両足はべきべきに折れており、立つこともままならない。片目は潰れ、頭頂部からはたらたら

と血と汗が混じった体液を垂らしている。

常人ならば激痛で失神してするどころか、既に死んでいてもおかしくないのだが、そこは腐つてもギフトメイカーというべきか。いまだに自信の敗北を認められずに、灰司に向かつて手を伸ばそうとしていた。

ずるずると、死にかけて身体を引きずりながら、既に本来の機能を喪失した左手を伸ばす。灰司はそれを見ても何も言わない。

「……………お前、終わりだよ」

虚ろな顔で虚空に手を伸ばしながら、掠れるような声でバルジはそう言った。

「お前はこれまで、俺様への復讐だけを生きがいにしてきた。その生きがいを、生きる意味を、お前はぶち壊したんだ。その意味、分かるよなあ……………?」

「……………」

灰司は何も言わなかった。

そう。

灰司は全てを失ってから、その元凶であるバルジへの復讐のみを糧に生きてきた。

しかし、復讐を完遂する以上、それはもはや灰司の原動力にはなりえない。後に残るのは、生きる理由を喪失した屍同然の命だけ。

復讐を遂げた先に灰司を待ち受けるのは、裁場の危惧していた未来だ。

も会いたいと願う者もない。それらはすべてバルジに奪われているからだ。命一つが残っていたところで、その使い道がない。故に灰司は、危険極まりない転生特典の多重投与オーバードーズを使用して復讐に挑んでいた。

バルジの呪詛通りになるのだけは気に食わないが、どうせ彼は地獄行きだ。あの世が存在するとしても、きっと顔を合わせることはないだろう。

(待ってるよ——俺も今から、そっちに行く——)

戦いの中で摩耗しきった懐かしき記憶達を思い浮かべながら、灰司は目を閉じる。

そこに、上から肉塊が落ちてきて——

時間は少し前に遡る。

「クソツ…………どうすりゃいいんだよ…………!!」

「灰司……………」

灰司を取り込んでなおも膨張を続ける肉塊バルジを前に、残された瞬達は手をこまねいていた。

体液を噴き出しながら不気味に脈打つそれを前に、ただ一人レドは笑い続ける。

レドの確保に失敗した古城が立ち上がる。

異変が起きたのは、それと同時にだった。

それまで成長を続けていた肉塊が、急に動きを止めたのだ。児童公園の敷地を埋め尽くし、周囲の住宅へとその侵略を広げようとする寸前で、肉塊は動かなくなっていた。

「なん、だ？」

「み、見て！」

怪訝そうな顔で動かなくなった肉塊を見つめる一同。

直後、肉塊がその全身を細かく振動させ始める。断続的に体液を噴き出しながら、ぶるぶると震えるそれに、瞬達は思わず警戒態勢をとる。

「なんだ……………今度は何が起ころうとしているんだ!!」

そうこうしているうちにも、振動の激しさは増してゆく。

それに伴って、肉塊に更なる変化が起きた。

肉塊から人間の腕のようなものが飛び出してきているのだ。それもおそらく2人分の。一体いつからそれが出てきていたのかは定かではないが、それは振動と共に露出範囲を広げているように見える。

「サイズ的に……………え、もしかして」

「——まさかっ!!」

「おい逢瀬ッ、唯ッ!!」

肉塊から飛び出した腕を目にしたことでひとつの可能性に至った瞬と唯は、裁場の静止を振り切つて肉塊の元へと走り出した。先ほどは肉塊の膨張と体液噴出の激しさで口々に接近できなかったが、いまならいける。

肉塊からあふれ出した体液と肉片に覆われた地面を駆け抜け、瞬と唯はそれぞれ肉塊から飛び出している腕を掴む。

そして、その腕たちを思いつき引き引つ張つた。

「うらあああああああああああああああああつ!!」

べちやぶちゆべちよつ、と不快極まりない音と共に、腕から先が露わとなる。

その腕の先についていた胴体、下半身、そして顔。それを目にした瞬と唯の予想は、直ちに事実へと変わる。

結論を言おう。

腕の主は、瞬と唯の予想通り、バルジに取り込まれていた行江飛鳥と行江薫だった。

「飛鳥……………」

「生きてる、と思う。多分」

唯はそう言いながら、飛鳥の傷だらけの身体に纏わりついている肉片を拭う。行江姉

妹の意識はないようだが、呼吸はしているあたり死んではないようだ。とにかく命は無事だったことに2人は安堵する。

しかし、飛鳥を引きずりだしたというにもかかわらず、肉塊の振動は止まらない。

否、激しくなっているだけではない。肉塊そのものが崩壊を始めているのだ。まるで中身を根こそぎ絞り出されているかのように随所から体液が噴き出し、振動のたびに表面の肉片が剥離して崩れていつている。肉塊の中で何があつたのかは定かではないが、おそらく肉塊にとって致命的となる何かが起こつたのだろう。

「瞬？」

「……………」

そんな中、瞬はある一点を見つめていた。

それは、飛鳥を肉塊から引きずりだした後に残つた穴だった。血や脂の混じつた体液を噴き出しながら形を失いつつあるそれを、瞬は飛鳥を抱きかかえながら無言で見つめている。

「唯、ふたりを頼む」

瞬は一言そう告げると、唯に飛鳥と薫を預け、肉塊に空いた穴に身体を突っ込んだ。

「ちよつと瞬ッ!! なにやってんのっ!!」

「飛鳥やだけじゃないだろッ!! まだ助けなきやいけない奴がこの中にいるっ!!」

オオオオ——」

灰司が引きずり出されると同時に、肉塊はけたたましい雄たけびを上げながら崩れ落ちてゆく。それにはもはや、まともな形を保てるだけの力はなかった。

そうして、公園を占拠していた肉塊が、白い煙を立てながら溶けてなくなつた後。

そこには、既に死亡しているバルジだけが残されていた。

すべては終わった。

バルジは死亡し、レドとレイラは逃亡。レイナーレもレイラも GANG ニールも戦闘不能と、ギフトメイカー側の完全敗北という形で激戦の幕は下ろされた。

肉塊に押しつぶされたり攻撃がぶち当たったりでぐしゃぐしゃになつた公衆トイレや遊具に囲まれた中、瞬と灰司はバルジの死体を前にして座り込んでいた。

「なんで俺を助けた」

「ほっとけなかつたし」

「これから死にゆく命なんだぞ、俺は」

「だとしてもだ。言つただろ、これまで一緒に戦つてきた仲だつて」

それにき、と言いながら、瞬は顎を使つてある方向を指し示す。そこには、ようやく意識を取り戻した飛鳥の姿があつた。彼女は今にも泣きだしそうな目で、ボロボロの瞬と灰司を見ている。

「あの子が悲しむ。少なくとも、あの子の前でそんな顔をしてやるなよ。目の前で恩人がそんな顔していちゃあ、喜べるもんも喜べねえだろ」

「……」

瞬にそう言われた灰司の顔は、空虚さに包まれていた。

ただひとつの生きる理由であつた復讐を完遂した今、灰司の命にもはや意味はない。長きにわたつて復讐だけを考へて生きてきたが故に、他の生き方を考えることができなくなっている。そこにいたのはひとりの復讐者ではなく、全てをやり終え、何もかもが無くなつてしまつたひとりの少年だつた。

しばらくの間、沈黙が続く。

そして。

うつすらと夜の闇が薄くない始めたころになつて、灰司はゆっくりと立ち上がった。

「どうすんだよ、お前」

「しばらくほつといてくれ」

灰司は、瞬の言葉にそう返した。その声は、いつも以上に投げやりに聞こえた。

ふらふらとおぼつかない足取りで裁場や古城達の隙間を縫うように歩を進めながら、公園から出ていこうとする灰司。

そんな灰司に声をかけようとする裁場だったが、その声は喉の手前で止まってしま
う。

「……………」

裁場整一は何も為せなかった。

灰司に復讐者としての道を歩んでほしくないという願いは、復讐の完遂という結末を以て否定された。死んでほしくないという願いは、きつと叶わない。

そもそも、裁場は今夜の激戦において蚊帳の外だった。彼のしたことといえば、一人の墮天使を救っただけだ。

そんな自分が何を言えがいいというのだ？ 灰司に声をかける資格があるのだろうか？

（……………俺は無力だ。あの時からなにも変わっちゃいないし、できてもない）
きつと、最初から復讐を止める資格はなかった。徹頭徹尾、裁場整一は無力だった。それが分かっていたが故に、裁場は立ち尽くしていた。

それを無視して灰司い公園を出ようとする間際、瞬が声を振り絞った。

「灰司」

「……………なんだ」

「学校来いよ。俺は待つてるからな。俺だけじゃない。唯も志村もハルもアラタもきつと待つてるし……………それに、飛鳥達にも顔くらい見せてやれよ」

「……………」

瞬の言葉に、灰司は一瞬だけ此方を振り返り、何か言いたげそうな顔を見せるが、すぐにそっぽを向いて再び歩き出す。

「……………灰司、どうするのかな」

「あいつは死なないよ」

「……………根拠なさそうだけど」

「もちろんないさ」

根拠は全くないけれど。

ただ、そうあってほしい。

そう願いながら、瞬と唯は去り行く灰司の背中を見つめ続けるのだった。

面に落ちる前に粉々になっていった。それを皮切りに、ボロボロと、ガングニールオリジオンの身体が崩れ落ちてゆく。

「これは一体……アッ？」

何が起きているのかはわからない。

困惑する一同の前で、ガングニールオリジオンの中身が露あらわとなる。

中にいたのは、瞬と同じ年くらいの少年だった。肩まで伸びる茶髪と、ひどく整った顔を持ち、全身が粘液のようなもので覆われている。ただ、普通の人間ではない箇所があった。頭に生える猫耳と、腰の下あたりから生える猫の尻尾。どうみても作りものなにかじゃない付き方をしている。

その時、瞬の脳裏に思い浮かんだのは、搭城小猫のことであった。確か彼女はあくまであると同時に化け猫であった筈。さすれば、今日の前にいる彼も同じような存在なのかもしれない。

瞬がそんなことを考えていると、目の前の少年が目を覚ました。

「うわっなんだこれ気持ち悪っ！」

少年は目覚めるなり嫌悪感を露わにし、自身の身体についた粘液を振り落とす。

そしてきよろきよろとあたりを見渡した後、何かに納得した様に何度もうなずくそぶりを見せる。

「ああ、お前らが解放してくれたのか」

「ええ……なにこの美少年」

「俺は風猫アズマ。流れ者の化け猫系転生者だ」

「化け猫……………」

首をかしげる瞬だったが、即座にオカルト研究部の搭城小猫のことを思い出して納得する。

化け猫ということは、目の前の彼はおそらく小猫の同類なのだろう。

「いやあ助かったぜ！ なんせ協力断つたら無理矢理オリジオンにしゃがるんだもんな！ほんと重苦しかったし、頭もまともに回らねえしですっげえもどかかったんだぜ？」

「

「え、あの……………」

「ありがとよ、礼を言うぜ仮面ライダー」

瞬の肩をたたきながら礼を言うと、アズマは瞬の横を通り抜けてゆく。

「え、ちよちよちよいどちらへ？」

「猫は気ままな生き物さ。今まで縛られていた分好きなように生きる……………それだけのことよ」

そう返すと、アズマは鼻歌を歌いながらその場から立ち去ってゆく。全身ズダボロの

はずなのに、随分と軽やかな足取りだった。あれも妖怪であるがゆえのタフさなのだろうか？

まさか強敵・ガングニールオリジオンの中身があんな奴だったとは夢にも思わなかった。彼もまた、バルジに自由を奪われていた被害者だったのだ。

と、ここで瞬は思い出す。

「そうだっ、レイラの奴は!!」

そう。

バルジの死亡に伴い、ガングニールオリジオン——風猫アズマが自由を取り戻した以上、彼女もまた同様に理性を取り戻しているに違いない。

そう思った瞬は、慌てて先ほどまで戦っていた土手に向かおうとする。

が、その肩を叩く者がいた。

「誰だ——え？」

振り返った先に居たのは、血塗れメイド服の少女——レイラだった。

血の流し過ぎで顔色は見るからに悪いし、モップを杖代わりにして何とか立っているほどに弱り切ってはいるが、その顔には少し前まであった狂気がすっかりなくなっており、どこか憑き物が落ちたような顔つきになっている。

「レイラっ……………!!」

「ありがとう、逢瀬瞬」

「お前、その身体で動いてて大丈夫なのかよ!!」

警戒する唯とは対照的に、ボロボロのレイラの姿を目にした瞬は、思わず彼女の身体を支える。

戦う前からだしぶ死にかけていた上に必殺技までぶつけてしまった要か気がするのだが、なんでこいつは生きているのだろうか。良かったと言えば良かったのだが、レイラの生命力のえげつなさについて引きつった笑みが漏れてしまう瞬だった。

「大丈夫だ、初歩的な治癒魔法でなんとかなってごほほほほっ!!」

「吐血してる時点でなんとかなってねーじゃねえか!! 血吐きすぎて顔色ほぼ死人だぞ!!」

「大丈夫!! ねえほんとに大丈夫なんだよねえ!!」

痩せ我慢というのも烏滸がましいレベルの強がりには、警戒心剥き出しだった唯も一緒になってレイラを心配する。

そうして吐血がひと段落したレイラは、改めて瞬達の顔を見つめる。

「本当にありがとう。まさか、またこうして身も心も自由になれるとは……こうして生きてるのが奇跡なくらいだ」

「……………まあ、よかったよ」

「レイラ、なんか随分と雰囲気が柔らかくなったね」

当たり前といったらそうなのだが、洗脳されて敵対していた時と比べると、物腰が柔らかくなっているように感じられる。おそらく、これが本来の彼女なのだろう。

「レイラ、お前はどうしたい？」

「それはギフトメイカーがつけた偽りの名前。私は……アステア。アステア・ライトレア。それが本当の名前だ」

「アステア……それが本当の名前か」

レイラ——否、アステア・ライトレアは、瞬の言葉に無言でうなづく。

自由も尊厳も、そして名前すらも奪われていた少女は、ここでようやく己を取り戻すことに成功したのだ。あまりにも多くの者を奪っていったバルジだが、こうして救われたものもあつた。そのことが、瞬達にとつてはたまたまなくうれしく感じられた。

「私は……罪を償いたいと思う」

「償うつて……お前、洗脳されてたんだろ？」

「確かに私は洗脳されて、ギフトメイカーに命じられるがままに数多もの命を奪ってきた。だけど、洗脳を免罪符にはしたくないんだ。洗脳されていようとなかろうと、私が背負うべき罪であることには変わりはない。それが私の、命の使い方だ」

「アステア……」

彼女の決意表明に、瞬は異を唱えることができなかった。

本人の言うとおり、洗脳されていたとしても、アステアが数多もの人間の命を奪ってきたという客観的事実は揺るがない。そしてそれを知っているが故に、アステアは罪から逃げることもできない。彼女には、罪と向き合う以外に道がないのだ。

アステアは身体を支えていた瞬の手を除けると、モップを杖代わりに使いながら、瞬に背を向ける。

が、そこに裁場が助け舟を出してきた。

「……………君はバルジに洗脳されていたんだろう？ なら、情状酌量の余地はあると思うのだが……………記録によると、君自身はそこまでギフトメイカーとしての被害の大きさは、冷遇っぷりが幸いして他の構成員よりも遥かに小さい。仮に情状酌量の余地なしと判断されても、そこまで重い罪にはならないと思うが……………どうする？」

「……………」

「AMOREには俺から話を通しておく。君はじつとしている、その怪我で動いているのが不思議なくらいなんだぞ？」

「……………わかったよ」

アステアはそう答えると、辛うじて原形を保っていた近くのベンチに腰を下ろす。

彼女と入れ替わりに、裁場が瞬の前に立つ。その顔は、途方に暮れているように見え

た。

「俺はどうすればよかったんだろうな……灰司どう向き合えばよかったんだ？」

「多分だけど、俺達をはじめから部外者でしかなかったんだよ。これはずっと灰司とバルジの戦いだったんだ。そこに俺達が口を挟む権利は………ないんだ」

「そう、か」

瞬の言葉に、裁場は短くそう答える。

まるでそのまま消え入りそうなまでに弱弱しい雰囲気のカラダを見て居ても立つても居られなかった瞬は、彼の胸に軽く拳を押し当てながら、裁場を奮い立たせようとする。

「なにしょげてんだよ。バルジは死んだけど、まだ他のギフトメイカーが残っている。奴らが何の罪もない人達を傷つけ続ける限り、俺達は戦うしかないんだ。だって、仮面ライダーなんだから」

「……………なんだか、君が眩しいよ」

そう言った裁場の顔には、微笑が浮かんでいた。

いつの間にか周囲は朝焼けに照らされており、公園の端の方では、意識を取り戻したレイナーレに飛びつく墮天使組やそれを見て笑い合う古城と雪菜、手持ち無沙汰気味に周囲をぶらつくGUMIの姿も見える。彼らもまた、無事に本懐を成し遂げていたの

だ。

瞬には彼らの事情は分からないが、自然と笑みがこぼれていた。

その日の朝焼けは、むせかえるほどに綺麗だった。

陰謀交錯都市 アマスベ
— THE END —

e??????
y

救われたままでは終われない Her | Odyssey

数日後 AMORE本部前

「釈放だ」

そう言い渡されたとき、アステアは浮かない表情をしていた。

バルジの死亡に伴い、洗脳が解かれ正気に戻った彼女は、AMOREの本部が存在する別次元へと移送された。

そして、そこでの数日にわたる取り調べの結果、彼女は罪に問われることはなかった。しかし、洗脳の影響がまだ残っているかもしれないとのことで、一旦彼女の世界に戻ったうえで、現地のAMORE隊員のもとで経過観察期間に入るとのことだ。

上記の内容を言い渡されてからさらに数日経ち、彼女はAMORE隊員の男性に連れられ、空港のロビーのような場所にやって来た。

この世界はどうかやら瞬達の世界よりも技術が進歩しているようで、次元間の移動技術が一般に普及しているらしい。そして、彼女が今いる施設は次元航行艦の発着施設であ

り、ロビーの窓から外を眺めると、今まさに一隻の艦が別次元へと旅立とうとしていた。「珍しいかね？」

「いや、そうでもない。だが私の世界では軍事利用が主だったからな……庶民の身では到底利用できるものではなかったよ」

男性隊員の問いかけに、窓の外を眺めながらそう答えるアステア。その脳裏には、妹と共に生まれ育った故郷のことが浮かんでいた。

お世辞にも良い世界とは言えなかった場所だが、それでも愛しの妹や、血は繋がらないが優しかった義理の家族たち、何かと張り合うことの多かった級友など、望郷の念を抱かせるには充分すぎる思い出があるのだ。しかしアステアは、彼らには黙って出てきてしまった挙句、当初の目的は果たせなかったどころか、悪の尖兵にまで身を落とした。そんな自分に、果たして帰る資格はあるのだろうか？

思いつめるアステアに、男性隊員が続ける。

「君の妹については行方を追っている。だが……仮に行方が分かかって、身柄を捕えたとしても、彼女は大罪人だ。君みたいに洗脳されている可能性が薄い以上、無罪放免は絶望的だ。最悪死刑や抹殺もあり得る。それでも……」

「それでも、頼みたい。これ以上罪を重ねる前に、あの子を捕まえてほしい」

「……僕は事務員みたいなものだけど、AMOREを代表して約束しよう。必ずギフト

メイカーを撲滅させると」

そう言いながら、男性隊員は敬礼をする。

「君の乗る船は分かっているな？6番ゲートから17時に出港する艦に乗りたまえ。まあチケットに書いてあると思うが……………と、何処へ行く？ そつちはゲートとは反対方向だぞ？」

男性隊員はそのまま説明を続けようとするが、アステアは彼を無視し、ゲートとは反対の方向に歩き出していた。

慌てて男性隊員が呼び止めると、アステアは不機嫌そうに鼻先で構内案内板を指し示す。案内板には、トイレやエレベーター、非常口の方向が記載されている。

——言わずもがな、彼女が用があるのはトイレである。

「お前は淑女のトイレを覗く趣味でも持っているのか？」

「これでも妻子持ちなんだ。リスクとリターンが割に合わない」

アステアの嫌味を軽く受け流すと、男性隊員は去り行くアステアの背中を見送る。

——数分後、彼はこの選択を後悔することになる。

「……………」

誰もいないトイレにやって来たアステア。

勿論、彼女の目的は用を足すことなんかではない。

「いける、か？」

トイレの窓を見上げる。一人は何とか通れそうな大きさだ。

まず彼女は、窓を通るうえで邪魔になるであろう帽子と厚手のコートを脱いで畳む。

そして、

ホロフシコン・サモンウエボンズ
「因果歪曲・武想召喚」

そう呟くと、アサルトの手の中に細いワイヤーのようなものが出現する。彼女はそれを窓の鍵に向かって投げて引っかけると、ワイヤーを引っ張って鍵を開けた。鍵が開いたのを確認すると、アステアはワイヤーから手を離し、畳んだコートと帽子を窓から外に放りなげる。その後、ガンツ、と床を強く蹴って飛び上がり、窓枠にしがみつくと、手から離れたワイヤーは、その瞬間跡形もなく消え去っていった。

腕の力でよじ登り、窓から身を乗り出す。2階相当の高さだが、この程度ならどうってことはない。そのまま、さらに身を乗り出しながら体重をかけ、窓から外に出る。

「……………」

当然ながら、頭から落下するような体勢になるものの、アステアは空中で一回転し、綺

麗な三点着地を決める。そして、近くに放り投げていたコートと帽子を広いあげ、土埃を払って再び身に付ける。

ここは搬入口に近く、人気は少ない。アステアは、先ほど身を投げた窓を見上げながら思う。

「あのままひとりで帰ることは、できない」

哀れな被害者として、甘んじて保護される道も用意されていた。しかし、彼女はそれを自ら投げ捨てた。どうしても許せないし、認められなかった。

誰かに任せて逃げるなんて真似をすれば、ギフトメイカー 奴らの玩具にされてまで妹を助け出そうとした自分の今までが無駄になる。どうしても、これだけは自分でやらねばならない。誰かを頼るつもりはないし、その資格もない。どれだけ途方もない道であろうとも、諦める気は微塵もない。

夕日で照らされた頬に、一筋の涙が零れ落ちる。少女は帽子を目深く被りながらそれをぬぐい、決意表明をする。

やるべきことは決まっている。ゆくべき場所もわかっている。ならば、はじめから選択肢はないも等しかった。

「待っている……絶対に私が救い出してやる……！」

発艦予定時刻の17時がやってきた。
しかし。

アステア・ライトレアがその時刻に、搭乗口に現れることはなかった。

設定集

定 キヤラクターズ・ファイル（オリジナル編）※随時更新予

◆MAIN KAMEN RIDER

■逢瀬瞬おうせしゆん

ICV榎木淳弥

本作の主人公。髪型は……例えるならばHACHIMANと神様の言うとおり式の
明石靖人の中間と言えればいいだろうか。少なくともイメージの方向性はそう。

周囲の勝手な事情で振り回され、口ではあーだこーだと言いながらも結局人助けして
しまう、典型的なやれやれ系主人公。ただしこれは、半ば強引な経緯で仮面ライダーに
なったことによる反発心からくる態度。根は素直なので、話が進むにつれてやれやれ系
な要素は薄れていっている。

基本的には良識と、人並み以上の正義感と責任感を持った普通の高校生。

両親とは幼いころに離別しているが、生きているのか死んでいるのかは知らないらしい。

現在は叔父と妹、居候の幼女×2と野良猫と共に暮らしている。

■仮面ライダーアクロス

身長・ 198cm

体重・ 90kg

パンチ力・16t

キック力・24t

ジャンプ力・35m

走力・ 100mを3.5秒

《CROSS OVER! 思いを! 力を! 世界を繋げ! 仮面ライダーアクロス!》

クロスドライブバーとアクロスライドアーツを使って逢瀬瞬が変身する仮面ライダー。

菱形上の肩アーマーは左右で色が異なり、右が赤で左が青。黒を基調としながら、手足にはオレンジのラインが走り、胸部装甲や膝当て等は銀色。腹部には映像フィルムのような模様がある。

変身シークエンスは、

液晶から無数の光の線が飛び出してに巻き付く↓全身が包まれた後、背後から振子がぶつかる↓光がはじけとんで変身完了。

変身解除シークエンスは、

アクロスがテレビの砂嵐状のシルエットに変化↓アーマーが霧散して解除。

必殺技音声は《レジェンドリンク時はここにリンク状態のライドアーツに関連した語彙が追加》CROSSBRAKE》。

武装など

●クロスドライバー

変身ベルト。バックル上部に2つのライドアーツの差込口があり、そこにライドアーツを刺した後に差込口ごと横に90度倒すことで、ライドアーツの力を解放する。装着者から見て右側がアクロスライドアーツ、左側がそれ以外のライドアーツ専用の差込口。バックル中央部には円盤状の液晶があり、そこにライダーズクレストなどが浮かび上がる。

一度差込口を起こして、ライドアーツを抜かずに再度倒すことで必殺技を放てる。レジェンドリンク状態の際は2つの差込口を同時に動かす。

●ツイーンズバスター

専用武装。平成ライダー御用達の銃剣。

銃形態が基本モードであり、そこから折りたたんでグリップと銃身を接続すると、銃身の最後尾から柄が生え、結合したグリップと銃身が刀身となる形で変形する。

ガンモードではグリップ下部に、ソードモードでは柄の先端にライドアーツの差込口があり、そこにライドアーツを差し込むことで必殺技を放つ。

●クロシンングチェイサー

専用バイク。専用のライドアーツをドライバーに使うことで何時でもどこでも手元に呼び出すことができる。最高時速は時速200kmと言われているが、そんな速度を日本の公道で出せるかと言われたら出せない。乗り手の技量次第では壁面走行もお手の物。

ちなみに開王学園はバイク通学が禁止されているので、これで学校に通うことはできない。

専用マシンの割には活躍がいまいち。なんならエンストしている。

■必殺技

《クロスオーバーシュート》

ライダーキック。

勢いよく飛び上がった後、額から標的に向かって光の軌跡を生成。その後、その軌跡に沿って急降下しながら蹴りをぶちこむ。

《クロスオーバースラッシュ》

剣技。ツインズバスター・ソードモードにアクロスライドアーツを装填して発動。オレンジの光を纏ったツインズバスターで相手を素早く斬る。

《クロスビクトリースラッシュ》

リンクネプテューヌ時の必殺技。リンクネプテューヌの能力で生成される専用武装の大剣・パープロンに紫色の光を纏わせ、相手をVの字に切り裂く。斬撃を飛ばすパージョンもある。

《ブーステッドインパクト》

リンクドライブ時の必殺技。幾重にも倍加した腕力に物を言わせて重いきり相手をぶん殴る。

《虹彩のスパイラル・ストライク》

リンクペンデュラム時の必殺技。

遊矢のペンデュラムの幻影と共に、虹色の光を纏った足で相手を蹴り抜く。

リンクペンデュラム自体が分身や短距離の瞬間移動能力を有している為、回避が難しい。

《ボルテージクロスシユート》

リンクビルドの必殺技。

基本的にはビルドのキックと酷似した演出だが、出現するグラフが、標的を頂点として下に凸の放物線グラフとなっている。

《クイッククロスオーバーシユート》

リンクカブトの必殺技。

クロックアップ状態で放つクロスオーバーシユート。基本的なモーシヨンはクロスオーバーシユートとそう変わらないが、蹴りの直前で瞬間的に超加速をすることで、威力を何倍にも高めている。

■ 裁場誠さいばせいいち一

I C V 武内駿輔

フリーの武装探偵として活動する青年。目つき怖い眼鏡のイケメン。

その実はクロスドライバーで変身する、本作オリジナルの2号ライダー・ユナイトの変身者。本人が武偵・A M O R E エージェントという経歴なため、そこで培われた戦闘能力は瞬を遙かに凌ぐ。

元々は責任感と正義感に溢れたA M O R E エージェントだったが、バルジを取り逃し

たせいで灰司の世界の滅亡という結果を招いてしまい、その責任と自身の無力さからA MOREを退職し、武偵として活動しながら独自にギフトメイカーを追っていた。

灰司が復讐の道に走ってしまったことに負い目を感じており、彼を止めるべく立ちはだかる。

■仮面ライダーユナイト

身長・ 200 cm

体重・ 94 kg

パンチ力・12 t

キック力・20 t

ジャンプ力・36 m

走力・100 mを3.2秒

《CROSS OVER!正義の意志をフュージョライズ!不撓不屈のウオリアー!仮面ライダーユナイト!》

クロスドライバーとユナイトライドアーツを使って裁場が変身するライダー。アクロスの同型機。デザインモチーフは遊戯王OCGの「融合」カードと軍服。

変身シークエンスは

背後に光り輝く渦が出現↓渦から装甲が渦の回転に沿って裁場の近くに飛来↓装甲

が次々と全身に装着、
という流れ。

●クロスドライバー

アクロスのもので同じなので説明は割愛。

●フュージョンマグナム

銃型のユナイト専用武装。腰のホルスターに携帯している。

ツインズバスター・ガンモードよりも精密性・射程距離・火力のあらゆる面を上回る。そのぶん撃った際の反動が大きいので、猛練習しないと取り扱いは難しい。

ライドアーツを差し込むことで、発射する光弾の性質を自在に変えられる。

●ユニオンジャルグ

槍型のユナイト専用武装。背中に背負っており、使わない時は短く畳んでいる。今のところ本編未使用。

●マツハフージュォナー

専用バイク。今のところ本編未使用。

■必殺技

《アップゾーブシユート》

キック技。

フュージョンマグナムからブラックホール弾を撃ち込んで着弾した相手を拘束。そのままドロップキックを叩き込む。逃げようのない、殺意満載の必殺技。

◆MAIN CHARACTER

■もろほしゆい諸星唯

ICV 安済知佳

金髪ショートの子。

初期設定では低身長かつぺたんこだったけど、色々とあつて身長も胸も平均サイズになった。

瞬の幼馴染みであり、瞬が今の感じになるきっかけを作った。とにかく周りを巻き込むタイプの人間であり、周囲の人間をぐいぐい牽引してくバイタリティあふれる元気な少女。

何の力もないが、胆力は瞬以上であり、オリジオンに自ら突っ込むなどの無謀な真似も辞さない勇敢なヒロイン。

身体能力抜群であり、中学時代は陸上をやっていたが、あまりの化け物っぷりに多くの部員の心をへし折ってしまい、引退者を出したことに責任を感じて現在は引退してい

る。

当初は普通の人間……と思われていたが、池袋編にてレイラに襲われた際に謎の力に目覚める。

バリアを生成して志村と自身の身を守ったうえ、レイラにかけられていた洗脳を強引に解除して彼女を“壊して”しまった。当人はその時のことを覚えてはいないようだが、この力は一体……？

■逢瀬湖森
おうせこもり

ICV 桑原由希

瞬の妹。結構だらしない性格。

瞬がアクロスになった当初は、それをどう受け止めていいのかわからなくなり、距離を置いていたが、色々あつて瞬の在り方を認めるようになった。

唯にべったりしている。トモリのことは鬱陶しいと思っている。

■欠望アヲタ
かけもち

ICV 増田俊樹

茶髪センター分け。作者の中では一番デザインが安定しない。

姉と2人の元艦娘と暮らす少年。友達思いなまっすぐな性格の持ち主であり、一誠とは高校入学時からの仲。

大鳳のことは単なる家族以上に思っているようで、彼女が傷つけられた際は、何もできなかつた自身の無力さに悩み抜いた拳句クロスドライバーを盗むという暴挙に出たことも。

……まあ、それ程までに大事に思っている。

実は転生者なのだが、転生特典については一切語らない。何故……？

■ヒビキ

ICV 悠木碧

ネプテューヌと共に瞬の家に住候している幼女。名前意外の記憶を失っているらしい。

唯以上の世話焼きであり、少し目を離したら誰かを助けてる。オリジオンにも物怖じしない肝っ玉幼女。

とある秘密があるようだが？

■九瀬川くせがわハル

ICV 高橋花林

黒髪ショートボブで常にジト目気味。

スク水大好きオタクガール。日課はスク水をキメる事。普段の服の下に常にスクール水着を着ている変態。生粋のアップー系陰キャガールであり、空気が読めない言動が

目立つが本人もに気している模様。

部員不足で廃部通知が出されていた漫画研究部を存続させるべく、黒神めだかの協力の元瞬達を部員として引き入れることに成功した。オリジオン騒動に巻き込まれた後は、漫画研究部の名称をノリでOrigin Counters部と改称した。

■志村優始しむらゆうし

ICV 永代翼

瞬達のクラスメイト。肩まで伸びるサラサラの金髪が特徴。

本人曰く「ルックス以外にいいところ無しのダメ人間」。

ドジで小心者だが、間違っていることは間違っていると云える度胸も併せ持つ。本作の賑やかし筆頭。

■港トモリみなと

ICV 坂本真綾

都内の大学に通う女子大生。環士郎の教え子の一人。

ヨッシーオリジオンとして児童誘拐を繰り返す転生者の友人を止めようとしたが叶わず、一緒に誘拐されたのだが、仮面ライダーとして戦う覚悟を固めた瞬の手によって助け出される。その後は唯がちよくちよくお見舞いに行っていたらしく、そこで唯と仲良くなった。

悪い人ではないが、恩返し of 気持ち that 空回りしまくっているので逢瀬兄妹からは鬱陶しがられている。

実はお腹が弱く、些細なことで腹をくだす。

■ フイフティ

ICV 櫻井孝宏

瞬にクロスドライバーとライドアーツを託した謎の青年。外見はぱつと見黒い某花の魔術師。

「仮面ライダーの導き手」を自称し、事あるごとに瞬の前に現れてはいろいろと論したり説明したりするが、肝心な時に限って出てこないのが、瞬からは全くと言っていいほど信用されてはおらず、それどころか不審者呼ばわりされている。しかし、味方側で唯一、ギフトメイカーや転生者、次元統合について詳しく知っている唯一の人物でもあるため、その知識は頼りにされている。

結構陰湿な性格でもあり、クロスドライバー盗難事件を起こしたアラタに対しては露骨に態度が悪い。しかし、特訓には付き合っただけでいるあたり、完全に嫌っているわけではない模様。

灰司とは面識があるようだが、詳細は不明。

どうやら不老不死の存在らしく、ギフトメイカーに致命傷を負わされても何事もな

かったかのように平然としており、それどころか自身の血を自在に操るといふ芸当も見せた。

●ギフトメイカー

転生者を唆してオリジン化させている集団。転生者の中から、新たな転生神を生み出すべく活動している。

ギフトメイカー自身もオリジンであり、その実力は普通の転生者を遥かに凌駕する。

転生システムを支配している為、今いる転生者の大半は初めからギフトメイカーの息のかかった層ばかりになっている。

■ティータ

ICV北田理道

ギフトメイカーのリーダー格。

別にスパータイムジャッカーではないし、コンボが気持ちいい奴でもない。

非常に傲慢な性格であり、無理矢理オリジンを暴走状態にするなど容赦がない。

その傲慢っぷりは部下にも容赦なく向けられるので、他のメンバーからは内心ではめ

ちやくちや嫌われている。それでも実力は最強クラスなので他のメンバーは誰も逆らえない。

■笠原かさほら

ICV 平川大輔

黒スーツにサングラスという、逃走中のハンターのような見た目をした男性。

ギフトメイカーの一員として、冷静に自身の仕事を全うしている。

■レド／ブレイドオリジオン

ICV 山下大輝

ギフトメイカーの中では最年少。見た目はチャラそうな童顔の少年。コーカサスビートルアンデットの人間態をイメージすれば分かりやすい。

見た目通りの軽い性格で、あまり深く考えずにオリジオンを生み出している模様。

オリジオンとしての能力は、本家ブレイド同様にスピードスートのラウズカードの能力を自在に使うことが可能。カードをラウズする必要なしに発動可能なため、本家よりも隙が無い。他にもトランプ型爆弾やカード手裏剣も披露する。

■リイラ

ICV 本渡楓

ギフトメイカーの一員。昆虫の触覚や足らしきものが頭や背中から生えてる紫髪ゴ

スロリ少女。ぶっちゃけ蠱惑魔の中に混じってもおかしくなさそう。

レド以上に享樂的で残忍な性格。その実力は未知数。

姉であるレイラのことは無能と見下しており、バルジの玩具にされている現状もなんとも思っていない。

以前は姉妹揃って暮らしていたようだが、ある時を境にレイラの前から姿を消し、ギフトメイカーの一員になった。

なぜが瞬からは「唯に近い存在」との認識を受けているが、その理由は不明。

■レイラ

ICV豊崎愛生

レイラの双子の姉。だがぶっちゃけあんまり似ていない。ごつい軍服を着た銀髪のおねーちゃん。

妹とは違って堅物であるのだが、その割には色々と変な行動を取っている。あと最近
は頭痛が酷いらしい。バルジの事は普通に嫌い。

原理は不明だが、武器を自在に生成する能力を有しており、それによる物量押しで闘
う。……エミヤ？

実はバルジに洗脳されており、本来の彼女は、少なくとも自分から悪事に加担するよ
うな性格ではない。

経緯は不明だがリイラと離れ離れになり、彼女を探してギフトメイカーに行き着いた
はいいものの返り討ちに合い、洗脳されて手駒となつてるのが真相。そのためギフト
メイカーのメンバー内での地位は一番低く、メンバーからはあらゆる面で冷遇されてい
る。

■バルジ／ピカチュウオリジオン↓イガリマオリジオン

ICV山下誠一郎

ギフトメイカーのマットサイエンティスト。倫理観も良識もハナから持ち合わせて
おらず、ただ自分が楽しみたいからという理由でギフトメイカーをやっている。（ギフ
トメイカー全員そんなもんだろとか言わない）

灰司の世界を滅ぼしたり、レイラに洗脳プレイを施したりと悪趣味な面が目立つが、
彼自身はそれらを全く悪いとは思っていない。それどころか盛んに灰司を挑発してい
る。

実験と称してレイナーレ一派を監禁するなどしているが、その目的は……？

転生特典は当初はピカチュウの力と思われたが、それはカモフラージュであり、真の
転生特典はシンフォギア・イガリマ。徹底的に相手を煽つて冷静さを奪いながら、切れ
味抜群の大鎌を難なく取りまわす。

●リバイブ・フォース

ギフトメイカーお抱えの精鋭転生者の集まり。定員は4名。

優秀だと見込まれた転生者の中から選抜され、ここで更に成果を上げればギフトメイカーの正規メンバーに昇格し、他者をオリゾン化する力を得られる。

残りの1人はまだ未登場。中々出すタイミングに恵まれない可哀想な奴等である。

■タロットオリゾン

I C V 三木真一郎

劇中最初に現れたリバイブ・フォース。見た目は理知的な男性だが、人間態の名前は現時点では不明。

21枚のタロットカードに即した能力を持つ。

モチーフは仮面ライダークイバに登場するチエックメイト・フォーのビジョップ。

■藤宮泡不／ブギーポップオリゾン

I C V 一之瀬加耶

リバイブフォースの紅一点。性悪ギャル。

転生特典は“世界の敵の敵”ことブギーポップ。

本家同様に切れ味抜群の鋼鉄ワイヤーを自在に駆使して戦う。

■???／ガングニールオリゾン

ICV藤原夏海

自我を殆ど喪失しているバーサーカー。その為正体は不明。

驚異的なパワーとタフネスを誇り、度々アクロス達の前に現れてはその都度苦戦させている。

転生特典はシンフォギア・ガングニール。

本来の使い手どうように強靱な肉体を惜しみなく使った肉弾戦を得意とする。

*

● AMORE

正式名称は転生者秩序維持同盟。Alliance to Maintain the Order of Reincarnations（主にギフトメイ

カーのせいで）悪化する転生者事情をどうにかすべく、転生者犯罪に心を痛めた、良識ある転生者達が作り上げた自治組織が前身となって作られた警察組織。次元を超えて転生者犯罪を取り締まっている。

エージェント達は「転生者狩り」と呼称されるが、これはあくまで転生者達による蔑称。よっぽど凶悪な転生者でない限りは殺さずに逮捕し、更生施設送りにするのが普通となっている。

構成員は転生者も非転生者も多種多様。

■ 無束灰司 むつかはいじ

ICV 千葉翔也

悪意のある転生者を粛清する秘密組織「AMORE」のエージェント。

長年転生者狩りとして戦ってきたが故に、卓越した戦闘技術をもち、多数のダークライダーに変身することができる。

冷酷であろうとするが、なりきれない性格。転生者狩りとして数多もの悪意を目の当たりにしてきたために、人の善性をハナから信じておらず、そういう面をはじめとして瞬とはとことん折り合いが悪い。

バルジに世界を滅ぼされており、復讐の為に転生者狩りになった。復讐が果たせるなら自身の命などどうなっても構わないと考えており、相討ちなら上々、もし仮に復讐を遂げながらも自分が生き残っても、その後で自ら命を絶つつもりらしい。そのため、裁場からは復讐をやめるように言われているが、本人は聞く耳を持つてはいない。

18話で上層部からアクロス監視の任務を受け、素性を隠して瞬達に接近したが、25話で瞬に正体が露見した。

■ 御手洗倫吾 みたらいりんご

ICV 島崎信長

AMORE エージェントの一人。灰司の後輩であり、彼に憧れている。

お調子者であり後先考えない面が目立つものの、基本的には人当たりのいい好青年。

◆その他勢力

■霧崎律刃きりさきりつは

ICV 丹下桜

ヒビキとともに悪質転生者に攫われていたロリ。つかみどころのない性格だが、ワームによる虐殺を目の当たりにしても全く動じないレベルに肝が据わっており、彫刻刀でワームの群れを一網打尽にするほどの実力を持つ。どうやら転生者のようだが……？

■セラ・フルスローネ

ICV 石川由依

転生者に攫われた大鳳の前に姿を表現し、大鳳を救出した少女。

普段は燻んだコートに身を包んだ目立たない格好だが、必要とあらばファンタジックな女騎士然とした姿に変身して悪を討つ、高潔な精神と高い実力を併せ持つ少女騎士。

どうやらある人物を探しているようだが、果たして探し人は見つかるのだろうか。

どういいうわけか瞬達からは「唯に似ている」と言われている。何故そう思ったのか

は、言った当人たちも含めてわからない。

■ 潮原東吾 しおはらとうご

ICV 佐倉綾音

舞網鎮守府提督を務める軍人。

元は普通の人間だったのだが、軍の暗部が行っていたとある実験に巻き込まれた結果、軽巡・川内の姿となつてしまった。一応元から舞網鎮守府にいる川内との区別をつけるため、普段は白い軍服を着用している。

提督の中ではまだ若輩者だが、癖の強い艦娘達をまとめ上げる人望の強さと、海を守る強い責任感を併せ持った人物。

欠望姉弟とは新人提督時代からの縁であり、ちよくちよくプライベートでも交流がある。

■ 逢瀬環士郎 おうせかんしろう

ICV 土師孝也

瞬と湖森の叔父。親代わりとして2人の面倒を見ている。

大学教授であり、瞬曰く、大学では考古学かなんかを研究しているらしいが、詳しいことは瞬にもよくわからないらしい。

ネプテューヌやヒビキの居候を快く受け入れる懐の広い人物。

順一郎おじさんや美杉教授のパチモンとか言わない……言わないの！

■ 欠望かけもちいつき一希

ICVかないみか

アラタの姉。

艦娘専門のカウンセラーをやっている。

現時点ではほぼモブ。

◆用語集

● オリジオン

本作の敵怪人。転生者の転生特典を意図的に暴走させる事で誕生する。転生特典自体、だいたいどこかで見た事あるようなやつばつかなので、そこから生まれるオリジオンはいかなればアナザライダーなんでも版。

総じて元となった転生特典よりも凶悪な能力を有している。

変身シークエンスは、体表に無数のジツパーが現れ、それが閉じてゆく形で変化する、というもの。

共通して、身体のあちこちにジッパーがくつついていて、これは「どれほど外面を格好良くしようが所詮ごっこ遊びでしかない」という表れ。

別に元ネタと同じ力を使わないと倒せない、とかいった制約はない。

● 転生者

死んだ人間が前世の記憶を残した上で、別の世界で生まれ変わったもの。ぶっちゃけハーメルンに入り浸ってる読者の皆さんには説明不用だと思う。

共通してなんらかの転生特典を持つ。

現在はギフトメイカーが転生システムを支配しているため、転生してくる人の大半が悪人だったり誘惑に負けるような心が弱い奴ばかりになっている。

ただ勘違いしてはならないのは、転生者＝悪ではないということ。

悪い奴もいれば、その分いい奴もいる。それは至極当然のことなのです。

● ライドアーツ

鍵のような形状をした、本作のコレクションアイテム。

クロスドライバーの資格者が、原作キャラとの絆をはぐくんだ証。

● 次元統合

世界同士が勝手に融合する現象。

統合された世界は、あらかじめ1つの世界として誕生していたように歴史が書き換え

られる。なので基本的にその世界の住人は次元統合には気付けない。

世界同士が融合するのはよくある事であり、それ自体が危険というわけではないのだが、それはあくまでも世界観が近い世界同士での話。あまりにも多くの、かつ差異の大きい世界同士がくつつきすぎると、世界自体が耐えきれずに崩壊を引き起こしてしまう。

また、融合する世界の組み合わせによつては、一方の世界がもう一方の世界を完全になしにしてしまう事もある。

1話で起きていたのはコレ。

ルールのジオウやデイケイドのそれに近い。

◆世界観

幾つもの世界が存在している。所謂マルチバース。

ただしなんらかの理由でそれらが一つになりつつある。

●天統市

瞬達の住んでる街。東京23区からそう離れてはいないが、大都会というわけではない。市の半分がメガフロートで構成されている。

お隣にレオ・コーポレーションのお膝元の舞網市があるので、あちらほどではないが、少なくとも学校にアクションデュエル用の機械が併設されているくらいにはデュエル関連の技術が普及している。

少なくとも駒王町・神織島等が次元統合によって混ざった結果の産物。

●舞網市

「遊戯王ARC-V」の舞台のひとつ。遊矢達の住む街。

デュエル業界の最大手である大企業レオ・コーポレーションのお膝元であり、デュエル関連の技術産業が他の都市よりも発達している。

●開王学園

瞬達の通う学校。

次元統合のあおりを受けてかなり変質しており、校舎の間取りからして元の面影を残してはいない。

少なくとも統合前はそれぞれ“箱庭学園”“駒王学園”“彩海学園”と呼ばれていた3校が融合しているが、実情は定かではない。悪魔が裏で手を引いたり、フラスコ計画が行われていたりすると表も裏もカオスを極めている。

◆その他

●各原作の初登場時点での時間軸

ストブラ→1巻中盤。ただ原作追いなから書いてるから設定無視が多数

HSD D↓原作1巻の冒頭。

A R C | V ↓アニメ最終回から2年後。ただし……

ビルド↓少なくとも新世界後

カプト↓加賀美がガタツクの資格を得た辺り

めだ箱↓喜界島加入前

ネプテューヌ↓V I I以降

デユラララ!!? ↓S Hを想定

淫夢↓淫夢に時系列とかある訳ないだろいい加減にしろ！

緋アリ↓3〜4巻あたり。

ブレイド↓桐柳さん死んだあたり

イメージOP

澤野弘之&岡崎体育「膏」(1〜23話)

水樹奈々「ETERNAL BLEZE」(24話〜)

イメージED

BUMP OF CHICKEN 「なないろ」(1〜23話)
Sunset Switch 「モザイクカケラ」(24話〜)

戦闘曲

水樹奈々 「アンティフォーナ」

オリジオン紹介（序章～1章編）※ネタバレ注意

序章編

■宵江誠／ギルガメツシユオリジオン

転生特典：王の財宝

古城編のボスであり、最初の一般怪人。

前世から、日頃から自分の気に入らないものをボロクソにとぼすようなろくでもない人間。なかでも、ライトノベル作品を特に嫌悪し、中身を知らずに人の又聞きで批判するという事を繰り返していた。

結果として周りから嫌われ、ネットでもリアルでも孤立していき、酔って川に転落し、誰にも助けてもらえない事なくそのまま溺死した。

転生後は嫌いだった「ストライク・ザ・ブラッド」の主人公である暁古城を排して原作ヒロインを手籠にすべく、風沙を攫って古城をおびき寄せるなどの策を漏したり、原作序盤の敵であるオイスタツハを先回りして撃破することでアスタルテを手中におさ

めたりと好き放題していた。終盤では、まだ眷獣を一匹も手なずけていない頃の古城を倒して雪菜も奪おうとするが、追い詰めすぎて逆に古城を覚醒させてしまい、結果として自身が排したオイスタツハの役回りをそのまま引き継ぐ形で撃破された。

最初の一一般オリジオンということで、転生特典の代名詞ともいえる王の財宝に。

全身錆まみれの鎧を身に纏ったゾンビとでもいふべき見た目が特徴。英雄王にも賢王にもなれずに終わった彼らしい見た目である。

現時点では数少ない、仮面ライダー以外の手で倒されたオリジオン。

■ヨツシーオリジオン

転生特典：ヨツシーの能力

伸縮自在の舌を使って児童誘拐を繰り返していたオリジオン。序章におけるアクロスサイドのボスキャラ。長い舌で対象を何でも体内に取り込み、卵の中に閉じ込めてしまう。見た目はまんま爬虫類。

児童誘拐を繰り返していたが、ある時友人のトモリの手でヒビキを逃がしてしまう。それを追いかけてヒビキを保護した唯を襲おうとするも、アクロスと転生者狩りの横やりで失敗する。しかしトモリを病院送りにすることには成功している。

次いで老婆に化けて湖森・ネプテューヌ・ヒビキを攫うことに成功するも、覚悟を決

めたアクロスに執拗に追いかけられ、最後はリンクネプテューヌとなったアクロスに刀両断されて撃破され、児童誘拐犯として逮捕された。

第1章編

■ドライグオリジオン

転生特典：赤龍帝の籠手

1章の先鋒を飾ったオリジオン。見た目はまんまドラゴンの化け物。

本家同様の倍加能力に加え、異常に優れたフィジカルが合わさり、幾度となくアクロスやオカ研メンバーを苦戦させた。

悪魔を滅ぼして自分が魔王になるという野心を抱いており、一誠を心身ともにへし折ることもかねて、アーシアの神器をうばってさらに強くなるうとしていた。

しかし覚悟を決めたアクロスと一誠の一撃で敗れ去り、その後は内心彼のことを嫌っていたレイラの手で用済みと判断されて殺された。

■高山／ビルドオリジオン

転生特典：仮面ライダービルド

14・15話に登場。

燻んだ赤と青で構成された人型の怪物。

元は正義感の強い少年だったが、力こそすべてな現実に絶望し、自身が悪と断じたものに私刑をくだす通り魔となっていた。

最終的にはビルドとアクロスのダブルライダーキックで撃破され、ゆがんだ正義から解放された。

■児玉玲太郎／フリートオリジオン

転生特典：艦の力

16・17話に登場した「艦隊」の名を冠するオリジオン。

外見は、青白い肌に鬍髯を模したマスクで覆われた目元、目を惹きつける妊婦みたいに丸々と突き出た腹（おまけにデベソが丸見え）、ボロボロの軍服と随所に見られる艦娘の艦装のような部位。ただし艦装は全て使い物にならないレベルで損傷しており、さらに様々な艦種のもが入り混じったカオスなものになっている。

艦娘と同種の力とされているが、いかんせん本人が使いこなせておらず、海上戦では練度の高い舞網鎮守府の面々に手も足も出なかつた。

非常に傲慢な性格で、おまけに極度の女性軽視主義者ミソジニスト。前世も自分の性

格のせいで孤立していたが、全然成長していない。エロ同人誌の竿役のような言動を平気でするのでギフトメイカーからも内心嫌われていた模様。

■木嶋海吉／デモンオリジオン

転生特典：鬼（鬼滅の刃）の力

16話に登場したオリジオン。見た目はジツパーまみれの赤鬼。力だけをもってるので、鬼としてのデメリツトはまるで無い。

この辺地雷オレ主あるあるのご都合チート味がありますねえ！

ちなみに転生特典はぜんぜん使いこなせてない。能力的には血鬼術も使える筈なのだが、練習をろくにしていけないので使えず、基本的に力押ししか出来ない。結局アクロスにより強大な力押し戦法でやり返されて呆気なく撃沈。弱いぜ！

前世はナルシストを拗らせたブサイク独身男。自分勝手に本人の事情を全く考えずに女性にアタックしまくったりしていた。気持ち悪い（直球）

■羽間九一／サーフィスオリジオン

転生特典：幽波紋スキャンド「サーフィス」

（ジヨジヨの奇妙な冒険第4部　ダイヤモンドは砕けない）

18・19話に登場。

転生特典は変身能力を持ったスタンドの「サーフィス」。

ハイスクールD×Dの世界に転生してイキリちらす筈が、色々とクロスオーバーした世界だったが故に、イレギュラーを排除して無理矢理にでも原作通りに進めようと画策していた。それも全部原作の展開をなぞった上で活躍する為。本編ではめだか達生徒会と仮面ライダーアクロスの排除を目的に行動を起こした。

しかしめだかボックスの原作についての知識が無いのが裏目に出て、無謀にも生徒会に喧嘩売ったのが運の尽き。生徒会の各個撃破も失敗し、肝心の変身能力も、所々でボロが出てゐる為にめだかに見破られる結果となった。

そもそも原作通りに修正するのは自分が活躍する舞台を整えるためであり、原作愛なぞ微塵もない。

外見は白装束を纏った藁人形。毒のぬられた釘を飛ばしたり、金槌での殴打で戦う。元ネタのスタンドの外見から連想して、丑の刻詣りのモチーフも入れています。

■波馬剛／グールオリジオン

転生特典：喰種グールの力（東京喰種）

18・19話に登場した囃ませ犬要員。

自分は選ばれし者たがら何してもいいと思ひ込んでゐる馬鹿。転生して社会常識すら捨ててきた模様。現代日本でこれは無いですね。一体これまでどうやって生きてきたんだろうか……？

最後はレイラに捨て石にされた。結局、彼は選ばれしものでもなんでもなく、ただの雑魚キャラでしかなかったのだ。

■札道マサル／オッドアイズオリジオン

転生特典：前世で使用していたカード

20話・21話に登場。

熱心な遊戯王ARC-Vアンチ。自分とは異なる意見を持つ奴には徹底して付き纏い糾弾する屑。OCGプレイヤーとしても態度は最悪で相手を煽ったり貶したりを繰り返して出禁になった大会は数知れず。転生後も同じような言動を繰り返していた為にユース資格取り消しもあわや、となっていた。アクションデュエルが嫌いなのでアクションカードは死んでも取らない。

遊矢を甚振ろうとし、決闘で返り討ちにあつた。負けたくせに実力行使にでるリアリストの皮を被った人間の屑。遊矢を糾弾しながらそれ以下の存在に成り下がるというエンタメを皆に見せてくれた。

オッドアイズ・フアントム・ドラゴンに裏切られるなど、カードとの信頼はなかった模様。

正直言つて決闘者の恥晒し。ルールとマナーを守つて楽しく決闘しよう（提案）。

■カブトオリジオン

転生特典：仮面ライダーカブト

22・23話で登場。

仮面ライダーカブトの力を持ったオリジオン。

元はただのカブトファンだったが、その憧れがゆがみまくり、ただ天道を超えるためだけに生きる修羅へと変貌を遂げた。

マスクドライバーとの連戦を繰り返しながらもカブトと接戦を繰り広げる正真正銘の人外。間違つても序盤の一般怪人が持つていいタフネスでは無い。

最終的にはカブトとの一騎打ちの末、敗北した。
本人的には満足の模様。

■イノケンティウスオリジオン

転生特典：魔女狩りの王イノケンティウス（とある魔術の禁書目録）

22・23話で登場。

とある魔術師が作り上げたルーン魔術の術式の名を持つオリジオン。本来ならルーン文字の刻まれたカードによって結界を築かなければ満足に力を発揮できないのだが、こいつにはそんな制約はない。自在に灼熱の炎を操る。

バルジが瞬時にけしにかけてきた。

戦闘シーンがバツサリカットされたのはネタ切れだからではない。

■タイアードオリジオン

転生特典：タイアード（ブギーポップ・クエスチョン 沈黙ピラミッド）

22・23話で登場。

物体を劣化させる合成人間の力を持ったオリジオン。原点同様、触れた箇所を一瞬で劣化させる。四肢を動かなくし、地面を脆くする。彼の前では物理的な防御など無意味と思っただ方がいいだろう。

オリジナルの使い手からしてデバッファ要員。主に行動を封じるために用いる。劣化した生体組織は能力が解除されれば元通りになる。

火力はそんなにないのでまあ大したことはない

作中では古城と交戦。最終的には湖の中に放り込まれたところを古城の眷獣の雷撃

を受けて撃破された。

■木花／フシギバナオリジオン（原案：黒い幻想氏）

■水亀／カメックスオリジオン

■火吹／リザードンオリジオン

転生特典：カメックス・フシギバナ・リザードン

カントー御三家のオリジオン。見た目は普通のチンピラ。

転生者狩りを倒そうとするも、灰司が強すぎたため失敗に終わる。

どうやら仲間意識は高い模様。

24話でフシギバナが灰司カイザに、26話でカメックスがユナイトに撃破された。